神宮司廳藏版

宗敎部三

古事類苑

古事類苑刊行會

古事類苑

宗教部第三册目錄

宗教部四十五

佛教四十五

尊勝寺
最勝寺
圓勝寺
成勝寺
延勝寺
靈鑑寺

宗教部四十七
佛教四十七

眞正極樂寺
金戒光明寺
菩提樹院
知恩寺
聖護院 照高院併入
慈照寺 淨土寺併入

宗教部四十八

三鈷寺
善峯寺
金藏寺
光明寺
乙訓寺
海印寺
寶積寺
相應寺
東寺
西寺 慈恩寺 併入
施無畏寺
鹿苑寺
廣隆寺 桂宮院 併入
妙心寺

宗教部五十二

宗教部五十四

佛教五十四

古事類苑

宗教部三十七

佛教三十七

寺院一總載

宗教部三十八

佛教三十八

堂塔

學寮

宗教部三十九

佛教三十九

寺格

宗教部四十

佛教四十

寺領

資財

宗教部四十一

佛教四十一

參詣

募緣

開帳

宗教部四十二

佛教四十二

宗教部四十三

佛教四十三

宗教部四十四

佛教四十四

宗教部四十五

佛教四十五

宗教部四十六

佛教四十六

宗教部四十七

佛教四十七

宗教部四十八

佛教四十八

妙心寺 八二三

龍安寺 八三五

等持院 八三九

宗教部四十九

佛教四十九

仁和寺 八四五

法金剛院 八五六

宗教部五十

佛教五十

宗教部五十二

佛教五十二

宗教部五十三

佛教五十三

宗教部五十四

佛教五十四

古事類苑

宗教部三十七

佛教三十七

寺院總載

寺ハ、テラト云フ、佛像ヲ安置スル堂舍ノ謂ナリ、或ハ精舍ト云ヒ、道場ト云ヒ、又伽藍トモ云フ、我國ニテハ、欽明天皇ノ十三年、蘇我稻目、向原ノ家ヲ捨テシヲ以テ寺院ノ始トス、爾來造寺ノ事漸ク盛ニシテ、推古天皇ノ三十二年ニハ、既ニ四十六所ノ寺アリ、鎌倉幕府ノ比ハ、一萬三千有餘ノ多キニ及ビ、德川幕府ノ時ニ至リテハ、實ニ四十餘萬ノ巨數ニ達セリト云フ、寺院ヲ建立スルニハ、其境內ヲ結界スルヲ例トス、結界トハ、佛ノ法ヲ以テ、其地域ヲ淸淨ナラシムルヲ謂フ、而シテ大寺ニ在リテハ、結界ノ內、多ク女人ノ入ルコトヲ禁ズ、凡ソ寺ニハ皆稱號アリ、大抵一寺一號ナリト雖モ、或ハ一寺數號ナルモアリ、而シテ年號ヲ以テ寺號トスルハ、必ズ勅願寺ニ限レル事ニテ、後世勅願寺ニ非ズシテ、寬永寺、元祿寺ト稱スルガ如キハ、亦之ニ準ゼシヲ以テナリ、又寺ニハ山號アリ、所在ノ山ヲ以テ呼ビシヨリ起リシガ、後ニハ山上ニ在ラザル寺ニモ、別ニ山名ヲ設ケテ之ヲ稱セリ、又院號アリ、後世剏ムル所ノ寺ハ、多ク寺、山、院ノ三號ヲ兼有セリ、此外又堂號、庵號、軒號、齋號等ヲ以テ呼ブ者アリ、

寺院ニハ、一氏ノ創立ニ係ル者アリ、其氏人ハ、其寺ヲ稱シテ氏寺ト云ヒ、氏寺ニ對シテ、其氏人ヲ檀越ト云ヒ、又檀那ト云フ、並ニ施主ノ義ナリ、又本願ト云フ、卽チ創建ノ其立願ニ出ヅルヲ謂フ、而シテ檀越タルモノハ、舊クハ子孫世々其寺ノ財物田園ヲ管理シ、往々此ヲ私シ

名稱

テ、其衰頽ヲ致シヽ事アリ、或ハ寺田ハ無税ナルヲ以テ、自己ノ田園ヲ寺領ニ假托シテ、自ヲ利スルモノ尠カラズ、又權門勢家ノ如キニ至リテハ、肆ニ檀越ヲ追放シテ、寺產ヲ私セシ事アリ、姦先百端ニシテ枚擧ニ遑アラズ、然レドモ中世以來、漸次寺院ノ衰頽ト共ニ、檀越トノ關係モ殆ド斷絶セシガ、德川幕府ニ在リテハ、天主敎ノ防遏ニ備ヘンガ爲ニ、天下ノ人民ヲシテ悉ク寺院ニ隷屬セシメテ、其檀家ト稱シ、且ツ一タビ隷セシ所ノ寺院ヲバ、容易ニ變ズル事ヲ得ザラシメタリ、是ニ於テカ寺院檀越ノ關係最モ密ニシテ、是ヲ菩提所ト稱シ、累世之ニ葬祭ヲ托セリ、

道場ハ佛道ヲ修行スル場ニシテ、亦寺院ノ類ナレドモ、後世ハ多クハ官許ニアラザルモノヲ謂フ、而シテ時宗ノ寺院ニハ、道場ヲ以テ號スルモノ多シ、德川幕府時代ニハ、又市中寺構ノ類ヲ稱シテ道場トス、

寺院ノ多キハ、國家ノ財ヲ糜スルヲ以テ、昔ヨリ廢合ヲ行ヒ、或ハ私立ヲ嚴禁セリ、德川幕府ニ至リテハ、古跡新地ノ別ヲ立テヽ、其待遇ヲ分チ、且ツ新立ヲ許サヾリキ、

〔類聚名義抄 七寸〕寺 香伺、テラ、

〔伊呂波字類抄 天地儀〕寺 テラ　精舍 寺名　祇園 同　季蒙 同　月殿　日空　伽藍　道場 已上同、寺異名也、

〔書言字考節用集 一乾坤〕佛寺 ブツジ 金碧、招提、緇廬、蘭若、並同、　佛宇 ブツウ　佛閣 ブツカク　寺 テラ 後漢永平十年、置摩騰、法蘭於鴻臚寺、後移白馬寺、故釋氏之居、至今用寺字、元是以官府曰寺、見左傳注疏、法苑珠林、

〔釋氏要覽 上住處〕寺 華區也、釋名曰、寺嗣也、謂治事者相嗣續於其內也、故天子有九寺焉、

〔義楚六帖 二十一寺舍塔殿〕寺

寺有多名 寺誥云、道場、生庭、公庭、淨住、舍法、同出世間、精舍、清淨、無極園、金剛淨刹、寂滅道場、離惡處、親近等處、已上皆寺之異名也、○中略 寺之名義 經音義云、西域云僧伽藍摩、此云衆園、寺即此方之稱、以漢明帝永平十三年、摩騰竺法蘭、至洛陽鴻臚寺下闕時、後立十寺、白馬其一也、寺者司也、亦云廟、廟者貌也、所以髣髴先人之靈貌、又西方云招提、有解、招即招引、提即提携、此

全、漢語、正云招提、此云四方、即四方僧居止處、道場精舍此方語、

〔倭訓栞前編十七〕てら　寺をよめり、日本紀に精舍伽藍をもよめり、莊嚴のてりかゞやく意にや、今の朝鮮語にててるといへば、もと韓語にぞ、

精舍

〔日本書紀推古二十二〕二年二月丙寅朔、詔皇太子(厩戸)○及大臣(蘇我馬子)○令興隆三寶、是時諸臣連等、各爲君親之恩、競造佛舍、即是謂寺焉、

〔倭頭屋本節用集天之地〕精舍(シヤウジヤ)

〔書言字考節用集乾坤二〕精舍(シヤウジヤ)白孔六帖、精舍、楚宮諸池、化城、並曾佛寺通稱、

〔釋氏要覽上住處〕精舍　釋迦譜云、息心所棲曰精舍、藝文類集云、非由其舍精妙、良由精練行者所居也、

〔類聚名物考佛教五〕精舍　さうさ　せうさや　今世に此詞は佛寺にのみ用ふるとおもふは僻事なり、儒にもいふなり、されども祇園精舍といふ事を覺えて、あまねく人のさは意得しなり、後漢書五十七劉淑傳、淑少好學、明五經、遂隱居立精舍、講授諸生、常數百人、

〔日本書紀敏達二十〕十四年三月丁巳朔、馬子○中略新營精舍、

〔大安寺緣起〕其自小及大、蓋起於上宮太子(厩戸)○熊凝精舍矣、○中略推古天皇廿五年丁丑、○中略奏天皇曰、後代帝王、多可短祚、非佛法力、何敢救護、願建一精舍於熊凝村、修種々佛事、護代々皇位矣、○中略舒明天皇立、○中略百濟河側擇勝地、移精舍、號曰百濟大寺、

道場

〔倭頭屋本節用集天地〕道場(ダウヂヤウ)

〔增補下學集上二家屋〕道場(ダウヂヤウ)隋煬帝改寺曰道場、

〔書言字考節用集乾坤一〕道場(タウチヤウ)隋煬帝大業八年改僧居名道場、楞嚴義疏、沙門體心修道之地也、又見要覽、

〔佛說維摩經上菩薩品四〕佛告光嚴童子、汝行詣維摩詰問疾、光嚴白佛言、世尊我不堪任詣彼問疾、所以者何、憶念我昔出毘耶離大城時、維摩詰方入城、我即爲作禮而問言、居士從何所來、答我言、吾從

道場來、我問、道場者何所是、答曰、直心是道場、無虛假故、發行是道場、能辨事故、深心是道場、增益功德故、菩提心是道場、無錯謬故、布施是道場、不望報故、持戒是道場、得願具故、忍辱是道場、於諸衆生心無閡故、精進是道場、不懈退故、禪定是道場、心調柔故、智慧是道場、現見諸法故、慈是道場、等衆生故、悲是道場、忍疲苦故、喜是道場、悅樂法故、捨是道場、憎愛斷故、神通是道場、成就六通故、解脫是道場、能背捨故、方便是道場、敎化衆生故、四攝是道場、攝衆生故、多聞是道場、如聞行故、伏心是道場、正觀諸法故、三十七品是道場、捨有爲法故、諦是道場、不誑世間故、緣起是道場、無明乃至老死皆無盡故、諸煩惱是道場、知如實故、衆生是道場、知無我故、一切法是道場、知諸法空故、降魔是道場、不傾動故、三界是道場、無所趣故、師子吼是道場、無所畏故、力無畏不共法是道場、無諸過故、三明是道場、無餘閡故、一念知一切法是道場、成一切智故、如是善男子、菩薩若應諸波羅密、敎化衆生、諸有所作、擧足下足、當知皆從道場來、往於佛法矣、

〔釋氏要覽 上 住處〕道場 肇師云、閑宴修道之處、謂之道場、隋煬帝勅、改僧居名道場、

〔令義解 二 僧尼〕凡僧尼、非在寺院、別立道場、聚衆敎化、〇中略 者皆還俗、

〔改邪鈔 本〕一道場ト號シテ、簷ヲナラベ、墻ヲヘダテタルトコロニテ、各別々々ニ、會場ヲシムル事、
オホヨソ眞宗ノ本尊ハ、盡十方無碍光如來ナリ、カノ本尊所居ノ淨土ハ、究竟如虛空ノ土ナリ、ココヲモテ祖師ノ敎行證ニハ、佛ハコレ不可思議光佛、土ハマタ无量光明土ナリトノタマヘルコレナリ、サレバ天親論主ハ、勝過三界道ト判ジタマヘリ、シカレドモ聖道門ノ、此土ノ得道トイフ敎相ニカハラシメンガタメニ、他土ノ往生トイフ廢立ヲシバラクサダムルバカリナリ、和會スルトキハ、此土他土一異ニ、凡聖不二ナルベシ、コレニヨリテ、念佛修行ノ道場トテ、アナガチ局分スベキニアラザル歟、シカレドモ廢立ノ初門ニカヘリテ、イクタビモ爲凡ヲサキトシテ、道場トナヅケテコレヲカマヘ、本尊ヲ安置シタテマツルニテコソアレ、コレハ行者集會ノタメナリ、一

道場ニ來集センタグヒ、遠近コトナレバ、來臨ノ便宜不同ナラントキ、一所ヲシメテモ、コトノワブラヒアリヌベカランニハ、アマタトコロニモ、道場ヲカマフベシ、シカラザランニオイテハ、町ノウチサカヒノアヒダニ、面々各々ニコレヲカマヘテ、ナンノ要カアラン、アヤマリテコトシゲクナリナバ、ソノ失アリヌベキモノ歟、ソノユヘハ、同一念佛无別道故ナレバ、同行ハタガヒニ四海ノウチミナ兄弟ノムツビヲナスベキニ、カクノゴトク、簡別隔歴セバ、オノ〳〵確執ノモトヒ、我慢ノ先相タルベキヲヤ、コノ段、祖師ノ御門弟ト號スルトモガラノナカニ、當時サカンナリト云々、祖師聖人御在世ノムカシ、カツテカクノゴトクヤナハダシキ御沙汰ナシト、マノアタリウケタマハリシコトナリケレバ、コトニヨリ、便宜ニシタガヒテ、ワヅラヒナキヲ本トスベシ、イマ謳歌ノ說ニオイテハ、モトモ停止スベシ、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年二月丁酉、大僧正行基和尙遷化、和尙藥師寺僧、俗姓高志氏、和泉國人也、○中略時人號曰行基菩薩、留止之處、皆建道場、其畿內凡四十九處、諸道亦往々而在、弟子相繼皆守遺法、至今住持焉、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年四月癸卯、勅、僧尼之制、事明令條、男女之別、非無禮法、頃者諸寺僧尼其數寔繁、外託勝因、內虧戒律、精進之行無顯、淫犯之徒屢聞、僧綱顏面、不加捉搦、官司寬容、無心糺正、又法會之時、懺悔之日、男女混雜、彼此無別、非禮之行、不可勝論、敗道傷俗、莫甚於斯、永言其弊、理合懲肅、宜令京職幷諸國、勝示部內諸寺、及所有道場等、令加禁斷、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年正月十日丁卯、正三位行權中納言平朝臣高棟奏請、別墅在山城國葛野郡、以爲道場、賜額平等寺、詔許之、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年三月廿三日癸亥、山城國愛宕郡地四町賜典藏從五位上笠朝臣西子、聽建道場、

〔三代實錄清和二十一〕貞觀十四年三月廿三日癸巳、今春以後、内外頻見怪異、由是各遣使者諸神社奉幣、使於近社道場、毎社轉讀金剛般若經、

〔三代實錄清和二十五〕貞觀十六年三月二十三日壬午、是日詔於貞觀寺設大齋會、以賀道場新成也、

〔扶桑略記村上二十六〕康保四年五月廿五日、天慶以往、道場聚落、誦念佛三昧、希有也、何況小人愚女多忌之、

〔西山上人傳〕上人此夢を、實信房に語て、汝は今生一世の芳契にあらず、多生の師弟なりとぞ、感歎せられける上人すなはち、温泉を出て、天王寺に參詣し、聖靈院を道場と定め、供僧偕住十六人を念佛衆として、その〳〵小袖を引あたへられけり、

〔續日本紀聖武十六〕天平十八年六月己亥、僧玄昉死、玄昉俗姓阿刀氏、靈龜二年、入唐學問、○中略來皇朝、亦施紫袈裟著之、尊爲僧正、安置内道場、自是之後榮寵日盛、稍乖沙門之行、時人惡之、

〔僧史略中〕内道場

内道場起於後魏、而得名在乎隋朝、何耶、煬帝以我爲古、變革事多、改僧寺爲道場、改道觀爲方壇、若内中僧事、則謂之内道場也、今朝茲福等殿安佛像經藏、立刹摩鐘、呼爲内寺是也、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年四月丁巳、下野國言、造藥師寺別當道鏡死、道鏡俗姓弓削連、河内人也、略渉梵文、以禪行聞、由是入内道場、列爲禪師、寶字五年、從幸保良時、侍看病、稍被寵幸、廢帝仁淳○常以爲言、與天皇孝謙○不相中得、天皇乃還平城別宮而居焉、

伽藍

〔伊呂波字類抄加疊字〕伽藍

〔下學集上屋宅〕伽藍(ガラン)

〔倭頭屋本節用集加天地〕伽藍(ガラン)

〔書言字考節用集一乾坤〕伽藍(ガラン)梵語、唐翻曰衆園、又云僧舍、詳要覽、代醉、

瓦葺

初見

〔釋氏要覽上住處〕僧伽藍摩梵語也、或云僧伽羅摩、此衆園、五分律云、緋沙王施迦蘭陀竹園爲始也、

〔日本書紀十九欽明〕十三年十月、有司乃以佛像流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、

〔倭訓栞中編四加〕かはらぶき　齋宮忌言に寺を瓦ぶきと稱せり、日本紀に瓦舍をかはらぶきのやとよめり、○中略齋明天皇の時、宮闕を瓦覆にせんを擬せられたれど、果さずして止ぬ、今に宮闕は板葺を用ゐさせらるれば、此名ある也、

〔延喜式五齋宮〕凡忌詞、內七言、○中略寺稱瓦葺、

〔日本書紀十九欽明〕十三年十月、百濟聖明王更名聖王遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷、○中略是日天皇聞已歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豐秋日本豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子、同奏曰、我國家之王天下者、恒以天地社稷百八十神、春夏秋冬祭拜爲事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒、天皇曰、宜付情願人稻目宿禰、試令禮拜、大臣跪受而忻悅、安置小墾田家、懃修出世業爲因、淨捨向原家爲寺、於後國行疫氣、民致夭殘、久而愈多、不能治療、物部大連尾輿、中臣連鎌子、同奏曰、昔日不須臣計、致此病死、今不遠而復、必當有慶、宜早投棄、懃求後福、天皇曰、依奏、有司乃以佛像流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、

〔元亨釋書二十八寺像〕向原寺者、欽明十三年十月、百濟國聖明王貢獻釋迦銅像、天皇宣問群臣可拜不、物部尾輿、中臣鎌子等皆沮之、唯蘇稻目贊成焉、天皇賜像于稻目、稻目大悅安小墾田家供養、後捨向原宅爲寺置像、是本朝寺院像設之權輿也、

〔壒囊抄十三〕本朝佛閣幷勅願寺何レカ最初ゾ
是卒爾難記、總佛閣最初向原寺歟、○中略總佛閣初ト申サバ、向原寺ナルベシ、

〔和州舊跡幽考十六高市郡〕向原寺

寺數

或和尙、元和年中の述作の書に、向原寺の跡は、曲川の邊にありと云々、此義にしたがへば、はじめ向原寺は、曲川の邊にありて、後石川にうつして、石川の精舍といひけるにや、又日本紀に、守屋大連燒拂ふ體をおもふには、向原寺、石川精舍、大野丘の塔、同所のやうにも見え侍る、後の人さだかにせらるべし、

〔日本書紀敏達二十〕十三年九月、從百濟來鹿深臣闕名字、有彌勒石像一軀、佐伯連闕名字、有佛像一軀、是歲、蘇我馬子宿禰請其佛像二軀、○中略乃以三尼、付氷田直與達等、令供衣食、經營佛殿於宅東方、安置彌勒石像、屈請三尼、大會設齋、○中略馬子宿禰亦於石川宅、修治佛殿、佛法之初、自茲而作、

〔和州舊跡幽考十六高市郡〕石川精舍

玉林抄に云、豐浦より西四十町ばかり、蘇我大臣の領地の內にして、かの家の東なりと云々、今見るに、石川は西に、豐浦は東にならび、なを東につゞきて、元興寺の跡に草室有、

〔日本書紀敏達二十〕十四年二月壬寅、蘇我大臣馬子宿禰起塔於大野丘北、大會設齋、卽以達等所獲舍利、藏塔柱頭、○中略是時國行疫疾、民死者衆、三月丁巳朔、物部弓削守屋大連、與中臣勝海大夫奏曰、何故不肯用臣言、○中略詔曰灼然、宜斷佛法、丙戌、物部弓削守屋大連自詣於寺、踞坐胡床、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿、旣而取所燒餘佛像、令棄難波堀江、

〔和州舊跡幽考十六高市郡〕大野丘塔

石川同所也、石川精舍ならびに、此塔ともに守屋燒拂ふと見えたり、

〔日本書紀推古二十二〕三十二年九月丙子、校寺及僧尼、具錄其寺所造之緣、亦僧尼入道之緣、及度之年月日、也、當是時、有寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、幷一千三百八十五人、

〔高祖遺文錄二十九〕諫曉八幡鈔

日本六十六箇國、二ノ島、一萬三千三十七寺ノ佛ハ、皆或ハ畫像、或ハ木像、或ハ眞言已前ノ寺モア

リ、或ハ巳後ノ寺モアリ、

〔吹塵錄社寺三十二〕天王寺勸化に付、取調諸宗寺數、

攝州四天王寺は、聖德太子建立に而、佛法最初の寺たる事は、普く世人の知れる所なり、先年諸堂修復の助力として、日本國中の諸宗の寺院に寄進の事あり、其節の寺數を左に記す、

一禪宗　一萬百箇寺
一黄檗宗　九千百箇寺
一眞言宗　一萬千百箇寺
一法相宗　五千三百廿箇寺
一天台宗　千八百廿箇寺
一淨土宗　十四萬廿箇寺
一遊行宗　六萬四千六十箇寺
一大念佛寺　千五百十箇寺
一西本願寺　四萬五千十箇寺
一東本願寺　八萬八千三百五十四箇寺
一高田門跡　七千五百廿箇寺
一日蓮宗　八萬三千廿箇寺

右寺數、總而四十六萬九千九百三十四箇寺、○九千恐七千誤

〔內務省寺院總數取調書〕日本全國佛道十宗三十四派

本末寺院總計　七萬壹千七百零九箇寺

右ハ明治廿六年七月、諸宗各派ヨリ屆出ノ算數ニ係ル、內塔中衆徒ハ算入スレドモ、普通ノ

寺中坊舍ハ算入セズ、

內譯

華嚴宗　本末通計　拾箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　大和國添上郡奈良町大字雜司　東大寺

末寺　九ヶ寺　內　中本寺　貳ヶ寺　所轄末寺　七ヶ寺

法相宗　本末通計　四拾七箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　大和國平群郡法隆寺村　法隆寺

大本山　貳ヶ寺　別格寺　壹ヶ寺

末寺　四拾三ヶ寺　內　中本寺　三ヶ寺　塔中寺　貳拾七ヶ寺　所轄末寺　拾三ヶ寺

天台宗山門派　本末通計　三千五百拾壹箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　近江國滋賀郡坂本村比叡山　延暦寺

別院　八ヶ寺　塔頭　五ヶ寺　別格寺　貳拾七ヶ寺　塔中衆徒　百九拾ヶ寺

末寺　三千貳百八拾ヶ寺　內　大寺　百拾九ヶ寺　直末　四百八拾貳ヶ寺　復末貳千四百廿七ヶ寺　世襲末寺　貳百五拾壹ヶ寺　所轄本山　壹ヶ寺

天台宗寺門派　本末通計　四百五拾四箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　近江國滋賀郡大津町大字別所　園城寺

別格寺　三ヶ寺

末寺　四百五拾ヶ寺　內　上等寺　六拾八ヶ寺　中等寺　四拾ヶ寺　下等寺　三百四拾ヶ寺　所轄末寺　貳ヶ寺

天台宗眞盛派　本末通計　四百拾壹箇寺
內　總本山　壹ヶ寺　近江國滋賀郡坂本村大字坂本　西敎寺
中本山別格寺　三ヶ寺　別格尼寺　壹ヶ寺
末寺　四百零六ヶ寺　內　中本寺　拾七ヶ寺　小本寺　八ヶ寺　直末寺　百零貳ヶ寺　孫末寺　貳百七拾九ヶ寺

眞言宗兩派　本末通計　壹萬三千拾壹箇寺
內　總本山　貳ヶ寺　兩派末寺ノ總數混合シテ分タズ、故ニ分派掲載スルコト能ハズ、故ニ今合載ス、
古義派總本山　紀伊國伊都郡高野村　金剛峯寺
新義派總本山　同國　那賀郡根來村　大傳法院
古義派大本山　九ヶ寺　同　別格本山　拾ヶ寺　同　準別格本山　四ヶ寺　同　所轄律宗總本山　壹ヶ寺　同　同　尼寺　四ヶ寺　同　塔中衆徒　九拾四ヶ寺
新義派大本山　貳ヶ寺　同　別格本山　貳ヶ寺　同　準別格本山　壹ヶ寺
兩派末寺合併　壹萬貳千八百八拾貳箇寺　內　中本寺　九百七拾八ヶ寺　小本寺　百四拾七ヶ寺　格院　三千七百五拾六箇寺　末寺　六千零三拾四ヶ寺　門徒寺　七百拾壹ヶ寺　尼寺　三拾六ヶ寺　近士寺　九百五拾八ヶ寺　所轄末寺　貳百六拾貳ヶ寺

禪宗臨濟派　本末通計　六千百四拾壹箇寺
內　總本山　壹ヶ寺　京都市下京區大和大路通リ四條下ル小松町　建仁寺
大本山　九ヶ寺　別格寺　拾壹ヶ寺　所轄本山　拾四ヶ寺　同　尼寺　七ヶ寺

塔頭 七拾九ヶ寺 內 建仁寺 拾四ヶ寺 相國寺 拾壹ヶ寺 南禪寺 八ヶ寺 東福寺 貳拾三ヶ寺 建長寺 貳拾三ヶ寺

末寺 六千零貳拾ヶ寺 內 建仁寺末 五拾九ヶ寺 內 中本寺 貳ヶ寺 平末寺 五拾六ヶ寺 所轄末寺 壹ヶ寺 天龍寺末 百四拾八ヶ寺 內 中本寺 四ヶ寺 直末寺 五拾貳ヶ寺 孫末寺 四拾五ヶ寺 所轄末寺 四拾七ヶ寺 相國寺末 百拾四ヶ寺 內 中本寺 貳ヶ寺 小本寺 貳ヶ寺 平末寺 五拾四ヶ寺 所轄末寺 五拾六ヶ寺 南禪寺末 六百八拾九ヶ寺 內 中本寺 六ヶ寺 小本寺 三拾三ヶ寺 直末寺 六拾四ヶ寺 孫末寺 貳百八拾八ヶ寺 曾孫末寺 拾八ヶ寺 所轄末寺 貳百八拾ヶ寺 東福寺末 三百七拾八ヶ寺 內 中本寺 拾九ヶ寺 小本寺 拾七ヶ寺 直末寺 九拾壹ヶ寺 孫末寺 貳百五拾壹ヶ寺 大德寺末 貳百零壹ヶ寺 內 中本寺 拾三ヶ寺 小本寺 貳ヶ寺 平末寺 百六拾七ヶ寺 本山塔中 拾九ヶ寺 妙心寺末 三千六百三拾八ヶ寺 內 中本寺 拾八ヶ寺 小本寺 三百五拾貳ヶ寺 平末寺 三千貳百四拾五ヶ寺 所轄末寺 貳拾三ヶ寺 建長寺末 四百貳拾九ヶ寺 內 中本寺 貳ヶ寺 小本寺 四拾五ヶ寺 直末寺 百三拾八ヶ寺 孫末寺 貳百貳拾八ヶ寺 曾孫末寺 三ヶ寺 所轄末寺 拾三ヶ寺 圓覺寺末 貳百拾六ヶ寺 內 中本寺 三ヶ寺 小本寺 拾七ヶ寺 法地 百八拾八ヶ寺 平僧地 六ヶ寺 堂庵 貳ヶ所 永源寺末 百四拾八ヶ寺 內 中本寺 七ヶ寺 小本寺 貳ヶ寺 直末寺 九拾七ヶ寺 孫末寺 四拾貳ヶ寺

禪宗曹洞派 本末通計 壹萬四千零拾六箇寺

內 總本山 壹ヶ寺 越前國吉田郡志比村 永平寺
大本山 壹ヶ寺
末寺 壹萬四千零拾四ヶ寺 內 常恒會地 貳百零壹ヶ寺 片法幢地 八拾壹ヶ寺 隨意會地 百六拾六ヶ寺 小本寺并法地 壹萬千貳百九拾五ヶ寺 平僧地 貳千百ヶ寺 堂庵 百七拾壹ヶ所

禪宗黃檗派 本末通計 五百七拾八箇寺
內 總本山 壹ヶ寺 山城國宇治郡宇治村字五箇莊 萬福寺
末寺 五百七拾七ヶ寺 內 中本寺 三拾三ヶ寺 小本寺 七拾ヶ寺 所轄末寺 四百七拾四ヶ寺

淨土宗鎭西派 本末通計 七千零六拾九箇寺
內 總本山 壹ヶ寺 京都市下京區林下町 知恩院
大本山 四ヶ寺 檀林 拾八ヶ寺 所轄檀林 壹ヶ寺 同 尼寺 七ヶ寺 別格寺 壹ヶ寺
末寺 七千零三拾七ヶ寺 內 本寺格 八百七拾九ヶ寺 末寺 五千九百九拾七ヶ寺 所轄本寺 三拾壹ヶ寺 同 末寺 八拾九ヶ寺 同 寺 四拾壹ヶ寺

淨土宗西山派 本末通計 壹千零八拾貳箇寺
內 總本山 壹ヶ寺 京都市上京區南禪寺町 禪林寺
大本山 三ヶ寺 檀林 拾ヶ寺 檀林格 貳ヶ寺
末寺 千零六拾六ヶ寺 內 中本寺 七拾九ヶ寺 小本寺 六拾壹ヶ寺 所轄寺 六拾四ヶ寺 平末寺 八百六拾貳ヶ寺

眞宗本派　本末通計　九千五百四拾九箇寺
內　總本山　壹ヶ寺　京都市下京區堀川通本願寺門前町　西本願寺
本山別院　三拾八ヶ所
末寺　九千五百拾ヶ寺　內　平末寺　九千四百八拾八ヶ寺　末寺支坊　貳拾貳ヶ寺

眞宗大谷派　本末通計　八千四百四拾九箇寺
內　總本山　壹ヶ寺　京都市下京區　東本願寺
本山別院　三拾六ヶ寺　別格別院　拾貳ヶ寺
末寺　八千四百ヶ寺　內　末寺　八千百貳拾ヶ寺　同　附屬　九拾八ヶ寺　同
支坊　百八拾貳ヶ寺

眞宗高田派　本末通計　六百貳拾九ヶ寺
內　總本山　壹ヶ寺　伊勢國奄藝郡一身田村　專修寺
本山別院　五ヶ所
末寺　六百貳拾三ヶ寺　內　上座　五ヶ寺　院家　百零八ヶ寺　老分席　貳百拾
五ヶ寺　中老席　百九拾四ヶ寺　大衆分席　七拾貳ヶ寺　衣座　貳拾九ヶ寺

眞宗佛光寺派　本末通計　三百四拾ヶ寺
內　總本山　壹ヶ寺　京都市下京區高倉通佛光寺南へ入ル新開町　佛光寺
本山別院　五ヶ所
末寺　三百三拾四ヶ寺　內　中本寺　壹ヶ寺　小本寺　貳拾三ヶ寺　直末寺　百
七拾九ヶ寺　孫末寺　百三拾壹ヶ寺

眞宗興正寺派　本末通計　貳百四拾九箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　京都市下京區醒ヶ井通七條上ル華園町　興正寺

本山別院　六ヶ寺

末寺　貳百四拾貳ヶ寺

眞宗木部派　本末通計　五拾三箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　近江國野洲郡中里村大字木部　錦織寺

本山別院　貳ヶ寺

末寺　五拾ヶ寺　內　本山塔中　貳ヶ寺　所轄末寺　四拾八ヶ寺

眞宗出雲路派　本末通計　四拾五箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　越前國今立郡味眞野村　毫攝寺

末寺　四拾四ヶ寺　內　寺院　四拾貳ヶ寺　道場　貳ヶ所

眞宗山元派　本末通計　拾壹箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　越前國今立郡新横江村　證誠寺

末寺　拾ヶ寺

眞宗誠照寺派　本末通計　四拾四箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　越前國今立郡鯖江町字深堀　誠照寺

末寺　四拾三ヶ寺

眞宗三門徒派　本末通計　三拾壹箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　越前國敦賀郡福井市豐町　專照寺

末寺　三拾ヶ寺

日蓮宗身延派　本末通計　三千七百箇寺

内　總本山　壹ヶ寺　甲斐國南巨摩郡身延村　久遠寺

大本山　四ヶ寺　獨立本山　貳拾八ヶ寺　所轄本山　拾三ヶ寺

末寺　三千六百五拾四ヶ寺　内　中本寺　三百零三ヶ寺　小本寺　拾九ヶ寺　直

末寺　貳千貳百零九ヶ寺　孫末寺　千百貳拾三ヶ寺

日蓮宗妙滿寺派　本末通計　五百五拾五箇寺

内　總本山　壹　寺　京都市上京區榎木町　妙滿寺

優待寺　貳　寺

末寺　五百五拾貳ヶ寺

日蓮宗興門派　本末通計　貳百八拾ヶ寺

内　總本山　壹ヶ寺　駿河國富士郡上野村字上條　大石寺

大本山　七ヶ寺

末寺　貳百七拾貳ヶ寺

日蓮宗八品派　本末通計　三百三拾四箇寺

内　總本山　壹ヶ寺　駿河國駿東郡金岡村岡ノ宮　光長寺

大本山　四ヶ寺

末寺　三百貳拾九ヶ寺

日蓮宗本成寺派　本末通計　百七拾六箇寺

内　總本山　壹ヶ寺　越後國南蒲原郡本城村　本成寺

大本山　貳ヶ寺

末寺　百七拾三ヶ寺　內　中本寺　五ヶ寺　小本寺　八ヶ寺　所轄末寺　百六拾ヶ寺

日蓮宗本隆寺派　本末通計　八拾八ヶ寺

內　總本山　壹ヶ寺　京都市上京區大宮通五辻西ヘ入ル紋屋町　本隆寺

大本山　三ヶ寺

末寺　八拾四ヶ寺　內　小本寺　三ヶ寺　所轄末寺　八拾壹ヶ寺

日蓮宗不受不施派　本末通計　壹箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　備前國津高郡金川村大字金川　妙覺寺

敎會所　拾七所

融通念佛宗　本末通計　三百五拾壹箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　攝津國住吉郡平野鄕町　大念佛寺

末寺　三百五拾ヶ寺　內　中本寺　四ヶ寺　本山直末　三百零三ヶ寺　中本寺末四拾三ヶ寺

時宗　本末通計　四百九拾四箇寺

內　總本山　壹ヶ寺　相模國鎌倉郡藤澤大富町　淸淨光寺

大本山　壹ヶ寺　檀林本山　壹ヶ寺　本山　六ヶ寺

末寺　四百八拾五ヶ寺　內　檀林　四ヶ寺　中本寺　八ヶ寺　小本寺　四拾壹ヶ寺　直末寺　貳百拾八ヶ寺　孫末寺　貳百拾四ヶ寺

〔日本書紀二十九〕天武八年四月乙卯、詔曰、商量諸有食封寺所由、而可加加之、可除除之、是日定諸寺名也、

〔徒然草上〕寺院の號さらぬ萬の物にも名を付る事、昔の人は、少しももとめず、只ありのまゝに、や

寺號

すくつけけるなり、此比はふかく案じ、才覺をあらはさんと志たるやうに聞ゆる、いとむづかし、

〔古今制度集六上〕高野山衆徒法度(眞言)○中略

一寺號院號、先規輙不許事也、然近年恣稱寺院號、甚無謂、令停止之事、○中略

元和元乙卯年七月日　大御所君御朱印

〔新編相模國風土記稿百三鎌倉郡〕清淨光寺、

藤澤山無量光院ト號ス、時宗ノ總本山ニテ、藤澤道場ト唱フ、

〔慈眼大師傳〕慶安年中、勅賜額號東叡山寛永寺圓頓院、

〔三縁山志一〕茲に、武藏國三縁山增上寺廣度院といへるは、○中略西流の正嫡○中略一宗の大叢林たり、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕清淨華院　在寺町通今出川下所○中略

淨土宗四箇之一本寺(往昔禁裏佛殿、故無寺號山號、)

〔貞丈雜記十五評判〕一何寺、何院、何軒、何庵、何齋など、云、寺、院、軒、庵、齋など、皆何殿の殿と同意なる故、是等には殿文字付ざる事、上古の法也、京都將軍時代にも、中比より、殿文字を付てよびしなるべし、舊記に、善法寺殿、聖護院殿、三寶院殿、實相院殿などゝあり、本式は殿文字あるまじき事也、

〔寺社法則上〕安永二年巳九月十四日　土屋能登守

寺社奉行

寺號替、宗旨替等之儀、延享年中、本末之義ニ付、御書付を以被仰渡、私共方、諸宗本末帳差出有之候上ハ、遠國奉行所ニて、私共方へ不申聞承屆、本寺替等仕候ては、別紙御書付之趣ニ相障申候ニ付以來ハ私共方へ掛合有之候樣仕度奉存候、左候得バ、其上相糺候上、挨拶可仕候間、右之趣、遠國奉

行所へ掛合有之候樣可仕哉奉伺候、

九月

文化八未閏二月十五日

佐渡奉行ゟ達

一佐州相川下寺町法界寺儀、法然寺と寺號改度旨願出候付、御問合仕候處、増上寺役者へ御達、知恩院をも御糺御座候處、寺號相改候ても差支無之旨申出候間、於佐州差支無之候ハヽ、承屆候樣御挨拶可有之哉之旨御伺御座候處、御伺之通、御差圖相濟候間、願之通、申渡候樣被仰聞、承知仕候、佐州ニても差支候筋無御座候間、寺號改之義、願之通申渡候、此段御達仕候、

二月

〔寺社法則下〕文化九申年五月十二日

奥平大膳大夫

御書面、道場ニ寺號を附候而ハ、新寺にも紛敷候間、本山より差免るゝ旨申立候共、御聞屆無之方と存候、

和泉守

同二丑閏八月

松平下總守

書面、大膳院儀、三寶院御門跡ゟ寺山號差免有之候共、新規之儀ニ付難成筋と存候間、御聞屆無之方と存候、　丑閏八月

大久保

〔寺社法則下〕文化九申年九月十九日

青山大藏少輔

書面、寺山號之儀、容易難成筋候得共、阿含院儀ハ一社之別當ニて、新規ニ一ヶ寺相立候趣とハ不

相聞、本山之許容ヲ請候上ハ、於御領主差支之筋も無之候ハヾ、御聞届不苦筋と存候、

和泉守

一寺有數號

〔和漢三才圖會七十三大和〕豐浦寺　名本元興寺　在大野丘之北

石川精舍及大野丘塔燒拂之後建立之、蓋守屋大連滅亡後、推古天皇四年、蘇我大臣建之、四門有額、元興寺南法滿寺北飛鳥寺東法興寺西　元正天皇靈龜二年、移當寺於奈良、故此曰本元興寺、又推古天皇初、皇居于此地、即位號豐浦宮、後移于小墾田宮、以此地爲寺地、故有豐浦寺之名、

〔大和名所圖會三〕法隆寺平群郡にあり 舊名班鳩寺、法相宗、八宗兼學 人皇三十二代用明天皇の皇子聖德太子〇中略造立し給ふ、一名七德寺といふ、金堂儼然として、西に輪藏そばだちて鳥路寺と號し、東に鐘樓あり、北に講堂をかまへて聖國寺とよぶ、乾に鎭守の社頭を祠して寶藏寺ともよぶ、南に法隆學問寺の門巍々として、金皷の二口をかけたり、

〔攝津志三東生郡〕四天王寺天王寺村 山號荒陵、一名三津寺、又名難波大寺、又稱法華院、又名敬田院、

〔和漢三才圖會七十三大和〕東大寺又名城大寺、大華嚴寺、恒說華嚴寺、國分寺、金光明四天王護國之寺、

〔大和志添上郡佛刹〕東大寺、〇中略又金光明四天王護國之寺、此聖武天皇所賜樓額今尚存、

〔東寶記一〕一東寺草創事

建立東西兩寺於羅城門之左右、東寺號左大寺、西寺號右大寺、羅城門之左、元有山城國分寺、以其跡建立大伽藍、而號左大寺云々、〇中略

一護國寺號事

大師御記云、夫以、大唐惠果大師奉勅青龍寺師々相傳、元名大官道場、然而大興善寺大阿闍梨耶被勅爲秘密之場、改號青龍寺、方今准彼以東寺可號敎王護國寺、額是既奉勅而已云々、

以年號爲寺號

〔叡岳要記下〕嵯峨天皇、同弘仁〇十四年、義眞座主治山之時、有勅賜額號延暦寺、

〔類聚三代格四〕太政官符

應ㇾ得ㇾ度嘉祥寺去年分者三人ㇾ事〇中略

夫嘉祥寺者、先帝〇文德奉ㇾ爲深草天皇〇仁明所ㇾ建也、〇中略

天安三年三月十九日

〇按ズルニ、嘉祥寺ハ、嘉祥年間ニ建テシニハアラズシテ、仁明天皇ノ爲ニ建テラレシヨリ名ヅケシモノナラム、嘉祥ハ仁明天皇ノ朝ノ年號ナリ、

〔類聚三代格四〕應ㇾ改嘉祥寺年分度者ㇾ爲貞觀寺年分ㇾ事〇中略

夫貞觀寺建立之初、未ㇾ定其名、因ㇾ茲假嘉祥寺年分號、即稱西院、令ㇾ住度者、貞觀四年七月廿七日、應ㇾ以嘉祥寺西院號貞觀寺之狀下知既訖、〇中略

貞觀十四年七月十九日

〔三代實錄三十二陽成〕元慶元年十二月九日乙亥、詔以元慶寺爲定額、

〔伊呂波字類抄仁諸寺〕仁和寺、光孝天皇御宇造之、仁和四年八月日供養、[illegible]號仁和寺、

〔和州舊跡幽考四添上郡〕菩提山

菩提山正曆寺、龍樹院は、正曆年中勅をうけて、兼俊僧正の建立、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十一月廿五日庚子、建長寺供養也、〇中略已造畢之間、今日展梵席、

〔建長寺碑文〕山以鄕名、寺以年號、請師〇道隆爲開山第一祖、

〔沙石集十下〕建仁寺本願僧正事

故建仁寺ノ本願僧正〇榮西中略、建仁寺ヲ建ラレケリ、〇中略ハタシテ相州禪門〇北條時賴建長寺ヲ建テ、大覺禪師、叢林之軌則、宋朝ヲウツシヲコナヒハジメラル、滅後五十年ニアタル、建仁建長文字相似リ、年號ヲ以テ寺號トスル風情モ昔ニタガハズ、〇下略

〔元亨釋書二智傳〕釋榮西、〇中略建仁二年、金吾大將軍源賴家、施地于王城之東、營大禪苑、〇中略依之建仁、上爲官寺、得有司監護、

〔天龍寺造營記錄〕師檀和睦有改號、被下勅裁云々、其狀云、

曆應寺事、可被改號靈龜山天龍資聖禪寺者、院宣如此、仍執達如件、

七月廿二日　曆應三年

權大納言經顯奉

謹上　夢窻國師方丈

〔江戸名所圖會十四〕東叡山寬永寺

〔慈眼大師傳〕二月〇寬永二年承台命、卜靈地於江城之鬼門、〇中略創東叡山、

〔本阿彌行狀記下〕南光坊僧正の、大師號の事、叡山殊の外不承知たりといへども、勅命是非なく山の歷代に加ふ、〇中略寬永寺の號も、大に不承知の事なりとぞ、

〔泰平年表常憲院〕元祿元年十一月四日、神田橋御門外に御祈願所御建立、筑波山護持院元祿寺と號す、延寶江戸切繪圖に、今の牢屋敷より土手を隔て、北の方に對して知足院有、

〔南蠻寺興廢記〕頃ハ人王百七代、正親町院ノ御宇、織田信長、〇中略謁見畢テ、妙法寺ニ入レ置キ、中泉藤左衞門、奉行トシテ饗應ス、ウルカンガ弘法トコト安土ニ於テ評議アリ、文敎院桃山等申止ムト雖共、信長承引ナク、菅谷九右衞門ニ命ジテ、京都四條坊門ニ四町四方ノ地ヲ寄附シ、石垣ヲ築キ、一寺ヲ建テ、永祿寺ト號ス、因茲叡山ノ衆徒憤リ、延曆寺ノ外、年號ヲ以テ寺號トスルコト不可然トテ、座主要圓僧正ヘ訴ヘケレバ、僧正ノ曰ク、其儀故法也ト雖ドモ、今朝廷衰ヘ、王位モ輕ク、佛法ノ威力モ亦薄シ、信長權勢ニ募テ、我意ヲ働トイヘドモ、之ニ敵シテ却テ山ノ害有時ハ、王威ヲ以テ制シ難シ、隱便ノ沙汰可然歟ト制セラレケレドモ、一山蜂起シテ、大講堂ノ庭ニ集リ、朝廷ヘ强訴ノ奏狀ヲ認メ、衆徒百三十人ヲ山ヨリ下シテ、之ヲ奏達ス、朝廷僉議アッ

テ、山門ノ強訴沙汰延引セバ、又神輿ナド捧グ來ランハ、京都ノ騒動ナルベシ、早ク信長へ命ゼラルベシ迚、花山院中納言廣政ヲ以テ、山門奏狀ノ趣、信長ヘ命ゼラル、信長不快也ト雖ドモ、勅命ニ准ヒ、永祿寺ヲ改テ、南蠻寺ト號ス、

○按ズルニ、我國ニテ支那ノ年號ヲ寺號トセシモノアリ、卽チ曹洞宗ノ永平寺ノ如シ、同寺ノ條參看スベシ、

山號

〔一話一言十九〕山號寺號

今市中にある寺にても、必山號寺號ある事おかしき事と思ひしに、西土にてもある事なり、譚友夏が、鵠灣文草の中に、重修寶峰山觀音寺碑記あり、其文中に曰、邑百里無山、何山之足名、寺必麗山、寺之斯山之矣とあり、五月既望記

〔鹽尻一〕嶽山と連續する山號　我尾城南萬松寺山號を龜嶽山といふ、寺僧明僧心越に額を筆せん事を望む、越曰、嶽も亦山なり、豈二ツ並べて稱すべけんやとて、龜嶽林と書してあたへけるとなん、按るに異邦に嶽山用ひし事、間々多し、廬州吳嶽山、均州太嶽山、徽州白嶽山、及朝鮮に北嶽山有、衢州龜峯山、瑞州蠻嶽山、及南安府羊嶽山の類も、峯といひ、嶽といふも、また山ならずや、越が心別に趣ありしか、

〔羅山文集十五記〕高雄山神護寺募緣記

〔類聚三代格四〕太政官符

應以高雄寺爲定額幷定得度經業等事〇中略

天長元年九月廿七日

〔國花萬葉記二上山城〕補陀落山六波羅密寺

〔花洛名勝圖會二〕華頂山知恩敎院

院號

山門〔略○註〕額華頂山、〔竪額〕靈元法皇宸筆、

〔山城名勝志〕〔五洛陽〕本國寺〔號大光山、方丈名妙法花院、〕

〔和漢三才圖會〕〔七十三大和〕佐保川　今新在家石橋是也、水上出於春日山、西流、眉間寺南旋也、眉間寺山號曰佐保山、是故也、

〔甲斐國志〕〔八十七巨摩郡〕身延山久遠寺　稱妙法華院、日蓮宗總本寺ナリ、

〔東福紀年錄〕建長元年己酉、平元帥時頼〔最明寺殿〕開巨福山、號建長寺、圓爾遣僧十員、行叢林禮、

〔建長寺碑文〕山以鄕名

〔新編鎌倉志〕〔三〕巨福路坂

巨福路〔或作小袋路、或作禮、又作呂、〕坂ハ雪下ヨリ建長寺ノ前ヘ出ル切通ナリ、

〔新編相模國風土記稿〕〔百三鎌倉郡〕清淨光寺

藤澤山無量光院ト號ス、時宗ノ總本山、

〔慈眼大師傳〕寛永二年二月、承台命、卜靈地於江城之鬼門、摸王城叡岳舊規、創東叡山、〔略○中〕慶安年中、勅賜額、號東叡山寛永寺圓頓院、

〔初祖道元禪業記〕寛元二年甲辰七月、草創吉祥山永平寺、

〔温故新集閒書〕〔七〕京師五山

万壽寺は、洛中故山號なしと云、夫故山號を用ゆれば京山と云也、

〔三代實錄〕〔三十五陽成〕元慶三年三月廿三日癸丑、以淳和院、爲道場、不改院號、安置平生侍左右之尼、厚充供料、永令居住、師資相承、修道不斷、

〔法然上人行狀畫圖〕〔四十八〕往生院の念佛房〔又號念阿彌陀佛〕は、叡山の住侶、天台の學者なりき、〔略○中〕嵯峨の清涼寺、〔略○中〕かの西隣の往生院も、このひじりの草創なり、

〔洛陽般舟三昧院記〕伏見般舟三昧院は、後土御門院の草創なり、

〔伊呂波字類抄宇諸寺〕雲林院、(中略)先是僧正遍照奏言、雲林院、是仁明天皇之第七皇子常康親王舊居也、去貞觀十一年二月十六日天皇遷化之後、親王剃除頭髮、此院求爲精舍、

〔壒囊抄下〕得長壽院　天承二年壬子三月十三日甲辰、供養之御願文、〇下略

〔百練抄七二條〕長寬二年十二月十七日、太上皇〇後白河供養蓮花王院、

〔天下南禪寺記〕帝嘗以其在禪林寺之南顏焉、曰南禪院、〇中略此寺之濫觴也、

〔攝陽群談十三寺院〕大念佛寺　山號大源山、院名諸佛護念院ト稱ス、

〔山城名勝志四洛陽〕佛光寺　號花園院、

堂號

〔續日本後紀二淳和〕天長十年十二月癸未朔、道場一處在山城國愛宕郡賀茂社以東一許里、本號岡本堂、是神戶百姓奉為賀茂太神所建立也、天長年中撿非違使盡從毀廢、至是勅曰、佛力神威相須尙矣、今尋本意、事緣神力、宜彼堂宇特聽改建、

〔諸門跡傳二〕毘沙門堂　元院室稱號、代々任僧正、

〔書言字考節用集一乾坤〕因幡堂イナバダウ在五條烏丸、號平等寺、天德三年、因州刺史橘行平本願、則以等身藥師佛爲本尊、

〔山城名勝志四洛陽〕因幡堂

今按、元大納言行平卿第也、藥師從因幡國遷座之後作堂、

〔伊呂波字類抄幾諸寺〕行願寺　皮堂是也、子細有皮堂法文、仍委不勒之、

〔京城萬壽禪寺記〕正嘉年中、十地上人又曰爾一上人、覺空禪師也、與其徒慈一上人寶覺禪師也、修淨土教、慈一聞東福國師道風、往扣其室、針芥相投、十地亦見國師、遂領玄旨、二師棄教入禪、扁六條御堂曰萬壽禪寺、蓋嘉曆三年、相模守平朝臣狀云、萬壽之題額、起最明寺之素意、

坊號

〔南都七大寺巡禮記元興寺〕極樂坊　安極樂萬陀羅、故號極樂坊也、智光法師所書之萬陀羅也、則號

智光萬陀羅也、〇中略

堂一字號萬陀羅堂、在四方仁極樂萬陀羅、口傳云、此堂者、智光法師造之、其後破損間、西行法師勸十方建立云々、〇中略

禪定院 號飛鳥坊

〔寺格帳上天台〕高百五拾石 御朱印六百五拾貳石餘之内配當　京愛宕山 長床坊

〔寺格帳上眞言〕高百石 朱御印　大山 八大坊 〇中略

高五百石 御朱印 本寺　和州 小池坊

〔寺格帳下修驗〕高五拾三石 御朱印 正大先達　武州越生 山本坊 〇中略

高九拾五石壹斗餘 御朱印淺間領之内　駿州村山鄕 池西坊

高九拾四石五斗 御朱印右同斷　同州同鄕 辻之坊

高貳拾六石五斗餘 御朱印右同斷　同州同鄕 大鏡坊

〔寺格帳下無本寺〕高百五拾石 御朱印貳千石之内配當　南都東大寺山内 花嚴宗本寺 四聖坊 〇中略

高壹石 御朱印　京六角堂頂法寺 天台宗 池坊 〇下略

庵號

〔寺社法則下〕寛政四子六月十六日　進達

一都而一寺ニ相立來候寺、庵號ニ而相續致來候を、寺號ニ相改度旨願之儀、私共ヨリ直願出、又ハ遠國奉行ヨリ懸合等之砌伺之上差免候も有之、又不及伺、私共限ニ而差免候も有之、是迄區々ニ而御座候、以後ハ得ト相糺、一寺ニ相立來候段無相違分ハ不及伺差免候樣可仕哉、此段相伺候、

書面、其度々伺候方ニ相心得可申旨被仰聞、

牧備前

軒號

丹波守殿へ進達　近藤登之助

文化十一戊十月廿六日

一御書面、庵號を寺號山號等ニ改度願之義、奉行所へ相願候ハ格別、本寺より差免有之候共、御聞屆ハ難成筋と存候、

〔釋氏要覽上住處〕庵釋名曰、草爲圓屋曰庵、庵奄也、以自覆奄也、西天僧俗修行多居庵、

〔今昔物語十三〕攝津國菟原僧慶日語第五

今昔、攝津國ニ慶日ト云フ僧有ケリ、〇中略道心盛ニ發テ、忽ニ本山延暦寺ヲ去テ、生國ニ行テ、菟原ト云フ所ニ籠居テ、方丈ノ庵室ヲ造テ、其ノ中ニシテ、日夜ニ法花經ヲ讀誦シ、三時ニ其ノ法ヲ修行シテ、其ノ暇ノ迫ニハ、天台ノ止觀ヲゾ學ビケル、庵ノ內ニハ佛經ヨリ外ニ餘ノ物无シ、三衣ヨリ外ニ亦著物无シ、亦庵ノ邊ニ女人來ル事无シ、〇下略

〔和漢三才圖會七十二末山城〕櫻元庵　在山田村、嵯峨法輪寺之南

有巨櫻樹一株、呼曰西行櫻、西行庵舊地、又有稱西行田之田地、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕酬恩庵　在綴喜郡薪里、寺領九十五石、

靈瑞山妙勝寺、南浦大應國師隱居之舊跡、一休和尙墓之建庵、〇下略

〔寺格帳禪下〕御朱印高五拾石　江州粟勝寺村　實宰庵

〔新編鎌倉志三〕松岡

松岡ハ、圓覺寺ノ南向ナリ、東慶寺ト號ス、〇中略

蔭凉軒　方丈ノ北ニアリ

海珠庵　山門ヲ入、右ニアリ、

永福軒　山門ヲ入、左ニアリ、

青松院　佛殿ノ東北ニアリ

妙喜庵　青松院ノ北ニアリ

右皆脇寮ナリ

齋號

〔寺格帳洞下宗〕　遠州　可睡齋

右住職、於御白書院御椽頰、老中列座被仰渡之、

一住職御禮、御白書院獨禮、獻上一束一卷、御闕之外貳疊目、

〔徒然草諸抄大成十〕相國寺ノ仁如和尚ノ御門弟ニ、俗男ノ儒學ヲ心ザシ、詩作ヲ自慢セシ者アリ、入道シテ道號ヲ和尚ニ申ケレバ、彼ガ心中ヲシロシメシタリケン、タヾ其方ノ思フヤウニツカレヨトノ給ヒシニ、東坡山谷ガ片字ヲトリテ、坡谷庵トツケヽリ、人々キタナキ、庵號カナト笑フヨシヲ聞テ、庵ノ字ヲノケテ、齋ノ字ニツケカヘタレド、イヨ〳〵惡シクナリテ、人ニワラハレシトナリ、貞

○按ズルニ、前文ノ注ニ貞トアルハ松永貞德ナリ、

道場號

〔本朝文粹願文十四〕陽成院四十九日御願文　後江相公

奉造某佛

奉寫某經等

右去九月二十九日、忽出冷泉之寶宮、永遷眞如之華界、七七御忌、已當今朝、仍於圓覺道場、奉供養件佛經、〇中略

天曆三年十一月十八日　別當前大納言源朝臣

〔本朝文粹序十〕九月十五日於豫州楠本道場、擬勸學會、聽講法華經、同賦壽命不可量、　江以言

蓮社號

如是我聞、九月十五日者、是所謂勸學會也、爰吾黨二三子、結緣於彼會、來至於此間之者、而作是念、○下略

〔淸淨光寺文書新編相模國風土記稿所載〕淸淨光寺藤澤道場　遊行金光寺七條道場　時衆、人夫馬輿已下、諸國上下向事、○中略

應永廿三年四月三日　沙彌道觀華押

○按ズルニ、時宗ノ寺院ハ、皆道場號アリ、

〔朝倉始末記二〕加賀能登越中ノ凶賊亂入越前事

彼圓福道場ト申ハ、齋藤氏遠貞ト云ヒシ人、世間ノ無常ヲ觀ジツヽ、自自導ト名乘ツテ律宗ニ歸伏シ、螢ヲ聚メ、雪ヲ積ミ、學文怠ラザリケレバ、智行兼テ相備リ、三國ノ湊ニアリケルガ、義祖親鸞聖人ノ越後ノ國ヘ左遷ノ時、不慮ニ面謁ノ事アリテ、他力念佛ノ法門ヲ立所ニ受得シ、卽師資ノ禮ヲトゲ、○中略加戸ト云山里ニ圓福寺ヲ立ツトカヤ、

〔江戸砂子二淺草〕神田山日輪寺　時宗　相州藤澤末　新寺町

開山一遍上人、芝崎の道場と云、

〔類聚名物考佛教六〕蓮社　結社　淨社　今淨土宗の家にて社を結びて、その家をも、蓮社の號を立る事あり、俗人にも、蓮社號を授などいふ事さへ、今世には出來たり、その初は、晉の惠遠を始祖とする事也、此事は釋氏要覽、荊楚歲時記、佛祖統記卷廿七等に出たり、淨家一抄物云、今釋家結募緇白、建法○法社忍求生淨土、淨土廣、遍求心亂、乃確指安養淨土、爲棲神之所、故名蓮社淨社、爾と見ゆ、惠遠法師の傳は、梁高僧傳第六佛祖統記、第廿七編年通論卷三五十等に見ゆ參考すべし、

〔僧史略下〕結社法集

晉宗間、有廬山慧遠法師、化行潯陽、高士逸人輻湊于東林、皆願結香火、時雷次宗、宗炳、張詮、劉遺民、

周績之等、共結白蓮華社、立彌陀像、求願往生安養國、謂之蓮社、社之名始於此也、

〔碧山日錄〕長祿三年五月八日己丑、寺之南麓有蓮社之侶、所居頗有風致、晩與最勝翁過從而遊、

〔寺格帳淨土上〕御朱印高四拾石　惠遠派　紫衣　堺　旭蓮社

右住職於知恩院申付ル

〔鹽尻五十五〕日本淨宗蓮社號傳

釋白蓮社、諱圓心、京兆人、未詳其姓族、德宇宏、智鋒爽、邈然不嗜世味、唯好顯密妙旨、既洞、晩投鎭西聖光師修淨業久矣、四條院天福元癸巳歲三月、從國使橘尙書入宋、理宗紹定六年登廬山謁睿禪師、傳衣鉢而歸朝、自號白蓮社、淨土宗社號、權輿于此、且師乃廬山義祖也、光師門人亦有蓮社等、蓋自此時社號間在しか、勅額、扶桑廬山大阿彌陀經寺開山等一祖、賜紫特號旭蓮社、大乘澄圓大菩薩、智演國師大和尙、泉州大鳥郡產也、姓源、左典厩義氏之裔、泉州刺史義貞男、母百濟氏、嗷無嗣、禱泉州家原文珠大士、一夕聞兒啼庭籬、便開戶舉以爲子、五歲親文墨、暗誦曼殊神呪、閭里嘆異焉、師梵相奇偉、性悟而器閎、九歲入東大寺、師圓雅公而薙染授具長惠解、天然才氣秀逸、研究俱舍唯識閫奧、洞徹三論花嚴妙旨、既而至槇尾山、精練兩部秘敎、且善悉曇字義、然傳台宗於承遍觀豪二師、每友東福虎關公、親敲禪要、且久學淨敎、浴九品西山二流、亦遙游東關、謁鎌倉光明常譽大和尙、循其奬訓、稟鎭西正系、自爾名望新、而盛弘通淨宗、觀以稱名一行、花園帝文保元年丁巳、泛溟滓徑入元、仁宗延祐四年登廬峯、見東林叆曇普度大師、學輪下、而面授無邊海藏口決、傳佛國惠遠之正脈、剩蒙致外證許、在元凡五年、巡歷各蘭勝區、得謁師印可、於此齊携三藏佛證圖將來佛舍利、遠公傳持六時禮蓮華塲及衣蓋、文籍若干、歸朝、實後醍醐院元亨改元辛酉也、其後明極同船而歸也、帝召數聞去、內外謂佛家鸑鳳、僧中龍虎、帝崇其道德、正中甲子元年、特詔創梵宮、勅號旭蓮社、以精舍呼蓮社、我國始于此、　普敕天下、令修般三昧、益轉綜英發、後村上院興國四年壬午、北主康永元年天變地天、疫疾比屋愁苦天倫、惱宸襟、便余演公禳災、師應命昇九禁、奉授一乘圓戒、使王公以下士

庶、七日唱一百萬遍念佛、應時妖氣忽退、消四民呼萬歲、帝感激之餘、特賜大乘澄圓菩薩崇號、被紫袍、且叙宣宸翰寺額號扶桑廬山大阿彌陀寺、其勅書曰、法師遠涉滄波、覆異聞於絕域、遐游唐縣、研妙機於碩師、宜施食封百戶云々、恩榮之盛亦如斯、師名翼四布、振彌天威風、丕漲吉水法流、挑廬山傳燈、淨宗中興、誰出師之右乎、我國禪淨兼學道場、以旭蓮社爲先、在洛東花頂山後龜山院文中元年北主應安七年秋七月廿七日、師召大衆而上堂、遺誡普說、不異平日、端座合爪而辭衆、向自影唱佛名、悠然而座化、報壽九十有餘歲、嘗述十勝論、驚覺論、獅子伏象論、拂風論等若干帙、藏寶匧、今皆行世、

大樹家蓮社號

東照宮安國殿　德蓮社　台德院　光蓮社　文昭院　順蓮社　有章院　照蓮社

貴介蓮社號

瑞龍院尾張侯光友卿　天蓮社　龍雲院高松侯　雄蓮社

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

臣某言、○中略　欽明天皇之代、佛法初傳本朝、推古天皇以後、此敎盛行、上自群公卿士、下至諸國黎民、無建寺塔者不列人數、故傾盡資產、興造浮圖、競捨田園以爲佛地、多買良人以爲寺奴、降及天平彌以尊重、遂傾田園多建大寺、○中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔享保集成絲綸錄二十一〕寬文八申年十月

覺

一新規建立之寺御停止之旨、三十八年以前被仰出之處、其以後借置候寺地、當春火事之節燒失之分被召上之旨、寺社奉行所ゟ申渡畢、然ば右之明地之義は、借置候輩之頭ニ、先可預置之事、

一當春不燒失新地、又ハ私曲無之分は、約束之年數迄ハ、先其儘可差置候、但住持方より明退之儀

ハ、可ㇾ爲ㇾ心次第事、以上、

十月

〔反古裏〕近年都鄙トモニ、坊舍造立ノ事シカルベカラズ、一身冥加ノタメ、諸國御門弟ノ煩トイヒ、且ハ他宗ノ偏執ノモトヒナリ、ヨロシク停止アルベキ旨、仰出サル、是ニヨリ、私建立ノ在所、若松ニ清澤二役、波佐谷ニ鮎瀧、山田ニ瀧野ノ外ハ略定ス、越中國安養寺ニ赤田、打出兩所ノ草坊停止セリ、中田ニヲイテハ、昔ヨリ是アルヨシ、申上ラレケルトナリ、近松ニ赤野井、今小路ニ豐島、是ハ存覺上人御代ヨリノ坊跡也、其外ハ停止アリケリ、然ニ實如御圓寂ノノチ、又在々所々ノ新坊建立シ、坊主衆ニイタルマデ、寺內ト號シ、人數ヲ集、地頭領主ヲ輕蔑シ、限アル所役ヲツトメザル風情、サダメテ他家ノ謗難アルベキ物ヲヤ、既ニ濃州所々ノ寺內ヲ破卻セラレ、南方ニモ其類アマタ聞エ侍リ、是ニヨリテ、前住上人專ラ御掟ノ旨、カタク仰出サレ、所々ノ非義アラタマリ、御再興ノ時節到來セシトナリ、或ハ守護地頭領主御一流ニ歸シ、興行ノ在所、或ハ佛法マレナル遠國、ハジメテ俗緣ヲクハヘ、法流恢弘ノ秘計ヲメグラス事、昔年ヨリモ是オホシ、尤御一宗繁榮ノ根元タルベシ、シカラズシテ、名聞利養ニ著シ、町ノウチサカヒノ間ニ、アマタ所ニ寺內ノ新義、カヘリテ誹謗ヲ招クタヨリナルベシ、

〔草茅危言四〕寺院之事

一織田氏ノ延曆寺、豐臣氏ノ根來寺ナド、干戈ニ及ビシハ、格別ノコト、ソレナラデ寺僧ニ罪アリテ、寺破卻ト云コト、餘リ聞及バズ、是ハ有ベキ筈ノコトナラン、顯貴諸侯ニテモ、罪有レバ改易アリ、子孫斷絕シ、城郭邸第モ召上ラル、或ハ跡ハ立テモ、邸第ヲ召上ラレ、居城破卻有シハ、昔モ今モ間見ニ接セリ、又平民死罪ナレバ、田宅貲財沒收ノコトハ、常刑ナリ、何トテ、寺院バカリハ然ラザルニヤ、數十年前、浪花ノ南平野鄉ノ大念佛寺ノ住僧、贋綸旨ノ罪ニテ、磔刑ニ處セラ

禁私立寺

レシニ、寺ハ別條ナシ、又多武峯トモ云、長谷寺トモ聞ク、奸僧相謀リテ、佛經轉讀ノ内ニ往生サスル奇特アリトテ、人ヲ生ナガラ棺ニ入レテ、僧衆讀經ノ内、棺底ヨリ槍ニテ突殺シ、直ニ火化シ、金帛ヲ騙シ取タル罪ニテ、皆死刑ニ行ハルヽニ、寺ハ別條ナシ、近年府下ノ僧奸淫ニテ斷罪ニ處セラレ、府北ノ僧妖術ニテ遠流ニ處セラレシニ、皆寺ハ別條ナシ、僧ハ子孫ノナキモノ故、寛大ノ慈ヲ以テ、罪ハ其身ニ止マルナルベケレドモ、後住ヲ置テ、法脈ヲ傳フレバ、俗間他姓ノ養子相續ト、何モ替リタルコトモナケレバ、刑亦其罪ニ從ヒテ、籍沒ノ科ナカルベカラズ、兼テ諸本寺ニ嚴命有テ、已來右ノ類、、寺破却ニ致タキモノナラン、成敗興亡ハ人世ノ習ナルニ、寺バカリハ、成テマタ敗レズ、興テ終ニ亡ビザルコトノ機ニナリタリ、夫故、次第ニ多クナリタル故、カヽル便宜ニ、兎角減ズル樣ニアルコト切要ナルベシ、

〔本朝世紀〕寛治元年八月廿九日

左辨官下　左京職　右京職　撿非違使同之

應任先符旨重禁制立京中堂舍事

右左大臣宣、奉勅、比來兩京之間、多建堂舍事、乖朝憲、理不可然、宜仰左右京職幷撿非違使任先符旨、自今以後嚴從禁遏者、職宜承知依宜行之、

寛治元年八月廿九日　　大史小槻宿禰

權少辨藤原朝臣

〔古今制度集六上〕禪家大德寺諸法度〇中略

一新院建立之時、申降綸旨奉書、塔頭披露先規也、然近年爲私稱寺號院號事、自由之至也、向後可停止事、〇中略

元和元乙卯年七月日　　大神君御朱印

古跡新地

○按ズルニ、私立ノ寺ヲ禁ゼシ事ハ、又寺格篇、官寺、勅願寺條等ニ見ユ、宜シク參看スベシ

〔天龍寺文書七〕常住屋敷之定

一新地之寺就ㇾ建立、屋敷於ㇾ所ㇾ望者、土地一坪ニ付代銀拾錢目宛ニ相定事、

一新地之小庵於ㇾ建立者、可ㇾ依ㇾ其處也、代銀者可ㇾ爲ㇾ右同前事、○中略

右依ㇾ衆評ㇾ如件

承應二癸巳年七月七日　天龍寺役者○下略

〔享保集成絲綸錄二十一〕元祿元辰年四月

寺院古跡新地之定書

寛永八辛未年、起立之寺院は、古跡、但當辰年迄は五十八年ニ成申候、翌申年より起立之寺院新地ニ成申候、

元祿元辰四月

〔憲敎類典四ノ十四上〕元祿五壬申年五月

嚴有院樣御十三回忌御法事付て、新地古跡等被ㇾ仰付ㇾ覺、

天台宗二ヶ寺　眞言宗四ヶ寺　禪宗四十九ヶ寺內、十五ヶ寺五山派、一ヶ寺大德寺派、五ヶ寺妙心寺派、廿八ヶ寺曹洞宗　淨土宗三十三ヶ寺　日蓮宗三十八ヶ寺　一向宗二十ヶ寺內、七ヶ寺西、十三ヶ寺東、

都合百四十六ヶ寺

右有來候新地之寺院、今度古跡被ㇾ仰付、向後新地取建候儀、堅御停止之間、可ㇾ得ㇾ其意之旨、寺社奉行中へ、老中牧野備後守列座被ㇾ申ㇾ渡之、

元祿五年申五月

〔享保集成絲綸錄二十一〕元祿五申年七月

覺

只今迄有來新地之寺院は、御赦免にて、向後古跡同意ニ被仰付、自今以後、新地之寺院、堅御停止之旨被仰出候、但只今迄ハ、新地寺院之內、最早段々潰候分、再興之儀、并庵室之類、寺院ニ取立候義ハ、彌以堅く御停止之間、可被得其意候、右之趣、只今急度、在々江被相觸候ニは不及候、面々書面之趣被相心得、被仰出ニ不相違樣ニ可在御仕置候、以上、

七月〇又見ニ張紙留、

〔明良洪範續篇三〕水野右衞門大夫忠春、寺社奉行ノ時、新地改メ仰付ラレ、見分ノ時川田ガ窪ニ、牧野備前守貞成ガ寺也トテ、新地ノ寺院有ルヲ、同役ノ人、此寺ノ儀ハ、別儀ヲ以テ、其儘立置レ然ルベカラント云、右衞門大夫聞テ、新地ヲ改ムルカラハ、譬ヘ備前守殿ノ寺ニモセヨ、立置ル筋モ有ラバ兎モ角モ、筋無レバ、其儘ニハ差置レズ、御役ヲ勤ムル者、私曲ノ取計ヒ有テハ、上ミヘ對シテ相濟ズトテ、第一番ニ、其寺ノ寺號ヲ削ラレケルト也、カヤウニ正直ナル右衞門大夫ナリシニ、後年大坂御城番ノ時ハ、イカナル儀ニヤ惡評ヲ受ケタリ、

市中寺構

〔享保集成絲綸錄二十一〕寺社之部ニ可有之御觸書、箇條入交リ之部に有之候分、

一寬文二寅年九月出家、山伏、行人本寺より證文ヲ取可差置、幷表店ニ不差置、裏店ニ置候共、寺構ニ爲致間敷儀、地借店借等之部ニ有之、

寬文二寅年十月

一諸出家幷山伏、町中ニ家屋敷ヲ持、其家屋敷之內ニ寺構ヲ仕置致居住候、出家山伏有之候ハヽ、今明日中ニ相改、其樣子ヲ具ニ書付、名主月行持判形仕、差上可被申候、若地代屋敷借家抔ニ有之候共、相改書上ゲ可被申候、右之通之出家山伏無之町ハ、月行持印判ヲ持、町年寄方江其斷可

修道

被申來候、少も油斷有間敷候、以上、

十月

寛文五巳年十月

一借在家構佛壇不可求利用之事

右之通御法度ニ候間、向後町中ニ而出家、山伏、願人、行人等、佛壇構候者、差置申間敷候、併當分差當リ、參所無之者可有之候間、左樣之者、當年中ニ拂可申候、正月ゟ撿使ヲ出し相改令違背者有之候ハヾ、家主家守、相棚之者曲事ニ可申付候間、此旨相守可申候、以上、

十月

寛文五巳年十一月〇中略

一出家、山伏、行人、願人、佛壇構候儀無用之由、最前も相觸候通違背仕間敷候、但山伏、行人、願人は、旦那より祈念頼ミ候ハヾ、其時計、繪像を懸、祈念可仕候、祈念仕舞候ハヾ、繪像無用可仕事、〇中略

十一月

〔天保集成絲綸錄六十一〕天保五午年二月

御府内住居之寺社修驗等、市中ニ道場を構、諸參詣等爲致候儀は、難成之儀ニ有之候處、近來猥ニ相成候間、今般類燒之於町々、市中道場有之候分は、唯今迄之振合を以、普請取掛リ候儀は不相成候間、其旨兼て町役人ども心得罷居、去卯年町觸之通相心得、早々奉行所江可訴出候、

午二月

〔日本書紀天武二十九〕九年四月、是月勅、凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺二三以外、官司莫治、唯其有食封者、先後限三十年、若數年滿三十則除之、且以爲飛鳥寺不可關于司治、然元爲大寺而官恒治、復嘗有功、是以猶入官治之例、

〔類聚三代格 三〕乾政官符

修治諸寺破壞事

右山階寺玄基法師奏狀偁、嚴淨國家、無過伽藍、撥却災難、豈若佛威、今見國土諸寺、往々頽落、曾罔修治者、伏請仰國司檀越等、每年漸治者、奉勅依奏、

天平寶字三年六月廿二日

〔類聚三代格 三〕勅、諸國國分寺、塔及金堂或朽損、由是天平神護二年、各仰所司、以造寺料稻、隨即令修、而諸國緩怠、曾未修造、非唯露穢尊像、實亦輕慢朝命、宜早隨壞修理、不得更怠、又國分僧尼供養、除米鹽外、曾無優厚、齋食之道豈合如此、宜齋酢雜菜優厚供養、其料度者、用寺田稻、永爲恒例、

神護景雲元年十一月十二日

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆十年四月戊申、山背國郡內諸寺浮圖、經年稍久、破壞處多、詔遣使、咸加修理焉、

〔政事要略 五十六 交替雜事〕定額寺破損 ○中略

信濃 前司源師尙

又云、不加撿挍之怠、雖在前司、而去任之後、依格入京、須見任相承、而講讀師共加撿挍、不論無實破損、令別當三綱檀越等、有田園之寺以其地利、無田薗之寺申請料物修塡、待了放還講讀師、

延長五年判

〔玉葉〕建曆二年三月廿二日　宣旨 左大臣、右大弁、○中略

一可令諸寺執務人修造本寺事

抑已上修造之勤、格條炳焉、而社寺司等徒貪社領寺領之利潤、不顧本社本寺之破壞、然間叢祠雖荒而秋露空濁、蘭若檐頹兮春雨不留、須隨小破且加修理、而及大損始經奏聞、頻申請別功、剩爲己忠、偁稱致造畢、偏忘公平論之政途、殆背科條、慥令彼司等致連々修造、若背符旨、尙有懈怠者、解却見任、撰

人改補、兼又有殊功、宜加褒賞、但其領不幾、其勤難及者、注損色、經言上、課別功令造營、

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月廿九日丙午、神社佛寺興行事、二品〇源頼朝日來思食立由、且所被申京都也、且於東海道者、仰守護人等、被注其國總社、幷國分寺破壞、及同尼寺顚倒事等、是重被經奏聞、隨事體爲被加修造也、爲善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行、今日面々被下御書云云、　六月九日乙卯、去四月之比、政道事、殊可致興行之趣、付議卿令奏聞給了、勅答之條々、執職事目錄、帥中納言被進之、今日所到來也、

條々

一諸社諸寺修造事

於神社者、大概被付國訖、諸寺尤大切、東寺以下殆無其跡、如此令申旨可然事也、早可計仰之由、被申攝政訖、

〔吾妻鏡 十九〕承元四年八月九日甲子、神社佛寺領興行事、思食立、有不慮顚倒事否、可尋注進之旨、今日被下御書於守護人等云云、

〔御成敗式目〕可修造寺塔勤行佛事等事

右寺社雖異崇敬是同、依修造之功恒例之勤、宜准先條、莫招後勘、但恣貪寺用、不勤其役之輩者、早可令改易彼職矣、

〔式目新編追加〕可被崇敬佛神事

九州爲宗寺社、破壞以下所遂撿見、且可令注進損色之由、所被仰使者也、但於遠所者、使者撿見爲難治者、可計沙汰、

寛元三年十二月十六日　　武藏守 判

備前守殿

〔新御式目〕弘安七五廿

寺社領如レ舊被二沙汰付一、被レ專二神事佛寺一、被レ止二新造寺社一、可レ被レ加二古寺社修理一事、

〔長曾我部元親百箇條〕一諸寺勤行事等、如二有來一不レ可レ有二懈怠一、并寺家造營、以二其寺領一可二修補一事、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛文五年七月十一日

定 ○中略

一寺院佛閣修復之時、不レ可レ及二美麗一事、

付佛閣無二懈怠一掃除可二申付一事、○中略

右條々、諸宗共可レ堅二守之一、

〔寺社奉行留書二〕諸作事

戌十二月十九日戸田山城守殿御渡候書付、土井伊豫守ゟ相廻、

一寺社境內作事之事

右者有來所修復之分ハ不レ及レ伺ニ、勝手次第致し候様ニ可レ被二申渡一候、

一同表向并門前町屋作事之事

右可レ爲二同前一候

一同境內新規作事、并造リ足作事之事

右新規之作事、或は作リ足作事之儀、有來通にて事濟可レ申義ハ、其通ニ可二差置一候、作事不レ致候而不レ叶義於レ有レ之ハ、隨分輕ク可レ仕候、若花麗成儀仕候ハヾ、潰可レ申候間、兼而左様可レ心得旨可レ被二申渡一候、○中略

一遠國御修復願之事

右者可レ爲二伺之通一候、尤難レ成筋ニ候ハヾ、其趣申聞可レ被二差戻一候、

以上

左記四通之書付、亥三月十日於御城戸田山城守殿江差出、

一寺社境内作事修復建直之節、寺社奉行所江相願被差免候、則拙者共方へ茂繪圖以口上相届申候、寺社奉行衆江願相濟候間、作事之儀、勝手次第仕候樣ニと申渡候、若御帳面と境内坪數、門前町屋、或持添地仕添地、本寺違文守相違之儀有之候節、家作ニ障無之樣ニ而御座候へハ、作事ハ勝手次第可仕候、ケ樣之相違有之間、寺社奉行衆印形之斷定紙可致持參之由申渡、印狀致持參候節申上、御帳相直申候、〇中略

右之通御座候、相違無之候得者願之通可仕由申渡候、以上、

正月

牟禮郷右衛門
朽木十兵衛
榊原隼之助
有田忠右衛門
飯田四郎左衛門
酒井新三郎

一寺社境内作事之事
　右有來所修復之分ハ、奉行所江不及願出、勝手次第可致修復候、
一同表向作事之事
　右有來通之修復、又は門塀葺替等之類、只今迄ニ相替品も無之分ハ奉行所江不及願出可改作事、
一同境内新規作事、幷造り足之事、總而有來通ニ而可事濟義ハ、新規幷造り足可致無用候、不致作

事ニ候而不叶義於有之ハ、隨分輕ク可仕候、若花麗成義仕、追而相知候ハヽ、爲取崩可申候間、兼而左樣可相心得候、右之分も向後者奉行所江不及願出、可致作事候、〇中略

右之趣被得其意、觸下并門前町家之者共迄可被申渡候、

十二月〇享保二年

〔寺社奉行留書 六〕寺社奉行江

寺社御修復之儀、享保十一年申渡候通、彌可被相心得事、

古跡之重キ寺社、又ハ各別御由緒有之候處、寺社領も少く、旦方、氏子等之助力も無之處者、御手不被附候而者、退轉可有之候條、御修復金可被下候、有來ル通リ不殘不致修復候而も、可相濟所ハ省略致し、修補候樣可被相心得事、

京六孫王社、椿宮、江戸穴八幡之類候事、

右寺社領茂相應ニ被附置、其上世間之助力も有之、かなりに修復可相務所者、自力を以修補候樣ニ申聞置、取掛候節、輕ク御金可被下候事、

武州六所明神、淺草觀音堂之類候事、

以上

三月〇享保十二年

〔德川禁令考 四十二下賜金〕享保十四酉年

寺社御修復料之御書付

寺社御修復之儀、御代々時之思召にて、一旦御取建、或ハ御修復被仰付候とて、永々從公儀御修復等可被仰付樣無之候、然共氏子旦方等之助力少キ寺社ハ、以來可及退轉候間、左樣之所ハ委遂吟味、勸化計ニてハ、修復難叶候ハヽ、爲修復料御金可被下候事、

一寺社大小ニよらず、助力之多少ニ隨ひ、御金可被下候事、
一如先々致修復候儀にてハ無之候、致減少不苦儀ハ遂吟味相止可申事、
右二箇條、近年寺社爲修復料御金被下候趣を以可有作略候、且又右爲御修復料年々金千兩宛除置候筈ニ候間、願有之內、可及大破所より取懸り候樣繰合可有之候、或ハ壹ヶ年之御修復料餘り候ハヽ、後年之御修復料ニ加可申候、尤右ハ年々除置候千兩之外ニ可相心得事、
一總勸化被仰出候、重キ寺社等ハ、尤別段之事、
右之趣、寺社奉行江申聞候間、可被得其意候、以上、

酉二月

〔寶曆集成絲綸錄十九〕寶曆七丑年五月

寺社御修復願之儀、享保年中ゟ度々申渡、寬保元酉年、御修復願出候寺社多有之候節、御代々思召を以、御造營御修復等被仰付候寺社、永々御修復所と相心得、大破ニ及び候上、御修復之願又ハ勸化等之儀願出候、右樣ニハ有之間敷事ニ候、向後上ゟ御修復被仰付間敷候、勿論寺社領相應ニ有之場所ハ、自今以後小破の節、早速修覆を加へ、及大破候節願出、或ハ專ら勸化之事願出儀は有之間敷儀に候旨、右之通御修復願候寺社江可被申渡旨相達候處、其節御修復願候寺社其外、右ニ准寺社江も不洩樣申渡無之哉、此以後願出候ハヽ、際限無之事ニ候條、以來彌前書之趣ニ相心得、公儀江もたれ不申、寺社領或ハ世間之助力を以修復致候樣、兼て寺社之者共江猶又不洩樣、得と可被申渡候、且又寬保之度相達候趣被申渡候上にて、自力修復難調儀も有之願出候ハヽ、寺社之格合を以、勸化御免被仰付候儀も可有之、其助成を以、修復ニ取掛り候節、御由緒之輕重に應じ、御金材木之內可被下哉、是亦寺社之者共江、申渡候儀は無之、寺社奉行心得之爲、申聞置候段、其節相達置候通ニ候へば、縱御修復或は勸化等の儀願出候共、容易ニは取上候筋ニハ無之候處、近頃は

願次第、一通り被相糺候迄にて、得と寬保の度申渡置候書面の趣を以、被相糺被申聞候儀ニも不相見候、此度相違候趣、尙又寺社の者共江被申渡候上にても、御修復或は勸化等願出候寺社も有之候ハヾ、彌前書の趣を以、得と被相糺、無據筋は被申聞候樣、可被相心得候、

右之通、此度寺社奉行江申渡候、享保年中より度々申渡、勸化又ハ御金材木等被下可相濟場所も、其以後御修復願出候節、右之吟味無之、願の書面を以、吟味有之、又候御修復被仰付候類も有之、區ニ相成候條、以來御修復願等、吟味ニ下げ候節、前書の趣を以、得と遂吟味、以來間違無之樣可被相心得候、

五月

〔寶曆集成綠綸錄十九〕寶曆八寅年八月

寺社奉行江

總て寺社之分、前々公儀ゟ御修復被仰付候場所々々、幷御金榑木類被下、或ハ勸化、開帳等御免、助力を以致修復候箇所々々共、此度一統不洩樣相調、右寺社之格合、御由緖之輕重、寺社之多少、幷御修復金被附置候分、委ク相糺、去丑年相達候書付之趣ヲ以致作略、自今共御修復可被仰付分、又ハ御金榑木類被下、或ハ勸化開帳等御免可被仰付分、其外共委ク認分、帳面ニ仕立可被差出候、勿論御宮御靈屋等有之場所も所々より前々御修復被仰付候儀も有之、又ハ御金被下候儀も有之候得共、御宮料御靈屋料幷御修理料金之有無多少等ニ寄、御手當可有之儀ニ候之間、其趣相心得、尤寬保年中、寺社御修復願之儀ニ付、伺相濟候箇所之分ハ、右伺相濟候趣ニて、右之振合ヲ以、總寺社不洩樣相糺、書付可被差出候、

八月

〔天明集成綠綸錄二十六〕寶曆十三未年八月

遠寺司

寺社奉行江

遠國寺社御修復願等ニ而、出府仕候者、願之否相濟候迄、當地ニ相詰罷在候而者、難儀も可致間、以來者、自分勝手ニ而、當地ニ罷在候者格別、左ニ無之分者、何も江願書被請取候ハヽ、一旦罷歸度者ハ、勝手次第相歸候樣可被致候、

八月

〔天明集成絲綸錄 二十九 寺社〕安永三午年十二月

寺社奉行江

總而寺社御修復等之願申立、各より被申聞候迄、右願通相濟候樣致度段、年寄を以御所方江相願、禁裏御崇敬茂有之候に付、願之通被仰付候樣被成度旨御沙汰之趣、所司代ゟ申來候類茂有之候一旦公儀江相願候儀を、猶又御所方江相願候儀者有之間敷事に候、以來右體之儀有之候はゞ、却而願之障にも相成、筋に寄急度被及御沙汰候儀茂可有之旨、寺社之輩江可被申渡候、

十二月

〔天明集成絲綸錄 三十〕安永六酉年五月

寺社奉行江

遠國寺社御修復之儀、向々より願出、是迄段々被相伺候分、箇所多、一度ニ御修復被仰付候ては御入用相嵩候ニ付、三州信樂光明寺、攝州多田院御修復等之儀は、當年御差延之積り可被相心得候、勿論以來ハ、遠國寺社御修復一箇年御入用高定置、難捨置分計、御修覆被仰付候害ニ候間、其趣被相心得、向々より御修復願出候ハヽ、破損之樣子得と相糺、輕重之趣可被申聞候、最其時々、御勘定奉行江可被談候、

〔扶桑略記 四 舒明〕十一年十二月、大安寺記云、施入百濟大寺封邑三百戶、良田三百町、幷種々財寶、〇中略

結界

此時始起京都造寺司等、多伐寺側社樹、子部大神含怒、放火燒寺幷塔、

〔日本書紀 二十三 舒明〕十一年七月、詔曰、今年造作大宮及大寺、則以百濟川側爲宮處、是以西民造宮、東民作寺、便以書直縣爲大匠、

〔職原抄 下〕造寺使(東大興福等兩寺外無此號)長官(東大寺者、大辨必兼之、興福寺者、南曹辨兼之、)次官　判官(東大寺者、一史兼之、)主典

〔職官志 四〕造寺之官、古多有之、天武時、有造高市大寺司、天平及天平寶字之間、有造藥師寺大夫、造西隆寺長官、造西大寺長官、造法華寺長(○長下脫官字)等、並臨寺所置、職原鈔云、東大興福之外無此號、蓋朝廷及相家特重之、不廢其名也、不必以造寺故置、東大寺聖武帝建置、天平十四年所發願也、興福寺淡海文忠公建置、和銅二年成之、○中略 按顯統鈔、南曹謂勸學院、在大學寮南、是藤氏之讀書所、類聚三代格、勸學院、是贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣公、以去弘仁十二年建置、乃謂之爲大學寮南曹、○中略 編年紀、拾芥鈔並云、藤氏長者宣旨以家辨官一人補、是謂南曹辨、公卿補任、貞應二年、右大辨藤原資經、爲造東大寺長官、文治三年、右中辨藤原親雅、爲造興福寺長官、此易例然也、○中略 按一史、謂太政官左大史上首、卽小槻氏之人也、

〔秘藏記〕結界義結界有二種、一者次第、二者横也、初次第者、最初菩提心是因也、佛位是果也、常觀想自此因地至於彼果位、純一觀行淨菩提心、更不起二乘外道心、是曰次第、二横者、我一心法界中毘盧遮那、乃至四佛四波羅密、十佛刹微塵數如來宛然而有、爲煩惱雲霧所覆蔽、不得明了見、當觀想除去是雲霧、開顯本有莊嚴、更不起妄想無明等煩惱、是曰横、觀是理、眞言印契是事也、

〔九院佛閣抄〕一當山內外結界事

官省符結界、亦名總道大行結界、○中略

東限江際　南限宜(ムヘ)谷(無動寺南在之)

西限二下水飲一　北限二横川谷一〇中略

一内地淨刹結界、亦名二六郎結界一、

口決云、當山六郎結界之外、官省符結界、籠山結界、相加内外八重結界在レ之、

〔性靈集 九〕高野建立初結界時啓白文

沙門遍照金剛、敬白十方諸佛、兩部大曼荼羅海會衆、五類諸天、及以國中天神地祇、幷此山中地水火風空諸鬼神等、〇中略某申幸頼諸佛加持力、幽明機熟之力、以二去延暦二十三年一入二彼大唐一、〇中略受則輪王啓運擬二弘此法一、必須得二其地一、簡二擇四遠一、此地ト食、是故天皇陛下特下二恩璽一賜二此伽藍處一、今爲二上報二諸佛恩一、弘二揚密教一、下増二五類天威一、拔二濟群生一、一依二金剛乘秘密教一、欲レ建二立兩部大曼荼羅一、仰願諸佛歡喜、諸天擁護、善神誓願證二誠此事一、所レ有東西南北、四維上下、七里之中、一切惡鬼神等、皆出二去我結界所一、有二一切善神等、有二利益一者、隨レ意而住、〇下略

結界石

〔類聚名物考 佛教 五〕結界石　けかいさく　俗けつかいせき　是を今僧徒に打まかせては、葷酒の牌と云、禪家の寺には、不レ許二葷酒入一レ門内一といふ榜石を建る故なり、又律家にては、外相大界の碑石をも立るも、山城國西山の三鈷寺の記には、門外少去建二結界石一、雖レ題不レ許二女人魚肉五辛等入一レ此、與二本院一相去二町餘と見ゆ、精舍とは、俗地穢土の界境をむすぶ意なり、

女人禁制

〔眞俗佛事編 六雜記餘〕靈場禁二女人一　問、靈場ニ女人ヲ禁ズル所多シ、其謂イカン、答云、寺院ニハ、殊ニ女人ヲ禁ズベシ、故ニ吾祖ノ遺誡ニモ、僧坊ニ女人ヲ入ルヲ戒ルノ一條アリ、女人ノ容色ヲ視レバ、行者ノ心亂レテ、呪力ナカラシム、是故ニ秘經ニ深ク誡玉フ、蘇婆呼童子經ニ云、女人令色、巧笑嬌音、性愛二矜莊一、行歩妖艷、姿態動二男子一、心迷惑亂持二眞言一者、寧以二火星一注二入眼中一、失二於雙目一、盲無レ所レ見、不下以二亂心一觀二視女色一、分二別種々相好美艷上、令二念誦者一使レ無二驗功一、私云、已上ハ秘經ノ本說ヲ以テ、寺院ニ女人ヲ禁ズル所以ヲ出セリ、總ジテ僧坊ニ女人ヲ入ル過ハ、行事鈔ニ辨ズルガ如シ、

〔法然上人行狀畫圖 十八〕上人、大經を釋し給とき、四十八願の中の第三十五の女人往生の願の意をのべての給はく、上の念佛往生の願は、男女をきらはず、然にいま別に此願ある、其こゝろいか

ん、さら〳〵この事を案ずるに、女人はさはりをもし、別して女人に約せずばすなはち疑心を生ずべし、其ゆへは女人はとがをもし、大梵高臺の閣にもへだてられて、梵衆梵輔の雲をのぞむことなく、帝釋柔軟の床にもくだされて、三十三天の花をもてあそぶ事なし、〇中略この日本にも靈地靈驗の砌には、みなこと〳〵くきらはれたり、比叡山の傳敎大師の建立、大師みづから結界して、谷をさかひ峯をかぎりて、女人のかたちをいれず、されば一乘峯たかくして、五障の雲たなびくことなく、一味谷ふかくして、三從の水ながるゝことなし、高野山は弘法大師結界の峯、眞言上乘繁昌の地也、三密の月輪あまねくてらすといへども、女人非器のやみをばてらさず、五瓶の智水ひとしくながるゝといへども、女人垢穢のあかをばすゝがず、聖武天皇の御願十六丈金銅の舍那、はるかにこれを拜見すといへども、なを扉の内にはいれられず、天智天皇の建立五丈石像の彌勒、あふぎてこれを禮拜すれども、なを壇の上には障あり、乃至金峯の雲のうへ、醍醐の霞のそこ、女人更にかげをさゝず、悲哉兩足ありといへども、のぼらざる法の峯あり、ふまざる佛の庭あり、耻哉兩眼あきらかなりといへども、見ざる靈地あり、拜せざる靈像あり、この穢土の瓦礫荊棘の山泥木素像の佛だにも障あり、いかにいはんや衆寶合成の淨土、萬德究竟の佛をや、これによりて往生そのうたがしあるべし、かるがゆへに、此理をかゞみて、別に此願あり、善導和尚この願を釋しての給はく、彌陀の大願力によるがゆへに、女人佛の名號を稱すれば、命終のとき、女身を轉じ男子となることを得、〇下略

〔枕草子三〕おぼつかなき物

十二年の山ごもりのほうしのめおや

〔枕草子春曙抄三〕めおや、〇中略此草紙の心は、山法師の久しく禁足してあるに、父は行ても、相見るべきを、母は登山かなはねば、十二年のほど、尤おぼつかなかるべし、

寺入

〔類聚名物考佛教六〕寺入　てらいり　室町家の前より寺入といふ事有り、罪科有り、或は世をかんじて、官祿をすてんと思ふ人、高野山へのぼり、或は御室、比叡山などへ行て、僧俗の中へ交り、髮を剃ば、其罪をもゆるし宥る事有り、これを方言に寺入と云ふなり、當時も高野山へかけこむなどもいふより、菩提所の寺の住持の、罪人をこひ受てなだむる事とはなりたり、この事三韓の古への風俗にこの事あり、

〔寺社法則下〕文化十酉三月　本多中務ゟ

一書面、浪人體之もの、類、其外惡黨もの、御領分徘徊いたし、又は惡事仕出し候もの、御領分内ゟ大樹寺領江へ逃入候節、附入召捕繩懸候義、幷右寺內へ逃入候節、附入候而も、寺內ニ而ハ繩懸ケ不申、寺外へ連出し、繩懸候積を以、今一應大樹寺塔頭回向院へ掛合、挨拶之趣を以、猶又御問合候方と存候、

〔寺社法則上〕文化十酉閏十一ノ廿八　根岸肥前ゟ　內藤豐前樣

小石川金杉水道町
傳右衞門店喜助方ニ居候
惣五郎妻
きよ

右夫惣五郎ゟ、伊奈助右衞門元御代官所武州多摩郡中野村百姓万右衞門外壹人相手取、右きよ取戾之義、當九月中願出、當時吟味中ニ御座候處、きよ儀同月中欠落いたし、東慶寺ゟ欠込候段申立候、右きよ不罷在候而者、吟味難相決候間、きよ義私御役所江早々差出候樣、東慶寺へ被仰渡候樣仕度候以上、

御書面、きよ義、相州鎌倉東慶寺役人召連出候得共、病氣之由ニ付、右役人山下又右衞門江預申付、其樣御役所江召連可罷出旨申渡候、　內豐前

同寺異宗

〔寺格帳上天台宗〕高六百八拾七石餘　御朱印、高貳千八百拾貳石三斗餘之內、配當　羽州最上慈恩寺　最上院

右住職子孫讓〇中略

但慈恩寺と申ハ、一山之總寺號ニ而、別ニ慈恩寺と申寺無之候、最〇上〇院〇は〇天〇台〇宗〇、東叡山末、花藏院ハ、山城國仁和寺末、寶藏院者、高野山龍光寺末ニ而、三ヶ寺輪番ニ年頭御禮申上ル、〇中略

御朱印社領、貳千八百拾貳石八斗餘之内、配當

高貳百五拾石　羽州最上慈恩寺　花藏院

御朱印右同斷

高百五拾石　同斷　寶藏院

右貳ヶ寺住職、先住幷門末相談之上相定ル、〇中略

但慈恩寺と申者、一山之總號ニ而、別ニ慈恩寺と申寺無之候、花〇藏〇院〇寶〇藏〇院〇者〇古〇義〇眞〇言〇宗〇、最上院者天台宗、東叡山末寺ニ而、三ヶ寺輪番年頭御禮申上ル、

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕當麻寺、在二上山南東麓、　寺領三百石、

號二上山万法藏院禪林寺、眞〇言〇寺〇淨〇土〇寺〇兩〇持〇

〔信府統記 三〕善光寺ノ緣起〇中略

僧房大勸進 天台宗別當ナリ 本願 淨土宗比丘尼ナリ、此所ニ佛舍利、中將姬ノ髮毛ノ名號アリ、 天〇台〇宗〇二十一坊 淨〇土〇宗〇十五坊 時〇宗〇十坊、是妻戸ノ時宗 ト號シテ、遊行派トハ異ナリトカヤ、

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕法隆寺　別號 七條寺 聖國寺 寶龍寺 來立寺 鳥路寺 往生寺 法隆學問寺

聖德太子爲父王用明帝祈病、自彫作藥師像、造寺、而病不愈崩御焉、雖然不得止、推古天皇十五年寺院悉成就、法相宗、八〇宗〇兼〇學〇、

南都　法相三論律眞言四〇宗〇兼〇學〇　法隆寺

〔寺格帳 下 無本寺〕御朱印 高千石

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕東大寺〇中略

八〇宗〇兼〇學〇、以三論華嚴爲本

〔寺格帳 下 無本寺〕

改宗轉派

御朱印貳千石之內
高三拾九石九斗五升九合　配當　南都東大寺山內　花嚴律宗　戒壇院　○中略

御朱印貳千石之內
高六拾九石七斗八升三合　配當　南都東大寺山內　法相律　知足院　○中略

御朱印貳千石之內
高百五拾石　配當　南都東大寺山內　花嚴宗本寺　四聖坊　○中略

御朱印貳千石之內
高七拾石　配當　南都東大寺山內　三論宗本寺　龍松院

〔山州名跡志〕九愛宕郡小倉山二尊院、寺號華臺寺在同山境地東面　宗旨兼學天台、眞言、律、淨土、

〔寺格帳〕下無本寺御朱印寺領高貳百八拾三石餘幷門前境內　京六孫王社大通寺律宗眞言三論兼學　遍照心院

御朱印百三拾三石餘之內
高百拾三石餘　京都一乘院御門跡末京清水寺法相眞言兼學　成就院

〔國師日記〕元和二年八月廿四日、千本養命坊之儀、今度南光坊末寺之由被申懸候、彼寺之儀者、此度不慮に相果申坊主を五代ハ從東寺佛法相傳仕、末寺之證跡慥御座候事

一各慥存候分も信長公、秀吉公、秀次公相國樣○德川家康此四代之間者、彼養命坊東寺江相隨申候、○中略

又南光坊も信長公より相國樣迄四代之間、何共不被申候て、唯今威勢之餘如此被申懸候事不謂儀候、○中略

一相國樣御存生之內も、養命坊眞言宗ニて御座候事ハ、板倉伊賀守殿は院何茂御奉行中御存知之事候間今更不及申上候事、

一從南光坊數百年以前、彼寺天台末寺ニ而御座候由被申候、昔のごとく、諸寺被成御改候者、當國○山城東福寺も、眞言之舊跡ニ而御座候、又勢州朝熊岳者、弘法大師開山、殊本尊等御作ニ而御座候得共、何も數代他宗ニ罷成候得者、至今日迄、其分に候、此外如此之例共、不知其數候、何も如先規被成御改候者、不及是非儀を、此養命坊者、及五代眞言法流仕來候處に、少知行御座候とて南光坊末

寺に有度との事、更不寄存儀、此等之趣、被聞召分、如有来被仰付候者、辱可奉存候、仍言上如件、

元和貳年八月十四日　　　　金剛珠院在判

観智院在判○中略

金地院和尚

覺

〔教令類纂初集九十三〕正德三癸巳年閏五月

一兩本願寺門下、改派之事、慶長以來、公儀之御沙汰無其例候上ハ、今日に至て、御沙汰ニ及ばるべき事ニ無御座候、然れば、攝州圓慶寺、武州正德寺等、改派之事、東門既ニ許容之上ハ、其寺を以て、門下とせられ候とも、又ハ西門江返附らるべきも、東門之沙汰たるべき事勿論ニ候、但し圓慶寺住持慈觀事、最初、其前住幷其所之庄屋、年寄等と契約し候證狀の旨に違ひ、其母とし、其妻とし候ものどもに對し、不孝不義之罪科、重犯のものに候、此等の惡徒、門下に可有之事、東門之爲、不可然事ニ候、且又、既に公儀ニ達し候上ハ、御大法におゐて、捨置れ難き所に候間、慈觀一身に於てハ、公儀之御沙汰として、御大法に任せらるべき事、

一正德寺中におゐてハ、御大法違犯之罪科等、相聞えず、改派之事ニ至てハ、御沙汰に及ばれず候所勿論ニ候事、

一去々年十月、圓慶寺慈觀、罪科糺明候事有之に就て、西門ゟかねて大坂奉行所江相達せられ候、又去寶永三年八月、武州教證寺事ニ就て、東門輪番寶信坊、かねて寺社奉行所江相達し置れ候事有之におゐてハ、たとひ門派等之事御沙汰に及ばず候共、事既ニ公儀に達し、御大法におゐて、すて置れ難き事、今度慈觀事之如く成儀有之に就てハ、其寺之事ハ、本寺之沙汰に任せ、罪犯之輩ハ、御大法に任せて、御沙汰可有之事ニ候、若其輩といふ共、御沙汰に及ばれ候事、難儀之子

細も有之候ハヽ、自今以後、此等之事に就て、かねてより奉行所江達し置れ候に及べからず候事、

正德三年閏五月

閏五月廿三日、年寄衆江越前守へし本願寺雙方江就可相渡也、

〔眞光寺由緒記〕一天明二壬寅年、本山佛光寺改派して、西本願寺御門跡末派となる、○中略

一同年○寛政元年修讓上京致し、西本願寺を改派して、又佛光寺末派ニ歸參す、

天明二年寅秋、眞光寺住職乘尙改派、西本願寺御門跡坊官家より、眞光寺へ書翰寫、

五月十五日之御札、昨十八日相達、令披見候、先以兩御門跡樣、倍御機嫌能被爲成御座候間、可爲御大慶候、然バ其國○土佐高知城下小高坂寺町眞光寺乘尙義、舊冬令上京尙御本山歸依ニ付、歸參仕度旨、志願之趣申聞候故、何分歸國之上、當御本山御末派へ被申込、夫より被申登候ハヽ、隨分御聞屆旨申達置候處、彌歸參仕度志願之段、貴寺へ申込、委細被相調候處、相違無之ニ付、則其段被及言上候御書面之趣、令承知之候、就右、其御領所寺社役人中へ、歸參屆之連署被下候間、貴寺被致持參、委細可被及演說候、尤連署之寫、別紙差下候ニ付、御披見可有之候、且右御領主表屆無滯相濟候上、眞光寺法物等、御定法之通可被御執計候、萬事手拔無之樣肝要之御事ニ御座候尤佛光寺ニてハ、三之間之由、此度之規模ニ、餘間被仰付被下度段、此等之儀ハ、歸參屆等首尾能相濟、其上之沙汰ニ御座候間、左樣御心得可有之候、但不及連署、貴寺御使僧被相勤候事ニも有之候ハヽ、何レ共宜御執計可有之候、○中略要用而已、及返報候、恐々謹言、

七月十九日

平井玄蕃堯圖判

島田讃岐守勝富判

下間兵部卿法眼賴明判

離末離配

眞宗寺殿

追啓、歸參證文不被差上候故、則案文之寫差下候間、右之證文被差置、其上ニて、萬事御執計可有之候、○下略

〔眞光寺由緒記〕一筆致啓達候、然者、其御城下小高坂寺町眞光寺乘尙、幷門徒、是迄、佛光寺末派ニ御座候處、此度當本山依歸依、歸參願出候ニ付、及吟味候處、差支無御座候故、寺法之通被差免候、以來當山末派ニ御座候間、左樣御承知可被下候、委曲眞宗寺可申出候間、御聞屆可被下候、右爲可得御意如是ニ御座候、恐惶謹言、

七月十九日　連名

松平土佐守樣御內寺社御役人衆中

〔寶曆集成綜綸錄二十〕寬延三午年四月

寺社奉行江

一向宗改派之儀、唯今迄之通、公儀にて、御取上無之筋ニ候、然共寺共改派致候付ては、彼是差障候儀も有之候間、其僧一己改派致候儀ハ、其通ニ差置、寺共改派致候儀は、何れとも領主之了簡次第申付候筈ニ候間、爲心得相達候、御料所之儀も、右之趣ニ准じ、寺社奉行了簡次第申付候樣可被致候、

四月

〔寺社法則下〕同○文化十二年四月　同斷○尾張殿御城附

一御書面、關三ケ寺江も一通り相尋候處、全昌寺ハ、戶田采女正格別之由緒有之由ニて、妙應寺離配之義、同家ゟ懸合有之、當時取調中之趣、尤三ケ寺ゟ妙應寺迄離配等申渡候譯ニハ無之旨申聞候、一體離末離配之義ハ、其寺起立等ニも寄、一派仕來を以可取計儀ニ付、全昌寺を離配致、差

氏寺

支之儀ニ候ハヾ、其譯妙應寺より可申立儀にて、檀家之もの共、可拘筋ニハ無之候間、旦家より奉行所へ願出候ハヾ、容易ニ難取上筋と存候、

〔世事百談三〕氏寺　氏寺といふは、氏神といふに同じ、

〔大日本史氏族一〕初自上世來、諸名族各建祠、祭其祖神、謂之氏神、合其族類、號爲氏人、念祖之意太厚、及佛法之興、更爲其祖營寺塔、稱曰氏寺、而古俗始變矣、參取舊事本紀、姓氏錄、續日本後紀、三代實錄、天台座主記、興福寺緣起、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年正月癸酉、制、定額諸寺、檀越之名、載在流記、不可輙改、而愚人爭以氏寺、假託權貴、詐稱檀越、寺家田地、任情賣買、事多奸濫、宜加禁斷、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年八月廿三日壬戌、太政官下符大和國司偁、散位從五位下宗岳朝臣木村等言、建興寺者、是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也、本緣記文具存灼然、望請、宗岳氏撿領、而彼寺別當傳燈大法師位義濟確執曰、太政官仁壽四年九月十三日下當國符偁、彼寺、推古天皇之舊宮也、元號豐浦、故爲寺名、凡厥緣起具存前志、佛法東流最始於此、其田園奴婢施入之由、勅誓堅懇、銘之金盤、頃年堂舍頹破、尊像暴露、綱維不勤、勾當有懈、聲臺鈴臺其久斷眞演之聲、佛物僧物還致俗用之謗、習而不悛、恐乖御願、宜令長官勾當、不得獨任綱維以致道場之損、立爲恒例、又貞觀三年九月二十五日、下治部省符偁、僧綱申牒、彼寺本自無有俗別當、而今特置之、寺中諸事觸途爲損、請早從停止、處分依請者、宗我稻目宿禰以家爲佛殿、天皇賜其代地、遂相移易施入皇宮、稻目宿禰奉詔造塔、然則建興寺之建出自御願、不可爲宗岳氏寺明矣、官商量宜停氏人撿領之望、不得重致寺家之愁、

〔伊呂波字類抄波諸寺〕土師寺ハシテラ　號道明寺、土師氏寺也、俗爲菅原本姓、菅家氏寺也、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

興福寺ハ、是淡海公ノ御願、藤氏累代ノ氏寺也、

〔今昔物語十四〕大伴忍勝發願從冥途返語第三十

今昔、信濃ノ國小縣ノ郡孃ノ里ニ、大伴ノ連忍勝ト云フ者アリケリ、大伴氏ノ者等心ヲ同クシテ其ノ里ノ中ニ寺ヲ造テ、氏寺トシテ崇ム、

〔吉記〕壽永二年七月十二日甲戌、傳聞、平氏公卿十人連署内大臣（平宗盛）已下也以日吉社爲氏社、以延暦寺爲氏寺、可奉歸仰之由、書起請狀被送衆徒中云々、若是密事歟、聞此狀悲淚難抑、但棄平野社用氏社、神慮有恐事歟、

〔源平盛衰記三十〕平家延暦寺願書事

去程ニ木曾義仲、所々ノ合戰ニ打勝テ、六月上旬ニハ、東山北陸二ノ道ヲ二手ニ分テ責上ル、東山道ノ先陣ハ、尾張國墨俣川ニ著、北陸道ノ先陣ハ、越前國府ニ著ヌト聞エケレバ、平家今ハ防戰ニ力盡ヌ、佛神ノ加被ニアラズバ、爭カ彼凶賊ヲ鎭ベキトテ、平家ノ一族ハ、公卿モ殿上人モ同心ニ願書ヲ捧ゲ、山門ノ衆徒日吉ノ神恩ヲ憑ムベキ由被申タリ、其狀云、

敬白　可以延暦寺歸依准氏寺、以日吉社尊崇如氏社、一向仰天台佛法事

右〇中略藤氏者以春日社興福寺、爲氏社氏寺、久歸依法相大乘之宗、平家者以日吉社延暦寺、如氏社氏寺、新値遇圓實頓悟之敎、彼者昔遺跡也、爲家思榮華、是者今新誓也、爲君請追罰、仰願山王七社王子眷屬、東西滿山護法聖衆、十二大願醫王善逝、日光月光十二神將、照無二之丹誠、垂唯一之玄應〇中略仍當家公卿等、異口同音作禮而請所如件、　敬白

壽永二年七月日〇中略

トゾ書レタリケル、

〔鎌倉大草紙下〕又此天長山國淸寺と申ハ、上杉代々の氏寺にて、尊氏將軍の御叔父上杉兵庫頭憲房法名瑞光院雪溪道欽のために、其子息上杉民部大輔憲顯、應安元年に初て建立の處也、

〔集古文書十八判物〕北條氏政判物相模國鎌倉建長寺塔頭寶珠院藏

大聖院殿如御證文、堪忍分修理免無相違可爲肝要候、若横合非分有之者可有披露、畢竟氏寺不退轉樣、万端遺念尤候、依狀如件、

天正九年辛巳十月廿一日　　　奉之

東漸院

菩提所

〔貞丈雜記十六 四事〕一死したる人に、院號寺號等を付る事、たとへば法性寺成恩寺など云、又等持院慈照院など丶云事あり、何れも其人の存生の時、建立し置れたる菩提所の名也、皆是大祿をとり、高位高官の人のする事也、後世に及てハ、菩提所をも建立せずして、院號を付る事になりたり、剩當世ハ賤き者も、出家に金子をやりて所望なれば、院號を付る事に成りたり、

〔二尊院文書〕瑞春院御寄進狀

越中のくにとやまやなぎまちのこと、ふくわうゐん殿〇義政のごはんにそへて、ながく二そんゐんにきしん申候、ふくわう院殿、けいうんゐん殿、せうこうゐんの御ぼだいれう所として、ふだんねん佛、そのほか御正き月ごとの御き日ども、いつまでもけたいなく候やうさだめておかれ候、くはしき事どもは、そち殿のそへ文やうにまいらせ候かしく、

かきち三年十月廿八日

二尊院のほうぢやうへ

〔知恩院起立書上〕文祿年中、〇中略權現樣、〇中略當院は、淨土宗自流他流の總本寺、殊に超譽上人御住職の御寺なれば、御由緒有之間、京都御菩提所と御定被遊、

檀越

〔伊呂波字類抄太 疊字〕檀越　檀那

〔祖庭事苑五〕檀越檀那、此云施主、越謂度越彼岸、

〔饅頭屋本節用集太 人倫〕檀那ダンナ

〔倭訓栞中編十三〕だんな　檀那は梵語布施と譯す、釋氏要覽に梵語陀那底、唐曰施主、陀訛而爲檀、僧徒より稱するはよし、今專主人を稱するはいかゞ、又檀越ともいへり、舊譯也、萬葉に𦬇ノ檀越とあるは、𦬇聖大德などにむかへたる諢名にや、又常人の姓名にや、伊勢兩宮の祠官より檀那と稱せしは、既に元弘中にありし、神國決疑編に見えたり、

〔俚言集覽多〕檀那　家來より主人をさして云、寺を云り、我墳墓を賴む寺を檀那寺と云、奉公人受狀に、宗旨は何宗、寺は何所、何寺の檀那に紛無御座候と書く、又鐘鑄の施主を大檀那何某と書、

〔俚言集覽比〕百檀那　寺院にて施物の寡き檀那を百檀那と云、錢百文の檀那と云事なり、

〔萬葉集十六有由緣并雜歌〕法師報歌一首

檀越也、然勿言、氐戸等我、課役徵者、汝毛半甘、

〔藤原家傳下武智麻呂〕公從少時貴重三寶、貪翫妙法、願求佛果、終食之間不敢有忘、雖有公務、常禮精舍、忽入一寺、寺內荒涼、堂宇頹落、房廊空靜、顧問國人、國人答曰、寺檀越等統領寺家財物田園、一從不令僧尼勾當、不得自由、所以有此損壞、非獨此寺、餘亦皆然、公以爲、如來出世、演說諸法、敎化衆生、令樹善業、其敎深妙、從天竺國流轉震檀、延及此地、得其門者出離蓋纏、失其路者輪廻生死、何肯白衣檀越、輙統僧物、不供法侶、損壞精舍、此非所以益國家之福田、損衆生之要業也、仍奏曰、臣幸遇大化、奇(當作宰)守一國、因公事而巡民間、就餘隙而禮精舍、部內人民不知因果、檀越子孫不懼罪業、統領僧物、專養妻子、僧尼空載名於寺籍、分散餬口於村里、未嘗修理寺家破壞、但能致有牛馬蹋損、此非所以國家度僧尼演佛化也、若非糺擧、恐滅正法、伏請明裁、(○下略)

〔東大寺金銅碑文〕施(○中略)

封五千石(○中略)

依此發願、太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、(○中略)以代々國王爲我寺(○東大寺)

檀越、若我寺興復、天下興復、若我寺衰弊天下衰弊、○中略

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇法名勝滿

〔類聚三代格三〕太政官符

可勸定額寺資財并任三綱事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國定額寺資財者、國司與三綱檀越共撿按處分、其任三綱者、依檀越衆僧請、國司覆勘充任、若寺家破壞、及有餘犯失者、推問所擧衆僧檀越等、依法科罪、自今以後永爲恒例、

延暦十五年三月廿五日

太政官符

禁斷王臣諸家稱爲定額寺檀越事

右被右大臣宣偁、諸寺檀越名載流記、已入定額、豈合輙改、如聞五畿內及近江丹波等國、愚闇之徒、假託權勢、以寺私付王臣、卽詐稱爲檀越、遂乃有犯之僧縱任三綱、寺田之類恣情賣買、事多奸濫、深乖道理、宜嚴禁斷、依舊改正、自今以後不得更然、若猶不悛、錄名言上、事緣勅語、不得疎略、

延暦廿四年正月三日○又見日本後紀、政事要略、

太政官符

應禁制畿內諸寺除檀越之外王臣家預寺事

右被右大臣宣偁、奉勅、夫功德之興、因心各別、何則或甲構堂宇、乙專得爲己、是以大小諸寺、每有檀越、田畝資財隨分施捨、累世相承、崇敬至今、如聞王臣勢家不顧本願、而追放檀越、改替綱維、田園任意或賣、或耕、各稱己寺、遂致損穢、宜早下知、若有斯類者、五位已上錄名奏聞、六位已下禁身進上、又縱雖有愚暗檀越盡擧寺家、知意與他、而事既乖道、不得彼此相與付預、其檀越子孫總攝田畝、專養妻子、不供

衆僧、先禁制訖、宜簡氏中情存弘道者充之、凡此庶事、勿致疎略、

大同元年八月廿二日〇又見日本後紀

太政官符

應禁斷七道諸國諸寺檀越等佃寺田地并費用雜物事

右被右大臣宣偁、奉勅、如聞檀越等、種佃寺田、不納租米、或費燈分稻、不燃夜燈、或貸用錢物、經年不還、或駈使牛馬、役家人、如此之流、觸類繁多、加以寺山樹木任意斫燒、愛憎自由、改補三綱、有一於此、豈謂檀越、從今而後始若有犯者、科違勅罪、國司三綱衆僧知而容隱、亦與同罪、

大同元年八月廿七日〇又見日本後紀

〔東寶記一〕一朝崇敬事

弘仁三年十一月廿七日、施入田地符文云、以代々國王為我寺檀越、若伽藍興復、天下興復、伽藍衰弊、天下衰弊、〇中略

弘仁格文具可考載之

〔朝野群載二文筆〕廣隆寺緣起字秦公寺、一名峯岡寺、

謹撿日本書紀云、推古天皇十一年冬十一月己亥朔、皇太子上宮王謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得此像將以恭敬、時秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造峯岡寺者、謹撿案內、十一年冬、受佛像小墾田宮天下御宇推古天皇卽位壬午之歲、奉為聖德太子、大花上秦造河勝所建立廣隆寺者、但本舊寺家地、九條河原里、一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪、同條荒見社里、十坪十一坪十四坪十五坪、合拾肆町也、而彼地頗狹隘也、仍遷五條荒蒔里八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪、并六箇坪之內、卽施入水陸地肆拾肆町肆段壹佰玖拾貳步也、又去延曆年中、別當法師泰鳳、竊取流記資財帳等逃亡、又去弘仁九年、逢非常之災、堂塔步廊緣起雜公文等悉燒亡、然則此寺緣

起資財帳等共燒亡、或散失、雖然或地沼開付圖帳、或地常荒未開發、或地入京未入其替、今爲後代相註其由、留置寺家、以爲累劫龜鏡、

承和三年十二月十五日　　　　　　　　　檀越□□宿禰永道

大別當傳燈大法師位壽寵　　法頭朝屋宿禰明吉

少別當傳燈大法師位道昌　　都維那傳燈滿位僧惠最

上座傳燈滿位僧賢禎　　寺主傳燈滿位僧安惠

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年八月廿六日丙午、以山城國葛野郡觀空寺預之定額、勅、觀空寺者、嵯峨太上天皇創建、宜以其後親王源氏爲檀越、永爲恒例、

〔三代實錄二十六清和〕貞觀十六年九月十四日己亥、今或檀越等好以綾羅錦綺及諸美麗色、充其布施法服、貧者耻其不及、富者競盆其花、不顧家之有無、殊費事知國之損耗、今以爲世尊遺法付囑國王、國王制宜安存緇侶、而違佛敎、乖王法、不顧其非甚無謂矣、但佛弟子等無有私蓄、唯以檀越之施、得爲衣食之資、既有嚫施、何不納受、然則違法之罪尤在施者、夫淸其流者、先當澄其源、故使等思議、未加糺彈、望請頒示天下、曉喩諸人、然後若有違法布施者、不論施受、必加科責、

〔扶桑略記二十六村上〕應和二年○中略同年丹波國桑田郡宇治宿禰宮成、依婦女勸、企造佛思、則同郡菩提寺字穴穗寺觀音像是也、遣使京洛、求佛工人、沙彌感世應請往到、佛工感世每日轉讀法華經、其中暗誦普門品、日々必誦三十三卷、奉仕觀音、爲多年業、隨宮成語、造金色觀音像、其功既畢、檀越施物、宮成本性猛惡、竊進到大江山、隱立途側、射害佛工感世、奪取所與祿物、歸宅已畢、

〔南都七大寺巡禮記〕法隆寺○中略

有錫杖、太子御物之柄長五尺許也、當寺本願聖德太子也、

〔東大寺具書〕如同九年○建久院廳御下文者、本願聖武天皇當寺草創之後、置八宗敎法、留諸宗學侶云

云、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〇正嘉元年八月廿一日癸卯、大慈寺供養、曼茶羅供、〇中略彼書六函被遣本願聖靈右大臣家〇源頼朝法華堂別當之許候、

〔圓覺寺文書新編相模國風土記稿所載〕夢窻正覺國師塔頭圓覺寺黃梅院事

將軍家御在鎌倉之時、可令興行之由、檀那命鶴殿被申成御敎書之間、宏達首座爲塔主所修造也、隨而命鶴殿被申寄常陸國結城村、色好村、椿村三箇所了、彼三箇村土貢內半分者、先當院支緣、半分者爲檀那受用分、永代塔主無怠慢可被沙汰遣之、凡當院興行依彼願力令成就之間、爭無報謝之儀乎、若背此旨者、爲門徒計可改易塔主者也、爲後證門徒之儀如斯、

文和三年甲午三月日

妙葩華押

宏達華押

志玄華押

〔花營三代記〕永和五年十一月廿五日、東福寺檀那職事、如元被返進九條殿御敎書、春屋和尚于時南禪寺爲僧錄持參九條殿、同於東福寺談合之、武家事書等在之、

〔蔭涼軒日錄〕文明十八年五月廿九日、就東福寺師檀之義、九條家一條家相論事、於以後武家不可有御綺、爲禁裏可有勅定之由、二階堂判官方被白之由、以悰子達、一條家喜慰之由有返答、　六月六日、自一條殿有使者云、東福寺師檀之事、與九條殿相論、禁慮亦不能決斷、爲武家可被決之勅命有之、定自東相公愚方江可有台命、然者一條家不失面目之樣、返答所希也、愚曰、若有台命相尋寺家、寺家返答之分可令披露云々、兩家門之系圖幷支證案供使者一覽、　十九日、午後謁東相府、東福寺管領事、自九條殿被出寺家支證、自寺家私江、來住持之一行兩通、自九條殿私江賜之、支證自九條殿被仰趣披露之、同自九條殿御方御所江被進御一行幷支證等、同披露、自御方御所御白之趣、光明峯寺殿〇九條

（原道家）所被定置者、一門長者可令管領諸寺院云々、當九條殿爲上首、當一條殿爲下﨟、然者九條殿爲御理運也、以此旨被仰付于寺家者幸然、東相御返答曰、上古事者然乎、近代事者、一條家管領也、改之如何、況又先是之九條家者上首也、先是之一條家者爲下﨟也、上首若管領事相定者、九條家可令管領、不然而一條家管領之、旁以不可改之、如近代、一條家可爲管領之旨可白云々、冷泉殿御白太也、

〔桃華蘂葉〕一家門管領寺院事

東福寺（慧日山）峯殿（〇藤原道家）御草創、見御置文等、〇中略長老入院之時、御教書自武家被出了、然而依代々芳躅、家門御教書同副遣之、往代者雖爲家司奉書、至愚老之代、任武家御教書、仰人令書之、加官判遣之、（入道之後書沙彌判）每度調筆料二百疋進之、于今不失舊規、

〔碧山日錄〕長祿三年二月廿四日辛丑、昨日問周書記曰、西芳精舍、乃正覺國師剏之乎否乎、曰行基法師草創之地也、今指東庵其古基也、後來空海又居此地而修密行、時大同帝之子高岳皇子出家、以名眞如、且從空海於此所以學密教、時有十弟子入其室、眞如乃其一也、其室今西來堂是也、後數百年、諸堂圮壞、柱礎存而已、津氏之先某見之、有興廢之心、竟出於家貲以修之、且施莊園而爲檀越、檀越三世之時、正覺國師出於世也、津氏拜致國師、以爲始祖也、師竟改西方爲西芳云、

〔大成令四十二〕條々〇中略

一檀方建立由緒有之寺院住職之儀ハ、爲令檀那計之條、從本寺遂相談、可任其意候事、〇中略

右條々可相守之、若於違犯者、雖有科之輕重、可有御沙汰旨、依仰執達如件、

寛文五年七月十一日

大和守
美濃守
豐後守
雅樂頭

離檀

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛文五年七月十一日

定○中略

一檀越之輩、雖レ爲二何寺一、可レ任二其心一、從二僧侶方一不レ可二相爭一事○中略

右條々、諸宗共可二堅守一之。○下略

〔草茅危言五〕送葬之事

今儒佛ノ爭ヒハ、姑ク差置、凡日本ニ生ル丶人ハ、神代以來傳リテ、今ニ專ラ用ユル法ニ從ヒ、中古ヨリ起タル天竺ノ風儀ハ、用ユマジキトイハンニハ、何ノ子細ノ有ルベキヤ若シ寺法ナラバ、浮屠バカリ、其法ヲ用テ、濟ムコトナリ、ソレヲ在家ノ信ゼザル者ニマデ推シテ用ヒサセントスルハ、無理ナルコトナリ、寺ニテ斯ク云募ルモ、人生上下オシナベテ、宗門ニ分屬スル故、ソレヲ詮ニ思ヘドモ、是ハ天敎ノ制禁ノ時、權時ノ制ニテ、天下ノ人ヲ、何宗ニナリトモ寄セテ天敎ナラザルノ證ヲ取タルバカリノコトニテ、其ノ儘ニテ、今日ニ及ビタナリ、故ニ改宗勝手次第トノ御條目有ヨシニテ、往歲京ニモ大坂ニモ、埋葬ニテ、寺ト採合ヒタル時、急ニ改宗セント云タルニ、寺モ窮シテ、土葬ヲ承服シタルナド、追々聞及ビタリシ、近來ハ、改宗ノコト寺々ニテ、何トカ云合セテ、甚ダムヅカシクナリタルトモ云、是ハ公法ニ戾リタルコトナルベシ、

〔社寺取計留〕離旦、寛政十二申、周防守殿江朱書菅沼下野守問合、

書面別紙伺書、幷夫々御附札とも令二一覽一候處、早川八郎左衞門江之御差圖ハ存寄無レ之候、山口鐵五郎伺之方は、林光寺離旦得心ニ而一札取置候由は、武笠外記申候迄ニ而、右一札も寫之趣ニ相聞候間、彌離旦得心ニ候哉之段、林光寺糺有レ之候方と存候、離旦承知ニ無二相違一旨、林光寺申立候とも、家內一統神道葬祭ハ不二相成一候間、其家幷神職相續可レ致、總領ハ、吉田家免許之趣を以神道葬祭いたし、次男以下妻其外家內ハ、是迄之通、旦那寺之宗判引導請候樣可二申渡一旨、鐵五郎江御差圖有

寺院整理

之樣云々、

申六月　　松平周防守

離旦改宗、享和元酉六月、堀豊前守殿江松平紀伊守家來問合、(朱書)

書面、離旦改宗之儀ハ、容易ニ難成筋ニ候得共、寺旦納得之上ハ、無據子細有之外ニ差支候儀も無之候ハヽ、承屆候とも不苦筋と存候、

酉六月

〔寺社法則下〕文化十四丑八月十六日　　松平出羽守

書面、遠在ニ罷在候もの、御城下へ引移等御申付候者、御領主御存寄次第之事にて候へ共、離檀之義者容易ニ難相成筋ニ而、素寺檀之間柄ハ、元來相對之義ニ付、御領主ゟ離檀等御申付候筋にては有之間敷候間、引移御申付次第、且差支之譯等、委細不承候而者、何レ共難及御挨拶候、

〔寺社法則下〕同十一年(〇文化)四月　　酒井讃岐守

一書面西池出雲、先祖ハ神道葬祭いたし候共、中絶之義ニ付、是迄宗判引導いたし候旦那寺をも糺之上、差障無之候ハヽ、出雲幷跡相續可致、悴ハ神道葬祭、其外家内之もの共は、仕來之通旦那寺宗判引導可致旨被御申渡、不苦筋ニ候、若旦那寺不得心ニて、出雲と申争候ハヽ、寺法社法ニ拘候義ニ付、奉行所吟味之義被御申立候方と存候、

〔桃源遺事五〕一寛文五年、西山公御領内の淫祠三千八十八御除なされ、又縁起のたしか成社をば御修復遊し、神職の者をも官位社料等夫々に被仰付候、又翌年新地の寺院九百九十七御のぞき、三百四十四寺の僧の破戒なるをば御諭し被成候て、百姓に被成候、古跡の廢寺等、みな修葺興復被成候、且能僧を御まねきなされ候、稲木村久昌寺へは、京都本圀寺の僧正日陸住職いたされ、中河西村(那珂郡)寶幢院へは、僧正以傳來られ、水戸吉田(茨木郡)藥王院へは、僧正良運來られ、岩舟(鹿島郡)願

入寺へは、惠明院瑛兼本願寺本如子也來られ、常盤郷茨城郡水戸城下天德寺へは、大明國の僧心越禪師住職せらるあるひは談林を御開き、或は法式法衣を御改被成候故、諸宗悉く是に歸し、碩學英才の出家遠國他鄕よりも被參候、西山公常に御たわむれに我が宗旨は釋迦宗也と仰られ候、

〔土津靈神言行錄上〕寛文六年九月二十一日、令修塔寺八幡宮、建鳥居、去佛像、同日、令毀二十年來所建寺院堂宇、○中略

一七年丁未二月十日、令修郭內諏訪社、毀佛堂、去佛像、

〔大學或問〕或問、佛法は其國西域にも、唐土にも、我邦人の今の樣に繁昌なる事なし、然るに佛法再興とは何ぞや、云、堂寺の多きと出家の多きとを以て見れば、佛法出來てよりこの方、今の此方のやうなるはなし、佛法を以て見れば破滅の時至れり、○中略堂寺は一度燒れなば二たび建事あらじ、殘りたるも狐狸の栖となるべし、出家の無道にて盛なるは亡ぶべき天命ならずや、此必然の理をしらで、いつまでもかくのごとく繁昌ならんと思へるははかなき事なり、山林は荒たり、人の信はなし、亂世の兵糧に迷惑して、公儀並に諸侯も、堂寺建立の力あるべからず、

〔薩國談餘二〕近世熊澤何某トカヤ、備前ノ君ニ得ラレ、政行ハレシ、善政コソ有ケメ、我等寡聞ナレハ、聞得タルコトモナシ、城郭廬舍田野溝洫風俗モ勤儉也、ゲニモ物知リノ手形アリテ、有ガタクゾ覺ユル、又集義和書、大學或問ナド云者ヲ見ルニ、名下ムナシカラズ、理學ニ精シカリケリ、其時ノ政令也トテ書タル物ヲ見シニ、佛法ノ邪道ヲ掃除シ、聖人ノ大道ヲ知ラシムルナドヲヒタヽシク書レタリ、其人ノシツルコトモ思ハレズ、旁人ノ僞託ニヤト不審シケレド、寺ヲ破リ僧ヲ逐シコトナド、世ニ事々シク云ナレバ、實ニヤ有ケン、ソレ實ナラバ、王政ニハ叶ハザリシトゾ思フ、サシモ一代ノ名儒ナルヲ、我等ガ口ニテカク申スハヲコガマシケレド、聞ツルコトアレバ云ナリ、佛法ノ行ハルヽコト、敏達帝ノ朝ヨリ千年ニコエテ、君臣心ヲ傾ケテ尊崇シ玉ヘバ、闔國ノ民

何トハシラズ、二世安樂ノ敎主也トテ、夢ニモ幻ニモ南無阿彌陀佛ト唱ヘマツハリ君ニモ親ニモカヘヌホドニ斯民心ニアマチケレバ、百年ノ仁政ニテモカヘルコトカタカルベシ、國體時勢ヲシリテコソ政ハ行フベシ、

〔閑散餘錄上〕熊澤息遊軒山〇蕃ハ、藤樹ノ高第ノ弟子ナリ、初メ備前ノ岡山侯松平信郎光政太學ニ志アリ、ソノ頃藤樹大儒ノキコヘ有ケレバ、禮ヲ厚フシテ聘セラル、藤樹ハ年老タルヲ以テ辭シテユカズ、息遊軒ニソノ餘ノ弟子ヲ添テ岡山ニユカシム、岡山侯、息遊軒ヲ尊重シテ大夫ニ上シ、國政ヲ任ス、〇中略岡山ノ政事ニハ今ニ其流風アリトキケリ、〇中略蘐園談餘、爲學初問ナドニ、寺社ヲ破壞シタル由ヲ大ニ謗レリ、然レドモソレヲ見テ、ソノ外ノ功ヲ廢スベカラズ、總テ人ヲ論ズルニハ、ソノ人ノ全體ヲ能知テ、功罪ヲ辨ヘズンバアルベカラズ、徂來ノ言ニモ、學問ハ仁齋、才ハ熊澤、餘子ハ碌々取ニ足ズトイヘリ、

〔年成錄〕抑佛〇中略

本願寺宗は其害尤甚し、處置も易からず、まづ今より公家武家と婚姻を通する事を停止すべし、門跡の婚も同宗の內にての事たるべし、もとより出家なれば姓なし、姓の異同には論なきなり、〇中略一向宗の座敷法談を禁ずべし、是は前方願ひありてゆるされし事なれば、今にては大に害あり、亦法談の跡にて、解結とやら、安心とやら尤害あり、又門徒らうち集りて申合せとやら名づけて、法談安心の類なることをする也、是は害の至極なり、更に禁を嚴にすべし、俗人は寺にゆきて僧の法談を聞にてすみたる事也、其外の事はみな邪法こ近し、

門徒の黨を結ぶこと、上をおそれざるわざなり、近頃京都にて一騷動ありて、罪人多く江戸にひかれ、死たる者も少からず、三年をへてやうやくさだまりぬ、かゝること度々に及びなば、定めて嚴刑あるべし、此宗斷滅して門徒等も死刑多かるべし、さらば耶蘇宗同樣になりはつべし、是れ

をおそれずや、今よりはいたくつゝしみて、かゝる禍をまぬかれよかし、此度の新令は全く山を救ひて、永く無事ならしめんとの厚き御惠なりと僧俗ともによく驗すべし、

一向宗に限りて必寺を村里の中に置て、齊民に偏著す、大に害あり、其宗法のことなれば、俄に改めがたし、燒失の時破壞して、再建の時に其地を沒收して、偏境寺町の裔などにて、替地を與ふべし、武器を沒收し、俗體、帶刀、家來を停止するは、諸宗とおなじ、葷食の外諸宗とかはる事すくなし、村里の小道場甚多し、是も時を待て合併すべし、〇中略法華宗は中にも毒ふかし、其害一向に亞ぐべし、

法華宗に日本諸神を籠套する事を停止すべし兩部の盛なる時節に立たる宗門なれば、深く咎むるにたらねど、今兩部を停止あれば、此宗も必改むべし、天竺にていふ天部神はかまひなし、唯日本諸神のことをいふ也、是國政なれば違背すまじと、其本寺の主僧を綱所に召して嚴命を下すべし、もし祖師よりの宗風なれとて命を拒くならば、此一宗斷滅して主僧を流刑に處すべし、さて法華宗を耶蘇宗にならべて寺證文に入べし、主僧命に隨はゞ、本寺より命を傳へて末寺みな改むべし、曼陀羅といふものを書改むべし、僧俗ともに舊來の曼陀羅を燒失べし、命を畔きかくし置ものあらば死刑、〇中略

いとふるき物の殘りたるは、人皆めづるものなり、されば古寺の廢頽を興復するとだにいへば、おのづから金錢ををしまぬ情あり、佛法の信不信にはかゝはらぬものなり、好古の癖ふかき人は、平生佛を誘り僧を憎む身にても、古寺の廢頽を見ては、涙をおとすなり、畢覚わけもなき事なり、かねてよくわきまふべし、かゝる人の說にひかれては口をしき事なり、光明皇后御手製の蓑の箆、今の世に殘りたりとて何になるべきや、民の膏血を率りて建たる寺、また民の惑をふかくして、千歲後の今まで天下の疣贅積塊となりたるものなれば、皆糞箆なめり、惜むにたらず、まし

て弑逆王子の建られし寺などは是を拜みなば、わが身に汚のつくべきことにこそ、日の本の佛法は弑逆臣子より始て興隆したる法なれば、爰にてはよからぬ事としるべし、鎌子大臣の賊臣を誅せし時、此法はたちどころに斷滅あるべきを、なほかくたておかれしはいとあやしき事なりや、

すべて佛法興隆を大善事といひならはして、わが命にもかふるものあり、是戒行よき僧にもありて、人の心を動かすこともあり、骨髓にしみつきたる病なるべし、是を心得てみだりに動くべからず、もとより惑なれば、是によりて命を捨たる者を賞譽すべからず、亦姦僧はこれを棒にりまはして、里俗を劫しおどして信をとるなり、にくむべし、

すべて彼等がいふ善も惡も筋の違ひたる事なり、君を弑して佛法を興隆すれば、名つけて大善事とするなり、愚民の聖德を崇ひておがむは、おのれいつにても君を弑すべきと思ふにや、佛語の諸惡莫作、諸善奉行も言の上には少しも瑕はなけれども、其善といひ惡といひしもの、たがひたれば始よりとり處なき也、○中略

僧の墮落は四海同風なれど、其に格別にて刑を蒙るものある時は僧の罪によりて、其寺を破却斷絶あるべし、諸侯以下大罪あれば、其國邑家系斷絶する也、僧にかぎりて寺の斷絶なきはいかにぞや、是は今より古をなすべし、墳墓ある寺は堂塔のみ破却して、地面は同宗の寺に附屬すべし、檀越是に隨ふ、此外にも此類いかほどもあるべし、

行末國の大害となるべきは一向宗なるべし、此手あては懈るべからず、但國家强盛の中に起りたらば、忽撲滅して跡のためよき事なるべし、おとろへたる時ならば、いかゞしらず、

諸侯以下凡武家たるものは、一向宗につかぬといふ事、幼時より聞たること也、法令にもある事にやしらず、今はかなたこなたに、武家の一向宗なるものあり、よからぬ事なり、はや〳〵停止あ

るべきこと、おもはる

〔東潛夫論 中 編 府 第四〕天下ノ佛寺十萬ニ過グベシ、僧尼ノ數ハ數十萬人ニ及ブベシ、當時ノ僧徒學問スル人甚ダ少シ、ヤスキ學問ダニセチバ、釋氏ノ敎ノ如ク戒律ヲヨク守ル人ハ、千ニ一二モ得ガタシ、僧ト醫ハ學問セチバナラヌ者ナリ、然ドモ僧醫トモニ學問出精スルコトナシ、余少キ時ヨリ、文學ノ弟子多ク取リタルニ、醫ハヒ一本ニテ生業ヲスルモノユヘ、少シハ學問ヲ出精スルモノアリ、僧ハ兎角シテ師匠ノ讓ヲウケ、又空キ寺ノ主トモナレバ、生業モ出來スレバ、別シテ不精ナリ、且ツ天敎ノ禁嚴ニシテ、偏戸ノ民ヲ佛寺ニ割付、常檀那トナシ給ヒシヨリ、如何ナル名僧ニテモ檀那ノ增スコトモナク、愚僧ニテモ定レル檀家ハ離レス故、別シテ不精ニナリタルナリ、且ツ當時國家文明ニナリテ、富貴ノ人ハ、子ドモヲ僧トナスコトナシ、只窮人ノ子ノミ寒饑ニ逼テ出家スルナリ、故ニ僧ノ人品益卑クナリテ、佛敎國家ノ益ニハナラズ、還テ害トナル樣ニナリタリ、眞宗ハ釋氏ノ道ニアリテハ、其敎ニ背キタレド、父母妻子ハ元人倫ノ道ニシテ、其人柄却テ律義ナリ、禪宗ハ殊ニ人柄惡シク、和尙ハ格別、小僧ハ人ノ妻娘ヲ盜テカケ落チシ、人ノ財產ヲ盜テ逃レ去ルナリ、是空觀トテ、世界ノ事ハ空ナリト見破リシ弊ト云フ人モアレド、實ハ行脚シテ佛寺ニ投宿シ、旅行ノコト容易ナルユヘナリ、他宗ハ投宿ナシガタキ故、不埒モ稍々少シ、佛寺ニ投宿ヲ許スハ、元ト座禪修學ノ爲ニハ甚ダ便利ナルコトニテ、他宗モ左モアルベキコトナリ、然ドモ事ノ大便利ナルハ大害モアルコトナリ、是自然ノ理ナリ、且ツ今天下ノ寺數、甚ダ過テ、田舍ノ佛寺ハ檀那纔ニ四五十戸、甚シキハ十餘戸ナリ、名ハ僧トイヘドモ、實ハ農戸ト同ジ、但田作シテ生業トナスナリ、深草ノ元政ガ、一禪寺ニ宿セシ詩ニ、但談農桑不談禪トハ、誠ニ其實ヲ得タリト云ベシ、箇樣ノ僧徒豈學問ニ暇アランヤ、宜ク天下ノ佛寺ヲ併セテ十分ノ一トシ、一寺ノ旦那千軒以上トナスベシ、佛寺ハ古ヘ村里ノ庠序ナリ、僧ハ其敎官ナリ、豈今ノ如ク無賴ノ人ヲ居ラ

シムベケンヤ、必ズ家筋正シク學問アリテ、年四十以上ノ人、縱不仕合ナドニ、今世ヲステント思フ人ニ出家ヲ許シ給ヒ、度牒ヲ給シテ遊樂セシムベシ、五十以上ニモナリ、二百五十ノ戒律ヲ守リ、學問アル者ヲ一寺ノ住職トナスベシ、檀家千軒以上ナレバ、檀施モ多ク、弟子ノ三人ヤ五人ハサシ置キ學問ヲサセラルヽナリ、サテ朔望ニハ必ズ檀那ヲ集メテ說法スベシ、前方ノ講錄ヲ其所々ノ官廳ニ差出シテ、故障アルコトハサシ留ムベシ、說法ノ日ハ、役人立合テ、喧嘩非禮ヲ禁ズベシ、尤モ白日ヲ以テシテ、男女ノ席ヲ左右ニ分ツベシ、是ノ如クナシ給ハヾ、民間ノ敎トモナリテ鴻益アルベシ、今ハ唯人ニ便ナリトテ、說法夜ヲ以シテ、男女ノ席モ分タヌ故、說法ノ場、男女淫奔ノ媒トナル、佛寺ノ數ハ十分ノ一トナルトモ皆大寺トナリテ、學問アリテ行儀正シキ僧住職トナレバ、佛法興隆トモイフベシ、サテ毀チ棄テタル小寺ノ跡ニハ、小堂ヲ立テ本尊ヲ安ンジ、歲時ニ新ニ立タル大寺ヨリ僧ヲ遣ハシテ諷經セシムベシ、本山ヨリ金子分ケ前ナド云付ラルヽ時ハ、前方寺數ノ割合ヲ出銀セバ、本山ニモ障リアルマジ、眞宗ハ妻子モアルコトナレバ、本寺ニ召寄セテ寺家ト云モノトナシ、又ハ多ク田地ヲ與テ御座ト云フモノニナスベシ、本山ヨリ元一寺ノ跡ナレバ、格式モ一寺ノ並ニアシラヒ、官ヨリモ出產ノ路ヲ饒ニシタマハヾ、何ゾ故障ハアルマジキナリ、

〔山家除僞 乾〕天台法華宗分度者廻小向大式　合四條

凡佛寺有三、一者一向大乘寺、初修業菩薩僧所住寺、二者一向小乘寺、一向小乘律師所住寺、三者大小兼行寺、久修業菩薩僧所住寺、今天台法華宗年分學生、幷廻心向大初修業者、一十二年令住深山四三昧院、得業以後、許假住兼行寺、

凡佛寺上坐、置大小二坐、一者一向大乘寺、置文殊師利菩薩、以爲上坐、二者一向小乘寺、置賓頭盧和上、以爲上坐、三者大小兼行寺、置文殊賓頭盧兩上坐、小乘布薩日賓頭盧爲上坐、坐小乘次第、大乘布

薩日文殊爲二上坐一、坐二大乘次第一、此次第坐、此間未レ行也、〇中略

弘仁十年三月十五日　　　　前入唐天台法華宗沙門最澄上

〇按ズルニ、最澄ノ顯戒論上ニモ、佛寺ニ大乘小乘、及ビ大小兼學ノ三種アルコトヲ云ヒテ、印度ノ實例ヲ引證セリ、

古事類苑

宗教部三十八

佛教三十八

堂塔

寺院堂塔ノ制ハ、其初ハ隋唐ノ式ヲ摸セシガ、臨濟曹洞二宗ノ傳來スルニ至リテハ、宋ノ制ニ倣ヒ、諸宗ノ建築是ニ於テ爲ニ變ゼシモノアリシナルベシ、而シテ各〻少異アリ、黄檗ガ明ノ制ニ傚フニ及テハ、其結構諸宗ト大ニ其趣ヲ異ニセリ、凡ソ寺院ノ堂舍ニハ七堂ノ稱アリ、古來諸說アリテ一定セズ、七堂中ニ於テ、尤モ重キモノヲ金堂トス、本尊ヲ安置スル所ニシテ、又呼デ本堂ト云フ、禪宗ニテハ佛殿ト云フ、本堂ノ前ニ在ルモノヲ禮堂ト云フ、本尊ヲ拜禮スル所ナリ、講堂ハ、佛說ヲ講ズル所ニシテ、禪宗ニテハ法堂トモ云フ、食堂ハ、或ハ僧堂ト云フ、僧ノ常居會食スル所ニシテ、文殊又ハ賓頭盧ヲ安置スル所多シ、禪宗ノ衆寮モ亦之ニ屬スベシ、鐘樓ハ、多ク經藏ト相對シテ、金堂講堂ノ中ノ左右ニ在ルヲ舊式ト爲シ、經藏ニハ多ク傅大士ヲ安置ス、方丈ハ、住持ノ居ル所ナリ、故ニ住持ヲ稱シテ方丈ト云フコトアリ、廚ハ、一ニ庫司、庫裏、庫院、庫堂等ト云フ、多ク香積如來ヲ安置ス、寺院ノ粢粥ヲ調フル所ナリ、政所ハ、寺院ノ事務ヲ覽ル所ニシテ、門跡ニハ又綱所ト云フアリ、政所ト大同小異ニシテ蓋シ古ノ僧綱所ノ一變セシモノナラン、

塔ハ梵語ニシテ、具ニハ窣堵婆ト云ヒ、略シテ塔婆ト云ヒ、飜譯シテ高顯ト云フ、其極メテ高キヲ謂フナリ、原ト佛骨ヲ瘞埋スル所ノ名ニシテ、佛菩薩等ノ像ヲ此ニ安置ス、往古ハ寺ア

名稱

レバ、大抵皆塔アリ、天平中ニハ、天下ニ勅シテ造塔ノ事ヲ勸誘セリ、塔ハ七重ニ造ルヲ以テ本式ト爲スト云フ、此他二重、三重、五重、九重等アリ、五輪塔ハ地水火風空ノ五級（最下ヲ地輪トシ、最上ヲ空輪トス、）ヨリ成レルモノニシテ、多寶塔モ此ニ屬ス、又七寶塔、法身塔ナドト云フモアリ、相輪橖ハ、延暦寺ニ在ルモノ世ニ著ハル、百萬塔ハ、孝謙天皇ノ奈良諸大寺ニ頒チシモノニシテ、今ニ至テ法隆寺ニハ之ヲ存セリ、此他十八萬、三十萬等ノ小塔ヲ造刻セシモノ古來甚ダ多シ、又阿育王ノ例ニヨリテ、八萬四千基ノ小塔ヲ造リシモノアリ、又泥塔ト云フヲ供養セシモノモアリ、石塔ハ、死者ノ墓上ニ建ツルモノナレドモ、是亦塔ノ一種ナリ、窣堵婆及ビ塔婆ノ語タルヤ、上ニ既ニ言ヘルガ如ク、塔ト同ジト雖モ、古來或ハ其形ノ短小ニシテ、石又ハ木ヲ以テセルモノニ限リテ之ヲ稱セリ、塔ノ具ニ、又種々アリ、寶鐸、箜篌、火珠、露盤、橑層等、其主ナルモノニシテ、露盤ニハ銘文ヲ刻スルモノモアリ、幢ハ寶幢トモ云フ、ホコト訓ズ、或ハ九輪ノ謂ナリトモ云フ、

門ハ其類甚ダ多シ、外廓ニ在ルヲ總門ト云ヒ、又大門ト云ヒ、其內ニ在ルヲ中門ト云フ、多クハ樓門ニシテ、左右ニ金剛力士ヲ安ズ、故ニ又仁王門ノ稱アリ、又三門ト云フ、必ズシモ三箇ノ門アルニアラズ、又山門ニ作ル、門ニハ又多ク額ヲ揭グ、而シテ勅額ヲ揭グルモノヲ以テ、官寺タルノ標識ト爲ス、

〔伊呂波字類抄 太疊字〕堂塔

〔類聚名義抄 六土〕堂 在下 和タワ

〔倭訓栞 前編古九〕こりたき　延喜式忌詞に、堂稱㆓香燒㆒と見えたり、万葉集にも香塗流塔とよめり、日本紀にも燒香をこりをたきてと訓せりこりは凝烟の訓義なるべし、增一阿含經に、香爲㆓佛使㆒、故須㆓燒㆑香遍請㆒と見えたり、凡そ神は花をもて祭るといふ事はあれど香の事は見えず、よて佛堂を

かく稱せり、四方拜などに香の事あるは、皇極紀などより出て後世の事なるべし、

〔類聚名物考 佛教五〕こりたき 堂の替詞、香燒の字をよめり、轉音なり、堂塔は常に香を焚て供養するゆゑに名づく、かうたきの轉なり、

〔延喜式 五齋宮〕凡忌詞内七言、〇中略 又別忌詞、堂稱香燃、

〔沙石集 上〕太神宮御事

社壇ニシテハ、經ヲモ、アラハニハモタズ、三寶ノ名ヲモ、タヾシクイハズ、〇中略 堂ヲバコリタキナンドイヒテ、外ニハ佛法ヲウトキ事ニシ、〇下略

〔撮壤集 上寺院〕諸堂 禪院

佛殿 土地堂 祖師堂 法堂 僧堂 庫裏 寮間 禮間 上同 茶堂 衆寮 浴室 風呂 輪藏 鐘樓 鎮守 總門 山門 脇門 方丈 衣鉢閣 明樓 東西 廊下 塔頭 昭堂 卵塔 寮舍 東司 後架 延壽堂 行堂 眠藏 叢林 會下 旦過 客菴

〔東寶記 一〕南大門 〇中略

私云、〇中略 凡二王二天、爲三寶外護、故伽藍門前安之、三堂是三寶也、金堂亦名佛殿、佛稱金人、名異體同、是故配佛、講堂亦名法堂、主法寶、食堂亦號僧堂、主僧寶矣、

〔大安寺緣起〕中天竺舍衞國祇園精舍、以兜率天宮爲規模焉、大唐西明寺、以彼祇園精舍爲規模矣、本朝大安寺、以彼西明寺爲規模焉、寺者在大和國添上郡、其寶塔、華龕、佛殿、僧房、經藏、鐘樓、食堂、浴室、內外重構不遑具記、

〔興禪護國論 下〕第八禪宗支目門者、按禪苑淸規幷大國見行式、有十也、一寺院、謂寺大小雖異、皆一樣摸祇園精舍之圖、寺圖在別 四面有廊無脇門、只開一門、而監門人薄暮閉之、天明開之、特制止比丘尼女人肉人夜宿矣、佛法之滅亡、只起於女事等故也、

〔三緣山志 二〕第三堂閣建緣

本朝に所有伽藍造立の規則、もと梵土の餘風たりといへども、みな震旦の寺院を摸移せずといふ事なし、然に時世沿革ありて、道則又異あり、倩伽藍經營を勘考するに、元興、法隆、大安、西大、招提、興福、東大、廣隆等をはじめ、鑑眞、道慈、義淵、良辨開建は、陳隋の制度にもとづき、叡山、東寺、高野、園城等の如き、傳敎、弘法、慈覺、智證等の創立は、唐代の模範をうつし、建仁、東福より、五山、十刹、大德、妙心、鎌倉五山、永平、總持等に至るまで、千光、聖一、圓成、宗燈、大覺、祖元、道元、懷弉等の所立は、宋朝の清規をうつし、黃檗、永源、瑞聖、佛國等の、隱元、圓應、木庵、心悅等の造れるは、明國の制に憑據す、此際に造立せる寺院數萬みなかれこれに准據し、宗わかち、法ことなりといへども、會儀悉く同じからざるはなし、我淨家の伽藍、大に是に異なり、四箇八箇の本山、各表示ありて、外國の風姿によらず、○下略

〔扶桑略記 五天武〕九年十一月、因皇后病、造藥師寺、○中略爲憲記云、藥師寺、淸御原天皇之師僧祚蓮入定、見龍宮樣、習作也、已上

〔十訓抄 二〕抑匡衡四代に當て、中納言匡房と云人有けり、帥に成ては江帥と申ける、才智先祖をつげり、宇治關白平等院を建立の時、地形の事など示合られんために、土御門右府を相伴はせ給ける、大門の四足北向ならずは其便なし、大門の北向の寺や侍ると問はせ給ければ、右府不覺よし答へ申されけり、但匡房卿いまだ無官にて、江冠者とて有けるを、車の尻にのせて具せられたりけるをかれこそ如此然事はうるせく覺えて候へとて、召出してとはれければ、申云、天竺には那蘭陀寺、戒賢論師の住所、震旦には西明寺、圓測法師の道場、日本には六婆羅蜜寺、空也上人の建立、皆是北面也とぞ申ける、宇治殿ことに御感ありけり、

〔類聚名物考 佛敎 五〕大門北向之寺○中略

今案るに、那蘭陀寺は門東向なり、北向にあらず、按に、

新譯十地經卷上那蘭陀寺の希麟音義卷三西域記云、歷代帝王、共建、合爲一寺、東闢其門、常供千僧と見えたれば、東向なる事明らけし、但し北向なりと覺えられしは、暗誦の失措にて、その故なきにしもあらず、慈恩寺三藏法師傳卷三を考ふれば、那爛陀寺の事をしるせし所には、大門の事はなくて、この次に王舍城を見し所に、西通小徑、北有大門と見えしをおもひわすれて、王舍城を那蘭陀寺とは答へられしなり、北向にあらぬ事は明汚稿のつれ〴〵草の抄物なりにも委しく辨へたり、

〔書言字考節用集十數量〕伽。藍。七。堂。三門、佛殿、法堂、方丈、食堂、浴室、東司

〔類聚名物考佛教五〕七堂伽藍 しちだうがらん 山門三門とも云ふ 佛殿、法堂、庫裏、僧堂、浴室、東司、

〔本阿彌行狀記下〕七堂伽藍之事

禪家

佛殿　法堂　禪堂　食堂　寢堂　山門　厠

法相

金堂　講堂　山門　塔　左堂　右堂　浴室

天台

中堂　講堂　戒壇堂　文殊樓　法華堂　常行堂　雙輪橖

眞言

金堂　講堂　灌頂堂　大師堂・經堂　大塔　五重塔

華嚴

中堂　金堂　講堂　左堂　右堂　後堂　五重塔

天台宗已下、門ハ爲建物也、

〔安齋隨筆後編十四〕一禪家七堂ハ、佛殿、法堂、僧堂、庫裏、三門、西淨、浴室、

一眞言七堂ハ、金堂、講堂、五重塔、大門、經藏鼓樓ニモ中門、鐘樓、

一七堂伽藍、庫裏、搗堂、西淨、山門、八塔、佛殿、湯屋、

一唐樣七堂、東方丈、西方丈、鐘樓、鼓樓、方塔、佛殿、山門、

〔大乘院寺社雜事記〕文正二年正月廿六日、又四郎進退事、裴舜寺主去狀進之、當月事、啗文之隙入歟、

仍來三日日付ニ書進上了、則給愛滿丸了、

敬白　天罰起請文事〇中略

此條、偽申入候者、可蒙春日大明神、七堂三寶之御罰候、〇中略

文正二年丁亥二月三日　福智院因幡權寺主　裴舜判

〔多聞院日記〕永祿十一年二月十一日、今般於鳥芋峯、一向衆道場可立之旨、三人衆之內、石成主稅守付奈良大坂堺衆令競望、以過分之禮物申談、既地破令張行之間、種々從寺門雖申理、無承引間、今日五社七堂令閉門了、六方沙汰候金堂前大湯屋僉議、先規歟、今度大湯屋ニては無之歟、七堂後社頭閉門了、東大寺、法隆寺、藥師寺へモ可有閉門之旨書狀被付候、

金堂

〔倭名類聚抄十三伽藍具〕金堂　梁元帝入佛日殿禮拜詩云、珉理金堂柱、檀欒紺篠叢、

〔箋注倭名類聚抄五伽藍具〕楊氏云、佛殿金堂也、禮堂金堂前名、所引詩古詩歸不載、

〔易林本節用集乾坤〕金堂コンダウ

〔類聚名物考佛敎五〕金堂　こんだう　金箔だみにせし堂故にいふ、今の金閣寺の如き是なり、

〔日本書紀二十二推古〕十四年四月壬辰、銅繡丈六佛像並造竟、是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂、時佛像高於金堂戶、以不得納堂、於是諸工人等議曰、破堂戶而納之、然鞍作鳥之秀工、以不壞戶得入堂、

〔東大寺要錄 一〕七月、癸巳、〇神龜三年 詔曰、太上天皇〇元正 不豫、稍經二序一、〇中略 興福寺立二東金堂一、奉レ供二養之一矣、

〔類聚三代格 三〕太政官符〇中略

一國分寺、先經造畢、塔金堂等或已朽損、將レ致二傾落一、如レ是等類、宜下以二造寺料稻一且加中修理上之、

以前、被二右大臣宣一偁、奉レ勅如レ件、

天平神護二年八月十八日

〔千載和歌集 十七雜〕花ざかりに、法成寺にまゐり、金堂のまへの花のちるを見て、よみ侍りける、

皇太后宮大夫俊成

ふりにけりむかしをしらば櫻花ちりのすゑをもあはれとは見よ

〔本朝世紀〕長和二年六月廿八日戊子、今日法興院八講始參入之間、雨脚俄降、依レ出二門不一レ幾之程一歸レ家、小時天晴、卽參入、彼院燒亡之後、近日堂舍漸以結構、上達部殿上人饗二設北堂東庇一、卽是法興院本堂、謂二本堂一、是本願堂也、誠雖二燒亡一、只稱二本名一而已、

〔長秋記〕長承三年五月十三日壬戌、上皇〇鳥羽 御二幸宇治平等院一、〇中略 上皇先令レ禮二本堂一、次令レ禮二懺法堂一給、次禮二持佛堂一給、

保延元年正月十七日辛卯、入レ夜參二白河殿北殿一、〇中略 大僧正覺猷申云、於二前例一詳不二覺悟一、但法金剛院本堂阿彌陀堂也、隨二西向一也、今被レ造二加之堂塔向二本堂一而被レ造二北面一矣、不レ可レ有二其難一候歟、

〔太平記 三〕主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上〇後醍醐 笠置ヘ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル、

〔大乘院寺社雜事記〕文正二年三月十二日

一忍辱山本佛、今日奉レ入二本堂一了、諸人群集、去年炎上之處、早々建立、珍重々々、

〔願如上人雜記〕法中〇中略

一三井寺○中略本堂○金堂ト云○

〔細川家記八忠興〕天正十三年乙酉三月、秀吉公、紀州根來寺を攻討り、○中略此寺は、幽齋君、御助力にて、本堂護摩堂御建立、此時の住持惠俊坊看雅、一ニ宿雅別稱は宗波藤陰一本藤張と云々、

佛殿

〔運歩色葉集婦〕佛殿

〔易林本節用集不乾坤〕佛殿ブツデン

〔山州名跡志八葛野郡〕正法山妙心寺、在木辻西、○中略佛殿、同本尊釋迦佛、坐像、二尺四五寸許、持ニ花左手拈花、微笑相、覺王寶殿佛殿

〔山城名勝志九葛野郡〕天龍寺○中略

佛壇

〔伊呂波字類抄不疊字〕佛壇フツタン

〔運歩色葉集婦〕佛壇

〔易林本節用集不乾坤〕佛壇ブツダン

〔叢林集四〕一寺院ハ言フニ不及、タトヒ在家トテモ、優婆塞優婆夷モ釋門ノ弟子ナレバ、佛壇ヲバ其家ノ深奥ノ上亭ニ構ヘ置クベシ、若シ店下ニ安置セバ、不敬ノ咎アルベシ、道綽ノ傳ニ見ヘタリ、四氏ヲ論ゼズ、八宗ヲイハズ、歸佛歸法ノ身タラバ、佛像ヲ其家ノ主トシテ、其佛家ニハ、我モ仕シテ給仕スト思フベシ、我家ニ佛ヲ置ト思フベカラズ、サレバ隨分懇重ヲ盡シ、禮敬ノ實ヲ抽ヅベシ、

〔出定笑語附錄一上〕今ノ世俗家ニアル佛壇ト云フ物ヲ見ルニ、ソノ宗旨々々ノ佛ヲ正面ニ直シテ、第一ト傳クベキ、親先祖ノ位牌ヲバ下段ニオロシ、甚キハ、其忌日ニ當テモ、靈供ヲダニモ備ヘ

ズ、御眞向トカ云者ニ、打抜飯ヲ一ツ供ヘ置バ、其餘リヲ先祖ノ御靈ヘモ分テ下サルナド、云テ、大切ニセネバナラヌ先祖ニハ、少シモカマハヌガ、コレハ何ト云コトダ、其阿彌陀ノ立ズクミニ、ブンヌキ飯ヲ一ツ與テオケバ、先祖ノ靈ニ備ヘズトモ、其内ヲ分テ與ルト云コト、何ト云經ニ何ト云佛ガ、說テ置タコトガ有カ、夫ガ聞タイ、

〔源平盛衰記四十二〕金仙寺觀音講附六條北政所使逢義經事

武藏房辨慶、座ヨリ起テ、判官〇源義經ノ前ニ五本立ニ取並テ、戲呼今月ノ講ハ、隨分尋常ニ營出シテ覺候、來頭ハ誰人ゾ、此定候ゾヨト云フ、判官實ニ此講目出シ、來頭ハ義經營侍ルベシト宣ヘバ、兵皆咲壺會也、飯酒共ニ行テ、佛壇ノ中ヨリ老翁ヲ尋出シテ、是ハ何講ゾト問ヘバ、翁フルヒ〳〵是ハ月並ノ觀音講ニテ候ガ、〇下略

〔遠碧軒記一〕禁中の黑戶に、御佛壇あり、繪所のもの了澤、一間に蓮花をかく、本尊は代々の御尊崇の佛を安置、右に色々の古佛あり、然るに後光明院の御時の炎上に、みな燒失、後光明院の勅諚に、今度の炎上は、御難義なれども、此佛どもの燒には珍重と被仰となり、取ても除けられず、炎上は幸なりとぞ、黑戶の間は、後小松院の幼君の時に、燒失を被成れて、烟にて薰りしより、直に黑戶の間と云、その間御佛壇なり、

持佛堂

〔運歩色葉集地〕持佛堂

〔易林本節用集知乾坤〕持佛堂

〔增補下學集上二家屋〕持佛堂

〔書言字考節用集一乾坤〕持佛堂又云念誦堂

〔源氏物語五若紫〕たゞこのにしおもてにしも、ぢぶつすゑたてまつりて、おこなふあま成けり、

〔眞俗佛事編五雜記〕內持佛堂間、吾邦本堂ノ外、方丈或ハ寮ノ內ニ、佛像ヲ安ジテ、內持佛堂ト云フ、是本據アリヤ、答曰、義淨南海寄歸傳ニ出タリ、彼云僧房之內、有安尊像、或

於隷上、或故作龕、食坐之時、像前以布幔遮障、朝々洗沐、毎薦香華、午々虔恭、隨餐奉獻、乃至南海諸州法亦同此、斯乃私房尋常禮敬之軌、其寺家尊像、并竪別有堂殿、

〔日本書紀二十九天武〕十四年三月壬申、詔、諸國毎家作佛舍、乃置佛像及經、以禮拜供養、

〔玉勝間六〕持佛堂

天武天皇の御代、十四年三月廿七日のみことのりに、諸國毎家作佛舍、乃置佛像及經、以禮拜供養とあり、書紀に見えたり、民の家々まで、持佛堂といふ物をかまへて佛をまつる事は、これよりやはじまりけん、

〔康資王母集〕住よしに、人々まゐりしに、〇中略その神主國基が、持ぶつ堂たて侍りしに、つまどをえさせ侍とて、かくいひつかはしたる、

槇の戸を西にあけてやながむらんさきだつ月にことづてをして

〔十訓抄二〕江帥〇大江匡房は、又めでたき相人なりけり、清隆卿因幡守の時、院の御使として來れり、帥持佛堂に入て、念誦の間なりければ、御使を緣にすへて、あかり障子を隔て、此に謁す、〇下略

〔愚管抄四〕顯家〇中略三井に歸り入て、持佛堂にこもり居てけり、是をきこし召て、匡房こそ師檀の契り深からん、それしてなぐさめんとて、匡房を召て使はされければ、急ぎ三井寺の房へゆきむかひて〇中略おりけるに、持佛堂のあかり障子、ごまの煙にふすぼりて、なにとなく、身の毛たちておぼえけり、

〔長秋記〕長承三年五月十三日壬戌、上皇〇鳥羽御幸宇治平等院、〇中略上皇先令禮本堂、次令禮懺法堂給、次禮持佛堂給、

〔寶物集三〕丹波國ニ有ケル人、京ナル佛師ヲ請ジテ、觀音ノ像ヲ造ヲフセテ、迎へ參ラセタリケルニ、其用途ニ數ノ寶ヲ取セテ、人身ニトリテ惜ト思ヒケル馬ヲ引出シテ取セケリ、佛師悅テ、此馬ニ乘リテ京へ歸リ上リケルヲ、馬ノ主思反シ悔シク惜カリケレバ、山中ニ行テ、佛師ヲ道ニテ射

殺シテ、彼馬ヲ取テケリ、サテ家ニ歸リテ、持佛堂ニ指入テ佛ヲ拜ミ奉ル、我卽チ佛師ヲ射殺シツル矢、佛ニ立テ有テケルヲ今中シ侍也、

〔源平盛衰記一〕清盛行大威德法附行陀天幷淸水寺詣事

抑淸盛打續繁昌シ給ケル事、幼少ノ昔、中御門家成卿ノ許ニ局ズミシテ有ケルニ、彼卿ノ祈ノ師ニ、大納言阿闍梨祐眞トテ、貴キ眞言師アリ、家成卿ノ持佛堂ニテ、護身加持シテオハシケレバ、淸盛モ常ニ有對面、

〔玉海〕嘉應二年十一月廿六日壬寅、此日女院○藤原聖子、皇嘉門院、御持佛堂供養也、導師法印公顯、讀衆十口、此中僧一口、導師以下皆綱也、奉行新藤中納言忠親卿、

〔吾妻鏡八〕文治四年四月廿三日己丑、於御持佛堂、被始行法華經講讀、

〔吾妻鏡九〕文治五年閏四月卅日己未、今日於陸奧國、泰衡襲源豫州、○源義經、中略、豫州家人等雖相防、悉以敗績、豫州入持佛堂、先害妻二十二子女子四歲次自殺云云、

〔太平記十六〕正成首送故鄉事

今年十一歲ニ成ケル帶刀、父ガ首ノ生タリシ時ニモ似ヌ有樣、母ガ歎ノセン方モナゲナル樣ヲ見テ、流ルヽ泪ヲ袖ニ押ヘテ、持佛堂ノ方ヘ行ケルヲ、母怪シク思テ、則妻戸ノ方ヨリ行テ見レバ、○下略

〔諸寺文書纂六〕御持佛堂別當職事、可令致沙汰給、仍執達如件、

曆應四年二月二日　左兵衞督花押

三寶院僧正御房

〔徒然草上〕いやしげなる物、居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、

〔園太曆〕貞和四年正月三日、入夜爲四條大納言奉、有消息、被見之、御獻請文、續之、大學寮御影、當時被

安置御持佛堂、而可被成道場事之間、欲被奉渡他所候之處、(○下略)

〔薩戒記〕永享六年九月八日、午終剋、予弟權大僧都尊助(本名政助)入滅、(○中略)於予西持佛堂(慈恩院)看病、遂以有此事、

〔鎌倉大草紙〕鎌倉殿思召たつ事有、已に憲春に御評定あり、上杉大におどろき、諫奉るといへども御承引なし、(○中略)上杉いさめ兼て、我館山の内へかへりて、(○中略)持佛堂へ入て、則腹切たまひける、

厨子

〔下學集 下器財〕厨子(ツシ)(佛舍)

〔饅頭屋本節用集 財門寶〕厨子(ツシ)(佛)

〔和漢三才圖會 十九神祭附佛供器〕佛龕　俗云厨子

龕(苦含切)　浮圖塔、一曰塔下室也、唐楮遂良書云、久棄塵世、與彌勒同龕、

按今安佛像橫名龕、俗呼爲厨子、字本作廚、(非庖廚字義)櫝也、顧愷之曰、以一廚畫寄桓玄家是也、

〔倭訓栞 前編十六〕づし　厨子と書り、二階、三階、四階等あり、ちう反つ也、(○中略)佛像を入るを厨子といふは、字彙に、廚又櫝也と見ゆ、儒の神主には櫝といへり、

講堂

〔倭名類聚抄 十三佛塔具〕講堂　金光明經云、大講堂衆會之中、

〔伊呂波字類抄 加疊字〕講堂(カウタウ、金光明經有大講堂、)

〔金光明經 四捨身品十七〕爾時道場菩提樹神復白佛言、世尊、我聞、世尊過去修行菩薩道時、具受無量百千苦行、捐捨身命皮血骨髓、惟願世尊、少說往昔苦行因緣、爲利衆生受諸快樂、爾時世尊即現神足、神足力故、令此大地六種震動、於大講堂衆會之中、有七寶塔、從地涌出、衆寶羅網、彌覆其上、爾時大衆見是事已、生希有心、

〔釋氏要覽 下說聽〕講堂置佛像(大法炬陀羅尼經云、法師說法時、有羅剎女、名愛欲、常來惑法師、令心散亂、是故說法處常須置如來像香華供養、勿令斷絕、彼羅剎女見已即自迷亂、不能爲障、)

法堂

〔山門堂舍記〕講堂〈俗呼二釋迦堂一、是四塔中堂也、今〉

〔御山のおをり〕釋迦堂〈在二嘉堯堂の下一〉又轉法輪堂といふ、

〔源平盛衰記〈四〉〕白山神輿登山事

同〈○嘉保二年十月〉二十五日ニ、大衆大講堂ノ庭ニ會合僉議シテ云、〈○下略〉

〔源平盛衰記〈二十四〉〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

大講堂ト申ハ、天平勝寶年中ニ御建立、本尊ハ五丈ノ千手ノ靈像也、

〔運歩色葉集〈波〉〕法^{ハウ}堂^{トウ}〈○禪家〉

〔撮壤集〈上寺院〉〕法堂

〔書言字考節用集〈一乾坤〉〕法^{ハツ}堂^{タウ}〈僧家說法之處〉

〔天下南禪寺記〕法堂前、平階欄干、左右金銅表柱、

〔相國寺供養記〕法堂〈雷音堂〉

〔山城名勝志〈九葛野郡〉〕天龍寺

法雷堂〈法堂〉

〔正法山志〈八〉〕法堂

古無二法堂一、時以二佛殿前一而爲二法堂一、〈常住有二古之法堂遺韻一、卽今佛殿也、〉修二佛座左右圓柱一掛二大法鼓一、而掩二佛像一爲二法堂之用一矣、

〔東福寺日記〕法堂

涅槃像かゝる、四間ニ八間、表具の圖ともニ兆殿司の筆なり、

禮堂

〔伊呂波字類抄〈良疊字〉〕禮堂〈ライダウ、金堂之前堂名、〉

〔類聚名物考〈佛敎五〉〕禮堂 らいどう 今の世に、拜殿といへるものに似たり、

〔多武峯略記下〕第五別院在二當寺之内一

東院堂號二講光堂一、萱葺一間四面禮堂作、元檜皮葺、有二五間廊一、

〔夜鶴庭訓往來〕相二續客殿一、可レ立二檜皮葺之持佛堂、禮堂、庵室一、

〔文德實錄十〕天安二年四月庚子、是夜寶皇寺火、俗名二鳥戸寺一、金堂、禮堂、盡爲二灰燼一、

〔太上法皇御受戒記〕申剋還二御食堂一、其禮堂設二御座一、如二大佛殿一、

〔本朝世紀〕天慶四年八月廿六日癸丑、今日光孝天皇國忌也、仍諸司廢務、此日太政大臣於二極樂寺一供養一切經、○中略參議已上著二禮堂一、修二內裏御諷誦一之間、勅使藏人頭左中辨兼內藏頭源相職朝臣把レ笏居二禮堂一、修二中宮御諷誦一之間、彼宮御使右近衞少將兼中宮權亮小野好古朝臣把レ笏帶レ劒出二居禮堂一、

〔更級日記〕夢に見るやう、淸水の禮堂にいたれば、別當とおぼしき人出來て、○下略

〔蜻蛉日記下ノ上〕世中あはれに心ぼそくおぼゆるほどに、石山におこしまうでたりしに、心ぼそかりし夜な／＼、だらにいとたうとくよみつゝ、らいだうにたゝずむほうしありき、

〔後二條關白記〕寬治五年八月十六日壬申、參殿、敎照法師來云、金山寺禮堂被レ吹レ風已臥了之由所レ申也、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年○元久元年十一月七日乙丑、笠置解脫上人使者參著申云、去月十五日、禮堂造畢之間、無爲遂二供養一云云、是將軍家御奉加事、賀申之故也云云、

〔集古文書四十一注進狀〕密嚴院注進狀所藏不レ詳

注進　走湯山諸堂造營之事

上諸堂

一禮堂九間上葺　同大床妻戸登橋修理○中略

曆應貳年七月日

密嚴院

〔攝壤集寺院上〕祖。師。堂。

〔東大寺要錄四〕一僧正堂根本僧正御影。堂。

〔天下南禪寺記〕土地曰二顯應靈祠、祖。堂。曰二一華五葉一、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺　常樂庵開山塔在二普門寺內一〇中略

開。山。堂。常樂聖一國師像、

〔叢林集四〕本寺ノ祖堂ハ大キニシテ、本堂佛堂ハ小サキコト愚俗ノ疑フコトナレドモ、本寺ハ祖師ノ御本廟、祖堂ハ法會ノ席ナリ、大タルベシ、嚴タルベシ、堂ノ大小ニテ尊卑ヲ云フベカラズ、知恩院黑谷等例一同ナリ、

〔眞宗九表記四〕第一　阿彌陀堂ヨリ御影堂廣大ナル事

問云、三世ノ諸佛多シトイヘドモ、念佛ノ人ノ尊ムトコロ、重ンズルトコロ、阿彌陀佛也、此故ニ淨土宗ニハ彌陀ノ寶殿ヲ正面ニ建立シテ、廣大ニツクル、是卽超世別願ノ恩ヲ尊敬スル故也、然ルニ眞宗ニハ親鸞聖人ノ御影堂ヲ廣大ニ建立シテ、阿彌陀ノ寶殿ヲ輕少ニ傍ニツクリ玉フ、是ナンノ故ゾヤ、

答云、眞宗ノ門人ハ、御本寺ヘ歩ヲハコビ、初メニ阿彌陀堂ニ參詣シ、如來ヲ禮シ、次ニ御影堂ニ參リテ、御開山ニ御禮ヲ申ス、然レバ彌陀ノ寶殿ヲ正面ニスルコト明ラケシ、何ゾ彌陀ノ寶殿ヲ傍ニスト云ヤ、但シ堂宇大小ノ難ニ至リテハ、欣求淨土ノ御門徒衆ニ、彌陀智願ノ海、深厚ニシテ、涯底ナキ事ヲ聞シメン爲ニ、御影堂ヲ廣大ニツクリ玉フ、去バ眞宗ノ法水次第ニハビコリテ、御門徒日々ニ增シ侍ベリヌ、是故ニ參詣ノ道俗ウタヽ群集シテ、御影堂ニアマレリ、是故ニ參詣ノ道俗御門外ニ在テ、風雨雪霜ニクルシム、然レバ善智識、風雨雪霜ニクルシム人ヲ愍ミ玉ヒテ、御影堂ヲ廣大ニ建立シ玉フナリ、

問云、斯答イマダ前ノ難ヲ遮セズ、何ゾ彌陀ノ寶殿ヲ廣大ニツクリテ、如來ノ尊前ヲヒテ聞法ナサシメ玉ハンヤ、

答云、眞宗ノ法水ヲクム人、平生業成機法一體ノ信心ヲ慶ブ事、御開山聖人ノ御恩力也、去バ御開山聖人御在世ノ時、參詣ノ諸人鸞聖人ノ御前ニヲヒテ、所得ノ信ヲヨロコビ、改悔シ、猶々信心ヲ相續ス、是ニ依テ、鸞聖人滅後ニモ亦御存生ノ時ノ御勸化ノヨロコビヲ表顯シテ御影前ニ集テ所得ノ信ヲシラゲ、改悔シテ退キ侍リヌ、ソレヨリコノカタ御門徒タル人ハ、御影堂ニヒザマヅキテ御恩惠ヲ喜ビ侍ベリヌ、去バ眞宗ノ法水次第日々ニ盛ニナリ、諸人群集シテ、御堂ノ内ニアマリ、御門外ニクルシム、是故ニ善知識御堂建立ノ御苦勞ヲカヘリミタマハズ、講衆ノ願望ニ應ジ玉ヒ、御影堂ヲ廣大建立シ玉フナリ、

評議云、世人屋舍ヲ大キニ作ルコトハ、自己ノタメナリ、精舍ヲ大キニ作ルハ、化他ノタメナリ、雖然分際ニ過タル寺ヲタツレバ、其檀越建立精舍ノ助力ニクタビレ、所得ノ信ヲ亂ラカシ、寺ヘノ歩モ自ウト〳〵シクナレリ、是故ニ近付クコトナケレバ、法ヲ示スベキ便ナシ、去バ律ノ中ニハ、分際ニ過タル寺ヲツクル人ハ、外道ニシテ佛弟子ニアラズト禁メ玉ヘリ、

昭堂　牌堂

〔攝壤集寺院上〕昭堂

〔易林本節用集之〕昭堂(ショウダウ)

〔百丈清規考證上二ノ一〕昭堂　在衆寮後、或在僧堂後、照堂後有後架也、蓋前後有堂暗蔽、造此堂高於餘堂、以受照故名照堂也、又於此立僧首座說法之義、見抄、　今呼祖師眞堂、爲照堂、此引廟設昭穆之義、而無據、又以眞影云寫照、故云照堂、按大鑑廣淸規云々、今誤呼享堂爲昭堂、蓋享同饗、然則照堂不用而可也、又方丈中間云正堂、或有方丈奧造影堂、思此影堂云正堂、而誤正堂云昭堂義乎、如此誤言多矣、或照堂設法堂後不可也、或照堂內設小便處不可也、　祖會嘯韻、照又作昭、共可用也、

〔新編相模國風土記稿七十八鎌倉郡〕建長寺 昭堂 開山自作ノ像ヲ置ク

〔山州名跡志七葛野郡〕萬年山等持院

足利家昭堂 在佛殿北、南向、堂內敷瓦、本尊釋迦佛坐像二尺五寸許

〔新編相模國風土記稿百三鎌倉郡〕清淨光寺 ○○○位牌堂 日供堂トモ唱フ、

〔正法山志八〕玉鳳東牌堂

文昭院殿○德川家宣 贈正一位大相國公 尊儀○中略

正一位台德院殿○德川秀忠 源公 尊儀

東照宮大權現○德川家康

大猷院殿○德川家光 贈正一位大相國 尊儀○中略

忠○龍華道忠、卽本書著者、曰、以廟位論之、昭東穆西、東照牌安正中、台德昭在東、大猷穆在西、○中略

玉鳳院西牌堂

豐國大明神○下略

〔倭名類聚抄十三佛塔具〕塔 孫愐切韻云、齊楚曰塔、吐盍反、內典有多寶佛塔、石塔、沙塔、泥格等、楊越曰龕、口含反、一云、塔下室也、

〔箋注倭名類聚抄五佛塔具〕按法華經見寶塔品云、此寶塔中有如來全身、乃往過去東方無量千萬億阿僧祇世界國、名寶淨、彼中有佛、號曰多寶云々、方便品云、或有起石廟旃檀及沈水木、櫁幷餘材、甎瓦泥土等、若於曠野中積土成佛廟、乃至童子戲聚沙爲佛塔、此所引蓋是、按多寶塔見榮花物語玉臺卷、○中略廣韻塔字注云浮圖、與此不同、龕字注云塔也、又塔下室、則知此所引塔下室也、唐韻龕字注、但廣韻無齊楚曰塔楊越曰龕八字、按方言云、龕受也、齊楚曰鋡、揚越曰龕、孫氏蓋依之、而所見方言誤鋡作塔、遂以楊越曰龕爲佛龕字、廣韻以塔也訓龕字、亦襲是謬也、源君從之非、是佛塔字宜

引葛洪字苑云、塔佛堂也、見玄應音義、伽藍具窣堵婆、條詳引之、又按塔本梵語、具言窣都婆、訛略云偸婆、又省云偸、或假沿字、見緣身經、出玄應音義、後從土諧聲作塔字、非古字也、

〔釋氏要覽〕〔下送終〕立塔〔梵語塔婆、此云高顯、今稱塔也、又梵云蘇偸婆、此云寶塔、又梵云窣堵婆、此云墳、又云抖擻婆、此云讚讚、又云浮圖、此云聚相、〕

〔翻譯名義集〕〔七寺塔壇幢〕窣堵波〔西域記云、浮圖又曰偸婆、又曰私偸簸、皆訛也、此翻方墳、亦翻圓塚、亦翻高顯、義翻靈廟、劉熙釋名云、廟者貌也、先祖形貌所在也、又梵名塔婆、發軫曰、說文元無此字、徐鉉新加云、西國浮圖也、言浮圖者、此翻聚相、戒壇圖經云、原夫塔字此方字書乃是物聲、本非西土之號、若依梵本、瘞佛骨所名曰塔婆、後分經、佛告阿難、佛般涅槃茶毗既訖、一切四衆收取舍利、置七寶瓶、當於拘尸那城內四衢道中起七寶塔、高十三層、上有輪相、云云、支佛塔應十一層、阿羅漢塔成以四層、亦以衆寶而嚴飾之、其轉輪王亦七寶成、無復層級、何以故、未脫三界諸有苦故、十二因緣經、八種塔、並有露槃、佛塔八重、菩薩七重、辟支佛六重、四果五重、三果四、二果三、初果二、輪王一、凡僧但蕉葉火珠而已、〔illegible〕〕

〔大唐大慈恩寺三藏法師傳〕〔七〕〔永徽〕三年〇春三月、法師欲於寺端門之陽造石浮圖、安置西域所將經像、其意恐人代不常、經本散失、兼防火難、浮圖量高三十丈、擬顯大國崇基、爲釋迦之故迹、將欲營築、附表聞奏、勅使中書舍人李義府、報法師云、師所營塔功大、恐難卒成、宜用甎造、亦不願師辛苦、今已勅大內東宮掖庭等七宮亡人衣物助師、足得成辦、於是用甎、仍改就西院、其塔基面各一百四十尺、倣西域制度、不循此舊式也、塔有五級、并相輪、露槃凡高一百八十尺、層層中心皆有舍利、或一千二千凡一萬餘粒、上層以石爲室、南面有兩碑、載二聖三藏聖敎序記、其書、卽尙書右僕射河南公遂良之筆也、

〔類聚名義抄〕〔三土〕塔〔音榻、俗云、音之重、或作𡎺、非、〕　塔〔正〕

〔伊呂波字類抄〕〔太疊字〕塔婆

〔書言字考節用集〕〔一乾坤〕塔〔タフ〕〔正曰塔婆、梵語謂之浮圖、揔佛骨之處也、又無舍利曰支提、詳西域記、要覽、〕塔婆〔タフバ〕〔見上、本朝俗謂葬所爲塔婆、蓋據揔佛骨之義、〕

〔釋氏要覽〕〔上住處〕支提〔梵云脂帝浮都、或云制底、制多、皆譯名靈廟、雜心論云、無舍利名支提、又名滅惡生善處、〕

〔太子傳玉林抄〕〔四〕傳云、塔是佛舍利之器也、文

〔類聚名物考〕〔佛敎五〕塔　たふ　塔は卽ち卒兜婆にして、三重、十三層、五重、七層も有り、其かたちさ

まざまにして天竺の制も一かたならずと見ゆ、木石は其略なり、七寶塔とて飾りたるもあり、畫塔とて畫がくもあり、又略なり、泥塔とて土にても作り、沙をあつめてもつくる事あり、十一級なるも有り、皆故由あり、後分涅槃經、佛告阿難、佛般涅槃、茶毘既訖、一切四衆、收取舍利、置七寶瓶、當於拘尸那城内四衢道中、起七寶塔、高十三層、上有輪相、翻譯名義集七注云、經中多言相輪、人以仰望而瞻相也、

〔萬葉集十六有由縁幷雜歌〕詠香、塔、厠、屎鮒、奴歌
香塗流、塔爾莫依、川隈乃、屎鮒喫有、痛女奴、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕塔一基五重、高十六丈、

〔扶桑略記三推古〕元年〇中略是歳四天王寺、始移難波荒陵東下矣、緣起云、〇中略斯處昔釋迦如來轉法輪所、〇中略金堂安置金銅救世觀音像、〇中略寶塔壹基五重瓦葺、〇下略

〔赤染衞門集〕寶塔品
大空に寶のたふのあらはれて法のためにぞ身をばわけゝる

〔法然上人行狀畫圖四十二〕正信房の沙汰として、彼芳骨〇源空之骨をおさめたてまつらんために、二尊院の西の岸の上に鴈塔をたてゝ、貞永二年正月廿五日に、正信房御骨の御むかへに、粟生野の幸阿彌陀佛のもとにまかりむかふところに、〇下略

〔釋氏要覽上住處〕鴈塔（西域記云、昔有比丘見群鴈飛翔、戲言知時、忽有一鴈投下自殞、衆曰、此鴈垂誡、宜旌厚德、於是瘞鴈建塔、）

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年四月戊申、山背國郡内諸寺浮圖、經年稍久、破壞處多、詔遣使、咸加修理焉、

〔眞俗佛事編二殿具〕舍利塔置壇（寶樓閣經曰、寂靜處建立精室、塗或ハ舍利塔前對佛像、又但轉多利軌五護身印ノ下曰、又作此印、誦眞心眞言、於舍利塔前至心發露懺悔衆罪消滅、又金剛童子軌ニモ出タリ、）

〔倭訓栞前編二阿〕あらゝぎ〇中略齋宮の忌詞に、塔をあらゝぎといふは、阿蘭若の意といへど、瑟臺

造塔

の貌、九輪のあたりに似たるをもて、俗に塔のたつといふ意にて、蘭葱より出たる詞なるべし、

〔延喜式　五齋宮〕凡忌詞、內七言、〇中略　塔稱阿良良岐、

〔日本書紀　二十敏達〕十四年二月壬寅、蘇我大臣馬子宿禰起塔於大野丘北、

〔日本書紀　二十三舒明〕十一年十二月、是月於百濟川側建九重塔、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕十一年〇舒明　歲次己亥春二月、於百濟川側子部社平切排而院寺家建九重塔、入賜三百戶封、號曰百濟大寺、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕大安寺三綱言上、〇中略　爾後藤原朝廷御宇天皇、〇文武　九重塔立、

〔扶桑略記　六聖武〕天平二年三月廿九日、始建藥師寺東塔、

〔藥師寺緣起〕一寶塔二基、各三重、每重有裳層、高十一丈五尺、縱廣三丈五尺、

右兩塔內、安置釋迦如來八相成道形也、

〔大和名所圖會　三添下郡〕藥師寺　砂村にあり〇中略

六層塔　天平二年の建立なり、今にあり、

〇按ズルニ、此書ニ六層トアルハ、裳層ヲ加ヘテ稱セルナリ、

〔續日本紀　十三聖武〕天平十二年六月甲戌、令天下諸國每國、寫法華經十部、幷建七重塔焉、

〔東大寺金銅碑文〕菩薩戒弟子、皇帝沙彌勝滿、稽首十方三世諸佛法僧、去天平十三年歲次辛巳春二月十四日、朕發願、僻廣爲蒼生、遍求景福、天下諸國各令敬造金光明四天王護國之僧寺、〇中略　又於其寺、造七重塔一區、別寫金字金光明最勝王經一部、安置塔中、

〔續日本紀　十四聖武〕天平十三年三月乙巳、詔曰、〇中略　其造塔之寺、兼爲國花、必擇好處、實可長久、　閏三月甲戌、奉八幡神宮秘錦冠一頭、金字最勝王經、法華經各一部、度者十八人、封戶馬五疋、又令造三重塔一區、賽宿禱也、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年十二月乙卯、勅天下諸國、或有百姓情願造塔者、悉聽之、其造地者、必立伽藍院内、不得濫作山野路邊、若備儲畢、先申其狀、

〔東大寺要錄四〕一東塔院

七重寶塔一基高廿三丈八寸、塔内安四方淨土、在廻廊、今作之、

天平勝寶五年三月三日建立

一西塔院高廿三丈六尺七寸

天平勝寶五年閏三月廿三日建

〔日本靈異記下〕減塔階仆寺幢得惡報緣第卅六

正一位藤原朝臣永手者、諾樂宮御宇白壁天皇御時太政大臣也、延暦元年頃、大臣之子從四位上家依、爲父惡夢見而白、父言、不知兵士卅餘人、來召父身、此惡表相故應謝除、雖然白甚、而父不聽、然後、父卒時、子家依、得久病、故請召禪優婆塞而令呪護、猶不愈差、時看病衆中有一禪師、發誓願言、凡憑佛法修行大意救他活命、今我壽施病者代身、佛法實有、病人命活、棄命不惜、手於置爐、燒香行道、讀陀羅尼、而忽走轉時、病者託言、我永手也、我令仆平法花寺幢、後西大寺八角塔成四角、七層減五層也、由此罪、召我於閻羅王闕、令抱火柱、以挫釘打立我手於、而問打拍、今閻羅王宮内煙滿、王問何煙、答曰、永手之子家依、受病而痛呪之、禪師手於燒香、彼煙也、即閻羅王免我擯返、然我體滅無所寄宿、故道中漂於是不食病者乞飯而食、差病起居、夫幢是招轉輪王報之善因也、塔是後三世佛舍利之寶藏也、故依幢仆得罪、由塔高減被罪也、不應不恐、是進現報也、

〔醍醐寺雜事記〕延長九年○承平元年十二月八日、中務卿親王○重明使藤原清平告云、醍醐寺塔事、令啓太后○中略、仰延賀法師、勸申五重及一重塔支度、

〔十訓抄十二〕白河院御時、九重の塔の金物を牛の皮にて作れりと云事世に聞えて、修理したる人、

定綱朝臣事にあふべき由聞えたり、佛師なにがしと云ふ者を召て、慥にまことと空ことを見て、有のまゝに奏せよと仰られければ、承て上りけるを、なからの程より歸りおりて、なみだをながして色を失ひて、身のあればこそ君に仕へ奉れ、肝心うせて黑白見えわくべき心地も侍らずと、云もやらずわなゝきけり、君聞召てわらはせ給て、ことなる沙汰あらでやみにけり、彼韋仲將が凌雲臺に上りけん心地も、かくや有けんと覺ゆ、時の人、いみじきをこのためしに言けるを、顯隆卿聞て、こやつは、必冥加あるべきもの也、人の罪蒙るべき事の罪を知て、みづから嗚呼のものとなれる、やんごとなき思はかり也とぞほめられける、誠に久しく君に仕へ奉りて事なかりけり、又賞あるべからん事、あながちにとゞめられてもせんなかるべし、

〔相國寺塔供養記〕大かた塔婆は、七重が本にて侍るとかや、そのゆへは、法花經にも、起二七寶塔一懸二諸幡蓋一とあれば、七重をかぎるべしと見えたり、先にも申候つる、白河院の御時、法勝寺の塔をたてられしに、大塔の七重に過ぎたる事は、例なきよしさだめ有て、七重にて、すでに供養有べきにさだまりたりしを、唐土に、さるためし有よし、良眞座主勸申されしかば、さらばとて、又二重をくみあげられて、遂に九重の塔供養とかや、これは上なき御塔にて侍りしかども、あまり分に過たる故にや、佛慮にそむきけるやらん、承元二年に、雷火にやけたりしを、建仁寺の開山葉上僧正、功國を給はりて、つくり立られしかば、建保元年にくやう有しが、又康永元年にやけて、今は其かたもなきぞふしぎなる、

〔太平記二十一〕法勝寺塔炎上事

康永元年三月廿日、〇中略中ニモ八角九重ノ塔婆ハ、横竪共ニ八十四丈ニシテ、重々ニ金剛九會ノ曼荼羅ヲ安置セラル、其奇麗崔嵬ナルコトハ、三國無雙ノ鴈塔也、

〔本朝續文粹十二願文〕修善

七寶塔

白河法皇八幡一切經供養願文　　敦光朝臣

敬白、〇中略保安三年、〇中略白河之傍、建五重塔一基、三重塔二基、〇中略

大治三年十月廿二日

〔中右記〕天承二年〇長承元年二月二十八日庚寅、法成寺兩塔供養也、〇中略故御堂〇藤原道長御時、此塔被立一基、其後天喜六年二月廿三日夜、本寺燒亡時爲煨燼、其後有議移藥師寺塔成二基、三重、毎重有四佛、八相成道、承暦三年十月五日供養了、永久五年正月八日、兩塔、南大門燒亡、元永元年十月二日、初御塔作事、立心柱、是遠江守爲隆成功也、其後補藏人頭、十分七八作了、爲隆又薨了、此兩三年、以上座信慶介造了、今日供養、立心柱、後經十五年供養、今度作直五重、案兩堺大日各四體、

〔吾妻鏡〕四十四建長六年六月三日癸酉、故城介入道願智周闋期、立塔婆、遂供養、導師右大臣法印嚴惠、眞言供養也、布施南庭十、馬一疋、〇下略

〔東妙寺文書〕佐賀文書纂所收肥前國東妙寺塔婆事、爲勅願之儀、遂修造之功、殊可奉祈天下泰平者、院宣如此、仍執達如件、

暦應二年六月一日　　按察使經顯

良念上人御房

〇按ズルニ、此時、足利直義ノ院宣ヲ奏請シテ、毎國一基ノ塔婆ヲ建立セシ事ハ、寺格篇安國寺條ニ詳ナリ、宜シク參照スベシ、

〔台記〕久安六年五月廿日乙巳、往生小冠者事、信範注進禪閤之狀如此、〇中略去廿一二日之間、當時御所押小路殿透渡殿安置七寶塔一基、上下奇之、雖被尋問内外、不知何人所爲、被召問御所兵士之處、

彼此早朝男十人捧此寶塔、安件所、其時命兵士云、若有被尋事者、往生冠者奉渡之由可披露、我住所在京極三條邊者、仍件兵士差御使被尋之彼邊、即副御使直參入、被問由緖之處、申云候者、爲卑下之身、願期往生之業、其成道之儀、不可過塔婆之由、依智者之敎、此兩三年、造出此形、用途力盡、供養無術、廿九日大會之次、欲被啓白此意趣者、聞食此願念、昨日被副供養云々、件男品體外才者子、幼稚時離二親、近年宿緣者家、無相憑人、偏歸佛道、在家此之輩、見此形勢、稱往生冠者君云々昨日於院承及此由、重以此旨可令披露給候、謹言、

五月卅日　信範

法身塔

〔寂照堂谷響集二〕法身塔

客問、法身塔是何謂也、答謂梵書鍐字也、不空三藏金剛頂義決云、鍐字法界種、相形如圓塔、是名法身塔、

〔因藏知津十〕佛說造塔功德經有釋圖淵序、共二紙、　維　唐中印度沙門地婆訶羅譯

佛在忉利天、爲觀世音菩薩說、內分別一四句偈義、諸法因緣生、我說是因緣、因緣盡故滅、我作如是說、如是偈義、名佛法身、汝當書寫置彼塔內、何以故、一切因緣、及所生法、性空寂故、是。故。我。說。名。爲。法。身。、

相輪樘

〔書言字考節用集二乾坤〕相輪樘（サウリンタウ）在台嶺西塔、是塔婆也、相輪俗云空輪也、樘柱也、

〔寂照堂谷響集一〕相輪樘

有客曰、叡山有相輪塔、嘗聞人所以名相輪塔、少有知之者、相輪者、何義耶、答塔當作樘傳敎大師銘作相輪樘、樘者柱也、相。輪。者。是。乃。俗。間。所。謂。九。輪。也。、在叡岳者、不造浮圖、單建相輪柱、爲塔婆、故稱相輪樘、呼爲相輪塔、無復達矣、言相輪者、僧祇律中塔上盤蓋云輪相、經中多云相輪、名義集解謂、以仰望而瞻相也、相視也、相。輪。亦。名。金。刹。亦。稱。金。幢。、如高僧傳云、有九層浮圖、擧高九十餘丈、上有金刹、高十丈、又云、

五輪塔

元魏太后胡氏造塔、九百尺、上相輪一百尺、上火珠可受二十五碩、鈴一碩食大者是也、上火珠者最上金寶珠、我俗忌憚稱火、故呼爲水圓、又重重相輪名承露盤、故傳中云、承露金盤一十一重、鐵鏁角張、盤及鏁上皆有金鐸、承露盤或略云露盤、九重或云露盤九層、又十二因緣經云、有八人得起塔一如來、二菩薩、三緣覺、四羅漢、五阿那含、六斯陀含、七須陀洹、八輪王、若輪王已下起塔、安一露盤、見之不得禮、以非聖塔故、初果二露盤、乃至如來安八露盤、八盤已上並是佛塔、法苑珠林引之

〔叡岳要記下〕相輪塔

高四丈五尺

〔日光山志五〕相輪樘　御宮御築地外の山腹にて、新宮馬場の方に有、是ハ古傳敎大師叡山を初とし、日本六ヶ所に建給ふといふ、

安東　上野　上野國綠野郡にあり　　安南　豐前　豐前國宇佐郡にあり

安西　筑前　在所不審　　安北　下野　下野國都賀郡にあり

安中　山城　叡山西塔院にあり　　安摠　近江　同東塔院にあり

慈眼大師叡山に比して、傳敎大師の銘文を摸寫して建立し給ふ、始は奥院の山へ寛永廿年建給ひしが、其後慶安三年、今の地へ御建直しになれりといふ、總高地盤石より七間二尺、外に根入二尺四寸、元口差渡三尺一寸、基石大さ八尺四方、八角座石二丈一尺七寸、廻り控柱高一丈七尺八寸元口丸差渡一尺八寸五分、金瓔珞のかなもの二十四連、金鈴二十四あり、滅金かなもの下に葵御紋金にて置けり、敷石の圍内五間四方許、其眞中に輪樘の銅柱を建たり、控是も銅柱にて、頭に凝寶珠あり、樘の圖は右に出し如くなり、○圖略

〔深賢法印記〕塔有因塔果塔、如次五輪與多寶也、又世流布率都婆中、非五輪聊剋梵一字率都婆云々、此中出三說、一五輪塔五字所成、胎藏界本有因德、未加莊嚴之位也、多寶塔一字所成、金剛界修生果

多寶塔

德、既加莊嚴之位也、二五輪塔如前、一字所成塔者、男率都婆也、聯刻者是也、靜遍僧都、以此後說習至極秘曲也、又或傳、二塔同五輪塔也、於蓮心可有差別、一字所成、無量五輪心法塔故、五字所成、各別五輪色法塔故也、　問今兩部三昧耶曼荼羅所圖、同似寶塔、其形無差別、何今云五輪塔乎、　答云、寶塔總體五輪也、五輪上以四萬加莊嚴、今約本體、兩部倶云五輪塔也、爾者非相違歟、

〔秘藏記鈔三〕第十七章

地下想風輪、欠字黑色放光明、狀如半月、遍於法界、上想水輪鑁字白色放光明、狀圓遍於法界、已爲乳海、上想阿字、金色、所謂黃色、狀方遍於法界、上想囉字、赤色、狀三角遍於法界、上想惡字、成八葉蓮華、是即地輪上有八柱樓閣、每葉一柱、閣內有曼荼羅、方圓大小任意、上亦有八葉白色蓮華、蓮華臺上置阿字、放放光成率都婆、〇略圖 腰下念阿字、是即地輪黃色、臍念卑字、水輪白色、胸念羅字、日輪赤色、髮際念吽字、風輪黑色、頂上念劒字、虛空青色、又五色光具足、所謂五大者阿字、是本不生理種子、落種子於地輪、則待水土緣始芽、是故有水輪、雖有水土緣、必待日輪煖氣、得具莖葉、是故上有日輪、雖有水土日輪緣、必待解脫風、得具足生長、是故有風輪、縱雖有水土日風、而皆悉堅實、何能生物、是故最上有虛空輪、所謂五字嚴身也、

〔山槐記〕元曆二年八月廿三日癸酉、午剋著直衣自東山參院、(後白河)前斬一人盛房、衣冠、今日被供養五輪一萬基塔、自去夏、上下諸人及課諸國、爲被滅追罰之間罪障、被勸進八萬四千基、各書名字於地輪下、長講堂佛前、幷前庭立棚奉安之、

〔寺社法則下〕寬政三亥年五月十四日　織田出雲守

一書面、五輪塔之儀、往昔有之候證據も無之、申傳而已之事ニ而、殊ニ一旦退轉致し候儀、旁容易ニ難成筋と存候、〇下略

〔類聚名物考佛教五〕多寶塔　たほうたふ　この多寶塔に三義有り、一は法華經の寶塔品に依れ

ば、地より寶塔涌出しに、多寶佛其中に安座し給ひし事見えたれば、此意に準へて多寶佛を置く、されども多寶塔といふにや、又二には、世に多寶塔といふ塔の製作形によりて、何佛を安置をもいふ歟、三は涅槃經の說によれば、多くの寶をもて莊嚴して飾れば、多寶塔といひて、かたちと內の佛にはよらぬ事と見ゆ、いづれも事によりて心得べし、

〔本朝文粹十三願文〕村上天皇供養雲林院御塔願文　江納言維時

風聞、造塔善根流傳貝葉、豈唯果報之殊勝、兼復道場之莊嚴也、仍心中發願之後、新結構多寶塔一基、安置五佛像、

鐵塔

〔日本紀略朱雀〕天慶八年二月廿七日甲午、皇太后〇藤原穩子於法性寺供養多寶塔、一切經等、

〔阿彌陀寺文書周防三〕廳宣　在廳官人等

可早任分配旨、免除東大寺別寺牟禮令別所南无阿彌陀佛不斷念佛幷長日溫室等用途田畠事、

建立〇中略舍利殿壹宇、方丈、

安置高五尺鐵塔一基、

其中奉納佛舍利五粒、〇中略

右件堂舍建立、田畠分配、大略如斯、〇中略在廳官人等宜承知依宜行之、故宜、

正治貳年歲次庚申十一月八日

願主造東大寺大和尙南无阿彌陀佛在判

〔日光山志二〕多寶鐵塔　本社の左の方にあり、堂一間四面、內に鐵塔を置、塔內に銅像の普賢を安す、其扉黑漆、〇下略

泥塔

〔明月記〕寬喜三年二月九日丙寅、巳時宰相來、去六日、中宮萬卷心經供養、聖覺又說法殊勝云々、〇中略

石塔

導師被物經高布施、殿上人取其後、泥塔供養云々、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年八月廿九日甲子、將軍家〇源實朝御不例、追日增氣、仍於鶴岡寶前被供養八萬四千基泥塔、導師安樂房重慶、〇下略

〔倭訓栞前編十一〕そとやくたふ〇中略　今せきたふといふ、內典に多寶佛塔、石塔沙塔泥塔等ありといへり、

〔小右記〕萬壽二年七月一日辛巳、當季十齋日、〇中略　石塔、　八月一日庚戌、石塔如常、

〔親長卿記〕文明十二年七月十二日、參詣淨蓮花院墓所、今度亂中石塔散亂之處、大略取居之、仍一向非其物、他物等居置了、不可說事也、亡母外祖母墓等如元切付之間、不散亂之故也、於其外者一向沙汰事也、後人不可存知事也、不可說也、

〔大乘院寺社雜事記〕明應四年二月廿四日戊寅、未剋極樂坊、予石塔立之切出事、此二十ヶ年計以前事也、代十石、若槻庄器也　今度梵字切代一貫文、餺代以下六百文、石切祝中五百文同雇二人百文、加用一人五十文、土壇石十代三百廿九文、唱門明寬方二人百四十三文、雇夫二人百一文、石花立代二百文、

〔古今制度集九〕眞言　高野山學侶方定〇中略

一山中塔場、近年甚廣、無用之至也、古來石塔卒塔婆猥不可紛失、向後縱雖爲國持大名、其地形不可過二間四方事、〇中略

慶長二年九月廿一日　御朱印

〔日光山志五〕納骨塔　礎石大なること、四五疊敷も有べき石へ窟を鑿て、納骨すべき爲に設け、其上へ碑銘を置り、銘文は羅山子の撰なり、古へ御宮奥の院山の邊に有けるゆへ、神威を畏て、慈眼大師破却せられ、遺命に依て、其後座主法王の御發基なり、

〔倭訓栞前編十一〕そとやくたふ　明衡往來に、石塔饗事、二月石塔之功德惠業無量也、と見えたり今

座頭に遣れり、二月六日東福寺に於て、雨夜の皇子の法事をいとなみ、後四條河原に出て、石もて塔をたて、香花を供養し、これを拜す、雨夜の皇子は、光孝天皇の御子にて、明を喪ひましませしにより、世の衆盲を愍み、國を置て惠ませたまふといへり、されどかゝる御名の皇子はましまさず、蟬丸を延喜帝の皇子といふがごとしとぞ、唯神名式越前國丹生郡に雨夜神社あり、

沙塔

〔類聚名物考佛教五〕塔　たふ　塔は即ち卒兜婆にして、〇中略沙をあつめてもつくる事あり、

〔續高僧傳七〕釋慧約、字德素、姓婁、東陽烏場人也、〇中略故風鑒貞簡、神志凝邵、擁塵之歲、有異凡童、惟聚沙爲佛塔、壘石爲高座、

〔本朝文粹十序〕五言暮秋勸學會、於禪林寺、聽講法華經、同賦聚沙爲佛塔、　慶保胤

台山禪侶二十口、翰林書生二十人、共作佛事、曰勸學會、焉、結緣植因、盛哉大哉、方今令一切衆生、入諸佛知見、莫先於法華經、故起心合掌、講其句偈、〇中略原夫童子聚沙、以爲佛塔、始自戲弄之手、出於幼稚之心、波洗欲消、策竹馬以不顧、雨打易破、鬪芥雞以長忘、既而其數、則是幾許、其高不過一重、海風之吹沈香、自供芬芳、河水之汰碎金、暗添嚴飾、如來所說、依見戲皆成佛道、況乎我等或齡過壯年、其識且多曰、何疑來世、〇下略

鏡塔

〔龍湫和尙行狀〕師諱周澤、自號龍湫、〇中略嘉慶二年戊辰九月九日八十一歲示寂于西山壽寧院、〇中略塔在西山者曰壽寧、山門曰兌德山、室曰聽水軒、卵塔曰鏡像、不安木像、開戶則翠竹一叢、

〔太閤記三〕信長公御葬禮之事

壬午七月中旬、秀吉卿御次丸を相伴ひ、上洛ましまして、〇中略於龍寶山大德寺、十月初旬より、一七日の法事執行ひ奉らんと、あし一萬貫幷八木は播州より精白にして千石、大德寺納所へ相渡し、奉行として、杉原七郞左衞門尉、桑原次右衞門尉、副田甚兵衞尉を加へにけり、其用意漸成て、十月十一日轉經、〇中略十五日御葬禮の爲體兼目計也、〇中略かくて御位牌所として、建立一字號總見院、

同卯塔爲作事料、銀子千百枚渡之、其上永代無相違やうにと、寺領五十石、大德寺近邊において現米五百斛を以て買得し令寄附畢、

〔東大寺要錄 四〕一東西小塔院

神護景雲元年丁未、造東西小塔堂、實忠和尚所建也、天平寶字八年甲辰秋九月十一日、孝謙天皇造一百萬小塔、分配十大寺、各籠無垢淨光、陀羅尼摺本、(口傳云、惠美亂逆之間、懺悔料云々、)

〔觀古雜帖〕百萬塔幷塔中所納陀羅尼、(○中略)今ハ法隆寺ニ幾萬許カ遺レル、其他ノ諸寺ニハ曾テ見聞及バヌコトニゾ成レリケル、

〔續日本紀 三十 稱德〕寶龜元年四月戊午、初天皇八年亂平、乃發弘願、令造三重小塔一百萬基、高各四寸五分、基徑三寸五分、露盤之下各置根本、慈心、相輪、六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺、賜供事官人已下仕丁已上一百五十七人爵、各有差、

〔本朝續文粹 十二 願文〕修善

白河法皇八幡一切經供養願文

敬白 奉書寫一切經律論等事(○中略)

保安三年建小塔院、安小塔二十六萬三千基、今年更加圓塔十八萬三千六百三十七基、(○中略)

大治三年十月廿二日 敦光朝臣

〔百練抄 五 鳥羽〕保安三年四月廿三日、上皇(○白河)於法勝寺供養五寸塔三十萬基、有舞樂、爲希代法會、

〔玉海〕治承五年(○養和元年)九月卅日癸卯、大外記賴業來、(○中略)賴業云、一昨日自前幕下(○平宗盛)之許、被送使者、剩而令謁之處、被示云、天下事、於今者武力不可叶、可廻何謀略哉、大神宮被行臨時祭事如何、又任阿育王例、被造八萬四千基塔如何、此兩條之外、有善政可被行者、可計示云々、答云、臨時祭事、可被尋本宮之輩祭主、宮司等也、他人難申左右、又八萬四千基塔事、偏可在御意、此外善政又不可叶、但擬當

時之政、可被試歟、不然者尤可危歟、　十月十四日丁巳、巳刻、院藏人來催云、來月十六日、可被供養八萬四千基塔、其內五百基可令造進、寸法五寸云々、各可奉籠寶篋印陀羅尼一反云々、

〔義楚六帖 二十一寺舍塔殿〕塔

育王經塔 王殺八萬四千宮女、夜聞哭聲、王悔爲造八萬四千塔、又天帝天上造三千塔、竭溟海而求珠、淨康衢而徒石盡力也、出弘明集十三卷、

〔園太曆〕貞和三年七月五日、早旦左衛門督送消息云、明日爲禁裏御祈、可被立八萬四千基石塔一萬基可立進者、又來八日、北野社一萬度一千度可令參、總者石塔七千基、萬度七百度可令參勤之由出請文了、

〔花營三代記 下〕應永三十二年二月廿二日、於東寺八萬四千基塔造、御方足利義持ノ御ヒヂシリヨリタケタカユビノ高サ也、赤松越後守持貞私ノ願云々、內々自上御所足利義持被仰付歟、

〔倭名類聚抄 十三伽藍具〕窣堵婆　俱舍論曰、破壞窣堵婆、是無間同類、窣音、蘇骨反、

〔箋注倭名類聚抄 五伽藍具〕阿毘達磨俱舍論三十卷、唐玄奘譯、所引分別業品文、原書婆作波、○中略　按慧苑音義云、塔梵言也、或曰偸婆、正曰窣堵婆、此翻爲墳陵、玄應音義云、塔諸經論中、或作藪斗波、或作塔婆、或云兜婆、或言偸婆、或言蘇偸婆、或言脂帝浮都、亦言支提浮圖、皆訛略也、正言窣覩婆、此譯云廟、或云方墳、塔字諸書所無、唯葛洪字苑云、塔佛堂也、音他合切、依之知塔梵言譌略、然則塔與窣堵婆、其實非異、言有詳略耳、而後俗謂三重五重乃至十三重構成者爲塔、謂疊石爲五輪形及一木削造五輪形者、爲窣堵婆、日本紀略康保四年、永祚元年條、榮花物語、浦浦別卷、疑卷、所謂者卽是、蓋三重五重構成者自隋唐傳之、故以隋唐語謂之塔、又爲五輪形者、大日經說、眞言家所傳、故直以梵語呼之、遂分爲二物二名也、源君別擧之、然俱舍論所言、卽構成者、非疊石削木造者也、

〔伊呂波字類抄 所疊字〕窣堵婆 ソトバ　率都婆 同

〔書言字考節用集 一乾坤〕窣堵婆 ソトバ 梵語、唐翻云方墳、詳于俱舍論、婆覽、　卒都婆 同

〔雜談集九〕卒都婆之事

卒都婆トイフハ梵語ナリ、高顯所、功德聚ナド、義ヲ以テ翻ス、本漢土ニナキユヘナリ、大日ノ三昧耶身ナリ、山野里巷ニ多キユヘニ、人ゴト　見レドモ、ソノ利益ヲ知ルベカラズ、仍テコレヲ記ス、密敎ノ意、佛ニ三身アリ、種子三昧耶尊形ナリ、次ノ如、法、報、應ノ三身ナリ、種子ハ梵字ノ字等ナリ、世間ノ五穀ノ種子ノ如シ、ソノ中ニ、條、葉、華、菓等ヲ含ス、三昧耶ハ芽ノサシテ形スコシカハリタ〇タ下恐脱ニル字ガゴトシ、五鈷、三鈷、蓮華、利劍、寶珠、輪、羯磨等ノ、佛菩薩ノ三昧耶身ナリ、尊形ハ羯磨身、人ノ形ノゴトシ、卒都婆ノ中ニ五輪本ナリ、五大ノ形チナリ、方、圓、三角、半月、圓形、次ノ如ク地、水、火、風空ナリ、梵字ニテ五字眞言ナリ、コレ大日ノ三昧耶身ナ〻、人ノ形チニ相似タリ、顯經ノ中ニ、猶一切衆生、卽菩提相ト云ヘル、尤モ然ルベシ、大般若ニハ一切有情、皆如來藏トイヘリ、理趣經ニハ、普賢菩薩、一切我故ト云ヘリ、一行ハ一切衆生ノ色心實相、常是毘盧遮那、平等智身ト釋シ玉ヘリ、サレバ大乘ノ敎ミナ凡聖其體一如ナルユヘニ、相形モ相似タリ、淺キニ似テ而モ深キ法門コレナリ、三昧耶ニ四義アリ、平等、本誓、除障、驚覺ナリ、平等トイフハ、諸法ノ差別ハ、翳眼我相ノ前ノ假相ナホ空花ノ如トシ、佛眼種智ノテラストコロ、如々平等ハ一相無相ナリ、コノ中ニ天然トシテ、衆生ヲ利スベキ、本誓悲願アリ、父母ノ子ヲ愛スル心ノゴトシ、世間ノ父母、子ニオイテ同體骨肉ノ思ヒアルユヘニ、悲哀ノ心天然トシテコレアリ、佛ケ衆生ニオイテ同體ノ知見オハシマス、イカデカ同體無緣ノ慈悲ナカランコレ天然ノ道理ナリ、磁石ノ鐵ヲスヒ、方諸ノ水ヲ生ズルゴトシ、除障トイフハ、カクノ如ク三昧耶形ヲミル人畜等、コノ理ヲ知リ知ラズ、オノヅカラ罪障ヲ除クコト、!!ノ光リニアヒテ霜露ノキエ、毒鼓ヲ聞テ、身命ノ斷ルガ如ク必然ノ道理ナリ、驚覺トイフハ、罪障除レバカナラズ智慧ノ光アラハル、雲消レバ日ノ光リアキラカナルガ如シ、コノ四義タヾ卒都婆ニカギラズ、觀音勢至ノ三昧耶形ノ蓮華、文殊不動ノ智劍ニ、ミナコノ德アルベシ、イル

カセニ思フベカラズ、驚覺トイフハ、其義オホシ、我本有ノ智ノ、惑障ニカクレタル、障ノゾコレバ自然ニアラハレテ、先無常ノ淺キ理ヲ知ル、卒都波等ヲ見テ、世上ノ無常ヲ知リ、ワガ身モノガレザル事ヲ知ルベシ、

〔和漢三才圖會 十九 神祭附佛供器〕窣塔婆（窣堵婆〇注 塔婆〇注 浮圖〇注 蘇偸婆〇注 抖擻婆〇略）
釋氏要覽云、窣塔婆梵語也、壘塼石爲之、形如小塔、上無輪、初果一級 二果二級 三果三級 四果四級 辟支佛十一級 佛塔十三級 表超十二因縁、各有等級也、若凡夫比丘有德行者、亦得立塔、即無級也、初果至四果、即此聲聞也、辟支佛即此縁覺也、
按法華文句亦云、窣都婆即寶塔也、蓋凡僧世俗、墓上不得立之、故用石爲五大形、空風火水地、仍人體象也、仍名五倫、又稱石塔者、擬寶塔之意乎、又削木爲五倫形者、俗謂之窣都婆、非有別意、唯隨簡易用木耳、
[illegible]空風火水地之梵字、表心識之梵字、凡稱之六大、其功德不可量云々、或曰有一見窣都婆永離三惡道之文、人皆稱之、然此文於藏經中無所見、後人之作、未知所出、

〔滿濟准后日記〕應永三十三年八月廿二日、卒都婆供養法有之、其詞云、新造立供養セラレ玉ヘリ、五。。。。。大法性塔婆八十四基、〇下略

〔日本紀略 四 村上〕康保四年五月廿日戊申、五畿內幷伊賀伊勢國等廿六箇國、可立卒都婆六千基之由被下宣旨、高七尺、徑八寸、依天皇御惱也、

〔本朝文粹 十三 願文〕爲盲僧眞救供養卒都婆願文　江匡衡
夫卒都婆之功德、大哉至哉、不可得以說、仰變身於多寶如來、尋信力於雪山童子、功能出於般若、饒益傳於俱縛、因玆弟子致一心、合衆力、造立十三基、額有三面矣、一面奉圖阿彌陀佛、觀音勢至各一體、一面奉圖阿彌陀佛、地藏、龍樹各一體、以六體佛菩薩、蓋當六道矣、一面奉圖阿彌陀等、葦檀那善女人之

願也、

〔八條相國記〕天治元年十月廿一日甲子、此日、太上皇〈鳥羽〉爲奉拜弘法大師聖廟、令參詣金剛峯寺給、

廿八日辛未、卯剋上格子、〇中略登時出御、〇中略行程三十六町、毎町立卒都婆、而其數三十七本、尋子細、依書金剛界三十七尊種子、縮歩數加一本云々、

〔源平盛衰記　六〕西光卒都婆事

或人ノ云ケルハ、今生ノ災害ハ過去ノ宿習ニ報ベシ、貴賤不免其難、僧俗同ク以テ在之、西光モ先世ノ業ニ依テコソ、角ハ有ツラメドモ、後生ハ去トモ憑シキ方アリ、當初難有願ヲ發セリ、七道ノ辻ゴトニ、六體ノ地藏菩薩ヲ造奉リ、卒都婆ノ上ニ道場ヲ構テ、大悲ノ尊像ヲ居奉リ、廻リ地藏ト名テ、七箇所ニ安置シテ云、我在俗不信ノ身トシテ、朝暮世務ノ罪ヲ重ヌ、一期命終ノ剋ニ臨ン時ハ、八大奈落ノ底ニ入ランカ、生前ノ一善ナケレバ、没後ノ出要ニマドヘリ、所仰者今世後世ノ誓約ナリ、助今助後給ヘ、所憑者大慈大悲ノ本願也、與慈與悲給ヘトナリ、加様ニ發願シテ造立安置ス、四宮河原、木幡ノ里、造道、西七條、蓮臺野、ミゾロ池、西坂本是也、譬ヒ今生ニコソ、劒ノサキニ懸共、後生ハ定テ薩埵ノ濟度ニ預ラントイト憑シトゾ申ケル、

〔山城名勝志　十一　愛宕郡〕美曾呂池廻地藏〈在美曾呂池村内、七道辻其一也、〉

〔平家物語　二〕卒都婆ながしの事

康賴入道は、あまりに故鄕のこひしきまゝに、せめてのはかり事にや、千ぼんのそとばをつくり阿じのぼんじねんがう月日けみやう、ゑちみやう二首のうたをぞかきつけゝる、

さつまがた沖の小島に我有と親にはつげよ八への汐風

思ひやれしばしと思ふ旅だにも猶ふる里はこひしきものを

これをうらにもつていで、なむきみやうちやうらいぼんてんたいしやく四大天王、けんらう地

神、王城ちんじゆ、諸大明神、別してはくまの、ごんげん、あきのいつくしまの大明神、せめては一本なりとも都へつたへてたべとて、おきつ白波の、よせてはかへすたびごとに、そとばをうみへぞうかべける、

〔滿濟准后日記〕永享二年二月廿九日、彼岸勤行、今日結願、卒都婆等如常式供養法、淳基法印、式以前卒都婆供養詞在之、

〔碧山日錄〕寬正二年二月廿五日丙申、客曰、願阿烹粥調糕、日々食飢民、然而保命得活者尠矣、晦日辛丑、以事入京、自四條坊橋上見其上流、流屍無數、如塊石磊落、流水壅塞、其腐臭不可當也、東去西來、爲之流涕寒心、或曰、自正月至是月、城中死者八萬二千人也、余曰、以何知此乎、曰、城北有一僧、以小片木造八萬四千率堵婆、一々置之於尸骸上、今餘二千云、大槩以此記焉也、雖城中所不及見、又郭外原野溝壑之屍不得置之云、

〔親長卿記〕文明十一年三月廿日、立清水宿、未剋許、著高野山淨清心院之北坊、〇中略休息之後、參詣奥院、隨身卒都婆、自禁裏被仰付卒都婆等同隨身、暫念誦之後詠歌、

たか野山おもへばなどかすみもせで又ぐらき世にかへる心ぞ

〔和漢三才圖會十九神祭附佛供器〕下馬　下乘

按諸伽藍地門傍竪石或木、書下馬下乘等文字、自此而內乘車馬不可入之制禁也、本名卒都婆也、

象好曰、退凡下乘卒都婆在外者下乘、在內者退凡、

西域記云、佛在靈鷲山說妙法、時摩訶陀國頻婆沙羅王爲聞法故、興發人徒、自山麓至峯岑、跨谷凌巖、編石爲階、廣十餘步、長五六里、中路有二卒都婆、一謂下乘、即王至此走行以進、一謂退凡、卽簡凡人不令同往其山頂、

戒壇石　今禪律寺門立之銘書不許葷酒入山門此亦卒都婆之屬也、

〔類聚名物考佛教五〕町。卒。都。婆。　てふそとば　今按に町卒都婆とは、一町々々に一宛立る卒都婆なり、いまも高山には此事多し、

〔沙石集二〕彌勒行者事○中略

高野ノ大塔ハ、不二ノ總體ナリ、其ヨリ改所ヘ五里百八十町ニ彌勒ノ御座ハ、胎藏ノ大日ニアタル、仍テ胎藏ノ百八十尊ノ種子ヲ、町。率。都。婆。ニモカケリ、又奥院ヘ一里ハ金剛界ノ三十七尊ノ種子カク、

畫塔

〔類聚名物考佛教五〕摺字塔　山槐記、治承四年□月□□、今日禮四十五基、毎塔奉押摺寫塔、是は塔の形を紙に書たるを、巡禮の時に其寺をおがむことに此札を張れし事と見ゆ、今も觀音の卅三所巡禮する人、或ひは百社百寺などに詣る人の、札打といふ事すると同じさまなり、畫塔なれども、佛の御前に塔を一基作りて建奉るの意にて、西土の紙錢を神佛に奉るに同じ、此方の六十六部といふものゝ、納經を國々に納るもおなじ意なり、さらば今も札打といふ事する人は、むなしく我名國郡を書て納めんよりは、卒都婆の形を書て納るやうにあり度ものなり、

印塔

〔板塔婆伊賀〕印佛印。塔。○中略

當得成佛、若有人、作印佛印塔功德、

建仁三年九月十五日造□

造東大寺大勸進大和尙□

塔具

〔二中歴佛具三〕寶塔具

寶鐸、瑩鏃、及火珠、

〔本朝文粹願文十三〕供養同寺浄妙寺○塔願文

金星銀星之左右、飾護塔之魚、白雲靑雲之低昂、迎遊塔之鳥、見露盤之耀日、道場觀之胸已開、聞寶鐸

之鳴風、菩提心之涙先落、

〔倭名類聚抄 十三 佛塔具〕寶鐸 四聲字苑云、鐸（徒落反）大鈴也、李德林幷州西山塔銘云、寶鐸交音、梵聲疑韻、

〔箋注倭名類聚抄 五 佛塔具〕按說文、鐸大鈴也、四聲字苑蓋依之、隋書懷州刺史李德林集十卷、唐書同、今無傳本、

〔伊呂波字類抄 保 疊字〕寶鐸（大鈴也）

〔下學集 下 器財〕寶鐸（ホウチヤク）（塔具也）

〔扶桑略記 五 天智〕七年正月十七日、於近江國志賀郡建崇福寺、始令平地、掘出奇異寶鐸一口、高五尺五寸、

〔三代實錄 四 清和〕貞觀二年八月十四日辛卯、參河國獻銅鐸一、高三尺四寸、徑一尺四寸、於渥美郡村松山中獲之、或曰、是阿育王之寶鐸也、

〔鹽尻 一〕阿育王寶鐸ト云フモノ堀出、予が父在世なりし時、參河國御油の驛、南北戶山にて、村民堀出せしとて、銅鐸を名府（○名古屋）に携へ來りて、公府に納なん事を請ふ、依て是を啓して奉りし民は祿なんど給はりし、（瑞公の御時也）亡父曰、昔三河國渥美郡にて、阿育王の寶鐸を得、朝廷に獻せしと云事、（三代實錄、貞觀二年庚辰八月十四日辛卯ノ條、）三代實錄に見ゆ、其高さ三尺三寸と云り、其銅鐸、かたち異樣にして、我國の製ならず、是阿育王の古物なるも知べからず、但かゝる故事、申上んも、いと鳴呼の事なりとて、人にもかたらざりし、其後いかゞなり行しとおもひわすれ侍りし、年經て東都に下り、外山の御別業に寓し侍りし、御邸の吏語りしは、今此御園に、其鐘をつらせておかせたまふといふにぞ、立かへり、昔の事もおもひ出て、さらぬ袂をぬらし侍りし、　賢按ニ、播州高砂尾上ノ鐘トテ、異體ノ鐘アリ、是モ何レノ年カ、地中ヨリ堀出シタ・ル阿育王ノ塔ノ寶鐸ナルベキカ、因ニ爰ニ記ス、

〔下學集 下 器財〕九輪（クリン）（塔最末）

〔類聚名物考佛敎五〕塔顆(顚)　たふのさき　塔抄(今云九輪)なり、輟畊錄九吳江塔顚箭の條に、吳江の華嚴寺の浮圖の事をいへる所に、浮圖之顚と有り、また塔抄とも塔顆とも有り、三ながら今云ふ九輪の事にて、其先をいふなり、

〔太平記二十六〕執事兄弟奢侈事
夫富貴ニ驕リ、功ニ侈テ、終ヲ不慎ハ、人ノ尋常皆アル事ナレバ、武藏守師直、今度南方ノ軍ニ打勝テ後、彌心奢リ、擧動思フ樣ニ成テ、仁義ヲモ不顧、世ノ嘲弄ヲモ、知ヌ事共多カリケリ、(中略)今年石河川原ニ陣ヲ取テ、近邊ヲ管領セシ後ハ、諸手諸社ノ所領、一處モ本主ニ不充付、殊更、天王寺ノ常燈料所ノ庄ヲ押ヘテ、知行セシカバ、七百年ヨリ以來、一時モ更ニ不絕、佛法常住ノ燈モ威光ト共ニ消ハテヌ、又如何ナル極惡ノ者カ云出シケン、此邊ノ塔ノ九輪ハ、大略赤銅ニテアルト覺ル、哀是ヲ以テ、鑵子ニ鑄タランニ、何ニヨカランズラント申ケルヲ、越後守(師直弟師泰)聞テ、ゲニモト思ケレバ、九輪ノ寶形一下テ、鑵子ニゾ鑄サセタリケル、ゲニモ人ノ云シニ不差、腐谿無クシテ、磨クニ光冷々タリ、芳甘ヲ酌テタツル時、建溪ノ風味濃也、東坡先生ガ、人間第一ノ水ト美タリシモ、此中ヨリヤ出タリケン、上ノ好ム所ニ、下必隨フ習ナレバ、相集ル諸國ノ武士共、是ヲ聞傳テ、我劣ラジト、塔ノ九輪ヲ下テ、鑵子ヲ鑄サセケル間、和泉、河內ノ間、數百箇所ノ塔婆共、一基モ更ニ直ナルハナク、或ハ九輪ヲ被下、マス形計アルモアリ、或ハ眞柱ヲ切レテ、九層計殘ルモアリ、二佛ノ並座瓔珞ヲ、曉ノ風ニ漂ハセ、五智ノ如來ハ、烏瑟ヲ夜ノ雨ニ潤セリ、

〔倭名類聚抄十三佛塔具〕箜篌　法華經云、起七寶塔、懸諸幡蓋、又云、簫笛、箜篌、種々舞戲、以妙音聲歌唄讚頌、(箜篌二音、俗云空古、)

〔箋注倭名類聚抄五佛塔具〕所引分別功德品文、按箜篌樂器、法華經所載、所以皷之供養佛、非懸之佛塔、然淨藏法師傳云、微風起西北方來、吹塔婆寶鐸箜篌、搖擊和鳴、又體源抄載箜篌云、愚案塔層四

角懸者卽是歟、彼塔在宇治平等院、則中古有塔隅懸箜篌者、今石淸水八幡宮有琴塔、塔隅懸小箏、是其類、但其所引經文非懸之塔隅者、源君引證誤矣、下總本作法華經云、簫、笛、琴、箜篌九字、所引方便品偈文、按分別功德品云、起七層塔、云簫笛箜篌、故源君引之爲佛塔具、疑下總本所據本、起七層塔以下皆脫、淺人以標目云箜篌、依方便品補簫笛云々五字也、然方便品不載起塔之事、則不得引之證佛塔具箜篌也、是引方便品者、恐非源君舊文、箜篌又見音樂具、

〔倭名類聚抄〈十三佛塔具〉〕火珠　漢語鈔云火珠〈塔乃比散久加太〉

〔箋注倭名類聚抄〈五佛塔具〉〕按五代會要、顯德二年九月勅、除朝廷法物、軍器、官物、及鏡、幷寺觀內鐘、磬、鈸、相輪、火珠、鈴鐸外、其餘銅器一切禁斷者、卽是、本事詩云、崔曙進士作明堂火珠詩贖帖曰、夜來雙月滿、曙後一星孤、當時以爲警句、按、火珠形似長項胡盧、故有比散久賀太之名、

〔倭名類聚抄〈十三佛塔具〉〕露盤　梁孝元帝、有雲夢寺露盤銘、

〔伊呂波字類抄〈留疊字〉〕露盤〈ルバン塔具也〉

〔古京遺文〕粟原寺鑪盤

寺壹院〈○中略〉

和銅八年四月、敬以進上於三重寶塔七科鑪盤矣、仰願藉此功德、皇太子神靈速證无上菩提果、〈○中略〉

粟原寺今廢、大和志云、廢址在十市郡粟原村、鑪盤今藏多武峯妙樂寺、〈○中略〉余往讀崇峻天皇紀、有鑪盤博士某、爾時無辨鑪盤是何物、今於此銘始得知之、七科卽七階、猶云七層也、四天王寺本願緣起云、寶塔第一露盤誓手鏤金、亦謂露盤第一層也、

〔太子傳玉林抄〈七〉〕傳云、第一露盤、〈文〉口傳云、〈詮要抄〉今露盤者違、常思常ニハ最下ノ方ノ坐ヲ云也、此此重々ノ空輪ノ物名也、其中ニ自餘ハ雖成黑色、最下ノ圓輪金色ニシテ今不汙云々、

〔赤染衛門集〕塔〈○天王寺〉の露盤　黃金太子ぬり給ひて、この光りうせんをり、佛法もうすべしと誓ひ

給ひけるが、くもりて見えしに、

みがきけんこがねの色もくもりつゝ、法の光りも消ぬべきかな

〔道の幸中〕寛政四年十二月六日、薬師寺へ行、○中略六重の塔、○中略天武天皇の御宇に草創、○中略かつまたの池はましたにあり、高さ十六丈、空輪の長さ五丈ほどありとぞ、さても九輪の心柱をくみて、屋の上におほひたるを露盤といふ、方五六尺もあらんか、高さは二尺ばかりあり、露盤のうへに、上のひらきたる鉢のさましたるもの、ふちに、手をかけて、いさみて露盤にのぼる、年ごろ聞わたりぬる銘文は、心柱の東の方にゑりてあり、塔の心柱をば檫といふよし、順朝臣の和名抄に見えれば、檫の銘といふべきなり、世人の、露盤の銘といふはあやまりなり、

〔倭名類聚抄十三佛塔具〕檫　四聲字苑云、檫初轄反、俗云心乃波之良佛塔中心柱也、

〔箋注倭名類聚抄五佛塔具〕按玄應音義云、刹又作檫、同音察、梵言差多羅、又云刹書無此字、即刹字略也、依之檫本梵語、差多羅之訛略、無其字、故借用剎字、訛作刹、後又木旁、諧察聲作擦、遂與木名擦字混、無別也、

〔增補下學集上二家屋〕檫塔具

〔書言字考節用集二乾坤〕檫シンバシラ字苑、佛塔中心柱也、

〔日本書紀二十二推古〕元年正月丙辰、以佛舍利置于法興寺刹柱礎中、丁巳、建刹柱、

〔扶桑略記三推古〕元年正月、蘇我大臣馬子宿禰、依合戰願、於飛鳥地建法興寺、立刹柱日、島大臣○馬子幷百餘人皆著百濟服、觀者悉悅、以佛舍利籠置刹柱礎中、

〔好古小錄上金石〕奈良西京藥師寺東塔銘

維清原馭宇　天皇即位八年、庚辰之歲、建子之月、　中宮不悆、創此伽藍、而鋪金未遂、龍駕騰仙、大上天皇、奉遵前緒、遂成斯業、照先皇之弘誓、光後帝之玄功、道濟郡生、業傳曠劫、式於高躅、敢勒貞金、

其銘曰

巍々蕩蕩、藥師如來、大發誓願、廣運慈哀、猗猗聖王、仰延冥助、爰餝靈宇、庄嚴調御、亭亭寶刹、寂寂法城、福崇億刧、慶溢萬齡、

此銘檫ノ西面ニ鐫ル、寺傳テ舍人親王撰幷書云、按日本紀壬申年ヲ以、天武天皇卽位ノ元年トス、此銘卽位八年庚辰歲トイヘルハ、癸酉ノ年ヲ天武天皇ノ卽位ノ元年トシ、壬申ノ年ヲ皇子大友ニ係テ、日本紀ノ壬申ノ年ヲ、天武天皇卽位ノ元年トスル者ト合ザレバ、親王ノ撰ニ非ルコト知ベシ、

〔古京遺文〕藥師寺東塔檫銘〇中略

右刻在藥師寺東塔刹柱上、隅東奈佐先生有檫銘釋、精核可喜、〇中略是銘造在文武天皇之時、故謂持統天皇、爲太上天皇也、續日本紀、文武天皇二年十月、庚寅以藥師寺構作略了、詔衆僧令住其寺、可見持統天皇之時、猶未落成也、蒙齋以爲天武天皇時之物、疎漏甚矣、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年二月丙辰、破却西大寺東塔心礎、其石大方一丈餘、厚九尺、東大寺以東飯盛山之石也、初以數千人引之、日去數步、時復或鳴、於是益人夫、九日乃至、卽加削刻、築基已畢、時巫覡之徒、動以石祟爲言、於是積柴燒之、灌以三十餘斛酒、片々破却、棄於道路、後月餘日天皇不悆、卜之破石爲祟、卽復拾置淨地、不令人馬踐之、今其寺內東南隅數十片破石是也、

〔三代實錄五淸和〕貞觀三年八月十七日戊午、宣告五畿七道諸國云、佛頂尊勝陀羅尼功德勝利不可思量者也、故波利殞身、邀大士於五臺窟、善住繫念、脫極苦於七返生、宜令書寫梵本安國內諸寺塔、昔無牢固之、易損弊、須鑿心柱深藏其中、凡厥功力所盛只有處心、亦須國司當日淸食、於國分寺令講讀師燒香散花、供養諸尊、回向法界、但定額寺令三綱修之、其無塔寺不在此限、

〔東寶記二〕一塔婆五層

塔雜載

大師御草勸進表（正文被納勝光明院寶藏、今以第二傳本寫之、點畫等不慥、大概摸寫之、）

東寺

請令諸司等曳一材事

合應曳材廿四枝

塔心材四枝　第一材（不顯指之、應曳者五百人、）第二材（不顯指之、應曳夫四百人、）第三材（荒宮坊、應曳者三百五十人、）第四材（右大所子、應曳夫三百人、）

〔攝津徵書九〕荒陵寺緣起（中略）

寶塔壹基（五重瓦葺）　心柱（籠佛舍利髻毛）

四大天王像四體（下略）

〔倭名類聚抄十三佛塔具〕層。　梁簡文帝大愛敬寺刹下銘序云、普通三年二月、建七層靈塔、唐韻云、層昨稜反、一層重屋也、（和。名。太。布。乃。古。之。）

〔箋注倭名類聚抄五佛塔具〕隋書云、梁簡文帝集八十五卷、唐書云八十卷、今無傳本、閻光世蕭梁文苑有梁簡文帝集十四卷、未見文苑英華載所引文、普通上有以字、三年下有歲次壬寅四字、二月下有癸亥朔八日庚午七字、此並節去、所引唐韻與廣韻同、下總本注塔上有和名二字、廣本注塔作太布二字、按塔乃古之、新撰字鏡同訓、靈異記單訓古之、

〔扶桑略記五天武〕九年十一月、爲憲記云、藥師寺、淸御原天皇之師僧祚蓮入定、見龍宮樣習作也、（已上）寶塔二基、各三重、有裳。層。高十一丈五尺、縱廣三丈五尺、兩塔內安置釋迦如來八相成道形也、

〔大法師淨藏傳〕天曆之比、法師寄住法觀寺、六年春三月、卿相重臣（實賴等中將）朱紫貴客等數十人、依花而群來矣、爰見件寺塔指乾方傾斜、命云、塔傾方者不安云々、然此塔向王城而傾曲如何、法師云、年來欲直之塔也、集會上下可加其料之由、相定之處、法師云必不可用物矣、衆會聞之、皆知以驗力可直之由、法師又云、今夜直試者、衆庶聞已、各以口還、法師以亥剋坐於露地、加持寶塔、遣於本坊、口弟子仁璫奇、

此事寄眼於塔徘徊庭中及至子剋微風起西北方來吹塔婆寶鐸鏗鏘搖擊和鳴聞之而大底知塔之端直也然而當夜陰未見其直否之體終宵不寢達旦得明已見直時空之形因玆庫車軟輿貴公主香衫細馬豪家郎上卿下品雲集禮拜矣

〔山槐記〕治承四年三月廿一日癸酉自今日禮百塔始自法成寺終于清水寺自卯時及秉燭辰時於中山予（〇中山忠親）堂著儀申剋於雲居寺武者所則貞（家人也）堂又著儀尤少將兼宗侍從忠季安房守長定五六親家諸大夫侍等十餘人在共於菩提樹院乘手輿今日禮四十五基每塔奉押摺寫塔供香花洗米一燈長賀大德啓曰於清水六波羅密寺等依見燈入夜參詣奉燈明本堂 廿二日甲戌今日猶禮百塔殘廿八基辰剋先禮常光院塔（六波羅入道相國平清盛泉亭內）及法住法性觀音寺等至東寺於佛殿房今天王寺塔禮了於蓮花王院雨下即又止午剋於觀音寺先以御堂著儀酉剋於東寺食堂（上參聞之、但於僧名侍男勤之）又著儀今天王寺爲見證所仍入夜所參也 廿三日乙亥卯剋地震今日猶禮百塔殘廿七基辰終剋先禮春日木辻邊塔次第巡禮廣隆觀見證仍自東方參御前供燈明次仁守巡禮向保壽院法印許予相具儀房主被著鈍次向雲林院知足向一條堀川邊今日於所々逗留而猶不及秉燭仍暫參季俊塔下入夜參行願尤本堂燈明次禮塔歸華滿百塔了

〔類聚名物考佛教五〕塔の高さをはかる事 故實世話卷二 塔をつもるに下の重三間四方ありて五重ならば升形まで十五間有る物なり又五間四方ならば廿五間有る物と知べし一重づゝ四角に積りたるものなり其上に屋根をふくなり上の九輪は其塔に從ひて品有りて如斯と云々此事鎌倉の執權上杉民部入道道昌が語と見えたり今案に塔の高さを計らんには猶心やすき事あり日影にて計るべしたとへば高一間の竿を立て日影何尺とつもりて塔の日影何十何間何尺と見て其積りにて其まゝ志るなり

〔倭訓栞中編十三多〕たうのかげ 諏方に七不思議あり所謂神渡御作田耳裂鹿社頭雨根入杉塔影

幢

蛙狩也、其塔の影は、上宮本地堂の邊、穴へ紙をあつれば、塔の影うつる事あり、五雜俎、牛首寺窻中見塔影、閉門則影從門罅入、其影倒見、尖反向門、塔相去甚遠、此理之不可曉者、何處無塔、何處無窻隙、而塔影未必入、卽入而未必倒也と見えたり、

〔秇苑日涉三〕倒塔影
元慶中、東寺造五級塔、卽今所存是也、寺前有民家、每及晡時、壁上有塔影、極小且倒焉、人多不解其故、按、老學庵筆記曰、段成式酉陽雜俎言、揚州東市塔影忽倒、老人言、海影翻則如此、沈存中以謂、大抵塔有影必倒、予在福州見萬壽塔、成都見正法塔、蜀州見天目塔、皆有影、亦皆倒也、然塔之高如是、而影止三二尺、纖悉皆具、或自天窻中下、或在廊廡間、亦未易以理推也、

〔倭名類聚抄十三伽藍具〕寶幢　華嚴經偈云、寶幢、諸幡蓋、

〔箋注倭名類聚抄五伽藍具〕大方廣佛華嚴經六十卷晉佛陀、跋陀羅譯、又八十卷唐實叉難陀等譯、所引初發心菩薩功德品文、新舊二譯並同、釋名幢童也、其貌童々然也、按說文無幢字、古借橦字爲之、後漢書馬融傳注、橦者旗之竿也、按寶幢音讀、見榮花物語音樂卷、萬葉集幡幢訓八多保己、

〔倭訓栞中編十九〕はたぼこ　文選に橦をよめり、延喜式に幢に作れり、

〔萬葉集十六有由緣幷雜歌〕高宮王詠數種物歌二首〇一首略
婆羅門(バラモン)乃、作有(ツクレル)小田乎(ヲダヲ)、喫烏(ハムカラス)、瞼腫而(マナブタハレテ)、幡幢(ハタホコ)爾居(ニヲリ)、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年五月庚寅、詔曰、崇飾法藏、肅敬爲本、營修佛廟、清淨爲先、今聞諸國寺家、多不如法、或草堂始闢、爭求額題、幢幡僅施、卽訴田畝、〇下略

〔攝津徵書九〕荒陵寺緣起〇中略
寶幢肆基
二本廊東西、一本廊乾角、一本廊艮角、

〔性靈集九〕奉造東寺塔材木曳運勸進表一首

右東寺別當沙門少僧都空海等奏、空海等聞、興隆三寶、唯憑一人、一人所務、惟孝惟德、德之所聚者、塔幢是最也、塔名功德聚、幢號與願印、功德聚、則毗盧遮那萬德之所集成、與願印、則寶生地藏之三昧身、是故建塔建幢、福德無盡、○中略東寺者、先帝○桓武之御願也、雖帝經四朝、年逾三十、然猶紹構未畢、道俗觀者、咸願早成、○中略空海等謬代良匠、叨預御願、驅馳日夕、經營東西、今塔幢材木、近得東山、僧等從今月十九日、與夫曳運、木大力劣、成功太難、○中略今望、令六衞八省親王京城等、戮力竭誠各曳一味、○中略僧等徼願如是、天慈允許、宣付諸司、

天長三年十一月廿四日

〔性靈集便蒙九〕幢俗所謂九輪也、或云刹、或云相輪、塔毘盧遮那三昧耶形、萬德所聚、故名功德聚、與願印、寶生地藏本誓標幟、故云三昧身、

〔釋氏要覽上住處〕梵刹梵者淸淨之義、經音云、梵云刹瑟致、此云竿、今略名刹、卽幡柱也、長阿含經云、若沙門於此寺中勤苦、得一法者、便當竪幡告四遠、今有少欲知足居此、

〔東寶記二〕一塔婆五層

大師御草勸進表正文被納勝光明院寶藏、今以第二傳本寫之、點畫等不慥、大槪摸寫之、

東寺

請令諸司等曳一材事○中略

幢材四枚

第一材　左近衞府　左馬寮　十一月廿七日　第二材　右近衞府　右馬寮　十一月廿七日

第三材　左近衞府　左衞門府　十一月廿八日　第四材　右近衞府　右衞門府　十一月廿八日

已上四材應曳各者百五十人

鐘樓

幢。柱十六枚

第一材太政官　十一月廿九日　○下略

〔榮花物語 十七 音樂〕御堂供養、治安三年七月十四日とさだめさせ給へれば、よろづをまづ心なう、よるをひるにおぼしいとなませ給、○中略やう／＼佛を見たてまつり給へば、中尊たかくいかめしうおはしまして、大日如來におはします、ひかりのなかの化佛無數億にして、無量莊嚴具足し、寶帳。寶幢。寶瓔珞、上下四方に光明てらしかゞやけり、○中略所々に寶幢はたかけつらねたり、みな是七寶をもて強盛せり、こがねのすゞやはらかになり、日のむまのときばかりになる程に、かねのこゑきよきりになりひゞき、よにすぐれたり、

〔倭名類聚抄 十三 伽藍具〕鐘樓シユロウ　諸亮鐘樓銘云、庵園寶地、率苑珠臺、形如涌出、勢似飛來、

〔下學集 上 家屋〕鐘樓

〔雜談集 五〕鐘樓事

祇園精舍ハ、都率天ノ一院ヲウツシ、唐ノ西明寺ハ、祇園ノ一院ヲウツシ、日本ノ大安寺ハ、西明寺ノ一院ヲウツセリト云ヘリ、我朝ノ諸寺、ミナコレヲ本トセリ、金堂講堂ノ中ノ、左右ニ相對シテ、鐘樓、經藏立之、コノ作法、ソノ由來未聞、私ニ料簡シテ云、尤モ可相對、見聞ノ利益ナリ、經ハ見之愚惑ヲノゾキ、鐘ハ聞之業患ヲヤムベシ、經ハ見ル人希ナリ、有智ノトモガラニ可令蒙、鐘ハ聞クトモガラ多シ、畜類猶可有益、況ヤ人ヲヤ、有智無智トモニ、可有益、祇園精舍ノ無常院ノ鐘ハ、諸行無常ノ音アリテ聞之病人、多ク愈ユト云ヘリ、コレ苦ヲ除ク先蹤ナリ、

〔寺社法則 下〕文化九申五ノ卅　松平丹後守

書面、中絕之撞鐘再興之儀ハ、寛政之度、御觸之趣有之、難成筋ニ候、併證跡分明ニ有之候ハヾ、其譯を以御問合有之候方と存候、半鐘ハ法具故、新キ寄附有之候而も不苦筋と存候、

〔倭名類聚抄十三伽藍具〕經藏。後周王襃有經藏願文、

〔箋注倭名類聚抄五伽藍具〕隋書云、後周小司空王襃集二十一卷、舊唐書作三十卷、新唐書作二十卷、今無傳本、其經藏願文、載在廣弘明集、東林寺經藏見東林寺白氏文集記及白氏文集後記、共載在白氏文集第六十一卷、

〔下學集上家屋〕經藏キャウザウ

〔撮壤集上寺院〕輪藏。

〔運歩色葉集輿〕經藏

〔書言字考節用集一乾坤〕輪藏リンザウ 又云經藏、梁傳大士善慧爲後世造轉輪藏、今俗所笑ワラヒ佛者、其二子普建、普成模像也、詳傳灯錄、佛祖通載、

〔釋門事始考〕法寶輪藏

梁善慧大士傳、翕以世人多故、不暇誦經、或不識字、乃於雙林道場建大層龕、中心立一柱、啓八面而奉一代經卷、謂之輪藏、且發願曰、登吾藏門者、世々不失人身、發菩提心者、推之一匝、卽與持誦其功正等、今之藏殿、設大士像依此、本傳

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕樓二口 一口經樓。(中略)一口鐘樓。

〔叡岳要記上〕經藏 今號大師堂、安置大師眞影一體、

右寺家緣起、奉爲桓武天皇、兼欲興隆佛法鎭護國家、延暦七年歳次戊辰故十禪師前入唐贈法印大和尙位最澄、大師初所造立、

〔扶桑略記抜萃桓武〕延暦十六年、傳敎大師傳云、延暦十六年丁丑、最澄和尙、書寫一切經論章疏、山院本自無備、不盡部卷、仍和尙行向大和國平城故京、於大安寺別院龍淵寺、營成此願、七大寺衆僧傾鉢添供、捨功成卷、大安寺沙門聞寂道心堅固、相助此願、又有東國化主道忠禪師者、是此大唐鑒眞和上持戒第一弟子也、傳法利生、常自爲事、智識遠心、助寫大小經律論二千餘卷、纔及滿部帙、設万僧齋同日供

養、今安置叡山經藏、斯其經也、已上

〔本朝續文粹十一記〕納和謌集等於平等院經藏記

和謌者、不關八万十二之敎文、無載姬旦孔父之典籍、唯爲日域之風俗、空抽艶流之綺語、○中略故以斯和謌集等、納平等院經藏、併非加顯密法文之緗秩、偏爲慣讃歎佛乘之偈句也、願以數篇風雲草木之興、戀慕怨曠之詞、翻爲安養世界七菩提之文、八正道之詠、○中略于時延久三年暮秋九月記、

作者大學頭孝言

○按ズルニ平等院經藏ハ、又宇治寶藏ト稱ス、事ハ江談抄、順德院御琵琶合等ニ見エタリ、

〔多武峯略記下〕淨土院經藏檜皮葺口間四面

古記云、嘉保元年、後二條關白師通、建經藏、安七千餘卷經律論及台與章疏矣、○下略

〔吾妻鏡九〕文治五年九月十日丁卯、今日奧州關山中尊寺經藏別當大法師心蓮、參上于二品御旅店、愁申云、當寺經藏以下、佛閣塔婆、淸衡雖草創之、悉爲鳥羽院御願所、年序惟尙、被寄附寺領、又所被募置御祈禱料也、經藏者、被納金銀泥行交一切經、於事嚴重靈場也、然者始終無牢籠之樣、可被定歟、

十七日甲戌、淸衡已下、三代造立堂舍事、源忠已講、心蓮大法師等注獻之、○中略淸衡管領六郡之最初草創之、○中略宋本一切經藏、內外陣莊嚴、數宇樓閣、不遑注進、○下略

〔新編相模國風土記稿七十九鎌倉郡〕圓覺寺○中略

經堂　僧堂ヲ兼ヌ、元祿中松平佐渡守新ニ造立ス、法輪寶藏ト號ス、大藏經ヲ收ム、選佛場無準筆跡ノ額アリ、是禪堂ノ額ナリ、

〔鹿山略記〕經堂、○中略兼僧堂也、元祿十二年、江府松平佐渡守、法名永固院道基鶴翁居士、捨家資若干、相攸寶殿乾、重新法輪寶藏、兼選佛場、且寄納大藏經金函也、

〔山州名跡志四愛宕郡〕東山建仁寺

經藏　今在₂方丈庭₁右ニハ輪藏ナリ、所藏一代經開山唐朝ヨリ將來ナリ、

〔多武峯略記下〕平等院經藏本瓦葺、一間四面、

件堂者、大法師濟嚴受₂白河院勅宣₁所₂建立₁也、安₂置傳。大。士。像₁、彩色長五尺五寸

〔集古文書十五判物〕足利直義判物相模國鎌倉淨明寺藏

一切經印板、同經藏等事、任₂智通上人之例₁、可₃被₂致₁沙汰₁之狀如₂件、

觀應二年五月廿四日　　花押

解一上人御房

〔十訓抄十二〕行成は、道風が跡を繼てめでたき能書なりけり、○中略彼卿の孫に帥中納言伊房とておはしけるも、いみじき手書なりけり、春日大明神の示現によりて、すゞろに御經藏と云額を一枚かきて置給ひたりけれども、只今打過ぎ經藏もなければ、あるやうあらんとて置たりけるほどに帥もうせ給ひて後、遙に年へて後に、思の外に公家より此社に一切經を安置しまいらせられける時、誰か額をば書べきと沙汰有けるに、此帥の子孫の中より、かゝる事有て、彼帥かきをける額有とて、えり出されたるをうたれたるに、神慮に叶給まで有ける事、やんごとなく覺ゆる、

〔倭名類聚抄十三伽藍具〕僧坊　法華經云、起₂塔寺₁及造₂僧坊₁、他經等或云、僧房供₂養衆僧₁、其德最勝無量無邊、

〔箋注倭名類聚抄五伽藍具〕按、僧房見₂增阿含經₁、下　按、僧坊者、僧所₂在之處₁、訓₂別屋₁是也、僧房者僧舍之房室、二義不₂同、源君混₂一之₁非是、

〔下學集上家屋〕僧坊ソウバウ

〔釋氏要覽上住處〕僧坊祖林云、坊區也、苑師云、坊區院也、

〔本朝文粹十序〕山寺付僧房

方丈

七言、晩秋於天台山圓明房月前閑談、　江以言（○本文略）

〔慈惠大僧正御遺告〕華山中院妙業房一處（○中略）

又可令得便宜、選角車宿七間屋、東方僧房、西方廊屋等皆欲造立、而無其料物、

〔扶桑略記　三十白河〕承曆五年（○永保元年）四月廿八日、辰剋叡山大衆引率數千軍兵、來向於三井寺、（○中略）其傳六月（○中略）十八日癸酉、勅遣右大史江重俊並史生等、勘錄寺塔房舍燒失、其記云、御願十五所、堂院七十九處、塔三基、鐘樓六所、經藏十五所、神社四所、僧房六百廿一所、舍宅一千四百九十三宇也、（已上官使實錄也）

〔本朝世紀〕康治元年三月十七日庚戌、去夕園城寺惡僧數十、帶兵仗著甲冑、偷登天台山、擬燒拂東塔南谷彌勒堂邊僧房五六宇、（○下略）

〔多武峯略記　上〕第九炎上三箇度、（○中略）第三度

承安三癸巳年六月二十五日、山鄉幷寺中堂塔僧坊等皆悉燒失、

〔源平盛衰記　二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

興福寺ハ是淡海公ノ御願、藤氏累代ノ氏寺也、（○中略）空輪雲ニ耀キシ五重塔婆、稽古窓閑ナル三面ノ僧坊、（○中略）大湯屋ニ至迄、忽ニ煙ト成コソ哀ナレ、

〔百練抄　八高倉〕治承四年十二月廿八日、今日東大寺、興福寺、堂舍僧房、不殘一字、悉以燒拂、佛法之滅亡、偏在此時、

〔易林本節用集　保〕方丈（ホウヂヤウ）（島名又寺○）

〔釋氏要覽　上住處〕方丈（蓋寺院之正寢也、始因唐顯慶年中、勅差衞尉寺承李義表前融州黃水令王玄策往西域、充使至毘耶黎城東北四里許、維摩居士宅示疾之室遺址疊石爲之、王策躬以手板縱橫量之、得十笏、故號方丈、）

〔萬葉集　五雜歌〕蓋聞、四生起滅、方夢皆空、三界漂流、喩環不息、所以維摩大士在乎方丈、有懷染疾之患、

〔元亨釋書 六淨禪〕釋榮朝粹密學、從建仁西公、稟宗門要旨、○中略寺傍民家望寺以爲失火、急奔入寺、見朝之坐丈室而化、

〔天下南禪寺記〕應永二十八年辛丑十月十九日、丈室重建舊址易地、

〔花洛名勝圖會 二〕知恩敎院

○本堂の後に在、大方丈。小方丈。略之、　佛間 阿彌陀佛の立像を安置す

〔新編相模國風土記稿 百三鎌倉郡〕清淨光寺

大方丈、○中略小方丈、

〔相國寺供養記〕排門 妙莊嚴域○中略

方丈

〔大燈國師行狀〕師諱妙超、○中略洗心子入室參禪造詣不淺、不勝崇信之至、施第宅而作大德方丈、今雲門庵是也、

僧堂

〔百丈淸規考證 上二ノ一〕廣堂　指僧堂也

〔景德傳燈錄 十四〕前石頭希遷法嗣

鄧州丹霞天然禪師、不知何許人也、初習儒學、將入長安應擧、方宿於逆旅、忽夢白光滿室、占者曰、解空之祥也、偶一禪客問曰、仁者何往、曰選官、何如選佛、曰選佛當往何所、禪客曰、今江西馬大師出世是選佛之場、仁者可往、遂直造江西、才見馬大師、以手托幞頭額、馬顧視良久曰、南嶽石頭是汝師也、遽抵南嶽、還以前意投之、石頭曰、著槽廠去、師禮謝入行者房、隨次執爨役、凡三年、忽一日石頭告衆曰、來日剗佛殿前草、至來日、大衆諸童行各備鍬钁剗草、獨師以盆盛水淨頭、於和尙前胡跪、石頭見而笑之、便與剃髮、又爲說戒法、師乃掩耳而出、

〔相國寺供養記〕僧堂 選佛場

食堂

〔山城名勝志九葛野郡〕天龍寺

選佛場僧堂

〔新編相模國風土記稿八十九鎌倉郡〕壽福寺

僧堂　選佛場ノ額アリシト云フ

〔倭名類聚抄十三伽藍具〕食堂　內典云、舍衛國祇陀園食堂、浴室無レ不二備足一、

〔箋注倭名類聚抄五伽藍具〕揚氏云、食堂僧食處也、寺炊爨處謂二之大衆屋一、本文未レ詳、按涅槃經師子吼品云、厨坊浴室洗脚之處、大小圊厠無レ不二備足一云々、至二舍衛國祇陀園林須達精舍一、此所レ引即其事、昌平本寺下有二中字一、

〔伊呂波字類抄志諸寺〕食堂在二諸寺一安二置文殊聖像一、

〔增補下學集上二家屋〕食堂

〔書言字考節用集二乾坤〕食堂又云庫裏

〔寂照堂谷響集三〕賓頭盧像安二食堂一緣

客問、賓頭盧翻名及安二食堂一因緣如何、答、賓頭盧具云二賓頭盧頗羅墮一、賓頭盧名、此云二不動一、頗羅墮姓此云二捷疾一、婆羅門十八姓之一也、食堂供レ之者、始因二道安法師一、高僧傳云、安常註二諸經一、乃誓曰、若所レ說不二甚遠一レ理、願見二瑞相一、乃夢見二梵僧一、頭白眉長、語レ安云、君所レ註合レ理、我當二相助弘通一、可二時々設一レ食、後十誦律至、遠公乃知二和尚所レ夢賓頭盧一也、於レ是立レ座飯レ之、處々成レ則、先レ此別施二空座一、前置二枕盞一、無レ安二聖像一、至二宋泰至末一、正勝寺僧法願、正喜寺僧法鏡等始圖レ形矣、

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕堂二口一口金堂二重（中略）一口食堂

〔文德實錄四〕仁壽二年三月丁丑、詔二諸大寺一、起二四月一日一迄二八月卅日一、衆僧食時同集二食堂一、各讀二大般若經一卷一、以救二水旱之災一、永爲二歲事一、

庫裏

〔續寶簡集二十二〕定置　金剛峯寺學侶一味契約之間事

條々（○中略）

一食堂再興事、此堂者、大師御在世之時、安御作之准胝尊、被行出家得度梵閤也、然間、御手印緣起（仁）被載之、加之御室高野御入供之御時、御參著之砌也、旁以規模之靈席也、爰以今爲滿寺一圓之沙汰、造立既及于過半畢、終功併奉任大師明神幷聖僧之護持處也、今安置之聖僧者、大聖文殊之尊容也、傳一乘一實之妙義、皆是尊之恩德也、修學鑽仰之輩、誰顯隨喜之色、不致終功之方便乎、又依食資身命者、如來之金言也、既是稱食堂、依造作之功、豈無壽域延算色力自在之德乎之事、（○中略）

永享四年九月十七日　會行事入寺寶算

〔運步色葉集〕（久）庫裡（寺）　庫司（ス司）

〔撮壤集上（寺院）〕庫裏

〔義楚六帖二十一（寺舍塔殿）〕廚　廚名香積（淨名取香積佛飯、因是得名、）

〔異制庭訓往來〕塔頭卵塔、庫裡、僧堂、東司、後架、方丈、（○下略）

〔山城名勝志十六（紀伊郡）〕東福寺

庫司（額香積院、無準筆、）

〔相國寺供養記〕庫院（香積院）

〔維摩詰所說經下（香積佛品十）〕於是舍利弗心念、日時欲至、此諸菩薩當於何食、時維摩詰、知其意而語言、佛說八解脫、仁者受行、豈雜欲食而聞法乎、若欲食者、且待須臾、當令汝得未曾有食、時維摩詰卽入三昧、以神通力、示諸大衆、上方界分過四十二恒河沙佛土、有國名衆香、佛號香積、今現在、其國香氣比於十方諸佛世界人天之香、最爲第一、（○中略）於是香積如來、以衆香鉢盛滿香飯、與化菩薩、（○中略）時化菩薩、以滿鉢香飯與維摩詰、飯香普熏毗耶離城及三千大千世界、時毗耶離婆羅門居士等聞

是香氣、身意快然歎、未曾有、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕大衆院屋一拾口

二口厨。　一口長十五丈、廣四丈二尺、
一口長五丈四尺、廣二丈、〇中略　已上並蓋瓦

〔永平元禪師淸規 乾〕典座敎訓

諸知事在庫堂、商量明日喫、甚味喫、甚菜、設甚粥等、

〔天下南禪寺記〕今山門僧堂庫院、並舊址而存、諸額於新基、

〔京城萬壽禪寺記〕同〇永享九年丁巳、〇中略法堂、僧堂、庫司、浴室、涸厠、翠臺諸寮等、次第備矣、

〔海人藻芥〕承仕法師者、〇中略御室ニハ不被許緣、只於厨所邊候、

〔異俗佛事編新譯一〕大黑天守寺食厨、緇天多キ中ニ、大黑天神、寺院ノ食厨ヲ守リ玉フ事ハ、義淨三藏南海寄歸傳ニ云、天竺諸大寺ニハ、成食厨ノ柱ノ側、或ハ庫ノ戸口ノ前ニ、木像長二三尺ノ神王アリ、座像ニシテ手ニ把金嚢、小牀ニ踞テ、一脚ヲ垂下セリ、毎ニ以油拭故ニ黑シ、故ニ號テ曰莫訶歌羅、此云大黑天神、即大黑天神ナリ、古ヨリ傳ヘテ、大天部ト云フ、三寶ヲ愛シ、護五衆使無損、願ヲ告セハ、必稱フ、毎食時ニ香火及飯食ヲ備フ、般彈那寺ハ、佛ノ大涅槃經ヲ說キ玉フ處ニシテ大寺ナリ、常ニ百餘人ノ僧アリ、食シテ、有時五百ノ僧遶ニ來テ、寄乞衆ト、ロリ無貯、正ニ日中ニ及テ、知事ノ人如何セント苦シム、而ルニ淨人ノ老母謂之曰、莫害我衛アリテ、香火飯食ヲ陳テ、大黑神ニ云、四方ノ僧、大聖涅槃ノ靈迹ヲ禮セントシテ飢ニ來レリ、幸タハ飲食供養不乏ヤウニ護リ玉ヘト云テ、寺ノ常食ヲ出シテ次第ニ行ケレハ、大衆成タ足食ノ長トコロ如平日、成皆讃大黑神之威力、世僧ノ評ニ曰、大黑說云、大己貴命ヲ大黑トモ云フ、袋ヲ負鼠ニ乘ツカヒ玉フコト、舊事紀古事記ニ載タリ、大己貴ス、故ニ大黑ハ天竺ノ神ニ非ズシテ、大己貴ノ像ナリ、此像ノ頭ニ被ルモノ、體ニ服スル衣、踏メル俵、皆吾國ノ俗ニシテ異域ニ非ズ、素ヨリ大己貴ハ地主神ニシテ福神ニ崇之ト云ヘリ、愚按ズルニ、石山口訣等ニハ、大黑天ノ像、寄歸傳ノ說ヲ取レリ、雖然權化ノ眞作ノ大黑天神ノ像、皆今ノ世ノ流布ノ像ニ同ジ、是ハ又據ドコロ有ルベシ、就中明師尊ヌベシ、大日經疏等ニ出ヅル大黑天神ハ、今ノ食厨ノ守護神トハ異ナリ、新譯仁王經護國品第五、摩訶迦羅大黑天神、青龍疏闘戰神也、觀自在三世最勝一心明王儀軌注曰、大黑天、披象皮、橫把一棒、一頭穿人頭、一頭穿羊、

〔本朝高僧傳淨禪二十三〕京兆東福寺沙門琛海傳

釋琛海、字月船、〇中略武州大守平氏、創東永精舍、聘海爲開山祖、〇中略一時逢歉歲、會衆闕糧、有一冠人、面黑身矮、謁河越檀氏曰、吾長榮和尙使也、平氏曰、有何所示、冠人曰、今年米價翔貴、寺厨乏糧、衆

政所
綱所

將他往、檀越豈無意耶、平氏諾之、冠人謝曰、善哉檀越、謹領尊旨、平氏卽施送米百斛、一乘贍足僉謂冠人乃本寺所供之大黑神也、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕板葺漆間政所廳屋一字高九尺、長六丈三尺、廣一丈五尺、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕大衆院屋一拾口、〇中略

貳口政屋、〇〇一口、長七丈、廣三丈二尺、一口、長六丈八尺、廣一丈八尺、　已上並蓋瓦

〔源平盛衰記四〕白山神輿登山事

白山中宮大衆政所返牒留主所衙〇中略

延曆寺政所下　加賀馬場先達神人等〇下略

〔左經記〕長元四年十二月廿八日辛未、少納言相共向綱所、〇〇綱所屋頗倒、仍口平帳、立兀子、爲上座、南面、

〔塵袋抄九〕諸門跡ニ、人ノ差寄所ヲカウ所ト云ハ、綱所ト書也、綱所ノ伺候スル所ナル故也、但ナベテ非可云、依所依門主、頗可有故實也、僧綱ノ不伺候所只對面所ナンド可云ト云々、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕勘錄大安寺資財知行之事〇中略

右以去天平十八年十月十四日被僧綱所牒偁、左大臣宣、奉勅、大安寺緣起幷流記資財物等、子細勘錄早可言上者、謹依牒旨勘錄如前、今具事狀謹以言上、

天平十九年二月十一日　都維那僧靈仁

寺主法師敎義

上座法師尊耀

僧綱所

左大臣宣偁、大安寺緣起幷流記資財帳一通、綱所押署下於寺家、立爲恒式、以傳遠代者、〇中略

天平廿年六月十七日　佐官業了僧願淸

門

大僧都法印行信　佐官藥師寺主師位僧勝福略○下

○按ズルニ、綱所ノコトハ、僧官篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔下學集上家屋〕大門　樓門

〔撮壤集上寺院〕總門　山門

〔書言字考節用集二乾坤〕三門正曰三解脱門、略云三門、俗或作山門、事見智度論、法界次第、

〔釋氏要覽上住處〕寺院三門凡寺院有開三門者、只有一門、亦呼爲三門者何也、佛地論云、大宮殿、三解脱門爲所入處、大宮殿喩法空涅槃也、三解脱門謂空門無相門無作門、今寺院是持戒修道、求至涅槃人居之、故由三門入也、

〔通俗編二十四居處〕三門　釋氏要覽、寺宇開三門者、佛地論云、謂空門、無相門、無作門、按作山門者據此爲訛、然山門亦自有出、高僧傳支遁于石城山、立棲光寺、宴坐山門、遊心禪苑、

〔廣隆寺來由記〕總門一字

金剛力士像各一軀立像高一丈一尺、鞍作鳥作、　額一箇　廣隆之寺古文字、太子染筆、

中門一字　多門天、持國天等像、立像各高一丈二尺　八大夜叉像

〔江戸名所圖會十六〕圓滿山廣德寺

當寺の總門は、名匠の差圖にして、是迄、風火の難度々にをよぶといへども、恙なし、最番匠の規矩とする所なり、

〔天下南禪寺記〕文和天子○後光嚴院新立山門、曰瑞龍山太平興國南禪々寺、

〔天龍寺供養記〕於總門前下車、○中略入山門、○中略直參堂前座、以佛殿之左廊西端爲御所、

〔法勝寺供養記〕西大門內北脇立五間幄、○中略南大門外西脇立五間幄、

〔大和名所圖會一添上郡〕東大寺

轉礙門は、東大寺西北の總門をいふ、俗に景清門ともいふ、○中略建久六年三月、大佛供養の日、惡七

兵衛景淸、此門に隱れ、將軍賴朝公を窺ふ、秩父重忠かれが異相を察し、景淸を捕へしむ、是俗說妄誕なり、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合門玖口、佛門二口、在神王金剛力士、梵王、帝釋、婆斯匿王、毗婆娑羅王形、僧門七口、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕門伍口佛門二口之中、一口在金剛力士、(中略)僧門三口、

○按ズルニ、法隆寺金堂及ビ塔ノ前ニアル門ハ、今中門ト呼ベリ、卽チ此ニ謂フ所ノ佛門ノ一カ、

〔東大寺要錄四〕一南中門

延喜二年壬戌、聖寶僧正造中門供養、

〔雜談集五〕寺門ノ金剛ノ事

諸寺ニ、二王ヲ立ル事、重々ノ習ヒ有之、一リノ金剛ハ口ヲ開キ、一リノ金剛ハ口ヲ閉ヅ、童部ノ說ニハ、近江ノミヅウミヲ吸ホサムトテ、口ヲ開キ王ヘバ、一人ウト云テ口ヲ閉ト、コレ最下ノ法門ナリ、マコトニ童部ノ說ナリ、高野ノ明遍僧都ノ談義ノ時、夏ノ事ニテ、雷電ヲビタヾシクシケリ、電光ノコトヲ、サシモノ多聞廣學ノ智者不知、電光ノ事未見及ト被申ケレバ、或愚癡ノ古老僧、アレハ龍王ノ目タヽキノ時ノ光ナリト申ニ、イミジク知リ給ヘリ、本說何ニ候ゾト問ハレケレバ、童部ノ說ナリト申ケル、時ノ人興ニ入ニケリ、

悉曇ノ習ヒニハ、刧盡ノ時、梵王諸字ヲ呑失フニ、阿吽ノ二字左右ノ口脇ニトヾマリテ不失、此事ニ付テ密敎ノ甚深ノ法門有之、不及記之、眞言師ハ可知、都テ陰陽兩部ノ法門ノ下地ナリ、

淺略ノ義ニハ、昔シ千人王子皆預常作佛ノ記テ、九百九十八人ノ王子劫國、名號等アリケルニ、末子二人誓ヒテ云ク、兄ノ王子成佛シテ遺像ノ寺有ラン時、我等二人ハ寺ノ門ニ立テ、金剛ノ形ニテ守護トシテ、佛ノ化儀ヲタスケタテマツルベシ、コレ經ノ說ナリ、

弘法大師渡唐シテ、惠果大師ニ、種々ノ不審トヒ申シ給フ中ニ、寺門ニ金剛ヲ立ルコトハ、イカナル表示ゾヤト、答云、佛ハ理ナリ、金剛ハ智ナリ、智ヨリ理ニ入ル表示ナリト、コレメデタキ法門ナリ、秘藏記ニ有之、論ニ云ク、佛法ノ大海ハ、信ヲ以テ入リ、智ヲ以テ渡ル、智ナクバ、生死不可出者也、智ハ般若ノ體、若シ無之バ、全ク同畜類也、人身ウケタル益アラジ、般若ニ體用アリ、正體智ハ體ナリ、無心無相ナリ、後得智ハ用ナリ、大悲ノ化他ノ分別、俗諦ノ差別ノ法、幻化ナレドモ、是非簡擇捨劣顯勝シテ、生死流轉ノ業行ヲステヽ、涅槃常住ノ業因ヲ、三業相應シテ、朝夕心ニ染テ熏習スベシ、世間ノ愚鈍ノトモガラノ、菽麥ヲワキマヘザルヲ、イヤシキ事ニ思ヘルゴトク、生死涅槃ノ二事ニ無分別、無厭欣、イカデカ反本還源哉、佛法ニ入レルスガタ、世事ヲワスレテ、佛行ヲ愛スベシ、世間ノ才學多聞智解、コレヲウチステヽ、沙門ノ行儀尤可愛之、

〔四經儀集註半字談　四〕密迹金剛（此ガ當時寺門ニ安置スル二王ナリ、經說ハ一體ナレドモ、今二體ニ造ルハ、一方ニテハ、見分惡シキ故、二體ニ造ル歟、）

〔秘藏記〕所以諸寺門造立金剛形像如何、答、金剛者智也、此智摧滅煩惱矣、此亦恐違經文、不用、只是守護寺院安置佛之敎法耳、例如神前立帶弓箭衞護神也、

〔東寶記　一〕一南大門（二階樓門、東西五間、南北二間、○中略）

一寺門安置金剛力士像事　東（開口像）名金剛、西（閉口像）名力士、　天王寺太子御手印緣起云、二重中門。

一宇、（瓦葺五間）金剛像、力士像云々、（○中略）

一中門（東西五間、南北二間、○中略）

寺門安置二天像事

理明房興然記云、諸寺門安二天事、不空羂索自在王呪經下云、壇東門外盡二天王守護、其門左邊應作持國天王、右邊應作增長天王、俱被衣甲、器仗嚴淨作瞋怒面、眼光赤色、持國天王以手執劍、增長天王以手執矛云々、

〔伊呂波字類抄 久諸寺〕元興寺(中略)本元興寺、四面有額云々

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕豐浦寺 名本元興寺、在大野丘之北、(中略)

四門有額。元興寺 南額 法滿寺 北 飛鳥寺 東 法興寺 西

〔續日本紀 七 元正〕靈龜二年五月庚寅、詔曰、(中略)今聞、諸國寺家多不如法、或草堂始闢、爭求額題、幢幡僅施、即訴田畝、(中略)自今以後嚴加禁斷、(又見藤原家傳)

〔舊五代史 百十五 周書六 世宗紀二〕顯德二年五月甲戌詔曰、釋氏眞宗、聖人妙道、助世勸善、其利甚優、前代以來累有條貫、近年已降頗紊規繩、近覽諸州奏聞、繼有緇徒犯法、蓋無科禁、遂至尤違、私度僧尼日增猥雜、刱修寺院、漸至繁多、鄉村之中其弊轉甚、漏網背軍之輩、苟剃削以逃刑、行姦爲盜之徒、託住持而隱惡、將隆敎法、須辨否臧、宜擧舊章、用革前弊、諸道府州縣鎭村坊應有勅額寺院、一切仍舊、其無勅額者、並仰停廢、所有功德佛像、及僧尼並騰併于合留寺院內安置、天下諸縣城郭內若無勅額寺院、祇于合停廢寺院內、選功德屋宇最多者、或寺院僧尼各留一所、若無尼住、祇留僧寺院一所、諸軍鎭坊郭及二百戶已上者、亦依諸縣例指揮、如邊遠州郡、無勅額寺院處、于停廢寺院內僧尼各留兩所、今後並不得刱造寺院蘭若、王公戚里諸道節刺已下、今後不得奏請刱造寺院、及請開置戒壇、男子女子如有志願出家者、並取父母祖父母處分、(中略)準格律處分、每年造僧帳兩本、其一本奏聞、一本申祠部、逐年四月十五日後、勒諸縣取索管界寺院僧尼數目申州、州司攢帳至五月終已前、文帳到京、僧尼籍帳內無名者並勒還俗、其巡禮行脚出入往來、一切取便、

〔扶桑略記 抜萃 聖武〕天平十八年、或記云、同年七月、天竺婆羅門僧菩提始來本朝、(中略)菩提入洛、詣東大寺、天皇感欲、賜食封戶、勅令巡禮諸寺、至大安寺東僧坊南端小子坊留住、後尋處給官額、曰菩提僧正院、已上、

〔三代實錄 十四 淸和〕貞觀九年五月十九日丁巳、大納言正三位平朝臣高棟卒、高棟者、桓武天皇孫、而一品

葛原親王之長子也、○中略晚年、栖心釋敎、誦讀佛經、嘗以山城國葛野郡別墅爲道場、詔賜額曰平等寺、

〔碧山日錄〕長祿三年五月八日己丑、寺之南麓有蓮社之侶、所居頗有風致、晚與最勝翁過從而遊、又詣稻荷之神祠、迂路問祐西堂於成就院、對床談咲、予素聽寺之額空海之所書、有此乎、祐說其所由曰、空海曾於此地精修勤劬、殊誦求聞持之呪、其行成之時、大悅以書大成就院之字、揭于楣、其字年久廢圮、無修之者、遂成丘墟、吾師菊莊知此地甚靈、屛居禪宴、而地高壖無水、只覓稻嶺之池水而已、師見西北之隙地、有古井、改鑿之、深纔尺餘、而淸泉騰涌、而得一板、徑一尺、長二尺、泥土塗漫、師怪而洗之、有大成就院之字、其角有四天之像、如顯然而新畫、蓋空海之涌呪取閼伽水於此井、後人以空海之意沈額於此乎也、師乃掛之於門、見者爲奇、一日悅惚之間失之、不知何人偸之、師乃徒弟、嘆惜不能無遺意矣、十數日後、有一樵人來曰、木幡山趾有一物、夜々發光、視者慴怖而過、師疑此而往視之、此額果委草萊之中、師喜而携回、後傳曰、紀州高野之僧某取此竊逃、欲以爲山之重鎭、竟至木幡山、其重如盤石、不擧、故弃之去云、祐乃開其寶殿而出之、字劃彰々、如掛鐵鉤、寔法社之靈貨也、祐又曰、罹風癘寒瘧之者、洗此字而以飮之、鬼祟忽解去、日夜來覓之者相繼不絕也、童行苦厥擧止、近歲密襲而不出也、日錄曰、凡以先人之言行刊于碑碣、欲其不朽也、若飾善行於不德、而以取一時之悅者、雖誌之於千萬石、不日而磨滅、銷缺、烏乎、空海之去、殆垂一千年、而雖此額子淪於古井、土蝕水嚙、字劃愈炳如也、有德者其如此乎、後者思之、

〔靈源寺文書〕近衞右大臣基熙公具狀之寫

抑靈源法常兩禪寺者、一絲道人之開基也、太上法皇○後水尾辱賜勅額於兩寺、加之別染神翰一通、以被收靈源寺、可謂勝緣矣、偏是欲令慕先師之法理、永不斷滅彼道叡信也、然則二寺僧徒及檀越等、各任宸筆之旨、和順而慇懃可挑先師之法燈者、奉謝佛法王道之洪恩、其信實何事加之哉、一日管覽之次、爲後證染禿毫者也、

右大臣基熙

寛文十三年三月廿一日

靈源寺祖岸丈室

〔堯恕法親王記 十〕寛文十二年十月二十日(四賀茂)靈源寺者、一絲和尚へ、法皇(○後水尾)ヨリ給之寺也、彼庵破壞之間、當年春夏之間、從法皇御建立也、元靈源庵ト號ス、今度御建立之後、賜靈源寺額(法皇勅額)、今日件ノ御禮として、當住祖岸、於青蓮院宮里坊、御膳進上、予右大臣殿等伺公、入夜退出、(祖岸者、基熙猶弟、基音猶子也、)

〔知恩院起立書上〕京知恩院

知恩院ハ、法然上人、四十三歳、承安五年、淨土宗を開宗し、念佛弘通の庵室なり、然るに、上人滅後文暦年中、遺弟勢觀房源智、右の舊坊再興の願ありて、奏聞を遂ければ、四條院叡感御し、本堂に大谷寺、上人廟堂に知恩敎院、總門に華頂山、右三所に勅額を賜ふ、然るに應仁年中兵火、及永正年中一山火災の節、三所額燒失す、享祿年中、後奈良院重て賜之、今の大谷寺知恩敎院の勅額是なり、寶永八年、靈元法皇宸翰華頂山の額を賜ふ、今の三門の額是なり、

〔百一錄〕元祿十一年八月十三日、東叡山中堂藥師堂御供養、御奉行家公(○日野)御下向、(○中略)中堂勅額瑠璃殿勅額江府下向、其重不堪一牛力、人夫或六七十人、或百人持之運送、九月六日著府、同日スキヤ橋より失火、(○中略)東叡山數字燒失、

〔泰平年表 常憲院〕元祿十一年九月、東叡山根本中堂、及文殊樓新營成、同六日上野嚴有院殿御廟炎上、(此日中堂瑠璃殿の勅額下向、朝四つ時新橋南鍋町より出火、千住掃部宿に至る、是を勅額火事といふ、)

〔半日閑話 六〕一上野執當佛頂院、願王院より、寺社奉行衆へ差上候由、御別當龍光院差越候書付寫、

日光御靈屋二天御門内、勅額下ゲ之義、深秘職人に無之候而は難相成趣、御別當より申越候ニ付、先達而申上候處、安永五年、上野中堂、其外三ケ所共、勅額有之、御修覆中、御作事方ニ而、御修覆も出

來候樣に相聞候へバ、此度之義も右ニ准じ御作事方之取計に相成、差支有間敷哉之旨、御尋ニ付申上候、中堂勅額等ハ、此迄も深秘職之持場ニハ無御座候、從來御靈屋御額ハ、深秘職之外、爲取計候例無御座候由ニ承知仕候、然バ御門主思召をも奉伺候上、決斷可申上と存、御內々入御聽ニ候處、勅額ハ御同樣ニ而も、其意味輕重不同と被仰候、其譯ハ、中堂勅額ハ、佛法有驗之瑠璃殿之文字、御宸筆ニ候間、廣く崇之候者、國和之總道ニ而、御靈屋御額、國禮之別道ニ候、然バ末々之者に至る迄、國禮之別道に候處之勅號宸筆を奉崇敬之志ハ直に御威光を奉挑之道理、古來深秘御備被立置候一條ニ候得バ、御別當より申越候段、其筈之事ニ思召候、但此度、勅額御修覆と申候ニハ無之候間、御作事方取計差支有之間敷哉との趣意ハ、格別の權道、有其謂樣にも被聞召候、總而上智之權道必下愚之流弊と相成候はんも無覺束候條、其處の入念候バ、御差圖次第之義と思召候、此段申進候、

十月　　兩院

〔寺社法則上〕文化十四丑二月三日　　進達留

勅額之儀ニ付、上野執當相尋候趣申上候書付、

勅額掛候ニ不及、其外ハ可爲書面之通旨、執當へ可申渡段、　　阿部備中守

此度

有德院樣〇德川吉宗浚明院樣〇德川家治孝恭院樣〇德川家治長子家基勅額御出來之御儀ニ候ハヾ、別紙之通一旦御門江被爲掛候上御寶藏江納置被成可然義ニ思召候、尤就右、別段御供養等之儀ニハ及申間敷樣ニ御門主思召候、依之申上候

芝方

惇信院樣〇德川家重勅額來候事　以上勅額四枚也〇中略

同〔文化八年〕五ノ廿三　同斷〔留〇同合之內〕　細川越中守家來ゟ

一上野、增上寺火之御番中、萬一御近火之節、勅額卸之儀、安永年中、土岐美濃守樣へ奉伺、其後天明年中堀田相模守樣へ猶又奉伺候、差圖之趣、別紙之通御座候、依之其以來、右之通相心得罷在候、御額卸之儀、此方ニて取扱申儀ニ御座候得バ、兼て御額釣り樣之仕法も見分、其程ニ應じ、卸候道具之手當も仕置申儀ニ御座候ニ付、其段も右之節相伺候處、兼而見分仕置候ニも不及、火之御番之方不念之筋ニも不相成段、別紙之通御座候間、釣り樣之仕法も不相分候へバ、勿論道具等手當も出來兼候ニ付、其用意も仕置不申、尤人數之儀ハ、火消人數之內、其節之模樣ニ寄、差出申事ニ而可有御座候、右之趣、年久敷儀ニ付、猶又奉伺候也、

書面之趣、當時迚も振候儀無之候、

別紙

上野、增上寺火之御番之節、勅額卸之儀ニ付、左之通之書付を以、土岐美濃守樣へ、安永八年六月八日相伺申候事、〔中略〇〕

一勅額之儀ニ候得バ、御別當之方ニて可取計事ニ候得共、高ミニ付、火之御番之方ニは、高ミニても働致し附候者も有之候間、寺社奉行ゟ申談爲下候儀ハ、其時宜ニ隨ひ御取計に候、

一御額持退之儀、御案御同樣、寺社奉行守護致候義ニ付、火之御番之方ニて、持退之人數別段用意ニ不及、時宜ニ寄り、御人數之內を相用候義も可有之候、

一御藏入有之候御額、御別當ゟ持退之儀申候とも、御別當ゟ之對談ニ而ハ難被成旨、御挨拶可有之方と存候、

一御額掛り居候所、下之候節之爲御心得、兼て見分之義ハ、前書之趣ニ付、及間敷候、

右御答左之通〔中略〇〕

雜載

一勅額下之儀、寺社奉行ゟ御談申候事ニ候得ハ、火之御番之御方御不念と申筋ニハ無之候、

一二天門ゟ内へ人數繰入之儀ハ、御案御動座無之候テも繰入申候、御案御動座無之内ハ、御靈屋御屋根上江ハ人數上不申候、右勅額下之儀ニ付、御同席ゟ御問合有之候ハヾ、前書之趣御挨拶不苦候、右勅額下之一件、此扣之通、土岐美濃守樣御在勤中、御差圖相濟候得共、夫ゟ年隔候事故、若や御振り違候事も難計、天明六午十二月、此一件帳面ニ寫、此節寺社奉行堀田相模守樣へ尙又相伺候處、勅額下之一件、先年土岐樣ゟ御差圖被成候通り、當時迚モ相替儀無之旨、尤此趣御同役樣方へも御廻し被成候處、御同役樣方之御扣ニも少も振候義無之由、小林典膳を以、去暮差置候帳ニ御付札ヲ以被仰聞候、

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十八年九月戊寅、恭仁宮大極殿施入國分寺、

〔扶桑略記 拔萃 淳仁〕天平寶字三年八月三日、大唐鑑眞和尙、奉爲聖武皇帝招提寺所創建也、〇中略講堂一字〇平城朝集堂施入也、安置丈六彌勒像脇侍菩薩像、

〔續日本紀 十五 聖武〕天平十六年十月辛卯、律師道慈法師卒、天平元年爲律師法師、俗姓額田氏、添下郡人也、性聰悟、爲衆所推、大寶元年隨使入唐、渉覽經典、尤精三論、〇中略遷造大安寺於平城、勅法師勾當其事、法師尤妙工巧、構作形製皆稟其規模、所有匠手莫不歎服焉、卒時年七十有餘、

〔海人藻芥〕諸山寺ノ坊舍ノ作樣、多分寢殿ハ板屋作リニテ、中門廊有之、對屋ハモロハヤ也、但高野山ニハ、檜皮屋ノ坊舍少々有之、度々御幸ナラシメ給フ謂レト云々、近年サリヌベキ諸院家ニモロハヤノ對屋有之歟、無下ニ見苦キ者也、

〔寺社法則 下〕文化十四丑年四月　靑山石之助

一書面安養寺玄關、先規之通、唐破風造建替之義、古來之泰平塚、桁、臂木等相殘有之、證據分明之上ハ、願之通御聞届不苦筋ト存候、

學寮

學寮ハ、僧侶修學ノ所ニシテ、後世檀林又ハ檀所等トモ呼ベリ、古クハ東大寺、延暦寺、金剛峯寺等ハ、僧侶修學ノ道場トシテ頗ル盛大ヲ極メタルモノナリシガ德川幕府時代ニ至リテハ、眞言宗ノ長谷寺及ビ智積院、淨土宗ノ增上寺、曹洞宗ノ吉祥寺、眞宗ノ兩本願寺ノ如キモ亦各、學寮ヲ設ケテ、常ニ盛ンニ其徒ヲ敎授シタリ、而シテ多クハ、一宗一派ノ徒ノミヲ會聚スルヲ例トスレドモ、時ニ或ハ他宗ノ僧ノ來學ヲ許セルモナキニアラズ、又會下、會下寺、江湖等ノ稱アリ、專ラ禪宗淨土宗等ニテ唱フル所ニシテ、會下トハ一師ノ下ニ會集シテ、學ブヲ謂ヒ、江湖トハ一時四方ヨリ集リテ互ニ研學スルヲ謂フ、

名稱

〔書言字考節用集 乾坤一〕學寮(カクレウ)

〔釋氏要覽 下說聽〕學肆 肆者、所以陳貨鬻之物也、因後漢張楷字公超學徒隨之所居成市、故今學處稱學肆焉、

〔書言字考節用集 乾坤一〕檀林(ダンリン) 又云、叢林、活法、僧林也、

〔元亨釋書便蒙 八〕檀林 檀林者、衆寮名、所謂檀林無雜樹、鬱密森沈、師子住之譬也、又法海經一曰、此如來之座、清淨道德者之所集、猶如旃檀之林、

諸宗學寮

〔東大寺要錄 五〕一諸宗事

方今聖皇聖武建立伽藍、集其學徒、傾捨戸邑、宛其供料、所以學侶修習無弃寸陰、僧衆集住不倦寒暑、三面僧房諸宗並窻、小乘大乘鑽仰既舊、四方禪院衆逵連樞、半字滿字翫味彌新、花嚴、三論各談五敎八不之理、天台、法相手演四敎三時之義、眞言、戒律能修三密五篇之行、成實、倶舍妙弘三藏四舍之敎、紹隆之業於茲盛矣、寺家之務其爲事了、

〔叡岳要記 下〕勸學堂、

院(四方院)源座主、依度々說法賞、賜封戶、宛住山修學者、丈六阿彌陀事、被移安置丈六堂本尊也、

〔與福寺濫觴記〕諸堂建立之次第(○中略)

勸學院　人皇九十代後宇多院御宇御願、弘安甲申年御建立、爾今不退之勤行所也、人王百十代明正院御宇寬永十九年十一月廿七日炎上、其後造立、(今堂者、慶安二己丑年造立、)

本尊　大聖文殊幷

〔江戶砂子(三上野)〕東叡山寬永寺圓頓院

學寮　俗に百間長屋と云、當山の檀所なり、

〔諸宗階級〕天台宗僧徒經歷昇進衣體之事

東叡山學校所化昇進之次第

一學校初入之儀ハ、關東十箇之檀林經歷之上、七八年以上之勤功ニ而、補任添簡を以、學寮伴頭も相願候得バ、著帳申付、尤檀林之經歷無之小僧々、卿名にて著帳仕候者ハ、五六年之經歷ニ而、學頭凌雲院ニ而入講爲相勤、其後出勤之次第等左之通、

一寄宿所化之儀ハ、東寮不仕、一山其外寺々ニ住居仕候、

一二季之所化人數不定

一常住之所化人數不定

右二季之所化と申候ハ、春秋二季之內、勝手次第、每年一度宛學校江相詰、相勤候事ニ御座候、

一常住之所化と申候ハ、右二季ニ而、兩三年も相勤候得バ、常住入申付、每月朔日十七日之內番割ニ而、論義ニ相勤、幷春秋兩度講釋之內、再釋會讀等も、器量之淺深ニ而常住人々、四五年目ニ長論義之初講申付、五六年も相勤候得者、長論義之再講申付、其後三四年過ギ候而、長始問答講師申付候次第ニ御座候、尤右之內、覺帳後年數計ニ而、學校勤方之經歷一向無之者ハ、最初之二季、

常住之儘にて罷在候、

一前座十人

右夏始之講師相勤候上、格別ニ出精仕候所化相撰、前座役江昇進何レ之書ニ而も、講釋三座爲相勤、伴頭十老幷總所化迄聽聞爲致、三伴頭ゟ學頭凌雲院江伺之上、前座役申付座順ニ而、一日一夜、一句問答講師爲相勤候、

一十老十人

右闕役之節、前座之内ゟ相撰、三伴頭ゟ學頭凌雲院江申出候上昇進申付、其組之所化を預置候而、論義幷再釋總而所化之勤方等吟味爲致、兩大會講師一日一夜宛兩度爲相勤、其上座順ニ而、何レ之書ニ而も、學頭凌雲院伺之上、於講堂講釋仕候、

一隅寮壹人

右十老役經歷之間、所化誘引之致方、幷講釋之勤方等ニ而、伴頭、十老十三人、學頭凌雲院、於佛前選擧之名前を行籌ニ仕、封候而、凌雲院江差出凌雲院より執當江差出、凌雲院執當兩人立合、御門主於御前開封之上入札多者江右隅寮役被仰付候段、凌雲院より申渡之、尤別席之論義被仰付候節ニ講師役相勤候

一伴頭三人

右闕役之節、隅寮役、御本坊江被召、凌雲院執當立合之上、伴頭役被仰付候間、執當申渡之候、右伴頭ニ相進候得バ、一山交衆座居被仰付候、右三伴頭之儀、學寮總而之支配仕年數相立候上、田舍寺本寺席、相應之寺院住職被仰付檀林之寺院明キ候節は、御撰之上、順次ニ移轉被仰付候、尤一門、交衆、弟子、所化、學寮、十老、伴頭、右何レも田舍相應之寺院被仰付候、已後檀林江昇進仕候事ハ右之内ゟ御撰之上檀林江罷出候、檀林ゟ田舍僧正寺江轉住之義、是又右之次第ニ御座候、〇中略

享和二戌年三月

上野執當　住心院

圓覺院

〔權僧正良運傳〕師諱良運、字自證、號月心、常州鹿島郡鉾田鄕人也、〇中略慶安元年戊子四月八日、投鄕之三光院良賢薙髮、時年十四、四年辛卯、詣州之月山寺、度年苦學、初望法席、慧解如成人、尋遊於總野兩州致覺、研習討論、汲々不疲懈、承應三年、武城之慈海、諱宗順、名於强識、著探指鈔十八卷、後主東叡之學席、任大僧正、開講法華疏於野州宗光寺、師移錫聽受、數諮問所疑、講主歎曰、此人他日荷負宗教矣、〇中略延寶二年甲寅、奉命移住武州金鑽山、時年四十嫡弟良諶、嗣拜本住院住職、師賚同拜賀、人以爲榮也、〇中略八年庚申、募緣檀助、造建本堂、摸擬本山之三塔、彫立釋迦、彌陀、藥師三佛、從前年開創常念佛會於此、以爲常行不退道場、當寺、本東關三談場之一、而爲僧正室、仙波星野山、長沼宗光寺、並金鑽山、此往古三談所、後加五爲八場、最時、以無主學席者、廢安居之規矩久矣、由之漸失三教庠名、師數上表牒、訴復舊規、志願彌固、累藏不已、法王東叡第四世解脫院宮憫其興廢悃誠、弘法恢志、貞享元年甲子十月、賜復三談場之舊貫許狀、並中興之褒書、於是告乎四方、招集學徒、定冬夏之規矩、立安居之制度、未幾教覺之隆盛、殆勝於他叢林矣、〇中略元祿四辛未夏四月、奉命、東叡第五世大明院宮轉任宗光寺、任權僧正、時年七十五秋八月、應令旨、講始終心要於殿中、法王臨席、合山徒衆會列聽受、師初開講於叡岳、來至於此三十餘年、聯縣講授、一誘學徒、聲譽不止、鳴於台宗、令聞徧達他家、遠近仰慕、徒衆輻湊、十年丁丑、奉長樂寺轉住命、五月十五日入院開堂焉、時年六十三〇中略十二年己卯、有吉田山談所開基命、賜加補院室維摩院號、兼兩寺住職、時年六十五凡東關八談場學徒、受臈定級之處、而新加其席爲固難矣、職由因國主水戸大君西山公諱光圀、字子龍、西山所退居地名、諡義公、懇誠之需、所容許也、大君感歎無涯、修營院宇、經始學校、復言法王請師開基

〔古今制度集二〕東寺諸法度　制法〇中略

一觀智院者、一宗之勸學院也、彼經藏諸聖經無類本儀大切也、不殘一冊以目錄令寫之、納于高野山

青巖寺之經藏、學者之用ニ立ベキ事、

一可ㇾ立二古跡之學室一專修學事

右東寺醍醐眞言教相之所學及二退轉一之由、甚以油斷也、至下于無二學問一者上、寺領之所帶不ㇾ可ㇾ叶、早速可ㇾ修二學興行一者也、

慶長十四年八月十八日

〔紀伊國續風土記 五十二 高野山 二〕勸學院○中略

當院ハ、衆徒勸學の道場なり、弘安四年、北條相模守時宗建立にして、記文を置きて、金剛三昧院を管領とす、其文に載す、

一勸學院可ㇾ爲二管領一子細事、右勸學院者、三寶惠命久續二龍華之三會一、四智法水廣流二天下四海一、且爲ㇾ報二佛祖弘恩一、且爲ㇾ興二菩薩門葉一、此偏佛祖興法素意、菩薩在定本誓也、是以安二置二十五之結衆一、傳二學三十七之秘敎於有心人一、誰不ㇾ同ㇾ心耶、依ㇾ之於二當院敷地一者、依二興法隨喜之志一、寺家彰二永施之書一、至二學人止住一者、住二未來安泰之念一、衆徒出二起請之狀一、然則一山同任二擁護之誓願一、諸人專運二勸助之忠勤一、先叶二高祖本懷之濫觴一、後成二諸佛大願之計略一也、若管領之仁住二名利一者、弘通之願必廢退歟、爲二當院之沙汰一、永可ㇾ致二學衆之扶持一矣、○中略　弘安四年辛巳三月廿一日、相模守平朝臣、

金剛三昧院ハ、鎌倉殿祈願寺にして、十萬餘石の莊園を領す、故に寺家より、勸學院の敷地を附して、學徒を扶持せしむ、其後、文保二年、後宇多法皇、院宣を賜ひ、勅願の會場とし、肥後國岳年田莊を修理料に賜ふ、其院宣左に書す、

高野勸學院、可ㇾ爲二御願所一事、右尋二勸學院建立有緣之子細一、在二高野山結界無漏之聖跡一、則爲二眞言法門事相敎相之談義所一、專擬二我后聖朝安穩安全之勅願寺一、○中略　院宣如ㇾ此、悉ㇾ之云々、文保二年九月廿九日、

〔大和志 城上郡 十二〕初瀨寺。初瀨村(中略)于院十二區、四來僧徒寓居之處、謂之學寮、每寮數十楹、其會衆之處、謂之勸學院、論義決擇、日夕唯務、

〔和漢三才圖會 山城 七十二末〕智積院。(中略)東照宮憐權師一流絕、擇殘僧中俊哲者二人、一遣長谷寺小池房、一住于當寺、令新義派再興、而祥雲院遷于妙心寺、改爲智積院、如今覺鑁新義學寮所化寓僧每滿七百有餘、

〔京都御役所向大概覺書 四〕御朱印傳文言之事

當院領、山城國宇治郡大鳳寺村五百石事、全可收納、并寺屋敷境內前々所化屋鋪二箇所山林竹木諸役等免除、任元和五年九月十五日、寬永十年四月十八日、寬文五年七月十一日先判之旨、永不可有相違者、可抽國家安全之懇祈者也、仍如件、

貞享二年六月十一日 智積院

御朱印

〔元亨釋書 八 淨禪〕釋祖圓、信州人也、號規庵、幼歲投相之淨妙寺出家、(中略)初佛心領龍山、宮殿樓臺未有梵製、及圓一新、大殿、法堂、雲堂、庫院、山門、檀林、凡叢林當有者、具體而成、正和二年春寢病、(下略)

〔三緣山志 七〕學寮

寮は庵也、草を以て圓座を作り、自ら棲をいふ、西天の僧俗修行して多く庵に居す、唯釋氏のみ居捿するにあらず、晉に陶琰(晉書)あり、又陶潛(逸民傳)士焦光(神仙傳)も茲に居れり、今佛門の中、諸宗みな此規あり、我蓮門學則の寮、由來既に久し、廓壁上人(安樂集疏新講義下)云、淨家學寮、往古了譽上人、於常福寺而創置、祐崇和尙於光明寺而興隆、二俱爲四方雲集寓舍研學而已、此時より先なきにたれ共、記主禪師の座下、六派を魁首とし、緇徒受訓の時、みな草庵を結び、朝暮錬綜せしこと、光明寺記にみへたり、其頃禪家繁榮たりしかば、化風ありしにや、されば、問公はまつたく他に(光明寺ばかりなりしを、東關の地外に移されし也、)ひらくのはじめ、崇師は光明寺に再興ありしこと、しらる、其後諸談所に是を置、中にも

横會根、生實、小金、鴻巣、專ら盛なり、元龜天正の頃、川越蓮馨寺にては、滿巖（岩付淨國寺開祖）全樹（小金東漸寺二世）幡隨（江戸幡隨院、館林善導寺開山）、存應（觀智國師）も寓寮あり、我緣山には、開山上人是を定規し、音譽公の時、再び備足し、法門あり、爾來相繼て、諸國の緇徒僑寓せり、中興國師の代にいたりては、宗徒悉く輻輳し、他の檀林と合數すべし、慶長寬永に日を追て盛隆し、既に承應の山記に百二十餘宇とあり、或は大或は小、疆界を定め、門戶を別ち、主僧の名を標札して、別に寮名をたてず、これ智豐の寮などに異にして、曹洞の則に準せるににたり、（智積院、初瀨何れも寮を長屋につくり、觀覺の寮、藤松の寮、中の寮、嶋の寮などゝ名を定め、諸國より至れる所化、其長屋の小席に標名し、居棲に、一庭の間に六七人づゝすめり、[illegible]法運いづれも其札かくの如し、但紙表なり、）濟家大德妙心に此義なし、曹洞の一派に此則あり、まかれ共人を撰び、其寮主に定め、補住ともに撰舉たりしかど、膏雲の大小に至りては大に異なり、天文の頃より、慶長の初迄は、淨禪互に交接同學せしかば、學寮の則何れより移れり共、准據せり共、定むべからず、今當山の寮と云は、宗徒の閱書に便あらしめ、學子の研覈を務とす、又講堂をかね、春秋の講演ありき、（享保中より、數度の火災に減損し、寬政に至り八十六宇、文化に及びては八十二字、いづれもその谷の部にいだす、）

〔和漢三才圖會　六十七武藏〕無量山壽經寺　在小石川（淨土中寺）○號傳通院、○所化寮百軒、

〔諸宗階級〕東派淨土眞宗一派階級之次第

一學寮ニ於て、夏臈之次第ニハ、一個之階級相定有之候、左之通、

所化（寺格官職ニ不拘一同平僧衣體）

擬寮司　九年夏滿

寮司　十六年夏滿

上首　寮司之首座

擬講

闕講

講師

但講師職ニ相成候時ハ、身分ハ飛檐ニ而も、其身一代、内陣官被免候、

右之通相違無御座候、以上、

淺草本願寺輪番

東坊　長覺寺

享和二年戌年四月

〔眞宗傳法始末三耳如〕十二月十〇（寛永十三年）黌ヲ本堂ノ西北ニ創ス、蓋シ京師三條ノ銀座某、貲ヲ捐テ之ヲ營スル也、明年十一月十四日、慶讃會ヲ講堂ニ修ス、宗主之ニ臨ム、始テ講師ヲ置キ、能化職ト稱ス、河内出口光善寺准玄ヲ以テ、之ニ任ズ、准玄諱ハ圓雅、珍雅ノ長子ナリ、明年夏和讃ヲ講ゼシム、此レ本山講肆ノ權輿タリ、爾來學徒輻湊スルコト、年ヲ逐テ益盛ナリ、

〔永平元禪師清規坤〕衆寮十二板圖樣凡例

夫衆寮者、堂衆飯後之看讀、及平日齋後之喫茶、晩間之喫藥石、或臨時之行茶湯等、皆於此行之、然則衆寮從僧堂之大小、而亦當有廣狹焉、僧堂若十二板、則衆寮亦必當十二板、僧堂若十六板、則衆寮亦必當十六板、而其衆寮之締構、但四周施牀、無中牀、則唯露地廣濶空疎、且堂衆叵容盡、故勅規載十六板僧堂圖、同規抄亦載十六板衆寮圖、其締構爲體也、屋上開四箇天窻、有十六牀之樣子、同抄第十四卷載寮元須知曰、寮主、副寮、到曲祿前、問訊、到第一處、第二處、第三處、問訊、收問訊、經舊路、不可抹過、乃至到十六處問訊、畢歸中央問訊立、由此考之、所謂十六處者、卽十六牀明矣、今且欲造營十二板之衆寮、則先如圖樣設牀、而中牀屋上各開天窻一區、而四壁亦皆設明窻、以取明相焉、若前後門兩頰牀與中牀、每牀各當設板頭、牀縱除牀緣與經櫃爲六尺、而又明窻下各設經櫃、凡櫃高一尺有二寸、徑一尺有五寸許、櫃上表面爲經案、以備看讀用、裏面卽爲經櫃、衆僧各自鎖之、容藏看讀之用具也、禪苑清規曰、寮主看守衆僧衣鉢、備規列職寮主章曰、公界坐禪、看經看守經櫃、夜間同寮元巡視經案、或失鎖者

留記鎖之、又勅規下卷巡視經案抄曰、僧堂則曰函櫃、衆寮則曰經櫃、由此考之、經櫃與經案二名、而其實一也、必非櫃與案二物也、

如寮元寮、依天童山圖、則於妙莊嚴堂背後、別構一局焉、勅規抄圖、則於衆寮後門右邊設之焉、禪規列職章曰、寮首座當請久住宿德諳練事體之人、同寮主、於寮中止宿、看守衆僧衣鉢、由是等文考之、則據勅規抄圖、設後門右邊者爲正焉、

禪規曰、寮主依入寮先後輪請、或當一月、或當半月、或十日、各逐所在、主看守衆僧衣鉢、然則所謂寮主在各自之案位、輪次勤之、猶堂中直堂也、是以須知、無單稱寮主寮之分寮矣、

以十刹圖考之、天童山則於衆寮之背後、有把針架及洗衣處焉、今復倣之、設把針架洗衣處等可也、

〔江戸吉祥寺大佛遷臺銘序〕武藏國豐島郡平塚鄉駒込諏訪山吉祥寺、靑巖周陽和尚之所插草也、寺舊在城之西丸、中移神田、歷數十年、明曆丁酉〇三年齋同安察公之住持、爲祝融氏所虜、後移駒込、爾來海內禪雛趨風爭聚、故具二十七舍學寮、以容一千餘員僧徒、蓋此境者、昔丹後守堀君之別業也、堀君掩館而後家姓喪亡、地維荒蕪久矣、是以察公恭奏大君殿下、乞地移寺、新建庫司祠堂、厥後離北重公鍾材鳩工、改作大殿方丈三門雙廊、梵宮之宏麗、禪樓之幽邃、殆十倍於昔、至若公栽松栢檜杉十萬餘株、玉樹秀海中、瓊林隔塵氣、實爲武城坤域之冠、然邇間復羅池魚之變、重興未終、今僅復十之一二耳、玆有我山中嘗堀君之所造盧遮那佛塑像可丈餘、堂々露坐於草樹之間、每爲風霜之所凌磨、聖容剝落、元祿癸未〇十六年冬、過地震、不能安住、遂頽仆而體解矣、〇中略正德四甲午夏沙門法印、相具一容、隨喜爲化主、〇中略募緣於諸方、〇中略是故改範功就、魏々聖容顯於目前、其功詎不偉矣、〇中略

享保七壬寅歲七月吉旦　住持比丘臨峯良極謹誌

〔先哲叢談後編七〕井金峩

金峩僑居駒籠時、家貧不能自給、吉祥寺緇流從金峩學文章歌詩者頗衆矣、金峩爲之創講者、講

會下

會下寺

講者、今所謂賣講、定其價員講說經史、日資賃錢者也、每人出銅錢三十文、以時限爲之始終焉、大抵聽其講者日不下百五六十人、故得賃錢四貫五百文有餘、爲衣食之資、遂得不乏焉、至今下帷騈館、教授爲業者、必爲其賣講者、其事皆自金峩始矣云、

〔草山集五〕常照講寺記

我佛之後、祖述法華而助出世本懷者、像法有天台、末法有高祖、雖共弘法華、而其行化之迹不同何也、良由命有通別、時有旁正也、故大師曰、法華眞實經、於後五百歲必應流傳也、大師遙指乎末法而曰眞實經、曰必應流傳、人若熟讀此文、則知通別之命、旁正之時之有在也矣、然唱此宗者必以講學爲業者何也、法華者、出世之大意也、不學一化之始終、則大意不彰矣、天台大師說諸大部、集其大成、出世之道於是方顯矣、所謂言佛法者、以天台爲司南、寔繇是也、大師之後、相繼講道世興、而今天台一家、山○延暦云、寺○圓城云、非不熾焉、唯以論議爲業而講學之迹不振、獨在吾宗專攻斯道者何也、良由通命有限、旁時無久也、於是盎固敎大師之前言矣、元和之間寂照乾師開常照寺於北峯、爲講學之場、去洛較遠、而境閑地淨、講學之徒得其所也、

〔下學集下言辭〕會下以上二所肆之、伴道所者、以戒律爲本、一行三昧而立注也、會下者、以參禪參學爲本、法問商量而立注云々、

〔撮壤集上寺院〕會下

知鋻禪師年譜寬永元年壬午、師十四歲、在東山東海會下、○中略貞治五年己巳、師二十一歲、在東山雪和尙會下、擢任侍客、固辭不赴、

〔三緣山志七〕會下

會下とは何の義ぞ、禪林淨家此言を立、會とは輻輳の名、下とは上實主に對するの稱也、

〔鎌倉大草紙下〕憲實入道○上杉を、雲洞菴○菴一本作院高岩長棟庵主と稱し、長門國深川大寧寺と申會下寺にうつしをき、馳走渴仰して、則大內殿ハ、憲實の養子になり、上杉山の內の系圖を繼、○下略

江湖

〔北條五代實記二〕三浦介時高滅亡之事

其頃、三浦介時高ト子息新介義同ト、父子不和ニシテ、〇中略義同ハ少モ色ニ不出、彌孝ヲ致シケル、家老共是ヲ見テ、此義不可然ト時高ヲ諫メシカ共、時高少シモ不聞入、剰ヘ近習ノ者ニ下知シテ、義同ヲ討ントス、義同述懐シテ鬢髮ヲ剃リ、ヒソカニ三浦ヲ忍出テ、相模國ノ西郡諏訪ノ原摠世寺ト云會下寺へ引籠リテ、道寸ト改名シケル、三浦ノ一門被官ノ輩、時高ノフルマイ、義ヲ背ケリト爪彈ヲシテ、三浦ヲ退キ、義同入道ノ跡ヲ尋テ、摠世寺へ籠リケル、

〔碧山日錄〕長祿三年三月二十七日己酉、鐘山愚仲禪師、諱及始、入天龍國師之室、執弟子之禮、爲求法泛船入中州、貶劍江湖、晩投一老宿、脫然有契、乃嗣之、暨其歸而天龍之諸弟疑嗣法於它、而不識其實否、〇下略

〔寺社分限帳七〕諸山出世之作法

一曹洞宗ノ法ハ二十年修行ヲトゲ、江湖頭ヲスレバ、官位ニナル也、

古事類苑

宗教部三十九

佛教三十九

寺格

上代ハ、寺院ニ官寺、私寺ノ別アリ、而シテ官寺ニハ國分寺、定額寺等ノ名稱アリテ、堂塔修理ノ費用、僧尼修行ノ用途等ハ、悉ク官ノ給スル所ニシテ、其格式諸寺ノ上ニ在リ、

國分寺ハ、毎國ニ二寺ヲ置ク所ニシテ、一ヲ僧寺ト爲シ、金光明四天王護國之寺ト云ヒ、一ヲ尼寺ト爲シ、法華滅罪寺ト云フ、聖武天皇ノ神龜五年、金光明經ヲ諸國ニ頒チテ轉讀セシメシ時ニ其端ヲ發シ、天平九年ニ國別釋迦ノ像一軀、脇侍菩薩二軀ヲ作リ、兼ネテ大般若經一部ヲ寫シ備ヘシメシヲ以テ其權輿ト爲ス、而シテ國分寺ニハ朝廷ヨリ講讀師ヲ遣シテ法ヲ弘メシメシモノニテ、事ハ僧職篇ニ在リ、又鳥羽天皇ハ、諸國ニ天永寺ヲ置キ、足利尊氏ハ諸國ニ安國寺ヲ置キシ事、史ニ見ユルハ、共ニ國分寺ニ擬セシモノナラン、

定額寺ハ、元ト本願ノ主アリテ、私ニ建ツル所ニ屬スレドモ、國家ガ認メテ之ヲ官寺ニ列シタルモノニシテ、年分度者ヲ置キ、一定ノ用途ヲ給スル等、殆ド國分寺ニ同ジ、

又勅願寺、若シクハ御願寺ト稱スルモノアリ、歷代ノ天皇若シクハ皇后ノ發願ニヨリテ草創セラレタル寺院ニシテ、亦官寺ニ准ゼラル、蓋シ勅願寺ニハ初メ僧俗私立ノ道場ナリシヲ、後ニ陞セテ勅願寺ト爲シヽ類モ尠カラズ、而シテ御祈願寺ノ名稱ハ、中世以後間々見ユル所ニシテ、亦御願寺ニ同ジ、而シテ官寺ヨリ以下皆勅額ヲ掲グルヲ例ト爲ス、

後世ニ至リ、又門跡ト云フ寺格ヲ生ゼリ、門跡トハ門徒又ハ門流ノ謂ニシテ師跡ヲ繼承スルノ稱ナリシガ、足利幕府ノ比ヨリ、仁和寺青蓮院以下、皇子、皇族、攝籙清華ノ子弟ノ入室スル寺ノ院室ヲ門跡ト稱シテ、一種ノ寺格ト爲シ、又門跡ノ內ヲ小別シテ、宮門跡、攝家門跡、准門跡、脇門跡等ニ分テリ、而シテ足利幕府ノ末、本願寺ノ准門跡ニ列セシ始末ノ如キハ、之ヲ帝王部卽位篇ニ詳ニセリ、門跡ハ、足利幕府ノ末ヨリ、寺院最上ノ格式ト爲リテ、帝室及ビ幕府ニ於テモ、其待遇極メテ厚シ、門跡ノ下ニ、院家、幷ニ准院家ト云フアリ、サレド當時ハ又門跡ヲ呼ブニ院家ヲ以テスル事モアリキ、天台宗ノ平院家、眞宗末寺ノ院家ノ如キハ此列ニアラズ、要スルニ德川幕府時代ニ在リテハ、上下ノ區劃嚴明ニシテ、雲上明覽各門跡ノ下ニ注セルモノヽ外ハ、此列ニアラズト知ルベシ、

中世以後、四大寺、七大寺、十大寺、十五大寺、二十五大寺、二十一寺ノ稱アリテ、他ノ官寺、勅願寺ニ別テリ、臨濟宗ニテハ五山、十刹、甲刹ノ別アリテ、五山ニハ又京都ト鎌倉トノ別アリ、南禪寺ハ又五山ノ上ニ列シ、大德寺モ亦此ト班ヲ同クス、支那ノ制ニ倣フナリ、淨土宗ニテハ、十八箇寺ヲ選テ檀林ト稱シ、是ヲ十八檀林ト云フ、德川家康ノ創メシ所ナリ、同宗ニハ此外ニ紫衣檀林、香衣檀林、引込紫衣檀林アリ、德川幕府時代ニハ、獨禮地ノ寺院アリ、其住持賀正ノタメニ將軍ニ謁スル時、一人ゴトニ寺社奉行ノ爲ニ其名ヲ通ズルヲ謂フ、又穢多寺ト云フアリテ、コハ眞宗ノ末寺ニ限レリ、

各宗ノ寺院、皆本寺末寺ノ別アリ、本寺ハ本山トモ稱シテ、其中ニ大本山、中本山等ノ區別モアリ、多クハ祖師開闢ノ寺院、若シクハ其高弟又ハ其宗中興ノ碩德等ノ草創セシモノニシテ、末寺ハ諸國ニ散在シテ是レニ屬スルモノナリ、中世南都北嶺ノ盛時ニアリテハ、互ニ末寺ヲ爭ヒテ、干戈ヲ動シヽ事アリ、德川幕府時代ニ在リテハ、法律ヲ以テ本末ノ關係ヲ規定

セリ、又本寺ニハ、大本寺、中本寺、小本寺、本寺並等ノ別アリ、末寺ニ直末ト然ラザルモノトアルナド、其狀甚ダ繁クシテ、擧グルニ勝ヘザルナリ、

子院ハ、本寺ノ境內ニ在ル寺院ニシテ、末寺ノ如ク、諸國ニ散在セルモノニアラズ、塔頭ハ原來其寺ノ住持、又ハ大檀那ヲ寺ノ境內ニ葬リテ塔ヲ建テ、因テ塔ノ頭ニ寺ヲ創建セシヲ謂ヒシガ、遂ニ一般子院ノ稱トナレリ、子院ニハ、多クハ院號、舍號、坊號、軒號、齋號、庵號等ヲ附スレドモ、寺號ヲ附スルモノモ亦少カラズ、又別院アリ、別院ハ或ハ子院ノ如ク、本寺ノ境內ニ在ルアリ、又末寺ノ如ク離隔スルモノアリ、便宜ノタメニ別ニ一院ヲ他所ニ置キタルモノナリ、

此他寺格ニハ、淨土宗ニ扇間、一文字等アリ、曹洞宗ニ常法幢、片法幢、隨意會地等アリ、眞宗ニ連枝院家等アリ、又中世以來、禪宗及ビ淨土宗ニ會下寺ト云フアリ、學寮篇會下ノ條ニ附載ス、

〔日本書紀二十九天武〕九年四月、是月勅、凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺二三以外、官司莫治、唯其有食封者、先後限三十年、若數年滿三十則除之、且以爲飛鳥寺不可關于司治、然元爲大寺而官恒治、復嘗有功、是以猶入官治之例、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、在近江國紫樂郷山寺者、入官寺之例、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、○中略新造寺乃官寺止可成波官寺止成賜夫、○下略

〔類聚國史百八十佛道〕貞觀十六年十二月廿五日己卯、攝津國島上郡悉檀寺預之官寺、先是傳燈大法師位圓純奏言、先師傳燈大法師位安秘、奉爲國家建此道場、貞觀五年太政官處分、爲天台別院、望請改爲官寺、詔許之、

國分寺創建

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月十三日辛酉、勅曰、山城國愛宕郡粟田院、元是太政大臣藤原朝臣〇基經之山莊也、太上天皇〇淸和愛其淸閑、蹔駐仙蹕、遂於此地出家落飾、仍爲道場、額曰圓覺寺、今橘山漸遠、弓劍无追、拜爵臺而慕襟、望鶴樹而纏渉、昔周人之思邵伯、愛其甘棠、漢國之仰摩騰、崇其精舍、彼一臣一僧、猶尚如此、況聖跡所存、何不尊重、宜特爲官寺、以傳遐年、卽日頒下山城國、令牧宰知之、

〔東福紀年錄〕後嵯峨天皇寬元元年癸卯、〇中略勅陞承天、崇福二刹、以爲官寺、

〔空華日工集〕康曆三年二月廿六日、大休寺年忌、淸谿拈香、府君管領入寺、點心罷、余揖歸歇處、君〇足利義滿卽問、湯治何日、余答、今月盡頭必定矣、君曰、湯治則不妨、切勿告退、余曰、老病交侵、倘居官寺、倦甚、伏望、賜免放、歸山林、隨意湯醫、

〔類聚三代格三〕勅、朕以薄德、忝承重任、未弘政化、寤寐多慚、古之明王、皆能光業、國泰人樂、災除福至、何修何務、能致此道、頃者年穀不豐、疫癘頻至、慚懼交集、唯勞罪己、是以廣爲蒼生、遍求景福、故前年馳驛、增飾天下神宮、去年普令天下造釋迦牟尼佛尊像高一丈六尺者各一鋪、幷寫大般若經各一部、今春已來至于秋稼、風雨順序、五穀豐穰、此乃徵誠啓願、靈貺如答、載惶載懼、无以安寧、案經云、若有國土講宣讀誦、恭敬供養、流通此經王者、我等四王常來擁護、一切災障、皆使消爍、憂愁疾疫亦令除去、所願遂心、恒生歡喜者、宜令天下諸國各敬造七重塔一區、幷寫金光明最勝王經、妙法蓮華經各十部、朕又別擬寫金字金光明最勝王經、毎塔各令置一部、所冀聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、其造塔之寺、兼爲國華、必擇好處、實可長久、近之則不欲薫臭所及、遠之則不欲勞衆歸集、國司等各宜務存嚴飾、兼盡潔淸、近感諸天、庶幾臨護、布告遐邇、令知朕意、又有諸願等、條例如左、

一毎國僧寺尼寺、各可施水田一十町、

一毎國造僧寺、必令有廿僧、其寺各爲金光明四天王護國之寺、尼寺一十尼、其寺各爲法華滅罪之寺、兩寺相去、宜受敎戒、若有闕者、卽須補滿、其僧尼毎月八日必應轉讀最勝王經、毎至月半誦戒羯磨、

一諸國置上件寺者、毎月六齋日、公私不得漁獵殺生、國司等恒加檢校、

一願天神地祇、共相和順、恒將福慶、永護國家、

一願開闢已降、先帝尊靈、長幸珠林、同遊寶刹、

一願太上天皇〇聖武、大夫人藤原氏〇宮子、及皇后藤原氏〇安宿媛、皇太子已下、親王、及正二位右大臣橘宿禰諸兄等、同資此福、倶向彼岸、

一願藤原氏先後太政大臣〇鎌足、不比等、及皇后先妣從一位橘氏大夫人〇三千代、靈識、恒奉先帝、而陪遊淨土、長顧後代、而常衞聖朝、乃至自古已來至於今日、身爲大臣、竭忠奉國者、及見在子孫、倶因此福、各繼前範、堅守君臣之禮、長紹父祖之名、廣洽群生、通該庶品、同解憂慴、共出塵籠、

一願若惡君邪臣、犯破此願者、彼人及子孫、必遇災禍、世々長生無佛法處、

天平十三年二月十四日〇又見續日本紀

〇按ズルニ、續日本紀、是歲正月丁酉十五日ノ條ニ、既ニ諸國國分寺トアリ、本篇寺領ノ條ヲ參看スベシ、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年十二月己丑、金光明經六十四帙六百四十卷、頒於諸國、國別十卷、先是諸國所有金光明經、或國八卷、或國四卷、至是寫備頒下、隨經到日、卽令轉讀、爲令國家平安也、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年三月丁丑、詔曰、毎國令造釋迦佛像一軀、挾侍菩薩二軀、兼寫大般若經一部、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年六月甲戌、令天下諸國毎國寫法華經十部、幷建七重塔焉、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后〇聖武后藤原安宿媛、法號光明子、崩、〇中略創建東大寺及天下國分寺者、本太后之所勸也、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年十一月己卯、詔曰、朕以去天平十三年二月十四日、至心發願、欲使國家永

固、聖法恒修、遍詔天下諸國、國別令造金光明寺法華寺、其金光明寺各造七重塔一區、幷寫金字金光明經一部、安置塔裏、而諸國司等怠緩不行、或處寺不便、或猶未開基、以爲天地災異、一二顯來、蓋由玆乎、朕之股肱豈合如此、是以差從四位下石川朝臣年足、從五位下阿倍朝臣小島、布施朝臣宅主等、分道發遣、撿定寺地、幷察作狀、國司宜與使及國師簡定勝地、勤加營繕、又任郡司勇幹堪濟諸事、專令主當、限來三年以前、造塔金堂僧房悉皆令了、若能契勅如理修造之、子孫無絕、任郡領司、其僧寺尼寺水田者、除前入數已外、更加田地、僧寺九十町、尼寺四十町、便仰所司墾開應施、普告國郡知朕意焉、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲六月乙酉、勅遣使於七道諸國、催撿所造國分丈六佛像、　壬辰、詔曰、頃者分遣使工、撿催諸國佛像、宜來年忌日〇聖武天皇周忌必令造了、其佛殿兼使造備、若有佛像幷殿已造畢、者、亦造塔令會忌日、夫佛法者、以慈爲先、不須因此辛苦百姓、國司幷使工等、若有稱朕意者、特加褒賞、

〔類聚三代格三〕太政官符

應令國分幷定額寺僧勤六時修行事

右被右大臣宣偁、先帝創造國分二寺、分號護國滅罪之寺、擇苾芻々々尼、殊設嚫施具足之法、又於定額寺雖建立有主、本願異趣、而擁護國家、豈爲分別、此皆救世利物、傳于不朽者也、是以一切刹土、常轉法輪、百千人天俱蒙解脫、善神滿國、惡龍出境、而頃年講師之擧不充格意、國分之僧還多放逸、福田荒而不耕、農畝競而說利、鐘聲絕響、六時無聽、香火止烟、三業彌倍、護國滅罪之理、不可焉然、拔苦與樂之誠、必須勤愼、宜重告知講讀師六時修行、同仰定額寺相共撿察、若有違行者、錄名言上、

仁壽三年六月廿五〇五一本作六日

〔政事要略五十五交替雜事〕太政官符五畿七道諸國司

雜事三箇條

一應愜行講讀師幷僧尼布施供養料渾署請文勘會公文事

右左大臣宣、奉勅、國分二寺、年中請僧者、所以攘災難祈年穀也、而年來宰吏怠慢不必懇修、徒費官物、空忘精勤、宜加下知、自今以後、全令行件布施供養、取其連署請文、勘會公文、但國宰懇加監臨、分明勤惰、令御願者、下知民部省已畢、諸國宜承知、符到奉行、

以前條事仰下如件、諸國承知、符到奉行、

長保三年五月十九日

右大辨藤原朝臣

左大史小槻宿禰

國分寺設置

〔延喜式 二十一玄蕃〕凡和泉國安樂寺、伊豆國山興寺、加賀國勝興寺、能登國大興寺、並各爲國分寺、置僧十口、壹岐島直氏寺爲島分寺、置僧五口、

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁十一年十一月庚申、近江國言、國分僧寺、延暦四年火災燒盡、伏望以定額國昌寺、就爲國分金光明寺、但勅本願釋迦丈六、更應奉造、又應修理七重塔一基云々、許之、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年五月癸未、和泉國言、以在和泉郡安樂寺、爲國分寺、置講師一員僧十口、但不置讀師、依請許之、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年九月丁丑、以加賀國勝興寺、爲國分寺、准和泉國寺、只置講師一員僧十口、其僧者便分割越前國國分寺僧廿口之內、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十二月乙卯朔、以能登國郡內定額大興寺、始爲國分寺、

〔續日本後紀 十四仁明〕承和十一年二月丙辰、能登國言、依去年十月十七日官符、以定額寺爲國分寺、訖、望請停讀師被給講師者、勅依請許之、

〔文德實錄 八〕齊衡三年九月癸丑、散位從五位上春枝王卒、春枝四世從五位下仲嗣第八之男也、○中略 春枝預此撰叙之、即爲能登守、○中略 上請以定額大興寺爲國分金光明寺、安居之講自此勤修、梵唄之響、晝夜無休、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十月三日戊寅、相模國言、○中略依太政官去貞觀十五年七月二十八日符、以漢河寺爲國分尼寺、而同日地震、堂舍頽壞、請依舊以本尼寺爲國分尼寺、詔並許之、

〔三代實錄四十五光孝〕元慶八年四月廿一日辛亥、伊豆國司言、國分法華寺、承和三年失火燒亡、其後以定額寺爲法華寺、請將新建、其料可用修理國分幷通三寶布施料、聽之、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年八月廿六日甲寅、勅、令尾張愛智郡以定額願興寺爲國分金光明寺、緣本金光明寺災火燒損也、

〔三代實錄五十光孝〕仁和三年六月五日丁未、美濃國司上言、國分寺災、梵宇佛殿一時成煨燼、席田郡定額尼寺殿堂宏麗、今修御願、請爲國分寺、許之、

國分寺罹災

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年七月癸亥、震但馬國國分寺塔、

〔類聚國史百七十三災異〕弘仁二年二月丁卯、相模國金光明寺災、　八月甲戌、遠江相模飛彈三國國分寺災、

〔續日本後紀十五仁明〕承和十二年三月己巳、武藏國言、國分寺七層塔一基、以去承和二年爲神火所燒、于今未構立也、前男衾郡大領外從八位上壬生吉志福正申云、奉爲聖朝欲造彼塔、望請言上、殊蒙處分者、依請許之、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十月三日戊寅、相模國言、國分寺金色藥師丈六像一體、挾侍菩薩像二體、元慶三年九月二十九日遭地震皆悉摧破、其後失火燒損、望請改造、以修御願、○中略詔並許之、

〔小右記〕寛仁元年十二月十四日、戊寅、昨日近江國國分寺幷尼寺等、爲野火燒亡、先尼寺燒亡、次國分寺、兩寺相去頗遠、而風吹移云々、

國分寺修造

〔類聚三代格三〕太政官符

一國分寺先經造畢塔金堂等、或已朽損、將致傾落、如是類宜以造寺料稻且加修理之、

以前被右大臣宣偁、奉勅、如件、

天平神護二年八月十八日

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年九月戊午、勅、〇中略宜令諸國具錄歲中修理官舍之數、付朝集使、每年奏聞、國分二寺亦宜准此、不得假事神異、驚人耳目、

〔類聚三代格三〕勅、諸國國分寺塔及金堂或朽損、由是天平神護二年各仰所司、以造寺料稻、隨即令修、而諸國緩怠曾未修造、非唯露穢尊像、實亦輕慢朝命、宜早隨壞修理不得更怠、又國分僧尼供養、除米鹽外曾無優厚、齋食之道、豈令如此、宜齋酢雜菜優厚供養、其料度者、用寺田稻、永爲恒例、

神護景雲元年十一月十二日

〔延喜式二十一玄蕃〕凡諸國所徵塡修理國分二寺料稻、率分之數、移送主稅寮、

〔政事要略五十五交替雜事〕太政官符五畿七道諸國司

雜事三箇條

一應擧塡式數修理國分寺稻事（修舊寺功德見受領功課事）

右勘解由使解偁、謹天平十六年七月廿三日詔書偁、四畿內七道諸國國別割取正稅四万束、以入國分僧尼兩寺、各二万束、每年出擧、以其息利、永支造寺用、但志摩國分、宛尾張國、壹岐島分宛肥前國、多褹對馬、不在入限者、神護景雲元年十一月十二日勅書偁、諸國國分寺塔及金堂、或既朽損、由是天平神護二年各仰所司、以造寺料稻、隨即令修、而諸國緩怠、曾未修造、非唯露穢尊像、亦輕慢朝命、宜早隨壞修造、不得更怠者、而今諸國每申未納、勘減件料、或國僅擧半分、或國殆絕本穎、伏撿言上不與解由狀、實錄帳所注、載國分二寺堂塔雜舍佛像資財等、大破朽損、觸色多　不可勝計、縱擧塡式數猶難修理、況無彼料、更施何術、爰至于不獲止之損色、申請正稅、宛用修理、是則減省式數、不勤擧塡之所致也、既而堂舍破損、逐歲月而彌倍、佛像暴露、隨風雨以易漫、先皇御願豈可如此、水旱疾疫、恐自此生、望請

件修理料稻、全擧塡式數、永預國司講讀師、將令勤行修治之事、須往年減省國々以正稅幷別納租穀、例用遺、及通三寶布施料等漸加擧、令塡本數、若違新制、無意擧塡、不事修造、猶致破壞、拘留以懲怠慢、又有顧累年之損、成不日之功者、擢之不次、殊加優賞、然則先朝堂構、致修治於明時、暴露尊容、期興隆於後代者、從三位守大納言兼行民部卿中宮大夫平朝臣伊望、同宣奉勅、依請者、以前條事如右、諸國承知、依宜行之、符到奉行、

左少辨正五位下兼行博士伊豫介大江朝臣　　外從五位下行左大史尾張宿禰

天慶二年二月十五日

勘解由使勘判抄

國分寺堂舍破損

无赦判云、中破以上者、令前司幷同任口料、見任修理待了放還、小破者、見任之吏以修理料遣、又同堂金幷雜物破損無實、

同判云、堂舍幷倉及資財者、前司同任幷講讀師三綱等出料物、見任修理並待畢放還、

同判云、見任申官、以通三寶施料修理、（○中略）

天慶元年判　　加賀守源中明

先例、會赦者、中破以上申官請料、而（當時長官謀不別大少、以例料）云々、又云、國分寺幷諸定額寺佛像堂舍无實破損稱、前以往无實破損者放還已上之事、爲辨濟了、然則可謂前司任中所致也、无實者、失由不明、事涉盜犯、須國分寺者、今前司、幷同任吏、講讀師、三綱等、修塡待畢放還、定額寺者令別當、三綱檀越等修塡、待畢放還、講讀師破損者、不修理讀、前司會赦、須見任相承、國分寺堂舍者、以例料、若不足者、申官請料、佛經資財者、申請通三寶布施料修理、莫拘前司、定額寺不論大中破、以田園地利、與講讀師共加撿按、修理莊嚴、

天慶五年判

〔政事要略二十八年中行事〕應令五畿七道諸國每任修造國分二寺諸定額寺破損拾分貳參定功過日所司

勘申造不由事、

右得治部省去七月廿六日奏狀偁、國分尼寺由緣至重、本願之旨、具見于格條、而頃年以來、諸國所進朝廷公文、唯注諸寺之破損、不見一任之狀、造鎭護國家之地、丘墟而已、是則公家不立懲勸之制、所司不致勾勘之本之故也、謹案事情、建立新寺、則不如修舊寺、供養全儀、亦不如補壞、功德勝尙敎典已詳、望請給官符於五畿七道諸國國分尼寺諸定額寺、每任修理破損、十分之二三、定功過日、令所司勘申造不之由、以其勤功、以加抽賞者、權右中辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉勅、依請、給官符於諸國、令勸修造、兼下宣旨於諸司、加裁功過勘文、明其造否、隨彼勤惰、可行賞罰者、

長保四年十月九日、左大史小槻宿禰奉親奉、件宣旨被下勘解由使、

〔類聚符宣抄八〕堂塔損色事

左辨官下美濃國

使右大史坂本忠國　從肆人　左史生川原文岑　從貳人

左史生大島爲範　從貳人　使部　從各壹人

木工小屬凡河內助連　從貳人　算師雀部爲利　從貳人

長上日下部重安　從壹人　工長上山有直　從壹人

將領秦吉延　杖取伴安光

右左大臣宣、奉勅、爲令撿錄彼國國分寺堂塔雜舍等損色、差件等人、發遣如件、國宜承知依宜行之、使者經彼之間、依例供給、路次之國亦宜給食馬官符追下、

寬弘元年閏九月十三日、史

右少辨藤原朝臣

〔小右記〕治安三年四月廿三日丙辰、右中辨章信朝臣、持來前日所給之勘宣、武藏國申、修造國分寺、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年正月丁酉、〇十五日故太政大臣藤原朝臣〇不比等家、返上食封五千戸、二千戸依舊返賜其家、三千戸施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料、　三月乙巳、詔曰、〇中略又毎國僧寺、施封五十戸、水田十町、尼寺水田十町、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年十一月己卯、詔曰、〇中略其僧寺尼寺、水田者、除前入數已外、更加田地、僧寺九十町、尼寺四十町、更仰所司墾開應施、普告國郡、知朕意焉、

天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地限、〇中略諸國分金光明寺、寺別一千町、〇中略諸國法華寺、寺別四百町、

〔類聚三代格三〕太政官符

一國分二寺田者、國司佃收以賓入寺、下符已畢、自今以後、宜付三綱耕營、又聞彼田或惡徒費佃功、得實甚少、如是惡田宜更改易、便以乘田及沒官田隨近沃美者、永奉三寶之用、〇中略

以前、被右大臣宣偁、奉勅如件、

天平神護二年八月十八日

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年四月癸丑、捨山背國國分二寺、便田各廿町、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年二月廿一日甲寅、勅能登國、置國分寺布薩戒本田三町、

〔延喜式二十一玄蕃〕凡國分二寺田、令三綱耕營、永奉三寶之用、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歳十二月己亥、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、紀伊、阿波、讃岐、伊豫、土佐、筑後、肥前、肥後、豐後、日向等、二十六國、國別頒下灌頂幡一具、道場幡四十九首、緋綱二條、以充周忌御齋莊飾、用了收置金光明寺、永爲寺物、隨事出用之、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十一月辛未、頒下野國分二寺圖於天下諸國、

〔類聚三代格三〕太政官符

應勤造國分寺并禁犯用寺物事

一諸國國分寺年中所造成物、費用財物、依實勘僉、每年附朝集使申上、卽令奏聞、

一今聞國分寺封田等物、或國曾不充造寺、亦無供養僧、而國郡司等非理用盡、或國雖有可用、猶不存心、唯收藏中、空令朽損、自今以後、不得更然、

一國分寺封并佃稻地子等物、宜收納寺家臨應充用、國司共知、聽國司處分施行、

一每年率施三寶物等、必依內敎充用、及封田并諸財物、若有國郡司乖理犯用者、卽解見任官、依法科罰、永不任用、

以前被大納言正三位藤原朝臣永手宣偁、奉勅如件、

天平寶字八年十一月十一日

〔日本後紀平城十七〕大同四年正月乙未、令天下諸國、爲名神寫大般若經一部、奉讀供養、安置國分寺、若無國分寺者、於定額寺、

〔日本紀略淳和〕天長八年三月乙巳、佛舍利五百粒、令太宰府觀音寺講師光豐安置彼府管內國分寺、及諸定額寺、

〔續日本後紀仁明六〕承和四年六月丁酉、依從五位下勳六等小野朝臣宗成請、勅聽出羽國最上郡建立濟苦院一處、又宗成所司國分二寺奉造佛菩薩像并寫得雜經四千餘卷、並令附官帳、不紛失、事具官符、

〔三代實錄清和六〕貞觀四年十一月廿五日己丑、先是從五位上行但馬權守豐井王割公廨造幡十八旒、各長一丈五尺、施入國分寺、請官裁云、永附官帳、以資御願、太政官處分、依請焉、

〔三代實錄 清和七〕貞觀五年四月三日乙未、先是伯耆講師傳燈法師位僧賢永奏言、年來五穀不登、百姓窮弊、加之疫癘頻發、死亡者衆、賢永奉爲國家誓願佛力、精誠欣感頗知靈驗、由是副留供料、圖書寫一萬三千佛、幷觀世音菩薩像、及一切經、貯穀百斛以資燈炷、請安置國分寺、乃附國司、其穀每年出擧、勿斷燈明、詔許之、

國分寺奴婢

〔類聚三代格 三〕太政官符

一國分二寺應買賤、寺別奴三人、婢三人、其年滿六十放免從良、若有死闕者依數買塡若別有身才、功能可善者、不須待滿六十、卽須申官從良買替、繁息之後不可更買、其價直者便用寺家封物、若誤買惡奴婢、必返本主、以三年爲留返之期、〇中略

以前被右大臣宣偁、奉勅如件、

天平神護二年八月十八日

國分寺用途

〔類聚三代格 八〕詔、四畿內七道諸國、國別割取正稅四万束以入國分僧尼兩寺各二萬束、每年出擧以其息利永支造寺用、但志摩國分充尾張國、壹岐島分充肥前國、多褹對馬不在此限、

天平十六年七月廿三日〇又見續日本紀

〔續日本紀 稱德二十九〕神護景雲二年三月乙巳朔、北陸道使右中辨正五位下豐野眞人出雲言、佐渡國造國分寺料稻一万束每年支在越後、常當農月、差夫運漕、海路風波動經數月、至有漂損復徵運脚、乞割當國田租以充用度、〇中略並許之、

〔日本後紀 嵯峨二十一〕弘仁二年九月己亥、令諸國依舊出擧修理國分寺料、

〔政事要略 五十六交替雜事〕定額寺事〇中略

私記云、同文云、定額寺燈分稻、便預講師三綱者、於國分二寺燈分稻如何、答國分二寺燈分不見國司預掌耳、問令講師三綱依件出擧、令有制法、何可出擧哉、答、令云、僧尼不得私蓄園宅財物、及興販

出息者、然則依公出擧不可制之、

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻、山城國〈中略〉國分寺料一万五千束、〈中略〉大和國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉河内國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉和泉國〈中略〉國分寺料五千束、〈中略〉攝津國〈中略〉國分寺料一万五千束、〈中略〉伊賀國〈中略〉國分寺料五千束、〈中略〉伊勢國〈中略〉國分寺料四万束、修理志摩國國分寺料三千束、〈中略〉尾張國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉參河國〈中略〉國分寺料二万束、修理志摩國國分寺料三千束、〈中略〉遠江國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉駿河國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉伊豆國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉國分貳寺供養料一万束、〈中略〉甲斐國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉相模國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉武藏國〈中略〉國分寺料五万束、〈中略〉上總國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉下總國〈中略〉國分寺料五万束、〈中略〉常陸國〈中略〉國分寺料六万束、〈中略〉近江國〈中略〉國分寺料六万束、〈中略〉美濃國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉飛彈國〈中略〉國分寺料五千束、〈中略〉信濃國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉上野國〈中略〉國分寺料五万束、〈中略〉下野國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉陸奧國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉若狹國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉越前國〈中略〉國分寺料三万束〈中略〉加賀國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉能登國〈中略〉國分寺料五千束、〈中略〉越中國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉越後國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉佐渡國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉丹波國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉丹後國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉但馬國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉因幡國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉伯耆國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉出雲國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉石見國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉隱岐國〈中略〉國分寺料五千束、〈中略〉播磨國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉美作國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉備前國〈中略〉國分寺料四万束、〈中略〉備中國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉備後國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉安藝國〈中略〉國分寺料三万束、〈中略〉周防國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉長門國〈中略〉國分寺料一万束、〈中略〉紀伊國〈中略〉國分寺料二万束、〈中略〉淡路國〈中略〉國分寺料五千束〈中略〉阿波國〈中略〉

國分寺法會

略國分寺料一万四千束、〇中略讃岐國〇中略國分寺料四万束、〇中略伊豫國〇中略國分寺料四万束、〇中略土佐國〇中略國分寺料一万束、〇中略筑前國〇中略國分寺料三万二千二百九十三束、〇中略筑後國〇中略國分寺料一万三千三百九十四束、〇中略肥前國〇中略國分寺料三万三千三百九十四束、（當國壹岐島各一万六千六百九十七束）〇中略肥後國〇中略國分寺料四万七千八百八十七束、〇中略豐前國〇中略國分寺料一万四千二百七十四束、〇中略豐後國〇中略國分寺料二万束、〇中略日向國〇中略國分寺料一万束、〇中略大隅國〇中略國分寺料二万束、〇中略薩摩國〇中略國分寺料二万束、同寺十一面觀世音菩薩燈分料一千五百束、

〔續日本紀稱德二十七〕天平神護二年九月丙寅、伊豫國人大直足山、私稻七萬七千八百束、鍬二千四百四十口、墾田十町獻當國國分寺、授其男外少初位下氏山外從五位下、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年五月戊辰、尾張國海部郡主政、外正八位下刑部岡足、獻當國國分寺、米一千斛、授外從五位下、　六月庚子、紀伊國那賀郡大領外正六位上日置毘登弟弓、稻一万束、獻於當國國分寺、授外從五位下、

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年四月癸巳朔、美濃國方縣郡少領外從六位下國造雄萬獻私稻二万束於國分寺、授外從五位下、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡諸國國分二寺、依僧尼見數、毎寺起正月八日迄十四日、轉讀金光明最勝王經、其施物用當處正稅、（見主稅式）

〔延喜式主稅二十六〕凡諸國國分二寺、各起正月八日迄十四日、轉讀最勝王經、其布施三寶、絲卅斤、僧尼各絁一疋、綿一屯、布二端、定座沙彌尼、各布二端、但供養用寺物、

凡諸國金光明寺安居者、三寶布施絲卅斤、講讀師法服各絁五疋、布施講師絁十疋、綿廿斤、布廿端、讀師絁五疋、綿十斤、布十端、呪願散花唄等僧各絁二疋、綿四斤、布四端、聽衆僧尼、各絁一疋、布一端、定座沙彌、綿二斤、布二端、講讀師從沙彌、各布二端、其供養、講讀師日米各六升四合、（飯料二升、饘粥四合、雜餅四升、）大豆小

豆各五合、油二合、醬酢未醬各一合、海藻滑海藻於期菜各三兩、大凝菜芥子各一兩、紫菜二合、鹽一合二勺、定座沙彌、講讀師從沙彌各一口、米一升五合、(飯料)餘物減半、並用正稅、太宰觀世音寺、用筑前國正稅、

凡壹岐島島分寺法會布施供養料稻一万二千九百七十一束一把一分五毫、(最勝王經料一千八百八十七束五分五毫、吉祥悔過料三千三百六十四束二把、崇道天皇春秋讀經料八百束、安居雜用料六千九百十九束八把六分、)太宰府以管內諸國正稅通計以充行、(筑前國百八十束、肥前國二千七百六十六束、肥後國三千六百廿束九把一分五毫、豐後國三千九百四束、日向國一千八百束、)

凡壹岐島島分寺佛聖供料稻一千三百卅二束八分、講師常供四千七百廿六束、以筑前國正稅每年充行、

(續日本紀 二十孝謙)天平寶字二年七月戊戌、勅爲令朝廷安寧天下太平、國別奉寫金剛般若經三十卷、安置國分僧寺二十卷、尼寺十卷、恒副金光明最勝王經並令轉讀、

(續日本紀 二十八稱德)神護景雲元年正月己未、勅畿內七道諸國一七日間、各於國分金光明寺行吉祥天悔過之法、因此功德天下太平、風雨順時、五穀成熟、兆民快樂、十方有情同霑此福、

(續日本紀 三十二光仁)寶龜三年十一月丙戌、詔曰、頃者風雨不調、頻年飢荒、欲救此禍、唯憑冥助、宜於天下諸國國分寺、每年正月一七日之間、行吉祥悔過以爲恒例、

(類聚三代格 三)太政官符

應於國分尼寺安居之中令講法花經事

右被權中納言從三位兼行左衞門督陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、奉勅、國分二寺初建自遠、一則名爲金光明護國寺、一則號爲法華滅罪寺、最勝法華二部經各十部如法書寫、粧飾蘊櫝、及苾蒭苾蒭尼每寺有其員、是則先帝救世利物之法、遠傳于今不朽者也、而頃年所行僧寺安居之會、獨講最勝王經、尼寺滅罪之場、无說法花妙典、兩寺所設法藏、用有不同、宜仰諸國令講讀師安居之會、先於僧

國分寺僧尼

寺講最勝仁王經、次於尼寺講妙法華經、庶幾无二无三之勝理、開示郡國、除災植福之大善廣被衆庶、

承和六年六月廿八日〇又見續日本紀

〔文德實錄 一〕嘉祥三年四月壬戌、飛彈國講師傳灯滿位僧德嚴上奏、諸國國分二寺安居修行、爲國誓念、而此國舊來不修此法、論之佛理可謂闕如、請准諸國每年薫修、許之、

〔本朝世紀〕天慶二年七月十三日壬子、政衙後、上卿於陣行內印事、是依祈雨五畿七道明神奉幣、於國分寺幷有供定額寺、可讀仁王經官符也、

〔延喜式 二十一玄蕃〕凡諸國國分寺僧尼、以去年定數、勘注一卷、當年三月一日、移送主稅寮、

凡國分寺僧度緣無公驗者、不得預正月安居等請、

凡僧綱、每歲首、遍訪求諸大寺僧情願國分僧者、不論多少、細記年﨟幷願國、正月卅日以前、經省寮申官、若申國分寺僧死闕、卽便補之、

凡諸國國分寺僧、有死闕者、簡擢京諸寺僧堪爲法師者、申省、省申官補之、諸寺僧無心願者、擇百姓年十六已上者、新度補之、但寺別令有壯年者五人、若見僧心願之內、壯年滿此數、不聽更新度、其尼者講師與國司簡定申官度之、

〔延喜式 二十六主稅〕凡諸國國分寺僧尼者、待玄蕃寮移、隨其定數、許行布施供養、

凡在京僧、入諸國國分寺者、路次國充馬食、僧日米二升、鹽二勺、童子一人日米一升五合、鹽一勺五撮、

〔類聚三代格 三〕太政官符

一國分尼寺、先度之尼十人、後度之尼十人、合廿人、布施供養同爲一法、唯先十尼之中一人死闕、卽依先勅早滿彼數、仍國司國師共簡定申官、待報符行、但後十尼者不預此例、〇中略

以前、被右大臣宣偁奉勅如件、

天平神護二年八月十八日

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年八月癸亥、治部省言、今撿造僧尼本籍、計會內外諸寺名帳、國分僧尼住京者多、望請任先御願皆歸本國者、太政官處分、智行具足、情願借住、宜依願聽、以外悉還焉、

〔類聚三代格三〕太政官符

應定國分寺僧死闕替事

右撿案內者、去天平十四年五月二十八日下畿內及七道諸國符偁、奉去天平十三年二月十四日勅處分、每國造僧寺、必令有二十僧者、仍取精進練行操履可稱者度之、其雖可稱、不得卽度、必須數歲之間觀彼志性終始無變、乃聽入道者、而國司等不精試練、每有死闕妄令得度、今被大納言正三位藤原朝臣是公宣偁、奉勅、國分寺僧死闕之替、宜當土僧之中擢堪爲法師者補之、自今以後不得新度、先申闕狀、得報施行、但尼依舊、

延曆二年四月二十八日〇又見續日本紀

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年五月壬戌、令諸國司講師沙汰國分寺僧、

〔日本後紀十七平城〕大同四年閏二月辛丑、始還志摩國國分二寺僧尼、安置伊勢國國分寺、

〔類聚三代格三〕太政官符

應自京所入諸國國分寺僧路次充供養幷傳馬事

右太政官、今月三日下五畿及七道諸國符偁、依太政官去延曆二年四月廿八日下五畿及七道諸國符、擇擢京寺之僧補入國分之闕、而頃年間緇徒去日、唯授公驗、不充食馬、今被右大臣宣偁、郵傳之設、本備遞送、宜自今以後、僧身及童子一人令充供養公乘者、諸國承知依宣行之、其給法者、僧日米二升、鹽二勺、從日米一升五合、鹽五撮、立爲恒例、

弘仁七年五月三日

太政官符

應補國分金光明寺僧闕事

右案去天平十三年二月十四日格偁、每國造僧寺、必令有二十僧、若有闕者卽須補滿、延曆二年四月二十八日格偁、今國司等不精試練、每有死闕、妄令得度、理不可然、宜死闕之替擢當寺僧之中堪爲法師者補之、先申闕狀待報符行之、自今以後、不得新度者、頃年停前件格、簡京諸寺僧心願者補彼闕所、右大臣宣、奉勅、如聞僧等、或重在本寺、或喜從師主、至于入國分寺、心願者蓋寡矣、因是法會之場、僧員不備、先朝之制、於茲有闕、夫消禍殖福、釋教爲本、弘道利物、必由其人、自今以後、心願之外、宜擇當國百姓年紀六十已上心行既定始終無變者度之、

弘仁十二年十二月二十八日

太政官符

應諸國國分寺僧廿口之內令得度年廿五以上者五人事

右得太宰府解偁、觀音寺講師傳燈大法師位光豊牒偁、依太政官去弘仁十二年十二月廿六日符、度六十已上之人、既以老耄之極、始入甚深之道、勤學修行、更無如何、至於梵唄散花用音之事、令會集者掩口大咲、加以三綱之職、事多米鹽、修理堂塔、料濟供養、曾無强堪者、破寺之供、莫大於斯、望請年廿五以上者五人、每寺聽度、固擇才行、嚴糺僞濫、死亡之替、相續將度、庶幾駐佛日於欲沒、建法幢於將倒者、府加覆審、所陳有實、仍請官裁者、中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅、依請、自餘諸國亦宜准此、

天長五年二月廿八日

太政官符

應納國庫國分二寺僧尼度緣戒牒事、

右得佐渡國解偁、被治部省去承和十年六月十四日符偁、被太政官今月四日符偁、撿案內、太政官去

國分寺雜載

弘仁四年二月三日下同省符偁、右大臣宣、奉勅、僧尼有身死幷還俗、其度緣戒牒早令進省、省卽年終申官毀之、庶幾令訐入屛跡法流自澄者、而今諸國請補僧尼死闕之日、不進度緣、是猶所司疎略所致也、今被大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣偁、補國分二寺僧尼之闕、先進度緣、然後補之、若乖此旨、科違勅之罪者、今國司等加覆審、僧尼度緣或隨身遊行他國、或挾訐僞紛失、因此死亡之後無由搜求、望請準國司任符、續收國庫、其身死補替之日、隨卽將進官、謹請官裁者、同宜依請、諸國亦宜準此、

承和十一年十一月十五日

〔延喜式治部二十一〕凡諸國附朝集稅帳等使、所送國分二寺雜公文、勾勘畢卽具狀、移式部民部等省、

〔日本後紀桓武八〕延曆十八年七月庚午、是月有一人乘小船、漂著參河國、以布覆背、有犢鼻、不著袴、左肩著紺布、形似袈裟、年可廿、身長五尺五分、耳長三寸餘、言語不通、不知何國人、大唐人等見之僉曰、崑崙人、後頗習中國語、自謂天竺人、常彈一弦琴、歌聲哀楚、閲其資物、有如草實者、謂之綿種、依其願令住川原寺、卽賣隨身物、立屋西郭外路邊、令窮人休息焉、後遷住近江國國分寺、

〔西大寺藏本下〕當寺御奉行國分僧尼兩寺十九箇國內綸旨八通進之候、殊致興行之沙汰、可紹隆戒律之由、各可被仰含旨也、恐惶敬白、

十月三日　在判

西大寺方丈

〔傍廂後篇〕國分寺の瓦

國分寺の事、上篇に云ひしごとく、いづれの國もその國府にありしなり、その跡の古き瓦得んとて、好事の者行きて尋ね出だす事やまず

天永寺

〔鹽尻二十一〕鳥羽院天永年中に、六十餘州被定天永寺、尾張ノ天永寺ハ、春日井郡味鏡村ノ護國院

安國寺

也、美濃天永寺ハ、加茂郡細目村東光寺也、東光寺今在大梁村、

〔梅松論〕下一三條殿〇足利直義は、六十六ヶ國に、寺を一宇づゝ、建立し、各安國寺と號し、同塔婆一基を造立して所領を寄られ、御身の振廻廉直にして實々敷いつはれる御色なし、

〔永光寺文書〕奉安置能登國永光寺塔婆

佛舍利二粒　一粒東寺

右於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請、既爲勅願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、安置之儀、旨趣如件、

曆應三年正月一日　左兵衛督源朝臣〇足利直義

〔歷世古文書〕一奉安置　筑後國淨土寺塔婆

佛舍利二粒　一粒東寺

右於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請院勅願、仍東寺佛舍利各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等安置之儀、旨趣如件、

曆應四年正月一日　左兵衛督源朝臣直義判

〔大慈恩寺文書〕奉安置下總國慈恩寺塔婆

佛舍利二粒　一粒東寺

右於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請、既爲勅願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、安置之儀、旨趣如件、

曆應四年六月十五日　左兵衛督源朝臣直義花押

〔園太曆〕康永三年七月廿五日

諸國寺塔通號事

勸修寺前大納言送消息、武家申請諸國寺塔通號、可被下勅裁間事、被仰合愚意、所存申了、

諸國寺塔通號事、武家如此申候、申請之上、不可有子細候、但塔號於本朝者、不被聞食及之樣候、可被仰此子細候哉、任申請只可被下院宣歟、若又先例もや候らん、何樣可候乎、内々可申合之由被仰下候、經顯恐惶謹言、

七月廿五日　經顯

武家使者行譚申詞 康永三七廿三

兩條

一諸國通號事 可號安國寺歟

一同塔婆事 可稱利生塔歟

以上可爲勅願之由、先日治定訖、爲永代興隆可被下通號之間可申入者也、

諸國寺塔通號事、武家申請塔論歟、如此事須被下官符候乎、塔號於本朝未具勘得之、今日依別願建立、爲後代通號大切候者、以安國同號寺塔共稱之條、可爲穩便之儀候歟、以各別號被裁表勅裁者、新儀掲焉、若可斟酌候哉、委細申狀雖其恐候、每事就蹤跡行來之條、本朝軌範候、仍不貽恐慮之心底歟、可令計披露給謹言、

七月廿五日　判

追申

委細被議武家之條、若可有憚者、先塔號不打任可爲何樣哉之旨、可被仰候歟、宜廻賢慮之計申沙汰給歟、

〔本朝高僧傳 三十 淨禪〕京兆東福寺沙門至孝傳

釋至孝號無德、姓藤氏、越前平葺人、○中略 初住城北北禪寺、曆應二年、大將軍尊氏源公管天下兵馬之權、嘗謂安國利民莫如佛乘、乃令各州置安國寺先改北禪爲京之安國、遷四條大宮之西、列于十刹、以

孝爲興建開山、緇白麕隨、有六瓴石幢於桂河側者、往告夢窓國師云、○疎 使人洗磨、題曰尊勝幢、又有雕造沙門安國之六字、甚鮮、餘漫滅不見、斯乃昔檀林皇后遣沙門慧萼、入唐、迎義空禪師、創安國寺、唱佛心宗、萼重入唐、雇抄筆書尊勝陀羅尼經、刻之貞石、以鎭國家者也、國師賜孝曰、想夫和尙再生之義空也、孝設寺之巽隅、庭其上扁寶幢、東傳祖公作記證之、源公喜曰、兆已如此、其國安矣、遷董東福、又住讃州長興寺、帝勅興南禪、貞治二年正月十一日化于寶幢院、春秋八十、

〔三國地志 百三伊賀舊案〕建武以來建立諸國塔每國各一所事、去年二月六日院宣如此、所被下通號也、早改當寺號可爲伊賀國安國寺狀、如件、

貞和二年六月六日　左兵衛督 花押○足利直義

平等寺長老

〔勢陽五鈴遺響 十三重郡〕景揚山安國寺○中略 安國寺緣起云、勢州三重郡西日野景揚山安國寺、初爲聖道家、而號西明寺、○中略 其時西明寺住持僧、厲師錬於伽藍、去于龜山東和田縣、時師錬改西明寺號神護寺、曆應二己卯天、建立一字、蒙勅號安國寺、則東日野縣本覺寺開山堂是也、○下略

〔甲斐國志 八十佛寺〕悟道山安國寺、心經寺村○八代郡 曹洞宗龍華院末、○中略 當寺ハ曆應二年己卯、勅ニ因リテ、每州安國寺ヲ建テ、國家長久ヲ祈ラセラル、七堂備ハリ、塔頭モ多カリシ由、卽其寺ナリト云、

〔新編相模國風土記稿 二十五足柄下郡〕安國寺 古義眞言宗、大工町蓮上院末、愛宕山善養院ト號ス、寺傳ニ、元曆中僧堅雅、此地ニ草庵ヲ營ミ、善養院ト名ク、元弘中僧宥快住職シ、再興ノ企アリシニ、曆應二年、源尊氏、國家安全ノ祈請トシテ、各國ニ安國寺ヲ造立アリ、其時○中略 當寺ヲ再興シテ、安國寺ト改ムトナリ、此事文化十三年ノ大鐘序文ニモ、其大略ヲ彫セリ、

〔空華集 纂緣疏〕下總州天平山安國寺化鐘疏

故征夷大將軍源公執政之初、曆應間、創於六十六州、每置一寺、皆名安國、則本寺其一也、○下略

〔蔭凉軒日錄〕長享元年十月十日、江州蘆浦觀音寺住持丁忠上人、持武夷山圖子昭筆、杉原十帖來、有實、雜話移刻、愚云、觀音寺南有律寺、今存否、忠云、數年前罹鬱攸、不遺一柱、愚云、寺號如何、忠云安國寺、安國寺之在六十六州者、以此安國爲權輿、蓋先代末有慈意和尙云者、及當御代始存、東山元應寺派也、寺亦爲元應寺之末寺、尊氏公問慈意曰、天下安全之祈念、以何爲然、慈意答云、於六十六州建一基塔婆、號安國寺然乎、於是如其言命之、故江州安國爲之始也、

〔飛州志（七吉城郡寺院）〕太平山安國禪寺　寺說ニ云ク、當寺ハ足利尊氏將軍草創、光和尙ヲ以テ第一祖トス、

開山壽像讃詞　飛州吉城郡荒城縣太平山安國開山瑞巖光和尙者、南禪之碩德也、觀應元年庚寅八月十一日入寂、閱世七十有三、先是曆應中、源尊氏每州建安國寺、其於飛州者是也、蓋請師爲開山鼻祖者也、〇下略

〔筑前國續風土記（十一嘉摩郡）〕安國寺舊跡　下山田村の東南の山下に有、前路廣く長くして境地よし、三方山有て谷ふところ廣し、誠に大寺の跡と見ゆ、白馬山景福安國寺と云、光明院御宇曆應二年、勅によりて東福寺より、一國に一所ヅヽ、安國寺を置て、國家の長久を祈らせらる、此所則當國の安國寺なり、七堂悉く備り、塔頭も多かりしとかや、其の舊跡は、今の觀音堂より一里奥、山深き所に有、

定額寺

〔伊呂波字類抄（知諸寺）〕定額寺（在諸國、見寺格、）

〔五代史（四十八雜傳）〕劉審交、字求益、幽州文安人也、〇中略是時晉高祖分戶部度支鹽鐵爲三使、議併三司益煩弊、乃復合爲一、拜審交三司使、議者請撿天下民田、宜得益租、審交曰、租有定額、而天下比年無閑田、民之苦樂不可等也、遂止不撿、而民賴以不擾、

〔續日本紀（十七聖武）〕天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地限、大安、藥師、興福、大倭國法華寺、諸國分金光

明寺、寺別一千町、大倭國分金光明寺四千町、元興寺二千町、弘福、法隆、四天王、崇福、新藥師、建興、下野藥師寺、筑紫觀世音寺、寺別五百町、諸國法華寺、寺別四百町、自餘定額寺、寺別一百町、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁斷京職畿內諸國私作伽藍事

右奉勅、定額諸寺其數有限、私自營作、先既立制、比來所司寬縱、曾不糺察、如經年代、無地不寺、自今以後、私立道場、乃將田宅園地捨施、幷賣易與寺、主典以上解却見任、自餘不論蔭贖、決杖八十、官司知而不禁者、亦與同罪、

延曆二年六月十日　〇又見續日本紀

〔類聚三代格三〕太政官符

可勘定額寺資財幷任三綱事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國定額寺資財者、國司與三綱檀越共撿挍處分、其任三綱者、依檀越衆僧請、國司覆勘充任、若寺家破壞、及有餘犯失者、推問所舉衆僧檀越等、依法科罪、自今以後、永爲恒例、

延曆十五年三月廿五日

太政官符

應停定額寺資財帳進官事

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、准例、五畿內七道諸國定額諸寺資財等帳、附朝集使每年進官、自今以後、宜停進之、但遷替國司、相續撿挍、其國分二寺、一依先例、

延曆十七年正月廿日

〇按ズルニ、定額寺資財ノ事ハ、資財篇ニモ散見ス、宜シク參看スベシ、

〔類聚三代格三〕太政官符

禁斷王臣諸家稱爲定額寺檀越事

右被右大臣宣偁、諸寺檀越、名載流記、已入定額、豈合輙改、如聞、五畿內及近江丹波等國、愚闇之徒、託權勢、以寺私付王臣、卽詐稱爲檀越、遂乃有犯之僧、縱任三綱、寺田之類、恣情賣買、事多奸濫、深乖道理、宜嚴禁斷、依舊改正、自今以後、不得更然、若猶不悛、錄名言上、事緣勅語、不得疎略、

延曆廿四年正月三日

〔類聚三代格三〕太政官符

諸國定額寺燈分稻可使預講師三綱事

右被右大臣宣偁、奉勅、國內庶務、觸事繁多、宜其燈分料稻停預國司、便令講師三綱依件出擧、省〇治部省寮〇玄蕃寮依例勘之、僧綱亦加撿挍、立爲恒例、不得漏失、

大同三年七月四日

〔類聚三代格三〕太政官符

應令國分幷定額寺僧勤六時修行事〇中略

又於定額寺、雖建立有主、本願異趣、而擁護國家、豈爲分別、此皆救世利物、傳于不朽者、〇中略

仁壽三年六月廿五日

〔類聚三代格四〕太政官符

應以元慶寺爲定額置年分度者三人事〇中略

元慶元年十二月九日又見三代實錄

〔三代實錄四十五陽成〕元慶八年四月廿一日辛亥、伊豆國司言、國分法華寺、承和三年失火燒亡、其後以定額寺爲法華寺、請將新建、其料可用修理國分幷通三寶布施料、聽之、

〔政事要略五十五交替雜事〕勘解由使勘判抄

私願寺
御祈願寺

國分寺堂舍破損○中略

先例、會赦者、中破以上申官請料、而當時長官議、不別大少、以例料云々、又云、國分寺幷諸定額寺佛像堂舍无實破損、稱前以往无實破損者放還、已上之事、爲辨濟了、然則可謂前司任中所致也、无實者、失由不明、事涉盜犯、須國分寺者、今前司、幷同任吏、講讀師、三綱等、修塡待畢放還、定額寺者、令別當、三綱、檀越等修理、塡待畢放還、講讀師破損者、不修理怠、前司會赦、須見任相承、○中略

天慶五年判

〔本朝世紀〕天慶二年七月十三日壬子、政後、上卿於陣行內印事、是依祈雨、五畿七道明神奉幣、於國分寺幷有供定額寺、可讀仁王經官符也、

〔壒囊抄十三〕本朝ノ佛閣幷勅願寺ハ、何レガ最初ゾ、

是卒爾ニ難難記、總ジテ佛閣ノ最初ハ向原寺歟、勅願寺最初ト申ハ、四天王寺、幷ニ南京ノ藥師寺ナルベキ歟、其故ハ是已前ノ堂舍數箇所アリト云共、皆後ニ在所ヲ改メ、或寺號ヲ換、又初ハ私ノ寺タルヲ後ニ勅願ト成サラルヽ多シ、

〔壒囊抄十三〕次用明天皇二年丁未上宮太子、自向澀河館、守屋討テ後四天王寺ヲ立給、是誠ニ勅願寺ノ最初也、サレバ世ニ流布シテ、佛法最初ノ天王寺ト申ケリ、

〔新儀式五臨時〕御願寺事（付太上皇、皇后御願寺、幷僧俗私造寺奏付屬公家事等、）近代之例、一代新有被修造御願寺、（天台山定心院、四天院、貞觀寺、元慶寺、仁和寺、醍醐寺、法性寺、延命院、大日院、雲林院等之類也、）先點勝地、次定預人、或上卿奉仰、僧俗司相共勤仕其事、（貞觀寺例是也、）或只有俗官無僧司、（法性寺、大日院等是也、）隨其申請、充其料物、或不經所司、後院奉仰勤仕造作之事、（雲林院、御堂、寶塔等是也、）又太上皇、皇后、幷僧綱、公卿、或以私寺奉付屬公家、爲定額寺、（天安寺、禪林寺、圓覺寺、圓成寺、補多樂寺等是也、）造畢之後、或修法會、或必不被修、但依奏請、（御願寺、依寺司奏請、自餘本願人奏、）有置定額僧幷年分度者等、又以近國正税充分燈油佛聖供等、（上皇、皇后、僧俗、付國家寺等、亦皆准之、）

〔細川家書札抄〕一律家へ書狀、侍者御中、侍者論師、但如何、勅願所、御祈願所によりて調樣可相替候歟、一邊難定、

〔顯如上人雜記〕五攝家御元祖事

一勅願所ニハ、天子ノ御壽牌ヲ、本尊ノワキニタテラルヽ也、先皇ノヲバ、御位牌ト申也、當今ノヲバ御壽牌ト申也、

今上皇帝聖躬萬歲ナド、アル也、聖躬トハ、聖德ヲ祝申心也、

聖壽萬歲トモアリ　躬ハ全身也ニミイルイキテヒ

〔釋家官班記下〕一顯宗名僧昇進次第

寺門　竪義探題無之、其外如餘寺、雖有所職之號、一寺法會非勅願之間、不及勅補任者也、

〔江家次第七八月〕御盆事

藏人仰出納令成送文、送於先皇〇後三條御願寺、當事四十口送圓宗寺、四十口送法成寺阿彌陀堂、是承保〇白河例也、可隨時、

〔東大寺要錄一〕大神宮禰宜延平日記云

天平十四年十一月三日、右大臣正二位橘朝臣諸兄、爲勅使參入伊勢大神宮、天皇〇聖武御願寺可被建立之由所被祈也、爰件勅使歸參之後、同十一月十五日夜示現給布、帝皇御前玉女坐而、放金光氏宣久、當朝ハ神國ナリ、尤可奉欽仰神明給也、而日輪者大日如來也、本地者盧舍那佛也、衆生者悟解此理、當歸依佛法也云布、御夢覺給也、後彌堅固御道心給、始企件御願寺給也、謂東大寺是也、

〔淸水寺緣起〕延曆十七年七月二日、延鎭聖人、與坂大將軍〇田村麿同心合力、始奉造金色十一面四十手觀世音菩薩像、假造寶殿所奉安置也、號淸水寺、又號北觀音寺也、同廿四年、奏請、寺地永以施入、便以茲寺爲栢原天皇〇桓武御願矣、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官宣

應令勤修御願延暦寺諸院禪師等事

右右大臣宣、定心總持、四王三箇院、是代々聖朝、深發御願所建立也、〇中略

貞觀十四年十一月一日

〔三代實錄 清和二十九〕貞觀十八年八月廿九日癸酉、勅、置貞觀寺座主、不令僧綱攝領、先是僧正法印大和尚位眞雅奏言、貞觀寺者、今上之御願所建立也、故太政大臣忠仁公〇藤原良房與眞雅勠力推誠、經略修造、彫鏤莊嚴、成之不日、公家施入田園資財、〇下略

〔扶桑略記 二十陽成〕元慶五年十二月十一日乙酉、無品恒貞親王奏言、淳和院、緣先太后遺旨、爲京城尼不能自存者、所依止也、凡其所行諸事、一如太上天皇〇淸和在世時、又大覺寺、是嵯峨天皇舊宮也、又嵯峨太上天皇、太皇后、淳和太后、三陵在其近側、又檀林寺是嵯峨太皇太后〇橘嘉智子御願所建也、三寺所行同如一家、請永置公卿別當、令其撿按者、詔聽之、

〔壒嚢抄 十四〕醍醐寺ハ何レノ御願ゾ

醍醐、朱雀村上、三代御願ト云也、譬ヘバ如三井寺歟、

〔東福紀年錄〕嘉暦四年五月十四日、東光寺須勅願寺之綸旨、

〔靈源寺文書〕勅願寺綸旨之寫

當寺、爲勅願寺、宜令專佛法之巨益、奉祈聖祚之洪基者、天氣如此、悉之以狀、

延寶六年五月廿九日　右中將 花押

靈源寺住持祖岸御房

〔山槐記〕永暦二年〇應保元年四月七日己酉、今朝上皇〇後白河幸園城寺別院平等院、〇中略是長吏前大僧正〇行慶建立此堂、寄進御祈願寺云々、仍御幸、

〔三寶院文書一〕八條院廳牒　遍智院衙

欲早任宮廳寄文以當院爲御祈願寺狀

牒、去八日宮廳寄文狀偁、當院者、故權少僧都義範門跡、累代秘密道場也、〇中略寄進八條院御祈願所、可奉祈寶祚也、〇中略故牒、

文治二年十月　日　　　主典代散位佐伯朝臣花押

〔集古文書四官符〕弘安五年官牒和泉國泉南郡久米田寺藏

太政官牒和泉國隆池院

應以當院爲御祈願所事

右太政官今日下治部省府偁、得彼院住侶等去六月廿一日奏狀偁、謹考案內、以諸練若爲御願寺者、朝家之流例、佛閣之先規也、〇中略望請天恩因准先例、以件隆池院可爲御願寺之由被下綸旨者、奉祝寶祚於九重之雲、永傳白業於三會之月者、正二位行權中納言源朝臣具房宣、奉勅依請者、省宜承知依宣行之者、院宜承知、牒到准狀、故牒、

弘安五年五月三日

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史兼備前權少掾小槻花押

從四位下行左少辨平朝臣

〔大德寺文書一〕大德寺、禪、爲御祈願所、禪徒等令凝丹誠於無貳、可祈寶祚於億兆者、新院〇花園御氣色如此、仍執達如件、

正中二年二月廿九日　　俊光

宗峯上人御房

〔淨土寺文書二備後〕備後國淨土寺□□事、爲勅願之儀、遂修造之功、殊可奉祈天下泰平者、院宜如此、仍

門跡

執達如件、

曆應二年六月一日　　按察使經顯奉

空敎上人御房

奉安置備後國淨土寺塔婆佛舍利二粒 一粒東寺

右於六十六州之寺社、建一國一基之塔婆、忝任申請、旣爲勅願、仍奉請東寺佛舍利、各奉納之、伏冀皇祚悠久、衆心悅怡、佛法紹隆、利益平等、安置之儀、旨趣如件、

曆應三年正月一日　　左兵衞督源朝臣直義花押

○按ズルニ、足利直義六十六州ニ一國一基ノ塔婆ヲ建テ、勅願寺ト爲シ、後ニ之ヲ安國寺ト稱セシ事ハ、安國寺條ニ詳ナリ、

〔集古文書三十九施行狀〕正平廿四年施行狀 伊豫國風早郡善應寺藏

可爲御祈願所之間、西園寺大納言殿御消息候也、仍執達如件、

正平廿四年五月三日　　沙彌花押奉

禪應寺長老

〔假頭屋本節用集人倫毛〕門跡モンゼキ

〔倭訓栞前編三十三毛〕もんせき　法親王の居をトたまふ寺院をいふ、寬平法皇の仁和寺に寓居を構へ給ふより起れり、御門の跡といふ義也、

〔羅山詩集三十一時事〕謂日光門跡法親王尊敬、尊敬者當今之弟也、本朝王子爲親王、後出家者、俗稱曰入道宮、又曰入道親王、其爲僧而後有親王宣下者曰法親王、又帝脫屣祝髮者曰法皇、其居處已爲蕃棲、曰御門跡、所謂宇多帝居仁和寺之類也、餘准之、帝與御門倭訓同、後世貴族沙門住持其處、則推之曰御門跡、或單稱門跡、又太子宮爲春宮坊、故御門跡陪從者亦借其名、遂稱坊官、皆流傳之號也、侍臣從

法皇共出家、住寺院者謂之院。家。、相繼住持者多自稱院家、亦是欲表其非凡僧也、尼院亦然、

龍種驚看降九霄、袈裟移影日光嶠、白雲深處一瓊樹、雪宿梁園夏未消、

〔大和事始六〕御門跡

醍醐天皇の御時、宇多法皇、東寺にて灌頂し、御室を仁和寺に造らる、是御室の始なり、後世に御門跡と云事も是より起れり、宇多法皇のおはせし所なれば、御。門。の。跡。と云義なり、

〔平家物語考證四〕もんぜき二に相分云々

補、門跡トハ、門。徒。一。跡。ト。云。義。ナ。リ。、延暦寺ニ、大塔、梨本ノ兩門跡アリ、南都ニ、一乘院、大乘院ノ兩門跡アリ、各門ノ僧徒、所主ヲ分テ相混ゼズ、今ノ世、門跡ト云、僧官ノ如シ、然レドモ僧官ニハアラズ、一門跡ヲ統領セラルヽ僧ニシテ、一宗一方ノ棟梁ナリ、

〔扶桑略記三十白河〕延久五年四月廿七日庚子、上皇〇後白河作祭文、被奉三井寺新羅神社、其詞曰、〇中略抑在位之昔、理政之時冒、智。證。大。師。乃。門。跡。冒旁有所申文、或依座主事天致怨望志、或依戒壇事天成訴訟文、〇下略

〔中右記〕天仁元年四月二日、或人來談云、〇中略今年灌頂已被行了、〇中略但於後々年者、猶弘。法。慈。覺。智。證。大。師。等。門。跡。、相次可被行者、是本之訴訴源也、〇中略凡此灌頂阿闍梨、本自任弘法慈覺智證門。徒。、次第可被行之義也、今年被破件次第、頗不穩便、

〔玉海〕治承元年十月廿五日辛卯、民部權少輔宗雅來語、故僧正〇忠覺門。跡。之事、併被進法皇、木幡證菩提院在其中云々、可悲云々、

〔源平盛衰記十四〕南都山門牒狀等事

園城寺牒　延暦寺衙マラウトイカマト

欲殊致合力被助當寺佛法破滅狀

宮門跡
攝家門跡

右入道淨海、恣失皇法、又滅佛法、○中略當寺破滅、將當此時歟、而延曆園城兩寺者門跡雖分、慈覺智證之遺訓、所學是同、○下略

〔野守鏡下〕慈鎭和尚は、此上人○忍眞を先達として聲明を興行せられき、○中略もしこの道○聲明すたれば、佛法もをとろへ、門跡もすたるべしとて、朝夕音律の曲をのみたしなまれければ、法驗もことにあらたに、門跡もまことに榮えたりける、

〔憲教類典三ノ四官札〕奉書之次第○中略

私曰、右を御門跡と稱す、但し宮方御入室の時は宮門跡と申、三家之親王○伏見、有栖川、桂、より御繼候を親王門跡と申、攝家より御入院候へば攝家門跡、清花之枝葉なをらせ給ふを、清花門跡と申、其時之御住持之身元ニよりてとなふる也、

〔諸門跡譜上〕仁和寺御室　青蓮院　隨心院　蓮華光院安井　淨土寺　平等院　本覺寺
法住寺　安祥寺　妙香院　禪林寺　常住院　如意寺　毘沙門堂　聖護院
梶井殿梨本　三寶院　勸修寺　圓滿院　一乘院　大乘院　滋賀院日光輪王寺　妙法院
實相院　曼殊院竹眞殿　大覺寺　東南院　上乘院　智恩院

〔嘉永七年雲上明覽上〕御門跡方御門跡方、原不レ分レ等、後分二三等一、冠二宮、攝家、准之字一、如此今將門惟分二某等一耳、故各通稱二某寺御門跡一也、○中略
輪王寺宮○號二日光宮一中略　御領一万三千石　京御里坊新道廣小路上ル元稱二一條河原御殿一
御宗旨天台輪王寺慈性入道親王四十一一品管領宮　光格天皇御養子、實有栖川韶仁親王御子、
仁和寺宮御室御所、又稱二御室宮、總法務宮一、○中略　御領千五百二石餘　御里坊西院參町新在家角
御宗旨眞言仁和寺　豊宮十一　仁孝天皇御養子、伏見入道邦家親王御子、
大覺寺宮稱二嵯峨御所、嵯峨山、嵯峨院、又稱二嵯峨殿一、○中略　御領千拾八石一斗餘上嵯峨　京御里坊下立賣御門成四殿町南側
御宗旨眞言大覺寺　御無住○中略

妙法院宮號二新日吉御門跡一〇中略　御領千六百三十三石餘大佛、御里坊院參町、
御宗旨天台妙法院　御無住〇中略

聖護院宮〇中略　御領千四百三十石餘洛東聖護院村、號二森御殿一
御宗旨天台大峯本山聖護院雄仁入道親王三十四、二品三井長吏熊野三山檢挍、光格天皇御養子、實伏見貞敬親王御子、〇中略

青蓮院宮〇中略　御領千三百三十二石餘粟田口、御里坊梨木町、
御宗旨天台青蓮院尊融入道親王三十二、二品天台座主、仁孝天皇御養子、實伏見故貞敬親王御子、〇中略

知恩院宮〇中略　御領千八十石餘京師東山、御里坊西院參町、
御宗旨淨土知恩院　隆宮　伏見入道邦家親王御子〇中略

勸修寺宮醍醐帝御祈願所、或記云、醍醐帝母后贈太政大臣高藤公女贈大后胤子御草創、〇中略　御領千十二石勸修寺村御里坊石藥師寺町角
御宗旨眞言勸修寺　御無住〇中略

梶井宮圓融院御門跡又梨本御門跡、〇中略　御領千六十四石今出川口下ル東側
御宗旨天台梶井　滿宮　九　仁孝天皇御養子、實伏見入道邦家親王御子、〇中略

曼殊院宮號二竹内御門跡一〇中略　御領七百二十七石一乘寺村、御里坊寺町上御靈馬場行當、
御宗旨天台曼殊院　御無住〇中略　御領千七十石山科、御里坊中立賣御門内、
御宗旨天台毘沙門堂　御無住　輪王寺宮御兼帶〇中略

圓滿院宮號二平等院狛欅井一　御領六百十九石餘江州三井寺、御里坊藪ノ下、
圓滿院覺諄入道親王三十六、無品、光格天皇御養子、實伏見貞敬親王御子、〇中略

大覺寺御門跡御隱居
瑜伽定院御門跡亮深七十、前大僧正法印、近衛故經熙公御子

大乘院御門跡堀川院寛治元年十二月隆禪權大僧都御建立〇中略　御領九百十四石南都、御里坊梨木町、

（御宗旨法相）大乘院御門跡隆温（四十四、興福寺別當、前大僧正法印）　二條故左大臣齊信公御子（○中略）

一乘院御門跡（○中略）　御領千四百九十二石（南都御里坊、石藥師西北角、）

（御宗旨法相）一乘院　起君（七）　近衛忠熙公御子（○中略）

實相院御門跡（○中略）　御領六百十二石五斗餘（北岩倉、號石倉御殿、御里坊、寺町石藥師、）

（御宗旨天台）實相院御門跡義賢（廿七、前大僧正法印、）　二條故齊信公御子（○中略）

三寶院御門跡（○中略）　御寺領三千九百九十八石二斗餘、守護使不入之所、內御院領六百五十石、

（醍醐、御里坊、梁木町、廣小路北、）

（御宗旨眞言大峯當山御法頭）三寶院御門跡定演（四十七、醍醐寺座主、前大僧正法印、）　鷹司故政熙公御子（○中略）

隨心院御門跡（小野曼荼羅寺、寬喜元年蒙宣旨、親殿御門跡領掌云々、後堀河院御宇、後七日御修法之賞、以隨心院永爲御祈願所矣、○中略）　御領六百十二石餘

（洛東小野、御里坊、寺町上ル切通口北ヘ入、）

（御宗旨眞言）隨心院御門跡增護（五十一、前大僧正法印、）　九條故准后尙實公御猶子、實二條故前左大臣治孝公御子、（○中略）

御領三百石（洛東）

（御宗旨眞言）蓮華光院　御室（號安井、大覺寺御門跡御兼帶、）

○按ズルニ、輪王寺宮ヨリ圓滿院宮マデハ宮門跡方ニシテ、瑜伽定院御門跡ヨリ蓮華光院マデハ攝家門跡ナリ、

〔海人藻芥〕山門三門跡者、梶井、靑蓮院、妙法院、是也、此外ノ門跡モ亦拜任座主跡是多シ、淨土寺、竹內、岡崎、東南院、檀那院、積善院、毘沙門堂等也、此外若出身ノ輩有之者、可拜任者也、（○中略）御室門跡者、自寬平法皇以來皆親王也、但峯殿（○藤原道家）息准三后法印入室之例有之、南都兩門跡（一乘院大乘院）執柄息相續也、其外東寺、山門三井寺諸門跡、隨時宮一ノ人或ハ三家ノ息令入室也、（○中略）山門、三井寺ノ門跡、可其本所住山之處、細々爲公請令在京之間、京白川ノ坊ハ皆假ノ宿坊也、仍古

不定法式、及末代特濫吹也、仁和、醍醐門跡、自古本所也、然ル間諸門跡寢殿ニハ不入酒肉五辛、

〔殿中申次記〕一御對面之時御送有るべき御人數之事（○中略）

一法中には、御室、靑蓮院殿、梶井殿、妙法院殿、聖護院殿、實相院殿、淨土寺殿、大覺寺殿、三寶院殿、此御人數御送りあり、御室、梶井殿御事は、宮にてまします間不及是非、其外は、准后ニ御成候はねば御送はなし、總而門跡の御事は、准后ニ御成候ほどの御衆をば、御送りあり、此外いまだ右樣の御方御座有べき歟、次ニ宮門跡は、准后不及沙汰御送也、御室、梶井殿に限らざる御事也、宮門跡にも、御送なきも御座候由承及候也、

〔大館常興書札抄〕一御持僧と申は、聖護院殿、實相院殿、大覺寺殿、圓滿院殿、花頂殿、三寶院殿などなり、門跡家高のうちにては、此御門跡だちにて御入候也、三寶院殿は、御家さほどなく候へども、武家門跡たる間、於殿中各同前ニ御賞翫なり、

此外、御門跡の事、（宮）御室梶井殿、（宮）靑蓮院殿、沙法院殿、下河原殿、淨土寺殿など也、何も〳〵攝家同御事也、殊に宮門跡は、一段取分御賞翫なり、

〔長祿二年以來申次記〕正月十三日（門跡法中少々賀茂參賀也、日吉も參也、猿樂、○中略）

一如斯有て、門跡衆、西衆にて御入候間、則御便所へ御出成て、御裝束を被改候而、又御便所へ御出座あり、去（十日攝家淸華以下）御對面の樣ニ雖可在之候、又かやうのたぐひは左樣には無之、門跡衆（梶井殿、妙法院殿、）以下一人宛御參也、是は殿上人被申次之、其樣體御對面のさいのきはへ參て門跡少々と被申入て、西の御障子より一人宛被參也、御退出之時、御縁迄被送申也、

〔御當家令條二〕禁中幷公家諸法度

一攝家門跡者、可爲親王門跡之次座、攝家三公之時者、雖爲親王之上、前官之大臣者、次座相定上者可准之、但皇子連枝之外之門跡者、親王宣下有間敷也、門跡之室之位者、可依其仁體、考先規、法中

之親王希有之儀也、近代及繁多無其謂、攝家門跡、親王門跡之外之門跡者、可爲准門跡事、〇中略

右可被相守此旨者也

慶長二十乙卯年〇元和元年七月日

昭實在判二條關白也

秀忠在判

家康在判

〔官中秘策三十二〕每年勅使參府之事是ハ有德院樣(德川吉宗)御代之記也、

一每年三月上旬、勅使參府有、御對顏御返答、其外御饗應之次第、

一勅使、法皇使、東宮使、當著日、爲上使御老中別使高家衆一人、

一御對顏之前日、上使ハ高家衆、

右相濟而、上使高家衆を以、御樽肴被遣之、

一御能前日、上使高家衆被遣之、但攝家、親王、諸門主へ之御會釋之大體如此、

一御對顏御白書院、公方樣緋御裝束、御太刀、御劍、御先立御老中、出御、大納言樣御裝束出御、御上段御著座、但御上段之御疊、御しとねを除之、〇中略

一攝家方、親王方、諸門主方參向之時ハ、御白書院御上段に於て、御對面直に右に著座、上意有之、御老中御取合申上、退去有之時、御下段迄御送り、御太刀目錄高家披露之、

一兩本願寺、右同斷、

但攝家、親王、宮門跡方ニハ、御下段御敷居之內二疊目、淸花之大臣、攝家門跡方ニハ御下段之上四疊目邊著座、其外自分參向之公家衆ハ、一人宛御禮、則御下段御右之方ニ著座、上意有之趣、御老中御取合申、退去、〇中略

一攝家親王方、御馳走役も五萬石位也、〇中略

一親王、攝家、諸門主方、兩本願寺歸路之節ハ、上使御老中高家相添、拜領物白銀五百枚、綿五百把、兩本願寺ハ東西共ニ白銀三百枚、綿二百把、

〔雍州府志五寺院〕仁和寺　寛平法皇之御庵室跡也、故稱御室、○中略凡本朝主上稱御門、故宇多法皇讓位後所住之室、故稱御門跡、又謂御室、依之仁和寺外、不可有御門跡之號、此外門主號皆崇其人、而准門跡之例者也、然則准門跡而非實也、

准門跡

〔太平記三十〕持明院殿吉野遷幸事附梶井宮事

梶井二品親王ハ、此時天台座主ニテ坐シケルガ、同ク被召捕サセ給テ、金剛山ノ麓ニゾ坐シケル、此宮ハ、本院ノ御弟、慈覺大師ノ嫡流ニテ、三度天台座主ニ成セ給ヒシカバ、門跡ノ富貴無雙、御門徒ノ群集如雲、○下略

〔東武實錄四十〕寛永九年八月十四日、御代替ノ御禮トシテ、仁和寺門跡、一乘院門跡、照高院門跡、聖護院門跡、大乘院門跡、隨心院門跡、實相院門跡、圓滿院門跡、三寶院門跡、勸修寺門跡、江戸ニ參向ス、

〔憲敎類典四ノ十四下寺社〕寶曆二壬申年八月廿七日

信濃守殿御渡　大目付　御目付江

一明廿八日、日光御門跡御住職之御禮有之候ニ付、表向四時揃ニ候、詰衆其外御目通江罷出候布衣以上之面々長袴著用可有之候、

右之通可被達候

八月廿七日

〔倭訓栞前編三十三毛〕もんせき○中略準門跡といふは、攝家淸花より釋門に入て、門跡の室にますをいへり、

〔寛永七年雲上明覽上〕准御門跡方附院家衆○中略

本願寺御門跡○中略　御領三百石餘　六條俗稱ニ西六條、

本願寺御門跡光澤　五十九前大僧正法印○中略

東本願寺御門跡○中略　七條俗稱ニ東六條、

東本願寺御門跡光勝　三十八、前大僧正法印○中略

興正寺御門跡○中略　御領百五十石　西六條御境內

興正寺御門跡攝信　四十七、正僧正法印、○中略

佛光寺御門跡○中略　御領六石八斗　五條坊門高倉

佛光寺　次麿君十一○中略

專修寺御門跡○中略　御領三百五十石　伊勢一身田、京御坊河原町二條、

專修寺御門跡圓禧　三十七　有栖川宮御子　前大僧正法印○中略

錦織寺御門跡　御領二十石　江州木部

錦織寺御門跡賢慈　十四　一條左大將忠香卿御猶子

〔天保集成絲綸錄　五十六〕寛政三亥年三月

寺社奉行江

東本願寺門跡

明廿八日、御對顏ニ付、五ツ半時登城之事、且又最前被書出候家來も可被差出候、

三月廿七日

〔天保集成絲綸錄　六十一〕天保四巳年三月

大目付江

三月七日東本願寺門跡、同新門跡、御對顏ニ付、表向四ツ時揃ニ候、御式江相掛候面々は、熨斗目長

袴、其外御目通江罷出候、布衣以上、熨斗目半袴著用候樣、可被達候、

〔譚海 三〕兩本願寺代がはりには、かならず江戸へ出仕あり、奉紙を捧げられ、拜謁あり、公儀にても、兩本願寺御取扱は武家の如く嚴然たる事なり、年々使者兩寺より奉るには、前後の席をあらそひて、六ヶ敷ゆゑ、御返書等をも、同時にたまはる事なりとぞ、

脇門跡

〔素絹記〕凡梨本(圓融房軒下有二梨木一故也)雲師已來覺師門跡法曼一流、大多和毘沙門堂、檀那院等、是號脇門跡、其後靑蓮院一門跡、相應和尚一流、是名三昧流、脇門跡者、十王院、妙光院、岡崎裏築地、石泉院大御堂、星光院、尊勝院、竹裏是等也、其後妙法院門跡有之、法曼流掌行門也、次淨土院三門跡外、金剛壽院御遺跡法曼流也、

〔大館常興書札抄〕一脇門跡と申は、定法寺殿、住心院殿、尊勝院殿、岡崎殿、近衞坂殿、若王子殿などなり、

〔眞宗傳法始末 二顯如〕十二年(〇永祿)八月廿日、勅シテ、宗主(〇顯如)ノ次子顯尊ヲ以テ、脇門跡トス、而テ六歲、興正寺是也、蓋脇ハ、本ニ對スルノ稱ニシテ、猶我門下ノ門跡ト言ガゴトキ也、

院家

〔伊呂波字類抄 爲 疊字〕院家

〔倭訓栞 前編 四十三 爲〕ゐんげ　院家と書り、門主の隱居處の意也、よて多くは堂上の息也、

〔寺社法則 下〕同(〇文化)十二年八月　牧野大和守々

一御書面、權僧正以上ハ、御奉行所(江)格別宜敷取扱候得共、院家ハ、官名ニて、對公儀候寺格ニも無之候間、平寺(與)の差別ハ、其寺院ニも寄候義、兼而取極難及御挨拶候、

〔海人藻芥〕興福寺者、一條院、大乘院以下、諸院家多被補別當也、

〔壒囊鈔餘〕門跡御相伴　院家ハ、御相伴也、

〔壒囊鈔餘〕一三門跡　脇門跡　院家、

〔新撰公家要覽〕院家衆

松林院興福寺　積善院三井寺　日嚴院大佛　上乘院若王子　報恩院醍醐、號水本、○　住心院六角

眞乘院御室　覺勝院嵯峨　眞光院御室　尊壽院御室　喜多院興福寺　覺了院知恩院　釋迦院水本弟子　上乘院眞如院　上乘院大和內山　淸閑寺醍醐　理性院醍醐　無量壽院同　圓了院靜仙院弟子　惠明院大佛日嚴院弟子　若王子東山　金剛院大佛　西輪院嵯峨覺勝院弟子○節略

○按ズルニ、本書ハ貞享三年ノ刊行ナレバ、此ニ擧グル院家ハ、其時ノモノナラム、

〔文久三年雲上明鑑上〕青蓮院○中略

院家　尊勝院○以下二院略　准院家　聖光院○以下十五院略

〔蔭涼記部類二〕應永卅三年五月廿五日

　中山前大納言どのへ

一院家與出世官次差別之事　院家上不及異論候、但法會之時者、守官次候間、院家人々出世已下ニ座列之事ニ候、公請之儀此分候、尋常之時者、暫時も無其儀候、○下略

〔應仁記下〕洛中大燒之事

山門ノ諸院家ハ、梶井ノ御所、青蓮院、妙法院ヲ首メトシテ、安居院、石泉院、毘沙門堂、尊勝院、法輪院、定法院、大皆ヲ擧閣而、○下略

〔諸宗階級〕天台宗僧徒經歷昇進衣體之事

　東叡山經歷之次第

一平院家之事

右者御門跡方江隨從仕候者故、三山共院家之常々衆徒同樣論席學業相勤候得共、法席之經歷ニも不拘、官位等昇進仕候類も御座候、○中略

享和二戌年三月

上野執當 住心院
圓覺院

〔和漢三才圖會七十二末山城〕本願寺十箇寺勅許院家寺處處今東西院家數不定

本宗寺 三州土呂鷲塚　顯照寺 河州

乾證寺 勢州長島　本法寺 江州堅田

慈敬寺 江州堅田　稱德寺 上同

勝興寺 越中　順興寺 河州牧方

敎行寺 攝州名鹽　常樂寺 和州吉野

宇多朱雀二帝、落飾入仁和寺、御門跡號、始于此、其時相從出家貴族、稱院家衆、自此門跡寺、必有院家衆、

〔一向宗源脈〕第十一、顯如上人諱光佐、信樂院大僧正、文祿元年十一月廿四日化、壽五十、證如之子、○中略同○永錄三年十月、本願寺僧徒十箇寺、勅許院家號、蓋院家則非平民之旨、故次下云、本願寺十箇寺勅許院家寺、處々有之、今東西院家數不定也、十箇寺者、謂三州土呂鷲塚木宗寺、河州顯照寺、勢州長島乾證寺、江州堅田本法寺、同處慈敬寺、同處稱德寺、越中勝興寺、河州牧方順興寺、攝州敎行寺、和州吉野常樂寺是也、但宇多朱雀二帝、落飾入仁和寺、御門跡號、始于此、其時相從出家貴族、稱院家衆、自此門跡寺、必有院家、然今依上鑑末、今一向宗所有五箇門跡者、列攝家門跡之次、故非宮門跡之分、是攝家准門跡之分也、

〔攝壤集上寺院〕四。箇。大。寺。 東大寺　興福寺　延曆寺　園城寺

〔日本略記〕一四箇之本寺と申は、東大寺、興福寺、延曆寺、園城寺也、此四箇之大寺は、天下の御祈所にて、內裏の御祈禱所也、

七大寺 東大寺、興福寺、元興寺、法隆寺、西大寺、藥師寺

〔拾芥抄下本諸寺〕七。大。寺。

東大寺聖武天皇神龜五年始造之、　興福寺不比等、和銅三年造山階寺、是也、　元興寺推古天皇、崇峻天皇元年始造之、飛鳥寺、本法興寺、　大安寺皇極天皇元年始造之、蘇我馬子大臣造之、和銅三年遷造之、本名百濟寺、　藥師寺天智天皇元年造之、天武天皇、　西大寺高野天皇天平勝寶元年創之、至天平神護元年十七年造畢、

法隆寺(聖德太子、號伊香留香寺、)

〔將門記〕于時(○天慶三年)本天皇(○朱雀)請十日之命、於佛天厥內屈名僧於七大寺、祭禮奠於八大明神、詔曰、忝膺天位、幸纂鴻基、而將門濫惡爲力、欲奪國位者、昨聞此奏、今必欲來、早饗名神、停此邪惡、速仰佛力、拂彼賊難、乃本皇下位、攝二掌於額上、百官潔齋、請千祈於仁祠、

〔類聚三代格 三〕太政官符

定僧綱并十五人大寺三綱法華寺鎭等從僧并可充童子食事

大安、元興、弘仁(○仁一本、作福、當從、)藥師、四天王、興福、法隆、崇福、東大寺、西大寺三綱、并法華寺鎭二人、各沙彌二人、童子二人、(○中略)

延暦十七年六月十四日

○按ズルニ、元亨釋書ニ、延暦十七年六月、定十大寺トアリ、此文ニ據リシモノナラム、本文十ノ下ノ五人ノ二字恐クハ衍、

〔拾芥抄 下本諸寺〕十五大寺

東大寺　興福寺(一守長者宅云々)　元興寺(又豐浦寺又建通寺)　又建興寺(十一面)　大安寺(元大官大寺)　藥師寺　西大寺

法隆寺　新藥師寺(聖武天皇)　大后寺　不退寺　京法華寺(光明皇后、號法華滅罪寺、)　超證寺(眞如親王)　龍興寺　招提寺(新田部親王尹呂宅、鑒眞和尙爲戒壇、)　宗鏡寺(實者、崇敬寺、)　弘福寺

已上、此外加崇福寺(近江志賀郡、號志賀寺、)梵釋寺(近江國志賀郡、延暦五年建立之、同十一年近江國水田百町勅施入、)檀林寺(嵯峨、橘太后、)延暦寺(延暦七年始建立、白河帝寛治三五十二御幸、東塔根本中堂、藥師、西塔釋迦、横川觀音阿彌陀、謂之三塔、)貞觀寺、元慶寺、仁和寺、醍醐寺、淨福寺、勸修寺(醍醐、右大臣定方建立、)謂之廿五大寺也、

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡十五大寺安居者、寺別請講師、讀師、及法用僧三口、(呪願、散花、唄、各一口、)并定座沙彌一口、講師沙彌各一口、其法用以上者、僧綱簡點、但講師者、寮允以上相共簡定、普請諸宗、三月下旬牒送治部、申

官、四月上旬請之、並起四月十五日盡七月十五日、分經講說、東大寺、法華、最勝、仁王、般若經各一部、理趣般若、金剛般若經各一卷、興福、元興、大安、藥師、西大、法隆、新藥師、本元興、招提、西寺、四天王、崇福等十二寺、法華、最勝、仁王、般若經各一部、弘福寺、法華、最勝、維摩、仁王、般若經各一部、東寺、法華、最勝、仁王、般若、守護國界主經各一部、〇下略

〔類聚三代格　三〕太政官符

應擇老僧充童子料米事

右被右大臣宣偁、奉勅、宜擇十五大寺僧年八十已上者、日別充童子一人料米一升停止、但停止待後符、

仁壽三年四月廿日

〔拾芥抄　下本〕廿一寺　公家恒例被行御讀經諸寺

廣隆寺　上出寺〇出下恐脫雲字　常住寺　珍皇寺　清水寺山城、中納言坂上田村丸、延曆十七造之、千手、　八坂法觀寺、淨藏加持塔、

聖神寺　東寺在九條、高野末寺、弘法大師、　西寺九條、前少僧都慶俊、　延曆寺　法性寺九條河原、貞信公、　貞觀寺　極樂寺昭宣公、阿彌陀、

元慶寺　仁和寺　下出雲　祇園　法成寺近衞北京極東御堂關白、治曆元乙丑十十八供養、　鴨神宮寺　六角堂六角北、東洞院西、六角面、名頂法寺、　佐井寺

〔三代實錄　三十八陽成〕元慶四年十一月廿九日己卯、是日詔分遣使者於二十一寺、修功德、以太上天皇聖體乖豫未有平復也、東大、興福、元興、西大、藥師、大安、法隆、招提、延曆九寺、各供佛燈油三升、名香六兩、細綿一連、供僧新錢三貫文、寺別請名僧二十口、始自來月三日、限以三日、可轉讀大般若經、分遣使者於新藥師、四天王、香山、長谷、壺坂、崇福、梵釋、現光、神野、三松、子島、龍門十二箇寺、並燒燈嚫綿、以修功德、

〔日本書紀　二十九天武〕九年四月、勅、凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺二三、以外、官司莫治、唯其有食封者、先後限三十年、若數年滿三十、則除之、且以爲、飛鳥寺不可關于司治、然元爲大寺、而官恒治、復嘗有功、是

五山

以猶入官治之例、

〔攝壤集上寺院〕五山(京師關東)

南禪々寺(五山之上、瑞龍山太平興國) 天龍資聖禪寺(靈龜山) 相國承天寺(萬年山) 建仁禪寺(東山) 東福禪寺(惠日山)

萬壽禪寺(京城山) 建長禪寺(巨福山、以下鎌倉五山、) 圓覺禪寺(瑞鹿山) 壽福禪寺(龜谷山) 淨智禪寺(金峯山) 淨妙禪寺(稻荷山)

〔日本略記〕一五山之事、京の五山は、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺、南禪寺は五山の上とて、五箇寺の頭上也、

鎌倉五山之事、建長寺、圓覺寺、淨智寺、壽福寺、大覺寺是也、

〔空華日工集〕永德二年五月七日、君(○足利義滿)問東西五山之起、余曰、昔曆應年間、先君(○足利義詮)秉鈞、創置五山、第一建長南禪(均等)第二圓覺天龍(均等)第三壽福、第四建仁、第五東福、其後淨智、淨妙、萬壽、遂旋以准五山而添入、遂號相洛五山、君又問、唐國亦有五山十剎否、余曰、日本五山十剎倣彼國也、君又問、唐五山位次、曰第一徑山、君曰、徑字義何如、曰、始山有兩徑、故亦曰雙徑、君曰、與金山同別、曰金山則在楊子江中、與焦山並屹立波中、皆名山、非五山也、蓋日本韻響、徑金相近也、君問徑山寺名、曰興聖萬壽禪寺、又問其次、曰靈隱景德禪寺、曰天童景德禪寺、曰淨慈報恩光孝禪寺、曰育王山廣利禪寺是也、

〔釋門事始考〕五山十剎

佛在世時、有鹿苑、祇園、竹林、大林、那爛陀五精舍、佛滅度後、有頂塔、牙塔、齒塔、髮塔、爪塔、衣塔、鉢塔、錫塔、瓶塔、盥塔十塔所、(又高僧傳興福篇論云、佛泥洹後、八國王請分舍利還國、及得盛舍利瓶與燒佛處炭、各俱起塔、於是十剎興焉、是依十誦律之說、)宋寧宗朝、衞王史彌遠奏立五山、(徑山、靈隱、天童、淨慈、育王、)十剎、(中竺、道場、蔣山、萬壽、雪竇、江心、雪峯、雙林、虎丘、國淸、)以準竺國、元朝更立三十六甲剎、(華藏、龍翔、仰山、東林、承天、大慈、金山、焦山、何山、保寧、天寧、永福、百丈、淸涼、廬山、圓通、開先、資福、壽山、香山、楓橋、鼓山、大覺、疎山、黃龍、智者、長蘆、東禪、報國、少林二祖、三祖、四祖、五祖、六祖、)於中擧龍翔(明改天界善世)爲五山之上、統三等諸剎、

〔圓覺寺文書 新編相模國風土記稿所載〕五山座位次第事

至德三七十、五山之上南禪寺、五山第一建長寺、天龍寺、第二圓覺寺、相國寺、第三壽福寺、建仁寺、第四淨智寺、東福寺、第五淨妙寺、萬壽寺、

右南禪寺者、爲勅願皇居之間、可爲五山之上者也、仍長老者爲三位者、可爲天龍、建長上、至自餘五山者隨京都鎌倉之所在、相互可爲賓主禮矣、

〔空華日工集〕至德三年七月十日、賜五山之上公帖、帖曰、南禪寺座位事、可爲天下第一五山之上之狀如件、至德三年七月十日、左大臣○足利義滿御判、義堂和尙、　十三日、朝旨陞南禪位於五山之上、今日謝恩上堂、台旆入山、點心罷、就于法堂、先拈相府帖云、這箇是左丞相欽奉陞旨、陞當山位居于五山之上、底公灦、鐘鼓一新、山林改觀、周信雖不敏、敢不遵承、維那對衆宣示、遂登座祝、

〔正法山誌 四〕南禪寺、大德寺、紫衣位次相論之時、南禪寺訴狀之寫、

夫南禪寺者、以龜山法皇勅詔、被成御建立、勅願所之事、御崇仰異于他、於宗門之位次者、天下第一紫衣之濫觴也、大德寺者元來位次十刹也、雖然後醍醐帝被準紫衣之時、宜相並南禪第一之上刹之御綸旨也、然處今度大德寺與南禪寺位次相論之儀、併相背後醍醐帝御綸旨者、甚以無其謂所詮任先規之旨、南禪寺之位次、彌以可爲天下第一紫衣之上者也、

天正廿年九月日

〔東都伽藍記 下〕鎌倉五山

一九拾五貫九百文　建長寺

一百四拾四貫八百三拾文　圓覺寺

一八貫五百八拾文　壽福寺

一六貫百拾文　淨智寺

一四貫三百文　　淨妙寺

公帖頂戴之方、紫衣長老、黃衣長老、

〔寺鑑下〕禪宗五山派。。。。

深紫衣	京五山ノ上東山	南禪寺〇中略
紫衣地	五京山第一嵯峨	天龍寺〇中略
黃衣地	京五山第二京都	相國寺〇中略
黃衣地	京五山第三東山	建仁寺〇中略
同	京五山第四大和大路	東福寺〇中略
同	京五山第五大和大路	萬壽寺

〔撮壤集上寺院〕尼寺

景愛寺以下比丘尼五山　通玄寺　護念寺　檀林寺　惠林寺

〔易林本節用集下〕關東鎌倉、〇中略又於尼寺五山者、景愛寺、護念寺、檀林寺、惠林寺、通玄寺也、

〔雍州府志四寺院〕尼寺五山、今不詳其處、竊考之、通玄寺、開基智泉尼、而今曇華院、古通玄寺之一塔頭也、景愛寺、開基如大尼、而在京北松木島也、今寶慈寺、古景愛寺之一塔頭也、檀林寺、開基檀林皇后、而在嵯峨、惠林寺、不詳開基、今京北寶鏡尼寺之西北有法慈寺、或稱南御所、是則古惠林寺之一塔頭也、護念寺、不詳開祖、今方廣寺大佛殿北、慈芳禪院邊田疇之名、有護念寺號、古在斯處乎、

〔大聖寺文書〕大聖寺は、景愛寺の開山如大和尚よりの的傳にて、代々紫衣を勅許の事にて候、のこる四山は、紫衣のれいなく候まゝ、するにて候、いか樣にもねがはれ候とも、勅許あるまじき事にて候、大聖寺、寶鏡寺は景愛寺の前住のよしみ、けいあい寺は、尼衆五山の第一にて候ゆへ、先代よりことに大聖寺は尼衆のかしらにて候ゆへ、古來より尼衆一のふれながしなどもいたされ候

事、もちろんにて候、かつしきのうちも、尼衆のかみこつき申され候、此事、後ならの院の勅書を、正親町院のかゝせられ候に、仙洞御在位の時、おゝ書をくはへられ候て、はいしやう申をかれ候へば、もつとも永代相違あるまじく候、もし末にて、か樣のさほうまぎらはしく成候事にてはとおもひて、此書をまいらせをき候、かへすゞゝ紫衣は、景愛寺にかぎりたる事にて候へば、のこる四山には、かつてれいなき事にて、もし末代に紫衣座上の事、まぎらはしき事に相成候てはと、かやうに申候事にて候、かしく、(○未詳、年代不蓋元祿寶永間、)

〔如大禪師小傳〕景愛尼寺開基如大禪師小傳

師號如大、別稱無外、後又呼無著、乳名千代野、城奧州禪門之女也、幼而仕掖庭、既笄配金澤越州守、(後號慧日禪門)而誕一女、(後號禪迦堂殿)鍾愛特渥、長而爲足利讃岐守淨妙寺貞氏公夫人、於是舅氏門閥彌蕃、閨敎尤厚、越州逝後、口口誦經呪、追薦冥福、且就于建長禪刹、請慶讃釋迦像及楞嚴經、佛光國師爲之陞座、敷演宗乘、覓薙紺髮、著禪衣、一翛翩然、入洛參聖一於慧日、機鋒峻口、穎悟卓犖、衆忌憚之、且覩其天姿絕妍、相議曰、道場不宜與窈窕尼同居、門下耆舊拒其參扣、一聞之呵曰、縱令衆散堂空、唯有一箇如大、則足矣、何憂我道之墮地哉、衆確執不可、從是絕慧日消息、師自把炬火、灼面成瘢、美惡乍殊、呼杖東歸、謁佛光于瑞鹿、一見機契、居常商確斯道、(○中略)植相氏民部大輔、二階堂山城守、及諸檀越、巨施淨財、剏建一宇於洛北松木島、名之景愛寺、(是佛光國師所命、蓋景仰佛姨母大愛道之意也、)師提振百丈懿規、而建叢林、以董衆席、追慕德山偉風、而折却佛殿、以置法堂、門庭峭峻、法道剏盛、諸官奏朝、昇位于尼寺五山之甲、國師將唱滅、與手書於師曰、汝受吾衣法、道風大行、

〔擁壤集(上寺院)〕十刹(京師幷諸國及甲刹)

等持禪寺(以下皆禪宗同)　臨川寺　眞如寺　安國寺　寶幢寺　普門寺　廣覺寺　妙光寺　(筑前)聖福寺

(上野)長樂寺　(豐後)萬壽寺　(駿河)淸見寺　(美濃)定林寺　(羽州)崇福禪寺　(阿州)補陀寺　(播州)寶林寺　(土州)國淸寺　(肥後)興國寺　(筑前)承天

寺　防州乘福寺　伯州光孝寺　備後天寧寺　圓福寺　興聖寺　下野雲岩寺　越前弘祥寺　越中興化寺　丹波安國寺　下野能仁寺　羽州光明寺　法雲寺　出羽崇福寺　奥州興德寺　越後米山寺　海會寺　信州開善寺　向州大慈寺　景德寺　大聖寺　龍翔寺　佛心寺　西禪寺　三聖寺

〔和漢禪刹次第〕十刹位次此位次者、康暦至永享年中也、太方五山位也、

山城州等持寺　京師開山夢窻國師、舊號凰凰山、義堂和上住持去此號、〇中略

臨川寺　西山、開山夢窻國師〇中略

筑前博多聖福寺　安國山、開山千光祖師〇中略

眞如寺　北山方年山開山佛光國師〇中略

安國寺　京師開山大同和上、中興開山無德和上、舊曰北禪寺、山號神龔、

豐後萬壽寺　蔣山、興聖萬壽禪寺、開山眞翁和上、佛印禪師、〇中略

駿河清見寺　巨鰲山、開山關聖上人〇中略

美濃定林寺　瑞雲山、開山佛光國師、〇中略

西山寶幢寺　覺雄山、大福田寶幢禪師、開山普明國師、〇中略

出羽崇禪寺　龍島山、開山普明國師、〇中略

東山普門寺　凌霄山、開山聖一國師、

京師廣覺寺　大明山、開山桑田和上、智覺禪師嗣大覺、

京師紫野大德寺　龍寶山、開山大燈國師、〇中略位可齊南禪寺公言、故著紫衣也、

山城州妙光等　天長山、開山法燈國師、無礙和上、爲開山、〇中略

播磨寶林寺　赤松山、寶林永昌禪寺、開山雪村和上寶覺禪師、

紀州由良興國寺　鷲峯山、西方興國禪寺、開山法燈和上、

筑前博多 承天寺　萬松山、開山聖一國師、相那謝氏、開山塔曰常樂院、

周防山口 乘福寺　南明山、開山鏡空和上、諱淨心、嗣南院國師、○中略

伯州 光孝寺　大雄山、光孝報恩禪師、開山南海和上、諱寶洲、嗣桃源、桃源嗣月船、月船嗣聖一、

備後 天寧寺　海雲山、開山普明國師、○中略

越前安居庄 弘祥寺　太治山、弘祥護國禪寺、開山別源和上、○中略

越中十刹 興化寺　黄龍山、開山恭翁和上、諱運良、佛林惠日禪師、嗣由良開山法燈、

丹波 安國寺　景德山、安國光福禪寺、開山天庵和上佛性禪師、嗣佛國禪師、

出羽 光明寺　東山、開山在中和上、

播州 法雲寺　金華山、開山雪村和上寶覺禪師、

筑前太宰府 崇福寺　橫嶽山、萬年崇福禪寺、開山大應國師、

越後 米山寺　醫王山、開山義堂和上、

信州 開善寺　疊秀山、開山淸拙和上大鑑禪師、

河州 補陀寺　南明山、安國補陀寺、開山夢窓國師、嘉吉二年、齒于十刹、

日向 大慈寺

京師 妙心寺　正法山、開山有圓成國師開基、位齊南禪、故著紫伽梨、

關。東。十。刹。

相州 瑞泉寺　錦屏山、開山夢窓國師、

同 禪興寺　福源山、開山大覺禪師、

同 東勝寺　靑龍山、開山西勇和上、

同 萬壽寺　乾明山、開山佛光禪師、

上野州 長樂寺　世良田山、開山榮朝和上、

豆州 國清寺　開山無礙和上、佛與禪師、嗣佛國、

大慶寺　靈松山

圓福寺

相州善福寺　海雲山

同東光寺　醫王山、開山月山和上、諱友桂、嗣一山、

能仁寺

興德寺

〔建武以來追加〕一東福寺事 應安五八十七、布施入奉行、

爲大刹之位者、任被定置之法、住持者、經歷三年兩班者可送一箇之處、既違背法則、任雅意、朝進暮退之條、非五山之一列歟、所詮至如然之住持兩班者、於公方不可用、東堂耆舊名字之上、他寺會合之列座、同所被停止也、以此趣可被觸寺家矣、

一同廿八日御沙汰 同奉行

東福寺事、背被定置之法、非五山列之間、武家雖不可相綺、自今以後可守法則之旨、大衆一同依申子細、所有其沙汰也、然者早先以耆舊兩班、可致勤行之由、可被仰寺家之、

〔成氏年中行事〕一同月○正十六日、建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺淨妙寺、並ニ十刹諸山之長老以下、御禮ニ被參、公方樣御直垂、御荷用之人々モ直垂ニテ御茶アリ、メシノ御茶ハ、御一家中ニ持參、其外ハ、只奉公人衆ト、建長寺御茶ヲバ御荷用同樣ニ持テ參、其以下ハ、先メシヲ持テ被參、五山之長老、並東堂ニハ、御門送、御緣マデアリ、十刹ニハ、御座ノ內ニテ御禮有、諸山ヨリ、單寮同後堂、首座、書記、藏主、侍者、喝食、東班ハ、提點都寺以下無御禮、其家之住僧、極樂寺、寶戒寺、成就寺、淨光明寺、覺園寺、慈恩寺、大樂寺以下被參、香ノ衣被著タルニハ、御緣マデ御出、香之袈裟計掛ラレタルニハ、御座ノ內ニテ御禮有之、是モ御茶有、其後、太平寺ノ長老、公方樣姬君 同天壽院殿、東慶寺、管領妹也 松岡長老、同瑞松院殿樣同積善院殿御出、御茶以後御酒數獻、國恩寺、護法寺、禪明寺ニモ有御茶、此三箇寺モ、比丘尼五山ノ內也、仍同日、海岸寺殿御出、金澤之稱名寺ハ御茶計也、御茶持參アツテ、御前ニ置、直ニ受取コトナシ、不知案內ニテハ可有越度之間、具記之、大御所樣御出ノ時ハ、御女房樣、御茶持參之時ハ直ニ被受取也、毎年、公方樣モ御禮ニ御出アル也、

〔空華日工集〕應安八年〇永和元年九月十八日、管領上杉兵部〇憲能來問病、且就和會報恩永代之儀式、余曰、宜早辨後事、兵部曰、新寺之事一切任師意、余曰、昔十方諸檀爲先師造寺、不可勝計、特以天龍則爲十方刹、兵部曰、吾聞、臨川以下大小寺院、皆爲度弟院、今此瑞泉亦然也、

〔蔭凉軒日錄〕永享七年八月廿七日、出羽國崇禪寺、以有先例始爲十刹列、新命周悟西堂御判卽出矣、

寛正三年卯月十四日、諸五山制法、以普廣院殿〇義教足利御判之例、可被載公方樣之御判并制法新文之事伺之、

〔空華日工集〕永德二年五月四日、君〇義滿足利又話及東西二府各置十刹事、余曰、寺多則住持濫據者亦多、切莫容易添寺、且啓曰、今時住持動歩濫進、或曰、某有力宜修造者、或云、某人口老宜稱長老云々、殿下愼擇其材堪住持者、則有道者進、濫稱者退、是公選也、君領之、　七日、寶篋院〇義詮忌、府君未入寺、僧錄先至、懷出一書、乃佐々木龜壽殿以大慈院付余之狀也、於是余辭不得、府君入寺、點心罷、僧錄與府君議以東西十刹、君顧問余、余曰、添置十刹似乎崇僧室、而恐濫進之徒得意、有道之士差避、如彼唐土宋朝、每州置天寧、有一尊宿〇忘名大息云、住持之濫始於此矣、今又承新規改度第院爲十方、則許預十刹云々、余伏以臨川已爲十刹首、是度第也、當寺及普門、亦皆度第、諸方以爲何如哉、府君僧錄皆領之、

〔半陶藁一〕妙興禪寺幹緣疏并序

尾州路長島山妙興報恩禪寺、乃特謚圓光大照禪師插草之地、而大應國師爲之第一祖也、安衆二千指、一派不以甲乙主之、而延十方有道衲子以爲住持也、初貞治帝有旨、陞位于甲刹、爾來一百餘歲、殿堂門廡鐘魚鼓板蔚爲一方叢林也、於是應仁以來、四海鼎沸、佛氏之廬之於天下、如經楚人一炬、實濁亂壞劫之秋也、而本山巋然猶存于今日、可謂天幸也、雖然寺乏恆產、時當艱厄、日往月來、風震雨凌、所謂殿堂門廡覆苦爲之墜矣、椽梠爲之脫矣、其如此、則蕩爲荒墟者、可翹足而待焉、而弊之甚者、大佛殿爲最也、

〔蔭凉軒日錄〕文明十七年七月十八日、肥後國高瀨山淸源寺、甲刹事望之、以鹿苑院證狀白之、寶篋院殿〇足利義詮御書幷門徒諸老連署、肥後守護菊地肥後守重朝證狀、供台覽、相公〇足利義政曰、甲刹事、其數不相定乎、答白、不相定、近年有其例哉、答白、比年事不知之、亂前、季瓊東堂居蔭凉日、肥後國竹林寺、始准甲刹之列、雖不可有容易御免云々、寶篋院殿御書云、

天下靜謐御祈禱事、殊可抽丹誠之狀如件、

觀應三年卯月廿一日　　御判

淸源寺長老

上卷　淸源寺長老　　義詮〇中略

以上四通、供台覽、乃御免之由被仰出、

九月十五日、肥後國淸源寺、可爲諸山之列之御判事、以同國竹林寺、信濃國開善寺御判案文、供台覽、以舊例可被成御判之由有台命、去長祿二年戊寅六月廿一日、竹林寺事、季瓊被申沙汰、以其書立供台覽、

信濃國開善寺可爲諸山列之狀如件

曆應元年七月十七日　　左兵衛督御判

謹上　淸拙和尙此一通、自建仁寺出之

肥後國菊池郡眞如山竹林禪寺可爲諸山列之狀如件、

月日此一通自東福寺出

十八檀林

〔檀林譯書〕十八檀林御定の來由は、東照神君樣、元來淨土の法門深く御信崇、殊に觀智國師に厚き御歸依によつて、慶長五年、關ヶ原御出陣の節、增上寺へ被爲成、御門出に、法問被仰付候に付、國師則衆を集め、天上天下唯我獨尊の法則を論議せられ、〇中略御門出を祝し奉り、其意を寓して、一首

を詠じ被ᴸ奉ᴸ呈ᴸ之、其歌に、

草も木も枯れたる野邊に只ひとり松のみ殘る彌陀の本願

神君樣御喜色不ᴸ淺、此度の軍に勝利あらば、十八公に擬して、精舍十八區を經營し、本願の妙用を弘め、永く天下安全の祈願をなさしめんと、上意被ᴸ爲ᴸ有候處、果して御利運を開かせ給ひ、御歸城の後、國師と御評議ありて、御誓約の通、於ᴸ關東ᴸ十八檀林御定、或は舊地或は新規御開創にて、追々十八の數備足仕候、且右爲ᴸ永式ᴸ三十五箇の御條目被ᴸ下、寺格結構に被ᴸ仰付ᴸ候、依ᴸ之永く御祈願の道場となり、盛んに淨敎を弘通仕候事、偏に神君樣御恩惠と奉ᴸ感荷ᴸ候、且其開基等の譯各寺より書出候に付、其旨左に申上候、〇下略

〔見聞秘談抄〕御葬禮沙汰之事

雅樂頭〇酒井申上ケルハ、〇中略其上御當家ノ御事、御先祖御口夫ノ時、三州侍與平反逆ノ時、大樹寺ニ御入、既ニ御滅亡ニ及バン時、淨土ノ僧徒一揆ヲ起シ、僧侶三百人、出世ノ僧十八人、欣求淨土ノ御旗ヲ差テ十八人討死ヲトゲ、大敵ヲ切散シ、全ク御運ヲ開カレ候テ、今ニ長久ニ御座候、然バ淨土宗增上寺ニシクハアラジト奉ᴸ存候ト申サレケル、綱吉公聞召、〇中略乍ᴸ去夫敵地ニ入時ハ謀ヲ以ストカヤ、御先祖此報志ニ十八人ノ僧徒ノ追善ニ十八檀林ヲスヱ、淨土ノ繁榮時ヲ得タルモ、爰ニ天台止觀ノ法流、御先祖御心ヲ盡サレ、上野ヲ御取立有テ、比叡山ヲ移シテ、東叡山トアガメ、一品親王ノ座主ヲ呼下シ奉リ、江府ノ鎭守トシテ、代々ノ宗門トシ給フ、〇中略然ル上ハ、東叡山ニ葬送シ奉ラン條、各左樣相心得可ᴸ在トノ事也、

〔靈屍三〕關東十八檀林　淨土宗關東檀林十八所

光明寺鎌倉　壽經寺小石川傳通院　增上寺芝第一座今　勝願寺鴻巢　常福寺瓜連　弘經寺飯沼　大巖寺生實　蓮馨寺川越　弘經寺結城　東漸寺小倉　淨國寺岩槻　大善寺瀧山　大念寺江戸崎

大光院新田　幡隨院神田　善導寺館林　靈岩寺靈岩嶋　靈山寺湯嶋、今移淺草、非檀林

〔江戸名所圖會三〕三縁山增上寺、廣度院と號關東淨家の總本寺、十八檀林の冠首にして、盛大の佛域たり、

〔諸宗階級〕學席階級幷律僧行儀覺

一紫衣檀林三ヶ寺　飯沼　弘經寺
　　　　　　　　　瓜連　常福寺
　　　　　　　　　新田　大光院

右闕如之節ハ、是又香衣檀林十貳ヶ寺之內、方丈書上之上、移轉被仰付候、

一鎌倉光明寺　小石川傳通院

右闕如之節ハ前文紫衣檀林三ヶ寺之內、方丈言上之上、移轉被仰付候、

一增上寺　知恩院

右兩山闕如之節ハ、傳通院光明寺之內より、住職被仰付候、

右所化初入寺ゟ、檀林住職被仰付候、次第階級依御尋申上候、以上、

享和元辛酉年十二月　　增上寺役者　察常
　　　　　　　　　　　　　　　　　秀海

〔諸宗階級〕學席階級幷律僧行儀覺

一引込紫衣七箇寺　金戒光明寺　寶産院　清淨華院　天徳寺　知恩寺　誓願寺　大樹寺

右闕如之節ハ、香衣檀林十貳ヶ寺之內、方丈書上之上、轉住被仰付候、但右十貳ヶ寺之內、御當山役者相勤候僧ハ、爲役儀勤功引込紫衣七ヶ寺江ハ、方丈書上不被申候仕來ニ御座候、但當人達而相願被書上候ハ、格別之儀ニ御座候、

〔寺鑑 上〕獨禮寺院

〔元寛日記〕元和二年正月六日、秀忠公御裝束白書院御上段ニ御著座、增上寺御禮、御右之方御下檀ニ著座、次ニ傳通院、大光院兩人一人宛御禮、誓願寺、大養寺、本誓寺、幷增上寺役者二人、右進物持參、一同御禮、其後大廣間ヘ出御、御上壇ニ御著座、獨禮之諸出家於下壇御禮、右畢而御納戸構ヘ入御、此間ニ獨禮之諸出家退出、于時下壇之御障子開之、下壇ニ御立座、諸出家諸神主一同御禮、

〔東武實錄 三十二〕寛永八年正月六日、例年ノ如ク、出家、社人等御禮有リ、巳ノ刻、御廣間ニ出御、御長袴ヲ著セラル傳通院、智恩院、大念寺、新智恩寺、大善寺、淨福寺、弘經寺、大巖寺、各獨禮、コレヨリ以下、二ケ寺宛出テ御禮、天台、眞言、禪宗、日蓮宗、時宗、社家、山伏、伊勢內外宮兩長官、御祓ヲ獻ズ、御上壇ニ、是ヲ置キ、洲御床ニ是ヲ納ル、內宮總中山崎八幡ノ神主、以下是ヲ略ス、

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、法相宗本寺者興福寺也、三論宗本寺者元興寺、律宗本寺者西大寺也、倶舍宗本寺者園城寺、成實宗本寺者大安寺也、華嚴宗本寺者東大寺也、天台宗本寺者延曆寺也、眞言宗本寺者東寺也、已下是を八宗と云、此外四宗有之、禪宗本寺者南禪寺也、淨土宗本寺者知恩院也、日蓮宗本寺者經王寺也、時宗本寺者古寺也、初の八宗と後の四宗と合せて十二宗也、天竺にては五百三宗也、唐土にては三十二宗也、日本にては十二宗也、

〔享保集成絲綸錄 二十一〕寛文五年七月十一日

定 ○中略

一本末之規式不可亂之、縱雖爲本寺、對末寺不可有理不盡之沙汰事、○中略

右條々諸宗共可堅守之、○下略

〔憲敎類典 四ノ十四下 寺社〕寛保元辛酉年十一月

諸宗之寺院、本末論或ハ祿役、座階、法流、住番、世牌等、其外法儀ニ掛リ候公事訴訟ハ、其祿所觸頭、本

寺等ニ而逐一遂吟味、依怙贔屓無之可令裁行事ニ候、申付を致違背不相請候ハヽ、其咎可申付候、其上ニも及難澀候者ハ、奉行所江可差出候、吟味之上急度可申付候、尤他宗又ハ俗人江懸り候出入ハ、只今之通、添簡を以可差出候、

右之通、諸宗一統可相心得候、

〔寺社法則上〕延享二丑年六月廿四日　御書付寫

寺院本末爭論之事、寬永十年、諸宗ゟ差出候寺院本末帳を以取捌可申儀勿論ニ候、若本末不改候て不叶事有之バ、伺之上裁許可申候、但寬永以來裁許申付候內、本末帳面と相違出來之分、此節猥ニ相改候儀ニて無之候、

右寬永十年差上候帳面全備無之樣ニ相見候間、右帳面ニ載候寺格之寺院不足之分、此節帳面取置可申事、

〔諸宗階級〕新義眞言宗僧侶成立次第

一本寺と申中ニ、上方本寺と、田舍本寺と申譯御座候、上方本寺ハ、御室、嵯峨之兩御所、醍醐智積、初瀨、高野等ニ御座候、是ハ偏ニ、唯法流ニ本寺ニ而、支配之本寺ニハ無御座候、仍右本寺方之末寺、關東ニ數多御座候得共、新義眞言宗之分ハ、乍恐御兩君樣任御朱印御條目、四箇寺ニ而支配仕候故、本寺方ゟ差綺被申候事ハ、決而相成不申候、關東田舍本寺と申ハ、法流本寺兼而支配本寺ニ御座候故、其末寺之分江ハ公用觸達ハ勿論、其外住職進退等、不殘支配仕事ニ御座候、

一直觸格院本寺と申候而、前段申上候、御室嵯峨等之法流等ニして、相應ニ門徒末寺有之候得共、非法林候、所化を集メ論學提撕仕候義ハ、決而相成不申候、仍夏冬兩講論學之節ハ、其最寄之會場談林所江、門末之所化共自分之弟子迄も差出申候、四ケ寺之末寺ハ、皆法流等にして、則支配末と格院ニ御座候、○中略

右新義眞言宗僧侶成立之旨趣、前書之通相違無御座候、以上、

享和元年酉十二月　彌勒寺　根生院　圓福寺　眞福寺

〔續々泰平年表〕安政二年三月三日御達〇中略本寺と唱候內、大本寺、中本寺、小本寺、本寺、並等之名目有之候得共、一二箇寺にても、末寺一統有之候分は、相除候積り、但諸國祿所懸所、其外末寺等は無之候共本寺も無之、一本立候類之大地、或は寺格宜敷分は、其時宜次第、是又長門守方へ可被申聞候、御朱印地之分、差別無之事、

〔東大寺要錄六〕末寺章第九

新藥師寺、〇中略笠置寺、〇中略普光寺、〇下略

〔醍醐雜事記二〕圓光院末寺　筑前國三宅寺

〔今昔物語三十一〕祇薗成比叡山末寺語第廿四

今昔、祇薗ハ本山階寺ノ末寺ニテナム有ケル、其ノ只東ニ、比叡ノ山ノ末寺ニ、蓮花寺ト云所有リ、而ル間、祇薗ノ別當ニテ、良算ト云フ僧有ケリ、勢德有テ世間叶タリケル僧也、其レニ、彼ノ蓮花寺ノ堂ノ前ニ、微妙キ紅葉ノ有ケルガ、十月ノ比色ノ微妙カリケレバ、祇薗ノ別當良算、折ニ遣タリケルヲ、蓮花寺ノ住僧ノ法師、心奇怪也ケレバ、此ヲ制シテ云ク、祇薗ノ別當德人ニ坐カリトモ、何デカ天台末寺ノ內ナル木ヲバ、心ニ任セテ案內モ不云ズシテ可被折キゾ、極タル非常ノ事也ト、良算ガ使、此ク被制テ、否不折テ返テ、此ナム申シテ折セ不待ヌト、良算ニ云ケレバ、良算大キニ嗔テ、此ク云ナラバ、同クハ其ノ木皆伐テ來ト云テ、從者共ヲ出シ立テ遣ケル程ニ、彼ノ蓮花寺ニテ制シツル法師、定メテ良算從者共遣セテ、此ノ木ヲバ伐セムズラムト悟テ、良算ガ從者共ノ不來ヌ前ニ、法師自ラ其ノ紅葉ノ木ヲ、根際ヨリ伐臥セテケリ、然レバ良算ガ使行テ見ルニ、木ヲ伐テケレバ、返テ良算ニ其ノ由ヲ云ケレバ、良算彌ヨ嗔リケリ、而ル間、橫川ノ慈惠僧正、天台座主トシ

テ、殿下ノ御修法シテ、法性寺ニ有ケルニ、彼ノ法師木ヲ伐ルマヽニ、法性寺ニ急ギ參テ、此ノ由ヲ座主ニ申ケレバ、其ノ時ニ、座主肩ヲ並ブル人無カリケルニ、大キニ嗔テ、良算ヲ召シニ遣タリケレバ、良算我ハ山階寺ノ末寺ノ司也、何ノ故ゾ天台座主我ヲ心ニ任セテ可召キゾト云テ、放言シテ不參ザリケレバ、座主彌ヨ嗔テ、山ノ所司ヲ呼下シテ、其レヲ以テ祇薗ノ神人等代人等ノ延暦寺ニ寄スル寄文ヲ書儲テ、其レニ判ヲ加ヘヨト押責ケレバ、神人等被責侘テ、判ヲ加ヘテケリ、其ノ後座主、今ニ於テハ、祇薗天台山ノ末寺也、早ク別當良算ヲ可追却キ也ト云テ追セケルニ、良算敢テ事ト不爲ズシテ、[ ]ノ公正平ノ致頼ト云フ兵ノ郎等共ヲ雇寄セテ、楯ヲ儲ケ、軍ヲ調テ待ケル間ニ、座主此ヲ聞テ、彌ヨ嗔テ、西塔ノ平南房ト云フ所ニ住ケル睿荷ト云ケル僧ハ、極タル武藝第一ノ者也、亦彼ノ致頼ガ弟ニ入禪ト云フ僧有ケリ、極タル兵也、此ノ二人ヲ祇薗ニ遣テ、良算ヲ令追ルニ、此ノ二人彼ノ所ニ行テ、良算ガ儲タル軍共ニ向テ云ク、汝等濫ニ箭ヲ放テ惡事ヲ至サバ、後ノ爲ニ惡カリナムト誘ケルニ、良算ガ雇タル致頼ガ郎等共、入禪ヲ見テ早ウ山ノ禪師殿ノ御スルニコソ有ケレト云テ、後ノ山ニ逃去ニケリ、心ニ任セテ良算ヲ追却シテケリ、然テ睿荷ヲ別當ニ成シテ、令執行ケルニ、其ノ後山階寺ノ大衆發テ、公家ニ訴ヘ申ス樣、祇薗ハ往古ノ山階寺ノ末寺也、寺ノ其レヲバ、何カデカ恣ニ延暦寺ニ被押取ム、速ニ本ノ如ク、山階寺ノ末寺ト可爲キ由ヲ可被仰下シト、度々訴ヘ申シケル程ニ、御裁許ノ遲々也ケルマヽニ、山階寺ノ若干ノ大衆京上シテ、勸學院ニ著ケリ、然レバ、公ケ聞シ食シテ、驚テ御沙汰可有カリケルニ、其ノ前ニ、彼ノ座主ノ慈惠僧正失ニケリ、然テ其ノ沙汰、明日可有ト、既ニ被仰下タリケルニ、山階寺ノ大衆ハ、皆勸學院ニ有ケルニ、其ノ寺ノ中算ハ、宗ト此事ヲ可沙汰キ者ニテ有ケルニ、勸學院近キ小家ニ宿テ居タリケルニ、其ノ夕サリ方、前ニ弟子共ナド數居タリケルヲ、俄ニ中算只今此ニ人來タラムトス、其達暫ク外ニ出デヨト云ケレバ、弟子共皆去テ有ケル程ニ、人外ヨリ入來ルトモ不見エヌニ、

中算人ト物語スル音ノ聞エケレバ、弟子共怪シト思ケル程ニ暫許有リテ、中算弟子共ヲ呼ケレバ、皆出來タリケルヲ、中算此ニ山ノ慈惠僧正ノ御タリツル也ト云ケレバ、弟子共此ヲ聞テ、此ハ何カニ宣フ事ゾ、慈惠僧正ハ早ウ失ニシ人ヲバト思ケレドモ、怖シクテ、物モ不云デ止ニケリ、然テ明ル日、此ノ沙汰有ケルニ、中算風發タリト云テ、沙汰ノ違ニ不出ザリケレバ、山階寺ノ方ニ、指ル申シ沙汰スル人无カリケルニ依テ、其ノ御裁許不切ザリケレバ、大衆ドモ返下ナドシテ、遂ニ祇園ハ比叡ノ山ノ末寺ト成畢タルナリケリ、

〔今昔物語三十一〕多武峯成比叡山末寺語第二十三

今昔、比叡ノ山ニ、尊叡律師ト云フ人有ケリ、○中略道心ヲ發シテ、本山ヲ去テ、多武ノ峯ニ籠居テ、偏ニ後世ヲ思テ、念佛ヲ唱ヘテ有ケルニ、多武ノ峯、本ヨリ御廟ハ止事無ケレドモ、顯密ノ佛法ハ無カリケルニ、此ノ尊叡、多武ノ峯ニ住シテ、眞言ノ密法ヲ弘メ、天台ノ法文ヲ敎ヘ立テ、學生數出來ニケレバ、法花ノ八講ヲ行ハセ、卅講ヲ始メ置テ、既ニ佛法ノ地ト成ニケルニ、尊叡、此ノ所此ク佛法ノ地トハ成シツト云ヘドモ、指ル本寺無シ、同クバ此レヲ我ガ本山ノ末寺ト寄セ成テムト思ヒ得テ、尊叡彼ノ慶命座主ノ關白殿ノ思エ殊ニシテ、親ク參ケルヲ以テ、殿ニ御氣色ヲ取ケレバ、殿此ヲ聞食シテ、尤モ吉キ事也ト被仰テ、速ニ可寄シト被仰下ニケレバ、多武ノ峯ヲ妙樂寺ト云フ名ヲ付テ、比叡ノ山ノ末寺ニ寄成シケリ

〔百練抄七近衞〕久安三年四月七日、天台僧綱、以越前白山可爲延暦寺末寺之由訴申、無裁許、

〔明月記〕建保元年十月廿八日、巷說、清水寺事、本寺出寄文之上、不聞知食之由、被仰放山門、仍山僧等入坐彼寺、寺僧取佛像逃去、或云、出奔南京云々、南北衆徒犯亂、本寺本山魔滅、只在此事歟、

〔太平記二十四〕依山門嗷訴公卿僉議事

日野大納言資明卿被申ケルハ、○中略後鳥羽院御宇、建久年中ハ、榮西能忍等禪宗ヲ洛中ニ弘メシ

時、南都北嶺共ニ起テ及嗷訴ニ、建仁寺建立ニ至テ、遮那止觀ノ兩宗ヲ被置上ヘ、開山以別儀可爲末寺由、依被申請被免許候キ、〇中略然ラバ山門訴申處、其謂アルカトコソ存候ヘト、無憚處ゾ被申ケル、

〔法觀寺文書〕六條東洞院圓福寺事、爲法觀寺末寺之由、被聞食之旨、院御氣色所也、仍執達如件、

曆應四年六月十五日　大藏卿雅仲

圓日上人御房

〔天文日記〕天文十年八月十九日、本證寺と報土寺、就本末相論事、去春以來、左右方捧訴狀訖、仍唯今令裁斷之、

一報土寺奉安之本尊ニ、前住御判を被加候、〇中略是又可爲支證也、

一對本證寺、報土寺不勤諸役之上は、直參之儀は顯著也、

一於出口蓮如之時、報土寺令直參候、其剋、本證寺へ報土寺不致其屆之段は已出口へ參候時、本證寺ハ、就濃州之儀、蒙勘氣候間、報土寺ハ、親類事候間、無對面候條、種々懇望申、本證寺へ音信仕候間敷候由堅申定、直參候時は、不能案內之段尤候右三ヶ條之趣、本證寺、報土寺へ、以兵頼申付候、本證寺も納得之由言上候也、

〔鹽尻二十八〕初め四ヶ本寺とて、知恩院、知恩寺、金戒光明寺、清淨華院を鎭西善導寺派の本寺としたる、後柏原院勅して知恩院を別て、淨土宗總本宗と定めさせ給ひし後は他に異なり、されども所化　出世色衣を聽さるゝ事は、四寺某末寺を執奏して各綸旨申下したる、然るに元和以來は、東武の增上寺にて所化の年臈を考へ、知恩院より傳奏に申上て綸旨を拜領す、是故外の三ヶ寺は本寺の名のみにして、末寺の出世をばいろふ事なし、西山派はむかしの儘にて、光明寺禪林各執奏す、

〔社寺取計留〕御舊記御下ゲ之申上

西本願寺、興正寺爭論之儀ニ付、私共見込之趣、別紙を以申上候處、承應、明暦之頃、井伊掃部頭殿取計ニ而、興正寺御咎有之候趣之儀、今般雙方被仰立之書面齟齬いたし相聞申候、依之明暦度之御舊記御糺御座候様仕度奉存候、別紙私共見込之通可取計旨被仰出候上ニ而、興正寺使者使僧江申聞候利害ニも右明暦之御舊記を以申聞候ハヽ、別而屈伏可仕儀と奉存候間、右御舊記拜見仕度、此段申上候、

亥三月（寛政三亥年）

牧野備前守

寺社奉行

〔德川禁令考後聚三十五 司法書道則〕午十二月廿三日伺

淺草万隆寺　現住光圓御仕置相伺候書付

大岡越前守

國府臺　總寧寺

越生　龍穏寺

富田　大中寺

右三ヶ寺訴出候ハ、淺草万隆寺現住光圓儀、不埒ものニ而、從本寺加州大乘寺、退休出寺申付候得共、違背仕候、光圓住職不埒、殿堂及大破、關三ヶ寺ニ而吟味願候旨、從本寺使僧差越候ニ付、於三ヶ寺遂吟味候處、光圓不埒不行跡之儀共有之候得共、畢竟一宗之外聞如何ニ付、法中之仕置ニも可申付處、光圓巧言以、三ヶ寺申付をも違背仕候ニ付、於奉行所詮議願候旨申ニ付、大乘寺役僧崇供と申ものをも呼寄、相尋候處、万隆寺檀方之内拾三人より、光圓住職不埒之旨書付差出候、右拾三人之内、南茅場町野間屋甚四郎手代傳七と申もの方江、光圓逢候新吉原町遊女之方より之文有

別院

之、惡所江參候證據ニ爲見候間、致詮議候處、左之通御座候、

午十一月十八日掲リ屋ニ入　淺草万隆寺現住　光圓

〔社寺取計留〕直末、文化二丑閏八月、豐前守殿江青山大膳亮家來問合、

書面、洞泉寺儀、妙心寺直末寺願之儀ハ、同寺相願候上、許容有之候ハヾ、御聞屆不苦候へ共、古跡地之譯添翰之儀ハ、御聞屆無之方與存候、

丑閏八月

〔武江雜纂四十一〕東照大權現様、本願寺御取建以來、御代々様御厚恩不淺思召、當上様猶以御疎略不被思召之旨被仰聞、御尤至極奉存候、末々迄奉任御意、萬事御本寺之御下知違背仕間敷事、對公儀不義之輩御座候而、何様頼申共、坊主共者不及申、知音近付、假令雖爲旦那、一味仕間敷、早速其旨言上可仕候事、

公儀聊輕存間敷之旨、從御本寺被仰聞候趣、堅相守可申候、

右之條目、雖爲一事於違犯者、忽洩如來之本願、別而蒙祖師之冥罰、永可墮地獄者也、依誓詞如件、

天保九戌年　何國何郡何村何寺　法名判

下間治部卿殿　下間大藏卿殿　下間式部卿殿　粟津陸奥介殿　宇野相馬殿

上田織部殿

右之通、末寺之分、御府内諸國ともニ、當春より夏迄之内ニ、追々上京血判不殘相濟候得ば、右誓詞寺社奉行所へ差出候との事、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年二月庚申、從五位下菅野朝臣永岑言、亡父參議從三位眞道朝臣、奉爲桓武天皇所建立道場院一區、在山城國愛宕郡八坂鄕、雖其疆界接八坂寺、而其形勢猶宜別院、由是道俗號八坂東院、伏望限以四至、別爲一院、置僧一口、永俾護持、許之、

掛所

〔續日本後紀 仁明九〕承和七年七月戊寅、以播磨國揖保郡大道寺、賀茂郡淸妙寺、觀音寺、並爲天台別院、

〔續日本後紀 仁明十四〕承和十一年四月壬午、參議式部大輔從四位上滋野朝臣貞主、以在西寺南居宅一區、捨爲道場、仍言、私建道場、是格之所禁也、雖是舊宅、事似新建、但此家之爲體、前臨淵水、後隔佛地、去寺迫近、殆同伽藍、凡寺邊二里本禁殺生、而家人奴婢動事漁網、近寺之弊、還犯憲法、望請使入西寺、命爲別院、號其名曰慈恩院、東大寺僧傳燈住位圓修永爲別當、三綱在別、又自此以後、別當三綱隨檀越願、令宛行之者、勅聽之、

〔三代實錄 陽成三十二〕元慶元年十二月十六日壬午、以禪院寺爲元興寺別院、

〔三代實錄 陽成三十四〕元慶二年八月十三日丙子、勅以加賀國石川郡止觀寺、爲天台別院、

〔三代實錄 陽成四十〕元慶五年十一月九日癸丑、以陸奥國安積郡弘隆寺、爲天台別院、

〔三代實錄 陽成四十六〕元慶八年九月十日丁卯、權僧正法印大和尙位遍照奏言、雲林院者、故無品常康親王之舊居也、親王出家爲沙門、貞觀十一年二月十六日、以此院付囑遍照曰、深草天皇〇仁明賜此居之、天皇登遐、常康落髮、昊天罔極、德猶難報恩、欲永爲精舍、令學天台之敎、伏思、元慶寺永置年分度僧三人、傳天台之法、行試度之道、請以爲元慶寺別院、成親王之心願矣、但院中雜事擇遍照門徒之堪幹事者、令其勾當、勅依請聽之、

〔山槐記〕永曆二年〇應保元年四月七日己酉、今朝、上皇〇後白河幸園城寺別院平等院、〇中略是長吏前大僧正〇行慶建立此堂、寄進御祈願寺云々、仍御幸、

〔多武峯略記 上〕第八本寺

右當寺者、叡山末寺、無動寺別院也、

〔本阿彌行狀記 下〕信長公、比叡山を燒捨られし時、梶井宮、延曆寺の座主として、東塔の圓融房に成らせられし所、信長ひそかに使者を以て、叡山燒討に仕べき間、御下山相願候由、言上之處、當分之

子院

御座所無之、御迷惑之段被仰入候故、左あらばとて、俄に大原に寺を建て、夫へ移し入奉られしとぞ、今に御かけしよにてあるよし、此寺は、今大原村極樂院の御境内の中に、礎石計殘りありとなん、

〔白石紳書十〕一東本願寺江戸の御堂の事は、三州の一向寺、長敬寺、滿正寺壽敬寺などいふ僧等、三河御譜代衆の旦那寺なる故に、江戸へ移り來りて、寺地を賜てありし、彼壽敬寺、大きに力を費して、公儀を經て、終に本願寺のかけ所をとりたてゝ、本願寺へ參らせしなり、

〔諸宗階級〕東派淨土眞宗一派階級之次第

一連枝ハ、御門跡御兄弟を連枝と唱候、本山之掛所江入院被致、寺務被相願候も有之、是又連枝と唱候、尤代隔り、御血脈とほく相成候後は、院家ニ相成候、當時者、連枝無御座候、且連枝格と唱候も有之、當時越後高田本誓寺、水戸磐船願入寺、江州長濱大通寺、此三個寺ハ連枝格にて御座候、

○中略

享和二戌年四月　淺草本願寺輪番　東坊

長覺寺

〔鹽尻五十三〕支院。俗にいふ末寺也

〔三緣山志五〕第八子院權輿

子院は塔頭なり、本院に對し名く、我宗の制掟として、他山諸寺院の子院に住すれば、たとへ身に香衣上人の號を賜り、年老耆長たりといへども、皆選擇部の次座に列りて、唱導、下炬、演說、敎化をゆるさず、去かはあれど、御當山の子院は、他寺の子支に異なり、一旦學席に列り、又入番院務の衆數に加はり、年月を經、二脈相承ののち、上人號の勅許を蒙り、其後有緣法流の跡を補任し、御靈屋の勤仕を本務とし諸侯の宿坊をかぬ、いづれも配領を賜り、資什をわかちて、小檀もあり、互に開

祖の法流を續續し、淺深の昇沈をみださず、德長學功といへども、越階を許さゞれば、規格往風を守り、列座戒臈による、一臈は護國殿の守護職をかね、餘院の任務を司命す、次座より五座まで、輪番の役執事をつとむ、又有器律撰をもつて、二人を幹事に擧げ、十三院を月行事と定め、餘を中老と稱す、中興創弘の時は、十三院たり、其後寛永九申年、台德院殿登霞ましく／＼ける時、花洛より畔明師下向し、つゐに住山す、(畔明の所に出す)今は三十院、みな伽陀佛讃の淸曲を調練し、各院稽古の究妙を法務の正役とせり、

〔大猷院殿御實紀四〕寛永二年十一月、大僧正天海の願により、忍岡の地を給はりて、伽藍を創建せしめらる、○中略子院は上乘院を尾邸にてつくられ、○下略

〔運歩色葉集多〕塔頭(タツチウ)

〔饅頭屋本節用集太天地〕塔頭(タツチウ)

〔倭訓栞中編十三〕たつちう　塔頭をよめり、寮をいふ、

〔續々泰平年表〕安政二年三月三日御達○中略

塔頭、寺中も門末無之候得ば、末寺同樣之事、

〔長樂寺文書三〕奉寄進東福寺正統庵上野國那波郡今井郷内

阿彌陀寺村うち在家一宇、田五反、(島少々在之、)(此内二反半作、六反)

右所者、先師法照禪師御塔頭料所のために、永代きしん申ところ也、もし違亂妨申候者、ふけうの仁として、了仙が跡をしるべからず、依寄進狀如件、

曆應二年十一月十三日　了仙在判

〔和漢禪刹次第〕靈龜山天龍資聖禪寺(中略)曆應二年己卯剏營○中略

開山夢窻國師(塔曰三會、又曰雲居、)

〔山城名勝志 九葛野郡〕天龍寺

塔頭 見于古記載之 　雲居庵 和漢禪刹次第云、開山塔、在方丈東北側西端、

〔鹿王院文書 一〕光嚴院殿御塔頭、於天龍寺建立間事、尤可然存候、就其在所以下事宜可爲寺家之計歟、被存候、可爲何樣候哉、此事先日禁裏へも申談候處、叡慮又同前之由承候き、旁不可有子細歟之由存候、且以此趣可被仰住持候哉、興仁恐惶謹言、

八月廿八日　興仁 〇崇光院

〔普明國師行業實錄〕貞治甲辰 〇三年 建上皇 〇光嚴 壽塔于寺東、扁金剛院、

〇按ズルニ、光嚴天皇、貞治三年七月七日崩ズ、

〔山城名勝志 九葛野郡〕天龍寺

金剛院 和漢禪刹次第云、光嚴院御剛、普明國師 在天龍寺門前東側法界門筋北西角、

〔應仁記 一〕武衞家騷動之事附畠山之事

父左衞門督入道德本 〇持國 近年病氣ニテ、建仁寺ノ西來院ハ、德本ノ塔頭ナレバ此寺ニ陰居セラレケルヲ、尾張守 〇政長 ハ、爲上意、伯父德本ヲ請テ、家督相續ノ儀可申定ノタメニ、畠山阿波守入道ヲ迎ニ被進ケリ、

〔應仁記 三〕洛中大燒之事

先ヅ相國寺ノ廣大ナルヲ、一隅ヲ舉テ可量、近年處造十三塔頭ヲ混ジテ、一所ニアツムトモ、昔ノ塔頭一ツノ弊ヱニ比セン、百分ノ只一ツナラン、

〔和漢禪刹次第〕靈龜山天龍資聖塔寺

塔頭、寺内三ケ所也、

雲居院 開山塔　多寶院 〇註略　金剛院 〇註略

諸寮〇中略

兩山會雲院物先和上、諱周格、〇中略　同法苑寺圓鑑和上、諱梵相、〇中略　同慈德軒誠中和上、諱中歎、〇中略　同松泉庵寂京和上、諱妙郞、〇中略

萬年山相國承天禪寺〇中略

諸塔頭

鹿苑院瓊那塔〇中略　壽德院無永和上、諱用伸、〇中略

諸寮

金潤軒物先和上、諱用格、〇中略　萬松軒仙岩和上、諱澄安、

〔三緣山志十七〕扇間

緣輪の上首、此席闕如の時、かねて願札を、月番に出し置、初入の日、月番より許可せらる、是緣輪にひとしく、初願再願手札にしるし、月番へ出すの後、學頭二臘よりそれの評議ありて後申渡あり、役所內謁所學頭二臘役寮に許可のむねをとゞけ置れり、此席三十四脩、往年横木間と稱す、是一文字緣輪の二席は、法問の席向座たり、此座横木に列するゆへに名づく、近年扇間と書、初入の後、講席の順次を心とし、研覈練學し、若一文字の席に人數不足の時は、當席より出座す、法門の尋答をつとめ、句義純正緣輪の時に異なり、

〔三緣山志十七〕階級座次

一番輪　緣輪　扇間　一文字　月行事　學頭

〔諸宗階級〕曹洞宗僧侶成立最初ゟ永平寺江轉昇迄之次第

一關三箇寺ハ、上件ニ申上候、常法幢、片法幢、隨意會地等、寺格有之寺院之內ゟ、於御城住職蒙仰候儀ニ御座候、

一總持寺ハ輪番地ニ而、末流之內ゟ一年一回宛交代仕、尤現住紫衣著用仕候、

一永平寺江ハ、關三ケ寺之內ゟ、於御城住職蒙仰候儀ニ御座候、勿論永平寺住職人之義も、勸修寺

殿御執奏を以、直參內仕、奉拜天顏候而、勅賜禪師號被下置候、尤紫衣著用之寺ニ御座候、西本山之外紫衣著用之儀、於一宗ハ不相成儀ニ御座候、

前書申上候通、相違無御座候、以上、

享和元辛酉年十二月

富田 大中寺
越生 龍穩寺
國府臺 總寧寺

〔諸宗階級〕高田派僧徒位階法衣等之定書

覺

一當派階級之儀ハ

連枝格　院家　老分　中老　大乘分　衣座　國袈裟　平僧

右八段之階級相分申候〇中略

享和二戌年正月

高田派觸頭
淺草 唯念寺
同 稱念寺
櫻田 澄泉寺

〔諸宗階級〕佛光寺一派階級衣體次第書

覺

佛光寺御門跡末寺僧徒官職之應法衣等之次第、左ニ申上候、

一當流階級之儀者

院家　內陣　左脇內陣　右脇內陣　三之間　赤地　常色　緞子薄板　平僧

右十官階級法分相分申候〇中略

右之通相違無御座候、以上、

享和二戌年二月

佛光寺門跡觸頭
下谷 西德寺
加番 義泰坊

〔諸宗階級〕東派淨土眞宗一派階級之次第

一穢多寺ト申も有之、穢多寺之住持ハ、於本山剃刀無之候、右ハ別種して、外交り無之候、又者於本山、平僧寺、飛檐寺兩寺ニ而、百姓町人之旦家ト一同ニ、穢多を旦家ニ持候寺も有之候、此向者、於本山平僧寺、飛檐寺と取扱ニ無差別、其住持へ剃刀被免候、○中略

淺草本願寺輪番 東坊

享和二戌年四月 長覺寺

〔富士山志料 三〕櫻河院樣寛延三庚午年四月二十三日御崩御葬送御燒香寺方格式之書留

院家、山門中大原附、 兩本願寺、知恩院、右ハ何レトモ上段燒香、其外ニ陳、 一御經供養導師當日御請待ニ而候得者、南門石段之上ニ而、下乘ニテ候得共、御靈前惶故、石下之下乘ニ候、 一院家ハ可為堂上之格ニ候、 一知恩院、總下馬御成御門之外一間計手前ニテ下乘、 一百萬遍、黑谷淨華院、何レモ外門之內、三間計入候而下乘、 一大德寺、妙心寺、外門之內、長柄ハ入置候へ共、直ニ下乘、 一延曆寺、園城寺、興福寺、東大寺、天下四ケ之大寺、依之、下乘可准大德寺、妙心寺、 一東寺ハ眞言宗之為總本寺、下乘四ケ大寺ニ准候、 一西本願寺、從古來玄關橫付之例有之故、東門跡モ同格下乘可然、 一興正寺ハ、舊例之通、玄關雨落迄竪付之評議相極、且又佛光寺准之、 一興正寺 外門之內へ入、直ニ下乘右之外、從往古一切門外下乘ニ候、 延曆寺、般舟院、 深草安樂行院、二尊院、三鈷寺、來迎院、廬山寺、 金山天王寺、光明院、淨福寺、大原寺、 右何レモ上段之燒香諷經アリ、○下略

○按ズルニ、此ノ他ノ會葬寺院、皆下殿燒香ト知ルベシ、仍テ之ヲ略ス、

〔諸宗階級〕天台宗僧徒經歷昇進衣體之事

東叡山經歷之次第

一同山衆徒三十六ヶ院之事

右之内、淨名院ハ、元來常圓院ト申、衆僧之官僧寺ニ而、公儀御由緒有之、別御朱印貳百石被下置候處、其後從日光御門主被仰立、律院ニ引直候以來、淨名院と相唱、比丘僧輪番持ニ相成候事、○中略

享和二戌年三月

上野執當

住心院

圓覺院

〔教令類纂二集百十四〕明和四丁亥十二月

寺社奉行江

堂上方之猶子と稱し候、諸寺院の僧侶、諸寺格相當の儀ハ、勿論の事に候得共、不相當の寺院にも、格式宜敷可相成手段にて、猶子ニ相成候類も有之趣に相聞え候、右類ハ、御條目掟等江も相障り、如何なる事に候、向後猥りニ無之樣、急度可相守候、尤寺格相當の猶子と、寺院は御條目掟に不相背樣、急度可相心得候、

右の趣、諸國末々まで、不洩樣可被相觸候、

〔社寺取計留〕寺格引直、朱書寛政七卯二月、板倉周防守殿江　三浦志摩守來問合、

書面、佛光寺末眞光寺當住、從本山官體昇進申付有之迚、於御領內、取扱方幷禮席等改名寺格にも拘り、自餘之障ニ相成候筋ニ付、佛光寺役人共ゟ願越候品有之候與も、御聞濟無之方與存候、

卯三月

〔寺社法則下〕寛政十二申二朔　松平右近ゟ

一書面、双林寺儀、寺格も有之候間、御家來ゟ之懸合文通ニ候ハヾ、役僧宛之方相當與存候、

古事類苑

宗教部四十

佛教四十

寺領

寺領ニハ、封戸、寺田等アリ、封戸ハ、令ノ定ムル所ハ、別勅ニアラザレバ施入スルヲ得ズ、故ニ當時其施入ノ封戸ハ、往々還收ノ年期ヲ立テ、五年或ハ三十年ト爲シ、コトモアリキ、而シテ光仁天皇ノ寶龜十一年ニハ、永ク件ノ封ヲ入ルト云フ文ノ永ノ字ヲ以テ、一代ヲ指スモノニシテ、後世ニマデ及ブモノニアラズト爲シタリ、然レドモ其制ハ行ハレザリシモノノ如シ、

寺田ニハ、封內ニ在ルモノト、單獨ナルモノトアリテ、官ヨリ之ヲ施入セシモノト、王臣以下ノ其私地ヲ寄進セシモノト、寺ニテ新ニ田野ヲ開墾セシモノト、又私ニ買得セシモノ等アリ、元來私地ヲ寺ニ入レ、寺ノ新ニ田野ヲ開墾シ、又私ニ買得スルハ、律令ノ禁ズル所ナレドモ、王臣ノ地ヲ施、モノモ少カラズ、又寺ノ私ニ田野ヲ占有シテ開墾ヲ爲シ、田園ヲ買收シテ、其利ヲ專ニスル事頻リニ行ハレシカバ、元明天皇ノ和銅六年ニハ、田記ノ錯誤ヲ正シテ、更ニ田野ヲ占有スル事ヲ禁ジ、其數ノ格ニ過グルモノハ、之ヲ還收セシムル制ヲ立テタリ、且ツ寺田ハ不税地ナルヲ以テ、王臣權貴ノモノ、其租税ヲ免レンガ爲メニ、寺家ニ施入スルコト、往々ニシテ之アリ、故ニ天平以降、屢〻禁令ヲ發シ、桓武天皇ノ延曆十四年ニ至リテハ、更ニ禁斷ヲ加ヘ、以後犯スモノハ沒官ニ處スル事ト爲セリ、サレド其弊ハ益〻甚シク、實際之ヲ

禁遏スルコト能ハズ、中世以還、寺田ノ制度全ク弛廢セシガ德川幕府ニ至リテハ、復タ其法ヲ定メテ、賣買質入等ヲ爲ス事ヲ嚴禁セリ、

朱印地ハ、足利幕府ノ末ニ濫觴シテ、德川幕府ノ時、公許ノ寺領ニ附セシ名ナリ、將軍ノ朱印ノ書ヲ付シテ之ヲ證スルヲ謂フ、又除地アリ、朱印ヲ有セザレドモ、貢賦ヲ納レザルヲ謂フ、又年貢地アリ、其貢賦ハ一般民地ト同ジ、又藏米ヲ以テ之ニ支給スルモノアリ、又門前地アリ、寺院ノ境内ニ町家ヲ建テ、其收入ヲ以テ寺院ノ費用ニ供スルナリ、而シテ其近傍ノ所有地ヲ以テ持添地ト稱ス、亦門前地ノ類ナリ、又境内ニ相撲芝居等ノ興行ヲ許シテ、寺用ヲ補足スル等ノ事モアリキ、

名稱

〔運歩色葉集志〕寺領

〔易林本節用集言辭志〕寺領（ジリヤウ）

制度

〔令義解四雜令〕凡寺不在食封之例、若以別勅權封者、不拘此例、〈權謂五年以下〉

〔令義解三田令〕凡官人百姓並不得、將田宅園地捨施及賣易與寺、〈謂捨施者猶布施也、賣易者、賣及貿易、但依文奴婢牛馬等不在禁限、〉

〔令義解三田令〕凡田六年一班、〈謂此據未給口分人也、其先已給訖者、不可更收授也、若田有崩埋侵食、亦依收班例也、神田寺田不在此限、謂此即不税田也、縱有崩埋侵食、不可更復加授也、〉

〔延喜式二十六主税〕凡勘租帳者、據皆當年帳、〈○中略〉其神田、寺田、布薩戒本田、放生田、〈○中略〉並爲不輸租田、

〔延喜式二十二民部〕凡位田、功田、賜田、及神寺等田者、各據本地、不須輙改、

〔日本書紀二十九天武〕四年二月己丑、詔曰、甲子年諸氏被給部曲者、自今以後除之、又親王諸王及諸臣幷諸寺等所賜山澤島浦林野陂池、前後並除焉、

〔續日本紀六元明〕和銅六年四月己酉、因諸寺田記錯誤、更爲改正、一通藏所司、一通頒諸國、　十月戊戌、制諸寺多占田野、其數無限、宜自今以後數過格者皆還收之、

〔續日本紀十聖武〕天平元年十一月癸巳、任京及畿內班田司、太政官奏、親王及五位已上諸王臣等位田功田、賜田、幷寺家神家地者不須改易、便給本地、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年三月戊辰、太政官處分、凡寺家買地、律令所禁、比年之間、占賣繁多、於理商量深乖憲法、宜令京及畿內嚴加禁制、　五月庚申、禁諸寺競買百姓墾田及園地永爲寺地、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆三年十二月庚辰、詔曰、山川藪澤之利、公私共之、具有令文、如聞比來、或王臣家及諸司、寺家包幷山林、獨專其利、是而不禁、百姓何濟、宜加禁斷公私共之、如有違犯者、科違勅之罪、所司阿縱、亦與同罪、

〔類聚國史百八十二寺田地〕延曆十一年四月丙戌、在攝津國島上郡菅原寺野五町、梶原僧寺野六町、尼寺野二町、或寺家自買、或債家所償、並緣法制還與本主、大井寺野卅五町、贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等野八十七町、贈太政大臣正一位藤原朝臣房前野六十七町、故入唐大使贈正二位藤原朝臣淸河野八十町、或久載寺帳、或世爲家野、因隨舊給之、

〔類聚三代格十二〕太政官符

禁凡下百姓將田宅園地賣買與寺事

右案田令云、凡官人百姓並不得將田宅園地捨施及賣易與寺、又天平十八年五月九日符偁、諸寺競買百姓墾田及園地永爲寺地、宜加禁斷不得爲然、如有違犯者、賣買人並依法科罪、又延曆二年六月十日符偁自今以後、私立道場、及將田宅園地捨施、幷賣買易與寺、主典以上解却見任、自餘不論蔭贖決杖八十、官司知而不禁者、亦同罪者、被右大臣宣偁、奉勅、如聞或寺詐附他名買入寺家、如此之類、往往而在、前後雖禁、違犯猶多、此而不粛、豈曰皇憲、宜其承前施捨賣易田宅園地子細勘錄附使申上、自今以後復有此類、咸皆沒官、以懲將來、

延曆十四年四月廿七日○又見類聚國史

〔日本後紀十四平城〕大同元年閏六月□□勅、王臣神寺占山河海島濱野林原等者、從乙亥年〇天武四年曁于延暦廿年、一百廿七歲之間、或頒詔旨、或下格符、數□兼占、頻斷獨利、加以氏氏祖墓及□姓宅邊栽樹爲林、□寺所許步數、具有明文、

〔式目新編追加〕一寺社領事弘安七十二十八

被勘領家地頭得分、彼是無損之樣、可被分付下地也、此旨可尋沙汰之由可被仰引付、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛文五年七月十一日

定〇中略

一寺領一切不可賣買之、并不可入手質物事、〇中略

右條々諸宗共可堅守之、

〔享保集成絲綸錄二十四〕享保十九寅年四月

當時村方五人組帳差上申一札之事

一御朱印之寺社領田畑屋敷質物に書入候共、取申間敷、縱證文等に有之候迚も、御朱印之寺社領田畑屋敷ハ、外江取候儀難成間、質物ニ一切取申間敷候、此段相守可申旨、被仰渡奉畏候、若相背申候ハヽ、如何樣之曲事ニも可被仰付候事、

〔寶暦明和撰要集寶暦寺社之部〕寶暦十二年年二月十八日、松平右近將監殿御渡候御書付、

三奉行江

唯今まで、元來寺地ニ而無之、百姓所持之地所を、寺院江致寄附、又は讓地等ニ致し候も有之、右之地所を、他之寺院或ハ他寺之塔頭等江讓渡、右場所江引寺等致し、又は本寺致離末、願主勝手之宗旨ニ仕替へ、引寺致し、或は當時退轉寺號計水帳等有之を取立引寺號ニ致し候儀、并墓所詰リ添地寄進、境內江圍込候儀、右之類、自今可爲無用候、百姓ハ勿論、たとへ領主地頭たり共、田

畑猥ニ寺院江寄附致し候儀、容易ニハ難成事ニ候、

右之趣可被相觸候、

二月

〔地方凡例錄四〕寄附地之事

百姓ゟ寺社へ田畑を致寄進は、直に寄進地とか、讓田地、又は買附地とか可唱、町人百姓ゟ寄附といふ名目は、前々ゟ停止なり、年貢諸役も、村方百姓並に勤れば、志ある百姓、寺社へ田地を附る義は不苦、然れども村役等不勤樣に致すは、禁制の旨、先年相極たる處、寶暦十二年年以來、都て寄附地は不相成段被仰出、當時は寺社寄進等は停止なり、

〔日本書紀二十九天武〕八年四月乙卯、詔曰、商量諸有食封寺所由、而可加加之、可除除之、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合食封貳佰戸〇永年者、在四國、

〔續日本紀一文武〕三年六月戊戌、施山田寺封三百戸、限三十年也、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年二月丙申、施山階寺食封一千戸、鵤寺食封二百戸、隅院食封一百戸、又限五年、施觀世音寺食封一百戸、

〔續日本紀十四聖武〕天平十三年正月丁酉、故太政大臣藤原朝臣〇藤原不比等家返上食封五千戸、二千戸依舊返賜其家、三千戸施入諸國國分寺、以充造丈六佛像之料、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合食封壹阡戸在土佐、備後、播磨、丹波、尾張、伊勢、近江、信濃、相模、武藏、下野、常陸、上總等國、

參佰戸

右飛鳥岡基宮御宇天皇歲次己亥納賜者

漆佰戸

右飛鳥淨御原宮御宇天皇歲次癸酉納賜者〇中略

天平十九年二月十一日〇署名略

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月甲午、今年晩稻稍逢亢旱、宜免天下諸國田租之半、寺神之封不在此例、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年三月乙巳朔、先是、東海道巡察使式部大輔從五位下紀朝臣廣名等言、得本道寺神封戸百姓款曰、公戸百姓時有霑恩、寺神之封、未嘗被免、率土黎庶、苦樂不同、望請、一准公民、倶沐皇澤、使等商量、所申有理、至是官議奏聞、奏可、餘道諸國、亦准於此、

〔類聚三代格八〕太政官符

封一百戸五十戸輸米國

右被内大臣宣偁、奉勅、件封永施秋篠寺、其權入食封限立令條、比年所行甚違先典、天長地久、帝者代襲、天下物非一人用、然縁有所念、永入件封、今謂永者是一代耳、自今以後、立爲恒例、前後所施一准於此、

寶龜十一年六月十六日〇又見續日本紀

〔神皇正統記後醍醐〕中古となりて、莊園おほく立られ、不輸のところいできしより、亂國とはなれり、上古にはこの法よくかたかりければにや、推古天皇の御時、蘇我の大臣、わが封戸をわけて寺によせむと奏せしを、つゐにゆるされず、光仁天皇は永神社佛寺によせられし地をも、永の字は一代にかぎるべしとあり、

〔東大寺要錄六〕東寺

右延暦十二年歳次癸酉、公家建立、東西兩寺施入食封千戸、弘仁十四年癸卯、以東寺永賜空海和尚、其後渉東大寺眞言院廿一僧、爲末寺、

〔類聚三代格八〕太政官符

應官家功德分封物依舊收東大寺事

右檢案內、太政官去延暦十四年六月十一日下民部省符偁、太政官去寶龜十一年十二月十日下造東大寺司符偁、被內大臣宣偁、奉勅、東大寺封五千戶、就中官家修諸佛事分二千戶、宜收於別庫、以充每年安居、國忌、及雜齋會料度、仍三綱寺司與諸司相對出納者、右大臣宣、奉勅、件物收置別倉出納、諸司往還有煩、宜自今以後收納官庫、修行功德之日、隨用出充者、今右大臣宣、奉勅、詔書偁、朕有所思、宜其依舊還收寺家充用佛事、仍大和國司與僧綱及三綱、計會出納者、宜依詔書并寶龜十一年十二月十日符、依舊收納當寺別庫、充用官家修功德分、國司諸綱相對出納其收物、畢卽申民部省、至於出用待官符行、仍年終造納物并用殘等帳申送、

大同三年三月廿六日

〔日本後紀十七平城〕大同三年九月乙未、〇十六日勅、權入食封、限立令條、比年所行甚違先典、其招提寺封五十戶、荒陵寺五十戶、妙見寺一百戶、神通寺廿戶、宜且納穀倉院、

〔朝野群載十七佛事〕弟子在衡敬白

請諷誦事

佛御布施名香一裹　燈明二盞

衆僧御布施信濃布二百端

奉施入職封五十烟甲斐廿五烟播磨廿五烟

右諷誦封戶所請如件、〇中略凡代々昇進、雖云叡聖之深恩、度々拜除、莫非先皇〇村上之餘化、仍割大臣之粢口卽獻御願之伽藍、嗟乎黍稷不香、欲混醐醍之妙藥、埃塵豈重、亦任山陵之仁風、思納受於甚深開青蓮而遠鑒、仰哀愍於弘誓、照白茅之上分、今翅精誠大概如此、弟子在衡敬白、

安和二年十月廿八日　弟子右大臣從二位藤原朝臣在衡

寺田

〔神皇正統記 白河〕白河に法勝寺をたて、九重の塔婆なども、むかしの御願の寺々にも超え、ためしなきほどにぞつくりとゝのへさせたまひける、此後代ごとにうちつゞき御願寺をたてられしを、造寺熾盛のそしりありき、造作のために諸國の重任などいふことおほくなりて、受領の功課もたゞしからず、封戶莊園あまたよせおかれて、まことに國の費とこそなりはべりにし、

〔延喜式 二十二 民部〕凡神寺封丁、不得點衞士仕丁事力、

〔倭訓栞 中編 十五〕てらだ　寺田也、寺ニ施入の田をいふ、古く史に見えたり、

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化元年八月癸卯、遣使於大寺、喚聚僧尼而詔曰、〇中略 凡自天皇至于伴造所造之寺、不能營者、朕皆助作、令仰寺司與寺主、巡行諸寺、驗僧尼奴婢田畝之實、而盡顯奏、

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年七月乙巳、定諸寺墾田地限、大安、藥師、興福、大倭國法花寺、諸國分金光明寺、寺別一千町、大倭國國分金光明寺四千町、元興寺二千町、弘福、法隆、四天王、崇福、新藥師、建興、下野藥師寺、筑紫觀世音寺、寺別五百町、諸國法華寺寺別四百町、自餘定額寺寺別一百町、

〔類聚三代格 十五〕勅、如聞、護持佛法、無尙木叉、勸導尸羅、實在施禮、是以官大寺別永置戒本師田十町、自今以後、每爲布薩、恒以此物、量用布施、庶使怠慢之徒、日勵其志、精勤之士、彌進其行、宜告僧綱知朕意焉、主者施行、

天平寶字元年閏八月廿三日〇又見續日本紀

〔妙心寺文書 一〕沽却　田地一所事

合貳段者

四至 東限類地 南限錦小路 西限御田 北限四條坊門

右件田者、圓融院佛聖田而、藤井次郎丸相傳私領也、依有直要用、以能米貳拾伍石陸斗 政所定、加請米參石 限永代所賣渡定蓮房實也、更不可有他妨、仍爲後日證文新券之狀如件、

祠堂地

永暦二年二月廿四日

藤井次郎丸花押

嫡子藤井伊巳花押

〔古簡雜纂〕奉寄進　圓覺禪寺祠堂

駿河國下島鄕内大屋勘解由左衞門尉跡事

右爲亡母明山性照禪尼爲菩提、菩提所奉寄附之狀如件、

貞治元年十二月七日、前上總介範氏、○今川、花押、

〔諸寺文書纂九〕大樹寺祠堂方永代買得相傳之田畠之事、幷年起地等、縱雖有天下一統之德政入、特ニ地起、於此祠堂錢。。。幷田畠等者、至子々孫々努々不可有違亂煩者也、仍爲後日支證如件、

大永八年戊子二月三日

道閑在御判

奉事

祐泉在御判

〔大　寺事書〕奉寄進祠堂田地之事

合一貫三百文者　　小佐儀壽庵

右爲亡母滿樹濟林公靈供米而、永代奉寄進之所實正也、不可有永損、子々孫々不可有違亂煩者也、坪者長表米二反八斗成、酉之田面ニ壹反六斗成、又壹反五斗成、都合一石九斗成ヨリ、年貢一貫三百文可有納所候、但自然無沙汰之儀候ハヾ、則被召放、可爲常住之御計候、仍爲後日如件、

天文廿一壬子年六月十日

松平三郎右衞門

浄賢在判

〔諸寺文書纂九〕永代むけ申候下地之事

合五斗三升目者

右永代むけ申候分實正也、タヾシカノ米貳石五升カリ申候而、大樹寺え。だ。う。物。之事候、天下一同ノトクセイ入申候共、於此下地違亂申間敷候、仍如件、

弘治四年戊午正月吉日　松平源五在判

使六郎左衛門

大樹寺まだう方へ参

〔寺社法則 下〕文化十酉十二月

町奉行、御勘定奉行、御勘定吟味役、

一御書面之趣令承知相糺候處、右地面之儀沽券面ハ住持名前ニテ、英信寺代々住持讓ニハ候得共、全寺附祠堂地面ニ付、右地面之書加借受候儀ハ不相成旨、本寺ヨリ申出候段、増上寺役者申出候、

堪忍分

〔諸寺文書纂 一〕平石跡職之事中務大夫任讓旨、息千德丸可有相續、但小法師至十五歳迄、爲名代塗岡兄弟江彼知行分被仰付候訖、其内山林幷被官百姓等之事、三分一可被存知、小法師爲堪忍分、毎年拾五石宛可被遣候、此旨堅可令存知之由、被仰出候者也、仍執達如件、

天文十七年九月三日　盛知

快敏

壺井源右衛門殿

〔集古文集 十八 判物〕北條氏政判物 相模國鎌倉建長寺塔頭寶珠院藏

大聖院殿如御證文、堪忍分修理免無相違可爲肝要候、若横合非分有之者可有披露、畢竟氏寺不退轉様、万端遣念尤候、仍狀如件、

天正九年辛巳十月廿一日　奉之

東漸院

〔妙本寺文書 新編相模國風土記稿所載〕於寺中竹木假初ニモ不可剪取事、寺僧衆堪忍分之兵粮、少シモ不可有

横合事、來廿五日ヲ切而、郷村兵粮不可置仕置候寺中へ、他之兵粮被入置間敷事、右定所如件、

庚寅〇天正十八年正月十四日　朱印〇虎印

妙本寺

〔駿府政事錄〕慶長十六年十月廿九日、大御所〇德川家康令赴河越給、云々　十一月一日、丙申乘燭以後山門南光坊天海、仙波金地院等出御前、爲仙波〇武藏入間郡喜多院所化堪忍料、而寺領可有御寄附之旨被仰出云々、

〔大德寺文書一〕一堪忍寺役之義、自常住夏冬衣可下行也、〇中略

應安元年六月日　宗石花押〇下略

〔寺社領守護使不入考〕東照宮駿遠三を知しめされし頃の御朱印は、其時々の文例に從はせられ、御家人又は御麾下の輩へも不入と記されしあり、御三代の間、諸國普く御朱印を賜はりし事はあらず、寬文五年に至り、日本の寺社一統に、御代々の先判に據られて、御朱印を賜はりしより後、皆この書式を用ひらる、今其文體を考ふるに、たとへば、三河總持寺、應永、永享、文安等の印書に、段錢以下臨時課役等之事免除、早爲守護使不入之地可領知旨と載たるを、慶長八年の御朱印には、任先規所寄附也、幷寺中竹木諸役免除と記され、元和寬文もこれに同じ、又天正十九年、普く關東に出されたる御朱印に、殊寺中不入とあるを、寬文には、任先判境內竹木諸役免除、或は寺中守護使不入、寺廻免除、又は全收納などと文を易られしあり、慶長元和の文に、境內諸役免除と載せられたるを、寬文には、任先判永不可有相違と略せしあり、これ舊章によりたる文を、前後になし、或は飾り、あるひは省けるにて、其意先判の語に盡たり、今守護の名の權輿より、時勢の沿革を按ずるに、國初以來御朱印の文に、守護使不入と見えたるは、天文の頃、不入の語を、諸役免除の事に轉じ用ひしより、因循して唯舊文に據られたるまで

にて、其實は、諸役免除と別に等あるにはあらざるべし、

○按ズルニ、本書ハ、奥書ニ、天保三年壬辰閏十一月豐藤熱之述トアリ、

〔甲陽軍鑑十九品第五十〕天正元年五月より、其年中に、諏訪、富士、戸隱を始、五ヶ國の諸社諸寺へ、勝頼公續目の御朱印出る也、

〔東武實錄三十一〕寛永七年八月十六日、大和國菩提山炎上スルノ時、大神君〇徳川家康台徳公〇徳川秀忠兩君、此寺ニ賜ル御朱印燒失ス、住僧江戶ニ來テ、是ヲ愁訴スルニ依テ、御朱印ヲ菩提山ニ賜ル、

當寺領、大和國添上郡池田村三百石、幷寺廻竹木山林等、不可有相違、彌專修造、勵學問、可抽天下祈禱精誠者也、

寛永七年八月十六日　御朱印

菩提山

〔湯島寺院書上〕武藏國豐島天澤山麟祥院領同郡柏木村之內百石、幷境內竹木等、依爲稲葉春日局菩提所、令寄附候、全可院納、永不可有相違者也、

寛永十一年十二月十二日　御朱印

〔大猷院殿御實紀六十九〕慶安元年三月十七日、先代御朱印たまはらざる寺社領、こたびその願により、新にたまふもの百八十二、

〔大猷院殿御實紀七十二〕慶安元年十月十七日、諸國寺社御朱印たまはる所三百三十四通、十八日、けふ寺社に頒賜せらる、御朱印三百四十八通、十九日、寺社御朱印三百五十四通分たる、

〔憲教類典四ノ十四上寺社〕寛文五乙巳年三月朔日

覺

一御當家御三代之御朱印所持之寺社之ともがらは勿論、御兩代之御朱印頂戴之分ハ、不依寺社

領之高下、繼目之御朱印可被下事、

一御一代之御朱印頂戴之寺社領ハ、先五拾石以上之分、御朱印可被下事、

一寺社領無之境内計之御朱印雖有之、於一宗之本寺者、繼目之御朱印可被下事、

右之通被仰出之間、面々領分ニ有之寺社之輩、今年六月中、江戸江先御代々之御朱印持參仕候樣可被相觸候、此紙面之外ハ、重而可爲御沙汰之間、不及參府旨、堅く可申渡者也、

寛文五年巳三月朔日

〔天成令二十〕寶永八卯年三月

覺

御朱印頂戴之社寺之輩、不依寺社領之多少、境内計之御朱印雖爲所持、不殘今度御朱印可被下旨、被仰出候條、面々領地幷支配所ニ在之寺社之輩御朱印に寫を指添、今年五月より七月迄の內、江戸江致持參、安藤右京進、松平備前守所江相達候樣可被觸之候、以上、

三月

〔憲教類典四ノ十四下寺社〕寶暦十庚辰年八月十八日

松平攝津守殿御渡

覺

一御朱印頂戴之寺社之輩、不依寺社領之多少ニ、境内計之雖爲御朱印、於令所持者、御朱印可被下之間、御料私領に有之寺社領御朱印に寫を差添、來酉正月より三月迄之內、江戸江致持參、阿部伊豫守、戸田采女正殿江相達候樣ニ可被觸之候、以上、

八月

〔天保集成絲綸錄六十二〕寛政元酉年三月

大目付江

寺社領御朱印有之所之領主地頭、所替村替或ハ隱居家督、名改、又ハ頭支配等、去々未秋以來替候分ハ、其趣書付、松平右京亮、西尾讃岐守江可差出候、尤寺社領御朱印渡濟候迄ハ、右之通可被相心得候、委細ハ兩人江可承合候

右之通可被相觸候、

〔寺社法則下〕寛政九巳年十二月

小普請支配

御書面、豆州修禪寺儀、前々ゟ人別帳も新庄安太郎方江差出、入院届も致し來候段、無相違候ハバ、先住迄ハ、地頭と心得居候を、當住に限り、入院屆も不致、安太郎を蔑ニ心得居候趣ニてハ、不埒ニ相聞候ヘ共、御朱印地と申迚も、安太郎吟味ニハ行屆申間敷、拙者方ゟ聲掛け候儀難致筋ニ付、奉行所吟味之義御申立候方と存候、

〔寺格帳上天台宗〕御朱印高五拾石と申傳、地面は有之候得共、御朱印寛永十二亥年自火ニ而燒失、無御座候、其後御書替相願候得共、御書替願候節之譯不相知候、

御朱印高五拾石　上州德川　永德寺

〔寺格帳上眞言宗〕高千石御朱印高九千五百石之内

○○○○○○御朱印公儀之寺ト被成下、權現樣御神像奉爲本尊○下略　寺務檢校　靑巖寺

〔寺格帳上淨土宗〕御朱印高百石永拾貫文○○○　紫衣檀林　鎌倉　光明寺

〔寺格帳下日蓮宗身延派〕御朱印高永貳拾貳貫貳百文　鎌倉　本覺寺○中略

御朱印高永四貫三百文　同(相州)鎌倉　長勝寺○中略

御朱印高永壹貫文　相州鎌倉　妙法寺

判物地

〔寺格帳（上淨土宗）〕高（御判物）九千四拾石（内二百石御藏米）　御靈屋料

同高千五百石　方丈領

同高貳百石　隱居領

〇中略

增上寺大僧正

〔寺格帳（上眞言宗）〕御判物千三百五拾石之内

高百石

三州鳳來寺學頭
醫王院

〔寺格帳（下諸本寺）〕高（御判物）五百石

攝州河邊郡眞言律宗
多田院

直判地

〔甲斐國志（附錄百十九）〕西郡加賀美村法善寺所藏、他寺社所藏御判物者多カラズ、尋常所賜ハ福德御朱印、但取次人名ナキ者ハ稱之御直判ナリ、諸士ニモ賜之、

甲斐國法善寺領、加賀美内九拾八貫六百文、寺部内壹貫文、藤田内壹貫百廿文餘、加賀美中條内壹貫五百文等之事、

右所令領掌不可有相違者、守此旨、被抽國家安全之精誠之狀如件、

天正十一年四月十九日　家康（花押）

法善寺

〔寺格帳（下禪宗五山派）〕高（御直判）八百九拾貳石餘

京五山ノ上、東山、深紫衣
南禪寺

黑印地

〔甲斐國志（佛寺七十三）〕府中

一圓覺山淨興寺（小路廣）　同宗（淨土宗〇）知恩院末、祖白院ト稱ス、黑印地ナリ、古地三石六斗、慶長元年十二月、淺野長政ノ印書アリ、境内八百四坪、又古府中ニ宗現庵アリ、境内五百五拾貳坪、舊ニ廢シテ淨興寺ニ併ス、共（ニ）四奉行證文ヲ藏セリ、開山宗蓮社圓譽、（時代詳ナラス）本堂七間ニ七間半、彌陀ノ立像ヲ安ゼリ、信玄ノ所寄ト云、罹災殿宇未興復、寮舍二、末寺四、（三寺在ニ府内）

無量山歡喜寺（新紺屋町）同宗淸淨院ト云、古寺地黑印、四百七拾貳坪、（四奉行證文ニ、鍛部内トアレドモ古府中分ナリ、）城内ニ觀音堂アリ、寺記境内四百坪餘トアル

ハ淺野ノ一紙黑印ニ壹反四畝、此米壹石六斗八升トアル地ナルベシ、　功德山正念寺同町　同

宗汝昌院ト云、境內三畝歩黑印地ナリ、　六角山欲生寺久保町　同宗境內六拾坪、黑印地ナリ、淺野

一紙黑印ニ、二畝此米二斗四升欲生トアリ、

〔寶永七寅年以來相改候寺社帳〕寶永七寅六月

拜領地

古跡拜領地　東叡山末　牛込　泉藏院

一境內九百貳拾四坪

門前町屋小間拾九間壹尺五寸〇下略

〔芝寺社書上〕四本寺　野州富田大中寺末　芝　万松山　泉岳寺

禪曹洞宗

一境內拜領地貳万百八拾五坪

內　門前地千百七拾七坪

〔地子新地之寺社帳〕今井村燒跡　麻布六本木大日堂別當　天台宗　大行院

除地

一境內百貳拾坪

外除地七拾坪餘

右〇中略　安政七申年三月廿九日申上

〔御府內備考百九品川〕南品川海晏寺門前〇中略

一當町起立之儀は、往古村地ニ而、〇中略　其後、元和三巳年、猶又家作七軒相增、都合拾四軒出來、夫ゟ追々當時町家ニ相成申候、尤右時代之者、跡式相續致候者、無御座候、右海晏寺除地之內、町家相立候ニ付、年月不知、海晏寺門前ト相唱、寺社御奉行所御支配之處、延享二丑年中、町御奉行能勢肥後守樣、馬場讃岐守樣御勤役中、町方御支配ニ相成申候、

免引地

〔地方凡例錄 六〕一神佛免引。

是は除地にては無之、村高の內にて、假令ば八幡免、天神免、荒神免、觀音免、阿彌陀免、藥師免など、て、五畝三畝宛、社地堂下幷に田畑或は堂舍は無之とも、神佛の森等の地面は、古來撿地の節より、地所は寺又は社人持もあり、總村持もありて、高の內引に成り、割付鄕帳等に何免引と記すなり、

○中略

一寺屋敷引。

是は私領方にて、假令ば池川河原野地等を、總村の申合せにて、新開に願ひ、地頭の爲になることを拵へ、其內三分一か五分一を、寺屋敷に被下候樣に相願ひ、一統に撿地を請け、寺屋敷分は高の內引に相立る、尤も高の內引にすることはよろしからずといへども、由緒もなき寺に、黑印除地等を遣はすことは成難く、竿除に致し置ても、末世如何樣の妨あるべきやも計り難きゆへに、高の內引に致すこととなり、右體の所は料所に成ても、古來の引付に任せて置くことなり、又地頭の由緒ある寺などへ、田畑山林等を致寄附、高の內引に立るもあり、扨又古跡同然の寺地ありて、之は撿地の時分、除地にも致すべき處、除地と云は重きことにて、格別の由緒なくては難成村高に入れ置く、然れども古跡の事なれば、年貢を付るも如何に付、高の內引にして、寺屋敷と云名目にて引置くなり、勿論古代は新地の寺院寺號等を取建る儀有之しか共、元祿年中以來、新寺は申すに及ばず、古き寺號ばかりあるを新地に取立ることさへ、前々在來の外の寺院は勿論庵室たりとも、新規に取立る儀御停止に成、近年は引寺も容易に難成、依之私領にても、右體の寺屋敷引等を、當時新に引て立ることなどは、決して相成らざることなり、

年貢地

〔寶永七寅年以來相改候寺社帳〕寶永七寅年六月

古跡年貢地

境内

三百三拾六坪　吉祥寺末戸塚源兵衛村　曹桐宗　夾山寺

外百六拾八坪　此度差免持添地

〔地子新地之寺社帳〕年貢地　伊賀守知行所

一境内三百七拾五坪　鮫ヶ橋南町　深川靈巌寺末　浄土宗　香蓮寺

右〇中略寛保元辛酉年五月十六日申上

〔東都府内寺社鑑五〕　京妙心寺末　小石川傳通院領戸崎町

帳外新地寺社御免帳、享保二丑十二月改　濟家　是照院

年貢地

一境内千七百坪

〔御府内備考七十九麻布〕臺雲寺門前

一常州眞壁郡傳正寺末曹洞宗臺雲寺境内、表田舍間拾一間半、裏巾十二間五尺西裏行二十六間四尺、東裏行二十八間半、此坪三百三十六坪、寛永七午年開基之節、古跡御年貢地ニ而、元祿八亥年九月廿三日、織田越前守様御撿地御改有之、〇中略

一境内不殘御年貢地ニ而、御水帳反別屋敷一畝歩ニ御座候、

〔寺社法則下〕文化三寅十二ノ十九　進達

一寺社境内貸家之儀ニ付、去ル寛政二年十二月中、松平和泉守殿御在勤中、御書付を以被仰出候以後ハ、年季明ニ而、猶又貸續之儀願出候分、多分難成候段申渡候、追々爲取拂候義御座候、然處右願之内、元來无緣之貧地、檀家も少く、漸貸家又ハ貸地等之助成を以、取續罷在、爲被拂候而ハ、實ニ

難立行之類有之、尤右御書付ニも、格別譯立候義ニ候て、猶其品ニ寄、伺之上可申付との御文段有之候付、私共申談之上取計方、無餘義分計、其度々與得相糺、貸積之義相伺、差免置候も、至于此節、不少候ニ付、猶勘辨仕候處、右ハ畢竟貸家貸地等之餘德を以、一寺取續罷在候事ニ候へバ、迚も此上取拂之儀ハ難爲仕奉存候間、以來之義ハ、去ル戌年御書付後伺之上差免候分、此後年期明、猶又貸續願出候節は、糺之上子細於無之ハ不及伺、私共手限ニ而差免候樣可仕哉、元來右御書付以前ハ、手限ニ而差免候儀ニも御座候付、旁以此段相伺申候、

承付　書面伺之通相心得可申旨被仰聞、承知仕候、

備前守殿へ進達　　　　　　　　　　　　　　脇坂〇中務

同年〇文化四年六ノ三　　　　　　　　　　　井上河内守　阿部

書面、堂社修覆再建等之ため境内ニて、操芝居見世物等之義、前々仕來之例も有之分ハ、日限を定相願候ハヾ、花麗ニ不相成樣、精々被申付御聞屆候ハ不苦候、年限幷寺社領之內ハ、勿論之儀、境內ニ而も、先例も無之、新規ニ相願候分ハ、日限を定候とも、容易ニ御聞屆無之方と存候、且相撲之儀右を渡世いたし候もの、年寄勸進元等有之素人を不相交、日數を定興行いたし、役人中爲見廻、猥ニ無之樣御申付候ハヾ、御聞屆候ても不苦事ニ候、

〔寺社法則〕下寬政元酉五月廿九日　申合

一唯今迄、寺社境內において、稽古角力興行之儀不屆出候處、近來角力年寄共ゟ、持場之方迄屆出候ニ付、右ハ人寄等いたし候儀ニハ候得共、承屆候ハヾ、都而聊之儀ニ而も、奉行所江申出候樣相成、一體之締にも可相成候間、勸進角力ニ不紛樣可致段、屆書ニ認入させ、月番へも可相屆旨申渡、以來承置候樣可致候事、

門前地町並屋敷町屋敷

〔寺格帳上天台宗〕拾六萬五千六百坪御朱印境內　相州一澤 淨發願寺

〔寺格帳上淨土宗〕境內御朱印　長崎 大音寺

〔寺格帳下禪宗〕境內山林竹木御朱印　甲州 長禪寺〇中略

境內山林竹木諸役免許御朱印　相州湯本 早雲寺

〔寺格帳下一向宗〕高境內六拾九石五斗餘御朱印　東本願寺末 三州野寺 本證寺

〔寺格帳下無本寺〕山林境內御朱印　江州高野村 禪宗臨濟派本寺 永源寺

〔寺社法則上〕文化七午七月二日　大給

屋敷改曾我熊之助江

諸寺院町。並。屋。敷。と、門。前。地。之差別、各方御心得致承知度及御掛合候、

御書面之趣承知仕候、寺院之內町家相建候を門前町家と相唱、寺院之外ニ所持仕候を町並屋敷と相心得罷在候、乍去年貢町役等差出候地所を町並屋敷と相唱候、町役計差出候を町。屋。敷。と唱申候、

七月　屋敷改

〔集古文書十五判物〕等持院尊氏公御判物所藏未詳

覺園寺門前地事、任繪圖面目錄之旨、都寮等敷地、后住之輩可被致築地修功之狀如件、

文和二年十一月六日　尊氏花押

左馬頭殿

〔大成令四十二〕万治二亥年十一月

一東叡山、增上寺、傳通院、智樂院寺領門前境內、幷江戶近邊御代官等新地家屋鋪相建間敷之由、先年大猷院〇德川家光樣御代雖被仰出、近年僧俗令借之旨其聞有之候、

右之寺院寺領境内幷御代官方新地、自今以後、一切借申間鋪事、

〔寺社門前帳〕能勢肥後守殿　　本多長門守

市谷本村　修行寺

右ハ門前貸地之儀、去午〇元文二年十月、大岡越前守江願出、願之通申付、此節家作出來、借宅之者共、追追引移候由、相屆候ニ付、右之趣例之通御役所江も御屆可申達旨、修行寺江申渡候間、此段申達候、以上、

十一月〇寛延二年十二日

〔寺社法則上〕文化七午六月

根岸へ　　大給

高輪成覺寺境內古門前町家相止、寺地ニ致し度儀問合、

御書面成覺寺地面之義、去寅年〇文化二年類燒いたし難澁ニ付門前町家相止、寺地ニ致度旨之儀相糺候處、同寺地面之儀ハ、古來より成覺寺門前と唱候儀は無之芝田町八丁目町並之年貢地ニて、町並屋敷ニ候、依之前々ゟ家主附町役諸入用等勤來候地所ニ御座候、既ニ當住入院致し候砌も、町內家持家主共へも相屆、茶振廻等も致し、町內ニても居付地主同樣ニ心得居候由、尤成覺寺ニ不限、外武家方寺院等町並屋敷囲込ニ致し候も、町役諸入用相勤候義ニ付、右町屋之分、成覺寺江囲込候共、御糺之上、外並之通、町役諸入用差出候義ニ御座候ハヽ格別同寺願之趣ニてハ難相成筋と奉存候、則町年寄共相糺候書付相添、及御挨拶候、

午六月

〔御府內備考八十七〇飯倉〕大養寺門前

一當門前起立之儀ハ、台德院〇徳川秀忠樣御局爲御菩提所、慶長十六年、寺地四千九百九十五坪、大養寺江

拜領被仰付、右地所拜領之節、永井信濃守樣御差圖ニ而、土井大炊頭樣、并水野監物樣地所御割渡被成下、尤田地ニ有之候處ヲ、築地ニ被成下候、右拜領地境内之内七百七十六坪一合九勺、四才之場所、年月不知、願濟ニ而町屋家作仕、大養寺門前ト相唱、寺社御奉行御支配ニ罷在候よし、然る處年月不知、町御奉行御支配ニ被仰付候、尤書留燒失仕、願濟寺社御奉行所之儀は相分不申候、

〔御府内備考三十八駒込〕高林寺門前

一往古駒込村百姓地ニ有之候處、高林寺、本郷御茶水ゟ、明暦三酉年引地ニ相成、當時之地所拜領仕、寛文年中、門前町屋御免被成下、寺社御奉行支配之處、其後延享二丑年十二月中、町奉行御支配ニ相成申候、尤地所之儀者、外町屋敷同樣ニ而、沽券等有之、古券地ニ御座候、且當門前地、古來ゟ同寺江年貢差出來申候、

〔御府内備考十七淺草〕淺草寺地中金剛院門前

一右は明和元申年ゟ、中年拾ケ年季門前地ニ奉願上候處、寺社御奉行酒井飛驒守樣御勤役中、願之通被仰付、夫ゟ年季明度々奉願上、願之通被仰付候、○中略

差上申一札之事

一拙寺境内本堂并自坊大破修覆、極貧寺ニ付難及自力難儀仕候、右境内角地面ニ而、西側三十二間、表通リ向ハ町家ニ而御座候得ハ、屏通り塵芥集リ、行倒等有之、貧寺有之候故、見廻リ等も行届不申、火之元甚無心元奉存候、依之朱引繪圖面之通り、西之方裏通り南北江間口十八間、奥行東西江四間之所二尺引込、竹垣仕、入口四ケ所明ケ、二間半梁ニ桁行十八間、東之方裏通り一間之下屋付一棟ニ仕、平ら家瓦葺ニ而貸家境竹垣仕、明和元申年ゟ午年迄、中年十年季内、門前地被仰付被下置候樣、酒井飛驒守樣寺社御勤仕中、御願申上候處、願之通被仰付、難有仕合奉存候、其後年季明ケ度々奉願上、寛政六寅年、年季明ケ候處、猶又同寅年ゟ、當子年迄、中年十年季貸續被仰付被下置

候樣、青山下野守樣寺社御勤役中、奉願上候處、寛政九巳年、土井大炊頭樣寺社御勤役中、願之通被仰付候、然ル處、當子年、年季明ケ候ニ付、新門前家取拂之儀茂、先達而御觸茂御座候間、貸續願上候趣、甚奉恐入候得共、前書奉申上候通り、拙寺義極貧寺ニて、堂自作修覆等難及、自力、難儀至極仕候ニ付、當年ゟ來ル戌年迄、中年十ケ年年季貸續被爲仰付被下置候樣奉願上候ニ付、今日爲御見分被成御出、拙寺幷隣寺近寺町役人共被召出、御立合申上、朱引繪圖面を以御見分被成候處、相違無御座候、拙寺願之通被仰付候ニも、何之御障も無御座候段、一同申上候上ハ、何卒願之通被爲仰付被下置候樣奉願上候、尤有來之外、町家ケ間敷作事幷又貸等一切不爲仕、紛敷者不差置、年季明キ候ハヾ勿論、年季之內ニて茂返地仕候ハヾ、早速御屆可申上候、爲後證仍如件、

淺草寺地中　金剛院

文化元子年十二月廿一日

大久保安藝守樣御內　金井才右衞門殿

〔寺社法則 下〕文化八未四月

有馬〇中略

小田切へ達

西久保天德寺門前地之義ニ付、先達而御懸合有之、土佐守方ニ而相糺、同人病氣ニ付、私方へ申達候間、則左ニ及御挨拶候、

一右門前町家ハ、往古孫兵衞町と唱、慶長十六年、天德寺、當府之場所へ引地ニ相成候以來引續居附之町屋ニ而、寛文二寅年之比ゟ、町方支配ニ成候趣、名主方書留有之、起立不相分候へ共、門前町家持共、沽券狀致所持、寛文十二子年家屋敷賣渡候沽券狀も有之、年古沽券之地所ニは無相違相聞候、尤天德寺ゟ人足役差出、公役金等は差出不申候、延享二丑年、寺社門前町家御引渡ニ相成候巳前より、町方支配之場所ニ御座候、尤東叡山增上寺門前町屋、其外沽券附ニ相成候寺社門前町屋同樣、沽券地ニ而、家屋敷賣買致し候場所、九箇所程有之、右寺院へハ人足役錢又ハ

持添地　抱屋敷　抱地

掃除役錢等納來候、其外古例之寺社門前、并寺社附之地面を、願之上町人共江貸附、地代を其寺院ゟ所務いたし、或ハ右之内ニハ、年季町家と唱候類も有レ之、右之分、延享二丑年、都而門前寺社領、町家共、御引渡有レ之候へ共、其以前より右之内ニも、町家支配ニ相成候も有レ之候、

右之趣及二御答一候

〔芝寺社書上一〕

築地本願寺末　芝金杉裏三丁目　南光山法龍院　經覺寺〇中略

淨土宗

一買添地町並屋敷坪數貳拾貳坪〇中略

文政十年丁亥十月　經覺寺

〔寺格帳下無本寺〕御朱印寺領高貳百八拾三石餘并門前境内　京六孫王社大通寺　律宗眞言三論兼學　遍照心院

〔寺社法則下〕文化三辰五月　曾我熊之助へ間合

一御書面、持添地、抱地之譯、御内々被レ成二御承知一度旨承知仕候、境内地續ニ而、往古ゟ寺附之地所を持添地と唱來り、住持一代切ニて所持之地所を抱屋敷、抱地と唱申候、尤百姓屋敷地を抱屋敷と唱、田畑地面を抱地と唱申候、

〔寺社法則上〕延享二乙丑年　申渡

諸寺院境内寄附地等申付、持添地之分、家作致間敷旨、證文申付差免候、然處近來持添地江土藏抔建度願相申出候、先達而申付通り、家作之儀は、一向不二相成一候付、其趣相心得、自今右體之願仕間敷旨、觸下之寺院へ可二申渡置一候、

丑二月

〔寶永七寅年以來相改候寺社帳〕寶永八年卯二月

施入田地
公地施入

一古跡　日蓮宗　伊豆國法花寺末　雜司谷　寶城寺

借地百拾坪

外百坪持添卯塔場

右寶城寺、本多彈正少弼方江願出候ハ、卯塔場差詰致難儀候、境內西之方、旦方寄進地百坪有之候間、持添卯塔場ニ仕度旨相願候ニ付、見分遣、遂吟味寺處、寶城候申趣無相違ニ付、彼地牛込濟松寺領故、承合候處、持添卯塔場ニ差免候而茂障儀無之旨、名主組頭幷濟松寺代官書付差出候ニ付、願之通差免、四方致生垣、入口枝折戶附、向後家作仕間敷旨、證文申付、

〔芝寺社書上一〕　淨土眞宗　淺草本願寺末　芝金杉裏二丁目　林光山　德念寺

一古跡御年貢地、淺草本願寺抱地貳百八拾四坪之內、間口六間一尺、奥行八間二尺、五拾八坪餘、拙寺境內ニ御座候、〇下略

〔芝寺社書上三〕　京都西六條本願寺御門跡末　芝田町六丁目　久遠山延立寺〇中略

一境內繪圖朱引仕候處、右前町屋敷之儀ハ、往古より拙寺抱町屋敷ニ御座候處、八十ヶ年已前、無據事御座候而、人之爲ニ町人方江引渡申候、〇下略

〔寺社門前帳〕東叡山御本坊御抱屋敷

上野山王下町　同車坂下町　神田相生町　下谷長者町　上野黑門前町　下谷竹町生池院門前

右者、御本坊御家來拜領町屋敷執當支配、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年三月辛巳、詔東國朝集使等曰、〇中略又於脫籍寺入田與山、

〔續日本紀 孝謙 十七〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔、捨大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各絁五百疋、綿一千屯、布一千端、稻一十万束、墾田地一百町、法隆寺絁四百疋、綿一千屯、布八百端、稻一十万束、墾田地一百町、弘福四天王二寺各絁三百疋、綿一千屯、布六百端、稻一十万束、墾田地一百町、〇弘福以下三十一字據一本補、崇福、香山藥師、建興、法花四寺、各絁二百疋、布四百端、綿一千屯、稻一十万束、墾田地一百町、〇中略今故以茲資物、敬捨諸寺、所冀太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥薫質、万病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下太平、兆民快樂、法界有情、共成佛道、

〔續日本紀 稱德 二十八〕神護景雲元年十一月壬寅、四天王寺墾田二百五十町、在播磨國飾磨郡、去戊申年收班給百姓口分田、而未入其代、至是以大和、山背、攝津、越中、播磨、美作等國乘田、及沒官田捨入、

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲二年五月辛未、惠美仲麻呂越前國地二百町、故近江按察使從三位藤原朝臣御楯地一百町、捨入西隆寺、　九月辛巳、又先是、勅、如聞、太宰府收觀世音寺墾田、班給百姓、事如有實、深乖道理、宜下所司研其根源、即仰大宰搜求舊記、至是日、奉勅班給百姓見開田十二町四段捨入寺、園地卅六町六段依舊爲公地、

〔續日本紀 光仁 三十二〕寶龜四年四月癸丑、捨山背國國分二寺便田各二十町、　十一月辛卯、勅、故大僧正行基法師、戒行具足、智德兼備、先代之所推仰、後生以爲耳目、其修行之院總卅餘處、或先朝之日有施入田、或本有田園、供養得濟、但其六院、未預施例、由茲、法藏湮廢無復住持之徒、精舍荒涼、空餘坐禪之跡、弘道由人實合奬勵、宜大和國菩提、登美、生馬、河內國石凝、和泉國高渚五院、各捨當郡田三町、河內國山埼院二町、所冀眞筌秘典、永治東流、金輪寶位、恒齊北極、風雨順時、年穀豐稔、

〔續日本紀 桓武 三十九〕延曆五年四月乙亥、播磨國言、四天王寺飾磨郡水田八十町、元是百姓口分也、而依太政官符入寺訖、因茲百姓口分多授此郡、營種之勞爲弊實深、其印南郡、戶口稀少、田數巨多、今當班田、請遷飾磨郡置印南郡、許之、

〔類聚國史 百八十二 寺田地〕延暦十二年二月戊午、播磨國言、故左大臣從一位藤原朝臣永手位田□□町、神護景雲三年、有勅入四天王寺、夫賜位田者以身爲限、永入寺家、事乖國憲、勅先朝既行、宜莫收還、

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年正月戊戌、律師傳燈大法師位如寶言、招提寺者、斯唐大和尙鑒眞爲聖朝所建也、天平寶字三年、勅以沒官地賜之、名爲招提寺、又以越前國水田六十町、備前國田地十三町充給供料、令學戒法、

〔三代實錄 二 淸和〕貞觀元年五月十九日甲戌、傳燈大法師位道詮奏言、法隆寺東院、是聖德太子所居、堂宇奮存、遺像是在、年祀稍久、破壞日加、請以大和國平群郡水田七町四段施入彼院、以充修理堂舍幷忌日轉念功德料、許之、

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年閏十月五日辛卯、勅以山城國乙訓郡公田五町爲元慶寺田、而四段三百十六步返入石作寺、今以宇治郡官田四段三百十六步施入元慶寺、

〔三代實錄 四十 陽成〕元慶五年七月十七日癸亥、越前國丹生、大神、坂井等郡田地六百一町九段百五十八步、依天平勝寶元年四月一日詔旨、令興福寺領得、但天平勝寶元年以前爲公田之類、雖在四至之內、不聽領之、

〔三代實錄 四十四 陽成〕元慶七年七月廿一日乙酉、山城國愛宕郡墾田四段七十步返給鶴原寺、班田使收公給百姓口分、寺愁訴、故返之、　九月廿三日丙戌、山城國紀伊郡墾田二段返給實相寺、攝津國島下郡墾田一町九段三百五十八步返給藤原豐淵、班田使收公班給百姓口分、寺及豐淵等以本公驗愁訴、故返之、

〔三鈷寺文書〕攝津國生島庄富松鄕內公田七町百十一步、坪付在別紙 聊有子細、爲故准后御菩提、限永代所被寄進善峯觀念三昧寺供田也、更不可有向後之煩、末代若被返付本庄之時、可被沙汰下用途參百貫文之由所候也、仍執達如件、

文永四年二月八日　散位花押奉

淨證上人御房

〔集古文書四十二寄附状〕將軍久明親王寄進狀相模國鎌倉鶴岡八幡宮藏

奉寄　鶴岡八幡宮寺

近江國報恩寺半分地頭職、幷周防國小鯖庄半分預所職、伊豫國齋院勅旨田事、

右爲長日不斷本地供料所、武藏國鹿島田郷替所被寄進也者、依將軍家仰、奉寄如件、

正應元年十一月廿一日　前武藏守平朝臣花押

相模守平朝臣花押

〔新善光寺文書〕新善光寺、號御影堂、當敷地事、五條町北西頰南北廿丈、東西四拾丈、帶今度本主宛狀、被建立寺家云々、尤被感思食訖、彌勵佛法興隆志、可被專勤行之由所被仰下也、仍執達如件、

享祿二年十二月六日　信濃守花押○諏訪長俊

河内守花押○遊佐就盛

當寺雜掌

私地施入

〔日本書紀推古二十二〕十四年五月戊午、勅鞍作鳥曰、○中略今朕爲造丈六佛以求好佛像、汝之所獻佛本則合朕心、又造佛像既訖不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戶、然汝不破戶而得入、此皆汝之功也、卽賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田二十町焉、鳥以此田爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺、

〔日本書紀推古二十二〕十四年、是歲皇太子○廐戶亦講法華經於岡本宮、天皇大喜之、播磨國水田百町、施于皇太子、因以納于斑鳩寺、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年閏八月壬戌、紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言、○中略伏願以此功田永施其寺、○山階寺助維摩會、彌令興隆、遂使內大臣之洪業與天地而長傳、皇太后之英聲俱日月而遠照、

〔類聚國史〕百八十二 寺田地 延暦十二年二月戊午、播磨國言、故左大臣從一位藤原朝臣永手位田□□町、神護景雲三年、有勅入四天王寺、夫賜位田者、以身爲限、永入寺家、事乖國憲、勅先朝既行、宜莫收還、

〔大覺寺文書〕日根秋友解　申請常荒地事

合陸拾町者 佐糸郡之内捺田島一所

四至 限東下居 限西世山川前 限南大川 限北四津谷井葛木峯

右件常荒地者、去天長二年、秋友開發、經三四箇年間、无指其主、而秋友請當土之刀禰、郡内所司證判、秋友成地主了、但窪地者爲治田、高地者爲後代之明鏡、仍注子細以解、

天長六年二月十日　日根秋友

在地刀禰與判

〔三代實錄〕四 淸和 貞觀二年十月十五日辛卯、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八步施捨不退、超昇兩寺、先是傳燈修行賢大法師眞如上表曰、件田、大同四年、勅賜上毛野 眞如同母妹 叡努 眞如異母妹 石上 眞如同母妹 内親王等、彼親王等偏謂、私地捨充功德、而歷代以降、盡被收公、闕諸俗務、理縱宜然、眞假之論義、有未謐、當今慈雲廣覆、慧日更明、凡緣佛事之莊嚴、必賜恩綸而印可、請特哀許、施入不退、超昇等寺、不破亡靈之宿心、將資聖朝之冥助、勅許之、眞如者平城太上天皇皇子、弘仁之廢皇太子也、

〔朝野群載〕十七 佛事 施入帳

藻原庄一處

地四至 限東淸水野 限西巨堤葦原 限南綠野 限北小竹河

東西壹仟貳拾丈　南北肆佰捌拾漆丈

田代庄壹處 在長柄郡 壹處 在天羽郡　開田參十餘町　畠等 員在券文

右庄田等、副圖券公驗等書、奉入如件、就中藻原庄、曾祖父故從四位上黑麻呂朝臣之牧也、墾闢爲治

田也、田代庄、始自曾祖父至于祖父故從五位下春綱朝臣、其間往々買得以爲私業也、先考故從四位上良尙朝臣、相承管領也、菅根等、先人生平被過庭之訓云、件兩箇庄、先君有命、可施人與福寺云、昔先君於此藻原庄寢居、即遺命云、病深膏肓、命迫旦暮、若有不諱、葬此庄中、汝生時我無厭、若其後子孫非其人、轉爲他人之地、恐令牛羊踐我墳墓、須汝世即施入興福寺者、仍隨遺命葬件庄中、今我命鎌頗叶、得免飢寒、須隨先君本意施入彼等、比作此念、不意遷化、今菅根等敬隨祖考之命施入件寺庄田、伏願寺家下知彼庄、但天羽庄、奉維摩會之資用、藻原庄奉諸聖衆之供給、願以此功德、先奉資祖考、早脫漏屋遊常樂我淨之域、乍渡迷風獨究覺涅槃之岸、乃至七世父母、皆成佛道、敬白、

寬平二年歲次庚戌八月五日　蔭子　藤原朝臣敏樹　藤原朝臣基風　藤原朝臣房貞

藤原朝臣顯相　藤原朝臣眞興　因幡掾藤原朝臣菅根

奉別當大納言口口卿宣偁、宜下知彼寺早令領納者、

同月廿日、別當左少辨藤原朝臣佐世奉、

〔仁和寺文書一〕奉寄　所領壹處事

在越前國東條郡內

河和田庄　公驗目錄在別紙

右件處領、元者親父周衛朝臣先祖相傳私領也、繼所讓與周子、仍爲募御勢、永奉寄待賢門院之御願法金剛院御庄、以周子之子々孫々爲預所、可執行庄務者、相副次第公驗所進如件、

保延五年十一月日　藤原周子

〔寶簡集二十三〕押紙　齋院御自筆　蓮華乘院二卷內御寄附

前齋院廳下　南部御庄政所

可早寄進於高野山蓮華乘院當御庄內山內村田拾町事

右件御堂、爲故鳥羽院御菩提、所令建立御也、仍以件村所當地利、爲被充彼佛性燈油人供等、令寄進者也、然者於自今以後者、縱爲庄役、雖被充課勅院事等、至于件村者、更不可支配者、存此旨、永可爲被御堂御領之狀、所仰如件、敢不可違失、故下、

承安五年六月廿四日　　宮内錄中原（花押）

別當少納言兼侍從藤原朝臣（花押）　　河内權守紀朝臣（花押）

〔三鈷寺文書〕寄進　私領山田地等事

在小鹽

一處一段　　一處半

在玖條西洞院二戸主

副進

本券三通

右件田者、觀性相傳之領也、而爲二世資糧、永以奉寄本師釋迦牟尼如來畢、但於預所者、門迹之中以其器量者可令知行之狀如件、

元曆元年五月十五日　　法橋（華押）

〔三鈷寺文書〕右大臣家（○藤原實定）政所下　鷄冠井殿寄人沙汰人等

可早充行故三位殿（○實定父公能）御月忌幷御忌日料田參町事

神嚢里

卅二坪五段小（三斗代、貞光、）　同里卅四坪六十步（三斗代、貞光、）

榎小田里

三里四段（五斗代、貞光、）　同里十一坪六段內（五斗代、二段、貞光、）

田邊里
十九里四段半 三斗代、國利、
已上御月忌料
神嘗里
廿六坪六段六十歩 四斗代、眞光、　同里廿七坪三段 四斗代、眞光、
弓絃羽里
八坪三百歩 四斗代、眞光、
已上御忌日料
右件田參町、爲故三位殿御月忌并御忌日用途料、所被割充也、寄人沙汰人等宜承知不可違失、故下
文治四年四月　日　案主大江
令　太皇太后宮大屬菅野朝臣　大從主水令史清原眞人
別當散位藤原朝臣 花押

〔高野山奧院興廢記〕土御門御宇建仁三年 癸亥 二月日、河內國壺井里、源義家入道廟所云々 通法寺 伊豫入道墓所 別當僧永賢 號大進房、元住當山、撿挍玄信弟子也、以私領田施入奧院、願念之趣、懇志之至、盖爲結三會得脫之芳緣、永奉施三段相傳之私田、即配三口承仕之依估、將備三身菩提之資量、

〔集古文書 四十二 寄附狀〕僧定盛寄進狀 河內國古市郡壺井八幡宮藏
奉寄進河內國古市郡內通法寺寺領別當寺務職并所職名田畠山野所從資財雜具等事、
右於當寺領以下等者、僧定盛代々相傳之所領也、而遂世間無常之習、上、連病更發之間所注置也、且任先師素意、嫡男代一丸宛行畢、但若代一丸不慮子細出來相傳難治之時者、舍弟童一丸令相傳知行、寺務以下、尤可致興隆也、且任先師讓狀并代々調度證文等、所讓與明白也、仍爲後代龜鏡所注置

之狀如件、

文保二年戊午八月三日　　僧定盛花押

〔妙心寺文書三〕寄進　長講堂領但馬國七美庄上方內萩山名事

右於當庄上方者、經秀代々相傳當知行無相違地也、然病氣依難儀既相待臨終時分、於老父者、折節令在國、至于子息等者、幼稚之間、末期追善以下迷惑之餘、以件一名、妙心寺開山和尙塔頭微笑庵仁重所奉寄進也、任申置旨被取行沒後佛事等、被立置位牌於當庵、至于未來際可被弔菩提者也、此上者、於子々孫々不可致違亂煩、若令違亂者、爲不孝之仁、不可知行經秀跡、永代爲寺領、更不可有相違者也、仍爲後日寄進之狀如件、

應安六年五月十六日　　經秀花押

〔大內義隆記〕山門ノ座主領、仁和寺ノ法務領、東大寺ノ國ケ領、往古ノゴトクキフシ玉ヒ、佛陀人ニカヘラザル事ヲゾ深ク申サレケル、紫野玉堂和尙ヲ申下サレテハ、參學ノ師範トシテ、座禪ノ床ニアガリ、八境界ノ月ヲ澄シテハ、無明ノ闇ヲ拂ヒ、觀念ノ窻ニ向ヒテハ、三茶本〇茶一作着ノ心ヲ襲ヒ給ヌ、此和尙ヲ尊ミ申サレテハ、新造ニ佛閣ヲ構、龍福寺ト號シテ五百餘貫ノ寺領ヲキフシ、末寺ヲ餘多ソヘ玉フ、

〔諸寺文書纂九〕平藪空閑院新田之事

開山勢譽上人御寄進之上者、於彼寺領者、代々住持幷旦那ハ、永代令沽却事、堅停止、万一此旨有違背者、從本寺而可被加成敗之旨如件、

大永八年戊子二月三日　　第六世玉譽愚道　充蓮社有判

道閑有御判

〔明月院文書新編相模國風土記稿所載〕禪興寺總門內田畠一貫六百八十一文、同所山野竹木之事、

施入得分
地子施入

明月院分百八十文、任永正十七庚辰年落著之旨、令寄附者也、仍如件、

天文十六年丁未十月十二日　氏虎朱印

明月院

〔諸寺文書纂九〕道甫十三回爲孝養、御寺近所ニ候以眞如寺領內參十貫目、永代寄進候、從此內公方年貢大門築田方へ從御寺、貳貫五百文可有御納所候、但依其年體可爲撿見次第候、田畠小日記別紙ニ在之、作人者誰々雖爲被官、被召放、御寺之可爲御計候、於子々孫々聊不可有違亂者也、仍末代之證狀如件、

天文十六年丁未十二月五日　岡崎三郎 廣忠在御判

大樹寺参

〔曇華院文書〕山城國西院內參拾石事、爲新地進之訖、全可有直務之狀如件、

天正參十一月六日　信長朱印

曇華院雜掌

〔古文書彙纂〕尙侍從二位五百井王家

白米肆斛

右故能登內親王、去寶龜十一年、以品田壹町地子、奉入般若寺佛御供養料、而□□未奉其實、仍今追一箇年之地子代奉入如件、

弘仁六年十月廿五日　少書史大初位下杖部路忌寸道麿〇中略

家令從六位上大原史繼吉

〔諸寺文書纂三〕奉寄進　大濱御道場西濱地子事

右上者中松下迄、下者自堀尻南八町、以此寄進每月可訪命日者也、仍而爲後日狀如件、

領家職施入

康曆二年卯月廿一日　沙彌道弘花押

〔妙心寺文書五〕奉寄進屋敷之事

合壹所者北方藪有之

右件敷地者、每年壹貫文地子仁定所也、爲常觀禪門後生善提而、永代妙心寺常住江奉寄進實正也、本支證狀一通相副進入申候、若於此屋敷有異亂之輩者、爲公方可有盜賊之御成敗者也、仍爲後證寄進狀如件、

文明貳年四月十三日　西京久富後室尼祖秀花押

〔多聞院日記〕奉寄進　與福寺七堂佛餉料所事、

合貳町貳反定頁○所○米○トシテ、合一石一斗定、反別五升ヅヽ、佛餉升十一合定

右此下地ハ、佛餉付有其由緒之旨候、從當年拙者へ、森田跡式給置候間、永代我等子々孫々付被下置間之事者、反別五升宛負所米而、無旱水損寄進申處也、則百姓方へ可致下行之間、可有御直納者也、以別段懇志如此候、然バ可被抽武運長久、壽福增長、子孫繁昌精誠者也、仍後代證文如件、

永祿九年丙寅卯月三日　河合權兵衛尉淸長判

福智院殿參

〔天龍寺文書一〕臨川寺領加賀國大野庄領家職事、寄事於動亂、軍勢等致濫妨云々、早鎭狼藉、可全寺家所務、若有違犯之輩者、爲處重科、可注進交名之狀如件、

建武三年八月二日　花押

富樫介殿

〔廣隆寺文書乾〕附箋 義教

桂宮院領山城國桂新免得宗領并美濃國西池田庄內豐久鄉領○家○職○半○分事、

早任當知行之旨、寺家領掌、不可有相違之狀如件、

永享四年四月　　花押○足利義教

〔南禪寺書留〕慈聖院領河內國八箇所內島頭領家職事

地頭職爲北野宮寺領也

右在所者、勸修寺右兵衞佐重經、應安七年甲寅九月二日寄附當院地也、得分半分者、勸修寺殿、從寺家取沙汰之、半分者、爲寺納者也、爾來當知行無相違、斯波修理大夫入道祐護、同左衞門佐入道道源、八箇所知行之時、爲寺家直務、彼二代之狀在之、○中略

八箇所、祖父禪能印直務之時、京著三千石、日供入目ハ、一年中六百石也、松梅院禪親、於殿中申之、

右彼在所、三十八箇年不知行之處、伊勢守貞親、同名備後入道照永、其子七郎右衞門尉貞熙、於殿中、以條々懇訴、重而御還補于當院、併彼兩三人之爲新寄進者也、後日爲此門業之人、可證知者也、

康正二年丙子十月吉日　　院主中璞花押

〔諸寺文書纂二〕和泉國和田庄領家職事、止軍勢料所之儀、可被付金剛寺之由、今月六日國宣如此、早可被沙汰寺家雜掌於當所之狀如件、

十一月十一日　　左衞門少尉花押

濟恩寺掃部助殿

〔集古文書十七判物〕畠山在氏判物

河內國觀心寺領同國觀心寺七鄕地頭領家兩職半分事、任代々寺證幷當知行旨、領掌不可有相違之狀如件、

天文六年丁酉十一月十三日　　在氏花押

觀心寺衆僧御中

同遵行狀 河内國錦部郡觀心寺藏

河内國觀心寺七郷地頭領家兩職之事、任御代々御判之旨幷長政一行、不可有相違之狀如件、

天文六年十一月十三日　沙彌淨徒 花押

觀心寺

年行事

本家職施入

〔古簡雜纂 午〕大和國山口庄雜掌謹辨申 ○中略

當庄者、故按察局之知行之時、以本家職、令寄進北小路大納言家、於領主職者、子孫相傳不可有相違之詞、被讓進法性寺姬宮御所之時、○中略 姬宮御他界之剋、以當庄、爲御菩提、令寄于嵯峨二尊院、正覺上人之時、侍從忠光、依令寄附件本家職、於興福寺西金堂家、致濫妨之間、應司禪定殿下御當職御時、西金堂家與二尊院長老番訴陳、被經再往御沙汰、○中略 粗披陳言上、如件、

延慶二年四月日

地頭職施入

〔天龍寺文書 一〕加賀國大野庄地頭職 四條中納言隆資跡 事、爲甲斐國牧庄替所、寄附臨川寺、狀如件、

建武三年八月卅日　源朝臣 花押

夢窻國師

〔鰐淵寺文書 二〕出雲國三所郷地頭職、任先度綸旨、鰐淵寺根本南院知行、不可有相違者、天氣如此、悉之以狀、

興國元年八月廿三日　勘解由次官 花押

〔西大寺藏本 下〕伊賀國島原保地頭職、爲後鳥羽院、後宇多院、後醍醐天皇御菩提料所、可被知行者、天氣如此、仍執達如件、

正平八年五月十五日　勘解由 在判

給藏米

西大寺長老

〔天龍寺文書二〕寄進　臨川禪寺

駿河國田尻郷南村河原一色地頭職事

右田尻郷南村河原一色地頭職者、任康暦元年九月十二日御下文、幷同十月十三日御教書之旨、所令還補也、而且爲亡父相模守清氏追善、且爲普賢菩薩結緣、限永代所奉寄進臨川禪寺也、仍寄進之狀如件、

永德元年五月六日

阿波守正氏花押

進上　臨川寺衣鉢侍者禪師

〔理性院文書坤〕三ぼうゐんもんぜきざつゑやう申、山ゑなおの丶庄四の宮さんさいとうの事、

右山ゑなそうかう地とうしきの事、ぐはんおう年中より、代々の御判をたいせられ、いまに御知行ニ同じくおの丶庄りやうかうとうの事、

ふくわうゐん殿様○足利義教の御代御せいばいをなされ、正ちやうぐわんねんより、たう御代いまにいたり候て、御知行さほひなき事に候、此りやうかうのまいり候事、三井寺の上くわうゐんよりつたはり、大きやうがねよりもんぜきへ御はいりやうの所に、山しな家知行をいたし、すぐにもんぜきへわうりやうのよし申かすめられ候、上ゐとして、御はいりやうのうへは、わうりやうのよし申され候、くせ事尋候、此だん先御代御さたを經られ候て進せられ候、仔細御教書に見え候、此よしきこしめし入られ、御せいばひかしこまり存べく候、仍言上如件、

文明十八年八月日

〔寺格帳上淨土宗〕高九千四拾石御判物内貳百石御藏米　御靈屋料

〔寺格帳上禪宗〕御藏米

課役免除

一高五拾俵　　下各　廣德寺

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年八月廿四日壬申、昔弘仁末沙門玄賓於伯耆國會見郡、建立阿彌陀寺、至是勅、永免寺田十二町九段四十步租、本國內百姓所施入也、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年六月廿九日癸亥、備前國御野郡圓覺寺庄常荒田四十九町百三步、永免輸租、

〔東大寺要錄六〕東大寺牒　當國衙

欲被免除寺家香菜庄國司等防河夫役幷臨時雜役狀

添上郡五所

和邇庄、大宅庄、中庄、櫟北庄、簀川庄、〇中略

牒、件庄國司等愁狀偁、御寺建立以降至于大佛御供、代々聖皇依本願之趣、以供御稻被割宛者、仍當國百姓不運御稻、已得息肩之便、御菜者、昔國內道心之輩、隨力所堪各以備進、其子孫爲件庄國司、供奉年久、經部相分雜有其數、公民不幾、往代以後依免臨時雜役、雖無料物所勤行也、而今當時國宰不免雜役、宛如平民、況乎又負課防河夫役、切勘殊甚者、倩尋案內、防河夫役、去年二月被下可免除之宣旨了、綸旨不輕、何有差宛乎、就中、當時國宰循良之聞、普及分憂之政、偏無涂國之愁、何無判許、仍牒送如件乞衙察之狀、早任宣旨、停止夫役幷被免臨時雜役、仍注事狀以牒、

寬弘七年八月廿二日　　權都維那法師行好　都維那法師鴻助

別當權少僧都澄心　上座　寺主大法師安璽

〔東大寺要錄二〕東大寺

注進　寺領役夫工免除證文事

三の國大井庄茜部兩庄免除宣旨四通之內

一通、件兩庄役夫工、無前跡、宜從停止之由宣旨、

天永三年二月七日

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年九月十七日癸卯、相模國大山寺、免田五町、畠八町、任先例可引募之由、今日下知給云云、

〔不動堂文書新編相模國風土記稿所載〕下高部屋郷、可早任先例引募大山寺畠等事、

元暦元年九月十七日〇有源頼朝御判

〔集古文書十四廳宣〕建仁三年廳宣河内國錦部郡觀心寺藏

廳宣　留守所

可令早任度々宣旨并後白河院廳御下文、免除觀心寺東坂等國役雜事及踐祚大嘗會初齋宮初齋院事等事、

右件寺領勅院事、國役等可免除之由、度々被成下宣旨廳御下文畢、早任彼狀、可停止國役万雜事勅院事等、兼又石川郡内東坂者、可爲寺領之由、承和三年官符顯然也、加之保元年中、重有其沙汰、寺領無相違、而郡任人等近日任自由、切取材木云々、所行之旨尤不當也、早可停止彼濫行之狀、所宣如件、留守所宜承知依件行之、以宣、

建仁三年六月廿八日　　右兵衞權佐兼守藤原朝臣判

〔集古文書四十二寄附狀〕北條貞將寄附狀武藏國金澤稱名寺藏

下總國下河邊庄内赤岩郷、信濃國石村郷、武藏國六浦庄富田郷、今者□□里谷此所々者、爲不輸之地、永代奉寄附當寺候、此外父祖二代之間、寄附之所々者如本知行御管領不可有相違候、天下泰平之御祈念、可被致精誠候、恐々謹言、

正慶元年二月十六日　　武藏守貞將花押

稱名寺長老

〔南禪寺文書〕後醍醐天皇宣符

太政官符南禪寺

應停止國司守護使入部、并官使檢非違使、院宮諸司、及神人甲乙人等亂入、造諸社以下、大小國役、國東鎭西早打役、當寺領遠江國初倉庄內江富鄉、吉永鄉、鮎河鄉、藤守鄉、同國新所鄉、加賀國得橋鄉、同鄉內佐野村、佐羅村、今村、府南社神主職、并得南、釜延長恒等參名、同國笠間東保、但馬國池寺庄、播磨國矢野別名、同國大鹽庄、備中國三成鄉事、

右得當寺住持沙門疎石、去二月日奏狀偁、當寺者、龜山法皇革皇居成佛閣、廟叡志興祖宗、締構既遂、尋常、尊崇亦無等匹、仍被降天澤廣天之宸翰、永令備寺領安全之龜鑑、今又賜五山最頂之綸旨、彌奉祈萬歲康寧之洪基者也、望請、殊蒙天恩、當寺領悉任勅願之叡志、爲三寶常住物、盡未來際無改轉、爲寺家一圓之地、永止國衙之綺、并國司守護使等入部、應被停止造諸社以下官使檢非違使、院宮諸司、國使等之亂入、大小臨時之國役、關東鎭西上下早打役、吉備津宮役、白山金劔宮以下、諸寺諸社神人、甲乙人等亂入狼藉之旨、被成下官符、備寺領安全之龜鏡、全寺用彌欲奉祈天長地久之御願者、從二位行權中納言兼春宮權大夫左衞門督大學頭藤原朝臣實世宣、奉勅依請者、寺宜承知依宜行之、符到奉行、

從四位上行左少辨藤原朝臣　　修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰

建武二年四月廿二日

〔天龍寺文書　一〕太政官符山城國司

應停止伊勢太神宮役夫工米御禊、大嘗會以下勅役、院役并都鄙寺社所役、及國中段米、關米、恒例臨時公役等、永爲臨川禪寺領、當國葛野郡內大井鄉事、

右得彼寺住持沙門契愚去年十二月日奏狀、偁、謹啓案內、去建武年中、後醍醐上皇賜宸翰詔曰、當寺者、龜山法皇仙居、都督大王〇世良遺跡也、昭慶門院傳領之、附屬大王、大王命爲蘭若、仍加寺領、寄附國師、〇中略既爲勅願寺、奉祈我聖朝、於是有數箇之榮地、轉一寺之食輪、欲賜諸役勅免之官符、而備將來不易之規鑑、望請洪慈、枉聽懇款、然則一百許輩之緇徒、常祝無疆之聖祚、盡未來際之歷數、長擧揚敎外之宗門者、正二位行權大納言源朝臣通冬宣、奉勅、依請者、國宜承知依宣行之、符到奉行、

正四位下行左中辨平朝臣　修理東大寺大佛長官從四位下行左六史小槻宿禰

貞和五年四月廿八日

〔諸寺文書纂八〕當門跡領諸國所々幷醍醐管領諸寺院領等事、任先例、役夫工米以下課役所免除也、此上者守護役等、向後彌可停止催促之由可加下知、早可令存知給狀如件、

長祿四年七月四日　花押〇政義

三寶院殿

〔泉涌寺文書二〕泉涌寺領攝州溯江新免分事、爲直務當知行云々、任今月十日御折紙旨、彌領知不可有相違狀如件、

文明十四

六月十日　長盛花押

當院雜掌

〔新編相模國風土記稿八十八鎌倉郡〕本覺寺

所藏文書曰、制札、本覺寺、右當寺ヘ陳僧飛脚諸公事堅令停止畢、若横合之儀申懸族有之者、速可處科罪者也、仍如件、永正十一年甲戌十二月二十六日北條早雲ノ花押アリ、

〔諸寺文書纂九〕泉松庵之事、如前住照譽守諦一期者、諸役免除候、而可給候、於後々庵主、努々其儀有間敷候、然而當寺之儀、聊於諸事不可有如在候、仍爲後日一筆令申候、恐惶謹言、

臨時課役

大永八年十一月十六日　　道閑有御判

大樹寺

〔泉涌寺文書五〕當寺門前境内地子以下事、令免除訖、永不可有相違候也、

天正十七
十二月朔日　朱印〇豐臣秀吉

泉涌寺

〔集古文書三十二下知狀〕天正十一年下知狀　所藏不詳

大覺寺御門跡領高田村御本役年貢草錢地子錢等之儀、向後御直務申定上者、下用給五段半事、並一職可爲御直務、自然誰々雖望申、御直納之上者、別號下用給事不入義候、御寺領之妨仁可成義者、今より以後も御停止尤候、恐々謹言、

大覺寺殿御雜掌中澤右近大夫殿〇中略

天正十一年下知狀

當寺境内山林竹木井寺領所々散在段錢等に、不可有違亂、次棟別人夫傳馬御借材木總而臨時之課役、巳來事被免除之段、御代々證文分明之上は、彌不可有相違之狀如件、

天正十一
十一月十八日

鞍馬寺山上山下

〔諸寺文書纂八〕自御門跡被仰候醍醐御造營段錢事、當年可申付之處、造内裏反錢不慮被仰出候間、無其儀候、仍而度可申付事者小事候共、國之儀不可事行候、於來年者必可致沙汰候、猶々内裏段錢事、俄被仰出候條、非私之儀候哉、此趣能々可預御披露候、恐々謹言、

九月二日　　義直花押

上野民部大輔殿

〔東寺百合古文書〕東山御所御普請料萬疋事、爲當寺領分不日可被致其沙汰之由候也、仍執達如件、

七月二十三日　布施下野守英基判

松田對馬守敦秀判（○敦恐數誤）

東寺雜掌

〔諸寺文書纂一〕河內國通法寺寺領、京都公方段錢事（○近○年○號○休○每年○被○相○懸○之）分、被奉寄附千手觀音上者、彌武運長久之御祈禱可被抽精誠者也、仍所被仰出如件、

大永七年七月七日　備後守

守護不入

〔天龍寺文書三〕臨川寺（付三會院）領諸國所々段錢以下諸[illegible]守護役等事

右條々、先度被免除之處、近年守護人等、或相懸人夫已下臨時課役非分料足等、令譴責之、或召仕寺領名主沙汰人等、令自專所職名田等、因茲、常住之闕乏非一事、且背佛意、且輕成敗之條、積惡之至甚、其咎惟重、向後彌於諸寺領令免許諸役之上者、永代停止使者入部、一切不可守護綺之、若猶背此旨致非法者、就寺家之注進可有殊沙汰者也、然早爲守護不入之地、可全寺用之狀下知如件、

應永廿七年四月十七日　從一位源朝臣

〔西大寺藏本下〕西大寺光明眞言料所、丹後國志樂庄地頭職（但除○地○見○曆應御寄附狀）口錢以下、諸公事、幷臨時課役等事、所令免許也、早爲守護使不入地、寺家可全領知之狀如件、

永享六年九月十四日　在判

當寺長老

〔武家嚴制錄十三〕一武州無量壽寺領御寄附狀

武藏國東叡山無量壽寺喜多院領入間郡仙波鄉五百石之事、可被全寺納、幷寺中門前屋敷境內山林竹木等令免許之訖、永代可爲檢斷使不入之地、若於背制法輩出來者各別也者、守此旨、佛法興隆

寺領訴訟

不ㇾ可ㇾ有二怠慢一之狀如ㇾ件、

元和六年三月十五日　　從一位右大臣源朝臣御判

〔鹽尻十五〕按ずるに、浮屠氏、中世開主ノ尊崇によりて、驕僭自恣至らざる所なく、剰へ兵器を備へ、武勇を事とし、國郡を押領して、國家の害をなす事諸州多かりし、某の山は僧徒武備堅固にして、勢ひ降すべからざる沙汰あり、某の寺は、法戒嚴重にして、凡人のいろふ事能はざる談あり、某の嶽は、魔所にして凡登るものは、必ず天狗是を罰すなんど、おびたゞしくいひなし、國主不。入。の地。になし、賊を集め黨を立、我意を振ひて、貪慾を先とせし事、幾百年ぞや、幸ひ名將のこれらの邪徒を屠るありて、人漸く彼が惡むべき事を辨へ、僧法師も武事を止て佛事をなす、然ども今に至りて猶魔所等の妄言をなして、一山を固する謀をなす山多し、〇中略凡そ僧祝等、佛神を假りて己を利し、驕亢不遜ならん事を欲して、國主不入の所を自慢す、今諸州たまく國主の令ならずして、關東の御下知を受る寺社を見るに、多くは不學不律ならぬはなし、動もすれば訟を發して、自遠島にうつされ、あるは一山を追出されて亡び侍るも亦幾はくぞや、今の僧祝等をして、一封の地を治せしめば、必非道人を害し、身を亡ほさゞる者はあらじ、夫を辨へずして、俄に國主不入の所とせんとおもふは、至愚の甚しきといふべきかも、

〔東大寺要錄二〕鴨社東大寺相論長渚開發事

右件地、可ㇾ爲二東大寺領一之條、應德皇后宮職〇白河中宮藤原賢子相傳之狀、嘉承宣旨、承安祐季請文等、已以炳焉歟、然者且尋二天平施入之跡一、且任二元永勘注之旨一、可ㇾ有二其沙汰一歟、抑鴨社可ㇾ爲二開發主一之由、見二記錄所勘文一、此事如何、社家若有二墾開之志一者、可ㇾ請二寺家一、將存二公領一之由者、可ㇾ觸二國司一、自由之勤、專背二格條一者歟、鴨社可ㇾ領二田地一之由、文書中無ㇾ所ㇾ見之故也、但如二康和宣下一者、猪名庄四十餘町之外、可ㇾ非二寺領一歟、准二勅施入町段一之條、雖ㇾ非ㇾ無二不審一、用捨之間、宜ㇾ在二聖斷一、以二此趣一可ㇾ被二奏聞一之狀如ㇾ件、

六月廿一日　　　右大臣 在判

右大辨宰相殿

〔古簡雜纂 子〕興福寺僧綱大法師等誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩、任先日院宣旨、被召給山城河内攝津三ヶ國國司免判、繼當寺佛法惠命狀、

右謹考案内、當寺者大織冠釰釋迦形像、淡海公建興福伽藍以降、謂披閱鑽仰之畫箱者、法相一宗之敎跡、尋朝夕鎭守之善神者、春日四所之靈社、○中略既遇藤氏繁昌之時代、豈愁山科佛法之衰微乎、而今年山城河内攝津三ヶ國庄々、爲國司各收公、仍大會相折已闕、七日齋席欲絶矣、爰大衆以此旨訴申公家之處、去月九日院宣狀云、三ヶ國庄々、早可免除、信忠請文所被副下也、爰大衆綸言如汗、悦佛日再中、然而齋會迫明日、庄役俄難叶、仍盡寺家筋力、法會如本式、而大會以後、山城國司先日優免一國庄々遣苛法使、仰諸庄民之、維摩大會其役已了、於今者人民等可靡國衙所勸、莫隨寺家所役、院宣有限、請文無私、而國司下知如返掌、早任先日勅定、召給國使免判者、五千餘輩之衆徒、忽散多日之欝霧、五百一歲之會場、重挑二明之法燈、倩思中宗盛衰、只在今度裁斷而已、望請天恩、被召賜件三ヶ國國使之免判者、將繼一宗佛法惠命、奉祈万乘聖王寶祚、僧綱大法師等誠惶誠恐謹言、

保元三年十一月日

〔續寶簡集 四十六〕

外題　院宣　高倉院

荒川庄與田仲吉仲庄相論之事 治承年

新院廳下　紀伊國在廳官人等

可令早任鳥羽院幷一院廳御下文、停止田仲、吉仲兩庄妨、高野山訴申荒川庄北堺事、

四至　東限檜峯井黒川、南限高原井多須木峯、西限尼岡中心井透谷、北限牛景淵井純陀淵南古溝

右彼山、今年十月日解狀偁、謹撿舊貫、荒川庄者、雖爲人領、元是弘法大師御手印之官符一万許町之内也、然故美福門院傳領之後、奉爲鳥羽院御菩提建立梵宇於當山、施入御庄於其砌、即相副

御手印官符三帖、奉納御影堂、重又相具調度文書、被納寺家寶藏畢、依茲以彼所當被相折其佛供人供之間、能清、長明等、構事於濫行、企妨於寺領之條、總蔑爾王威、別不奈佛法也、就中荒川庄者、尋本公驗、北四至者、牛景淵幷純陀淵、南古濤也、然院使盛弘被語、田仲庄、荒川庄之內、除五町餘打牓示畢、其後長明彌乘勝拔弃件牓示、流紀伊河畢、所爲既非謀叛乎、依茲八條女院〈○鳥羽皇女暲子內親王〉爲被改直本四至、令申下官使之處、長明又相語件官使、遙渡大河南、剗取荒川庄中心東西三十餘町南北十餘町畢、仍寺家重訴申、法性寺禪定殿下〈○藤原忠通〉田仲吉仲兩庄相論堺、永令寄進高野山御畢、而猶能清依令祗候院中、背領家御避文、私所押領也、然間去年十月比、右大將家〈○藤原頁通〉御高野詣之次、寺僧洩申上訴訟趣之處、聊似有御哀憐、仍寺僧企參洛、令訴申之間、可有對問之由依被仰下、去五月廿日、於藏人所被召問兩方庄官之日、田仲庄官長明等一言無陳申、隨負畢、其後藏人左少辨、猶可遂對問之由、依被仰下荒川庄官等、以八月廿四日雖參洛、田仲庄官長明等、一切不參云云、以知非理矣、但能清等者、謀略既盡之剋、奉寄事於殿下之御勢云々、事若實者、早任法性寺禪定殿下度々御避文、彼相論境、停能清非論、欲被返大師者也、其以者、尋東寺北家昌榮者、弘法大師南圓堂鎭壇之德也、依之、御堂關白〈○藤原道長〉詣南山、頻顯靈瑞、宇治博陸〈○藤原賴通〉凝篤信、永施庄薗、凡數代關白皆崇大師之聖跡、累葉賓佐悉興當山之佛法、是以法性寺禪定殿下守先蹤、荒川庄北堺、以永曆年中令寄進大師御畢者、任彼廳御下文、宜令停止田仲吉仲等庄妨之狀、所仰如件、在官廳人承知、不可違失、故下、

治承四年十二月　日

主典代右衞門少尉安倍（花押）

〔仁和寺文書　一〕可令早停止爲御室御領但馬國新井庄地頭致新儀非法事

右如訴狀者、總田數十八町八段三百歩、定田十三町七段百廿歩、畠十二町九段十六歩、定畠八町七段九十六歩也、而新補地頭宇多々四郎家守、背傍例、猥任田畠總員數、誂責加徵之條難堪也云々者、

事若實者甚不穩便、早停止自由新儀、云加徵、云給田、就定田畠之員數、且守宣下之旨、可引募之狀、依仰下知如件、

貞應二年十二月廿四日　前陸奧守平花押

〔諸寺文書纂一〕通法寺

河內國通法寺執行琳海與供僧道覺、舜海等相論、佛性田幷三昧田以下條々事、

本田肆町參段　修理料參町參段者

右當寺者、爲伊豫入道殿(○源賴義)御建立之地、如壽永、元曆、文治、貞應、文永、關東御下知者、或停止甲乙人等亂入、或地㳆免所當等、不可有闕怠之由被載之、或山林樹木止諸方之煩、可爲寺家進止云々、爰琳海則任關東代々御下知、就執行職可領知之由申之、供僧等亦守文治關東御下知正應六波羅成敗、可致沙汰之旨稱之者、就訴陳狀有其沙汰之處、去年六月令和與畢、如狀者、於佛性田肆町參段者、任正應六波羅御下知、供僧等可令領知、其外條々者可爲琳海沙汰云々、然早守彼狀、向後相互不可有違亂之狀如件、

永仁七年正月十二日　右近將監平朝臣
前上野介平朝臣

〔古簡雜纂午〕大和國山口庄雜掌謹辨申

欲早被棄捐無道濫訴、且依御相傳理、且任代々御裁許旨、令御領掌、召行謀書、重科被懲、向後傍輩爲俊覺僧都不顧代々棄破旨、構出窮謀書、及非分濫訴條々無謂子細事、○中略

右當庄者、大日姬宮代々相傳領掌無相違之地也、仍御相傳御文書、幷長者宣已下證文、備于右、分明也、抑如俊覺僧都濫訴狀者、(取詮)當庄者藤原氏女相傳之私領寄進之地也、而依建曆之寄進狀、自北小路大納言家以來、任代々之讓知行之云々、此條比興申狀也、當庄者、故按察局之知行之時、以本家職

令寄進北小路大納言家、於領主職者、子孫相傳不可有相違之詞、被讓進法性寺姬宮御所之時、先日按察局寄進狀、幷建曆勸學院政所御下文等懸正文於口自大納言家返賜于按察局職之由、致妨之間、就訴申、姬宮御領掌不可有相違之由、依被成長者宣、御管領無異儀之處、姬宮御他界之刻、以當庄爲御菩提、令寄于嵯峨二尊院、正覺上人之時、侍從忠光依令寄附件本家職於興福寺西金堂家、致濫妨之間、應司禪定殿下御當職御時、西金堂家與二尊院長老番訴陳、被經再往御沙汰、二尊院長老蒙御成敗之處、堂家猶以致亂妨之間、香園院禪定殿下御時、又有重々御沙汰、而堂家永山本家號上人可爲一圓知行之由、御裁許之刻、興福寺別當僧正同就加施行、西金堂衆等歸道理、相副侍從忠光寄進狀已下證文、悉去與于二尊院之後、彌知行無相違之處、無官大夫師象號忠光之子息、相語所々惡黨、恣令亂妨之間、依爲惡黨、觸訴于六波羅、即牛付御敎書之處、恐罪科逐電之刻、師象依他罪被召出武家、被處罪科畢、而俊覺僧都請取惡行人々寄沙汰、押小路禪定殿下御時、經亂訴之間二尊院與俊覺僧都番于三問三答訴陳之時、俊覺所帶之文書爲眼前謀書之間、被下長者宣、稱俊覺所帶按察局之寄進狀非無疑貽、然者知行不可有相違云々、仍姬宮御相傳御知行敢無依違之者也、而今俊覺僧都不恐謀書罪、以先日弃破之狀備潤色、令掠申之條、好而招重科者也、糺斷爭可及猶豫儀哉、○中略粗陳言上如件、

延慶二年四月日

〔建武以來追加〕一本所寺社領事

方々施行停滯、頭人幷奉行緩怠、空經廿ケ日者、任本條宜經直訴、嚴密遵行之可申左右之由差日限可仰本引付方、但有限日數已前、諸方雜掌亦猥及濫訴者、可被閣彼訴訟也、

〔理性院文書坤〕山科家雜掌、與三寶院門跡雜掌相論、山城國山科內小野庄西山野村兩鄕幷四宮散在等事、

如山科家雜掌申狀者、爲後白河院御影堂領、累代知行之間、令割分庶子云々、如三寶院門跡雜掌支狀者、普廣院殿御代、爲三井寺成算法印跡拜領已來、及七十年當知行云々、訴陳之旨雖惟多、於山科家所帶證文者、庶子割分無所見、至門跡支證者、正長元年以來知行無相違之上、代々御內書明鏡、今更爭可被棄置哉、爰就稱號(山科冷泉)時代不審之條、被相尋山科家之處、捧系圖雖被申子細、證文所載之實名無之間、非無疑殆、然上者云證文之旨、云當知行、可被成御成敗、於門跡口宜爲上意矣、

明應四年七月廿八日　散位春貞(○以下七人署名略)

〔本能寺文書　乾〕文明十八年

當寺敷地永代買得相傳之次第事

一右此地者、西坊城言長卿、康曆元年十二月廿三日(仁、)申請綸旨、添寄進狀、妙峯寺道的上人(仁)寄進、次因幡堂執行覺勝相傳之、東岩藏寺中明院(江、)應永十四年賣渡之畢、次永享五年(癸丑)卯月二日爲當寺建立開基、日隆聖人有買得、(敘通證文有之、買得檀那如意王丸云々、寄進狀後宣出之、)

一普光院殿様(○足利義敎)被知召子細事、此地永享五年雖買得四十町之內、未佛閣等不立、院坊依爲一兩之體、艮角非人風呂被令立、其砌依奉恐權威、不能訴訟申、其後買得子細、依達上聞、永享十年之冬、忝替地冷泉富小路(仁)下給、剩三箇年地子、自定光坊被令寺納、其後文安年中言長末孫雖及違亂、就小笠原信濃守、上件申開間、敵競望停之、兩奉行(松田津志摩守、齋藤上野守、)奉書有之、其後寶德二年(于時管領)(職畠山殿口德本)安堵御敎書被成畢、爰享德元年守職上表之刻、坊城少納言卿申掠上聞、家之領地之由申沙汰、迄至長祿四年雖押領、其後長祿四年三月廿七日(仁、)請伊勢守貞親儀、以奉行齋藤四郎衞門種基加判、請和泉守貞秀、同年七月十六日(仁)達上聞、則糺明、可就理運之由被仰出了、被付召文、砌、自高倉御所被仰付堀河御局、御支趣甚、雖然爲貞親儀糺明之由被仰出、上召文不可闕如云々、乍去、御支不聊示、星霜延引及六ヶ年、其間之召文致第四ヶ度、自敵支狀出之、其旨在別紙、當寺聽

禁押領

二問番在別紙、其時敵悪理間、伊勢備前守吹嘘、朽播部頭方江雖致種々計略、貞親被聞淵當寺理運、故不能許用云々、

一勅書子細事、被坊城家就可致山口祭役儀、自舊院様、以當傳奏廣橋殿、坊城家可就理運之旨勅定有之、雖然可任札明之理非之由御下知有之、上意忝何事如之哉、

一於殿中對決事、寛正六年七月十七日（此方奉行齋藤四郎衞門　敵方奉行飯尾左衞門大輔）證文明鏡被沈淵底、訖言長類判等遂上覽、其旨御奉書被載之、同廿六日自朽播部頭被出書上了、仍自寛正六年訖至當年無他妨致知行者也、

一康曆元年綸旨實不事、敵方謀書之由雖支申、一條殿御一行中山殿推紙、幷證狀對論之時、御披覽有之、被付理運上者不能是非、

一言長類判事、公家判不可有之由雖支申、類判自壬生文庫被出、有御披覽、無預儀旨被成上意畢、

一古山名殿借書事、敵以此儀雖爲知行證文、自岩藏寺令吾返狀、岩藏寺文書內有之間、還成當寺證文畢、

一文明十八年七月五日、寄事於御拜賀供奉、當知行之由申掠、雖著御奉書同十日木河被申上、件之理運依遂上聞、同八月十七日、安堵御奉書頂戴了、（奉行飯尾加賀守淸房也）

〔妙心寺文書三〕院廳下　仁和寺

可早任文書理停止當寺內花園領主妨、法印大和尙位成淸訴申、

紙屋川廳司小路谷幷田一反三百步事

四至（限東紙屋河　限西高岸、　限南大路　限北大路、）

右彼法印今月日解狀偁、謹檢案內、件谷者、自本領主威儀師維嚴至于邦定、七代相承無異論、又花園領、自東宮大夫家、至于大炊御門右大臣（藤原公能）家、傳領又及七代、貴賤雖異、領主各別、聊無橫妨而去

應保二年之比、邦定領掌之時、以彼權威被押妨之間、邦定抱愁歎、雖送日月、公驗之理顯然、道理不朽之故、相副調度劵契所沽却賜也、然則田地領掌之道以文契爲先、彼花園與件谷已爲各別之地、何混合彼中可被妨領哉、仍任公驗之理爲賜廳御下文、勒書狀謹解者、任文書之理可令停止花園領主妨、之狀所仰如件、寺宜承知不可違失、故下、

安元元年八月十六日　主典代大藏權大輔中原朝臣在判

判官代右少辨兼左衞門權佐平朝臣在判

別當太皇太后宮權大夫藤原朝臣在判

散位高階朝臣在判

但馬守藤原朝臣在判

〔勘仲記〕弘安十年二月一日壬戌、左相府〇藤原師忠宣下申諸家領等口宣、直所申承也、口宣云、

弘安十年正月卅日　宣旨

諸家所領、僧家門跡、諸社諸寺領等、或管領人、或執務仁、殊究理非之淵奧、可行成敗之道理、比者勵忘廉潔之直、間有奸濫之企、因玆訴訟起自下、次第直言上、万機之諮詢不遑、一揆之裁斷有煩、論之政途、豈可然乎、蓋知道者必達於理、達於理者必明於權之故也、悔非於既往、愼過於將來、自今以後猶有憖犯之聞、連綿而差積者、可有罪科、曾無寬宥、兼又社務寺務之輩者、宜立改官改職之側乎、

藏人治部少輔藤原兼ー奉

〔建武以來追加〕一寺社幷本所領以下押領輩事五十三御沙汰曆應四

近年武家被官人甲乙之輩、令違背下知御敎書、剩對于守護使幷使節等、及合戰狼籍之由有其聞、緈起常篇、然者別而可有嚴密之沙汰、奉行人令隨身文書、直令披露者、可被裁判罪名之旨、可觸御五方引付焉、〇中略

僧尼賜封戸田地

一寺社本所領事（觀應三七廿四御沙汰）

依諸國擾亂、寺社之荒廢、本所之牢籠、近年倍增、而適靜謐之國々、武士濫吹未休云々、仍課守護人、依國遠近、差日限可施行、於不承引輩者、可分召所領三分一、無所帶者可處流刑、若遵行之後、立歸致違亂者、不經上裁、相催國中地頭御家人、不日馳向在所、加治罰、如元沙汰居雜掌於下地、可注申子細、將又守護人有緩怠之儀者、可改易其職、次近江、美濃、尾張三箇國、本所領半分事、爲兵粮料所、當年一作可預置軍勢之由、相觸守護人等訖、於半分者、宜分渡本所、若預人寄事於左右不去渡者、一圓可返付本所、〇中略

寺社本所領條々（延文二九十御沙汰）

一帶御下文輩事

觀應以來、追年擾亂之間、任勇士之懇望、不及糺決、補任之條、不慮之儀也、因玆寺社荒廢、本所衰微、牢已至極云々、尤有其恐、可返付面々本知行之條勿論、但或賞戰場之大功、或依戰士之要須、以別儀充行之分不幾歟、於如此之所々者、先均分下地、可返付一方於雜掌也、至相殘分者、追可有其沙汰、次寺社一圓之地、幷禁裏仙洞勅役料所（除本家領家諸門跡管領地）等事、猥轉變之條、冥慮難測、敢不可准先條、任舊例先返進之、追可充給其替、〇下略

〔日本書紀三十持統〕七年正月丙午、賜船瀨沙門法鏡水田三町、

〔續日本紀三文武〕大寶三年九月癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也、

〔續日本紀八元正〕養老三年十一月乙卯朔、詔僧綱曰、〇中略神叡法師、〇中略戒珠如懷、滿月、慧水若寫滄溟、儻使天下桑門智行如此者豈不殖善根之福田渡苦海之寶筏、朕每嘉歎、不能已也、宜施食封各五十戸、並標揚優賞、用彰有德、

〔續日本紀十二聖武〕天平八年二月丁巳、入唐學問玄昉法師施封一百戸、田一十町、扶翼童子八人、

雜載

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年十一月庚午、收僧玄昉封物、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月辛丑、外從五位下僧延慶、以形異於俗、辭其爵位、詔許之、其位祿位田者有勅不收、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜十年十月壬子、又施高叡法師封三十戶、優宿德也、

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、〇中略淸麻呂爲人高直、匪躬之節、與姉廣虫共事高野天皇、並蒙愛信、〇中略姉廣虫及笄年、許嫁從五位下葛木宿禰戶主、旣而天皇落飾、隨出家爲御弟子、法名法均、授進守大夫尼位、委以腹心、賜四位封幷位祿位田、

〔以貫庵事議草〕神祖、不學の僧の寺領多くして、碩學の僧の貧窮ならむ事しかるべからず、さらば其不學の僧の寺領をけづりて、其領を以て碩學の僧にあたふべしと仰ありしより、はじめて五岳の碩學領といふ事は出來て、今も學才の聞へあるものどもを撰びて、かの碩學領を賜ふ事にはなりたり、

〔勘仲記〕正應六年八月五日戊子
條事定國解
正五位下行攝津守津守宿禰國助誠惶誠恐謹言〇中略
一請給官使不論有輸不輸庄園皆悉撿注勘決本免加納具被停止事
右同撿案內、當國者、本田万二千五百二十餘町也、而中古以來、神社佛寺領、權門勢家庄、逐年蜂起、每任倍增、其外或號本所之加納、或稱寄人之名田、悉以虜掠、不異免田、仍所遺公田其數不幾、就中本免百町之庄、寵領二三百町、何況庄園近邊相交、田堵過庄司、稱公田、過國使、募庄領、巧成一旦之論、遂遁兩方之辨、如此之類繁而有徒口之、雖本免十町、恣堺限四至於寵領數百町焉、是則雖似作人之賄賂、

只依領主之押行也、望請天裁、被給官使國使相共不論有輪不輸、皆悉撿注、且對撿公驗、勘除免田、且相定官物、宛行公事、永絕虞芮之訟、將期般禹之治矣、

一請任先例被宛行在家役、神社佛寺權門勢家庄園寄人等、居住要津不勤國役事、

神崎　濱崎　杭瀨　今福　久波

右同撿案內、件所所住人等、近年假神社佛寺號、募權門勢家之威、寄事於左右、遁避庄家役、公事擁怠、已在此事、〇中略望請天裁、任申請被裁下者、將省吏務之煩、誠勵循良之術矣、〇中略

正應六年八月一日　　正五位下行攝津守津守宿禰國助

〔今昔物語二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

今昔、大藏ノ丞ヨリ冠給ハリテ、藤原ノ清廉ト云フ者有リキ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、其レガ前世ニ鼠ニテヤ有ケン、極メテ猫ニナム恐レケル、〇中略然テ此ノ清廉、山城、大和、伊賀三ケ國ニ田ヲ多ク作テ、器量ノ德人ニテ有ルニ、藤原ノ輔公ノ朝臣、大和ノ守ニテ有ル時ニ、其ノ國ノ官物ヲ、清廉、露不成ザリケレバ、守、何シテ此レヲ責取テムト思フニモ、无下ノ田舍人ナドニモ非ズ、諸司勞ノ五位ニテ、京ニ爲行ク者ナレバ、厩ナドニモ可下キニモ非ズ、然ドモ緩ベテ有レバ、盗人ノ心有奴ニテ、此彼云テ出シモ不遣ズ、何ガセマシト思ヒ廻ラシテ、思ヒ得テ居タル程、清廉、守ノ許ニ來ヌ、〇中略守ノ云ク、大和ノ任ハ漸ク畢ヌ、只今年許也、其レニ、何ニ官物ノ沙汰ヲバ、今マデ沙汰シ不遣ヌゾト、何ニ思フ事ゾト、清廉、〇中略伊賀ノ國ノ東大寺ノ庄ノ內ニ入居ナンニハ、極カラム守ノ主也トモ、否ヤ責メ不給ザラム、何ナル狛ノ者ノ、大和ノ國ノ官物ヲバ辨ヘケルゾ、前々モ、天ノ分地ノ分ニ云成シテ止ヌル物ゾ、此ノ主ノシタリ顏ニ、此ク慥ニ取ラムト宣フ、嗚呼ノ事也カシ、大和ノ守ニ成給フニテ、思エノ程ハ見エヌ、可咲キ事也カシト思ヘ共、現ニハ極ク畏マリテ、手ヲ摺ツヽ云居タルヲ、守〇中略其ノ遣戶ヲ開テ、此チヘ入レヨト云ヘバ、遣戶ヲ開ルヲ、清廉見遣レバ、灰

毛斑ナル猫ノ、長一尺餘許ナルガ、眼ハ赤クテ、虎珀ヲ磨キ入タル樣ニテ、大音ヲ放テ鳴ク、只同樣ナル猫、五ツ次ギテ入ル、〇中略清廉、只、吾君、吾ガ君、然テハ清廉ハ、暫クモ生テハ候ヒナム、ヤトテ、手ヲ摺テ、宇陀ノ郡ノ家ニ有ル稻米籾三種ノ物ヲ五百石ガ方ニ、下文ヲ書テ、守ニ取ラセツ、〇下略

〔保元物語〕二山門爲義降參事

去程ニ、六條判官并子共尋可レ參由、播磨守〇平清盛ニ被二仰付一、十六日〇保元元年七月清盛、三百餘騎ニテ如意山ヲ越テ三井寺ヲ求レドモナシ、東坂本ニ在由聞ヘテ、大和庄泉辻ト云所ヲ追捕ス、是ハ無動寺領ナレバ、大衆起テ寺領ヲ追捕スル條無念也、仔細アラバ、山門ニ相觸テコソ沙汰ヲ致サメ、無二左右一亂入ノ條狼籍也トテ、軍勢ニ向テ散々ニ相戰フ、

〔仁和寺文書〕四所々門跡領事、此砌都鄙被レ致二馳走一、門主御入室事、年中急度相調候樣可レ有二御沙汰一由、内々叡慮之趣候、別而可レ被レ廻二御遠慮一候哉、恐々謹言、

九月〇天文二年廿九日　　二條

眞光院殿

資財

寺院ノ資財ハ、一ニ什物ト云フ、什ハ十ナリ、其物ノ一ニアラザルガ故ニ、十ヲ以テ名トストト云ヒ、或ハ什ヲ以テ聚雜ノ義トス、又校割ト云フ、校又交ニ作リ、新舊器物相交ルノ義ニシテ、割ハ、公物、私物、分割ノ義ナリト云フ、寺ニハ資財帳アリテ、住持、檀越等、相連署シテ、其保管ノ責任ヲ明ニシ、政府亦常ニ之ニ干涉シテ、其賣買質入等ヲ禁止ス、

寺院ノ用途ハ、寺領等ノ所出ヲ以テ之ヲ辨ジ、或ハ正税中ヨリ別ニ若干ノ稻ヲ割キテ出擧

シ、其利息ヲ以テ之ニ充ツルコトアリ、後世ニハ又祠堂金アリ、永世祖先等ノ祭ヲ託スルタメニ、施主ヨリ寺院ニ施入シタルモノニテ、亦同ジク諸般ノ用途ニ供ス、而シテ大寺ニ於テハ、或ハ預メ佛分、法分、僧分、通三寶分ナドノ目ヲ立テ、用途ヲ一定セルモノモアリキ、

寺ノ奴婢ハ、亦其資財ノ一ニシテ資財帳ニ載セラル、奴婢ハ多クハ王公貴人ノ佛法ヲ信ズルモノ、良人ヲ買ヒテ寺ニ寄附セシモノニシテ、政府ノ待遇ハ略、官ノ奴婢ニ同ジ、但シ口分田ヲ給セズ、

〔伊呂波字類抄志疊字〕資財。

〔安齋隨筆十三〕一什物。　什物を、寶物と心得るは、俗の誤也、寺の什物と云より誤來るなるべし、史記の什器の註に、索隱曰、什數也、人家常用之器非一、故以十爲數、漢書の注に、師古曰、古者師行二五爲什、食器之數必共之、故曰什物、什具、今人通以生生之具爲什物、亦猶從軍作役若干人爲火、共蓄調度、(以上小補韻會○中略)陣中にては、十人一火とて、十人に竈一つ立て、鍋も釜も、其外諸道具を、十人相合てつかふなり、一人別々につかはず、什の一組十人が相合てつかふ故、其道具を什物と云也、什物とは一人の物に非るを云也、それに準じて、佛寺に前々よりして、其寺に付け渡りにて、前住の僧より後住の僧へ、讓り渡す諸道具は、當住の僧一人の物に非る故、是を什物と云也、其什物の中には、寺に付たる寶物もあるを、什物と稱して、人に見する故、俗には、什物と云は、寶物と云に同事と思誤る也、

〔史記一五帝本紀〕虞舜、(○中略)作什器於壽丘、(中略)索隱曰、什器什數也、蓋人家常用之器非一、故以十爲數、猶今云什物也、

〔飜譯名義集三什物〕經音義云、什者十也、聚也、雜也、亦會數之名也、謂資生之物、莊子關尹曰、凡有貌象聲色者皆物也、易曰、天地絪縕、萬物化醇、玉篇云、凡生天地之間、皆謂物也、事也、類也、

〔釋氏要覽三住持〕三寶物佛物有四種、一佛受用物、謂殿堂衣服牀帳等、不得互用、若曾佛用者只得著塔內供養、不得移易使用、五百問經云、佛堂柱木壞、有施主修換訖、其故者施

制度

僧不得用之、施他佛物、五百問云、佛物不得移至他寺、犯弃、若僧盡去、當白僧、僧聽、將去無罪、又云、佛物得賣買取供養具、

〔續日本後紀 仁明十八〕嘉祥元年十一月己未、下野國言、藥師寺者、天武天皇所建立也、體製巍々宛如七大寺、資財亦巨多、

〔都林泉名勝圖會 二〕慈照寺○中略

天正の末近衞龍山公前久○と豐臣秀吉公と御中不和にして、龍山公は筑紫へさすらへ、三歲を經て歸洛し給ふ、後こゝに姑幽棲し給ふ、其時什寶多く離散しけるとぞ、

〔百丈清規考證 上ノ二ノ二〕交割。　交者新舊器物相交也、古キ道具、新シキ道具ト云トキ、割者分割公物私物也、常住物ト私物ト一處ニ不成ヤウニ仕分ル義也、本非器名、今時什物是常住不易物、故如器物之通名、

〔鹿苑寺文書〕鹿苑寺之儀、當住持逐電之上者、今度寺領校割。令改易、新住持申付候、○中略

慶長三年九月十六日　德善院玄以花押

鹿苑寺役者中

〔令義解 二僧尼〕凡僧尼、將三寶物餉遺官人、謂三寶者佛法僧也、餉遺者無心囑請、直將送與、若送私物、妄相囑請者亦同、官人者、內外百官主典以上、若違、凡人幷自用者、須准同居卑幼用財之法、其三寶物、混在一處、未經分割、故不科盜罪、若僧物分訖而盜者、依凡盜法、○中略者、百日苦使、

〔類聚三代格 三〕太政官符

應畿內七道諸國國師交替事

右得從四位上守治部卿船王等解偁、今聞、國師赴任之日、受得官符、解任之時、國司無狀、於理商量、寔爲未然、素緇雖別、於政仍同、自今以後、新舊交替、計會資財、同知損益、然後與國司共造帳三通、一通僧綱、一通三綱、一通國司、望請、頒下諸國、仍以申送者、奉勅、宜告國師、務令遵行、

天平勝寶四年閏三月八日

太政官符

應勤造國分寺幷禁犯用寺物事

一諸國國分寺、年中所造成物、費用財物依實勘錄、毎年附朝集使申上、卽令聞奏、〇中略

一毎年奉施三寶物等、必依內敎充用、及封田幷財物、若有國郡司乖理犯用者、卽解見任官、依法科罰、永不任用、

以前被大納言正三位藤原朝臣永手宣偁、奉勅如件、

天平寶字八年十一月十一日〇中略

太政官符

可勘定額寺資財幷任三綱事

右被右大臣宣偁、奉勅、諸國定額寺資財者、國司與三綱檀越共撿挍處分、〇中略若寺家破壞、及有餘犯失者、推問所由、擧衆僧檀越等、依法科罪、自今以後、永爲恒例、

延曆十五年三月廿五日〇中略

太政官符

應禁制畿內諸寺除檀越之外王臣家預寺事

右被右大臣宣偁、奉勅、夫功德之興、因心各別、何則或甲搆堂宇、乙專得爲己、是以大少諸寺、毎有檀越、田畝資財、隨分施捨、累世相承、崇敬至今、如聞、王臣勢家、不顧本願、而追放檀越、改替綱維、田園任意、或賣或耕、各稱己寺、遂致損穢、宜早下知、若有斯類者、五位已上錄名奏聞、六位已下禁身進上、〇中略

大同元年八月廿二日

〔政事要略五十六交替雜事〕定額寺事〇中略

延治格云、應令諸寺三綱檀越禁止秩滿別當恣犯用寺家財物事、右右大臣宣、凡寺家流例、自有三綱檀越、相共行其雜務、此外更置別當者、尤是爲令莊嚴伽藍、而起擧之日、巧稱淸廉、被補之後、治迹希聞

只犯用資財、破損堂塔、伽藍爲墟、莫不因此、尋其意況、寔由任秩不立定限、遷替無責解由也、因茲秩以四年爲限、任終可責解由之事、已存式文、然則諸寺別當等、須守制旨能治寺家、新司到日、取解由而今有聞、新司未到之前、競犯佛物、多利己私、專營眼前之爲益、不顧後日之取煩、若早不加禁遏、恐寺家彌致頽損、宜早仰下、莫令爲然、其新司未到之間、三綱檀越相共勤加撿察、若或三綱檀越等不勤撿挍、令失財物、及己自同彼有致違犯者、殊處重科、曾不寬宥、

貞觀十三年九月七日

〔享保集成絲綸錄二十一〕元文三午年四月

近年諸寺院、猥ニ其寺之本尊、什物、佛具、并建具等書入、又は賣渡之證文を以、金銀致借用候寺院數多有之、不埒候、向後右之品質ニ入、或賣渡證文を以、金銀致借用候當人は勿論、證人迄も吟味之上、急度可申付候、尤金主之儀も、右之品質物ニ取、或ハ賣渡證文ニて、金子を貸し候段、不埒ニ付、金子濟方之儀、訴出候共、向後ハ濟方申付間敷候、

四月

用途

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

山城國正稅公廨各十五万束、國分寺料一万五千束、嘉祥寺料一千七百卅六束四把、海印寺料三千束、元慶寺料一千束、圓覺寺料一千束、東光寺料一千束、文殊會料二千束、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年七月甲申、詔曰、四畿內七道諸國國別割取正稅四万束、以入僧尼兩寺、各二万束、每年出擧、以其息利、永支造寺用、

〔法隆寺伽藍緣起并流記資財帳〕合米壹仟貳佰陸拾斛捌斗　合穀肆仟貳佰拾貳斛

佛分肆佰肆拾陸斛捌斗參升伍合　灌佛分肆拾陸斛玖斗貳升

法分伍拾參石貳斗　聖僧分貳佰捌拾石參斗

通三寶分壹佰參拾肆石伍斗　　觀世音菩薩分貳拾貳石漆斗
塔分貳仟壹佰肆拾漆石玖升（在二國）　　別燈分壹拾玖石陸斗參升
通分玖佰玖拾漆石漆斗陸升　　一切通分貳拾肆石陸斗陸升
寺掃分肆石陸斗參升伍合　　四天王分伍石伍斗
金剛分壹石伍斗肆升　　溫室分貳拾漆石
合稻壹拾壹萬壹佰伍拾肆束參把
佛分壹仟肆佰拾陸束玖把　　灌佛分參佰漆拾玖束漆把
法分參拾貳束漆把　　聖僧分陸束貳把
通三寶分肆佰肆拾捌束　　塔分肆仟捌佰玖拾捌束貳把
法藏分貳拾肆束　　常燈分壹仟束
別燈分參仟壹佰捌拾伍束壹把　　通分陸萬五仟貳拾壹束漆把
一切通分參萬參仟漆佰肆拾壹束捌把（○中略）
天平十九年二月十一日
〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合糯玖拾玖碩漆㪷壹勝
合米參阡參陌拾捌斛貳㪷捌勝
合籾參阡壹拾碩貳㪷貳勝
合稻貳陌貳拾萬壹阡陸陌陸束捌把參分半
通分稻一百八十八万五千七百六十六束八把分半
見一百卅三万六千四百十六束七把二分　每年未納五十四万二千八百七十八束八把八分
半

朽失無實惡稻六千四百七十一束二把

僧分稻廿四万五百七十四束

見十万五千八百卌四束七把六分　每年未納十三万四千七百廿九束五把四分

功德分稻二万二千四百九十五束三把二分

見一万五千二百五十二束九把六分　每年未納七千一百卌二束三把六分

盂蘭盆分稻一万七千二百卌九束四把四分

見一万二千三百十一束五分　每年未納四千九百卌八束三把九分

溫室分稻三万五千五百廿束九把七分

見二万七千五百六束四把　每年未納八千十四束五把七分〇中略

天平十九年二月十一日

〔類聚三代格八〕太政官符

應出擧靈安寺料稻四千束事

右右大臣宣、奉勅、如聞者、此寺構作年久、徒有伽藍之名、未修說法之事、宜割正稅四千束、每年出擧、以其息利充春秋悔過并修理料、

弘仁七年十月廿三日

〔三代實錄四十光孝〕仁和二年六月廿日戊辰、勅、以清和院稻一千束直新錢二十貫文、付山城國、加擧正稅、收其息利、宛圓覺寺長明燈料、先是清和院申牒、偁圓覺寺是先太上天皇始於落飾終於登遐之地也、南北二堂莊嚴佛像、定十口僧供給齋飯、皆是先皇御願也、去元慶五年三月十三日、詔列於官寺訖、而明燈未共、晝夜難照、望請准安祥寺例、以稻一千束付國司、每年出擧、請其息利、於近寺愛宕郡、充常燈分、至是許之、　七月五日壬午、勅、充延暦寺西塔院釋迦佛堂長明燈油每日二合、但正月十四日每

日一升、僧五口供料每日白米各四升六合、割近江國正稅稻一萬五千束、出擧用其息利、若有未納、以正稅稻充、其供料、其燈油以米交易、歲初總送、其用途幷員數、副稅帳言上、長官勾當國司遞祗濟、自今以後、立爲恒式、

〔朝野群載十七佛寺〕詩寺催牒

東光寺普法三昧院牒　丹後國衙

欲被下行米伍拾貳斛事

牒、當院彼國御願定額寺佛聖燈分供養料、施入稅帳便分院油四箇年料、年別十三斛、任濟例可被下行之、但至于返料者、見納之日可奉放之狀牒如件、乞也衙察狀以牒、

承曆四年十一月日　　小寺主法師　都維那大法師

撿校大法師　上座大法師　檀越氏人　正四位下行主稅頭兼侍醫丹波權守丹波朝臣雅忠　從四位下主稅權助兼算博士播磨權介三善朝臣　散位從五位上三善朝臣

〔諸寺文書纂九〕寄進申燈明錢幷定香錢之事

合貳貫五百文者

右爲燈明錢寄進申所也、在所平田ヲトリ堂分作人長坂縫殿助、夏冬兩度ニ可沙汰旨候、寄進狀之事、重而藏人方ヨリ可進候、先今一筆申候、仍如件、

永正十年酉年卯月廿四日　　道閑有御判

進上
大樹寺

濫用資財

〔藤原家傳下武智麻呂〕公從少時、貴重三寶、貪聽妙法、願求佛果、終食之間、不敢有忘、雖有公務、常禮精舍、忽入一寺、寺內荒凉、堂宇頹落、房廊空靜、顧問國人、國人答曰、寺檀越等、統領寺家財物田園、一從不令僧尼勾當、不得自由、所以有此損壞、非獨此寺、餘亦皆然、公以爲、如來出世、演說諸法、敎化衆生、令樹善

業、其敎深妙、從天竺國、流轉震檀、延及此地、得其門者、出離蓋纏、失其路者、輪廻生死、何肯白衣檀越、輙統僧物、不供法侶、損壞精舍、此非所以益國家之福田、損衆生之要業也、仍奏曰、臣幸洛大化、奇恐忝〇奇守一國、因公事而巡民間、就餘隙而禮精舍、部內人民、不知因果、檀越子孫、不懼罪業、統領僧物、専養妻子、僧尼空載名於寺籍、分散餬口於村里、未嘗修理寺家破壞、但能致有牛馬蹋損、此非所以國家度僧尼、演佛化也、若非糺擧、恐滅正法、伏請明裁、勅曰、崇飾法藏、粛敬爲本、修營佛廟、淸淨爲先、今聞諸國寺、多不如法、或草堂始闢、爭求題額、幡幢纔施、卽訴田園、或房舍不修、牛馬蹋損、庭荒涼、荊棘旅生、遂使无上尊像、永蒙塵埃、甚深法藏、不免風雨、多歷年代、絕無構成、揆事而論、極違崇敬、宜諸國、兼并數寺、合成一區、庶幾同力共造、更興頽法、明告國師衆僧及檀越等、具條部內寺家、便宜并財物、附使奏上、待後進止、從此已後、國人怕罪、不敢侵用寺家之物也、

〔日本靈異記中〕己作寺用其寺物作牛役緣第九

大伴赤麻呂者、武藏國多摩郡大領也、以天平勝寶元年己丑冬十二月十九日死、以二年庚寅夏五月七日、生黑斑犢、自負碑文矣、探之、斑文謂、赤麻呂者、擅於己所造寺、而隨恣心、借用寺物、未報納之死亡焉、爲償此物、故受牛身者也、於玆諸眷屬及同僚、發慚愧心而慄无極、謂作罪可恐、豈應无報矣、此事可報季葉楷模、故以同年六月一日、傳乎諸人矣、冀无慚愧者、覽乎斯錄、改心行善、寧飢苦所迫飮銅湯、而不食寺物、古人諺曰、現在甘露、未來鐵丸者、其斯謂之矣、誠知非无因果、不怖愼歟、所以大集經云、盜僧物者、罪過於五逆云々、

〔日本靈異記下〕用寺物復將寫大般若建願以現得善惡報緣第卄三

大伴連忍勝者、信濃國小縣郡孃里人也、大伴連等同心、其里中作堂、爲氏之寺、忍勝爲欲寫大般若經、發願集物、剃除鬢髮、著之袈裟、受戒修道、常住彼堂、寶龜五年甲寅春三月、倏被人讒、堂檀越所打損而死、(檀越者、卽忍勝之同屬、)眷屬議曰、令斷于殺人之罪、故輙不燒失、點地作冢、殯收而置、然歷五日乃甦、語親屬言、

召使五人共副疾往々道頭有甚嶮坂、登於坂上而躊躇、見有三大道、一道平廣、一道草生荒、一道以鐵而塞、衢中有王、使白言召、王示平道言、從是道將、五使衢往道末有大釜之、湯氣如焰、涌沸如波、吼鳴如雷、即生取忍勝、幷投彼釜、釜冷破裂而成四破、變三僧出來問忍勝言、汝爲何善、答我不作善、唯欲寫大般若經六百卷、故先發願而未書寫、于時出三鐵札校之、加白僧告之言、汝實發願出家修道、雖有是善、而多用于住堂之物、故摧汝身、今還畢願、復償堂物、總放還來、過三大衢、從坂而下、即見甦返、斯乃發願之力、用物之災、是我招罪非地獄咎矣、大般若經云、凡錢一文至廿日倍、一百七十四万三貫九百六十八文倍在枚、竊一文錢莫盜用也者、其斯謂之矣、

〔今昔物語十九〕大安寺別當娘許藏人通語第廿

今昔、大安寺ノ別當ニテ□□ト云者有ケリ、其ノ娘ニ、形美麗ニ、有樣微妙キ女有ケリ、其レガ許ニ、藏人□□ト云者忍テ、夜々通ケル程ニ、互ニ難去ク相思テ有ケレバ、時々ハ晝モ留リテ、不返ヌ時モ有ケリ、而ルニ晝留タリケル時、晝寢シタル男ノ夢ニ、俄ニ此ノ家ノ内ノ上中下ノ人嘷テ泣キ合タリ、何ナレバ此クハ泣クニカ有ラムト思テ、怪シケレバ、行テ見レバ、舅ノ僧、姑ノ尼君ヨリ始メテ、有限リノ人、皆大ナル器ヲ捧テ泣キ迷フ也ケリ、何ナレバ此ノ器ヲ捧テ泣ニカ有ラムト思テ、慥ニ吉ク見レバ、銅ノ湯ヲ器毎ニ盛レリ、打責テ鬼ノ呑セム、ゾヲ可呑クモ非ズ、銅ノ湯ヲ心ト泣々ク呑也ケリ、辛クシテ呑畢ツレバ、亦乞ヒ副テ呑ム者モ有リ、下ノ下衆ニ至マデ是ヲ不呑者无シ、我ガ傍ニ臥タル娘ヲモ女房來テ呼ベバ、起テ入ル不審サニ亦見レバ、此娘ニモ大キナル銀ノ器ニ、銅ノ湯ヲ一器入テ、女房有テ取ヌレバ、此娘之ヲ取テ細ク勢タ氣ナル音ヲ擧テ泣々ク呑メバ、目耳鼻ヨリ焰煙リ出ヅ、奇異ト思テ、此ヲ見立テル程ニ、客人ニ參ラセト云テ、銅ノ湯ヲ器ニ入レテ臺ニ居ヘテ女房持來ル、其ノ時ニ、我ニモ此ル物ヲ呑ムト爲ルニコソ有ケレト、奇異ク思ヘテ、迷ヒ騷グト思程ニ、夢覺ヌ、驚テ見レバ、女房食物ヲ臺ニ居ヘテ持來レリ、舅ノ方ニモ物食ヒ

祠堂金

嗅ル音有リ、其時ニ思ハク、寺ノ別當ナレバ、寺ノ物ヲ心ニ任セヲ仕フ、寺ノ物ヲ食ニコソハ有ラメ、其レガ此クハ見ユル也ケリト、心疎ク思ヘテ娘ノ志モ忽ニ失ヌ、然レバ構ヘテ此レヲ不レ食トテ、心地惡キ由ヲ云テ、物モ不レ食シテ出ニケリ、其後猶心疎ク思ヘテ不二行成一ニケリ、其ノ後此ノ藏人、殊ニ慚愧ノ心有テ、糸出家ノ志マデハ无リケレドモ、聊ニ道心有テ、佛物ナドハ敢用スル事无カリケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔薩戒記〕應永卅二年閏六月十五日癸未、申剋許、左頭中將隆夏朝臣來臨、〇中略中將談曰、〇中略金山寺、家成卿建立也、于レ今在レ之、雲居寺北也、彼寺〇中略當家第一公卿、爲二長者一、近代知二行寺領一、彼寺寶藏紺紙金泥一切經有レ之、故鷲尾中納言隆敎卿長者之時、取二出件經一、號二天神御筆一、沽二却方々一、其後故中納言隆信、頭中將父也、爲二長者一乍レ驚見レ之、纔少々相殘、仍件所レ殘御經取出、納二我家一、在レ今者、

〔眞俗佛事編〕六雜記錄祠堂銀(シドウギン)佛家ニ鬼神ヲ祀ル所ヲ、祠堂ト名ヅク、吾俗依レ之、父母亡靈ノ爲ニ、寺ニ納ル財ナレバ、祠堂銀ト云、釋氏要覽ニハ、此ヲ長生錢ト云、律ニハ、無盡財ト名ク、子母展轉無盡、故云無盡財、又云長生錢、長生錢ト云モ、此財且生子ノ義、ト云ヘリ、又曰、西京記云、寺中有二無盡藏一、

〔建武以來追加〕一諸宗佛事物事康正元十廿八

於二貳文子祠堂錢一者、任二本帳一、雖レ被レ准二德政法一之旨被レ定二置之處一、或限二宗體一、或論二利平之多少一、申二亂入一條太不レ可レ然、所詮任二先度御成敗一、不レ謂二諸宗一、至二貳文子之祠堂錢一者、不レ及二子細一歟、

〔大樹寺記〕祠堂米金

一金子四拾貳兩貳分　古祠堂

一米六拾壹俵餘　同斷

一金子拾兩　泰心院祠堂金　學寮寄附

右新古金五拾貳兩貳分也、則米共ニ寮舍十二軒預ケ置致二支配一候、

〔寶曆集成絲綸錄十九〕寶曆八寅年五月

寺社奉行江

泉涌寺祠堂金貸附、幷觸流願之儀、是迄例も有之事ニ候得共、右類之願段々相増候ては、其內ニは願相濟候貸附之名目ニて、內々外金等加入貸附候類モ有之候ては紛敷、其上濟方之儀も、實ニ祠堂金同樣ニ嚴敷取立候ては、差支之儀も出來可申哉ニ付、難成旨可申渡候得共、右祠堂金之儀ハ、格別之御寄附ニて貸附、利潤を以御法用も相濟候由ニ候之間、當時有金五千七拾兩餘計貸附申候、尤外金不取交、當時之有金高を、後年迄之貸附金ニ相極、銘々借主之國所名、幷借請候金高共、泉涌寺ゟ京都町奉行江書出させ、右五千七拾兩餘不殘貸出相濟候上ニて、右金借請候者共江計願之通、元利無相違返濟可仕旨觸流、且又京大坂江ハ、泉涌寺依願祠堂金五千七拾兩餘貸附被仰付ニ付、右金借請候者江ハ、此度別段ニ相觸置候條、以來泉涌寺祠堂金と申貸出候者有之候共、此度貸附被仰付候、右寺祠堂金ニてハ無之候間、其旨可相心得旨觸流候樣申付候間、右之趣被相心得、京大坂町奉行江も可被申越候、

五月

〔天明集成絲綸錄二十九〕安永四未年六月

寺社奉行江

總て門跡方其外寺院等、御寄附金、又は自分貯金を貸附ニ致置、堂舍修復再建等手當ニ致候由を以て、祠堂金等の名目にて貸附之儀相願候へハ、被相伺候上、借受候もの、名前所附、幷金高書付等、其所之奉行所五差出置、右借受候者江無滯返濟可致旨、奉行所より觸流之儀、被申達候も有之候處、右者奉行所ゟ返濟方の觸流は、一ニ候へば、自分金貸附等も難相知ニ付、以來は寺社貸附金返濟方觸流の儀、願出候共難相成候間、被得其意、實ニ堂舍修復等の手當ニいたし候譯立、難捨置筋ニ候ハヾ、相願候金高不殘公儀江爲差出、其所の奉行所、又ハ御代官ゟ利足幷年限を定て在町

江貸附、其寺院入用之節、願出候ハヽ、取立相渡候積ニ候間、貸附金相願候門跡方、其外寺院等有之候ハヽ、右之趣を以、其節可被相伺候、

六月

寺社奉行江

〔天保集成絲綸錄五十九〕文政二卯年十一月

總而門跡方、其外寺院等、貸附金之儀安永四年以來、返濟方側流相止、無據譯相立難被捨置分ハ、金高不殘、公儀江差出、其所之奉行、又ハ御代官より、利足幷年限を定、貸附候筈に相成候處、向後ハ是迄貸附ニ相成居候分ハ格別、新規貸附之儀ハ、容易に不承屆、併門跡方、比丘尼寺等、寺領少分ニて實に修復料等差支候歟何歟、格別筋合立候分は、安永之度達之通、願金高爲差出、最初之金銀高極置、貸増利倍年延願等ハ、難成趣を以て、承屆可申候、

一相對ニて貸付、貸先、名前金銀高屆置候分、元高取調、此節改て爲相屆、以來當時之高より、不相增樣相達、萬一增候分ハ、返濟滯候共、於奉行所は、不取立積、若格別之御由緖にて無據貸付高増別段申立候は、取調之上承屆、最貸付方等、等閑ニ不相成樣、相應之引當を取候歟、又ハ町役村役連判證文を以貸渡、一貫目以下小貸之向迚も同樣入念可申、貸付中絕の分ハ、自今不承屆筈ニ候、

右之通、此度改て、松平和泉守江相達候間、得其意、何も被申立候向も有之候は、右之趣を以取調候樣可被致候、

十一月

〔宮門跡方其外貸付金二件〕文政十亥九月七日、出羽守江進達、　土井大炊頭

城州愛宕郡幡枝村圓通寺、貸付金願之儀申上候書付、

書面伺之通、聞濟之名目を以、貸付候儀は、雖相成、於御府内相對ニ貸付候儀ハ勝手次第、尤貸附所ヶ間敷儀不相成段、可申渡旨被仰聞、承知仕候、

亥十月九日

城州愛宕郡幡枝村
圓通寺

右相願候者、當寺之儀者、勅願ニ而、禁裏御所、仙洞御所、東福門院様、○徳川和子其外宮方、局方ヨリ、御祠堂金銀、御送金銀、修復料、相續料等被成下候ニ付、右金銀貸附之儀、寶暦十三未年、京都町奉行所江相願候上、是迄數年來貸附、猶又右寶暦以來茂、追々御所方ゟ御祠堂金銀御寄附被成下候ニ付、法類妙心寺寺中通玄院水月院江預置、上方筋ニ而貸附、右之利金を以、尊儀御供養、其外寺修復等仕來候處、追々利分相積、當時は多分之金高罷成候付、右兩院被扱仕兼候旨ニ而、返納之儀申出候、然ル處、禁裏御代々、別而東福門院様御供養無退轉、永續仕候様、御寄附被成下候金銀ニ御座候得者、彌以大切ニ相心得、永々紛亂無之様守護仕度候得共、寺中ニ而已牽預置候計ニ而は、利潤も相增不申、往々御供養等も不行屆候様可相成哉、然レ共京都近在江已而貸出候而は、莫大之金銀、融通茂差支、助成は勿論、廢失之程も無覺束奉存候ニ付、不容易儀ニは御座候得共、何卒以御慈悲、攝津和泉國々之儀ハ、於彼地貸附仕、關八州越後國々之儀ハ、御當地法類共之内相頼、相對を以貸附仕度奉存候間、御聞濟被成下、右利潤を以、御供養無退轉相勤、寺修復手當仕、永續仕度旨相願申候、

右之通、水野越前守寺社勤役中願出、取調中、御役替ニ付、私方江請取、猶相糺候處、圓通寺儀ハ、延寶八年、後水尾院勅願所ニ被仰付、禁裏御代々、東福門院様、其外宮方等ゟ、御祠堂金銀御寄附有之候ニ付、寶暦十三未年、京都町奉行所江相願、年來貸附、其後猶又御所方ゟ追々御祠堂金等御寄附有之候ニ付、法類妙心寺寺中通玄院水月院江預置、年來貸附、右之利潤を以、禁裏殊ニハ東福門院様御供養、并寺修復之手當ニ仕來候處、右金追々利倍仕、當時は、莫大金高相成候ニ付、自然不取締之

儀も出來候而は、大切之御供養料之儀、奉恐入候旨、右兩院無餘儀相斷申候、併寺領迚茂無御座候得ば、右之利潤無之候而は、永久之寺計茂無御座候ニ付、無據前書之通奉願候段申立候、依之取調候處、安永四未年、并去ル卯年、總而門跡方其外寺院等、貸附金之儀ニ付、被仰出候御書付之趣をも見合候處、卯年被仰出候御書付之內、是迄貸附ニ相成候分ハ格別、新規貸附之儀は、容易ニ不承屆候趣も有之候得ば、相願候攝津和泉關八州越後國々江貸附候儀は、全新規之儀ニ付、容易難相成筋と奉存候、併當時之儀は、禁裏御代々勅願所ニ而、御祠堂金銀、御送金、修復料、相續料被成下候ニ付、右金銀貸附之利潤を以、永々相續仕、外寺德茂無之寺院ニ而、實ニ無餘儀次第ニ相聞申候ニ付、猶勘辨仕候處、文化十酉年、阿部備中守寺社勤役中、妙法院宮院家常住金剛院、於御府內相對ニ而貸附願之節、安永四未年、門跡方其外寺院貸附金之儀ニ付、被仰出候御書付之趣も有之候得共、其後、御寄附金相對貸附之儀願出、伺之上、願之通申付候類例も有之候間、相對を以貸附之儀は、勝手次第可致旨可申達哉之段相伺候處、願之趣承置、若貸附金滯候節、願出候共、全公事並之通取計、別段之濟方等不申付、尤奉行所江申立、聞濟候趣之名目を以、貸附候儀ハ難相成、相對貸之儀ハ可爲勝手次第之旨可申渡段被仰出、其旨申渡候例も御座候間、今般之儀茂聞濟候趣之名目を以、貸附候儀は難相成、於御府內相對を以貸附候儀は可致勝手次第、尤貸附所ヶ間敷儀決而難相成旨可申渡候哉、此段相伺申候、

九月

〔武邊大秘錄 五〕諸寺院祠堂金貸附之事

一諸寺院より貸附候銀子、右ハ御祠堂銀之內、慥ニ借用致候趣有相認といへども、其寺院より未だ御願不相濟分ハ、平貸附ニ同斷廿歩壹割渡被仰付候事、

御由緒有之候御祠堂銀ニ候ハヾ、其趣申立、貸附御免ニ相成候後、御祠堂名目附ニ相成候分

ハ格別、如本文未だ顯不相濟分ハ、たとひ御由緒有之御祠堂銀といへども、內證貸之義ニ候間、平貸附之取扱ニ相成候事、

家人

〔倭訓栞 中編十〕じけ 寺家、日本紀に見ゆ、三代實錄に、寺家女赤須と見えて、寺の家人也、〇下略

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合賤伍佰參拾參口之中 廿五口、訴未判竟者、在大倭國十市郡與山背國宇治郡、奴九口、婢十六口、壹家人者、

家人壹佰貳拾參口 奴六十八口 婢五十五口

奴婢參佰捌拾伍口 奴二百六口 婢一百七十九口

淨寺奴壹口 〇中略

天平十九年二月十一日　都維那僧靈尊 〇下略

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年十月辛丑、賜四天王寺家人奴婢三十二人爵有差、

〔三代實錄 十二 淸和〕貞觀八年三月四日庚辰、太宰府解偁、觀音寺講師傳燈大法師位性忠申牒偁、寺家人淸貞宗位等三人、從五位下笠朝臣麻呂五代之孫也、麻呂天平年中爲造寺使、麻呂通寺家女赤須生淸貞等、卽隨母爲家人、淸貞祖父夏麻呂、向太政官幷太宰府頻經披許、而未蒙勅裁、夏麻呂死去、淸貞等愁猶未有止、寺家覆察、事非虛妄、望請、准據格旨、徙居貫附筑後國竹野郡、太政官處分、依請、

奴婢

〔日本書紀 二十一 崇峻〕二年〇用明四月、橘豐日天皇崩、七月、厩戶皇子、〇中略平亂之後、於攝津國造四天王寺、分大連〇物部守屋奴半與宅、爲大寺奴田庄、

〔令義解 三 田〕凡官戶奴婢口分田、與良人同、家人奴婢、隨鄕寬狹、並給三分之一、謂此不輸田也、謂其寺奴婢者、不在給限也

〔日本書紀 二十五 孝德〕大化元年八月癸卯、遣使於大寺、喚聚僧尼而詔曰、〇中略凡自天皇至于伴造所造之寺、不能營者、朕皆助作、令仰寺司與寺主、巡行諸寺、驗僧尼奴婢田畝之實、而盡顯奏、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年七月、於是近江將犬養連五十君、自中道至之留村屋、而遣別將廬井造鯨、率二百精兵、衝將軍營、當時麾下軍少、以不能距、爰有大井寺奴名德麻呂等五人、從軍、卽德麻呂等爲先鋒、

以進射之、鯨軍不能進、

〔東大寺奴婢籍帳〕攝津職移　大養徳國司

合十三人

奴伊賀臣大麿年九十一　男輕部造弓張年四十九〇中略　次辛矢田部君衣屋女年六十五　次辛

矢田部君姉女年五十四　法麻呂女飯刀自女年三十六

右八人同郷戸主辛矢田部君弓張之戸口所貫

以前、得刑部省去天平十二年八月二十二日移偁、撿案内、故従五位下大宅朝臣廣麿等所訴奴婢、去養老七年五月八日判給已訖、職宜前件奴婢等子孫等除籍、附少初位下大宅朝臣賀是麿之戸者、又天平十四年五月七日移云、得職去四月十四日移云、大宅朝臣賀是麿所訴婢、將除其籍无細名、又申云、以神龜二年十二月二十八日刑部省下職符文、應除戯名、具在注載、即求其符、无有此職、仍不得輙除者、今依移狀、撿勘省案、賤歷名載於神龜二年十二月二十八日符下已訖、亦撿職神龜三年二月二十七日勘籍申送解文、件賤歷名灼然所載、仍具狀、移至宜准狀速與處分者、職依二度狀除籍已畢、仍具事狀、便附賀是麿、故移、

天平十五年九月一日　従六位上少進高向朝臣諸成

従四位上行大夫大伴疾

〔續日本紀十七孝謙〕天平勝寶元年十二月丁亥、大神禰宜尼大神朝臣杜女其輿紫色、一同乘輿、拜東大寺、〇中略施東大寺封四千戸、奴百人、婢百人、

〔東大寺奴婢籍帳〕治部省牒大倭國金光明寺

寺奴伊麿年卌八　元島宮奴

右被太政官去二月廿六日符偁、大納言従二位藤原朝臣仲万呂同日宣偁、奉勅、件伊麿免奴従良、即

便令爲五十戸政者、省宜承知依勅施行者、寺宜承知、今錄事狀、故牒、

天平勝寳二年三月三日　從六位下行大錄飛驒國造石勝

參議從四位上守卿兼紫微中臺大弼勳十二等石川朝臣年足〇下略

〔東大寺奴婢籍帳〕治部省牒東大寺

東大寺婢二人

婢美氣賣、年六十七、　婢小楓賣、年六十一癈疾

右被太政官今月六日符偁、得省解偁、玄蕃寮狀云、僧綱牒云、東寺三綱狀云、被官去十二月廿七日符偁、偁、奉勅、上件婢等、其年至六十六已上及廢疾者、准官奴婢例者、謹請處分、官判依請者、宜承知准狀施行者、寺宜承知、今以故牒、

天平勝寳三年二月八日　從六位下行大錄飛驒國造石勝

從五位上行少輔百濟王元忠

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年七月丁未、先是從二位文室眞人淨三等奏曰、伏奉去年十二月十日勅、紀寺奴益人等訴云、紀袁祁臣之女粳賣嫁木國氷高評人內原直牟羅、生兒身賣、狛賣二人、蒙急則臣處分居住寺家、造工等食、後至庚寅〇持統四年編戸之歲、三綱校數、名爲奴婢、因斯久時告愬、分雪無由、空歷多年、于今屈滯、幸屬天朝照臨宇內、披陳鬱結、伏望正名者、爲賤爲良、有因有果、浮沈任理、其報必應、宜存此情子細推勘、浮沈所適、割判申聞者、謹奉嚴勅、捜古記文、有僧綱所庚午〇天智九年籍書寺賤名、中有奴太者幷女粳賣及粳賣兒身賣狛賣、就中異腹奴婢皆顯入由、太者幷兒入由不見、或曰、戸令曰、凡戸籍恒留五比、其遠年者依次除、但近江大津宮〇天智庚午年籍不除、蓋爲氏姓之根本、遏姦欺之亂眞歟、據此而言、猶爲寺賤、或曰、賞疑從重、刑疑從輕、典冊明文、何其不取、因斯覆審、或可從浮、雙疑聳立、各自爭長、淨三等庸愚、心迷孰是、輕陳管見、伏聽天裁、奉勅依後判、於是益麻呂等十二人賜姓紀朝臣、

眞玉女等五十九人內原直、卽以益麻呂爲戶頭、編附京戶、而紀朝臣伊保等猶疑非勅、至是召御史大夫從二位文室眞人淨三、參議仁部卿從四位下藤原惠美朝臣朝獵、入於禁內、高野天皇口勅曰、前者卿等勘定而奏、依庚午籍勘者可從、況是一理也、又撿紀寺遠年資財帳、異腹奴婢皆顯入由、種賣一腹不見人由、據此而言、或可從浮是亦一理也、罪疑就輕、先聖所傳、是以從輕之狀報宜已訖、而紀朝臣等猶疑非勅、不肯信受、故今召御史大夫文室眞人、面告其旨、復召朝獵副令相聽、

〔類聚三代格三〕家人事

勅、藥師寺奴婢等、年滿六十、幷才能勇勤悉從良、

天平神護二年五月十一日

〔類聚三代格三〕太政官符

一國分二寺應買賤、寺別奴三人、婢三人、其年滿六十放免從良、若有死闕者、依數買塡、若別有身才、功能可善者、不須待滿六十、卽須申官從良買替、繁息之後不可更買、其價直者便用寺家封物、若誤買惡奴婢、必返本主、以三年爲留返之期、○中略

以前被右大臣宣偁、奉勅如件、

天平神護二年八月十八日

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年二月戊子、幸山階寺、奏林邑及吳樂、奴婢五人賜爵有差、　三月辛亥、幸元興寺、捨綿八千屯、商布一千段、賜奴婢爵有差、　癸亥、幸藥師寺、捨調綿一万屯、商布一千段、賜長上工以下、奴婢已上二十六人爵各有差、放奴息麻呂賜姓殖栗連、婢清賣賜姓忍坂、　四月乙巳、幸飽浪宮、賜法隆寺奴婢二十七人爵各有差、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月癸亥、是日賜配智識寺今良二人、四天王寺奴婢十二人爵人三級

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年五月戊申、近衞勳六等藥師寺奴百足賜姓三島部、

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺奴婢籍帳一卷　寶龜三年壬子識次案

東大寺三綱可信牒上

　申上寶龜三年奴婢籍帳事

合奴婢二百二人○中略

見定奴婢一百八十八人○中略

　編首奴大井　年卌九 左手小指疵　正奴

　　女婢濱刀自女　年廿八 左鼻縁耳黒子　正婢

　男奴吉織　年一　黄奴○中略

單首奴廣津　年三十九、左高頰黒子、　正奴○下略

○按ズルニ、編首ハ奴婢二人以上ノ長ニシテ、單首ハ獨身ノモノヲ謂フナリ、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜四年七月庚寅、詔、免從四位下紀益人、爲庶人、賜姓田後部、又去寶字八年放免紀寺賤七十五人、依舊寺奴婢、但益人一身者特從良人、

〔續日本紀桓武四十〕延暦八年五月庚申、播磨國揖保郡大興寺賤若女、本是讃岐國多度郡藤原郷女也、而以慶雲元年歲次甲辰、揖保郡百姓佐伯君麻呂詐稱己婢賣與大興寺、而若女之孫小庭等申訴日久、至是始得雪、若女子孫奴五人婢十人免賤從良、

〔東大寺要錄十〕延暦十一年十二月丁丑、東大寺三綱言、案去天平勝寶元年十二月廿七日勅曰、以奴婢等奉施金光明寺、其年至六十已上及癈疾者、准官奴婢依令行之、雖非高年、立性恪勤、駈使無違、衆僧矜請放免從良者、今奴廣前等非懈駈使、念欲請從良、許之焉、

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公淸行

臣某言、○中略欽明天皇之代、佛法初傳本朝、推古天皇以後此敎盛行、上自群公卿士、下至諸國黎民、無

資財帳

建寺塔者不列人數、〇中略　多買良人以爲寺奴、〇中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔集古文書四官符〕弘安四年太政官牒河内國古市郡西琳寺藏

太政官牒河内國西琳寺

雜事三箇條〇中略

一應停止寺邊猥藉雜使入部事〇中略

右同前〇前條云、右得彼寺氏人等去年十二月廿二日解狀偁云々、承之也、十　得解狀偁、四邊之民烟者三寶之奴婢也、年々修雁宇之破壞、日々備鷲王之供施、庄園顚倒分、雖爲無緣之砌、檀施積集分不恥有封之寺、而諸方雜使等、吹毛求疵、掠取寺奴、穿穴伺短、追捕民屋、然間僧侶含愁、而講論之筵動冷、土民壞墳、而修造之營易廢、爲法爲寺不可不誡、望請天裁因准太子御廟等傍例、寺邊四至内永可停止諸使亂入之由、被下綸旨者倍抽丹誠奉祈紫禁者、同宜奉勅依請、〇中略

以前條事如件、寺宜承知依宜行之、牒到准狀、故牒、

弘安四年五月廿六日

修理東大寺大佛長官正五位上左大史兼備前權介小槻宿禰花押牒

正五位上行右少辨兼春宮大進藤原朝臣

〔伊呂波字類抄古諸寺〕與福寺〇中略　有四門、〇中略　東號奴婢門、令住奴婢、爲勤仕寺役也、

〔類聚三代格三〕太政官符

應停定額寺資財帳進官事

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、準例、五畿内七道諸國定額諸寺資財等帳、附朝集使、每年進官、自今以後、宜停進之、但遷替國司相續撿挍、其國分二寺一依先例、

延暦十七年正月二十日

太政官符

應令四年一進諸國定額寺資財帳事

右撰格所起請偁、太政官去天長二年五月二十五日符偁、勘解由使起請偁、太政官延暦十七年正月二十日格偁、五畿内七道定額寺資財等帳、附朝集使、毎年進官、自今以後、宜停進之、但遷替國司相續撿挍者、自爾以降、不進件帳、今諸國言上不與解由狀、多載部内定額寺資財堂舍無實破損等、夫有司勘事、文書爲本、無其帳何辨眞僞、望請六年一申以擬勘據者、右大臣宣、奉勅依請者、凡六年一申爲期遷替、而今秩歷之期、改定四年、資財之帳、猶指六年、去任後申、不便勘據、伏望四年一申以適勘會者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月二十八日〇二十八日、三代實錄作二十四日、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕法隆寺伽藍緣起幷流記資財事〇中略

牒、以去天平十八年十月十四日、被僧綱所牒偁、寺家緣起幷資財等物、子細勘錄、早可牒上者、謹依牒旨、勘錄如前、今具事狀、謹以牒上、

天平十九年二月十一日

都維那僧靈尊
上坐僧隆信
寺主僧玄鏡
可信半位僧乘印
可信複位僧寶廣
可信複位僧乘觀

僧綱、依三綱牒、撿件事記、仍爲恒式、以傳遠代、謹請紹隆佛法、將護天朝者矣、

天平廿年六月十七日

大僧都法師行信

佐官業了僧願淸

佐官兼藥師寺主師位僧勝福

佐官兼與福寺主師位僧永俊

佐官師位僧惠徹

佐官業了僧臨照

古事類苑

宗教部四十一

佛教四十一

參詣

我國古來一定ノ靈場アリテ、信徒此ニ參詣スルノ風アリ、而シテ其最モ著名ナルモノヲ西國三十三所ノ觀音ト爲ス、紀伊國那智ニ始リ、美濃國谷汲ニ終リ、傳ヘテ花山法皇巡禮ノ遺跡ト稱ス、參詣ノ徒ヲ巡禮ト稱シ、一種ノ歌ヲ誦シテ途中ヲ行乞ス、京都江戸等亦各此ヲ摸シテ、別ニ其所ヲ定メタリ、次ニ著名ナルハ、四國八十八箇所ニシテ、次ハ六十六部ナリ、コハ法華經六十六部ヲ書寫シテ、五畿七道ノ諸國ヲ徧歷シ、毎國有名ノ一寺ニ納メシニ起リテ、海內ノ靈地ヲ巡拜スルナリ、中ニハ八十八箇所、三十三所等ヲ兼ネテ巡禮スルモノアリ、次ハ眞宗ノ二十四輩ナリ、二十四輩ハ開祖親鸞幷ニ高弟二十四人ノ創メシ寺ヲ巡拜スルモノナリ、又淨土宗ニハ、二十五箇寺詣、四十八箇寺詣アリ、日蓮宗ニハ、百箇寺詣、二十一箇寺詣アリ、京都ニハ、七觀音七藥師、十二藥師、六地藏詣等アリ、又神社ト同ジク、寺院ニ百日詣、千日詣、千度詣ヲ爲スノ風ハ甚ダ古シ、

又緣日トテ、佛菩薩ノ會日ニ參詣スル風アリ、中ニ就キテ、觀音、地藏等ノ緣日ハ、古クヨリ之レアリシモノヽ如シ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕左疊字 參詣

〔書言字考節用集〕九言辭 參詣(サンケイ)

巡禮

〔俚言集覽之〕順禮　桂川地藏記、或有三十三所順禮行者打簡、俊寛謠、今巡禮と書、

〔饅頭屋本節用集之人倫〕順禮（ジユンレイ）

〔類聚名物考佛教六〕寺めぐり　すなはち是巡禮なり、さるに素性集に、寺巡と詞書には書きたれども、歌には佛に祈るにはあらで、神もまゐるらんといへば、神佛かねていふにや、

〔素性法師集〕法皇、寺めぐりし給ふ御ともにて、

ふして思ひおきてかぞふる萬代は神ぞまゐるらむ我君の爲

〔伊勢集上〕やまとに三月ばかり有けるに、さうざうしく寺めぐりせんとて、りうもんといふ寺にまうでたりける、正月十一日ばかりになん有ける、○中略

たちぬはぬきぬきし人もなき物を何山姫の布さらすらん

〔雜筆往來〕抛世間名利、巡禮靈地、可紹隆佛法、耀神威、

〔嬉遊笑覧七行遊〕西國順禮といひしは、東國よりの名と聞ゆ、○中略また高野大師を念ずる輩は、四國邊路を廻り、一向門徒は、廿四輩といふことに出づ、親鸞上人由所の地、武州、上總、下總、常陸、上毛、下毛、北國、伊勢一身田まで、二十四所えり出して參詣す、○中略その外洛中にも、卅三所のうつし、何くれの靈場とてめぐる所多くあり、江戶もまた同じく、巡るべき所多く設けたれ共、卅三所觀音も、東西南北におびたゞし、其外九品佛、六地藏、四十八所地藏、八十八箇所弘法大師巡拜あり、大進夜話に、江戶八十八箇所は、寶暦の頃淺間山上人、本願に依て移す所なりといへり、早春は、七福參り、只にぎはへるは、春秋二分に、六阿彌陀詣なり、佛詣おろし、中村龜玉が高點、六阿彌陀居つて拜む人はなし、それのみならず、千社參りなど云ことさへ出きぬ、かゝるたぐひの事も、先蹤あり、

西國三十三所巡禮

〔撮壤集上寺院〕三十三所巡禮

紀州那智山　紀三井寺　粉河寺　和泉槇尾寺　河内藤井寺　大和坪坂寺　同岡寺　同長谷寺　同興福寺　山城御室戶

同醍醐　江州岩間寺　江州石山寺　同三井寺　山城今熊　同清水寺　同六波羅密寺　同六角堂　同皮堂　善峯寺　丹穴

後太寺　攝州總持寺　同勝尾寺　同中山寺　播州清水　同法華寺　同書寫寺　丹波鳴合寺　若狹松尾寺　江州竹生島　同長命寺　同觀音寺　濃州谷汲寺

〔拾芥抄下本諸寺〕三十三所觀音

六角堂金銅三尺如意輪、聖德太子、
河島（島一本作崎）正觀音、壹演僧正、
法性寺觀音堂
醍醐如意輪堂等身、聖寳內供、
摠持寺白檀三尺六寸、十一面千手、
六波羅蜜寺八尺十一面、空也上人、
長谷寺金色二丈六尺、十一面、
東大寺法華堂丈六千手、道基上人、
粉河寺等身千手、大伴孔子古、
眞木尾和泉、等身千手、弘法大師、
那智如意輪堂一搩手半
播磨清水丈六千手、光善上人、
長樂寺十一面、或云准胝、宇多院御時、雙林寺北祇園東、
乙訓良峯寺山城、八尺千手、源算上人、
龍蓋寺丈六土佛、大和國高市郡、岡本弓削法皇造立之後未燒、
藤井寺河內丹南郡、號剛林寺、從三位藤井給子、等身千手、
近江石山寺丈六土佛、二臂如意輪、朗辨、爲聖武御願、

中山千手、吉備大臣、
清水寺丈六千手、延鎭大師、
神光寺
同石間等身千手、泰澄大師、
勝尾寺攝津國等身千手
神呪寺
元興寺南京
同西金堂
紀伊三井寺
谷汲美濃、號華嚴寺、
天王寺
成相丹後、一搩千手、中聖觀音、

同觀音寺神崎郡、三尺千手、絹笠山、不知願主、　同袋懸

穴太寺丹波、本尊藥師、號菩薩寺、但觀音記之願主宇治城宮城、

校合或人本之處、合點廿二箇所附合、河崎寺　中山元興寺　長樂寺西金堂　法性寺天王寺　觀音堂紀伊三井寺　神光寺近江　神呪袋懸等無之

此外、金剛寶寺、等身十一面、爲允上人、　仲山寺同聖德太子

長命寺三尺聖武內大臣　准胝堂三尺聖寶僧正

行願寺八尺千手道緣上人　千手堂御室尺、二尺一寸、不知願主、

如意輪一尺六寸性空上人　法華寺字壷坂寺

松尾寺馬頭等身若狹國海人　觀音寺等身千手山本左大臣

竹生島示現上人建立、千手等身等注之、河山已下廿一所除之、若同所異名歟、將又有異說歟、可尋決、

〔閑田次筆二〕拾芥抄は、拔萃の書にて、雅俗を撰ばず納たるものなれども、他に考ふべき古書乏しひし今世にしては、大に有益の書なり、○中略此抄の中に、順禮三十三所の觀音を出せるが、一箇所は、流布の本に脫せり、三十二所のうち、今に異なる所拾壹箇所あり、河崎、壹演僧正、私云、ある人近古の京繪圖を示さるゝ内に、一條の東鴨河の西岸なる河崎と稱す、其南角河崎觀音壹演開基と見ゆ、次て名跡志を見るに、今寺廢して清和院に此觀音をうつすといふ、法性寺觀音堂、伏見街道、今小堂あり、神光寺、神呪寺、兩寺無所見、不及考、元興寺、南京東大寺法華堂同西金堂天王寺、私云、浪華四天王寺歟、長樂寺東山善蓋寺、大和高市郡近江觀音寺ノ下に同袋掛、觀音寺は古今同じ、此袋掛といふ所今不知、以上いつより改りけん、又曰、校合或人本之處、合點廿二箇所附合、此外とて十一箇所を出されし內、拾箇所は、今順禮する所なり、金剛寶寺といふ一所ありて、是はいづくなることを玄らず、此拾所前にはなし、又細書云、若同所異名か、將又有異說か可尋決と見ゆ、上來一二の次第を書れず、むかしは然りけるにや、又因にいふ、此三十三所を巡拜することを、今西國と呼ぶは、もと東國の人の詞なるべし、道の

ついで、東海道を登り、伊勢兩宮に詣、八鬼山をこえて、熊野にいたるより、國々をへて、近江の長命寺、觀音寺、美濃谷汲に終りて、中仙道をへて、東國の故鄕に歸るは、次第順路なり、されば其第二番紀三井寺の歌に、ふるさとをはる〴〵こゝに紀三井でらはなのみやこもちかくなるらん、といへるは、關東の人にはあひて、中原の地の人のためには聞へず、然るを、本覺の故鄕を出て輪廻せしを、今順禮の力によりて、佛國の花の都もちかくなるらんの意なりと解するは强解なり、笑ふべし、さて此順禮歌といふもの、都鄙共に、一文不通の人も唱へおぼえて、觀世音の緣日など、經文を稱ふると心得て謳ふを、少し文雅ある僧、そのうたどもの拙きをいひて、同じひまにて、觀音の名號をも唱へよかしと思ふよしを語る、予曰、誠に然り、しかれども其稱ふる人の意には、經文なりと心得て、一向に稱ふれば、其人のためには經文なるべし、

〔壒囊抄十二〕三十三所トハ何々ゾ

那智山如意輪堂、○中略那智山千手堂、○中略金剛寶堂、紀三井寺ト云、○中略紛河寺、○中略施福寺○中略南法華寺、壺坂寺ト云、○中略龍蓋寺、岡寺ト云、○中略長谷寺、初瀨寺ト云、○中略南圓堂、○中略准胝堂、○中略正法寺、岩間寺ト云、○中略石山寺、○中略如意輪堂、○中略六角堂頂法寺ト云、○中略淸水寺、○中略行願寺、革堂ト云、○中略六波羅密寺、○中略觀音寺、○中略善提寺、穴太寺ト云、○中略良峯寺、○中略總持寺、○中略勝尾寺、○中略仲山寺、○中略淸水寺、○中略法華寺、○中略如意輪寺、書寫山ト云、○中略成相寺、則ナリアヰト云○中略松尾寺○中略竹生島、○中略華嚴寺、谷汲ト云、○中略觀音寺、○中略長命寺、○中略御室戸寺、○中略是參詣ノ次第也、就此次第異說是多歟、或ハ爲長谷初、或ハ御室戸爲初、長谷ヲ爲終、或說ニ云、只便路ヲ爲本、不論前後ト云々、此記ハ久安六年庚午長谷僧正參詣之次第也、或夜、長谷僧正ノ夢ニ、於琰魔王宮、日本ノ生身觀音卅三所ヲ註セル記錄ヲ見ルニ、則今ノ日記也ト云々、

一度參詣ノ輩ハ、縱ヒ雖造十惡五逆、速ニ消滅シ、永ク離惡趣ト云々、此中ニ、十一面五、如意輪六、千

手十六、聖觀音三、准胝、馬頭、不空羂索各一也、是總持寺試ノ觀音ヲ本トスル分也、若シ本尊ヲ以テセバ、十一面四、千手十七ナルベシ、

〔竹居清事〕榑桑西三十三所巡禮觀音堂圖記圖三十三幅金碧裝飾

竊嘗攷之、跡隣於迂、而其歸乃詣善順之地、君子之道也、事不失恒、而其卒乃入乎剛愎之途、小人之計也、竺乾大聖設敎也、使民用之而不使之知矣、故觀其跡、則謂之迂、○中略吾土有巡禮之語、不見之圖記、亦不得之於聖詰賢策之際、蓋巡者如巡狩之巡也、禮者敬而禮之也、○中略昔養老年中、大和國長谷寺有僧得道上人者、疾而絕矣殆數日、遂甦、如寐復醒、冥府制嚴、官吏用法、皆如人間所圖也、閻王勅上人大期未限、可歸本土、且有光世音、堂有三十三所、所最欽也、告之其人、人諳禍難測、上人恐其或無之信者、王乃賜之三十三印、印各有三十三之名、上人及甦告之人、人未之信矣、上人感楚璞之辱、收之於攝之中山寺、到今得道之氣猶鬱矣、顧力不足振之、以此爲憾、上皇○花山遂遣中使遠謁乎攝之中山寺、訪之寺僧、印文不园、累々三十三所印、以安之三十三所、上皇與佛眼偕親詣之、屈至尊而行賤種之所趾、吁難矣哉、不亦光世如來現梵王身乎、距數百年、永享上下之変、巡禮之人道路如織、關市相望、小簡書某土某人三十三所巡禮之字、貼之佛宇、寘之茶店、茶店什八九、弗問之報、雖曰埜巷林區疲氓窮戶、皆已食口以給、謂之從善如水之就流乎、得道之於閻王也、不浪授也、佛眼之於得道也、如執左劵、故歷數百年、天下之人始大信而受之、爲時之至乎、爲源之深乎、寶德中、備前州牛窻靈鷲寺玉仲瑛書記、創意命工繪三十三所而作三十三幅也、

〔天陰語錄〕越前河合莊、岩坂三十三所巡禮觀音、安座點眼法語、

善財童子、○中略寬和二年夏、天祿上皇○花山厭世相、幸華山寺、脫屣寶位、薙髮以著昣服、法諱入覺、時年十九、與世尊出家同其年也、天下靈區徧印足迹、聞三十三所靈異、一々巡而禮之、至尊猶爾、矧庶人乎、矧沙門乎、爾來巡禮之人溢于村、盈千里、背後貼尺布、書曰三十三所巡禮某國某里、關吏識而不征之、

舟師憐而不貰之、或推食食之、或推衣衣之、始于南紀那智、終于東濃谷汲、歷國者八九、送日敷旬、觸熱衝寒、手足胼胝、面目黧黑、如大禹治洪水之勞、以故途路而化草莽者惟夥矣、皆言、與其生而造罪業、孰若其死而結善因、欽仰大士者、如渴赴水、飢赴食、其源出花山上皇也、自寬和二年、至今明應八年、已得五百餘霜、巡禮之人益熾也、

〔鹽尻 一〕三十三所巡禮歌　花山院御順禮、熊野書寫山等へ御幸の御事、古記、且ハ歌書後拾遺集以下等に見えたり、古人三十三所を廻し事も、千載集前大僧正覺忠の歌あり、〇中略されども、今の如く、一番は紀州那智如意輪堂より、三十三番濃州谷汲の華嚴寺と定たるは、いつよりにや、拾芥抄下三十三所觀音は異也、按壒嚢抄にも、順はちがいて有之なり、

六角堂、中山、河島、淸水寺、法性寺、神光寺等を記して、神呪寺、元興寺、及び善益寺〇善益、一本作長谷、近江の袋懸なども見ゆ、同所異名異說ありとしるし、そのかみ今の如く定りたるにはあらず見ゆ、南紀山陽〇陽一本作道より、東の國々を巡りて、西國順禮といふが如し、坂東の人云初し也又何番と、番の字はいと俗なり、其うたふ所の歌、花山院法皇の御製などいふこそ、物もしらぬ田舍人の傳なれ、法皇所にての御歌、さらにかゝる野鄙の御歌ならず、

〔鹽尻 五十九〕三十三所巡禮

世尊觀音之靈場、而詣三十三處、謂之巡禮、凡其周廻之際、累數月、歷十有餘國、而到濃州之谷汲而止矣、相傳、寬和法皇〇花山啓其端、蓋此擬普門示現之數、而爲之者也、然曾無經典所出、亦印土、支那、未聞有斯事、只是扶桑、沿襲爲風、無智緇白、習以勇爲、近世殊多、其中或爲現世福壽除災快樂者、或爲將來生王臣貴顯之家、而禱祐自在者、或徒效他之轡、而名山靈嶋爲遊覽者、皆是不具正信、不知正道之所致也、實可憫矣、若夫篤信大悲、盡心致誠、不遠千里、而爲菩提者、乃是皆得解脫之良緣、亦其不能無感應也、可謂愚化之一端矣、然比西方業、百千萬分不及其一、若念佛者、阿彌陀佛、則聞之禮、則視之憶念、

則憶念之、亦觀世音大勢至爲其勝友、行住坐臥、乃如在三尊前、且夫眞心徹到、現在親見、後生極樂刹、證得無生忍、何必歷山涉水、風飡露宿、久勞行旅、其之巡禮也、徒仰影像焉、此之念佛也、親遇眞身焉、優劣曾壤、不可同日而論也、

雲棲老人、曾有遊名山之辨、亦同斯說、

〔嬉遊笑覽七行遊〕三十三番觀音順禮のこと、鹽尻に、寬平の帝（宇多院）御出家ありて、眞言を益信僧正に受て、灌頂せさせ給ひ、法流を寬空僧正に授けさせ給ふ、專ら桑門の御有さまなりしが、御行脚のことはなかりし、花山院御發心の後、國々を御修行ありし、是ぞ始めなるべき、今の三十三所觀音順禮も、この法皇より權輿すといへり、〇中略、三十三所も異りあり、拾芥抄に、卅三所を擧て、或人の本を校合するに、合點廿二箇所は附合、十一所は異なるよし見えて、もし同所異名歟、はた又有異說歟とあり、そは同所異名のやうにおもはるゝもあれど、もとより異なるもあるべし、（後に變じたる寺などある故なり）懷子十尋きに終はましらむ歌の道ほとけの御國ねがふ順禮、（長好）順禮歌（御詠歌なり）と付たり、此歌いつの程よりありともしらず、其内しめぢがはらの歌は、新古今（雜）に觀音の御歌とて出づ、嵯峨の歌は（鷲の山再びかげのうつりきてさがのゝ露に有明の月）續古今に出て、寂蓮の歌なり、その餘はいとふつゝかなる口ずさみとみゆ、

三十二番職人歌合に、順禮と高野聖とつがひたる花の歌、おひずりに花の香しめて中いりの都の人も袖にくらべん、判云、高野居住之聖、諸國順禮之客、或期五十六億之會座、或約三十三所之靈場、共雖結佛道修行之果、立嘉人間榮耀之花、歌科更無甲乙、判詞難辨勝劣者乎、また述懷歌、同行のめぐる御てらのその數に三十三の茶がはりもがな、此繪にかけるおひずりは、紺の袖なしはふりの背に、白き布ひと幅縫つけたるなり、是を南留邊志に、衰經の遺製とおもへるはひがごとなり、思ふにこれは笈摺にて、笈を負ふにそのあたる所すれて破れやすければ、白布をつけたるも

のなり、されば染たる布ならでもあるべきを、今は赤き布をも付るは、女のし初たりけむを、後に
は男も著る事となりしにや、〇中略
西國順禮といひしは、東國よりの名と聞ゆ、物みめぐる事さま〴〵あり、南紀山陽巳東國々を巡
るに、畿内の人もこれを西國と云こと古し、應永以後の札多くあり、札は木にて作れるのみなら
ず、しんちうも銅もあり、好事家これによりて、札をうつことは應永ごろより專らなりといへる
は非なるべし、花山院御札にかゝせ給へりと、新拾遺集にあるをや、

〔日次紀事七三月〕此月初西國三十三所觀音巡禮人、多聚京師、俗勤西國巡禮、謂爲西國、

〔日次紀事臨時四〕清水寺萬燈會幷三十三度瀑詣、及傭人、或舞臺飛、諸國三十三所觀音巡禮幷洛陽三
十三所觀音巡禮、

〔新拾遺和歌集釋教十七〕修行せさせ給うける時、粉河の觀音にて、御札にかゝせ給うける御歌、

花山院御製

むかしより風にしられぬともしびの光にはるゝ後の世のやみ

〔千載和歌集釋教十九〕三十三所の觀音、おがみ奉らんとて、所々まいり侍りける時、みのゝ谷汲にて、油
の出るをみて、よみはべりける、

前大僧正覺忠

世を照す佛のしるしありければまた灯も消ぬなりけり

〔太平記五〕大塔宮熊野落事

是ハ竹原八郎入道殿ノ甥ニ、戸野兵衛殿ト申人ノ許ニテ候ト云ケレバ、サテハ是コソ、弓矢取テ
サル者ト聞及ブ者ナレ、如何ニモシテ、是ヲ憑マバヤト思ケレバ、門ノ内へ入テ、事ノ樣ヲ見聞處
ニ、內ニ病者有ト覺テ、哀レ貴カラン山伏ノ出來レカシ、祈ラセ進ラセント云聲シケリ、玄尊スハ
ヤ究竟ノ事コソアレト思ケレバ、聲ヲ高ラカニ揚テ、是ハ三重ノ瀧ニ七日ウタレ、那智ニ千日籠

テ、三十三所ノ巡禮ノ爲ニ罷出タル、山伏共路蹈迷テ、此里ニ出テ候、一夜ノ宿ヲ借、一日ノ飢ヲモ休メ給ヘト云タリケレバ、內ヨリ怪シゲナル下女一人出合ヒ、是コソ可ㇾ然、佛神ノ御計ヒト覺テ候ヘ、〇下略

〔管見記〕永正三年九月廿六日、年行事宥範、携ㇾ來松茸ㇾ暫雜談、南都按察得業來、三十三所巡禮之次云云、今夜宿ㇾ此亭ㇾ、

京都三十三所巡禮

〔攝壤集上寺院〕三十三所觀音

行願寺波愛　天王寺山井如意輪　千手堂栗北院一條京極　感應寺河崎聖觀音　子安觀音聖觀音、丈六石像、北白川神樂岡北、　新長谷寺十一面、二尺六寸、吉田東頰、　吉田寺行基御作　善法寺十一面、三體、內一體天神御作、體慈覺、一體普相公、岡崎西頰、　東岩藏寺千手、行基一刀三禮、等身　速成就太子堂院如意輪　長樂寺三寸金銅　長福寺千手堂阿彌陀寺前、祇園南、行基御作、　六波羅密寺十一面、空也上人建立、　珍皇寺六道十一面、成不空羂索、　黒岩七觀音堂式院清水坂　清水寺　如意輪堂清水瀧上　清閑寺千手、行基御作、　蓮華王院千手、卅三間、　二階堂四道寺如意輪、新熊野觀音寺大路、　觀音寺十一面、弘法、一刀三禮、等身、　泉涌寺下從泉涌寺中有道　梵音寺千手、弘法等身御作、法性寺大路東頰、　隨身院千手九條富小路西頰、　東寺食堂千手　如意輪堂空也堂下北小路猪熊北西頰　妙法寺穴浦堂下北小路町　六條八幡東洞院、輪像三尺、　頂法寺聖德太子御作守佛、一寸八分閻浮檀金像、三尺覆身、太子御作、一刀三禮、　長泊寺三條坊門、烏丸東頰、　浄光院東千手堂仁和寺池上白蓮社乾　神應寺仁和寺御堂南神殿下　朝日寺北野社中

〔雍州府志五寺院〕近世准ㇾ西國三十三所觀音巡禮ㇾ而於洛內外ㇾ定ㇾ三十三所ㇾ兒女甚得ㇾ其便ㇾ所ㇾ謂頂法寺六角堂、京極長吟寺、下御靈社測行願寺革堂、新長谷寺、吉田寺、高臺寺門前觀音、同南隣靑龍寺、清水坂地藏院、清水寺、同奧千手堂、同朝倉堂、泰產寺、六波羅密寺、愛宕寺、蓮華王院、泉涌寺中楊貴妃觀音、同善應寺、同所新熊野、法性寺、東九條淨光寺、東寺中松原大宮長延寺、松原妙壽院、大宮祥雲寺、北野觀音寺、西京西蓮寺、大將軍村長寶寺、同所地藏堂、北野東向觀音、金山天王寺、清和院是也、

江戸三十三所巡禮

〔東都歲時記附錄四〕江戸三十三所觀音參古來札所といふ、享保廿年開板の江戸砂子拾遺に載たり、詠歌これを略す、

一番　金龍山淺草寺　　二番　淺草駒形堂　　三番　深川三十三間堂
四番　淺草淸水寺　　五番　下谷安樂寺　　六番　上野淸水堂
七番　湯島天神喜見院　　八番　駒込寺町淸林寺　　九番　同淺嘉丁定泉寺
十番　駒込正念院　　十一番　小石川さすがや丁圓乘寺　　十二番　小石川傳通院
十三番　築土無量寺　　十四番　同八幡成就院　　十五番　牛込寺町行元寺
十六番　市谷八幡東圓寺　　十七番　四谷北寺丁淨雲寺　　十八番　同南寺丁眞成院
十九番　赤坂淸嚴寺　　廿番　西窪天德寺　　廿一番　芝增上寺
廿二番　飯倉順了寺　　廿三番　麻布新丁稱念寺　　廿四番　三田古川丁龍翔寺
廿五番　魚藍淨閑寺　　廿六番　三田濟海寺　　廿七番　伊皿子道往寺
廿八番　道往寺內一聲劍　　廿九番　高輪引接院　　卅番　同如來寺
卅一番　二本榎黃梅院　　卅二番　同坂中光雲寺　　卅三番　目黑瀧泉寺

四國八十八箇所遍禮

〔國花萬葉記 十四上阿波〕四國遍禮八十八箇寺之靈地、當國之分、凡二十三箇之次第道法、○中略

一番、靈山寺、板野郡板東村、(中略)これより極樂寺迄十町、

二番、極樂寺、板野郡ひの木村、(中略)これより金泉寺迄廿五丁、

三番、金泉寺、板野郡大寺村、(中略)是より黑谷寺迄一里、

四番、大日寺、又黑谷寺、同郡黑谷村、(中略)是より地藏寺迄十八丁、

五番、地藏寺、板野郡やたけ村、(中略)是より安樂寺迄一里、

六番、安樂寺、板野郡ひきの村、又瑞運寺、(中略)是より十樂寺迄十丁、

七番、十樂寺、板野郡たかな村、(中略)是より熊谷寺迄一里、

八番、熊谷寺、阿波郡どなり村、(中略)是より法輪寺迄十八丁、

九番、法輪寺、阿波郡、(中略)是より切はた迄廿五丁、

十番、切幡寺、阿波郡切はた村、(中略)是より藤井寺迄一里半、

十一番、藤井寺、麻植郡、(中略)是より燒山寺迄三里、○中略

十二番、燒山寺、名西郡、(中略)是より一宮迄五里、

十三番、一宮寺、名東郡、(中略)是より常樂寺迄十五丁、

十四番、常樂寺、名東郡國命村、(中略)是より國分寺へ八町、

十五番、國分寺、名東郡、(中略)是より觀音寺迄十八丁、

十六番、觀音寺、名東郡、(中略)是より井土寺迄十八丁、○中略

十七番、井土寺、又明照寺と云、名東郡、(中略)是より恩山寺迄五里、○中略

十八番、恩山寺、勝浦郡、(中略)是より立江寺迄壹里、

十九番、立江寺、那賀郡、(中略)是より鶴林寺迄三里、○中略

廿番、鶴林寺、勝浦郡たつみ向たなの村、(中略)是より大龍寺迄一里半、

廿一番、大龍寺、たつみ向那賀郡、(中略)是より平等寺迄二里、

廿二番、平等寺、那賀郡あらたの村(中略)是より藥王寺迄五里、○中略

廿三番、藥王寺、かいふ郡ひわさ村○中略

右貳拾三ヶ寺、阿波國分なり、是より廿四番土佐國東寺迄廿一里、内十里は阿波分なり、

〔國花萬葉記十四上土佐〕四國遍禮八十八ヶ寺之内、當國に有之十六ヶ寺之次第、

廿四番、東寺、又號最御崎寺、安喜郡、(中略)是より津寺へ一里也、

廿五番、津寺、又號津照寺、安喜郡室津浦、(中略)是より西寺まで壹里、

廿六番、西寺金剛頂寺、安喜郡、(中略)是よりかうのみね寺へ七里、

廿七番神峯寺、安喜郡たうの濱村、(中略)是より大日寺迄九里、

廿八番、大日寺、香美郡大谷村、(中略)是より國分寺へ一里半、

廿九番、國分寺、長岡郡國分村、(中略)是より一宮まで一里半、

卅番、一宮寺、長岡郡一宮村、(中略)是より五臺山迄二里、○中略

卅一番、五臺山、長岡郡、(中略)是より禪峯寺へ一里半、

卅二番、禪寺峯寺、長岡郡、(中略)是より高福寺迄一里半、

卅三番、高福寺、又號雪濱寺、長岡郡長濱村、(中略)是より種間寺へ二里、

卅四番、種間寺、吾川郡、(中略)是より清瀧へ二里、

卅五番、清瀧寺、高岡郡高岡、(中略)是より青龍寺迄二里半、

卅六番、青龍寺、高岡郡龍村、(中略)是より仁井田まで十三里、○中略

卅七番、仁井田五社、高岡郡みやうち村、(中略)是より蹉跎まで廿一里、○中略

卅八番、蹉跎寺、幡多郡いさ村、(中略)是より寺山迄十二里、

卅九番、寺山院、幡多郡沖村○中略

右是迄十六ヶ所、土佐國分也、是より豫州觀自在寺迄七里、内三里半まつおさが餘迄土佐分也、

〔國花萬葉記十四上伊豫〕四國遍禮八十八ヶ所之内、當國ニ有之廿六箇寺之次第、○中略

四十番、觀自在寺、宇和郡平城村、(中略)是よりいなりへ道すぢ三有、なだ通筋十三里、○中略

四十一番、稻荷宮、宇和郡とがり村、(中略)是より佛木寺迄卅丁、

四十二番、佛木寺、宇和郡則村、(中略)是より明石迄三里、

四十三番、明石寺、宇和郡明石村、(中略)是より菅生山へ廿一里、○中略

四十四番、菅生山、浮穴郡すがふ村、(中略)是より岩屋へ三里、

四十五番、岩屋寺、浮穴郡竹谷村、(中略)是より淨瑠璃寺へ八里、○中略

四十七番、八坂寺、浮穴郡八坂村（中略）これより西林寺まで一里、

四十八番、西林寺、浮穴郡高井村（中略）是ゟ浄土寺へ廿五丁、

四十九番、浄土寺、久米郡たかの子村（中略）是よりはんじへ十五丁、

五十番、繁多寺、温泉郡（中略）是より石出まで廿丁、

五十一番、石出寺、温泉郡石出村（中略）是より大山寺まで二里、〇中略

五十二番、太山寺、和気郡太山村（中略）是より圓明寺へ十八町、

五十三番、圓明寺、和気郡和気濱村、〇中略

五十四番、延命寺、（中略）これより別宮まで一里〇中略

五十五番、三島宮、（中略）是より泰山寺迄一里二丁、

五十六番、泰山寺、小泉村（中略）是より八幡迄十八丁、

五十七番、八幡宮、いがなし村（中略）是より佐禮迄廿丁、

五十八番、佐禮山、（中略）是より國分寺迄一里、

五十九番、國分寺、越智郡國分寺村（中略）是ゟ横峯寺迄六里、〇中略

六十番、横峯寺、なるほう村（中略）是より香園寺迄三里、

六十一番、香苑寺、周敷郡香園寺村（中略）是より一宮まで八丁、

六十二番、一之宮、周敷郡新屋敷（中略）是より吉祥寺迄七丁、

六十三番、吉祥寺、新居郡氷見村（中略）是より里まへ神寺へ一里、

六十四番、里前神寺、新居郡（中略）是より三角寺へ十里、〇中略

六十五番、三角寺、宇麻郡（中略）是より讃岐國雲邊寺へ五里、〇中略

右二十六所、以上伊與國分なり、

〔國花萬葉記〕十四上讃岐　四國遍路八十八ヶ所之内、當國に有之廿三個寺之次第、〇中略

六十六番、雲邊寺、三好郡はくち村（中略）是より小松尾迄三里半、

六十七番、小松尾山、與州（與州二字恐衍）豐田郡辻村（中略）是ゟ琴引迄二里、

六十八番、琴引八幡宮、（中略）是より觀音寺へ二丁、〇中略

六十九番、觀音寺、（中略）是より本山寺迄一里、

七十番、本山寺、（中略）これより彌谷寺迄三里、

七十一番、彌谷寺、三野郡（中略）是ゟまんだら寺へ一里、〇中略

七十二番、万陁羅寺、よしはら村（中略）是より出釋迦寺迄三丁、〇中略

七十三番、出釋迦寺、（中略）是より甲山寺迄廿丁

七十四番、甲山寺、（中略）是より善通寺まで十丁

七十五番、善通寺、（中略）是より金倉寺迄廿丁〇中略

七十六番、金藏寺、金藏寺村（中略）是より道隆寺迄一里、〇中略

七十七番、道隆寺、（中略）是より道場寺迄一里半

七十八番、道場寺、〇中略

七十九番□（本書寺名缺、中略）是より國分寺へ一里半、

八十番、國分寺、阿野郡國分村（中略）是ゟ白峯寺迄五十丁、

八十一番、白峯寺、あの、郡青海村（中略）是より根來（來恐香）寺迄五十丁、

八十二番、根香寺、あの丶部(中略)是より一宮迄二里半、

八十三番、一之宮、香川郡一宮村、(中略)是ゟ屋島寺迄三里、〇中略

八十四番、屋島寺、山田郡屋島(中略)是より八栗寺迄一里、〇中略

八十五番、八栗寺、寒川郡むれ村、(中略)是より志度寺まで一里半、〇中略

八十六番、志度寺、寒川郡、(中略)是より長尾寺へ一里、〇中略

八十七番、長尾寺、寒川郡長尾村、(中略)是より大窪寺迄四里、〇中略

八十八番、大久保寺、寒川郡、(中略)是より阿州第十番切幡寺迄五里、〇中略

右是迄廿三ヶ所讃岐分也

江戸八十八箇所遍禮

〔東都歲事記一下三月〕十日　廿一日迄、四國八十八箇所の寫、弘法大師巡拜、〇中略大進夜話といへる草紙に、江戸八十八箇所は寶曆の頃、淺間山の上人本願によつて移す所也と云り、

六十六部納經

〔眞俗佛事編三苦行〕廻國納經六十六部納經人、今世甚盛也、是北條時政前生納經ノ事ヨリ起レリ、

〔倭訓栞中編二十八呂〕ろくぶ　六十六部を略して云、六十六ヶ國を廻りて、六十六部の法花經を、國々の靈地に藏る行脚僧をいへり、太平記北條時政が事にみゆ、今國分寺及一宮に藏む、僧俗ともに此を勸む、或妻子をひきゐるもあり、

〔嬉遊笑覽十一乞士〕仲間六部、下手談義に、年中江戸に住居しながら、日本回國とまが〳〵しき顏つき、是を仲間六部といふ、昔はかやうのものを鳩のかひといへり、

〔俚言集覽呂〕六十六部〇中略　是は一國に一部の大典、その國の靈場に納むる六十六ヶ國、古六十六部の經文を納めん願にてありし也、

〔鹽尻七〕六十六部回國札所付幷代笈　或問、近世民間に六十六部とて廻國す、如何なる寺社をか順禮するにやと、予曰、是近頃の野俗なれば、參詣の所もさだかならず、六十六箇所の寺社に、一部八卷法花經を奉納して、大乘妙典と云、其次第、寶永四年東武旭皐が板せし、一幅に見えたり、此類の印行多し

下野 瀧尾寺 千手
伊豆 三島 釋迦
三州 鳳來寺 藥師
伊賀 圓壽寺 不動
泉州 松尾寺 千手
丹波 穴太寺 十一面
伊豫 一宮 正觀音
勢州 一宮 シャカ
周防 新寺 正觀音
紀州 千栗 ミダ
日向 法花嶽 シャカ
出雲 大社 シャリ
但馬 養父 文殊
加州 白山 ミダ
信州 上諏訪 文殊
常州 鹿島社 シャカ
合六十四箇所也
二箇所不足如何、

上野 一宮 阿彌陀
甲州 七覺山 釋迦
尾州 一宮 大日
勢州 朝熊岳 福一万
阿州 上太子 正觀音
攝州 天王寺 正觀音
讃州 白峯 千手
備州 吉備津宮 ミダ
長門 一宮 正觀音
肥後 阿蘇宮 十一面
豐後 由原 ミダ
伯州 大仙寺 地藏
丹後 成相寺 千手
能登 石動山(ユスルギ) 虚空藏
越後 藏王權現 釋迦
下總 香取社 十一面

武州 六所明神 釋迦
駿州 富士 アミダ
遠州 一宮 藥師
志州 常安寺 正觀音
和州 長谷寺 十一面
阿波 大德寺 コクウザウ
淡路 千光寺 千手
備後 淨土寺 正觀音
筑前 宰府天神
薩摩 新田 ミダ
豐前 宇佐 ミダ
オキ 諾日 シャカ
越中 立山 ミダ
若州 一宮 シャカ
サド 小比叡山 正觀音
上州 一宮 十一面

相州 八幡 釋迦
遠州 國分寺 釋迦
近江 多賀社 アミダ
紀州 熊野本宮 ミダ
山城 賀茂社 正觀音
土佐 五臺山 コクウザウ
播州 書寫山 如意輪
アキ 嚴島 辨才天
筑後 高良玉垂 釋迦
大隅 八幡 ミダ
石見 八幡 ミダ
因州 一宮 釋迦
越前 平泉寺 シャカ
飛州 國分寺 シャカ
奥州 鹽竈 シャカ
アハ 清澄寺 虚空藏

右の內にても、又異なる處を、順禮するも有り、山城にて、八幡、淸水、大和にて、東大寺、興福寺、法隆寺にも納經す、尾州熱田、國府宮等、定めたるもあり、國々にて、其志の寺社に納め侍るとぞ、武藏以東の人殊に多し、秩父坂東一百番、八十八箇所より、西國三十三所、四國遍路四十八箇所ニ、六十六部

を一ツにして、回るもの多し、其中に、賣僧買僧の、もの貰ふために、あるくも侍る、古代の賓、熱田田島家にあり、念頭に作りしもの也、

〔鹽尻五十九〕六十六部

世有巡遊扶桑六十六州、而毎州納經於神社佛閣、以爲修行者、謂之六十六部、又曰回國行者也、跋涉山川、不辭嶮岨、綿歷年月、不憚苦勞、東往西還、絡繹不止、近歲最甚、不知其之權輿、不聞其之所出、支那天竺、曾無其事、三國經典、總無所見、只世傳、昔者源頼朝、平時政宿世、爲納經僧、依此善業、而生貴顯之身、蓋因之爲之者也、吁夫設爲轉輪王、唯是有爲之妄執、未免輪回、非可翼者、況栗散王乎、亦況人臣乎、若策勵身心、修西方業、則不運一步、不勞千里、畢此生死、直到淨刹、得無比樂、證無生忍、何幸如之乎、唯是無智道俗之所爲、而不聞正道之過也、過乎惑矣、實可愍傷、或曰、爾乃廢之乎、謂既納經於佛閣、豈小緣乎、但不爲世福、而爲佛道、乃可也、

〔太平記五〕時政參籠榎島事

昔鎌倉草創ノ始、北條四郎時政、榎島ニ參籠シテ、子孫ノ繁昌ヲ祈ケリ、三七日ニ當リケル夜、赤キ袴ニ柳裏ノ衣著タル女房ノ、端嚴美麗ナルガ忽然トシテ、時政ガ前ニ來テ告テ曰ク、汝ガ前生ハ箱根法師也、六十六部ノ法華經ヲ書寫シテ、六十六箇國ノ靈地ニ奉納シタリシ善根ニ依テ、再ビ此土ニ生ル事ヲ得タリ、去レバ子孫永ク日本ノ主ト成テ、榮花ニ可誇、但其擧動違所アラバ、七代ヲ不可過、吾所言不審アラバ、國々ニ納シ所ノ靈地ヲ見ヨト云捨テ歸給フ、〇中略其後辨才天ノ御示現ニ任テ、國々ノ靈地ヘ人ヲ遣シテ、法華經奉納ノ所ヲ見セケルニ、俗名ノ時政ヲ、法師ノ名ニ替テ、奉納筒ノ上ニ、大法師時政ト書タルコソ不思議ナレ、

〔甲陽軍鑑品第二十六〕信玄公御時代諸大將之事

一長尾鎌信輝虎公、十三の御年仰らるゝは、我父爲景に、はなれまいらせても、父の恩によつて一

國をたもつ者也、然れば一州を治る者、仕出の侍はさも有まじ、親に讓らるゝ者は、一切の苦を不レ知、故に善惡を知まじ、善惡を不レ知ば何事もあしかるべしとて、其一年中六十六部の聖とつれて、奧州、出羽、關東、其外所々を修行し給ふ、是れ輝虎公十三の御年也、

〔鹽尻五十九〕右曼荼羅講寺の炬羅師、筆して予に示され侍る、○中略六十六部の回國、三十三所の順禮世に多く、夫ならぬものもめぐりありきて活命し侍る、甚敷は盜賊の類、間々侍るとなん、此故に其止宿を禁ぜらるゝ所なんど聞ゆ、和州高取等のごとし

〔寺社法則下〕文化十一戌二月　內藤鑑之進

一書面、六十六部與唱候名目、奉行所ニハ無レ之候、諸國靈場等江參詣いたし候道心者之類ニ可レ有レ之、笈、所持之有無ニ拘リ候節ニも有レ之間敷、其身分高下も可レ有レ之事ニ而、施物貰請候處、物貰とも村方ニ而ハ可レ申哉ニ候得共、是以奉行所ニ而取扱候名目ニ無レ之候間、右體之もの御領分內へ參り、違變等出來之節ハ、其身分等、得與糺之上、御問合可レ有レ之筋と存候、

〔類聚名物考佛敎六〕七大寺詣　七大寺は、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺をいふ、是皆古跡にて、故由有る寺なれば、是をめぐり拜むを七大寺詣とて、人の同じくせし事なり、今の觀音靈場三十三所巡禮、六地藏參りの類ひなり、

〔太平記二〕天下怪異事

主上○後醍醐ヲ扶乘進テ、陽明門ヨリ成奉、○中略兼テ用意ヤシタリケン、源中納言具行、按察大納言公敏、六條少將忠顯、三條河原ニテ追付奉、此ヨリ御車ヲバ被レ止、怪ゲナル張輿ニ召替サセ進タレドモ、俄ノ事ニテ駕輿丁モ無リケレバ、大膳大夫重康、樂人豐原兼秋、隨身秦久武ナンドゾ、御輿ヲバ舁奉ケル、供奉諸卿皆衣冠ヲ解テ、折烏帽子ニ直垂ヲ著シ、七。大。寺。詣。スル京家青侍ナンドノ、女性ヲ具足シタル體ニ見セテ、御輿前後ニゾ供奉シタリケル、

七觀音詣

〔書言字考節用集十數量〕同都〇京七觀音クワンヲン革堂、河崎、吉田寺、清水寺、六波羅密寺、六角堂、蓮花王院、

〔雍州府志五寺院〕七觀音所謂、革堂、河崎、吉田寺、清水寺、六波羅密寺、六角堂是也、〇六角堂下、恐脫蓮花王院、

〔明月記〕元仁二年正月廿一日壬午、申後雨漸密、女房參七觀音、

〔蔭凉軒日錄〕寛正二年六月二日、御參詣于七觀音、蓋先御代之舊例也、三年正月廿三日、爲御代官詣七觀音也、速歸以伊勢七郞衞門白之、

〔續百一錄〕元文元年十月廿七日、七觀音、御局樣爲御代參、殿御參詣、御初尾十帖ニ包、アメフリ、御撫物從御所出ル、御初尾三百文ヅヽ、御局樣ゟ出ル、〆二貫百文ナリ、

七觀音者、革堂、　黑谷吉田寺　長閑寺　清水寺　六波羅密寺　六角堂、　清和院、七所ニテ御キトツ仕、御フダ出、

七藥師詣

〔攝壤集上寺院〕七佛藥師或說東寺醍醐亦高雄神護寺

第一太秦廣隆寺推古天皇御宇、聖德太子建立、　第二山門中堂延曆寺桓武天皇御宇、傳敎大師草創、　第三寶藏法雲寺聖武御宇、行基造立、　第四六道珍皇寺嵯峨天皇ノ御宇、小野篁草創、　第五八幡護國寺同御宇、弘法大師建立、　第六祇園元慶寺陽成御宇、圓如草創、　第七因幡堂平等寺一條院御宇、橘行平卿建立、釋尊一刀三禮御作、安置祇洹精舍云々、

〔日次紀事四臨時〕七所藥師詣

〔薩戒記〕應永卅二年八月四日庚午、今日內〇稱光御惱不令發御、諸人有喜色、予〇中山定親依番也、參院、今日內近臣七人、爲御惱御祈、參詣七佛藥師云々、堅固密儀也、東寺、權大納言實秀、法雲寺、寶藏、中御門宰相宗繼、因幡堂、四辻宰相中將季保、法界寺、日野左大辨宰相秀光、八幡護國寺、左中將雅豐朝臣、太秦廣隆寺藏人左少辨資親、延曆寺根本中堂侍從益長等云々、

〔二水記〕永正二年五月八日、今日藥師參詣七人也、　八月十二日、今朝有因幡堂參七人、

十二藥師詣

〔日次紀事四臨時〕十二所藥師詣

〔遠碧軒記四〕十二藥師　石藥師　芝藥師　昆陽藥師　福昌藥師　誓願寺　蛸藥師　威心院

雙林寺　因幡堂　布袋藥師　粉糖藥師釜座二條上ル町　北野德松院之内

〔日次紀事七月三〕二十四日、六處地藏詣、今日、洛外六處地藏詣、所謂賀茂深泥池ミドロイケ、或云御菩薩池ミゾロイケ、山科、伏見、鳥羽、桂、太秦是也、凡一日六處之行程十里餘也、六地藏、文德天皇仁壽二年、小野篁作地藏像六體、安於木幡法雲山大善寺、故稱此處曰六地藏村、其後保元二年、平清盛公、六所造堂分置石地藏、今日修供養、西光法師司此事云々、

〔資益王記〕文明十四年七月廿四日、參六地藏、所謂、西院、高山寺　壬生、八田、屋禰葺、星光寺平　清和院、正親町西洞院、讃州藏珠院

〔柳葊隨筆二〕六地藏　江戸砂子、慈濟庵空無上人勸化の助力を以て金銅立像八尺の地藏六軀を造立し、江戸六ケ所に安置す、元祿四年開眼供養を執行し、これをはじめの六地藏といふ、一番駒込瑞泰寺、浄土宗　二番千駄木專念寺、浄土宗　三番日暮里浄光寺、眞言宗　四番池端心行寺、浄土宗　五番東叡山慈濟庵天台宗　六番淺草寺境内正智院、六地藏緣由、瑞泰寺桂芳山　幢陀地藏と云、中根氏の女性腫抜本復せしことかや、專念寺一心山　寶珠地藏と云、浄光寺寶林山　寶印地藏、予そだてなき人、眼病の人祈念すべし、心行寺影向山　持地藏兩乳のいたみ、すべて乳房の願をかなへ給はんと也、慈濟庵上野大佛の側　除蓋地藏と云、安産守護也、正智院日光地藏と云、江戸六地藏建立略緣起、抑々予十二歳の頃古鄕を出、十六歳にして剃髮受戒す、其□□秋のころより重病をうけ、二十五歳の春の末に至て醫術も叶難く、死既に極れり云々、一心に地藏菩薩に誓願すらく、我もし菩薩の慈恩を蒙て、父母在生の内命を延ることを得ば、盡未來際に至まで、衆生の爲に菩薩の御利益を勸め、多く尊像を造立して、衆生に歸依せしめ、共に安樂を得せしめんと誓ふ、其夜不思儀の靈驗を得て、重病速に本復す云々、諸人を勸め、帝都の六地藏に同く、御當地の入口ごとに、一體づゝ、金銅一丈六尺の地藏菩薩を六所に都合六體造立して天下安全、武運長久、御城下繁榮を祝願し、兼て諸國往來の一切衆生へ、普く緣を結ばしめんと誓ふ、深川地藏坊正元、○中略　右六地藏の願主正元は、俗名吉三郎とて、八百屋お七と云ふものゝために出家し、此六軀を造立すといひつたふ、此說虛也、○中略　寶永年中造

立成就す、後の六地藏と云、金銅丈六の六軀也、

〔江戸砂子（三巣鴨）〕醫王山眞性寺　御室末〇中略地藏坊正元御師建立、唐銅六地藏の三番目也、謂所六軀ハ

一番　品川（眞言）品川寺　二番　四谷（淨土）大宗寺　三番　巣鴨（眞言）眞性寺

四番　山谷（禪宗）東福寺　五番　深川（淨土）靈巖寺　六番　深川（眞言）永代寺

六阿彌陀詣

〔俚言集覽（呂）〕六阿彌陀　江戸西北郊、一、元木西福寺、二、ぬまた延命寺、三、西ケ原無量寺、四、田畑與樂寺、五、下谷廣小路長福寺、六、龜井戸曾光寺、

〔江戸砂子（二下谷）〕六阿彌陀　五番目　寶玉山長福壽寺　東叡山末　上野麓〇中略光明木を以彫刻の靈像六軀、これを六阿彌陀と號、順禮する事なり、謂所六所ハ、

一番（禪宗）三縁山長福寺　足立郡本木　二番ヘ九丁

二番（眞言）甘露山延命院應味寺　足立郡下沼田　三番ヘ十五丁

三番（同）佛寶山西光院長福寺　豐島郡西ケ原　四番ヘ十丁

四番（同）寶珠山地藏院與樂寺　同郡田端　五番ヘ廿五丁

五番（天台）寶玉山常樂院長福壽寺　同郡東叡山麓　六番ヘ一リ半

六番（禪宗）西歸山無量壽院常光寺　葛飾郡龜戸

二十四輩詣

〔二十四輩順拜圖會（序）〕聖人の蹟を示し給ふ靈場、及び御弟子二十四輩の寺院を巡拜しては、祖師の廣恩のはしばかりをも報ひ奉らんと、遠き國はるけき界を越て、詣ふで廻るぞ、ありがたけれど、〇下略

〔二十四輩順拜圖會（後篇三常陸）〕嚴船山順入寺

二十四輩牒（釋定如御事也、是は御本廟第三世覺如上人大網御坊へ御下向の折から、高祖の御門弟二十四輩正流相承の人々を連署し給ひし記也、與ニ正慶元壬申年正月五日執事）

二十五箇所詣

四十八箇寺詣
二十一箇寺詣
百箇寺詣

千箇寺參納札

釋定知とあり、

○按ズルニ、二十四輩ハ、親鸞ノ高弟二十四人ノ遺跡ナリ、

〔嬉遊笑覽七遊行〕淨土宗は、法然上人ゆかりの所を二十五ヶ所、紀州誕生寺より始て順拜す、これを二十五箇所靈場と云、

〔雍州府志五寺院〕淨土宗四十八願之四十八箇寺詣、又日蓮宗百箇寺詣、同二十一箇寺詣、近世各宗門徒定之、

〔日次紀事四應時〕日蓮宗二十一箇寺詣、同二十一箇寺上人會合交爲之地、其頭人號會合本、

〔詞花和歌集四冬〕東山百寺をがみけるに、しぐれしければよめる、　左京大夫通雅

もろともに山めぐりするしぐれかなふるにかひなき身とはしらずや

〔麓の花下〕麹五吉が札

神社佛閣には千社參などゝて、そこの稻荷社、かしこの天神宮などいへるまで、うるさきばかり札はれるわざはもといづれの時か、帝の法皇の御位にならせ給ひて、卅三所の靈場を札うちめぐり給ひしより起れるといへり、近くはそのおんあとをつぎ奉りて、天愚孔平といひし人なせりそれに次では麹町てふ所の五吉といへるもの、このわざをもはらなし、いづれと定めもなくおのがまうづるまに〳〵札をはりしとなり、そのころ今のごとく印刻しける札にはあらず、書たるなり、

〔嬉遊笑覽七遊行〕千社參は明和七年撰の江戸名物鑑にもみえず安永このかたのことなるべし、神社のみにあらず、佛寺にも詣するに千社參といふはいかゞなり、麹町五吉とかいへるは、その始の頃の者にや、それが札は文字をば書たるにて、板に摺たるにはあらず、これらは其徒の中にて、廣く知られたるものとなむ、唯人に知らるゝを手からとす、いと益なき戲れなり、又落書してあ

巡禮雜載

るくものもあまた見ゆこれは神佛ある處のみならず、橋にまれ、家にまれ、石にも、木にも、墨ぐろに書ちらす、いとうるさし、千箇寺參、鶴海提亭が、種をろし其日に仕舞ふ京の千箇寺、

〔山槐記〕治承四年三月廿一日癸酉、自今日禮百塔、始法成寺、終于清水寺、自卯時及秉燭、

〔嬉遊笑覽七行遊〕長崎歳時記に、春の長閑なる時、大人或は小兒かたらひつれて、天神札、又は婦女老婆は大師札打廻る、村の天神社廿五箇所、因て廿五社札と云ふ、大師札は四十八箇所なり、

〔徒然草下〕人あまたともなひて、三塔順禮の事侍りしに、横川の常行堂のうち、龍華院と書けるふるき額あり、〇下略

〇按ズルニ、三塔ハ、比叡山ノ東塔、西塔、横川ヲ謂フナリ、

千度詣

〔今昔物語十六〕清水二千度詣男打入雙六語第卅七

今昔、京ニ有所ニ被仕青侍有ケリ、爲事ノ无カリケルニヤ、人ノ詣ケルヲ見テ、清水ヘ千度詣二度ナム參タリケル、其ノ後幾ク程ヲ不經ズシテ、主ノ許ニシテ、同樣也ケル侍ト、雙六ヲ打合ケリ、二千度詣ノ侍多ク負テ、可渡キ物ノ无カリケルヲ、□強ニ責ケレバ、思ヒ佗テ云ク、我レ露持タル物无シ、只今貯ヘタル物トテハ、清水ノ二千度詣タル事ナム有ルヲ、其レヲ渡タサムト云ヘバ、傍ニ見證スル者共、此レヲ聞テ、此レハ打量ル也ケリ、嗚呼ノ事也ト咲ケルヲ、此ノ勝タル□ノ□此レ糸吉キ事□二千度詣ヲ渡サバ、速ニ□此ノ□云ヘバ、勝侍ノ云ク、否ヤ此クテハ不□二□潔□御前ニシテ事ノ由ヲ申シテ、慥ニ己レ渡ス由ノ渡文ヲ□テ、金打テ渡セバ請取ヌト云ヘバ、負ケ侍、糸吉キ事也ト契テ、其ノ日ヨリ、精進ヲ始テ、三日ト云フ日、勝侍、負侍ニ、然バ去來參テムト云ヘバ、負侍、嗚呼ノ白物ニ合タリト思テ、共ニ參ヌ、勝侍ノ云フニ隨テ、渡由ノ文ヲ書テ、觀音ノ御前ニシテ、師ノ僧ヲ呼テ、金打テ、事ノ由ヲ申サセテ、某ガ二千度參タル事、慥ニ、某ニ雙六ニ打入レツト書テ與タリケレバ、勝侍請取テ、臥シ禮ムデ其後

幾程ヲ不經ズシテ、此ノ打入タル侍、不思懸ヌ事ニ係テ、被捕テ獄ニ被禁ニケリ、打取タル侍ハ、忽ニ便有ル妻ヲ儲テ、不思懸ヌ人ノ德ヲ蒙テ富貴ニ成テ官ニ任ジテ、樂クテゾ有ケル、三寶ハ目ニ不見給ヌ事ナレドモ、誠ノ心ヲ至シテ、請取タリケレバ、觀音ノ哀レト思シ食ケルナメリトゾ、聞ク人、此ノ請取タル侍ヲ讃テ、渡シタル侍ヲバ憾ミ謗ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔萬松院殿穴太記〕斯て年もかへり〇中略又煩せ給〇中略上池院の紹胤、御藥を參らせたり、御あし腫はれ出させ給ひ彌煩はせ給へば、御祈りの事有べしとて、正月八日には、比叡山根本の中堂の藥師如來の寶殿にて、諸侯の輩、千度の巡禮を致しけり、

月詣

〔沙石集二〕依藥師觀音利益命全事〇中略

尾張國龍山寺ハ、昔龍王ノ一夜ノ中ニ、造リ供養セル寺也、夜アケヽレバ、堂ハホリサシタリトテ、當時モ其跡見ヘ侍リ、馬頭觀音ニテ、靈佛ニテ御坐、年來月詣シテ、十八日毎ニ三十三卷ヨミテ奉リケル、カヽル因緣ヲ以テ、御タスケ有ケルニコソ、

〔古史傳七〕俗に、伊勢へ七度熊野へ三度愛宕樣へは月參りと云ふ諺のあるを、此國〇近江にては御多賀樣へは月參りと云由にて、伊勢大御神宮と、此御社に詣でぬ人なしと國人云り、

百日詣

〔袋草紙四〕清水寺觀音御歌〇中略

梅の木のかれたる枝にとりのゐてはなさけさけとなくぞわりなき

此ノハテノ歌ハ、マヅシキ女、清水寺ニ百日參リ、ナク〳〵祈念スル夢ニ、御帳ノ中ヨリ、小僧出來テ、云ケル歌ナリ、

〔太平記三〕主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上〇後醍醐笠置へ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル〇中略夜明ケレバ、當寺ノ衆徒成就房律師ヲ被召、若此邊ニ楠ト被云武士ヤ有ト御尋有ケレバ、近キ傍リニ、左樣ノ名字付タ

ル者アリトモ未ダ承リ及バズ候、河内國金剛山ノ西ニコソ、楠多門兵衞正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ、○中略其母若カリシ時、志貴ノ毗沙門ニ、百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子ニテ候トテ、稚名ヲ多門トハ申候也トゾ答申ケル、

千日詣

〔嬉遊笑覽十一〕千日詣の行人は、かならず鳥足が一枚歯の高あしだをはき、手の長き阿伽桶に樒をさして頭に戴き、胸に皃鉦をかけて打ならしありきしが、これも今は草鞋をはき、阿伽桶は手に持、あるひは持ぬも多かり、物戴きし古風今は絶果ぬ、むかし鳥足といひしものは、後の雁歯の如き二またにはあらず、諸國咄に、鳥足の高あしだとてある畫を見るに、げに鳥の足の如く、歯は前三つ後一つ繊にて作れり、

〔改正月令博物筌七月〕十日　諸方千日參　清水千日參、觀世音菩薩へ、今日參詣すれば、千日にあたる、或は四萬六千日にあたるとて、諸方へ參詣するなり、京清水、江戸淺草、大坂天王寺、その外、諸方觀世音、昨今參詣おびたゞし、河州野崎觀音、和州奈良二月堂、

〔日次紀事三七月〕初十日法會　清水寺千日詣俗傳、今日參詣當二平日之千度一、或謂當二四萬六千日一、

緣日

〔鹽尻六〕佛神緣日ノコト　佛神の緣日といふ事は、佛菩薩降誕日、示現日、或は其神の誕辰降現、昇仙飛來等の日と云ふ、月次祭日道書、幷月令廣義抔ニ見え侍る、是我俗にいふ緣日なり、

〔類聚名物考佛敎四〕緣日　神佛の緣日とて、人の拜詣する事は、上古はきかず、中比よりは、この事見えたり、唐土にも有なり、されども釋尊の如きはいと久しく見ゆ、清朝探事、佛神に緣日といふ事有や、答、諸府州縣毎年二月八日上丁の日、至聖大師の廟に奠儀あり、三月廿三日、天妣を祭る、五月十三日、關聖帝を祭る、正、六、九月、十八日、觀音の供養す、

〔淨土眞宗名目圖〕二十日秘佛唐戒禪師奉レ勅所レ造、出二虛堂錄七一、未レ考、邦俗言二諸佛菩薩緣日一者、蓋本二於此一、

〔雲錦隨筆四〕十王經に、十齋日に念ずべき聖衆を擧る中に、十八日には地。藏。を念じ、二十四日には觀。音。を念ぜよといへり、今世俗に二十四日を地藏の緣日とす、何れの代よりか誤れるや、準提觀音の十八臂は、九界を度するに折伏攝受の二門あるが故に、二九十八の數を顯せり、十八日を觀

音の緣日とすることは、是に本づく者ならんか、一說に、勝尾寺の觀音を、比丘妙觀彫刻せしに、其徒十八人、十八日を經て、始て成る、卽ち八月十八日なり、妙觀その日を以て化し去る、これより十八日を觀音の會日とすといふ、然れども地藏の二十四日は、いかなる謂といふを志らず、

〔櫻陰腐談　一〕緣日

客問曰、諸佛緣日未聞明說、汝以爲若何、　答曰、某自少壯詢諸博識耆宿、都無知緣日之說所自而出之人、世人漫臆度推鑿、致有妄說、不足云耳、相傳有二說、一謂、昔於日本造觀。音或藥。師等之殿堂、用初致遷宮之日、習來爲其緣日乎、一謂、緣日具名婆婆有緣之日、若爾用尊尊初現釋迦說經座之日、爲其緣日乎、久來但有此兩說、更無全取決之證、

〔類聚名物考　佛敎四〕彌。陀。感應日　十五日なり　月の十五日を彌陀の緣日とするは、卽ち彌陀感應日の事なり、十佛を十齋日に配て念ずるに、十五日は彌陀に當るなり、又三十佛を卅日に配り當る事あり、其時も十五日は彌陀なり、本朝文粹に、紀齊名の勸學會の序文に云、念極樂之尊、一夜山月正圓と見えしも、十五日の滿月をいふなり、また歸命本朝抄に云、拐けふは彌陀感應日なりといへる、かた〴〵徵とすべし、

〔類聚名物考　佛敎三〕七觀。音。　觀音菩の緣日、當時は十七日より廿三日に於て一七日が間を七觀音とす、むかしは十八日を緣日とせしにや、淸朝探事蘇生徂徠七郞問、朱佩章答、にも、正六九月十八日觀音を供養すと見えたり、また八日も緣日とせし事、撰口集抄に見えたり、

〔今昔物語　十四〕修行僧至越中國立山會少女語第七

今昔、越中ノ國ロロノ郡ニ立山ト云フ所有リ、○中略女ノ云ク、今日ハ十八日觀。音。ノ御緣日也、

〔後宇多院御幸記〕正和二年七月上旬之比、急速催仙蹕於上鄕、不日遣勅使於南山、其時院宣云、取意來月六日御進發、同八日御登山、一七箇日可有御參籠云々、○中略此度臨幸、高野山始而所々御幸、自

然皆其御緣日相當、先高野山金堂本尊者、藥師如來也、仍八日御登山、十六日天野明神之緣日也、其日既有御社參、十八日救世觀音之緣日也、其日礒長廟、天王寺兩所之御幸アリ、三事既相應、御悉地登唐捐乎、

〔相州兵亂記 中〕淺草ノ沙汰

大永二年九月ノ初メ、古河ノ御所ヘ御使アリ、御使者ハ、富永三郎左衞門尉トゾ聞ヘシ、其歸リニ富永武藏ノ淺草ヘ參詣シケルニ、其日觀音ノ緣日ニテ、十八日ノ事ナルニ、常ヨリ人群聚ス、殊更不思議ナル事アリ、辨天ノ堂ノ邊ヨリ錢涌出ルコト有リ、〇下略

〔鹽尻 四十〕一七月十日觀音を安置する寺院へ、千日參と稱して男女多參詣す、今は四万九千日に當るなんどいふにや、今江戶にては四万六千日といふ、其外六月廿四日、あたごの四万六千日などいふ、賢按、此類を佛菩薩の緣日の欲日といふ、何の經釋に出たる事にや、不審、例の浮屠氏の錢取歟、殊に洛東淸水寺、七月九日の夜より路もさりやらず群聚せり、凡經論の說にも不見、百年前の書にさへなき事也、

〔三養雜記 二〕四萬六千日

七月十日を觀世音の四萬六千日と稱して、淺草寺などへは、前日より參詣のもの群集なせり、もと月每に一日の功德日ありて、觀音欲日といへり、

正月朔日向百日　二月晦日向九十日　三月四日向百日　四月十八日向百日　五月十八日向四百日　六月十八日向四百日　七月十日向四萬六千日　八月廿四日向四千日　九月二十日向四千日　十月十九日向四百日　十一月七日向六千日　十二月十九日向四千日

江戶鹿子に見えたり、この中七月十日は四萬六千日に向ふといふによりて、此日にかぎりて、人人ことさらにまうづること、見えたり、むかしは淺草寺の境內にて、この日茶せんをあきなふもの多くいでたり、多くは田舍のもの、もとめてかへれること、かや寛政のころよりたえた

りといへり、また楊枝見せに、下袋とて附子の粉子の袋を赤紙にてつらね、軒などにさぐること
なりしが、これも文政のはじめにわづかに、一二軒ならでは見及ざりき、今は雷よけとて、玉蜀黍
を尊うることなども文化の末に初、今にさかんなり、何事もふるき手ぶりは、年を追てたえぬる
こと多かりける、

募緣

募緣ハ財貨ヲ募集シテ、堂塔ノ建立若シクハ修理、及ビ其他ノ費用ニ充ツルヲ謂フ、勸進ト
云ヒ、勸化ト云ヒ、奉加ト云フ、是ナリ、
德川幕府ノ時ニハ、御免勸化ト稱スル者アリ、幕府ヨリ其國數ヲ定メテ之ニ證券ヲ與ヘ、募
緣セシムルヲ謂フ、其國ノ多少ハ、寺格ノ尊卑及ビ舊例ニ依ル、然レドモコハ大抵無檀ノ寺
ニシテ、其檀越ヲ有スル者ハ、之ヲ檀越ニ募ルナリ、足利幕府ノ時ニハ、屢、朝鮮國ニ募緣シタ
ル事アリ、亦一時ノ變例ナリトス、
募緣ニハ勸進帳ヲ造リ、其來由ヲ列ネ、或ハ其功德ヲ敍シ、以テ廣ク募者ニ示ス、或ハ之ヲ其面
前ニ讀ムアリ、文覺ノ後白河法皇ノ御前ニ至リ、高雄山ノ勸進帳ヲ讀ミシガ如キハ、人ノ偏
ク知ル所ナリ、

名稱

〔類聚名物考佛教六〕募緣　募緣は勸化をするを云ふ、古へは知識ともいへり、募緣疏と云ふは、勸
化帳の事なり、正字通に云ふ、以財使人曰雁募、今將帥選鋒曰募士、又僧衆乞施檀越曰募緣、また是
を募化ともいへり、或は化疏ともいふなり、

奉加

〔類聚名物考佛教六〕奉加　ほうが　神佛へ寄附施入を、猶人々の力をかりて加へ奉ると云ふの

意なり、神事によりて射を奉射といひ、ぬさ奉るを奉幣といふが如し、むかしこの奉加を知識と云ひたり、是も知音の交友にちなみて、この勸進を奉加させし故の事なり、俗に云ふ類母しと云ふの類なり、知識の事は國史より以下諸書に多く出たり、奉加といふは古は聞えず、中古已後の事なり、

知識

〔類聚名物考佛教六〕知識　ちしき　知音知識の人にたよりて、勸化して、堂塔經など建立するをいふなり、今俗には無盡、又はたのもしといふ物なり、講を結ぶといふも亦同じ、艸山集に知識文有り、○中略今案、知識は知己といふに同じく、己をよく知る人をも、又は他の人をよく知るをも云ふべし、これを善知識といふなり、それより轉じて、その知識の人をすゝめて、勸化募緣するをもすなはち知識といふなり、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年五月戊寅、上野國碓氷郡人外從七位上石上部君諸弟、尾張國山田郡人外從七位下生江臣安人多、伊與國宇和郡人外大初位下凡直鎌足等各獻當國國分寺知識物、並授外從五位下、

〔寶物集五〕尾張國ニ俊綱聖人トテ、行業ヤンゴトナキ聖アリケリ、一國コレニ歸シ、殆ド他國ノ歸依ニ及、知識ヲス丶ムル事有テ、熱田ノ大宮司ガモトヘ行テ、奉加セヨト云ヒケルニ、聖人中間ニ押入テ奉加ヲセメケレバ、大宮司醉ノマギレニ腹ヲ立テ、水ヲ懸テ追出ツ、

制度
御免勸化

〔昆陽漫錄四〕勸化

先年豆州田方郡ノ願成就寺ヨリ出セル上言ノ書ニテミレバ、今ノ御免勸化ハ、永祿ノ頃ヨリ起リタリト見ユ、其文左ノ如シ、

爲大御堂上言之、豆州中、家一間以棟原升米一升宛遣之候段、從諸百姓前可請取之、聊此外之儀申懸由、至于御耳入者、可被處重科候、但家數八千九百五十五間半、本棟別之高辻也、然間鄉々江

以配符被仰出狀如件、

〔享保集成絲綸錄二十一〕寛保二戌年五月

諸國寺社修復爲助力勸化御免之上、寺社奉行連印之勸化狀持參、御料、私領、寺社領、在町致巡行候寺社之輩、只今迄村方により勸化停止之旨、地頭ゟ申渡有之候間、勸化難成由斷申所とも候段相聞候、私之勸化相留候儀は、領主心次第ニ候、從公儀御免之上、諸國巡行之事ニ候條、寺社奉行連印之勸化狀持參候寺社之輩へは、志次第可致勸化旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭ゟ、兼而可申聞置候、

右之通可被相觸候

〔寶曆集成絲綸錄十九〕寶曆九卯年六月

都て諸勸化の儀、相願候者は、家別劃ニ不殘寄進有之事の樣ニ存候も有之趣相聞候、既志の輩は可致寄進旨相觸、其上にて不差出分をバ、志無之者と相聞候、右之趣ニ候間、此度之觸は難相成候間、其段得と可被申聞候事、

〔天明集成絲綸錄二十九〕安永三午年三月

寺社奉行江

都て寺社修復等之ため勸化相願候節、勸物取集方之儀、向々より勸化所江相納、或者在町役人共より勸物取集、最寄勸化所江相渡候樣致度旨申立、願之通ニ被仰出も有之候得共、追々右之通、役人共より勸物取集勸化所江遣候樣成行候而は、際限も無之在町共迷惑可致候ニ付、別して御由緒有之、寺社又者譯立候願之筋は格別、其外之儀者、以來難相成間其旨相心得、右之趣、向々江可被申達置候、

三月

相對勸化

安永三午年十二月

寺社奉行江

總て寺社御修復等の願申立、各より被申聞候迄、右願通相濟候樣致度段、手寄を以、御所方江相願、禁裏御崇敬も有之候ニ付、願の通被仰付候樣被成度旨、御沙汰之趣、所司代より申來候類も有之候、一旦公儀江相願候儀を、猶又御所方江相願候儀は、有之間敷事ニ候、以來右體の儀有之候ハヾ、却て願の障にも相成筋ニ寄、急度被及沙汰候儀も可有之、寺社の輩江可被申渡候、

十二月

〔吹塵錄社寺三十二〕天王寺勸化ニ付取調諸宗寺數〇中略

寬政十二庚申年正月より、一箇月錢三文ツヽ、十二箇年之間、天王寺へ可差出旨、寺社奉行より、諸宗へ被申渡、

〔天明集成絲綸錄二十七〕明和三戌年八月

諸國寺社修復爲助成、相對勸化巡行之節、自今ハ寺社奉行一判之印狀持參、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候、公儀御免之勸化ニハ無之、相對次第之事ニ候間、御免勸化と不紛樣可致旨、御料ハ御代官、私領ハ領主地頭より、兼而可申聞置候、

八月

〔寺社司要錄〕差上申一札之事

一拙寺本堂井門庫裏等及大破、修復自力難叶ニ付、爲助成、去未四月朔日より、日數九十日之間、御府內相對勸化仕度旨奉願候處、願之通被遊御免候、依之御府內町中、日數漸廿九日相廻候內、大病ニ付相廻不申候段、其節御屆申上置候處、此度病氣全快仕候付、相殘候日數、當月十五日ゟ六十一日之間、勸化仕度旨奉願候處、願之通御免被成下、難有仕合奉存候、右日數之外、餘分相廻不

申勿論、相對次第仕、押而勸化仕間敷旨被仰渡、奉畏候、相濟候ハヾ、早速御屆可申上候、爲後證仍如件、

天明八戊申年八月十日　下總國葛飾郡駒羽根村 長命寺印

宛

右長命寺江被仰渡候趣、拙僧一同奉承知候、依之奥印仕差上申候、以上、

築地本願寺輪番

○中略

差上申一札之事

拙寺堂舍自坊再建幷新熊野社頭修補爲助成、五ヶ國巡行勸化相願候處、巡行勸化之儀ハ難相成、最寄ニ而二ヶ國、九十日宛、相對勸化御免被成下候旨、當三月廿七日、於內寄合被仰渡、今日一名之勸化狀、於御列席御渡被下、難有奉請取候、右日數之外、餘分相廻リ不申勿論、相對次第仕、押而勸化仕間敷段、尤巡行相仕廻次第、御屆申上、右勸化狀返上可仕旨被仰渡、奉畏候、爲後證仍如件、

寬政六甲寅年七月十八日　聖護院宮院家 住心院權僧正代 淸重院

寺社御奉行所

〔寺社法則下〕同○文化九年六月　御勘定奉行

一御書面、法善寺相對勸化願之義、御代官ニて聞屆ハ難成筋ニ候、

〔御觸〕諸國寺社修復爲助成、相對勸化巡行之節、○中略御免勸化と不紛樣可致旨、御料者御代官、私領ハ領主地頭ゟ、兼而可申聞置候、

右之通、明和三戌年相觸置候處、年曆相立、御免勸化ハ、其度々觸有之、相對勸化ハ、寺社奉行一判之印狀を持參候故、不審ニ存候而も相聞候得共、紛敷者ニ者無之候間其段可相心得候、右之通御料

募造寺佛殿

者御代官、私領者領主地頭より、不洩樣可觸知者也、

天保十四年卯六月

〔續日本紀 十五 聖武〕天平十五年十月乙酉、皇帝御紫香樂宮、爲奉造盧舍那佛像、始開寺地、於是行基法師、率弟子等勸誘衆庶、

〔元亨釋書 十四 檀興〕釋觀喜、和州人也、行住座臥唱彌勒號、好修古塔廢寺、自曳材運土、或乞路人加助、〇中略釋蓮入、居伯耆大山寺、勤精修、寬弘之間詣長谷寺、期七日誓曰、願大悲者、示我來世所居、第七夜、夢一比丘從殿帳出曰、自此西南九里有勝地、汝止彼修練、必生兜率內宮、覺感喜、卽至彼、東西山高、地形遼闊、而無堂宇、又絕人蹤、入偶憶夢事、居一樹下、其夜西方有光、入以謂魅怪也、夜夜如是、然無燒害、一朝往光所、有大巖、上置石板、敗葉埋積、苔蘚固封、入去蘚葉、立板拂拭石面、雕彌勒三尊像、其刻畫奇妙、殆非人工也、入作奇想、益固前夢、普告四來、勸建精舍、經年終于此、臨亡果有祥瑞、〇中略釋光勝、不言姓氏、爲沙彌時、自稱空也、〇中略天曆二年四月、上天台山、從座主延昌得度、五年京畿疫死、屍相枕也、憐之自刻十一面大悲像、新之、像成疫止、其長一丈、於洛東勸四衆、創一藍、號六波羅密寺、奉安像焉、

〔山槐記〕治承三年二月廿九日丁巳、去廿五日、禮塔之間、於靈山邊、遇南無阿聖人、聖人曰、依三井寺大衆訛、可建立關寺、先年爲山大衆被燒也仍人別米一升勸之、家中上下勸進給者、其後予勸之、今日八十人分且送之、

〔東大寺造立供養記〕夫東大寺之四大菩薩之結構、三國無雙之伽藍也、草創之後、送四百餘歲之間、安德天皇御宇治承四年十二月廿八日、爲前大相國平清盛入道、東大興福寺等、忽被燒失了、〇中略爰高野山之重源上人感夢想也、大佛告上人言、吾可去他方云々、夢覺大驚、疑念不少、忽出高野山、詣大佛殿、謁于理眞已講、示於夢想由、其後不旬日、有燒失也、〇中略重源上人賜□□□□宣、〇中略卽捧此勅書、

廻諸國、又在上人之勸進。帳。彼此共□□一輪車、普令見知諸人、以彼車六兩、令配六道□盧遮那佛、幷脇士四天像六鋪、以每車被副也、遣□□□□□□東勸。進。毛。人。域。而夷類等有隨分奉加、是一不思議也、爰奥州猛者藤原秀平眞人、殊抽感歎之志、專廻知識之方便也、依眞人忠節、盡奥州結緣、從爾以降、一天四海次第結緣也、

〔吾妻鏡六〕文治二年八月十六日庚寅、午剋西行上人退出、頻雖抑留、敢不拘之、二品以銀作猫、被充贈物、上人乍拜領之、於門外與放遊嬰兒云云、是請重源上人約諾、東大寺料、爲勸。進。沙。金。赴奥州、以此便路巡禮鶴岡云云、陸奥守秀衡入道者、上人一族也、

〔古簡雜纂午〕東大寺大勸。進。圓乘上人申、造國周防肥前所務事

右如被下圓乘上人去年十二月廿九日院宣者、知行兩國造營事、殊可致其沙汰云々者、守護地頭御家人等停止自由違亂、任先例可相從國務之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應三年三月廿五日　前武藏守平朝臣判
相模守平朝臣判

東大寺大勸進候事、奏聞候之處、修理事所被申無相違之由、官使令申之上者、不可有別子細、早如元可令存知給之由、天氣所也、仍執達如件、

正應三十二月廿五日　右大辨顯世

實淸上人御房

〔蔭凉軒日錄〕寬正三年二月九日、湯山阿彌陀堂御奉加、御太刀御馬被下也、請取奉懸御目也、　四年四月九日、大和國達磨寺勸進之事、某以狀可命于諸五山之由被仰出也、

〔本朝高僧傳六十五權輿〕豐前羅漢寺沙門昭覺傳建順

釋照覺、字圓龕、不言姓許、隨壽福寂庵昭公、參究禪觀、徧遊名區、曆應初、隨豐前大嵓屋、山陽半邊有大

石窟、縱横若干丈、可容千人、傍掛瀑川、高十餘丈、石屏東列、石橋前横、覺自圖十六羅漢像、奉于窟内、名者闍窟、結庵嵓下、榜以幻住、又距嵓窟一拘盧舍建智剛寺、移錫安居、延文四年春、雲樹三光國師之徒、建順字逆流、到庵見覺、初如舊識、追遊洞窟、偶然似有所追憶者、眷々不去、卸包入窟、晏座一年、後修幻住、改扁安心、乍住枯淡、村民供給、一日語覺曰、此窟靈境、實是羅漢棲眞之處、錮石肖像、安於窟中者、永世之福田也乎、覺擊節曰、吾以力不足、蹉跎歲月、子運神力而成吾素願焉、相俱合志、四方幹緣、遐邇響應、大小盤陀、不駄而來、不載而集、順心匠工、覺亦加手、不鳴鎚鑿、鋑鏤堅頑、欲裝彩飾、至心掘地、丹青黄白、隨意涌出、願輪竣功、周歲而成、石像長各可三尺、〇中略七百餘軀、〇中略五年十月望日、慶讃招一千餘員僧、請聖福月堂和尚、爲開導師、〇中略

京兆本覺寺沙門玉翁傳

釋玉翁、上杉氏、越後州人、幼觀無常、捨箕弓業、披忍辱衣、入州之禪刹、問曹洞宗要、年過弱冠、去習經敎、遊東關之談林、受般舟三昧法、以文明末、泝洛唱導、會歷應仁兵燹、洛寺焦土矣、翁慨厄運、力圖興營、寓瓦礫場、談念佛門、四民向化、財施自來、秉心塞淵、始願大亨、所謂洛東眞如堂、六波羅密寺、城西嵯峨釋迦堂、江州石山觀音堂、坐成鼎復、觀輪奐美、繇此盛名翔于一時、〇中略大永元年正月染病、〇中略春秋六十二

〔續近世畸人傳四〕僧卍山附僧光慶、僧月舟、

卍山和尚は、備後の人也、〇中略其後東大寺の公慶上人、檗宗の鐵眼和尚など親しく交給ひしが、寛文四年の秋、三師同じく會して物語の時、師云、大願を發さゞるは、菩薩の魔事也と大般若にみゆ、しかれば各位大願を發し給んや否と、鐵眼和尚曰、誠然り、吾も亦願心あり、一切經を彫刻して、檗山に納め、永く世に廣めんと思ふと、公慶上人曰、我は南都大佛殿を造立せんことをおもふと、師曰く、我もとより大願あり、宗門の傳法の要、總て一師の印證によるなり、然るに近世宗風頽れて、

法弟を以て嗣とすること祖意にあらす、誓て古に復せんと思へりと、二師是をきゝ、拍掌し、吾等が願心は大なれども、水至れば渠となるごとく猶易し、師の願は倒に喩峨をのぼるがごとく、難しとも難しと、禮拜して去る、

〔憲敎類典寺社四ノ十四上〕享保七壬寅年

諸寺院江被仰出候掟書中略

一堂社建立修覆之爲に、千部幷に談議興行之節、勸化いたし候に付、參詣のものに興行之旨趣申聞候儀は尤に候、善事修行之法席にて勸化之札を出し、或は供養と號して袋を配り、燈明料を取集候次第、見苦敷致し方及聞候ニ付、自今は施主之志に任せ、邵劳なる勸方相止、禪門之俗人を座へ出し候樣成義仕間敷事、中略

享保七壬寅年

〔寺社司要錄〕差上申一札之事

拙寺本堂修復爲助成、去ル午年ゟ卯年迄拾ヶ年之間、四月十九日ゟ、日數十日千部、三日供養、都合十三日之間執行仕度旨、天明五巳年十一月奉願候處、同月廿七日御內寄合於御列席、願之通被成下御免、難有仕合奉存候、依之千部幷供養中、本堂左右江貳間ニ五間之差懸貳ヶ所、中略中門之內へ九尺ニ三間之勸化場壹ヶ所、中略假作事仕度段、是亦奉願候處、願之通被成下御免、難有仕合奉存候、尤人多ニも可有之候間、喧嘩口論無之樣相愼、火之元入念可申旨被仰渡、奉畏候、執行相濟候ハヽ、假小屋取拂、早速御屆可申上候、爲後證仍如件、

深川　淨心寺

寬政元酉年四月

宛

〔隨心院文書坤〕弘法大師、來年七百年忌、爲勸進、東寺寶菩提院、至東國下向之條、宜被存知之由、所被

仰下也、仍執達如件、

對馬守 判
散位 判

享祿五年四月四日

諸門徒中

募刊經費

〔近世畸人傳 二〕僧鐵眼

僧鐵眼、諱光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻もありしが、其宗徒不德无才の人も、寺格により上位に居ることを甘心せず、黄檗山にのぼり、木庵禪師に從ふ、其妻なる人尋登しかども、對面せざるをはかりて、黄檗門前に旅宿して、師の出るを窺ふに、或日果して出たるを、しひていざなひければ、止事をえず、伴ひて故國へ歸り、其鄕まで入しが、ぬけて上途し、又黄檗に至る、法を嗣し後、攝津國難波村瑞然寺を建立せり、世人今猶鐵眼をもて其寺を稱す、一切經の藏板を思ひたちて勸進せしに、其料金集れるところ、天下大に飢しかば、師憐みて件の金を不殘施し、又如前勸進せるに、數年ならず又集りたるが、再び五穀不熟にて餓死多ければ、此たびも此金を施行に盡せり、されども德の至りにや、第三回の勸進にて、藏經の印刻成就して、其經を須つ所の代金を、本寺より已下一宗の寺々に配ること今に於て同じ、同宗に綿袋圓といふ藥をうる、も同じ、勸學寮より一宗に金を須つ、此師佛學深く說法能辨にて、俗間を化度すること多けれども、生涯建立門にかゝり、自の腕力十分ならずといひて、吾法嗣をたてず、法弟寶洲和尙に寺を附屬す、是又化のかたき所なり、寶洲も佛學に長じて德行ありとぞ、

勸進能

〔雍州府志 八古蹟〕芝居 〇中略 凡稱勸進能者、中古以來、沙門堂塔建立時構芝居、必倩觀世大夫而催猿樂、其始北山鞍馬寺有僧號靑松院法師善成、自慈照院義政公至普廣院、〇普廣院恐光源院誤 義輝公、世壽保一百餘歲、斯僧爲再興鞍馬寺、請觀世大夫而於只州河原催之、是勸進能之始也、勸進勸人使赴善之

謂也、中世以來爲佛神供給請米錢、是亦謂勸進、如今專爲乞取諸物之義也、

勸進平家

〔看聞日記〕嘉吉三年五月七日、淨蓮華院修理勸進猿樂、今日於土御門河原觀世仕云々、此間平家勸進、於或小庵宗一撿挍語云、猿樂六番、万人鼓操之由、見物者語

○按ズルニ、勸進能ノ事ハ、樂舞部能樂篇ニ詳ナリ、

〔康富記〕文安元年四月七日丙戌、詣勸修寺右兵衞權佐亭、只今誓願寺之勸進平家爲聞可罷出、可同道之由被命之間、伴參之、左中辨同被出之、皆歩行也、予奉連歩、誓願寺之奥、心阿彌陀佛堂在之、珎一撿挍、重一撿挍、自今月三日始之而重一聲損之間、今日、木一語之、

勸進相撲

〔古今相撲大全下本〕勸進相撲開基

勸進相撲の開基を尋るに、山城國愛宕郡田中村千榮山光福寺世俗云千榮寺開山より四代目宗個和尚といへる住僧、當山の鎮守八幡宮再建に付、人皇百十一代後光明院御宇、寛永廿一年申十一月二十月に正保元年と改元に御願ひ申上られ、御赦免に付、翌正保二酉年六月、下鴨會式今云糺森の內、十日が間興行ありし、是勸進相撲の始めなり、○中略元祿十三辰年、又光福寺八幡宮大破に付、五代目の住僧正慶和尚、古例を引、勸進すまふ御願申上られ、御免の上、此度は新田村赤宮稻荷大明神勸請の所の邊にて、晴天七日が間興行有し、○中略其後人皇百十五代中御門院御宇、正德五未年十月に、又寺內破損に付、光福寺六代目の住僧順榮和尚、先年の例を以御願ひ申上られ、御免ありて、翌正德六申年に、眞葛原において、晴天十日が間有、

〔嬉遊笑覽四武事〕勸進とて、佛寺などの建立修覆の爲に興行○相撲するのみにあらず、そのかみは寄ヨリを勸むるをもて勸進といふなり、大全などには、彼勸化の爲にするをのみ勸進と心得たるにや、それ故千榮寺鎮守八幡宮再建の時を、勸進相撲のはじめといへるなるべし、

〔義演准后日記〕慶長十年七月廿三日、於當鄕○山城醍醐勸進相撲、今日初了、鄕民張行、

富突勸化

〔相撲行事家傳〕永代寺門前仲町書上

一御府內相撲起立は、寬永年中、宮地寺地爲二造營一御屋敷樣方より力士相賴寄相撲致來候處、其後勸進相撲年寄行司共より、度々御賴申上候處、御聞濟無レ之、貞享元子年中、寺社御奉行本多淡路守樣へ奉二願上一候處、願之通勸進寄相撲御免被二仰付一候に付、深川八幡境內にて始て興行仕、夫より永御免にて相撲年寄ども申合、年々四季に所々にて勸進相撲興行仕候、

〇按ズルニ、勸進相撲ノ事ハ、武技部相撲篇ニ詳ナリ、

〔續正寶事錄〕享保十五年四月廿一日、町年寄ゟ年番名主へ、

仁和寺御門迹御屋形向御修復爲二助力一御當地於二護國寺一、三ヶ年之間、正五九月、毘沙門天富突之儀、御願之處相濟、來月廿三日ゟ始候之間、町中右之趣可二相心得一候、此旨各方ゟ、町々不レ殘樣可レ被二申達一候、以上、

戌四月

〔正享問答〕流行三笠付と言て、博奕同然の事有て、天下一同に堅き御停止なれど、寺より建立の爲とて願出れば、佛法の事は格別とにや、ゆるして富と言て、三笠の同じき事を成さしむる事も有、是皆民に利心をすゝむる也、

〔寺社奉行舊記〕富突勸化之儀ニ付御書取之趣、評議仕申上候書付、

書面、評議仕候通可二取計一旨被レ仰レ聞、承知仕候、　松平右近將監

巳(〇文政四年)三月廿四日　寺社奉行

宮門跡方を始、御由緖有レ之寺社是迄御手當筋之儀、品々願出候向も不レ少、其儘被二差置一候而は、往々公儀御厄介筋ニも可二相成一事ニ付、何と歟御主法も附不レ申候而は相成間鋪、富突勸化願等之儀、是迄品々沿革有レ之候得ば、いづれ後弊少樣規矩を立、此上富突勸化願等、是迄より手廣に被二差免一方

之程合ヶ所之多少、年限之長短等、如何程之議定ニ而可然哉、評議を盡し、了簡之趣可申上旨、御書取を以被仰聞候、

此儀取調候處、富突勸化之儀ニ付而は、御趣意も有之、追々改革被仰出候儀ニ候得共、宮門跡方を始、御由緒有之寺社等困窮之餘、不得止事、公儀御厄介筋之儀申出候樣成行、際限も無之儀ニ付、富突等是迄ゟ手廣ニ被差免候ハヽ、自御厄介筋も相減可申、左候迚、以前之通相成候而は、又又後弊を生し可申、御書取之趣御尤至極に奉存候間、得と評議仕候趣左之通ニ御座候、

一宮門跡方、幷大寺大社之分、

富突一之富、　兩迄、

一二十二社、諸國一宮幷御由緒厚き寺社之分、

富突、一之富、五拾兩迄、

一御由緒薄き寺社之分、

富突、一之富、三拾兩迄、○中略

右評議仕候趣、書面之通御座候、御渡被成候御書取一通返上仕候、

十二月

○按ズルニ、社寺富突ノ事ハ、法律部下編下博奕篇ニ詳ナリ、

〔蔭凉軒日錄〕長祿二年五月六日、等持院竺雲和尚、鹿苑院瑞溪和尚、以狀防州龍崗和尚、建仁寺造營高麗一万貫之內、幾千餘貫文寺納之由、自寺家被白也、　八月十二日、建仁寺高麗奉加之事、自寺家大衆以訴狀白之、　十四日、伊勢下總守、飯尾左衞門佐爲兩使、召建仁瑞岩愚谷奉計嵩西堂都聞維那柏首座、被決高麗惠光怠慢之罪也、　十六日、寂路庵惠光、爲不出建仁寺修造高麗奉加錢、被罪科、被召置于聖護院、以家財被預置于當院也、飯尾左衞門大夫奉之、是故命于寺管主事納所主管三員、

勸進帳

使請取出之、　十七日、前日寂路庵家財、今日一々可有點撿之由、飯尾左衛門大夫、以使者先報之、〇中略寂路庵罪科嚴重之旨建仁寺評定衆、爲禮謝被參之由披露之、　九月十五日、建仁山門、以寂路庵贓物、可管山門之由披露之、

〔翰林胡蘆集〕遣朝鮮國書

弊邑修好貴國、比年殊甚、惟懷惠之所致也、甲午〇文明六年歲、我使者歸國、仍剖象牙符十枚、以爲往來之信、賜莫大焉、今後有聘問、此符第一以下、如次以授使者、宜免嫌疑、抑我筑前州有寺、曰普門、主寺事者告曰、頃年、堂宇傾廢、風雨震凌、苟非求財於貴國、不知計將安出、故差釋氏光信首座、授以第一符、遂諭其意、且又欲求大藏經、安置寺內、以爲一方殖福之地、庶幾分法寶、以利邊民、施貨以興梵剎、則貴國之化、無所不至也、或苟々々、不腆土宜、具乎別幅、采納惟幸、不宣、

〔續善隣國寶記〕日本國大內防長豐筑肆州太守多々良義興、奉書朝鮮國禮曹參判足下、竊聞、殿下、開國以來、治成制定、故聞風瞻望、以通往來者、無虛歲也、今遣通信使太白西堂正鱗首座等、謹啓僕治內豐之前州崇聖禪寺、國初禪窟、草創稔久、而頽敗日隨、雖有修補之志、綿力不單、故求舊復之成功於貴國、賑濟吾邦者、莫如銅錢綿布等、無悋壁之意、再起正法於搏桑之西枝、是亦貴國之盛化、遠被遐邦之壹端也、上祝聖壽万歲、次祈社稷千秋、仰荷鴻庥、謹獻不腆之土産、具備別幅、遞徹類乞昭亮、餘冀循時珍嗇、不宣、

明應陸年拾壹月參日

大內多々良義興

〔源平盛衰記十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

此ニ文覺、〇中略或時、院御所〇後白河法性寺殿ニ參テ、御奉加之由言上ス、御遊ノ折節ナルニ依テ、奏者此由ヲ申入レズ、文覺終日相待ケレ共、如何ニト云事モナカリケレバ、御前ノ無骨也トハ爭知ベキナレバ、聞召入ザルニコソト心得テ、天性不當ノ物狂也ケレバ、是非ノ案內ニモ及バズ、常ノ御

所ノ御坪ノ方ヘ進參リテ、珍シカラヌ管絃哉、機嫌モナキ御遊哉、我貧道無緣ノ身タリトイヘ共、高雄山ノ神護寺ヲ修造建立シテ、佛法ヲ住持シ、王法ヲ祈誓シ、衆生ヲ利益セント云大願アリ、況大慈大悲ノ君、十善万乘ノ主トシテ、ナドカ輙ク御奉加聞召入ラレズ、口惜キ御事ニコソ、大願之意趣御聽聞有ベキトテ、勸進帳ヲサツトヒロゲ、調子モ知ズ、大音聲ヲ放上テ讀之、

〔太子傳玉林抄七〕夢窻國師、湯ノ山ノ阿彌陀堂トテ律院在之、彼所ニ勸進帳ヲ作テ、上ハ一貫、中ハ五百、下隨意云々、其勸進帳ノ奥ニ、二首ノ歌アリ、

堂フリテ雨ノモリヤトナリニケリ佛ノアダヲイザヤフセガン

彌陀佛ノ淨土ヘ入トスヽムレバ下品ナリトモ又タリヌベシ

此勸進帳ヲ持シテ、サガノ方、夢窻ノ門家ヲスヽムレバ、坐具ヲノベテ拜シ、巨多ノ奉加アリト云々、

〔康富記〕文安五年八月廿三日丁丑、早朝詣世尊寺、相公(行豐)痢病所勞云々、子息伊忠朝臣面謁、先度被誂勸進帳草出來候間持參、付進之、如法々々悅被祝謝候、彼卿可有清書云々、

草案見左

彼勸進之本主俗男也、仍沙門とも不得書、又居士とも不得書、然間弟子と書也、俗も諷誦などには弟子と書故也、

勸進弟子景房敬白

十方檀那を勸め、二世懇願を成し、佛法を崇め、神託に任せて、天盤戸を莊嚴し、多寶塔を建立せんと請狀、

右天上天下に獨尊として、因圓果滿するを佛と號し、一陰一陽不測して、千變万化なるを神と稱す、○中略爰弟子文安丙寅の歲春下旬の比、但馬國城崎郡より參詣の時、歷覽せしむるに、宇治には、

奉加帳

元雁塔ありて、礎のみを殘し、山田には今も石塔ありて、形の如く也、凡都鄙の間、多の神社毎に塔ある例を存す、仍岩戸の奇觀をまさん爲、此に塔婆を建立奉らんと、一念發起し、大願を思企つ、爾來造次にも心に懸て、寤ても寐ても思ふて眠たり、○中略然則奉加の人、隨喜の倫、喜見の志よりも貴く、阿育の功にも勝れぬべし、現には神靈の利生を蒙り、當には實土の誕生を得ん、重乞皇居仙院春秋万年にして、柳營槐門本枝百世ならむ、願くは此功德、先兩宮を貢りたてまつり、普く万國に及ぼさむ、仍勸進所唱如件、敬白、

文安五年八月　日　　勸進弟子景房敬白

〔薩戒記〕應永卅二年十一月十六日辛亥、或人談云、相國寺奉加帳、日野入道一位儀同三司ト書テ加判、同新一位入道又書從一位加判、此事皆不可然歟、又廣橋入道一位、只書名常家許、予案此儀、皆以不甘心、各書沙彌可加判歟、如何、

〔親長卿記〕文明十年八月三日、泉涌寺奉加帳被下之、禁裏御奉加物可書進之由被仰下、予書之、

禁裏御奉加　如此書之進上了、

〔武邊大秘錄八〕奉加帳書樣事

天文十八年卯月上幹

大塔造營奉加覺　　沙門阿純敬白

一金子何兩　伊勢備中守貞辰判

一銀子何枚　七郞次郞貞之判

一料足何疋　佐々木沙彌徹齋判

一納米何石　たれがし內

一絹何疋　けいあゐん

一綿何把　　たれがし内つぼね

一名附ハ、名字、官實名ニ判形也、但願主より付ニハ不ㇾ及二判形一殿書ニ可ㇾ付也、

一總領庶子變せて付る時ハ、庶子ハ名字を除き付事古法也と云々、

一女中ハ誰某と肩書をして、下ニ内と可ㇾ書、判形ハ無ㇾ之也、尤かな書也、

一高家國主家之百姓細工人等ハ必可二混亂一也、雖ㇾ爲二又若黨士分、出家、山伏、醫陰、社家等一ハ、可ㇾ爲二一帳一也、但互之可ㇾ依ㇾ位也

一願主ハ、差出日之下ニ可ㇾ有二判形一也、管領も必御判形有之也、

〔寺社法則〕下寛政十二申閏四月

一書面、無檀同樣ノ貧地ニ而、本尊觀音堂等修復爲二助成一、千人講取立之儀、寛保明和之度、御觸之趣も有ㇾ之、紛敷筋ニ付、御聞届無ㇾ之方と存候、

開帳

開帳トハ、常ニ帳中ニ秘スル所ノ佛像ヲ露シテ、衆人ヲシテ廣ク之ヲ拜セシムルヲ謂フナリ、開帳ニハ居開帳、出開帳ノ二種アリ、居開帳トハ、其寺ニテ行フヲ謂ヒ、出開帳トハ、他所ニ出デヽ行フヲ謂フ、而シテ、出開帳ニハ、一定ノ場所ニ於テ行フアリ、一所ニ止ラズ巡行シテ開帳スルアリ、又御成跡開帳ト稱スルアリ、將軍參詣ノ爲ニ開帳シタル後、衆人ヲシテ拜セシムルヲ謂フ、又奥開帳、表開帳等ノ別アリ、開帳ノ年期ハ、大抵三十三年ニシテ、一タビ行フヲ以テ普通ト爲シヽガ如シ、而シテ開帳間ノ日數ハ、徳川幕府ノ時ハ、三十日ヲ以テ普通トシ、或ハ五十日、六十日ニ渉ルモノアリキ、要スルニ開帳ハ衆人結緣ノ爲ニスルモノナレド

名稱

モ、徳川幕府ノ時ニ於テハ、多クハ堂塔修理ノ用途ヲ得ルヲ以テ、其目的ト爲シタリシガ如シ、

〔類聚名物考 佛敎四〕開帳　思ふに、開帳、開扉などいふ事、今の世のさまにはあらねども、これに似たる事は有しなり、それもよりておこれる所とはいふべし、明月記、文暦二年閏六月十九日、禪居數輩來車、謂近日可開三尊像、近日京中通俗騷動禮拜云々、

〔俚言集覽 加〕開帳　東里新談、櫻陰腐談に、開帳は中國には無き由書れしと覺ゆ、大なる誤なり、開帳をば啓龕と云ふ、睽車志にあり、閉帳をば閉寺と云、然黎餘笔にあり、或は齋場と云、或は大會と云、皆開帳なり、或七日、或十日、諸書に載る所なり、唐の德宗貞元六年二月、詔葬佛骨於岐陽、有佛指骨寸餘、葬於無憂寺、或奏出之以示、帝乃出置於禁中精舍、又送京師佛寺、傾都瞻施、財物累巨萬、憲宗元和十三年庚戌、僧惟應等、赴鳳翔法門寺、迎佛骨、命中使杜英琦監焉、先是功德使奏、鳳翔法門寺有護國眞身塔內釋迦牟尼佛指骨一節、其本傳、爲當三十年一開、開則歲豐人安、至來年合發、詔許、及至命中使領禁兵與佛徒迎護光順、以納之、留禁中二日、乃送京城諸寺、懿宗咸通十四年、又有此事、已上見冊府元龜、康駢劇談錄、咸通十四年迎佛骨時、僧徒が愚人をたぶらかさんが爲に、大なる雲母片を粉にし、風に乘じて空にひらめかし、佛の光を放つと云て呼のゝしりしとかや、咸通の開帳は、中華無雙の大さわぎと、唐國史補にも沙汰ありと記す、是に因て見れば、開帳は唐よりの故事と見ゆ三十年一開、則歲豐人安、此全文又佛祖統紀四十二卷に見ゆ、光順當作禮敬、

〔嬉遊笑覽 七佛會〕色音論、むさしの江戸のくわんおんは、三十三年すぎて後、御戸を開かせ給ひけり、享保四年日記、正月晦日、淺草觀音開帳、三十三年罷成候、依て開帳の儀、淺草寺より相願〇中略狂歌咄に、去る辛亥七〇寛文十一年の彌生のころより百日のほどくらまの毘沙門開帳とて、京ゐなかよりまうでつどふ、〇中略西鶴大かゞみに、天和三年四月、河内國藤井寺の開帳、〇中略二水記、永正十四年四

月十一日、法輪院虛空藏開帳之間爲參詣とあり、開帳といふ名も古き事なり、

〔梅窻筆記下〕開帳の名目モフルク聞エタリ、二水記、永正十八年二月八日、早旦詣木屋藥師堂、烏丸從去月開帳也、聖德太子御作云々、古物御面貌不慥、八百年許無開帳云々トアリ、

〔玉勝間十二〕開帳といふわざ

同記○康富記に、文安元年十月二日、梅尾春日大明神御影、御帳被開之、南都大乘院被所望申、被開之、此次所望之族、上下道俗男女、拜見無子細之由、兼有其聞之間、奉仲清大外史幷藏氷寺、今日參之、令拜見了、其儀、有開帳、寺家之衆有講論之儀式、其後南都衆有法樂之後、大乘院殿有御拜見、御退出之後、諸人群集、頗猥籍之體也、梅尾本堂ヨリ、遙東倚テ、有檜皮葺堂一宇、南面春日御影、西向ニ奉懸之繪像、住吉御影彼是兩鋪也、殊勝云々と見えたり、今の世の開帳といふことのさま也、目錄に、梅尾開帳事とあるは、後に書たるものなるべし、

〔寺社司要錄〕差上申一札之事

一拙寺境內阿彌陀堂及大破、修復爲助成、本尊阿彌陀如來、當月廿八日ゟ來十月十三日迄、日數十五日之間、葛西領長島村正圓寺におゐて、開扉仕度段、奉願候處、今日御內寄合於御列席、御免被成下、難有仕合奉存候、依而開扉中紛敷義不仕、尤人多にも可有之候間、喧嘩口論無之樣相愼、火之元入念、寶物不差出、提灯表江目立不申樣仕、開帳ニ不紛樣可仕旨被仰渡、奉畏候、勿論開扉相濟次第、早速御屆可申上候、爲後證仍如件、

寬政元酉年九月十八日　武州豐島郡西ケ原村　無量寺印

宛

前書被仰渡候趣、拙僧一同承知仕候、依而奥書印形差上申候、以上、

愛宕　圓福寺印

ながませ

制度

〔俚言集覽 加〕開帳○中略今の俗、京都にては開帳といはず、おがませといへるよし、辻々などに、何々の佛おがませと書てありしとある人いへり、

〔武邊大秘錄 六〕開帳幷爲拜萬日等之事

一諸寺社開帳致し候節、所々江相建候高札ニ開帳と書候儀ハ、京都御奉行所よりの御添證文を頂戴仕、於關東寺社奉行所之御濟狀頂戴いたし候分也、

一京都御役所計願相濟、寺社奉行衆江不相屆分ハ、開帳と稱し候事不相成、只爲拜と可書事、

朱書右諸寺社開帳幷爲拜萬日等之節、所々江高札、大和大路建仁寺門前、博多町大工職鱗形屋喜平治請負ニて建之、○下略

〔享保集成絲綸錄 二十一〕元祿七戌年十月

一前々も相觸候通、町中表店ニて念佛講、題目講と名付、鐘太鼓をたゝき、念佛題目を唱、大勢人集候儀停止候間、自今以後も、彌可爲停止事、

一町中ニて表店を借り、諸寺諸社之開帳、幷靈寶抔と名付、勸進仕候儀堅可爲停止、若不叶儀有之候ハヾ、寺社奉行衆へ相斷、寺社奉行衆赦し被申候ハヾ、其段家主能々致吟味、無紛事ニ候ハヾ、勸進致候本人を召連、兩番所へ訴、差圖次第可仕候事、

右之趣、堅可相守、若相背者於有之は、本人ハ不及申、家主迄、急度曲事可申付者也、

十月

正德三巳年閏五月

一近き頃開帳場ニて、大挑燈、夜中數多立置候、火之元等も不宜、其上前方は無之儀ニて、近年次第ニ增候樣ニ相見候間、開帳之節、相止候樣ニ、寺社方支配之寺院へ可被申渡候、以上、

閏五月

〔天明集成絲綸錄二十八〕明和五子年六月

大目付江

諸寺社、神事佛事開帳等、其外平生共葵御紋附候品、寄附之儀、菩提所ハ格別、其外江ハ、向後可レ爲二無用一候、

六月

〔寺社法則下〕寛政元酉十月廿日　御留守居衆江　松平紀伊守

一總而開帳之神佛、於二大奥一御物覽、其外御內へ差出候節之御取計方、致二承知一度候、依レ之及二御懸合一候、

十月

答　總而開帳之神佛、於二大奥一御物覽、其外御內ニ差出候節之取計方、〇中略

一總而開帳神佛等、大奥ニ而御物覽有レ之節、寺社奉行へモ申渡候間、申談候樣御老中方ゟ被二仰渡一候義も御座候、

一御用掛御側衆拙者共へ被二申聞一候て、各樣へ懸合申候上、御老中方へ申上候事も御座候、

〔武邊大秘錄六〕開帳井爲レ拜、萬日等之事〇中略

一諸寺社前年萬日修行致し候年より廿八ヶ年相過候て、萬日執行仕度旨願出候時ハ、御免ニ相成候事、

右年限を不レ經內ハ、御免ニ不二相成一候、

一開帳井爲レ拜等之節、靈寶御代々御宸筆等、御七代以來之品ハ、差出し候儀不二相成一、御七代已前之品ニ候ハヾ不レ苦、

但御七代以來ニ候とも、御寄附の佛軀類ハ不レ苦候事、

右ハ寛政五丑年三月八日、傳奏万里小路殿より御附武家衆江被二申聞一候也、

附

開帳幷爲拜等之節、諸寺社御寄附物を差出し度候へハ、書付を以、執奏之公家方江願出候事、

右相濟候上ハ、書付其儘御附衆江被遣候、其時御附衆より、右書付御所司代江被差出候、

一開帳幷爲拜萬日等之節、菊之御紋付紫幕幷同御紋之提灯等相用候儀ハ、右御紋付之由緒書を致、別段ニ相願候事、

一開帳幷爲拜萬日等之節、參詣人を內陣ニ相通し候ニ付、內陣切手を賣渡候義ハ、前々より御法度之事、

一開帳幷爲拜萬日等之節、於堀內幷門前、煮賣屋幷水茶ミせ差出し候儀ハ、其寺社付添煮賣店總代、水茶店總代共罷出煮賣店何十軒、水茶店何十軒と、書付を以相願候事、

一開帳幷爲拜萬日等之節、其外宮社遷宮ニ付、町中より寄進物を送り候時、地車ニ積、大勢にて引通り候儀ハ不相成候事、

附　開帳ニ付高札之文言不同之事

本尊藥師如來

勅會御開帳候也

庚申從三月五日　因幡堂役者

京都因幡堂本尊薬師佛開帳之義ハ、勅宣ニ付於禁裏被仰付之、則方丈、非職人口にて奉之、尤開帳之日數御定無之故、御紐解之日附計ニて、幾日之間といふ日限を不書出、閉帳之義、勅宣無之候ハヾ、縦五十日或ハ百日ニても開帳候事也、

右御紐解之節ハ、御使番布衣を著し、騎馬ニて向ひ、御戸帳を被開候事、又閉帳の刻も同斷、

右ニ付、因幡堂薬師佛開帳之義ハ、他之寺社とハ異にして、開帳有之候後、年數ニ不拘候事、

拜覽

山城國嵯峨清涼寺之釋尊、於關東開帳之節ハ、高札ニ右之如く拜覽と書候事ハ、禁裏御撫佛ニ候故、如斯書候也、

台覽

如此書ハ、禁裏御撫佛ニてハ無之候、將軍家御參詣有之候分ハ、右之如く、台覽と書候事、

朱書禁裏之御拜佛ハ御撫佛と唱、右御撫佛を將軍家御拜有之節ハ拜覽と稱す、

禁裏之御撫佛にあらず、將軍家計之御拜佛を台覽と唱候事、高札之表ニ依て差別可知、

〔社寺取計留〕開帳之節造物觸文化七午年也

諸寺社開帳之節、造物等之儀ニ付、去ル午年、安藤對馬守殿御勤役中、御書付を以三奉行江被仰聞候趣有之候處、其節諸觸頭江相觸之儀、月番覺書ニ記無之ニ付、取調候處、月番植村駿河守方ニ而、相觸候は相違無之、全記洩候儀と存候、然ル處近來右御書付ニ違背いたし、造物等願出差留候をも、密々差出候向も有之、既ニ私懸ニ而當時吟味に成ものも有之候、依之猶又此砌、諸觸頭呼出、別紙之通申達、其段月番覺書江も記置候樣可致と存候、依之申渡書案取調、爲御相談相廻し申候、思召之程被仰聞候樣いたし度存候、尤申達之儀は、私掛り落著後取計可申候、

十一月　脇坂中務大輔

期年

〔櫻陰腐談　一〕三十三年開帳

客問曰、日域伽藍、使人拜於本佛、俗謂之開帳、然以三十三年爲其限數何、其詳無撿、　答曰、此法非曾今日、李唐以前曾有此儀、但以三十年爲其限焉、資治通鑑二百四十(唐紀)曰、憲宗元和十三年十一月、功德使上言、鳳翔法門寺塔有佛指骨(法門寺有護國眞身塔、塔內有釋迦牟尼佛指骨一節、)相傳三十年一開、開則歲豐人安、來年應開、請迎之、通鑑綱目四十九曰、憲宗十四年正月、遣中使迎佛骨至京師、留禁中三日、歷送諸寺、王公士民瞻奉捨施、惟恐弗及、

〔三養雜記　三〕開帳

神佛を開帳して衆人に拜さすること、二水記に、永正十四年四月十一日、法輪院虛空藏開帳之間爲參詣とあり、開帳といふ名もふるきことなり、また開帳は、大かた三十三年に一たびすることのやうになれることと、いつの頃より始まれるにか、增鏡、瀧のもとには不動尊、このふどうは、伊豆國より生身の明王の、みのかさうち奉てさしあゆみておはしたりき、その蓑笠、寶藏にこめて、三十三年に一度いださるるとぞうけたまはると云ことと見えたり、かゝればいとふるきよりのならはしにや、唐山にも似たることあり、資治通鑑に、唐憲宗元和十三年十一月、功德使上言、鳳翔法門寺塔、有佛指骨、相傳、三十年一開、開則歲豐人安とあり、

〔薩戒記〕永享二年二月廿三日甲午、或人曰河崎觀音開帳、貴賤爲市、三十三年一度開之云々、

〔巖助往年記〕天文八年三月廿一日、石山觀音開帳、至八月開帳也、五月十三日、予參詣了、今日開帳事、卅三年目云々、

天文十六年閏七月六日、京勢竹田發向、寺家、坊中、新御塔、本御塔已下悉又炎上、塔御本尊阿彌陀八出申云々、鳥羽院御願之塔也、彌陀佛被念時、被現形像、被寫之御本尊、二百餘歲開帳無之、一和尙卅三年之間修之後、開帳之由置文有之間、老者卅三年不輕之條、開帳之儀不叶云々、

日數

〔寺社法則 上〕安永四未四月廿七日

一寺社開帳年限之義、是迄三十三年、滿四年目ゟ伺ニ不及差免候も有之、又ハ三十三年目ニ願出候得ハ、未滿ニて相立差免候も有之、先役中取計も區々ニ付、致吟味候處、前々三十三年目願出候間、不及伺差免候方多分有之ニ付、以來ハ三拾三年目ニ願出候得ハ、不及伺差免可申段申合候、

〔開帳差免牒〕子夏○文化元年

天台宗　淺草　清水寺

本尊千手觀音、明和九辰年開帳相願候以來、當子年三拾三年ニ相當リ候ニ付、爲助成、四月朔日より、日數六十日之間、於自坊開帳いたし度旨、亥十二月中、堀田備前守江願出、當正月廿七日、松平右京亮宅於內寄合、願之通差免之、

〔半日閑話 十二〕明和六年己丑二月十八日より、金龍山淺草寺觀音開帳、日數ハ三十日なり、日延二十日を合て、六月八日迄に、參詣の男女雲のごとく、吉原より燈灯を獻す、

〔開帳差免牒〕寅秋○文政元年

天台宗　紀州日高郡鐘卷　道成寺
病氣ニ付代　觀道

本堂殊之外及大破候處、元來無檀寺ニ而、修復難叶、自力依之爲助成、本尊蛇身化益之千手觀世音菩薩幷靈寶等、來七月朔日より、日數六十日之間、本所回向院於境內開帳いたし度段、寅四月中、水野左近將監方江願出、同五月六日、松平和泉守宅於內寄合、願之通差免之、

道成寺開帳差免置候處、段々故障之儀有之、日限延引之段、其度々願出承置候處、八月十日より、日數六十日之間開帳いたし度旨、猶又願出候付承屆候、

辰春（文政三年）　日蓮宗　身延　久遠寺

諸堂及大破、修復難叶、自力爲助成、日蓮之像并靈佛、靈寶等、來辰三月十一日より、日數六十日之間、於深川淨心寺境內開帳いたし度段、卯二月、松平右近將監方江願出、同十八日、自宅內寄合ニおゐて、願之通差免、

居開帳

〔德川禁令考 四十二 神事佛事〕享和二戌年

阿部播磨守江　吉良信丸より問合挨拶、

居開帳差免度儀

御書面、御知行常光院居開帳願之儀、外ニ差障も無之候ハヾ、奉行所江願届等ニも不及、御開屆不苦候儀と存候、

〔寺社司要錄〕差上候一札之事

拙寺本堂其外及大破、修復難及自力候ニ付、爲助成本尊毘沙門天、當二月十五日ゟ日數六十日之間、於自坊開帳仕度段、去卯年六月中奉願候處、同十八日願之通御免被仰付、難有仕合奉存候、右開帳中紛敷儀仕間敷、尤人多にも可有之候間、喧嘩口論無之樣相愼、火之元入念、提灯等表江目立不申樣可仕旨被仰渡、承知奉畏候、勿論開帳相濟次第、早速御屆可申上候、爲後證仍如件、

寬政八辰年二月十二日

谷中感應寺現住　光明院印

寺社御奉行所

前書被仰渡候趣、拙僧一同承知仕候、依而奥書印形差上申候、

上野執當　惠恩院印

御成跡開帳　奥開帳　表開帳

〔寺社法則 上〕天明元丑年十月七日　申合

御別當代 觀理院僧正

一御成御跡開帳之義、元文三午年、先奉行共申合候趣、御鷹野御成之節、寺院江被レ遊二御立寄一、本尊開帳被二仰付一候得バ、御跡開帳日數十五日被二仰付一、壹度御跡開帳被二仰付一候寺院、追て御成之節、本尊開帳被二仰付一候ても、最初御跡開帳ゟ、年數拾年拾壹年以上ニて無レ之候ハヾ、御跡開帳被二仰付一間敷候、右十五日日數之內、雨天ニて候共、日延ハ不二相成一候事、

右之通御座候間、奧開帳表開帳之儀も右ニ准じ取計申候、尤別段思召を以被二仰出一候儀ハ、格別之儀と心得罷在候、

出開帳 巡行開帳

〔德川禁令考 四十二 神事佛事〕寬政六寅年

阿部豐後守より脇坂淡路守江問合挨拶、

出開帳相願候節心得之事

領分之內出開帳、幷他領江出開帳之儀、

書面御領內出開帳之儀ハ、御聞屆ニ而も可レ然存候、他領江出開帳之儀、幷巡行開帳之儀ハ、奉行所江相願候ハ、格別、領主限ニ而難二差免一筋ニ存候、

開帳例

〔看聞日記〕應永廿八年四月廿日、醍醐一言觀音、今月自二八日一開帳、御堂破壞之間、爲二修理一開帳勸進云云、貴賤參詣之由聞レ之、仍俄思立、密々參詣、三位重有朝臣、長資朝臣、慶壽丸、壽藏主、周鄕、善基等相伴、地下禪啓以下三四人召具、予乘レ輿、面々近所之間步行也、御堂參著、折節無人之間、下レ輿入二內陣一奉レ拜二見千手觀世音像一、御長一尺餘 殊勝也、御帳傍、阿波內侍之影懸レ之、少納言入道信西姬、建禮門院祗候、法名心阿彌陀佛影尼姿也、件尼公、夢想ニ觀音像拜見、仍奉レ作二千手像一、建二立御堂一云々、緣起之子細、勸進帳ニ載レ之、

〔建內記〕嘉吉三年五月十六日庚午、松林院法印貞兼送二書狀一、長谷寺開帳事以レ使中云々 幷使者中坊云々長谷寺開帳事、永享十二年、自二寺家一內々申二御臺御方一、普廣院殿御時及二御沙汰一、可レ加二下知一由被二成下一、○中略 此開帳以

三箇年爲年限、但除開帳之年、中二箇年云々、然者當年及四箇年之間、已爲閉帳之基、永享十二年六月開帳之間、當年六月可被閉帳、可蒙綸旨之由、寺家就本路所申請也、但寺家修造等事、以散錢等致沙汰之間、至來十一月延引事可申請之由內々申候、九月開帳之時、至十一月閉帳事等有先例、所詮於延引者、勿論事也、可得貴意之由申候、就中戶帳者、唐錦帳也、鹿苑院殿〈義滿〇足利〉有新調被寄御自筆之年號御署、於于今者以外古物也、可有新調、可爲寺家可沙汰歟、又就佳例室町殿武家可有御沙汰歟、但公方用脚難得之時分歟、中々不可及申出歟、內々先談伊勢入道、隨其計可申予〈傳奏〉之由法印仰含之由、使者相談了、明後日可來之由仰了、

翌日使者談勢州入道之處、雖可有御沙汰、更無用脚時分也、寺家之沙汰可然之由相計候、仍不示予云々、

長谷寺開帳の事、永享十二年の六月に綸旨をなされて候、そのとしをのけ候て、三ヶ年にて開帳候ほどにらい月閉帳せられ候べきにて候、さりながら、寺家修造などのたよりにも、いまちと延引ありたく候、延引の例は又勿論にて候、十二月まで延引の樣に申さたし候へと申候、先例候うへは、申請候ぶん、きこしめされ候よし、仰られ候べきやらん御伺候べく候、かしく、

表書云

勾當內侍どの御局へ　　時ふさ

錦帳も、ふるくなり候ほどに、新調の沙汰候ほどに、かたがた延引候はんと申候、

〔親元日記〕寬正六年七月十七日壬戌、上樣〈義政〇足利〉石山寺〈依本尊開帳〉御參詣、女中御乘悉御はり輿也、御母御供、但御先〈江〉御參也、〇中略濱關所〈南釘貫外〉ヨリ御船ニ召ス、〈御船同御一獻ハ、守護沙汰也、〉猿樂共御船ニ祗候、守護六角万壽代、山內宮內大輔共以祗候也、

〔元長卿記〕永正七年六月五日己丑、頂法寺本尊開帳事被聞食、

〔二水記〕永正十四年四月十一日、法輪院盧空藏開帳之間、爲參詣、朋友五許輩同道内裏女中衆二三人被詣、於臨川寺之前、酒宴及數刻、（○中略）當年開帳、應仁以後無之云々、開帳之時、世上有兵亂之由兒女子說云々、

〔續史愚抄後柏原〕永正十八年（○大永元年）正月廿三日丁丑、自今日木屋藥師堂（在烏丸、聖德太子御作、）開帳、八百年來無此事云、

〔嚴助往年記〕天文十三年七月八日、四條道場阿彌陀開帳、自去月開帳云々、此本尊釋尊御作、天竺無常院御本尊也云々、希代靈佛神變多く、九日大洪水、併此開帳故也風聞云々、洛中所々洪水ニ流出、前代未聞、不思議有之、

〔續史愚抄後陽成〕文祿三年四月十八日丙寅、自今日六十箇日、因幡堂本尊藥師開帳、（晟紳追二[?]寅[?]）

〔續史愚抄後水尾〕慶長十六年七月廿四日辛酉、自今日三七日、壬生寺地藏開帳云、（宗記追）

〔國師日記〕嵯峨清涼寺本尊開帳之事、得上意候處ニ、本願上人へ被仰付候、幷別時念佛之散錢、如先規不可有相違者也、仍如件、

慶長十六
十月十四日　　　　金地院　圓光寺　板倉伊賀守

釋迦堂本願上人

〔紫芝園漫筆八〕河州葛井剛林寺千手大士像、長數尺、實有千臂、癸亥（○天和三年）春、住持奉像來東都、寓城北護國寺、都人往燒香者日千數、一鄙人見像曰大士千臂而兩脚、何脚之太寡也、大士言曰、吾唯寡脚是故求脚、使吾脚多如手何以東行爲、世俗謂錢曰脚、故大士云爾、

〔出定笑語附錄一〕千手觀音ト云フガ有ルガ、實ニ千手有ルハ河內國葛井ノ剛林寺ニアル觀音バカリダト云コトデム是ニ付テ、太宰彌右衛門ト云儒者ノ著シタ紫芝園漫筆ト云モノニ、天和三年ノ春、右ノ千手觀音ヲ江戶ノ護國寺ヘ持テ來テ開帳シタル時ニ夥シク參詣ノ有タコ

トヲ記シテ、一トツノ咄ヲ書テ有ル、夫ハ一人ノ鄙キ人ガ、カノ像ヲ見テ、コノ観音ハ手ガ千本有テ脚ガ兩ツダガ、手ニ合セテハナゼ又コノヤウニ脚ノ寡イコトヂヤト云タレバ、観音ガ云ニハ、オレハ甚ダ脚ガ寡イヂヤニ依テ、脚ヲ求メニ此所ヘ來タノヂヤ、モシ脚ガ手ノ如クタント有ラウナラバ何シニコヽヘ來ヤウゾト云タト云コトデム、是ハ錢ヲ足ト云ニツケテ太宰ガ、戲レニ作ッタ咄シト見エルガ、如何ニモ面白イ、観音モ、釋迦モ阿彌陀モ、衆生濟度ニ諸國ヘ開帳ニ歩行ト云ハ、ソリヤ云ヒ立バカリ、實ハ足ガ欲サニ開帳見世ヲ出スノデム、

〔基量卿記〕貞享五年二月十二日、參院、藤野井甲斐、自今日參番之由也、

一内々望申岩屋山開帳事、口上書奏聞、無別條由勅許也、則申渡幷町奉行ヘ理之義、雨武家ヘ可被談旨申渡、内々以播州通達之處、於承知無別條由、幷上志摩守申之云々、猶爲理可被參由申了、

口上之覺

一岩屋山奥院不動明王開帳之義、從往古、卅三年一度仕候ヘ共、今度仙洞様御仰罷成候ニ付、爲御祈禱開帳之儀奉願候、先年寛文十二年從逢春門院被仰付開帳仕候、其後延寶五年從東福門院様被仰付開帳仕候、右兩度者、舊例之外ニ相勤申候、將又岩屋山之義ハ、一本寺ニ而寺務も無御座候、以上、

二月八日　岩屋山普光院

〔續史愚抄中御門〕寶永七年二月廿八日癸亥、自今日於東山丸山云開帳竹生島辨財天女、

〔大江俊光記〕元祿七年六月廿四日、巳剋、眞如堂ニて善光寺如來開帳、天台衆法事アリテ後開帳、群聚ニテ近所ヘ難寄脇ゟ見物了、　廿五日、早朝母公御供して善光寺如來長一尺五寸、脇立左右二體、涅槃像釋迦、善光夫婦之像、母公御介抱して懸御目了、　廿四日ゟ五十日ノ間開帳之由也、　九月十日、善光寺如來、幷涅槃像ノ釋迦、聖德太子、巳剋眞如堂出、大坂ヘ下向、念佛講中ノ入道ハ實德、俗ハ上下著

其外道心者等供也、三町も可ㇾ謂也、彌陀ノ先ヘハタ二本、釋迦ノ先ヘ二本、其外無ㇾ別義、〇中略今夜ハ伏見泊リ之由、散錢六月廿四日ゟ八月卅日迄ニ一万兩も其餘も可ㇾ有ㇾ之と風聞也、前代未聞之開帳也、本體ノ本尊ハ、秘佛とて不ㇾ來、外ガハノ本尊ノ由也、

〔松蔭の日記二花まつもろ人〕その比十〇元祿四年うづまさの廣隆寺の上宮太子の像を、あづまにゐて奉りて、人こぞりておがみ奉るに、此程わが御かたへも入奉れり、ゆへあるたから物などあまたありけれど、いみじきにめうつりして、よくもおぼへず、北のかたひめ君なども、おがみ奉らせ給ふて、布施などあまたせさせ給ひき、

〔御昇殿記下〕正德元年

一七月十六日ヨリ至九月十六日、竹田不動開帳、御即位後恒例也、

一九月三日ヨリ東山長樂寺觀音開帳、御即位後恒例也、

〔月堂見聞集九〕享保元丙申年

一八月四日より、六波羅密寺にて、越後國西生寺弘智法印遺骸ノ像開帳、白小袖ニ黒衣ヲ著、木欄色之袈裟を掛、兩膝を立、兩手を膝の上に置、首を右の方に傾て、面を垂て眠るが如キ、身ハ七十餘と見え候、行年七十二才之由、當年三百五十四年に罷成候由、先年江戸にて開帳有ㇾ之候遺骸之本像ハ、岩窟ニよりかゝり、中々動しがたし、定めて其寫にて在ㇾ之べきとの評判也、

〔月堂見聞集二十八〕享保十九年

一三月二十六日より、高雄山神護寺開帳、女人の登山をゆるす、依て女人參詣夥し、同栂尾も開帳、併し宅間の寫し給、二神の御影ハ開帳なし、明惠上人の堂の靈寶計なり、

〔開帳差免牒〕寅〇文化三年春

新義眞言宗　下總國成田村　新勝寺

雜載

右諸伽藍及ニ大破ニ候付、修覆爲ニ助成ニ本尊不動明王并二童子靈寶等、來寅三月朔日より、日數六十日之間、於ニ深川永代寺境內ニ開帳いたし度旨、丑九月中、脇坂中務大輔方江願出、年限未滿ニ付、御老中江伺之上、同十一月六日、大久保安藝守宅於ニ內寄合ニ願之通差ニ免之一、

〔武江年表 九〕嘉永六年五月十日より、六十日の定にて、本所回向院に於て、勢州國分の阿彌陀如來開帳あり、別當大寶院 同月七日、此本尊江戸著にて、品川の品川寺(ホンセン)を出立あり、黎明より、講中と唱へし輩、江戸幷近郊より出、其黨を分ちて、男女一樣の新衣を著し、何講中と記したる、多くの旗を飄して、佛龕を送迎す、又見物の貴賤群集し、品川より兩國橋畔に至る迄二里餘り、大路へ駢闐して、錐を立るの所なし、しかるに午の中刻、柳原、岩井町、上納地なる飴屋源左衛門が店より失火し、半町の餘燒たり、これによつて、救火の人夫と行違ひ、道路の混雜いふ計りなし、しかるにこの開帳始りてより、詣人多く繁昌しけるが、亞墨利加の船、始て浦賀に著せしより、俄に閉帳し、七月又九月に至りて開帳あり、境內に燈心にて、大なる虎の形と豐干禪師の形を造りて、見せ物とす、細工人浪花松壽軒なり、又竹田縫之助が作の、木偶もあまた見せたり、外に島布なもて、二十四孝の偶人をつくり、見せもの出たり、兩國橋の東詰に、見立女六歌仙と題し、女の偶人をつくりて見する、京師の大石眼龍齋吉弘といふ人の作なり、其容貌活るが如し、これ近年行る活人形、江戸に於て行るゝの始なるべし、

〔武江年表 十〕安政三年三月廿日より六十日の間、下總國成田山不動尊、深川永代寺に於て開帳、江戸著の時、送迎の人數、千住より深川迄、街巷に塞り、錐を立べき所なし、開帳中、日參朝參等夥しく、諸人山をなせり、永代寺境內は寸地を洩さず、看せ物、茶店、諸商人の假屋をつらねたり、又奉納の米穀、幟、挑燈、還額等、境內に充滿せり、看せ物は、江戸細工人の造りし活人形、里見八犬士の土偶人、曲馬、輕業、大女の三人兄弟といふもの出たり、この姉妹は、下總國葛飾郡庄內領、木の崎村百姓彥七娘にて、なつ十六歲、なか十二歲、とめ八歲也、いづれも格別大なるにはあらねど、肥滿せる事甚し、其餘色々の見せものも出たり、

〔嬉遊笑覽 佛會七〕下手談義に、元祿寶永の頃迄は、開帳こと手輕く仕掛て入用すくなく云々、近年の開帳は莊嚴つくろひ、張番に對の看板、染貫のはをりも、昔は夢にだもみず云々、亦は開帳場を仕廻ふと否や、本尊を質に入て入唐渡天の行がた知れず云々、かゝる事まではいひたれど、いまだ

幟など立ることは見えず、のぼり立るは、神祭にならふとも見えず、戲場の看板に似たるものなり、

〔嬉遊笑覽 七 佛會〕世に秘佛とて、開龕なきは、醜き像なればなり、沙石集に、佛像たやすくやぶるべからず、笠置の彌勒は、いろどり奉りて後靈驗御座さずといへり、古佛像をばたゞ、其儘にてあがむる一の樣なり、但し、形見にくゝかたわしきをば、律の中には戸帳をかけよといへり、

名稱
所在

古事類苑

宗教部四十二

佛教四十二

般舟三昧院

般舟三昧院ハ、京都今出川ニ在リ、禁裏ノ內道場ヲ擬シテ、後土御門天皇ノ草創シ給ヒシ所ニシテ、泉涌寺ト共ニ、世々皇室ノ爲ニ追福ヲ修スル所ト爲ス、

〔書言字考節用集〕一乾坤 般舟院（ハンジユ ヰン）洛陽大宮西、號指月山、伏見院內道場、後爲寺、

〔雍州府志〕四寺院 般舟三昧院　在千本大宮西、天台、眞言、禪、律、四宗兼學之道場也、而寺產有三百石、舊伏見皇居之內道場也、爾後爲寺、於茲修般舟三昧法、故則爲寺號、依在伏見指月山、號指月山、天正年中豐臣秀吉公、築城於伏見山時、移斯寺於京師、近世主上崩時、奉葬東山泉涌寺、於斯院修追薦之法事、方丈有後水尾院之畫影、畫妙法院宮堯恕親王之筆、而贊後水尾院御製、則宸翰也、方丈後有藤原定家塔、則石地藏也、傳言斯處定家卿之宅地、而時雨亭亦在此地也、前町南號定家辻子、

〔山州名跡志〕二十一洛陽寺院 般舟三昧院、略云般舟院、　在須磨町通安居院通西四町、　宗旨天台、眞言、律、淨土兼學、　門南向

佛殿南向

本尊。。　阿彌陀佛座像二尺許　作　慈覺大師

開基。。　圓慈慧篤和尚、四山之孫弟也、弘導臨空弟子、明應元年壬子八月九日化、八十一歲、

當院ハ後土御門院勅願、禁裏。。內道。。場。。ニ被擬。。處ナリ。。始メ伏見里指月ニアリ、舊地載前卷、天正年中、此地ニ移ス、此所又歡喜寺ノ舊跡ナリ、於此邊二箇ノ歡喜寺アリ、此所應仁ノ兵火ニ滅セリ、應仁

創建

記云千本ニテハ兩歡喜寺、此寺ニ定家葛ノ墓アリト云フ是ナリ、

〔洛陽般舟三昧院記〕伏見般舟三昧院は、後土御門院の草創なり、〇中略此御門は、位にありながら、後世を御心にかけ、六十有餘の寶算をたもち給へり、これさきだちて仙宮を經營し、佛閣を建立の叡願にて、征夷大將軍にみことのりして、造營不日落成せり、則般舟三昧院の勅額をかけらる、それより以來、還勅ありて、代々御追善追福、此所にて修せらるゝ事、恒例なり、毎事禁中に模せらる故、法會は、皆准御齋會なりされば衣冠たゞしからざる者は、出入なし、當時にをきては、勅願隨一の精舍とも申べきにや、凡小僧が、見聞の及所、聊記する而已、

寺格寺領

〔寺格帳上天台宗〕京都般舟院　御朱印高百五拾石

右住職、從御門主被仰渡、

一繼目御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御鬮之外貳疊目

一御暇、於柳之間老中被仰渡、時服四拜領之、康萱ニ而引

一年頭御禮無之、

雜載

〔宣胤卿記〕永正十四年九月廿八日、今日後土御門院聖忌、於伏見般舟三昧院被行御經供養、奉行藏人左少辨資定也、御導師覺雅大僧正、〇中略御願文草進大藏卿、和長卿同淸書世尊寺宰相行季卿云云、當年十八年也、終日稱名念佛、存懇志許也、

〔實麗卿記〕弘化三年十一月十八日己亥、今日、光格天皇御七回聖忌、於兩寺有御法會、般舟院御法會著座公卿、高倉新大納言、永、山科中納言、言、新宰相中將、公、散花、殿上人雅光朝臣、實泉涌寺御法會著座公卿、鷲尾前大納言、隆、替前源中納言通、新中納言、公、左大辨宰相、光、散花、殿上人久隆朝臣、有文等云々、

行願寺

名稱 所在	創建 本尊 開山

行願寺ハ、一ニ革堂ト號ス、京都京極近衞ニ在リ、天台ノ僧行圓ノ開基ニシテ、三十三所觀音ノ一ナリ、革堂トハ、行圓ガ、皮衣ヲ被リ、皮聖ト稱セラレシガ故ナリ、

〔伊呂波字類抄 諸寺〕行願寺 皮堂是也、于額有皮堂法文、仍委不勘之、

〔拾芥抄 下 諸寺〕革堂 號行願寺、八尺千手、行圓上人、

〔書言字考節用集 乾坤 一〕革堂 洛一條、號行願寺、開祖行圓、頂戴寶冠、身被革衣、俗呼稱革上人、故云爾、今小川通狩野通大在靈泉、曰革堂水、則其遺址也、

〔雍州府志 寺院 四〕行願寺 在京極中御門北、本尊觀音、所謂三十三處巡禮之隨一也、開祖行圓常著皮、故世謂革堂、在一條北、俗曰一條革堂、行圓甚崇上賀茂明神、故堂前石塔之中勸請賀茂明神、天台宗僧守之、屬青蓮院門主、

〔山城名勝志 洛陽 三〕革堂(中略)今按、元在一條北油小路東、今遷京極近衞、

〔國花萬葉記 山城 二上〕行願寺 又革堂 京極北邊

寺領二十石 一條院、寬弘二年、行圓上人、建立開基、本尊、長八尺の觀音、 行圓、賀茂の神託に依て、神木槻木を以て彫刻之、 當寺に、賀茂明神の塔とて有之、

〔元亨釋書 檀興 十四〕釋行圓、鎭西人、寬弘二年、遊帝城、頭戴寶冠、身披革服、都下呼爲革上人、圖持千手大悲陀羅尼、又欲得好材刻其像、一夕夢、沙門來告曰、明日送爾異材、翌朝果一僧至語曰、賀茂神祠側有一槻木、莓苔纏封、不知幾千百歲、其外似朽、內甚堅實、每至六齋日、槻畔有誦千手神呪音、近見無物、遠聞有聲、自古名爲異木、是子之所求材也、古老傳言、昔城北出雲路有小女、臨鴨河浣衣、一箭泝流而來、女取見之、鳴羽加笴、女携還家、插簷牙、自此女娠、已而生男兒、父母問其夫、女曰無、父母以爲匿也、兒三歲、

雜載

父母議曰、世豈無父而有兒乎、思此里人乎、宜具酒膳大宴里夫、令此兒持杯試告言、以此杯獻汝父所、其得杯之人便兒之父也、議已、多會郷人、數爵之後、令兒送杯、時兒取杯穿衆人出堂而置篠上鴨箭所、父母及諸胥怪之、相議曰、是箭鳴鴨羽、宜姓此兒爲賀茂氏、(鴨、和訓賀茂也、)於是兒化成雷上天、母又同時登天而去、今之賀茂中祠、昔爲田中時、田主已播秧數畝、其苗俄變成槻樹、母氏降樹下爲神、今賀茂中宮是也、兒又降爲神、賀茂上宮是也、其槻歳久偃仆、世貴爲靈木、不厄樵材、故至於今也、子乞神官剜菩薩像、圖喜而詣神主告事、神主不斬、不日而成像長八尺、營行願寺安之、以圖衣革、俗呼行願寺爲革堂、後仁弘法師得餘材、又造八尺像安良峯寺、

〔百練抄 四 一條〕寛弘元年十二月十一日、皮聖供養一條北邊堂、行願寺是也、

〔堯恕法親王記 七〕寛文九年五月廿二日、參革堂觀音、(千手立像、彼寺之本尊、緣起寫在別紙、)此本尊、從正月十八日開帳也、古來、卅三年ニ一箇度開帳云々、當年已某年ヨリ卅三年也、此寺、山門ノ末寺、故此時之住持(元純、)元來出入之者也、仍而緣起之文、予書之、補古文也、從是此度之開帳ノ事、諸事雖存知之、漸今日拜尊像畢、

〔百練抄 十一 土御門〕元久元年正月十八日、上皇(○後鳥羽)御幸行願寺、以御太刀一腰被修御誦經、

〔新續古今和歌集 八 釋教〕人々かは堂にて勸學會をこなひける時、おなじ品(○法華序品)入於深山、

藤原仲實朝臣

鳥の音も聞えぬ山にきたれどもまことの道は猶遠き哉

〔蔭凉軒日錄〕寛正四年卯月廿三日、今日、公方樣(○足利義政)參詣于柴藥師堂皮堂淸和院、蓋舊例也、以次遂御成于光慶院云々、

頂法寺

頂法寺ハ、一ニ六角堂ト云ヒテ、京都六角東洞院ニ在リ、六角トハ、堂ノ形ヲ謂ヘルモノニテ三十三所觀音ノ一ナリ、池坊ハ、此寺ノ執行ニテ、世々立花ノ宗匠タリ、

〔拾芥抄下本諸寺〕六。角。堂。〈金銅三尺如意輪、聖德太子、〉

〔雍州府志寺院四〕頂法寺　在三條南、稱六角堂、梶井門主爲寺務、聖德太子廣隆寺建立時、伐材木於此處、其中槻樹有靈光、以此木刻觀音像安置之、一說、斯靈像、聖德太子自淡路國岩屋迎之云、是三十三所順禮之隨一也、近世僧專光住方丈、斯人得數品花枝於一瓶中、而摸山水之景象、倭俗謂立花、至今代代玩之、僧俗爲此徒弟者多、庭有大柳樹數株、本根至一圍者多、枝低垂者拂地、春末新綠爲奇觀、凡六月七日十四日祇園會前日、雜色在堂、使所飾山鉾之町人取圖、定所渡之前後、又倭俗二月八月、家僕互易、是謂出易、其未定居者、每夜聚此處、故主人使人招之、擇其人而用之、

〔山城名勝志洛陽四〕六角堂〈中略〉六角北、東洞院西、六角面、名頂法寺、

傳云、當堂金銅如意輪小像ハ、聖德太子ノ御持尊也、無開扉、內陣一尺三寸木像、或云弘法大師作、或云、高麗國光明寺像也、然ヲ木國僧德胤法師使太子奉令迎云々、外陣三尺像、不知作、當寺昔ハ寺僧アリ、僧正ナドニモ任ゼラレタルニヤ、今ハ其儀絶テ、執行池坊守之、〇中略

池坊　六角堂執行也、代々立花爲業、就中專順法師連歌達人也、筑波集作者、

〔伊呂波字類抄呂諸寺〕六角堂　緣起云、六角堂如意輪觀音、淡路國巖屋浦ニ、小韓櫃ニ入テ、乍韓櫃打寄也、而聖德太子拾取開見之處、即如意輪觀音也、爲持佛、太子與守屋大臣合戰之間、誓願云、戰若如心勝了ハ、可奉建立四天王、若我有利如思勝了、欲建立四天王寺、採材木於山城國愛宕柚之間、暫奉居本尊於多頁樹樾、浴水、浴水了、如本奉取本尊、全不放樹樾、給祈請夢云、吾爲汝本尊、既經七世、於今者、此處可利益衆生也、即欲建立御堂於此處、經始之處、自東一老翁出來、太子問件老翁云、此地欲建立小堂、材木甚不日採得事如何、即答此堂傍有老楊樹一木、每朝紫雲下降此樹之者、翌日早旦、向件樹下見之、果如老翁之言、即見之切臥、以件樹一本奉造六角堂一宇畢、其後遷都之間、遣勅使奏云、京都欲打丈尺分定小路之處、有六角小堂一宇、可分定小路中心、可當之、所謂聖德太子建立六角堂是也、勅云、可奉壞渡御堂於他所、仍行事官等引率衆來臨、見之無堂宇、奏此旨、重遣勅使云、是常住此所有御志者、南北之間少可令入給、于時天下俄晴然成奇之處、五丈許令入北給、仍分定六角小路了、靈驗殊勝也、於此本緣起者、有民部省云々、

創建本尊

〔續古事談四神社佛寺〕六角堂ノ如意輪觀音ハ、淡路國イハヤノ海ニ、辛櫃ニ入テ鏁子サシテウチヨセラレタリケルヲ、聖德太子アケテ御覽ジテ、本尊トシ給ケリ、コレハ思禪師六代ノ本尊トゾ、太子守屋大臣トタヽカヒ給ケル時、心ノゴトクカチタラバ、四天王寺ヲツクラムトチカヒ給ケルニ、思ノゴトク勝給ケレバ、材木トラムトテ、山城國愛宕ノ杣ニオハシケル時、コノ本尊ヲシバラクタラノ木ノウツボニスヘ奉リテ、水アミ給テ、モトノゴトクトラントシ給ニ、此佛アヘテハナレ給ハズ、アヤシミテフシ給ヘル夢ニ、此佛ノ給フ樣、汝カ本尊トシテスデニ七世ヲヘタリ、今ニヲイテハコノ所ニトヾマリテ、蒸々ノ衆生ヲ利益スベシ、コレニヨリテ堂ヲ此所ニツクリテスヘ奉ラントスルニ、東ノ方ヨリ、トシ老タル女出來レバ、太子問テノ玉ハク、此所ニ小堂ヲツクラントスルニ、材木アリナンヤ、此女申樣、コノカタハラニスギノ木一本アリ、アサナ〳〵紫雲ヒキオホフ、コレニテ作給ベシ、次日太子ユキテ見給ニ、女ノコトバノゴトシ、スナハチ此木ヲ切テ、六角ノ小堂ヲ作テ、此佛ヲ安置シ給フ、遷都ノ時、造宮使申テ云ク丈尺ヲ以テ小路ヲ打テサダムルニ、六角ノ小堂、道ノ中心ニアタレリ、是聖德太子ツクリ給ヘル六角ノ小堂也、宣旨ニ云ク、他所ヘワタスベシ、コヽニ勅使祈請シテ云ク、コノ所ニスマントオボシメサバ、南北ノ間ニスコシ入給ヘト申スニ、空俄ニクレフタガリテ、五丈バカリ北ヘ引入ニケリ、サテ六角ノ小路ヲトヲシツ、其後五百餘歲ヲヘテ、天治二年十二月五日、京中大燒亡ニ、此堂ハヤケニケリ、左大辨爲隆ノ侍、トシゴロツカウマツリケル、此本尊ヲ取出タテマツリケリ、其後シキリニ火事アリ

堂塔

〔扶桑略記三十白河〕承保四年〇承暦元年十月六日壬午、六角堂之町燒亡、然觀音寶殿遂免餘災、

〔本朝世紀〕仁平二年十一月八日戊戌、丑剋六角北烏丸東有炎上、六角堂適免其殃、

〔康富記〕文安四年六月十八日戊寅、是日曉寅刻六角堂號頂法寺本尊遷座也、去永享□年炎上以後、自武家被付其要脚被造御堂、雖然普廣院贈大相國薨逝之後、依公方御奉加物不被遣、至今未周備、爰去月

比、地下人商賣之德人感夢想之告、致千二百貫之奉加、終御堂之造營、奉渡本尊於本堂者也、此寺爲勅願寺之間、舊例度々爲院中御沙汰、然間今度自寺家付傳奏中山尹卿申入公家之間、爲公家御沙汰被遂其儀了、左中辨藤原敎忠朝臣參向之間、守護官人大判事坂上明世參之、右大史高橋員職、史生中原職國、官掌紀季兼、同參向之、舞人樂人同參役之、公家儀、傳奏〈定親卿〉鷹臺卿被申沙汰歟、武家儀、布施民部大夫貞基爲奉行、申入管領、管領參向、人々出立難治之由各被申之間、自寺家奉見訪云云、左中辨〈五百疋〉判官〈千疋〉史〈貳百疋〉史生官掌〈各百疋〉充沙遣之、伶人等有其儀歟、可尋之、

抑當寺本尊觀音、奉渡本堂之儀、久安二年十二月五日記錄不分明、文永十年十一月十一日、本尊觀音遷座本堂、件度院司右中辨經長參向之、其外供養度々、伶人等被遣之、今日爲文永例云々、

〔寺格帳　下〕〈知恩院末寺　無本寺〉高一石　〈京六角堂頂法寺　天台宗〉池坊

右住職、弟子讓り、

〔袋草子　四〕六角堂觀音御歌

とへかしなあしびたくやのまぢかきにこゝのへてらす月はものかは

あやしくもひだりのみゝのきこへぬるかせのするわとかきこゝろ見む

此次歌ハ、故白河院、三條殿ニ御テ、六角堂ノ百度マイリ、人々無往反之路ニテ、退轉之時、人ノ夢ニミエケル歌也此後、三條殿燒亡云々、

〔台記〕康治三年正月廿四日丙子、入夜、參六角堂、行願寺、依願成就、自今年三箇年、四季一度可參六角堂也、

〔臥雲日件錄〕長祿二年三月三日、向壷記、乞食者纔八人、向曰、乞食皆訴、來六日、當赴六角堂施行云々

四日、喚智瑞行者來、剃髮之次、予問六角堂施行之來由、瑞曰、願阿彌曰于公方望救餓人、公方出百貫文爲助、就六角堂南大慈院北、造假屋者百二間、初三日、先可施粥、其後栗羹耳、每日八千人之設也、

願阿彌筑紫人也、先是架四條橋、去年又施百貫、爲南禪再造佛殿之助、如此善利多多匪啻今施、僞人、能成檀波羅密者、其名曰願、願波羅密亦成就哉、胡不偉乎、

名稱	所在	創建

平等寺

平等寺ハ、一ニ因幡堂ト云フ、京都高辻烏丸ニ在リ、傳ヘテ因幡守橘行平、因幡國ヨリ齎ス所ノ藥師ノ靈像ヲ安置スト云フ、

〔拾芥抄下本諸寺〕因幡堂藥師、高辻南、烏丸東、大納言橘好古、

〔書言字考節用集一乾坤〕因幡堂（イナバダウ）在五條烏丸、號平等寺、天德三年因州刺史橘行平本願、則以等身藥師佛、爲本尊、

〔山城名勝志四洛陽〕因幡堂

今按、元大納言行平卿第也、藥師從因幡國遷座之後作堂、光朝禪師爲住持、是彼卿孫也、橘氏系圖云、橘行平好古孫云々、作者部類、行平卿女光朝禪師母云々、號平等寺、寺稱天台聖護院御門主、寺但眞言也、但卿坊一院本山先達也、今堂、普廣院殿數公所再興也、

〔橘氏系圖〕好古彈正大弼、宮內少、美作守、文章博士、從二ア大納言、長者、參木、左大辨、右衛門佐、民部卿、—敏政—
則光—光朝母行平女
行平從四上、因幡守、因幡堂本願、—行賴藥師寺、拾遺ニ入、
　　—女子光朝法師女

〔碧山日錄〕長祿三年十二月十四日壬戌、因幡堂執行某出本尊之記、其字皆和也、余爲作其譯曰、○中略蒼龍集乎己卯蜡月之中、與紀州太守春公適遊洛之平等寺、其像醫王善逝尊也、按其舊記曰、印度祇園精舍四十九院之一、而東北瘵病院之所安也、欲令慈救濁世之病、而大覺世尊手自刻之以安之、世尊唱泥洹於雙樹之後、星移霜荒、精舍圯廢、此像踊身虛空而去、遂入海龍宮、以極拔異類也、是乃大法

東播之漸也、於是乎本朝天曆帝十有三年己未、大納言橘好古之孫行平公、奉勅致神拜於因幡州一宮也、(神拜之爲言、未見之於傳記、其取祭神致拜以表敬而已矣、)一宮卽大臣武內之廟也、公致拜畢、於次館舍、少頃寢病、欲殆入死地、荒服之境無醫術、左右莫奈之何、因祈求靈劾於諸聖、公夢、有一異僧、來曰、汝克欲除汝病、汝可赴賀留津、以擴之、津有一浮査、浮査而非浮査、非浮査、而浮査、欲諭導東裔之群生、而向西土佛生國、順浪而來也、汝往命諸役夫、揚之於岸上、可以祈焉云、諾而覺矣、急赴賀留津、津有一老翁、○中略翁又曰、西乾祇樹之佛廬荒壞、所裝飾之幢幡紛繽而散乎十方剎土、其一幡落於此邦、俗與先武內之幡併、其故事以名國、故曰因幡也、公重咨有津之怪事、翁曰、此海底有一物、夜々發光、四十餘歲于此矣、山壑之隙、水府之幽、悉莫不以照也、鱗甲懼之、飛走避之、往來之商船見之者悚慄而無敢近也、時此七日夜、其光倍蓰於常時矣、公可速退、恐其遇妖、公曰、博哉子之言也、吾其庶乎、翁欣々而去、公自忖云、是皆夢裏異僧之所告也、有何畏乎、覓沈大網於滄溟而試羅之、乃得藥師之尊像、其長五尺許、金光燿煜、香氣普薰、公驚喜仰之、其病立瘥、加以身心和悅、非世上之所能比也、假創一字以敬安之、國人持香華以供養者不可紀矣、漁郎舍其網、樵夫投其斧、靡弗以來詣敬信矣、公劃墾田若干畝以充寺供也、堂旁有桑樹、邑人懸乾豆於其上、故名此字爲豆桑寺、以未有其扁也、公回洛詣闕、奏事、愜旨尋聽、其昇殿除官於大納言以襲父之爵也、中朝朱紫競賀之曰、公之有此、殆聖像之所致也、公辭像之時曰、吾歸於洛、速可奉迎也、然後、以冗少緩其期、像入恍惚之間告之曰、吾久在西印度、以諭道赴東裔、特於汝有善契、故以汝爲最也、然汝怠前期、吾只以度生爲急、故不俟信而來也、覺而異之、乃有叩門者、闢而見之、尊像儼然、公不勝感歎、而涕泗連如也、迎□室內謝罪曰、我於國州奉約來降然、外纏公事、內追家私、以不果之、願以大慈恕之、像頷之、其□像忽焉在於前庭、假寐告之曰、室內甚汙穢、故避之也、亦至五鼓之時、空中有聲、雅麗旋繞、人□告曰、高辻烏丸之坊、有從佛生國來大醫王之像也、皆可詣云、繇是士女接踵而拜瞻矣、公爲以此地既穢不宜聖降座、父(○父恐祖父誤)好古之私弘第在於二條京極之街、其處不凡、一日具法儀以奉移之、

堂塔

伶官前導、唄師後隨、寶蓋華幡、光彩奪レ目也、其設也、如下夏臺雲武巡城之像、相慶安之像上、又抵レ夜歸二於舊地一、夢示二其意一曰、此居西方淨域之東門、而當二淨瑠璃界之西門一、況釋尊因地轉法輪之所也、我度生之緣在二於此一、故爾耳、公愈感愈喜、而捨二其家一以爲レ寺、又使二季子之賢者司一レ鎭此寺一、今有二其裔一所レ謂號二執行一者也、時乃永延帝十有七年四月也

〔本朝世紀〕康和五年十一月十六日辛卯、今夜、五條坊門南、五條北、東洞院西町、尻東、多以燒亡、因幡堂同爲二灰燼一、

〔山槐記〕治承三年二月廿八日丙辰、今日、壞二却廳屋一施二入因幡堂一、去月十九日辭二大理職一、其後即可レ壞之處、不レ宿二本所一、楊梅、西洞院、過二四十二日一、仍其忌移二三條亭一之間、有二王相忌一、連々相陪不レ宿二本所一、去夜所レ宿二楊梅一也、自レ去廿四日一大將軍遊レ北、自二本所一此亭雖レ當レ北、依二初日宿一可レ有レ忌、仍今日不レ憚也、因幡堂、去々年四月廿八日燒亡、大極殿火事同日也、其後未レ終二其功一、仍所二施入一也、一昨日遣二召彼寺預一、仰二子細一、今朝壞置重遣召預、預法師相二具聖人一來、又彼寺雜役車持來積二八兩一歸了、四間板葺屋一宇、立蔀、疊、弘筵等皆施入了、予硯用二東山一、予座著到料到恐衍○官人座硯用二六葉漆一、著到料爲二滅罪一各用二佛事一也、聖人曰、因幡堂者、證菩提院末寺也者、

〔看聞日記〕永享六年二月十四日、六角町ト室町之相合南頰より火出、付火云々七條坊門まで燒、西ハ西洞院東頰まで東ハ萬里小路まで燒畢、其中、因幡堂、本尊ハ不燒取出云々萬壽寺寺内悉燒失、草創以來不レ燒云々、六條道場、河原院聖天、大內屋形、正七土藏等也、其外、在家不レ知レ數、東西六町餘、南北十四町餘云々、近比大燒亡、言語道斷事也、殊因幡堂萬壽寺不レ堪二驚歎一事也、並天魔所爲勿論事歟、

〔二水記〕大永八年二月八日、午後、詣二因幡堂藥師一、此次六條、本國寺之邊令二歷覽一、戰場縱横、堂塔、在家等一圓無レ之、言語道斷之體也、

○按ズルニ山城名勝志ニ、因幡堂云々、今堂、普廣院義敎公所二再興一也トアレド、二水記ノ文ニ據

寺領 參詣 雜載 名稱 所在 創建 沿革

レバ、大永ノ亂ニ、堂舍皆烏有ニ歸セシニ似タリ、

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕因幡堂平等寺 在松原通烏丸 寺領四十石

〔滿濟准后日記〕應永三十一年十月九日、自今日御所樣〇足利義持 因幡堂御參籠、

〔薩戒記〕應永卅二年八月四日庚午、今日內近臣七人爲御惱御祈參詣七佛藥師云々、堅固密儀也、〇中略 因幡堂四、辻宰相中將、季保、

〔半陶藁 五〕題因幡堂詩 有序

洛之五條有寺、曰平等、堂曰因幡、淨瑠璃古道場也、〇中略

門外軟紅吹帽紗、東方不遠在東華、香燈月念瑠璃映、洛社一春開却花、

〔堯恕法親王記〕延寶七年四月三日、因幡堂藥師、從今日開帳、是ハ今度、主上〇靈元 御不豫之時之御立願也、著座公卿等有之、導師積善院善大僧正也、

〔擁書漫筆 三〕因幡堂藥師緣起畫詞一卷あり、詞は後醍醐天皇の書せたまへるなりといひつたふ、天明年中の火にあひて、標紙はやけたれど全體はことゆゑなし、畫も詞もともに考古の便に備べきこと多なり、

大報恩寺

大報恩寺ハ京都上立賣朱雀西ニ在リ、僧義空ノ創スル所ニシテ、元ト天台ニ屬セシガ、後眞言ニ改宗セリ、

〔雍州府志 四寺院〕大報恩寺 在北野千本地、本尊釋迦也、故俗稱釋迦堂、昔猫間中納言光隆卿家司岸高、捨千本宅爲寺、請如琳上人、事在與彥龍半陶藁大報恩寺幹緣疏、〇中略 中古天台宗也、近世板倉、伊

賀守勝重、爲京尹日、住僧違法、依之放此僧、於玆附與智積院僧正玄宥、爲眞言新義之道場、而爲代々能化退隱之地、寺產有百石、

〔雍州府志 五寺院〕大報恩寺　相傳、求法上人義空、承久元年、假構小堂、安一佛十六弟子像、一說、貞應二年、義空俗姪奥州秀衡、爲上人建大堂、嘉禎二年、奉綸命弘通大小乘三宗、貞治二年二月、等持院尊氏公、降府命令行涅槃講、自是爲常典、

〔山城名勝志 二洛陽〕大報恩寺 千本釋迦堂也、在上立賣朱雀西、元天台、近世眞言、方丈云養命坊、佛語心論口決云、自古而修涅槃會、故俗云修遺敎之寺、又云北野釋迦堂、秀吉公及築聚樂之城、破山門取一切經、納北野經藏、減千石寺產、但與百石云々、

〔國花萬葉記 二上山城〕瑞應山大報恩寺 千本釋迦堂寺領百石中

用明天皇の御草創、今の本堂は藤原秀衡建立して、如珠上人を請す、此地に猫間中納言光隆卿の家有、本坊を用明坊と名付、每年二月ニ遺敎經會有、智積院の僧衆勤之、

〔大報恩寺文書〕顯敎密宗　勅願所大報恩寺養明坊

一大報恩寺者、用明天皇御建立也、二尊百濟國佛工彫刻、云行基作唱謨也、付爲鎭守五所之靈神、號多喜宮、本尊釋尊幷十大弟子之尊像也、中興開山者、出羽國雄勝郡千福里住人藤原忠明子息也、實名義空上人、承久元年之比也、幷諸末寺、內野經王堂、號願成就寺、北野輪藏堂、號學藏坊者也、

一松殿基房公、法性寺關白二男攝政太政大臣從一位、御隱遁、而其比迄、寺領數多、其目錄別紙在之也、

一攝津國時枝庄相傳系圖開發領主源康基、日野中納言兼光卿女子、姉小路大納言公宣卿室、實文卿、姉小路三位、法名了空、聖勝、法觀上人、讓得時枝庄、融聖、明源上人、建武三年九月廿七日、下賜安堵院宣者也、自其以後、代々系圖別紙在之也、

一御代々御綸旨、御判、御下知數通在之、本知殘分、則太閤之御朱印迄、無恙當知行仕者也、

一奉祈一天太平之御願、被下御祈願之御綸旨、就中始置法華三昧之勤行幷遺敎經、於于今無怠轉、抽誠精所也、

元和元年七月廿五日　　大報恩寺役者

〔午陶甕一〕大日本國山城州平安城千本大報恩敎寺幹緣疏 幷序

夫本寺者、求法上人義空插草之地、俱舍、天台、眞言、三宗弘通之靈場也、高堂可安者、本師釋迦文佛、左輔右弼、欽光慶喜、前疑後丞、鶖子釆菽、十大尊者、像設儼然也、月月黑白、說圓頓妙戒、以布饒益有情之化、蓋利末法、莫先毘尼焉、按寺古記、上人生緣羽州、其母禱醫王善逝、夢吞日輪而誕焉、志學之歲、發大願曰、創一精藍以報四恩、報恩之號、權輿于此也、其後、爲求勝法、出本州赴關左、薙落受戒、求法之名、輝光于此也、而未知宗之所歸、一夕夢遊叡岳、學台宗定光智者、奮夢如合符節也、爾來孜孜乾乾、掩稽古窟者有年矣、屢謁石淸水北野廟天王寺、以祈冥助、意在得佛法相應之靈地也、猫間中納言光隆卿家卒、有岸高者、信男也、規千本地、以捨上人、承久三年、假構小堂、安一佛十弟子像、貞應二年、欲建大堂、櫰柳山委、鏈鑿谷響、而所謂大光柱者、無所取材、實闕典也、衆工拱手、未如之何、時攝陽尼崎、有鬻材富賈曰成金者、得一異夢、金色白眉老杜多、告曰、我洛陽北隅、見創精藍、汝所藏巨材、有可以爲大光柱者、爲我沾諸、成金許諾、乃以大報恩寺印、刻其木頭而去、覺後視之、印文粲然、成金感歎不已、入洛尋之、乃千本大報恩寺也、事與夢脗合、而夢中老杜多者、十弟子第一尊摩訶迦葉也、容貌一無差者、奇哉、成金不勝喜躍、所諾之材、悉奉施焉、於是、大堂不日而成、嘉禎元年、忝承綸命、弘通大小乘三宗、鬱爲望刹焉、上人又刻多聞天像、一百日懇求、感得佛舍利五粒、因整法儀、供養者一千日、奇瑞不一、載在古記云、貞治二年、等持大將軍、〇足利尊氏降府命、命本寺、行涅槃講、遂爲常典、昔廣相公、特推台緘、講筵化儀倍舊、加之飜蓋大堂、金碧一新、前代王臣歸仰、表表乎人耳目也、經應仁文明之大亂、佛宇神祠、鮮次於洛東西者、舉燬于兵燹矣、況乎本寺者、舟岡山構後、大内野橫前、此則戰場、彼則賊壘、荒烟衰草、過者皆泣、而歸存其間者、本寺大殿、與北野古廟而已、雖云神物護持、實爲佛法靈驗也、而北野廟、今茲春、爲草賊所火、歟耶橫耶、孰不嗟惜哉、本寺當乎此時、傾廢日久、風吹雨打、上漏下濕、若不葺補、坐見歸燼、嗚呼可喟矣、比

文明、架鐘樓修本堂亦皆四衆繫緣之力也、蓋寺無恒產費用浩繁、非單力所辨也、故今沙門某甲、持此短疏扣十方檀門在上則王公宰臣文武百僚、在下則士農工商、華夷四民、無富無貧、揮千金者、施一錢者、各各成殊現當二世勝報不亦大哉、金藏經云、修新不如補、故其福更多、佛豈欺人哉、思之、

寺領

〔大報恩寺文書〕當行方目錄

一參拾八石九升　田畠替　西院內　一四拾七石貳斗八升　本知殘分　京西內二條ヨリ三條迄ノ間

一貳石九斗　同　三本木內　一拾壹石七斗五升　本知　花園內　合百石

右全可知行候也

天正十九年九月十三日　秀吉朱印

養命坊

○按ズルニ、此他ニ元和元年七月二十七日ノ家康黑印ノ寺領目錄アリ、其高亦右ニ同ジ、

雜載

〔親長卿記〕明應四年二月十三日、今日參詣千本釋迦堂遺教經聽聞、次千本櫻一覽畢、

〔二水記〕永正十五年二月十二日、千本釋迦堂遺教經令聽聞於局彈琴、但同樂人無之、仍時々付伽陀了、

〔兼好法師集〕八月十五日夜、報恩寺にて人々あまた歌よむよしきゝ侍しを、わづらふこと有て、えまからで申つかはし侍し、

月にうき身をあきゞりのへだてにもさはらでかよふ心とをしれ

壬生寺

壬生寺ハ、一ニ壬生地藏堂ト號シ、又寶幢三昧寺トモ稱セリ、京都綾小路南、坊城西、五條坊門

ノ北ニ在リ、此寺毎歲三月念佛ヲ修シ、狂言ヲ行フ、之ヲ壬生念佛、又壬生狂言ト云フ、壬生狂言ノ事ハ、樂舞部芝居篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔山城名勝志四洛陽〕壬生地藏堂（在綾小路南、坊城西、五條坊門北、毎歲自三月十四日至廿四日修念佛、世俗曰壬生念佛、）

礦礫集云、壬生地藏堂、暮春念佛ノ時鳴ラス金口ハ、東山殿ノ御寄進ナリ、黃金ヲ多ク加ヘラレタレバ、其響他ニ異ナリ、參詣ノ人、此音ヲ聞ケバ、物憂ヲ忘テ、隨喜ノ心ヲ催スト云ヘリ、

緣起云、當寺、正曆二年草創、本願三井快賢僧都、禪林ト居厭穢土、爲養悲母棲京華云云、仰佛工定朝、奉彫刻地藏尊像、寛弘二年、御堂供養（導師本願僧都、寺號小三井寺、）白河院承曆年中幸、（于時號地藏院、）建保元年、中興大願主、和州前史平朝臣宗平、於五條坊門坊城定敷地、建立佛閣塔婆（塔供養導師、前大僧正親嚴、）法堂舍僧坊（導師勸修寺大僧正成寶、開闢初、建小堂五條壬生、及再興時、依寶改坊城、就本居稱壬生地藏、）正喜元年二月廿八日燒失、再興（導師仁和寺菩提院大僧正行遍、）正元元年二月廿八日、和州前史平宗平息、左金吾校尉政平、（此時、改號寶幢三昧寺、○中略）

緣起云

本堂一宇（本尊井四天王像、各一體、五間四面、）　阿彌陀堂一宇（丈六像、一間四面、）　釋迦堂一宇（同藥師彌陀二體、地藏二體、）　寶塔一基
（大日如來一體、釋迦文殊普賢各一體、）　大門八足（一丈金剛力士、額菅原爲長卿筆蹟、）

〔二水記〕大永八年二月八日、壬生地藏堂、悉以壞破之、只本堂南門等許殘也了、抑此堂、草創已後未及回錄、賊、古所尤可嘆之、

〔諸國圖會年中行事大成三月下〕十四日

壬生大念佛會（今日を繩張と云、十五日より廿四日まで、）洛西壬生村にあり、心淨光院と號、壬生寺と云、又寶幢寺と號す、中世三井寺に屬す、故に小三井寺と云、今南都招提寺に屬す、寺領四十六石、本尊地藏尊、稱德天皇の御宇、南都招提寺の鑑眞和尙の開基なり、（當寺に鑑眞の像あり、面貌甚だ怖べき像也、仍て世人夜叉神と云は誤也、）一條院正曆年中、快賢僧都中興す、（本尊地藏尊は、快賢僧都、佛工定朝に命じて作らしむと云、）今日より二十四日に至るまで、念佛會を修す、其間、里人堂前の舞臺に於て俳優をなす、（是を勤る者、多くは當村の鄕士なり、）其起は、後伏見院正安年中、圓覺上人、此寺

に仕し、始て融通念佛を修す、其間、衆人の睡を寤ん爲に、狂言をなすといへり、〇中略今日より二十四日に至る迄、晝は堂前に於て俳優をなし、毎夜酉の刻より、戌の刻に至るまで、金鼓をうつて、大念佛を修す、都て此狂言の所作には、深き習ひありて、就中桶とりの足どりは、地藏尊の種字をなし、其餘何れの狂言にも、秘事ありと云、是所謂遊戲三昧にして、狂言即念佛と同體なり、故見聞の輩も、其利益等しと云々緣起意

其式十四日を纜猿と號て、俳優猿の渡る所の纜を、舞臺にかくる、また面棒まきとて、長竹(シノベダケ)に、紅白の紙を卷く事あり、是を面棒といふ、狂言に用る杖なり、十五日より、毎日巳刻許より、各假面を被り、狂言をなし、酉刻に至る、廿一日は、早朝より勤む、廿四日狂言畢て、面揃とて、狂言に用る所の、假面を殘ず出し、舞臺の上に群居る、兒童に被しめ、其後棒振一人、赤熊(シャグマ)を被り、白布を以面を覆ひ、長き棒を振て技をなす、此とき、兒童等同音に、テウハサイ〳〵と囃す、是を俳優の畢とす、凡て此扮戲に用る衣裝雜具等は、時々施主ありて是を貫く、別して近年所々より、新に衣服の施主ありて、甚だ美麗と成れり、往古一年故ありて、此法會を怠りしかば、大に疫病流行甚熱し、法會の怠りたる事を覺る、是より怖れて、怠る事なしとぞ、假面に、佛工定朝が彫刻せる物三面あり、此會の場に於て、狂言の面になぞらへ、張ぬきの假面を商ふ、參詣人是を求る事おびたゞし、又狂言の桶取の竪にかけし、尺長紙をもつて、鉢卷とすれば、能頭痛を治し、其餘狂言に用る面棒、造花、炮烙(ハウロク)の破れ等を、守となし、帶る時は、疫病を除き、疱瘡麻疹輕しと云傳へ、世俗これを求る者多し、

俳優目錄

桶とり　炮烙割　花盜人　釣狐　道念　賽河原　猿　餓鬼責　熊坂　羅城門　花折　川渡り　大原女　閻魔角力　島渡り　大江山　舟辨慶　節分　夜鳥(ぬえ)　禰宜山伏　猿座頭　時女　愛宕參　紅葉狩　酒藏　腹つゞみ　葵の上　湯立　棒振　以上二十九番

此法會に、打ところの金口、音聲殊勝にして、頗名器也、銘云、地藏堂金鼓一口、正嘉元年丁巳五月、大和權守土師守貞とあり、

長講堂

名稱所在

長講堂ハ京都六條萬里小路ノ東北ニ在リ、淨土宗西山派ニ屬ス、原ト後白河上皇ガ六條殿內ニ建テ給ヒシ所ニシテ、律院ナリシト云フ、當寺ハ皇室ノ御領ニ屬シテ、每ニ其追薦ノ法會ヲ行ヒタリキ、又多クノ莊園アリテ、後嵯峨天皇以後ハ、專ラ持明院流ノ私領ト爲リ、之ガ爲ニ相爭ヒ給ヒ事モ屢ナリキ、

創建

〔山城名勝志 五洛陽〕長講堂 舊在二六條殿一、其後所々遷替、今移二六條北万里小路東一、按當堂後白河院、於二六條殿內一、御草創、元律院也、近世爲二淨土宗一、後白河院御宸翰御畫像、在二于今一、勅封、

〔山州名跡志 二十洛陽寺院〕長講堂〇中略號二長講堂一事ハ、近ハ爲二御菩提一、遠ハ爲二十方群生一、凡觸聞ニ所觸ノ者、其尊卑ヲ不レ論、亡魂ノ名帳ヲ藏メ、御回向アランノ御願ナリ、然レバ且暮ノ勤修無二間斷一、故ニ號玉フ處ナリ、白拍子妓王等ガ名ヲスラ、此所ノ名帖ニ記シ玉ヘル由、載二平家物語一、

〔宣胤卿記〕長講堂傳奏事

長講堂僧衆寺官等謹言上

右當堂御願之開基者、忝後白河院御祈願として、嚴重無雙之靈場、本尊ハ无量壽如來の三尊、幷地藏之尊容現佛を安置申され、別ハ伊勢八幡の兩神、同御勸請として、現當二世之御祈守地也、因茲公武御崇敬他に異といへども、應仁一亂以來、散在の御領知有名無實之間、僧衆等堪忍迷惑之條、可然御寄進之地も莅申べき樣に、內々衆評ありといへども、とかく年月を送り行の忠勤をいたす處也、爰丹後國宮津庄ハ、往古よりの堂領として、長日不退之佛餉、灯油、施物等に定られ候て、北山等持院本役を如形執沙汰者也、近年ハ堂中川越以下万事の諸役を償、寺用を全せしむる處近日兵部大輔貞弘、上意を掠申、御料所の御代官とがうし候間、堂中迷惑之次第也、然バ御願忽退轉に及べき者歟、事ハ何も禁裏御料所たる處ニ競望違亂何事哉、御奏聞を經られ、嚴密に仰出され

堂塔

寺領

バ、僧衆等彌御祈いたさんがため、粗謹言上如ﾚ件

三年龜〇文卯月日

〔和漢三才圖會七十二山城末〕長講堂

後白河法皇建在二御影一念佛勤修舊跡、今淨土宗西山派僧守ﾚ之

〔吾妻鏡八〕文治四年四月二十日丙戌、酉剋、親能飛脚自二京都一參著、去十三日、六條殿燒亡云云、寶藏、并御倉、雖ﾚ遁ﾚ災、於二長講堂一者災、本尊奉ﾚ取二出之一云云、

〔百練抄十一土御門〕承元二年五月十六日、今日長講堂供花也、依二六條殿燒失一、於二土御門東洞院御所一被ﾚ始ﾚ之、

〔吾妻鏡十九〕承元四年三月十三日辛丑、去月所ﾚ被ﾚ遣二明王院一之御使、歸參申云、去二日、六條殿長講堂被ﾚ遂二供養一、公胤爲二御導師一云云、

〔百練抄十五後嵯峨〕寛元三年十二月十六日丁丑、宣陽門院、令ﾚ供二養土御門東洞院長講堂一給、

〔勘仲記〕弘安七年十一月廿八日壬寅、後聞、今日被ﾚ供二養長講堂一、今度於二御所一者無二造營之儀一、於二御堂一者被ﾚ終ﾚ功、供養儀、院司民部少輔光泰奉行、

〔應仁記三〕洛中大燒之事

花洛ハ眞ニ名ニ負フ平安城ナリシニ、不ﾚ量應仁ノ兵亂ニ依テ、今赤土ト成リニケリ、〇中略大宮ニ三箇寺、悲田院、安樂光院、長講堂、

〔二水記〕大永八年二月八日、長講堂是又一圓滅亡了、歎而有ﾚ餘事也、

〔續史愚抄後水尾〕元和六年十一月□日□□、有二長講堂御影堂後白河院再造供養儀一、樂所等參向、

〔花園院宸記〕元亨三年四月九日庚午、此日以二右大將〇菊亭兼季、西園寺實兼子、一給二御書一、是長講堂領、并播磨國已下御領悉可二管領一云々、此事去年春比有二仰旨一、而兩三度固辭之間被ﾚ閣了、而自二去日比一、直有二仰猶固辭一、

而推而猶可有御沙汰之由有仰、遂今以右大將所被仰下也、凡强雖不可遁避、非器之上、旁有所思、仍去年所固辭也、今又同前、仍以大將四五度申子細之處、已治定於冥慮、又有被決之子細、方不可及子細之由有仰、然而遂不申領狀、可有御案歟之由申之、及晩大將退出、於永福門院御方〇後伏見院御母猶申子細、而又直及種々仰、仍愁以可領狀歟之由申入之、雖然猶有所思、不申院御方御返事也、 十一日壬申、以俊光有申入旨、今日白地御幸今小路殿也、即又可參之由有仰、仍所參也、猶俊光一二度御問答、依有申入旨、播磨國熱田社暫猶如日來可有御管領、於長講堂者、猶所申無勅許、早可令管領云々、此上不能申議、事治定了、旁以有所思、仍再往固辭、然而仰旨嚴密、有其恐之間、愁以領納也、委細不能記耳、 十五日丙午、長講堂管領間事、閑廻思案之處、猶不可然之事等是多、仍以俊光委細申入、又召右府〇九條房實之處、灸盛爛之上服藥之間、參入不可叶之由申之、仍俄向菊第、委細仰之、具可申入之由申之、先日御幸之時、仰趣語之以外參差之子細有之、仍猶固辭之由可申入之趣仰之、以大將御問答、以前領狀之由被思食之由有仰之由語之、是太以參差也、以大將仰之時、可申子細之間、兼日御問答之時、所存不及委細也、仍領狀之由被略歟、以外事也、委細仰含之、入夜歸來、此事後日種々予申子細、仍遂止了、聊有所思固辭也、此事左右有難、世上沙汰云々、然而有所思、是又非一旦之私曲、仍遂以遁避也、燕雀豈知鴻鵠之志乎、小人莫嘲之、

〔梅松論上〕二の御子〇龜山の御子孫、後醍醐院、御禪を受たまひて、元應元年より元弘元年に至る、御在位の間、今にをいてハ、後嵯峨院の御遺勅治定之處に、元德二年に、持明院の御子立坊の義なり以の外の次第也、凡後醍醐院、我神武の以往を聞に、凡下として天下の位を定奉るをしらず、且ハ後さがの院の明鏡なる遺勅をやぶり奉る事、天命いかむぞや、たやすく御在位十年を限に、打替打替あるべき規矩を定申さむや、しかれば持明院十年御在位の時は、御治世と云、長講堂領と云、御滿足有べし、當子孫登位の時は、いづれの所領をもて有べきや、所詮、持明院の御子孫、すでに立

坊の上は彼御在位十年の間は、長講堂領を以、十年、龜山院の御子孫に可レ被レ進よし、數ヶ度道理を立て問答に及ぶといへども、是非なく、持明院の御子、光嚴院立坊の間、後醍醐院逆鱗にたへずして、元弘元年の秋八月廿四日、ひそかに禁裏を御出有て、山城國笠置山へ臨幸あり、

〔光明寺殘篇〕官軍可レ存レ知條々

一長講堂領以下、本所各別庄園等、不レ可レ致二濫妨一、

〔宣胤卿記〕長講堂傳奏

九月廿一日、供僧祐舜、信直朝臣等持二參之一、

長講堂僧衆寺官等謹言上

右當座大破事、自二應仁一亂刻一、連々被レ侵二雨露一、令二朽損一之間、舊院樣御時雖二歎申一、依レ不レ被レ加二御修理一、忽本御堂令二顚倒一畢、自二其砌一、御本尊丈六阿彌陀像、幷觀勢三尊、地藏等雖レ奉レ移二置御影堂之內一、狹小之間、蓮臺以下奉二取放一之條歎而猶有レ餘者哉、殊近日御堂破壞之間、爲二舊院樣御佛事一、被レ加二御修理一、御本尊被レ奉レ昇二蓮臺一者、公私可レ爲二大慶一者也、次御領等雖レ有二名無實一、御本役以下如二先規一可レ有二其沙汰一之由、被レ成二下御奉書一、可レ致二催促一、所詮以二此旨一被レ經二御奏聞一、被レ全二修造同知行等一者、彌爲レ抽二御願精誠一、粗謹言上如レ件、

文龜元年九月日〇中略

九月廿四日進レ之、昨日他行之故也、

かしこまり候て、うけたまはり候、

長講堂の御すりれう千疋、つけられ候べきよし仰下され候、めでたく存候、やがて申つかはし候、御れう所ゑかく〳〵とも存候はで、御佛事なにかのさしあたりたる御事ども候はんずるに、かやうに仰つけられ候、ありがたく存候、越前の御れう所の事、いせんくはしく勸修寺中納言に申候つること、さりぬべき御使まかり下候て、申さだめ候はではかなう申候事はかたく存候、たゞ狀などにては、ことごとしく申し候とも、そのゑゐしも候はず候、さいゑよ胤御使にまかり下候て、申さだめにてあさくらに生口をもさせ候て、まいらせ候、忠節と存候、そのとしの御ねんぐ候はぬ

什物

さきにあさくらなくなり候て、うちの者はからひ候て、まづ三千疋まいらせ候をれいに仕候て、たゞかやうに候可候、ことには御れう所の名のみ計にて候つる、三千疋ばかりの事にて候はゞ、申つかはし候程もさうい候まじく候、かやうの事は、一たんと御使もくだり候やうに候はではと存候と、御さたも御心もとなく存候て、御わたくしまで入候、御ついでによく〳〵御心へ候て、御ひろうまいらせ候、

堂修理料事、可ㇾ被ㇾ付二千疋一之由、如ㇾ此被二仰下一候、廿六日可ㇾ被二遂執一之由候也、恐々謹言、

九月廿四日（〇文亀元年）　清高

大藏大輔殿（〇中略）

尋下御長講堂領丹後國宮津庄事、亂以前者、每月――疋、（年中分二万四千疋）亂中國方違亂已來、年中万疋、自ㇾ等持院執沙汰、頭方彼寺知行之故候、以二此庄役之儀一於二御堂一勤行事、一日御祈、十三日御本願講、十五日本尊講、廿二日稽古講、―講以上每月之儀候、總而年中長日之例時懺法、佛供之僧衆、不斷之勤行候、等持院僧御堂參勤事儀、以二此旨一可ㇾ預二御披露一候、仍粗言上如ㇾ件、

年（〇文亀三年）四月日　衆僧等

〔和漢三才圖會七十二末山城〕長講堂　在二五條下寺町一　寺領二十石

〔康富記〕嘉吉四年二月卅日庚戌、早朝罷二向院廳定直宅一、（樋口東洞院）依二招引一也、先詣二長講堂一、堂前之松樹者、故官務彥枝宿禰所二殖進一也云々、參二御影堂一、（後白河法皇）庭田中將被ㇾ語云、每月十三日御靈供供進之時、殿上人爲二巡役一御陪膳參入也、山科流ト綾小路源家流ト許參ㇾ之、其外不ㇾ可ㇾ叶之由被二定置一也云云、御影者、崇光院殿御代被ㇾ付二勅封一、其後未ㇾ被ㇾ開ㇾ之、院ならでは無二御拜事一也、御鎰開役者も不ㇾ拜事也云云、後白川法皇御自筆御畫像也云云、

〔月堂見聞集十〕享保四己亥歲

一此度長講堂開帳ニ付、所々ニ出ス札、

勅許

後白河院御影堂本堂御修復ニ依之、當三月十三日巳刻、御遷座供養御法事、法皇御自畫之尊影幷寶物等、從同十三日卯月四日迄、御開帳也、

月　日　　長講堂

寺院

〔續史愚抄 後西院〕明曆三年三月十一日甲寅、長講堂、後白河院御影、自公家修覆訖、返賜于寺家、去年五月所被召云、

〔宣胤卿記〕長講堂傳奏

廿五日、長講堂長講衆事、以文申入之、

散書也長講堂のちやうかう衆の事、豪尊のぞみ申候よし、修南院僧正かやうニ申候、これは久しく闕にて候程に、供僧中より申候て、かやうニ申候よし申候、修南院ハ長講堂の修理の別當にて、かやうの事もとり申候規式ニて候、この豪尊ハ山門の住侶にて候、このよし御心え候て、御ひろう可被下候、かしく、

のぶ胤

裏書ばかり也勾當内侍どのへ御房へ

勅許之由、有御返事、

長講堂長講衆事、以良海法印闕所被補大法師豪尊也、可令下知給之由被仰下候也、恐々謹言、

八月十八日　宣胤

修南院僧正御房

參考

〔猪熊關白記〕正治三年三月十三日癸亥、此日、長講堂御八講結願也、有御幸、〇後鳥羽巳刻許著束帶、如恒、固文表袴、蒔繪劔、紺地平緒等也、相具馬、隨身、府生以下、褐衣、襖袴、壺胡籙如例、番長二藍狩袴如例、依甚雨、各著壺脛巾、

也、移馬舍人裝束、色々亦下給之、殿御共參、院、午終出御、寄御車於西面妻戶、內藏頭隆衡朝臣、副御車轅、頭中將通具朝臣取御劒入御車、殿下(○藤原基通)參御車簾給、余(○藤原家實)於門外騎馬、內大臣同供奉、於六條殿寄御車於中門廊、殿下參御車簾給、則事始、

〔百練抄 十一土御門〕承元四年三月二日、今日被供養六條殿內長講堂、仍上皇(○後鳥羽)有御幸、

〔百練抄 十五後嵯峨〕寬元三年十二月十六日丁丑、宣陽門院(○後白河皇女覲子)令供養土御門東洞院長講堂給、又有曼陀羅供養事、御導師行遍僧正、女院有御幸、右大臣(○藤原兼平)已下參入、

〔增鏡 十一草枕〕文永十一年(○中略)本院(○後深草)は故院(○後嵯峨)の御第三年の事おぼし入て、む月のすゑつかたより、六條殿の長講堂にて、あはれにたうとくをこなはせ給ふ、

〔光嚴院御記〕元弘元年十一月十三日甲申、自今日於長講堂供花、是每年秋季分也、去九月、依天下之亂延引、今月行之、而御堂事、內々仰合武家之處、所々惡黨猶未靜謐、旅御所尙暫可有御用意歟云々、西園寺大納言申之、　十六日丁亥、今日自地幸長講堂、爲供花也、

〔園太曆〕貞和三年五月廿八日、抑明日長講堂行幸(○光明)也、上皇(○光嚴)不可御幸、此上、御輿中門下御之儀不可有之歟、其儀何樣候哉、有勅問、仍云、引勸寺門行幸儀、相尋匡遠、清澄等了、請文到來之間進上了、其次大別記之、行幸之時、御輿寄事、公泰卿覺候語之、其說申入了、　廿九日、抑今日行幸長講堂、是官司修理御方逢云々、　九月六日、自今曉長講堂供花被始行云々、仍上皇(○光嚴)御幸也、如法密々拂曉可幸之由、兼有沙汰、而及未剋不及御車寄沙汰云々、如何、

〔太平記 四十〕中殿御會事

貞治六年三月十八日、長講堂ヘ行幸アリ、是ハ後白河法皇ノ御遠忌追貴之御爲ニ、三月マデ御逗留有テ法華御績經アリ、

〔深心院關白記〕文永二年三月九日戊寅、長講堂御八講初日也、仍余著束帶、參六條殿、(其次、先參□□院帶□也、藥師)

名稱
所在
創建

堂撤之、

〔花園院宸記〕正中二年十一月三日己酉、今日、御月忌於長講堂被行之、此間有沙汰被仰合人々也、舊院見○伏御素意、於安樂光院可被行之由也、而後堀河院御八講於此道場被行、如何之由有沙汰、又如當時者、被行御八講之條可見苦、修理人難事行歟、仍先於長講堂被行之、修理以後、可被渡安樂光院歟之由有沙汰、但定資卿、度々被改道場不可然、可爲安樂光院之口申修理、又可被行之由申之、然而修理以後、猶可有沙汰之由治定、仍先今日於長講堂被行之、

清淨華院

清淨華院ハ常ニ略稱シテ淨華院ト云フ、京都京極土御門ニ在リ、向阿ノ開基ニシテ、向阿ハ舊ト園城寺ノ僧ナリ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕清淨華院　在寺町通今出川下所（初在土御門烏丸之西）　淸和天皇勅願（往昔禁裏佛殿、故無寺號山號、）　慈覺大師建立　中興開山　源空上人、又中興向阿上人、　淨土宗四箇之一本寺　坊舍十九院、（万日寺二院、）

〔山城名勝志三洛陽〕淨華院（元在土御門烏丸西、今遷京極土御門北、淨土宗四箇本寺一也、淨土宗鎭西六派、京都三箇、三條道光　一條禮阿　木幡慈心　關東三箇　白幡寂惠　藤田性眞　名越尊觀）

後愚昧記云、淨花院淨土宗寺也、向阿上人開基也、（舊在二條万里小路）

（傳曰、向阿、姓源氏、武田安藝守時綱子、貞和元年六月二日示寂、歌人新千載集作者、）

〔眞如堂緣起山城名勝志所載〕向阿、（元圓城寺住侶、號淨花房證賢、）弘安十年、發心して離山しけるが、洛陽にいで、花開院に隱遁す、其後に、淨花院を開基して號是心上人、

堂塔

〔建内記〕正長貳年七月十日、淨華院佛殿上棟也、造營以後未遂、此節依御奉加所周備也、佛壇同致沙汰云々、早旦上棟之時分、予引送馬者也、（月毛）置鞍當座引廻之、以代物二百疋内々渡之了、其外女性等面々分百疋、依師弟致賀禮、國繼馬一疋出之、（代百疋、内々渡寺家云々）後聞、自仁和寺宮被引御馬、（置鞍）其外自所々引之云々、自室町殿直向寺門賀之、抑自仙洞有女房奉書、被遣御馬於寺家、但代貳千疋折紙也、則傳進之、當代之眉目、万歲之佳瑞、名利相兼門中成御祈禱之勇之由、長老等照上人幷門中面々畏申之趣、種々奏聞了、長老追被參申者也、殊更御結緣之處、如此畏申、御本意之由有勅答、

〔親長卿記〕文明十九年八月三日、今日淨花院本尊遷座也、亂後無佛殿、今度如形新造造畢也、

〔續史愚抄〕（中御門）寶永七年十一月廿六日丙辰、清淨華院阿彌陀堂造畢、上棟云、（基長卿記）

寺領

〔寺鑑〕下 淨土宗　　紫衣　京都淨華院・

御朱印　高五拾石

緇載

〔國花萬葉記〕（山城）二上 清淨華院（○中略）

諸院菩提所

敬法上人塔（龜山院戒師）　上人ハ寺中松林院開基、後方丈ニ移ル、　等熙上人塔、當寺三世ノ住職也、後圓融院、後小松院稱光院三帝ノ御戒師、又黑谷中興師、　入江殿塔、三時知恩寺、或ハ入江殿ト稱ス、攝家ノ息女多住尼トナル、淨花院ノ住職戒師タリ、　峯松院塔、甘露寺前亞相嗣長卿也、　瑞光院塔、葉室前亞相顯成卿、雲晴ト號ス、　龍雲院塔、山科言綱卿也、同淸陽院（言經）　同華岳院（言繼）　同韶景院（教利）　同岳春院（言經）　眞空院塔、河野家公福卿也、　慈順院塔、淸水谷家實任卿也、　香林院塔、姉小路公景卿也、　同梅樹院（淸俊卿）　同正儀大夫（實道卿）　峯松院塔、勸修寺嗣長卿、一岌ト號ス、（○前ノ甘露寺嗣長）ト、法名實名同、甚不審ナリ、後日糺スベシ、　曉覺院塔、松木宗保卿、喜屋ト號ス、　林光院塔、山本勝忠卿也、　淸樹院塔、圓基定卿、桃岸ト號ス、　春松院塔、贈左大臣基任公、雲岸ト號ス、　南崇院塔、贈左大臣基音公、　多

松院塔、東園中興ノ祖基景卿也、松林院塔、同賢房卿、松林創建ノ人也、建聖院塔、万里小路前房卿也、同能證院〈秀房等祇〉同崇恩院〈惟房文溪〉同松柏院〈充房潤利〉同總觀院〈兼房空月〉同松月院、〈總房雲岩〉同瑞雲院〈雅房性方〉

相國寺

相國寺ハ京都上立賣烏丸ノ東ニ在リ、永德年中、足利義滿ノ建立セシ所ニシテ天龍寺ノ始祖疎石ヲ以テ開山ト爲ス、此時五山既ニ備ハリタレバ、五山ノ第一ナル南禪寺ヲ陞セテ、五山ノ上ト爲シ、因テ當寺ヲ以テ五山ノ第二ニ爲セリ、而シテ義滿以下足利家歷代ノ位牌ハ、寺中ノ子院ニ分置セリ、中ニ於テ鹿苑院ハ、卽チ義滿ノ塔ノ所在ニシテ、當院ノ住持ハ、寺中蔭凉軒ノ住持ト共ニ、禪院ノ僧錄司トシテ、足利時代ニ在リテハ、其威甚ダ盛ナリキ、

名稱
所在

〔和漢三才圖會七十二末山城〕萬年山相國承天禪寺〈在洛陽上立賣烏丸之東〉

創建

〔空華日工集〕永德二年十月三日、應召與僧錄同參府、府君〈○足利義滿〉曰、吾新欲建小寺、去月晦日、於三會略說其事、兩和尙記否、皆曰記之、君曰、然則奏于內裏、要承天氣、今日日吉、請安寺號、僧錄曰、宜在君意、君曰、吾那得知其由乎、僧錄顧余曰、何等名可爲善、余不能卒爾而白、忽入思惟三昧、僧錄曰、君余位至大丞相、名爲相國寺如何、余不覺失笑曰、余心所趣向一與僧錄同、唐土東京有大相國寺、恰好恰好、府君大喜、余曰、寺號或有四字者、有六字者、又奏承天氣、喚作承天相國可乎、府君僧錄皆肯之、

〔空華日工集〕永德二年十月二十一日、參上府、府君〈○足利義滿〉出先國師和歌墨蹟而讀之、且問新寺相國殿宇、大小安衆幾個、修禪辨道等事、或五十人、或百人、要選僧侶共住、吾以道服不時入寺行道、是吾建寺本意也、余因白云、昔先代〈○北條〉時、關東造立建長圓覺等寺、安衆幾乎一千人、先帝創建南禪、天龍亦如是、府君但建大伽藍、準相洛五山、勿以事小刹、府君曰、吾本乏貲財、欲建大伽藍、効須達長者、必見笑

於旁、觀者矣、余曰、不然、府君但令願力堅固、縱雖今生不成、在他生而必成就、古人曰、佛法無多子、久長難得人、又曰、古人有三生作浮圖者、君聞喜曰、吾嘗竊作此念、然恨無人勸、今聞斯言、吾所願也、夫豈不進承乎、府君於是有欲建大叢林之志、余又白云、殿下位極人臣、祿重泰山、所禱壽量也、而今崇建佛寺、進敬僧法、如此、延年之術莫大焉、殿下一人發心、乃天下之人發心也、凡匹夫之善惡、止其一身而已、殿下所行善惡、天下所系、可不愼哉、今殿下好善如此、天下之人皆好善始於此矣云々、（中略） 三年十二月十四日、一品（足利義詮）忌入府、府齋罷、君引就鹿苑而道話、君問先祖昔開天龍基時事、余曰、先公特爲後醍醐天皇而所建立、初當開基址時、先公伯仲（尊氏直義）自擔土者三次、先國師（疎石）作對、君又問南禪開基事、曰、余凡雖聞其由、而未詳之、亦未見南禪建立記文、南院行狀等、然略欲陳余所聞而已、龜山法皇與大明國師（普門）嘗有香火之契、於是欲建大叢刹、然大明國師未及開其基而入滅、南院國師（祖圓）應詔剏建、法皇製錦簀、作土籠、與南院作對、運土三次、法皇褒臣從侍者、其與南院聽叫作對而擔之、府君聞而喜甚、及夜自鹿苑入新寺、退僧喝召家臣、乘月普請、君且笑曰、何必用南禪錦簀之製、即命作柰籠、躬親搬土、命余作對、擔者三次而後、君把兩籠、合作一簣而運之、君命畠山將監典廐、與余之聽叫作對、三次運搬、蓋是倣法王從臣、與南院聽叫之例也、預役者、玉堂仲氏、山科中將、日野兄弟、武田、下條等、自餘不記、

〔翰林胡蘆集〕散説

明德三年壬申八月二十八日、奉勅而慶讃相國寺、爰按吾山剏造、永德三年癸亥、公年二十六歲、親搬土築基、請普明國師爲開山、而師固辭、推天龍國師爲之始祖、而以第二世視事、未幾請老、於是請空谷師（疎石族姪妙葩）領相國事、自永德癸亥至明德壬申、僅歷十稔、而飛樓湧殿、幻出夜摩覩史、因奏師高行于朝、秋八月召對內殿、賜徽號曰佛日常光、常光披先國師慶讃天龍日所搭之衣、就覺雄寶殿陞座說法、公以大將軍率文武官落新寺、一時勝會也、

〔相國寺供養記〕明德三年歲次壬申八月二十八日丁丑、天顏快晴、秋氣淸爽、今日、萬年山相國承天禪寺供養也、兼被尋日次於刑部卿安倍有世卿、吉曜之由擇申之、去廿五日、先被成准御齋會宣、上卿左大將〇藤原實直、職事藏人左少辨藤原宣俊也、行家司右兵衛權佐重房、万里小路大納言息也、參仕公卿等、奉今旨悉相觸之、殿上人者、前左京權大夫惟宗行冬朝臣、爲御布施取催之、依爲本所職事也、隨兵、帶刀、衛府等者、飯尾美濃守貞之、中澤次郎左衛門尉氏綱、兩人相催之、寺家方事、以宗西堂源逢、西堂中淵、西堂良芝、西堂有濟、西堂周崇、西堂梵晃、西堂如像、都聞等、執沙汰之、剋限可爲卯一點之由被相觸、侍所畠山右衛門佐郎等數百人、著甲冑警固總門脇門左右番屋、勢多大夫判官大判事中原章賴、著布衣候山門西方守護之、万里小路大納言、雖可爲御寺、先參御寺可奉行之由、被仰出之間、早參、今度御次第自執柄被作進之、〇中略當御代延文以來三十餘年、囊弓矢而風塵不起、買牛犢而田業克修、遠方近國之民擊壤歌、堅甲利兵之士高枕樂、舊多逆臣雖有犯上之亂、一時被加誅罰、万邦悉馬靜謐、彌奉恐武威、無不戴仁化、久輔佐王道、御歸依佛法之間、當寺雖爲大伽藍、此七八年之間、成風之功、不日而終、昔者竹園、槐門、棘署、蘭若、結宇數百間、今者金殿、玉堂、朱樓、寶閣、周垣廿餘町也、〇中略翌日被送御布施、導師　鵞眼三千貫　砂金百兩居銀折敷　鞍置馬十匹　御劍一振金作　御衣五領

五山十刹等　各鵞眼五千疋　御馬一疋

但南禪德叟和尙、掛額法事御導師、仍万疋云云、

於導師御布施者、一物無受用、悉寄進當寺、

〔相國考記〕應永三年六月二十三日、新開三世如來殿、舊之佛殿、號覺雄寶殿、慶讚之疏云、准三宮道義、重開萬年相國洪基、落成三世如來大殿、仰賛本師釋迦如來、西方無量壽佛、當來下生彌勒尊佛、

〔豫章記〕其後永德二年、後小松院御卽位、此年同又相國寺御建立間、當國〇伊豫ヨリ、過分ノ材木等御進上有ケル也、諸大名、悉北山ヘ被移ケルニ、京都ハ只六角ト河野ト依爲不辨遲滯シケルヲ、細川

堂塔

家ヨリ河野依有野心如是也ト巻說シケル二、○下略

〔臥雲日件錄 六〕文安五年八月十九日、予○北禪 又問鹿苑院殿於此移宅之事、曰、創基恐在于泉州合戰之前一兩年歟、初命諸大名之士役于土木、獨大內義弘曰、吾士以弓矢爲業而已、不可役于土木、卽義弘深逆鈞旨之濫觴也、經營未畢時、令考其費、則二十八萬貫也、

〔相國寺供養記〕明德三年歲次壬申八月二十八日丁丑、今日萬年山相國承天禪寺供養也、○中略 所造之殿門等、

排門 妙莊嚴城 總門 万年山 山門 相國承天禪寺門前、有池有橋、 佛殿 覺雄寶殿有之、東西有廊、 土地堂 冥貴 祖師堂 密付 法堂 雷音堂 庫院 香積院

僧堂 選佛堂 方丈 浴室 宣明 東司 西淨 講堂 鐘樓 塔頭 鹿苑院、有三重塔婆、寶幢院、大智院、常德院、雲頂院、○中略

〔翰林胡蘆集〕散說

六年○應永 九月、於相國寺、慶讃七重大塔、其高三百六十尺、較之慈恩塔、則彼不及此者百六十尺、可謂彈壓前古、常光師代公製疏曰、奉三寶弟子源義滿、頃日逆臣作亂、義士致忠、劍戟交鋒、宛親共殞命、肝腦塗地、魂魄無所歸、因茲、義滿特生悲心、拔濟幽苦、仍集一千僧衆、同音諷經云々、由是觀之、營造大塔者、專爲追薦亡魂也、同十一年四月、復於北山建七層大塔、公謂近習臣曰、天登乎吾、以功德善根也、大哉善根、至哉功德、

〔兼宣記〕應永十年六月三日、入夜甚雨雷鳴、雨脚聊休止之時分、相國寺大鐘頻有聲之間、乍驚立出寢所、欲相尋子細之處、相國寺大塔炎上云々、凡迷惑無極者也、先揚鞭參室町殿之處、柳營已令出門給之間、不及下馬則參御供、入御相國寺、此時分御塔已倒了、依餘煙勝場院已燒亡、如今者、寺中難遁歟之由有沙汰、頃之予歸蓽、雷火無疑云々、雖爲相國寺々中別郭也、奉燈無之云々、旁以雷火之由謳歌、自第三層火出來、隨見付僧達等馳走無其詮云々、天災也、人力不覃者哉、勝場院燒失外、寺中無爲云云、所天之令然歟、珍重々々、

〔吉田家日次記〕應永十年閏十月二十五日己亥、今日大塔敷地普請、天龍寺僧衆勤仕之、諸大名已沙汰之、南禪寺僧同參勤之云云、相國寺塔婆回祿之後、被改彼地、可被建立北山云云、以外之大儀歟、

〔看聞日記〕應永廿三年正月九日、戌刻雷電暴風以外也、此時分、赤氣耀蒼天、若燒亡歟之由不審之處、北山大塔(七重)爲雷火炎上云々、雷三度落懸、僧俗番匠等捨身命雖打消、遂以燒失、併天魔所爲勿論也、去應永七年、相國寺大塔(七重)爲雷火炎上、其後北山ニ被遷之、造營未修功之處、又燒失、末代不相應歟、法滅之至可悲可歎、聽又相國寺ニ被遷可被建立之由、則有其沙汰云々、

〔薩戒記〕應永卅二年八月十四日庚辰、未始剋、北方有火、柳原邊云々、早鐘聲頻聞、令下人見之處、相國塔塔中賢德院云々、亂風忽起、飛炎及數町、常住院雲頂、鹿苑等院悉燒亡、其後火付相國寺僧堂、自僧堂付總門、次方丈、次法堂、次佛殿、次山門、次風爐及鎭守八幡宮悉燒、北風頻吹、遂吹付法界門(在一條北向、號妙莊嚴城)、彼大路東西小家等悉燒、予(○中山定親)亭頗危、仍女房等乘車向新善光寺(一條大宮)、記錄等大略渡他所了、(○中略)此火、自賢德起云々、抑相國寺者、鹿苑院入道大相國(○足利義滿)建立、自口年草創之處應永元年之燒亡、其後又造營、于今不周備、但七堂悉被造營了、所々額承定國師(道號絶海、諱聖國師也、)筆也、此寺爲五山第一、仍以南禪寺爲五山之上也、今化一片煙、可惜可悲、後聞、僧三人、喝食二人燒死云々、依之諸人無不觸此穢、大略天下不淨云々、今日馳參內、院之人々或衣冠或直衣、但內府(○藤原滿季)德大寺大納言(○實盛)著布衣參內、雖不昇殿不可然歟、予車進內裏了、寺中燒殘所々、勝定院、大德院、大智院、法住院、大幢院、崇壽院、輪藏、此外少々相殘云々、本寺中寮々一字無之、又大鐘燒了云々、此鐘者、南都元興寺鐘也、中比、鬼神依突此鐘、仍人成恐不突云々、彼寺荒廢之間、故鹿苑院相國取上、被釣此寺、凡就件鐘有子細等云々、今已燒失、可悲之、(○又見滿濟准后日記)

〔蔭涼軒日錄〕永享七年七月廿二日、當寺僧堂立柱、八月三日可無住持之故、以十一日入院可相易之事伺之、雖然立柱日可擇十一日以後之由被仰出、(○中略)廿三日、當寺僧堂居礎、擇八月三日立柱、

寛正四年正月廿二日、法界門再興、幷馬場可被靜訟之事、以飯尾左衛門大夫可命于盛都聞之由被仰出也、〇中略 廿八日、法界門幷馬場之事、如舊可成之事、餘談之中被仰出也、 廿九日、爲法界門合力、公方段錢幷關所可被寄之事伺之、〇中略 二月七日、法界門修造、以公方段錢可被寄之分、與伊勢守評之由、且披露之、〇中略 四月三日、法界門東邊一條面、可被返下于寺家旨申之、卽御領掌也、

〔續史愚抄後土御門〕文正二年〇應仁元年十月四日丙申、相國寺燒亡、自二日至今日火滅云、但七重塔婆一基殘云、

〔應仁記三〕相國寺塔炎上之事

文明二庚寅年十月四日ノ初月、一天クモリナカリケルガ、月山ノ端ニ懸ホドナルニ、乾愛宕ノ方ヨリ揺曇、大雨車軸ノ如シ、雷電掩耳拉目モ甲斐ゾナキ、良有テ、相國寺七重ノ塔一基、去々年燒殘テアリケルニ、雷落カヽリ燒上、櫓番衆見テ申ケルハ、猿ノ如ナル物、塔ノ重々ニ火ヲ付ケルニ、燒ケルトゾ申ケル、時節到來ハ、遁ナキ事トゾ申アヒケリ、

〔蔭凉軒日錄〕文明十六年十二月廿一日、又爲相國寺小方丈造立御奉加之事、以住持幷評定衆連署、訴訟之趣白之、先是建仁寺東福寺兩方丈敗壞之故御奉加事、久雖望之、兩寺之儀者、爲修理也、相國寺事者、兵火以來、一柱片瓦亦無之、故先以急伺相國之訴訟之由白之、堀河殿含胡之、

〔厳助往年記〕天文廿年七月十四日、晴元方人數出張、〇中略 都合三千許云々、〇中略 三好方松永兄弟〇中略 都合四萬人許有之云々、〇中略 晴元方之衆ハ相國寺陣取之處、從諸口責入、終日終夜相戰ト云ヘドモ、下衆不從其理、雖然多勢之上、從方々懸火間不叶、相國寺至晩天取去云々、其跡ニ懸火諸塔頭伽藍悉一寺滅亡了、

〔慶長日記一〕慶長十年、此年相國寺ノ法堂建立ス、是自大坂秀頼公、一万五千石依合力也、

〔慶長日記二〕慶長十一年四月、相國寺三門建立、是ハ去壬寅、備前國金吾〇淺野長政果給、已後上リ時餘米二万石、羽柴三左衛門借用之通を、今相國寺ヘ、從家康公直ニ令寄進給、是ヲ以テ此三門を立ル

也、

〔續史愚抄 靈元〕寛文七年三月廿三日丁卯、爲法皇御願被建相國寺開山堂、此日被供養、勅會、有樂、公卿大炊御門大納言經光已下三人著座、奉行院司藏人右少辨資茂、○資茂卿記、法會記、永貞卿記、

寺格

〔日本略記〕一五山之事、京の五山は、天龍寺、相國寺、建仁寺東福寺、萬壽寺、

〔空華日工集〕至德三年六月一日、少刻、府君○足利義滿臨寵、點心罷、茶話曰、新寺佛殿既成、去年有安座點眼、得列位於五山之中、則吾建寺之本意也、余曰、最可矣、君曰、然則除得一寺、若或除萬壽而添相國耶、其末、然但以相國爲準五山耶、抑亦不除萬壽而爲六山耶、余曰、皆弗可也、萬壽古刹也、不可除、相洛今有準十刹者、無準五山者、六山亦本無其例、唐國在五山之上者、但陞南禪位、爲五山之上、補入以相國不亦可乎、府君甚喜、

寺領

〔國師日記〕當知行目録

一貳百九十石六斗	城州	一九石四斗	西岡上久世
一四百八十四石六斗四升	寺戸	一七十一石三斗	山內
一八十二石五斗二升	花園	一五十石九斗	谷山田 西賀茂
一百九十六石七斗六升	西院口	一拾二石三斗四升	千本船岡廻
一五十壹石七斗九升九合	三本木內	一四十一石七斗八升三合	西京
一五石貳斗六升	深草	一四十五石五斗	東九條
一十九石三斗	同所	一貳百石	市原野
一百石	靜原		

都合千六百六十貳石壹升貳合

右永代可全領知之狀、如件、

慶長六年五月廿二日　　大御所樣御直判

相國寺

〔國師日記〕一爲城州東山常在光寺屋敷幷山林替地、於朱雀西院之内、百石所寄附也、永進止不可有相違之狀如件、

慶長八年癸卯七月廿九日　　右大臣御直判

相國寺

右貳通ハ、當御代御直判也、

參詣

〔滿濟准后日記〕應永三十一年十月廿九日、今日相國寺御幸、○後小松、未半剋御出、御車大八葉、御下簾等如常、御牛飼九人歟、遣手一人、著紫狩衣、自餘直垂、悉縫物直垂也、召次十餘人、御車御簾被下之、御車、次ニ將軍宰相中將殿御供奉、○中略、於山門御下車、相國寺長老參テ、聊示申參向體、則退出、次佛殿へ渡御、御歩義、室町殿樣内々又御引導被申、次於佛殿御棧敷構之、兼日用意也、則渡御御棧敷、次藥師如來トテ寶號ヲ唱事在之、能聲二人各西堂、一人芳西堂、一人光西堂云々、衆僧七百餘人云々、同音助音、藥師如來後、大悲呪、消災呪、次廻向、次又法堂大鼓鳴之、衆僧自佛殿渡法堂、次此間ニ自御棧敷御出、於佛殿本尊前御燒香云々、次又法堂御棧敷へ入御、御歩義、次長老自方丈入法日、行者四人燃灯亭前行、侍者五人召具之、次登法坐說法云々、

〔蔭涼軒日錄〕永享十一年十二月晦日、來年御成始之事伺之、以先規正月十八日可有御成之由有命鎌倉五山、各使后堂首座獻堵物以致禮謝、建長、圓覺則五千疋、淨智、淨妙、壽福則三千疋也、○中略、午時、當院幷勝定院御燒香、鎌倉五山所獻堵物可充當時山門要脚之旨被命、

子院

〔山州名跡志〕二十一、洛陽寺院　萬年山相國承天禪寺

足利家堵所

雜載

鹿苑院、安ニ義満公牌一、法號鹿苑院道義、　勝定院、安ニ義持公牌一、同勝定院道詮、
長德院、安ニ義量公牌一、同長德院道基、　普廣院、安ニ義教公牌一、同普廣院道惠、
慶雲院、安ニ義勝公牌一、同慶雲院道春、　慈照院、安ニ義政公牌一、同慈照院道成、
常德院、安ニ義尚公牌一、同常德院道怡、　大智院、安ニ義視公牌一、同大智院道存、
法住院、安ニ義澄公牌一、同法住院道舜、　萬松院、安ニ義晴公牌一、同万松院道照、
光源院、安ニ義輝公牌一、同光源院道圓、　靈陽院、安ニ義昭公牌一、同靈陽院道柱、
林光院、安ニ義嗣公牌一、同林光院道純、

〔山城名勝志 二洛陽〕蔭凉軒。（或云、初義満建ニ鹿苑院一以來、住ニ此院一者、爲ニ僧錄司一、與ニ蔭凉軒一同掌ニ五山事一、五山出世長老西堂、因ニ[illegible]蔭凉一以言ニ上之一、而賜ニ公帖一、）

〔本朝高僧傳 三十五淨禪〕京兆萬年山相國寺沙門妙葩傳
釋妙葩、字春屋、自號不輕子、甲州人、〇中略康曆元年、〇中略明年正月賜ニ徽號一、勅書曰、〇勅書略左丞相義満源公、奉ニ勅總ニ僧錄司事一、本朝此職、權ニ輿于葩一也、

〇按ズルニ、僧錄司ヲ金地院ニ移シヽ事、金地院篇ニ詳ナリ、

〔嚴助往年記〕大永七年二月廿五日、相國寺鹿園院炎上、付火歟云々、

〔蔭凉軒日錄〕文明十七年十二月廿五日、大雲御影、幷龜山法皇御像、涓ニ今日一奉レ移ニ大雲庵一、

〔和漢禪刹次第〕萬年山相國承天禪寺〇中略諸塔頭〇中略
一山派
普廣院。（舊號乾德院、觀仲和上、諱中諦、嗣ニ夢窓一、〇中略）　勝定院。（絶海和上、南禪靈岩院下住之、）

〔蔭凉軒日錄〕文明十八年七月十三日、八鼓以前行ニ鹿苑一、〇中略奉レ待ニ台輿一、卸ニ台輿一則愚前引ニ入于御棧敷一、〇中略又問曰、今闔寺之衆幾多、答曰、二百人許、在ニ邊土一者相加、則五百人許在レ之、又問曰、亂前者幾多、答曰凡八百人、

名稱 所在 創建　沿革 宗派　寺格 寺領 寺職

等持寺

等持寺ハ、京都二條南萬里小路西ニ在リ、足利尊氏ノ開基ニシテ、疎石ヲ以テ開山トス、十刹ノ第一タリ、足利氏代々ノ追薦ハ、皆此寺ニ於テ行ヘリ、

〔山城名勝志四洛陽〕等持寺(中略)今按、二條南万里小路、號等持寺町、

和漢禪刹次第云、開山夢窻國師、舊號鳳凰山、義堂和尙住持時去此、(〇註略)十刹第一位、

〔翰林胡蘆集〕勝軍地藏造冑劍擁光供養

長享元年、歲舍丁未、九月某日、大檀越征夷大將軍源府君、(〇足利義尙)出官庫財送寺、命工修飾勝軍地藏尊像、(〇中略)

謹按、此像之始、元弘建武之間、仁山大相公、(〇足利尊氏)馬上而取天下、心誓謂、若開吾運可必建三寺、然而新造未集之國、無所取財、且以字之雙寺者爲額、等持寺是也、(〇中略)因以大願王爲殿內本尊、又塑此像安置左脇、

〔後愚昧記〕永德元年十二月二日、可行八講、(〇中略)於等持寺行之、件寺當時禪院也、元來號淨華院、淨土宗寺也、向阿上開山也、淨花院、當時在土御門室町也、

〔康富記〕寶德二年七月十日壬子是日、等持寺(三條坊門万里小路)佛殿立柱上棟也、公方(〇足利義政)并管領(〇細川勝元)ヨリ被引馬云々、

〔撮壤集上寺院〕十刹(京師并諸國及甲刹)

等持禪寺(禪宗)

〔寺社分限記三注相宗〕京師十刹也、黑衣著色袈裟也、(〇〇〇〇十刹各寺西堂之位)

佛國派

一三百廿六石

舊號鳳凰山　　尊氏公御菩提所　　等持寺

開山夢窻國師

天龍寺相國寺代替一年宛輪番勤之也、

〔空華日工集〕永德二年四月十九日、僧錄曰、大慈院無田地食邑恒產、是之非人所爭、令予居等持官寺、一夕宿疾發、雖欲退居洛下無一宿地、今此院幸無希望者、何其辭讓哉、余尙不肯矣、

〔佛智廣照淨印翊聖國師年譜〕建武三年丙子、師諱中津、字絕海、○中略明德二年辛未、是歲七月十六日、退等持寺、移住北等持院、以公命也、

〔翰林五鳳集〕暮春、北寺看花、時住等持寺、　　蘭坡

天公省事巧相違、北寺花多南寺稀、百万買隣今不惡、袈裟角裏落紅歸、

〔後愚昧記〕永德元年十二月二日、可行八講、○中略於等持寺行之、

〔薩戒記〕應永卅二年五月二日辛未、等持寺御八講初日也、○中略參八講堂、二條南、万里小路西也、

〔翰林胡盧集〕寶篋院殿年忌拈香

大日本國山城州、京之等持禪寺山門、長享改元蒲月第七日、伏値寶篋院殿瑞山大居士○足利義詮捐館之辰、預於斯日、嚴設台位、排備燈燭爐瓶、住持僧某、拈香法語、隨恒例也、大居士、當國家新造之日、以等持大相公家督、握鈞軸、莅斯民、可謂有功天下、不啻功天下、抑亦有功宗門、

法興院　積善寺　附入

法興院ハ京都二條ニ在リ、一條天皇ノ正曆元年ニ、藤原兼家ノ建立スル所ニシテ原ト村上

天皇ノ御弟盛明親王ノ邸宅ナリシト云フ、

積善寺ハ、法興院内ニ在リ、一條天皇ノ正暦元年、藤原兼家ノ二條ノ邸宅ヲ佛殿ト爲セルモノナリ、

名稱所在

〔伊呂波字類抄 保諸寺〕法興（ホコ）院 正暦二年辛卯七月供養

〔拾芥抄 下本諸寺〕法興院 二條北、京極東一町、大入道殿第、後爲レ堂、

〔山城名勝志 三洛陽〕法興院 拾芥抄云、二條北、京極東、本號二東二條一、二條關白傳領、大入道殿第、後爲レ堂、

創建

〔榮花物語 三樣々の悦〕かくて大殿〈○藤原兼家〉十五の宮〈○盛明親王、村上帝御弟、〉のすませ給ひし二條院を、いみじうつくらせ給て、もとよりよにおもしろき所を、御心のゆくかぎり、つくりみがゝせ給へば、いとゞしうめをもをよばぬまでめでたきを御覽ずるまゝに、〈○中略〉二條院をばやがて寺になさせ給つ、もしたいらかにもをこたらせ給はゞそこにおはしますべきなり、〈○中略〉七月〈○正暦元年〉二日うせさせ給ぬ、たれも哀にかなしき御ことをおぼしまどはせ給ことかぎりなしことし御年六十二にぞならせ給ける、〈○中略〉二條院をば、法興院といふに、此御いみの程、おほくの佛つくりいて奉りて、寢殿におはしまさせ給て、〈○下略〉

〔百練抄 五堀河〕永長元年六月廿四日、前大相國〈○藤原兼家〉供‐養法興院、堂炎上之後、申‐請受領功‐所‐建立‐也、又被レ始二八講一、

雜載

〔大鏡 五太政大臣兼家〕この殿法興院におはしますことをぞ、こゝろよからぬところと人はうけ申さゞりしかど、いみじうけうせさせ給て、きゝもいれでわたらせ給て、程なくうせおはしましにき、御ものいみのおりわたらせ給はんとて、おはしましてはいかゞあると、御うらをせさせおはしまして、そのたびほごゐんにて、御やまひづきてうせさせ給へるぞかし、むまやの馬に御おいじのせて、あはたぐちへつかはしたるが、あらはにはる〴〵とみゆるなど、おかしき事におほせ

られて、月のあかき夜はげかうしもせでながめさせけるに、めに見えぬ物のはら〳〵とまいりわたしたりければ、さぶらふ人々はおぢさはげど、殿はつゆおどろかせ給はで、御まくらがみなるたちをひきぬかせ給て、月見るとてあげたるかうしをおろすは、なに物のするぞ、いとびんなし、もとのやうにあげわたせ、さらずばあしかりなんと、おほせられければ、やがてまいりわたしなど、おほかたおちゐぬ事ども侍りけり、さてつゐにとのばらのにもならで、かく御堂にはなさせ給へるなめり、

〔百錬抄一條四〕正暦二年七月、法興院供養、 四年六月廿五日、關白供養法興院内三昧堂、

〔日本紀略一條十一〕寛弘三年十月廿八日丁酉、左大臣〇藤原道長於法興院万燈會、

○

積善寺

〔山城名勝志洛陽三〕積善寺今按、押小路河原、有積善寺南大門等田字、

靑蓮院門跡次第云、茲源大僧正、積善寺別當、

〔百錬抄一條四〕正暦元年五月十日、入道太政大臣〇藤原兼家以二條京極第爲佛閣、號積善寺、〇法興院同所歟、〇又見日本紀略、

〔榮花物語見はてぬ夢四〕かくて攝政どの〇藤原兼家の法興院のうちに、別に御堂たてさせ給て積善寺となづけさせ給て、その御堂くやういみじくぞいそがせ給、

〔扶桑略記一條二十七〕正暦五年二月廿日、關白道隆供養積善寺、安置金色丈六毘盧遮那佛像一體、脇侍釋迦藥師各一軀、梵王帝釋四天王各一軀、圖繪釋迦一萬體、書寫大小乘經妙典、先公入道大相國〇藤原兼家以忠事君、以信歸佛、即卜勝地、以立道場、積善寺是也、草創以後二三年間、墻壁先成、不日之功、堂閣始稀、如雲之構、豈圖大厦之基未半、厚夜之駕早催、爰有精舍、稱法興院、斯乃先公開放之地、不日所改成也、林鶯百囀、暗添歌曲、岸柳千條、漫助舞腰、已上

〔本朝文粹 五奏状〕爲關白內大臣〇藤原道隆請以積善寺爲御願寺狀　江匡衡

請准先例以積善寺爲御願誓護國家

一可置年料諸國講讀師事　一可置年分度者三人事　一可置三綱十禪師事

右玆寺、先公入道太政大臣〇藤原兼家在世之日、卜東郊吉田野所建立也、當爾之時、怪異頻示、既知此地之不宜結構、不幾遂遭所天之長逝、臨命之間、所誡造寺之事爲先、因玆尋興福寺之例、移土木於他所、遍法興院之傍、混風流於同居、斯乃一懷先公起居之難忘、一取微臣往返之不遠也、嗟呼風樹一擺、年華五改、春雁驚喧、猶妬大厦之遲成、秋砌螢亂、空悲常燈之未挑、朝務爲之或懈、夜眠自然易寤、爰能事纔畢、適爲伽藍構雲之甍、暗摸上天知足之様、滿月之相、自出西土毗首之心、攀林花而散香、雖禮諸佛之容、臨池水而拭鏡、恨隔亡父之影、臣朝家之恩溢身、不可不報、尊親之命銘骨、不可不陳、若不藉莊嚴之美、謂先公何、若不廻長久之謀、謂後代何、今所爲御願、蓋償先志、抽新誠也、抑雖有寺、無法不能守也、乃造一切經、雖有法無人不能弘也、乃置阿闍梨、可有綱維住持之職、故定三綱十禪師、可有修學出身之道、故請度者講讀師、昔郭子之立祠堂、偏只報恩謝德、今微臣之興佛寺、抑亦移孝爲忠、望請鴻慈曲垂矜照、准先例以件寺爲御願、興隆佛法、誓護國家、功德無邊、善根無量、謹請處分、

正曆五年二月七日　關白內大臣正二位藤原朝臣

〔帝王編年記 十八後一條〕長元四年辛未、積善寺燒亡、自燼火中、最勝王經一部十卷、觀音經一卷、遙飛落淸水寺瀧上、權別當覲慶尋落所追取、安置寶藏、端少燒損云々、

法成寺

法成寺ハ、後一條天皇ノ治安二年ニ、藤原道長ノ建立スル所ニシテ、寺內ニ金堂、五大堂、藥師

名稱	所在創建

堂、東北院等ノ諸堂アリ、金堂ニハ高サ三丈二尺ノ大日如來ノ像ヲ安置ス、東北院ハ一條天皇ノ皇后上東門院ノ建立スル所ナリキ、此寺今廢ス、舊地ハ京都京極ニ在リ、

〔伊呂波字類抄保諸寺〕法成寺 後一條院御宇寛仁元年建立、阿彌陀堂、同四年供養、藥師堂、治安元年辛酉十二月二日、供養、西北院、同二年壬戌、東西二塔井講堂、十齋堂、法華堂等供養、万壽元年十月十八日、法成寺内、供養金堂藥師堂、康平元年戊戌二月廿三日、法成寺燒、同二年己亥十二月十五日、阿彌陀堂、五大堂、眞言堂供養、治暦元年乙巳十月十八日、金堂、藥師堂、觀音堂供養、燒亡之後造立、永久五年塔火事、長承元年壬子二月廿八日、五重塔供養導師忠尋、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕法成寺 在京極東近衛北
後一條院朝、御堂關白道長公建立、治安二年成、落慶導師院源、(延暦寺座主、慈惠之弟子、)七堂大伽藍、其金堂安置三丈二尺大日如來、一一蓮花葉上有百體釋迦、其餘花美不可言、(東北隅有東北院、上東門院建之、近世遷東山眞如堂乾、)今僅存礎、

〔榮花物語十五疑〕この御なやみは、寛仁三年三月十七日よりなやませ給て、同廿一日に出家せさせ給つれば、日ながく覺さるゝまゝに、さるべき僧だち殿ばらなど、御物がたりせさせ給て、御ここちこよなうおはします、いまはたゞいつしかこの東に御堂たてゝ、すゞしくすむわざせむ、となむつくるべき、かくなんたつべきなどいふ御心だくみいみじ、かくて日ごろになるまゝに、御心ちさはやぎて、すこし心のどかにならせ給て、きのふけふぞ、みや〳〵御かた〳〵へわたらせ給、殿のおまへ(○藤原道長)今はおこたりにて侍り、大宮(○一條中宮彰子)中宮(○後一條后威子)とくうちいらせ給へ、さう〴〵しくおはしますらむと、そゝのかし聞えさせ給へど、大宮はなをしばしと心のどかにおぼされたり、中宮ぞいらせ給、殿は御堂をいつしかとのみおぼしめす、このよの事はたゞ此御堂の事ばかりおぼしめさるれば、攝政殿(○藤原頼通)もいみじう御心にいれてをきて申させ給、(○中略)かくて世をそむかせ給へれど、御いそぎはうら吹風にや、いまは御心ちれいざまになりはてさせ給ぬれば、みだうの事を覺しいそがせ給、攝政どのくに〳〵までさるべきおほやけごとをばさ

る物にて、まづこの御堂のことをさきとつかうまつるべきおほせ事の給、殿の御まへも、このたびいきたるはこと〴〵ならず、この願のかなふべきなめりとの給はせて、こと〴〵なく御堂におはします、ほう四丁をこめておほがきにしてかはらふきたり、さま〴〵におぼしをきていそがせ給に、夜のあくるも心もとなく、日のくるゝも口をしうおぼされて、夜もすがらはやまをたゝむべきやう、池をほるべきさま、木をうへなめさせ、さるべき御だう〴〵かた〴〵さま〴〵つくりつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします、丈六の金色の佛を、かずもしらずつくりなめ、そなたをば北南とめだうをあけて、道をとゝのへつくらせ給、とりのなくも久しくおぼされ、よひ曉の御をこなひもおこたらず、やすきいも御とのごもらず、たゞこの御堂の事をのみ、ふかく御心にしませ給へり、日々におほくの人まいりまかでたちこむ、さるべき殿ばらをはじめたてまつりて、みや〴〵の御ふ御庄どもより、一日に五六百人の夫を奉るに、かずおほかるをばかしこきことにおぼしたち、國々のかみどももちし官物はおそなはれども、たゞいまは、此御堂の夫やく材木檜皮瓦と、おほくまいらすることを、我も〳〵ときをひつかうまつる、おほかた、ちかきもとをきもまいりこみて、ゑな〴〵かた〴〵あたり〴〵につかうまつる、ある所をみれば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみゐてつかうまつる、おなじくはこれこそめでたけれとみゆ、御だうのうへを見あぐれば、たくみども二三百人のぼりゐて、大きなる木どもにはふとき綱をつけて、こゑをあはせて、おさへさとひきあげさはぐ、御堂の内をみれば、佛の御座つくりかがやかす、いたじきを見れば、とくさ、むくの葉などして、四五十人手ごとになみゐて、みがきのごふ、ひはだぶき、かべぬり、かはらづくりなどもかずをつくしたり、又としおひたる翁法師などの、二尺ばかりの石を心にまかせて、きりめとゝのふるもあり、池をほるとて、四五百人おりたち、山をたゝむとて、五六百人のぼりたち、又おほぢのかたを見れば、ちから車に、えもいはぬおほ

きどもにつなをつけて、さけびのゝしり引もてのぼるあり、かも河のかたをみれば、いかだといふ物にくれ材木をいれてさをさして心ちよげにうたひのゝしりてのぼるめり、大津むめづの心ちするも、にしはひんがしといふ事はこれ成けりとみゆ、磐石といふばかりの石を、はかなきいかだにのせてゐてくれどしづます、すべていろ〳〵様々いひつくしまねびやるかたなし、かの須達長者の祇園精舍つくりけんも、かくやありけんとみゆるを、冬のむろ、なつの風、をの〳〵事ことなり、かゝる御いきほひにそへ、入道せさせ給てのちは、いとゞまさらせ給へりとみえさせ給にも、なをなべてならざりける御ありさまかなと、ちかうみたてまつる人はたうとみ、とをきひとは、はるかにをがみまいらす、いまはこの御堂の木草ともならんとおもへる人のみおほかり、そなたざまにおもむけば、海の浪もやわらかにたちて、御堂のものをもてはこばせ、河も水すみて心よくうかべもてまいるとみゆ、猶この世のこととはみえさせたまはず、

〔榮花物語十六本の雫〕きたのかた○道長女は、中宮○威子の姫君にさるべき所たてまつらせ給へれば、うちわたり給にしかば、あはれにこゝろぼそくてすぐさせ給、やう〳〵御法事の程もちかうなれば、院○小一條何事もおぼしいそがせ給、との○顯光の御ふなどもかゝるおりだにもとめさせ給へど、ただいまの受領どもは、たゞ御堂のことをさきとする程に、せう〳〵の所の御事をばなにとも思ひたらねど、たゞ院おはしませば、それをよろづにたのみきこえ給て、われはちごのやうにてすぐさせ給ふも、いみじうあはれなり、此宮だちのかくおいぼけておはするおとゞ一ところをまつはし、いみじき物に思聞え給へる程ぞ、あはれに心うきまでみえさせ給、

〔大鏡七太政大臣道長〕太政大臣道長のおとゞは、太皇太后宮彰子上東門院皇太后宮妍子中宮威子尙侍嬉子はるのみやの御息所の御父、○中略まづはつくらしめ給へる御堂などのありさま、鎌足のおとゞの多武峯、不比等大臣の山階寺基經のおとゞの極樂寺、忠平のおとゞの法性寺、九條殿

の楞嚴院、あめのみかど〇聖武のつくり給へる東大寺も、佛ばかりこそはおほきにおはしますめれど、なをこの無量壽院にはならび給はず、ましてよの寺々はいふべきにあらず、大安寺は都率天の一院を天竺の祇園精舍にうつしつくれり、天竺の祇園精舍をもろこしの西明寺にうつしてつくり、もろこし西明寺の一院をこの國のみかどは、大安寺にうつさしめ給へるなり、志かあれどもたゞいまはこの無量壽院まさり給へり、南京のそこばくおほかる寺どももなをあたり給はなし、恒德公の法住寺いとまうなれど、なを此無量壽院すぐれ給へり、難波の天王寺など、聖德太子御こゝろに入てつくり給へれど、なを此無量壽院まさり給へり、ならは七大寺十五大寺などを見くらぶるに、なをこの無量壽院いとめでたく、極樂淨土このよにあらはれにけると見えたり、故此無量壽院を思ふに、おぼし願する事も侍けん、

〔扶桑略記 二十八 後一條〕寬仁四年三月三日、同日、入道大相國〇藤原道長供養無量壽院、其詞云、弟子、九重儲闈、倶忝外祖之重寄、三宮揖祿、同致嚴親之禮儀、荷天之寵、誰如弟子哉、於是鳳城東郊、鴨河西畔、建立一道場、號無量壽院、成風之營、不日而就、便以安置金色丈六阿彌陀像九軀、觀音勢至兩大士像各一軀、綵色四天王像各一體、此外亦於堂々所企種々、法花三昧之衆侶、行業分時、滿月十齋之諸尊、相好列座、前今、香花幡蓋之添嚴飾、都卒天之雲不隔、苦空無我之唱妙音、安養界之風相傳、三回內職之多尊成也、併廻玉輿於露北、一善大會之准御願也、嚴儀衞於法門、何啻弟子之光花、亦非如來之面目乎、已上

〔今昔物語 十二〕於法成寺繪像大日供養語第廿二

今昔、後ノ一條ノ院ノ御代ニ、關白太政大臣〇藤原道長寬仁三年ト云フ年ノ三月廿一日ニ出家シ給テ後、□年ト云フ年ノ□月□日建立ノ法成寺ニシテ、天皇ノ御祈ノ爲ニ、百體ノ繪佛ノ丈六ノ像ヲ令書メ給テ、金堂ノ前ノ南面ニ懸ケ並テ供養シ給事有ケリ、其ノ中ニ高サ三丈ノ大日如來ノ像ヲ、飯室ノ□□阿闍梨ヲ以テ令書テ、此レヲ中尊トシテ懸タリ、其ノ前ニ長キ平張ヲ打テ、其下

堂塔

ニ入道殿ヲ始メ奉テ、其ノ次ニ御子ノ關白內大臣殿〈教通〉〇〈頼通〉ヲ始メ奉テ、左大臣顯光、右大臣公季、幷ニ納言參議ノ公卿員ヲ盡シテ、平張ノ下ニ著給ヘリ、其後ニ殿上人併著ク、亦此ノ平張ノ左右ニ、長キ幄ヲ打テ衆僧ノ座トス、其ノ南ニ大鼓鉦鼓各二ツ莊リ立テ、其ノ南ニ、絹幄二ヲ打テ、唐高麗ノ樂屋トス、其儀式實ニ珍ク興有リ、既ニ事始テ、南ノ大門ノ外ニ左右ニ幄ヲ立テ、諸ノ僧衆會セリ、唐高麗ノ樂人樂屋ヨリ南ノ大門ニ出テ僧ヲ迎フ、諸僧樂人ヲ前ニ立テ引テ入ルニ、南大門ノ壇ノ上ニ諸僧上リ立テ比サケリ見遣ケレバ、百體ノ丈六ノ佛被ㇾ懸並ㇾレ給テ、風ニ被ㇾ吹テ動キ給フガ、生身ノ佛ノ如クシテ貴キ事无ㇾ限、□□□□□□□糸幡庭ニ立並ベタル、風ニ被ㇾ吹テ動クモ目出タシ、亦二ノ大皷ノ□□□□□光ヲ放ツチ如シ、實ニ此等淨ノ淨土ト思エテ貴シ、亦僧共ノ見ケレバ、下ニ入道殿ノ御マス、上ツ方ニ香染ノ法服著シタル僧ノ居タレバ、彼レハ誰ゾ、仁和寺ノ濟信大僧正ノ在ス也ケリト思テ、皆僧共步ビ行クニ、漸ク近ク成ル程ニ、此ノ人不ㇾ見ズ成ヌ、立給ヌルカト思テ、僧共各座ニ著ヌ、誰モ皆同樣ニ見テ、兼テ香爐箱ヲ座ニ置テ、從僧共ノ居タルニ、彼ノ平張ニ著給ヘリツル香染ノ僧ハ誰ゾト問フニ、從僧等答テ云ク、而ル人更ニ不ㇾ在サズト僧共皆云ヒ嘷リケル、一人見タル事ナラバコソ僻目トモ可ㇾ疑キニ、皆同ク見レバ可ㇾ疑ニ非ズ、世ノ此ヲ聞クニ奇異也ト思フ、然レバ此レハ佛ノ化シ給ヘルカ、若ハ昔ノ大師ノ來リ給ルカトゾ、僧共皆云ヒ嘷リケル、一人見タル事ナラバコソ僻目トモ可ㇾ疑キニ、皆同ク見レバ可ㇾ疑ニ非ズ、世ノ末也ト云トモ、カク貴キ事ハ有ケリト云ヒ合ヘリケリ、定メテ後ニ入道殿聞セ給ヒケム、奇異ノ事也トナム語リ傳ヘタルヤ、

〔海人藻芥〕法成寺者、執柄御願寺也、無雙寺也、然ヲ近代令ㇾ顚倒ㇾ無ㇾ跡形ㇾ、結句寺院敷地皆成ㇾ鴨川ㇾ、而モ不ㇾ知ㇾ何處ㇾ、無念也、

〔山城名勝志 三洛陽〕法成寺〇中略

無量壽院（榮花物語云、御堂ノ西、）　金堂（榮花物語云、金堂中央、五大堂左、阿彌陀堂右、）　五大堂　藥師堂（榮花物語云、御堂ノ東西向十餘間、瓦葺、百練抄云、號ニ淨瑠）

院、(病) 十齋堂(榮花物語云、阿彌陀堂ノ東、大御堂ノ西、) 三昧堂(榮花物語云、普賢堂ノ西、中門ノ南、) 釋迦堂(榮花物語云、藥師堂よりは北のはし、大御堂の東、ひはだぶき、)
觀音堂 塔(日本紀略云、五重ノ塔、) 圓堂(元亨釋書云、僧正明快慶ニ法成寺八角堂一、) 眞言堂 總社(山槐記云、治承二年十一月十二日、奉レ使、四十一ヶ所ノ内、) 經
藏 鐘樓 戒壇 南法華堂(見ニ扶桑略記一) 南樓 寶藏 南大門(左右號門) 東面門 西面門(京極、見ニ百練抄一)

【榮花物語十六本の雫】月ごろ御堂(○法成寺)のいぬゐのかたにへだてゝ、う。へ。の。御。堂。たてさせ給へり、みなついぢをゐこめて、三間四面のひはだぶきの御堂、いとさゝやかに、おかしげにつくらせ給て、またにしのかたと、らうわたどのつくりつゞけさせ給て、十二月十よ日(○治安元年)ほどに御堂供養あり、御だうのありさま佛いとおかしげにて、三尺ばかりの阿彌陀觀音勢至おはします、

【榮花物語十六本の雫】入道殿(○藤原道長)は御堂のにしによりて阿。彌。陀。堂。たてさせ給て、九體のあみだ佛つくらせ給て、この三月(○寛仁四年)に供養せさせ給はんとて、いみじういそぎのゝしりて、宮々もおはしますべければ、柳櫻藤やまぶきなどいふ綾をり物どもをしさはがせ給、かくて此もがさ京にきにたれば、やむ人々おほかり、前大貳(○藤原隆家)もおなじくは此御堂の供養よりさきにとおぼし急ければ、この比のぼり給て、いみじきからのあやにしきおほく入道どのにたてまつり給て、御堂のかざりにせさせ給、めでたき御堂のゐとのゝしれども、世の人たゞいまは此もがさに事もおぼえぬさまなり、

【榮花物語十七音樂】かの六時讃にいひたるやうに、よるのさかひゐづかなるに、所々のみはしのかな物どものきらめきたるさへ、めでたう御らんぜらるゝに、けふは十四日なれば、三。昧。堂。には普賢講をこなはせ給を、やゝとほき程なれど、ものすむじ、ぬかづきなどするは、あらはにきこしめされて、いみじうたうとうおぼしめさるゝに、ことはてぬなりときこしめす、阿。彌。陀。堂。にとのゝおまへ(○藤原道長)おはしまして、念佛せさせ給を見たてまつりやらせ給も、此世よりゆくすゑまで、あはれにたのもしうみ奉らせ給、

〔榮花物語玉の臺十八〕にしの御門の南のかたに、檜皮ぶきのさゝやかなる御堂あり、かれは三昧堂ぞかし、いざまいらんとてゆけば、みあかしの光ほのかにみえて、轉法輪の座に僧ゐたり、普賢いとささやかにて、象に乘てたゝせ給へるも、いかめしうおはします、

〔榮花物語玉の臺十八〕御堂あまたにならせ給まゝに、淨土はかくこそとみえたり、れいの尼君だち、あくればまいりておがみたてまつりつゝ、よをすぐす尼ほうしおほかる中に、心あるかぎり四五人ちぎりて、この御堂の例時にあふわざをなんしける、うちつれて御堂に參りてみたてまつれば、西によりて北南ざまに東むきに十餘間の瓦ぶきの御堂あり、たるきのはしばしは金のいろなり、よろづのかなものみなこがねなり、御前の方のいぬふせぎは、きんのうるしのやうにぬりて、ちがひめごとにらでの花がたをすへて、色々のたまを入て、かみにはむらごのくみして、あみをむすばせ給へり、北南のそばのかた、東のはしばしのとびらごとに繪をかゝせ給へり、かみに色紙形をして詞をかゝせたまへり、はるかにあふがれてみえがたし、九品蓮臺のありさまなり、

〔扶桑略記後一條二十八〕治安元年十二月二日、供養法成堂內西北院、

〔藥師堂供養記〕万壽元年六月廿六日壬午、今日法成寺藥師堂供養、丈六七佛藥師如來、日光、月光、十二神將、丈六六觀音像、等安置堂中、破物忌參詣、入自東大門、關白左大臣內大臣、及諸卿皆著饗饌座、予加著、一巡後就食、依午時可始事也、被啓歟、關白頻被催出居、少時左少辨義忠、大夫外記賴隆、史等著出居座、數度被催、少納言經隆、基房、在殿上人座口基房著出居幄座、少納言未著之前、關白以下皆著佛前座、先是打鐘、今朝太后渡御御堂、以乾方爲御在所、衞府上達部帶弓箭、諸衞佐同、但上達部著螺鈿隱文帶、禪閤口也、民部卿俊賢只著無文幷白襲、身雖宮內司、不候啓陣云々、依以致事簡略裝束歟、講讀師講師院源、讀師扶公、乘輿有講師讀師前、五位六位者、文武官者被定歟、音樂如常、講讀師於高座邊降自輿、於舞臺西邊可下之、堂前南北造假座、爲百僧座、座前置七佛藥師經、觀音經、舞臺上左右立置花瓶火蛇之机、又座前左右立置花筥机、是常儀也、堂童子左

右各六人（之中四位各二人）唄師四人、（皆僧綱）前例二人也、新定歟、大行道音樂如恒、讃衆、次梵音、次錫杖衆、昇立舞臺之間、雨脚忽降、仍進立堂簀子、奉供養、雨脚則止、小選又降滂沱、被講讀師前机垂錦幡等、亦被禮盤半疊立、講讀師前後、（講師前、讀師後、立雨脚方、太以輕々也、）又撤舞臺庭中等机、頗以狼藉、頃之雨止、亦則降、小時止、合三箇度、其後雨止、左少將隆國（四位）就講師高座邊、仰給度者、由被修公家及宮々所々諷誦、公家宮々使被物、但太后宮無御使、依臨御也、此間著請僧饌、講師演說如例、事了、先給講師祿、（講師被物、中納言長家取之、又絹若干裹、絹四位取之、讀師被物、宰相中將兼經取、不著座云々、太絹四位取、如講師祿、）講讀師降高座、到禮盤下、拜禮退出、

〔小右記〕萬壽元年六月廿六日壬午、今日法成寺藥。師。堂。供養、（丈六七佛藥師如來、日光月光、十二神將、丈六六觀音像等安置堂中、）破物忌參詣、入自東大門、關白（左大臣○藤原賴通）內大臣（○藤原教通）及諸卿皆著饗饌座、僕（○藤原實資）加署、一巡後就食、依午時可始事也、被營歟、關白頻被催出居、少時左少辨義忠、大夫外記頼隆、史等著出居座、數度被催、少納言經隆、基房在殿上人座、愁基房著出居幄座、少納言未著之前、關白以下皆著佛前座、先是打鐘、今朝太后渡御御堂、（以乾方為御在所、）衛府上達部帶弓箭、諸衛佐同、但上達部著螺鈿脳文帶、禪閤、民部卿俊賢只著無文幷白襪、身雖宮內司、不候啓陣云々、依似致事簡略裝束歟、講讀師（講師院源、讀師扶公、）乘輿有講讀師前（五位六位者文武官者新定歟）音樂如常、講讀師於高座邊降自輿、於舞臺西頭可下之、堂前南北造假座、為百僧座、座前置七佛藥師經、觀音經、舞臺上左右立置花瓶火蛇之机、又座前左右立置花筥机、是常儀也、堂童子左右各六人（之中四位各二人）唄師四人（皆僧綱）前例二人也、新定歟、大行道音樂如恒、讃衆、次梵音、次錫杖衆（○原一字虫損、據藥師堂供養記補、）昇立舞臺之間、雨脚忽降、仍進立堂簀子、奉供養、雨脚則止、小選又降滂沱、取講讀師前机、垂錦幡等、急取禮盤、半疊立、講讀師前後、（講師前、讀師後也、雨脚方太輕々也、）又撤舞臺庭中等机、頗以狼藉也、雨止、亦則降、小時止、合三箇度、其後雨止、左少將隆國（四位）就講師高座邊、仰給度者、由被修公家及宮々所々諷誦、公家宮々使被物、但太后宮無御使、依臨御也、此間羞請僧饌、講師演說、如例事畢、先給講師祿、（講師被物、中納言長家取、又絹若干裹、絹四位取、讀師被物、宰相中將兼經取、不著座云々、太絹四位取、如講師祿、）講讀師降高座、到禮盤下、拜禮退出、今般於舞臺西

邊乘之、(如初與持來高座下、然而令持退、)次行諸僧祿了、關白以藏人資通朝臣令召別當前少僧都心譽、仰任大僧都由、次關白召右頭中將顯基密語了、顯基傳仰余云、右衞門尉宣明可敍五位者、事頗不審、仍以可仰內記之趣、達關白、有甘心、召權右中辨經輔、可召進內記事、令仰外記、關白使皇太后宮少進爲政朝臣令告宣明、宣明進出拜禪閤、次有大唐高麗舞曲、(蘇合、太平樂、龍王、鳥蘇、崑崙、八仙、納蘇利、)太平樂崑崙八仙、關白已下殿上人脫衣給之、下官不能脫、給出袙與大口、相合無爲術之上、老人脫衣可無便宜、仍召左將監光高、只給袙袖、太平樂之間執燎、樂畢退出、可然卿相爲催太后還御祗候、余退出間、少內記兼行參入、召堂南階下、仰右衞門尉宣明依法成寺堂預仕、可給敍從五位下之位記之由、令參諸卿、左大臣、(關白、)內大臣、大納言齊信、前大納言俊賢、大納言行成、賴宗、能信、中納言兼隆、實成、道方、公信、長家、朝經、參議經通、資平、通任、兼經、定賴、大貳惟憲、參議廣業、朝任、

〔扶桑略記(二十八後一條)〕萬壽四年丁卯八月廿二日、入道大相國供養法成堂內釋迦堂、十三間堂一字、中奉安置金色丈六釋迦如來像一體、左右別六尺梵天帝釋四天王像、其傍亦別同如來十大弟子八部衆形像各一體、堂之東南各飾四間、奉置金色等身釋迦尊像百體、依信心之誠自潔、毘首之功猶勝焉、別奉置金泥妙法蓮花經一部十卷、黑字同經百部千軸也、便開平座之儀、就屈請五十口之僧侶、供養演說、(已上)

〔伊呂波字類抄(止諸寺)〕東北院(後一條院御宇、上東門院長元三年八月供養、延久元年十二月廿七日置阿闍梨四口、)

〔東北院供養記〕長元三年八月廿一日壬寅、今日女院御願堂供養、拂曉女院渡給、中將騎馬扈從、件供養儀可准御齋會之宣旨、一日仰下訖、僧前令奉之、(高坏十二本、加折敷、懸盤卅前、大破子十荷、糯料米六十石、)件儲皆依定、往古不聞事也、只人々與之、今般有精料等之定、太珍事也、諷誦修了、賀茂下神宮寺幡四流令催著隨身信武送行事人所、(二流我令縫、二流中將令縫、)午口剋、三位中將同車參法成寺、法成寺內艮角新立三昧宮、(女院御願、)諸卿著座、汁物畢下箸、關白云、早打鐘畢、至今可著堂中座、卽諸卿起座著佛前座、先是證誠大僧正深覺一人

在堂中座、諸僧、(百口)十分居東在所、舍南庭、幷東西廊座、僧前經机各置法華經、(百部)堂前庭立導師呪願高座、幷禮盤、(禮盤立二階中央、高座階東西、)舞臺上立行香机、文□二□□願文呪願文、舞臺東西庭立置花宮机、大鼓立中門東西廊前、件廊爲樂人座、堂中佛前敷高麗端一枚、爲唄座、(僧正慶命、權僧正尋圓、)講師呪願乘輿、其前行各五位二人、六位二人、所謂講師前等也、(中略)卽被始念佛、關白密語云、從內以頭辨被聞云々、若有可賞進之人哉者、斯事未有一定、法成寺司山座主僧正慶命、大僧都永圓、大僧都定基也、定基者、故入道被成之寺司也、今二人者、入滅給之後寺司也、定基從彼時于今住寺、然而抽最下臈者不可賞進、又賞三人如何、大汎愛乎、總無賞與三人、此間如何、余答、此御寺中、阿彌陀堂、藥師堂、仁和寺、母后建立御堂、慈德寺、圓融寺、雲林院等皆有賞、及今時無賞何、雖有多□之難、猶不可被行乎、關白云、事尤然矣者、僧正可給封歟、永圓可給法印位歟、定基可讓人之心云々、余云、讓無便人如何、答云、最圓者、余答、最圓尤宜事也、抑只可在主上御心院御雅意歟、關白起參御前被議定歟、小時復座云、三人賞猶可有也、頭辨傳綸旨歟、不可覽出者、是念佛以前無事之間、念佛畢、頭辨傳勅語云、天台座主權僧正慶命可給七十戶封、(宣旨二七十五戶、前例數也、)大僧都永圓可給法印位、阿闍梨最圓可任權律師、大僧都定基讓、封事律師事仰同辨、法印事、先是關白云、給法印位者、至僧都可停任歟、余答云、准俗官不可停任歟、參議敍二位、中納言亦復如是、僧俗相同、理之所當、何有差別乎、如何、尋圓依申請者、僧都敍法印位任彼意樂也、其外者無所帶職直敍而已、如院源、幷石淸水司等、關白諾許可無停任□□□多政方子舞納蘇利、子舞甚美也、見人之□□□證誠大僧正深覺、講師僧正慶命、呪願權僧正尋圓、引頭前大僧都扶公、大僧都明尊、唄權大僧都定基、大僧都永圓、散花權少僧都敎圓、權律師良圓、堂達眞範、額齋、衲衆廿人、讃衆廿人、頭光慶、(東寺)蓮□、(天台)梵音廿人、頭忠命、長算□杖方算、定命、

〔百練抄 四 後一條〕長元三年十月廿九日、關白左大臣(藤原賴通)供養法成寺塔、(准御齋會)

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜五年三月十四日、上東門院供養八角堂、大僧正明尊僧正明快、共賜封戶、供養

記言、弟子玉轡落飾、新繼佛子之蹤、木叉凝誡、專守牟尼之敎、仍先公建立法成寺內、重占地形、忽結梵宇、使奉造立金色丈六阿彌陀如來像一軀、佛則兩足之尊、遙顯南方端嚴之像、堂亦八角之構、偏寫南圓靈勝之基、已上

〔定家朝臣記〕天喜六年○康平元年三月廿七日、始築法成寺檀、諸堂皆始之、阿彌陀堂、殿下(藤原賴通)令築給、仍殿下早旦御坐、次令參內給、　卅日、殿下以左中辨爲使、被告法成寺火事於木幡先公○道長御墓所、有告文、於中門被立使者、　十月廿七日、法成寺上棟立柱、已刻阿彌陀堂、藥師堂、未刻五大堂、辰刻殿下已下、率御阿彌陀堂假屋、陰陽師孝秀等候御前、申刻限成由、卽令打鼓、右近將監正助打之、次又打上棟鼓、了召大工已下給祿有差、五位大工諸大夫取之、已下御國身知家事等取之、各在工料置大工前、次御休息幕、北僧房、有饗饌、上達部、卽御五大堂、豫立幄於前庭、作法如前々出御、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平二年十月十二日、法成寺阿彌陀堂五大堂、幷眞言供養先如舊、建立无量壽院、卽奉安置金色丈六阿彌陀如來像九體、一丈觀音勢至二菩薩像各一體、彩色四天王像各一體、此中彌陀尊一體者、禪定仙院寺家之內別排禁宇、素所安置也、堂舍已爲灰燼、佛像獨避烟焰、以此一佛爲其中尊、昔釋尊之出火宅也、設譬喩於羊鹿牛之蹤、今彌陀之留月輪也、得扶持於龍象衆之力、彼示善巧方便之詞也、此顯常住不變之理也、又皇后職建立五大堂、非啻償先公之蓄懷、兼亦答弟子之厚意也、卽奉造立彩色三丈二尺不動明王像一體、丈六四大尊像各一體、專抽懇懷、敬以供養、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平八年○治曆元年十月十八日、供養法成寺金堂藥師堂觀音堂、未刻行幸彼寺、大赦天下、但雖神社之訴幷放火之輩非赦限、勸賞寺司前大僧正、明尊申立御願寺、號大安樂、寄阿闍梨三人、權僧正覺圓任大僧正、年卅五、關白前太政大臣賴通朝臣二男也、母前中書王具平親王女也、阿闍梨覺尋任權律師、依前大僧正明快之讓也、上座阿闍梨賴任補權律師、已上行幸賞

〔百練抄五鳥羽〕永久五年正月八日、法成寺東西塔南大門、幷中宮京極御堂號證菩提院、等燒亡

〔本朝續文粹十三願文〕法成寺塔供養願文　資綱朝臣

弟子南瞻部州大日本國關白左大臣從一位藤原朝臣〈某〉稽首、和南三世諸佛、側聞、造寺起塔者、以大慈觀爲先導、以菩提心爲本根、尋勝槪於累代、則栖巖之基無朽、憶微功於往劫、亦聚沙之戲不空、諸善之中莫先於斯矣、夫法成寺者、祖父入道太相國〈藤原道長〉爲志求佛道、鎭護國家、所草創也、誠是佛法中興、香花不退之道場也、而去康平年中忽有火孼、悉爲煨燼、是以先公太相國〈藤原頼通〉殊守前規、如舊造立、其未復者、釋迦堂十齋堂寶塔等也、爾時先公相議云、至于塔婆者、新加一基、宜立兩所、旨意所企、誠有以矣、伯父前太相國任彼遺訓、營造瓦葺三層寶塔二基、不日之勤未終、厚夜之襯忽促、於是弟子忝以百官之總己、苟爲一門之長者、重命巧匠、飾構甫就、露盤之在東西也、旁曜朝日曉月之光、風鐸之分左右也、自擬青龍白虎之相、倩見牢天高妙之勢、不異從地涌出之形、乃以八相之舊造、各安兩塔之新檀、又妙法蓮華經廿八品、開結二經、分其大意、毎柱圖繪、丹青交功、莊嚴盡美、非唯復寺家之舊儀、兼又償父祖之宿志也、又建立瓦葺七間四面十齋堂一宇、卽奉安置一丈六尺金色大日如來像一體、同丈六阿彌陀如來、藥師如來、釋迦如來、普賢菩薩、大勢至菩薩、地藏菩薩、定光菩薩、觀世音菩薩、像各一體、又七間四面釋迦堂一宇、安置舊像之釋迦、卽爲常住之敎主六天十大弟子八部衆等圖、加彩色、列其脇士、毎柱圖繪法花曼陀羅、毎扉圖繪十六羅漢、多聞持國天、十羅刹、哥梨底母、散脂鬼神、堅牢地神、迦毘羅神、又法花三昧堂一宇、奉安置舊像普賢菩薩一體、其圓光中新安置妙法蓮花經、其四柱間、各圖繪法花曼陀羅、又圖四面之扉、以一乘之文、堂則先後畢功、佛又新古並像、方今己未之歲、孟冬之月、特開支提之會、其輝供養之誠、槐門棘路之恭敬、抽一心而周行、羅衿薛衲之圍繞、整百徐之夏臈、更以一部之樂懸、將驚十方之佛界、吳桐越竹之沸天也、自代乾闥之妙曲、叢蘭羅菊之薰露、如供西使之奇香、況也彼公家之准齋會也、忽降鳳銜之勅命、皇后之臨梵筵也、暫移椒掖之尊儀、寔雖仁祠之光華、豈非家門之眉目乎、彼虎丘山之起金刹矣、調伎樂於漢表之雲、佛陀里之開寶龕焉、傳法味於江東之月、塔婆功德不可思議者歟、仰願三寶界會、知見證明、功德上分、先資國家、以此勝因、增其寶祚、北辰之德不

爽、南薰之化遠覃、仙院禪定福祚延長、后房儲闈之期上壽也、算過恒沙、皇子公主之爲外孫也、齡爭劫石、三公九卿、文武官僚、各趁朝闕、同遊福庭、重請答本願之厚意、飾父祖之菩提、然猶弟子久輔無爲之聖代、殊誇太平之佳名、保長生於金石之質、伴久視於松蘿之契、男女子孫、氏族群黨、一善之所及、壽命無量、乃至法界利益不限、敬白、

承暦三年十一月五日　弟子關白左大臣從一位藤原朝臣

〔殿暦〕永久五年正月八日寅剋許向宇治、依熊野精進也、女止富家、於余幷內府者、向法橋成信小阿房、午剋許爲潔齋沐浴、女房同於富家沐浴、內府又於此房沐浴之間、京方有火事、自京人走來云、法成寺塔有火、火起高倉カデノ小路出羽前司光國家、風實無術吹之間、及御堂塔、火行東及河原、中宮御堂、故六條右府堂凡上下人家、及千餘家皆燒失、法成寺塔二基、南大門、總社、南瓦垣等燒失、仍止精進京上、及秉燭參御堂、女房歸三條、見兩塔等之間神心如無、但不及阿彌陀、藥師、法華等堂、是可然扶歟、當候阿彌陀堂妻、致修正沙汰、人々申旨相分、雖然右府藤中納言等口狀有謂、仍今夜如例令行之、但呪師又大導師等之間、樂止之退出、余不參、內府同之、數剋之後退出、　廿四日、今日法成寺南大門棟上也、仍巳剋參法成寺、直衣冠、前駈衣冠、隨身ツタハバキ、車半蔀、兼參會家司職事著束帶、內府、右大將、藤大納言、源中納言、能俊別當、宰相中將顯雅、左大辨長忠等也、皆著直衣、殿上人束帶、先參阿彌陀堂、爲南廂上達部、殿上人東上對座、但余座東一間、南面敷筵、其上敷高麗端疊、副北戶主、四尺屛風、參之後、召爲隆日剋限、此間陰陽師家榮參入、爲隆申云、剋已成了、仍早仰可立柱之由、此間同阿彌陀堂南廊南妻立大鼓、行高（左近將監）打之、立柱了之後、余以下、同堂參佛前、頃之後、以同剋限巳申剋成了、如初打鼓、上棟々了、法華堂南廂故筵ヲ敷、召工等三人、著束帶著座、大工三人、著束帶著座、大工三人給被物、諸司允取之、殘祿等隨身、下家司等取置座前、其後退出、參院即退出了、佛法去廿日初之、今日御塔壇、今始修理、余退出後、工三百餘人著饗座云云、工未著饗以前、余參院了、同道人々、別當源中納言等也殿

參諸

上人兩三人有此內、

〔伊呂波字類抄 諸寺保〕法成寺（中略）長承元年壬子二月廿八日、五重塔供養、導師忠尋、

〔本朝世紀〕仁平三年十月十八日癸酉、法成寺西塔棟上也、佐渡守高階爲清所造進也、左大臣引諸卿參內云々、近日左府可令執行氏寺事之由、有龍闇之命、仍今日初參法成寺、

〔百練抄 高倉八〕承安元年七月廿七日、東北院拂地燒亡、佛經等取出、被渡西北院、件院元在法成寺中、康平元年二月廿三日燒亡、其後移立今地、上東門院（藤原彰子一條后）建立給、同年七月廿一日供養之、建立以後百十二年、　七月三十日、東北院木作始、　十月八日、今日東北院上棟、（於角堂池畔、建立一間四面精舍、安置丈六阿彌陀像、）

〔徒然草上〕京極どの法成寺などみるこそ、心ざしとゞまり、こと變じにけるさまはあはれなれ、御堂殿のつくりみがゝせ給ひて、庄園おほくよせられ、我御ぞうのみみかどの御うしろみ、世のかためにてゆくすゑまでとおぼしをきしとき、いかならん世にも、かばかりあせはてんとはおぼしてんや、大門金堂などちかくまで有しかど、正和の比みなみの門はやけぬ、金堂は其後たふれふしたるまゝにて、とりたつるわざもなし、むりやうじゆゐんばかりぞ、其かたとてのこりたる、丈六の佛九體いとたうとくてならびおはします、行成大なごんの額、かねゆきがかける扉、あざやかにみゆるぞあはれなる、法花堂などもいまだ侍るめり、是も又いつまでかあらん、かばかりのなごりだになき所々は、おのづからいしずへばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし、されば萬に見ざらん世までをおもひをきてんこそ、はかなかるべけれ、

〔法成寺金堂供養記〕治安二年七月十四日壬午、天晴、此日入道太相國建立法成寺金堂五大堂新佛開眼供養會也、准御齋會可行之由、被下宣旨、仍諸司供奉如例、依此法會、天子臨幸、太皇太后宮、（彰子）皇太后宮、（妍子）中宮、（藤原威子）東宮、（後朱雀）同有行啓、（寺本名無量壽院也、元年六月廿七日辛未卯刻、兩堂豎柱上棟、其後不日而就矣、此堂材木甚大、般車不□、鴨河之水、尋常□而每當途上之時、有河水不勞人力、曳着寺門、是天地相感歟、今日供養之次、改號法成寺、權大納言藤原卿書其額、已二點懸諸門、但阿彌陀堂稱無量壽院、以本額懸之、同稱所存也、前

一日、堂莊嚴、金堂内外懸殊勝幡花鬘代、諸堂鐘樓經藏同懸之、前庭立高座二脚、(東呪願師、西導師、)中央立禮盤二脚、庭池之南構舞臺、(通中洲、)其上北端立花机二前、中洲東西立七丈幄二宇、爲左右樂所、池四邊立龍頭懸絲幡、(關白左大臣所被調之絲幡也、美麗无比、)五大堂西南廂爲東僧座、阿彌陀堂東□廂爲西僧座、池西(大門以東)立幄、爲積諸經物之所、南大門東西立幄、爲衆僧集會之所、金堂南裳層西四間懸御簾、諸司設御座於西第四間、同間西南柱前設皇太弟御座、於西三間設太皇太后御座、南榮東第三間以東設王卿座、西廊、東第二間立大床子、爲御休息所、北庇敷内侍女藏人等座、□廊前砌敷侍臣座、鐘樓東臺下設式部彈正等座、金堂北後庭立幄二宇、(南北妻、)爲外記史幷侍從僕所、(侍從幄在東、上官幄在西、)當日寅刻發小音聲、(神分、)同刻御佛開眼、卯刻分送諸僧法服、(侍用綾羅、)僧前(太政大臣以下諸卿、任次第被調備、僧綱料也、○中略)次迦陵頻、舞了、樂船進發音聲、(廻杯樂、)唄師二人起座、各渡東西橋、經舞臺著座、(樂止、)此間左大臣奉勅語、臨於堂東南檻、召大外記清原眞人賴隆、被仰云、可召内記撿非違使者、賴隆稱唯退出、即令參大内記菅原朝臣忠貞、左衞門權佐大江朝臣保資、各承宣旨退出、是依前大相國有被奏、被行非常大赦也、大臣又召賴隆眞人被仰云、大赦詔早可下給、可令試候縁事諸司者、各召使部、召仰了、其詔書曰、

詔、朕以薄德、謬承洪基、愧君臨而及七年、思子育而愼□□、爰外祖前大相國、營道場於城東之地形、設供養於珪白之秋禮、聽善根之至焉、廻翠華而臨矣、新見土木之壯麗、更知人民之勤功、禪慮所請、唯施仁之情而已、大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、八虐、强竊二盜、常赦所不免者、咸皆赦、又薰風者應□扇惠露者欲普霑、仍資未得解由之徒、不論僧俗、同以原免、庶因功德之衆二世、將顯感動之在一天、布告中外、俾知朕意、主者施行、

次定者沙彌二口、從東西橋、登舞臺禮佛了、就案下、取火舍立、○中略

次給僧祿、(先是昇祿辛櫃、立東西僧座前、公家祿證誠上卿、自餘殿上侍臣諸大夫等諸官司大夫以下勤之、)

公家

雜載

僧綱料、白大袿、
凡僧料、白單重、
太皇太后宮
皇太后宮
中宮
春宮坊

酉剋導師呪願下高座、奏平樂、長慶樂、著禮盤、禮佛退出、樂人省寮前行如初儀、次打金鼓、此間加口分供於僧座、又公卿座同有偈、左右口發音樂、奏種々之舞、行僧布施、此間僧衆退出、時也遙收、秋月漸昇、綠池淨而如瑠璃之地、清風和而帶旃檀之香、舞人下臺、近進奏之、主殿寮供炬火、雖上界之勝事、亦以何加此乎、前大相國、榮樂無比、德化被臣、久受三代攝籙之重寄、忝爲千年聖日之外祖、爰寬仁年中出家、師眞被居相位之間、四海誰不沿恩澤、此修佛事之時、萬方誰不結其緣、唐家本朝雖多、未有如我朝相府現當相兼矣、管絃既了、鳳輦欲廻、有御送物、參既種先有賞賜、大佛師定朝被叙法橋上人位、又越前守從四位下源朝臣濟被叙從四位上、因幡守正五位下豐原朝臣爲時叙從四位下、已上二人、遣堂行事、木工大工從五位下常道朝臣茂安叙從五位上、修理少屬伊香豐高轉權少進、已上二人工也、次大臣以下、祿法有差、此間太政大臣起座、從堂後被退出、爲被候東宮御輦事也、右大臣奉勅語、臨檻召大外記賴隆眞人、被仰云、左右近衞番長各一人、近衞各三人、宜爲太政大臣隨身之由仰彼府者、賴隆稱唯退出、各召仰了、子剋乘輿還宮、有鈴奏、相次東宮還御、右大臣著左仗座、被奏下詔書、如例、大部敕書也、退召中務少輔源朝臣賴清下給了、式部丞不參、仍修理少進豐高除目、以外記令封之、大臣加封□給、外記後日可給彼省也、丑刻事了退出、

〔猪猥關白記〕正治元年四月七日戊辰、巳時許殿下基通〇藤原令參法成寺給、爲御覽修理也、次參御內云云、

〔小右記〕萬壽二年八月十二日辛酉、宰相兩度來、右兵衞督來、兩人清談臨夜漏、〇中略禪閤〇藤原道長以左

衞門志爲長令取豐樂殿鵄尾、豐樂守衞士之有指宣旨歟、陳不取詞、爲長打調衞士、遂取下鵄尾、先取一鵄尾、造木鵄尾可被置云、昨修理進豊高所申、宰相密談、件鵄尾以鉛鑄造、以鉛爲宛法成寺瓦料云云、万代之皇居一人自由乎、悲哉云々、

〔古事談五神社佛寺〕法成寺建立之時、自陽明門大路南被立南大門、近衞大路ヲ被築籠タリケリ、其時大外記頼隆眞人夢想ニ、陽明門額地ニ落タリケレバ、奇問之處、額云、吾以望東山爲命、而今依被塞大路之末所落地也云々、依此夢被寄北云々、此事見于經信卿記、

出雲寺

名稱所在

出雲寺ハ、上出雲、下出雲ノ二寺有リ、創建ノ年代詳ナラズ、傳ヘテ云フ、建立ノ後、凡ソ二百餘年、傳教大師此地ニ草庵ヲ構ヘテ住セリト云フ、此地勝地ニシテ、初メ大師在唐ノ間、天台山建立ノ地ヲ此所ニ撰ミシト云ヘリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ京都出雲寺町ニ在リト云フ、

〔山城名勝志二洛陽〕出雲寺（上出雲寺、下出雲寺、延喜式七寺之內也、今按、相國寺北照院北、有出雲寺町、〇中略）童蒙抄云、志もついづも寺は、一條京極のすこし下により、今の毗沙門堂をいふべし、　古今爲家抄云、しもついづも寺、一説下御靈、新御靈と申人も侍るにや、又云、しもついづも寺とは毗沙門堂也、出雲路よりすこし下によりたれば云といへり、出雲前司成季と云者の建立也、　同榮雅抄云、下つ出雲寺とは、上御靈下御靈とて有、是は下御靈なりと云々、又新御靈と云人も侍るにや、橘逸勢の舊跡のよし、御堂記にかけるとかや、

創建

〔出雲寺記〕出雲寺司等敬白

依舊緣記奉修春秋二季彌勒會事

堂塔

春三月十四日寺家所修、卽音樂左衞府勤修、

秋九月十四日、內藏寮所修莊嚴儀式寮勤仕、

右案舊記、是寺建立之後二百餘年、此隆奇妙事、降四種色花、或示奇瑞相、或點天台、立處得勝地、廼傳敎大師構草庵之室、住修之功年課、所謂四所點定之庭、叡岳之佛誠、移自此伽藍矣、又是會緣記云、定春三月十四日、續秋九月十四日、則晝講說彌勒經、夜頂授菩薩戒、春櫻花之時、舉寺家司修此會、卽大藏少錄小槻貞峯施入田參段佰步、卽宛其利物經年來、秋菊鮮之比、內藏寮受取、上下官人、唱爲年久、又寮起文云、始自貞觀三年、永勤仕此會、尊卑之官、上下之人、至于究仕之徒、人結三番善根、殖彌勒之臺、○中略　又左近衞府云、天慶二年誓願云、左近衞府爲彌勒會發大道心、始自先年、永加音樂之典、添歌舞之美、○中略　抑從始以降、衞及二百餘年、爰初會昔儀式、餘場歸依之人、多中會之今、莊嚴頗廢、合力之輩少、然而數歲之間、或年行講演、自送會日、或年共音樂、貴增莊嚴、如斯、○中略　始從興法之歲、至于初會之期、每年會命無闕怠、寺中平安、法音無絕、寮府安穩、○中略　今寺寮之大志、其超願如此、南無都史多天彌勒慈尊、南無常住界會諸佛菩薩、以弟子等丹誠、遂新古宿願、見聞隨喜之輩、慈尊授記、必結三會之緣、集會莊嚴之族、以如來敎化定期二世之因、乃至五趣四生三途、八難群類、普及慧日之光、悉臨覆盆之下、敬白、

延長四年三月十四日一本正曆四云々　　都維那僧泰嶠

自延曆年中至正曆四年百七十餘年、始自大寳三年至延長四年百九十三年、　　寺主僧平增○以下名略

〔山城名勝志二洛陽〕出雲寺○中略

金堂七間四面、貳重瓦葺、壹宇

金色丈六釋迦如來像一體　天皇御願　　同千手觀音像一體　皇太后宮御願

丈六彌勒慈尊像一體　一品內親王御願　　梵天帝釋四天王像各一體

雜載

講堂五間四面一字

半丈六毗沙門天像一體　大吉祥天像一體　六觀音像一體

食堂五間四面一字瓦葺

十一面半丈六觀音像一體　等身毗頭盧像一體　虛空藏菩薩像一體

鐘樓伍石納鐘一口經藏各一字、瓦葺、三重搭二基、瓦葺、安置佛舍利十六粒、寶藏三字安置一切經三部、無垢淨經一千卷、般若心經一万卷、四面廻廊

八十間、瓦葺、中門南大門二階、瓦葺、安置增長廣目二天金剛力士像各一體、

合

〔出雲寺記〕出雲寺司等敬白　注進出雲寺留記并敷地案文事

一凍間肆面貳蓋金堂壹字　瓦葺

奉造立安置金色丈六釋迦如來像壹體　天皇御願

金色丈六千手觀音像壹體　皇太后宮御願

丈六彌勒慈尊像壹體　一品內親王御願

梵天帝釋四天王像各壹體

一伍間肆面講堂壹字

奉造立安置半丈六毗沙門天一體　大吉祥天各一體　六觀音像各一體

一伍間四面食堂壹字　瓦葺

奉安置十一面半丈六觀音像一體　等身毗頭盧一體　虛空藏菩薩一體

一鐘樓經藏各一字　瓦葺

〔宇治拾遺物語十三〕今はむかし、王城の北、かみついづも寺といふ寺たてゝより後、年久しくなりて、御堂もかたぶきて、はか〳〵しう修理する人もなし、このちかう別當侍き、その名をば上かく

となんいひける、これぞさきの別當の子に侍ける、おひつぎつぐ妻子もたる法師ぞしり侍ける、いよ〳〵寺はこぼれてあれ侍ける、さるは傳教大師の、もろこしにて、天台宗たてん所をゑらび給けるに、この寺の所をば、繪にかきてつかはしける高雄、比叡山、かむつ寺と、みつの中にいづれかよかるべきとあれば、此寺、のちは人にすぐれてめでたけれど、僧なんらうがはしかるべきとありければ、それによりて、とゞめたる所なり、いとやんごとなき所なれどいかなるにかさなりはてゝ、わろく侍なり、それに上かくが夢にみるやう、我ちゝの前別當、いみじう老て、杖つきていできていふやう、あさて未時に、大風ふきて、この寺たをれなんとす、しかるに我この寺の瓦の下に、三尺ばかりの鯰にてなん、行方なく、水もすくなく、せばくくらきところにありて、あさましうくるしき目をなんみる、寺たうれば、こぼれて庭にはひありかば、童子打ころしてんとす、その時なんぢがまへにゆかんとす、童部にうたせずして、賀茂河にはなちてよ、さらばひろきめもみん、大水に行て、たのもしくなんあるべきといふ、夢さめて、かゝる夢をこそ見つれとかたれば、いかなる事にかといひて、日暮ぬ、その日になりて、午のときのすゑより、俄にそらかきくもりて、木をおり家を破、風いできぬ、人々あはてゝ、家どもつくろひさはげども、風いよ〳〵吹增りて、村里の家ども、みな吹たをし、野山の竹木たをれおれぬ、この寺まことに、未時ばかりに、吹たうされぬ、はしらおれ、棟くづれて、すぢなし、さるほどに、うら板の中に、とし比のあま水たまりけるに、大なる魚どもおほかり、そのわたりの物ども、桶をさげて、みなかきいれさはぐほどに、三尺ばかりなる鯰の、ふた〳〵として庭にはひ出たり、夢のごとく、上覺が前にきぬるを、上かく思ひもあへず、魚の大にたのしげなるにふけりて、かな杖の大なるをもちて、頭につきたてゝ、我太郎童部をよびて、これといひければ、魚大にて、うちとられねば、草かり鎌といふものをもちて、あぎとをかきゝりて、物につゝませて、家にもていりぬ、

古事類苑

宗教部四十三

佛教四十三

西本願寺

西本願寺ハ今京都六條ニ在リ、舊ト本願寺ト單稱セシガ、分立ノ後始テ東西ヲ以テ之ヲ別テリ、茲ニ其濫觴ヲ尋ヌルニ、弘長年中、開祖親鸞ノ沒スルヤ、遺骨ヲ東山大谷ニ埋シ、文永中又吉水ニ移シテ始テ一字ノ佛閣ヲ起ス、是ヲ本願寺ノ起原トス、此地ハ親鸞ノ女覺信ノ寄進スル所ナリ、而シテ親鸞ノ孫如信ヲ第二世ト爲シ、覺信ノ孫覺如ヲ第三世ト爲シ、而後覺如ノ子孫常ニ之ガ住持ト爲リ、世襲シテ以テ今ニ至ル、

文和元年、叡山ノ僧徒、大谷ノ廟ヲ毀テリ、是ヲ本願寺ノ破壞ニ遇フ始ト爲ス、是善如ノ住持タリシ時ナリ、文明中ニ至リ、又破却ヲ蒙ル、是ニ於テ住持蓮如、親鸞ノ影像ヲ負ヒテ、近江國大津ニ走リ小坊ヲ設ク、是ヲ本願寺移轉ノ始トス、更ニ轉ジテ越前ニ赴キ、吉崎ニ居リ、又河内國出口里ニ移リ、又山城國ノ山科ニ赴キ、大ニ旺盛ニ向ヒ、盛ニ堂舍ヲ興シ、四方ノ信者常ニ來集シ、其地ノ繁昌セルコト、殆ド京都ノ如クナリシト云フ、天文元年住持實如ノ時ニ當リ、六角定賴及ビ日蓮ノ黨ノ爲ニ燒カル、是ニ於テ攝津國大坂ニ移リ、石山本願寺ト稱ス、大坂ノ坊ハ、舊ト蓮如ガ隱遁ノ爲ニ造リシ所ナリ、天正年間、住持顯如ノ時、織田信長ニ攻メラレ、去リテ紀伊國鷺森、和泉國貝塚、攝津國天滿ノ諸處ニ轉ゼシカ、天正十九年豐臣秀吉ノ命ニ依リ、現今ノ地ニ遷ル、

名稱　所在　創建　沿革

顯如ニ二子アリ、長ヲ教如ト云ヒ、季ヲ准如ト云フ、顯如沒シテ教如家ヲ嗣ギシニ、秀吉命ジテ准如ヲ立テ、教如ヲシテ退居セシム、後ニ教如德川氏ニ依リテ別ニ本願寺ヲ建ツ、大谷派本願寺是ナリ、本願寺是ニ於テ東西ニ分立セリ、

西本願寺ハ龜山天皇ノ朝ニ在リテ勅願所ト爲リ、元弘中、更ニ久遠寺ト同ジク朝廷祈禱ノ場ト爲レリ、

住持ノ官職ハ、其初ハ權大僧都ニ過ギザリシガ、證如ノ時ニ僧正ト爲リ、顯如ニ至リ大僧正ト爲リ、准三宮ヲ宣下セラレ、其寺格ヲ進メテ准門跡ト爲セリ、

別院所々ニ散布シ、其數甚ダ多シ、中ニ就テ、大坂ハ西南諸國ノ咽喉ニ在ルヲ以テ、尤モ世ニ聞エ、江戸ハ幕府ノ城下ニ在ルヲ以テ特ニ著シク、共ニ住持ハ輪番ヲ以テ之ニ充ツ、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕西本願寺　在醒井通六條南七條北　宗旨　淨土眞宗

〔雍州府志四寺院〕本願寺　龜山院文永九年、親鸞上人之息女覺信尼、於大谷建立之、上人遷化後十一年也、爾後移宇治郡山科郷、又遷攝州大坂天滿宮之側、然後移京師六條、至光佐上人時、其嫡光壽、有故隱居本願寺之後東方、故號東本願寺、又稱御裏、其弟光昭、雖爲庶子、繼其統、是號西本願寺、又稱御表、又有庶流、其一爲興正寺門主、其一爲理性院門主、

〔最須敬重繪詞一〕于時建仁元年辛酉聖人二十九歲、聖道ヲ捨テ淨土ニ歸シ、雜行ヲ閣テ念佛ヲ專ニシ給ケル始ナリ、スナハチ所望ニヨリテ、名字ヲアタヘタマフ、ソノ時ハ綽空トツケ給ヒケルヲ、後ニ夢想ノ告アリケル程ニ、聖人ニ申サレテ、善信トアラタメ、又實名ヲ親鸞ト號シ給キ、シカアリショリノチ、或ハ製作ノ選擇集ヲサヅケラレ、或ハ眞影ノ圖畫ヲユルサレテ、殊ニ懇懃ノ恩誨ニアヅカリアクマデ巨細ノ指授ヲカウブリ給ケリ、サレドモ身ニ才智ヲタクハヘナガラ、コトサラニ、學解ヲ事トセラルヽスガタ・モナク、コヽロヲ淨域ニスマシムトイヘドモ、アナガチニ世

塵ヲトヲザカル行儀ヲモ表シ給ザリケリ、黒谷ノ大師聖人眞宗興行ニヨリテ、遠流ノ罪責ニ及シ時、門弟ノ上足、同科ノ沙汰アリシニ、コノ上人モ、ソノ中トシテ、越後ノ國國府ニウツサレテ、オホクノ春秋ヲ送リタマヒケリ、明師聖人歸京ノ時、オナジク勅免アリケレドモ、事ノ緣アリテ、東國ニコエハジメ、常陸國ニシテ專修念佛ヲスヽメタマフ、コレヒトヘニ、邊鄙在家ノ輩ヲタスケテ、濟度利生ノ本意ヲトゲントナリ、○中略本廟ハ、京。都。白。河。大。谷。ニアリ、知恩院ノ西ノ邊、本願寺コレナリ、根本ノ門弟ハ、モハラ東國ニミチ、枝末ノ餘塵ハ、ヤウヤク諸邦ニヲヨブ、面授ノ弟子オホカリシ中ニ、奥州東山ノ如信上人ト申人オハシマシキ、アナガチニ修學ヲタシナマザレバ、ヒロク經典ヲウカヾハズトイヘドモ、出要ヲモトムルコヽロザシ、アサカラザルユヘニ、一スヂニ、聖人ノ敎示ヲ信仰スル外ニ、他事ナシ、コレニヨリテ、幼年ノ昔ヨリ、長大ノ後ニイタルマデ、禪牀ノアタリヲハナレズ、學窻ノ中ニチカヅキ給ケレバ、自ノ望ニテ、開示ニアヅカリタマフ事モ、時ヲエラバズ、他ノタメニ說化シ給トキモ、ソノ座ニモレ給コトナカリケレバ、聞法ノ功モオホクツモリ、能持ノ德モ、人ニコエ給ケリ、カノ阿難尊者ノ常ニ佛後ニシタガヒ、身座下ニ臨デ、多聞廣識ノ名ヲホドコシ、傳說流通ノ錯ナカリケルモ、カクヤトゾオボユル、コノ上人ノ弟子マタツノカズアリ、東國ニハ、數輩ニヲヨブ、處々ノ道場、ヲノ〳〵化益ヲイタス、京都ニハ一人ノ尊宿マシマス、勸解由小路中納言法印坊宗昭コレナリ、當流傳來ノ譜系ヲバ、今師ヨリウケ、親鸞聖人ノ遺跡ヲバ、先考ヨリツタヘタマヘリ、コレ一流ノ法將、當敎ノ名哲ナリ、○中略スナハチ坊號覺惠○覺如父ト稱ス、

〔反古裏〕抑東國ヨリ御歸京ノ後ハ、扶風馮翊、トコロ〳〵ニ居住シマシマストキコヘ侍レドモ、マヅ五條西ノ洞院ニ、スマセタマフ、コレ御入滅ノ地ナリ、御遺骨ヲバ東山大谷ニ、オサメ奉リケリ、文永九年冬ノ比、ナヲ大谷ノ墳墓ヲアラタメテ、吉水ノ北ノホトリニ、遺骨ヲホリワタシ、佛閣ヲ

タテ、御影像ヲ安置シタテマツラル、本願寺ト號スル靈場是ナリ、鸞聖人ノ御娘覺信禪尼、御寄進ノ地ナリ、コノ覺信ハ、スナハチ御遺跡御相續ノ御子ナリ、御母ハ惠信ノ御房、月輪禪定殿下〔〇藤原兼〕實ノ御娘、玉日ト申セシ貴女ナリ、聖人御入滅ノオリフシハ、越後ニマシ〱ケルガ、弘長三年春ノ比、コノ御娘ノ御方ヘ、カノ御靈夢ノ記ヲシルシ給ヒ、鸞聖人、觀音薩埵ノ應現ニテ、オハシマスヨシ、同ジク法然上人、勢至菩薩ノ化身ニテマシマセシ靈告、マサシク鸞聖人ヘ尋申サセシ昔ノ事ヲシルシツケテ、都ヘノボセオハシマストナン、入西坊寫シタテマツラレケル御影像ハ、仁治三年九月廿日ノコロ、御壽算七十歲ノ御トキナリ、コレ定禪法橋ノ筆跡ナリ、今本願寺御建立ハ、文永中龜山院ノ御在位ナリ、スナハチ龜山院、伏見院、兩御代ヨリ、勅願所ノ宣旨ヲ蒙レリ、寺務ハ覺信房ノ御息覺惠法師ナリ、是モハジメハ、青蓮院二品親王尊助ノ御門人、父者日野左衞門佐廣綱、コレハ範綱卿孫從三位信綱卿ノ子ナリ、則六條三位範綱ノ弟、嵯峨三位宗業卿ノ猶子トシテ、儒道官學ノ業ヲツタヘマシマセリ、然ドモ父卒逝アリテ、光國卿ノ養子トシテ、生年七歲ノトキ、門跡ヘマイリ給ヒ、後ニハ宗惠阿闍梨ト申侍リキ、靈寺造立ノノチ御暇ヲ申サレ、隱遁ノ身トナリ、淨土門ニ入、奧州大網ノ如信上人ノ御弟子トナリ、東山ノ御本廟ノ御留守職タリ、シカルニ文永七年庚午十二月廿八日、覺如上人御誕生、所ハ洛陽富小路ノ邊ナリ、コレ鸞聖人ノ御曾孫、如信上人ノ御附屬、當流中興ノ明匠ナリ、スナハチ覺惠ノ嫡男、眞宗興隆ノ尊師ナリ、最初覺信禪尼、御置文ニハ、御影堂敷地ハ、親鸞上人ノ御門弟中ヘトアソバサレ、覺惠ニ御鑰ヲアヅケサセラレ、御門弟參詣ノ時、アマネク拜顏ノ所役タルベシト云云、然ドモ覺如上人ハ、如信上人ノ御相續トシテ、法流傳持三世ニアタリ給、コレモ始ハ、南都一乘院信昭大僧正ノ御門侶、勘解由小路法印宗昭ト申タテマツリシガ、十七歲ノ冬、如信上人報恩講大谷御在寺ノ時、面授口決ノ師弟トナリ給ヒシヨリ後、親父覺惠トトモニ、東國御修行タビ〱ナリキ、御出誕ノハジメヨリ、開山聖人ノ御再

誕ト、世モテアガメタテマツリシ善知識ナリ、其嫡男存覺上人者、法門御問答御承伏ノ義ナカリシカバ、御義絶トナリ、シバラク空性房了源汁谷佛光寺ヘイザナヒ申、自義骨張ノタヨリトナシ申セシマヽ、イヨ〳〵御不快タリシカバ、東國西國所々ニ忍ビ給、後ニハ東國ヨリ御歸京アリ、御門弟ニシタガヒ、御懇望ニヨリテ、觀應〔○一本作貞和〕ノ比、御赦免アリケリ、御舍弟從覺上人ノ御代ニハ、東山ノ御坊ノアタリ、今小路ト申所ニ、御坊ヲカマヘラレ、常樂臺ト申シ住セケリ、覺如上人御入滅ノ後ハ、善如上人御附弟トシテ、四世ニアタリ給フ、コレハ從覺上人ノ御眞弟ナリ、其御子綽如上人、越中國井波トイフ所ニ、一字御建立、瑞泉寺ト號ス、是又勅願所ナリ、後小松院ノ御宇、明德元年ノ比、造立ナリ、

〔祇園執行日記〕文和元年閏二月二日、一向宗住所可破却由、事書始到來、彼事書云、如風聞者、於法華宗者、依有退治之沙汰、悉以赴邊境畢、事爲實者神妙也、毛一向宗者、曾無其沙汰云々、所詮任妙顯寺之近例、相祇園執行、以犬神人可撤却一向宗奴原之住宅云々、事書使者一人持來、神供一前給了、三日、一向宗事、昨日事書等副狀遣目代許、他行之間、付置留寺了、　五月廿八日、大谷一向宗堂可破却之由、山門事書、此間連々到來、本所是又相待祇園歟、無左右參向犬神人之由、梶井殿公觀僧都口入狀、尙々重又靑蓮院御敎書出來、

〔叢林集七上〕祖師御墓之事

聖人ノ御墳墓ハ、文永ヨリ文明マデ、東山大谷ニ巍々トシテ御座セリ、然ルニ蓮如上人ノ御時、行化盛リニシテ、大谷ノ御本廟モ繁榮シ、參詣ノ諸人モ多カリシカバ、諸家ノ妬モ漸ク起リ、山門ノ憤リモ頻リニ催セリ、寛正應仁ノ比歟、大谷ノ御坊ニ、日華門ヲ建タマヒシニヨリテ、イヨ〳〵山徒イキドヲリヲナシテ、衆議シテ云タ、大谷ハ本門主靑蓮院ノ境内ナリ、彼祖師流刑ノ昔ヲ思フニ、此地ノ住居遠慮アルベキノ處ニ、鎭和尙ノ舊好ヲ以テ、代々雍敎ノ弟子トナリテ、門主補任ノ

子屬タルニ依テ、山門モ宥メ置ク處ニ、コノ比ノ體タラク、門下境内ノ盧モナク、日華門ヲ建ヌル條、尤モ傍若無人ノフルマヒナリトテ、山上山下ノ惡徒ソノ勢四百計リ、俄カニ大谷ニセメヨセタリ、時ニ文明三辛未年二月中旬、蓮如上人五十七歳ノ春ナリ、事スデニ卒忽タル間、防グニ不及シテ、御堂ツキニ破却シケリ、蓮如上人ハ、祖師ノ御眞影ヲ抱ヘ、忍ビ落チタマヒテ、暫ク隱レ居マシマス、ツキニ三井ノ僧衆ヲタノミ、寺門ニ入リ給ヒ、近松寺ト云フ園城寺ノ別坊ニ移ラシメタマヘリ、コレ三井ハ山門ノ手ニイハレアルガユヘナリト云云、○中略

文明一義ノ時ヨリ、願知、私ニ一宇ヲ大谷御廟所ニタテ、、住持セショリ、代々御番相續ス、シカルニ、信長公一亂ノ事故ニ、大谷ノ御境内、二度退轉セシメ、本尊幷ニ御影等深ク隱シ守ルコト、凡ソ十八年、サテソノ後、大谷ニ移シ奉ル前五年ノアイダ、粟田口村ノ檀那、大工惣兵衛ガ家ニ移シ奉リ、其後同村ノ常在光院ノ境内、常圓俗名助左衛門ガ家ニ尊影モ移シ奉ツリ、御廟骨モ彼レガ後園ニ假ニ圍ミ置奉リキ、時マタ類火ニアフテ、右蓮實證御三代ノ御書、及ビ寶物等燒失シ畢テ、大谷御坊地ハ、一亂ノ後ハ、須和殿ノ知行所トナリ、ソノ後又、御壘所伊阿彌ガ所領處トナリ、又右退轉十八年ノ間也、其時妙祐諸司代德善院玄意法印ヘ訴達シ、松田善右衛門、味岡市右衛門ヲタノミ、祖師御本廟ノ荒廢シタマヘルコトヲナゲキ、遂ニ御境内ヲ再興シ、御廟ヲ立テ、御尊骨ヲ移シ容レ奉リキ、文明根本ノ御廟地ナリ、今ノ知恩院ノ內瓜生石ノ巽、崇泰院ノ堂ノ後ニ殘ル古塚是ナリシカルニ、コノ御敷地ハ、覺如上人御草創ノトキハ、乾元二年ノ院宣、重テ嘉元元年、加賀守三善ノ傳達王法公方ノ御朱印地、本ヨリ兩帝勅願ノ本所ナレドモ、ユヘコソアリケメ、久シク御朱印絕タル故ニ、前ノ如ク、動モスレバ、展轉スルコトヲ、妙祐フカク歎キ、秀吉公ヘ訴訟シケルトコロニ、太閤ソノ志ヲ感ジ許シ給ヒ、遂ニ天正十七年ニ、御朱印ヲ頂戴シキ、ソレヨリ巳來、永ク御朱印地トナリ、又代々御朱印ノアテ所ハ、大谷道場トアリ、

〔蓮如上人遺德記〕抑稱光院〈諱實仁〉ノ御宇、應永廿二〈乙未〉洛陽東山大谷ニシテ、蓮如上人誕生シマシマシケリ、日々歲々ヲ送リタマヘリ、〈○中略〉粤ニ一ノ騷亂オコレリ、其大旨ハ、中古以來イチジルシカリシ流義、聊衰ルニ似タリ、シカレバ先師ノ出世ニヨリテ、法雨枯類ヲ潤シ、佛日四海ニアフグ、故ニ世ヲ憚リ、是ヲ密トイヘドモ、イヨ〱時機相應ノ敎ナルガユヘニ、ソノ勸化ノヒロマル事往ニ超過セリ、コレニヨリテ叡山ノ學侶、謀叛ノ逆意ヲ企ツ、ソレ聖道ノ諸宗證シガタク、末代ノ劣機ナルガユヘニ、瑜伽三密ノ月ノ前ニハ、觀想ヲコヲシ三諦相卽ノ牖ノウチニシテ、妙理ヲ顯サンコト、今ノ世ノ根機ニヲヒテハ、最モカナヒガタシ、是故ニ機ヲソムキ、時ニアラザル宗門ハイヨイヨ廢リ、敎法スデニカクレントス、シカレバ淨土ノサカンナルヲ偏執シテ、无實風聞ノ儀ヲモテ、東山大谷ノ禪坊ヲ破卻セリ、シカルニ聖人ノ影像ヲバ、輦輿ニノセ奉リ江州志賀郡大津ト云處ヘウツシ奉リ、礫屋ヲ借居奉リ、先師モ同クコノ處ヘ忍タマヒツヽ、虛ク草扉ヲ閉テ、光陰ヲ送リタマフ、其以來ハ、大津南ノ邊ニ、小坊ヲカマヘテ、御影聖人ヲモ居奉リ、御門弟ノ懇志ヲモテ、假栖ヲツクノヒ、禪室ヲシツラヒ居住シタマヘリ、カクノゴトクシテ、年序ヲ送リタマフコト暫ナリ、

文明第三〈辛卯〉ノ曆、初夏上旬ノコロ、大津ノ小坊ヲ忍出テ、北邦ニ趣キタマフ、〈○中略〉實ニ文明第三ノ御下向ハ、偏ニ眞宗繁昌ノ先蹤ナリ、〈○中略〉

同年〈○文明七年〉南呂下旬積齡六十一ニシテ、吉崎ノ禪室ヲタチタマヒ、順風ニ帆ヲアゲ、ヒソカニ若狹ノ小濱ニ船ヲヨセ、丹波ノ嶮岨ヲ通リツヽ、攝津國ヘ出タマヒ、ソレヨリ河內ノ國茨田郡中振ノ鄕出口ノ里ト云處ニ至タマヒ、幽栖ヲトタマフ事、スデニ三年ナリキ、〈○中略〉

同十年、先師六十四歲、初陽下旬第九日、河內國茨田郡出口ノ里ヲイデヽ、上洛シ在テ、山城國宇治郡小野トイフ莊、山科ノ內野村ノ西中路ニ輦輿ヲタテラレ、少時見廻リタマヒテ、シカラバ此ニ

居住シ、時宜ヲモ試ベシトテ、先小屋ヲ建タマヒ、ソノ年ハ、江州近松ノ弊坊ニテ越年シ、翌年六十五歳ニシテ、沽洗ノ比、連續シテ作事ヲ企タマフ、〇中略文明第十二（庚子）六十六歳、夾鐘上旬ノ比ヨリ、營作ヲハジメラレ、同キ仲秋ノ比、既ニ造畢ノ式ナリ、先師ノ御心ニ、歡娯ノ思深シテ、實ニ數年ノ願望コヽニ逢スト、滿足コノ時ト、歡喜ノ色外ニ現タマヘリ、其後暢月十八日夜ニ沒テ、大津ニ御座ケル根本ノ御影像ヲウツシ奉リタマヘリ、〇中略文明十四年（先師六十八歳）春ノ比、思召ケルハ、當寺ハ是忝モ龜山、伏見、兩御代ヨリ勅願所ノ宜蒙リテ、私ナラザル寺ナレバ、本堂ナクシテハ詮ナシ、然ル間、頻リニ建立ノコヽロザシ在テ、既ニ同ク中旬ヨリ相續シテ、土木ノ企ヲナシ、忽ニ林鐘下旬ノ天ニ覃テ、建立成就セリ、

〔實悟記〕一蓮如上人ハ、野村殿、大坂殿、堺御坊、越州吉崎、播州英賀、參州土呂、同鷲塚、大和飯貝、紀州黑江（文神別所）ナドハ、開山ニテ御入候、但鷲塚ハ、實如ニテ御入候歟、

〔眞宗傳法始末（蓮如二）〕六年（寛正）正月九日、叡山西塔ノ兇僧、道化ノ隆盛ヲ嫉ミ、黨ヲ率テ、大谷ノ殿堂ヲ破毀ス、越前ノ願知善ク祖墳ヲ護ス、因テ靈龕故ノ如シ、師乃祖像ヲ奉ジテ、難ヲ大津ニ避ク、既ニシテ、諸徒相謀リ、山徒ト和ヲ講ズ、爾後師諸處ニ寄寓ス、應仁元年、移テ堅田ニ居ル、二年、重テ東北ノ諸州ニ遊ビ、備ニ祖迹ヲ歷訪ス、本宗寺ヲ三州土呂ニ創ス、十月又高野、吉野ノ諸山ニ登ル、文明元年春、堅田ヲ轉ジテ復大津ニ移ル、尋テ三井寺万德院ニ寓ス、遂ニ寺ヲ南別所ニ創シ、祖像ヲ安ズ、寺衆、寺領若干ヲ割テ之ニ付ス、

〔二十四輩順拜圖會（一近江）〕近松寺御坊（大津八町にあり、西御門跡御堂、近松院と號す、）　本堂十二間四面、往古三井寺の別所院たり、御本廟第八代蓮如上人、山門の妨難に逢給ひし時、三井寺の衆徒、蓮師をかくまひ奉り、此院に入御なさせ參らせ、終にこれを寄附せられけるとぞ、

〔叢林集（七上）〕吉崎退出之事

此事實悟別記アリ、今ソノ略旨ヲイハヾ、文明七年、（但シ彼記應仁ニハ、享祿ノ比トアリ、甚不審ナリ、）初比加賀國富樫助二郎政親ト、百姓ト不和ノ事出來、ツヰニ一揆ヲナス、其企テ輕カラズ、其百姓ミナ御門徒ナレバ、宗旨ヲ思フ人、又是ヲカナシム、○中略富樫ハツヰニ打マケテ國ヲステテ、關東ヘ退キテ、彼コニテ終ニ果ラレケリ、一落ノ後、將軍（常德院殿相國義尙ナリ、）ヨリ、富樫次郎政親ガ從弟、富樫安高ヲトリタテ、マタソノ跡ヲ守護セシム、誠ニ阿毛ガ存外ノフルマイ、前代未聞ノコト也、（十三年ノ記ニ云ク、將軍家一義尙經ノ義ニテ、加州一國ノ一揆、御門徒ヲ拂ヒサルベキトノ義ニテ、加州ニ居住候御兄弟衆ヲモ、召アゲラレ候、）サレバ、國人別志ヲ存シ、武家ノ憤ヲリ、漸タセマリケレバ、明ル八年ノ秋ノ比、法眼ガ過、上人ニ及ンデ、吉崎御坊ヲ失ヒ率ラントハカリケルコト、シキリナレバ、八月下旬、夜中ニ忍ビテ出船シ、若狹路ニオチタマヘリ、サレバ五ケ年繁榮ノ靈場、一時ニ虎狼ノスミカトナレルコトコソカナシケレ、

〔富樫記〕室町將軍家御代々、富樫ノ家彌繁昌ニ相續ス、然シテ近代ニ至リ、寬正ノ比ノ富樫介ヲ泰高ト號、此人中年ヨリ病身ニテ在京叶ハズ、隱居シテ中務大輔泰成家督ヲ繼ギ、文明長祿比在京シテ公方ノ近習ニ有ケルガ、早世有テ、其子政親若輩ナレバ、家督相續ノ政道如何ト、申ス人多カリケル、然ル處ニ、泰高病氣本復シテ再任アルベキ由、永享四年ノ比、京都ノ管領細川右京大夫勝元朝臣ヲ憑ミ申サレ、既ニ上意モ宜シカリシヲ、富樫家ノ老臣モ畠山尾張守持國ヲ賴申、政親ヲ引立、守護ヲ望ミ、訴訟申ケレバ、則又政親ニ被仰付ケリ、因玆、祖父泰高ト嫡孫政親ト常ニ不快ニ過ケルナリ、然ル處ニ、洛陽山科本願寺蓮如上人北國ニ下向シ、宗門ヲ弘ム、加賀國諸侍諸民悉此法ヲ尊崇シ、皆以檀徒トナル、又同門ノ高田宗モ當國ニ在テ宗旨ヲ弘ム、此宗門憤ヲ發シテ本願、高田ノ二宗諍論ニ及ブ、既ニ訴論ヲ重テ、國主ノ決斷ヲ請フ、政親聞テ訴訟決斷ヲ遂シメ、高田宗ノ勝利トス、一向宗門徒等憤ヲ發シ、富樫殿ハ是法敵也トテ一揆ヲ發シ、諸民一同ニ蜂起セシム、政親則退治セント謀ヲ廻ス處ニ、公方義尙公江州エ御出陣アリ、佐々木六角四郎高賴爲御追伐、

鉤ノ里ニ御陣ヲ召ル、政親多勢ヲ催シテ江州エ參陣シ、戰忠アリ、公方ノ御感不斜、此次而ニ加州一向宗ノ士民一揆退治ノ御教書申賜リ、分國ヘ下向シ、近國ノ勢ヲ催サル、越前國堀江ヲ始テ上意ニ隨ヒ、政親ニ合力ス、政親ハ加賀國高尾ノ城ニ籠ル、長享二年六月上旬、一揆等高尾ニ押寄セ、日夜攻之、同九日高尾落城シ、政親自害ス、○中略政親妻ハ尾州熱田大宮司友平息女巴女ヲ成公家ノ養子ニシテ政親ニ嫁ス、長享ノ亂ニ彼妻尾州ヘ歸ル、大宮司則其息女ヲ勢州高田宗一身田專修寺ニ嫁ス、是故政親彼宗旨信仰ノ遺志ヲ繼者歟、夫ヨリ六年ニシテ永正三年八月六日、一身田ヨリ勢州、尾州、三州ノ諸末寺檀徒ヲ語ラヒ、桑子ノ妙源寺ヲ大將ニテ、越前ヘ發向ス、北國諸檀徒一同シテ越州九頭龍河邊ニ於テ合戰ス、此時本願寺方大將備後公昭賢討死ス、夫ヨリ加州ヘ打入ケルガ、又勢州方悉打負、本國エ引歸ル、夫ヨリ卅二年ニシテ、天文四年五月十一日、泰高又爲一揆自害ス、號泰雲寺、抑富樫家、崇德院天治二年三月八日加州ノ守護トナリ、下向ノ後長享二年迄繁昌也、

〔今古獨語〕大永五年正月中旬、實如上人御不例、モテノホカノ由告來タル、コレニヨテ、蓮悟、蓮慶、顯誓上洛セラレ、ソノホカ南北ノ一族諸國ノ徒衆、皆モテ來集ス、○中略カヽリシ處ニ、享祿初ノ比ヨリ、實英加州ノ所領之義申シアツカハレ、アマツサヘ太田保知行アルベキ企テ出キタル、超勝寺實顯父國ノ成敗ヲ用ヰズ、連々本寺ヘ讒訴コレアリト云々、コレニヨリテ、蓮如、實如仰サダメマシマス、六ケ條ノ御掟ヤブレ、國中ミダリガハシク、コノ御掟ト申スハ、往古ヨリ開山上人定メマシマストイヘドモ、別シテ蓮如上人吉崎御在國ノ時仰ツケラレ、カタク末代マデコノ趣キマモリ奉ルベキヨシ、御門弟ヘシメシ給ヒ、實如上人カノ御詞ノオクニ御判ヲ加ヘラレ、此旨ヲソムカン輩ハ門弟タルベカラザルヨシ、サダメマシマシヲハンヌ、コトニ去ル文明ノ比高田門弟、加州ノ諸武士ヲカタラヒ、吉崎山ヘ障碍ヲナシ、ソノワザハヒユエ、國ミダレシカバ、御門徒ノ面々、

根本ノ守護富樫次郎政親ヲ引出シ、國郡論セシメシ砌、公武ノ御本意コレニアリトテ、將軍家奉書ヲ國ノ面々ヘクダシ給ヒ、本願寺ヘ綸旨ヲナサレ、先方ノ武士本所領押領イハレナシ、前々ノゴトク門弟トシテ異見ヲナシ歸シツケラルベキ旨、右中辨政親ウケ給リテ、後正月日謹上本願寺法印ノ房ト書出サレ侍リ、又同夕慈照院殿〇足利義政御下知、其外管領以下武家公家寺社本主懇望シキリナリ、シカレドモ、コレサラニ佛法領ノコトニアラザルアヒダ、カタタ蓮如斟酌アリトイヘドモ、勅定ノ上ハ、國ノ面々談合スベキ旨内々仰セ下サレシカバ、公家心ヲ合セ、當守護政親ニ懇望セシメ、寺社本所領カヘシツケラレ畢ヌ、コレニテ諸家イヨ〳〵當家ノ義入懇アリシ事、偏ニコノ御掟ヲマモリ奉ルベキユヱナリ、シカルヲ今サラヤブラル丶義シカルベカラザル旨、最前御遺言ノスヂメヲモテ、五人衆郡郎心ヲ合セ、連々申シアゲ侍ル、シカレドモト丶ノホラズシテ、スデニ越中ノ諸侍神保椎名領中マデソノ望ヲナスヤカラ出來スル、コレニヨテ、隣國武士イヨイヨアヤブミヲナシ、諸州オダヤカナラズ、コノ旨、加州ノ老者心ヲ同クシテ本寺ヘソノナゲキヲナシ奉ルトイヘドモ、カヘリテ本寺違背ノ義ニトリナサレ、惡徒ノ讒訴アヒカサナリ、執奏ノ人コレナシ、サレバ隣國ノ武士ヨシミヲ通ジ、加越能州守護和睦ノ道ヲアツカヒ、越前ノ朝倉六郎左衛門尉敎景大將トシテ、一勢合力、國ザカヒニウチ出ヌ、コレハ松岡寺衆玄數年知音他ニコトナリ、今度山ノ内ヨリウチイリ、父法印其外一類山中ヘ召籠申セシユヱナリ、コレサラニ衆順ノノゾム所ニアラズ、シカリトイヘドモ、國ザカヒ山田ニ居住セシウヘハ、是非ニアラズ、加越國國和談ノ義、近日國ノ面々申シアツカヒ、成就ノ上ハ、眞俗ノ正路アヒタチ、本寺御一和ノ筋目申シタテ丶、吉崎再興スベキヤト、内々懇志ノ舊好申シオクリシカバ、力ナク同心セシメヌ、シカレバ詭者力ヲエテ、既ニ本宗寺實圓、下間源七頼盛、ソノ外同名諸傍輩ハセ下リ、遂慶モ子息實慶、助己下、下間上總法橋頼盛、同名次郎等、山ニオイテ、霜月十八日生害セシメヲハリヌ、父法師

ハ、十月十八日病牀ニフシテ逝シタマフ、サレバ予モチカラナク、マヅ命ヲノガレ、武士ノアハレミニヨリテ、越前ヘコエ侍リ、蓮悟ハモトヨリ能州守護多年ノ芳好ナレバ、ソノ國ニ申シツケヲレ、法徒引付ラレ、一宗ノ法度ヲ申シ談ジ、本寺御再興ノ便成ベシトテ、ソノワヅラヒナシ、ツヒニハ本寺ニ對シワタクシナキ旨アヒ達スベキ由、義統仰セ合セラルト云々シカレドモ讒者ノハカリ事、眞弟實敎ハ毒ニアヒテ命終ナリ、アハレ成シコトナル也、勝興寺實玄ハ、始ハ各同心ナリシカドモ、內緣ニヒカレ、又ハ讒者ノ調略ニヨリテ、メノ息證玄モ能州ノ張陣ナトモ力ヲ合セ、粉骨ヲイタサレシカドモ、本來心質異ニテ正義ヲ守ル人ナリシカバ、猛惡ノ輩コレヲネタミ、終ニ鴆セシメヌ、ソレヨリ後ハ、都鄙共ニミダレ、山科ノ遺坊モ回祿有シカバ、イヨ／＼敵軍威ヲフルヒ、大坂ノ靈場ヘモ諸勢ヲサシムカヘ、サマ／＼ニ御心ヲツクシ給ヒシト也、〇下略

〔蓮如上人一期記〕山科ノ御坊ハ、文明九年御建立、享祿三年〇傍書云、七月廿四日歟、ニ炎上、只五十年ノ間繁昌あり、

〇按ズルニ、山科本願寺ノ燒亡ハ享祿五年ナリ、次ニ引ク所ノ二水記ニ詳ナリ、

〔嚴助往年記〕大永五年二月二日、山科本願寺坊主〇實如死去、同七日葬送、數十萬人群集云々、

〔嚴助往年記〕享祿五年〇天文元年六月五日夜、山科本願寺坊主、〇證如其外內衆已下退出、小坂大騷動也、七月十六七日、南都興福寺院家僧坊悉放火、從本願寺張行一揆燒之云々、兩門跡其外院家坊中十七宇相殘、外者悉燒之云々、　八月十二日、大津近松見松寺、自江州六角方發向、　同廿四日、山科本願寺、同自江州發向、幷法華宗徒京數萬人罷立、合力云々、其前後大騷動無限、

〔二水記〕享祿五年〇天文元年八月十一日、洛外一向黨、悉以燒拂云々、　廿四日、早旦合戰、巳剋許攻落之、〇中略抑本願寺者、及四五代、富貴淬榮、尤寺中廣大無邊嚴莊、只如佛國云々、在家又不異洛中也、〇中略今日一時滅亡、

〔山城名勝志十七 宇治郡〕山科本願寺 ○中略

加越鬪諍記云、山科本願寺ヲ、六角少弼方、法花宗同事ニ被攻ケレバ、亞人○如實密ニ忍デ、大坂ヘゾ被落ケル云云、山科ノ寺內、一時ニ灰燼ト成ヌ、念佛三昧ノ阿彌陀堂ノ跡トテ、沙頭ニ露斑々タル、

〔祇園執行日記〕天文元年七月廿八日、抑天下將軍御二人候所ニ、同細川、モリ兩人候也、○中略カク候所ニ、山シナニ、法觀寺トイツシ、一向宗候ガ、澄元六郎ノ用トテ、津國ヘマカリコシ候ガ、又澄元ト中ワロク成ル折節、カノ一向宗都ノ日蓮宗退治候ハン由風聞候トテ、法華宗謀叛企テ、六郎ノ衆ト一所ニテ、山科ヲ攻メント云フ由、サリナガラ、法觀寺ハ、イマダ津國ニ候也、山村ト云者ハ柳本ト云シ者ノ中者也、當寺ノケン也、先威勢ヲ以テ也、

八月四日、堺ニテ、聽明殿、法觀寺ト取合レ候テ、アマタ一揆ウタレ候由キコヘ候、　七日、山村、京ノ上下ノ一揆ヲ引グシテ、ウチマワリシ候、　九日、山科破ニ、滋野井殿ノ御ウヘ保津ヨリ此方御落候トテ騷候、御座ハ山本二郎四郎所ニ御入候、

十日、今夜奈良夜中ノマヘヨリ、今日一日ヤケ候、今日、山村ウチマハリシ候テ、所々ノ一向門徒ノ寺ヲヤキ候、又山科ノ中モ打マハリシ候由申候、

十一日、山村、下京上京ノ日蓮宗町人ヲ引催、東山ヲウチマハリシ候、　十二日、下京上京ノ日蓮宗、野伏共ウチマハリ、心々セイツガイシ、野伏ヤガテ引候、　十六日、山科ヨリ將軍塚マデ、足輕カケ、マタノロシ上ゲ候、　十七日、山科ヨリ、東山ヲウチマハリシ候處ニ、彼ノ京ノ者共懸付候テ花山ノ上ニテ軍候處、山科ノ一向宗共崩候テ百二三十人討死候由申候、シカ〴〵不知候、都ノ方ハ無沙汰候間不知候、○中略

九月三日、東山阿彌陀峯ニ、篝タキ候、推ニ一向宗歟、　七日、六郎ノ衆又ハ京ノ法華宗共、又ハ西岡ノ者、皆津國芥川ノ邊マデウチマハリシ候、晝ノ四時程ニ行キ、暮ノ六時程ニ歸候、○中略　廿八日、

山崎ニ合戰候テ、朝打明ニ、京衆崩候トミヘ、甚程ニキコヘ候、山崎ノ彼方皆崩候テ、イマダ山崎ヲバ持候由キコヘ候、此崩候時、柳本ガ中山ナドト云シ者、其外ヂヤウニ死候ゲニ候、又甚程ヨリ、京ノ法華宗共、鳥羽ノアタリマデ、ウチマハリシ候、コヽヘ七時ニ歸候、時聲アゲ候、　廿九日、又朝トクヨリ、京ノ法華共鳥羽ノ彼方迄ウチマハリシ、ヤガテ歸候、　十月一日、六郎ノ衆ノ、京ニ居候、ウチマハリシ候、　二日、丹波口ニ篝タキ候、　十四日、京ニ居候、六郎ノ衆丹波へ立候、

〔蓮如上人一期記〕大坂の御坊ハ、明應五年に御建立、天正八年八月二日炎上、八十五年の間也、

○按ズルニ、山科本願寺ノ燒亡ハ享祿五年ナルヲ以テ、大坂ノ本寺ト爲リシハ其後ノ事ナリ、茲ニ明應五年トアルハ、蓮如ノ始テ別院ヲ建テシ時ナリ、

〔蓮如御文四〕抑當國攝州東成郡生玉ノ庄內大坂トイフ在所ハ、往古ヨリイカナル約束ノアリケルニヤ、サンヌル明應第五ノ秋下旬ノコロヨリ、カリソメナガラコノ在所ヲミソメシヨリ、スデニカタノゴトク一宇ノ坊舍ヲ建立セシメ、當年ハハヤスデニ三年ノ星霜ヲヘタリキ、

〔反古裏〕抑攝州東成郡生玉莊內、大坂ノ貴坊草創ノ事ハ、去ヌル明應第五ノ秋下旬、蓮如上人堺ノ津へ、御出ノトキ御覽ジソメラレ、一宇御建立、其始ヨリ種々ノ奇瑞、不思議等コレアリトナン、○中略

就中、當寺權輿ハ、堺ノ貴坊ヨリ、毎日カヨヒマシ／＼、御造營、ソノ地引ノ始、御門弟ニ仰付ラレシヲ、法安寺ノ寺僧、難ゼラレテイハク、明日ハ大惡日ナリ、ハジメテ寺場造立ノ日ニハ、シカルベカラズト、此旨森ノ祐光寺ノ先祖、內々申上ラレシカバ、如來法中无有選擇吉日良辰、佛說ウタガヒナシ、明日早々可被執立ナリ、巳後思ヒアハスベシ、法安寺彌繁昌アルカ、此寺場退轉アルカ、アヒミルベシト云云、然處先年日蓮黨、其外諸武士ヲカタラヒ、數月セメ奉リシカドモ、其煩ナク、彌御繁昌恢弘、先言猶以信敬シ奉所也、木澤一和ノアツカヒヲナシ、引退テノチ、法安寺へ種々難儀ヲ申カケ侍ルヲモ、當寺力ヲクハヘサセ給ヒ、一寺安堵ノ儀ニナリヌ、其時堅約ノムネ、寺家ヨリ

申アハセラレ、カノ寺万一不慮ノ退轉ニヲヨブ子細コレアラバ、貴寺ノ御進退タルベキ約諾ナリキ、然ルニ今度永祿七年ノ火難ニ、法安寺燒失退轉ニヲヨブベカリケレドモ、御宥免ノ芳恵、諸僧モ仰崇アルベキ事ナルヲヤ、

〔祇園執行日記〕天文二年二月十八日、京ヲ法華宗ウチマハリシ候、人ヲ京ニテ、三人敵トテ切候由申候、又此在所ニ、雜說候テ、トシメキ候、　三月廿七日、京ノ六郎ノ衆共、日蓮宗モ少ト交リ、津國へ立候、　廿八日、今日モ日蓮宗共立候、聽明殿、用ニツイテ、皆々上候、敵退治ノ用カ、　卅日、今日モマタ、法華宗立候トキ、朝ヨルヨリ鐘ツキ震動シ候、　四月一日、今日先度津國へ立候ツル京衆、皆歸陣候也、利運ニテ候ゲニ候、〇中略　廿六日、法華宗陣立候、下京上京ノ諸日蓮宗、京ニ居候六郎衆ニ交リ、大坂ヲタイヂニ、今日立候也、彼法クハンジ發向ニ立候ヤ、今皆一向宗、大坂ニ居候、六郎ノ敵也、〇中略　六月廿三日、今日大坂へ、以前立候ツル、法華宗京ノ武士共、大坂ト和睦トヤライヒ候テ、ソロソロ早上リ候、今日京少トシヅマリ候、

〔後奈良院宸記〕天文四年六月十三日癸卯、昨日尾坂本願寺有合戰、一揆五六百人打死云々、大概向衆此時滅亡歟、　十二月三日庚寅、昨日自靑蓮院本願寺公事、無爲之由被申、珍重々々、

〔厳助往年記〕永祿五年正月廿三日夜、小坂本願寺之内火事、本坊不口二千軒餘燒失云々、

〔今古獨語〕永祿七年十二月廿六日、ハカラザル回祿ノコトアリテ、御坊中一宇モノコラズ燒失アリシカドモ程ナク御再造、事ユヱモナク、成就セシカバ、霜月報恩講ニハ昔ノゴトク法事トリオコナヒオハシマス、

〔續史愚抄正親町〕永祿七年十二月廿七日丙申、攝津大坂門跡〇本願寺歟火、言繼卿記
天正四年四月廿八日辛卯、住吉社及本願寺已上攝津寺兵火云、或作廿六日、年代略記、言繼卿記、言經卿記、

〔本願寺文書〕從京都被下御兩使、貴寺信長和睦、信玄中媒尤之趣御下知候、因茲先以飛脚申候、是非

急度可預回札候、委曲自龍雲軒堀野左馬允所可被申越候、恐々謹言、

八月十三日　　信玄花押

下間上野法眼御房 進之候

○按ズルニ、信長ノ本願寺ト和セシハ、元龜元年八月二十日ニ始テ其事ヲ議シ、三年三月二十四日ニ至リテ成ル、故ニ此文書ノ八月十三日ハ、元龜二年ナル事ヲ知ル、

〔信長公記十三〕天正八年庚辰三月朔日、抑禁中より大坂爲御無事、近衛殿、勸修寺殿、庭田殿、被成御勅使、信長公より爲御目付、宮内卿法印、佐久間右衛門相添被遣候、○中略 閏三月二日、去程、大坂退城可仕之旨、忝も從禁中被成御勅使、門跡北方年寄共可有□可哉否之儀、不恐權門、心中之存知旨趣、不殘可申出之由、尋被申之處に、下間丹後、平井越後、矢木駿河、井上、藤井藤左衛門初として、致評諚、退屈之驗歟、又者世間見究申之故歟、今度者上下御一和尤と申事ニ候、爰ニ而、御院宣を違背申ニ付ては、天道之恐も如何候也、其上信長公被成御動座、荒木、波多野、別所御退治之如く、根を斷葉を枯して、可被仰付候、近年大坂端城五十一ヶ所相拘、上下苦勞之者共に、賞祿をこそ不宛行共、せめての恩に命を助可申旨、門跡被相存知、來七月廿日以前に、大坂退散に相定、御勅使近衛殿、前○久勸修寺殿、庭田殿、并宮内卿法印、佐久間右衛門等へ、御請を申誓紙御撿使被申請候、此旨安土へ言上之處ニ、青山虎御檢使被仰付候、　閏三月六日、安土より、天王寺日通に參著候、翌日　閏三月七日、誓紙之筆本見申され候也、

誓紙人數、下間筑後、子少進法橋、黄金十五枚、下間刑部卿法橋、同十五枚、あせち法橋、同十五枚、北方同廿枚、門跡添狀、同三十枚、以上、　閏三月九日、柴田修理亮加州へ亂入、添川、手取川打越、宮之腰に陣取、所々放火、一揆野の市と云所、川を前に當、柵籠、柴田修理、のの市之一揆追拂、數多切捨、數百艘之舟共に、兵粮取入、分捕させ、是より次第に奥へ燒入、越中へ越候、安養寺越之邊迄相働安養寺坂

右に見而白山之麓、能登境谷〳〵入〳〵迄悉放火し、光徳寺代坊主楯籠候、木越寺内攻破、一揆數多切ずて、のどの末盛之土肥但馬守攝取懸攻干、爰ニても歷々の者數輩討捕、在陣候し處、長九郎左衛門、飯之山に陣取、手を合、所々放火也、○中略　四月九日、大坂退出之次第、門跡より、新門跡かたへ可被相渡之旨御屆之處に、近年山越を取、妻子を育候、雜賀淡路島之者共、爰を取離れ候てハ、迷惑と存知、新門跡を取立候ハん之間、先本門跡、北方を退申され、一先被相拘、尤之由樣々申に付て、若門跡此儀に同事、右趣返事候、本門跡、北方、下間、平井、矢木等、御勅使へ御理申、雜賀より迎舟を乞、四月九日、大坂退出、○中略

天正八年庚辰八月二日、新門跡大坂退出之次第、御勅使近衛殿、勸修寺殿、庭田殿、右ノ下使荒屋善左衛門、信長公より被相加御使、宮内卿法印、佐久間右衛門、大坂請取申さるゝ、御撿使、矢部善七郎、抑大坂ハ、凡日本一之境地也、其子細ハ、奈良、堺、京都程近く、殊更淀、鳥羽より、大坂城戸口まで、舟の通ひ直にして、四方に節所を拘、北ハ賀茂川、白川、桂川、淀、宇治川之大河の流幾重共なく、二里三里之内、中津川、吹田川、江口川、神崎川、引廻し、東南者、上が嵩、立田山、生駒山、飯盛山之遠山の景氣を見送、麓ハ道明寺川、大和川之流に、新ひらき淵、立田之谷、水流合、大坂之腰まで、三里四里之間、江と川とつゞひて、渺々と引まハし、西ハ滄海漫々として、日本之地者不及申、唐土、高麗、南蠻之舟、海上に出入、五畿七道集之、賣買利潤富貴之湊也、隣國之門家馳集、加賀國より城作を召寄、方八町に相構、眞中に高き地形有、爰に一派水上之御堂をこう〳〵と建立し、前にハ湛池水、一蓮託生之蓮を生ジ後にハ響の舟をうかべ、佛前に輝光明、利劍卽是之名號者煩惱賊之治怨敵、佛法繁昌之靈地に在家を立、甍を並、繼軒、福祐之煙厚く、逼此法を尊み、遠國波島より、日夜朝暮佛詣之輩道に絕ず家門長久之處に、不思天魔之所爲來て、信長公一年、野田、福島御取詰候、落居候てハ、大坂手前の儀と存知、長袖ノ乍身、一揆令蜂起、通路不直之、其時野田福島之御人數御引取候キ、其遣恨思食、不被忘

敵歟、既五ヶ年以前之度、當寺參詣之輩を被推止、剩被捕御敵一分、諸口を取詰、天王寺に至て、原田備中相城被申付候、御普請無首尾以前と存、即時に催一揆、天王寺へ差懸、遂一戰、原田備中、塙喜三郎、塙小七郎、蓑浦無右衛門初として、歴々討捕、其競に天王寺とり巻候處、信長御後詰として、以無勢被成御動座、其巳兩度被及御合戰、乍兩度大坂合戰打負、數多討死させ、誠大軍を以て、小敵之擒と成事、無念次第也、併末法時剋而、修羅鬪諍之發、瞋恚乍不及力、大坂も、こう津、丸山、ひろ芝、正山を始として、端城五十一ヶ所申付楯籠、構之內にて五万石致所務、任運于天道、五ヶ年之間雖相守、時節身方者日々ニ衰、調儀調略不相叶、信長御威光盛にして、諸國七道御無事也、此上者、云勅命與云不違于御道理、退城可仕と肯申候、爰大坂立初て以來、四十九年之春秋を送る事、昨日之如夢、世間之相事相を觀ずるに、生死之去來、有爲轉變之作法者、電光如朝露、唯一聲稱念之利劍、此功德を以て、無爲涅槃の都に至らんにハ玄かじ、雖然今故鄉離散之思、上下巳沈淚、然而大坂退城之後、頓て信長公御成有而、此所可被成御見物、其意を存知、端々普請掃除申付、面にハ弓鎗鐵炮等之兵具其員懸並、內にハ資財雜具を改、有べき體を結構に飾置、御勅使御奉行衆へ相渡し、八月二日未剋、雜賀淡路島より、數百艘の迎船をよせ、近年相拘候端城之者、初として、右往左往に緣々を心懸、海上と陸と、蛛の子をちらすが如く、ちり〴〵に別れ候、彌時剋到來して、たへ松の火に、西風來而吹懸、餘多之伽藍一字も不殘、夜日三日、黑雲となつて燒ぬ、

〔南行雜錄一〕就大坂赦免、至彼寺內通路事、海上陸地共無異儀樣ニ、下々堅可申付候、從輪以下、此旨可申聞候、次大坂へ誓詞之儀遣候而可然候、幷人質之儀可出實子候、猶於樣子者、宮內卿法印可申候也、

閏三月十一日（天正八年）　信長

佐久間右衛門尉どのへ

就大坂赦免、彼寺內末寺之事相立候、播州英賀儀、矢留堅可申付候、重而樣子可申出候也、

後三月十一日〇天正八年　信長

羽柴藤吉郎どのへ〇中略

當寺赦免之上者、加賀國如先々可返付候、聊以不可有相違候也、謹言、

閏三月十一日〇天正八年　信長

本願寺

〔本願寺文書一〕今度本願寺門跡光佐赦免之上者、紀州雜賀幷組中諸宗同別相定訖、此時別而可勵忠節、就雖爲一人至大坂不可相通、万一大坂相殘之輩有之候ハヾ、則呼越、通路等堅可相留、若令相違者可爲曲事候也、

五月廿三日　信長朱印

當地總中

〔本願寺文書一〕從諸國本願寺參詣之事、至雜賀鷺森不可有其煩者也、

天正九年三月　日　信長朱印

〔貝塚天滿御移位之記歷代日記所載殘欠〕天正十一年七月四日、午剋、紀州ゟ御門跡を始、御女房衆悉く船に而泉州貝塚へ御上著、御開山無御恙御渡海、諸人群集、難有申所也、雜賀衆是迄送りたるハ、平太夫、龜太夫、明道、船頭佐之助、嘉祥寺迄之衆、刑部助、刑部大夫、同弟、卽剋爲御案內筑州へ、圓山內匠助御使ニ被遣之、筑州へ御書、折節到來よしニ而、大樽十御音信也、淺野彌兵、右左吉、羽柴久太郎、羽柴美濃守、イヅレヘモ御書御音信ハ無之、淺彌ヘハ銀五枚、賴廉書狀ニ而被遣之、是ハ巳前可被遣分ニ而候得共、他行ニ付相延、此度之御音信被成、〇中略

十三年五月三日、寺內屋敷可請取申由申ニ付テ、刑部卿、圓匠、益少、大坂へ罷越、御帷三被遣之、翌日四

日、秀吉御自身ニ御出有テ、繩打ヲサセラルヽ也、中島天滿宮ノ會所ヲ限リテ、東ノ河際マデ七丁北ヘ五町也、屋敷入次第ニ長柄ノ橋マデ可レ被ニ仰渡一云々、先以當分ハ七町ト五町也、元ノ大坂ノ寺內ヨリモ殊ノ外廣也、

〔貝塚天滿移位之記 歷代殘缺日記所載〕天正十四年七月十九日、御影堂〇本願寺御棟上、卯辰剋、御儀式別ニ注レ之、今日參詣衆群集於川端、ムカヒノ武士ノ族ツブテヲ打掛抔シテ、アゲクニ兩方タヽキ合、又大坂ノ町人ノ御門徒ノ衆モ出合テ防也、アマタ帷ナドヲ取、女房共ヲ引サガシ畢、然ル所關白殿聞召、惡行人數可レ有ニ成敗一トイヘドモ御取成ドモ、アリテ、タヾ十人、廿日四時分機物ニアゲラルヽ也、所ハ河端ノ裏門也、

〔本願寺文書 二〕當寺京都江被ニ引越一付而、諸事可レ爲ニ逼迫一候、歳暮之呉服、節句帷外、臨時儀一切無用候、總別三ケ年之間、諸方ヘ音信等堅可レ被ニ停止一之候、猶増田右衞門可ニ申上一候、恐々謹言

後正月五日　秀吉朱印

本願寺殿

〔本願寺文書 二〕今度、當寺、京都被ニ引越一付而、於ニ六條屋敷一傍示之事、南北二百八十間、東西三百六十間之內、本國寺屋敷南北五十六間、東西百二十七間相ニ除之一、其外令ニ寄附一之畢、然上者、地子之儀、如ニ田畠年貢一、全可レ有ニ寺納一候也、

天正十九 閏正月五日　秀吉朱印

本願寺殿

〔雪月花 三〕京都往古町之事

一兩寺內之事、天正十九卯年秋、西本願寺ニ、下京六條ト七條之間之地ヲ被レ下候事、然ルニ本國寺ハ、其時迄、南表之寺ニ而諸堂ヲ建テ、南ゟ參詣いたし候ヲ、本願寺限リ小屋敷ヲ本願寺ヘ被レ下

堂塔

故、表門ヲ被ㇾ塞、唯今ハ東裏ゟ廻リ入、奥深キ寺也、西寺内町數五拾六町、

〔叢林集七中〕本願寺移住之略頌作者未ㇾ知

自文永九文明三　大谷二百十一年
自文明十天文元　山科本寺五十五
自天正八鷺之森　亦復貝塚六年住
同十九年八月五　還歸洛陽是鎮坐
近松吉崎亦富田　出口前後八ヶ年
自天文元天正八　大坂前後四十九
天正十三八十三　攝州天滿七年住
寛文九年七十九　總合四百有八年

〔叢林集七上〕東山大谷御墓之事

サテコノ敷地ハ、口ハ五丈奥ヘ十丈、是レ聖人ノ御娘、彌女禪尼覺信ノ御寄進ナリ、後正安元年ニ南隣ノ地ヲ買添テ、一所トシタマフ、ソノ地モ根本ノ地ト量等シ、コノ買添タル地ニ坊ヲタテ、唯善坊ヲ住セシム、是レ覺惠ノ御ハカラヒナリ、是ヲ南殿ト云ヒ、覺信ノ在ス本坊ヲ北殿トイヒシトナリ、作法次第云、東山殿下ナド、乃至大谷殿ハ、本堂三間四面ト、八年紀ニ、御影堂五間四面云云、

〔實悟記〕一昔東山大谷殿ナドニテハ、御坊中ニ、イヅクニ女房衆御入候共、見エズ候キト被ㇾ申候、大谷殿ハ本堂阿彌陀堂三間四面、御影堂ハ五間四面也、チイサク御入候ツル事候、慶聞坊サシ圖ヲセラレ候ツル、御亭ト、御堂ノ間、竹亭トテ、其間モ二間バカリナリケルヲ、蓮淳ト拙者ト持申候キ、

〔實悟記〕一昔ハ東山ニ御座候時ヨリ、御亭ハ上壇御入候ト、各物語候、蓮如上人御時、上壇ヲサゲラレ、下壇ト同物ニ、平座ニサセラレ候、ソノ故ハ佛法ヲ御ヒロメ、御勸化ニツキテハ、上﨟ブルマヒニテハ成ベカラズ、下主チカク万民ヲ御誘引アルベキ上ハ、イカニモ〳〵、下主チカク、諸人ヲチカク召テ、御スヽメ有ベキトテノ、御事ニテ候ト、被ㇾ仰候テ、平座ニ御沙汰候、有ガタキ御コトヽ、諸人申タルトテ、各宿老衆カタリ被ㇾ申候、實如上人モ、御物語ヲ承候事ニテ候、定テ今モ存タル人候ベク候ナリ、

〔永正十七年記〕四月十二日、山科本願寺一見、庭座敷之體驚目者也、下妻大輔、興正寺以下一覽、

〔都名所圖會平安城二〕本願寺

本。堂。は、開山親鸞聖人自作の影像を安置す、此像は、開山在世の時、彫刻し給ひ、息女覺信尼公へさづけたまふ也、聖人の滅後遺骨を抹して、漆に和し影を潤色せり、故に骨肉御影と稱す、坐像にして長貳尺五寸餘也、又本堂は大谷本願寺のとき紫宸殿拜領より、御影堂造りは、紫宸殿の摸形也、堂前の高欄は、內裏に同じ、南北の脇壇には、前住大僧正、其外歷代の畫像を安ず、餘間には、九字十字の名號を安ず、寂如上人の筆也、每年報恩講、七晝夜の法會には、八幅の繪傳を壇上にかくる、阿。彌。陀。堂。本尊阿彌陀佛は、立像長三尺餘にして、春日の作なり、脇壇には、六高祖聖德太子法然上人の畫影を安ず、當御門主法如上人の御讚也、集。會。所。法會執行の時、僧衆こゝに會す、轉。輪。藏。一切經を藏む、額は寂如上人の筆なり、撞。鐘。樓。此鐘は、太秦廣隆寺にありて、少納言信西入道の銘あり、由緒は信長記、拾遺に委し、鼓。樓。此太鼓は、大和國西大寺にありしなり、閣內に其由緒を刻む、豐心丹の主方は、坊官下間氏にあり、これより藥を出す、唐。門。南の築地長辻にあり、此門はいにしへ豐國社にありしり、人物走獸等の彫物、莊嚴華美にして、希代の奇物なり、虎。間、四方に虎を畫、浪。間、天井に波を畫、南の方に車よせあり、聚樂亭よりこゝにうつす、對。面。所、大廣間ともいふ、繪は長谷川了溪の筆なり、前に能舞臺あり、白。書。院小廣間ともいふ、畫は右に同筆なり、前には能舞臺あり、黑。書。院、畫は狩野探幽の筆なり其外關雎殿、綺春館、永安館、桃仙館等の殿舍、高閣多しといへども繁によつてこれを略す、大仲居臺所をいふ、元伏見城は有りしをこゝにうつす、入口の唐破風に、大黑天の像あり、三つの俵を踏、

滴。翠。園集會所の東にありて、名區の十勝あり、

高。樓。を飛。雲。閣と號す、久代秀吉公の時、聚樂亭にありしを、こゝにうつす、額は九條關白尙實公の御筆なり、閣上の畫は、霞の富士、中閣の畫は三十六歌仙、ともに古法眼元信の筆なり、下を招賢殿といふ、飛雲閣の記は、殿中の東にかくる十六世湛如上人の御作にして、當御門主法如上人筆を染めたまふ、池ハ、高樓を巡りて、常に船を浮む、これを滄浪池といふ、龍背橋を過ぎて踏花場あり、此邊櫻樹數品あり、胡蝶亭の傍には、夜光石あり、嘯月坡は、池の巡りの坂をいふ、黃鶴臺は、高閣の西なる御湯殿なり、醒眠泉は、一名古醒井といふ、洛陽七井の其一なり、當新御門主文如上人の碑の銘あり、艶雲林には梅花多し、青蓮樹は茶亭にして、又澆花亭ともなづく、簡文が遊し華林園に同うして、鳥獸禽魚、おのづから來て、人に親の芳園なり、

寺格

〔眞宗傳法始末〕〔三 如〕十三年〔○寛 永〕八月祖殿落成ス、東西二十四間、南北三十一間、高十七間餘、實ニ天下ノ巨麗タリ、

〔本願寺文書〕〔一〕謹上　中納言法印御房　左少將隆貞

本願寺幷久遠寺可爲御祈禱所由事、先度々被仰下了、随則親鸞聖人影堂敷地、門弟等進止、幷彼留守職事、任證文道理、可令全管領給者、依宮將軍〔○護 良〕令旨、執達如件、

元弘二年六月十六日　　　　　　　　　左少將花押

謹上中納言法印御房〔○三代 覺如〕

〔今古獨語〕抑開山聖人三百年忌、永祿四辛酉年ニアタリ給フ、コレニヨリテ、諸國御門弟、御一門一家ソノ外坊主衆參向、タヾシ三月ノ比ヒキアゲラレ勤修アルベキヨシ、年内ヨリソノ沙汰コレアリ、カネテ今師上人〔○顯 如〕禁裏ヨリ門跡ニナシ申サル、勅使万里小路前内府秀房公也、サレバ下間一黨モ、坊官ノ准據タルベシトテ、大藏卿御使節トシテ内裏へ出仕之義、前々ニカハレリシカバ、左衞門大夫賴資モ落髮アリテ、上野賴充ト號シ、卽法橋ニ任ズ、丹後賴總モ法眼ニ叙セリ、ソレニ付テ、本宗寺、顯證寺、願證寺、光善寺、院家ノ望ミ天氣ヲ經ラレ、門跡へ申入ラレ、永祿第三ノ比、素絹紫袈裟ニテ參内アリ、ソレヨリノチ、敎行寺、順興寺、慈敬寺、勝興寺、常樂寺、院家ニサダマリヌ、シカレバ、御佛事ノ儀式、當分御門跡ニナシ申サレ候ト申、院家各々出頭、コトサラ御年忌遐邇ノ御事ナレバ、他宗ノ衆參詣モアルベシ、先聖道ノ衣裳シカルベキヨシニテ、法服、袮袈裟用意アリ、靑蓮院門跡ノ出世松泉院法印ニ御談合ト云々、

〔貝塚天滿移位之記〕〔歷代殘欠 日記所載〕天正十四年十一月三日、早天、御門跡樣、北御方樣、御讓位御見物ノタメニ、忍ニテ御上洛、十三日御參内有之、新門主興門御覽、〔但御見ハ、十五 日御參リ也、〕

〔言經卿記〕天正十四年十一月十三日甲辰、禁中並院御所ゟ、本願寺〔○光 佐〕准后被任、新門跡〔○光 壽〕僧正

ニ被任、興正院之□□則參內候云々、十一月十五日丙午、禁中ヘ本願寺准后末子兒、內々ヨリ被參候云々、

○按ズルニ、家譜ニハ光壽權僧正ニ任ズトセリ、參看スベシ、

〔大谷本願寺通紀〕三 歷世宗主傳

第十二宗主准如諱光昭、○中略 慶長十三年十二月廿七日任大僧正、

〔御湯殿の上の日記〕慶長十四年正月十一日、はる、ほんぐわぢ大そうじやうの御禮に、大たる十てう、きかね一枚、御なか五十は、まん上、

〔言緒卿記〕慶長十四年正月十一日、七條本願寺も、今日大僧正に舊冬被成候、御禮に參內了、

〔義演准后日記〕慶長十四年正月十一日、參內、○中略 本願寺一向宗 初而參內、新儀也、傳聞、大僧正ニ轉任云々、僧正モ、彼父○顯如 初而勅許、彼○准如ハ權僧正歟、剰大ニ轉任、奇代之事、參內モ父只一度參內歟、年頭諸門跡ト一同、今度初度也、隨門ハ法印﨟モ下也、本願寺ハ﨟モ上首也、官大僧正也、次第可爲如何歟、內々御談合、則以傳奏伺被申云、先年於將軍家、本願寺與隨門、次第如官位御禮アリ、仍將軍ヨリ仰云、本願寺ナドガ、攝家門跡ノ上ニ著ノ段、不可然由被仰出、其後、隨門ノ下ニ被著畢、此由訴訟、則早朝披露、勅定云、然バ悉禮畢以後、本願寺御禮可申入由被仰出、仍如此也、前代未聞ノ體、併佛法衰微之故也、不可說々々々、元祖親鸞上人ハ、青蓮院門跡ノ出世也、家ニヲイテ下賤也、身ニヲイテハ不淨ノ穢僧也、何ヲ以テカ爲貴哉、於朝家御崇重何事歟、八宗ハ添日逐年衰微、是併邪法興盛之所致也、可悲々々、

〔寶曆集成綸錄〕十九 寶曆八寅年三月

寺社奉行江

西本願寺、打物之儀、東本願寺は去ル未年參向之節、打物被持候儀差留候處、直ニ翌年被相願、前

之通相濟候、西本願寺は享保十一年參向之節迄被持、其以後參向之節不被持候付、暫ク中絶之樣ニ相見候、併享保十一年參向之節、差留候故、其後願も無之被在之候得共、東本願寺打物被持候儀、此節被承、前々之通、爲持度との願ニ候得ハ、畢竟東本願寺打物被持候儀も、是まで不被存、願後レ候趣ニ而、中絶と申筋ニ而も無之ニ付、此度願之通相濟候、
右之通ニ付、以來諸願之儀、中絶之儀に而も、容易ニ相濟候と申筋ニは無之候間、此趣可被相心得置候、

三月

〔富士山志料 三〕覺

淨土眞宗京西六條

本願寺御門跡　諱光闡、法號法如、

酉（世壽四十六、法壽四十二、）

九條故內府稙基猶子　實父播州本德寺考盤院、本願寺十四世、（信解院寂如弟）

院家　常樂寺　順興寺　廣敎寺　本善寺　興善寺

坊官　下間少進法印、下間宮內卿法眼、下間兵部卿法橋、

御直判有之

一勅願所

一參內有之

一下馬札有之候、但制札無之候、

一公儀御代替之節、其外住職繼目に、爲御禮參向、早速爲上使高家衆御越、登城之節、御玄關乘輿平附獻上物有之、於御白書院上段御對顏、退出之節、下段迄御動座、別日御能、御饗應有之登城、爲上使

御老中御越、拜領物有之、但し家司用人御目見、獻上物有之、拜領物有之、

御進物（御太刀馬代銀百枚、御時服二十、）御拜領物（白銀三百枚、綿子二百枚、）

一御朱印四通有之　但シ城州山科鄕泉州樂尾村、城州西院村、三條五條之間、大谷道場門前境內、

諸役等御免除、

三州馬雙村　右之通ニ而御寺領

三百拾四石　甲州等力村　右壹通掛所境內敷地

都合四通

六條院境內

一勅願所（龜山院已來）　附（當今御寶札、先帝御位牌有之、）

一光嚴院御宇、宮將軍家より、御祈禱所令旨有之候、

一御當家（○德川氏）御代々御位牌有之

一下馬札三方ニ有之

一直敍法眼ヨリ、官被任大僧正、

但後奈良院御宇、二品法親王宣下之勅書拜戴、于今傳來有之、

○按ズルニ、右ハ富士山志料ノ附錄ニシテ、幕府ニ上申セシ草案ナルガ如シ、

〔寬永七年〕雲上明覽大全（上）本願寺御門跡

御領三百石餘　（六條 俗稱西六條）

本願寺御門跡光澤　五十九

（前大僧正法印　自開山二十代）　號廣如

同、新御門主光威　廿九

寺領

前大僧正法印　就顯如

院家　越前超勝寺覺王院　自慶院河州惠光寺　播州教行寺安養院　超勝寺院江州慈敬寺　勢州法盛寺　寂照院

坊官　下間少進法印　下間民部卿法橋　下間刑部卿法眼　下間大藏卿法橋　下間按察使法眼

御家司　島田左兵衛權大尉　富島頼母　島田右兵衛少尉

御用人　瀧彈正　村井内藏之助　村井主計　上原數馬　山中一學　大西隼人　鈴木沖見　藤田大學　廣瀨奥膳　富島帶刀　松井中務　池永主税　大喜左司馬　下　橋主馬

〔本願寺文書一〕おほたにの、こしんらん上人の御ゑいだうのしきちの事、きしんのじやうをかきて、參らせ口候、かの御でしたちのな口〳〵いだしをはりぬ、たゞし、このところのるすしきにおきては、せんせうばうに申つくるところなり、はやくこのふみを、てつぎとして、くわんれいせらるべし、それの一このゝちは、又こどものなかにも、きりやうをはからひて、すゑのよまでもしだいに申つけらるべし、上人の御ためにも、あまがためにも、その御すへたらんとも、がら、このところをあひつぐべきうへは、ゆめ〳〵たのさまたげあるべから口かやうに申をくうへは、もしいかなるゐらん口申人ありとも、はやくくげぶけにうたへ申口たちにおきては、きしんのしやうにまかせて、もんていのくわんれいとし、るすしきにをいては、このじやうをまもりて、あまがしそんながくあひつぐべきものなり、よてのちのためにじやう、くだんのごとし、

こうあん三ねんかのへたつ十月廿六日　あまかく〈○下略〉

せんせうの御ばうへ

〔本願寺文書二〕泉州以二築尾村内貳百八拾石一令二寄附一候訖、全可レ有二寺納一者也、

天正十四七月廿八日〈秀吉朱印〉

本願寺殿

寺職

〔本願寺文書〕二 於城州山科郷內舊領貳拾石事、令奇附候訖、全可被寺納候也、

天正十七十二月十日 秀吉朱印

本願寺殿

〔本願寺文書〕二 天滿寺內町屋敷地子五百石小帳在之事、宛行畢、全可被領知者也、

天正十八二月五日 秀吉朱印

本願寺

〔憲教類典〕四ノ十四上 寺社 寬文五乙卯年七月十一日

山城國葛野郡西院村之內八斗九升、愛宕郡三條五條之間壹斗壹升、合壹石事、幷大谷墓場門前境內竹木諸役等免許之、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日、先判之旨、進止永不可有相違之狀如件、

寬文五年七月十一日

本願寺殿

〔天保集成絲綸錄〕六十一 天保五午年七月

寺社奉行江

西本願寺、境內手狹ニ付、爲火除添地之儀、度々相願候得ども、不被及御沙汰候處、猶又此度被相願候趣、無餘儀筋ニ相聞候間、北之方入堀川端八間餘、是迄持地幷借地共、長八拾八間、坪數七百四坪餘、火除添地ニ被仰出候間、其段可被達候、尤火除之事ニ候條、右場所江家作等仕間敷旨、是又可被達候、御普請奉行江可被談候、

〔叢林集〕七上 東山大谷御墓之事

サテコノ覺信尼公ハ、聖人ノ賢息七人マシマス中ノ、第七ノ妹、惠信腹ノ第六ノ御娘ナレバ、末子

ナリ、女儀ナレドモ、イカナルユヘマシマスニヤ、聖人七十一歳、寛元元年ノ暮レヨリ、角坊巳下御一迹ヲバ、コノ覺信尼公ヘ讓置セタマフ、世ノ家督タリ、サレバイマコノ敷地ヲ、進ゼヲル丶モ、殊ニ理リナルベシ、サテコノ尼公、ハジメハ彌女ト名テ、日野廣綱卿ノ室トシテ、覺惠トイフ御子アリ、聖人ノ御孫子ナリ、コノ覺惠ハ覺如ノ御父ナレバ、覺如上人ハ祖師ノ御產子ナリ、然ルニ覺信尼、御子ノ覺惠ヘハ、御代ヲ進ゼズシテ、如信上人ヘユヅリタマフ、コノ如信ハ、第三ノ御子宮內卿善鸞善永寺慈信坊ト號セシノ御子ナリ、サレバ聖人ノ御孫ナリ、覺信尼ノタメニハ、イトコナリ、覺信ハ、付屬ノ直弟ナレドモ、尼公ナレバ相承トセズ、三轉ノ如信上人ヲ、御二代トシ奉ル也、是レ本願寺ハジメテノ別當職ノ御住持ナリ、

〔日野一流系圖〕有信〇中略

有範 本願寺祖 [illegible]藏皇后宮權大進正五下
　範宴 山 上人權律師、本願寺開山、號二少納言公一、號二善信房一、號二親鸞上人一、弘長二年十一月二十八日入滅、九十歳、慈鎭和尙門侶、
印信 大貳公 母月輪關白御女
慈信 宮內卿、號二善鸞一、
如信 實慈信子、文曆元年生、
明信 信蓮坊
女子 左衞門佐廣綱妻、宗惠法印母、
宗昭 與 法印權大僧都、文永七年生、童名光仙丸、號二覺如上人一、實宗惠法印子、權中納言兼仲卿爲子、新千載集作者、
　光玄 山 號二大納言公一、法印權大僧都、號二智僧正一、號二存覺上人一、眞助法親王門侶、權大納言俊光卿猶子、
綱嚴 山 權大僧都、號二慈觀上人一、江州錦織寺、贈左大臣兼綱公猶子、
慈俊 山 法印權大僧都、本願寺、權大納言俊光卿猶子
　俊玄 山 法印權大僧都、俊光卿爲子、

山 時藝 法印權大僧都、權大納言時光卿猶子、

玄康 法印權大僧都、從一位資康卿猶子、

圓兼 法印權大僧都、贈内大臣兼宣公猶子、

山 兼壽 法印權大僧都、號蓮如、權中納言兼郷卿猶子、明應八年三月二十五日入滅、八十五歲、

山 光兼 法印權大僧都、本願寺、大永五年二月二日入滅、六十八歲、

山 光融 權少僧都、母權中納言永継女、早世、

山 光教 直叙法眼、權僧正、母法印兼壽女、天文二十二年八月十三日入滅、三十九歲、關白尚經公猶子、

光佐 直叙法眼、母權中納言源重親女、

〔本願寺文書 二〕本願寺留守職之儀、從開山代々證文、同先師光佐讓狀、對光昭明鏡之儀令拜見、納得仕候、然上者雖爲弟、任寺法之旨、光昭事、如先師可致尊崇候、聊以違背之儀不可有之候、太閤樣被加御意段、雖有存知仕由、宜預御披露候、恐々謹言、

文祿二後九月十七日　光壽 花押

施藥院

長束大藏大輔殿

木下半介殿

山中橘内殿 〇又見叢林集、

〔本願寺文書 二〕本願寺影堂留守職之事、親鸞聖人以來、代々證文、殊先師光佐對光昭讓狀、依明鏡、則經叡慮訖、然間雖爲三男、任寺法之旨可相續、彌勤行等不可有懈怠者也、

文祿貳十月十三日　花押 〇豐臣秀吉、又見叢林集、

本願寺殿

〔駒井日記上〕文祿二年後九月十六日

一當門跡ふぎやうぎの事、先門跡時〻、連々と申上事

一代ゆづり狀有レ之事、先代よりゆづり狀も有レ之由之事、

一先門跡せつかんの者被二召出一候事

一被二召出一候人よりも、罷出候者共、不屆思召候事、

一當門主妻女之事

一そこ心より不屆心中引直、先門跡のごとく、殊勝ニ嗜可レ申事、

一右のごとくたしなみ候ハヽ、十年家をもち、十年めに、理門江可レ被二相渡一事、是はかた手うちの被二仰付一樣ニ而候得共、新門跡此中御目をかけられ候間、如レ此由候、

一心のたしなみも成まじきと被レ存候ハヽ、三千石無役ニ可レ被レ下候間、御茶のゆともだちニ成候ハヽ、右のめしいだし候いたづらもの共召連、御ほうかう候へとの儀候、此御返事、

一右段々御意通、當門跡忝存候、十年めニ、理門江可二相渡一候、忝と被レ申候、然處ニ內衆申樣ニハ、ゆづり狀などの事不審之由申候、又むかしのゆづり狀ハ、門下おとなへ、かのものに披露候て、其上を以、ゆづり狀ニ而候と申候へバ、其申分のせうせき有レ之候哉、なくば申たる事くせ事候、うへ樣へかすめ申事、左樣の存分に而、今迄おやこの中ことも仕候、のちも、さやうに可レ在候間、末代のために、御成敗可レ在候、其申でを取出し候ハずハ、當門ニ十年の代をも御もたせ候まじく候、ゆづり狀ニまかせ、理門へすぐに可レ被レ遣候由候、いまだ不二相極一候、今日中こ相濟可レ申候、〇中略

一慮外ニかき申候得共、人のすきに調申候間、先書立申候を本と仕候而、進上申候、此等之旨可レ預二御披露一候、恐々謹言、

閏九月十六日　木半介

壽命院○中略

一御狀拜見申候

一七條新門主之事、代々幷先師讓狀ニまかせ、理門江昨日家を御渡被成候、

一新門主身上事、先師在世之時、新門主をせられ候ごとく、もとの家へこされ候て、理門よりまかなひにて候、

一從太閤樣も、御合力可在ニ而候、

一おとなの事も、一代持ニ付て、何れヲ成共、理門被申付次第と御申候、双方より一筆取かはしにて候、

一七條門跡事、殿下樣御上洛次第、御判形代替之を被成、御取、太閤樣、こうはん有べきにて候、○中略

十月十二日

一七條門跡儀ニ付、從太閤樣爲御使民部法印、長束、木下、山中御參、明日十三日代替之御禮、關白樣江可被申上由、太閤樣爲御意、右之御使衆被致言上、

十月十三日

一七條之御門跡、跡目御替被成之旨付而、三男光昭次目之御禮被申上、進物銀子百枚、太刀、

一從太閤樣、光昭爲案內者、木下半介、長束、山中橘內、民法被相添、

〔厳助往年記〕弘治三年四月十七日、小坂本願寺江、晴元川○細女被相越云々、六角猶子云々、

〔今古獨語〕弘治三年、厳師如○顯御祝義ノ嘉兆、晴元ヨリ御契約アヒト丶ノホリ、諸人千秋萬歲ヲ祝シ奉ル、ソノ比妙祐禪尼モ、カノ役ニシタガヒハベリシカバ、トリワキシタシク御詞ヲソヘ給キ、

永祿元戊午年七月十七日、今師上人御母顯能禪尼御逝、御年イマダ三十七歲、證如上人ニワカ

レサセ給ヒシヲ、アハレナル御事ニ申シ侍シニ、ワヅカニ五トセノ中ニナクナラセ給フ言ノ葉モタエタルコトニコソ、ソノ年九月十六日殿師御嫡男如○敎生レサセオハシマス、

〔細川系圖〕晴元━━昭元
　　　　　　　┗女子嫁二本願寺顯如一

〔國師日記〕元和三年五月二日、本願寺門跡、四月十六日之御書來、爲端午祝儀、帷子貳ツ、內單物一來、則返書遣ス、

〔天文日記〕天文十六年正月廿九日、一山門西塔院へ、末寺錢、去年分遣之、只今爲催促申來之間、所差遣之也、

東本願寺

東本願寺ハ、京都六條西本願寺ノ東ニ在リ、十一世顯如ノ歿後、其季子准如、豐臣秀吉ノ旨ニ依リ本寺ヲ嗣ギ、長子敎如退キテ閉居セシガ、德川氏天下ヲ治ムルニ及ビテ、敎如訴フルニ、其故ナクシテ廢セラル、ヲ以テス、家康乃チ敎如ニ命ジテ當寺ヲ起ス、實ニ慶長七年ナリ、當寺ハ影堂ノ廣大ナルコト西本願寺ニ勝リ、屢、火ケテ屢、興シタリ、別邸枳殼殿ハ寺ノ東方ニ在リテ、古ノ河原院ノ趾ト稱シ、泉石周池ノ勝アリ、大谷ノ廟ハ承應中建テシ所ニシテ、山科、江戸、大坂等ニ別院アルコト、概ネ西本願寺ト同ジク、寺格幷ニ門主ノ官位等モ亦一ニ西本願寺ニ準ゼリ、

〔山城名勝志五洛陽〕本願寺(中略)東○本○願○寺○、在二六條南、烏丸西、北小路北、新町東一、

○按ズルニ、今ハ大谷派本願寺ト云フ、明治維新以來ノ稱ナリ、

創建

〔雪月花三〕京都往古町之事

一東寺內ハ、西本願寺ゟ、十一年後、御當家之御取立ニ而、慶長七寅年、寺內屋敷ヲ被ㇾ下、其時之公儀奉行加藤喜左衞門殿兩度ニ被ㇾ渡候、町數五拾九町、

〔叢林集七中〕一東本願寺敷地拜領ハ、慶長七壬寅年、奉行ハ加藤喜左衞門ナリ、

〔東照宮御實紀附錄九〕本願寺の光佐が先妻の腹に、設けし嫡子を光壽といひ、後妻の生みし次子を光照といへり、光佐が死せし後、豐臣太閤その後妻が、美婦の譽たかきを聞及れ、めし取て寵眷せられけるより、光照をもて光佐が嗣とし、本願寺を繼しめ、光壽をば、早く隱居せしめ、眞常院として、子院の住職となさしむ、光壽も、我身犯せる罪もあらで、面目をうしなひしを、君にも、兼てさるまじき事とおぼしめしけり、さるに此度の戰の前に及び、光壽京を出で、關東へ赴き、金川の御旅館にて見え奉り、愚僧が門徒の者ども、美濃、近江の間にあまた候へば、此度彼等に一揆をおこさせ、御味方をなさしめんと申せば、君その心ばへは奇特に思召ども、一揆の事はまづ無用にいたされ、御僧は是より江戸におもむきて、滯留せらるとも、又は上方へかへらるゝとも、心まかせにせらるべしと仰られけり、其頃黑田長政もまた一向門徒をして、上方に蜂起せしめむと勸め奉りしに、われ賊徒を誅するに、何とて法師の力をからんやとて聞せ玉はず、其後慶長七年、光壽かく事不便に思召、特更の御執奏にて、光壽を門跡になぞらひ、別に東六條に伽藍を營建して、一刹を開かしめ玉ひしかば、光壽は彌陀如來の弘慈も是には過じと、世にかしこき事と思ひ、これより此宗、東西兩派に別るゝ事とはなりしなり、岩淵夜話

〔本願寺家系〕光佐

　光壽　童名茶々丸、母緑川右京大夫晴元女、顯如上人遷化ノ後、寺務三ヶ年ニシテ隱居、豐臣秀吉公依ㇾ命ナリ、慶長七年、自家康公賜リ祖師眞影、并東七條敷地御寄附、從ㇾ是東西トス、

信淨院御門跡法印大僧正教如

○按ズルニ、此家系ハ、本書ノ奥書ニ據レバ、幕府ニ上申セシ草案ナリ、

〔本山寺誌上〕堂宇　本寺ノ堂宇ハ、第二世如信上人ヨリ、第十一世顯如上人ニ至ル、都鄙處々ニ構造、第十二世教如上人、慶長七年烏丸七條ニ於テ堂宇建立、第十三世宣如上人、承應元年大師堂ノ構造ヲ改メ、大伽藍ト爲ス、蓋宗祖、嘉祿元年、下野國高田ニ於テ建立、專修寺伽藍ノ構造ニ基ク第十五世常如上人、寛文七年、本堂ヲ再建、第十九世乘如上人、天明八年正月晦日堂宇火災ニ罹ル、第二十世達如上人、寛政十年、兩堂等落成、文政六年十一月十五日堂宇燒失、同再建ノ爲メ、德川家齊公飛驒山ノ巨材二千餘寄附、天保六年兩堂等落成、第廿一世嚴如上人、安政五年六月四日堂宇類燒、宗祖六百年ノ忌辰近キヲ以テ、廣袤舊ノ如キ新假堂ノ工事ヲ創ム、德川家茂公、復飛驒山ノ巨材二千餘寄附、万延元年八月落成元治元年七月十九日堂宇及枳殼邸兵燹ニ罹ル、慶應元年十月二日、朝廷ヨリ兩堂再營ノ綸旨ヲ賜ヒ、併セテ白銀若干枚ノ御寄附アリ、

〔東本願寺舊記〕舊堂宇

舊大師堂、承應元年建立、

桁行、眞々　拾三丈一尺　二十間一分五釐餘

落椽眞々　拾丈二尺二寸　十五間七分

梁行眞々　七丈三尺五寸　後堂　一丈一尺五寸　向拜之出　一丈六尺二寸

寛政十年及天保六年建立

桁行眞々　二十一丈　三十二間三分餘　落椽眞々　二十三丈　三十五間四分

梁行眞々　十五丈　二十三間　後堂　一丈六尺五寸　向拜之出　二丈二尺五寸

舊本堂寛文七年建立

桁行眞々　八丈八尺二寸　十三間六分

落椽眞々　十丈二尺二寸　十五間七分

梁行眞々　七丈三尺五寸　十一間三分、後堂　一丈一尺五寸　向拜之出　一丈六尺二寸

寛政十年及天保六年建立

桁行眞々　十丈七尺八寸　十六間五分六釐

落椽眞々　十二丈三尺二寸　十九間

梁行眞々　十丈一尺六寸四分　十五間　後堂　一丈三尺　向拜之出　一丈七尺七寸一分

但シ文政度ハ、後堂　一丈四尺　向拜之出　一丈九尺二寸五分

〔本山寺誌上〕第十四世光晴上人〇常如

同七年〇寛文九月、本堂再建、

〔月堂見聞集二十八〕享保十九甲寅暦

一三月廿三日〆、東本願寺三門石築初ル、殊外夥敷事に候、毎日講中相代リ勤之、鉾子ノ女子、踊ヲ初ムモアリ、娘子ヲ持ル者ハ、裝束飾テ狂言ヲ致ス、八十有餘ノ老人モ酒醉ニ似タリ、言語道斷也、

〔出定笑語附錄一上〕享保時分ノコトダガ、一向宗ノ寺ヲ建立スルトキ、棟木ニ爲ヤウトテ、アル神社ノ神木ヲ、貰ヒタイト云タ處ガ、クレヌ故、棟木ノ大木ニコマッタ處ガ、日頃歎シコマレテ居ル、夫婦ノ者ガ、ソノ木ヲクレロト云フ、書置ヲ頸ニ懸テ、カノ神木ヘ上テ、首ヲクヽッテ死タル故、是非ナク、ソノ穢タ木ヲ、クレテヤッタト云フコトガ、今モ人ノ口ニ殘テ居テ、一向宗ノ輩ガ、キック自慢ヲスルコトダガ、コンナ奴等ハ、串ニモ箸ニモカヽラズ、云ニモ足ラヌコトヂヤガ、佛法ニ謀ラレテ居ル者ドモハ、コンナ痴鈍ヲ、キック感心シテ居ルガ可笑イデム、此方ノヲ

カシイバカリデナク、ソンナ心ニ勤メコンダ僧ドモヽヽヤツパリ落デハ舌ヲ出シテ笑テ居ル、コヽラガトント違ヒノナイコトデ、丁ド狸ガ人ヲ蠱惑ヘハメテ、腹鼓ヲ打テ悦ンデ居ルト同ジ趣デム、

〔續史愚抄 櫻町〕元文四年三月十五日辛酉、東本願寺山門成、有供養云、年代略記

〔續史愚抄 桃園〕寬延二年八月九日乙酉、東本願寺本堂火、政房卿記、年代略記

〔天保集成絲綸錄 五十五〕寬政二戌年六月

寺社奉行江

東本願寺、去々申年〇天明八年類燒ニ付、飛州白川郷御林之木拜領被有之度旨、再應被相願候趣、及言上候處、御由緒舊例をも被思召、格別之御沙汰を以、被相願候通、御林之内ニ而、材木被下ニ而可有之旨被仰出候、尤御林之場所幷林木員數等者相糺、追而不相違候間、伐出運送等は、本願寺入用を以、可被申付候、且又寺院作事之儀者、享保年中被仰出候趣も有之候間、以前ゟは、一二等も被取縮、莊嚴等も成丈手輕ニ相成候儀、專一ニ候、左候ハヽ、一宗之盛事たるべく候、此旨厚申達候樣ニとの御沙汰ニ候、右之趣、使僧成就房江可被相達候、

〔天保集成絲綸錄 五十九〕文政七申年十二月

寺社奉行江

東本願寺、去未年〇文政六年燒失ニ付、富士山御林木拜領之儀、再應相願候趣、及言上候處、御由緒御舊例をも被思召、格別之御沙汰ヲ以、御材木可被下旨被仰出候、尤富士山御林之儀は難相成、飛州御林之内ニ而、先格より員數減被下ニ而可有之候、右御林之場所幷材木員數等ハ相糺、追而可相達候間、伐出之運送等は、本願寺入用ヲ以可申付候、

〔天保集成絲綸錄 六十〕文政八酉年八月

寺社奉行江

東本願寺江可被下御材木之儀、飛州大野益田二郡村々御林内ニ而、槻柱、松杉栗角物、并末口物、取交木數貳千三百貳拾五本被下候間、其段可被相達候、委細之儀は御勘定奉行可被談候、

〔本山寺誌上〕第二十世光朗上人〇達如

同八年〇天明十一月十七日、本堂ノ再建ヲ企ツ、

同十年兩堂成ル、同年大門ノ再建ヲ企テ、享和元年成ル、

文政六年十一月十五日、堂宇回祿、大谷へ移住、

同八年正月、德川家齊公飛驒山巨材二千餘寄附、

同十年十月、兩堂再建ヲ企ツ、

天保六年兩堂成ル

〔本山寺誌上〕第二十一世光勝上人〇嚴如

嘉永元年大門成ル

安政五年六月四日、堂宇類燒、大谷へ移住、

同六年二月、廣袤故ノ如キ假兩堂建築ヲ企ツ、

同年八月、德川家茂公、飛驒山ノ巨材二千餘寄附、

萬延元年八月落成

文久元年、德川家康公ノ廟ヲ本堂ノ傍ニ建ツ、

同七月十九日、堂宇兵燹ニ罹ル、大谷ニ移住、

慶應元年、朝廷ヨリ兩堂再建ノ綸旨ヲ下シ、併テ御寄附金ヲ賜フ、

〔京都戰爭見聞錄〕二十日〇元治元年七月朝火未だ鎭まらす、〇中略八ツ時頃、此處を立出で、遙に火先の燃

枳殼殿

行方を見るに、一口ハ、五條新町邊、又一口ハ、七條を東に出る、また一口ハ、四條東堀川邊、又一口ハ、松原通油小路、また一口ハ、二條堀川近邊、東西の本願寺、風下にて早鐘の音響渡る、されど此騒動故、誰有て馳付る者もなし、

〔東本願寺文書〕昨年七月類燒之處、猶率爲龜山帝、堂宇再建之儀、如綸旨候、依之白銀三十枚賜之候間、彌勵諸門徒、速成就可有之旨、御沙汰候也、

慶應元年十二月廿九日　定功

東山大谷本願寺御房

○按ズルニ、此時門主東山大谷別院ニアリ、故ニ特ニ東山ノ二字ヲ大谷本願寺ノ上ニ冠セシム、

〔東本願寺文書〕近年度々之火災ニ付、格別之譯ヲ以テ、

金五萬兩

被下之　老中　板倉伊賀守

○按ズルニ、右ハ慶應二年十一月五日ナリ、

〔都名所圖會二平安城〕東本願寺○中略

東殿、今いふ百間屋鋪なり台命によつて、增地を賜り、東本願寺の別館とす、舊此所は、河原院の舊跡にして、池邊の出島に九重塔あり、是則融大臣の古墳なり、いにしへ此所に融公の社あり、境内の鹽竈下寺町万年寺にうつすなりと、池水は東の高瀬川より流れて、常に溶々たり、水口を獅子口といふ、臨池殿の庭は、小堀遠州の好なり、風光奇々として眞妙なり、

〔本山寺記上〕第十三世光從上人

同十六年、○寛永德川家光公六條七條間ノ地新屋敷二十五箇所ヲ加增、○中略

同二年承應十二月、退隱歷住四十年、東泰院ト稱シ、曾テ修造セシ別邸涉成園〇枳殼殿ニ於テ幽棲、以後之ヲ菟裘ノ邸トス

〔山陽遺稿六〕涉成園記

東六條之建也、由於慶長之幕議、而其別業之給、則出乎寬永之敎旨、其莊麗善美可知也、相傳、昔者源左府融、起河原院莊、今之別墅即其遺址、偃戈以來、人烟塡咽、距河頗遠、引其漕渠爲池、移豐臣太閤伏水舊構爲殿、樹外周以垣、環植枳殼、民呼之枳殼殿、而其實曰涉成之園、取於陶淵明之詞也、其扁爲紀侯所書、字甚雄偉、而使布衣賴襄記之、夫侯之書扁似也、而襄之作記、爲不稱矣、然以此園而名以陶詞、既已不稱者、則襄亦可以不必辭矣、但襄識枳殼而已、未視其中之所以成趣也、於是請一觀、園南面爲正門、自西門入、至一院、院東臨池、密樹壓水、曰滴翠軒、第一景水自北來、而南而東、循水行、右顧得一閣門、門西一逕、夾植櫻花、曰傍花閣、第二景過閣復循水、水忽大、滉瀁如無際、曰卯月池、第三景池有二島、右曰臥龍堂、第四景左曰五松塢、第五景架橋達塢、行松樹蟠互中、曰侵雪橋、第六景迂回而上、置茶寮、曰縮遠亭、第七景上亭望東岸、多喬木、下有藤架、曰紫藤岸、第八景還復過橋、繞池而東得樓、曰偶仙樓、第九景樓南堂宇宏敞、北則深邃、南堂外有梅數株、曰雙梅簷、第十景下樓復繞池而南、池窮有亭架水、曰漱枕居、第十一景東與臥龍堂對、堂掛古鐘、設茶讌於塢時、留客於亭、鳴鐘報茶熟也、乃艤舟亭下、泛池、繞二島而北、抵一橋、有屋覆之、曰回棹廊、第十二景舍舟上焉、達北岸、穿楓樹而西、曰丹楓溪、第十三景水潺潺注池、亦來自北、與滴翠同出一閘、終再憩軒卜、然後得園之趣矣、蓋始營之也、與石川丈山翁謀而成之者、名亦其所命也、襄初疑此名之不稱、以爲淵明栖託柴桑、其園所謂三逕就荒、松菊僅存、於此園也、何翅蹄涔之與巨海哉、雖然涉而成趣則一耳、今日所觀五松、不止五也、雙梅不止雙也、而縮遠之亭、昔嘗見東山諸峯、所以得名、而今則今則園中樹木蓊鬱而已、蓋自開法十餘世、而築之築而降、又幾乎十世、宜其改觀也、夫源左府尙矣、太閤之事排山倒海、有如昨日、而今也漠然、土木遺材、盡歸於此、將相之功名、固不如佛刹之綿延也歟、佛

寺格

刹而傳之親子孫、又豈有如此圓哉、故子孫能得祖宗之所營而享其樂如此、淵明之園、日涉而成趣、此園則歲涉而成趣也、自今之後、法脈相承、與太平之業同、歷劫弗墜、其趣之成、更如何哉、山皆生七寶之樹、池皆湧金色蓮華、未可知也、聊姑記見在之趣、以埃後世大手筆有再記之者、

〔續古事談 四〕河原院ハ、融左大臣ノ家也、臺閣水石風流ヲツクシテツクリ、ミガキテスミ給ケリ、ウセ給テ後、其御子、宇多法皇ニタテマツリテ、時々ワタリ給ヒケリ、カノ大臣ノ靈トヾマリスムキコエアリケレバニヤ、ツネニハ、スミ給ハズ、大臣ノ拔苦ノ爲ニ、誦經セラレタル事アリ、其後佛閣ニナリニケリ、仁康上人ト云モノ、知識ヲスヽメテ、丈六ノ釋迦佛ヲツクリテ、コノ所ニスヘタテマツリケリ、

〔應仁記 三〕洛中大燒之事

亭子院ノ河原院、此ノ寺ハ、融ノ大臣、古ヘ血鹿ノ鹽竈ヲ移サレシ舊迹也、

〔嘉永七年 雲上明覽大全 上〕東本願寺御門跡　七條 俗稱東六條

東本願寺御門跡光勝　三十八
前大僧正法印 號嚴如 自二開基一十代

无上覺院御門主光朗　七十五
弘化三年五月御隱居
前大僧正法印 號達如

院家

坊官　下間民部卿法橋　下間帥法橋

御家司　粟津右兵衛少尉　岡田大膳　横田主水　宇野相馬　川那部圖書

御用人　稲波外記　井上要人　儀部主馬　七里彈正　野崎一學　松井典善　入江主殿　島主膳　上田策馬　藤井此面　從聞札

寺領

〔憲敎類典 四ノ十三 寺社〕元和五年九月

態致啓上候、其寺境內之事、六條七條之間四町四方、先年相國樣○德川家康爲仰被申渡候、今度得上意候處、彌無相違候旨御直判被成候、則粟津大進へ渡申候、珍重存、恐惶謹言、

九月○元和五年十五日　板倉伊賀守勝重花押

本願寺雜掌

〔本山寺誌 上〕現境內

西新町、東烏丸、南七條、北魚棚、ツノ坪數ハ、二万一千九百三十坪餘ナリ、

附寺地墓地反別、

寺地　九町二反五畝二十九步七釐二毛　墓地二反九畝二十一步

寺職

〔門跡傳 坤〕本願寺御門跡　在烏丸七條、淨土眞宗嫡流、

親鸞上人　諱善信

姓藤原氏、天兒屋根命廿一世大織冠玄孫、贈太政大臣內麿公六代孫、參議有國卿五代孫、皇太后宮權大進有範男、母對馬守源義親女、承安三年四月朔生、童名若松麿、叔父從三位範綱養子、養和元年三月十五日入慈鎭和尚之門得度、號範宴、少納言公、爲山門住侶、登壇受戒、稱聖光院門主、時大僧都、建仁元年隱遁、入於法然上人吉水禪室、改名綽空、爲上足弟子、又依夢告號善信、承元元年、淨土宗益隆、於是南都北嶺黨議大起、朝議遂處師弟子遠流、（[illegible]）建曆元年、敕免、（[illegible]）然爲化益、猶在于北陸東關二十餘年、其在稻田也、著敎行信證六卷、大創宗旨、淨土眞宗於是乎盛矣、後遂遷于京師、實貞永元年矣、住五條西洞院邸、弘長二年十一月廿八日遷化于萬里小路押小路南角坊善法院、（[illegible]）時年九十、荼毘于東山鳥部野、（[illegible]）建廟堂於吉水北大谷、安影像、

如信上人

祖師聖人孫、父慈信房善鸞、延應元年生、受法脈于祖師、號大納言上人、（中略）正安二年正月四日遷化于常州金澤道場、時年六十二、

宗昭法印　覺如

祖師聖人曾孫、左衛門佐廣綱孫、阿闍梨覺惠男、母中原氏、周防權守某女、祖母覺信尼公、文永七年十二月廿八日生、（中略）觀應二年正月十九日遷化、時年八十二、○中略

俊玄法印　善如

宗昭法印孫、權大僧都法印從覺子、正慶二年二月二日生、（中略）文和元年關宗務、康應元年二月廿九日遷化、時年五十七、

時藝法印　綽如

俊玄法印男、觀應元年三月十五日生、（中略）明德四年四月廿四日遷化于瑞泉寺、時四十四、

玄康法印　巧如

時藝法印男、永和二年四月六日生、（中略）永享十二年十月十四日遷化、時年六十九、

圓兼法印　存如

玄康法印男、應永三年七月十日生、（中略）長祿元年六月十八日遷化、時年六十二、

兼壽法印　蓮如

圓兼法印男、母不知何許人、應永廿二年二月廿五日生、（中略）始應仁二年讓宗務于長男光助法印、（[illegible]）先人遷化、文明十五年再主宗務、延德元年讓宗務于光兼法印而老焉、擧所經歷亦不一焉、建本德寺（播州）、本善寺（和州）、大坂坊舍等而止住、明應八年二月遂遷于山科、三月廿五日遷化、時年八十五、號信證院、

光兼法印　實如

兼壽法印五男、母平氏、下總守貞房女、長祿二年八月十日生、（中略）大永五年二月二日遷化、時六十八、號敎恩院、

光敎權僧正　證如

光兼法印孫、遷譽院權少僧都光融（如圓）男、母法印兼壽女、永正十三年十一月廿日生、（中略）廿三年（天文）八月十三日遷化、時年三十九、號信受院、

光佐大僧正　顯如

光敎僧正男、母重子、源中納言重親卿女、天文十二年正月六日生、（中略）十九年秋、賜京師堀川七條之地、建本寺、八月五日移于此、文祿元年十一月廿四日遷化、時年五十、號信樂院、

光壽大僧正　敎如

光佐大僧正嫡男、母右京大夫源晴元女、永祿元年九月十六日生、（中略）十九年（慶長）十月五日遷化、時年五十七、號信淨院、

光從大僧正　宣如

光壽大僧正男、母家女房、慶長九年二月廿二日生、(中略)万治元年七月廿五日遷化、時年五十五、號二東奉院一、

〔山州名跡志二愛宕郡〕大谷地名 長樂寺南ニアリ　大谷ノ名、實ハ上ニ載ゴトク、知恩院地是也、然ルヲ彼寺造營ノ時、上古ヨリ在ル所ノ、親鸞聖人ノ廟閣ヲ以テ、鳥部山ニ移ス、然其所ヲ名ヅクルニ、舊號ヲ以大谷トナスナリ、今此地ハ、東本願寺ノ領ニシテ、同上人ノ廟塔アルヲ以テ、コレヲ名ヅクルナリ、○中略

親鸞上人廟　山上ニアリ、佛殿及此所、元祿年中造營ニシテ、莊嚴花美ナリ、貴敬渴仰ノ詣人、間斷アルコトナシ、

〔本山寺誌上〕第十四世光瑛上人○琢如

同年二○承應二年 德川家綱公、東山ノ地ヲ附與、因テ同地ヘ祖廟ヲ移築ス、

第十八世光超上人○從如

同三年○延享 八月十五日、德川家重公、大谷ノ地壹萬方歩ヲ加附ス、

〔都名所圖會三左青龍〕大谷は雙林寺に降りて艮にあり、東本願寺の祖廟なり、阿彌陀堂の本尊は、安阿彌の作親鸞聖人の廟塔は、後の山腹にして、墳上に虎石あり、○中略聖人の御墓は○中略元祿年中に造營あり、廟前の莊嚴みやびやかに微妙見へたり、

〔叢林集七上〕東山大谷御墓之事

寛文十庚戌年、本願寺大僧正琢如上人、モトメテ祖師ノ御尊骨ヲ奉納シマシマセリ、鎭西ノ隱徒袋中トイフ僧ノ地庵タルヲ買得シテ、ソノ餘際邊ヲモトメソヘテ、先ヅ右ノ古庵ヲシツラヒテ、當年ノ夏、本尊ヲ移坐シタマフ、コノ御本尊ハ、太子ノ御作ナリ、祖師ノ御影、幷ニ兼テ御内佛ニマシマシヽヲ、コノ假御堂ヘ移シタマヘリ、七條ニ在マセシ、敎如、宣如兩上人ノ御墓已下、コト〳〵クコノ地ヘヒキワタシテ、同秋御移徙ノ供養アリ、御代々傳ハリタマヘル祖師ノ御尊骨數粒、御墓

疑歟

ニ納メ奉ツリ、左ニ敎如上人ノ御骨、右ハ宣如上人ノ御塚、左右ニ侍坐シタマヒテ、三骨一廟ノ標幟タリトス、御骨此外ニ有餘マシ〳〵テ、今ノ御影堂須彌壇ノ内チノ最上ノ棚ニアガメタマフ、先年給侍ノ節、御緣ニ依テ、拜見敬禮シタテマツリキ、猶ソノ餘リヤシ〳〵テ、御内證ニ御安置ト、七里道專ノ物語ナリキ、サテコノ新御墳墓ヲ、大谷ノ御墓ト申スコトハ、上古ヨリ北ノ方ハ、禪林寺邊ヨリ、南ハ阿彌陀峯ノ麓高山寺邊マデヲ、總ジテ大谷ト云フト、別記ニ見エタリ、サレバ當御墳墓ノ地、大谷ノ眞中ナレバナリ、ソノウヘ根本大谷御墳墓ヲ移シ、大谷聖人ノ御尊骨ヲ奉納シ奉リタマヒシカバ、諸人ミナ大谷ノ御墓ト申スナリ、勝久寺移傳ノ御墓ヲバ、鳥部野墓ト申シナラハセリ、聖廟兩所トナリタマヘルコトハ、御遺弟繁榮ノ故歟、他家又例多シ、況ヤ本寺東西兩寺ト分レ給ヒシヲヤ、

一傳繪抄ニ云ク、遺骨ヲヒロフテ、オナジキ山ノフモト、鳥邊野ノ北ノホトリ、大谷ニコレヲオサメ畢ヌト、又云、文永九年冬ノコロ、東山西ノフモト、鳥部野ノキタ大谷ノ墳墓ヲアラタメテ、オナジキ麓ヨリ、ナヲ西吉水乃ホリワタシテ、佛閣ヲタテ、影像ヲ安ズト云云、明カニ知ヌ、弘長二年ヨリ文永九年マデハ、御廟骨大谷ニ勅號ヲ下シ、勅願寺トシテ、尊牌ヲタツベキ旨宣旨也、コノ尊影ハ御骨ヲ粉ニシテ、漆ニ和シテ御彩色トスト云云、サテコノ敷地ハ、口ハ五丈奥ヘ十丈、是レ聖人ノ御娘彌女禪尼覺信ノ御寄進ナリ、

〔天保集成絲綸錄六十一〕天保四巳年八月

寺社奉行江

東本願寺門跡

慶長以來之御高恩被報度、右ニ付而、近來御入用多之御時節々被承、上納金被致度段被相願候趣、達御聽候處、御機嫌ニ被思召、被願候通、上納金可被致旨被仰出候、此段可被達候、

〔東本願寺文書〕御事多御時節ニ付、金子壹萬兩、去年八月獻上之、早速非常之御用ニ相立、御滿足ニ思召候事、

野宮宰相中將

○按ズルニ、右ハ文久三年東本願寺、朝廷ニ獻金セシカバ、元治元年正月年始參内ノ時、御前ニ於テ、拜受セシ書ナリト云フ、

〔東本願寺文書〕奉爲龜山帝、勵諸門徒、早構致佛法紹隆沙汰、可專御菩提者、依天氣執啓如件、

慶應元年十二月廿九日、　權右口辨印、

東

大谷前大僧正殿如御房、

名稱　所在　創建

興正寺

興正寺ハ京都七條ニ在リ、卽チ西本願寺ノ南隣ナリ、文明中、佛光寺經譽ノ兄經豪、徒衆ヲ率ヒテ、本願寺蓮如ニ歸シ、別ニ一寺ヲ創ス、此ヲ當寺ノ濫觴ト爲ス、乃チ佛光寺ノ原名ヲ取リテ寺名ト爲シ、終始本願寺ニ隨從セリ、寺格其他皆佛光寺ニ同ジ而シテ維新以後本願寺ヨリ分離シテ獨立セリ、

〔山城名勝志五洛陽〕興正寺元佛光寺一寺也、今在七條北、堀川西、本願寺南、

〔佛光寺傳志山城名勝所載〕花恩院經豪、經譽上人兄云云、文明年中、入大谷本願寺、今興正寺是也、

〔本願寺由來〕興正寺華恩院之事

夫興正寺ノ起リハ、覺如上人ノ御時代、元應二年ノ比、六波羅ノ南方越後守維定ノ家人比留左衞

門太郎維廣ガ中間ニ、彌三郎ト云者アリシガ、覺如上人ノ御弟子トナリ、空性房了源ト號ス、シカルニ正中元年ノ八月、了源ガ建立スル處ノ寺ハ山科ノ興正寺ナリ、寺號ハ覺如上人付サセラル、供養ハ存覺上人ナリ、其後彼ノ寺ヲ、山科ヨリ汁谷ヘ移サレシ時、存覺上人、スナハチ佛光寺ト改タマフ、本ハ興正寺ナリ、元德二年、時正ノ中日、存覺上人、佛光寺ヲ供養シタマフ、已上存覺上人御筆記彼空性房了源ハ、スデニ本願寺ヲ背キテ、汁谷ノ一流ヲ取立シヨリ、永ク本寺ヘ不參ノ末弟ナリ、其後ハルカニ有テ、文明年中ニ、佛光寺ノ華恩院經豪本願寺ヘ歸參ノ宿緣時イタレルニヤ、寺僧四十餘人幷ニ門徒數万人引ツレ、本願寺ヘ歸參ナリ、爾ヨリ佛光寺ニハ經豪ノ弟經譽ヲ取立、彼寺ノ住持トナス、經豪、本寺ヘ歸參セラレシヨリ、興正寺華恩院、于今コレアリ、顯如上人ノ御時、次男顯尊公ヲシテ、興正寺ヲ附屬シタマフ事ナリ、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕興正寺〇中略

當寺開基　順德院御宇建曆二壬申年九月、親鸞聖人于時四十歲山州山科郷東野村ニ、始テ佛宇ヲ建立シテ號興正寺、〇中略然ルニ文明年中ニ、當寺十四世經豪上人、山科本願寺蓮如上人ニ謁シ、信服シ、志ヲ同フシテ、則於山科郷、新ニ堂舍ヲ造立シ、舊號ヲ用ヒテ稱興正寺、於此經豪上人ノ化導海內ニ弘溢ス、然後天正十九年秋八月上旬、京師七條堀河今ノ地ニ移セリ、

門跡號　正親町院御宇永祿十二年秋八月二十八日、當寺十七世、當顯尊上人在世勅許アリ、

堂塔

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕興正寺　在西本願寺南　門東向　堂東面　本尊　阿彌陀佛立像、二尺餘、作安阿彌　脇壇　左　宗祖聖人畫影　右　當寺前僧正畫影　餘間　北　聖德太子幷七高僧畫影　南　當寺歷代畫影、

對面所東面　庫裏南向

寺格

〔和漢三才圖會七十二末山城〕興正寺　在西六條御堂南　開基名佐越號顯尊〇顯如子爲中興、屬西本願寺、

亦爲二一本寺一、

〔草茅危言 四〕一向宗ノ事ニ付テ、序ナガラ議スベキハ、興正寺ノコトナリ、興正ハ、元來佛光寺ノ隱居ニテ、本願寺ノ蓮如ニ歸依シ、其末寺ヲ引連テ、本願寺ニ付屬シ、本願寺ニテ之ヲ天下ノ末寺ノ卷頭トストイヘリ、コレバカリニテハ、同ク攝家ノ猶子、准門跡タル由緒キコエズ、此由緒ハ別ニ何ゾ仔細ノ有シコトナラン、又一説ニハ、此隱居ノ四代目、永祿年中ニ、准門跡勅許アリシト云、然バ其時ノ猶子ノコトモ初リタルナラン、既ニ准門跡猶子タラバ、本山ト並ビタレドモ、末寺ノ名目ハ、ヤハリ存スト云、何ゾレニモ、興門ハ其ノ由緒ヲ鼻ニカケテ、本門ニ屈下セズ、別ニ一本寺ヲ立、兩本門ト鼎立セント規ル、本門ハ之ヲ憎ンデ、ツトメテ、裁抑シ、キット末寺ノ位ニ就シメントスルユヘ代々忿爭タヘズ、今ノ興門ニイタツテ、コノコトマス〳〵喧シク、ソノ末寺騷動ニモオヨビ、一旦公裁アリシカドモ、事議セザル由、ソノ勢カナラズ遠カラズシテ、大獄オコルベシ、興門ハ代々攝府ノ猶子タル故、御當職中、是ヲ後ロ楯トシテ、我マヽノ有シナド云人モ有レドモ、サニアラズ、攝府モ興門ノ驕邪奸曲ヲ憎マセラレ、一旦猶子ヲトリ上ラルベシトノ御沙汰モ有シヲヤウ〳〵ニワビテ、スミタリトキク、夫故中々後ロ楯處ノコトニハ非ズ、此程ノコト故、興門元ヨリ宜シカラズ、本門モ亦ヲトナシカラヌ趣ニ聞及ベリ、何ブン異端中ニテ、骨肉相食ノ變ニ至ル、コレ自ラ衰敗ヲ招ト云モノナレバ、國家ニ在テハ、此ニ乘ジテ、失フベカラザルノ機會ナルベシ、諸處末寺ノコトニ付テ、百姓マデ騷ギ立タル處モ有シトキク、是第一上ヲ憚ラザルノ擧動、其罪輕キニアラズ、雙方共嚴ニ黜罰有ラセラレタキモノカ、是又カノ滔天ノ患ヲ未發ニ滅スル一ツノ方法トモイフベキニヤ、

〔嘉永七年雲上明覽大全 上〕興正寺御門跡

御領百五十石　　西六條御境内

興正寺御門跡攝信　四十七
正僧正法印　號本寂
同　新御門主澤馨　十九
權僧正法印　號廣流
坊官　下間宰相
御家司　黑田陸奥介　村山中務
御用人　金子掃部　中川監物　有馬采女

寺領
〔興正寺文書〕天滿寺內町屋敷地子五百石事、對門主被宛行畢、代官之儀被仰付之條、速令取沙汰可寺納者也、
天正十八二月五日　朱印

寺號
〔諸門跡傳三〕山科興正寺　西本願寺派
親鸞聖人、眞佛、源海、了海、誓海、明光、此代改名佛光寺了海、了明、源鸞、源讃、性曇、性善、此代再名興正寺經豪、慶昭、慶堯、
此代門跡號勅許

佛光寺

名稱所在
佛光寺ハ京都五條東洞院ニ在リ、卽チ眞宗佛光寺派ノ本山ナリ、此寺ハ親鸞ノ開基ニシテ、元ト興正寺ト稱シ、山城國山科ニ在リシヲ、元應中、東山汁谷ニ移轉シ、此時始テ佛光寺ト稱セシガ、豐臣秀吉方廣寺建立ノ際、再ビ今ノ地ニ移リタリ、
〔山城名勝志四洛陽〕佛光寺　號花園院、今在五條坊門南、万里小路西、東洞院東、高辻北、舊在東山澀谷、天正十五年、大佛殿建立時移之云云、

創建沿革

〔宣胤卿記〕文龜四年二月廿日壬子、自花恩院(經豪律師、在山科)送榛兩種、

〔山州名跡志〕二十一洛陽寺院汁谷山佛光寺〇中略

當寺開基、往昔順德院御宇、建暦二年秋九月、宗祖親鸞聖人時四十歳山州山科郷東野村ニ、始テ一寺ヲ造立シテ號興正寺、然後當寺ヲ以テ、其上足眞佛上人ニ附屬セラル、又五條西洞院ノ邊ニ、九條相國兼實公ノ別業花園アリ、以是親鸞聖人ニ寄附セリ、聖人其地ヲ以テ寺トナシ稱花園院、是又眞佛上人ニ附ス、然シテ後、當花園院御宇、以園改恩、其已後堂舍ハ、亂世ニ至テ滅亡セリ、自之當寺ノ院號ヲ稱華恩院、其後後醍醐帝ノ御宇、元應元年ニ、當寺ヲ以テ、今比叡竹中庄汁谷ニ移ス、凡東ハ阿彌陀峯ヲ限リ、西ハ柳原ニ至ル、南ハ菅谷ヲ限リ、北ハ汁谷大路ニ至リ、領所若干也、又同御宇、當寺阿彌陀佛以爲靈佛、有奪取者、然レドモ有難事歟、是ヲ二條河原ニ棄ル、其夜數行ノ光明映赫シテ昭帝闕、雲客不堪傀怪、其光所ヲ求ルニ、是則所捨置佛光ナリ、帝叡感アッテ、勅シテ改興正寺、令爲佛光寺、加之以宸筆宗祖聖人ノ傳卷ヲ書シ、又以當寺可爲一向專修棟梁之綸旨ヲ賜ル、其後將軍尊氏公ノ祈願所トシテ、佛供田ヲ寄附セラル、自之宗門次第ニ全盛ニイタリ、歸伏ノ僧俗諸國ニ徧滿シ、塔頭〔一〕ニ四十八坊ニ及ベリ、然ルニ文明年中ニ至テ、當寺十四世經豪上人、山科本願寺蓮如上人ニ屬ス、此時寺僧四十二坊、及門徒數輩隨順ス、然シテ經豪上人於山科東野村、新ニ一宇ヲ草創シテ、舊號ヲ復シテ稱興正寺、依之當寺所在ノ六坊、經豪上人ノ舍弟經譽上人ヲ立テ、當寺十四世ノ血脈トス、然後秀吉公就大佛殿建立、當寺ヲ以テ、洛陽今ノ地ニ移シ玉ヘリ、

門跡號　後土御門院御宇、寛正六年乙酉、當寺十三祖光敎上人蒙勅許、

〔山城名勝志〕四洛陽佛光寺〇中略

存覺上人記云、元德二年二月時正日、供養佛光寺、元興正寺也、

〔祇園執行日記〕文和元年閏二月十五日、今日留守間、未剋、就下北小路白川佛光寺(一向宗)破却事、寺家

公人十餘人帶政所集會事書〈閏二月九日云々〉下洛、即可召具犬神人之由申間、以寄方催促、仍廿人許罷出之間、山門公人犬神人等、山徒曇殊院同宿大進注記、自元住彼寺、問答云、當寺事、先年山門就有其沙汰、歎申間、東西兩塔學頭、出連判免狀了、而俄今度無左右及破却沙汰之條不可然、此趣於山上可有其沙汰、先可罷歸之由候間、山門公人等不遂其節退散候間、當社公人幷犬神人等同罷歸了、右公人下洛、剩今日社參酒肴可被口口先爲執行代顯惡法師沙汰口給了、山門公人等、自佛光寺直歸了、〈中略〉

十八日、山門事書到來、一向宗堂佛光寺破却事、曆應年中、東西兩院學頭申連署免狀之處一類輩、近日可破却之由、有其沙汰條無謂、向後不可信用耳、申入貫首之由、事書〈十禪師彼岸所三院集會事書也、〉使專當於大法師代給法師云々、　十九日、一向宗堂不可破却、由事書、昨日到來、案今日遣目代許了、主上自天王寺今日行幸八幡、

〔佛光寺文書〕文明十三年十一月三日、山門大講堂集會儀、可早被啓達畠山殿事、

右吾山者、奉安十二大願尊像、勵衆病悉除之秘術、旋亦嚴三七和光權排、祈國土安事、所學者鎮護國家之要道、所修者除災與樂之妙旨也、爰頃年吹魔風、煽台嶺法燈、滿邪宗、四海隔正法、依之隱靈神擁護之威、失佛陀濟度之便、是以謗法輩爲山門雖加制止、猶以興行之間、加州一國既爲无主之國土、民族致違行之條、頗可謂亡國歟、嗚呼公武思食忘一旦之偩、下剋上之企无御覺悟之條、口惜敷次第也、然汁谷佛光寺之事、先年本願寺破却砌、可及其沙汰之處、爲妙法院殿、於彼寺者、本願寺非一流之宗體、爲法類各別、當門跡候人之由被仰分之間、寛宥之處近年居當國平野、曾以不及舊跡再與興行、闍先祖相傳之法流、无㝵光之儀張行云々、亂滿之基太以不可說也、所詮退彼佛光寺住持、本尊〈幷二〉聖教以下山門〈江〉渡給者、以由緒器用之仁體可定住持者也、然者敬神歸佛之根元、治國利民善巧、不可過之上者、耀醫王善逝之威光、施龜壽萬春良藥、募七社明神之冥助、廻當家億兆胖、滿山之禪徒者、彌瑩顯密之智劍、可抽子孫長久、松花千廻之懇祈之旨衆儀訖、

〔佛光寺文書〕文明十四年卯月廿六日、山門大講堂集會儀曰、可早被啓達妙法院門跡事、
右破邪歸正者、佛敎之太底、止惡修善者、戒門之法度也、爰太谷本願寺者邪法張行、亡國企遑眼間、先年既依令破却、同澀谷佛光寺事、可處同罪之處、爲當門跡御進止、非邪法之由被仰分之間、得其意之處、今般花恩院大納言無㝵光衆一味段、令露顯之條、以外濫吹也、然間江州末流之族、爲國方可令追放之由申送畢、但兄弟內、以正法發起之仁體佛光寺住持職御補任在之云云、依之末流之輩就最屓亦相分之由在之、然上者就邪正差別、兩方與力輩註分可給也、然重物遂糺明、於無㝵光衆同意者、堅加罪科、至根本如法之輩者、可令免除由群儀而已、

堂塔

〔山州名跡志洛陽寺院二十一〕汁谷山佛光寺　在五條坊門高倉　宗旨　淨土眞宗　門北面　堂東面
本尊　親鸞聖人影坐像、二尺餘、　安厨子　自作　脇壇　北隨庸上人畫影　南了源上人木像坐像、二尺五寸餘、
南北餘間　九字十字名號　隨庸上人筆
阿彌陀堂　在堂南、東面、　本尊　阿彌陀佛立像、三尺一寸八分、安厨子　作慈覺大師　此尊ハ親鸞聖人ノ安置佛ナリ、眞佛上人ニ附屬ス、　眞佛上人、姓桓武五代後胤常陸大掾平國香苗裔、下野國司大內家也、　脇壇　左聖德太子木像立像、二尺五寸餘、自作　安厨子　右法然上人木影坐像、一尺五寸餘、自作
安厨子、〻法然上人配所下向ノ時、親鸞聖人ニ附屬スル所ナリ、
餘間　北安將軍家御代々御牌　昔日存覺上人、於此所述六要抄幷四部九帖、故名存覺間、　南三朝六高僧木影共坐像、一尺五寸餘、中光明大師唐作、
骨堂　鐘堂　茶所等存ス

寺格

〔佛光寺先規作法記錄〕付リ大佛、於妙法院御門跡、千僧供養ノ出仕ニ付テ、佛光寺と本願寺と、穿鑿出來候意趣之事、　文祿四乙未年十月十五日、千僧供養始メ、八宗出仕以後、妙御門跡、大閤ニ御ウカヾイ被成、大閤御意ニ、佛光寺ハ、出仕無之、當月ハ、先本願寺罷出候、來月ハ、佛光寺も出仕と

被仰上、故ニ十一月廿九日ニ可罷出と被仰越也、佛光寺出仕、本願寺と各月ニ可罷出と在之處ニ、本願寺ゟ申分、佛光寺と各月出仕ト被仰付候、月ガハジマリニ候間、當月、本願寺罷出、來月佛光寺可被出と本願寺ゟ被申懸也、妙御門跡ゟ、先月本願寺出仕候間、當月ハ佛光寺出仕と御理リ候へども、各月出仕と被仰出候が始にて候而、本願寺可出と被申ニ付、センサク罷成也、佛光寺申分、其センサクナラバ、猶々佛光寺ハジメニテ御座候、其子細ハ、本願寺ヨリ、佛光寺ハ、サキニハジマリ、開山ノ御跡ツギノ寺ナレバ、本願寺跡ニ可罷出儀無之通申ニ付、公事ニ罷成、伏見ニヲイテ、太閤、御奉行衆之御前ニテ、センサク候而、佛光寺申分相聞へ候とて、公事ニカチ、十一月廿九日ニ、佛光寺罷出候事、當寺ゟ、御奉行所へ罷出ル衆 四坊 信秀 南坊 覺秀 中坊 玄通、右三人罷出候而被申披也、

付リ 本願寺、右遺恨ヲ以テ、明ケ申ノ正月ニ、大閤へ本願寺ゟ被申上、御朱印申請候而、本願寺ニ付テ、佛光寺出仕可仕と、德善院民部卿法印へ御朱印被付候、其たつし、

毎月大佛殿江諸宗出仕付、而一向宗體之事、本願寺、佛光寺月替出仕之旨被及聞召候、其通無御存知事候、自今以後、佛光寺事、本願寺に付而可出仕旨、堅可申付候也、

正月十二日　御朱印

民部法印

如此德善院へ、御朱印參候付、右之旨佛光寺へ申來候、佛光寺返答、來廿九日、大佛之御齋、本願寺同前ニ可致出仕、御朱印被申請付而、御理申上條々、

一文明年中ニ、彼本願寺、邪法をとりおこなひ申とて、山門大講堂の集會にて、被加御成敗の時も、佛光寺各別之旨付而、無異儀、至今日、本願寺と別各之筋目、山門ゟの證文分明御座處を何かと被申掠候段、致迷惑事、

一從古來本願寺參會不仕候事ハ、文明年中、山門より堅被定置候證文在之付而、以其筋目、先祖共、今生後生の罰文をもつて、誓詞を仕をき候間、子々孫々の分として、參會申候儀、是又迷惑仕候事、

一證文、曆々慥なる體御披露候は、一向宗義法度山門よりのをきめ、佛光寺、本願寺各別の子細相聞可令申候事

文祿五年正月廿二日　　佛光寺

民部卿法印

如此訴訟狀以テ、德善院へ、信秀、覺秀、玄通三人罷出、御理り申達候處ニ、德善院、山門之證文御入候哉と御尋在之、則三通指上ル、右筆梅軒ニよませらるゝに、一行も不成、其時二通ハ覺秀、一通ハ玄通讀ミ被申候、民部卿御聞被成、扨々慥成證文にて候、其旨大閤へ可申上候間、三通之書物渡し候へと御申候、其時玄通是ハ寫シにて候而、本書可懸御目と被申候へば、不及本書候、今時分、かやうの物、俄に誰人か書可申候哉、うつしを渡し候へと御申ニ付、三通ノ寫渡し申候、則大閤へ被懸御目ニ候へバ、よませ御聞候而、本願寺中々僞申上候、佛光寺ゟ本願寺ハ、末寺と可申事候、早々朱印返し候へと御申ニ付、佛光寺斷立申候然處ニ、尤御齋ニ罷出度候へども、末寺田舍遠國ニ在之、上洛申儀迷惑仕候而、願ハ御赦免被成被下候へと御斷申ニ付、御聞分被成候て不能出事、

〔嘉永七年〕雲上明覽大全 上 佛光寺御門跡

御領六石八斗　　五條坊門高倉

佛光寺次曆君　十一

院家　大善院權僧正　光園院權大僧都　長性院權大僧都
　　　久遠院權僧正　昌藏院　敎音院大僧都

坊官 江戶大蓮寺　西德寺肥前長崎　讃州高松正覺寺　聽德院京　越後寺泊高林菴　聖德寺越前武岡村　岡中島西雲寺

御家司 小幡出羽介　小島民部　小幡大和介

御用人 今村主鈴　關窪宮　關數馬　猪飼但見

〔和漢三才圖會七十二末山城〕佛光寺 在五條坊門通高倉　寺領七石二斗餘

本國寺

本國寺ハ京都六條堀河ニ在リ、日蓮ノ開基ニシテ、原ト相模國鎌倉郡鎌倉ニ在リテ、妙法寺ト號セシヲ、後ニ今ノ名ニ改メ、北朝貞和年中、住持日靜ノ足利尊氏ノ叔父タルヲ以テ、其力ニ賴リ寺ヲ今ノ地ニ移セリ、而シテ其舊地ニハ別ニ一寺ヲ建立シテ、舊寺號ヲ襲テ妙法寺ト稱セリ、

法華亂ハ文和中延暦寺ヨリ、祇園ノ犬神人ヲシテ、日蓮宗ノ寺院ノ京都ニ在ルモノヲ破却セシメ、天文二年又破却ヲ圖リ、其五年ニ至リテハ、洛中洛外ノ日蓮宗寺院、一トシテ其禍ニ遭ハザルハナク、各寺ノ僧侶ハ皆僻陬ニ遁避シテ、都門一時全ク同宗ノ跡ヲ絶ツニ至レリ、然ルニ同十五年、日蓮宗ノ僧徒相共ニ官ニ請ヒテ還住ヲ許サレ、尋テ延暦寺ト和ヲ講ジ、爾後再ビ堂舍ノ興復ヲ致セリト云フ、

〔山城名勝志五洛陽〕本國寺 號大光山、方丈名妙法花院、在五條南、六條北、堀川西、大宮東、

寺家說云、元在鎌倉、日蓮上人、建長五年八月廿六日、於鎌倉松葉谷結一庵、始名法華堂、後號本國寺、一宗最初精舍也、後日朗上人受讓、迨伽藍第四祖日靜上人、自鎌倉移帝都六條堀川、日靜將軍尊氏叔父也、祖師堂八條堀川戒光寺藥師堂也、故戒光寺銘瓦至于今相殘、南門皆在七條、本國寺被建時、此門絕、今北門耳殘、今寺地於北方、松永霜臺久秀所寄附也、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十七〕妙法寺〔〇中略〕廣布錄曰、建長五年卯月二十八日、祖師三十二歲、始而弘宣法華宗旨、同年八月廿六日、於鎌倉松葉谷結小庵、祖師住此地、前後十餘箇年、始法華堂、後號本國寺、尤一宗最初之精舍也、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十七〕妙法寺〔〇中略〕京六條本國寺所藏文書曰、別當職之事、不及是非同心候者、可爲眞實候、殊以松葉谷本國寺廢地義、止他妨、可有早興營候由、仰之旨申渡候訖、猶矢部七郞可申候、恐々謹言、五月七日〔〇恐爲文永十一年〕日蓮御房賴綱華押、

〔新編相模國風土記稿鎌倉郡八十七〕妙法寺〔〇中略〕同寺藏綸旨曰、松葉谷本國寺勅願之旨、被仰下訖、奉禱爾四海泰平、可抽精誠者、天氣如此、悉之以狀、嘉曆三年十一月二十一日、法華宗日靜上人御房、葉室左少辨長光奉、

〔本國寺年譜三〕嘉曆三年戊辰

十一月二十二日、三祖印〔〇日印〕師、手書讓狀、爲傳法付屬證、其狀曰、讓與日靜所、

右本國寺鎌倉松葉谷者、日朗聖人御造秘之靈場也、大聖人御讓狀立像釋迦佛、御自筆安國論、御免狀等、任付第相承之旨、悉所付屬日靜也、越後國本成寺等者、爲本國寺末寺、所付屬日源也、〔置文在之〕若日源短壽者、共一圓可爲日靜進止也、如本師之元意、不惜身命、可弘通宗旨大事也、仍讓狀如件、

嘉曆三年〔戊辰大歲〕十一月廿二日　　日印〔在御判〕

本尊持經聖敎等、悉皆渡之、

〔山城名勝志五洛陽〕本國寺、

院宣　勅願所本國寺、今度被遷帝都訖、永爲不易之寺地、任望之旨、六條楊梅東西二町、南北六町、令全管領、早可被致建造之由、院〔〇光嚴〕宣所候也、仍執達如件、

貞和元年三月十日　　權中納言隆蔭奉

三位僧都御房〇日靜

直義狀　六條法花堂屋敷、南森裏田堺、北五條今道堺、東御所跡舊堀堺、西大宮藪下溝堺等事、右任本地(但四町四方)之例、院宣所候也、

貞和元年十月二日　直義在判

本圀寺

〔祇園執行日記〕文和元年二月廿六日、法華堂破却事、昨日到來、重事書(第二度)案、以寄方下犬神人、明日可用意之由下知了、　廿九日、法華宗住所可破却由事書又到來、(第三度也)山門公人不相副馳向事、無先規之由、犬神人等申候旨返答了、使者釋迦堂御座供歸進公人云々、

〔二條寺主家記(續南行雜錄所載)〕二月(〇天文五年)之比、於京都叡山花王院、阿彌陀經之談議有之、日蓮宗(仁)杉本ト云者、談議ノ座(江)望テ不審ヲ立、一句以非道致陪儀間、被問訊ト云ヘドモ、願與耻辱間、山内ニ聞之、大衆怒テ、花王院山上ヲ追出云々、依之江州小弼殿(〇佐々木定賴)其外四ケ本寺觸催、六月廿三日京都押寄、東山ニハ六角殿衆三万計ニテ陣取、白川ヨリ北、勝軍地藏ノ上迄ハ、叡山衆本寺末寺都合其勢二万餘騎、其ヨリ北ノ方ハ、三井寺ノ衆三千餘騎ニテ陣取、廿四日、五日、九合戰、廿七日晩、日蓮宗沒落、三條口ヨリ初テ、下京ハ悉以燒失、上京三分一程燒了、

〔祇園執行日記〕天文二年六月十八日、京ニ殘リ候法華宗又ハ京殘候武士共交リ候テ、八郎ノ衆居候所、高雄、栂尾ヘウチマハリガテラニ行候處ニ、八郎衆モ出候テイクサ候、京衆クヅレ候、人三百計死ニ候由申候、シカ〳〵トシラズ候、京迄クヅレ候、京迄ハ八郎衆來候ハズ候、此クヅレニ、攝津ノ國ノ守護代、藥師寺備後ナド死ニ候也、今日近江モ來候也、　十九日土用ニ入候、今日モトタヨリ鐘ツキ、京衆京計ヲウチマハリシ候、西カラモ少出候ゲニ候、イクサナゲニ候、　二十四日、八ノ時分程ニ、西ノ衆千四五百ニテ、法華寺ヘ取カケ候、少ト房モヤケ候、日蓮黨四五人死候、西ノ衆モ

二三人死候、○中略七月十七日、此地下ノ者、建仁寺ノ門前カケ候トテ、震動シ候、十八日、今日建仁寺ヨリフリウノカヘシトテ、房辻ノ上ニ櫓ヲアゲ見候也、

〔天文日記〕天文五年六月十七日、延暦寺ゟ就日蓮宗退治之儀、合力之事被申候、　五年七月廿七日、京都日蓮衆徒、昨日大責、今日相果候、然而六條本國寺計未相拘候、其外悉果候、坊々ども、果候、人數大死候、

〔祐園紀抄續南行雜錄所載〕天文五年七月廿三日、山門ト京ノ法華衆ト取合出來也、山門ノ末寺越前兩寺、江州ノ一國、同心數万之勢云々、京都ノ法華衆ヲ可退治云々、子細ハ、去春ノ末事歟、山門ノ阿闍梨於京都法華ノ談議ヲ被致之其砌、法花衆ト號シ、彼談議ニ種々ノ答ヲ入之問答之處、件談議者、少落目ニ成處、散々ニ失面目畢、ソレヨリ談義破了、然バ山門失面目之間、京ノ法花衆ヲ可成敗云々、去五月初頃事歟、然バ彼法華衆取出デ及合戰了、所々ノ法華衆合力云々、二万騎餘モ有之歟申之云々、山門ノ勢十五万騎モ有之由風聞、廿五日、六日、大合戰アリ、廿七日ノ合戰ニ、法華衆切負、數千人打死云々、然バ上京下京大都燒失了、言語道斷之事也、但又傳聞、內裏其外上京三分一計ハ無大事、人死スル事三千人トモ、四千人トモ數ヲ不積也、又內裏ヘニゲ入候者數千人アリ、女童部押コロサレ、又ハ水ニカツエテ死ス、四方ノツキヂノ外ヘナゲ出シ〳〵スル間、內裏廻、死人數百人有云々、

〔公卿補任後奈良〕天文五年丙申(中略)七月廿三日、爲日蓮黨發向、自山門出張、

〔快元僧都記〕一七月七日○天文五年、七日、二十七日誤、京都日蓮宗退治、山門攻之、日光山衆ニ入攻上、平泉寺同發向、日蓮宗一万人討死、平野神主正二位兼永、及小倉中將等滅亡、

〔東寺過去帳〕天文五丙申七月廿七日、從山門就日蓮黨退治之義、彼黨類幷道俗男女等、生害數千人云々、

〔細川兩家記〕一京の法花宗、あまりに猥藉共有之間、山法師より、法花衆を發向候也、諸法花堂廿一箇寺燒失なり、一千餘人死すると云也、七月〇天文五年二十六日なり、南無妙法蓮華經也、

〔續史愚抄後奈良〕天文五年七月廿七日庚辰、日蓮黨自昨敗績、依爲彼檀徒、神祇大副三位兼永右中將公右朝臣等見殺、卽又彼宗寺廿一箇所火、餘炎延及于所寺、洛中過半燒亡、已上山門僧徒所爲也、公卿補任、王代年代記、歷代年代記、皇年代略記、往年記、

〔本能寺文書乾〕定

一日蓮黨衆僧、幷集會輩、洛中洛外於徘徊者、得御意可加成敗、彼僧令還俗、或相紛他宗族在之者、可爲同罪、然上者、彼等於許容者、可致罪科事、

一日蓮牛王札、幷推札家事、隣三間可被行闕所事、

一日蓮衆諸黨諸寺再與停止事

右條々有違犯之輩者、可被處罪科者也、依仰下知如件、

天文五年閏十月七日　上野介三善朝臣在判

〔本國寺年譜八〕天文十五年丙午

十二月被許從官舊地還住、其狀曰、

洛中法華宗還住之事、連々依被歎申、被成御心得之上者、早如先々可有歸住之旨、本國寺江者、別而被仰渡候、對彼一宗中可被申觸之由候也、仍執達如件、

十二月十八日　爲清在判

波多野備前守殿

舊記曰、後柏原院御宇、天文十五年十二月十八日、義晴將軍奉行爲清狀、十四祖日助代、十從蒙此命、忽告沙界浪華、去癸卯年、約定庫裏書院等再建、從此時木材造始、今年既而成、雖然官命未蒙、故藏之不上都也、今聞命不日應上都木材云、〇中略

十六年丁未

十四祖寓居草庵勸化、正月六日、築地始矣、（庫裏、書院、居間、對面所、玄關、卜地以成、）連日、木材上都、二月庫裏成、居間成、對面所成、書院成、玄關成、諸國諸末寺宗門至信輩、上都而寄附其志、如此至再建、五月威成矣、然勸化所、草庵勸誘不止、肋師往被住、此法務、八月六日本堂再建成矣、十日將遷座本尊、告官七日賜綸旨、（後奈良院人皇百六代）其文曰、

來十日、本尊遷座之由、被聞食訖、當寺爲勅願所、殊日蓮正嫡之段、任支證之旨、爲廣布導師、可奉祈天下安全寶祚延長者、天氣如斯、仍執達如件、

八月七日　右少辨

本國寺住持日肋上人御房

八日奏家召日肋賜九日遷座莊嚴（三寶、立像尊、生御影等奉安）十日大法會、大群集如竹葦矣、大衆歡喜信俗復本、無限喜復不可云、九月、唐門、出仕門、高麗門建、十月御影會式、於本堂務之、

〔本能寺文書〕（坤）平井加賀守殿　進藤山城守殿　書狀之寫

今度山門と當宗御和談之儀、爲霜臺（〇松永久秀）被相調、以直札被申候、永代不可有相違候、如先々佛法御再興肝要候、恐々謹言、

六月十七日（〇天文十六年）　貞治　判　高好　判

本能寺　法花寺　本國寺　諸寺代御中

〔集古文書三十七〕就日蓮衆還住條々事

一爲總分妙傳寺一圓放火之事

一向後法度東目（在別紙）定賴一札相副之事

一爲日吉御祭禮料之足付、毎年百貫文宛、三月中ニ永令納事、

右三ヶ條之儀、懇望之旨、依霜臺〇松永久秀被執申、御落居之上者、向後自他不可有別儀候、萬一相違之儀者、可被任定賴一札之旨候也、仍狀如件、

天文十六丁未六月十七日　近藤山城守貞治判在
平井加賀守高好同

三院執行代御坊

堂塔

〔山州名跡志洛陽寺院二十一〕大光山本國寺　在松原通南堀川西

宗旨　法華　宗派一致　總門東向

二王門西向　安兩金剛力士長八尺餘作不考〇中略

堂南面　本尊中央法華經　日朗僧都一字三禮之自筆　左釋迦佛　右多寶佛坐像長三尺餘　脇士

雲上四菩薩立像長三尺餘共作民部卿法印定慶　四天王立像長四尺餘作康慶

祖師堂　在本堂南西面　安宗祖日蓮影坐像三尺餘

寺記云、右此三影ハ、日靜上人ノ作也、

傳云、祖影ニハ、存生ノ脱齒三莖ヲ藏云々、〇中略

刹堂　在本堂西東面　安鬼子母神十羅刹女、鬼子母神ハ朗師持尊、刹女ハ法橋康秀作ナリ、堂ハ天文十七年ニ、細川右京大夫晴元再建

番神社　在祖堂南西面

拜殿　刹堂南在、東面、所勸請　天照皇太神　八幡大菩薩　三十番神

舊社ハ、太田道灌建立ス、當社ハ、加藤清正再建也、

三光社　在番神社南、西面、

當社造立　松永彈正久秀〇中略

大黑堂　在番神北、西面、安大黑神立像長二尺餘

此堂建立　小出播磨守秀政〇中略

清淨院塔　在堂東、西面、加藤肥後守清正室　法名　清淨院妙忠日壽

淨池院塔　在堂東、西面、肥後守清正　法名　淨池院殿日乘

瑤林院塔　清正姬　前大納言賴宣卿室　法名　瑤林院殿淨秀日芳

菊亭家代々ノ塔アリ

方丈西面　額　妙法華院字〇中略　額八分

人麿社　在方丈北、南面、所祭　柿本人麿

〔本國寺年譜　三〕南朝正平三年戊子北朝貞和四年戊子

貞和二年、祖師堂欲建、議棟梁藤井石見與之、五月十五日、賜正嫡綸旨、人皇九十七代光明院、

六條本國寺、爲日蓮正嫡之道場、殊安閻浮第一之釋迦佛、今日供養之旨聞食訖、彌抽法華之功力、宜被致四海泰平之精誠者、天氣如此、悉之以狀、

貞和四年五月十五日　左大狀

三位僧都日靜御房

昨年、釋迦堂既而成矣、今年七月十五日、開大法會尊佛遷座供養、故有賜物大成群矣、祝開堂也、

〔本國寺年譜　四〕南朝元中三年丙寅　北朝至德三年丙寅

四月八日五重寶塔成、奉安釋迦多寶四天王、祝開塔、宗門最初塔也、大爲群、

〔本國寺年譜　七〕天文五年丙申

三月廿六日、廿七日、當山戰復兵火、堂宇咸火、吾宗僧俗五萬八千餘也、上州之勢防裏門、若州勢防表門、雖然台徒

放火、酉戊（廿七日）剋燒失矣、此時阜諦女現、呼助師三聲、所現石今猶存云、阜諦石（大客殿南立像拜殿西在）是也、助師、三箇靈寶、三靈像、其他本尊等供奉、至泉州沙界、奉安成就寺、七年于茲也矣、東寺門前堤源左衛門防兵火、本尊釋迦多寶持還奉安、吾舍云、久我村末寺檀越切、本堂常拜本尊表相、與助師、助師本尊懷逃矣云、大客殿狩野永德畫切之、與衆云、衆取之去、（本尊輪寶本尊、是永德畫、今床上餝、）如此至之事具如記錄、（靈場記冠八十七冊、諸家）散記對考可知、是人唱天文法亂云也、

〔本國寺年譜十一〕寶永元年甲申

第廿一祖法務矣、從四月朔至十五日、本堂再建供養、十四日通夜、十五日寅剋衆徒諸末寺百味飲食供養、貫首大客殿至本堂正面（乘輿）音樂法事、（十五箇日）萬燈會如別記、九月東山題目堂建立、新始、（施主大坂鹿島宗碩）本堂再建本願主、（大坂鹿島八兵右衛門、法號貞林院宗碩日慧信士、伊丹加島九郎左衛門、法號本學院宗幽日宏信士、本堂材木、皆悉寄附矣、從本堂再建始、悉皆成就至、作事奉行勤持院日雄務之訖矣哉、）

〔本國寺年譜十二〕天明八年戊申

正月晦日寅剋、四條加茂川之東、宮川裏新道鈍栗辻子兩替屋失火、斯夜大風、忽火散東西南北、洛中過半類燒矣哉、禁裏御所、仙洞、女院、攝家、清花其他公卿、殿上宮殿、自他寺社、武官館、所司及文奉行舍町家、大風自在吹、悉類火、（風爲殘）斯時當山堂宇塔頭悉皆燒亡矣、山主退東寺法華堂、役僧塔頭大衆合心、靈佛其他佛像靈寶等、高名畫屏風張附等除此災、持出無難、但寫本類失之可謂丹精之勵矣哉、天文法亂以後、追年追日輪奐備矣、惜哉一時成灰塵矣、所殘物、番神拜殿（加藤清正公一建立）洛室之（後佛）尊佛拜殿（東南大客殿有、今假安大黑天、）經藏輪、（今番神像古佛等安此內、）塔頭棠長院一字、（後拂之爲空地、）二月夕火消、二月二日、山主假移居番神拜殿、而後背議、告諸國遠末近末乞救、坊跡各出標札、追日追月拂灰塵、拂除之、遠近末寺及檀越登京救此窮迫也、五月松平越中守（老中）上京、處々巡見、廿五日參內、（此時、聖護院宮中、皇居、月卿雲客詣、）八月當山刹堂建矣、（中立寶千本西入大黑庵、引大黑堂、爲刹堂、乃廿九世附正日解隱棲庵也、此師建大黑堂、今挽是于茲、）此災實前代未聞、

寺格

本國寺　京　日蓮宗

〔開帳差免牒〕戊春○文化十一年
右堂塔、天明八申年燒失いたし、追々再建いたし候得共、未不建揃、再建難叶、自力、依之爲助成本尊立像之釋迦佛、幷靈佛、靈寶等、來戊三月八日ゟ日數六十日之間、本所法恩寺ニおゐて開帳いたし度段、酉三月中、松平右京亮方江願出、年限未滿ニ付、御老中江伺之上、同月廿八日、於自宅年限ニ而願之通差免申候、

〔新編相模國風土記稿八十七鎌倉郡〕妙法寺○中略同寺藏文書曰、禁制、本國寺、右當寺爲勅願所、叔父日静所住之道場也、武士甲乙人等、不可致亂入狼藉、若有違犯之族者、可處罪科之狀如件、貞和四年六月三日、前ニ直義袖判アリ、

〔山城名勝志五洛陽〕本國寺
後小松院綸旨當寺爲勅願所、殊日蓮附法之根本、的傳正嫡之旨、被聞食訖、
應永五年二月十日　左大辨
本國寺上人御房

〔本能寺文書坤〕口上
一本國寺者、勅願所、殊日蓮正嫡之御倫旨在之、依之每年御祈禱之卷數、禁裏江差上、參內相勤、代々住持官職相勤、日蓮一宗之頭棟故、一宗諸寺之內ニ者、無異論座上仕候、又從御公儀諸事各別被成下候事、以上、
八月廿二日○年代未詳　本國寺

〔寺鑑下〕日蓮宗本國寺派　大光山　本寺　京都　本國寺
右住職、役者評議之上、菊亭家江伺之上相定ル、
御朱印　高百七拾七石

寺領 雜載

〔和漢三才圖會山城七十二末〕大光山本國寺 在堀川通松原 寺領百五十五石〇中略 東西二町、南北六町、

〔老人雜話上〕靈陽院殿〇足利義昭は光源院殿〇義輝の弟にて、南都一乘院の門跡にすはりておはす、〇中略信長〇中略靈陽院殿を天下の主と定め、本國寺に置て能守り玉へとて、頓て岐阜へ歸れり、〇中略三好が餘黨、尼崎邊に居たる者共、又發り來て本國寺を攻む、是を本國寺合戰と云、永祿十一年比也、本國寺巳に外郭を攻め破られて、藪一重になりけれども、初信長へ服したる伊丹、池田等來て、三好黨を討亡して、遂に昌山恙なし、〇中略さて本國寺にも心元なしとて、室町武衛陣に城を築きて、昌山をすへらる、今の武衛陣、東側ハ石垣なり、西側ハ町屋なり、家中の武士は面々屋を構へよとの事なれば、本國寺の宿坊を皆引取て家居とせり、

妙顯寺

妙顯寺ハ、京都寺ノ内小川ニ在リ、日蓮ノ弟子日像ノ開基ニシテ、同宗ノ寺院中、京都ニ在リテハ尤モ古キモノナリ、

名勝所在

〔和漢三才圖會山城七十二末〕具足山妙顯寺 在寺之內通小川 寺領一石

開基 日像上人 初號妙本寺在二條西洞院、天正中遷于此、

加賀中納言利光卿再興 役者 有六坊〇中略

右三箇寺〇妙顯寺、立本寺、妙覺寺、同山號、俗謂之三具足、

創建

〔山城名勝志洛陽二〕妙顯寺在寺內通北、小川東、元在二條南、西洞院、元妙顯寺町、天正年中遷于此、(中略)當寺、元號妙本寺、

〔草山績集二十八〕洛陽妙顯寺志略

洛陽妙顯寺者、日像菩薩之開基、而後醍醐天皇勅願之道場也、建治元年、菩薩年七歲、巳稟高祖付囑、及二十六歲、大弘吾宗於帝京、三遭擯斥、遂啓法運、元亨元年、賜寸金地、開大道場、號妙顯寺、是王城之地、一乘圓頓之宗伽藍之權輿也、權化之所施、早有感應之迹、元弘三年大塔宮願狀曰、妙顯寺者、靈驗無雙之本尊、利生方便之聖迹也、建武元年勅曰、妙顯寺爲勅願寺、殊弘一乘圓頓之宗旨、宜凝四海泰平之精祈、其餘歷朝勅綸旨、及封職等之事、不可枚擧、

堂塔

〔山州名跡志洛陽寺院二十一〕具足山妙顯寺　在寺內條小河通上　宗旨　宗派同前法華宗○一致派

樓門南面　額　妙顯寺横額　安金剛力士長六尺許　作不考　額　再興大檀那加賀國黃門利光卿御母堂、爲二世靈地也、光悅筆、

祖師堂　在佛殿東、西向、

番神社　在祖師堂東南、西向、　拜殿同

七面明神社　在右社前池中、西向、

五重塔　在祖師堂西、東向、

開基　日像上人　後醍醐天皇勅願之所也、初在西洞院二條南、如今天正年中、依秀吉公命所移也、

當寺ハ、於洛陽、此宗弘通最初ノ寺ナリ、

寺格

〔妙顯寺文書山城名勝志所載〕綸旨　妙顯寺爲勅願寺、殊弘一乘圓頓之宗旨、宜凝四海泰平之精祈者、天氣如此、悉之以狀、

建武元年四月十四日　民部權大輔定親

日像上人御房

〔妙顯寺文書〕當寺已爲數代勅願、且任永和鳳詔、近日殊專一宗之勤行、宜奉禱爾四海之安全者、天氣如此、仍執達如件、

寺領

應永六年十二月七日　左少辨花押

妙本寺長老日霽上人御房

〔妙顯寺文書〕妙本寺事、可ㇾ爲二祈願寺一之狀如ㇾ件、

應永十八年七月十八日　花押〇足利義持

住持

〔妙顯寺文書山城名勝志所載〕四條以南、綾小路以北、壬生以東、櫛笥以西敷地事、止二方々妨一、可ㇾ令ㇾ全二管領一給之由、天氣所ㇾ候也、仍執達如ㇾ件、

嘉慶元年八月十五日　權右中辨實敦

妙顯寺通源上人御房

〔妙顯寺文書〕押小路以南、姉小路以北、堀川以西、猪熊以東地事、爲二妙本寺敷地一可ㇾ有二知行一之狀如ㇾ件、

明德四年七月八日　花押〇足利義滿

〔妙顯寺文書〕當寺敷地八町之東ハ西洞院、南ハ三條坊門、西ハ油小路、北限二二條大路一事、藤中納言永繼卿〇高倉雖下爲二舊領一沽却之儀分明候上、然今度依二御尋一申二披子細一、被二聞食分一候、既永繼卿沽券之旨、攝津守存知之上者、當知行不ㇾ可ㇾ有二相違一候也、恐々謹言、

八月廿日〇永正十六年　元親花押

妙本寺御房中

〔妙顯寺文書〕二條以南、三條坊門以北、油小路與二西洞院一間、東西壹町、南北貳町、地事、依ㇾ爲二藤宰相家舊領一、今度被二棄破一上者、可ㇾ給二置之一處ニ、當寺御敷地之條、任二件理之旨一、令二用捨一候、然上者、永不ㇾ可ㇾ有二違亂一候、仍狀如ㇾ件、

天正叁年十月十八日　藤宰相家雜掌粟津筑後守　貞清

妙顯寺役者御中

〔東武實錄 二十九〕寬永七年二月二十一日、去年二月、甲州久遠寺ノ住僧日遠、宗論○中略

次、永喜讀口宣(後醍醐天皇)幷御教書(尊氏將軍)

口宣云

寄進御祈禱所妙顯寺寺領之事

尾張國松葉庄同國小家鄉、備中國穗太庄、今度御還幸、御願圓滿御祈精、殊以致忠功間、所被宛行也、永代知行領掌不可有相違者也、仍將軍宮令旨下知如件、

元弘三年五月十二日　左少辨在判

日像上人庵

御教書

近江國佐津河東方田地、幷備中國宇垣鄉內山條村、備中國河尻庄等之事、任本主氏重具信以下之童寄附之旨、爲當寺領致其沙汰、可抽祈禱誠之狀如件、

文和四年八月廿九日　尊氏將軍在判

妙顯寺僧都御房

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕具足山妙顯寺　在寺之內通小川　寺領一石

〔妙顯寺文書〕(今欲被書下御書案)一閻浮提第一法華行者日蓮聖人御影堂別當職事、以僧日眼、爲彼職永代不可有相違、而若僧衆幷宗弟等令違失此旨者、永代不可有當門弟之狀如件、

正中二年(大歲乙丑)後正月一日　可有御名御判等

(今欲被書下御補任狀案)

法華堂僧衆下

補任日蓮聖人御影堂別當職事

北小路油小路住僧

寺職

僧日眼

妙滿寺

妙滿寺ハ、京都寺町二條ニ在リ、日什ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ本山ナリ、

名稱　〔和漢三才圖會七十二末 山城〕妙塔山妙滿寺　
所在　在寺町二條下町

開基　日什上人　明德三年二月廿八日寂、壽七十九歲、

興當寺、奥州妙法寺、達州玄妙寺、三所一寺也、

創建　〔山州名跡志二十 洛陽寺院〕妙塔山妙滿寺　在要法寺南押小路北　宗旨　法華宗 宗派勝劣

門 西向　堂 南面

祖師堂　在堂前、西面、

番神社　在堂西、南面、

開祖　日什上人、永德三年癸亥五月所開也、元地綾小路堀河西、今尙云妙滿寺町、

日什傳　元在台家、而師慈遍僧正、住山及十年、師遂熟台教、離叡嶽、歸于本國黑川、入羽黑山、司盧名一家之祈願、見奇驗、故於屋形東地建一堂、令請在于師也、乞講談矣、能辨義細、盡於台家之深秘、其德徧十方、至哉師功、在于台教聽徒之上、而受所領矣、雖然心不快、而有思惟志趣、憶末法相應之宗立者、可謂在蓮門之弘教乎、而求師無其人也、竊悔之有年、發大誓、今時脫應法之惑亂、速爲開發佛知見、即時有一奇、而萬徒中一僧、懷出秘笈、謂于師曰、今我有行故卿、若過三年、則永可爲師之几席翫、言約而去、然後遂不來、以是應僧辭而見閱焉、年來疑惑、豁然洞朗也、故捨在寺、發願所思、合于此書也、師不可外求、自此開一流、而終建一精舍、更弘直授相承之法、明德三年壬申二月二十八日化、書日蓮遺作開目抄、如說修行

抄也、

後圓融院賜日什宗旨弘通宣旨、在當寺、如左、

洛中弘法之事

御奏聞之處、被聞食訖、早營道場可弘一乘圓頓之敎法旨、勅免所候也、專一宗之勤行、宜奉祈寶祚延長、四海安全者、天氣如此、仍執達如件、

永德元年七月六日　　左少辨在判

二位僧都玄妙御房

〔寺院階級〕御尋ニ付階級住職衣體之儀、左ニ申上候、○中略

一京都本山妙滿寺之儀者、一個年之輪番寺ニ而、檀林之能北を相勤候者、順次ニ輪番住職ニ罷登申候、

衣體之儀ハ、輪番中素衣緋紋白袈裟著用仕候、仕官仕候得者、夫々之官服著用仕候、尤任官仕候者ハ、下關後宿寺ニ而も、其身一代官服著用仕候、○中略

享和元酉年十二月

京都妙滿寺派觸頭
品川　妙國寺
同所　本光寺
淺草　慶卯寺

歡喜光寺

歡喜光寺ハ、六條道場ト號ス、原ト京都六條ニ在リシニ、由リテ名クルナリ、天正中京極錦小路ニ移ス、智眞ノ開基ニシテ、時宗ノ寺院ナリ、

名勝 所在 創建 沿革

〔山城名勝志四洛陽〕六條道場（號歡喜光寺、開山彌阿上人、元在六條西本願寺地、今遷京極錦小路南、寺家説云、今寺地、元是佐々木京極宅跡也云々、）

〔和漢三才圖會七十二末山城〕六條道場○中略　開基一遍上人（傳見相州藤澤）　初在六條、天正年中移于此、

〔歡喜光寺文書〕歡喜光寺（號六條道場）事、爲當時荒野之條、引移高辻烏丸、勤行等無退轉、然河原沙汰十念利益之時者、當寺敷地六條東洞院出向、可遂其節之旨、被聞食入訖、可被專興隆之由、所被仰下也、仍執達如件、

天文廿一年八月廿八日　大和守在判
對馬守在判

當寺雜掌

堂塔

〔看聞日記〕永享八年四月八日、晝六條道場炎上、此所三年炎上、未半作之處、又炎上、冥慮不審、

寺領

〔和漢三才圖會七十二末山城〕六條道場　在寺町錦小路　寺領四十石六斗餘、名歡喜光寺、

什物

〔寺社寶物展閲目錄一山城〕六條道場

一一遍聖繪十二卷（稱六條緣起）

跋云、正安元年己亥八月廿三日、西方行人聖戒記之畢、畫圖法眼圓伊、外題三品經尹卿筆、又云、康安二年乙酉卯月三日、破損之間修補之畢、于時僧阿又云、延德四年壬子六月廿三日、及大破間修理之、于時滿願寺住持覺阿、

箱蓋裏ニ記云、一遍上人一期修行畫圖十二卷、○中略　爰自北山入道太政大臣家被召之間、令進上之處、所納之櫃破損之間、被納于新調櫃、所被返渡于六條道場也、○中略　于時應長元年辛亥仲多上旬記、

（朱書）誠に絶品と相見申候、狩野永納も此緣起之儀を、筆法類宅間住吉、其山川樹石彩墨圖熟、意趣有餘者也と褒申候、詞書筆者ハ、寺家ニ申傳無之候得共、世尊寺行房と相見候、

名稱 所在　創建 沿革　寺領

金光寺

金光寺ハ、京都七條ニ在リ、故ニ世ニ七條道場ト稱ス、時宗ノ寺院ナリ、

〔山城名勝志五洛陽〕七條道場號ニ金光寺一、七條南、東洞院東、建長三年、一遍上人開基云云、

按太平記云、外樣勢ハ、鹽小路ノ道場ノ前ヘ差遣シ、河野陶山ハ引分テ、蓮華王院ノ東ヘゾ廻リケルト云云、是七條道場同所歟、寺說云、本尊彌陀東山光堂像安ニ于當寺一、白毫光時々不同云、又云、此敷地、元佛工定朝宅、云ニ七條大佛師一、至ニ于今一大佛師當寺檀越、

〔金光寺文書〕金光寺、延曆寺遷都以來、洛陽無雙靈地也、承平中、空也上人、建ニ一宇於此地一、號ニ市中山市屋道場金光寺一、自造ニ醫王善逝像一安ニ置焉、或詠ニ歌以貼ニ市門一、或造ニ法語一以度ニ衆生一、時大疫、上人敎ニ人唱ニ藥師佛號一、病者忽愈、世號ニ悉地藥師一、松尾大明神化ニ老人一來ニ此寺一、受ニ持念佛一、施ニ餌一口一、上人鳴以化ニ衆一、數詣ニ松尾山一、建ニ寺於西七條側一、號ニ西蓮寺一、明神臨幸時、必勤ニ念佛一、以爲ニ法樂一、弘安年中、一遍上人、於ニ空也上人影前一、修ニ往生禮讚一、勸ニ行念佛一、住持唐橋法印胤惠受ニ敎化一、改ニ名作阿一、以ニ藥師佛一爲ニ市姬大神本地一、以ニ阿彌陀佛一爲ニ本尊一、勅爲ニ六時宗一派本寺一、一遍上人嗣ニ法名號法器等今猶存在、

〔金光寺文書〕奉ニ寄進一永代屋地之事

合壹所者在ニ所七條東洞院西南角也一、口東西一丈九尺、奥南北八丈、

右件之屋地者、乘珍法橋壽賢買德相傳口領也、雖ニ然爲ニ後生菩提一、本券相ニ副肆通一、市屋道場金光寺御本尊之燈明料所仁、永代奉ニ寄進一之處實正也、更以不レ可レ有ニ他妨一者也、仍爲ニ後日一、永代寄進之狀如レ件、

文明拾參年辛丑六月十一日　　戸寺納所乘珍法橋生七十三　壽賢花押

〔金光寺文書〕山城國西院內貳拾六石九斗四升、境內地子替地三條ヨリ五條迄之內、本知壹石五斗貳升、合貳拾八石四斗六升事、遣ニ之畢、全可ニ知行一者也、

雜載

天正十九九月十三日朱印〇豐臣秀吉　市屋道場

〔金光寺文書〕市屋金光寺蓮臺だび料足參百文、定置申處實正也、若違亂申者有者、於子孫其あきらめを申ひらくべき者也、仍後日狀如件、

文明十八年丙午拾月日　七條大宮木下　小法師在判　正阿在判　正泉在判

〔親長卿記〕文明十一年二月十五日、參詣七條道場、

〔二水記〕永正十八年二月十二日、午剋、御輿渡御、頃之地主還御歷覽、然後爲御見物被寄御輿於七條道場、

古事類苑

宗敎部四十四

佛敎四十四

遺迎院

遺迎院ハ、京都市上京區寺町ニ在リ、原ト天台、律、法相、淨土、四宗ノ兼學タリシガ、今天台宗ニ屬ス、

名稱所在

〔雍州府志四寺院〕遺迎院　在行願寺之北、天台、律、法相、淨土、四宗兼學之地、而與般舟三昧院相通、

〔全國各宗本山明細帳〕天台宗　本山

遺迎院（同○上京寺町）

〔和漢三才圖會七十二末山城〕遺迎院　在廬山寺之南（天台、律宗、法相、淨土、四宗兼學、）

光明峯寺殿本願、開山善惠上人、（初在東福寺前、後移于此、）

飛鳥井家山科家等塔若干有之、

〔山城名勝志三洛陽〕遺迎院（今按、在京極鷹司北廬山寺南、此院元有東福寺前、後世遷此地、然舊跡猶有小堂、）

創建

仁空上人記云、遺迎院（光明峯寺殿本願、西山四箇之本寺、）開山善惠上人、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕遺迎院（在東福寺前三橋南東傍、仁空上人記云、本願光明峯寺殿、開山善惠上人、）

（近世遷京極鷹司北、故又載洛陽卷、然此地猶存小堂、）

西山上人傳云、法性寺ノ遺迎院ハ、月輪殿（○藤原兼實）峯殿ナドモ程遠カラズ、

洛陽ノ化導タヨリアルベケレバトテ、光明峯寺殿（○藤原道家）ノ御沙汰ニテ、始ハ人屋ヲ點ジテ、上

人ノ住處ト定メラレケリ、後ニハ佛閣ヲヒラキテ、釋迦彌陀二尊ノ像ヲ安置シ、寺號ヲモ遣迎トゾツケラレケル云云、寶治元年十一月廿六日乙亥、白河遣迎院ニテ上人入滅シ給フ、

圓福寺

名稱所在

圓福寺ハ、京都下京京極四條坊門ニ在リ、淨土宗西山流深草派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志四寺院〕圓福寺　號大本山、在京極三條坊門、淨土宗西山流之內、深草派之一本寺、而爲常紫衣之地、三河國寶藏寺等、亦爲此末寺、此寺花園院、後花園院、爲大檀越、故于今有御牌、寺產有二十石、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕大本山圓福寺　在同街四條坊門東、宗旨淨土門西向、堂同、本尊阿彌陀佛像立、四尺許、脇士觀音、勢至、作法然上人、　脇壇左善導和尚像、　右法然上人像共坐像、二尺六七寸許、安厨子、共自作　開基西山上人、初在室町通三條坊門、今尙云圓福寺町、花園院、後花園院御歸依ノ所ナリ、

〔山城名勝志四洛陽〕圓福寺淨土宗、深草流義之一本也、舊在室町三條坊門南圓福寺町、今遷四條坊門南京極、永祿五年三月八日制札云二條圓福寺云云、開基道意上人、深草顯空ハ立信ヨリ三世、

寺格

〔寺鑑下〕淨土宗

御朱印　高拾八石

右四ヶ寺〇光明寺、圓福寺、禪林寺、寺住職、一派老輩之內、末山ゟ相定ル、入院御禮、御白書院二卯月之內御暇、柳之間、御老中、年頭御禮無之、獻上一卷束拜領時服三、

右同　新〇深草派本寺紫衣　京都　圓福寺

雜載

〔康富記〕享德三年七月十四日甲子、予代々墳墓在五條坊門猪熊圓福寺、而六月末、近衞禪閤薨御也、〇中略圓福寺御葬送參會、

〔山城名勝志四洛陽〕按、淨土宗圓福寺、元在五條坊門猪熊歟、又錦小路大宮ニ有同名禪刹也、

淨福寺

名稱所在

淨福寺ハ、京都一條ニ在リ、宗派ハ淨土宗ニシテ、知恩院ニ屬ス、

〔雍州府志四寺院補遺〕淨福寺　在一條北聚樂、淨土宗、而屬知恩院、有後奈良院勅額、凡知恩院末寺住職、出世香衣之綸旨、內侍執奏、而降綸旨於知恩院方丈、方丈住職、招出世僧於知恩院而授之、則拜戴而入寺、不及參內、末寺中十九箇寺住職、直參內而受綸旨、是爲榮、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕惠照山淨福寺　在一條通千本東北方　宗旨淨土　屬知恩院　門南向堂

同　額、淨福寺、堅額

〔國花萬葉記二上山城〕淨福寺末寺智恩院

後奈良院勅願一條大宮西

柳原家　塔　始ハ北山紫竹村淨德寺ニアリ、近世故有テ此寺ニ移ル、淨德寺ハ柳原家ノ號也、

金蓮寺

名稱所在

金蓮寺ハ、一ニ四條道場ト云フ、京都四條京極ニ在リ、時宗ノ寺院ニシテ、後伏見天皇ノ勅ニ由リテ、淨阿ノ建立セシ所ナリ、藏スル所ノ一遍上人繪傳世ニ名高シ、

〔雍州府志四寺院〕金蓮寺　稱四條道場、在錦小路與綾小路之間、故號錦綾山、淨阿上人之所開基也、此地元具平親王之宅地、而今四脚門自其時存矣、

〔山城名勝志四洛陽〕四條道場號錦綾山金蓮寺、開山淨阿上人、在四條北京極東、額花園院宸翰、按此地佐々木道譽所寄進也、六月七日、將軍家、祇園會爲御見物、京極亭渡御在シモ此所ナランカ、鹿苑院殿嘉慶二年、釋迦堂被寄當寺了、堂絶而本尊釋迦佛像在于今、鎭守熊野權現　當寺杜鵑松トテ名木アリ、一年ノ雷火燒失ス、今在塔頭慶松庵、巨松、謂杜鵑松、

創建

〔淨阿上人緣起 下〕爰に、人王九十二代後伏見院の后河端女院〈號二廣義門院一〉難産の患有、諸寺諸山に勅して、是を祈といへども志るしなし、或時帝の靈夢に、びんづら結たる童子二人來て、女院難産のこと、祇陀林寺にあんなる、諸國修行の念佛勸進の聖の札をめしたまふべし、吾は則熊野權現なりと告て、虛空にあがり給へり、翌日、三條の大外記師宗卿に宣下ありて、勅使日野柳原大納言殿を以て院宣敕度に及、殊に網代の輿を給はる間、聖乘輿して院參し、小字の彌陀號三枚まいらせらるゝ、女院此札をきこしめして、程なく太子誕生有、公卿をの〳〵耳目をおどろかし、太子を取上て奉れば、三枚の札を、左の掌に握て誕生し給ふ、九十六代帝光嚴院これなり、諸卿奇異の思ひをなし、聖を尊崇まします、帝御感ありて、聖の廻國を留め、四條京極に一字の伽藍を造立有、〈歷長元年〉錦綾山太平興國金蓮寺の額は、萩原天皇〈號二花園院一〉宸翰を染くだしたまひぬ、聖は上人の院宣を蒙り、おなじく他阿彌陀佛も懇奏に依而、上人に任じ給へり、

寺格

〔集古文書 三〕後奈良院綸旨〈所藏不レ詳〉
當寺四足門之事、任二先規一致二再興一、彌專二佛法紹隆一、宜レ奉レ祈二天長地久一者、綸命如レ此、仍執達如レ件、
　　天文三年三月十五日　　右大辨〈判〉
　　　金蓮寺住持上人御房

寺領

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕四條道場　在二寺町四條上ル町一　寺領二十三石二斗、名二錦綾山金蓮寺一、廣義門院本願　開基淨阿上人、往昔具平親王之宅地、
　　頓阿法師墓

〔諸寺文書纂 三〕四條道場文書之内
奉レ寄二進四條京極金蓮寺敷地町々事　　尊氏判
右於二當敷地一者、導譽拜領也、爰依レ有二所願一、相二副御下文一、永代奉レ寄二進金蓮寺一也、且自二元弘一以來、凶敵御方

共以墮命族不可勝計、然間正爲資彼亡魂之菩提、且爲成就現當悉他之所願也、仍所奉寄進狀如件、

延文元年八月廿三日　沙彌判

〔金蓮寺文書〕金蓮寺（四條道場）敷地（四條以北、錦小路以南、京極以東、至于鴨河、）事

右地者、佐渡大夫判官入道導譽拜領之、令寄進當寺之間、被下等持院殿御判訖、公驗炳焉也、早任彼證文之旨、可令爲寺家一圓進止之狀、依仰下知如件、

嘉慶元年十月廿五日　左衛門佐源朝臣花押

〔諸寺文書纂三〕四條道場文書之内

蒙仰候、當寺金蓮寺敷地八丁者、爲平親王御遺跡之條、無子細候、自公方被尋仰候者、可注申此旨候、恐々謹言、

十一月廿日　重職判

○按ズルニ、雍州府志、和漢三才圖會等ニハ、具平親王宅地ノ跡アリ、爲平、具平ト共ニ村上天皇ノ皇子ナリ

〔寺社寶物展閲目錄一（山城）〕四條道場（○金蓮寺）

一一遍上人繪緣起廿卷（繪越前守光行、詞寄合、）

詞書

後伏見院、後二條院、花園院、轉法輪公忠公、同實量卿、冷泉爲秀卿、

跋云、德治第二之天初夏上旬之候、馳筆終功畢、

越前守光行、（朱書○岡本保孝書入）土佐系圖ニ無之候、若者行光之傳誤ニも候哉、乍去行光ハ延文年中、繪所預ニ補候得バ、德治ゟハ、五十年餘も時代後レ候、并書樣も劣リ候得バ、行光とハ相見不申候、然共全見所なき物ニも無之候、

雜載　名稱　所在　創建

〔大乘院日記目錄 一〕應永十六年□月□日、淨花院四條道場炎上、

新善光寺

新善光寺ハ、京都六條坊門ノ南、京極ノ西ニ在リ、世ニ御影堂ト稱ス、時宗ノ寺院ナリ、寺僧尼ト同棲シ、常ニ扇ヲ製ス、謂ユル御影堂折是ナリ、

〔雍州府志 四寺院〕新善光寺　在五條橋西、所謂御影堂也、一遍上人第二世應阿自作彌陀之像、自負來爲本尊、若寺中有故、則寺僧自肩擔之遷于他所、依之衣肩存破處、表所擔、故此徒稱肩衆、別有安阿彌所刻彌陀像、幷定朝所作觀音地藏像、毎年二季彼岸作踊躍念佛、中世以來携尼、常製扇賣四方、是謂御影堂折、非他處之所及、是摺扇之始也、倭俗造扇、是謂折、言屈折開合之義也、

〔山城名勝志 五洛陽〕御影堂 號新善光寺、在六條坊門南京極西、

當寺舊記云、天長年中、檀林皇后〇嵯峨皇后草創、以空海爲開祖、在東洞院春日、檀林寺別所爲尼寺、承平年中炎上、遷東河原別院、應永廿八年、移左女牛室町北、享祿二年、移五條町北、天正十五年、遷今地、按、明月記有綾小路河原御影堂、蓋此堂乎、

緣起云、新善光寺、御影堂者、檀林皇后御造營也、摸善光寺之尊容一光三尊、金銅、幷弘法大師像自作安置之、故號新善光寺御影堂、一旦尼寺衰、祐寬阿闍梨寓之、弘安五年依大師之靈夢、遷像於醍醐山、今在光臺院、爰再興大檀越王阿上人、號勝法院、後嵯峨院皇子、母隆衡卿女按察局、因高野山萱堂之開基法燈國師證明、歸依一遍聖、故請聖爲中興開山、此時改時宗、昔爲尼寺、爲念佛三昧道場、頗最助法親王、後嵯峨院皇子、母同王阿、被移一遍上人壽像自作、鏡影、就當寺日有詠歌、

西へゆく鏡となりて新なるよしみつ寺にうつる月影　王阿上人

平教盛室按察資賢卿女、王阿上人内戚也、就祐寬阿闍梨削髮、號生如佛、創蓮華院於堂傍卜居、王阿幼年時、有患潮熱、

如佛尼自側柏扇、令祐寛加持奉之、德風扇拂熱郎愈、皆人爲奇、寺家説云、是當寺製、爲本緣也、

〔圖花萬葉記二上山城〕御影堂又新善光寺と號す、○註略

五條橋の西にあり、一遍上人第二世應阿彌、自作の彌陀の像、自から負來て本尊とす、又安阿彌が作の彌陀一體、幷に定朝作の觀音地藏の像あり、古世平の敦盛弱冠妻室の由緒をつたへ、寺中尼をたづさへ、薄扇を折て作業とす、

寺中

香阿彌　長林房珠阿彌　龍阿彌　仙阿彌　由阿彌　文阿彌　來阿彌　一阿彌　樹阿彌　善阿彌

柳林房乘阿彌　桐林房重阿彌　林阿彌　蜜樹軒直阿彌　庭阿彌

妙覺寺

妙覺寺ハ、上京柳原ニ在リ、日實ノ開基ニシテ、日奥ヲ中興ノ祖トス、日奥不受不施ノ法義ヲ立テ、爲ニ對馬ニ流サル、事ハ日蓮宗篇不受不施派ノ條ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕具足山妙覺寺　在上京柳原初在室町四條之南

後圓融院朝開基　日實上人　日成　日遵　日實朗源之弟子　大覺僧正法孫永和四年六月七日化

右三箇寺○妙顯寺、立本寺、妙覺寺、同山號、俗謂之三具足、

〔雍州府志四寺院〕妙覺寺　號本覺山、日蓮宗二十一箇寺之隨一、而日實上人之開基也、中興之祖日奥上人、立不受不施之法義、依之配對馬島、無幾而被免、古法眼狩野元信、爲此寺之檀越、方丈有畫數幅、三十番神社之畫棟、亦元信之所筆、而于今存矣、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕具足山妙覺寺　在新町通北清藏口　宗旨法華宗派一致　門東面　堂南面

樓門南向　安二兩金剛一　作弘法　祖師寺　在二佛殿東一南面　額　祖師堂横額　日允筆　所レ安

日蓮　日朗　日像三師像二各坐像、尺許、　日蓮像　面貌ハ自作、餘ハ日像所レ作、

〔國花萬葉記二上山城〕具足山妙覺寺上京柳原、宗門三具足山ノ内、興云二本覺山一、

後圓融院御宇建立開基　日實上人

又云、右貳ヶ寺は、日實上人建立と云々、

狩野古法眼元信　塔本朝畫工ノ絶品

狩野法眼榮德、　塔此外近世狩野家塔多ク此寺ニ有

〔萬代龜鏡錄五〕中祖御赦免狀

先日之儀不レ懸二御目一、御床敷存候、隨而京都妙覺寺住持無レ之付而、寺中迷惑之由、何モ年寄衆へ申候處、前住持對馬ニ被レ居候コト、我等爲二心得一可レ有二歸寺一樣ニ各被レ申候條、早々貴公ヨリ對馬守殿へ被二仰屆一、無二相違一日奧歸寺可レ然存候、樣子之義ハ、宗哲法印モ存知事候、尙以二面可二申達一候、恐惶謹言、

正月七日　　板倉伊賀守勝重在判

ト元豐老

尙々日奧へモ可レ被二仰越一候、已上、

〔萬代龜鏡錄五〕諸末寺一統之誓書

日奧聖人、從二對馬一御還住之後、諸堂之修理以下相調、殊庫裏客殿御造畢之上、萬部御興行之段、誠御法力故奉レ存候、殊更從二諸末寺一、一同可レ奉レ仰二本寺之御法理一候、向後萬一本寺御貫首、法理御相違之義於レ有レ之者、乍レ恐諸末寺一同可レ奉二棄捨一候、是偏開山以來、本寺御法水、終無二一點之誤一由傳承難レ有存候間、此儀永代不レ相違一樣奉レ念願一候、就中關東三箇寺等雖レ致二參詣一候、法理御違背之貫首於レ有レ之寺一者、堅可レ相二留參詣一候、

寺副

右之條條於違犯之輩者、法華經中三寶諸天、別者高祖日蓮大菩薩、日朗日像幷代代先師之御罰、一身可相蒙候、仍一統之狀如件、

〔萬代龜鏡錄 五〕當寺(妙覺寺)○衆徒等一同致言上候、抑去文祿年中、大佛供養以來、種種之大難競起、他國遠島之御苦勞、天下無其隱候、雖然佛意御契當故、終有御赦免、御歸寺奇妙奉存候、加之當寺御再興之上、當年萬部之御經御執行、無寸之障礙御成就、殊者當宗制法繼目之御下知、久相滯候處、今度公方樣御上洛付而、板倉伊賀守殿被得上意、御存分相調候事、天下之法命御相續誠難有次第候、剩此度勝重公御添狀、總者一宗之龜鏡、別而當門流之眉目候、當山之法水開基已來、聊無諛儀、彌明白罷成候、就之自今已後之事、猶以法水之筋目至于盡未來際無闕如樣奉存候、向後若雖有天下一同之謗法供養、當寺法式之筋目堅可相守候、自然有難遁子細、縱一端衆徒者、雖謗法墮罪之人罷成候、貫首御一人涯分爲衆徒相脫可申候、萬一衆徒之力於不及儀者、貫首以御一心可被立不惜身命候、若此儀相違之貫首、當寺之代代不可列之候、若又貫首不惜身命立給候時、衆徒之中道心之人隨逐申衆有之者、爲自餘之僧衆不可怨之候、

右此條若於違背之族者、釋迦多寶一切三世諸佛、殊者本化之四大菩薩、法華守護三十番十羅刹女、別而末法應時之大導師日蓮大薩埵、日朗日像代代先師之御罰、一身可罷蒙、仍一統之連署如件、

元和九年癸亥霜月二十五日

〔萬代龜鏡錄 五〕妙覺寺法度條條

厥法度者、世出安全之樞機、佛法繁榮之洪基、立之則萬福不招萃、破之則千災立處來、不可不愼、不可不勵、故貫首衆徒一心潭思、定萬代不易之制法、是併廣宣流布之善巧、二世安樂之秘術也、

一宗旨之制法堅可相守事

當寺九箇條之法式委悉也、其中殊肝心者、初之三箇條也、第一謗法寺社參詣禁制、第二不施謗人、

第三不受謗施、此三箇宗義、法度之眼目也、此制法綴之、一期之行功、悉同泡沫、二世之冥加、永可盡也、

一雖爲天下一同之謗法供養、於當門流者、大衆一同可守制法、萬一大衆一同之儀難叶者、貫主一人者捨于身命、堅可被守此法度、若於寺僧之中、有其志、付貫主、爲餘之僧衆、不可怨之事、

貫首若有謗理謗法之義、當寺根本之法燈滅、於根本滅者、豈百千門葉、獨自不滅乎、又貫首若落謗法、於何處有改悔乎、故於貫首者、殊强存身輕法重之義、堅固可被守制法者也、

一縱雖爲廣學大才而諳于一代、究天台之奥義學匠、於當家之心地不深重人者、不可叶當寺之貫首事、

當家台家、但雖法華之修行、三時弘經之差別、本化迹化、行相天地遙異也、像法末法、出世現量、天台過時、本化應時、修行法體、廣略要異、近令違令、總付別付、本尊違目、脇士大事、安樂不輕、十箇差別、此等之義、尤深辨之、盛可弘通、當世希有云人、如夢如寢語、故門流學者、衣斷睡、畫止暇、專穿鑿此義、敎緇素迷倒、偏可報佛恩、

一高祖御本地能可存知事

凡雖云高祖是本化上行薩埵之再誕、合經文釋義、深不吟味、故末弟信仰之思、甚以疎淺也、受以於御書不生尊重之思、還輕慢之輩惟多、故近代邪義之法門多出來、妨眞俗之信力、殆廢忘宗義、增長無間業、是併由忘元祖御本地、可悲可悲、如此之族、多分者、或惡瘡、或重病、或落馬、或不慮弓箭、或臨終狂亂、如此現罰、是世人所知也、鷲峯雙林金言未來記、宛如符契、誰不愼哉、以現報不輕、後報重苦尤可恐、故門流之學者、於斯深思瑩精勘經釋明文、探御書之淵底、合金言與妙判之割符、於大聖人御本地不成猶豫之思、深可生信敬心、不爾者、一世之行學、悉可同僻見者也、

一門流之學者、先能習學本化法門、染義理於心腑、傳受宗義之大綱、助緣可聞台家、雖聞台家、於當寺

不可講釋三大部、若有望人可聞三一、其餘者可遂自見事、

近代一宗之學者、一生學三大部等之台敎、眞實不習本化法門、故宗義隱沒、眞俗之信力、令退轉事、

先師常之歎也、殊證眞之私記、甚違當家之法門、一宗之學者、多生邪僻、住于惡見、結局者替宗旨、移

他宗、大爲佛法之邪魔、偏由私記、若欲知證眞之謗法、早捨執情、具可見彼傳、不審云、當家法門不正

三大部等之台敎、有證據耶、答云、上野抄云、天台學者、玄文止三大部兎角料簡、構義理、如去年曆、昨

日食、不能今日用云云、立正觀抄云、天台大師靈山聽衆、雖宜如來出世本懷、迹化衆故不弘本化付

屬、正直妙法說紛止觀、故不有樣妙法似帶權法云云、富木抄云、假令如天台傳敎、法任有弘通、今至

末法如去年曆云云、

一門流之學者、常可練不惜身命心地事、

臨于大事、不惜身命事者、外典之敎、尙嚴重也、況於佛法者乎、而世間之事易捨、佛法難捨、是由無始

之迷、誠不蒙佛神加護、當于時驚動可倒惑歟、故朝夕練心地、尤可祈加被者也、○中略

一若有法難堂塔者、雖及破却法理不可著迯事、

堂塔者雖滅、以檀越力建立易成、著法理迯永代難愈、成瘡堂塔之損亡、不可破宗義制法、法理者如

命、堂塔者如家、誰有惜家捨命者哉、

一門流之學者、卒爾不可致公界之宗論事、

古今宗義、破滅之根源、皆申不覺之宗論、然則憑法理強、聊爾不可致問答、若有難去子細、可以記錄

決理非、是非無先例、直之對論者相手依無理、巧造不聞知名目問之、或假威權理不盡及喧嘩、當于

此時、得名問答者、有難叶事、因之乍有道理、致宗旨之紕繆、然間直之對論者、返返可有遠慮也、若背

此義輩者、頗可放門徒者也、

一行儀作法事

雖末世無戒之時、放逸之作法、是法滅衰微之相也、自然放埒之儀於有之者、爲法眷幷知音穩便可加異見、若於無承引者、評定可披露也、

一出家之過失向于外人不可放言事

凡顯出家之咎罪、金言所定、過出佛身血重罪、經云、出其過惡、若實若不實、此人現世得白癩病、乃至諸惡重病云云、又經云、闘達破僧罪云云、此外諸典之禁言、不可稱計、然者惡作法儀見之時者、直對其人、隨分可加教誡、若無其儀、向于他人毀之、或於寺外沙汰之者、佛法之重科、宜追放之、私云、此文略、有數條、今略之、

元和九癸亥年霜月吉辰　日奥在御判

〔妙覺寺文書〕鶴千世臺所入之儀、氏鄕如相定可仕候、代官前之事、入念遂算用、江戶大納言、加賀中納言兩人ニ見せ候て、其上民部卿法印、淺野彈正少弼を以可申上候、傍輩をかへり見、於令用捨者、兩三人可爲曲言候、猶家康利家可申候也、

二月九日〇文祿四年　朱印

蒲生四郞兵衞尉殿

町野左近助殿

玉井數馬助殿

裏書
一大坂生玉筋中寺町玉作山藥王寺什物、今般相改之、具足山妙覺寺江永相納焉者也、

文政十貳歲舍己丑天六月中一日

納主玉作山十八世　淸顯院日祁 花押

〔老人雜話下〕明智謀反の時、〇中略さて本能寺に火を掛てより、城介殿〇織田信忠の御座す妙覺寺へ推寄する、其比は、京の町家も所々にわづかに有て、障ることなければ、土居の上より分明に、水色

の族妙覺寺の方へ來るが見へければ、扨は明智謀反すと、憾に皆知る、妙覺寺は今の室町藥師町にあり、されども構無ければ叶はじと、南都の陽光院殿の御座す小池の御所を借りて、城介殿移らる、

名勝 所在 創建

本滿寺

本滿寺ハ京都寺町通ニ在リ、日秀ノ開基ニシテ、日蓮宗一致派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志四寺院〕本滿寺 在立本寺之北、號廣布山、日蓮宗日秀上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、堂內有日蓮上人木像、宗門徒尊崇不淺、時々開帳、人擧而拜之、相傳、中古北山芹生里土中有誦經之聲、土人怪之則掘之、果得此像、且像唇潤、依之誦經知此像之聲也、自是一村悉爲日蓮宗、爾後安置此寺、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕廣布山本滿寺 在佛陀寺南、 宗旨法華宗一致派 門西向 堂西向 當寺本尊、毎寺無異、又於名作載之、本尊安置體、見卷四頂妙寺條下、

番神社 在堂東南、西向、 堂 南脇壇 日蓮上人像坐像尺餘、安厨子、 此像、其元始ヲ不知、中頃丹波國黒田村ノ內、禪宗ノ家ニ安ズ、後代ノ住守、日蓮ノ像ナルヲ知テ櫃ニ入テ佛壇ノ下ニ置ヌ、然フシテ後、寺內及ビ寺邊ノ男女、煩シテ死スルアリ、中ニ一人狂亂シテ言フ、此病ハ、即チ彼像ノ祟ル處ナリト、依之土人相議シテ、像只此地ニ不置ニハ不如ト、終ニ去ルコト一里許山中ニ捨タリ、其所當國芹生ノ山ナリ、其後於山中晝夜讀經ノ音アリ、村民尋ミルニ、更ニ所在ヲ不知、或夜其所在ヲ夢ル者三人アリ、是ヲ語テ爲奇、共ニ山林ニ入テ窺フニ、果シテ像アリ、卽チ懷來ツテ、同所生祖寺ノ堂內ニ安ズ、然シテ年月ヲ經タリ、其地今尙稱高祖屋敷、方一町アリ、然後其地ニ字津宮

心覺ト云者アリ、竊ニ是ヲ奪テ、京師往返ノ巻ニ之ヲ售ヌ、或者佐見テ、當寺ノ住主日重上人ニ告グ、上人卽チ弟子ヲ遣シテ令見ニ、元祖ノ像ナリ、仍テ買取テ安置セリ、爾已來タ、靈應日ニ新ナリ、他門ノ輩トイヘドモ、祈願信敬ノ參詣、燈油香華ノ奉典無間斷也、

當寺開基　玉洞妙院日秀上人、當寺ノ地、初近衞左大臣道嗣公ノ別業ナリ、當宗崇敬ノ故ニ、應永年中ニ、改メテ爲寺、其地、今云フ新在家ニアリ、今尙本滿寺辻子ト稱ス、秀卽道嗣公ノ息ナリ、日秀傳云、秀諱、字觀隨、姓藤原、近衞關白從一位左大臣道嗣公男也、母瀨尾氏女、骨器秀凡類雄豪邁人矣、父感其才而投大光山日傳師焉、至壯年、遂作大發願、廣爲弘化演說如富樓那、終以公別居新營梵刹、云廣布山本滿寺官至僧都、寶德二年五月八日化、六十八歲、

〔新編法華靈場記六〕廣布山本滿寺

當山の開基玉洞妙院日秀聖人と申せしは、日朗聖人の御一流なり、されば應永年中より建立院日傳聖人の門派を分れて、洛北の一字を修營し、日々に宗門の敎法を弘給へり、秀師はそのもと大光山の學徒にして、傳公につかへ給ひ、ひろく一宗の秘賾をうけ、要義こゝに熟達し給ふ、時なるかな、近衞の左府道嗣公の御屋敷にひとつの道場を造建して、日秀聖人を招請し演說を聽受し給ふ、もとより師は樂說辨才にして、高談時をうつせり、まことに文義廣博、智解深遠なるがゆへに、いよ〳〵高峯の心を轉じ、信伏渴仰あつて遂に秀聖の法義を了解し、彼道場をもつて師に寄附し給ふ、此本境はそのかみ本新在家、今の本滿寺のづしに侍りしかども、秀吉公の命に應じて、洛東京極に引給ひぬ、それより宗流日々に新にして、月々に盛なれば、都鄙遠近の貴賤年々に伏し、信力を募しめて、開祖の餘功に信伏す、宗俗百八の貫珠を手にし懷にして、偏に南無妙の唱音精舍にたゝず、師遂に修營功成て、人皇百三代後花園の御宇、寶德庚午の五月上旬、壽六十八歲にして、廣布の本院に寂し給へり、

元祖瑞現

此尊像は、往昔丹波の國黒田といひし所に、薜林あり、化家の影なる事をしらで暫く安置し、これを敬す、其後蓮祖の影と聞傳て、用るにたらずと、古きかわごに押入、佛殿の下屋に置たりける、ときに、高僧及村里の男女、ゑきれひにおかされて、或は死し、或は年經て治す、其中に狂亂妄語して、尊像のたゞりと告しむ、これによりて、御影のたけき御事はしめてしりぬ、されば信敬の輩多く、又おぢおそれて、近きによらず、遂には疎奉りて、山中にすつ、其地在所をさる事一里ばかり、爰を名付て芹生といふ〇中略 其夜影像の有所を夢に見るもの三人、ともに此瑞を語り合て、時をうつさず急ぎ山林に尋ね入て、遂に尊像に逢奉る、其様拜するに、元祖聖人也、眼前の奇特、皆驚敬して伏し、忽あらごもをへだて抱へもりて、里に歸る、それより同所生福寺の堂内に安置し、年月爰に久し、いまに高祖屋敷といひならはし、方一町の舊地あり、それより粗權作應驗をしりて、丹波山國の住人宇津の心覺といふ者、ひそかに盗み取て、京都往來の道筋皆橋といふ所に持行て賣侍りしを、當山の檀度、此事日重聖人に告奉る、重師いそひで家司の僧に命じて、遂に望意を遂し、當寺に安置し給へり、まことに秀師御入滅已後、末法の世に及んで、かゝる尊像を移し給ひし事、偏に靈場末代にさかへ、宗義ます〳〵流布すべき前相ならんと覺ゆ、ひとたび拜して納受を蒙り、籠り明して瑞夢を見る事、其證あまねく人耳にあり、

堂社辨拜

當山の兩尊は、卽大光山に等し、其佛形一蓮並座也、勿論雲乘の四菩薩四天、四幢の外、餘佛これなし、中尊は日乾聖人御筆也、東方の御厨子は、扶桑第一の御影、利生應驗の大聖人、弘法拆伏の御尊形にて、拜し奉るにいと有難し、西の方は開山日秀聖人なり、扨又東方西むきの社は、番神三光七面大明神也、或師のいはく、堂上の繪馬に祖師の御影を畫して供養せし人多し、總て佛神ともに

雜載

其御象形を移し、兒童妄昧のやからに、吹紙をつけさせ、見輿の器となし侍る事、可レ然にあらずと
なり、愚案記などにも、此義を記給へり、元來繪馬といひしは、神前へ神馬供養の事よりならひ來
りて、今はよしなき遊女の作形等まで、尊前のおそれなくみだりに掛上侍る事となりぬ、禁ずべ
き事ならずや、鬼子母神の寶前には、柘榴を移して供養し、大黑天の御前には、白鼠などをかき納
る事、是世說のならはしに應じて、さてもあるべきものなり、猶よく心を付べし、

三聖傳記

當寺中興の名匠三權聖人の傳、各後に見えたり、宗俗日重、日乾、日遠等の御眞跡を三幅對とし、信
敬勿論おろそかならず、利生應驗ありて祈願の本尊とせり、是智才廣博の威德、權化感應の驗尤
備り、さて日重聖人の御辭世として二首の歌あり、

〔扶桑鐘銘集上〕洛陽本滿寺鐘銘

大日本國平安城、廣布山本滿寺、宗門第六祖日秀師之開闢、近衞家嗣公之建立也、此寺、二百餘年始、
在二公之宅内一、中移二于宅外一、而今處二于王宮京極邊一、是則所レ謂三變淨刹者耶、由來伽藍琢レ玉、蒲牢鍊レ金、去
寬文初元、會有二回祿之變一、則寺亦成二烏有一、既而龍頭墜レ地、鯨音失レ響、豈耐下驚二旦夜之眠一、覺中生死之夢上乎、今
茲己酉、檀越烏養氏長光者、爲レ祈二父母伯叔、及自佗得脫一、及レ投二射鑄一レ鐘、鐘成則挂二著樓上一、以集二大衆一而轟二
曉客一、願此功德、一切衆生、速脫二諸有苦一、共證二一乘道一、更祈二君臣安穩、天地長久、宗風彌扇、檀越願滿一者、

〔本滿寺文書〕就二大坂成敗儀一、今度長々在陣之辛勞、云二武功殊被レ抽、粉骨條快然不レ斜候、仍開陣事、先以
珍重候、猶飯尾次郎左衞門尉可二申上一候、恐々謹言、

六月（天文二〇年）廿八日　六郎花押

本滿寺

〔本滿寺文書〕武家　感狀

就山科退治之儀、加下知之處、於新日吉口及合戰、殊數多討捕之由、尤無比類候、彌勵戰功者可爲神　　本滿寺
妙、猶高信可申候也、

八月十七日〇大永七年　　花押〇足利義晴

妙傳寺

妙傳寺ハ京都二條ニ在リ、日意ノ開基ニシテ、日蓮宗一致派ノ一本寺タリ、

名勝所在

〔雍州府志四寺院〕妙傳寺　號法鏡山、在妙滿寺之北、日意上人開山、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、有七面明神之社、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕法鏡山妙傳寺　在寂光寺南、宗旨同上〇法華宗一致派　門西向　堂南面

〔國花萬葉記二上山城〕法鏡山妙傳寺京極二條上ル町

後柏原院御宇建立　開基日意上人

四條家　塔　此寺ニ在

創建

〔新編法華靈場記六〕法鏡山妙傳寺

當寺の開基日意聖人は、根本天台の學徒にして、改宗受法の名師也、されば本山身延の中興日朝聖人の廣學に歸し給ひ、はるばる東關の行を、久遠寺の靈場にこゝろざし、彼御山に登らせ給ふ、朝師その未萠をしろしめされ、かねて侍者に仰付られ、上方より珍敷學匠來り給へり、行向て供し參べしとなり、ありあふ人々不審(いぶかし)くおもひ侍れども、師の命なれば、是非におよばず、一兩輩そこともなく行向ひ、日意聖人に逢ぬ、師頓而朝師の使僧たる事を知しめされ、汝朝公の仰に隨て、

是まで來るや、其客僧我なり、はやく先達て身延山に告志らしむべしと、然れども使僧意師の御すがたを見て、更に心得がたく、內心大に蔑、下卑の凡僧とおもひ、又或は未萌の奇言に驚恭敬のこころをおこすも有、果して延山におひて、日意聖人はいまだ草鞋をもぬぎ給はず、先法問三箇を論じ、忽に通曉せり、遂に終日問難し、朝公の學德に伏し、卽座に舊宗天台の法をすて、日朝師の御弟子となれり、今世に云、身延の三權者朝意傳の其一師なり、されば朝師の讓を得給ひ、次は日傳聖人に御附屬なり。

傳曰、意聖人者、元台嶺之學徒也、聰明博覽而講台家之章疏、而無敵者也、然於衆派懷疑惑者有年、于時身延朝師有博洽之譽、而芳名及乎四海、開祖聽之不念勝也、遙跋乎東關之行、冒長途而漸至焉、朝聖兼知未萌、語乎徒弟曰、明日賓客也、其來者早告我、諸弟太怪之、次之日一僧來立乎營門、請見朝師也、下夫吪曰、師者貴也、豈直面乎、侍者聞之不可蔑、且待須臾言師矣、朝聖一覩恰如舊譚、未脫草鞋而法問三箇乃通曉、而已既而著座、多有問答、惠辯互鋒起也、散蒙霧於一時、生信喜於一心、忽棄捨舊宗、具承於要法、更爲朝師之補處、而不歷年立殿宇、大振於五之宗、故呼身延三權聖人耳、(下略)

かほどの智者にてましませば、かたじけなくも元祖より十二世の貫主として、名譽を四海に施し、遂に洛陽妙傳寺の靈舍を營み、身延の峯をうつし、關西三十三ケ國の末寺を以て、當山の支配と定め、廣く宗門の老若衰勞貧賤の輩、本山のまふでかなはざるは、近く此妙傳寺に參詣さしめ、其功德延山に同ずべしと、末代の證をのこし、七面の御神體を安じ、或は祖師の靈骨を分ち給ふ、ありがたき靈場也、當寺往古は上京にあり、中頃には西洞院綾の小路邊に遷し、又再び今の京極に引給へり、是秀吉公の命によつてなり、本地はまはり四町にして、僧坊三十餘宇とかや、度々の變災にて、或燒或廢せられて、今減少たる地境なれども、寺僧は南北に軒を並べて、今古かくれなき名場なり、若人甲陽に參詣なしがたく、行向心にまかせざる人、必先此御寺にまふづべしされ

ば、身延新師の御舜證として正善院を在京の宿坊と定給へり、

當山末流之眞俗、上洛之砌、可爲宿坊候、以此旨佛法弘通之馳走肝要也、仍如件、

天正十八庚寅南呂廿八日　　日新在御判

正善院日忍

記曰、大凡持妙題者、必可詣於身延嶽焉、信題號者、何不陟於七面山乎、是滅惡道場生善靈蹤矣、高祖師曰、移鷲峯于此云云、詣延山者、一生之中、當除滅無始無明也、大士之語、是豈可誣乎、故宗祖臨滅之日、遺命於高弟藏碎身舍利於延嶺焉、且夫山嶺之佳景、伽藍之奇秀、自非登臨者何能圖之乎、天正年中、東照大權現、準先規之例寄殺生禁斷、并不可借俗家權威而輕蔑此山等之數條、佛法興隆無怠慢可勵修行之旨、御敎書賜之焉、因玆重其嚴命酬其惠德常開闡妙法鎭擁護卒土巍々焉、赫々焉、雖然東海之險難、甲陽之峻嶽、壯士猶病諸、況婦人乎、何矧老羸寡孤者乎、于玆吾日意聖人、深愍其不堪而徙身延於王城創當山也、素藏宗祖靈骨崇七面明神是摸身延之謂歟、嗚呼薩埵示生於貞應卒化於弘安其間偉德心念口演、倘非可盡、況乎禿毫寧能述之哉、粗載別傳今也不遑枚擧而已矣、一生鴻業併收靈骨誰不信敬乎、恭惟身延者、移西天鷲峯于扶桑之靈跡也、當山者像東關延嶽于王城之梵宮也、我宗緇素慕靈山當登延山莫延山者須詣當山賴哉、明神異驗日新、所願從心所念耳、於是老人婦人不歷長途受其巨益者不可稱計也、倘欲詳事蹟靈應者、可窺緣起所以神名處、所以神垂跡、所以神護山朝々可見焉、於乎和光善功甚深哉、靈應在其信不也、不信而莫生疑謗云爾、

元祖靈骨

客殿の傍に一塔あり、是すなはち元祖大聖人の御身骨なり、參詣の輩信心を募しめて、未來成佛の果をもとむべき靈寶なり、

名稱所在

立本寺

立本寺ハ京都京極今出川ノ北ニ在リ、日像ノ開基ト稱ス、日蓮宗一致派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志 四寺院〕立本寺　號具足山、日蓮宗日壽上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、在京極今出川北、

〔山州名跡志 二十洛陽寺院〕具足山立本寺　在本滿寺南　宗旨　宗派同上〇法華一致　門西向　堂南向

祖師堂　在堂東南西向　十羅刹堂　在堂西南東面　刹女像　作不詳　日像上人開眼、體中有銘記、　經藏　在祖師堂南西面、　七面明神社　在經藏南池中西面、　法華題目塔在刹堂南東面堂、　石塔長八尺許、角截石、四面ニ題目ヲ彫ル、是則チ日像上人ノ筆ニシテ、昔上人於洛陽當宗ヲ流布ス、仍テ京師往來路口ノ巷ニ所立ノ塔ナリ、應仁ノ亂ニ當テ散在ス、所殘纔ニ五六アリ、此塔ハ、當寺今ノ地ニ移テ、自地中現ズ、　三十番神社　在佛殿東西面、

當寺日蓮ノ像ヲ號冑影、初メ松永久秀ノ男、右衞門佐久道ガ侍、佐々木廣次ト云フ者、年來信仰シテ、家内ニ安ズ、兵亂ニ當テ、出陣ノトキ、祈願シテ、凱陣無恙バ、一寺ヲ立テ可安ト、或山中ニ懷行テ、覆冑土中ニ納ム、盜賊是ヲ見テ、爲取ニ重キコト如磐石、故ニ惶之又納テ去ル、次凱陣シテ像ヲ掘出スニ、樵夫來テ件ノ始末ヲ告ル、其後年月ヲ經、像所々ニ至ル、有故當寺ニ所移也、

創建沿革

〔新編法華靈場記 三〕具足山立本寺

當寺も亦妙顯寺にひとしく、日像菩薩の御開基にて、世に云櫛笥の寺是也、されば人皇九十六代の御門、弘法地を下し給はり、堂宇を修し、本尊を遷奉り、日々に宗義を弘め給へり、貴賤のまうで晝夜をわかたず、寺内日毎に繁昌して、寺檀尤多し、然れども其比兵亂うちつゞきて、寺寶を奪れ、藍字を燒る事再三なり、され共、治平の時を待て、文祿年中、豐臣秀吉公の命によりて、洛東今出川

今の地に修造せり、其後南面の大堂を立、次に祖師堂刹堂等、番神の御社、一切經藏、樓門、本院、及び鐘樓に至るまで、悉く成て、數年凶災見る事なく、しかるに寬文元年辛丑の正月、西來の類火によりて、諸堂一時に燒亡す、折なる哉、博才妙辨の師靈鷲院日審聖人御住持なるがゆへに、やがて年月をうつさず、自力に一大堂を建立有て、毎日日中の法談をなし給ふに、貴賤群集して、堂上に居あまり、平地に立者亦量あらず、師の威德まことにためしすくなし、後住日芳聖人は、西陣惠光寺におはしまし、が、審師の請によりて、當寺にいらせ給ひ、共に諸國をめぐり、廣く弘通事加し給ひ、諸堂二聖の間に全し、

光嚴院

四條櫛笥西頰地一町隆資卿跡、爲今小路殿地替、可令管領給者、院御氣色如此、仍執達如件、

曆應四年八月九日　大藏卿在判

師覺上人御房

師覺上人は大覺僧正也、師は則大師の通稱、又は師範の敬辭、尤規模なり、覺とは世に云片名尊敬の意味たり、

又

御祈禱事、近日殊可被抽精誠之由、所被仰下也、仍執達如件、

明應五年六月廿八日　若狹守在判　散位在判

立本寺上人御房

又禁制　立本寺

一軍勢甲乙人等亂入狼藉事

一於當寺堺內放飼牛馬事

一伐採竹木事

右條々堅被停止訖、若有令違犯事者、可被處罪科之由、所被仰下、仍下知如件、

明應五年六月二十八日　若狹前司神宿禰在判

散位三善朝臣在判〇中略

又禁制　立本寺

右寄宿事、被停止訖、若有違犯之輩者、可被處嚴科由、所被仰下也、仍下知如件、

永正十五年九月二十三日　近江前司三善朝臣在判

散位　平朝臣在判

右の外數通、秀吉公より御當家〇德川氏に至る迄、悉略之、〇中略

元祖生影

當寺安置の靈像、胄の御影と申奉りしは、根本松永久秀の子右衛門佐久道家士佐々木廣次と云し者、代々持佛堂に安じ傳へり、然るに廣次軍事を勤る節、彼祖像にむかひ、大願を發していはく、我戰場に出、若死をまぬかれば、一精舍を建、尊像遷座なし奉るべし、他にわたらせ給ふべからずと、山中にもり入、雨露の爲に胄をおほひ、草のしげみにかくし置たり、〇中略本主廣次其後來つて胄を取、〇中略我宅に守奉り、猶一生敬禮、暫くもおこたる事なし、時の人此奇瑞を聞傳へ、をのづからくちづさみて、胄の高祖生御影と稱し奉りぬ、廣次やがて當寺の弘通所姉が小路の是妙院を建立せり、然して後織田信長の軍勢此寺に亂入し、〇中略晝夜寺にあだをなして、暫くもやすからねば、むつかしとおもひて、ひそかに上京飛鳥井町の邊に寺を引より、修造やう〳〵半なるに、又降邊より急火出て、刹那に寺を燒亡せり、住持はひとり高祖を抱き、當寺の脇坊玉藏院に逃來り、數月爰にありて、再建の時をまてり、されば一僧自力におよびがたく、彼精舍を本山に搬して、元

雜說

祖を立本寺にとゞむ、是日像聖人の御時とぞ、かゝる尊像いかでそのまゝおき奉らんと、それより、一堂を建給ひて、此尊影を安置し給ふ、まことに諸願圓滿にして、尤靈驗日毎にあらはる、

〔扶桑鐘銘集 上〕具足山立本寺鐘銘

辛丑之春、寺。鬱。攸。之。災。數年而鼎新、羽林次將光政女、號長壽院、樂施若干貫、造梵鐘幷寶樓、丁未冬鐘成、原夫祇陀林銅鐘、戒場院金鐘、修多羅院石鐘、及乎慶喜房前鐘磬、或輪王梵釋之像、或諸佛成道之相、或八水九龍之形、或日月星辰之象、或黃金敎誡之文、堂々焉、煌煌焉、如厥勝利也、載籍所紀昭昭焉、而今雖不悉備梵製、爲其功用一也、矧乎、鳴之宜揚佛乘、不可量、所冀、檀越家運、共金石彌固、子孫齊鐘聲無窮、乃至四德圓滿、百福莊嚴之殊勳、及法界、

本法寺

名稱所在

本法寺ハ、京都堀河通、寺之内ニ在リ、日親ノ開基ニシテ、日蓮宗一致派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志 四寺院〕本法寺　在妙覺寺之南、號叡昌山、日蓮宗二十一箇寺之隨一也、開祖日親上人諫普廣院義敎公之被疎日蓮宗信禪宗、普廣院大怒、使入獄舍、又以火燒鍋、乘熱蒙上人頭、然不動搖、自是此人所書、稱鍋蒙曼陀羅、其外靈驗多、依之守獄之小吏、悉拜戴法華經、爲日親徒、今雜色等、多爲日蓮宗、職此由也、此時本阿彌淸信、亦因刀劒之故、觸普廣相公之怒、與日親同在獄舍、舍中歸依日親上人、互出獄後剃髮、日親號之稱本光、凡本阿彌一家名上置光字、始自本光、悉爲日蓮宗、是亦因日親之故也、方丈有名畫數幅、每年七月十七日懸之、有寺產二十石餘、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕叡昌山本法寺　在堀川通寺之內　寺領十一石　後土御門院朝　開基日親上人（自中山日常第七之祖）

創建沿革

〔新編法華靈場記五〕叡昌山本法寺

當寺は下總の國中山正中山本妙寺（又は法花經寺と號す）輪番の御寺、世にいふ不愛身命の大導師鍋冠日親上人建立第一の靈場なり、むかしは四條綾の小路に侍りしかども、中比より一條堀川戻橋の邊にうつされ、又其後秀吉公の命によつて、今の所に引給ひぬ、

記云、師二十一歳、始開講於洛陽、來、欲營建精舍于中華、以爲一家之本道場、而衆難屢、或破或逐、不事就者數十年于斯也、雖然師德深志固其功終成、建立一寺、號叡昌山本法寺矣、

誕育薙染

日親聖人、父の御名は埴谷の平次といへり、又左近將監と號す、師の御兄千代壽龍丸と申せしは、後日嚴聖人とて、即上總の國埴谷の妙宣寺日英聖人の御讓を受、彼御寺の貫主たり、師は虎菊麻呂と申て同く妙宣寺におはしましけるが、四海弘法の大度をいだき、自大發願して、十四才より中山に入給ひ、日暹聖人の御法を受て、終日法理をみがき、內外の典籍該綜し給ひ、諸宗の法門悉通曉あるをもつて、十九歳の時、肥前の國松尾山にて總導師にさゝれ給ひ、すなはち西に赴きて、大きに弘化を成し給ふ事、其譽れ尤たぐひなし、

中山輪番　下の總州中山正中山法華經寺は、もとより日常御俗世の御領地にて、忝くも宗祖大聖人の御開闢なり、其より佛心院日珖僧正の御時、東照宮の嚴命により、はじめて寺法を改め、輪番を定め、京堺より下りて、彼山の貫主となれり、然るに慶長十　年に至りて、日來法師此山に居在し、わたくしの押領して、寺法の輪番を廢して、寺僧末寺を掠亂す、ときに當寺十二世日慈聖人東に赴き給ひ、此義を訴して、遂に日來法師がよこしまをとゞめ、輪番もとのごとくにきはまりぬ、

記云、日慈乃赴關左、屢經公庭、追逐日來、輪番復本、又令衆徒及末流安堵焉、東照宮大權現、大相國秀

忠公、有命而賜奉書、其旨本法寺、及頂妙寺、妙國寺、更守正中山、當令彼山相續光顯不至壞亂矣、其書在叡昌山寶藏、又近歲寺華經寺四院家、密相議而集寺僧末寺幷諸檀越語曰、求請貴族、爲正中山主、以成不受不施之魁首可乎、寶殿京畿三寺輪番、以專常公門家之權也、寺僧等不知院家實意、但喜與不受不施、無不應者、而其計議已宛焉、若正中山之勝藍大寺、而以貴族爲主、立不受義、則闔國邪流託于其威、以興盛由水之就下、沛然孰能禦之、於是第十八祖日允往武江訴論數回、有權勢人、亦黨乎彼徒、爲之助力、以故難可斥彼邪義、雖然允公數歷公場、立理出證、遂令邪徒決墮員處、乃令放邪人於遠境、此時重下嚴命於允、而三寺輪番又再興矣、依茲法華經寺不受義永絕、無復噍類、爾後末流及衆檀葦々歸降、皆本此而已、允又順公命、定法數條、俾萬世之下無違戾之矣、其叡昌山有大功于法華經寺、爲若斯也、寔非師大勳之餘烈哉、

上洛弘法

御年二十一才、專宗義を唱へ、應永三十四初春より、像師の弘功を追て、一條戾橋の邊に傘を立て、偏に諸宗無得道の義旨をまめし、謗法墮地獄の過罪をあらはせり、往來の貴賤或は笑ひ或はいきどをりて、瓦石をなげ、害心を企つ、然れども師少もひるませ給はす、こまかに經理を立て、衆を導けり、此故に木の葉秋待て落るがごとく、日ならずして、信伏隨喜の輩多く、つゐに宗風になびかぬはなし、こゝに播州梶折村に宇野孫左衞門、西村彥兵衞などいひしもの上洛せしつゐでに、演說を聞て、獻喜隨從し、遂に師の壇那と成て、法華をたもち我村に歸り、眞言の舊寺毘沙門堂をまつらひ、師を敬請して、講演をねがひ奉る、されば諸人を招き宗義をきかしめ、遂に此精舍を師に奉り、子孫親みのもの悉く檀度となりて、もつはら妙法をたもつ、此寺はじめは金仙寺といひしかども、法華一乘の靈場と成て、これを改め、一乘寺と號し、御弟子日禪に付與し給へり、禪師も亦凡をはなれ、學業秀達の名師なれば、一寺益營建し、堂舍殿門悉く皆具足す、彼毘沙門の尊像靈

験殊に繁多にして、万證とるにいとまあらす、此所は親師御建立最初の道場なり、其後博多の法性寺を創して、西國開導の霊場となし給へり、委細或説徳行記につまびらか也、

〔本法寺文書〕本法寺末寺所々在之由候、於我等不可有疎意候、佛法御修行有度之通尤候、於國中余儀有間敷候、恐々謹言、

九月三日〇年代不詳　小早川左衞門佐隆景 花押

本法寺日通上人御同宿中

寶鏡寺 大慈院 附入

寶鏡寺ハ、京都寺内通小河西北方ニ在リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、謂ユル比丘尼御所ノ一ナリ、

大慈院ハ、京都寺内通百百町ニ在リ、淨土宗ノ尼寺ニシテ、寶鏡寺ノ末寺タリ、

〔雍州府志 四寺院〕寶鏡寺　在本法寺西、尼寺而禪宗也、代々姫宮尼公爲住職、

〔山州名跡志 二十一洛陽寺院〕寶鏡寺　在寺内通小河西北方、　宗旨禪門 南向　寺同　住主尼公 姫宮

開祖不考

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕寶篋寺　在寺内通小川西　寺領三百八十石

尼寺　開基將軍慈照院義　公女 文龜年中建立

〔嘉永七年雲上明覽大全 上〕御比丘尼御所

名稱 所在　寺領 寺職

御領三百八十七石餘　寺之内小川西ヘ入　百々御所

宗旨禪 寶鏡寺　御無住

禁裏御附人　石川多仲　御用人　杉原左膳〇中略

比丘尼院家衆

寶鏡寺宮末寺

禪宗　繼孝院（上京繼孝院町　寺領六十九石餘）　同　養林庵（上京休齋圖子　同三十一石）

淨土宗　大慈院（宮御屋數　同百九十五石餘）　同　惠聖院（大慈院内　同二十五石）

同　瑞花院（右同斷　同四十石）

雜載

〔宣胤卿記〕文龜四年（○永正元年）正月十日癸酉、今日室町殿參賀式日也、近年剋限遲々之間、食後所參衆奥也、園以下五六輩之外無人、仍相倶先向政光朝臣方、（大樹同前、門在別、）他行云々、次參寶鏡寺殿、（大樹御妹）南御所（寺號不知之、慈照院殿御女、）各賜盃、

○

大慈院

〔和漢三才圖會〕七十二（本）山城　大慈院　在寺内通百百町（堀河）

尼寺、本願從二位仲子、（廣橋兼綱之女）後光嚴院皇后、號崇賢門院、（永德三年十月廿二日化）

〔寶鏡寺文書〕四　此一卷（○寶鏡寺文書）者、足利將軍家世寄鎭于吾大慈院之台帖也、唯夫歷世股肱、朝廷金湯、佛門威風、加于四海、勢位冠于列侯、自崇賢門院艸創當院以來、多是柳營親戚、割愛網而主此席、故壯麗殿宇、喜捨莊田、以備于悠久而已、苟不然、璿文花字、若此之多、而若此之嚴乎哉、雖寺門興廢屢易、憑于龍天之呵護、墨色如新、而恐經紀愈久、則與塵蠹所殘缺也、今加裝成軸、冀後世以詳故家之盛事、良有由矣、因題數語於卷尾云、時正德二年龍集玄默大荒落林鐘中浣、

前景愛　賜紫德巖理豐手書子寶鏡室中（○在印）

〔嘉永七年雲上明覽大全〕上　比丘尼院家衆

寶鏡寺宮末寺（○中略）

淨土宗　大慈院（宮御屋數）　同（○寺領）百九十五石餘

名稱所在　創建沿革

〔二水記〕永正十八年〇大永元年十二月七日、今日於相國寺陞座、拈香有之、奉爲慈照院殿卅三回追善、雖爲明年正月七日、今日被修也、爲見物罷向、〇中略大慈院南御所有御經供養、勅願也、御導師定法寺僧正、公助

〔翰林胡蘆集〕明應六年五月廿日、乃妙善院殿從一位慶山大禪定尼小祥忌辰也、奉大將軍鈞旨、於舊館莊嚴影堂、延集淨侶、勤修者有日矣云々、尊靈長女現領大慈尼院主席、而稱首平淨土一宗、時人謂御所、

要法寺

要法寺ハ、京都二條川東ニ在リ、日尊ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志四寺院〕要法寺　在二條京極、日尊上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、方丈有八幡太郎義家甲冑之宮、其蓋上有義家之金字、實古代之物也、始藤原兼家公、捨宅爲寺、號釋泉寺、傳言、其處則今要法寺之地也、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派　京都府管轄所同國(山城國)同郡(愛宕郡)京都二條川東　要法寺

一本山

一鼠色衣著用、寺格等總而無御座候、

〔新編法華靈場記四〕洛陽要法寺

當寺ハ六老第三白蓮阿闍梨日興聖人の御弟子、久成坊法印日尊聖人御開闢根本仁皇九十四代花園院の御宇正和元年に創草也、法亂已後には醒井通要法寺町に侍りしかども、天正年中今の地に引給ひぬ、されば其基洛陽九重にひらかせ給ふゆへ也とて、山號いまだ侍らず、まことに權實二敎を正し、本門要法の宗義を弘め、ゆかしき境地となし給へり、

日興師譜

師はもと天台をまなび三井寺に學をつとめ、熟達して駿州の實相寺にすはらせ給ふ、然るに蓮師の御教化に伏し、改宗して正法を受、遂に身延に遷り、蓮師の遺言遺書等に任て、在持七年を期し給ふに、波木井實長向師を以て定實主とせし故に、爭ひなく、こゝを辭退して富士大石寺にいらせ給ひ、本門戒壇を安置し、重須に蓮師の正御影を納め、廣宣流布をまちて、讀經演說し給ふべき注法花經口決二百廿九ヶ條、又ハ本尊七ヶの口決、本迹百六箇の血脈、三大秘法の口決等まで筆受し給ひ、蓮師の御口授つまびらかに相承ましく〳〵、遂に法義を日目師へ御付屬ありて、正慶二癸酉の二月七日に、行歳八十八歲にして、大石精舍の雲にかくれ、安祥に寂し給へり、

傳曰、師諱日興、姓橘、敏達天皇九代後胤、美濃守善根裔、大井庄司某三男也、父娶由比氏之女、產師於甲州、甲斐其小字也、甫師七歲入實相寺、師事播磨律師、而爲明顯密二教、穎悟博學、而有名譽也、大衆稱師、號伯耆阿闍梨、熟學至德、而赴駿河國蒲原庄、爲四十九院之住持實相寺、而于此有年矣、時蓮師正嘉初、入實相寺之經藏、考勘重月焉、万徒請蓮師、而令講法華、舉文義諸證、而明於末法時應、依之阿闍梨疑惑一時解而忽棄持法、而爲信伏偈仰也、自此成蓮師御弟子、號白蓮阿闍梨焉、下略中略〇

二寺合境

第十二世日在聖人の御時に至り天文五年七月廿七日、山門の惡徒万餘人を引卒して、洛中の法花寺悉く燒討して、大字小字を破却せしむが、ゝるがゆへに、累代の靈場も過半此時節より絕たる也、同十三年六月上旬、洛內諸法花寺より段々再興還住の義を訴訟し侍りしゆへに、山門の强義停止せられて、ことゑづまりければ、亡所やうやく再建して、本尊を安置し、又は修するに力なきは、一門派に接しなどして、寄進施財の旦度をまつ、然るに當寺は彼上行住本の精舍、二ヶ寺一所に引合て、同十九年三月十九日、五條の坊門堀川の東邊に寺地を定め、はじめて要法寺の號を

呼り、其比住本寺には在師寺主なりしかども、要法寺と成ては在住なし、滅後に是を歷代とあがむ、在師弘治元年十月廿五日、當院にして寂し給へり、壽八十歲、

經藏歷覽

廣藏院日辰聖人は、當寺中興と稱し奉りて、博學廣才也、かゝるがゆへに、天文十四に北野の經藏に入て、一切經を咸讀ましく〳〵、大藏拔萃五十卷を撰じ給ひぬ、まことに其譽天下にあまねし、ここをもつて法印權大僧都の威をかゞやかし、羽柴筑前守より寄進、幷寺內免除の證を給はる、今に傳えて當寺に侍りき、第十四世日賙聖人は東福寺にて藏經をくり給ひて、佛藏心寶百卷を撰み給へり、まことに成功たぐひすくなく、つゐに法印權大僧都の位にのぼれり、されば中澤對馬守光長の狀に云、

今度藏經一覽之義附而、權大僧都之口宣、從中御門殿被相調被進之候、彌天下之御祈禱可被抽偏念之段、可爲神妙之旨仰候、恐々謹言、

八月十一日　光長在判

寶藏院權大僧都御房人々御中

佛殿祖師堂悉く造營ありて、行歲六十三歲に及び、慶長十三年二月十六日に入寂し給ふ、其後には世雄坊法印權大僧都再び建仁寺の經藏に入大藏纂要全部百卷を筆述せり、其外著撰不可勝計、世に板行流布の書籍こゝに略し侍る、此外歷祖代々の成功事しげきがゆへに、餘は皆略之、

〔要法寺文書〕禁制　要法寺

一當手軍勢亂入狼藉事

一剪採竹木事

一相懸箭錢兵粮米事

右條々堅令停止、若於違犯族者、可處嚴科者也、仍如件、

天文二十年二月日　　筑前守好長花押 慶〇三

〔要法寺文書〕上卿 按察中納言

天文廿三年十二月三日　宣旨

權大僧都日辰　宜敍法印

藏人右少辨藤原經元奉

頂妙寺

頂妙寺ハ、京都二條河原ニ在リ、日祝ノ開基ニシテ、日蓮宗一致派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志寺院四〕頂妙寺　在二條河原、日蓮宗二十一箇寺之隨一、而日祝之開基也、細川若狹守爲大檀越、而號頂妙寺、然若狹守、今不詳其家系、樓門之內、東有持國像、西有多門像、運慶所刻也、世謂二王像也、男女祈疾病平復、其願成日、以大草鞋掲其前、此寺鐘其音好、與天王寺六時堂前之鐘同調也、斯寺舊在高倉中御門北、寬文十三年、有故移東河原、寺產有二十石餘、凡二十一箇寺之中、今所存者、十七箇寺也、其餘四箇寺中、所殘之坊舍、分散在十七箇寺之內、纔其跡存而已也、

〔山州名跡志愛宕郡四〕開法山頂沙寺　在三條大橋寅卯三町許

宗旨、法華、宗派一致　門南向　樓門同　額、開法山、竪額、掲于樓上、　當代高家御筆　安二天像左多聞右持國長七尺許作不考、此二天感應古今新ナリ、　堂南向　本尊釋迦佛右多寶佛左脇士　文殊　普賢　不動　愛染　四天王　四菩薩　中尊　法華首題牌　四天毘沙門天、持國天、增長天、廣目天、　四菩薩上行菩薩、淨行菩薩、無邊行菩薩、安立行菩薩、　當宗佛壇皆以同、當宗本尊ハ古作希ナリ、其中所在記之、已下所記、當宗本尊是ヲ略ス、准テ可知、

祖師堂　在佛殿前西向　所安　日蓮上人像　當宗ノ宗派ニ、一致勝劣ノ義アリ、當國中一致ハ多ク勝劣ハ少シ、是又已下流義ヲ不記ハ、皆一致ナリ、〇中略

當寺ハ元在新町長者町、文祿年中ニ高倉通中御門北ニ移テ、寛文年ニ今地ニ移ス、

〔花洛名勝圖會 東山三〕開法山頂妙寺　右同所(要法寺)の西にあり、法華宗十六本山の一なり、寺領二十一石、開基日祝上人、

〔新編法華靈場記 五〕開法山頂妙寺

當寺も同中山の法流にて、本法寺にひとしく輪番の御寺なり、開山は妙國院權大僧都法印日祝聖人なり、中頃は長者町に侍りしかども、文祿年中より高倉の御所の舊跡にうつりて、下立賣通東の行當りに圍屏を構へ、南方に大門あり、故に世人高倉通といふなるを、いつのほどにか頂妙寺通りといひならはしぬ、又今の地東河原に遷されし事は、此頃の事なればいふにをよばず、人知れる事なり、

師諱日祝、姓千葉氏、小字千鶴麻呂、人皇百二代後花園御宇、永享九丁巳歲、誕于下之總州千葉郡﨑、九歲入下總國中山法華經寺、拜薩上人、薙染得度、然後學業大成、于時文明五年師年三十七、來洛陽而營一庵、爲數日說法、聽衆群來而圍座、頗如碁也、一日細川勝益、進衆中改宗受法、直爲師大檀那而寄寺地、修營成功、稱之頂妙寺矣、凡在住四十一年、諸堂磐莫不建立、而位至三位大僧都、詠一首和歌而終、壽八十七、永正十癸酉四月十二日也、

辭世

八十あまり七年かけて人を渡す命ながらの橋ばしらかな

定寄進狀之事

右意趣者、勝益爲現世安穩後生善處致造營祈願所也、無懈怠頓證菩提可有勤行事肝要也、若相續之衆僧等不報之、時宜僻者可然人仁可被仰者也、仍就寄在所者、上棱小路下四條西万里小路東富

小路之間四丁町也、於子々孫々不可有違亂、爲後日之狀如件、

細川治部少輔

明應四年十一廿一日　源朝臣勝益在判

頂妙寺

又

頂妙寺事、高徭進退上者、如先々寄宿已下令免除候條、聊不可有別義候、猶西郎可有演趣候、恐々謹言、

十一月二日　氏綱在判

遠江守殿○中略

二天靈應

三門の番尊は常の二王にあらず、東は持國西は毘沙門天なり、運慶と快慶滅後安阿彌に師弟兩作にて、その勢形生身のごとし往昔永祿己巳五月十六日、寺檀坂井何がしの入道淨眞珖師に申けるは、和泉の國高倉に未曾有の靈像二天をはじましゝが、このごろ彼地兵亂して、靈社寺藍を燒はらひ、或は寺僧社司を害す、かるがゆへに寶財海に沈め、佛を山になげて、守僧だにも侍らざれば、はやくむかへ給へとつぐ、やがて寺僧に命じ給ひて、淨眞とともに彼所へ遣し給ふ、いひしに違はず遂にをもひを達し、當寺に遷し給へり、泉州の高倉より、又都高倉の舊跡に來現まします御事、まことにいとたうとし、されば彼淨眞程ありて當寺に參詣す、寺僧二天の御事を尋ね、かつて心得侍すといふには、何ゆへにあらそへる眞猶更に不知、我このごろ迄紀州にありて三五月以前歸洛し侍るなれば、などさることを怠るべきといふ、抑は希代の事にこそ、かくて渡奉るべきにあらずとそれより三門に安置し給へば、世人聞傳て常に祈願主絶ず、○中略

先年於安土法問以來逼塞之由候、早々上洛最候、諸事如前々與被仰出候、可被得其意候、此旨法華宗中申渡候、猶自諸寺可被申入候、恐惶謹言、

七月廿日　　民部卿法印玄以 在判

日珖上人 玉床下

されば秀吉公、先君の非刑を悔給ひ、各々宗門の敎法講演、意に任すべきのよし仰出され、これより憚處なく方座第四の僞證を破し、土宗の無得道を決難す、秀吉公我宗門の勝利を感じ給ひ天正十三暮に至りて、廿一ヶ寺由緒に隨ひて、各々御朱印をなしくださる、殊更珖師へは山城國田中にて寺領を賜り、威光四海に振ひ、遂に僧正の位に昇り、剩東照宮の嚴命によつて、正中山の輪番を始、當寺と本法寺と堺の妙國寺との三所より三年かわりにして、今に彼山を住持し給ふ凡此師は學業尤世に秀で、みづから三大部の講談をなされ、一宗最初の講師とあふがれ、妙辨博才類なければ、吉田より番神相傳の書をもつて珖師に送らるゝの記、勿論今に當寺にあり、されば我宗門諸派異なるといへども、法花を持僧俗此師を敬せぬ輩なし、殊に眞跡の御漫茶羅所持の人、無實の難をのがるゝといへり、

寺領

〔頂妙寺文書〕千葉胤泰 肥前國小城郡砥川保内乙犬名田地 三間寺智運東堂跡 爲光勝院料所所定置也、守先例可令致沙汰給之狀如件、

正平二十年八月廿二日　　平胤泰 花押

益田大夫殿

〔頂妙寺文書〕頂妙寺寄進狀

定寄進狀之事、　　勝益

右意趣者、勝益爲現世安穩、後生善處、致造營祈願所也、無懈怠頓證菩提可有勤行事肝要也、若相續

之衆僧等所報之時宜候者、可然人仁可被仰者也、仍執寄在所者、上錦小路下四條西万里小路東富小路之間四丁町也、於子々孫々不可有違亂、爲後日狀如件、

明應四年十一月廿一日　細川治部少輔源朝臣勝益花押

頂妙寺

〔頂妙寺文書〕山城國田中鄕之內貳拾壹石之事

全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日　家康黑印

頂妙寺

寺職

〔頂妙寺文書〕上卿源大納言原紙薄墨

長享二年三月十日宣旨權大僧都日祝、宜任權僧正、

藏人右中辨藤原量光奉

雜載

〔頂妙寺文書〕猶々諸寺の住持違諸老衆皆以如此趣候、

今度至于大坂於內府樣御前一宗と日奥遂對論、思儘詰、伏怏令閉口、啓一宗之本意、却年來之邪魔、候事、併御前之儀有樣ニ御申被成故候、此四五ヶ年彼曲者、誹謗一宗、廻諸國奪取旦那、掠領末寺、欲滅却本寺之條、門中之雖爲鬱憤、以無好緣、故日比沈愁憂候處、至于此時巨細之儀共以達上聞之故ニ、明理非を被聞召分、屬宗旨之本意候事、偏貴翁之奔廻才覺故候、一宗之老若、各令感悅候、此上者於諸寺貴老長久御祈禱可有之候、彌以繁榮可被任貴意候、恐々謹言、

十一月廿一日

立本寺上人日純花押

本法寺上人日通花押

妙顯寺上人日紹花押

榮任老 玉床下

本隆寺

名勝所在

本隆寺ハ、京都五辻ノ北ニ在リ、日眞ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志四寺院〕本隆寺　在五辻之北、號慧光山、日眞上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之随一也、堂前有無著尼汲水之井、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕慧光山本隆寺　在智慧光院通五辻北、　宗旨法華宗勝劣派　門東向　堂南向　祖師堂　在佛殿西、南向　法華題目石塔　在祖堂前、東向　日像上人筆　番神社　在祖堂南、東向　鳥居同木柱　當寺、初在壬生四條、中頃西陣ニ移ス、聚樂城造營ノ時、移今地、　開基　日眞上人

創建沿革

〔新編法華靈場記三〕慧光山本隆寺

當寺も同じく妙顯寺より分れ、日像菩薩の法流なり、卽常不輕院日眞聖人の御開基にて、後土御門の御宇長享二年に建立なり、上古の寺地は、壬生のあたり、中比は聚樂にあり、然るに太閤秀吉新君の城を築給へるみぎり、今の地に遷さしめ給ふ、

眞聖弘通

開山聖人明應のはじめより、北國に赴き給ひ、廣く宗義を解說し給ふ、時なるかな、越前平村の舊寺歲數り、此師に逢て、第六の祖顯本院法師やがて、眞聖の宗風になびき、卽座に歸伏して門下の隨約をなせり、是よりはじめて信伏の末寺彌まさり、威光月々に募り、既に若州小濱妙興寺の僧日因といひし比丘も、師の法流にかたむき、いまだ眞師を拜し侍らずといへども、予も其門葉に

なりてんと、頓而弘宗利益の信念を起し、在寺をすて、別舍をいとなみ、本尊あらたに安置し奉りて、開眼供養の導師として、日眞師を敬請せり、されば中尊の七字、今に傳へて眞聖の御筆なり、かゝる名藍なれば、師もその成功を感じ給ひ、惠光山本境寺と名付給ひ、それより但馬の國九鹿といひし所に、一寺を修して、妙經寺と號し給ふ、是又大場にて諸堂數を盡し僧坊歷々と軒をならぶ、今は荒廢し、其礎跡はかなくも無主庵となり侍りき、只なげかしきは時災也、或時又湯治し給はんため、有馬に赴き、攝津の國久代の村里を通給ふに、長途の勞を休んとて、暫く民屋に入せ給ひ、法義うち物語して過ほどなく、此家寺となして、すなはち當寺の下に付し、今に久成寺と名付侍り、こゝに眞聖旦那中に授給ひし大曼茶羅有、

傳曰、師諱日眞、字惠光、中山親通別腹之子也、未僧形頃、在于三井寺、甫十二歲、離園城寺、入龍華院、而即其年落飾、學竺典霽上人、而學業大成也、師自是誓欲爲弘化、先赴北國之地、弘宗之因、立義之緣、隨佗意方便、而引愚導賢、所改宗者万餘人、建立數場叢述數品、永祿元年戊子三月廿九日眞公逝、以爲法嗣、寺附屬日鎭焉、

三判本尊

當寺に三判の本尊とて、古今一幅の曼荼羅あり、祖師いかなる御内意にや、首題一遍間に三所まで御判あそばしたり、每年七月二十九日の虫拂に懸ぬ、

曼荼羅湯

師北國御弘通の砌、但馬の國湯の島といひし所に赴給ふ、此所の療湯涌上る事、甚つよく、熱き事又忍びがたし、かゝるがゆへに、病人適々行むかへども一足を入侍る事、かなはず、師是を見給ひ、やがて曼荼羅をあそばして、溫泉にしづめ給へば、其より滑然として和ぎ、病人四方よりつどひ集り、偏に眞師の德行を貴む、こゝをもつて今の代までも、曼荼羅の湯といひ侍りぬ、されば此所

名勝
所在
創建

に一箇寺あり、彼是眞師の行業に伏して、遂に是も末寺となり、本住寺と改ける、

眞聖製作

師はもとより文學に長じ給ひ、殊に台家の諸教に熟し、天台の三大部三十卷の科文并に法花論の科文等を書述し、其誉四方に聞へ、遂には後柏原帝の叡聞に達し、彼書幸に天覽におよび、忝も全部の外題をあそばし下さる、三條右府奥書し給ふ、其趣に云、

這三十卷玄義一卷、叡覽之後、被染勅筆者也、最爲寺家重寶耳、

轉法輪三條右大臣實香

此文句一卷外題被染宸翰者也、尤後代之可爲重寶而已

右相府

止觀亦右に同じ

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　同(京都府管轄所)　同國(山城國)同郡(愛宕郡)京都智惠光院通五辻上ル　本隆寺　○中略

一紫衣相除、其外之色衣著用、別段寺格無御座候、

一從往古參内等之例無御座候、

本能寺

本能寺ハ、京都京極姉小路北ニ在リ、日隆ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志寺院四〕本能寺　在三條京極、日隆上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、始在三條坊門西洞院、織〔一〕信長公寓斯寺、爲明智光秀被弑、時一旦爲焦土、其後移今處、堂前有信長公之塔、有寺

寺領

產四十石餘、

〔山城名勝志（四洛陽）〕本能寺（今在京極姉小路北、開基日隆上人、中興日典上人、僧[illegible]、筑波集作者、著和語記、）寺記云、元在六角以南、四條坊門以北、櫛笥以東、大宮以西、四町々、件地者、康曆元年十二月廿三日、西坊城言長卿、爲妙峯寺道的上人所寄附之也、然永享五年卯月二日、檀越如意王丸買得之、開基日隆上人附屬之云云、其後遷六角南油小路東、（此地、今號元本能寺町、）天正十年六月二日、平信長公於此地爲明智自斃、今亦遷京極東姉小路北、

〔國花萬葉記（二上山城）〕本能寺（京極姉小路上ル町 寺領四十石）

後花園院寛正中建立（開山日隆上人）

役者　寺家二十八軒

蓮住院　長園院　實教院　壽仙院

諸墓

日隆上人　塔（當寺開山也）

織田信長公　塔（信長公宗門ニ非ズ、此寺始メ西洞院四條坊門ノ南ニ在、則信長公渓雖有シ所也、兵火ノ後此處ニ移サル、其地今茶屋中島氏ノ宅ト成、）

杉和賀若狹守　塔（佐々木ノ種族、紀州新宮城主、）

清光院淨心信女　塔（當今第五宮ノ母公、内侍局也、五條菅原爲庸卿ノ女也、故ニ菅内侍稱、）

〔本能寺文書（乾）〕袖判

本能寺弘通所敷地、北小路與武者小路之間、室町東頰乾角（東西廿丈南北拾五丈）事、任買得、當知行之旨、領知不可有相違之狀如件、

永正拾五年八月廿一日

〔本能文寺書（乾）〕本能寺事、依有子細、本屋敷（江）可有還住之旨、被成奉書上者、舊領六角以南、四條坊門

以北、櫛笥以東大宮以西四丁町事、任御代々御判旨、如先々當知行不可有相違之由也、仍執達如件、

天文十四八月二日　爲清在判

當寺雜掌

子院

〔本能寺文書坤〕山城國鴨川村之内四拾石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日黑印〇德川家康

本能寺

〔山城名勝志四洛陽〕圓光院本能寺塔頭、在開山堂北、

本能寺圓光院にて

下草　のぼる水ありてやこほる空の月　宗祇

雜載

〔二水記〕永正十八年三月四日午時、近邊若衆四五人、令同道行本能寺、下京法花堂寺中令歷覽之、

〔老人雜話下〕明智謀反の時、〇中略桂川を渡りて、初て觸をなす、未明に信長の御座す本能寺今の茶やが家ある所、西洞院通三條二町下る、に推寄、信長御自滅ありて、火をかけたり、

妙蓮寺

名稱　所在

妙蓮寺ハ京都三條ニ在リ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

創建　沿革

〔雍州府志四寺院〕妙蓮寺　日蓮宗二十一箇寺之隨一、而日中上人之開基也、有寺產十石、

〔山城名勝志二洛陽〕妙蓮寺在寺內通北大宮東、

寺記云、日像師、永仁始創一宇於五條西洞院、寺廢有年、應永中、日應僧正、日忠上人、復興、其基於綾小路、寺名妙蓮、天文廿四年移北小路大宮西、今號神町　其後天正十一年、豊臣秀吉公築聚樂亭給時、今遷安

居院地云云、

〔山州名跡志（二十一洛陽寺院）〕卯木山妙蓮寺　在寶鏡寺西一町

宗旨　法華宗勝劣派　門南向　堂同　祖師堂　在佛殿西南向　三重塔　在祖堂南東向　番神同社　在塔南東向　鳥居同木柱　拜殿同　當寺開基　日像上人、於洛陽當宗寺院最初ノ所也、其來由ハ、開祖日蓮上人、宗義建立アツテ、祖東州ニハ雖弘、畿內西海不至、日像上人弘通回國ノ誓願ヲナシテ、經北陸來洛陽、往來ノ衢ニシテ、宗義ヲ說ク、其趣以諸宗對法華、權實邪正ヲ辨ジ、諸宗無得道、法華且說無上道ヲ讀ズ、以此諸宗徒僧妬コト如煎如燃、仍雖得種々苦難、更無爽、熟機緣隨喜受法ノ輩モアリ、爰ニ西洞院五條北ニ有酒家、諱號仲興、法ヲ聽受シテ、遂ニ宅ノ後園ニ造庵室、上人ヲ令住、其家門ニ有柳、依號柳屋、世人稱彼庵云柳寺、然後、法義以流布、寺境ヲ增益シ、加營建改號妙法蓮華寺、其後日像上人、妙顯寺ヲ建立ストイヘドモ、當寺ハ尙榮タリ、然後、日像上人第五世日存。。上人、有故改法義立勝劣義、出寺居當寺、又其比同士法屬ニ有英雄、日隆日眞是也、共以出妙顯寺立。。勝劣義、日隆草創本能寺、日眞開本隆寺也、一致勝劣配流、其義以多端、略之、又後世至應永年中、以當寺移大宮通四條南、改號妙蓮寺、上來采柳寺舊緣、分柳字爲山號也、寺主日應僧正也、伏見院仁王男其後又以寺北京移元誓願寺通大宮西、今尙云元妙蓮寺町、然後、天文二十四年移今地、

當寺本尊釋迦多寶兩佛、定朝所作也、初安叡山、及亂世、他境散在、移當寺、改臺座等安置之、

當寺什物、日蓮上人筆法華曼荼羅アリ、號祈雨本尊、後光嚴院御宇、延文年中、天下旱、帝普勅諸宗、請雨法ヲ修セシム、然無驗、仍妙顯寺司職大覺上人ニ詔ス、衆僧三百餘人ヲ具シテ、至桂川上、以件曼荼羅爲本尊、同音ニ法華ヲ讀誦ス、一軸未充雲起雷鳴テ、大ニ灑膏雨、數日不止、上太叡感アツテ、勅云、勸賞ハ可任義、以此宗祖上人及日朗日像ヲ爲菩薩請フ、卽勅以日蓮上人大菩薩、幷二師ニ賜菩薩、以大覺爲大僧正、特大覺ノ二字ヲ大書シテ賜ヘリ、此外紺紙金泥ノ法華經全部、天神御筆同紺

雜載　名稱所在　創建沿革

紙金泥經全部(細字品經)ヲ賜ヘリ、右曼荼羅ノ外ハ、在妙顯寺也、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　京都府管轄所(中略)同國(山城國)同郡(愛宕郡)三條　妙蓮寺

一紫衣相除、其外之色衣著用、別段寺格無御座候、

一往古參內仕、及僧正等任官之住職有之候、近來者無御座候、

〔宣胤卿記〕文明十三年三月廿四日戊戌、聞今日室町殿、壬生地藏御參詣之御歸路、御妙蓮寺、有獻云々、廿六日庚子、西川前宰相來、飯後令同道參詣六ケ所地藏、立寄妙蓮寺、賀室町殿渡御事、此住持者、源大納言入道弟也、親王御方外戚之間、任申請、先年被任僧正云々、不可然事也、

寂光寺

寂光寺ハ、京都京極大炊御門ニ在リ、日淵ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志四寺院〕寂光寺　在京極大炊御門、號空中山、日淵上人開基、而日蓮宗二十一箇寺之一員也、有寺產少許、織田信長公時、此寺中本因坊僧算沙之弟子宰相精圍碁、召見其術、爾後自東武本因坊幷將棊巧手宗桂共賜五十石之年俸、自是後、此坊住僧雖不知讀經卷、撰天性通圍碁者、剃髮爲僧、年年赴東武、謁見柳營、凡圍碁將棊之奕徒、立家受祿、是本朝之流風也、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕空中山寂光寺　在聞名寺南　宗旨法華　宗派勝劣　門西向　堂南向

〔新編法華靈場記四〕空中山寂光寺

開基は久遠院日淵聖人と號して、什聖門派の法流也、師新に空中の秘をひらき、娑婆即寂光の靈場を營建し給ふ、當寺はじめは室町通近衞の町に侍りしかども、秀吉公の命によりて、天正年中、

今の在地京極に移し給へり、されば北には南面の大堂を立、西に番神鐘樓をならべ、東に本院の唐門あり、寺僧各々東西に歷々たり、○中略

除凶施札

毎年正五九三季の祈禱、本堂におひて、滿山の徒衆とりをこなへり、其格妙典一部を讀誦し、天下安全國土長久、寺檀繁昌の丹誠をいのり給ふに、貴賤群集して、離諸衰患の修札を敬受し、家門に是を出す輩、亦於現世得其福報、我此土安穩の妙驗を得侍りき、花洛の堂院、何も等しく、朝家泰平の誠にことならずといへども、施札の利益は當山のみ、

尊前罰文

什聖の御誓戒は五箇條と聞ゆ、されば淵聖改正書授し給ひ、彌法式を正し、十六才をかぎりて、毎年二月二十八日には、流祖什師の正忌日なりとて、寺内の僧徒悉く本堂におゐて、法事を勤め、論義を行ひ、諸式相終て寺法五ヶの起請文をかき、貫主聖人をはじめ、一座の衆徒ひとりものこらす罰文連判し、一身精淨の行跡を誓ひ、二寶諸尊の寶前におさめ給へり、

淵聖成功

師此山に在住ましく\、一百餘卷の書籍を撰み、廣博智才の譽を殘せり、其德廣く四海に周遍して、師の行狀信せぬはなし、殊に御遷化三年前より前相を示し畫工に命じて、高座說法の形像を寫さしめて、影上文句の中に、九々の兩字をかき加へ、極老八十有一才の滅をしらしめ、兼慮不思義の三明通、權化奇特の一證をのこし給へり、其圖如此、○中略

脇坊の內に、當時の碁所本因坊の寺あり、貴人も下賤も是を翫びぬれば、宗緣と成侍るべき一助隨他意方便以何令衆生の益とならん、むかし橘の良利出家して寬蓮といひ、宇多のゐんの殿上の法師となり、圍碁の堪能なれば、碁聖大德といひしためしもおもひやられき、

名稱 所在

創建 沿革

妙泉寺

妙泉寺ハ、京都京極大炊御門ニ在リ、日舜ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ、

〔雍州府志 四 寺院〕妙泉寺　在京極大炊御門、日舜上人開基、而日蓮宗二十一箇寺之一員也、有寺產少許、

〔山州名跡志 二十 洛陽寺院〕本涌山妙泉寺　在寂光寺門内、堂西向、開基日舜僧都、始在綾小路、

〔新編法華靈場記 四〕本涌山妙泉寺

當精舍は、はじめ綾の小路に侍りしを、文祿年中今の所に引給へり、開基は大僧都法印日舜聖人にて、日什師の門流なり、まことに本迹二門を決し、要法化導の名藍を營み、遂に後花園の御宇、享德三甲戌の年五月晦日に寂し給へり、御年七十六、靈鷲院と號し奉りぬ、

寺藍頹破

年月漸く經て、寺境益繁榮し、四町餘の靈場と成て、僧坊左右にむねをならぶ、もとより當寺は公武の寺檀殊更に多く、法流日々に募て、代々大僧都の官に任せり、然るにひとゝせ畠山家に所緣ありて、親しく出入の衆徒あり、其比右衞門佐義就將軍の御勘氣を蒙り、遂に京都を追出せられ、あまつさへ政長に退治の下知を下し給ひて、誅伐のはたをあげて、河内の國に攻くだるよし聞へければ、義就やがて軍を催し兵をあつむといへども、公命に背く身なりければ、數年重恩入魂の輩も忽身えりぞひて、みつぐべき氣しきもなし、義就これを心うくおもひて、京都親みの僧坊に使を遣し、合力の勢を招く、その時當寺の徒衆にも加勢すべきよし、再三使來るといへども、寺事をすてゝ外にうつり、なんぞむほむの方人をせんや、更に其いはれなしとて、一言の返答にも

およばず、使を寺門にをひまくり、義就が滅亡をはかる、されども義就遂に赦免せられて、家門の恥辱一時にすゝぎ、すでに文正のころをひありし熊野を立出て、享徳以來の武威をあらはし、ふたゝび京都に上洛せり、それより執事の職に補せられ、猛威日々に耀侍れば、今は彼僧徒皆千非を悔て有にもあられず、或は夜中に寺を落去、又ゆくさきのなかりし者は、政長にくみして討死す、爾して後寺內頽廢して、甍破れ柱朽て、名藍夕の嵐に動じ、時鐘あれどもつくてなく、ありやなしやにかどさしこめて、貫主は老の身をひそめ、ひとり讀經の二時をつとめて、世の靜安を待給ひぬ、まことに兵亂年久敷、あるひは盗賊寺寶をうばひ、又は伽藍に火をかけて、つゐにむかしの跡さびける、然れども、又明應乙卯仲春に至り、一宇再興せり、四十年ばかり過て、又法花亂に燒亡すと云云、○中略

本堂再興

尊影はじめて現じ給へば、信心いよ〱慕り、正直にして更に邪なく、金銀珍寶庫にみちて、福不可量の經理にかなへり、かゝるゆへに彼影像を安置し奉らんがために、慶長十八一変を期して、遂に妙泉寺の名藍を起し、永く弘法の大道場に移せり、まことに靈驗無雙にして、福智圓滿、立身出世、祈願成就、其證多し、拜すべし、たつとむべし、再興の施主山田吉左衞門尉、法名常光院宗仙日行、

本禪寺

本禪寺ハ、京都寺町ニ在リ、日陣ノ開基ニシテ、日蓮宗勝劣派ノ一本寺タリ

〔雍州府志四寺院〕本禪寺　在清淨華院北、號光了山、日印上人之開基、而日蓮宗二十一箇寺之隨一也、

創建沿革

大久保家爲檀越也、故有代々塔、又有蓮養院日淨尼公之塔、是大久保氏之女也、

〔社寺取調類纂百九十六〕日蓮法華宗勝劣派

一本山　京都府管轄所　山城國愛宕郡京都寺町　本禪寺○中略

一紫衣相除、其外之色衣著用、別段寺格無御座候、

一往古參內仕及僧正等任官之住職有之候、近來者無御座候、

〔新編法華靈場記六〕光了山本禪寺

當精舍は越後國本成寺の末寺にて、九老日印聖人の御門流、卽日陣聖人御開基たり、はじめは四條堀川にあり、是人皇百一代後小松院の御宇、應永十三年戌の二月に草創なり、陣師此道場にをゐて、廣く本門の深秘を弘め、偏不借身命の大願を起し、日々に諸宗の權門を破せり、或は敵對或は歸伏して、師の法に傾者いく万人といふ事を志らず、これによりて寺內日々に繁昌し、僧坊年年に多かりき、然る比櫻井に引うつされ、あまつさへ天文五年の法亂に滅亡す、されども本山長久本成、精舍の日覺大僧正御再興にて、本地ふたゝび建立也、又今の京極に遷さるゝ事は、是秀吉公の御時天正十九年と云々、

寺譜曰、草創之初、有四條堀川、敷地南北四町、東西二町餘也、其後徙櫻井也、天文五年、天台宗與吾宗就宗論、山徒憤怒、大蜂起而攻洛中、日蓮宗鬪戰既及數日、自宗終敗北、諸寺咸燒亡、依此亂劇、寺已滅焉、然法印日覺大僧正興起光了峯、再修舊場、故爲覺師中興開山也、且遷今地者、依秀吉公峯命也、初河原町也、今號京極、

金色立像

金色靈像釋迦牟尼佛の一堂は、西向に建給へり、故に入寺正面におがまれ給へば、靈場とさながらたふとく、一燈の光を挑ぬれば、忽無明の闇晴て、九界成佛のよそほひを見る心地、筆紙にも記

名稱
所在

しがたし、凡此靈尊は、兵革の掠を脱し、又は浪濵の涸を凌ぎ、ゝかのみならず、此靈佛は猛焰の中にをひても更にもつて治給はず、奇なるかな、本元開祖の御在世より傳はらせ給ひ、東海の浪底より出現ましますヽ御佛にて、其來由大耳にあまねし、廣く貴賤の祈願を納受し給ひ、且又寺檀の除災を鎮護し、万品無量の驗證を示し給へば、たれ人かおろそかに拜すべき、殊に毎月十五日御開帳し給ひて、衆生老若結緣の利益を施し給へり、又虫拂は五月十六日なり〇中略

陣師行業

師姓源、佐々木裔也、越之後州瀨波郡荒川鄕之人、曆應二己卯誕生矣、名曰門一麿、眼有重瞳、掌現寶珠、而天性聰鋭、良才絶倫也、勤學於本成寺、而有徹悟之擧、十一歲時、歸父之家、隣家有病者、醫巫无效、則父母使門一麿祈、彼沈痾重病頓愈矣、落髮之後曰圓光坊日陣、昔涉夏夷、廣歷諸山、研習有年、遂秉本成寺職、法燈倍輝、弘通彌盛也、應永十三年、營興精舍於華洛、號本禪寺、而猶北陸東海道造寺、弘通殆不遑記也、年來著述亦多、若夫詳語其行功之夥、則南山之竹剡溪之藤、不能盡之、又門家傳說輙不叙也、世壽八十一歲、應永二十六己亥五月二十一日、安祥而化、

誓願寺

誓願寺ハ京都三條京極ノ東南ニ在リ、淨土宗西山流深草派ノ一本寺ナリ、舊ト天台宗ナリシガ、住持藏俊ノ時、源空ニ歸シテ改宗セリト云フ

〔書言字考節用集二乾坤〕誓願寺(セイグハンジ)城州愛宕郡、始在南都、號大本山、天智帝草創、釋慧隱開基、

〔山城名勝志四洛陽〕誓願寺按、元在上京舊誓願寺通小川西、今遷三條南京極東、

寺記云、當寺往昔在平城、遷今京、後圓空上人時、改淨土宗、深草流義一本、

創建

〔續史愚抄後陽成〕天正十九年二月廿五日辛酉、移誓願寺於三條京極、此日、阿彌陀佛遷座、路次伶人奏樂云、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕誓願寺〇中略當寺ハ、天智帝ノ草創、勅願寺、初メ在和州平安城開闢ノ後、當國乙訓郡西丘ニ移ス、其後今云、元誓願寺通小河ノ西ニ移ス、天正年中依秀吉公命今地移ル、開基僧　惠隱僧都、定惠法師、惠賓法師相繼デ住持ス、第四世以後、住主不詳、專貞法印、源信僧都、幽能法師モ暫ク住リ、源信僧都ノ作六道講式、每月十五日之ヲ勤ム、十餘世ノ後、藏俊僧正、法然上人ノ德行ニ歸依シテ改メテ、爲當宗、以法然上人爲開祖ナリ、又深草眞宗院立信上人、當寺ヲ兼帶ノコトアリ、是ヨリ西山深草派ノ爲本寺也、

〇按ズルニ、當寺草創ノ事ハ、緣起ニ詳ナレドモ、文繁ケレバ載セズ、

堂塔

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕誓願寺　在京極三條南六角通東　宗旨淨土　宗義西山　門西向　堂同　額当時再興、大施主大相國(豐臣秀吉)北御方、佐々木京極女、爲二世安樂也、大覺寺空性法親王筆　堂內額　南無阿彌陀佛　一遍上人筆額由緣在緣起、又在謠曲、所知世也　本尊　阿彌陀佛坐像八尺　安厨子、常開帳、　作賢問子　芥子國　兩作　天智天皇ノ叡願ニシテ所作也、

〔大乘院寺社雜事記〕應仁元年五月廿九日、京都ヨリ昨日返事到來廿六日合戰ニ燒亡所々、〇中略誓願寺之奥堂、小御堂、〇下略

〔長興宿禰記〕文明九年六月廿六日、庚戌今日誓願寺御堂造營立柱也、勸進坊主號十穀沙門興行也、勸進帳一條禪閤御作也、

〔宣胤卿記〕永正十五年四月十六日、今晚誓願寺本尊遷座也、勅使頭左中辨伊長朝臣參向、四方輿出立料千疋、自寺沙汰云々、近所乘輿初例歟、當寺車不叶也、樂人、舞人等參之、遷座ハ依密儀夜中也、參向舞樂ハ天明以後云々、新堂已二万貫下行、猶雖未調、先奉遷云々、

〔天文日記〕天文五年七月廿七日、京都日蓮衆徒、昨日大責、〇中略誓願寺講堂類火ニ燒候、

〔續史愚抄後奈良〕天文五年七月二十八日辛巳、誓願寺講堂、及百萬遍火、

〔厳助往年記〕天文八年十一月十日、誓願寺立柱上棟、

〔半陶藁一〕誓願寺畫菩薩化緣疏并序

京師誓願寺者西方敎主無量壽大願王道場也、天智天皇勅創其基、殿裏底乃春日慈悲滿行菩薩之所親刻也、爾來八百餘載、感應無比、一華一香結其緣者、一拜一聲致其敬者、三世之願無不成就、故雖廢而必興、如夕之有朝矣、一炬於應仁之初、再造文明之末、蓋使樂施者數起福因、亦善巧之一端也、殿之壁陰、舊繪觀音勢至二十五大士歌舞來迎之像、緇素爲之增瞻仰矣、今也所宜有者略具焉、而於斯一擧、猶爲缺典也、願陸丹靑世雖不之而鉅万之費、非隻手單力之所辨也、因持短疏、遍叩朱門白屋、且募十方四衆焉、昔京城修白蓮堂、雷公國英作疏曰、一錢不少、万貫非多、聚毛成裘、佛從心生、今之所希、亦在茲爾、

〔續史愚抄後陽成〕慶長二年三月十一日壬寅、有誓願寺堂供養曼荼羅供、庭儀導師大覺寺二品空性也、道門法親王歟、僧徒百人云、有舞樂、公卿勸修寺大納言晴豐已下三人著座、抑今度供養事、依太政大臣秀吉北政所佐々木京極某女云、按ニ系圖、長門守高吉女松丸云、是歟、備前守長政淺井女亦爲室、直可考決、所願有沙汰云、

〔天保集成絲綸錄五十六〕寛政四子年七月

寺社奉行江

京　誓願寺

右本堂并諸堂塔頭迄、去ル申年〇天明八年類燒ニ付、此度任先規之例、諸國勸化之綸旨被下置之、從公儀も御銀被下、願之通、諸國巡行勸化御免被仰付候、依之御府內武家方、寺社、町中江者、當子九月より來る丑年二月迄、役僧共相廻り、可致勸化候、其外國々江者、同年九月ゟ來ル午年九月迄、役僧共、

寺社奉行連印之勸化狀持參、御料、私領、寺社領、在町巡行すべく候間、物之多少ニよらず、其勸化ニ應じ可ㇾ致ㇾ寄進旨、御料者御代官、私領者領主、地頭ゟ可ㇾ被ニ申渡ㇾ候、

子七月

右之通可ㇾ被ニ相觸ㇾ候

寺格

〔寺社分限帳 五 淨土宗〕開山敎山　京　誓願寺 一代紫衣

〔寺鑑 下〕淨土宗

御朱印　高拾七石　深草派本寺 紫衣　京都　誓願寺

寺領

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕誓願寺　在寺町三條下町 號大本山　寺領十六石九斗餘

什物

〔寺社寶物展閱目錄 一 山城〕誓願寺

一緣起繪三幅 筆者不ㇾ知、內一幅者役人書足、

畫殊外見事ニ相見、其上彼是故實之儀、多く有ㇾ之候、書足一幅ハ、海北友松筆と相見候由、內記申候、

一同詞書六卷 寄合

鷹司房輔公、近衞家熙公、蓮花光院大僧正道恕、梅小路定矩卿、葉室賴孝卿、妙法院宮堯恕法親王、三室戶誠光卿、東園基賢卿、園基量卿、愛宕通福卿、青蓮院尊證法親王、園基勝卿、今城定條卿、水無瀨兼豐卿、有栖川宮幸仁親王、万里小路淳房卿、梅園季保卿、油小路隆貞卿、今出川伊季公、輪王寺宮公辨法親王、中院通茂卿、清水谷實業卿、庭田重條卿、梅小路共方卿、清閑寺熙房卿、藤谷爲茂卿、清閑寺熙定卿、風早實種卿、大炊御門經光卿、一條院宮眞敬法親王、大覺寺宮性眞法親王、竹內維庸卿、裏松意光卿、飛鳥井雅豐卿、近衞基熙公、

〔好古小錄 上〕誓願寺緣起 二軸、畫工姓名不ㇾ傳、

元三巻ニシテ、一巻ハ不傳ト云、惜ベシ、古老傳云、此本寺ノ縁記ニ非ズ、後人辭ヲ附會シテ、本寺ノ縁起トナス者也、繪ト詞ト合ガタキ所アレバ、サモアランカ、但畫力ハ精好ニシテ、故實ヲ存スルコト多シ、

名稱
所在
本尊

清和院 河崎堂 併入

清和院ハ、京都一條通西七本松北ニ在リ、原ト清和天皇ノ母后藤原明子ノ御在所タリシ正親町南、京極西ノ地ニ在リシヲ、寛文ノ始メ、今ノ地ニ遷セリト云フ、本尊ハ地藏菩薩ニシテ、天皇等身ノ像ナリト傳フ、

河崎堂ハ舊ト感應寺ト號シ、一條鴨川ノ西ニ在リシヲ、寺衰頽ノ後、本尊ヲ清和院内ニ移ス、俗ニ之ヲ河崎觀音ト稱ス、

〔山城名勝志七葛野郡〕清和院 拾芥抄云、正親町南京極西、又云、或本染殿清和院同所云云、雍中抄云、清和院染殿南云云、平家物語同之、當院、寛文始遷一條北朱雀西七本松邊、
縁起云、始曰佛心院、見德治二年三月十九日綸旨、後依勅號清和院、染殿第、今清和院也、北限正親町、南限土御門、東限京極、西限富ノ小路、本尊延命地藏菩薩、一演僧正作、清和天皇御長率摸尊容也、御長六尺二分帝恭敬し給ふ所の佛舍利二粒を、左右の御眼のひとみに入給ひ、腹心には宸筆法華經一部を納らる、

〔山州名跡志八葛野郡〕清和院寺號感應寺 在一條通西七本松北 門西向 宗旨眞言 堂西向 本尊二尊 北 聖觀音立像、五尺七寸、 作弘法 南 地藏菩薩立像、六尺貳分、 作一演僧正、此像清和天皇御等身像也、二尊安厨子內、
拾芥抄曰、清和院、正親町南、京極西、清和母后御在所云云、 按、正親町今中立賣通也、京極今御幸町

通也、今京極後世號也、然今當廳司殿北東牛町許歟、其後移今京極中御靈南大路中央、其地號河崎、故俗呼曰河崎觀音、明曆年中移此所、

雜載

〔三代實錄三十陽成〕元慶元年三月廿四日乙丑、太上天皇清和於清和院設大齋會、講法華經、限五日訖、親王公卿率會、

〔三代實錄四十陽成〕元慶二年九月廿五日丁巳、太上天皇延屈碩學高僧五十人於清和院、大設齋會、講法華經、限三日訖、太皇太后藤原高子今年始滿五十之算、由是慶賀修善、祈禱餘齡、親王公卿文武百官畢會、

○

河崎堂

〔山城名勝志七葛野郡〕河崎堂號感應寺、元在一條鴨川西、今遷清和院內、

清和院緣起云、感應寺伽藍舊地、鴨川西岸下鴨南也、寺退轉、正觀音弘法大師作、御長五尺五寸、壹演僧正持尊也、今安置清和院、

〔元亨釋書二十八寺像〕感應寺者、一演法師、嘗持觀世音像、欲得勝地安之、廣求靈區、貞觀中、到平安城東北、鴨河西岸、于時此地搖震、紫雲降垂、蓮花紛亂、奇香薰郁、演喜而構伽藍、以故號感應寺、一日老翁持釣竿出河中、語演曰、我此地之主也、自今應爲護伽藍神、我有神力、能除魔障去疫癘、又結好夫婦、調適產育、所謂牛頭天王者也、我好眠、一歲三百六十日、只五月五日醒、餘日皆臥、端午之朝初起、向天吐氣、其氣或爲雲霞、或爲雨露、万不同、其所觸或爲藥、或爲毒、或爲惡瘡、或爲疾疫、皆是有情之業感也、非我強爲也、言已形隱、演錄神言奏朝、勅黄門侍郞藤長良、就其地七日夜行道念誦、以報神德、

廬山寺

名勝所在

廬山寺ハ、京都京極廬司ノ北ニ在リ、寛元年中、僧住心ノ建ツル所ニシテ、舊ト天台、律、法相、淨土ノ四宗ヲ兼學セシガ、今天台宗ニ屬セリ、

〔山城名勝志洛陽三〕廬山寺元在安居院北大宮西、今廬山寺町、今遷京極同北、天台、律、法相、淨土、四宗兼學、○中略

廬山寺住持次第仁空上人記云、本願住心上人、開山本光上人禪仙云云、住心上人建佛閣於出雲路、號廬山、本光上人結草庵於北小路、開法幟、故明導上人、傳兩方之師跡於一身、合二箇之寺院於一處、

〔雍州府志寺院四〕廬山寺　元在一條猪熊、今在遣迎院之北、宗門同上、天台○本光禪仙和尚開基也、有寺產五十石餘、元三大師自作之雕像、毎月三日、十八日、二十八日開帳、男女群聚、方丈有法然自筆撰擇集之草本、筆跡殊絕、又有慈惠遺誡一卷、并聖寶之墨痕、後小松院時、第十世大用照珍侍者十八歲而入唐、歸朝日、永樂二年春正月十三日、古竺住山惟霅惟寶、有所贈照珍侍者之一軸、此僧將來之古佛等有若干、此寺始在並岡東、

〔國花萬葉記山城二上〕日本廬山天台講寺洛陽京極今出川ノ下、寺領五十七石、

後嵯峨院寛元三年、住心覺瑜上人ノ建立、　昔ノ惠遠翁と化して、廬山の二字を與ふ、依之山號とし、天台之別院なり四宗兼學　元三大師自作之彫像、毎月三日、十八日、廿八日開帳、　法然上人自筆草本之選擇、　慈覺大師遺誡一卷、聖寶上人之墨蹟、古竺住山惟霅惟寶卷物一軸明ノ永樂三年大明將來之古佛此二品ハ、照珍侍者入明持來、

創建

〔廬山寺緣起〕勸進沙門敬白

殊に十方檀越の助力を蒙て、廬山寺靈場の造營の功を全せんとこふ狀、

夫惟に、當寺は住心上人の本願、本光上人の開基也、彼本願上人、その心ざし塵境を離て、朝には法華三昧に住して、胸に圓頓一實を觀じ、夕には念佛三昧に入て、心を安養九品に遊ばしむ、玆に一人の老翁あり、法味を感悅して、來詣すること日久し、その姿をみるに、異人にして凡俗の類にあ

らず、上人是を惟しみて、鄉里を尋ぬるに、彼叟こたへていはく、我は是廬山の惠遠法師也、汝が戒香薰修に感じて、今この土に來れりとて、安心の要文をさま〴〵にしめしをき、又袖の中よりしるしたる物を出して、歸り去にし後は、二たび來らず、むかし達磨大師、うへ人と化して吾朝に渡り、聖德太子にまみへ、したためしをや、思よせられけむ、上人不思議の奇瑞を信じて、敢てうたがはず、かの一紙を披き見るに、廬山の二字あり、當寺そのかみは、與願金剛院といひしを、此時より改て廬山寺と號し、虎溪をうつして蓮社をむすび、緇道俗の結緣を專にせしかば、貴賤踵をつぎて父のごとくに敬ひ、男女歩を運て子の如くに來る、誠に門前盛なる市のごとし、蓋わが朝の蓮社は、當寺よりはじまれる者乎、抑此地の開基本岩上人は、東塔ひんがし谷十方院の住侶たりしかど、世をのがれて黑衣となり、こゝに住しそめられしよりこのかた三千の大衆、螢をあつめ雪に映せし輩、或は公請を遁れ、或は他導に赴くとて、きそひ集りぬる故に、當院代々の住持職たる人、みな碩學にあらずといふことなし、この故に當寺は比叡隱遁の地、三院別業の砌なり、中比明導上人、（諱は照源、六條內大臣有房公六男、始於山上者、稱大僧都房雲、）後醍醐天皇世に超て尊重したまふ餘りに、忝く袞龍の御衣を以て、傳敎大師の衣を縫うつして著せしめ給ふ、それよりして宗門の衣を改かへて、門徒一同に是を著す、當寺の眉目、何事か是にしかむ、彼叡山は靈地すぐれたれども、結界に隔られて、女人の結緣闕ぬれば、利益すくなきに似たり、當寺は聚洛の塵にまじはりて、市中の隱なれば、巨益尤ひろし、誠に此地は洛中の叡山、日本の虎溪なり、誰かこれを歸敬せざらん、況や四宗（眞言、戒法、天台、淨土、）兼學のすぐれたるのみにあらず、旦暮の勤行、勇猛精進にして倦をこたることなし、就中長日の藥師供は、天下國家の祈願たり、本尊は傳敎大師の御作、無雙の靈佛なりしを、根本中堂炎上の後、山上にうつし奉れりき、今の中堂の本尊是也、これ當寺の名望にあらずや、その後不測に御作の藥師如來一軀を感得して安置せしむ、併分身の瑞を現ずるならし、然るに彼堂は、自然居士手づか

ら良材を採て、ひだゝくみ、うつ墨繩をひきよせて、たゞ一すぢにつくりたてし伽藍なれば、佛閣多といへども、此一宇を靈場の眼目と防護せしに、去七月九日の夜、東北の民屋に災あり、深更に及びしかば、餘焔きそひ來れども、救ふに人なし、呼嗟惜る刹那の灰塵と成て須臾に雲煙とのぼりぬ、應仁よりこのかた今に至るまで、兵塵を避て梵閣の全ことを得しかども、嵐のまへには花ひるがへり、霜のそこには梁かたむけることをうれへしに、剰へ隣火の災に罹れる事、一寺の破滅時至れるにやと、大衆各怯弱の心を生ずといへども、祇園精舍數度の回祿も結緣のためといへり、當寺再興の企も、さだめて末世利益の方便なるべしとおもひおこして、無緣の境界をすゝむ、是万民の悦び諸人の幸也、仰願くは、此に少の財施をもはぢず、微細の懇念をも憚からず、道俗男女一同に志をはこばゞ、小僧力すくなしといふとも、微塵あつまりて山となり、一滴つもりて海となるがごとく、不日に造營の功を終しめむ、然則藥王菩薩の加護をかうぶりては、除病延命福力圓滿の願望を達し、彌陀如來の引攝にあづかりては、滅罪生善、決定往生の素懷を遂て、二世安樂の榮花にほこらんこと疑なかるべし、仍て勸進沙門、となふるところかくのごとし、敬白、

永祿十二年九月　日　　勸進沙門敬白

西園寺

西園寺ハ西園寺ノ家祖、藤原公經ノ創建ニ係リ、元ト京都北山ニ在リシヲ、後ニ京極通ニ移セリ、宗派ハ淨土宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會　七十二末　山城〕西園寺　在寺町筋達橋長福寺北

西園寺公經公草創、初在大德寺西北、號常住心院、鹿苑院義滿公、請其地營金閣寺、因移于此、後改名、

創建

西園寺、公經公由遺命、惠心僧都所作地藏、以爲公之塔像祭之、而後西園寺家累代葬於當寺、

〔山城名勝志七葛野郡〕西園寺拾芥抄云、衣笠岡邑、太政大臣公經家、號北山殿、

土人云、西園寺地、今鹿苑寺也、寺今遷京極小山口、本尊彌陀、井地藏像等在于今、西園寺殿第、大北山村北、鹿苑寺東、築地跡在于今、

〔山州名跡志二十洛陽寺院〕寶樹山西園寺　在京極通上御靈北、

宗旨淨土　屬知恩院　門西向　堂同　本尊阿彌陀佛坐像、七尺許、　作惠心

地藏堂在門内北東向、地藏菩薩坐像、六尺許、作惠心、

當寺始在北山、西園寺公經公ノ建立所經營、寛美ノ體載增鏡、云ク、本尊如來本堂ハ西園寺、功德院ハ地藏ト云云、今ノ本尊是ナリ、此寺元弘建武ニ至テ衰エタリ、後光嚴院御宇文和三年、移京師室町頭、天正十八年移此地、　開基、覺勝上人、今宗祖不詳、今尙西園寺殿檀越ナリ、

〔百練抄十三後堀河〕元仁元年十二月二日、前太政大臣藤原公經供養北山堂、號西園寺、北白川院○後堀河母藤原陳子安嘉門院○後堀河准母有子臨幸、右府○藤原公繼已下諸卿群參、仁和寺宮爲導師、

〔增鏡五内野の雪〕いま后の御父は、さきにも聞えつる右大臣實氏のおとゞ、その父殿公經のおほきおとど、そのかみ夢見給へることありて、源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし北山のほとりに、世にしらずゆゝしき御堂をたてゝ、名をば西園寺といふめり、この所は伯三位すけながの領なりしを、おはりの國松えだといふ庄にかへ給ひてけり、もとは田はたけなどおほくて、ひたぶるにゐ中めきたりしを、さらにうちかへしくづして、えむなるそのにつくりなし、山のたゝずまゐ木ぶかく、池の心ゆたかにわたつ海をたゝへ、峯よりおつるたきのひゞきも、げに涙もよほしぬべく、心ばせふかき所のさまなり、本堂は西園寺、ほんぞむの如來、まことに妙なる御すがた、生身もかくやといつくしうあらはされ給へり、又せんみやく院は藥師、功德藏院は地藏ぼさつにておはす、池のほとりにめうおんだう、瀧のもとには不動尊、この不動は津の國より生身明王みのか

さうちたてまつりて、さしあゆみておはしたりき、其みのかさは寶藏にこめて、卅三年に一度いださるとぞうけたまはる、石ばしのうへには、五大堂成就心院といふは、愛染王のさまさぬひほうとかをこなはせらる、供僧も紅梅の衣、けさ、ずゞのいとまでおなじ色にぞ侍るめる、又ほす院、けす院、無量光院とかやとて、來迎のけしき、彌陀如來廿五のぼさつこくうにげんじ給へる御すがたも侍るめり、北のしんでんにぞおとゞはすみ給ふ、めぐれる山のときは、木どもいとふりにるに、なつかしきほどのわか木のさくらなどうへわたすとて、おとゞうそぶき給ひける、

山ざくらみねにもおにもうへをかむ見ぬ世の春を人〻しのぶと、かの法成寺をのみこそ、いみじきためしに世繼もいひためれど、これはなを山のけしきさへおもしろく、都はなれて眺望そひたれば、いはんかたなくめでたし、

〔相國寺塔供養記〕光明峯寺の入道殿〇藤原道家、中略、聖一國師と力をあはせて、東福寺を建立せられし、いかめしき事にこそ、其比又一條のおほきおとゞ公經公世のおぼえも時めきておはせしかば、北山の山庄を結構して、まづ西園寺といふ御堂をぞ立られける、額をば光明峯寺殿かゝせ給ふ、供養の願文は爲長卿草せられけるとかや、此外あまたの堂どもをつくりならべらる、無量光院、功德藏院、成就院、妙音堂、法水院、池水院などゝぞきこえし、瀧の本の不動は、生身の明王にてましますと申傳たり、山櫻峯にも尾にもと、彼のおとゞの口ずさみ給ひし歌は、新勅撰集にぞ見及侍りし、されば代々の御幸行幸もつねにはこの所へとてこそ成侍りしか、近比は家門の力もおとろへ行給ふにや、はか〴〵しき修理をだにもせられねば、あそこゝやぶれて、さしもみがきみがゝれし所ともみえず侍りしにぞ、かゝる御所になされて、むかしにも立まさりて、玉をしき金をのべてつくりとゝのへさせ給ふ、舍利殿などは、まめやかにまばゆきまでに侍るとぞうけ給る、いまだよくもおがみまいらせねば、くはしき事はしり侍らず、かやうに御心をとゞめて御さたなか

雜載

らましかば、西園寺もたゞ名計こそあらむずらめとおぼえたり、これもよろづをすて給はぬ御めぐみのあまりにこそ、抑もこその四月にて有しやらん、

〔園太暦〕弘安四年六月二日、今日、東二條院、〇後深草妃藤原公子為故入道相國〇藤原實氏公子父十三年遠忌、北山第被行御佛事、〇中略以法水院為道場、

〔中務内侍日記〕こうあん八年七月五日、北山殿に行けいなる、〇中略十九日は、めうをんだうの御幸なり、

〔太平記三十七〕持明院新帝〇後光嚴自江州還幸事附相州渡四國事

康安元年十二月廿七日ニ、宰相中將殿〇足利義詮早馬ヲ立テ、洛中ノ凶徒等、事故ナク追落シ候ヌ、急ギ還幸ナルベキ由ヲ申サレタリケレバ、君ヲ始メ奉テ供奉ノ月卿雲客奴婢僕從ニ至ルマデ、〇中略三月二〇康安二年十三日ニ西園寺ノ舊宅ヘ還幸ナル、是ハ后妃遊宴ノ砌、先皇臨幸ノ地ナレバ、樓閣玉ヲ鏤メテ、客殿雲ニ聳タリ、丹青ヲ盡セル妙音堂、瑠璃ヲ展タル法水院、年々ニ皆荒ハテヽ、見シニモアラズ成ヌレバ、雨ヲ疑フ岩下ノ松風、糸ヲ亂セル門前ノ柳、五柳先生ガ舊跡、七松居士ガ幽栖モ、角ヤト覺テ物サビタリ、爰ニテ今年ノ春ヲ送ラセ給ニ、兎角シテ諸寮ノ修理如形出來レバ、四月十九日ニ本ノ里内裏ヘ還幸ナル、

興聖寺

名稱 所在 宗派

興聖寺ハ、京都寺ノ内通ノ北天神辻子ニ在リ、僧虚應ノ開基ニシテ、宗旨ハ禪宗ヲ主トシ、台密ヲ兼學ス、

〔雍州府志四寺院〕興聖寺　在天神辻子、山號圓通、慶長年中、虚應禪師開基之、專唱禪宗之旨、兼學台密、

名稱所在　創建沿革　寺領

近世今出川藤經季卿、飛鳥井雅宣卿奏、朝爲勅願所、

〔山城名勝志洛陽五〕興聖寺在寺內通北天神辻子

圓通山興聖禪寺、鐘銘曰、山城洛北圓通山興聖寺者、立台密禪之三宗、佛法興隆之地也云云、開山虚應禪師者、禪敎密兼全備矣、東關上野世良田長樂寺久居住、而榮長派下有印證、

曇華院

曇華院ハ、京都三條ノ北、東洞院ノ東ニ在リ、宗派ハ禪宗ニシテ、尼寺五山ノ一タリ、

〔山城名勝志洛陽四〕曇華院號瑞雲山通玄寺、在三條北、東洞院東、尼寺五山一也、蔭凉錄云、通玄尼寺曇華庵開基、智泉禪師、開基智泉者、四辻宮松岩寺左府善成公息女也、宮院代々戒師、天龍寺松岩寺也、壙墓之地、在大德寺昌林院、

〔雍州府志寺院四〕曇華院　在三條東洞院、始近衛院之太皇太后宮院崩後、移于近衛河原御所、稱前后宮、又謂大宮、大炊御門右大臣公能公之女、而德大寺實定卿之妹也、實定卿八月十五夜、爲賞舊都之月、自攝州福原來斯大宮、待宵小侍從在斯宮、以歌答物加波藏人之事、具在于平家物語、而世人之所偏識也、至近世有髮女子一人置之、表待宵小侍從、小侍從八幡山之社司西竹之女也、前后薨後爲禪刹、號通玄寺、開祖智泉尼、而尼寺五山之隨一也、有寺產五百石、爾後、皇姬多爲尼住之、代々天龍寺松岩寺僧爲戒師、遷化日葬大德寺昌林院、今通玄寺絕、其內一塔頭曇華院殘、近世移斯處、

〔蔭凉軒日錄〕長祿三年二月十八日、通玄寺內曇華院領北庄、雖爲御今上郎之闕所、曇華院爲本領之由被仰出、被返付之由、以齋藤民部丞被仰出、卽於曇華院奉報之、爲愚老所伺故、今晨被仰出也、

〔曇華院文書〕曇花院殿様御袋被召置候當所夫錢、爲月充納所之處、寄緈於左右令難澁之由曲事候、如前々速可進納申候、不然者可加成敗之狀如件、

卯月十三日（〇永祿十二年）　信長

初岡灰方　公文

〔曇華院文書〕城州大住庄之儀、一色式部少輔相構付而被遂御糺明之處、當院雜掌被申分明鏡之條、如前々森林跡幷南東跡職等之事、御家來之上者、爲守護不入之知一圓可有御直務、不可有他之妨者也、仍狀如件、

永祿十參三月廿二日　信長

曇花院殿雜掌御中

寺領

〔寛永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領六百八十四石餘　東洞院三條上ル竹御所　御里坊蛤御門内東側

曇華院（御宗旨禪）　御無住　御家司　桂城丹波守　同　筑後守　御用人　上原中務　樋口主水　清水正藏

雜載

〔山城名勝志洛陽四〕曇華院（〇中略）延德元年四月、將軍義尙薨、依無繼嗣、義政公召義視、於是相伴子息義材、從濃州上洛、而通玄寺方丈居、當院鐘有三銘、一延福寺銘曰、攝津國福原庄兵庫經島有寺、名延福寺云云、于時延文丙申初冬下旬五日、一妙覺寺銘曰、平安城高辻大宮法華堂、名妙覺寺云云、于時應永第八曆辛巳閏正月日、一金龍寺銘曰、長享二年戊申季春廿日、從一位富子寄之、金龍寺、

〔宣胤卿記〕長享三年（〇延德元年）四月十四日壬寅、今日今出川前大納言殿、（義視）同御息左馬頭殿、（義材廿四歲云云）早旦御上洛、御在所先通玄寺云々、彼寺御息女禪尼御座之所也、

慈受院

慈受院ハ、高倉通中御門北ニ在リ、禪宗ニ屬セル尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一ナリ、

名所〔山州名跡志洛陽寺院二十一〕慈受院　在高倉通中御門北、宗旨禪　住主尼公　開祖不考

〔山城名勝志洛陽二〕慈受院四園寺殿西南

等持院記云、慈受院殿、日野從一位榮子、勝定院殿御臺、長得院殿御母、法名淨賢號竹庭、日野重光相國息女

寺領〔寬永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領九十八石餘外現米五十石

宗旨御禪 慈受院　御無住

曇華院御室御兼帶　　御家司

新鳥丸通、丸太町ヨリ二町上

大聖寺　大歡喜寺 併入

大聖寺ハ、京都室町東上立賣南ニ在リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一ナリ、

大歡喜寺ハ、京都京極今出川ノ北ニ在リ、元ト此寺ノ住持、代々大聖寺住尼ノ戒師タリシガ、後、大聖寺ノ抱寺トナル、

名所〔和漢三才圖會山城七十二末〕大聖寺　在室町東上立賣、寺領二百五十石　後花園院姬宮　比丘尼寺

御在北山長谷

〔山城名勝志洛陽二〕大聖寺今按、在禁門內中筋、近年又遷室町東上立賣南、舊地在北山長谷、

親長卿記云、大聖寺御比丘尼御所、後花園院御子、○中略普明國師語錄曰、永德二年七月十九日、大聖寺殿從一品無相圓公大禪尼就于大聖寺、設壹七日之齋會、○中略竹林院實遠公記云、文明十一年八月廿八日、大聖寺

寺領　寺職

今日移徙、元慶雲院實得云々

〔嘉永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領四百五十二石　烏丸通上立賣下ル　御寺御所

御宗旨禪 大聖寺　御無住　御家司　津田筑前介　古谷宮内〇中略

比丘尼院家衆

大聖寺宮寺家二軒

慈雲院　寺領六石　攝取院　寺領六石

同御抱寺二ケ寺

大歡喜寺　寺町通筋違橋　寺領四十一石餘　蓮花清淨院　嵯峨村今林　寺領七十五石

〔大聖寺文書〕備前國輕部庄下村內大聖寺殿御知行分事、任御奉書之旨可被渡付寺家御代官候也、仍之狀如件、

長祿貳年五月十三日　敎之花押

小鴨安藝守殿

參詣

〔薩戒記〕永享二年二月廿八日己亥、詣北山大聖寺、依上皇姬宮御比丘尼兵部卿今入院給、

〔親長卿記〕文明四年正月十日、參賀長谷大聖寺殿、

〇

大歡喜寺

〔雍州府志四寺院〕大歡喜寺　始在千本南頰北、今所稱之舊歡喜寺町、夢嵩之派、而佛光之法孫、金潭之開基也、又大聖歡喜寺弘法大師之開基、而爾後江西和尙再興之爲禪刹、又爲眞言宗、今寺絕、大聖歡喜天堂一宇殘、大歡喜寺屬天龍禪寺、有寺產三十石、住僧代爲大聖寺住尼之戒師、然此歡喜寺一旦無住職時、自大聖寺置留守之老尼、自茲後直爲尼寺、〇中略

〔國花萬葉記山城二上〕大歡喜寺京極ノ北、西園寺ノ南ニ在、寺領卅石

元は千本の南に有、今其所を千本五辻の町にて、舊歡喜寺の町と云へり、藤原の定家の舊跡にして、時雨亭有、定家の塔有、般舟院にちかくして、其南の辻子を定家の辻子と云、此寺夢窓の派にして、佛光の法孫金鉀の開基なり、天龍寺に屬して、住職代々大聖寺住尼の戒師なり、此寺一旦住職なき時、大聖寺より留主の老尼を置る、是より一向尼寺也、

式子內親王塔但シ定家卿ノ塔ハ、般舟院ニ在

〔山城名勝志洛陽二〕大歡喜寺京極今出川北、幼居山人類筆云、夢窓千本南頰云々、今舊趾ハ今ノ般舟院之地也、

〔義堂和尙語錄三〕大歡喜寺開山廣照禪師忌、此香在人中、爲五戒本、在天上、爲十善根、(中略)恭惟開山勅謚廣照禪師金源大和尙、道重北山、名高南斗、分半座於龍峯、則茶瓢跳地、拈一華於鷲嶺、則雪谷回春、聯嵩山五葉之芳、續圓照六世之燄、(下略)

〔大聖寺文書〕袖判

大歡喜寺內智光院領地目錄之事

一所　口貳丈六尺、奧十丈、近衞油小路北頰　性了寄進狀在之

一所　口參丈、奧十丈、同處　同人寄進狀在之

一所　口捌丈五尺、奧十三丈五尺、同法華堂敷地　了範寄進

一所　口肆丈八尺、奧七丈八尺、近衞油小路南西頰酒屋敷地　同人寄進

一所　口四丈、奧十丈二尺、近衞西洞院與油小路中程、了範賀島方へ讓狀ニ寄進旨在之、

右彼屋地、雖爲代々相傳家領、依有子細古見方へ分使處實也、然古見了範入道當院仁奉寄進訖、爲末代自本家一筆令進候、於後々不可有他違亂者也、仍爲後證目錄狀如件、

永享元年三月　日、

〔嘉永七年〕雲上明覽大全〔上〕比丘尼院家衆

同〇大聖寺御抱寺二ヶ寺

大歡喜寺　〔寺町通、筋違橋、〕〔寺領四十一石餘、〕

光照院

光照院ハ、京都安樂小路上立賣ノ北西ニ在リ、四宗兼學ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一タリ、

草聽書〔光照院開山自本覺公闡繡之右語〕云、自本覺公〔後伏見院公主也〕從無人和尙祝髮懷衣、謁大笑宗師受具納體、〔無人師者、北野觀音寺第一祖、大笑師者、泉涌寺住第十六世、〕

〔山城名勝志二洛陽〕光照院〔在安樂小路、尼寺、上立賣北、新町西、應仁記云、一條室町ヨリ上ハ光照院殿迄、尺寸地不餘云云、〕

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕光照院　在安樂小路上立賣北西方　宗旨禪　門東向　寺南向　院主尼公〔家公息女〕　開祖、本覺禪尼、後伏見院皇女、師無人和尙剃髮得度、就大笑宗師受具納體云云、當院始在室町一條上、〔出應仁記〕回祿後及再興此地ニ立ル、此地法跡ニシテ、持明院通基卿改第宅所造安樂光院地也、〔此院始末、已記前卷、〕始此第ニ高倉院皇子守貞親王居住アリ、其故ハ親王ノ室ハ通基男基家卿女也、以居在義稱于世、號持明院宮、然承久三年秋、北條義時爲評、守貞御子仰茂仁公奉即位、後堀河院是也、母陳子〔通基孫女〕後號北白河院、以當第爲仙洞、〔記〕

〔和漢三才圖會七十二末山城〕光照院　在安樂小路　寺領四百五十八石　尼寺、開山自本覺公者、後伏見帝公主也、從無人和尙〔小野觀音寺第一祖〕薙髮謁大笑宗師〔泉涌寺十六世〕受戒、

〔嘉永七年〕雲上明覽大全〔上〕御比丘尼御所

名稱所在	寺領寺職
安樂小路　常磐御所	御領三百二十八石

光照院　御無住　御宗旨四宗兼學　御家司　岡本中務

名勝所在

三時知恩寺

三時知恩寺ハ、京都新町通上立賣ノ南ニ在リ、其地入江辻子ト稱ス、故ニ又入江殿ト號ス、淨土宗ニ屬スル尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一タリ、

〔雍州府志四寺院〕三時知恩寺　在入江辻子、故稱入江殿、代々攝家之息女多爲住尼、淨土宗門而清淨華院之派也、近世屬知恩院、

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕三時知恩寺　在新町通上立賣南、所地號入江辻子、此故稱寺號入江殿、寺門西面　宗旨淨土　院主尼公官家息女　三時冠號、及開祖未考、

雪玉集　過にし春、三時知恩寺の前住、百歳に六とせをのこしてかくれおはしまし、花開院にはうぶりしと聞えしに、

詠むべきかたみの雲もなき跡の露を悲しむ苔の下道　實隆

〔山城名勝志二洛陽〕入江殿號三時知恩院、在上立賣南、室町西、

〔親長卿記〕文明五年六月廿四日、於三時知恩院入江殿有御經供養、武家御願也、

〔三時知恩寺文書〕入江殿由らい之事

御代々姫宮方、親王方、姫宮方、せつ家姫君方、御宗旨四宗兼學、

一入江內親王　後光嚴院皇女見子女王

順德帝御代俊芿上人、宋朝より將來之善導大師御自作の尊像、土御門、順德、後堀川三帝江御戒

師の砌、右之尊像を被獻、宮中ニ御安置あらせられしに、夜々光明を放ち、靈顯伊ちじるし、其後年月おへて、入江内親王、此尊像を深く御信心ましく〱、乞受て伏見之里入江ちよ處に、假の庵を結び給いて、朝夕の御看經等あそばされたてまつりしとなん、

一覺窓性山大禪師　禪宗

鹿園院義滿公之息女、入江殿[江]御入、應永廿二未年二月朔日薨去、其後室町殿御姬入室之處、大じよ院に轉住せらる、

一三時知恩院了山大菩薩戒尼　四宗兼學

稱光天皇第一皇女、應永卅一年四月御入室、九才、永正六年六月十一日薨去、御年九十四才、小川御所東、崇光院之古御所を御室となし給ふ、是を入江之御所と唱ふ、　御廟華開院

一松山椿性大菩薩戒尼　四宗兼學

後土御門院皇女、文明十二年御入室、永祿元子年八月三十日薨去、御歲九十九才、　御廟華開院

寺領　寺職

〔嘉永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領百四十九石　新町上入江殿辻子　入江御所

三時知恩寺　御宗旨淨土　御無住　御家司　森島遠酒

〔三時知恩寺文書〕御境内東室町面西頰敷地事、進士美作守爲舊跡旨、歎申之間、雖被成御下知云々、數通證文云々、差圖、旁以炳焉之上者被返進訖、所々撿斷等之儀、如先々有御成敗、可令全領知給之由、所被仰下也、仍執達如件、

天文廿二年八月廿日　　散位花押（松田丹後守藤弘）
　　　　　　　　　　大和守花押（○飯尾元行）
入江殿雜掌

名勝所在　寺院

寶慈寺

寶慈寺ハ、京都上立賣ノ北、新町ノ西、木下町ニ在リ、元ト景愛寺ノ一塔頭ナリキ、禪宗ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一タリ、

〔雍州府志四寺院〕寶慈寺　在木下、前所謂景愛尼寺之一塔頭也、景愛寺絶、而寶慈一院存矣、景愛寺無學祖元爲開基、祖元像、并法嗣如大無著尼兩像、于今在寶慈寺、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕寶慈院　在上立賣通新町　寺領六十一石餘　尼寺今寶鏡寺末寺

〔山州名跡志二十一洛陽寺院〕寶慈院　在木下南二町東方　宗旨禪　門西向　院主尼公公家息女、從中比日野家支配也、　佛殿南向　本尊阿彌陀佛坐像、一丈餘、一作春日　脇壇左佛光國師像右無外和尚共坐像、安于厨子、

開基　無外和尚法尼佛光國師弟子也、云于世千代野姫也、城陸奥守女　當院始所開景愛寺境地、其一院也、應仁兵火炎上、後世造當院、遷本尊并祖影、今所安佛前三牌、佛光國師筆跡也、近世都下俗准四十八願、巡禮四十八所阿彌陀佛靈場、當院其一員也、

〔山城名勝志二洛陽〕寶慈院　今按、上立賣北、新町西在木下町、景愛寺一院云々、彌陀大像并佛光國師、如大禪師兩像等存于今、俗呼千代野寺、

〔寛永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

　御寺領六十一石餘　　上京木下町

御宗旨禪
寶慈院　美壽姫　十三

雜載　名稱所在

御家司　藤木左衞門

〔親長卿記〕文明三年二月九日、今日自寶慈院妙花院被進、漸寫妙經、卒都婆經、

日野故資愛公御養女
實外山故光親卿女

瑞龍寺

瑞龍寺ハ、京都村雲ニ在リ、日蓮宗ノ尼寺ニシテ、世ニ村雲御所ト稱ス、比丘尼御所ノ一ナリ、

〔雍州府志四寺院〕瑞龍寺　在村雲、關白秀次公有事後、母公瑞龍寺爲尼、創此寺、修秀次公之追薦、世稱村雲御所、寺產附五百石、一說足利直義公於京師村雲創大休寺、爲菩提所、遂自稱大休寺云云、于時夢窻國師之法謫、有妙喆侍者、則直義公之歸依僧也、請斯僧爲大休寺之開祖、此僧後爲相州鎌倉淨智寺之住職、號大同妙喆和尙、直義公於鎌倉亦建大休寺、京師大休寺則今瑞龍寺之地、而世稱村雲妙吉者、妙喆之誤也、太平記所載、亦誤妙喆、且爲天狗星之所化、是又虛誕之說也、按斯義足取之者乎、

〔山城名勝志二洛陽〕村雲寺ムラクモノ號大休寺、源直義朝臣建立也、

園太曆云、延文三年二月十二日、故入道左兵衞督贈從三位源朝臣直義卿、號大休寺、

鎌倉大草紙云、京村雲大休寺開基妙喆侍者、夢窻國師法眷、源直義歸依僧也、關東下向、淨智寺住、大同妙喆和尙ト號、

太平記今川家本云、妙吉侍者ヲ召取ントテ、人ヲ遣サレケレバ、早逐電シテ行方ヲ不知、乍去坊內ヲ捜スベシトテ、戾橋村雲寺ヲ捜スト云云、

〔應仁記二〕一條大宮猪熊合戰之事

寄手備中守ガ館落ケレバ、勝ニ乘リ、讃岐守ガ館ヘ押寄ケル、○中略寄手ハ雲ノ寺ニ火ヲカケテ、

寺職

村雲ニ押渡テ、百万返革堂燒立責ケル、此雲ノ寺ハ、一丈六尺盧舍那佛多寶ノ塔庫裏方丈、〇中略一片ニ燒亡テ、佛像經卷忽ニ一時ノ烟ト成テ立登リ、〇下略

〔寛永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所　西堀川本誓願寺上　村雲御所

御領五百石

御宗旨日蓮 瑞龍寺　日尊　四十八

九條故輔嗣御猶子
實伏見貞敦親王御子

御家司　辻民部

總持院

名稱所在

總持院ハ、京都寺ノ内通ニ在リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一ナリ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕總持院　在瑞華院之北淨土　寺領七十石　尼寺　開基未詳

〔雍州府志四寺院〕總持寺　在瑞華院北、爲同宗門、〇淨土專念宗是亦代々官家之息女爲尼而住之、

〔山城名勝志二洛陽〕總持院在瑞華院北、淨土宗尼寺、

齋藤親基日記云、文正元年四月廿二日、總持院殿被修理、

寺職

〔寛永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所　寺之内天神圖子東へ入

御領七十四石餘

御宗旨禪 總持院　御無住　御家司　中川宮内

〔全國各宗本山明細帳〕禪臨濟宗　大本山本寺

名稱	所在	創建	寺領

總持院　京都府管下上京寺之内

景愛寺

景愛寺ハ、京都松木島ニ在リ、如大尼ノ開基ニシテ、禪宗ニ屬シ、尼寺五山ノ一タリ、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕景愛寺　在洛北、尼寺之五山
開基　如大禪師一名無外、又名無著、城奥州禪門之女也、幼仕掖庭、既笄配金澤越州守而生一女、長而爲足利讃岐守淨妙寺貞氏之夫人、建一字於洛北是也、

〔山城名勝志洛陽二〕景愛寺雍仁記云、五辻景愛寺、
景愛尼寺、開基如大禪師小傳云、師號如大、別稱無外、後又呼無著、乳名千代野、城奥州禪門女也、幼而仕掖庭、既笄配金澤越州守而誕一生、後號釋迦堂殿、長而爲足利讃岐守淨妙寺貞氏之夫人云々、植相民部大輔、二階堂山城守及諸檀越、巨施淨財、昇建一字於洛北松木島、名之景愛寺、是佛光國師所命、諸官奏朝、昇位于尼寺五山之甲、

〔空華日工集〕永德二年三月七日、僧錄話、及景愛寺住持事、府君○足利義滿問景愛二字、余曰、嘗見佛光祖師與景愛如大尼長老書曰、人誤以景愛爲愛憐風景之義、大不然、蓋佛姨母出家號大愛道、故云、今尼寺名以景愛、景卽景山仰止、景行口止之景、今之世爲比丘尼者、宜景仰大愛道之義也、

〔山城名勝志洛陽二〕寶慈院○註略
古文書云、けいあい寺りやう、いしはらの御地し、合三百文うけ取申候、　ほうし院ぶきやう　大ゑい四年十二月廿五日、けしどのへ、

〔寶鏡寺文書 二〕法衣相承次第 不ㇾ付二景愛寺長老一事

◎佛光禪師―第一景愛開山如大和尙―第二無忍 道號月庭、景愛第二長老、―同第三長老 第三如空
同第四長老 第四孤峯惠秀―同第五長老 第五東峯惠日―同第六長老 徹嗣 不二相承一
同第七長老 無般 不二相承一
同第八長老 第六華林惠嚴―理秀 普明第十、 摠淸院 不二相承一、
同第十長老 理遠 李光院 不二相承一
同第十一長老 理高 深恩院 不二相承一
同第十二長老 理秀 淸居院 不二相承一
同第十三長老 第七鏡室惠照 建聖院 自二書記之時一、相二承法衣一、御影世出世重書附法、
景愛首座 第八徹堂惠通 建聖院 此後景愛長數人、于ㇾ玆不ㇾ可ㇾ考、成不二相承一也、
同首座 第九慈後 建聖院
同書記 第十慈照 建聖院

〔寶鏡寺文書 四〕五辻大宮北西頰、東林水落、南北玖丈餘、同西北頰、千臨寺光明寺事跡、東西拾七丈餘、指圖在二別紙一、敷地事、爲二塔頭所一、可ㇾ令二知行一給上之狀如ㇾ件、

應永七年十一月十日　　花押 〇足利義滿

景愛寺長老 惠照〇

惠照東堂ノ景愛寺ニ住ノ時分ニ、塔頭ノ敷地ヲ景愛寺ノ東隣ニ被ㇾ下御判候、自二景愛寺一ノ割分ニ非ズ候、

護念寺

護念寺ハ、京都五辻ノ南、朱雀ノ西ニ在リ、尼寺五山ノ一タリ、

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕護念寺 在二五辻之南一 尼寺之五山 如今爲二淨土宗一、非二尼寺一、

〔山城名勝志 二 洛陽〕護念寺 今按、五辻南、朱雀西、有二護念寺一、然當時淨土宗而非二尼寺一、是當寺歟、

雜載

園太暦云、貞和二能登守藤原利顯護念寺遣營

〔七十一番歌合〕六十七番　左　びくに

いつゝじやごねん寺かけて見わたせば京白川にすめる月影

名稱
所在

古事類苑

宗教部四十五

佛教四十五

泉涌寺

泉涌寺ハ、京都東山ノ最南ニ在リ、藤原緒嗣ノ草創ニシテ、當時法輪寺ト稱セシト云フ、其後仙遊寺ト稱セシガ、後堀河天皇ノ朝、俊芿之ヲ再興シテ今ノ名ニ改メ、台、密、禪、律、四宗兼學ノ道場ト爲ス、四條天皇ノ崩ジ給フヤ、山陵ヲ寺後ニ築キ、多ク寺領ヲ附セラル、是ヨリ寺運漸ク旺盛ニシテ、遂ニ朝廷ノ菩提所ト爲リ、後陽成天皇以後ハ、歷代ノ天皇ヲ始メ、后妃皇子皇女ニ至ルマデ、皆茲ニ葬リ奉ルノ制ナリキ、

〔拾芥抄 下末諸寺〕仙遊寺 今泉涌寺、觀音寺南、

〔書言字考節用集 二乾坤〕泉涌寺 センユジ 城州愛宕郡東山、齊衡三年左大臣緒嗣建立、初名法輪、後號仙遊、俊芿又改泉涌、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕泉涌寺 在大佛東南 兼學 寺領六百八十一石

文德帝齊衡三年左大臣緒嗣建立、建保六年大和守中原信房延俊芿爲住持、初名法輪寺、後改仙遊、有清水涌出、又改泉涌、禪、律、眞言、淨土、四宗兼學、

〔雍州府志 四寺院〕泉涌寺 號東山、始稱仙遊寺、一旦清泉湧出、依之改號泉涌寺、大和守中原信房請俊芿爲開祖、禪、律、眞言、淨土、四宗兼學之地也、俊芿入唐歸朝日、所將來之經疏、佛具、書畫等有若干、今所存者、思恭幷禪月所畫十八羅漢之圖特絕品也、第二世湛海入唐、歸朝時、所携來之牙舍利、今在舍利殿、四條院始奉葬此山、其後自後圓融院至後水尾院、有代々陵、寺產有千石也、

創建沿革

〔山城名勝志十五愛宕郡〕泉涌寺〇中略（或云、當山左大臣緒嗣〇以下略、〇大山略、〇日本略、爲神修上人建立、號法輪寺、其後行天台、爲仙遊寺、又中興俊芿、〇禁〇學台、密〇禪、律〇四宗、改泉涌寺、所謂依清泉涌現也、）

〔元亨釋書十三明戒〕釋俊芿、字不可棄、肥之後州飽田郡人、〇中略嘉祿元年十月、於泉涌寺建重閣講堂、明年之春、華構落成、卽結安居、并啓講席、二儀皆式宋土法則、軌則肅如也、台律二宗、指泉涌爲中興、

堂塔

〔雪月花三〕一泉涌寺諸堂

御拜堂　海會堂　向拜　佛殿　舍利堂　寶庫　觀音堂　釋迦堂　阿彌陀堂　開山堂　庫裏

西鐘樓　引御殿　衣食堂　小方丈　西廊下　輪番所　玄關庫裏　御陵ノ唐門　引御殿

西唐門　泉涌水屋形臺所門　南總門　北總門　西總門　黑門

此外、鎭守社、拜殿、鳥居、所々門、番所、番僧部屋、茶之間、所々廊下、土藏、舂屋、塀等、

右諸伽藍、元祿才四巳年十二月より、同十六年未三月迄、御修理入用銀高三百四十三貫五百七十五匁六分五厘、外ニ米、六十七石一斗四升、

奉行　石川藤右門

岡田平右門

〔山州名跡志三愛宕郡〕東山泉涌寺　在新熊野卯辰三町餘　順路在伏見街道一橋北、境地西面東北有山、宗旨兼四宗、禪、眞言、天台、律、〇中略

總門（向西戌間）　中間（向西）　額　東山（横額）　張卽之筆　佛殿（西向、二重屋根、數五、）　本尊　安三佛（中央）彌勒佛　左釋迦佛　右阿彌陀佛（座像、二尺許、）作運慶　左脇壇梵天王　帝釋天（脇侍子）　掌簿判官　感應使者（共立像、小像、）

右脇壇　安三僧（中央）開山（座像、二尺餘、持拂子、）　左靈芝（リンシ）（同上、持拂子、）　右南山（同上、左手持經、右手持筆、）已上新作、

釋迦堂　在中門內左　堂（南向）　額　妙應（横額）　照高院道晃筆　本尊　釋迦佛（座像、尺許、）　此堂ハ後水尾院御建立、　仙院嘗禪法ニ歸シ玉ヘル故ニ、黃檗山隱元ニ寄セテ、法ヲ問ハセ玉ヒ、舍利及ビ種

種ノ賜物アリ、和尚モ、亦異朝ヨリ所將來佛像ヲ獻ズ、今ノ本尊是也、是ヲ號シテ、云三平釋迦、以三平山檜木所造也、豎元和尚ノ作レル此像ノ賛アリ、○贊略

〔山城名勝志十五愛宕郡〕泉涌寺○中略

觀音堂在本堂西北、寛文五年、東福門院御建立、此像元安置樓門上云々、觀音緣起云、此尊玄宗皇帝創一伽藍安置、勅賜補陀海山圓通寶閣額云々、然經星霜殿宇零落、湛海入宋時、渡本朝云々、玄宗勅額今尚在泉涌寺、

〔京都御役所向大概覺書五〕泉涌寺

一四條院御影堂○中略

右今度、始而被仰付、正德元年卯十月より、同二年辰六月迄御造營、

右御入用、銀六拾貳貫七百拾八匁七分九薰、但大坂御藏銀相渡ル　金仕千四拾五兩壹歩、銀三匁七分九薰、但壹兩付銀六拾目替、外ニ米六拾七石壹斗四升、奉行井横目御扶持方米

松平紀伊守　奉行

石川藤右衛門

岡田平右衛門

〔山城名勝志十五愛宕郡〕泉涌寺○中略

造泉涌寺勸進疏云、今於京輦之東南仙遊今改泉涌之舊基、力穿山腹、塡窕深壑、將搬綿構、建造精舍、然則三門兩廊連棟周接、佛殿法堂重簷中立、僧堂、庫院左右相對、觀堂敎庠、前後分措、鐘樓、經藏、祖堂、方丈、眞言院、羅漢殿、閣等都盧三百餘間、營造浩瀚、草搬巨大云々、

承久元年十月日疏

幹緣比丘都勸緣新入宋學法比丘俊彷

寺格

〔建内記〕正長二年〇永享元年七月五日、黑戶、渡殿、門等、今日悉壞、渡雲龍院云々、今日於路次、謁勸修寺中納言經成卿相語云、經成與親光卿兩人、今度新造御作事可奉行之由被仰下云々、自明後日可被造始云々、遷幸以前可有新造云々、

〔泉涌寺文書二〕泉涌寺再興勸進事、被成綸旨訖、早被存知之、可致奉加之旨、分領中被官人以下被相觸也、幷勸進聖、上下路次無其煩候樣、宜被加下知之由被仰下候也、仍執達如件、

明應三　十月十九日　員通花押

〔泉涌寺文書二〕當寺修造之事、以公儀之奉加、兼都鄙之助緣、宜致再興之經營、專祈一天之安全者、天氣如此、依執達如件、

□行花押

七月十二日　權右少辨守光

泉涌寺衆僧中

〔泉涌寺文書二〕上包 後柏原院綸旨之寫 黑戶御殿

當院修營事、今度被寄黑戶御殿畢、早可被致其造功、殊來六月開山竹巖和尙百年遠忌云々、三朝戒師、一宗之碩德也、尤勵彼追修之懇、戒珊可被□令法久住之精祈者、天氣如此、仍執達如件、

二月〇文龜元年廿八日　右中辨賢房

雲龍院住持上人御房

〔實麗卿記〕弘化二年四月廿日庚戌、今日於泉涌寺、尊像靈位等遷座、幷堂供養、著座公卿、源大納言基、日野中納言隆、右兵衞督基、堂童子公利朝臣、親賀、奉行俊克朝臣等參行云々、

〔薩戒記〕應永卅二年七月十二日己酉、今日相伴伯二位資忠、中御門宰相宗繼等、詣東山泉涌寺、彼寺者律宗也、開山俊芿法師、與建仁寺開山之僧正同時渡唐、同時歸朝、立禪律二宗、以于今不衰、泉涌寺

寺領

者偏爲公家御寺、後光嚴、後圓融兩代御陵在此寺中、又有御影、

〔泉涌寺文書 六〕追加 御わたくしの覺　泉

覺 追加

一當寺ハ、北京律の棟梁の本寺ニて、二尊院ハ、三鈷寺のためにさへ末寺ニ候上ハ、本末の高下又ハ寺院の差別も可有御座かと存候事、

一勅願所多候へ共、當寺ハ他に異なるにより、御代々の御位牌より外ハ立不申候、彼院ハ道俗いかやうなる者の位牌等をもたて置候所と、泉涌寺と同じ樣にハ有間敷義かと存じ候事、

〔泉涌寺文書 一〕前關白家〇藤原忠教政所下　泉涌寺

可早任天德官符以下旨、被優佛陀施入、停止東九條御領沙汰人等濫妨、爲當寺領進退領掌、山城國紀伊郡苦手里參拾參坪田壹町事、

右得當寺解狀、偁、件田者、沙彌蓮性相傳之地、而依有由緖、永所寄附寺院也、爰東九條御領沙汰人等爲御領内之由就掠申、去年被尋下寺家之間、天德年中被成下官符之以來、雖送數百歲星霜、曾無他妨、就中峯殿〇藤原道家御時被經御沙汰、被止押妨之儀、被成下御敎書畢、且件名田全非御領内之條所備進次第證文明鏡之由就言上、忝被聞食披子細畢、凡當寺代々御歸敬異他、當御代剩又以御領内所被寄附也、然者爲被斷絕後代之牢籠、被成下懇懃之政所御下文者、彌欲奉祈殿中御繁榮乎者、早任申請、依天德官符幷峯殿御敎書等之旨、永停止東九條御領沙汰人等之濫妨、可令師跡相續進退領掌之狀、所仰如件、寺家宜承知、敢勿違失、故下、

永仁六年十一月日

案主左衞門尉中原別當勘解由次官藤朝臣花押

大從木工助安倍花押

〔增鏡 四 御神山〕廿五日〇仁治三年正月に、ひがし山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめたてまつる、四條

のゐんと申なるべし、やがてかの寺の御庄などよせていまに御ぼだいをいのり申侍るも、先の世のゆゑありけるにや、この御門いまだ物など、はか〴〵しくのたまはぬほどの、御よはひなりけるとき、誰とかや、さきの世は、いかなる人にてかおはしましけんと、たゞなにとなく聞えたりけるに、かのせんゆうじの開山のひじりの名をぞ、たしかにおほせられたりける、又人の夢にもこの御門かくれさせ給ひてのち、かの上人われすみやかに成佛すべかりしを、よしなき妄念をおこして、いま一ど人界の生をうけて、帝王の位にいたりて、歸てわがてらをたすけんと思ひしに、はたしてかくなんとぞ見えける、まことのその餘執のとほりけるしるしにや、御庄ども、よりけむとぞおぼえ侍る、

〔泉涌寺文書〕五當寺領目錄

一、貳百四拾九石六斗　泉涌寺廻
一貳百四拾四石　横大路
合四百九拾四石
天正拾三年十一月廿一日
泉涌寺

〔泉涌寺文書〕五［權現樣］

知行之目錄
一參百拾七石壹斗五升　當寺廻
一貳百四拾四石　横大路村
一四拾石　丹波國森村
都合六百壹石一斗五升

右全可寺納、井門前境内竹木諸役、如先規令免除訖者、守此旨、佛事勤行修造等、不可懈怠之狀如件、

元和元年七月廿七日　御書判

泉涌寺

什物

〔本朝高僧傳淨律五十八〕京兆泉涌寺沙門湛海傳

釋湛海、字聞陽、不詳氏族、叅通經論、專律部、入俊芿室、首座東山、嘉禎季、南詢宋、歷兩浙遊南湖、謁晦巖照公、受一心三觀之旨、照乃周印之高弟也、淳祐四年、寓寄泰山白蓮教寺、寺有佛牙一枚、護秘琅函、累朝尊護、海乞拜瞻、肅然信生、啓衆僧曰、吾願奉請、俾東方之人獲福修、因非所敢望乎、衆曰是釋迦如來眞身齒牙也、故累朝帝王歸依尊重、官符封衞、不出結界、何望之有、海齎持經論數千卷、茲歲秋歸、常喜佛牙、數歲、再遊留白蓮寺、此時寺衰廢、幹修乏人、海附鄕便、得良材數千、督工施材、門廊殿閣役成、復請長老建公與衆相議曰、營興之功、問以報德焉、請佛牙之請、守倘不聽、今何拒之哉、以情奏朝、函封付之、海歡躍頂受而出、訪下天竺古雲粹公、薰沐敬禮、詳述其來由、製記繫賛曰、氣衝牛斗、豐城劍光、透波心、合浦珠爭似聖人眞舍利、亘微塵劫照香衢、又到上天竺、晦巖然照公、歲已七十一、悅其再會、餞以偈曰、海東國主尊台教、重遣衲來聽法華、歸去香風滿衣裓、講堂日出映朝霞、寶祐三年乙卯、海奉佛牙舍利、駕商船還、乃鎭泉涌寺、每歲九月八日、啓舍利會、至今行之、都人競禮、

〔園太曆〕觀應元年十二月八日、世上事、猶有以外之風聞等、仍參仙洞、冠直衣、先東宮御方〇益仁親王入見參、泉涌寺長老參勤、御受戒事有之、其次當寺靈寶御舍利隨身、上皇〇光明有御拜見、但被滑簾云々女院已下女房等拜見之後、予〇藤原公賢同參、大夫同於評定所奉拔之也、

〔泉涌寺文書三〕上包　泉涌寺方丈　左中辨晴秀

當寺佛牙之事、天下無双靈寶、數百年以來無退轉、殊修正料所等之儀、被致御祈禱精誠之處、去年始

寺職

參詣

而不知行、言語同斷被歎思食候、今度佛牙下國在之、致万民奉加結緣、彼料所等還附之段可致其調之旨、被仰出候、仍執達如件、

二月十日　左中辨晴秀

泉涌寺方丈

〔泉涌寺文書二〕對馬守殿　右中辨重親

泉涌寺舍利殿等造營事、任開山國師古風、諸國勸進之儀、依寺家申請、所被成勅裁也、當國中勵涯分助成、令致嚴密之沙汰者、尤可爲神妙之由、天氣所候也、悉之以狀、

大永三年七月廿日　右中將（花押）

對馬守殿

〔泉涌寺文書六〕泉涌寺、（并）安樂光院、悲田院住持職之事、任先例可令存知給之由、依天氣執達如件、

寬永三年二月廿四日　權左少辨（花押）

玉秀上人御房

〔蔭涼記〕應永卅二年七月十二日己酉、今日相伴伯三位（資忠）中御門（宰相宗繼）等、詣東山泉涌寺、（中略）酉始剋到東門、（於落橋西下車、件橋損破不能渡事也）入總門（額云東山、不知筆者）、遙東行入山門（額云泉涌寺、師之筆也）、經西廊拜法堂、有二層云云、上奉安置楊柳觀音、此觀音自天竺所奉渡之佛也云々、次禮佛殿（此寺佛殿在御堂之後）、次至方丈謁長老、

拜見佛舍利、此舍利、釋尊御葬已前御牙齒也歟、于今令殘給、凡無比類云々、

九月十日丙午、今日上皇（後小松）御幸東山泉涌寺、予（中山定親）可候御留守之由、兼日被仰下、又他人少々奉仰所相催也、仍早旦參入、（去夜爲當番、仍及曉天參候、退出則又參入、）人々群參、御幸奉行万里小路大納言（時房、任大納言後未拜賀）、（中略）上皇經口路入御法堂、公卿殿上人候御共、西園寺中納言持御劒（如常人臣御劒提持之、具去年相國寺之儀）、在御後方云々、次佛殿已下所々歷覽、於二代御廟（後光嚴、後圓融、各有御影）御燒香、御香合雅兼朝臣持之、臨期內大臣取之

子院

傳獻云々、後聞、於法堂令頂戴御舍利、御長老持參之、御舍利拜御時有伽陀井樂云々、委追可尋註、

〔泉涌寺文書 玉〕泉涌寺諸塔頭井門徒衆撿地目錄

一六拾石壹斗參升 常住
一拾四石壹升四合 雲龍院
一九石五斗六升 新善光寺
一拾石九斗五升 藥王寺
一參拾九石四斗貳升五合 法音院
一七石九斗貳升 竹園院
一五拾石五斗六升三合 來迎院
一參拾貳石七斗六升四合 樂音院
一貳拾壹石八升 善能寺
一參拾貳石八斗六升六合 悲田院
一參拾六石七斗七升 長福寺
一六拾石參斗 法安寺
一拾九石 卽成院
一貳拾七石 楊柳寺
一參拾六石六斗六升貳合 長國寺
一九石四斗八升 普門寺
一拾七石八斗五升 壽命院
一七石八斗三升四合 勧持庵

雲龍院

總都合四百九拾四石六斗六升八合

天正拾三乙酉年十二月吉辰

〔國花萬葉記山城二上〕泉涌寺大佛ノ東南、寺領六百八十一石、〇中略

寺中院

戒光寺　寺領百六名、開山曇照入宋の時、丈六の釋迦の像を持來歸朝し、本尊とす、始は九條東洞院移り、以後此寺へ移、

悲田院　寺領五十石、古へ施藥院、悲田院の兩院を置、天下の飢寒病苦之者を救ふ、はじめは洛陽大應寺に有、此仁の後、こゝにうつる、

新善光寺〇中略

永圓寺　開基如導律師、元ハ西ノ京ニ在、

來迎寺　寺領廿八石

觀音寺　行基之草創、文永ニ大圓上人再興、

雲龍院　安樂光院　法安寺　楊柳寺　善能寺　法音院

〔山城名勝志愛宕郡十五〕泉涌寺〇中略

塔頭雲龍院在二泉涌寺中門内東南一、後光嚴院、後圓融院、後小松院御廟在二後山一、毎年自二四月廿日一至二廿九日一修二如法經會一、是則後圓融、後小松兩帝御追薦也、康應元年令三聖皐上人被二始行一之、

云々、

雲龍院開基竹巖皐律師傳云、律師諱聖皐、字竹巖、嘗擇レ地創二建律院一曰二龍華一曰二雲龍一、應永九年六月廿九日化、〇中略

同後小松院勅書

泉涌寺別院龍華、雲龍者、後光嚴、後圓融兩代上皇臨幸、尊崇無雙靈場也、朕特立二一箇大願一、凝二永世

城内山陵

叡襟既爲二三代叡歸之勝地一、(應永二年十一月日)

〔薩戒記〕應永卅二年七月十二日己酉、參二雲龍院一奉レ拜二兩代之御影一、各著二御小直衣一御、雲龍院者爲二公家之御塔中一、而燒失年久、此兩三年、院主圣安上人、奉二院仰一修造尤美麗也、歷覽之後及二昏黑一歸了、

〔建内記〕正長二年七月十四日、著二狩衣一參二泉涌寺雲龍院一、是則兩代(後光嚴院 後圓融院)御塔、(井)稱光院御塔也、來廿日、稱光院殿御一回也、光陰成レ夢、餘哀難レ休者哉、次參二詣雲龍院方丈一燒香、次謁二住持璽汎上人一、來廿日御作善事被レ談レ之、次於二泉涌寺方丈一謁二教信上人一、當住也、

○按ズルニ、稱光天皇正長元年七月二十日崩ズ、

〔國花萬葉記〕二上(山城)泉涌寺(○中略)

四條院始て此山に葬奉り、其後後圓融院より後西院に至る迄、代々の御陵あり、(○下略)

〔山陵志〕二四條陵、在二泉涌寺地一、(○中略)自二四條帝之葬一也、而經二十三世一、至二後光嚴一、又以爲二陵所一、而後、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後奈良、正親町、相尋乃爾、後陽成以降、世々併二與其后妃皇太子之喪一、亦皆例以葬焉、

〔二水記〕享祿四年四月七日、聖忌、參二泉涌寺一拜二御廟一、後土御門院御廟椿、先皇(○後柏原)御廟松也、法塔(東椿、西松)、

〔續史愚抄〕(中御門)寶永七年三月一日丙寅、於二泉涌寺一、有二東山院御石塔開眼及供養一、導師卓岩長老、公卿右大臣(綱平)已下五人參仕、次有二御佛事一、(於二堂前一也)導師及公卿等同前、已上奉行藏人右少辨光榮、(長歷、故辨)(殿御記、輝光卿記、)

安樂行院

安樂行院ハ、又安樂光院ト書ス、舊クハ持明院ト號セリ、原ト持明院基頼ノ持佛堂ナリシヲ

名稱所在

創建沿革

其子通基、父ノ本願ニ由リテ創建スル所ナリ、而シテ通基ノ子基家、後堀河天皇ノ外戚タリシ、緣由ヲ以テ、其仙洞ト爲リ、後嵯峨天皇以後モ屢、仙居ヲ此院ニトセラル、蓋シ後深草天皇ノ御統ヲ、持明院流ト稱スルハ此ガ爲ナリ、今泉涌寺ノ域内ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 知諸寺〕持明院 或書云、承曆四年十月阿闍梨五口甲寄之、西京坐主頁一件日供養、爲御願寺歟、

〔雍州府志 寺院四〕安樂光院 在京極今出川之北、元在京師上立賣、凡此邊有十二光院、所謂不斷光院、智惠光院等之類是也、安樂光院、元持明院家之寺、而爲律院、

〔山城名勝志 愛宕郡十五〕泉涌寺〇中略

塔頭 安樂行院 元在西洞院上立賣北、俗ニアンナン小路ト云フ所也、今遷泉涌寺方丈西側、本名持明院、

〔山城名勝志 紀伊郡十六〕安樂行院 在眞宗院西北森内、古木陰森、法花堂在外門内東方、奉敬仙骨地云々、土人曰仙骨堂、巳前有小塚、近年其上建小堂、

〔御湯殿の上の日記〕元龜三年十二月廿二日、ふし見のはんしゆゐん、御くわん玄ゆ、ふかくさのあ。。。。。。。んらくぎやうゐんよりも、御くはんじゆまゐる、

〔山州名跡志 愛宕郡三〕泉涌寺〇中略

安樂光院 在來迎院西 門向東 寺同 本尊阿彌陀佛 寶冠定印座像、二尺五六寸許、作不考

當院始名持明院、持明院基頼卿宅地ノ内ニ所立持佛堂也、其地洛北、今云フ上立賣ノ北、小河ノ東、安樂小路是也、後改テ爲寺、號安樂光院、基頼ノ末葉大藏卿通基ノ所立也、

〔安樂行院行事〕以舊記一記註之

大藏卿通基建立也、但於根本草創者、爲父基頼本願、當初去康和年中、爲廓内持佛堂建立一宇草堂、其時以彼院宇號持明院、其後迄年序不及周備、而去保安三年基頼逝去之後、彼通基朝臣天治年中、更揚虹梁之構、終成風之功、奉安置西方九品聖容矣、大治五年、遂供養演齋筵云々、其時供養日鳥羽院臨幸之由、雖有記錄之說、未及分明勘決也、其後以持明院號爲一家之稱號、以彼佛閣之名改稱安

樂行院了、改彼寺年月無分明所見也抑持明院曩祖中納言基家卿息女陳子、北白川院、依爲後高倉院正妃、彼院就彼所縁御寄宿于持明院私宅及多年、世人奉號持明院宮、爰俄承久擾亂之刻、依關東擧奏、以彼後高倉院皇子後堀河院奉備天位之、其後後堀河院御子四條院、相續御繼體登極之時、後堀河院脫屣之後、同以持明院被卜仙居了、其後四條院俄崩御、於此御流依不繼體御器用御、後嵯峨院登極已來、彼持明院私宅、自然爲代々仙居者也、仍數代祖皇、御國忌、御願等、久於安樂行院被修之、去觀應二年、南朝與武家御和睦之時、同三年觀應三、文和元也奉南朝之聖斷、持明院四主其時本院光嚴院、新院光明院、主上今本院、春宮今新院東宮直仁親王悉被奉遷南方、忽當朝無主、其年八月舊院後光嚴院踐祚被改年號於文和了、然而其時分持明院殿御舊領等事、光嚴院母后廣義門院爲御成敗矣、其後文和二年二月四日持明院殿炎上之後、彌近邊荒廢了、安樂行院一宇雖相殘、更無莊嚴法施之人、四壁崩倒、爲牛馬之牧、本堂破壞、任雨露之冒、棟梁忽令傾危、本尊已及盜失、仍去延文年中歟依廣義門院令旨被仰永圓寺住持上人、以當寺擬律院可開基再興云々、仍卽彼上人致洒掃修治之興隆、勵一向專念之勤行、不退轉經年序了、但代々根本御願等、於當寺被修之也、

〔蔭凉軒日錄〕長享二年九月廿八日、安樂光院公用百貫文事者、自寺家致其沙汰處、近年號本役無沙汰、以勅裁、地頭領家一具押領、百貫文加增五十貫取之、剩其餘分地下番頭十員切クレ、任雅意之條、上意可預御成敗之由、雖經公儀、于今不事行、寺家愁訴也御國事、是又號本領、代官職競望之處、爲上意被仰付者、何年可還寺家哉、無沙汰之段者勿論也、佛供燈油退轉、寺官破滅之義御不審尤也、雖然勝定院殿足利義持○御代彼御園代官職事、堅致佗事條、一旦被仰付處、二年所持而一圓無寺納之條、乃被召放請文ヲサセラル、彼在所、於後々競望有之者、可被處御罪科之由、以罰文白之、其罰文狀圓修寺殿御廟拜殿內被籠之、被召寄本支證、七口八裂而被口之由承及之條、寺家領所々不知行、此一所許當知行之處、爲上意代官職被仰付者、無沙汰一定之時者佛供燈油退轉、寺家破滅一定也、○中略十月十日、早旦一色大藏大輔殿來、勸盃雜話大輔密話云、御園筑前守、大館殿番子之故、無等閑、結城

雜載

越後守以今御乳白之、以故是又無等閑、二階堂安樂光院之取次也、三人皆有意扶御國、此在所安樂光院爲理運者、下代官事、可白付御園之契約有之、以故皆安樂光院可爲理運之計略有之、

〔明應凶事記〕明應九年十一月十二日壬戌、今朝即御收骨儀也、○後土御門上卿甘露寺中納言爲凶事傳奏、即有分散儀、一分如例上卿持之、○中略納骨掛頸奉籠深草法華堂、此法花堂者、安樂行院内之一堂也、於本院者、久退轉、此一堂相殘計也、乃堂僧行儀帶法花堂云々、

〔後奈良院御拾骨之記〕弘治三丁巳年九月五日崩御、○中略同十一月廿五日卯時、御拾骨、傳奏廣橋殿、○中略傳奏ハ即置深草安樂行院御骨奉納也、

方廣寺

方廣寺ハ、通常大佛殿ト稱シ、京都東山ニ在リテ、釋迦ノ大像ヲ安置セリ、天正十四年、豐臣秀吉ノ建立セシ所ニシテ、古溪ヲ開基ト爲ス、地震火災等ニ由リテ、堂舍佛像屢〻破壞シ、中比銅像ヲ鑄造セシ事モアリシガ、其後遂ニ木像ト爲セリ、當寺ノ洪鐘ハ、秀吉ノ子秀頼ノ時、鑄成セシモノニシテ、其銘序ニ國家安康ノ文字アルノ故ヲ以テ、德川家康己ヲ呪咀スルモノナリトシ、怒テ之ヲ改鑄セシメシモノナリ、事ハ法具篇鐘條ニ詳ナリ、

名稱所在

〔和漢三才圖會七十二末山城〕大佛殿方廣寺　在七條通順道伏見街道上

妙法院二品法親王　　寺領千六百卅三石

天正十四年、豐臣大閤建立、慶長七年、同内大臣秀頼公、用銅鑄盧遮那大佛像、

〔山城名勝志十五附錄愛宕郡〕大佛殿號方廣寺、在六條南鴨川東七條北、本尊釋迦大像、豐臣秀吉公創建、

創建

〔雍州府志四寺院〕方廣寺　在五條東、世謂大佛、天正十四年、豐臣秀吉公創建之、本尊釋迦大像、以木剥

之、以漆膠塗其外、斯像華嚴說法方廣佛之體相也、故號方廣寺、使大德寺古溪和尙住之、然寺不及成而和尙遷化、故聖護院道澄爲別當職、慶長元年閏七月大地震、佛像破壞、秀吉公謂、以佛之知見而不知其身之破壞、則爲不足信、而以矢射之、然後請信州善光寺本尊如來、爲此殿本尊、時方殘暑酷烈、然俄飛雪滿天、寒氣侵人、是爲如來之祟、秀吉公八月十八日薨逝之前十七日、使送還善光寺、爾後秀頼公欲使造銅像、慶長七年鑄造之日、火發自佛腹中、堂爲焦土、又再欲建堂、則先鑄大像、而後令構堂、而遂成矣、聖護院二品親王興意、相續爲別當、然大佛殿上梁銘幷鐘銘、依有不祥之語、止供養、興意法親王亦蟄居、無幾而被免之、建白川照高院而閑居、則賜院領千石、元和六年庚申十月七日遷化、爾後妙法院宮主大佛殿之事、

〔太閤記 七〕大佛殿之事

秀吉公、聚樂におはしましければ、彌洛中洛外にぎはひ侍るやうにあらまほしくおぼしたまふて、東山に、大佛殿を建立し給ふべき旨、五人之奉行共に被仰付にけり、昔は、二十年に造畢せしとなん、今度は、五年に成就し侍るやうに、工夫を廻し可相計之旨なりしかば、德善院宿所に各打寄相議しけるが、先奈良之大佛師宗貞法印、同弟宗印法眼、大佛棟梁之大工等を呼上せ、其品々など委く尋究め、遲速損益之義會得せんとて、井上源五方へ、如此之旨、五人之連狀にて云遣はしけり、右之職人共、奈良より悉く上京し、德善院に至りしかば、各寄合て、手廻しの宜しき事共、物に記しりけつゝ、五人之奉行共、御前に出て、これかれ申上しか共、不合御氣色して被仰けるは、材木裁制之事先ならんか、佛師鍛冶等之事先にて侍らんかと問給へば、各尤左もおはすべき事にこそと、及赤面けり、かくて材木を可取國々を記し付見るに、第一土佐、第二九州、第三信州之木曾、紀州熊野など宜しかるべきにぞ極りける、國々へつかはさるべき奉行二十人、大工廿人撰出し、御目にかけしかば、御氣色なり、大奉行は、德善院一人可然と定めらる、かく宜ふは、五人之奉行に、一々問

盡さんとせば、事行まじきかとおぼされての事也とかや、四國九國之人々は、土佐之山中へ分入て、材木を出し、淀鳥羽へ可令著船、勢尾濃三箇國之人々は、木曾山之材木を出し、河に流し入、勢州桑名に令著津、其より大船に積、經南海大坂に至て、德善院に可相渡旨なりけり、

一大佛地形之事　五畿內中國之人々は、大佛之地形石垣築山等之普請可相勤旨被定にけり、地形之所は、東山佛光寺なりければ、德善院普請之町場を渡し侍りぬ、二十一箇國之人數を、地形と、石垣、築山、三つに分被仰付しかども、石垣大さうなる事に因て、後は何も石垣に加りぬ、重て北國勢をも加へさせ給ふ、

一佛像之事　大佛を、昔の樣に、からかねにて鑄奉らば、遲く出來なんとて、木像に物し、漆膠にてぬり、彩色可申旨仰なり、震旦之佛像作り、豐後に居たりしを呼よせ問ければ、異朝にて、大像之佛をば木像にし、漆膠にてぬり立候へば、百年はこたへ侍由也ければ、卽其旨、將軍〇豐臣秀吉へ申上しかば、大佛を、宗貞宗印に被仰付にけり、手傳人は寺西筑後守、早川主馬頭、片桐東市正、古田兵部少輔、加須屋內膳正、間島彥太郎也、堂の高さは廿丈、佛の高さハ十六丈、昔より定法なれば、今以增減なし、

一漆膠之事　手傳人は、池田備中守、河尻肥前守、上田主水正、奉行は堺之今井宗久也、佛像不出來已前、蠣殼一萬俵取寄可申旨、唐人さしづに付て、勢州尾州へ取に下しけり、去共、運々受聚めをかざる事なれば、頓かには難調となん、其比江州守山邊の者とかや、廿五六才の時より、かみおろしなどし、世をのがれて有しが高野山の大伽藍共をあまた建立し、左樣の事になん得たるよし聞召及れ、後は是を大佛建立の主となし給ふ、內々望所でハ有、卽佛光寺地形之內に小庵を結び、常住の住居として急しかば、速成之便くはゝりぬ、殊高野山下法師共は、か樣の事になれて、大伽藍の手傳などに、宜しき事共多がりけり、佛像大かた出來しかば、漆膠をぬり初ぬ、東方に築山をつ

かせ、虹梁などもつなを車にて廻し引上毎事昔より自由なる事共多く有ぬ、千人許もして上なん虹梁を、百人許にて、車を廻し引上にけり、

〔小早川什書〕猶以鐵之事、於二其所一ニ只今之代にて相究朱可レ被レ遣候條、其通可二申付一候也、

大佛殿材木注文遣之條有二次第一、差急可レ被レ致二運上一候、并從二分國一出候鐵相留、大佛之用所ニ可二差上一候、委細安國寺可レ申候也、

五月十〇天正四年二十五日　太閤様　御判

小早川左衛門佐どのへ

〇按ズルニ、東山大佛殿起工ノ月日、古來明ナラズ、今本書ニ依レバ、略、之ヲ知ルヲ得ベシ、

〔細川家記忠興八〕同年十〇天正四年秀吉公、洛陽東山大佛殿を造立可レ有とて、四方の石垣被二仰付一、始は小石を以築候處、後は諸國より大石を集められ候、忠興君も石を御曳せ被レ成、松井康之を始め、各石に付たる大綱を曳故、秀吉公石に上りて、音頭を御取候、其砌利休より、康之へ送候、自筆之書簡于レ今有レ之

〇按ズルニ、此ニ云フ利休ノ書簡ト云フモノハ、松井家譜ニ載スル所ト同ジ、

〔松井家譜〕天正十四年、秀吉公、京都東山江大佛殿御建立ニ付、諸大名江御手傳被二仰付一、三齋様茂、御役儀被レ爲レ蒙レ仰、松井康之儀、御普請御用ニ付罷登居申候得共、相煩候ニ付、西加茂之内ニ罷在保養仕候、此節千利休ヨリ康之江之返書、

就二千利少煩申一候、遠路預二御使札一候、朱御養性之御心底一圓無二御存知一體と令レ存候、西賀茂迄御引籠と候へども、御心中ハむかしの物にて候、我等長在京申候へ共、人をさへ不レ進候、此御報ども申候間敷候へども、それもあまりの儀存ニて如レ此候、將亦我等も、五三日不圖又煩出、今日十六日至二大津一御座□□兼而雖レ被二仰出一候、伺公不レ申候、先々大□之よし承候て、本望此事存候、少御御札則届申候、誠御懇切忝次第ニ候、難レ謝奉レ存候、恐惶謹言、

本尊堂塔

五月十六日　　拋筌宗易判

松井新介樣尊報

追申候、大給の御次ニ當年中、此世の外の人に御成あるべく候、

其後、病快罷成、御普請場江罷出、御用相勤申候内、千利休ヨリ、康之江之返書、五日尊出珍札號ニ本望此事令存候、御普請場江御出、承候て滿足ニ候、遙久背本意無音御禮と存候、別而爰元調法之一種ニ候、次ニ今度越もし屋大石を被引候處、關白樣、石の上ニて御音どをとられ候事、爰元其かくれ無之候、御名譽ニ候、貴老御心底奉察候、就夫越もし屋へ以書狀申入候、御届賴申候、久しく無音仕候と申度候、御隙次第、大坂御下向奉待候、懸御目度候、恐惶謹言、

七月七日　　拋筌宗易判

松新公參尊報

〔山城名勝志十五附錄愛宕郡〕大佛殿〇中略大佛像、高六丈三尺、堂東西廿七間、南北四十五間、廻廊南北百廿間、東西百間、住持古溪和尚、次照高院道澄法親王、今又妙法院門跡管之、佛工南京宗貞法印、同弟廿宗印法眼造之、慶長元年閏七月十二日、因地震佛像崩、秀吉公其跡迎信州善光寺彌陀安置、同二年八月十五日如來歸座善光寺、同三年八月十五日又造大佛、同七年十二月四日大佛殿燒失、此度鑄銅像、鑄損而自大像出火、大佛殿共燒畢、同十五年、右大臣秀賴公復營云々、寛文二年改刻彫木像、井大堂廻廊門等御修復、二王門桁行十五間二尺五寸、梁行六間一尺、南門桁行六間六尺、梁行四間七尺、

〔花洛名勝圖會東山七〕大佛殿方廣寺建仁寺町通馬町の南にあり、妙法院宮御抱所なり、

本尊　盧舍那佛、座像長六丈三尺〇中略

同堂　桁行四十五間二尺五寸梁行二十七間五尺五寸棟高二十五間柱九十二本徑五尺五寸、但片屋十七間、虹梁長十五間上屋棟千五百二十八坪、但片屋十七間、同華瓦、百八十七枚、妻軒百八枚、下屋棟千四百七十二坪、但片屋八間、同華瓦表二百三十二枚、妻百四十八枚、牡瓦長二尺七寸、幅周一尺三寸、深三寸、牝瓦長二尺七寸、幅周一尺三寸、厚一寸五分、金剛垣徑十八間壇上幅三間五尺五寸二王門、桁行十五間二尺五寸梁行六間一尺、柱數十八本、金剛神高一丈四尺狛犬門内にあり、金色長七尺、金剛垣四箇各方三寸廻廊二王門の左右に列る、南北百二十間、

鐘堂、南廻廊の外にあり、方四間柱數十二本、洪鐘高一丈四尺、徑九尺二寸、厚九寸、慶長十九年に鑄所なり、今銘文磨滅す、

〔豐鑑二〕吹上濱

その頃、秀吉卿思ひ給へるは、奈良の京の大佛も破壞しぬ、都にたてばやと思ひなして、東山得長壽院の北に、地形をきつき、石をたゝみ、木のたくみ、佛師のたくみなどつどひて、留舍那の像をつくりみがき給ふ、高野の木食上人奉行せり、三年が程計にやことなりて、堂のいらか高く空にかがやき、玉のやうらく風にしたがへり、貴賤まうでつどうことはかりてしるべし、されど、いにしへ七月〇文祿五年の大地震に、佛のむねふりわりければ、せんかたなし、此度は鑄佛にてこそよかんめれとて、太郞秀頼卿又いとなみたまふ、漸々ことなりぬべきほどに、たゝらの火、堂にもえつきて、時の間にほのほとなりぬるぞ淺ましきされど堂をも又秀頼卿つくりみがきたまへり、此度は、人のなやみなさじとて、秀吉公よりゆづり給へる、金銀取出で、此役にあたれる人ごとにたび給ひけり、今ぞ東山に御座して、人皆なべて結縁をなしぬるもとふとき、

〔義演准后日記〕文祿五年閏七月十三日、地震〇中略大佛ノ事、堂無爲、奇妙、本尊大破、左ノ御手崩落了、御胸崩、其外處々□在候、後光聊モ不損、中門無爲、

〔時慶卿記〕慶長七年十二月四日、大工一人、但半日ニテ返、大佛炎上、夜中ヨリ燃ルヲ人不知、巳剋ニ燒出、照高院殿、其外高野衆ノ所ニ燒失、一時ノ灰燼、淺猿義共也、予モ則越門主御供申、山中山城守山庄ヘ奉入、此所ニ先々御庭御見舞之衆數多□□□□、本願寺隱居早々被越□□勅使萬里大納言、近衞殿モ渡御、其外堂上數輩也、

〔台德院殿御實紀二十六〕慶長十九年五月廿日、片桐市正且元、歸坂の暇給はり、馬幷巢鷹を下され、八月二日、大佛殿供養行ふべき旨命せられ、豐臣右府にも巢鷹を遣はさる、慶長見聞書、寛永系圖、慶長年錄、寛政重修諸家譜、

〔台德院殿御實紀 二十七〕慶長十九年七月廿六日、南光坊僧正天海、駿府にまうのぼり、〇中略今度大佛殿供養は三日、開眼は十八日たるべき旨、駿府よりの御旨なりといへども、十八日は、豐國大明神臨時祭なれば、三日早天に開眼、次に供養行はまほしき旨、豐臣右府こはるゝ旨聞え上しに、大御所聞しめし、大佛棟札幷に鐘銘御不審少からず、開眼供養共に延滯せられ、はやく棟札鐘銘の草案、進覽すべき旨、本多上野介正純、金地院崇傳もて、勝重且元のもとへ仰下さる、駿府記

〔國師日記〕一書令啓上候、今度大佛供養延引之儀、被仰出候、爲御心得、內證申入候、一今度市正被罷下、大佛大鐘成就之儀被申上候、奈良大佛大鐘之銘寫、被懸御目候、年號月日、大勸進法印行勇、大鑄師左兵衞尉延時、小工二十人、如斯ざつとしたるほり付ニ而候、今度鐘ニも此通、可然樣ニ御內證ニ候、一大佛供養、八月三日ニ執行有度由被申上、尤と被仰遣候、一役者之儀者、導師者妙法院殿、呪願者三寶院殿、證議者照高院殿ニ有度由、書付ニ而被申上、是も尤と御諚ニ候、一市正被罷上候而以後、書中ニ而被申越候者、最前可得御意を失念候、本尊之開眼師別ニ有之儀候條、各相談御室御所へ申入候間、以御次而、御前へ申上候樣ニと被申越、則書中披露申候處、其方次第との御諚ニ候、一御室御出仕候得者、天台眞言左右之座配、六ヶ敷可被成候、若天台宗右座ニ候者、叡山衆者出仕申間敷由、立御耳候故、座配之樣子尋ニ遣し候へ者、天台宗左座ニ落著之由申來、開眼者三日早天ニ執行、其以後堂供養と申來候、一重而爲上意申遣候者、三日ニ事多ハ如何に候間、開眼者先例も前方ニ候間、三日に本尊之開眼、十八日ニ堂之供養候者、太閤之十七年忌旁可然候、內證書中ニ而申遣候、其返事ニ、十八日ハ臨時之祭有之儀ニ候條、同者三日ニ一度ニ有度候と申來候、一棟上八月朔日と、中井大和へ案內候故、大和存分者、朔日ハ棟上候惡日如何と被申事候、一其後今度大佛ノ鐘ニ、長々敷銘を韓長老とやらんにかゝせ、棟札をもむざと書申候由、立御耳候而、ほりかきつけ候物ハ、末代有之儀ニ候間、不被得上意候事、市正不相屆候、兎角棟上候本尊開眼も、堂供養可相

延旨、被仰遣候、一鐘之銘、棟札之寫取ニ被遣被成御覽、一向御氣ニ不入、其上書札共法度惡敷候故、御機嫌惡候、市正罷下、御理申上度由存と相聞申候、但如何可有之哉、右之樣子ニ御座候條先大方申入候、猶奉期後音候、恐惶謹言、

八月十〇慶長十九年六日

金地院

本多上野介

本多佐渡守樣人々御中

〔台德院殿御實紀二十七〕慶長十九年八月朔日、京都には、この三日大佛開眼供養有べしとて、總奉行片桐市正且元、主膳正貞隆監臨し、導師呪願師をはじめ、諸門跡及び僧綱凡僧、悉くあつまり、法會の用意專らに莊嚴をなす、よて都鄙の貴賤結緣のためにとて、雲霞の如く群集し、七月のはじめより、近邊市街にも、新に肆店を設けて、飮食調度を備へ、その用意若干にて、喧鬧かぎりなかりしに、京職板倉伊賀守勝重より市正且元のもとへ、鐘銘棟札の事によて、駿府の御不審あり、供養延滯すべしと令しければ、この法會にあづかる門跡はじめ、僧俗大に驚き、四方に散亂し、市街に新に設たる假屋を毀棄などして、その騷擾大かたならざりしとぞ、駿府記、萬世家譜、貞享書上、

〔羅山文集五十六雜著〕大佛殿

本邦大佛殿、作于聖武帝、而後源賴朝、奈良鎌倉二所造焉、以材而言之、盡國中之名木也、以銅而言之、盡國中之良銅也、其費不知幾億兆也、〇中略大殿大像非養敎之具也、今率可養可敎之民、而塞飢之、欺惑之、謂之君非其君也、然則如何而可乎、曰養以常產、敎以孝弟而已矣、天正文祿之際、豐臣氏、相洛東之地、疊大磐、累巨石、堆其基域、創大殿、置大像、大像壞于地震、大殿燼於鬱攸、戊申己酉之年、

三〇慶長十四年 復肯堂之事始焉君子以爲一之謂甚、其可再乎、

〔續史愚抄靈元〕寛文四年四月八日庚子、造始東山大佛像、改銅爲木云、或作二廿八日、又作二寛文二年、誤歟、本朝年代記、年代略記、或記、寛文二

〔雪月花三〕一方廣寺大佛殿御修理

本堂桁行四十五間二尺、梁行二十七間五尺、 内荒神社鳥井垣有り 廻廊四方ヲ長ニ延シ、四百六間一尺五寸、梁行三間四尺七寸、 仁王門桁行十五間二尺五寸、梁行六間一尺、 南間、六間六尺四方 鐘樓四間四方

右寛文元丑年八月より、同七年未十二月迄、御修理御入用銀高九百九十一貫八百五十目、

釋迦大佛像　再興

右ハ、寛文四年辰二月より、同七年未七月ニ畢、御入用銀千六十二貫四十一匁六分、

奉行　今井彥右衞門　角倉與市

〔駿臺雜話四〕大佛の錢

嗚呼佛法の人心を蠱惑する事、何ぞこゝに至るや、然るに寛文の比かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、千年以來金仙を尊て、かく成たる風俗の後に出て、京の大佛を鑄て錢とし、天下を利益せられしこそ、先にも後にもきかざる事なれ、其卓識誠に古今に傑出すともいふべし、御當家創業以後、文明日に開きし故にかくの如き人も出るぞかし、

〔天明集成絲綸錄二十六〕寶曆十三未年九月

御勘定奉行江

京都大佛殿、并諸伽藍大破ニ付、諸國再勸化御願被成度候、依之、御料私領寺社領町方共、高百石ニ付銀十匁ツヽ之割合を以、寄附有之、其支配所領主地頭江取集、三箇年之間、勸化所江向々より相納候樣被成度旨、右相成がたく候ハヾ、於長崎壹箇年唐船一艘ニ、御定銀高之上ニ、銀十五貫目宛

増荷物被仰付、拾箇年之間、御買上被仰付、元直段ニ而荷物請取候而、賣立候餘銀を以、年々御修復江加、右年限迄、年々銀三十貫目宛、公儀江上納可被成旨、妙法院門跡より、御願候得共、兩様共御願之通ニ者難相成事ニ候、諸國再勸化之儀者、被仰付候間、御料私領武家幷寺社領在町共、志之輩より、物之多少ニよらず、寄附有之、右勸化物集り次第、京都町奉行支配町人之由、幷向寄御代官にて年一割之利足を以貸附ニ殘置、追々修復有之候様可被相達候、尤御勘定奉行、京都町奉行可被談候、

九月

右之通、御勘定奉行江申渡候間、可被得其意候、

〔天保集成絲綸錄 五十五〕天明八申年三月

寺社奉行江

京大佛殿破損ニ付、總修復ニは、金四萬兩程之入用相掛り、御拜借金、富等之助成にては、難行屆ニ付、御修復被仰付候歟、御手當被遣候共、又は右金高御拜借、永年賦御上納被成度由、妙法院宮御願ニ候得共、先達而格別之御儉約も被仰出候儀ニ付、難被及御沙汰ニ候、寶暦十二午年、諸國再勸化被仰出候節之勸物、京都町奉行支配町人、幷最寄御代官所ニて貸附ニ相成候分、富興行之助成を以如何樣ニも、御自分ニて御取繕ニ有之候樣、可被達候、

〔大佛殿雷火炎燒圖畫 輿地叢書所載〕寛政十戊午年七月朔日、夜四ッ時より俄に大雨降來り、其勢ひ瓦を碎くが如く、雷をかき侍る中、凡三ッ仕舞の電到て、殿敷枕の耳にことふ、然るに世上一統ニ寢休して、大佛殿に落る事を知人なし、夜明まへ方、耳に松風の音のごとく、何となく物音すれば、火の勢ひの鳴はとは誰しも知らず、然に雷は夜明四ッ時過頃、大佛殿北側東より四本目の柱の上升形に落、此頂に火附て、らふそくのごとく燃る、家根下の重の裏にて、中々階子水屆きかね、人々あ

れあれと計、居ながらすべきやうも無、働き居けるに、火消中居走り來りて一たん消したるとおもふより、火は柱の朽々くゞり、中にまはりて、しばらく有て、又燒出すといへども、たゞちらくともへ出す、人々わざは階子を次といゑどもたやすからず、水鐵炮にて消と云へども、わづか二尺計の所行不屆、炎次第ニ登りたる所ニ、附町屋に居合大工元結等、大勢屋ねに登り、水をかけんと、先板壁をうち破り、火ははや堂中にめぐる、斧を捨て急ぎ下り、恐れて身ふししびれふるひ、ほのふいよく堂中に滿亂、虛空へ數百丈煙立登る、此時は、凡夜明方の事なり、(中略)九ッ時、佛殿も山門も、階廊も、わかちなく、大佛中只一面に成て、小山の一度にもへるが如く、大木打かさなり、火の音、人音、四方にひゞき、唯今八ッ過、何時しづまるも計がたし、

一爰に不思儀御座候、昨五ッ頃、人々涼み居る所に、佛殿より、山門へ火飛行たり、見るもの不思儀の沙汰して恐る、中にも何ぞ外の火の寫りならんと許せし者もあり、しかるに、雷やみ過て大雨して落る、

一先年、大佛へ落て、すぐに燒だす、其節ふせぎおふせしは、廿五年以前、七月二日甲子の日也、又大黒天御遷佛も、七月二日甲子の日也、時節いたりなし、いかなくと、洛中實に涙をながす、此日十方にくれて、洛中に仕事する人少もなし、

一不思儀は、佛殿始、山門階廊とも、内へくとこげて、外々へ少しも出す、

一火消壹人、階子より落て死すといふ、

一風もなし、四方より吹くる火少もなし、

一煙は、虛空にみち、眞黑に御座候、日光り黃也、

一から金の華立、加藤肥後守清正宰相、各御門前の角力取弟子六七人を引つれ、つり出す、

一前兩側に立つ石燈籠、合三拾八、少もそこねず立也、山崎社人とぼすなり、

一山門の仁王成とも助けんと、釣瓶綱十四五荷も取寄せ結び繼、首にかけて、數百人いたりて、力にまかせて引ども〳〵びくともせず、終に綱を切てどつと散る、其間に、早火廻りてより付ず、
一三輪が崎と云へる角力取、大變を聞附て、走り來り、手に合品を出さんとするに、彼蓮花臺に有し香爐をかたげ遁んとするに、階子弱ておりる事を得ず、故に上よりなげ落て、足をかたげて、東本願寺に預る、火しづまりて後、又大佛殿に持かへるに、屋形を作り、八人釣にて、やう〳〵持也、昔かの三輪が崎を大力也とて賞し侍る、

〔京都寺社制札留〕禁制。。

大佛殿并鐘樓

一總門之內酉刻以後、不依貴賤徘徊并寢伏事、
附諸伽藍樂書事
一參詣之諸人、擊礫於門內回廊、射芝矢、狼火取散事、
一諸殺生事
附放飼牛馬於門內事
右條々、任先例堅被停止之訖、若於有違犯之族者、速可被處嚴科者也、仍下知如件、

元祿十年九月廿一日　紀伊守源朝臣

紙札一枚判有之、
板札一枚判無之、

〔義演准后日記〕慶長二年七月十七日、明日善光寺如來、大佛殿へ還座ニ付、今夕ヨリ、大津へ越、明日ハ、晴晴敷出仕之間、供奉人以下之裝束、納積遣候云々、　十八日明、如來還座、寅刻各出仕用意、同未刻漸出仕、卯刻悉門跡諸出仕次第事、
先最初眞言宗百五十口、天台宗百五十口、各派衆衲衣乘馬前行、但左眞言宗、右天台宗、二行、僮僕力

名稱 所在 創建

者以下曆々也、朱ノ日笠各指懸候、大閤御所ヨリ、馬以下(略○中)此乘五十餘ニ及、(略○中)次ニ輿山上人乘輿、力者以下曆々、(略○中)次奉行警固數百人、帶兵具美麗、次樂人數人、次重又警固武士數千人次幡十二本、次如來、輿金襴口張也、鳳凰輿ノ上ニ在リ候、荷輿丁三十人許シテ舁候、次甲州之守護弼正悉共奉、騎馬五位裝束二十騎計、烏帽子上下著用之乘二十有、次武士けいご武具數百人、次ニ諸門跡、先照高院(元聖護院也、于時准三宮)、四方輿、力者二十人歟、前行大童子中童子、輿ノ前ニ行、(略○中)如何、烏帽子上下侍四十人歟、次坊官騎馬三人共奉、(略○中)次妙法院二品親王常胤、四方輿、力者十六人前行、其次ニ中童子二人行、異樣歟、坊官騎馬兩人、次予、于時准三宮、四方輿、力者二行、前行二十人、輿力者舁也、輿ノ後ニ大童子二人共奉、中童子長途ノ間令略了、笠袋抔迎紅鼻荒口退紅之次、烏帽子上下侍乘五十人三行ニ列立、次坊官、先法口法印長口騎馬、中間侍等如形、笠袋白丁抔也、次兵部卿法眼重快、次宰相ト座長運、(長盛息也)行粧同前、次良家乘共奉、先理性院前大僧正覺助、金剛王院法印盛○松橋大○○一雅板輿ニ乘共奉了、力者以下笠袋ニ如常行粧如形、寶恩院金剛王院兩僧正共奉、次第如右記、次大覺寺、(略○中)次梶井、(略○中)次竹内(略○中)近代之儀也、從大津至大佛前、行列更ニ不斷、貴賤群集、(略○中)

妙法院

妙法院ハ、一ニ新日吉門跡ト云フ、京都東山ニ在リテ、天台ノ僧惠亮ノ開基ナリ、豐臣氏ノ、京都ニ方廣寺ヲ建ツルヤ、世々其主管ヲ爲セリ、

〔雍州府志(四寺院)〕妙法院　在鳥部山之下、天台門主之隨一也、山上有日吉之社、故或稱新日吉門跡、豐國、幷大佛殿、及蓮華王院今爲此門主之有也、日嚴院、門主之院家、而在妙法院之前、

〔山城名勝志(十五愛宕郡)〕妙法院(在滑谷道南、大佛殿東、天台、日吉門跡、)

堂塔

妙法院門跡次第云、相命法印、妙法院、又妙香院、號大納言藤原俊宗猶息、

釋家官班記云、二品親王尊性、後高倉院御子、山、妙法院、承久三年十月三日叙、

或記云、妙法院者、後白河法皇皇居之地也、其後法住寺御所時被附妙法院昌雲大僧正、故號皇居御門跡云云、後高倉第一皇子尊性法親王、初叙二品、是山門初例也、

〔山州名跡志三愛宕郡〕妙法院　在大佛殿東山下　門西向　宗旨天台、　法親王御法務、山門座主也、開基、山門慧亮僧正、〇中略法流法曼院、〇下略

〔花洛名勝圖會七東山〕妙法院宮方廣寺の東、馬町の南側にあり、御家領千六百三十六石餘、

延暦寺慧亮僧正開基以來、御代々山門座主法務宮御門跡御相續し給ふ、元祇園の南にあり、小坂殿、また綾小路宮と號す、豐國社創建の時、こゝに移したまふ、

〔太平記二十一〕佐渡判官入道流刑事

此比、〇暦應年中殊ニ時ヲ得テ、榮耀人ノ目ヲ驚シケル佐々木佐渡判官入道道譽ガ一族若黨共、例ノバサラニ風流ヲ盡シテ、西郊東山ノ小鷹狩シテ歸リケルガ、妙法院ノ御前ヲ打過ルトテ、跡ニサガリタル下部共ニ、南庭ノ紅葉ノ枝ヲゾ折セケル、時節門主〇亮性法親王御簾ノ内ヨリモ、暮ナントスル秋ノ氣色ヲ御覽ゼラレテ霜葉紅於二月花ナリト、風詠閑吟シテ興ゼサセ給ヒケルガ、色殊ナル紅葉ノ下枝ヲ、不得心ナル下部共ガ引折リケルヲ御覽ゼラレテ、人ヤアル、アレ制セヨト仰ラレケル間、坊官一人庭ニ立出テ、誰ナレバ、御所中ノ紅葉ヲバ、サヤウニ折ゾト制シケレ共、敢テ不承引、結局、御所トハ何ゾ、カタハライタノ言ヤナンド嘲哢シテ、彌尙大ナル枝ヲゾ引折リケル、折節、御門徒ノ山法師、アマタ宿直シテ候ケルガ、惡ヒ奴原ガ狼籍哉トテ、持タル紅葉ノ枝ヲ奪取、散散ニ打擲シテ、門ヨリ外ヘ追出ス、道譽聞之、何ナル門主ニテモヲハセヨ、此比、道譽ガ内ノ者ニ向テ、左様ノ事翔ン者ハ覺ヌ物ヲト忿テ、自ラ三百餘騎ノ勢ヲ率シ、妙法院ノ御所ヘ押寄テ、則火ヲ

ゾ懸タリケル、折節、風烈ク吹テ、餘煙十方ニ覆ケレバ、建仁寺ノ輪藏、開山塔、幷塔頭瑞光庵、同時ニ皆燒上ル、門主ハ御行法ノ最中ニテ、持佛堂ニ御座有ケルガ、御心早ク、後ノ小門ヨリ徒跣ニテ、光堂ノ中ヘ逃入セ給フ、御弟子ノ若宮〇亮仁法親王ハ、常ノ御所ニ御座有ケルガ、板敷ノ下ヘ逃入セ給ヒケルヲ、道譽ガ子息源三判官走懸テ打擲シ奉ル、其外出世坊官兒侍法師共、方々ヘ逃散リヌ、

〔碧山日錄〕應仁二年八月四日辛卯、西兵燒二青蓮院檀那院及寺舍民家一無レ數、東山爲レ之虛耗矣、　廿六日癸丑、山城東南之兵、燒二台宗妙法院一、

〔嘉永四年雲上明覽大全上〕妙法院宮

御領千六百三十三石餘　　大佛　御里坊院參町　小幡右兵衛

御宗旨天台　妙法院敎仁入道親王　三十三

二品天台座主

光格天皇御養子、實閑院故孝仁親王御子、

院家　勝安養院權僧正法印　常任金剛院權僧正法印

准院家　道城院權僧正　淨蓮華院權僧正　寶蓮華院權僧正　護國院

坊官　隱居菅谷揆察使法眼　山田大藏卿法印　今小路部治卿法眼　菅谷宰相法橋

諸大夫　山田筑後守　松井安藝守

侍　脇屋下總介

承仕　伊丹尾張介　內田法橋　木崎攝津介　堀部法橋　幸井出羽介

〔諸門跡傳二〕妙法院　號二新日吉門跡一、

惠亮和尙　山門圓澄資、信州水內郡人、延曆二十年生、西塔寶幢院第一院主、文德帝二皇子諍位、天安元、亮爲二惟仁一修二大威德法一、〇中略二年五月二十六日寂、五十九才、

〔妙法院文書〕無品親王廳解申請天裁事

相承旨令妙法院門跡本尊、聖教、寺院庄園［　　］等、全永代領掌狀、〇中略

一大報恩寺撿挍職事

件寺者、本願義空上人、貞應年中所寄進二品親王廳也矣、

右謹考舊貫、依得門跡之傳持、被下官符宣者、累代之芳躅、明時之通規也、爰當門跡者、惠亮和尚之賢跡、山中無雙之名區也、仍二品尊性親王中興門跡以來、至于性守僧正相續管領訖、然性守僧正、以山洛房舍、眞俗之遺跡、去正中二年二月十日、讓與尊澄親王之刻、以次第附屬之儀、親王可有傳持之由、具載遺狀畢、然間去建武三年、天下忽大變、乾坤雖似改、疊好幽通、文券不朽、依之冥顯相扶、致門跡之領掌之間、任先規所申請官符也、矧忝門室相承之重書等、多以尊澄親王遠堺隨身、剩先年依道譽法師〇佐佐木之濫惡、及門跡煙塵之大難之刻、所殘之文券悉以逢炎火訖、當于此時、若不預紛失明證之鳳綸者、爭可斷師跡後代之狠戾哉、望請天裁且任代々佳例、且察度々紛失、被成下官符宣者、將全門跡三寶之住持、奉祈國家萬歲之安寧矣、仍奉令旨以解、

康永三年七月　日　　別當法眼和尚位行祐奉

養源院

養源院ハ、京都東山ニ在リ、德川秀忠ノ妻淺井氏ノ、其父淺井長政ノ爲ニ建ツル所ニシテ、養源院トハ、長政ノ法號ナリ、宗旨ハ天台ニ屬ス、

〔和漢三才圖會〕七十二末山城　養源院　在大佛近處、天台　寺領二百石

淺井備前守長政卒、戒名曰養源院、息女崇源院殿台德院相公〇德川秀忠夫人、爲先考所建、山門院家住

寺格
寺領

于此、源君累代靈牌有之、

〔雍州府志四寺院〕養源院　淺井備前守長政葬後號養源院、台德相公之夫人崇源院殿者、長政之女也、故崇源院殿爲長政被建之、寄寺產三百石、山門院家住之、當家四代牌在當院、每月忌日始自所司從公役之人各參詣、寺產有三百石、

〔山城名勝志十五愛宕郡〕養源院（在蓮華王院東、天台開山盛伯法印、淺井備前守藤原長政被建養源院、爲菩提所創建之也、）

鐘銘云、（道林庵案心書）山城州愛宕郡洛東養源院者、贈從二位行權中納言前備前守藤原長政卿靈場也、其息女大廣院英岩者、豐臣秀吉公之內政、因之告事之由、以受其命建立、然不圖及回祿也、爾時崇源院贈從一位和與大姊遂再興給畢、崇源院者台德院之御內、而英岩之御妹、女院之御母堂也云云、

〔寺格帳上天台宗〕高三百石（御朱印）　大僧正迄昇進　京大佛　養源院

右住職從御門主被仰渡、僧正官之儀者、御伺之上、從御門主被仰渡、

一住職幷任官之御禮、御白書院獨禮、獻上貳束一卷、御閾之內貳疊目、

一御暇於柳之間老中被仰渡、時服五、白銀貳拾枚拜領之、（廣蓋ニ而引之）

一年頭以代僧御禮、御白書院御次一同、獻上扇子一箱、御暇無之、事書於寺社奉行所渡之、

但卷數ハ、二月十六日上ル、

智積院

智積院ハ、京都東山ニ在リ、卽チ豐臣秀吉ガ愛子棄君ノ追福ノ爲ニ建テシ祥雲院ノ舊地ナリシヲ、德川家康、眞言新義派ノ滅絕センコトヲ惜ミ、能化ノ僧一人ヲ此ニ住セシメ、紀州根來寺ノ法流ヲ再興セシ所ニシテ、眞言宗新義派ノ本山ナリ、寺中學寮夥シク、諸國ノ僧侶常

名所 所在 創建

ニ雲集ス、

〔雍州府志 四寺院〕智積院　在鳥戸山麓、紀州根來寺覺鑁之派、而眞言新義之道場也、其法流日衰、剩僧徒勵武勇、勤對武家、爲一方之讎、織田信長公怒之、燒伽藍滅僧徒、今代惜之、擇殘僧之中傑出之者、偶有二人、其一人令住長谷寺小池坊、其一人令住智積院、是爲兩能化、再興新義之法流、使專化僧、每年自十月朔日至同月十二日、修論義、而十二月十二日修法事、是謂報恩講、所化僧來集者及七百餘人、寺產有五百石、智積院地、始號祥雲院、元豐臣秀吉公之幼子、祥雲院殿之塋所、而妙心寺南化和尙住之、和尙者信長公之歸依僧也、爾後有故、移祥雲院於妙心寺、其跡爲智積院也、

〔山城名勝志 十五附錄 愛宕郡〕智積院 在養源院東、眞言新義、開山正意法印、

元此地豐臣秀吉公爲令君棄君所建創祥雲寺也、然到東照神君御世、新義門徒歎根來寺之廢、屢訴之神君、惜斷絕覺鑁派、而學室二院建小池坊於初瀨、再興智積院于此地、而于今新義派盛也、今智積院者不改元祥雲寺所構乎、棄君像今在妙心寺玉鳳院內、

開山堂 號密嚴堂、覺鑁元祿五年十二月、勅諡興教大師、

〔正法山誌 八〕祥雲寺　智積院

秀吉公、東山麓 在大佛殿東南、 建祥雲寺、請南化和尙住持焉、祥雲出執事一人、令預妙心評席、 南化遷化後、以祥雲附某藏主、失名、或曰、某藏主者秀吉門旗也、或曰織田常信之子也、 其人年弱、故南化令海南 南化法子 傳之、或謂、海南有奪自住之意、依此本山南化派歎擯海南、海南退去矣、某藏主後還俗矣、於是祥雲空席、公方遂變禪爲眞言宗、改寺名爲智積院矣、智積院之方丈、厨庫、皆舊祥雲寺也、天和二年壬戌七月十四日火災、方丈厨庫皆燒亡、

〔智積院文書 一〕隱居之砌、智積院長存房遺之、追而三所嘉口文口口之、

此度、隱遁之砌、根來寺能化之登臈、同彼寺破滅之體、并京都東山居住以來、法流展轉之儀、大形後住申渡條々、

一於根來寺能化者、近來始也、其故者、十輪院之先師道瑜法印者、下地爲客僧、依得學譽、滿寺之以衆評、百卅人令超座、爲交衆、依之客僧新故從客僧號能化、爲師也、例之又小池坊玄譽法印爲能化、此時學侶同心而仰、能化常客立合之論場初也、此兩人滅後巳來、能化壹人而四代令相續也、（空源□□玄超定識）、此時、能化之客僧始而定間、本來寺役之非所用、依之兩度之報恩講、二度之下院之論議之談義ヽ、兩學頭之躰、爲所作、從學頭能化被賴之由申傳、是非法之至也、但舊例二度之報恩講之論題者、學頭出之下院之題者、從五坊出事、

一定識房（賴玄）天正拾貳年（甲申）八月十七日遷化之後、常客之衆各引々分り、宮賢房（專譽）堯性（玄宥）可爲兩能化之由、從堯性殿衆企我執、及鉾楯、從夫致相之法席衰微之爲始事、

一翌年天正十三年（乙酉）三月中旬之比、大閤秀吉公、率軍兵發向、同廿二日、根來寺沒落ス、小池坊（宮賢）智積院（堯性）高野山令退散、雖召具各常客之衆、彼寺衆徒之妨障故、如例法談難叶、然處宮賢坊和州大納言（秀長）〇豐臣之應命、長谷寺移住、堯性房、城州高雄山籠居、而法談執行、其後、堯性北野之傍ニト

一字雖演法筵、非舊例事、

慶長三戊戌

一大閤御他界之後、家康公へ申上、根來寺雖有訴訟、終不遂其本意、於豐國給三ヶ所之坊舍、同知行（友國）貳百石有寄付、

堯性房先以令安堵事

一能化之始、道瑜以來、能化者不限小池智積院何之坊跡成共、以衆評撰碩學數輩中、號能化旨相定、彼寺沒落巳後、兩院相定令相續、彌衰微之爲基事、

於京々本山

一堯性房遷化之後、賴音房、長善房、後住之諍論、然處家康公依尊命、長善房（祐宜僧正）令入院、長善房老期

常塔

之砌者、愚僧江州總枝寺令居住、祐宣僧正懇志不淺處、不慮ニ不會而送年月、于時慶長十七壬子和睦相調令上洛處ニ、七月孟後、大御所家康公、三川之鳳來寺瀧本坊爲御使、駿府召之間、令下著、御前出仕之上、智積院より不會之由相問令和睦、可爲後住由仰出之間、右之旨趣致言上、御請申令上洛處ニ、常客定眼、能化より定、依之祐宣入熟不尋常折節、霜月十一日、僧正遷化之間、同十五日愚老令入院事、

慶長十八

一翌年癸丑三月、繼目爲御禮駿府令下向、於御前論義三座勤之、當寺御法度同知行之御朱印令頂戴、○中略

一於根來寺小池智積院者、中性院之爲門中故ニ、宮賢口下地之法流於爲傍流、實勝方於爲正流、小池坊之名ヲ指置而、中性院於名乘給、當院法流來故、又本名之小池坊於名乘給、既ニ當寺ニ彼法流有之上者、中性院より世上可申渡儀成共、上様、智積院於御存知之間、不得止上意難成故、先中性院之號者、東國下國之所化之下狀、書之以來以時分中性院ト名乘給ン儀、分別次第之事、

一當寺之法流者、實勝方、報恩院兩流、末代無間斷之様、一定相續、其中、實勝方可爲正流、于相上分明令他寺如此例多之也、祐宣僧正者、前後之血脈不首尾事、愚老之口銘肝、然共、學徒等恣企公事、住口之相續計種々、言上申故、法流相續之御沙汰無之間、不及是非儀也、併從祐宣至愚老、顚行意敎令相續、僧正別而私付秘癈故、後々可有相續事、○中略

右條々如件

寛永八年辛未卯月吉祥日 權僧正日譽 花押

智積院長存房

〔花洛名勝圖會七東山〕一乘山智積院新日吉社の南にあり、又五百佛山根來寺と號す、宗旨眞言新義なり、寺領五百石、寮七十軒、

本堂　本尊大聖不動明王（坐像長三尺許、興敎大師作、）高祖堂（本堂の左傍の上に有、弘法大師を安す、）開山堂（高祖堂の上、山の方にあり、興敎大師を安す）阿彌陀堂（開山堂の右傍にあり）鎭守社（開山堂の後左傍にあり、三部權現と稱す、春日、加茂、稻荷、伊勢、八幡等九座の神なり祭るを以て、九所明神とも號す、）藤森社（阿彌陀堂の傍にあり、地主神を祭る、）勸學院（本堂の前の傍にあり、論義、講釋等、其學頭こゝに於て司る、）學寮（此寮所にあり、一宗の所化僧こゝに集ひて勸學す、）方丈（客殿、書院、玄關等、名畫多く、庭中林泉の風景尤美觀なり、）當寺、始ハ祥雲院と號して、豐臣秀吉公の御子、棄君早世有し佛果の爲に妙心寺南化和尙を開基として、草創有しが、後に故あつて、妙心寺中玉鳳院に引移りぬ、然るに天正年中、豐太閤の爲に滅びし紀州根來寺ハ、覺鑁一派の總本寺たるに、絕にし事を、新義派の徒、しばしば慨歎して、御當家に愁訴す、是に依て、此間、封內東西五町、南北百五十間、寺領五百石を新に賜はりて、根來寺智積院と號し、眞言新義の總本寺とす、

〔智積院文書　一〕（上包）大坂秀賴公之御時、祐宣僧正より雲叔方江、所化部屋御立被下候樣ニと、御取持可給之趣被遣之書狀、

倘々貴僧へ御香信までに、松茸一折進之申候、

態文差越申候、正月御尋申候得共、不能拜顏候、此度、當寺之論談ニ付而、日本之客僧衆數多被參候ニ、部屋少くて堪忍不被成、迷惑仕候、先年百間御造可給由候得共、三十間出來して、七十間于今調不申、此度大佛之番匠等ニ、小屋等また御座候を、百間ばかり申請取候、且處々あししろの木も、百間ばかり造申候程申請候、度々片桐市正殿へ、態文札進じ候、貴僧ハ同心にて調申樣ニ、平ニ賴入申候、跡へ御座候所化衆之部屋も、悉破し申候、寺領も少く候故、修理等も不相成候、當寺にて論談申候へバ、豐國明神へ御法樂ニも被成候間、御塑味候樣ニ、伺入候、恐々謹言、

十月六日　　智積院僧正　花押

雲叔

進覽

〔續史愚抄靈元〕天和二年七月十三日戊午、智積院火、(堂舍佛閣無殘所云、番衆所記・永貞卿記、年代略記、)

寺領

〔寺鑑一〕新義眞言宗　京都　本寺　智積院

御朱印　高五百石

寺制

〔柳營禁令式一〕智積院法度

一爲學問住山之所化、不滿貳拾年者、不可執法幢事、

一所化衆不用能化之命、非法於有之ハ、可追放寺中事、

一所化衆中結徒黨企公事者、統領人可追放之、若統領不知もの上座壹人可擯出事、

右堅可守此旨もの也、

慶長八年四月十日　家康公　御朱印

寺職

〔智積院文書三〕仰出之覺

一被成下智積院致違背御條目之旨、今度不用能化之命、所化中結徒黨狼籍之働、甚以不屆之事、

一爲智積院後住江戸圓福寺從能化望之處、所化中不致承引剩器量不相勝之様申掠之、圓福寺儀、智積院、小池兩能化撰出之上者、不可及所化中之沙汰事、

依爲右之通、所化之輩、隨科之輕重、或流罪被召預之、或剝袈裟衣追放被仰付之、所謂、

上座 諶盛　上座 存識　中座 尊興

右三人者隱岐國江流罪

織田山城守江　上座 諶玄

松平兵部大輔江　同 文精

黒田市正江　同 文正

稲葉能登守江　中座 良甚

龜井能登守江　同　長仙

右五人者御預

上座亡存、上座仙音、中座敎精、中座順諦、中座覺印、中﨟定玄、中座存覺、中座堯與、中座堯與、在京都ニ之、

宗甚、在京都ニ之

右十人者、剝袈裟衣追放被仰付之、但堯覺宗甚者、京都有之間、於其元可被行同罪候、以上、

三月廿八日

蓮華王院 得長壽院 併入

蓮華王院ハ、京都東山ニ在リ、後白河法皇ノ勅願ヲ以テ、平清盛コレヲ造進シ、長寛二年、供養セシ所ナリ、俗ニ三十三間堂ト稱シ、千軀ノ千手觀音ヲ安置ス、

得長壽院ハ、鳥羽法皇ノ御願ヲ以テ、平忠盛之ヲ造進シ、長承元年、供養セシ所ナリ、此寺古來其所在ヲ詳ニセズ、或ハ云フ、コレ卽チ今ノ三十三間堂ニシテ、始メ得長壽院ト云ヒシガ、後白河法皇ノ時、蓮華王院ト改稱セシモノナリト、

名稱

〔伊呂波字類抄諸寺禮〕蓮華王院

〔拾芥抄諸寺下本〕蓮華王院後白川院御願、治承二十廿七供養、千手千一體、號新千體、

〔國花萬葉記山城二上〕卅三間堂　洛陽大佛に在り、蓮華王院と號す、　寺領十石六斗餘　鳥羽院御本願　平忠盛爲監吏監吏ハ奉行也　三十三間堂を造り、十一面觀音の像、一千一體を安置す、　崇德院、天承元年三月十三日、開眼堂供養、導師忠尋僧正なり、平愈山得長壽院と號す、　後白河法皇本願として、千手千體を造る、是を新千體と號す、此時蓮華王院と號す、

所在

〔花洛名勝圖會東山七〕蓮華王院

山城志云、長寬三年、後白河帝建蓮華王院、安觀音像一千一體、初鳥羽帝長承中、剏得長壽院、安觀音像一千一體、寶治中俱回祿、文永中再興、併爲一寺、

〔山城名勝志愛宕郡十五〕蓮。華。王。院。(中略)在鴨河東七條南、堂長六十四間一尺八寸六分、縱幅七尺三寸、

〔山城名勝志愛宕郡十五〕法住寺殿按、此御所、東瓦坂、西大和大路、南八條、北限七條歟、盛衰記云、御所東瓦坂、八條末西裏門、大和大路七條末北門、西大和大路、西門等アリ、此內御殿多シ、東殿、南殿、西御所、北御所、北殿、蓮。華。王。院。御。所。中新御所等アリ、

創建

〔百練抄二條七〕長寬二年十二月十七日、太上皇後白河供養蓮。花。王。院。准御齋會有行幸

〔愚管抄五〕後白河院は、多年の御宿願にて、千手觀世音千體の御堂をつくらんと、おぼしめしけるをば、清盛奉りて、備前國にてつくりて、まいらせければ、長寬二年十二月十七日に、供養ありけるに、行幸あらばやと、おぼしめしたりけれど、二條院はすこしもおぼしめしよらぬさまにてありけるに、寺司の勸賞申されけるをも、沙汰もなかりけり、親範職事にて、奉行して候ける御使しける、此御堂をば、蓮華王院とぞつけられける、

〔續世繼三內宴〕千體の千手觀音の御堂、蓮華王院建させ給ひて、天龍八部衆など、いきてはたらかすといふ計こそは侍なれ、鳥羽院の千體の觀音だにこそ、有難く聞え侍りしに、千手の御堂こそ、おぼろげの事とも、きこえ侍らね、

本尊堂塔

〔花洛名勝圖會東山七〕蓮華王院智積院の西、大佛殿の南にあり、俗三十三間堂と號す、妙法院宮の御持なり、寺領拾石九斗、本尊千手觀世音、坐像長八尺、大僧正行慶小佛師康慶法眼、康永法橋の合作なり、二十八部衆檀上に安す、東寺佛師運慶作、一千體千手觀世音立像各五尺許、內三百體は康慶、康永の作、二百體は運慶の作、其餘六條萬里小路、七條大宮、大佛師の作る處なりと云、本堂東向南北六十間一尺四寸六分、東西八間三尺七寸也、其を三十三間に柱を立るを以て、三十三間堂とよべり、築地の瓦には、豐大閤の桐の紋あり、是は大佛造營の時ともに、再建ありし故なるべし、

〔雪月花三〕一得長壽院三十三間堂桁行六十間五寸、梁行八間二尺二寸五分、

御拜十二間三尺三寸六分、二間三尺、

右御入用銀高不レ知

奉行　桑山修理亮
　　　中坊長兵衛

一同所築地、新造御修理共ニ、

右寛文二年寅九月より辰十二月迄、御入用銀、百六十一貫十六匁、

奉行　今井喜右衛門
　　　角倉與市

〔顯廣王記〕安元三年（○治承元年）十二月十七日壬午、蓮華王院、五重御塔供養也、導師前權僧正公顯、呪願山座主宮、有行幸、有勸賞、從三位實宗（上西門院）同長方（院）從四位上實敎（院）從五位上藤隆淸（行事中宮大夫隆季讓）法橋完敏（上座靜憲讓）法橋成覺（別當覺讃讓）康慶（佛師）賴全（繪佛師賴源讓）

〔五代帝王物語（後深草）〕建長元年三月廿三日、大燒亡有て、京中半に過て燒たり、北は押小路、南は八條、西は洞院、東は河原に至る、結句は、河原を吹こして、火焰飛來て、蓮華王院の塔に付て、やがて御堂に移る、云ばかりなき事也、中尊は出しまいらせて、千體の御佛も、わづかに二百餘體とかやぞ取出しまいらせける、されども燈明の消けるを、正しくかきたてさせ給ひたりける、千手をバ取出まいらせたりけるを、御供養の時、此佛をも薄をとして紛らかし參らせたる、正體なき事也、物の千になりぬれば、必精靈ありと申せば、生身の千手にて御座しけるにや、

〔增鏡（七内野の雪）〕世の中とかくさはがしとて、年號かはる、三月十八日、建長になりぬれど、なを火災しづまらで、廿三日、また〳〵あねの小路むろまち、からはしの大納言雅親の家のそばより、火いできて、百よちやうやけたり、おびたゞしとも、いふかたなし寬元四年の六月にも、おそろしき火侍りしかど、このたびは、なをそれよりもこえたり、（○中略）あかつきよりいでたる火、夜に入までき

三十三間堂大矢數

雜載

えず、ひつじの時ばかりに、蓮華王院の御塔に、もえつきければ、にはかに院も御幸なる、御みちすがら、けぶりをわけさせ給ふ、いとめづらかにあさまし、攝政殿も、御くるまにまいり給へり、三十三間の御堂の千體の千手、一時のほのほに、たゞひ給へば、不動堂、ほくとたうも殘らず、寶藏鎭守ばかりぞ、からうじてうちけちにける、後白河院の、さばかり御心ざしふかうおもほしたちて、長寛二年、供養ありし後は、やむごとなき、御てらなりつるに、あさましなど、いふもをろかなり、〇下略

〔岡屋關白記〕建長三年八月十日戊戌、今日蓮華王院上棟也、去々年三月廿三日燒失、以讚岐國被營作之、件國禪閤知行也、巳時計太上皇〇後嵯峨有臨行、御直衣、御冠、小庇御車、御隨身重服巾、公卿直衣、殿上人衣冠、如一日、

〔花洛名勝圖會〕七東山蓮華王院〇中略

右三十三間堂の裏椽側にて行ふ所の大矢數の濫觴は、新熊野觀音寺の別當梅坊といへる僧、射術を好みて、八坂の靑塚の的場へ通ふ歸るさ、此堂に憩ひ、射術の程を試みしより始まれりとぞ、爾して後、連年、天下列侯の藩士、競ふて弓勢を試むことゝす、多くは夏月長日の折を以て、先堂下の芝生に芝射を練し、然して堂上に登り、百射或は千射、または日矢數等おの〳〵の意に任せてこれを行ふ、殊に大矢數には、暮るより篝を焚て翌朝にいたる、通矢檢證の役人立並び、非常警固の火消役は、纏を振立、すべて其樣いと〳〵嚴重なり、その形勢を見んとて、諸人群をなすこと雲霞の如しこれ昇平武を鳴らすの一大盛事といふべし、

〔雍州府志〕四寺院蓮華王院　近世、武家射藝者、每初夏登此堂、自曉至暮放矢、其數至一萬、其內直發者是謂通矢、此堂亦妙法院之所主、而坊官松井三河監之、凡三十三間、每一間量法二間也、故其放矢之際六十六間也、

〔吉記〕壽永二年七月廿八日庚寅、參院、蓮華王院

〔明月記〕建久十年〇正治元年正月十八日、早旦、閭巷說云、前右大將〇源頼朝依所勞獲麟、去十一日出家之由、

以二飛脚一夜前被レ申レ院、仍以二公澄一爲二御使一、夜中可二下向一由被レ仰二父公朝法師一、又爲二宣陽門院御使一相共馳下云々、朝家大事何事過レ之哉、怖畏逼迫之世歟、(〇中略)蓮華王院御幸(〇後鳥羽)止了云々、

建永二年正月十八日、日入之程參二大納言殿(東帶)一見參、良久聞二御幸(〇後鳥羽)成由一、後參二儲蓮華王院一、先二位殿御車云々、(女房御車二、出車二也、)入御、師經卿御共、

〔增鏡(七北野の雪)〕文永も三年になりぬ、卯月に蓮華王院供養に御幸あり、一院は(後嵯峨)あか色のうへの御ぞ、新院は(後深草)青色の御袍たてまつれり、女院(大宮)の御車に、平准后もまいり給ふ、(〇中略)御導師は聖基僧正、(〇中略)御願文の清書、經朝の三位、料紙は、むらさきの色紙、額は、かの建はじめられし長寛に敎長かきたりけるが、燒ざりければ、此度も、それをぞ用られける、

〔五代帝王物語(龜山)〕同(〇文永)三年四月廿七日、蓮花王院御供養あり、建長後、年久造り立られて、御供養あれば、行幸(〇龜山)御幸(〇後嵯峨、後深草、大宮院、)ありて、僧俗目出きはれにてぞ有し、

〔古今著聞集(二釋敎)〕永萬元年六月八日、とらのとき蓮花王院の承仕が夢に、後戸の坤の角より、北へ第四の間に、もつての外黑き山ありけり、ふもとに承仕ありけるが、件の山の岑より、やんごとなき老僧出來ていはく、抑此水をば、何の料に掘ぞと侍りければ、(〇中略)此水は、細くみゆれども、八功德水、甘露利益含識方便水にてあらむずるぞ、よく〳〵精進して汲べきなりといふと見て、夢覺にけり、去程に件の後戸のみぎりの下に、現に水あり、貴賤汲けれども盡ざりけり、久くまざる時もあまらず、不思議なりける事なり、當時その水見えず、いつごろより失にけるにか覺束なし、

○

得長壽院

〔伊呂波字類抄(止諸寺)〕得長壽院(鳥羽院御願、長承元年三月十三日供養、導師忠尋座主、)

〔中右記〕天承二年(〇長承元年)三月十二日、民部卿(〇藤原忠敎)送二消息一云、此御影之名、先日依二公卿僉儀一、法成就院之由定申了、可レ用二其號一由被二仰下一也、關白殿(〇藤原忠通)令レ書レ額給也、而一昨日、師頼大納言、内々令

申云、就字與熟字同義也、然者熟字隨火、仍可有禁忌云々、依御念佛、昨日御幸法勝寺之次、被問僧侶、還御之後、又被問參會公卿之後、以顯賴相公、可申殿下者、夜及深更、去夜不參、今朝院(○鳥羽)召遣顯賴、仰云、難者申旨、義不分明、然而可用得長壽院之由、可示關白者、殿下令申給云、難義也、無謂代者、得長壽院、於勅定者、不可有左右、以之可改書額字者、　十三日甲辰、今日千體觀音堂供養、可被行也、(○中略)　得長壽院(額名、長尾宮〈覺性法親王、白河皇子〉被申、關白殿令書額給、)

〔拾芥抄諸寺下本〕長壽院(○鳥羽殿、三十三間、十一面、千一體、)

〔老人雜話上〕得長壽院は、今の三十三間堂にあらず、鳥羽院の御造營なれば、昔鳥羽に有けんかし、蓮華王院は、後白河院の御造營にて、新千體佛を安置す、今の三十三間堂也、增鑿拾芥抄にも明なり、

〔濫觴抄下〕得長壽院　天承二年(○長承元年)壬子三月十三日甲辰、供養之御願文、敦光朝臣、依造進賞、平忠盛朝臣昇殿、

〔朝野群載十一廷尉〕左大臣宣、奉勅、太上天皇、鳳城之左、鴨水之東、建三十間之精舍、安一千軀之觀音、殊擇良辰、新設齋會、爰爲僧白業之勝因、忽宥金科之禁憲、更大赦天下、今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺、未發覺、已結正、未結正、繫囚見徒、私鑄錢、犯八虐、故殺謀殺、强盜、竊盜、常赦所不免者、皆悉赦除、而所司稽留、速不頒下、恐令夏其(○夏其恐夏蓋誤)之囚徒、遲知率澤之洪化、不待施行之符、宜從原免之例者、

天承二年三月十三日　右衞門少尉藤原朝臣盛通奉

〔帝王編年記二十崇德〕長承元年三月十三日、太上天皇御願、得長壽院(三十三間御堂、一千一體千手觀音、十一面像、)供養、

〔百練抄六崇德〕長承元年三月十三日、得長壽院供養、(上皇臨幸、備前守忠盛造進之、)

〔源平盛衰記一〕平家繁昌并得長壽院導師事

忠盛朝臣備前守タリシ時、鳥羽院御願得長壽院トテ、鳳城ノ左、鴨河ノ東ニ三十三間ノ御堂ヲ造、

リ進ジ、一千一體ノ觀音ヲ奉居、勸賞ニハ、闕國ヲ賜ベキ由被仰下、但馬國ヲ賜フ、其外結緣經營ノ人、手足奉公ノ者マデモ、程々ニ隨テ蒙勸賞、其實ノ御善根ト覺エタリ、崇德院御宇長承元年壬子二月十六日ニ、勅願ノ御供養有ベシト、公卿僉議有テ、同二十一日ノ午ノ一點ト被定タリケルニ、其時刻ニ及テ、大雨大風共ニ夥カリケレバ延引ス、同廿五日又有僉議、廿九日ハ天老日也、勅願ノ御供養宜シカルベシトテ、可被遂ケルニ、氷ノ雨大降、牛馬人畜打損ズル計ナリケレバ、上下不及出行、又延引ス、禪定法皇大ニ被歎思召ケリ、○中略御布施ニハ、千石千貫沙金千兩、其外被物裹物、庭上岡ヲナセルガ如シ、實ニ御善根ノ志ハ、施物ニ色顯レタリ、及夜陰導師退出ス、爲飾佛庭、爲照燈乘萬燈ヲ炬サレタリ、倩モ彼寺ノ異名ヲバ、平愈寺ト申也、導師祈願ノ句ニ、衆病悉除、身心安樂ト高ラカニ唱ヘ給タリケルガ、其聲洛中白川ニ響ケリ、齋宮ノ女御折節怪キ痞ヲイタハラセ給ケルガ、御限ト奉見ケルニ、衆病悉除ノ風(ホノカ)ニ聞召テ、則御平愈、其外一時ノ内ニ、遠土洛陽ニ、上下男女二萬三千人ノ病愈タリケルニ依テ也、異說ニハ、二宮地主權現ノ非人ト現ジテ、日光月光十二神將ヲ相具シテ、說法ト云事アリ、併事ニテアリケル歟、

〔平家物語〕一殿上のやみうちの事

しかるにたゞもり、いまだびぜんの守たりし時、鳥羽院の御願、とく長壽院をざうしんして、卅三間の御だうをたて、一千一體の御佛をすへ奉らる、くやうは天承元年三月十三日なり、けんしやうには、けつ國を給べきよし仰下されける折ふし但馬の國のあきたりけるをぞ下されける、上皇猶御かんのあまりに、内のせうでんをゆるさる、

〔長秋記〕保延元年四月廿八日辛未、於得長壽院被供養觀音經、○中略今日圖繪丈六百體觀音於綵、公卿侍臣中宮女房等進、是供養講師權僧正忠尋、題名僧正十口、大僧正參仕、供養畢給布施、還御時非左金吾人々皆可參、女院○美福門院御幸者民部卿留了、下官乘車自閑路參仕、上皇○鳥羽於泉殿有御佛

供養事、女院還御二條殿、

〔本朝世紀〕仁平三年四月廿三日壬申、今日、院〇崇德於得長壽院、有楊柳觀音供養事、仍有御幸、毎年事歟、

〔兵範記〕仁平三年四月廿三日壬午、於得長壽院、有楊柳觀音供養、巳剋、參院、即御幸、兩院〇崇德鳥羽御同車、

名稱
所在
創建

清水寺

清水寺ハ、京都東山ニ在リ、坂上田村麻呂ノ建立ナリ、本尊ハ開山延鎭作ル所ノ金色十一面四十手觀世音菩薩ニシテ、西國第十六番ノ札所ナリ、法相宗ニ眞言ヲ兼ネテ、南都一乘院ニ屬ス、

〔伊呂波字類抄 世諸寺〕清水寺山城國愛宕郡八坂郷

〔書言字考節用集 二乾坤〕清水寺（セイスイジ）洛陽東山、事詳釋書、

〔東寶記 一〕東寺草創事〇中略

嵯峨天皇宸筆 勅書

勅

得大納言坂上大宿禰田村麿解狀偁、以去延暦廿四年十月十九日、蒙官符、賜山地壹處、建立私寺、號清水寺、望請、因准傍例、賜印一面、爲件寺之長財、加以壞私寺、移東西寺之日、田村麿定將被免件清水寺、爲鎭護國家之庭、則以田村麿之苗裔、爲撰成寺家之職、以僧延鎭之門徒、爲修治寺家之司者、依請、

弘仁元年十月五日

〔清水寺緣起〕抑昔有一聖人、名曰延鎭、蓋報恩大師入室弟子也、六時三昧之行年久、弘法利生之願日積、著蘿衣以出聚落、杖木叉以入山林、寶龜九年四月八日、抖擻之次、尋到勝地、是則山城國愛宕郡八坂鄕、東山之麓也、翠嶺圍繞、自移爐峯之雲、瀑泉飛流、如倒銀漢之浪、溪邊有草庵之居、庵中有白衣之人、延鎭聖人問云、居士住此經幾年哉、名姓爲誰、年齡不審、居士云、名乃行叡、性在隱遁、心念大悲之觀音、口誦千手眞言、棲居此地、久避喧囂、露往霜來、齡及二百、言談未畢、居士忽失、延鎭驚事之希有、悟地之靈勝、止宿庵中、練行瀧下、爰大納言坂上卿〇田村麻呂遊獵之次、欲飮冷水、尋得飛泉、相會延鎭、殊以歸依、便占件地、可建伽藍之由、言約已畢、延曆十七年七月二日、延鎭聖人與坂大將軍、同心合力、始奉造金色十一面四十手觀世音菩薩像、假造寶殿、所奉安置也、號清水寺、又名北觀音寺也、同廿四年、奏請、寺地永以施入、便以茲寺爲柏原天皇御願矣、大同二年、亞相宗室三善命婦壞運寢殿、建立佛堂、康平七年八月十八日燒亡、同十一月三日造畢云、

〔扶桑略紀拔萃桓武〕延曆十七年七月二日、鎭守府將軍坂上田村万呂、山城國愛宕郡八坂鄕東山清水寺、金色卅枝手觀世音并像一體奉造、幷破渡其舊居五間三面、檜皮葺寢屋、以爲堂舍、件寺緣起云、寶龜九年戊午四月、沙彌延鎭夢告云、去南向北、覺後淀有金色一支之水、卽尋金水之源、同月八日、至于清水瀧下、於是一草庵中、有白衣居士、年齒老大、白髮皤々、延鎭問云、住此幾年、姓名如何、居士答云、名曰行叡、隱居此地、二百歲許、心念觀音威力、口誦千手眞言、年來待汝、適幸相來、我有東國修行之志、其間替我可住此處、草庵之處當可創堂字地、此前株者、可造觀音木也、吾若遲還、早可企此願、忽指東去已了、雖有相待、遂無來期、仍尋求之處、山科東峯落所著履、定知觀音所現歟、又歷年序、雖果彼願、然間、延曆十七年、田村麿將軍、爲助產女、求得一鹿、訪水來到清水瀧下、延鎭具陳上件之旨、因茲將軍、建立此寺矣、已上出緣起、

廿四年、同年官符云、東山清水寺、右大臣宣、奉勅、件寺地殊賜參議從三位坂上大宿禰田村麿、永爲私

堂增

寺。國宜承知、依宜行之、符到奉行、參議從四位上右大辨兼行左近衞少將勘解由長官阿波守秋篠朝臣安人、清水流記云、有勅除官寺外、諸建立寺皆悉破却、寄附東大寺、爰田村麿卿奏聞公家、賜官符、已上

〔雪月花三〕音羽山清水

本堂（桁行十四間六寸、梁行十間五尺、）　四方（長延二四十五間九尺三寸三分）　車寄（三間五尺二四間四尺）　東西樂屋（二間五尺七寸、同事、）　兒舞堂（九間四尺七寸、五間、高サ七尺、）　奧千手堂　四方緣舞臺　阿彌陀堂　釋迦堂　後廟　護摩堂　朝倉堂　田村堂　經堂　三重堂　西門　樓門　鐘樓　裏門　廊下　地主權現　同拜殿　鳥居　辨財天社　地藏堂　瀧ノ宮（一間三尺一寸、深サ二十八間、）　瀧高（九尺三寸）　瀧下休所　春日社　鳥居　馬留、其外所々番所塀、　石垣共

右寬永七年午、同十年酉迄、御造營有リ、

右諸用銀高相知不申候

奉行　竹中筑後守

〔花洛名勝圖會六東山〕音羽山清水寺○中略

本堂（南向、檜皮葺にして、舞臺殿の造形を摸せり、前に緊造あり、世人之を舞臺と稱す、往々參籠の男女、祈願成就不成就を試さんとて、此舞臺より飛下る事あり、一奇事とす、寺法は堅く制禁し、堂內商店を出すものなして、これを警察せしむ、）

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平六年八月十八日、清水寺燒亡、取出觀音像、○又見帝王編年記

〔國太曆〕貞和五年二月廿七日、今日午剋許、當巽有火終日、傳聞清水寺悉拂地燒失、本佛奉取出云々、

清水寺炎上幷造營間事

康平六年八月十八日、戌剋、清水寺燒亡、於觀音像者奉取出之、

同年十月廿四日、被下宣旨云、

應給榮爵壹人事

右得清水寺去九月廿六日解狀偁、謹撿案內、件寺以去八月十八日戌剋燒亡、爰以同廿八日始木造

致其營、仍爲令宛作料之不足言上如件、望請天裁被下件營僧者、將致興隆佛法之勤、彌奉祈御願圓滿之由者、左中辨藤原朝臣泰憲傳宣、權中納言藤原朝臣能長宣、奉勅依請者、

康平六年十月廿四日　　左大史　小槻宿禰奉

同〇康平七年八月十一日、清水寺供養也、導師權律師良秀請僧百十口云々、

寛治五年三月八日、寅剋、清水寺拂地燒亡、於觀音像者奉取出云々、

嘉保元年二月廿三日、新造清水寺供養也、寺家結構營、

土木功都鄙貴賤、隨分奉料物云々、〇中略

正元元年四月廿七日、未剋、清水寺本願堂、地藏堂、小神二社、塔二、塔撿非違使宿、中門上下、南剋、階廊、車寄、僧房等燒亡、所殘觀音堂、阿彌陀堂、釋迦堂地主、大門車宿等也、

文永十一年十二月十九日子剋、清水寺車宿、大門西門廊、塔二基、　本願堂等燒亡、觀音堂、地主、阿彌陀堂等無爲云々、

正安二年三月六日、清水寺塔供養也、導師法印隆遍當時別當　院司右少辨光房、主典代東市正俊義、廳官左衞門少志重高、同守護官人左衞門少尉職直、章敏等參向之、

文保元年正月五日、未剋、清水寺塔幷鐘西廻廊等燒亡、

嘉曆三年三月十九日、清水寺塔供養也、導師僧正隆遍當寺別當　院司右少辨長光後院別當　主典代前河内守秀俊、廳官左兵衞尉季量、同守護官人左衞門尉親憲、大志章秋等參向之、

右例依仰注進如件

貞和五年三月二日　　左大史小槻清澄

〔本朝世紀〕久安二年四月十五日甲寅、今日寅剋、東山清水寺燒亡、尋其由緒、頃年以來、住僧等之中、有

一類凶黨、不隨寺家別當法印長圓命、爰長圓奏聞公家之後、追却件凶黨畢、其後凶黨等、侮過謝咎、雖陳可歸住本寺之由、長圓確執不許、爰凶黨等竊議云、我等數輩流落、飢寒難忍、餘命然生之間不若與長圓之黨一戰棄命、事若成者、如本蹤居寺中、事若敗者、放火與觀音靈像共燒失、仍去夜半、被甲冑帶弓箭之者數十人、入居堂中、長圓聞此事、忽發軍兵、令攻擊凶黨等、箭盡力窮、放火燒堂、寺僧等冒白刃、凌青煙奉舁出觀音靈像、見者莫不悲嘆、堂舍數宇一旦爲灰燼畢、天喜六年燒失之後、今亦有此事、豈非法滅之地、

三年三月二十七日庚寅、今日淸水寺供養也、件寺、去年燒失之後、別當法印長圓、殊以營造之、又天下貴賤施物如山、仍成不日之功、儲一日法會、奏八音妙典、以山階寺別當權大僧都慈勝爲導師、以權少僧都宜勝爲呪願、七僧之外有請僧百口、自院羽○鳥幷皇后宮廳被送之有施物、

〔源平盛衰記〕二額打論附山僧燒淸水寺幷會稽山事

去程ニ、大衆ノ下向ハ、平家ノ事ニハ非ズ、去ル七日ノ額立論ニ、會稽ノ耻ヲ雪ンガ爲ニ、興福寺ノ末寺ナレバ、淸水寺ヲ燒拂ハントテ、下ルト言ケレバ、淸水法師、老少ヲイハズ騷アヘリ、俄事ニテハアリ、物具ノ有モ無モイハズ、二手ニ分テ相待ケリ、一手ハ淸水、淸閑寺ノ境堀切テ、逆茂木ヲ引テ、瀧ノ尾ノ不動堂ヨリ、木戶口マデ五百餘騎ニテ固メタリ、一手ハ山井ノ谷ノ懸橋引落シテ、西ノ大門ニ垣楯カキ、食堂、廻廊、木戶口マデ、一千餘騎ニハ過ザリケリ、京童部ガ申クルハ、蟷蜋擧手招毒蛇、蜘蛛張網襲飛鳥ト云喩ハ此事ニヤ、山門ノ大勢ニ敵對シテ、危々トゾ咲ケル、山門大衆、追手、搦手二手ニツクル、搦手ハ、大關、小關、四宮川原モ打過テ、苦集滅道ヤ、淸閑寺、歌中山マデ責寄セタリ、追手ハ、西坂本下松、今道越ヲ打過テ、淸水坂晴尾ノ觀音寺マデ責付タリ、淸水法師モ思切、楯ノ面ニ進出デ、散々ニ戰ケレドモ、大勢雲霞ノ如クナリケル上ニ、時剋ヲ經ズ、ヤガテ坊舍ニ火ヲ懸タリ、折節西ノ風烈ク吹テ、黑煙東ニ覆ヒケレバ、寺僧今ハ防戰フニ無力、本尊ヲ負、坊舍ヲ捨

テ、延年寺、寺築地、二ノ閑道ヘゾ落行ケル、〇中略昔嵯峨天皇ノ后、春子女御ト申ハ、二條右大臣坂上田村麻呂ノ御娘也、御懷姙ノ時、御產平安ナラバ、我氏寺ニ三重ノ塔ヲクマント御願ヲ被立タリ、其驗ニヤ、平ニ王子御誕生アリ、第三ノ王子ニ、門居親王ト八此御事也、御宿願ヲ遂ゲラレンガ爲ニ官符ヲ申、承和四年ニ建立セラレタリシ、三重ノ塔婆、空輪高ク燿テ、寶鈴雲ニ響シモ燒ニケリ、猛火コヽニ止テ、本堂一宇ハ殘タリ、大衆既ニ歸上ラントシケルニ、東塔南谷敎光坊大阿闍梨仙性トテ、學匠ノ而モ大惡僧ナリケルガ、進出テ、僉議シテ云、罪業本ヨリ所有ナシ、妄想顚倒ヨリ起ル、心性源深ケレバ、衆生卽佛ナリ、罪トシテ更ニ不恐、本堂ニ火ヲサセヤ〳〵ト申ケレバ、衆徒尤尤ト、一同シテ手々ニ火ヲトモシツヽ、堂ノ四方ニ付ケタレバ、黑煙ハルカニ立上リ、赤日ノヒカリモ見エザリケリ、

○按ズルニ、此境堺相論ノ事ハ、又淸閑寺編ニモ載セタリ、參看スベシ、

〔百錬抄八高倉〕治承三年五月十四日、祇園大衆等發向淸水寺、又淸水寺僧合戰、相互放火堂舍人屋、多以炎上、此中八坂塔爲灰燼、事起淸水寺四至內住人、差祇園御靈會馬上之間、鬪亂出來云々、

〔吾妻鏡二十四〕承久二年四月三日壬戌、大夫尉惟義使、自京都到來、去月〇中略廿六日、淸水寺本堂燒失之由申之、當寺桓武天皇御宇、延曆十七年戊寅七月二日、大納言田村麻呂、壞渡私宅草創云々、

〔太平記二十七〕天下妖怪事附淸水寺炎上事

貞和五年正月ノ頃ヨリ、犯星客星無隙現ジケレバ、旁其愼不輕、王位ノ愁、天下ノ變、兵亂疫癘有ベシト、陰陽寮頻ニ密奏ス、是ヲコソ如何ト驚處ニ、同二月二十六日、夜半計ニ、將軍塚夥シク鳴動シテ、虛空ニ兵馬ノ馳過ル音、半時計シケレバ、京中ノ貴賤、不思議ノ思ヲナシ、何事ノアランズラント、魂ヲ冷ス處ニ、明ル二十七日、午剋ニ、淸水坂ヨリ俄ニ失火出來テ、淸水寺ノ本堂、阿彌陀堂、樓門、舞臺、鎭守マデ、一宇モ不殘炎滅ス、火災ハ尋常ノ事ナレ共、風不吹、大ナル炎遙ニ飛去テ、嚴重ノ御

新禱所、一事ニ燒失スル事、非直事、凡天下ノ大變アル時ハ、靈物靈社ノ回祿定レル表事也、

〔荒曆〕應永十三年九月十二日丑刻、清水寺塔幷西門等燒了、貞和五年二月、本堂以下火事、今年當五十八年歟、

〔敎言記〕應永十三年九月十二日、燒亡、清水塔已下、田村將軍堂、西門

〔續史愚抄稱光〕應永二十九年四月二十九日乙卯、有清水寺堂供養、（自頃日始行云、或作自二十七日歟、）

〔幻雲稿〕清水山新建慈願寺幹緣疏（有序、明應七年戊午、）

日東之爲俗也、歸吾佛者夥矣、而觀音大士爲之先也、院々設其像以屈膝焉、家々唱其名以盈口焉、故靈感昭々于世、三十三處爲之最也、○中略洛陽清水寺其一也、寺廼延曆十七年、鎭守府將軍坂上田村氏捨宅所建也、初法師延鎭到茲地、遇白衣老翁、得大士像材、而鎭以無貲因循送歲、迨于田村𦅸化、剏之以償夙志、今之大士像是也、慈與悲拔感應日新、件々具于寺之記、嘗應仁兵馬之役、寺罹畢方災、飛樓湧殿蕩爲焦土矣、數年之後、兩京收復、願主某申慕衆竭力、重換新銘、彼之巡而禮者、不異往時、若男若女、寓宿堂中、吾徒恐有裾襦參錯佛衣巾之誚、以故晝則留矣夜則去矣、有一比丘、竊謂禁汚穢、護此淸淨、則無緣之慈缺矣、否則淸淨伽藍爲有塵矣、不若別構一宇、凡聖同居、雖然囊無一簪、將奈之何、爲乎千仞山成於一簣、万里行始於一步、予何人哉、不可不爲、輙持短疏、徧扣詰𡑞、伏望上自金門、下至白屋、撥轉願穀、擘破慳囊、不論多寡、慨然樂施、然則榜以慈願、安以釋迦、釋迦觀音孰先孰後、昔觀音示現于靈山、輔弼于釋迦、今顧此山北有一峯、爲鷲嶺、人云境云豈偶然哉、諸人儻題名氏於疏尾、則二十年前親聞金口者也、可謂靈山一會、儼然未散、

〔大乘院寺社雜事記〕文明元年七月十二日、一昨日、○十日淸水本尊、大塔以下、幷六道、建仁寺、各悉以燒亡、日東御陣手放火云々、珍事、

〔梵舜日記〕寬永六年九月十日、淸水寺、幷奥千手堂、其外堂塔悉炎上、成願院○塔頭ヨリ出火也、京中ノ

貴賤悲中儀也、

〔雪月花 三〕一　泰産寺　子安塔 八尺四方

寛永六巳年、淸水寺諸堂炎燒、同七年より御造營始ル、然ルに、鐘樓　西門　春日社　馬留ハ燒亡なし、故御修理のみ被仰付、此節泰安寺も、御修復被仰付候、

本尊

〔和漢三才圖會 七十二 山城 末〕音羽山淸水寺　在洛東山○中略

本尊　楊柳觀音　坂上田村麻呂建立

奥院千手觀音　行叡居士草庵跡

〔出定笑語附錄 一 上〕京淸水ノ觀音ヲ、惡七兵衛景淸ガ、信仰シタルニ依テ、景淸ガ首ヲ剣ラレントスル時、觀世音ガ、ソノ身代リニ立テ、其時ニ首ヲ背向ニ付テ、能相ナルモノガ接ダニ依テ、今ニ此觀音ヲ、後カラ拜マセルト云フコトヂヤガ、是ラモ、僧ノ僞リニ相違ナイ、ナゼナレバ、景淸ガ身代リニ立ホドノ、神靈アル觀音ガ、自分ノ首ヲ接グ時ニ、ソノ接人ガ、後マヘニ接ヲ知ンデ、其通リニナツテ居テ、指圖モセヌト云コトガ有ルモノカ、

宗派寺格

〔花洛名勝圖會 六 東山〕音羽山淸水寺　八坂塔の東にあり、宗旨は、法○相○眞○言○兼○學○、南都一乘院御門跡に屬せり、寺領百三十三石、本願成就院外塔頭八ケ寺、西國三十三所第十六番の札所なり

寺領

〔寺鑑 上〕無本寺寺院○中略

南都一乘院御門跡末

京淸水寺

法相眞言兼學　成就院

音羽山

御朱印　高百三拾石餘之内　高百拾三石餘

獻上 一卷東　拜領 黃金一枚 時服二

參詣

〔元亨釋書 二十六 資治表〕寛治四年冬十月、天皇河○御幸淸水寺、

寛治四年、帝宿₂清水寺₁一七日、

〔枕草子十〕さわがしき物〇中略

十八日、清水に籠合たる、

〔玉葉和歌集十六雑〕法成寺入道前攝政〇藤原道長清水寺にこもりて侍けるにつかはれたる、

花山院御製

瀧のおともいかゞ聞らん都だに物あはれなる比にもあるかな

〔長門本平家物語二十〕抑平家の侍ども討もらされて、無₂甲斐₁命計り生たる數多有けり、〇中略主馬入道盛國が末子に、主馬八郎左衞門盛久、京都に隱れ居けるが、年來の宿願にて等身の千手觀音を造立し奉りて、清水寺の本尊の右わきに居奉りけり、盛久ふるにも照にもはだしにて、清水寺へ千日毎日參詣すべき心ざし深くして、あゆみをはこび、年月を經るに、人是を知らず、平家の侍打もらされたる越中次郎兵衞盛次、惡七兵衞景清、主馬八郎左衞門盛久、是等は宗徒のもの共なり、尋出すべき由、兵衞佐殿、北條四郎時政に被₂仰含₁けり、主馬八郎左衞門盛久は、京都に隱れ居たる由聞えけれど、北條京中を尋もとめけれども、更に尋得ず、ある時下女來りて、誠にや、主馬八郎左衞門を御尋さふらふなるか、かの人は清水寺へ夜ごとに詣給ふなりとぞ申ける、北條悦て、いか成ありさまにて詣するぞととふ、白直垂き給て、ものもはき給はず、はだしにて詣づる人にて候なりと申ければ、清水寺邊に人を置き、うかゞひ見するに、ある時白直垂のしほれたるに、はだしにて盛久詣けるを、召捕て兵衞佐殿へ奉る、〇下略

〔満済准后日記〕應永三十一年九月十六日、自₂今日₁公方樣〇足利義量清水寺御參籠、御座所寶福寺、如₂先先₁五壇開白以前可₂參申入₁旨被₂仰出₁間俄馳參了、　三十二年正月十八日、公方樣今日清水觀音へ御參詣、還御ニ清水妙雲院へ渡御云々、先々廿八日渡御也、當年被₂引上₁先御、

雜載

〔碧山日録〕長祿三年二月十七日甲午、龍子詣于清水觀世音堂、留宿、而致彌念恭敬、以一七日之期、予許焉、此日晩而赴之、

〔二水記〕永正十八年六月十三日、薄暮詣清水寺、宮御方密々渡御也、青蓮院宮、竹内殿等御誘引也、女中衆少々被參詣、男衆、下官、山科、庭田、綾小路、幷勸修寺侍從、廣橋、同坊城等也、於法華堂有御酒宴、雨後月光清朗、山色添景、近頃興也、

〔多門院日記〕元龜元年三月廿日、アハダロ之通リ清水寺へ參リ了、思外ナル堂舍ノ式驚目了、

〔二中歷四僧數〕清水寺三百三十三人

〔好古小錄乾〕清水寺緣起二卷畫光信、書當時公卿集書、癸巳初夏、終日展翫ス、按ニ宣胤卿記云、永正十四年九月十七日、清水寺緣起繪詞、余淸書、三十二段内、五段分遣、甘亞相、彼卿傳達也、繪者土佐刑部大輔光信書之、

〔新古今和歌集二十釋教〕なほたのめしめぢがはらのさしも草われよのなかにあらんかぎりは

何かおもふなにかはなげく世の中はたゞあさがほの花のうへの露

此歌は、清水觀音御歌となん、いひつたへたる、

〔百練抄八高倉〕嘉應元年三月廿六日、近日、清水寺瀧水枯失、去正月、自瀧上蛇百許出來、占求之處、山崩瀧渇歟云々、今亦如此、爲奇、

〔雲萍雜志一〕洛の清水寺なる音羽の瀧は、應永年間に、新に水口をつけて、此ところへ水を引たり、そのむかしは、音羽山のうち、所々へ落たりといへり、此瀧を汲て湯あみするときは、瘡を癒すこと功あるをもて、諸人下流を汲めり、

〔法然上人行狀畫圖十七〕上人〇源空清水寺にて、說戒のついでに、罪惡の凡夫なれども、本願をたのみて念佛すれば、往生うたがひなきむね、ねんごろにすゝめたまひければ、寺家の大勸進沙彌印

歳ふかく本願を信じ、ひとへに念佛に歸す、是によりて、文治四年五月十五日瀧山寺を道場として、不斷常行念佛三昧をはじめに、○中略いまに退轉なし、

正法寺 靈山寺 附入

名稱 所在

正法寺ハ世ニ靈山ト稱シ、京都東山ニ在リ、此地ニ舊ク靈山寺ト稱スル寺院アリシヲ、僧國阿此ニ住シテ一遍ノ法流ヲ唱フ、是ヨリ時宗ニ屬ス、

〔國花萬葉記 二上山城〕靈山正法寺 又鷲禪寺ト號ス、東山清水寺之北、 寺領廿三石五斗

本尊齒佛如來 元祖傳教大師中興國阿上人

寺中坊舍 長嚴坊 宜阿彌 恩阿彌 重阿彌 權阿彌 朱阿彌 與阿彌 丹阿彌 連阿彌 宿阿彌

〔雍州府志 四寺院〕正法寺 號靈鷲山、今世稱靈山、元天台宗、而寺產有二十石餘、其後一遍上人之派國阿彌住焉、自爾爲時衆、事跡同于圓山、堂有彌陀像、稱齒佛、相傳此衆一旦自生齒牙、二月幷八月時正中日午、於堂內有踊躍念佛、普廣院義教公據此山爲城、故被寄庄園於此寺、依之建碑、又有中興國阿堂、此人甚崇伊勢太神宮、時々參詣、終無行路之難、故詣伊勢太神宮者、必詣此堂、上人木像之傍有伊勢行脚所著木屐幷柱杖、拜上人後戴此杖履、欲無行路難也、毎年九月十一日修國阿忌、供花數瓶、

創建 開山

〔山城名勝志 十四愛宕郡〕阿彌陀堂 國阿上人開基

傳云、釋國阿、諱國空、姓源氏、八幡太郎義家十代孫也、俗名石堂右馬頭賴房 或云賴茂男國明、文和四年出家、本名明阿、盛年而出家、汲一遍上人流、深信伊勢熊野、應永十二年九月十一日化、

石堂系圖云、賴房、右馬頭、住東山靈山正法寺、爲國阿上人弟子云云、賴茂 石堂四郎 孫、義房息、

靈山寺

〇

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕靈山寺 拾芥抄云、靈山釋迦、在清水寺北、法觀寺東、〇中略

見聞隨身抄云、元慶八年甲辰、建靈山寺、

國阿上人繪傳云、佛閣此本尊釋迦如來は、人皇五十九代寬平法皇御宇、紫雲に乘じて天くだり給ふ靈像也、奇瑞あらたなるゆへ、勅をくだして御建立ありし御堂也、正面の額は、小野道風が筆跡、佛前の扉の繪、兩界の曼陀羅は圓信が筆、裏戸の五大尊、四天羅漢は金岡が筆也、〇下略

〔日本紀略 十一 一條〕寬弘元年三月十八日壬寅、靈山堂供養、

〔古事談 一 王道后宮〕一條院御時、長保比、右中將成信、左少將重家、同心示合出家、〇中略先到靈山寺剃頭之後、共在三井寺云々、

〔本朝無題詩 九 山寺〕暮春遊靈山寺　藤原明衡

一尋梵宇感相重、勝趣佳名瀉鷲峯、造化風流依洞水、構營年記驗庭松、〇下略

〔後拾遺和歌集 十 哀傷〕靈山にこもりたる人に、あはんとてまかりたりけるに身まかりて後、十三日にあたりてものいみすときゝて、　能因法師

ぬしなしとこたふる人はなけれども宿のけしきぞいふにまされる

〔山家集 上 冬〕雪の朝、靈山と申所にて、眺望を人々よみけるに、

たけのぼる朝日のかげのさすまゝに都の雪はきえみ消すみ

〔新續古今和歌集 十六 哀傷〕ひんがし山靈山といふ所に、墳墓の地をはじめむとて、先みにまかりてよみける、　中原ゝ向朝臣

こゝやさはつゐのすみかと思ふにもまだき露けき苔の上かな

〔親長卿記〕文明十九年九月三日、參詣靈山、聽聞日中、國阿上人御影等拜見之、唯阿招入茎、一盞、住持

上人來開談、

清閑寺

名所 所在 創建

清閑寺ハ、京都東山清水山ノ南ニ在リ、一條天皇ノ朝、佐伯公行ノ建立セシ所ニシテ、長德二年御願寺ト爲セリ、後ニ高倉天皇ヲ山後ニ葬リシヨリ、寺名世ニ著ハル、ニ至レリ、

〔伊呂波字類抄 世諸寺〕清閑寺 伊豫守正四位下佐伯朝臣公行、件年上奏、奉ㇾ爲鎭護國家、下所以利益衆生、於王城東、清水南、結構一院、勤修法花三昧、號清閑寺、去長德二年、寄進於御願寺、云々、

〔拾芥抄 下本諸寺〕清閑寺 佐伯公行建立

〔雍州府志 四寺院〕清閑寺 在清水山之南、播州刺史佐伯公行之所創建也、今眞言宗僧守之、高倉院之愛妃小督局死日葬此山、帝哀慕之、崩御時、依遺勅而奉葬此寺、陵上有大楓樹、傍有小督局之墓、

〔山州名跡志 三愛宕郡〕清閑寺 在清水巽、傳云、延曆廿一年、紹繼法師草創云々、師傳不詳、其後荒廢、一條院御宇、佐伯公行再興、

〔草山集 四〕遊清閑寺記

清水寺瀧之下、南行百步許、蹤一山梁出路、如向大路、而山深人稀、森々松樹、不知幾株、東行里餘、而入衡門之内、是清閑寺也、其地寂寞無塵、名與境固相得、余逢僧而問、此寺始於何代、開基祖爲誰耶、僧答曰、我山久廢而無古志、口碑亦磨滅、唯傳言佐伯公行所草創也、氏所謂僧正亦不知何人、失其傳者、皆此類也、

堂塔

〔山州名跡志 三愛宕郡〕清閑寺 ○中略 宗旨 初天台、今眞言、 堂 東向 本尊 千手觀世音 立像三尺許 作肾神 塔壇 在山上、古塔アル

雜載

所也、謠曲ニ、アレニ塔婆ノミエシト謡フ是也、　鎭守社　在門内山　鳥居巽向、本柱、　宮同　所祭山王

〔花洛名勝圖會六東山〕清閑寺歌の中山にあり、宗旨は初天台、今眞言、因幡堂四の坊兼帶す、

本尊　千手觀世音立像三尺許、菅神作、鎭守社入口門外の左山上にあり　祭神山王權現名跡志云、當寺初天台宗にして山門に屬す、是故に此神を祭る平、○中略

高倉院陵本堂より、北一町餘、山中にあり、石の五輪のみにして、四面に石垣あり、中に楓樹を植ゆ、古へは御堂の有しならんなれど、堂荒廢して、如此成たりと見ゆ、楓樹を植たるは、帝或時、下部どもの紅葉を焼しと聞召して、御感ありし事、平家物語に見えたれば、それらによりて、なせしにや○中略

小督塔御塔の左傍にあり

〔百練抄六崇德〕大治四年十月十四日、東山清閑寺炎上、

〔明月記〕治承五年正月十四日、未明巷說云、新院○高倉已崩御、依庭訓不快、日來不出仕、今聞此事、心肝如摧、文王已沒、嗟呼悲矣、倩思之世運之盡歟、○中略今夜渡御邦綱卿清閑寺小堂、抑是六條院御墓所堂云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年○建保元年八月十四日壬午、京都飛脚參著、申云、去月二十五日、清水寺法師建立一堂、其地在清閑寺領之由、彼寺憤鬱、相論之旨、清閑寺爲台嶺之末寺、山又咎之、清水寺依爲南都末寺、奈良殊怒之、而今月三日、清水寺構城、山僧集會于長樂寺、自公家、先遣撿非違使有範、惟信、基清等、破却清水之城、制止武備、急著法衣、可在佛前之旨、被仰含、寺僧承伏之、相次、遣廳官長吏於長樂寺、被禁制之處、所司法師等僅相逢、更無承伏之詞、惡僧等、妄吐奇怪之詞、殆及放言、廳官爲遁當時恥、退去之間、飛礫打門扉、馳歸奏聞之間、忽被仰北面之輩幷在京健士、近臣家人等、圍彼寺四至、不殘一人可生虜之由宣下、依之壯士等進先登、近江守賴茂、將伏兵遮嶺東之嶮阻、生虜山上者、是惡徒等、多赴險阻、仍先令家人廻其所指上旗於嶺上之間、更還奔、登嶺者不幾、于時不及狼籍、剥甲冑相具之令參、

殊預叡感、凡生虜二十人、被誅者十餘人也、同六日、山門衆徒、悉離山打付中堂、常行滅三昧堂燈、截落七社以下御簾神鏡、鎖門々、追放祠官云々、天台佛法、及魔滅期歟、

〔百練抄 十二 順德〕建保元年〔○建暦三年〕八月三日、延暦寺衆徒百餘人、集會長樂寺、爲令燒拂清水寺云々、是去頃清閑寺領內、清水寺住僧、爲迎講結構娑婆屋、自山門依令燒件屋、清水寺令謝申、而被責召衆徒張本之間下洛、不拘院之御制止、遣武士〔井〕西面輩、被追散之間、刃傷殺害之者、兩方數多云々、

二年八月二日、於院御所記錄所、勘申清水清閑兩寺堺相論事、

〔碧山日錄〕應仁二年八月七日甲午、西兵破清閑寺陣於清水山、而襲山科里、八日乙未、清閑寺有高倉帝所繪鳧雁之屏風、覺明所筆大般若經、經被爲兵卒掠散屏匿於幽深也、壞佛堂僧房、爲清水之營云、

建仁寺

建仁寺ハ京都東山、四條南、大和大路東、五條北ニ在リテ、五山ノ第三ニ位ス、我邦臨濟ノ初祖榮西ノ開基ニシテ、源賴家ノ本願ナリ、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕建仁寺

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕東山建仁寺〔ケンニンジ〕　在洛陽祇園西南、　寺領八百八十三石

源賴家公建立〔土御門帝建仁元年〕　開基榮西禪師〔○中略〕　有塔頭二十五院、

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕建仁寺〔號東山、五山第三、在四條南大和大路東、五條北、〕

〔雍州府志 四 寺院〕建仁寺　在大和大路四條南、源賴家公大檀越、而千光國師榮西之開基、而居五山第三位也、塔頭中華來朝之僧所開基者多、其內禪居庵、淸拙之所住也、所將來之泥塑摩利支天之像、世

人之所偁稱也、又方丈一切經、朝鮮國之物、而是又爲絶品、寺產有八百二十石餘也、寺中西來院有邑

山德本牌、號光孝寺三位右金吾德本、

〔沙石集十(終)〕建仁寺本願僧正事

故建仁寺ノ本願僧正(榮西)○戒律ヲ學シ、威儀ヲ守リ、天台、眞言、禪門イヅレモ學シ行シ給ヒ、念佛ヲモ人ニス丶メラレケリ、○中略イマダ葉上房ノ阿闍梨ト申ケル時、宋朝ニ渡テ、如法ノ衣鉢ヲ受ケ、佛法ヲ傳、歸朝ノ後、寺ヲ建立ノ志御坐ケルニ天下ニ大風吹テ、損亡ノ事アリクリ、世間ノ人ノ申ケルハ、此風ハ、異國ノ樣トテ、大袈裟大衣キタル僧共、世間ニ見エ候、彼衣ノ袖ノヒロク、袈裟ノ大キナルガ、風ハフカスル也、如此ノ異體ノ仁、都ノ中ヲハラハルベキ也ト申ケルニツキテハテハ公卿僉議ニヲヨビテ、京中ヲ罷出ベキ由、宣旨有ケレバ、弟子ノ僧共、浅猿ク思ケル處ニ、今日ハ吉日也、吾願成就スベシトテ、堀川ニテ、材木カフベキ事ナンド下知シテ、宣旨ノ御請申サレタル詞ノ中ニ云ク、風ハ是天ノ氣也、人ノナス所ニ非ズ、榮西風神ニアラズ、何ゾ風ヲフカシメン、若風神ニ非ズシテ風ヲフカシムル德アラバ、明王何ゾステ給ムト云々、是ニヨリテ、此僧ハ子細有者也ケリ、申旨アラバ、聞食入ラルベキ由、重テ宣下アリケレバ、寺建立ノ志ヲ申サレケルニヨリテ、建仁寺ヲ立ラレケリ、○中略ハタシテ相州禪門(北條時賴)建長寺ヲ立テ大覺禪師、叢林之軌則、宋朝ヲウツシオコナヒハジメラル、滅後五十年ニアタル、建仁、建長、文字相似リ、年號ヲ以寺號トスル風情モ昔ニタガハズ、相州禪門ヲバ、彼僧正ノ後身ノ如ク申アヘリキ

〔帝王編年記(二十三土御門)〕建仁二年壬戌、建仁禪寺草創、當寺者本朝禪院最初、千光法師開山也、敷地者征夷大將軍從二位源賴家卿(賴朝卿長子、母從二位平政子、遠江守平時政女也)施入、五條以北、鴨河原以東也、　同年六月廿二日、戊午、降宣旨、被置眞言、止觀、禪門三宗、此事、金吾將軍依被申請也、其後賴家卿同胞之弟實朝公(左大臣右大將)相繼尊崇、　同三年癸亥十一月十五日己卯、四面築垣始之、(前對馬守中原朝臣清業沙汰)　同四年甲子二月

九日、(癸卯、鬼宿)築僧堂壇、佐々木太郎源定綱、(秀義長子)自手曳車築之、(同四月、定綱賜使宣旨、為佳例也、)同日、渡殖菩提樹二茎等、丑寅角也、同三日、畠山庄司次郎重忠、築垣二本、未申角、總門北、二本築之、是皆為得道之因緣歟、重閣、講堂、眞言院、止觀(本尊丈六阿彌陀像)等營造之、

本尊

〔蔭涼軒日錄〕永享七年九月廿四日、當寺兩尊可彫造之故建仁寺三尊佛工之事被訊之、本尊則大進法印始造之、大夫法印改造之、左右兩尊、則西方大藏法眼造之、雖然面貌則皆舊也、

堂塔

〔山州名跡志(四愛宕郡)〕東山建仁寺(○中略)

佛殿(南面)本尊 釋迦佛(坐像、二尺許、)脇士(左)迦葉(右)阿難(立像、三尺許、)本尊壇左右退有廚子、所安(左)大元(坐椅子、三尺許、是卽伽藍守神也、家皆安、其安所謂土地堂、已下倣之、)(右)(禪)釋迦佛(立像、三尺許、)嵯峨清凉寺本尊ノ摸形也、作不詳 堂內敷瓦、五山皆以同風、額 祈禱(堅額)禪家皆以如此

諸堂今無所(如左)

拈華堂(云法堂)三世如來殿 望闕樓(云山門、有南門內跡、)慈視閣(云方丈閣)大悟堂(云僧堂)群玉林(云衆寮)

經藏 今在方丈庭、古六輪藏ナリ、所藏一代經、開山唐朝ヨリ將來ナリ、此經無比類以鮮明、藏經披見ノ輩、多クハ此經ヲ轉也、

〔百練抄(十五後嵯峨)〕寬元四年六月七日甲午、今日建仁寺、二階堂等燒亡、

〔本朝高僧傳(三十一淨禪)〕相州建長寺沙門慈永傳

釋慈永、字青山、姓紀氏、(○中略)康安年中、董建仁、僧俗歸向、如衆星拱北、開山以來、寺未構法堂、諸堂亦傾覆、永竭力興建、修營一新、脩先師十三回忌、設齋請衆、源公、(○足利義詮)嚫錫錢若干緡、入寺預法會、

〔如是院年代記〕應永四(丁丑)十一月十八日夜、建仁寺炎上、

○按ズルニ、佐々木道譽ノ妙法院ヲ燒キシ時、建仁寺ノ類燒セシ事ハ、妙法院ノ下ニ載ス、

〔蔭涼軒日錄〕長祿二年五月六日、建仁寺造營、高麗一万貫之內、纔千餘貫文寺納之由、自寺家被白也、

〇中略　八月十二日、建仁寺高麗奉加之事、自寺家大衆以訴狀白之、〇中略　十四日、伊勢下總守、飯尾左衛門佐爲兩使、召建仁瑞岩愚谷泰計嵩西堂都聞維那拍首座、被決高麗惠光怠慢之罪也、〇中略　十六日、寂路庵惠光、爲不出建仁寺修造高麗奉加錢、被罪科被召置于聖護院、以家財被預置于當院也、飯尾左衛門大夫奉之、是故、命于寺管主事納所出管三員、使請取出之、〇中略　十七日、前日寂路庵家財、今日一々可有點撿之由、飯尾左衛門大夫以使者先報之、〇中略　寂路庵罪科嚴重之旨、建仁寺評定衆、爲禮謝被參之由披露之、〇中略　九月十五日、建仁山門以寂路庵贓物、可管山門之由披露之、

〔續史愚抄後奈良〕天文廿一年十一月十三日辛卯、子剋、建仁寺伽藍塔頭等火、兵火云、言繼卿記、如是院年代、往年記、

寺格

〔日本略記〕一五山之事、京の五山は、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺、〇下略

〔寺格帳下禪宗五山派〕御朱印高八百貳拾壹石　同〇黃衣地　京五山第三東山　建仁寺〇中略

右十二ヶ寺住職器量次第、紫衣黃衣出世之公帖被成下之、住職幷年頭御禮無之、

一右出世總代爲御禮參府之節者、紫衣者御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御閾之內貳疊目、黃衣西堂、右同斷、獻上壹束壹卷、御閾之外貳疊目、御暇無之、如此有之候得共、南禪寺幷京五山者、輪番持之段、金地院役者書付差出候、

寺領

〔國師日記〕知行方目錄

一貳百參拾六石八斗貳升　本知城州京西三條通ヨリ、千本堺迄

一三拾貳石貳斗五升　同同上賀茂內　一壹石七斗　同同千本內

一四拾壹石七斗貳升　同同祇園領內　一百四拾七石貳斗二升　同同建仁寺廻

一七拾九石七斗　同同東寺廻　一四拾四石四斗　同同西賀茂內

一百九石七斗　出居堀成替地、同前　一百貳拾七石五斗五升　出居堀成境內替、西院內、

合八百貳拾壹石

右可全寺納候也

文祿二年九月十三日　御朱印大閤

建仁寺

什物

〔雍州府志 四寺院〕建仁寺 中略 塔頭、中華來朝之僧、所開基者多、其內禪居庵、清拙之所住也、所將來之泥塑、摩利支天之像、世人之所偏稱也、又方丈一。切。經、朝鮮國之物、而是又爲絕品、

子院

〔和漢禪刹次第〕諸塔（建仁寺及九世、皆弟子各以房、少々禪師號在之、大宋徽宗皇帝特賜千光法師、）

黃龍派 興禪護國院（開山塔、千光國師葉上僧正、諱榮西、明庵大師、賜天童虛庵敞禪師、備中州人、建保三乙亥七月五日入定、七十五歲、）

〔山州名跡志 四愛宕郡〕東山建仁寺　在大和大路四條南

興禪護國院　在佛殿巽、西向、是則開山塔所也、影堂（西向）內敷瓦、額　華藏世界（橫額）朝鮮學士雪峯筆、揭堂內中央、　祖像安置間、東退二間許、前唐戸二片、內板敷、上ルニ箱階アリ、　開山千光國師像（坐椅子、持拂子、長三尺許、）

菩提樹　在堂前南北、此樹師唐土將來使植、中略

禪居庵　在南門內西方　開基　清拙和尚（唐僧）佛殿（東向）　本尊　摩利支天（坐像七八寸許、）此像ハ、以土所作也、清拙和尚、唐土ヨリ、此尊像幷ニ土ヲ將來シテ造レリ、面貌白色、衣服彩色也、金色七頭猪ニ乘ズ（猪長七寸許）唐鷄足山ヨリ、嘉曆二年ニ來朝セリ故アツテ小笠原某、和尚ニ親ミ、此本尊ヲ信敬セリ、彼ノ家代々貴敬狀數通、當院ニアリ、

〔和漢禪刹次第〕東山建仁寺 中略 諸塔 中略

大鑑派 禪居庵（清拙和尚、諱正澄、建長日東禪居、建仁日西禪居、）

雜載

〔元亨釋書 二傳智〕釋榮西、中略 此春（建久六年）分天台山菩提樹、栽東大寺、初西在台嶺、取道邃法師所栽菩

提樹枝、付商船種筑紫香椎神祠、建久元年也、西以謂、吾邦未有此樹、先移一枝于本土、以驗我傳法中興之効、若樹枯槁吾道不作、蓋菩提樹者、如來成道之靈木也、世尊滅後一百年、師子國王受佛記、共佛舍利得南枝、盛金甕移殖、南宗之始求那跋陀羅始栽廣府、其後遠師分台峯、是以西爲法信寄來、逮東大寺復、勅以此木移焉、元久之始、西又取台枝栽建仁東北隅、兩處茂盛、垂蔭數畝、至今繁焉、天下分栽、

蓮華光院 觀勝寺附入

蓮華光院ハ、土御門天皇ノ朝、後鳥羽天皇ノ准母殷富門院亮子ノ建立セシ所ニシテ、當時山城國葛野郡安井村ニ在リシガ、其後久シク中絶セシヲ、後水尾天皇ノ中宮東福門院源和子ノ御願ヲ以テ、洛東觀勝寺ノ地ニ再興シ、爾來俗ニ安井門跡ト稱シテ、大覺寺宮ニ屬セリ、觀勝寺ハ建仁寺ノ東隣ニシテ、堀河天皇ノ頃、源親元ノ建立ニ係リ、世ニ光堂ト稱セシ所ナリ、

〔拾芥抄下本諸寺〕蓮華光院安井

〔山城名勝志十四愛宕郡〕蓮華光院(中略)舊跡在葛野郡安井村、近世安井門主、前大僧正性演、光堂之地被再興之、

〔百練抄十一土御門〕正治二年十月十七日、殷富門院〇後白河皇女亮子内親王安井御所御堂供養、上皇〇後鳥羽并宣陽門院〇後白河皇女覲子内親王御幸、

〔安井門跡代々相續次第〕當門跡者、後白河院御子殷富門女院御所、京之内、安井ト申所有之、此御所ヲ宮ノ僧正ニ〇道尊譲給テ門跡トス、是安井ノ門跡ト號シ、院號ヲ蓮華光院ト申、

第一宮、僧正道尊　高倉宮御子　母伊豫守盛章女、東大寺別當、〇中略

第八宮、僧正寛法　中務卿康仁親王御子、此間安井門跡ノ室中絶、但法流ノ相續不斷、御再興者嚴

名稱　所在　創建　沿革

寺格　寺領　寺職

有院樣御時、本院東福門院〇後水尾皇后德川和子御願之旨、板倉古內膳殿江被仰、關東ヨリ金千兩被仰出、安井寺院御造立、卽天下御長久之御祈被仰出、每年御祈禱相勤、正五九月、御卷數女院樣ヨリ江戶江被進候、〇中略

當門跡者

高嚴院樣〇德川家綱夫人伏見貞清親王女紀伊安君樣依爲御甥、本院〇後水尾東福門院後任御願之旨、永井古伊賀守殿關東言上ニテ相濟、安井門跡後住被仰付之旨、伊賀守殿御書付ヲ以テ、兩傳奏被仰渡候、今度安井門跡御再興之地者、京東山下河原之舊跡大織冠植給藤アルガ故ニ、洛東藤之名所トス、〇中略此所ニ門室御再興也、

〔安永板萬世雲上明鑑乾〕〇〇〇雀門跡〇中略

安井御門跡

〔嘉永七年雲上明覽大全上〕蓮華光院御門跡〇中略

御領三百石　洛東

蓮華光院　御宗旨眞言　御室

號安井大覺寺宮　御兼帶

院家　寶幢院　寶持院

坊官　久保　榎本

諸大夫

侍　久保出羽介

家司　鳩田造酒

〇

觀勝寺

〔雍州府志四寺院〕觀勝寺　始在下粟田山上、行基之開基、而園城寺唐坊行圓再興之、○中略　近世眞言宗安井僧正性演再興觀勝寺於東山眞性院中、

眞性院　在東山建仁寺後、眞言宗僧住之、近世觀勝寺兼帶之、院中有崇德天皇之宸影、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕光堂（在祇園南、建仁寺東、近世安井門主蓮花光院領之、或云本尊彌陀、寛永年中有御夢想之告、七條道場贈之、今金光寺本尊是也云々、）

〔元亨釋書十七願雜〕房州刺史源親元、家世武臣、延久帝潛藩時、備警衛、爲金吾、移廷尉司獄、而行陰德、笞杖減歎、刑罰緩法、年過四十、務佛事、於洛東作一字、安阿彌陀像、華麗耀煜、俗號光堂、○中略　長治二年十一月七日頭北面西右脇而逝、年六十八、

〔山州名跡志二愛宕郡〕觀勝寺　在祇園林坤、　門（東向）　宗旨　眞言　華嚴兼學　當地ヲ指テ、安井ト稱ス、是當寺ノ號ニハ非ズ、古ノ主ニヨルノ舊稱ナリ、堂ヲ光堂ト號シ、院ヲ光明院ト號ス、夫當寺草創ハ、平安城遷都已前ニシテ、春日明神垂跡シ玉フ靈地ナリ、是故ニ、大織冠鎌足公、此地景ヲ愛シ、自紫色ノ藤ヲ植エテ、家門藤氏ノ榮久ヲ祈リ玉フ所也、其苗今ニ殘テ、毎歳都下ノ貴賤、目ヲ喜バシム、昔號テ花ノ寺ト云フ、今猶コレヲ稱ス、崇德天皇、此花ヲ愛シ玉ヒ、數度御幸ノ鳳輦ヲメグラサル、○中略　文永年中ニ、此所ニ佛閣寺院ヲ修造シ玉ヒ、光明院ト號シ、尊靈ヲ鎭メ、法施不退ノ所トス、仍テ以テ此所歷代ノ天子御造營アリ、其大圓住職シテ、觀勝寺ト號ス、（有云、釋書井壒嚢抄ニ載スル處ハ觀勝ハ、當寺ニハアラズ、東山ノ中ニ、同名別寺有テ、共ニ大圓住居ノ寺也ト、）

〔壒嚢抄十四〕當寺（觀勝寺）ノ建立ハ何比ゾ、幷ニ本願上人ノ御事如何、

當寺觀勝寺ハ、法相道昭付法也、又義淵上人上足ノ內、行基其第二也、夫行基菩薩ノ草創トシテ、讓化佛法靈地タリト云共、荒廢星霜ヲ經テ後、三井寺唐坊法橋行圓再興アリ、是ニ依テ當寺ノ本緣起ハ、園城寺經藏在ト云、然共又零落年深シテ、止住僧侶モ無カリシニ、龜山院御宇、文永五年（戊辰）九月比大圓上人、不慮ニ此山ニ登テ令住持給ヘリ、其子細、寺家記錄見タリ、同十月廿日ヨリ、本堂ヲ

名稱
所在

今ノ地ニ可改造トテ、事始ヲ成シ、翌年五月廿日、朝夕勤行始シヨリ、〈略〇中〉龜山院〈略〇中〉勅願寺被成畢、本尊ハ是行基菩薩一刻三禮御作、千手千眼觀自在尊、又聖德太子御作、正觀音ノ靈像ヲ、御身ニ籠タリ、此故大慈大悲誓願殊深、鎭守又白山妙理權現和光同塵本誓實憑モシキ者也、本一社ニテ御座ヲ、上人淸瀧熊野ヲ勸請シ副、三所權現衞護被奉仰、是以前行有律師ト云人アリキ、其時後嵯峨上皇建長七年〈乙卯〉十二月廿三日、法勝寺阿彌陀堂供養次デニ、當山臨幸有テ、勅願寺成サレ、院主行有阿闍梨ヲ權律師任ゼラルト云共、又俄院主職ヲ範譽法印被補、依之行有悲歎鬱憤ノ餘リ、本尊ノ御身所納靈像ヲ盜出奉持去ヌ、是依テ無程佛宇亡壞シケルガ、上人住寺後、不測靈尊示現依テ、返入給者也、委細記有別、以前後嵯峨院勅願ナレ共、住持無依破壞シケレバ、龜山院又重勅願寺トシテ、御子後宇多院御祈禱ノ事、取別被憑仰ケリ、仍上人自彼御門御等身愛染王像ヲ造、長日護摩ヲ始置、

六波羅密寺

六波羅密寺ハ、始メ西光寺ト稱ス、京都東山ニ在リ、天曆中、天下大ニ疫セシ時、僧空也、十一面觀音ノ像ヲ刻シテ之ヲ祈リ、其疫爲ニ消除スト云フ、當寺ハ卽チ疫止ミテ後ニ、其像ヲ安置センガ爲ニ造リシ所ニシテ、又有名ナル地藏尊ヲ安置ス、西國三十三所第十七番ノ札所ナリ、

〔拾芥抄〈下本諸寺〉〕六波羅密寺〈十一面、空也上人建立、〉

〔雍州府志〈四寺院〉〕六波羅密寺　在建仁寺南、〈略〇中〉今新義眞言宗僧守之、〈略〇中〉平淸盛公亭在斯邊、且被尊崇之、堂有淸盛之木像、

創建沿革

〔伊呂波字類抄諸寺呂〕六波羅密寺空也上人、應和年中所草創也、本號西光寺、上人以厭下界願西土也、上人入滅之後、大法師中信來住此寺、專修衆善、兼行六度、故改本名、更號六波羅密寺也、爲天台別院、偏演四宗教法、是以世有法華講、本以此處爲講肆、

〔元亨釋書十四檀興〕釋光勝、不言姓氏、爲沙彌時、自稱空也、人又不諱言空也、○中略天暦五年、京畿疫、死屍相枕、也憐之、自刻十一面大悲像、祈之、像成疫止、其長一丈、於洛東勸四衆、創一藍、號六波羅密寺、奉安像焉也、

〔扶桑略記二十六村上〕應和三年八月廿三日、空也聖人、鴨河東岸建堂、供養金字大般若經會、請僧六百人、有舞音樂、

〔帝王編年記十七圓融〕天祿三年九月十一日、空也上人延喜御子於東山西光寺入滅、春秋七十有奇瑞、六波羅密寺者、上人之建立也、

本尊堂塔

〔花洛名勝圖會五東山〕六波羅密寺松原通愛宕念佛寺の東南側にあり、宗旨始は天台、今眞言新義智積院に屬す、寺領七拾石

本堂東向十一面觀世音、長八尺、空也上人作、西國巡禮第拾七番の札所なり、また洛陽觀音廻りの一たり、脇士、南藥佛師、坐像、傳教大師作、北地藏菩薩立像、作者不知、或云白河法皇御作、是當寺最初の本尊、古へは六波羅地藏堂といへり、平判官康頼が寶物集に此地藏尊貧女の爲に、其母を葬り給ふ事を載す、世に山送りの地藏、また鬘掛の地藏ともいふよしを記せり、

〔今昔物語十七〕但馬前司國擧依地藏助得活語第廿一

今昔、但馬前司國擧ト云フ人有ケリ、年來、公ケニ仕ヘ、私ヲ顧テ有ル間、身ニ病ヲ受テ俄ニ死ヌ、卽チ閻魔ノ廳ニ被召ヌ、國擧、見レバ、罪人極テ多カル中ニ、一人ノ小僧有、形チ端嚴ニシテ手ニ一卷ノ文ヲ持テ東西ニ走リ廻テ、訴フ事有ル氣色也、傍ニ有ル人ノ云ク、此ノ小僧ハ、此レ地藏菩薩ニ在マスト、○中略其時ニ、國擧彌ヨ悔ヒ悲テ、重ネテ小僧ニ申テ云ク、尙我ヲ慈ヒ給テ、タスケ救テ免シ給ヘ、我本國ニ返タラバ財ヲ棄テヽ、三寶ニ奉仕シ、偏ニ地藏菩薩ヲ歸依シ奉ラムト小僧此ヲ

聞テ、前ニ返リ向テ宣ハク、汝ガ云フ所、若シ實ナラバ、我試ニ汝ヲ乞請テ可返遣ヤカト宣テ、卽チ冥官ノ所ニ行テ、訴ヘ乞テ、國舉ヲ免シ放ツト思フ程ニ、半日ヲ經テ活ヌ、其後、國舉、此ノ事ヲ人ニ不語、忽ニ鬢髮ヲ剃テ、出家入道シツ、卽大佛師定朝ヲ語テ、等身ノ皆金色ノ地藏菩薩ノ像ヲ一體造リ奉リ、色紙ノ法華經一部ヲ書寫シテ、六波羅密寺ニシテ、大キニ法會ヲ行テ、供養シ奉リツ、其講師ハ、大原ノ淨源供奉ト云人也、法會ノ庭ニ來リ集ル道俗男女、皆淚ヲ流シテ、悉ク地藏菩薩ノ靈驗ヲ信ジ奉ケリ、其ノ地藏菩薩ハ、六波羅密ノ寺ニ安置シテ、于今在スト語リ傳ヘタルトヤ、

〔寶物集三〕又東山ニ貧女アリケル、年來地藏ヲネンジ奉リシニ、近キマヽニ、六波羅ノ地藏ヘ常ニ參リケル、此女年老タル母ヲ持タリケルニ、或時老母死テケリ、イカヾシテハウフラントアンジワヅラヒ、只一人マモラヘテ、泣居タリケル程ニ、或片夕暮ニ、行脚ノ僧一人出來テ、何事ニ角ハ歎キ給ゾト問ケレバ、事ノ子細ヲ有ノ儘ニ語リケル、僧是ヲ聞テ、最易事ニコソ侍ルナレトテ、指寄テ、ヒシ〳〵トシタヽメ、背ニカキ負テ山ヘ送リ孝養シ給ヒケリ、○中略ソレヨリシテ、此地藏ヲバ山オクリノ地藏ト申ストゾ、細ニハ地藏ノ驗記ニゾ申シタメル、

〔山城名勝志十五愛宕郡〕六波羅密寺

昔ハ地藏堂、別ニアリ、○中略今ハ、地藏觀音堂ノ內ニアリ、

〔塵囊抄〕世間病爲能治、或ハセウキ神ヲカケ、或ハ心經ヲヨム、其由緒アリヤ、又此祈禱ニ十一面ヲ用ハ何故ゾ、

村上院御宇、天曆五年辛亥、又京畿ニ大疫アリ、空也上人、自カラ八尺ノ、十一面ノ像ヲ刻テ、其法ヲ修テ疫病卽止、是今六波羅密寺ノ本尊也、

〔中右記〕天仁二年二月一日、當東有燒亡所、是六波羅密寺之中云々、

〔百練抄十四〕嘉禎三年十月廿八日丙午、今夜、六波羅地藏堂燒亡、

〔六波羅密寺文書〕勸進沙門觀實敬白

請蒙十方檀那助成修營六波羅密寺狀

右當寺者、空也上人凝棘誠之懇府所草創之梵宇也、彼上人於焉厭下界、其宿望偏在于西刹、故號謂西光寺、上人寂滅之後、中信止住之時、依積六度棘行功、改爲六波羅密寺、(常)修者讃佛乘之因、轉法輪之緣、所觀音菩提月之光、香花雲之雨、梵頌相繼、法音匪懈、誠是天台圓宗之別院、衆生利益之靈場也、觀音大士之爲本尊也、空也上人代毗首兮採三禮斧、地藏薩埵之跡後成也、奧州刺史感夢想兮置五寶座、爾降一伽藍之洪基雖年舊、二菩薩之利益彌日新、○中略 而當寺依無般若之料所、逐年而破壞、隨日而頹危、佛子倩見此事、發大願、早陳勸進之力、將勵修□燈明僧院荒兮、止住不全□嵐、獨咽三時之梵音、勤行卷席、堂宇爲塚、于時同國刺史爲巡禮向此塚、忽有奇瑞、仍集群民、奉堀於地藏菩薩尊像、種種有神變、一々令符合、崇敬之餘、奉安置國廳、登任之後、上洛之時、件尊像、同日自奧州令住坐國司洛陽私宅內道場、靈驗殆勝先規、歸依彌無餘念之處、同刺史夢想云、徹少之善廣給拔苦之緣、且德深得而難稱者歟、○中略 定發門々樞、爾曹勉旃、敬白、

貞治二年三月日　　勸進沙門觀實敬白

寺領用途

〔和漢三才圖會山城七十二末〕補陀洛山六波羅密寺　在清水寺南、　寺領七十石

〔六波羅密寺文書〕御判

當寺燈油料所清□名、幷安寧院年貢內、以參分之壹□令進上門主御方、由事請文披露畢、任次第證文道理、被下政所御下文之上者、寺家進止之條不及子細、○中略 仍執達如件、

乾元二年五月十五日　　左衞門時賴

六波羅密寺執行法眼御房

雜載

〔本朝文粹十詩序〕七言暮春於六波羅密寺供花會聽講法華經同賦一稱南無佛　慶保胤

夫六波羅密寺者、空也聖者權輿之、中信上人潤色也、如此兩人者、寧非奉如來勅、爲如來使、來此娑婆世界、度于濁惡衆生乎、於是毎日講妙法一乘、毎夜修念佛三昧、彼南北二京之名德日來、遞爲講師、遞爲聽衆、東西兩都之男女雲集、卽今十指、卽致寸心、開講已垂八九載、結緣不知遮萬人、何況轉展隨喜之功德、漸々廻向之薰修乎、暮春三月、百花爭開、別修四日八講、號結緣供花會、其一日、爲導一切男子、二日、爲度一切女身、三日、爲濟一切童子、四日、爲化一切僧侶也、大哉、誓願無得而稱之、當此時也、緇素相語曰、世有勸學會、又有極樂會、講經之後以詩而讃佛、今此供花之會、何無歎佛之文哉、滿座許諾、誰人間然、便以經中一稱南無佛一句、抽爲題目、往昔無信心無善心、其心或亂心、不再稱不三稱、其稱只一稱、彼人莫不成佛、莫不得道、嗟呼、我黨一心無餘心、千唱又萬唱、脫此凡身、登于覺位、且何疑哉、何疑哉、中有垂白髮紆朱衫者、身暫雖在柱下、心尙如住山中、少壯之年愁詠一事一物、强求名聞、衰暮之日、或記叢詞狂句、將攝菩提、今日推爲唱首、不敢再辭、聊述大綱、備於後事云爾、

〔大鏡三太政大臣實賴〕日本一の御手のおぼえは、この、ちそ〇そ上恐脫こ字とり給へりしか、六波羅密寺のがくも、此だいに佐理〇藤原のかきたまへるなり、

〔一遍上人緣起三〕其後、雲居寺、六波羅密寺、次第に巡禮して、空也上人の遺跡市屋に道場をしめて、數日を送りたまひしに、勢至菩薩の化身にておはします由、唐橋の法印、靈夢の記をもちてまいりくだりけるに、念佛こそ詮なれ、勢至ならずば信ずまじきかとぞしめされけり、

珍皇寺

珍皇寺ハ、又愛宕（オタギデラ）寺トモ稱ス、小野篁ノ建立ニシテ、丈六阿彌陀像ヲ安置ス、弘法大師、祖師慶俊僧都ニ從ヒ、此寺ニ久シク住セリト云ヒ、當寺ノ鐘ハ慶俊僧都ノ鑄造スル所ナリト云フ、

名勝　所在　創建　　雜載

今慶寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡六道ノ邊ニ在リ、

〔伊呂波字類抄〕諸寺〕愛宕寺〔同〕諸寺〕珍皇寺 オタキデラ 愛宕寺 簦卿建立、土俗云、一之書讀、參議小野篁卿建立、土俗云、此寺者、山城國國分寺、弘法大師幼少之時、相二從慶俊僧都一、久住二此寺一給云々、又簦卿沼寬朝宗、本朝賢臣、爲二此寺檀越一、依二此緣一修二盂蘭盆一、誦二盂蘭盆經一等、簦卿冠牙笏位袍等、累代之寶物、納二置寶藏一、去永久年中、本寺炎上、次燒失畢云々、

〔拾芥抄〕下本、諸寺〕廿一寺 公家恒例被レ行二御讀經一

珍皇寺

〔山城名勝志〕十五、愛宕郡〕珍皇寺 寶物集、珍皇寺ノ北ニアル八坂ノ塔ト云リ、然ルトキハ、八坂、法觀寺ノ南邊ヨリ、今ノ六道ノ邊ニ至ル迄、此寺ノ地ナリシニヤ、〇中略

愛宕寺 或云、元在二六道西、竹林中、建仁大統院南一、本尊彌陀丈六坐像云々、寺廢亡、

簦山記錄云、愛宕寺 本尊者簦山南谷、五佛院之本尊金色彌陀、承雲和尚建立也、然大法師明達、於二愛宕寺一迎二丈六之像一、〇中略

六道 在二五條末北、建仁寺巽角一、今建仁大昌院管領、有二藥師堂一、是珍皇寺本尊云々、本弘法大師開基、而東寺之門下也、故予ノ今自二大昌院一修二新正賀儀東寺長者一、是依レ無二珍皇寺一也、

〔寶物集〕四〕淨藏貴所ノ驗德ヲ顯スト申スハ、帝王師父三人ニ、驗德ヲ施シテ、拜マレタリト申シ侍ルメル、加之珍星(チンヤイジ)寺ノ北ニアル八坂ノ塔ノユガミタルヲ、護法シテ直サル丶程ノ驗ヲモチナガラ、子ヲ設ル事ヲ云也、

〔今昔物語〕三十一〕愛宕寺鑄鐘語第十九

今昔、小野ノ篁ト云ケル人、愛宕寺ヲ造テ、其ノ寺ノ料ニ鑄師ヲ以テ鐘ヲ鑄サセタリケルニ、鑄師ガ云ク、此ノ鐘ヲバ撞ク人モ无クテ、十二時ニ鳴サムト爲ル也、其レヲ此ク鑄テ後、土ニ堀埋テ三年可レ令レ有キナリ、今日ヨリ始メテ三年ニ滿テラム日ノ、其ノ明ム日可二堀出一キ也、其レヲ或ハ日ヲ不レ令レ足ズ、或ハ日ヲ餘テ堀開タラムニハ、然カ撞ク人モ无クテ、十二時ニ鳴ル事ハ不レ可レ有ズ、

〔古事談〕五、神社佛寺〕珍皇寺別當某云、當寺鐘者慶俊僧都鑄レ之、土ニ埋、經二三ケ年一可二堀出一之由契テ入唐

名稱　所在　創建　堂塔

畢、而一年半計アリテ、本寺之住僧等堀出之、鐘之音聞唐土、仍慶俊僧都示云、我寺之鐘聲コソ聞ナレ、不鐘ニ六時ニ鳴サムト思ツルモノヲ、太口惜云々、件僧都ハ弘法大師之祖師也、

高臺寺

高臺寺ハ、京都東山ニ在リ、豐臣秀吉ノ妻湖月尼ノ開基ニシテ、堂舍ノ結構壯麗ヲ極メ廟所ニハ秀吉夫妻ノ像ヲ安置シ、山門ハ征韓ニ用キシ艦材ヲ以テ作ル所ナリト云フ、建仁寺三江ノ開山タリ、

〔花洛名勝圖會 六東山〕鷲峯山高臺寺 双林寺の西南にあり、山號を又岩清不動山といふ、宗旨は禪宗濟家、建仁寺末寺、寺領五百石、塔頭八院、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕高臺寺 鷲峯山、在愛宕郡八坂里、 寺領五百石

豐臣秀吉公北政所湖月尼公、慶長年中建立、此地往古雲居寺境內也、 尼公以下、長嘯子、及木下氏一家有塔婆、

〔雍州府志 四寺院〕高臺寺 在祇園之南、號鷲峯山、豐臣秀吉公正妃、稱政所殿、創建此寺、請建仁寺常光院三光和尙、爲住職、政所殿稱高臺寺湖月尼公、寺中六坊、且有十境、其中有菊潭水、相傳、此寺僧飮菊潭水之下流、故得壽也、寺產有五百石、

〔山州名跡志 二愛宕郡〕鷲峯山 又岩清不動山　高臺寺在祇園巽 宗旨禪 濟家　門 西向　佛殿 東向、內數瓦、

本尊　釋迦佛 坐像、二尺四五寸許、　脇士　左 迦葉　右 阿難 共立像、三尺許、　新作　脇壇 北 大元像 倚子懸足、長三尺許、此像禪家安ジテ鎭守トス、形相、唐冠唐衣、右手ヲ額ニ插頭、又或插ス左手俗衣釋氏也、又安所ノ壇ヲ土堂ト云、已下記所禪家是倣　同 南　達磨大師 坐倚子、一尺四五寸許、 共ニ安厨子 此厨子 當寺ノ本願政所公ノ、牛車ノ上屋ヲ用ヒラル

方丈 在佛殿東、南面、 門同唐門左右築垣 方丈南向 南面緣長押上、木石唐人ノ彫物、彩色、間內張付障子地金、畫圖仙人岩木鳥雪松西湖蘆雁、狩野家弘意了溪永德、土佐光信等筆之、緣正面唐戶、餘ハ重算ノ戶、金腰障子、白木組天井、 佛間正面板敷金張付、畫光信、 本尊 千手觀音坐像、一尺七八寸許、 作不考 脇壇安所左 三江和尚畫像右 政所公親屬畫像

此方丈 秀吉公朝鮮凱陣ノ祝義、饗應ノ時、設ケ玉ヒテ他ニアリ、以テ引移ス處ナリ、 小方丈大方丈ノ東ニアリ、 此所內東向ニ額アリ〇中略

開山堂 在方丈東南向、前庭有池 門南向 額 重關横額、雪月堂筆、 堂南向 南北五間東西四間半、開戶二片、其左右窻、火灯口、白壁、堂內敷瓦、黑漆組天井、緣毬杖面、金具滅金、枅形及長押上彩色畫アリ、堂內南面ヨリ入テ、二間退テ、朱漆ノ丸柱アリ、長押ノ上彩色卷柱、柱ノ間一間半、其間北ノ正面長押ノ上、幅六寸許、横一間半ノ所、鏤彫物、赤白菊ノ折枝、其東西各一間半ハ、張付金銀ノ切箔スナゴナリ、此所、天井ノ中央ニ別ニ緣ヲ取テ、中ヲ四ツニ分ル、如此、緣黑塗毬杖面、地板紙張、泥引中ニ此ゴトキ黑白ノ地取四ツアリ、中ニ萩、薄、菊、紫陽花、桔梗ヲ畫、彩色、是卽政所公車ノ上屋ノ天井ナリ、又總細骨黑塗ノ中、赤白ノ彩アリ〇中略

秀吉公井政所公魄舍 在祖堂東山上、 臥龍祖堂ヨリ魄舍ニ至ル廊ヲ云 額 臥龍雪月堂筆

魄舍南面 外南西築垣、東ハ山、北番僧ノ居所ノ門、南面 小門開戶金具滅金門前上壇上ルニ切石ノ階アリ、

魄舍寶形造、屋根柿、梁東西三間半、南北四間、東西二方緣、欄干擬寶珠、金具滅金、南面段階、階ノ上唐破風、飾彫物、二重桶、金具滅金、唐戶二枚、金具同、唐戶口、幅一間半、其左右各一間、此所及東西戶、外重算黑塗、內金張、地取、置上金雲、繪、梅、櫻、牡丹、芍藥石竹、柘榴、菊、山茶花等折枝、長五六寸許ナルヲ散シ其間飛鳥アリ、青白ノ唐鳥、長三寸、尾五寸許、狩野古右京筆〇下略

〔日本外史十七豐臣氏〕外史氏曰、余○頼襄嘗遊東山、謁太閤像於高臺之祠、祠門蓋以征韓艦材造之云、嘗讀韓人所紀、曰明遣使者、竊太閤相貌、矮而黒、無他異、唯見其目光燗々射人、不可仰視、余覩其像、如信然者、

東光寺

東光寺ハ、陽成天皇ノ元慶二年ノ建立ニシテ、御願寺タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡ニ在リ、

〔伊呂波字類抄登諸寺〕東光寺陽成天皇御宇元慶二年戊戌建之、格云、在山城國愛宕郡、依太后御願所建立、

〔山城名勝志十五愛宕郡〕東光寺或云、靈山西北端、高臺寺南邊、有東光寺ノ名、此處歟、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

可以東光寺爲定額幷請用維摩會聽衆一人事

右得前皇太后宮職解偁、件寺在山城國愛宕郡、元慶年中依太后御願所建立也、今奉仰旨云、結構既成、功業漸畢、安置佛經、無堂興隆、庶准安祥元慶寺例、列之安額、名東光寺、以鎭護國家、以利益法界、其所住苾蒭、皆延暦寺僧天台宗業、如自伽藍創立之時、無闕修學護持之勞、重思住僧一人、毎年請用維摩聽衆、又其三綱者、任同寺僧六年爲限、不聽遷用他寺之僧、秩滿之後、宮定申補、至于後代寺家簡定、同亦申官立爲恒例者、謹請處分者、左大臣宣、奉勅依請、

延喜五年三月九日

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻

山城國正税公廨各十五万束、○中略東光寺料一千束、

〔扶桑略記二十五朱雀〕承平三年癸巳五月、東光寺内更立一堂、供養之、幷供養一切經論、其地爲體、誠是幽

閑清泉遶階、觀念之月自泛、綠苔滿地、座禪之莚遍鋪者也、唱梵唄而連音、不改靈山之舊跡、揚題名而分響、自寫竹林之遺風矣、

〔本朝續文粹九詩序〕七言、冬日於東光寺同賦埋橘落葉多詩一首以江爲韻并序、　在良朝臣

夫當鳳闕之東、有一道場、號之東光寺、華堂松房之得勝形、自叶龍虎左右之相、靈樹異草之蓄芳種、鎭爲詩酒觴詠之媒、彼三壺者、神仙之境也、雲濤隔兮難通跡、未如此寺往反無累、優遊有情、是以羽林源大將、禮部侍郎、引洛陽之華英、尋城東之蘭若、蓋屬四海之艾安、賞三冬之荏苒、

古事類苑

宗教部四十六

佛教四十六

知恩院

知恩院ハ一ニ大谷寺ト云フ、京都東山大谷ニ在リ、鎭西派四箇寺ノ一ニシテ、且ツ淨土宗ノ總本山タリ、舊ト天台宗ノ一院ニシテ、天台座主慈鎭ノ所領ナリシガ、建暦年中、淨土宗ノ開祖源空ノ赦ニ會ヒテ歸洛スルヤ、之ヲ與ヘテ住房ト爲サシメ、其沒スルヤ、墓ヲ此ニ建テタリ、之ヲ當寺ノ創始トス、德川幕府ニ至リ、其家原ト淨土宗ヲ奉ゼシヲ以テ、大ニ力ヲ當寺ノ爲ニ盡シ、堂塔輪奐ノ美ヲ致セリ、

知恩院宮ハ知恩院ノ域內ニ在リ、一ニ花頂宮ト云フ、德川幕府ノ建ツル所ナリ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕大谷寺知恩敎院　在東山吉水　寺領千七百石
順德院建暦元年建立　開基源空上人勅諡東漸圓光大師
號華頂山　淨土宗本寺

〔雍州府志四寺院〕知恩院　斯寺元山門慈惠僧正之所創、而法然上人再興之、而淨土宗四箇本寺之隨一也、號東山、始稱大谷寺、又謂吉水院、古此院在山上、今勢至堂是也、後柏原院之宸翰有知恩院之額、慶長年中移今所、其時滿譽僧正爲住職、寺產有千七百石餘、山上有開山法然上人塔、每年正月十九日至二十五日、修法然忌、後柏原院勅書曰、知恩院淨土宗之總本寺而修法然御忌者也、後奈良院綸旨曰、任後柏原院之先例、爲淨土宗之總本寺、修法然之御忌者也、依之則今淨土宗門之徒稱御忌者、

非無其謂也、斯地元大谷、而本願寺祖親鸞之墓、古在今知恩院中崇臺院後大松樹、爾後移鳥戸山、

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕知恩院 在祇園東大谷、淨土宗總本寺也、四箇本寺第一員、開山法然上人、往昔慈鎭和尚、招請法然上人、被寄附地也、サレバ昔ハ從勢至堂栗田口ヘ有道、是本路也、本堂ハ今ノ勢至堂邊也、則阿彌陀堂是也、知恩教院額、後小松院宸翰也、此地舊房狹少、大リシテ、慶長始、基趾ヲ開キ、其地ニアル、常在光院、速成就院、太子堂及親鸞上人墳寺等被遷處々、新造營大堂、庫裏、方丈給、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 三十八 事義〕知恩院ハ、愛宕郡白川ノ東大谷ニアリ、後呼デ大谷寺ト稱ス、上古慈惠大僧正草創ノ地ニテ、南禪院ト號セラレシトゾ、中古妙香院ト名ヅク、慈鎭和尚大師ニ附シ給フ、上人滅後十六年ヲ經テ、嘉祿三年、山徒廟堂、幷僧房悉破却、文曆年中ニ、勢觀房大谷舊院ヲ再興シテ、師恩ヲ報ゼント奏聞ス、主上 〇四條 叡感マシマシテ、總門ニ華頂山、佛殿ニ大谷寺、廟堂ニ知恩教院ト額勅ヲ賜リヌ、

創建

〔法然上人行狀畫圖 三十六〕上人勅免にあづかり給て、國 〇讃岐 をいで、ゝのぼり給ふ、〇中略 同 〇建曆元年 十一月十七日、彼卿の奉行として、花洛に還歸あるべきよし、烏頭變毛の宣下をかふぶり給ぬ、〇中略 慈鎭和尚の御沙汰として、大谷の禪房に居住せしめたまふ、むかし釋尊上天の雲よりくだり給しかば、人天大會まづ拜見したてまつらん事をあらそひき、いま上人南海の波をさかのぼり給へば、道俗男女さきに供養をのべん事をいとなむ、群參のともがら其夜のうちに一千餘人ときこえき、幽閑の地をしめ給ふといへども、日々參詣の人、連綿としてたえざりけり、

〔元亨釋書 五 慧解〕釋源空、姓漆氏、作州稻岡人也、〇中略 承安四年、出黑谷居洛東吉水、盛說專修及圓頓菩薩大戒、緇白靡然向風、嘉應帝 〇高倉 召入宮受戒、〇中略 建永二年春二月、竄讃州、居五稔、〇中略 建曆元年、詔追赴都城、二年正月、居大谷染疾、

沿革

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 五十二 寺院之餘〕知恩院 抑又當院草創以來、興廢度々ニ及シ中ニ、大師滅後、十六年ヲ經テ、嘉祿三年ノ逢亂コソ、前代ニモ此類希ナルベシ、宗事ニ見四十ナリ二時ニ山徒ノ爲ニ、廟堂ヲ破却セラレ、近隣閑居ノ僧房モ、悉打壞タレ

テ、居住ノ隱士等四方ニ追却セラル、カクテ七年ヲ經ケル程ニ、世移リ時改テ、人ノ心モ穩ナリケレバ、ニナ、文暦年中ニ至テ、勢觀房上人、鎭西ヨリ歸洛[illegible]下向シ給ヘリ、于時大谷ノ舊房再興ヲ營テ、先師ノ厚恩ヲ報ジ奉ラント、奏聞ヲ遂給ヒテ、終ニ其本意ヲ果給ヒケレバ、主上（四條）叡感マシマシテ、佛殿ニ始テ大谷寺、廟堂ニ知恩院、總門ニ華頂山トゾ勅額ヲ下賜ハリキ、サレバ當院ノ法命、此時ニ續得テ、連綿トシテ今ニ斷絶ナシ、彼文暦ノ後、凡百八十年ヲ經テ、永享三年、其後三十七年ヲ渉テ、應仁元年、兩度ニ及テ回祿ス、時ニ二代[illegible]ノ御奉加並御下知ヲ下サレテ、不日ニ再興ノ本意ヲ遂メリキ、[illegible]後又三十九年ヲ歷[illegible]正乙丑[illegible]ノ哉、火災ニ逢ケルテ、漸程ナクテ、祖造立ノ功ヲ勵マシキ、サレド事イマダ達セザル所アリケレバ、是ヲ諸方ニ唱ヘテ、勸進奉加ス、[illegible]都鄙響ノ如ニ應ジテ、營構ノ事終ヌ（中略）カクテ九十餘年ヲ經テ、慶長ノ始ニ及テ、東照宮カネテ當宗ニ御歸依ノ事、他ニ殊ナル由緒マシマスニ依テ、佛閣僧房、新ニ改造シ給ヘリ、サレバ地ヲ[illegible]ゲ、基ヲ大ニシテ、龍首鳳形、甍ヲ比ベ、軒ヲ連ネタリ、時ニ滿譽僧正主務メリケルガ、僧正其器廣大ニオハシマシテ、御檀家ト御心構符合シケレバ、カヽル大伽藍ノ、一時ニ事成ニケル、其比當院ノ古堂、舊房、其數イクバクナラズ、舊地又イト狹窄ナリキ、サレバ大殿廣閣其地ニ容マシケレバ、ソノカミ大師禪房ノ跡ナレバトテ、山上ヨリ移シ下サレテ、新ニ基址ヲ營給ヘリ、此地モト東山ノ勝境ナリケレバ、中比ヨリ、常在光院、太子堂、及親鸞ノ墳墓等交處セリ、新造ノ御堂立ラレケレバ、終ニ諸方ニ移サレテ、今處々ニ散在セリ、其後三十餘年ノ歳月ヲ送リテ、寛永十年正月九日、當寺務靈巖上人、及當山御門主[illegible]相共ニ、江戸下向ノ御留主、御堂ノ預失火シケル程ニ、諸堂悉一時ニ燒失ス、只經藏三門ノ二基ノミ餘炎ニ殘レタリキ、同十六年ニ、征夷大將軍家光公ノ御沙汰トシテ、諸堂悉昔ニ復レテ、光彩修飾尚モ彌增ノ事ニゾナリヌ、

（總本山知恩院舊記採要錄）後小松院叡信不淺、今金戒光明寺に傳る所、淨土眞宗最初門之勅筆あり、實に宗門之美目不過之と云々、然に此後度々燒亡、舊記に云、

永享三年辛亥令回祿畢、住持僧侶打手、言語同斷ス、忝ク普廣院殿○足利義教造營ノ興行不可廻時日之由被仰出、而以御奉加被相添之、剩洛中邊土之淨土宗門念佛徒衆、悉以可致奉加之旨御下知嚴重、卽時ニ佛閣以下新ニ成建立之所、其後應仁大亂發起、悉破壞、于時訴申柳營、奉歎之間、慈照院殿○足利義政有御奉加、堂舍成再興畢、今度永正乙丑○二年不圖發火災、而片時成灰燼、雖然本尊、眞影、傳記等皆以安全、任先規、爲叡慮、總門以下可再建之儀雖被仰出、有志無力、故唱奉加於都鄙、各預涯分之施財、當有之所造功成焉（下略）

右二十世空禪上人、二十一世大譽慶竺大和尚、二十二世周譽珠琳大和尚、二十三世勢譽愚底大和尚四世之間、七十五年、三ヶ度之兵亂火災、既退轉可仕之處、朝恩無此上、別而足利氏扶助を以、二十

一世大譽慶竺大和尙代、再建成就仕、二十二世周譽珠琳大和尙代、寬正二年辛巳、無滯宗祖大師二百五十回遠忌被相營候處、應仁之兵亂ニて、堂坊悉破壞、無據江州伊香立へ立退申候、京都騷亂ニ而法要も難整承及候、當國へ被爲下向度由尤候、家中一族爲歸依上者、別條候間敷候、當所無異ニ候、元祖之像を護持可爲下向候、什寶者及力間敷候、伊香立ニおいて住所可定置候、謹言、

朽木民部大輔植綱判

知恩院長老

雜掌御中

舊記如斯、尤近江國伊香立において堂宇を建立し、新知恩院と唱、爰に住する事八箇年、後土御門院勅によつて、再び堂舍を舊地に建立し、眞影歸洛ニ相成候事に御座候、尤當帝〔後土御門〕御尊信厚く、每度玉體御加持等被仰付候、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊五十二寺院之餘〕知恩院

抑當山中興、當正行蓮社滿譽上人尊照大和尙者、諱釋九花、後改尊照、姓藤氏、萬里小路內大臣秀房公之孫也、以永祿壬戌誕、皇帝育爲皇子、幼投當山、從浩譽和尙〔文伯〕剃髮、天性逸群、手不釋書、志切東游、遂赴總之下州生實大巖精舍、謁安譽虎角公、公坐龍澤〔山大巖寺〕之、大降法雨、學一世以大巖爲叢林之根源、故得人蓋多而已、因從角冢塵、聲聞四遠、一日角公從容語曰、子當發揮香道、終一宗法水傾瓶傳焉、文祿四年、照年三十四、歸于本山、而禮浩師、師則莞然、乃遷山附之、照固辭再三、師苦命不許、故諸補師跡、以及時、院宇荒廢、照慨歎有年、於是源大相國家康公、嘗有師檀之芳契、以訴衆志、公三諾、應照之求、影堂以下、大殿廣闊、一時新美、于時慶長九年甲辰、令照開堂、同十年正月、行御忌於新殿、海內流徒、從命群集、同十五年庚戌十月、天正皇帝、感照之德輝、特賜僧正、又八宮法親王〔良純〕入御當山、薙髮、寔是擬東照宮曾知恩三十五箇制法之第一、立宮門跡之條目也、元和五年、源大相國秀忠公、經營三門及經藏、此年未舊度、翌年春、照微疾、至夏固病、六月廿五日、死期正至、跌坐合掌、稱名若干遍、向西逝、年五十九、已上ノ數字現在セル者、今其大概ヲ擧、寬永年中御再興ノ後、三十餘年ヲ經テ、寬文十年、修治ヲ加ヘラル、明年事成ル、其後三十年ヲ經テ、元祿十五年、修治ヲ始、明年成テ、殿堂院室、金石ニ類ス、

〔雪月花三〕一知恩院

堂塔

東照宮御影堂　唐門　本堂〔桁行二十二間五尺、梁行十七間三尺五寸、〕　御拜〔十六間二尺〕　後門〔七間半、二間、〕　阿彌陀堂　開

山御廟　骨堂　唐門　紫雲水前棚　輪藏　鐘樓　衣會堂　西玄關　寶庫　大方丈桁行十七間半、梁行十三間、　小方丈桁行十二間半、梁行九間、　學文所　居間　常調茶所　茶之間　衣寮　廊下　衣寮部屋　大庫寚　坊主部屋　小庫寚　西庇　賄部屋　水棚廂舂屋　納所部屋　南侍部屋　土藏　雜藏　調茶所　大庫裏　薪部屋　下部屋黑門之内　米藏　雜色番所　浴室大方丈　唐門　手水洗屋形　四足門茶所　取合番所　黑門　西總門　門番人居所　鎭守社　瑞籬　鳥居　拜殿　宮守部屋井有　勢至堂　同鐘樓　座敷　庫裏　西同心部屋　東同心部屋　此外所々廊下十四箇　部屋番所　石橋　石垣等　御修理

元祿十四年巳四月ゟ、同十五年午八月迄、御修理、

入用銀、四百七十三貫八百三十六匁二分壹厘、

奉行　松平紀伊守殿與力高田佐五衞門　石川藤右衞門

〔圓光大師行狀畫圖翼賛五十二寺院之餘〕知恩院

○集○會○堂○影堂ノ背後ニアリ、東西十九間、南北八間半、外縁四方各一間半、瓦葺、南面也、本尊坐像ノ彌陀脇侍觀音勢至立像二尺五寸許ナルヲ安置ス、　二堂中間渡廊總ジテ十一間也、南方ハ七間ニ三間、瓦葺ニテ、其餘北方ハ板葺也、○大○方○丈○東西十八間、南北十二間半、南面、板葺也、○小○方○丈○東西十一間、南北九間、南面、板葺也、○大○厨○東西十三間、南北十六間、西面、瓦葺也、○小○厨○東西七間、南北十間、西面、瓦葺也、

〔月堂見聞集二十三〕享保十六年亥歳

一正月二十四日、知○恩○院○千○疊○敷之座敷にて、台德院殿東帶靈像像前ニテ百部讀經、

〔花洛名勝圖會二〕華頂山知恩教院

○勢○至○堂○本堂の東山にあり、南向、上本尊勢至菩薩座像二尺餘、安阿彌作、額　知恩教院竪額　後柏原院宸筆今揭る所、其摸寫なり、○中略

○一○心○院○勢至堂の南にあり、此所捨世道場ともいふ、遁世隱士の宗風にして、住僧位官に昇らず、黑衣を著す、開基は、緣譽稱念法師、本堂東向、本尊阿彌陀佛、安阿彌作、額、一心院、橫額光源院義輝公筆略○註　大○方○丈○本堂の後に在、小方丈略之○中略　山○門○本堂の西にあり、西向、元和五年御建立、額、華頂山竪額　靈元法皇宸

筆、閣上に寶冠の釋迦佛を安す、長五尺、脇士は善財童子、須達長者、および十六羅漢の像を安す、○中略　知恩院宮御殿黑門通北側にあり、法親王こゝに住し給ふ、○中略法親王門跡、當寺御法務の事は、東照神君の上奏にして、良純法親王、その權輿なり、又當山廿五代超譽上人は、三河國の產にして、德川親忠君の七男也、其初、信光明寺に住し、後に當山に轉住し給ふ、天文十八年八十一歲にして遷化あり、今玆に、安政四巳年閏五月十一日、國師號宣下、高顯眞宗國師と謚す、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊五十二寺院之餘〕知恩院

御影堂東西廿三間、南北十八間、外縁四面各九尺、瓦葺、南面也、須彌壇八間四面、中央ニ御厨子ヲ居テ、影像ヲ安シ奉ラル、

〔法然上人行狀畫圖六〕大谷は、上人源空往生の地なり、かの跡いまにあり、東西三丈餘、南北十丈ばかり、このうちにたてられけん、坊舍いくほどのかまへにかあらんと見えたり、その節儉のほども、おもひやられて、あはれにたとくぞ侍る、いまの御影堂の跡これなり、

〔法然上人行狀畫圖三十七〕武藏國の御家人桑原左衞門入道實名不知と申けるもの、上人の化導をつたへきゝて、吉水の御房へたづねまいりて、念佛往生の道をゝしへられたてまつりてのちは、但信稱名の行者となりにければ、歸國のおもひをやめ、祇園の西の大門の北のつらに、居をしめてつねに上人源空の禪室に參して、不審を決し、念佛をこたりなかりけるが、無始よりこのかた、常沒流轉して、出離その期をしらぬ身の、忽に他力に乘じて、往生をとげ、ながく生死のきづなをきらん事、ひとへにこれ上人御敎誡のゆへなりとて、報恩のために、眞影をうつしとゞめたてまつりけり、そのこゝろざしを感じて、上人みづからこれを開眼したまふ、上人御往生の後は、ひとへに生身のおもひをなして、朝夕に歸依渴仰す、かの入道、つゐに種々の奇瑞をあらはし往生の素懷をとげにけり、年來同宿の尼、本國へかへりくだるとき、件の眞影を、知恩院へ送りたてまつる、當時御影堂におはします木像これなり、

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕開山塔 在勢至堂東

黑谷上人傳云、上人住房ノ東、岸ノ上ニ、西晴タル勝地アリ、上人往生ノ時、此地ニ廟堂ヲ立云云、

〔百練抄 十三 後堀河〕安貞元年六月廿四日、山門所司已下、群集大谷邊、被破却法然上人墓所、是專修念佛事、近日有山門之訴、於彼墳墓興盛之故云々、但於遺骨者、門弟等偸掘出渡他所云々、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 五十二 寺院之餘〕知恩院

三門 南北十三間、東西六間、二階、西面、瓦葺也、南北有樓閣、名東西蓋半、南北三間、瓦葺、二階上ニ寶冠釋迦佛、左右ニ善財童子、須達長者ヲ脇侍トシ、及十六羅漢ノ像ヲ安ヒラル、大佛工康猶法印、代之作之、此門及鐘樓、輪藏ノ三基ノミ、火災ヲ免テ、慶長年中ノ遺營スル所也、

〔太平記 二十一〕法勝寺塔炎上事

康永元年三月廿日、〇中略金堂、講堂、阿彌陀堂、鐘樓經藏、總社宮、八足ノ南大門、八十六間ノ廻廊、一時ノ程ニ燒失テ、灰燼忽地ニ滿リ、〇中略暫アレバ、花頂山ノ五重ノ塔、醍醐寺ノ七重ノ塔、同時ニ燒ケル事コソ不思議ナレ、

〔碧山日錄〕應仁二年九月廿一日戊寅、客曰、西兵燒東山華頂僧房、塞東陣路、

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、〇中略淨土宗本寺者知恩院也、

〔知恩院書上〕御尋

從御當家寺格被仰付候譯

一文祿年中、知恩院住持滿譽尊照、權現樣伏見御在城之節、知恩院へ御參詣被爲遊、當院ハ淨土一宗自流他流ノ總本寺、殊ニ超譽上人御住職ノ御寺ナレバ、御由緒有之間、京都御菩提所ト御定被遊、不可混餘宗餘寺ノ旨被仰付候事、依之伏見御城御玄關迄乘輿、且御城外御番所總下座被仰付候事、其後二條御在城之節モ、御同樣ニ被仰付候事、〇中略

右依御尋申上候、以上、

知恩院役者

明和五子年十一月

〔總本山知恩院舊記採要錄〕一二十五世超譽存牛大和尙者、御當家御先祖松安院殿親忠君之御五男にて、長親君之御舍弟ニ御座候、○中略大永元年正月十一日、後柏原院勅請に依て、當山へ御移住、同三年、紫衣勅許、其頃、百万遍と、本末之爭論出來、時ニ靑蓮院宮尊鎭親王、御歸依之餘り、不容易御荷擔有之、比叡山延曆寺之大衆一同、公武へ及歎訴、終ニ當山其正ニ復し、彌一宗之本寺と定り、不謂門徒、宿老可爲上座之旨綸旨被成下、同年正月十八日、宗祖法然上人正忌月之法要、可稱御忌と鳳詔被成下、○中略應仁之亂後、年久敷堂舍荒廢之儘ニ候處、丹精盡力、再興成就、再び知恩敎院、大谷寺、二面之勅額、後奈良院宸翰被成下、殊ニ先帝御持念佛之一軸裏書宸翰被爲染、御寄附被成下候抔、總而存牛大和尙御高德之所爲ニ而、當山者勿論、一宗之中興と仰ぎ候儀ニ御座候、○中略

右爭論之節、山門之大衆、上書如左、

大永三年卯月廿四日、於山門大講堂三院集會議曰、

可早被相觸靑蓮院廳務事

夫吾山者、自桓武之聖主始、而皇澤沾法海、從大師之善巧起、而德風覆群山矣、然則他門他宗者、頗法花入實之弄胤、權難權執者、殆圓頓大乘之所開也、爰法然上人、仰當御門跡之敎光、建立淨土宗已降、諸德繼踵、翫三部之經旨、僧侶等擧、專六字之稱名、然今般百万遍之住持、背智恩院本寺、忘末寺芳契之條、邪義之至、既違本願、偏立之失、誰用之、速可被追罰彼一類之處、不慮御門主被遷御坐於九重之外、被穢綸旨於數程之巷之旨、太以卒爾之御出、驚動之至極也、○中略然上者速被成還御、本寺末寺之階位、法臈、法侶之座次、可被相定者歟、此趣預御許容者、滿徒開喜悅之眉、含歡悰之咲、盍御門葉復往代、省顯密之紹隆於緇素之袂、當山者守舊像、崇貫頂寺務之威光之旨、衆議而已、

右之通、末流之徒、其本源ニ超過せんとなすは、非議之至、神君樣ニも厚思食、慶長八年當山御建立

被爲仰付候節、本重貴ならざれば末輕賤なりとの上意ニ而、一山格別結構ニ被成下候、依而滿譽大僧正參府候砌、御取扱も、誠以結構ニ被爲仰付下置、此例ニ隨ひ、代々之住持御取扱格別ニ被成下、諸檀林始、何れも當山之御取扱ニ隨ひ、夫々寺格被仰付候儀ニ御座候、

〔續史愚抄 後柏原〕大永三年四月十八日戊午、靑蓮院入道無品尊猷親王、（後改尊鎭云、昨日改名歟、）出奔紀伊、其後入大和內山云、是知恩院與知恩寺有爭論、而親王執知恩院、依此事云、（二水記）

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 五十二 寺院之餘〕知恩院（中略）愛ニ大永年中ノ事トカヤ、一旦知恩寺ト相論[illegible]ノ事ニ及ビキ、時ニ靑蓮院御門主、知恩院ニ御[illegible]擔アリ、シカルニ彼寺時ノ權威ヲ得タリケレバニヤ、當院既ニ利ヲ失ハントス、サレバ御門主本意ナキ事ニシ給テ、御遁世ノ事ニ及テ、高野山ニ御座ヲ移サレキ、彼山蓮華院ノ舊記ニ云、大永年中、由アリテ、靑蓮院法親王[illegible]當院ニ寓居アソバサルナドアリ、カヽリケレバ、山門ノ大衆三塔合會シ、偏ニ此御事ヲ愁テ、大講堂ノ庭ニ僉議ス、卽其狀云、大永三年卯月廿四日、於山門大講堂、三院集會議曰、

可早號爲奉行沙汰達上聞事

夫汲流派討法水之源、不超五時之立波、踏門關窮佛家之奧、不出一代之極據矣、抑淨土一宗者、吾朝之弘通、以法然爲元基、以稱名爲行業、曆按其由來、彼然公者、叡峯住侶、台教修練淨德也、然間屬靑蓮院御門葉、卜居於東山之舊跡、寄望於四刹之雲、因茲構知恩寶之一宇、爲諸德之本寺、專念佛不退之一行、定衆中之法度、受當百萬遍之住持、宗自儀、僕本處之條、希代之濫吹、佛法之陵遲、不過之者歟、仍本末之次第、及度々雖被相逕之、外恐權威、內據集惡之間、御門主忽被遷御座於異境之間、一山之騷走、滿徒愁鬱、何事如之、早止非分之昇進、預順路之御政道者、達奉成門主之還御、彌勵一天泰平之精誠、於本寺跪伏之黨類者、盛揭四海安樂德音哉之旨、群議雷同[illegible]カクテ朝廷ニ奏シ、武家ニ訴ケレバ、當院還テ利ニ復シ、後柏原院之宸翰其事分明ニ宣下ヲ蒙リヌ、御門主又本意ヲ遂給ケレバ、幾程ナクテ御歸座ナリキ、カヽリケレバ、當院ノ事、叡慮オロソカナラヌ御事ニテ、崩御ノ時マデ、御善知識ニモ召給ケルトナン、サレバ二水記云、大永六年四月七日、卯刻崩御、（御年六十三）臨此期、又奉修記錄所記智恩院長老伺候、有御十念、稱名殊勝御高聲也、正念御終焉、御往生無疑者歟、音樂之聲、聞虛空之由、有沙汰、

〔憲教類典 四ノ十三上 寺社〕慶長二丁酉年九月廿五日

關東淨土宗法度之儀、從本寺知恩院被相定條々、各不可有相違儀尤候也、

九月廿五日　內大臣家康〇德川御判

諸檀林江

寺領

〔續史愚抄靈元〕延寶八年三月十四日甲辰、於淨土四箇本寺、〈金戒光明寺、百萬遍知恩寺、清淨花院、知恩院、〉及禪林寺等、行善導大師千回法會云、〈年代略記〉

〔常憲院殿御實紀附錄下〕智恩院、增上寺の住僧は、先々より玄關前にて下輿せしが、貞享三年より、中門にて下らしむる事となり、〈○下略〉

〔寺社分限帳五淨土宗〕
一千四十五石餘　京都　知恩院宮無品親王尊光
一五百石　東山　知恩敎院〈常葉方丈〉玄知閑

〔寺鑑下〕淨土宗　京都　知恩院大僧正
御朱印　高七百三石貳斗五升、内貳百三石貳斗五升　役者料

〔知恩院書上〕御尋　京知恩院〈○中略〉
尤御朱印高寺院〈并〉寺領之國郡村名共、明細書付可被差出候、

一高七百三石二斗五升　知恩院寺領
但〈五百石　方丈領〉〈貳百三石貳斗五升　役者分〉
内
一三百十石一斗九升、〈山城國葛野郡〉西院村ノ内、一二十九石二斗三升、〈同國愛宕郡〉佛光寺村ノ内、一四十七石四斗、〈同國同郡〉岡崎村ノ内、一三十七石、〈同國同郡〉淨土寺村ノ内、一十九石二斗、〈同國同郡〉粟田口村ノ内、一七拾七石八斗、〈同國同郡〉祇園廻之内、一三石九升、〈同國同郡〉四條五條ノ間、一百七十九石四升、〈同國紀伊郡〉東九條村ノ内、
右寺中門前山林竹木諸役、守護不入之御判物被下置候、
一米二百俵

淨林院樣爲御供養料、京都於御代官所御渡被下候、

右依御尋申上候、以上、

明和五子年十一月　　知恩院役書

〔崇廟祭名錄〕廿二日　淨琳院二品親王　內明譽白貞惠照大禪定尼　靈元院皇女寶曆八九月廟(德川吉宗)御靈所宿納、知恩院、有

什物

〔寺社寶物展閱目錄山城一〕知恩院

一法然上人行狀繪圖四十八卷　詞寄合書繪土佐吉光筆

詞書　伏見院、後伏見院、後二條院宸翰、轉法輪三條實量公、靑蓮院尊圓法親王、世尊寺行尹卿、同定成朝臣、姉小路庶流濟氏卿筆、

外題　尊圓法親王眞跡

目錄　安井門主大僧正道恕筆

右畫、初兩三卷之所者、至極見事ニ相見ヘ候、跡ハ弟子寄合書ニも候哉、少々劣候樣ニ相見候所も有之候、何ニも殊勝之名物ニ御座候、幷畫中彼是故實等相見候、

〔二水記〕享祿四年閏五月七日巳剋、於口庵、與知恩院長老參會、今日於禁中、法然上人傳一卷可讀申之云々、一代一度多分申入云々、其間事被談合、御前之儀、存分加意見了、今日十八卷歟、後聞於儀定所被申入云々、盆香宮被下之歟、

寺職

〔圓光大師行狀畫圖翼贊一事蹟〕此傳ハ天台ノ學侶功德院法印舜昌ノ述作ナリ、其事述懷鈔一作述懷之十雙論ニ自明ナリ、元亨ノ初、勅ニヨテ、知恩院ニ住シテ第九世ナリ、知恩院一國師ノ次ヲ住持ス、國師ハ伏見、後伏見、後二條、三朝ノ戒師ナレバトテ、後醍醐天皇特ニ賜佛元眞應知慧知一國師徽號、元亨元年三月六日、春秋六十ニシテ寂スト云、知恩院記

〔花頂宮三十五ヶ條〕一知恩院之事立置、宮門跡領各別ニ相定上ハ、不可混雜寺家、引導佛事等ハ、定脇住持、如先規可被執行、於十念爲結緣、門主自身可有授與事、○中略

元和元年乙卯七月日

〔諸門跡傳 一〕知恩院

寬永十年正月九日夜炎上、同十三年鑄洪鐘、同十八年、德川將軍家光公御再興、

初祖、二品、

良純入道親王　後陽成院第八皇子、母源大典侍具子、庭田權大納言重通卿女、慶長九年生、德川將軍源家康公爲御猶子、慶長十九年十二月十六日、爲親王、寬永二十年十一月十一日、配流于甲州天目山、常愛遊女、交地下、知俗體、寬永二十年正月、二條殿侍女有密通、誘出、其名無隱于世、仍同年流罪天目山、四十二才、万治二年六月二十七日歸洛、泉涌寺五十七才寬文四年四月十三日、建新宅於北野、移住、還俗而號以心菴、六十二才、同九年八月一日薨、六十七歲、同三日葬于泉涌寺、

〔萬世雲上明鑑 上〕知恩院華頂山御宗旨淨土入道尊秀親王

〔安政三年雲上明覽大全 上〕知恩院宮〇中略

御領千八十石餘

知恩院御宗旨淨土　隆宮　六

伏見入道邦家親王御子

院家

御兒　日野西久丸　高倉鐵丸

准院家　無量壽院僧正法印

坊官　武田宮内卿法眼　小山侍従法橋

諸大夫　角田加賀守　谷野土佐守

侍　安藤播磨介

御用人　岡本駿河介　石田伊勢介

京都東山　御里坊西院参町　西川内匠

承仕

〔天保集成絲綸錄五十九〕文政二卯年八月

寺社奉行江　　　　　　　　知恩院御門跡

九月二日

右登營、直ニ大廊下休息所江被相越、老中出席、及挨拶、

一於御黑書院御上段、御饗應有之、畢而御座間ニ而、公方樣右大將樣御對顏有之候事、

柳の間　知恩院御門跡兒　三雄丸　御同人院家　至誠心院　御同人伴　上善寺　同斷　保德院

蘇鐵間　坊官　家司

右之者共、供仕候は﹅、於席々御料理被下候事、

右之通可被得御意候

〔天明集成絲綸錄三十一〕安永九子年八月

寺社奉行江

葵御紋附之儀ニ付、先達而書付帳面を以、被申聞候內、城州東山淨土宗一心院本堂本尊ニ掛有之候、葵菊之紋緣ニ附有之候、願之儀以來者什物ニ致置、相用申間敷旨、京都町奉行ども申渡候由、然處、右一心院者、智恩院宮菩提所ニ而、前御門主尊胤親王染筆奉納之儀ニ而、年來相用候處、今更取置候而者、尊胤親王染筆之譯も不相立候ニ付、何卒是迄之通被差置度旨被申立候趣、久世出雲守より申越候ニ付、右者是迄之通被差置候樣ニと、出雲守江相達候、尤知恩院宮を始、此以後之例ニ者不成、其外之例ニ者、猶更難相成候、則右之趣、出雲守江茂相達候間、是又可被得其意候、

八月

名稱 所在 創建

一心院

一心院ハ、京都東山ニ在リ、僧稱念ノ開基ニシテ、淨土宗ニ屬シ、一心院派ノ本寺タリ、

〔雍州府志 四寺院〕一心院　在知恩院之山上、淨土宗稱念上人之開基也、此僧隱遁而不出世、此一派寺院處々有之、稱一心院派、或號捨世地、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕一心院　在智恩院近處山上　淨土念佛三昧一本寺

開基　稱念上人、天文年中建立　處々多有末寺十二軒、稱念、諱吟翁、初名緣譽、武州品川鄉人、藤田左衞門尉道昭之男也、幼聰明擢倫、師事三緣山親譽上人薙髮、及師之遷化到下總飯沼弘經寺、謁鎭譽和尙、受淨土一乘大戒、十有六而住武州岩槻淨國寺、後創江戸天智庵、後號天徳寺、以先師親譽爲開基、自居二世、又去住勢州松坂樹敎寺、又入洛新黑谷住、三年而於大谷影前結庵幽居、以念佛三昧爲己任、卽一心院是也、天文二十三年七月十九日化壽四十一、茶毘爲舍利、今現存、

〔山城名勝志 十四愛宕郡〕一心院　在知恩院阿彌陀堂南、稱念上人開基、額光源院義輝公筆跡云云、寺記云、開祖緣譽上人、諱吟翁、改稱念、天文始、大谷寺側結草廬、號一心院、此地青蓮院門主所賜也、本尊彌陀像青門主持佛云云、天文廿三年七月十九日寂、稱念曾開建七寺、所謂東山一心院、市原奧野中專稱庵、上嵯峨稱念寺、下嵯峨正定院、桂極樂寺、田井專念寺、淀念佛寺等是也、今在淀東町小庵也

青蓮院

青蓮院ハ、舊ハ青蓮房、又ハ十輪院、十樂院トモ云フ、下粟田口ニ在リテ、天台座主行玄ノ開基ナリ、此寺、古來諸宗僧侶ノ紫ノ衣ヲ著スルコトヲ許否スルノ權アリ、コレ當寺ハ、山門三昧

流ノ本ナルニ由テ然リト云フ、筆道御家流ノ當院ノ名ヲ以テ流ノ名トスルハ、尊圓法親王ノ法ヲ以テ師トスルニ本ヅケルモノナリ、

名稱所在

〔伊呂波字類抄 諸寺 志〕青蓮院 行玄阿闍梨 主中寄五口

〔雍州府志 寺院 四〕青蓮院 在下粟田、始名十樂院、天台門主之一院、而三昧院法流也、僧正慈道爲開祖、〇中略 凡山門多法流、其内三昧院流任僧正時、元蹤著緋衣、又著紫衣、爲榮、青蓮院者三昧流之本也、故著紫衣時、雖他宗之門主必告之、是舊例也、堂上著紫懸緒、猶告飛鳥井家也、本願寺之親鸞、元爲此院家、故本願寺新門主、少年日、多入此室留學、

〔和漢三才圖會 山城 七十二 末〕青蓮院 在粟田口、天台宗 寺領千三百卅餘石、始號十輪院、開基 行玄大僧正 自傳教大師九世〇中略

又尊圓親王以降、筆法傳授之家、世稱之御家流、

創建

〔圓光大師行狀畫圖翼贊 寺院 五十一〕青蓮院(中略)號青蓮院、至行玄大僧正、創建青蓮院於下粟田、(元住山門青蓮房)覺快法親王、慈鎭大僧正(中略)等連續セリ、

〔諸門跡譜 上〕青蓮院殿

行玄大僧正 青蓮院初祖、天台座主、本名眞實、

京極攝政關白太政大臣師實公男、母安藝守忠俊女、久壽二年十一月五日寂

覺快法親王 法性寺座主、本名圓性、

鳥羽院第七皇子、母家女房美濃、八幡別當光清女、養和元年十一月六日入滅、

慈圓大僧正 天台座主、天王寺別當、千九新九十二、勅廿四、續廿一、今十一、遺十一、攝九、玉廿六、載六、續後七、風雅入作者、

法性寺攝政關白忠通公男、初法諱道快、改慈圓、嘉祿元年九月廿五日寂、七十一歲、諡號慈鎭和尙、

〇中略

尊圓法親王、二品、天台座主、俗名尊彥親王、載二、續二、風八、新千十、作者、

寺格

伏見院第六皇子、母播磨內侍、俊衡朝臣女、延文元年九月廿三日入滅、五十九歲、〇中略

義圓准三后天台座主

鹿苑院義滿公男、後還俗、普廣院義敎公是也、嘉吉九年六月廿四日薨、四十八歲、

〔諸門跡傳二〕青蓮院

行玄大僧正初祖、久壽二年十一月五日寂、五十九才、青蓮院初祖、天台座主、號青蓮院、

〔天台座主記〕第五十九前權僧正行玄青蓮房　治山六年桂林房

少納言藤原實明息　行玄座主入室、最嚴阿闍梨灌頂弟子、壽永三年甲辰二月三日、任座主、年七十二、〇中略

建久三年壬子十二月十三日入滅、八十

〔青蓮院文書〕寺務御支配可有之從公儀之御書付

一寺務御支配方之儀、日光御門跡より御綺被成間敷事、

一日光御門跡御支配方之儀、青蓮院御門跡より御綺被成間敷事

〔宗建卿記〕享保十九年十二月廿六日、今日爲賞賜紫衣於妙法院宮、則開眼供養、奉行職事基禎朝臣奉之、進消息歟、從妙法院宮有請文、

爲護持御本尊新寫賞、可令着紫衣蒙綸言、謹奉了、宜預申沙汰之狀如件、

享保十九年十一月廿六日判

追申、自今已後、當院主紫衣著用不可有相違之旨誠無窮朝恩、深以畏入候也、

抑紫衣事、青蓮院宮外、輙不著之給、若於著之者、被申達彼宮之後被著之、近世例也、而享保十六年、妙法院宮堯恭不被申達于青蓮院宮被著紫衣、令行向于輪王寺宮旅坊給云々、依之自青門被申止了、

此事、靈元院被聞食、被勸責妙門土井院家金剛院前大僧正、有恐懼、依之愈以於紫衣者、青門主之外猥無著用之、而去年於宮中御八講之後、爲誠義之賞、賜紫衣袋於一乘院宮、尊昭青蓮院宮尊祐兩門

主、其後於尊昭親王者被著紫衣了、雖然、青門主不及一語云々、又今度如此定知、自今於紫衣者、以恩賜可被著之歟、

〔嘉永四年雲上明覽大全 上〕青蓮院宮

御宗旨天台

青蓮院滿宮 仁孝天皇御養子、伏見 入道邦家親王御子、 十三

御領千三百三十二石餘 粟田口 御里坊梨木町 駒井悠理

院家 二上乘院少僧都法眼 一尊勝院權僧正法印

准院家 一聖光院權僧正法印 五法輪院大僧都法印 三知樂院大僧都法印 四毫 攝一寺大僧都法印 六寶光明院大僧都法印 八無量壽院權大僧都法印 九蓮門院權大僧都法印 十蓮光院權大僧都法印 十一妙解院權大僧 都法印 七阿閦院權大僧都法印 二十乘院大僧都法印 十二鎰量院

坊官 大谷治部卿法印 烏居小路大藏卿法眼 同 谷兵部卿法橋 大谷宮內卿法橋

諸大夫 進藤加賀守 進藤豐後守

侍 山田西市佑 渡邊河內守

侍法師 勝見駿河法橋

承仕

〔青蓮院文書〕慶安元年五月廿七日、於關東、圓智院宮御登城、御新知三百石幷藏經一部、爲御門室、末代如此之旨、武命之事、圓智院宮御筆記、混御在府中之雜記、依之押別紙、納武家御判物箱、年號之御朱書、御門主御筆也、 寶曆六年十一月十三日

〔本願寺聖人親鸞傳繪 上〕九歲ノ春ノコロ、阿伯從三位範綱卿、于時從四位上前若狹守、後白河上皇ノ近臣ナリ、上人ノ養父、前大僧正慈圓、慈鎭和尙是也、法性寺殿御息、月輪殿長兄、ノ貴坊ヘ相具率リテ、ビンパチヲ剃除シ給キ、範宴少納言ノ公ト號ス、

〔反古裏〕今師上人御得度、御齡十二歲、八月十〇天文二十三年二十二日酉ノ一點ト云々、御法名顯如、御筆ヲ以

テアソバサレヤイラセラル、御剃髮ノ作法、御衣、袈裟ノ御著用モ、舊儀ノゴトク、靑蓮院宮ヘ、委細ノ御コトハリアリト云々、御急病ニ付テ、カクノゴトシ、前代ヨリ御門跡ニテ御落髮先例タリ、然バ御禮儀ハアヒカハラズ仰上ラル、

〔諸家家業記〕筆道　靑蓮院宮〇中略

御家樣と申ハ、靑蓮院宮之御傳授ニ而、彼流儀ハ、尊圓親王より始り候而、尊圓親王ハ、世尊寺行房朝臣伊尹卿より御傳來ニ候、此後、世々御家業と相成候、

〔二水記〕大永三年四月十八日、靑蓮院門跡〇尊鎭法親王今曉御逐電云々、勝事儀也、此題目者、今日東山智恩院寺、知恩寺有二相論事一、依二此事一也、門跡者智恩院之儀被レ執申一、說二巨細之儀一、依レ可レ費二筆力一不レ能レ記レ之、

名稱所在

南禪寺

南禪寺ハ、京都東山粟田口ニ在リ、原ト龜山法皇ノ離宮ニシテ、禪林寺ト稱セシガ、法皇改メテ禪院ト爲シテ南禪院ト云ヒ、東福寺ノ普門ヲ召シテ開山ト爲ス、元德二年五山ニ列セラレ、尋デ五山ノ第一ト爲リ、其後相國寺ヲ創シ、之ヲ五山ニ列スルニ及ビ、支那天界寺ノ例ニ準ジ、特ニ當寺ヲ以テ五山ノ上ニ位セシム、金地院ハ南禪寺ノ中ニ在リ、德川幕府ノ初メ、南禪寺ノ住持崇傳ヲ以テ顧問ニ備ヘシガ、崇傳ハ時ニ金地院ニ住セシヲ以テ、金地院ヲ以テ相國寺ノ鹿苑蔭涼ニ代ヘテ、僧錄司ト爲シ、其別院ヲ江戶ニ置キテ、海內寺院ノ政ニ參セシメタリ、是レ實ニ寺社奉行ノ起原ナリ、

〔拾芥抄〕下末諸寺南禪寺龜山院

〔和漢三才圖會〕七十二末山城瑞龍山天平興國南禪寺在二東嶽粟田口山一

創建

〔天下南禪寺記〕日出之國、五山之上、有大禪刹、曰南禪、其山曰瑞龍、在平安城之東、四海神秀、龍蟠虎踞、雲雨吐納、草木茂暢、白河之水、下與鴨川合、而中州淸淑之氣、人物與佳境並騰、鬱々葱々、蹇天造神閟之福地、○註略設于太極之先、立于無極之後、而國家之雄鎭、天下之大法窟也、

〔天下南禪寺記〕若稽惟我文應皇帝、○註略、龜山、位乾上九、於龜山也、特愛山水明秀、弘安中、置離宮於此地、而警蹕接武焉、(有二宮、今大雲本坊舊地、曰上宮、舊號松本殿、以壁松也、乃一條左大將實宅四面焉、次有禁裡御所南面焉、今中坊也、其中間有池水、號瀑、自南東落西流出、泉石皆天下珍奇、金物宸畫三字、龍淵室舊址曰下宮、金泥宸畫三字、)正應之初、物恠于宮中、○註略入簾暇安寢、黑衣千牛、殆乎將弗堪厥職矣、南都北嶺、顯密諸師下及呪術巫祝、百計拱手矣、四年有勅禪徒、禪也者別傳也口無明、手無印、人初不之信、而廷議堅執不允、召東福釋普門、(開山無關和尚、諡大明國師、)奉命率二十禪侶、安居宮中九旬、祖圓爲之冠、(規庵和尚、諡南院國師、)無別行、唯二時齋粥、四時坐禪而已、物恠匿跡、上下安寢、叡感之餘、革宮爲寺、○註略冬十二月、門染疾于蓐、上皇親臨寢室、慰問及於宮寺之後主、以屬祖圓、(時年三十一、)遂有旨、創建大佛殿、上皇親御錦囊代簀、圓差其肩者、是歲辛卯也、後三年落成、

〔濟北集十一〕文應皇帝外紀

文應皇帝者、寬元帝中子也、母藤太后、建長元年己酉降誕、文應元年卽位、文永十二年、讓位于皇太子、稱太上皇、在位十六年、天下康寧、弘安間建離宮于城東、其地元號福地、山木殷森、水石明媚、始平治之元、金吾將軍信頼伏誅、其子某時尙幼、雖不干軍事、以逆黨貶奧州、州人憐其簪纓之族、多與黃金、治承之赦回都、歸橐多金、都人號金侍從、構宅此地、家貲富繁、世言、某以金埋此山、福地之稱、於此立焉、上皇相攸營宮、宏壯嚴麗、爲都下之冠、正應之始、宮恠荐起、宮中戶障、夜半一時齊開共合、宮女之中、有臥而不能起者、問之、曰、有物抑我、故不能起也、問者曰、無、女曰、爭奈不起何、天曉自起、上皇大恐、集群臣議焉、臣僚皆言、高僧德行可沮玆恠、時南京睿尊、有戒行譽、三年上皇召尊安居宮中、以壓恠魅、尊率二十沙門修密法、九旬之間、鈴聲接響、爐壇凝烟、而魅如前、尊不告而南歸、四年上皇召東福普門問曰、師居此

堂塔

宮能止魅乎、門奏曰、外書猶言、妖不勝德、衲子之居、何怪之有、上皇語侍臣曰、門師者、烈丈夫也、因茲勅門又安居宮中、門分慧峯二十比丘、禪宴殿臺、群僚偸眼、門必修秘法、只其二時粥飯、四時禪坐、叢規整肅、亦無他事、自從門之居、宮怪止絶、臺閣宴如也、上皇因此傾心禪宗、謂門曰、宮魅之弭、依師之德業、兼宗門之靈妙也、願捨此宮為禪苑、門敬領之、卽禮門為師受衣盂、

〔南禪寺文書〕禪林寺起願事

朕聞、古云、人身難返、佛法難聽、吾被催十善之餘薫、恭踐萬乘之帝祚、雖有亢龍之悔、猶待金仙之樂、竊思何幸、法逢大乘禪、聞南宗處於後五百世之間、如在三百餘會之砌、爰以建寺度僧、有漏善根、雖非本望、利生悲願、化物要徑也、吾子子孫孫、宜知吾所思、當寺繁昌者、蘿圖永固、玉葉久茂、若背吾所思、厥亡旋踵、若在天界、以天眼照之、若在佛界、以佛眼鑑之、思之々々、○中略

永仁七年三月五日　　佛子金剛眼○龜山御判

〔山州名跡志四愛宕郡〕瑞龍山太平興國南禪寺 五山之上 在下粟田、境地有東山、

總門 西向 中門 同 前ニ有池、懸石橋、池號豢龍、此門常閉

脇門 同 在中門右 常ニ通ル

山門 同 在中門東 五鳳樓 云山門閣

今所在、寛永四年ニ藤堂高虎再興セリ、高虎大阪出陣ノ時、從者討死スル輩ノ牌ヲ安閣上、○中略

佛殿 西向 額 曇華堂 竪額、揭屋禰二重閣、此所元有法堂、回祿已來、以佛殿兼用、古殿地在此前、建仁、相國、天龍、亦同、本尊 釋迦佛 坐像、二尺二三寸計、脇士 左 文殊 右 普賢 共坐獅象、長尺餘、獅像長二尺二三寸計、金剛力士 立像、二尺七八寸計、已上安

厨子、脇壇 南 中央祠山大帝 左 大權修理菩薩 右 護法明王 懸腰倚子、長三尺五六寸計、龜山法皇宸牌 已上南壇

同脇壇 北 達磨大師 百丈禪師、臨濟禪師像、共坐倚子 ○中略

毘盧頂 云方丈、在佛殿東、

記云、下有一大石、老龍屈蟠者、巽位新架大屋、曰毘盧頂、西北面焉、乾峯和尙揭扁、

〔天下南禪寺記〕遂有旨創建大佛殿、略○中 是歲辛卯○正應四年也、後三年落成、署曰金剛王寶殿、略○註 土地曰顯應靈祠、祠堂曰一華五葉、略○註 夾大殿而宇左右也、祠南直大雲之饗堂、略○註 堂之北直歸雲之門、殿之後階、直入曇華堂、略○註 堂之後階、峻峭向上者、曰三級岩、略○註 輾十笏之室、室高揭龍淵、南面焉、註○略 下有一大石、老龍屈蟠者、巽位新架大屋、曰毘盧頂、西北面焉、略○註 庭中有大池橋、四隅栽四松、南偏有柳如綠、曰官柳、龍淵之北、有講茶之堂、曰雷音、略○註 後有二階板葺、宜聽雨也、略○註 階北有井、名不動水、汲用無竭、略○註 雷音之下有橋、曰三十六、以級名也、橋下衆寮、曰薝葡林、略○註 林之南、與曇華相距三丈餘、有小坂上通玄關、關下有小橋、自橋架小廊、廊之北五葉之右有寮、元一字三室、皆南向焉、中曰結集、次曰鬆雪、又次架一閣、曰大羅漢寶閣、後素五百應眞也、略○註 閣下二室、東扁首座、西揭維那、東西班立、相揖而出矣、下有小坂、少北而右紫竹寮、通則川水、略○註 坂之下一字三室、上曰望仰、中曰龍蟠、下曰虎嘯、略○註 虎之次有道、略○註 自大倉前通北門、略○註 道之次架大僧堂、曰選佛場、略○註 場之次橫廡于井、故黃門侍郎源有房卿所鑿也、水冽而甘、略○註 廡之次一字二室、東直歲、西淨頭、次溷司曰東、略○註 東之次橫道北通少林、舊名勝林、草河眞觀上人故居也、略○註 道之中有心地要門、略○註 溷之西道之次有正宗庵、南與洛室相望、其間有一大池、曰豢龍、亘南北、前築案山、以鎭風水、杉檜森列、有亭曰鎭春、略○註 傍有綾戶廟、略○註 從亭前少北、而右池向前、榜其門曰天下龍門、略○註 入門直前北直橫廡、南直天授之響堂、略○註 文和天子○後光嚴新立山門、曰瑞龍山太平興國南禪禪寺、上皇○龜山命建治帝○後宇多親染也、略○註 聳五鳳樓於其上、略○註 入門直前有新佛殿、略○註 佛三世於木、香本師迦文尊于中、而左醫王、右逸多、註○略 自新殿之後東涉步坂、既則橫架之廊于南北、略○註 而東仰之、所謂金剛玉寶殿屹立焉、勅願木釋迦文佛、般若會上說法坐像、即今殿裏四菩薩三大尊者、八大金剛八妙工李勃雖造、○中略 六柏兩行、森々乎殿之庭、而坤隅有御梅也、略○註 極橫廊之南而東行、左顯應之祠、有小坡少進得亭子、曰愈好、略○註 與曇華南扉連構亭南粉壁間焉、自亭而東向磴

陟數壘有門、直向毘盧頂、〇註略門之左扁曰擇木、木之下一字三室、皆西向、北曰小玉、中曰思忠、南曰內史、〇註略亭直其北、左右皆松、前架長廊于赤欄橋、〇註略左逦上生之院、〇註略廊之北一字二室、都總居西、監院在東、其西爲池、〇註略又之西地漸卑有鼓樓、〇註略次有庫院、曰公生明、〇註略與所謂選佛之場相望、庫之前少折而南向、有天授之塔、塔上東嶺曰羊角、有鐘樓曰天銘、故曾相公銘鐘也、〇註略嶺之東、乃文應之帝祠也、〇註略帝嘗以其在禪林寺之南顏焉、曰南禪院、〇註略此寺之濫觴也、

〔金地院文書〕南禪寺山門慶讚供養陞座〇中略　散說

娑婆世界南贍部州大日本國山城州五山之上瑞龍山太平興國南禪禪寺三門、辱龜山太上皇御願、掛勅額曰瑞龍山太平興國南禪禪寺、建治帝〇後宇多親染也、發五鳳樓於其上、安盧釋迦金泥立像、寬元帝〇後嵯峨等身也、罹應仁丁亥年〇元之騷亂、化烏有去、自建亥至于此凡百九十三年之盛事也、自應亥至于今、凡百六十二年、天下之諸侯互蠶食、諸國輕公命、擅私意、以故無有營造之企、纔雖構小營、唯蕭々環土耳、今際聖代、一天四海、悉歸吾大樹將軍源君之掌握、風不鳴條、雨不破塊、諸侯繼踵禮服麾下起廢繼絕、依是某州某縣某村、無大無小、神社佛寺再造復舊規矣、爰伊賀羽林藤原朝臣高虎與予忘年友、訂交年尙矣、有官暇則來、有私隙則往、或時揖予謂曰、故相國大人源君、辱恩顧、片時霎頃無忘于懷、無處欲報、今也於武州上野、天海僧正新興起伽藍、領其地之一方、造建大權現聖廟、欲露丹忱、已有其企、其構營也、厥土燥剛、厥位面陽、厥村孔朗、殿堂門廡、黝堊丹漆、舉以法故、生師有舍、庖廩有次、百爾器備、並平皆作、工蕃吏勤、晨夜展力、越明年成、殊我大人源兩君、枉台駕、有奉幣、一門連枝、他家諸侯無不扈從、何榮如之、〇中略本朝延喜聖君、德超堯舜、昇霞之後、托人求造一万卒堵婆、拔苦厄、自國他邦、如上之所說、不遑枚舉、建立一伽藍、欲資助亡卒冥福、予拊手謂曰、羽林爲什麼智捷如此、實希有之大善人也、何可輕忽哉、仍告吾山三門廢、即勵再營之志、爰分國中、前代未顯有一大山、大木古木鬱々然茂長、乃命斧斤赭之、以適山門之用、夫大木爲柱梁、細木爲桶、欂櫨侏儒、椳闑店楔、各得其宜、以成者、非匠氏

之功、羽林之懇誠、以協佛陀神明也、寛辰〇寛正五年孟正廿七日資始、同年九月十五日功畢、龜山太上天皇御忌月日也、未曾有々々々也、

〔天下南禪寺記〕應永二十八年辛丑十月十九日、丈室重建、舊址易地、源相公義持、加一字曰毘盧頂上、法源宗所立、住持月岩、

〔太平記四十〕南禪寺與三井寺確執事
同〇貞治六年六月十八日、園城寺ノ衆徒蜂起シテ、公武ニ致列訴事アリ、其謂ヲ何事ゾト尋ヌレバ、南禪寺爲造營、此頃建タル於新關、三井寺歸院ノ兒ヲ、關務ノ禪僧、是ヲ殺害ス、是希代ノ珍事トテ、寺門ノ衆徒鬱憤ヲ散ゼント、大勢ヲ率シ、不日ニ推寄テ、當務ノ僧共、人工行者ニ至迄、打殺スノミナラズ、猶モ憤ヲ不休、南禪寺ヲ令破却、達磨宗ノ蹤跡ヲ削テ、爲令達宿訴、忽ニ嗷訴ニゾ及ケル、卽山門南都へ牒送シテ、四箇ノ大寺ノ安否ヲ可定由、已ニ往日ノ堅約也、何ノ余儀ニカ可及、一同ニ觸訴テ、事令遲々、神輿神木神坐ノ本尊、共ニ可有入洛訇リケレバ、スハヤ天下ノ重事出來ヌルハト、有才人ハ潛ニ是ヲ危ミケル、サレドモ事大儀ナレバ、山門モ南都モ、急ニハ不思立、結句山門ニハ、東西兩塔ニ、樣々ノ異儀有テ、三塔ノ事書、鳥使翅ヲ費計也、然バ無左右可事行共不覺、公方ノ御沙汰ハ、裁許無其期シカバ、園城寺ハ、款狀徒ニ被拋テ、恐ノ中ニ日數ヲゾ送リケル、

〔後愚昧記〕應安二年七月廿七日、自今夜、南禪寺新造樓門破却云々、
綸旨案山門訴訟事、七社神輿入洛、依天下重事、偁、優神感可被撤却南禪寺新造樓門、此上早可奉成歸坐之由、可有御下知三千衆徒之旨、天氣所候也、以此旨可令洩申入梶井宮給、仍執達如件、
七月廿一日　右大辨嗣房
內大臣法印御房

〔空華日工集〕應安二年八月十四日、京之音耗至、去月二十八日、因山徒強訴、官拆南禪山門、諸山退隱

前代未聞也、

〔本朝高僧傳 淨禪三十五〕京兆萬年山相國寺沙門妙葩傳
釋妙葩、字春屋、自號不輕子、甲州人、○中略康曆元年春、有旨住南禪、一期未周、殿堂樓閣、皆復輪奐、鐘鼓改響、

〔天下南禪寺記〕明德四年癸酉八月二十二夜半、本寺回祿、凡爲寺殿堂門廡、鐘樓、南禪院火星飛散、無一字不燼矣、直日金剛燒失、蓋每日八金剛輪次下一分飯守護伽藍、牌曰、此大金剛、今朝直日、知殿行者司供自上至下、故上間一三五七、下間二四六八、陽數居上、陰數在下、八金剛出西域記、竺仙和尚、南禪金剛題應誌曰、曆應五年歲在壬午正月十六夜、本寺大雲庵災、烟焰既熾、衆乃惶惑、初覩之、足膝爲之就屈、而莫能起者、由是雖各隨身之具、一巾一屨、覓莫如何以措置、但如蜂午然耳、

〔康富記〕文安四年四月二日癸亥、是日申刻、南禪寺燒亡、自龍興庵失火出、○出一本作土、或大誤歟、佛殿幷法堂、僧堂、山門、庫裏、酒城、方丈等同時炎上、風呂一宇幾相殘、塔頭者天壽庵、龍興庵此二炎上也、本尊出木造釋迦也、奉打破奉取出、又八金剛奉取出云々、方丈羅漢名譽之筆跡也、成一時燼了、開山塔南禪院者免災、無爲也云々、昔文應帝○龜山 詔叡旨、東福普門无關 草創之伽藍、五山之上上禪院也、去明德四年八月廿二日始炎上、今度第二度也云々、佛法滅亡之體可哀之、

〔應仁記 三〕洛中大燒之事
花洛ハ、眞ニ名ニ負フ平安城ナリシニ、不量應仁ノ兵亂ニ依テ、今赤土ト成リニケリ、○中略東山南禪寺五十箇所ノ塔頭ハ、星ヲ幷ブル如ク也、龜山法皇ノ御建立毗盧頂上ノ寺ナレバ、肩ヲナラブル宗ゾ無キ、其塔雙ノ慈氏院、十刹モ不及ト申ケル、

寺格

〔金地院文書〕禁制　南禪寺
當寺爲祈願所、異他也、堂舍佛閣亂入、狼籍不可有之者也、

花押〇足利尊氏

建武四年八月日

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、〇中略禪宗本寺者南禪寺也、

〔天下南禪寺記〕元德二年庚午、準五山、見南院國師行狀、明極和尙住爲五山第一、上堂云、南禪不比舊南禪、超越建長圓覺先、蓋皆後醍醐勅詔、竺仙和尙住、天子入山謝上堂、曆應四年八月二十三日評定、康永元年四月二十三日乎沙汰、至德三年丙寅七月十三日義堂和尙住、升位于天下五山之上、準大明天界禪寺例也、

〔和漢禪刹次第〕諸塔頭〇南禪寺中略

右、南禪寺者、爲勅願皇居之間、可爲五山之上者也、仍於長老耆舊之位者、可爲天龍建長之上、至自餘五山者、隨京都鎌倉之所在、相互可爲賓主禮之狀如件、

至德參年丙寅七月十日　左大臣御判、鹿苑院殿義滿、東山殿也、

南禪寺座位事、可爲天下第一五山之狀如件、

至德參年七月十日　左大臣御判

義堂和尙

〔碧山日錄〕長祿四年八月七日辛巳、勤行如規、正宗曰、瑞溪和尙曰、昔以建仁、東福、萬壽、及建長、圓覺爲五山、而出世住山湘洛交、聘崇擧南禪、爲天下第一山、此時明極爲住持也、後斥關東兩寺、擧天龍相國、以爲其列也、南禪曾以天下龍門揭其門、後撤之爲天龍之門額、又義堂住南禪之時、改第一山爲五山之上云、

〔南禪寺文書〕禪林禪寺起願事

一寺領事

遠江國初倉庄

加賀國小坂庄

筑前國宗像庄

右件三ヶ所、盡未來際被寄附當寺畢、縱雖高岸成深谷、滄海變桑田、不可有改易者也、子孫宜守吾本志願、雖有加增、不可減少者也、〇中略

永仁七年三月五日　　佛子金剛眼御判〇龜山

〔南禪寺文書〕太政官符南禪寺

應停止國司守護使入部並官使、撿非違使院宮諸司及神人甲乙人等亂入、造諸社以下大小國役、關東、鎭西早打役、當寺領遠江國初倉庄内江富郷、吉永郷、鮎河郷、藤守郷、同國新所郷、加賀國得橋郷、同郷内佐野村、佐羅村、今村府南社神主職、並得南、釜延、長恒等之參名、同國笠間東保、但馬國池寺庄、播磨國矢野別名同國大塩庄、備中國三成郷事、

右得當寺住持沙門疎石去二月日奏狀偁、當寺者、龜山法皇革皇居成佛閣、勵叡志興祖宗、締構既遂尊崇、尊崇亦無等匹、仍被降天澤廣大之宸翰、永令備寺領安全之龜鑑、今又賜五山最頂之綸旨、彌奉祈万歳康寧之洪基者也、望請、殊蒙天恩、當寺領悉任勅願之叡志、爲三寶常住物、盡未來際無改轉、爲寺家一圓之地、永止國衙之綺、辨國司、守護使等入部、應被停止造諸社以下官使、撿非違使、院宮諸司國使等之亂入、大小臨時之國役、關東、鎭西上下早打役、吉備津宮役、白山金劒宮以下諸寺、諸社神人、甲乙人等亂入狼籍之旨、被成下官符、備寺領安全之龜鑑、全寺用、彌欲奉祈天長地久之御願者、從二位行權中納言兼春宮權大夫左衞門督大學頭藤原朝臣實世宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行左少辨藤原朝臣花押

修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰花押

建武二年四月廿二日

〔南禪寺文書〕南禪寺領目錄

遠江國初倉庄内 江富郷 鮎河郷〃 吉永郷 川尻村 藤守郷 上泉村

同國　新所郷

加賀國 得橋郷 笠間東保 佐野牛島村 苻南神主職 井御供田

同國倉月庄山家散田 諸江破出 山家散田 山口破出

荒浦内一河六反、安主名帝釋田、中村勝河郷一遶散田、船越散田、樋爪、

播磨國矢野別名、大鹽庄、　備中國三成庄　但馬國池寺庄、小佐郷、尾張國杜庄粟田口二子塞田地、

次當寺西門前敷地等

右所々目錄狀如件

嘉吉貳年十二月三日

〔國師日記〕案紙

當寺門前境内地子以下、令免除訖、永不可有相違者也、

天正十七十二月朔日御朱印

南禪寺

七月吉辰

山城國葛野郡安井村之内貳百石、爲金地院領永代令寄訖、全院納不可有相違者也、

慶長十六年四月十六日御朱印

南禪寺傳長老

寺領方目錄之事

一拾五石六升京廻田畠替西院之内　一百拾三石南禪寺門前

一百五石深草　一百廿石稻荷

一四十三石七斗西京　　一廿一石一斗八升菱川
一百五十七石三斗岡崎村　　一拾四石三升三本木
一三石四斗五升二條より三條之間
合五百九十貳石七斗二升
右全可ㇾ爲二寺納一者也
天正十九年九月十三日御朱印　南禪寺

寺制

〔寺院條目 二〕五山十刹諸山之諸法度

一東班、西班、轉位、官可ㇾ爲ㇾ如二寺法一事、

一秉拂者、叢林之典章、出世之初步也、近年猥申二下無拂之帖一、秉拂既欲ㇾ及二退轉一、於二向後一者、無拂之帖堅令二停止一事、

一南禪寺者深紫衣、天龍寺者淺紫衣、其外京都鎌倉之五山黃衣、十刹、諸山之出世、入院、開堂、儀式等、可ㇾ相二守先規一事、

一南禪寺者、龜山法皇、改二皇居一爲二禪刹一、尊崇異ㇾ他、勅書云、長老職之事、選二器量卓拔才知兼全、而佛法爲二重擔一、勤行爲二志節一之仁一、可ㇾ補二任一者也、僧者不三必貴二人爲一ㇾ尊、乃至雖二吾子孫一、不ㇾ可ㇾ以ㇾ勢住持一云云、然近年乍ㇾ在二他山一、濫申二下南禪之帖一、紫衣僧、其員過二本寺一、甚以無ㇾ謂、向後、本寺之外、猥不ㇾ補任一、但者德碩學之仁、希雖ㇾ有二免之稱一、准二南禪位一、可ㇾ爲二本寺之次座一事、

一新院建立之時、申二下綸旨奉書一塔頭披露先規也、然近年爲ㇾ私稱二寺號院號一事、自由之至也、向後令二嚴制一事、

一庄園方、今度差出之上、碩學料相定訖、選二其器用一、一代宛可ㇾ省ㇾ之事、

一鹿苑、蔭涼之官職者、先代之規範也、當時不ㇾ足二叙用一、毀二破之一訖、自今山後、以二五山長老之中歸依之僧

一員可レ兼二補出世之官貢一、幷入院出仕之儀式等者、如二先規一可二重賞一事、

右條々、爲二寺法相續學文昇進一、所二相定一如レ件、

元和元乙卯年七月日

御朱印

金地院

南禪寺諸塔頭境内幷門前

〔京都寺社制札留〕禁制

一伐二採山林等之竹木一、刈レ草事

附取レ石事

一鷹狩其外諸殺生事

一寺家役者之外、非分之輩、號二親類俗縁家從一、闕二符舍屋一令二擒斷一事、

右條々、任二先例一堅被二制止一之訖、若於レ有二違犯之輩一者、速可レ被レ處二嚴科一者也、仍下知如レ件、

元祿十年九月廿一日

紀伊守源朝臣松平紀伊守〇寺社奉行

紙札一枚列有レ之、板札一枚列無レ之、

〔南禪寺文書〕禪林禪寺起願事

一長老職事、選二器量卓拔才智兼全一、而佛法爲二重擔一、勤行爲二志節一之仁、可二補任一者也、佛日增輝、法輪常轉而已、僧者不レ必以二貴人一爲レ尊、乃至雖二吾子孫一、不レ可二以レ勢住持一、恐爲二傷レ風敗レ教之端一、深屬々々、

永仁七年三月五日

佛子金剛眼龜山〇御判

〔本朝高僧傳二十三淨禪〕京兆南禪寺沙門一寧傳

釋一寧、自號二一山一、世姓胡氏、宋國台州人、〇中略文保元年季秋示レ疾、上皇〇後宇多幸レ寺、駐二蹕龜山廟塔一、時時問レ疾、二十四日曉、手書遺表、獻二于廟塔一曰、一寧頓首、法皇陛下、聖駕幸二本山一、塞細門覰光也、

子院 金地院

〔和漢禪刹次第〕諸塔頭南禪寺中〇中略
大榮派 金地院 大業和上、祥登嗣了堂、

〔本光國師系譜〕崇傳道號以心、特賜圓照本光國師、
永祿十二己巳年生、天正十九年秉拂、文祿三年、賜西堂出世之公帖、慶長十年二月、賜建長寺住職之公帖、同年三月、賜南禪寺住職之公帖、同年五月廿八日、南禪入寺之式執行、慶長十三戊申年、依召駿府江參上、於御城下、金地院新ニ御建立、日々昵近、諸御用相勤、於京都金地院御建立、同十九年廿年大坂江御出馬、兩度共御供、院領追々加增、千九百石、幷御扶持方被下之、天下僧錄司ニ被仰付、元和二年、蒙權現樣御遺命、承台德院樣上意、江戶江參上、御城御近所ニ而、金地院御建立、內外諸御用相勤、專司天下寺社之事、每度金地へ御成有之、御上洛之節御供、寬永十年癸酉正月七日病發、廿日丑刻遷化也、

〔望海每談〕金地院は、元來五山派の司たり、南禪寺の地に有し館中の號なり、其館中には、大業和尙の開基なり、江戶西久保の金地院の院室は、傳長老を初とす、日本の諸寺の司を、總錄と呼て、足利時代より、相國寺にて是を持、故に、大閤時代には、相國寺の館中成る、豐光寺の承兌長老、是を司る、また關東のことは、足利の學校より、三要長老を江戶へ召し、寺社のことを司らしめ玉ふに付て、太閤薨後には、佶長老を相加へ玉ふ、其後、兌長老遷化し、佶長老も老年に及べるを以て、駿府に圓光寺の地を玉ふを以て、時々出仕にて、傳長老壯年にして、才智有故、其始は、名代の如く、諸事を任せたるゆへ每度御前へ出るに、御旨に相叶ひ、總錄を玉ふにより、當時に至るまで、公邊の其代替りと云へども、其職を勤るに依て、是より總錄は南禪寺にて持、寬永の末年遷化す、本光禪師と諡す、丹後の一色左京大夫義口が末子なり、傳長老の師は、靖叔長老と云て、其始は河內の眞觀寺に住、夫より南禪寺の塔頭信乘院に移り、是を移轉して、金地院に住し、傳長老其跡を相續す、

〔教令類纂 初集九十三〕正德二壬辰年九月十一日

故前住南禪金地院國師、東照宮神慮を以て、僧祿司ニ擢任せられ、其後宗風漸く振ひ、法孫普濟禪師、再び前代之御歸依を蒙り、其弟子通應禪師晦堂和尙等、師席を相繼、又相繼ひで、業寂之後、南禪歷住之長老、其師席を繼べきものなくして、本光普濟之傳燈、於是滅絕せんとす、依之御代々別恩之旨に被依、竺隱和尙西堂たるを以、大興禪師之席を繼し例に准じ、通應晦堂之師弟之札西堂を召して、其師席を繼せしめられ、卽日公帖を賜り、宜早く南禪住持職に可任由被仰出者也、

正德二年壬辰九月日

右書付、大奉書堅紙に認之、上包なし、九月十一日、於御白書院綠頰河内守渡之、

右令條留 寶正令條

〔御當家令條 九〕五山十刹諸山法度

任元和元年七月先判之旨、彌停止鹿苑蔭涼之僧官職、令兼補于當院訖、五山十刹諸山之諸法度、出世官資入院之儀式等、守同規如先判可被沙汰之條如件

元和五年己未九月日　秀忠公御朱印

金地院江

〔寺鑑 下〕禪宗五山派　紫衣 五山總錄 京　金地院

勝林山

御朱印　高七百石

〔天明集成絲綸錄 三十〕安永五申年十二月

寺社奉行江

京都金地院、御宮廻り、其外末々共、朽損候ニ付、先達而御修復之儀相願候間、京都町奉行江申渡損之箇所見分吟味之上、此度御宮廻り、御修復被仰付候、且金地院廻り之儀者、爲修復料、銀子四百枚

被下置候間、自分ニ而致修復、勿論、隨分保方麁末無之樣、修復可致旨、金地院江可被申渡候、尤御勘定奉行可被談候、

十二月

〔江戸名所圖會三〕勝林山金地院　增上寺の西切通の上にあり、京師南禪寺の塔頭にして、南禪寺の宿寺なり五山の僧錄と稱す、本尊は唐佛の聖觀世音菩薩なり、或人云、宋人陳和卿が作なりといふ、毎月十八日、觀音懺法修行す、開山を大業和尙と云、其頃碩學なりければ、五山の僧錄司に命ぜられ、評定衆に加へ給ひ、寺社の訴へを決斷せしむ、

〔明良帶錄一〕寺社奉行

寬永十二年、堀東市正始て勤む、此比ハ、評定所なければ、奉行の第宅江金地院出座、寺社の訴訟を聽く、

〔一話一言三十一〕諸家深秘錄抄　御當家御代々諸事始之事

寺社奉行事始ハ、金地院バカリニテ取扱ヒ玉ヒシカドモ、段々御當家御繁榮ニ隨ヒ、次第々々ニ事廣ク成、後々ハ武家或ハ百姓町人、或ハ禰宜山伏ナド相交リ申ニ付、十宗八宗計リニテモ無之故、寺社奉行金地院ヨリ、其事出雲守勝隆ト兩人ヲ以テ、寬永ノ比ヨリ、初テ寺社奉行職ヲ被仰付ケル也、

〔江戸砂子五芝〕勝林山金地院　五山僧錄　寺領七百石　切通芝

開山大業和尙　大覺禪師派

元來京都南禪寺金地院の宿寺なり、

〔天明集成絲綸錄三十一〕天明二寅年十一月

寺社奉行江

金地院及大破、總御修復相願候ニ付、去寅御金五百兩被下、如何樣ニも自分ニ而修復可致旨申渡

雲居院　多寶院　金剛院　南禪院　天授庵　濟北院　眞乘院

候處、種々致勸辨候得共、當年度々之風雨ニ而別而大破ニおよび、先達而被下候金子ニ而者、一向出來難致、當惑致候旨、品々申立、總御修復之儀、再三相願候段、先達而被申聞候、依之、猶又格別之思召を以、此度御堦金五百兩、外ニ檜木千挺被下候間、去年被下候御金共、都合金千兩檜木千挺を以、自分ニ而總修復いたし候樣可被申渡候、尤出來之上申立、出來形見分も請候樣可致旨、是又可被申渡候、被下候御金檜木等受取方之儀者、御勘定奉行可被談候、右之外、佛具類願之儀者、不被及御沙汰候、其段可被申渡候、

十一月

〔和漢禪刹次第〕瑞龍山太平興國南禪禪寺（○中略）

開山夢窓國師（塔曰雲居、又曰三會、○中略）

塔頭、寺内三ケ所也、

雲居院（開山塔）　多寶院（後醍醐天皇）　金（光嚴院御廟　普明國師）

〔和漢禪刹次第〕諸塔頭（○南禪寺中略）

一山派南禪院（龜山法皇御廟　一山國師）辭世曰、横行一世、佛祖飲氣、箭既離弦、虛（○空字下恐脫）落地、

〔增鏡（十三今日の日影）〕禪林寺殿をば、おはしまし、時より、禪院になされき、南禪院といふはこれなめり、

〔和漢禪刹次第〕諸塔頭（南禪寺）

東福派天授庵（第一世無關和尚、諱普門、謚佛心、大明國師、嗣聖一、正應四十二月十二日寂、頌曰、生不離此、去無所去、畢竟如何、不離當處、○中略）

同濟北院（虎關和上、諱師錬、嗣三聖寺寶覺、洛陽人、）

〔南禪寺文書〕南禪寺前住香林、於寺中建立一塔頭、號眞乘院之由被聞召畢、須歸萬國不亂政化、致四海一治懇祈者、天氣如此、仍執達如件、

寶德二年四月十九日　右兵衛權介花押

香林上人御房

南禪寺眞乘院事、早可ㇾ令ㇾ爲ㇾ諸塔頭列ㇾ之由所ㇾ被ㇾ仰下ㇾ也、仍執達如ㇾ件、

寶德二年八月三日　沙彌花押

香林和尙

〔管見記〕弘安六年七月十三日、被ㇾ參ㇾ禪林寺殿ㇾ、新院大宮院、新陽明門院等御所也、

〔國師日記〕元和六年四月十日、御祈禱事、寺中〇南禪寺出頭之衆江布施之事〇中略遣す、

御祈禱之御布施之覺

一參石紫衣　一貳石五斗黃衣　一貳石西堂　一壹石平僧以上　一三石神泉苑　一五斗行者

以上　右是は一年分を、一度ニ相渡候也、

一三石紫衣一人直垂　一二石五斗黃衣一人正因　一六石西堂三人、良西堂、求西堂、廣正堂、

一拾五石平僧拾五人、此拾五人之衆ハ、每月御出仕候を書付置候得と、去年中付候良西堂江談合仕候て、相究渡可ㇾ申候、　一三石神泉苑、是も一年分之御布施ニ而候と可ㇾ申候、　一五斗行者常榮

一貳年能閑　一貳斗常松　以上　此石四ミ如此力者なり

〇按ズルニ、コレハ武家ノ祈禱ヲ、年中定日ニ行ヒシ布施ナリ、

長樂寺

長樂寺ハ京都東山ニ在リ、寬平中ノ草創ニシテ、始メ天台宗ナリシヲ後ニ時宗ニ改ム、境內眺望ニ宜シク、古來勝地ト稱ス、源空ノ弟子沓空、此寺內ニ住シテ、淨土宗中別ニ一流義ヲ興

名稱 所在　創建 宗派 寺職

ス、之ヲ長樂寺義ト云フ、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕長樂寺（十一面、或云准胝、宇多院御時、雙林寺北、祇園東、）

〔山州名跡志 二 愛宕郡〕東山長樂寺　在圓山南　門（西向）　宗旨時宗　宗祖國阿彌二世宜阿彌　當山ハ往昔天台宗　開基傳敎大師　延曆年中ニ開ク處也、或書云、此地景、唐土ノ長樂寺ニ相似タルヲ以テ號ト、　堂（南向）　額　長樂寺（堅額青蓮院道證法親王筆）　本尊千手八臂十一面觀音（立像、一尺三寸、）海底ヨリ出現ノ像ナリ、

〔雍州府志 四 寺院〕長樂寺　在安養寺南、古天台宗也、本尊觀音、洛陽三十三所之隨一也、（中略）斯寺一代住職阿正坊印誓上人、建禮門院之戒師、而中興開基、靈山十六代國阿上人也、自是爲時衆、今有一宇坊舍、其事迹同安養寺、有鞠場及奕碁等之具、而牽遊人之興而已、與古題詠之遊大異、

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕長樂寺（○註略）

長樂寺記略云、寬平年中、草創此寺、置十一面觀音、又有釋迦文殊像、菅氏所謂、更臨露地禮牟尼云々、

〔諸寺略記〕一長樂寺者、延喜御宇、無緣起、本尊准胝金銅小立像、相傳云、寬平法皇御持佛云々、僧寬雅聖人建立也云云、

〔和漢三才圖會 七十二 山城 末〕東山長樂寺　在吉水之內　時宗　寺領八石四斗

宇多天皇朝建立　中興阿證坊印誓上人

〔國花萬葉集 二上 山城〕東山長樂寺（東山吉水之內 寺領八石四斗）　坊主杏阿彌

宇多天皇御宇建立、本尊十一面觀音、中興（開基）阿證坊印誓上人、此寺ニ安德帝御衣之はた有、

〔源平盛衰記 四十四〕女院出家附忠淸入道被切事

同（○文治元年五月）八日建禮門院（○平德子）吉田邊ニテ御飾ヲ下サセ給フ、御戒師ハ長樂寺ノ阿證坊印西上人トゾ聞エシ、御布施ハ先帝（○安德）ノ御直衣ナリケリ、（○中略）上人庵室ニ歸、十六流ノ幡ニ縫、長樂寺

雜載

常行堂ニ被ㇾ掛タリ、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕長樂寺○中略來迎房

五重拾遺云、來迎房、自二西都一移二東山大谷一、元在二太秦一在二知恩院南三町餘一、律師○○隆○寛○於二彼寺一、被ㇾ與二一流義一、故曰二長樂寺義一、

〔黑谷上人傳四十四〕長樂寺ノ律師又號二無我一、稱二皆空一、ハ、粟田ノ關白五代ノ後胤少納言貴隆ノ三男ナリ、○中略長樂寺ノ總門ノウチニ居ヲシメラレケル、○下略

〔蓮如御文二〕抑日本ニヲイテ、淨土宗ノ家々ヲタテ、西山、鎭西、九品、長樂寺トテ、其外アマタニワカレタリ、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕長樂寺

國阿上人繪傳云、東山長樂寺は宇多院御願所十一面觀音也、光英僧都の弟子住持して居給へるが、師匠僧都國阿を尊敬して、兩三ケ寺又雙林、安養、長樂、ともに讓給へば、榮存も上人の弟子となり、彌阿彌陀佛と名ヲ改、

〔今昔物語三十一〕繪師巨勢廣高出家還俗語第四

今昔、一條ノ院ノ御代ニ、繪師巨勢ノ廣高ト云者有ケリ、古ニモ不ㇾ恥ズ、今モ肩ヲ並ブル者无シ、○中略而ル間、公近江ノ守□□ノ□□ト云フ人ニ、廣高ヲ預テ、髮ヲ被ㇾ生ケルニ、守、東山ニ有ル所ニ、廣高ヲ籠メ居エテ、人ヲ付テ髮ヲ令ㇾ生ム、然レバ其ノ所ニ新キ堂有ケルニ籠リ居テ、人ニモ不ㇾ會ズシテ髮ヲ生シケル間、堂ノ後ニ有ケル壁板ニ、徒也ケルマヽニ、地獄繪ヲナム書タリケル、其繪于ㇾ今有リ、万ノ人、行テ皆此ヲ見ル、微妙キ物ニテ有トナム云フ、今ノ長樂寺ト云ハ、其繪書タル堂也、

〔本朝文粹十詩序〕初冬於二長樂寺一同賦二落葉山中路一　高岳相如

夫長樂寺者、形勝之其一也、山頭東嶮、望二鷲峯於不退地之前一、野面西平、顧二鹿苑於無漏界之右一、

〔本朝無題詩八山寺〕春日遊長樂寺　大江匡房

信馬行々不駐蹤、相門後乘得相從、花開花落春空暮、傍水傍山路幾重、錦繡林間連紫袖、瑠璃壇上禮金容、天時地勢誠奇絕、此處自然到下舂、

　藤原明衡

其奈城東閑放何、梵宮高處望方賖、崎嶇嶺勢旁籠寺、桑艾地形欲忘家、鐘磬曉和廬洞水、闍伽春惜禪庭花、嶺松百尺仙門老、山鳥一聲洞戸遮、樓閣參差當反照、郷國迢遞鎖餘霞、被牽好客艷陽興、恣轄行輪送日車、〇中略

秋日長樂寺卽事　藤原有信

一尋梵宇謝塵寰、悅步上方暫望還、蘿洞作觀紅樹下、竹梯踏嶮白雲間、寒葩牢落窮秋草、斜影參差薄暮山、悵望如今心漸倦、不堪兩鬢逐年斑、〇中略

冬日遊長樂寺　藤原有信

蕭條佛閣立盤桓、何耐流年景氣闌、碧洞松高煙色暗、翠微泉落晩聲寒、後嵐吹起來柴戸、山雀群飛押藥欄、庭葉飄零僧院靜、悵望誰不作禪觀、

〔後拾遺和歌集一春〕長樂寺にて、故鄕の霞といふ心を詠み侍りける、　大江正言

山たかみ都のはるを見わたせばたゞひとむらの霞なりけり

〔長秋記〕元永二年十一月十四日、下官行向長樂寺、源宰相爲先妣小堂供養也、〇中略去月晦日法事、所被供養之阿彌陀佛奉安置也、

〔百練抄十二順德〕建保元年八月三日、延暦寺衆徒百餘人、集會長樂寺、爲令燒拂淸水寺云々、是去比淸閑寺領内淸水寺住僧、爲迎講結構娑婆屋、自山門依令燒件屋、淸水寺令謝申、而被責召衆徒張本之間下洛、不拘院之御制止、遣武士幷西面輩、被追散之間、刃傷殺害之者兩方數多云々、　九日、被下解官

宣旨、左衞門尉中原尙綱、藤原景家、同文季、左兵衞尉藤原實員、平直宗、藤原忠村、佐伯正任等也、是去三日於長樂寺致狼藉之輩也、

雙林寺

雙林寺ハ、京都東山ニ在リ、古ハ天台宗ノ寺院ナリシガ、後ニ時宗ニ屬セリ、此地ハ平康頼及ビ僧西行ノ舊跡ニシテ、寺内ニ各〻其塔アリ、

〔拾芥抄下本諸寺〕雙林寺祇園東、藥師、左大史尾張定鑑建立、

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　雙林寺　在長樂寺南、號金玉山、古爲天台宗、中興僧時衆國阿上人也、勵與靈山正法寺爭本末、僧儀與安養寺雙林寺相同、中古平判官康頼有別莊、西行亦栖焉、有所愛櫻、故有康頼西行之塔、寺中文阿彌庭、有相阿彌所設之假山、

〔國花萬葉記二上山城〕金玉山雙林寺東山吉水南寺領廿四石五斗

本尊藥師、左大史尾張定祇建立、中興國阿上人、

寺中坊舍　門阿彌、閑阿彌　長喜庵西阿彌　谷阿彌　阿彌

諸墓

平泰頼入道塔歸洛ノ後、此ノ所ニ隱レ、寶物集ヲ作ル、

藤原周光塔今其所ヲ不知

西行法師塔　頓阿法師塔

〔山城名勝志十四愛宕郡〕雙林寺(中略)號金玉山、寺記云、昔天台宗、至德中國阿上人移住、爲時宗云、本堂側有西行法師、康頼入道墓、近年又建頓阿法師墓、〇中略

國阿上人繪傳云、至德元年十月十八日に、雙林寺住持勝行房は、國阿上人を請して云、我齡かたむ

雜載

き、既に入滅に及ぶの間、天台の宗門、末法不相應なるゆへ、寺次第に衰微し侍る、當寺を上人に讓まいらする間、念佛の道場となし給へとて、勝行房は寶壽庵に移り、往生の素懐を遂給ふ、光英僧都は安養寺にて往生を遂べしとて、無量壽院を國阿上人に讓り、僧都は安養寺に移り給ふ、

〔源平盛衰記 十〕康頼入道著雙林寺

判官入道ハ東山雙林寺ニ、昔ノ山庄ノ有ケルニ、落著テ見ケレ共、留主ニ置キタリシ下人モナシ、庭ニハ千草生カハシ、軒ニハシノブモ茂タリ、荒タル宿ノ習ニテ、事問人モナク、板間ニ苔ムシテ、月ノ光モ漏ザリケレバ、イトヾ心ノスミツヽ思ヒツヾケヽリ、

故郷ノ軒ノ板間ニ苔ムシテ思ヒシヨリモモラヌ月哉、ト我世ニ有シ時ハ、宿所モアマタ有キ、山庄モ所々ニ有シカ共、鬼界ヘ越シ後ハ、其行末ヲ不知、僅ニ殘ル栖トテハ、此屋バカリト哀也、○中略 其後雙林寺ノ庵室ニ閉籠、ナカランン跡ノ形見トテ、涙ノ隙々ニ寶物集ヲ造テ、世ニコソ披露シタリケレ、

禪林寺

名稱所在

禪林寺ハ、一ニ永觀堂ト云フ、京都東山ニ在リ、貞觀年中眞言宗ノ僧眞紹ノ開基ナリ、而シテ當寺ノ淨土宗トナリシハ、往時靜遍ノ時ニ在リト云フ、其本尊ハ、ミカヘリノ彌陀ト稱シテ世ニ著ハル、

〔伊呂波字類抄 世諸寺〕禪林寺 貞觀五年九月庚寅朔六日乙未、以山城國愛宕郡道場一院、預於定額、賜名禪林寺、先是律師傳燈大法師位眞紹申牒偁云々、見三代實錄、

〔拾芥抄 下本諸寺〕禪林寺

〔書言字考節用集 二乾坤〕永觀堂(エイクハンダウ) 城州愛宕郡東山、號聖衆來迎山禪林寺、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕永觀堂禪林寺　在東山　寺領四十三石　號聖衆來迎山

〔花洛名勝圖會東山三〕聖衆來迎山禪林寺　南禪寺の北に隣る、淨土宗西山流、西谷派總本山、無量壽院と號す、世俗永觀堂といふ、寺領四十三石、境内楓樹多し、

創建

〔三代實錄清和七〕貞觀五年九月六日乙未、以山城國愛宕郡道場一院、預於定額、賜名禪林寺、先是律師傳燈大法師位眞紹申牒偁、昔忝以愚朦貧道之質、厚蒙承和聖主之恩、不任慙愧之至、思致涓塵之効、行住坐臥、未曾廢忘、當于此時、至心發願、奉爲聖皇、造毗盧遮那佛、及四方佛像、奉報聖恩、護持國家、而每事闕短、資具未備、唯採材木、未始鏤刻、爰逮于齊衡元年、於河內國觀心山寺、謹奉造、三年之間、其功既畢、竊慮、山中寂寞、住持難久、至于後代、恐有頹毀事、須近移京華之邊垂、令易後代之修治、爰買故從五位下藤原朝臣關雄東山家、即便爲寺家、造立一堂、安置五佛、夫僧買俗家者、律令之所制、私立道場者、格式之所禁也、犯此禁制、立彼道場、非是敢犯法禁、故招罪名、誠欲報先帝之鴻恩、果區々之至願、夫普天之下、莫不王地、所作之功德、皆悉資國王大臣、此則聖敎之所明、非凡愚之私造、請預之定額、名禪林寺、永傳眞言法門秘要、師資相傳、存於不朽、詔許之、

〔山州名跡志愛宕郡四〕聖衆來迎山禪林寺　在南禪寺北　門西向　堂同　在山腹、世ニ云永觀堂、宗旨淨土、宗派西山義、諸化學室アリ、

本尊

本尊　阿彌陀佛見返相、立像、三尺餘、　作不詳　顧眄由緣人皇七十二代白河院永保二年二月十五日ノ晨、律師行道、念佛セルニ、阿彌陀佛壇ヨリ下テ、共ニ行ズ律師、信感ノ餘ニ、暫乾ニ向テ踟蹰ス、其時本尊左ニ顧眄シテ、遲シト言リ、然其相ヲ不改、依師求望ナリ、是偏末世ノ群生ヲ攝取引接ノ證鑑ヲ示ス、師自記之、今尚筆巻存ス、依件義、稱堂云永觀堂、山ヲ來迎山ト號ルハ、寬治二年九月八日ノ夜、師衆ヲ奬シテ、口唱念佛スルコト至信ナリ、忽チ光明赫然トシ、聖衆來影シテ、如星庭前ノ樹上ニ集會、以是稱、

寺領

〔三代實錄陽成三十二〕元慶元年十二月廿七日癸巳、勅山城國愛宕郡、公田四町、施入禪林寺、以太上天皇○清和御願佛堂建彼寺中、地勢窄陰也、

〔禪林寺文書〕山城國淨土寺内四拾參石事、令寄附候訖、全可有寺納候也、

天正十三十一月廿一日　御朱印○豐臣秀吉

永觀堂

右同斷○本寺西山派紫衣　京都　禪林寺

〔寺鑑　下〕淨土宗

御朱印　高四十三石

○按ズルニ、寺格ハ京都圓福寺ニ同ジ、同寺ノ條參看スベシ、

〔和漢三才圖會　七十二末山城〕永觀堂禪林寺

開山眞濟弘法大師之法孫、法相宗、文德帝齊衡年中草創也、　中興永觀律師　淨土宗中興靜遍僧都

〔仁和寺諸院家記〕禪林寺洛東永觀堂是也

眞紹少僧都根本座主、又號石山僧都、弘法大師入室、實惠灌頂弟子、○中略　宗叡僧正號後入唐僧正、又號圓覺寺僧正、左京人、池上氏、本朝眞紹僧都付法上足、唐朝法全阿闍梨重受、○中略　峯斆少僧都眞紹僧都入室、眞濟僧正弟子、宗叡僧正入灌頂資、○中略　深覺大僧正九條右府藤師輔息、寬忠僧正入室、寬朝僧正付法、如意輪持者、有驗、○中略　深觀大僧都號宮大僧都、花山法皇第四御子、深覺僧正付法、○中略　靜遍大僧都號大納言□□池大納言平賴盛息、後隱遁云々、後高野御堂御付法、遍智院成賢附法重受、

〔諸門跡譜　中〕禪林寺世號永觀堂、

眞紹僧都初祖、號禪林寺僧都、　宗叡僧正號禪林寺僧正、又圓覺寺僧正、或說曰、眞紹僧都之甥、　深覺大僧正法務、東大寺別當、東寺長者、高德驗者、　深觀僧都法務、東大寺、號坐禪院禪林寺、石山座主、　良深權大僧都法務、東大寺別當、東寺長者、號石山僧都、　永觀律師號禪林寺律師、歌人千今載撰後作者、　尊譽權僧都　覺譽大僧都　道智僧正號禪林寺、圓城寺長吏、狛僧正、又常喜院、

〔三代實錄　四十五光孝〕元慶八年三月二十六日丁亥、僧正法印大和尙位宗叡卒、○中略年七十六、終於禪林寺、

〔山城名勝志　十三愛宕郡〕禪林寺○中略

雜載

寺家說云、今淨土宗西山流西谷派也、元眞紹開基、本尊坐像彌陀、〈弘法自刻〉所、今任傳授堂、第二世宗叡僧正、智證徒也、淸和天皇歸依之、以此寺爲勅願所、爾後、花山院第四皇子深觀僧都住之、永觀律師、深觀徒也、又爾後、池大納言賴盛卿息靜遍、始爲仁和寺僧、然後住之、源空滅後、披閱撰擇集、而立一向專修義、源賴朝卿深被歸依之、爲武運長久、轉讀大般若經、其規于今不絕、善惠上人徒、淨音自住此、大興西山流、盛弘淨土宗、

〔元亨釋書五〈慧解〉〕釋永觀、姓源氏、投東大寺有慶學三論、兼聞諸宗、晚歸洛東禪林故居、謝絕交往、遍嘉安養、作七寶塔、安佛舍利二粒、乃誓曰、我若生淸泰、舍利必增數、明年成倍、

〔本朝高僧傳十一〈淨慧〉〕洛東禪林寺沙門永觀傳

釋永觀、○〈中略〉年至而立、入光明山、麾斥餘習、偏修淨業、山棲谷飮、凡十年矣、道友强起、住禪林古寺、演唱空宗、兼勸安養、洛下奔赴、大立化門、於寺巽隅、構東南院、○〈中略〉

贊曰、齊衡年中、眞紹僧都、洛之東山、建禪林寺、爲秘密場、爾後、南京東南院主輪次住持、歷二百二十餘歲、永觀律師、挾淨業而唱空宗、承久之比、西山空公往後、爲專修之地矣、今過八百年間、主者之代更、不知其數、而都人不謂禪林、獨稱永觀堂者、豈其德名、歲月磨而不磷者與、

〔禪林寺文書〕淨土當流學席之事、諸國之能化所化、不論遠近、佛法弘通器量之輩、非末寺、任先例、如寺法、皆悉出世之儀、可有執沙汰之由、天氣所候也、仍執達如件、

元龜三年九月廿二日　　右中將〈花押〉

禪林寺

〔本朝文粹十〈詩序〉〕晚秋於禪林寺上方眺望　　紀齊名

禪林寺者、古先帝之所草創也、奇巖削成、縉雲山之嵐愧色、淸泉飛灑、白露水之波讓聲、蓋釋宮之蓬丘艉閬矣、爰右親衛藤相公、屬海內之淸謐、尋洞中之風光、秋興自牽、蔭松柏而爲帷蓋、詩語無倦、靡薜荔

名所　所在　宗派

而代座筵、林宴水嬉、於是爲盛焉、常斯時、倚巖楹而閑居、登石樓而凝眺、澗水葉泛、如濯錦於江鱗、柴籬菊殘、似投玉於山鵲、至如夫進望樵蹊之幽蓬、退顧帝城之喧囂、白雲暮閑、往來者埜巾蕙服之客、紅塵晝暗、奔營者驄馬高蓋之人也、既而軸幌日落、迎佛之使飛煙、松戸人稀、礒塔之鳥棲月、俗客之中有一腐儒之才朽行愚者、獨倦春宮之淸虛、述記秋日之勝事云爾

〔後拾遺和歌集 四秋〕禪林寺に人々まかりて、山家秋晩といふ心をよみ侍りけるに、

源頼家朝臣

暮ゆけば淺茅が原の虫の音も尾上の鹿もこゑたてつなり

〔新拾遺和歌集 十九雜〕禪林寺にて、時鳥を聞きて、　前律師永觀

忍びねも音なかりけり郭公こやしづかなる林なるらむ

安養寺

安養寺ハ、京都圓山ニ在リ、舊ト天台宗ノ寺院ニシテ、僧慈鎭ノ嘗テ住セシ處ナリ、後ニ時宗ニ屬ス、

〔雍州府志 四寺院〕安養寺　在圓山、舊天台宗之寺也、慈鎭和尚暫住焉、山下有吉水、故稱吉水和尚、此水至淸冷也、相傳、三條小鍛冶宗近、製刀日、淬此水云、中世爲一遍上人之派、剃携比丘尼、每賣飲食、爲男女遊樂之場、嘗梅諸、餃餅爲名產、

〔圖花萬葉記 二上山城〕丸山安養寺 東山吉水 寺領八石三斗

根本天台　再興慈鎭和尚　中世ヨリ時宗

寺家　金重　涼阿彌　正阿彌　亭阿彌　連阿彌　彌阿彌

雜載

〔山城名勝志愛宕郡十四〕安養寺號圓山、在知恩院南長樂寺北、

傳云、此寺、應仁亂中爲烏有、愛宕人源照者建立、堂在烏丸東五條坊門北、件堂遷此山、今本堂是也、照者院蒙後小松恩寵、賜紫衣、盲人紫衣始于此云、

拾遺古德傳云、吉水者、感神院東邊、北斗堂北面也、卽今圓山安樂寺是也云云、傳聞、元祖沒後、隣寺長樂寺隆寛律師兼帶此地、應永中國阿上人住焉、爲遊行之派云々、

國阿上人繪傳云、至德二年八月廿六日、光英僧都は圓山安養寺に移り、同年十月晦日に往生し給へり、此安養寺も、上人國阿御支配にて、弟子の宜阿彌陀佛を住持させ給へり、

〔宗長手記〕因幡守賴則、年來異他の芳恩遠行追善のため、東山安養寺にして、千句のとぶらひし侍りし、中略背柏法師、宗碩法師、寺町波々加部河原林對馬守など上洛まことに珍重の事なりし、千句第十、

月にあはれあらましかばも夢路哉

法勝寺

法勝寺ハ、原ト大毘盧舍那寺ト云フ、六勝寺ノ一ニシテ、承暦元年、白河天皇ノ御願建立ナリ、中興ノ祖ヲ慈意和尙トス、後醍醐天皇ノ戒師タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡岡崎村ニ在リ、

名稱

〔伊呂波字類抄保諸寺〕法勝寺承保二年九重塔、并藥師堂供養、應德二年乙丑八月廿九日庚寅、供養常行堂、天永二年始被行三十講、承暦二年始置大乘會、

〔古事談五神社佛寺〕奉立法勝寺五佛之時、覺尋僧正誤其座位、仍菩提房僧都濟覺奏聞事由、奉立直云、又寺號ヲ覺尋ハ大毘盧舍那寺ト名ヅケタリケルヲ、菩提房改之爲法勝寺云々、

〔拾芥抄下本諸寺〕六勝寺

所在 創建 沿革

法勝寺（白河承暦元十二十八供養行幸、白河天皇、）

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　法勝寺　舊在岡崎村、天台淨土也、僧正覺深號大毘盧舍那寺、菩提房僧都濟覺改爲法勝寺、承暦元年十二月十八日斯堂成就、白河院行幸有供養、則爲勅願所、中興祖慈意和尙、而是則東坂本西敎寺建立之僧也、中古斯邊有尊勝寺圓勝寺成勝寺延勝寺最勝寺、加法勝寺是稱六勝寺、法勝寺絕、本尊藥師像、今在東坂本西敎寺、故西敎寺衆法勝寺之事、岡崎往々有寺院之遺址、九重塔跡民間稱塔壇、至今不耕種、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕法勝寺（拾芥抄云、白川承暦元年十二月十八日、供養行幸、白河天皇、或云、當寺中興圓、天台淨土慈威和尙、創東坂本西敎寺、後當寺絕、彼西敎寺知此寺亨、故本尊藥師像、今在西敎寺云々、）

〔愚管抄四〕さてすへさまに、鳥羽院十六年のゝちに、崇德院に御讓位ありて、ひゝ子〇曾孫崇德位に付て御覽ずるまで、白河院はおはしまして、大治に七十七にてぞ崩御ありける、白河に法勝寺たてられて、國王のうぢ寺に、是をもてなされけるより、代々皆此御願をつくられて六。勝。寺といふ、白河の御堂大伽藍ゥちつゞきありけり、ほりかはの院は尊勝寺、鳥羽院は最勝寺、崇德院は成勝寺、近衞院は延勝寺、これ迄にて後はなし、母后にて待賢門院圓勝寺をくはへて、六勝寺といふなゝべし、

〔壒嚢抄十二〕六勝寺トハ何ゾ、并ニ誰ガ御願ゾヤ、
法勝寺ハ白川天皇ノ御願、承暦元年丁巳十二月十八日ニ供養アリ、尊勝寺ハ堀河院御願、康和四年壬午七月廿一日供養在之、圓勝寺ハ鳥羽院后崇德院ノ御母、待賢門院御願、大治三年戊申三月十三日供養、最勝寺ハ鳥羽院御願、尊勝寺ハ東元永元年戊戌十二月七日供養畢、成勝寺ハ崇德院御願、保延五年己未十月十六日供養有、延勝寺ハ近衞院御願、久安五年己巳三月廿日供養畢、
以上六箇寺、皆勝ノ字アルニ依テ、六勝寺ト云也、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕法勝寺（中略）土人云、今岡崎村藪林中有諸堂名、九重塔跡在村南、號塔壇、五大堂跡在村西南車道東、其外堂跡多變壠畝、餘云、傳信和尚慈威、諱惠鎭、後醍醐天皇戒師也、○中略

金堂榮花物語云、金堂は播磨守ためいゑぞつくりける、　講堂　阿彌陀堂　五大堂　法華堂　南大門　八角　九重塔或云、竪横八十四丈、　藥師堂朝野群載、帥江納言願文云、講堂北七佛藥師丈六金像、　八角堂朝野群載、永保三年十月一日、帥江納言願文云、堂艮角八面堂云々、百練抄同之、　常行堂帝王編年記云、爲賢子中宮御菩提也、百練抄同之、　曼陀羅堂　小塔院　不動堂　鐘樓　總社山王　二重塔　八十六間廻廊　西門　北門

〔朝野群載文筆二〕法勝寺御塔供養呪願文

帥江納言

塵點劫裏　佛日希逢　恒沙界間　法水難挹　餘波東泛　適及蓬瀛　末光西留　施被扶木
是以聖上　殊抽宸冲　建大伽藍　號法勝寺　房舍庖湢　經藏鐘樓　道場已就　支提獨闕
金堂南面　瑤池中心　更課馬鈞　新造雁塔　層級黿室　取法栖靈　八角九重　齊度崇福
窮神盡妙　瑩玉飾金　風鐸和鳴　露盤照耀　超々擴俗　步々乘空　仰冩翔鵾　俯顧飛鳥
金剛界會　吾智如來　紫磨添光　百鍊比影　中尊八尺　分座四方　自餘諸尊　各安四角
表別之裏　藏金字經　八方之楹　圖月輪佛　講堂之北　更建一堂　七佛藥師　丈六金像
日月遍照　便在東西　相好端嚴　不能演說　又堂艮角　造八面堂　三尺白檀　愛染王像
十月一日　吉曜良辰　法駕忽臨　齋會爰設　藐姑廻蹕　榆翟移儀　百僚星羅　六宮影從
大長公主　新蕃鷁車　將相王卿　皆連紫綬　鷁舟亘浪　虎賁夾階　洛川雪廻　漁山雲遏
龍神八部　左右圍繞　百六十僧　前後進退　始自今日　乃至未來　於諸尊前　修供養法
法輪不退　到慈氏朝　善根彌蕪　傳樓至世　捧此功德　先資一人　瑤圖長堅　斗獻久轉
三戒水潔　洪涊永銷　五蘊雲晴　晻曖頓盡　白葉不朽　必備白毫　丹心惟深　將開丹菓
會沙添慶　儲鉉增榮　百穀用成　五穀時若　鯷川鶴園　石山劒林　悉免昏衢　共到慧岸

永保五年十月一日

〔中右記〕嘉保二年五月廿七日、曉一院幷女院從法勝寺還御、女院御惱令得尋常給也、法勝寺圓堂、丈六愛染王者明靈驗誠以掲焉也、往年上皇御瘧病時、於此御堂令平復御、今度又女院御邪氣令平復給、先後靈驗、誠爲末法佛之再中歟、

〔百練抄五鳥羽〕保安三年四月廿三日、上皇於法勝寺供養五寸塔三十万基、有舞樂、爲希代法會、

〔本朝續文粹十三願文〕白河法皇八幡一切經供養願文　敦光朝臣

敬白奉書寫一切經律論等事、〇中略保安三年、建小塔院、安小塔二十六萬三千基、年今更加圓塔十八萬二千六百卌七基、此外寺之西則建九間之佛閣、安丈六九體之彌陀、寺之北則排五宇之精舍、安大小數體之尊容、白河之傍建五重塔一基、三重塔二基、〇中略

大治三年十月廿二日

〔元亨釋書二十智傳〕釋榮西、〇中略建永元年秋九月、勅主東大寺幹事、寺罹治承寇火、修營未竟、以西德望、朝廷有此授、不踰四載、大殿層塔、凡當有之所悉備足、去承元二年、洛東法勝寺九層大塔災、勅門下侍郞藤公經監修造、豫周二州充其費、三年秋八月、猶未成一級、朝議以西之幹東大蠱、付以塔事、西不得辭、其落亦如東大之歲、

〔太平記二十一〕法勝寺塔炎上事

康永元年三月廿日ニ、岡崎ノ在家ヨリ俄失火出來テ、軈テ燒靜マリケルガ、纔ナル細煙一ツ遙ニ十餘町ヲ飛去テ、法勝寺ノ塔ノ五重ノ上ニ落留ル、暫ガ程ハ、燈籠ノ火ノ如ニテ、消モセズ燃モセデ見ヘケルガ、寺中ノ僧達、身ヲ揉テ周章迷ケレ共、上ベキ階モナク、打消ベキ便モ無レバ、只徒ニ虛ヲノミ見上テ、手撥テゾ立レタリケル、サル程ニ、此細煙乾タル檜皮ニ燒付テ、黑煙天ヲ焦テ燒

ケ上ル、猛火雲ヲ卷テ翻ル色ハ、非想天ノ上マデモ上リ、九輪ノ地ニ響テ落聲ハ、金輪際ノ底迄モ聞ヘヤスラント、ヲビタヾシ、魔風頻ニ吹テ餘煙四方ニ覆ケレバ、金堂、講堂、阿彌陀堂、鐘樓、經藏、總社宮、八足ノ南大門、八十六間ノ廻廊、一時ノ程ニ燒失テ、灰燼忽地ニ滿リ、燒ケル最中、外ヨリ見レバ、煙ノ上ニ、或ハ鬼形ナル者火ヲ諸堂ニ吹カケ、或ハ天狗ノ形ナル者松明ヲ振上テ、塔ノ重々ニ火ヲ付ケルガ、金堂ノ棟木ノ落ルヲ見テ、一同ニ手ヲ打、ドット笑テ、愛宕大嶽金峯山ヲ指テ去ト見ヘテ、暫アレバ、花頂山ノ五重ノ塔、醍醐寺ノ七重ノ塔、同時ニ燒ケル事コソ不思議ナレ、院ハ二條河原マデ御幸成テ、法滅ノ煙ニ御胸ヲ焦サレ、將軍ハ西門ノ前ニ馬ヲ控ラレテ、回祿ノ災ニ世ヲ危メリ、抑此寺ト申ハ、四海ノ泰平ヲ祈テ、殊百王ノ安全ヲ得セシメン爲ニ、白河院御建立有シ靈地也、サレバ堂舍ノ構、善盡シ美盡セリ、本尊ノ飾ハ金ヲ鏤メ玉ヲ琢ク、中ニモ八角九重ノ塔婆ハ、横竪共ニ八十四丈ニシテ、重々ニ金剛九會ノ曼荼羅ヲ安置セラル、其奇麗崔嵬ナルコトハ、三國無雙ノ雁塔也、此塔婆始テ造出サレシ時、天竺ノ無熱池、震旦ノ昆明池、我朝ノ難波浦ニ、其影明ニ寫テ見ヘケル事コソ奇特ナレ、カヽル靈德不思議ノ御願所、片時ニ燒滅スル事、偏ニ此寺計ノ荒廢ニハ有ベカラズ、只今ヨリ後、彌天下不レ靜シテ、佛法モ王法モ、有テ無ガ如ニナラン、公家モ武家モ、共ニ衰微スベキ前相ヲ兼テ呈ス物也ト、歎ヌ人ハ無リケリ、

寺格

〔蹇驢嘶餘〕一傳信和尚〈隱二于黑谷一〉慈威和尚、諱惠鎭、後醍醐天皇戒師也、法勝寺白河法皇皇居也、其後天台宗住持聖道衣也、後醍醐勅二命慈威一、住二持法勝寺一、從二其時一成二律衣一、後醍醐布薩著坐給也、戒師左座頭也、次第著二右頭下座一也、後醍醐右末座著給也、法勝寺從二其時一紫衣御免、衆僧十九歳、度僧寺位定故、勅裁不レ申二平僧一、ヤガテ上人ト號也、

參詣

〔法勝寺供養記〕承暦元年十二月十八日甲午、被レ供二養白河御願寺一、〈號二法勝寺一〉仍去十月二十三日、內大臣於二仗座一被レ定二僧名一、〈三百口〉十一月廿七日、內大臣召二少外記大江行職於里亭一、被レ仰下御願寺供養可レ准二御齋

會之宣旨、十二月十三日、權大納言藤原實季卿、於仗座被定中諸社御讀經僧名、十一社　御願寺供養御祈也、同十五日被請印殺生禁斷官符、依御願供養也、

前一日堂莊嚴、堂莊嚴爲體、佛像端嚴、堂舍□□□□麗、毗首埜滿月之烟、魯般畫成鳳之力、都盧寶幢綵幡之微妙、繡梠玉璫之殊勝、當愛日以照曜、隨祥風以飄颻、□□甚深、眞實甚深也、金堂南階壇下、東西相分敷座、（東爲上官座、西爲殿上人）經藏西壇下、鐘樓東壇下、各敷座、（東式部、西彈正）堂前壇下、左右立高座二脚、（東呪願、西導師）中央立禮盤二脚、東西立花机二前、置行香具、庭前南構舞臺、舞臺四角立龍頭、懸綵幡、壇上東西、各立立五間絹屋幄二宇、爲左右樂屋、東西廻廊、爲諸僧座、南大門外、左右立七間幄、爲諸僧集會所、南中島立五間幄、爲積物之所、金堂御所御裝束、南裳層東四間、懸御簾、所司設御座於東第四間、第二間立大床子、爲御休息所、西四間爲陽明院御所、東軒廊五間、爲中宮御所、西軒廊五間、爲一品內親王御所、堂以東、第三間以東設公卿座、東裳層爲內侍女藏人等候所、東釣臺爲御在所、（御裝束以下、行事所勤也）御在所北僧房四間、爲傳陸殿下御息幕所、御在所北立七間幄、爲上卿座、次東去七八許□立七間幄、爲殿上人座、次立五間幄、爲外記史等座、次東立五間幄、爲侍從座、次乾角立五間幄、爲官廚饗所、御所幔門外北立七間幄、爲進物所、次立五間幄、爲藏人所衆座、（子午）通北築垣立五間幄二宇、（東爲御輿宿所、西爲內藏大膳職饗所）東堤上立五間幄二宇、（此爲兵衞陣、爲右衞門陣）南　當東壇下巽角立五間幄、（爲右近陣）西大門內北腋立五間幄、（爲左近陣）南大門外西腋立五間幄、（爲彈正座）同門內東西各立五間幄二宇、（東式部省、西兵部省）西大門外南腋立五間幄、（爲雅樂寮官人座）當日寅剋發小音聲、（辨料）分　同剋御佛開眼、次陽明門院、中宮、一品內親王等、行幸以前、各渡御於御所、旁女房皆以打出、奇香異彩、嚴美爛熳于前、同剋上卿關白左大臣、內大臣權大納言藤俊家卿、藤忠家卿、權中納言藤祐家卿、源資綱卿、藤資仲卿、藤經季卿、藤實季卿、源經信卿、藤師通卿、參議藤師成卿、藤基長卿、藤宗俊卿、藤伊房卿、藤公房卿、著高陽院內裏右仗座、于時內大臣召外記、外記中原□□參、敘爵之後、依無外記員數、參進小庭、（但用五位常之）先尋諸司參否、次被仰下留守上卿以下事、參議藤時成卿、

左少辨藤原季仲、少外記中原章貞、左少史淸原師成等、皆奉仰候陣頭、次少外記大江行職率史生令立治部玄蕃標、次扈從者、少納言源朝臣重資少外記大江行職、權少外記中原親平、右大史菅野正職、右少史中原惟季、少內記大江通國等也、當日曉更、大外記中原朝臣師平、大內記藤原朝臣敦基、先從闌路所參寺家也、次行幸儀式如恒、天皇出御南殿、次寄御輿於南殿南階、近仗稱警蹕、公卿起陣座著靴列立、次少納言源朝臣重資、趁進庭中有鈴奏、（有勅答）次公卿已下、五位以上、次第騎馬行列、次御輿出自右衞門陣、大炊御門東折至東洞院、自二條大路東折渡河原、（渡河瀨構橋、國々勤之、）天皇入御西大門之間、雅樂寮著門外幄奏音樂經講堂後、就御出御座所、次進物所供御膳、次左右樂人發亂聲、御所者本是左相府累葉之釣臺也、不改舊粧只添新飾、龍頭鷁首、令浮碧沼以容與、妙舞廣樂、近爲紅欄以經來、誠雖人間之壯觀、髣髴佛界之莊嚴者歟、次卯剋、打衆僧集會鐘、僧侶著南大門外幄、○中略導師權僧正覺尋、所說表白皆勤寸丹、義說春水詞朗秋月、能說之、甚不異鶖子、次揚經題名之、我君雖樂万乘、偏歸三寶、肆卜其勝境、立此仁祠、名地之待主、不其然乎、次有御誦經事、左近中將藤原朝臣保實奉宣旨賜度者於導師幷呪願、次衆僧賜布施各有差、（先昇錄辛櫃、立東西僧座前、傳侍臣等勤之、）次奉布施、（導師料、右中辨藤原朝臣通俊、呪願布施料、權左中辨藤原朝臣師賢、）此外、證誠仁和寺御室師明親王御布施（左大辨伊房卿執之、）導師呪願降高座、樂人發樂、（宗明樂、新古）就禮盤禮佛退出、樂人省寮相引退如入儀、次打金鼓、左右互奏樂、左（伽陵頻、万歲樂、）右（胡蝶、菩薩、地久、輪臺、新靺鞨、納蘇利、）日景已暮、夜漏屢移、仍主殿寮儲庭燎、左右相分祗候、次左近將監多政助依有天氣降自舞臺□胡飲酒、其體受譜第、妙態超傍人、凡横目之翟、誰不感激乎、卽召御前賜爵一級、正助、拭感淚、伏地拜舞而退入、次給樂人祿、次內大臣召左大辨藤原朝臣實政、被仰下勸賞事、正四位下高階朝臣爲家、（播磨守、又被下重任宣旨、）從四位上藤原朝臣保實、（行事權中納言實季卿讓、）藤原朝臣通俊、（行事右中辨、二階、）從四位下藤原朝臣有宗、（陽明門院司□賞、）從五位上坂近武、（金堂工、）從五位下宮道朝臣義武、（行事、檢非違使如元、）文室眞人爲任、（金堂工、主稅屬如元、）伴延方、（講堂工、）法印大和尙位長勢、法橋上人位院助、兼慶、（已上佛子、）次被定兩家別當所司三綱等、金堂供僧、（檢校仁和寺御室、別當大僧正、權別當□□□上座寬慶阿闍梨、）

同堂供僧、(廣算律師、經命律師、增譽法印、濟覺僧都、信源僧都之、)講堂供僧、(永超律師、朝範律師、圓豪法橋、)阿彌陀堂供僧、(公伊內供、長心阿闍梨、)五大堂供僧、(全圓阿闍梨、賴照阿闍梨、義範阿闍梨、)召內大臣、召左衞門權佐藤原行家、依御願供養、今日可被行赦例之由被仰下、事仰退出、予二點進宮前奏鈴、少納言源重資勤之、(勅答如何)次大臣以上、參議以下、皆以退出、內大臣參議藤原師成卿、猶留仗座、召大內記藤原朝臣敦基、有大赦詔書事、內覽奏下如恒、次中務少輔藤原朝臣基□□進小庭著膝突、賜詔書退出、于時寅二點也、事訖內大臣退出、聊注大概貽之來葉矣、

〔白川御堂供養記〕永久二年十月廿九日、院(○白河)白河阿彌陀供養也、去夜亥剋、爲勤皇后宮□乃參彼宮、女房及遲々間、及鷄鳴、仍大夫右大將語下官云、明日行幸、丑時可參由有催者、欲退出、若有尋者所勞更發、退出由可披露者、權大夫雖被候、他官司一人不見、來□亮經忠朝臣參仕、後女房乘出車、次參車、御車於南階、(○中略、)仍以此齋院御車寄同廊在東面、內大臣、(東帶、)源大納言、右宰相中將備前介顯重朝臣候御共、此後退出、過河原門、上皇御幸之由所傳聞也、(○中略、)今度此御堂被補座主(宗受律師弟子也、名信緣、)又被成供僧相範阿闍梨、供養法、此度上皇還御、次前齋院還御、(權大夫參御車)次皇后宮還御、前齋院雖乘御車、女房遲々間、於北門南腋奉過皇后宮給、子剋還御、

〔百錬抄(六崇德)〕天治元年閏二月十二日、兩院臨幸法勝寺覽春花、太政大臣、攝政以下騎馬、前驅、

〔台記〕久安四年七月十七日壬寅、今日供養攝政室新造堂、巳剋參內著右仗、先之右衞門督家成卿承召仰事云々、午剋乘輿、(○近衞)初勸出、一列至法性寺邊離宮、今晚法皇(○鳥羽)皇后及暲子內親王遷御子此所、(上皇(崇德)太后自本在矣、)乘輿直入西間、暫留山中、殿下(藤原忠通)著生裝束、襪線、參會以伊通卿(一院別當)奏事由於法皇、勅許了入御、依召諸卿著御前座、供養□如式、(伊通卿制之)殿下以式賜余(○藤原賴長)云、見式可催行、下官年老目暗不得見之因之余催行雜事、法會間暴雨二度、又雷、諸僧衣濕、被行非常赦、但內裏放火者關神社訟者、殺近衞府重俊大炊允清光者非赦限、仰內記、復召左衞門尉季頼(五位)仰之、依雨佐不參也、舞先安摩、二舞、次左万歲樂、蘇合、龍王、(則介)右地久、新鳥蘇、納曾利、今日舞人無賞、白地之裏、降雨至舞訖、(法會間二度、相)

雜載

（合三度、）舞衣甚霑、秉燭後晴、今日可有胡飮酒散手、依雨停之、殿下問余云、大法會必有散手歸德乎、余申云、治曆法成寺供養無之、左大將云、此外又有無此二舞之例、殿下從之、納舍利之間、給諸卿祿、次贈天子法皇皇后、余取天子贈、其儀到南方、○此下恐有闕文、次於南小廊有敍位事、執筆敎長卿、殿下仰云、大臣可在此所、自餘不可在者、仍候之、敍位之次除目同可書之由被仰、余申云、任人唯一人者書之如何、除目不任唯一人之故也、仰云、所言可然、以口宣可任、考敍位了、殿下以範家奏法皇返給、召重通卿給之、（件卿在敍人之中、）次範家來仰僧賞、仰右少辨光房了、（工藤井顯成任木工少工、由忘却不於本宮仰外記、）之、侍從兼長以攝政給敍正五位下、仍余奏慶於法皇、天子、（直拜舞、先奏法皇、）範家傳奏之、（一院判官代五位藏人）次還御名謁了退出、于時車未廻來、仍乘權中納言綱代車退出、今日兼長不參、（在宇治）余改衣參宿女院、（御忌內）今日導師僧正覺宗、呪願大僧正行玄、（座主）或人云、座主愁不補寺司、（今日供養寺也、覺宗今朝補寺司、座主不被補愁、）稱障返獻法服、因之補寺司、有賞云々、殿下語曰、可獻馬、而或人云、堂前不引馬、因之無此事、予案之、禪閤宇治堂供養日、法皇臨幸被獻馬、與今仰違、是奇之、○中略今日顯親朝臣著白重、左右大將不甘心、今日名夫人曰幸子、事在別記、今日禪閤賜庄十八ケ所、（自六有仰文）民部大夫淸種爲使、依吉日見目六、見莊一所券、即納芝倉、獻賜由報札、

〔本朝世紀〕仁平元年七月五日癸卯、法勝寺御八講五卷日也、仍法皇臨幸、左大臣以下參入、

〔中右記〕寬治八年（○嘉保元年）七月廿六日、院御佛百體、從佛師法橋圓勢許（等身觀音百體）送法勝寺、

〔續史愚抄〕（後土御門）應仁二年八月五日壬辰、法勝寺、元應寺、岡崎在家等火、（或作前年、誤矣）

尊勝寺

尊勝寺ハ、康和四年、堀河天皇ノ御願建立ニシテ、六勝寺ノ一タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡岡崎村ニ在リ、

名稱 〔伊呂波字類抄〕所諸寺尊勝寺

所在 〔拾芥抄〕下本諸寺六勝寺
尊勝寺法勝寺西、堀河東、康和四七廿一供養、行幸、

〔山城名勝志〕十四愛宕郡尊勝寺（中略）土人云、岡崎村西北、東道一町許、西有二寺跡一、

創建 〔帝王編年記〕十九堀河康和四年七月廿一日、天皇御願尊勝寺六勝寺其一供養、御導師覺行法親王白川院皇子仁和寺御室額堀川左大臣、扉章綱書之、

堂塔 〔山城名勝志〕十四愛宕郡尊勝寺（中略）
阿彌陀堂　准胝堂　法華堂　講堂　五大堂　東堂　五重塔　灌頂堂　廻廊　中門　二重樓門

〔百錬抄〕五堀河長治二年十二月十九日、尊勝寺阿彌陀堂、准胝堂、法華堂供養、

〔吉記〕元曆二年七月九日、午剋大地震、（中略）後聞、今日顚倒所々、（中略）尊勝寺、講堂、五大堂、四面築垣、西門、此外東塔、九輪折落、

〔百錬抄〕十三後堀河寛喜三年八月一日、終日風吹、丑剋法勝寺西方在家火事、餘炎及尊勝寺五重塔、拂地燒失、

供養 〔尊勝寺供養記〕康和四年七月廿一日甲辰、今日有尊勝寺供養事、縁日准御齋會、被下宣旨了、去十五日被始御讀經、東又有習禮事、前一日堂莊嚴、其儀金堂南面、裳層東、第四間以東、同第八間以西、東西裳層各五箇間、并北面一間、□□南面并東西面戸等、懸御簾、中央戸五箇間不懸、南東西三面裳層、并壇上敷滿長筵、裳層有塗縁、置纈于、母屋廂裳層等、懸彩幡花鬘代等、壹層并裳層四角懸寶幢、南面裳層東四箇間、爲太上皇白河御所、副南面戸、東西行立亘大宋御屛風五帖、自西第二間西柱下南北行、又立一帖、有綱纈于帶、同第四間敷繧繝端疊二枚、其上敷唐錦縁龍鬢土敷二枚、施唐錦茵、爲御座、子午爲妻、其前立三尺御几帳、西第二三四間、立四尺御几帳、同第

二間敷唐錦毯代、(四角置口形鎭子)其上立螺鈿大床子二脚、敷唐錦褥、其上敷菅圓座、爲御休息所、○中略丑刻太上皇渡御、同刻中宮(○篤子)行啓、(用糸毛御車)寅刻發小音聲、(神分)同刻法印權大僧都經範參上、奉社東西御塔鎭壇、(心柱傍掘立、埋金銅寶、其中納五香五寶、以五色線纒其壺上、)次奉渡御塔御佛、權僧正良意奉行之、其御佛中心安置月輪、兼亦東西心柱第四層奉籠金泥般若心經、法華經等、(幷開結二經、一卷々々在金銅軸、其中籠佛舍利、佛舍利召東寺、以御經納金銅筒之、上有銘、)同層四面垂木、安置秘密眞言經、(書白檀納金銅筥、長二寸、弘一寸五分、)同刻三品覺行法親王參上、被奉社金堂御佛開眼、佛前立禮版、排批香花燈明佛供等、(事了、權左中辨時範取祿掛一僧賜之、)大僧正隆明奉仕講堂藥師堂東御塔御佛開眼、右少史中原信俊賜祿、(白大掛一領)權僧正良意奉仕灌頂堂五大堂西御堂御佛開眼、右少史中原象時賜祿、(同前)卯刻分遣證誠、導師、呪願各一口、引頭二口、唄四口、散花四口、定者二口、法服、○註略同刻打衆集會鐘、辰刻行幸、(鳳輦)(去夕、爲避御今日大忌、行幸法勝寺、)供奉公卿以下步列如恒、先於東門外暫留御輿、以院司民部卿源朝臣被奏事由、次乘輿入御金堂、東廊北面西第二間寄御輿、豫所司供筵道、(筵上鋪兩面)宸儀下輿經廊內、入御金堂御在所、樂人發亂聲、掃部女官昇立鈴大刀契等於東廊壇上、(當于東階下、敷薦安之、)次諸卿著東廊座、次宸儀令禮御佛給、便渡御上皇御所、頃之還御、○中略次左大臣奉勅可行賑給之由、仰左中辨重資朝臣、重資朝臣傳仰、權左中辨時範下知官行事所、令運料米卅石、召撿非違使右衞門府生安倍資清仰之、差副史生令班給之、次打金鼓、次左右遞以供舞、(左方、左近少將資隆朝臣行之、右方、右近少將師時朝臣行之、)次左奏按摩、次二舞、次左万歲樂、右地久、次左蘇合、右新鳥蘇、次左秦皇、此間日落西山、主殿舉燎、次右崑崙八仙、次左散手、(左近將監狛光季舞之)曲了、左大臣奉勅、召光季被仰加級之由、光季舞踏退入、次右歸德樂、次左太平樂、右狛桙、次左龍王、右納蘇利、次賜樂人祿有差、(左右各絹百匹、行事所給之、)先是左大臣奉勅、(藏人頭重資朝臣傳仰、)被寄封邑千五百戶、以三品覺行法親王爲寺家撿挍、以大法師靜明爲上座之由、仰右大辨藤原朝臣、藤原朝臣下知左大史祐俊了、又被補諸堂供僧等、大臣同以仰右大辨藤原朝臣令下知之、

金堂(大僧正隆明　僧正增譽)　講堂(權少僧都賢暹　證觀)　灌頂堂(權律師濟暹　行勝)　藥師堂(權少僧都直尋　法眼和尙寬慶)

曼荼羅堂權僧正眞意、權律師公圓、權少僧都長覺、　五大堂權大僧都永實、權少僧都尋空、　觀音堂權少僧都仁豪、權律師寛助、　御塔權大僧都範俊、

樂畢之後、主上依御旨渡御太上皇御在所、頃之被獻御贈物、銀三衣筥一合、納三衣、置錦袋、在鉛居筥、右大臣取之、銀香爐筥一合、納金香爐、銀輪、同香壺、馬頭盤、在上箸火、打筥、在納物、內大臣取之、此間被始行諸堂行法、畢毎堂儲佛供御明、金堂、灌頂堂、藥師堂、曼荼羅、五大堂、觀音堂、御塔、被始行供養法、講堂被轉讀始一切經、大般若經、亥刻主上還御御在所、次被行勸賞事、藏人頭重資朝臣奉仰、仰民部卿源朝臣、源朝臣各以下知了、〇中略子刻寢儀還御、次太上皇還御、次中宮還御、寢儀還宮之後、左兵衞督藤原朝臣於右仗覽赦令詔書草、就御所邊奏之、重奏淸書、下于中務省了、

廿二日乙巳、令參御願寺、令撤御裝束、

最勝寺

最勝寺ハ、元永元年、鳥羽天皇ノ御願建立ニシテ、六勝寺ノ一タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡岡崎村尊勝寺ノ東ニ在リ、

〔伊呂波字類抄左諸寺〕最勝寺鳥羽院御宇、元永元年供養、

〔拾芥抄下本諸寺〕六勝寺

最勝寺尊勝寺東、元永、元十二十七供養、鳥羽院、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕最勝寺(中略)土人云、舊跡在岡崎村西、二條通北、車道一町許西、欅園云田字也云々、

〔帝王編年記十九鳥羽〕元永元年十二月十七日御願、最勝寺其一六勝寺供養有行幸、額、法性寺殿下、于時內大臣、正二位

阿彌陀堂扉、定信、

〔山城名勝志十四愛宕郡〕最勝寺〇中略

藥師堂　五大堂

〔百練抄六崇德〕大治四年三月十六日、最勝寺五大堂炎上、　五年十二月廿六日、最勝寺五大堂供養、件堂、去年三月炎上、仍紀伊守公重造進之、

〔百練抄八後高倉〕安元元年十月廿三〇三、一本作一日、最勝寺藥師堂供養、去嘉應年中爲風雨空顚倒、其後造營之、無行幸、又上皇不臨幸、

〔吉記〕元曆二年七月九日午剋、大地震、〇中略後聞、今日顚倒所々、〇中略最勝寺藥師堂、三面築垣、

寺領

〔吾妻鏡六〕文治二年九月十三日丙辰、最勝寺領越前國大藏庄事、北條四郎時政代時定幷常陸房昌明等致押領之由、副寺解所被下院宣也、仍被經御沙汰、自今以後、時政雖知行地頭職、不可忽緒本寺下知、早停止新儀之無道、從本寺之進止、可令致年貢課役勤之由、所被仰下也、

雜載

〔中右記〕元永三年〇保安元年三月廿八日、右中辨雅兼送書狀云、最勝寺作事時、所召諸國之赤土用殘、于今在彼御寺、以彼赤土被塗鴨社廻廊、可有其憚否、可令量申給由、依御氣色上啓如件、

〔兵範記〕保元二年六月廿五日、參最勝寺、著西廊座、公家奉爲前鳥羽院、被行周闋御齋會、

圓勝寺

圓勝寺ハ、大治二年、鳥羽天皇ノ中宮待賢門院ノ御願建立ニシテ、六勝寺ノ一タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡二條ノ南、鴨河ノ東ニ在リ、

名稱

〔拾芥抄下本諸寺〕六勝寺

圓勝寺大治三三十三供養、行幸、待賢門院、

所在

〔山城名勝志十四愛宕郡〕圓勝寺〇中略土人云、舊跡在二條南鴨川東、今粟田口金剛寺北也云々、

創建

〔帝王編年記崇徳二十〕大治三年三月十三日、待賢門院御願供養圓勝寺、六勝寺其一也額、法性寺殿下、殿上廊同、西北廊華園左府、寢殿定信、御洛室御所平等院僧正行尊、

〔本朝續文粹十二呪願〕圓勝寺供養呪願

至心驚覺　三摩地門　稽首歸依　五部海會　檀那仙院　芳猷塞淵　宿福內備　陰教外播
后房逃歸　姑射並居　瓊樹花鮮　金樓月朗　人門娛樂　難忘於情　佛界護持　猶保於望
堯衢之側　周洛之東　榮光浮河　休氣發漢　法勝最勝　蓮宮卜隣　三層五層　華塔接砌
就斯吉土　建以伽藍　朱檻插雲　壁瑠映日　中史精舍　兩界圓極　大日如來　二丈飾像
胎藏新顯　四種法身　心符相諧　一切事業　其餘四座　皆丈六姿　瑩紫磨金　耀白毫玉
東方一佛　放青色光　常護我身　魔緣退散　南方一佛　放金色光　常護我身　願求滿足
西方一佛　放蓮華光　常護我身　壽命增益　北方一佛　放五色光　常護我身　利益安穩
丹精發爛　七尺四天　前後周廻　晝夜衞護　其左則有　五間層軒　五大明王　現忿怒相
其右復有　九間飛甍　數體佛陀　結跏趺座　維此二字　安置諸尊　年々剋雕　度々供養
今非佛閣　奉移尊容　載生居一本作舍然　宿願云果　圓頓實語　妙法花經　一部金文
百部黑點　部帙各別　開結相加　茲外心經　亦是金字　三年三月　無事無爲　櫻杏紛繽
管絃燁爗　黄屋稱蹕　八十一車　緇衣整襟　一百餘口　太上兩院　臨幸仁祠　鳳凰雲軒
連鑣並軌　薝蔔香散　瑠璃幡飛　開眼開題　以讚以嘆　謂惠業趣　出法皇恩　依此精誠
奉增寶壽　釋迦樹下　禪定無驚　第君洞中　宴遊不限　天子親母　祈延曆遙　上皇正妃
資仙算久　盤石基固　池水浪平　萬國朝宗　百寮時序　始從有頂　以及無邊　悉離邪山
併到智水

大治三年三月十三日

成勝寺

名稱　成勝寺ハ、保延五年、崇德天皇ノ御願建立ニシテ、六勝寺ノ一タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡三條ノ北ニ在リ、

〔拾芥抄下本諸寺〕六勝寺
成勝寺保延五十六供養、行幸、崇德帝、

所在　〔山城名勝志十四愛宕郡〕成勝寺(中略)金堂、經藏、鐘樓、廻廊、東南西北門等、見供養次第、土人云、成勝寺在三條北一町半許、白河橋東也云々、

創建　〔帝王編年記二十崇德〕保延五年十月廿六日、天皇御願、成勝寺供養、六勝寺其一也、有行幸、額、法性寺殿下、

〔愚管抄二〕永治元年十二月七日脫屣之後、すべて鳥羽法皇の御心に叶はせおはしまさざりけるにや、法皇崩御後事ども細に別帖にあり、御在位のあいだ、成勝寺を被立、

雜載　〔吾妻鏡六〕文治二年六月廿九日乙亥、成勝寺興行事、被申京都、凡神社佛寺事興行最中也、○中略成勝寺修造事、可被急遂候也、若及遲怠候者、彌以破損、大營候歟、就中被修復當寺者、定爲天下靜謐之御祈歟、然者國ニモ、被宛課候テ、急御沙汰可候也、以此旨可令申沙汰給候、賴朝、恐々謹言、

〔百練抄八高倉〕治承元年八月廿二日、始於成勝寺被行御八講、爲崇德院御菩提也、

延勝寺

延勝寺ハ、久壽二年、近衛天皇ノ御願建立ニシテ、六勝寺ノ一タリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國愛宕郡圓勝寺ノ西ニ在リ、

名稱　所在　創建

〔拾芥抄 下本 諸寺〕六勝寺
延勝寺 (久安五三廿供養、行幸、近衛院、)

〔山城名勝志 十四 愛宕郡〕延勝寺 (中古)土人云、跡在圓勝寺西、

〔帝王編年記 二十 近衛〕久安五年三月廿日、天皇御願延勝寺供養、(六勝寺其一也)

〔愚管抄 二〕久壽二年七月廿三日崩御、〇近衛 延勝寺を被立、此後代々如此、御願寺聞えず、五代の御門、此五勝寺を建らるゝに、待賢門院の圓勝寺を加へて六勝寺といふ、

〔百錬抄 七 二條〕長寛元年十二月廿六日、延勝寺阿彌陀堂供養、以近衛殿寢殿被立、延間數安置九體丈六佛、

名稱　所在　創建　寺號

靈鑑寺

靈鑑寺ハ、山城國愛宕郡鹿谷ニ在リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一タリ、

〔雍州府志 四 寺院〕愛宕郡　靈鑑寺　號圓城山、在鹿谷、　後陽成院之子女房持明院基久卿息女產妙法院宮堯然法親王、後陽成院崩後爲尼、此處依爲妙法院之領地建寺棲焉、後西院姬宮爲弟子稱谷宮、無幾而遷化、今住稱千宮、是亦新院之姬也、

〔山州名跡志 四 愛宕郡〕靈鑑寺　在谷口左　宗旨禪　門 (南向)　堂 (南向)　本尊不動 (石像立像一尺餘)　作智證、此像初自此安南堂、近年移此所、當寺御住主尼公姬宮開基、靈鑑院尼公、妙法院堯然法親王母公、

〔寛永七年 雲上明覽大全 上〕御比丘尼御所　鹿谷　稱谷御殿
御領百二十石

〔禪宗旨寺〕靈鑑寺宗諱入道女王　三十九

上皇御猶子　實伏見故貞敬親王御女

御家司　田原攝津介

宗教部四十七

佛教四十七

眞正極樂寺

名稱 所在 | 創建 沿革 本尊

眞正極樂寺ハ、一ニ眞如堂ト云フ、京都東山神樂岡ノ東ニ在リ、正曆三年、一條天皇ノ勅旨ヲ以テ創建セシ所ニシテ、寺地屢〻變更セシガ、元祿六年、今ノ地ニ移セリ、

〔書言字考節用集〕二乾坤眞如堂（シンニヨダウ）洛京黑谷北、舊圓仁開基、號鈴聲山極樂寺、

〔和漢三才圖會〕七十二末山城眞如堂極樂寺　在神樂岡東　寺領百五石

號鈴聲山一條院正曆三年勅願、以叡山戒算上人爲開祖、兼學淨土宗、不斷念佛道場、　寺中十二坊、

本尊阿彌陀慈覺大師作、三尺三寸、但有白毫之規、而未入玉、有由來、詳于緣起、

初在江州大戒京一條、其後在京極今出川、元祿年中、遷于舊地神樂岡、

〔山城名勝志〕十三愛宕郡眞如堂在神樂岡東、

〔山州名跡志〕四愛宕郡鈴聲山眞正極樂寺眞如堂　在金戒光明寺北　宗旨　天台　門西向　堂同

本尊　阿彌陀佛立像三尺三寸、作慈覺大師　脇士左千手觀音立像、一尺四五寸、同右不動立像、一尺許、一共新作

當寺開祖戒算上人、願主白河院后、山ヲ鈴聲ト號スルハ、此地、神樂岡ノ邊ナル故也、

〔雍州府志〕四寺院眞正極樂寺　號鈴聲山、又專稱眞如堂、本尊彌陀如來、慈覺大師之所作、而其始在叡山圓融院、永觀二年、本尊入山門、戒算上人夢曰、爲衆生利益欲出聚落、然三塔衆徒不肯之、戒算不能止、先移斯像於雲母坂地藏堂、又入夢告曰、神樂岡邊一夜檜木千本須生、是處則佛法有緣之地也、須

遷斯處、遂果然、其處則神樂岡邊、東三條女院離宮之內也、又與女院之所夢合、於是先移離宮、東三條女院、一條院之母公也、一條院、正暦三年秋、有勅建寺、戒算上人、天喜元年癸巳正月二十七日九十一歲而遷化、東三條女院塔亦在此處、應仁兵亂時、暫移本尊於山門黑谷青龍寺、又遷近江國穴太寶光寺、文明九年三月二十六日移洛陽一條、近世移京極今出川、斯本尊如來、諸人尊崇不淺、與三條京極誓願寺彌陀爲一雙、寺僧天台淨土兼學之、中世以來、山門院家上乘院代々住此寺、有寺產百五十石、每年自十月六日夜至同十六日朝有法事、是稱十夜、是因伊勢氏貞國靈夢之告、始自此寺、近世誓願寺幷其餘淨土宗寺院亦有此儀、本堂北有元三大師之像、相傳、所在山門之元三大師之畫影、幷廬山寺之所有卿公覺超之筆也、此像元三大師之所自彫刻也、每月三日、十八日、二十八日開帳、取圖之人常不絕、此圖中華所用觀音百籤之法也、宗門徒、謂慈惠爲觀音化現、故用之、依以觀音百籤附託之者也、又有稻荷神像、每年二月初午日、諸人參詣、

〔眞如堂緣起(山城名勝志所載)〕洛東神樂岡邊、鈴聲山眞如堂、本尊阿彌陀如來、(慈覺大師作、立像三尺三寸、九品來迎印、)山因神樂岡名鈴聲、寺號眞正極樂寺、本堂稱眞如堂、(本尊彌陀)大師(慈覺)在世間、叡山安常行堂、永觀二年、夢告戒算上人曰、爲衆生濟度、欲出聚落、早可令下山云々、三院衆議先雲母坂地藏堂令遷座、其夜又告云、神樂岡邊、一夜檜千本可生、是則佛法有緣地、衆生救度處也、果然其處則白河女院、(一條院母后、三條院姉、)東離宮內也、又院所夢合、於是先移離宮云々、正暦三年秋、有勅建本堂云々、應仁二年八月三日、依兵亂、移西塔黑谷、(青龍寺)文明二年三月十五日、遷穴太、(東坂下寶光院)同九年三月廿六日、移洛陽一條町、

〔眞正極樂寺文書〕山城國愛宕郡東山鈴聲山眞正極樂寺

眞如堂瑜伽最上乘院

勅。願。所、天台宗、三昧法流之密室、

本。尊。阿彌陀如來、生身之佛體、慈覺大師眞作、開山戒算和尙、緣。起。後柏原天皇宸筆、

御朱印所寺領高百五石城州淨土寺村之内、號花園田、

一圓融院御宇永觀二甲申年、一條院母后東三條女院子詮神樂岡之離宮御寄附、元眞如堂敷地是也、瑠璃壇之跡、蓮花水于今有之、

一一條院御宇正暦三壬辰年、蒙宣旨、本堂建立、

一文明十七乙巳年、慈照院義政公、本堂御建立、

本堂御建立之儀、御自筆之御教書被成下也、

先十六年爲燈明料、山城國花園田内御寄附、當寺領是也、御代々御朱印頂戴、

一後柏原院御宇、大永改元辛巳年八月廿九日、本堂供養御參向、柳原右中辨資定朝臣御導師青蓮院宮入道親王、將軍義稙公御參堂、法會御聽聞、爲御嘉儀、御太刀一腰、御馬一疋拜領、以伊勢守被成下也、

一正親町院御宇、永祿十丁卯年五月十一日、當寺住持職常紫衣之事、依爲勅願所、先例勅許之上者、重而不待勅、住持璽永可令著之由綸旨頂戴、職事甘露寺左中辨經元、

一永祿十丁卯年、光源院義輝公御殿之御跡、勘解由小路東頬御寄進、將軍義昭公本堂御建立、

同十一戊辰年、城州西岡下津林之内智德庵領、幷道場分御寄進、

一同十二己巳年、御殿之御跡、義昭公重而依被立御殿、一條之町方四町之替地、本堂被引移之也、

本尊遷座之砌、依御尊敬、路次爲警固、公領平信長御供奉云々、

一天正十五丁亥年、太閤秀吉公、寺町エ本堂被引移之、京極今出川之敷地是也、

一慶長九甲辰年、秀賴公、本堂御建立、奉行片桐主膳正

一後水尾院御宇、慶長十六辛亥年正月七日、蒙宣旨、鐘樓堂再建、職事中御門右中辨宣衡

一東照宮、當寺本尊御尊敬、元和改元乙卯年七月十五日、依爲御宿願御成就、御戸張一片、黃金十枚

寺格
寺領

并毘沙門天一尊被爲遊御寄進之間、天下泰平、御武運長久、御子孫繁昌之御祈禱、永可勵丹誠之由、以南光房僧正天海所被仰下也、依之長目御禱、奉抽丹懇者也、御戸帳、毘沙門、井御敕書、今有之、

一萬治四年辛丑年、依本堂類火、寛文三癸卯年、於寺社御奉行所御建立之御帳付之訖、井上河内守、加々瓜甲斐守、

一元祿改元戊辰年、京都勸進御赦免、同三庚午年本堂再建、九月廿六日本尊遷座、同五壬申年十二月朔日類火、同六癸酉年、依台命東山へ替地、假堂建立、八月廿二日本尊遷座、

右之外、天子、后妃、將軍家、御尊敬、依之宸翰御敕書雖被成下略之、

瑜伽最上乘院尊通

〔薩戒記〕應永卅三年七月十四日丙午、詣眞如堂、奉禮如來尊容尤殊勝、是慈覺大師一刀三禮之尊像也、

〔寺格帳上天台宗〕御朱印高百五石

大僧正迄昇進　京眞如堂　上乘院

右住職、從御門主被仰渡、任官之儀者、於京都相濟候故、御禮不申上候、

一織目御禮、御白書院獨禮獻上壹束一卷、御闕之外貳疊目、

一御暇於柳之間老中被仰渡、時服五、白銀拾枚拜領之、廣蓋ニ而引、

一年頭御禮無之

〔眞如堂文書山城名勝志所載〕山城國花園田〇花園在葛野郡東内下地二町、眞如堂爲燈明料、

文明十六年六月十一日　　准三后（足利義政）判〇古

金戒光明寺

名稱 所在	創建 宗派

金戒光明寺ハ、京都東山新黒谷ニ在リ、淨土宗鎭西派四箇本寺ノ一ニシテ、源空ヲ開祖トス、當寺ハ原ト比叡山西塔黒谷ナル源空修學ノ遺跡ヲ移セルヲ以テ、世ニ亦新黒谷ト稱ス、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕紫雲山金戒光明寺　在東山新黒谷　寺領百三十石　開基　源空上人

淨土宗四箇之一本寺　坊舍三十一院　道心者十八院

〔黒谷源空上人傳〕第六發心離山住谷門

久安六年庚午九月十二日、生年十八歳ニシテ、始テ黒谷ノ禪室ニ入リ、慈眼房叡空上人ヲモテ師トス、彼師ハ、瑜伽秘密ノ眞言玉ヲ瑩、圓頓大乘ノ戒律鏡ヲ懸、學解雙ナク、道心最深シテ、誠ニ師ノ位ニ足レリ、上人ノ發心ヲ聞テ隨喜シ、讃シテ仁者少年ニシテ、早出離ノ心ヲ發セリ、實ニ法爾法然ノ上人ナレバ、法然ヲモテ房號トスベシ、實名ハ源空トス、コレ源光ノ上ノ字ト、叡空ノ下ノ字トヲ拾取トゾ申サレケル、抑法弟聖覺黒谷ノ爲體ヲ聞見ニ、谷深シテ流淨、囂亂併去レリ、路細シテ跡幽ナリ、隱居尤便アリ、聖教藏ニ滿リ、修學自勇、本尊光ヲ耀ス、行法何怠ラン、遁世籠居ノ上人ノ心ヲ留給コト誠ニ其謂アリ、上人此ニ住テ、年月幾ナラザルニ眞言、戒律、一身ニ兼學シテ、血脈ヲ叡空上人ヨリ稟承ス、○中略

第八信修念佛往生門

上人○中略黒谷ノ報恩藏ニ入テ、一切經ヲ披見スルコト既ニ五遍ニ及ヌ、

〔山城名勝志愛宕郡十二〕青龍寺　在黒谷、本尊文殊、十一面、淨名居士、法然上人、始住于此、故今有像、俗云本黒谷、

〔雍州府志寺院四〕愛宕郡　金戒光明寺　號紫雲山、傳言、古紫雲起自斯山之石上、其石于今在西雲院中、昔日法然上人、始住叡山西塔黒谷、爾後建寺於斯處、弘淨土專念之宗、故是稱新黒谷、是亦淨土宗四箇本寺之一員也、四箇本寺、所謂知恩院、清淨華院、知恩寺、并當寺是也、毎年自正月十九日至二十五日、修法然忌、然斯說多異論、暫措之、本尊法然上人像之側有一向宗祖親鸞之像、是謂所自刻也、然

其所從來不分明、或言非親鸞之像、山上有塔、本尊文殊、始在中山寶幢寺、本朝三文殊之隨一也、中世寶幢寺中絕後、塔本尊在黑谷方丈、中興應譽上人時、建斯塔爲本尊、今方丈百五十石之寺產、元爲寶幢寺之所有也、寺中蓮池院有熊谷入道蓮生之像、山上有平敦盛塔、幷蓮生塔、寺之西北隅有西雲院、於斯院修常念佛、前年既有一萬日不退轉念佛之結願、故世稱萬日寺、開基僧號心譽宗嚴也、始此僧未披剃時、豐臣秀吉公征伐朝鮮日、爲小野氏所擄、來日本、天性無男根、故所到爲閹人、仕蜂須賀蜂庵、又事高臺寺政所亭、爾後從知恩院滿譽上人薙染爲僧、于時公方家侍女一位阿茶局、施資料創院於斯處、依之中華朝鮮投化人、於本朝死則葬斯院、

堂塔

〔山州名跡志四愛宕郡〕紫雲寺山金戒光明寺　在黑谷、境地山上、　門（西向）　堂（南向）　所安法然上人像、（坐像、二尺五六寸許、安厨子、）　自作　此像、初藝州瀨戶田ニ安ズ、　東照宮尊命ニヨッテ所移也、其故ハ、是ヨリ先、此堂ニ上人自作ノ像ヲ安ズ、然ルヲ此堂爲失火回祿ス、僧アリ、像ヲ抱出ントシテ、共ニ燒死ス、此旨達台聽、是ヲ惜彼ヲ憐玉ヒテ、諸國中、自作ノ像ヲ尋玉ヒ、遂得玉ヘル處ナリ、

親鸞上人像（同前）　安西脇壇

佛殿　在堂東、西向（堂內敷瓦）　本尊　阿彌陀佛（坐像、六尺許、）　作惠心　惠心僧都、一生間刻彫セラルル佛像多、此像工ノ畢故ニ、俗稱乙如來ト云フ、　脇士　觀音　勢至　近世安之　善導像（立像、四尺許、）新作　安同南壇

經藏　在堂前　中尊　寶冠釋迦（北面）　聖德太子像（東面）　新作　脇壇安二僧像、（左二十四世叶）譽上人、（右三十五世）通譽上人、當堂建立願主ナリ、

勢至堂　在堂巽、西向、　額　勢至堂（横額）　本尊、勢至菩薩、（坐像、一尺五六寸許、）　新作　此所開山法然上人塔所ナリ、五輪石塔　在本尊臺座下

敦盛熊谷塔　在勢至堂前（五輪）　敦盛法名空顏憐清、此號法然上人ノ作ナリ、上人ノ筆跡、攝州須

磨浦福祥寺ニアリ

熊谷堂 在勢至堂下 蓮生法師像 立像、一尺五六寸許、自作 傳云、蓮生房居住所ナリト

〔山城名勝志 十三愛宕郡〕岡崎文殊 號寶幢寺、本朝三文殊一也、今爲新黒谷三重塔本尊、或云、寶幢寺中絶後、此像置黒谷方丈、中興慶譽上人建此塔安置云云、

寺領

〔寺鑑 下〕淨土宗 紫衣 京都黒谷 金戒光明寺

御朱印 高百三拾石

菩提樹院

名稱所在

菩提樹院ハ、後一條天皇ノ遺詔ニ由リテ建立スル所ニシテ、今廢寺タリ、舊地ハ山城國愛宕郡神樂岡ノ東ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 保諸寺〕菩提壽院 長曆元年丁丑六月二日、上東門院被供養、

〔拾芥抄 下本諸寺〕菩提樹院 神樂岡東、上東門院御願、

〔山城名勝志 十三愛宕郡〕菩提樹院 (中略)元在神樂岡東麓、

創建

〔日本紀略 後一條十四〕長元九年五月十九日丙申、奉火葬淨土寺西原、神樂岡東西也、遺詔、停素服擧哀、不任喪司、不置國忌山陵、從今日立伽藍於神樂岡東、名曰菩提樹院、御葬之間、長家以下拾御骨、經輔懸御骨、安置淨土寺畢、

雜載

〔後拾遺和歌集 十哀傷〕菩提樹院に、後一條院の御影をかきたるをみて見なれまうでけることなどおもひいでゝ、よみ侍りける、 出羽辨

いかにしてうつしとめけん雲井にてあかずかくれし月の光を

〔千載和歌集 三夏〕後一條の御八講に、菩提樹院にまいりて侍けるにかぐら岡にて、ほとゝぎすの鳴

名稱所在

侍ければよめる、　律師慧遲

古を戀つゝひとりこえくれば鳴あふ山のほとゝぎす哉

〔枕草子　二〕ぼだいといふ寺に、けちえん八かうせしが、きゝにまうでたるに、人のもとよりとくかへり給へ、いとさう〳〵しといひたれば、はちすのはなびらに、

もとめてもかゝるはちすの露をおきてうき世に又はかへる物かは、とかきてやりつ、まことにいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞおぼゆる、

〔百練抄　四後朱雀〕長暦元年六月二日、上東門院供二養菩提樹院一、〈○後一條院御墓所、號二樹下一、〉

〔百練抄　五堀河〕寛治二年八月十七日、二條院供二養菩提樹院一、

〔源平盛衰記　二〕額打論附山僧燒二清水寺一幷會稽山事

同〈○永萬〉元年八月九日、山門ノ大衆下洛スト云披露アリ、〈○中略〉撿非違使季光ヲ切堤（キリツヽミ）ヘ遣シテ、形勢ヲ見セラル、歸參シテ申ケルハ、衆徒數百人、山路ヨリ菩提樹院ヲ透テ、靈山ニ群集ス、山路ニ於テハ相防ニ無力由ヲゾ申入ケル、

知恩寺

知恩寺ハ、京都北白河ニ在リ、原ト上賀茂ノ神宮寺ニシテ、京都今出河ニ在リ、天台宗ノ寺院ナリシガ、源空ノ此ニ住セシヨリ、終ニ淨土宗ニ屬ス、後ニ鎭西流四箇本寺ノ一ト爲リ、知恩院ト其本末ヲ爭ヒシ事アリ、第八世空圓ノ時、百萬遍ノ念佛ヲ修シテヨリ、寺號ヲ專ラ百萬遍ト稱シ、每月其法會ヲ修セリ、

〔書言字考節用集　二乾坤〕百萬遍（ヒヤクマンベン）〈城州愛宕郡、號二長德山智恩寺一、元是賀茂神宮寺也、〉

創建沿革

〔和漢三才圖會七十二末山城〕長德山知恩寺　在神樂岡吉田之北、寺領三十石、○中略坊舍十九院、道心者院二

〔花洛名勝圖會四東山〕長德山知恩寺百萬遍と云ふ、北白川の地にあり、淨土宗鎭西派、四箇の本寺なり、功德院と號す、寺領三十石

〔山城名勝志十三愛宕郡〕知恩寺二水記云、知恩寺、或號百万遍、

舊在北小路今出川、賀茂瓦屋是也、被建相國寺時、被遷一條北油小路、其後移京極、寬文二年移賀茂川東田中村、

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　知恩寺　在吉田山下高畠北、世所謂百萬遍也、始在今出川通相國寺北、而元上賀茂神宮寺也、堂安置慈惠大師所彫刻丈六之釋迦像、故名釋迦堂、又稱賀茂河原屋、時邊土人時々爲禳疫癘、則於佛前轉百八大念珠、以誦彌陀號、至百萬遍、依之此寺或號百萬遍也、一旦賀茂神職人、延法然上人使住之、爾後小松內府重盛孫、備中守平師盛子、法然上人法嗣勢觀房源智爲住職、自玆專爲淨土專念宗之道場、改號知恩寺、依之勸請賀茂明神爲鎭守、每年此社火燒日、賀茂社司來勤之、淨土宗四箇本寺之隨一、而後奈良院宸筆有知恩寺之額、寺產有三十石、每年自正月十九日至二十五日、修法然忌、永正五年五月五日、三好長輝入道希雲、其子長光、則自河內出攝津、亂入京師、與細川佐々木等、合心戰、然爲大內介敗亡、長輝入道希雲於斯寺自裁、

〔花洛名勝圖會四東山〕長德山知恩寺○中略抑當寺は、往昔慈覺大師の草創にして、賀茂下上社の法樂修法の寺なり、始め神宮寺と號す、舊は今出川の上、相國寺の地なり、慈覺大師彫刻の釋迦の像を安するゆゑに、今出川の釋迦堂と號す、其後永德三年、鹿苑院相國義滿公、相國寺草創の時、當寺を油小路一條の北に移す、又其後豐臣秀吉公の時、京極土御門の南に移り、寬文二年又今の地に轉す、當寺、其始は天台宗たり、嘗て法然上人、賀茂下上を信敬あり、或時明神上人の枕上に來て、告賜ふやう、神宮寺の釋迦佛は、諸人吾神相となして、諸願を祈る、吾其奸直を鑑みて、感應を施す、されば今より寺を以て、汝に附與すべし、此に於て、專修念佛の立義を說ば、海內其化に順ずべし、吾亦之

を擁護せんと、加之、社司の數輩にも、此寺を以て、上人に寄附すべきよしの靈夢の告有し程に、神官驚き、議て寺を上人に與ふ、上人も又神勅にまかせ此に住職して、遂に專修の法要を談じ、天下に一宗を發興す、又或時、鴨の明神懇望有て、末世衆生のため、一枚起請を書しめ賜ふ、是より當寺を改めて、念佛の道場とす、爾後徒弟勢觀房源智（備中守平師盛の下にして、小松内府重盛公の孫なり、無雙の智者と言傳ふ、）に當寺を讓り賜ふ、然れば源智上人は、當山第二世なり、（曆仁元年十二月十二日、此寺に於て寂す、臨終奇瑞を現す、傳記に委し、）

〔法然上人行狀畫圖　六〕上人（○中略）源空、東山吉水のほとりに、しづかなる地ありけるに、かの廣谷のいほりをわたして、うつりすみ給、（○中略）そのゝち賀茂の河原屋、小松殿、勝尾寺、大谷など、その居あらたまるといへども、勸化をこたることなし、

〔知恩寺歷志略〕二世勢觀源智上人、小松内府重盛公孫、備中守師盛子、（一説、無官大夫敦盛子、）從二童形一常隨給仕弟子、元祖憐愍覆護異レ他、付二屬淨土法門一寶圓戒等、寄二託本尊什物房舍聖敎、以二師跡且賀茂神祠之近、故住二當寺、常運二歩於賀茂、造二立神宮堂、號二功德院、世人稱二此寺一曰二賀茂神宮寺、呼二此師一名二賀茂上人、又改二知恩寺、鎭守亦勸二請賀茂、每歲賀茂社職詣二鎭守、曳二注連一致二如在之儀一

〔知恩寺歷志略〕八世空圓善阿上人、（又名二空寂上人一）後醍醐天皇元弘元年秋大疫、天皇悲二傷之、詔レ敎二諸寺諸社祈レ之、無レ有二應驗、聞二淨土門亦有二鎭護國家之法、命二善阿一祈レ之、善阿恭奉レ詔、不レ修二餘法、七日無間稱二名號、得二一百萬遍、（戒珠傳曰、道綽曰、須下依二小阿彌陀經、一七日相續、無間念中名號上、若滿二一百萬遍一必得二往生、元祖示二或人一曰、百萬遍義、雖レ非二佛願、小阿彌陀經、若一日、若二日、乃至七日念佛者、即得二往生、其七日念佛數當二一百萬遍一之由、人師釋レ之、百萬遍須下以二七日一修上レ之、但不レ堪、宜下以二八日九日一修上レ之、非レ謂下不二必滿一百萬遍一不上レ可レ得レ生也、一念十念可レ得レ生、欲下一念十念可レ得レ生之歡、累二百萬遍之功德一也、由レ此觀レ之百萬遍敎、依二彌陀經、彌陀經、一切諸佛、所二護念一經、百萬遍念佛、用二之祈願、亦可レ知矣、念佛現益、經釋甚多、恐レ繁略レ焉、）時疫勢乍歇、若披二雲霧一而仰二靑天、是則金輪御信力之所爲、又念佛功高理深故也、天皇嘉悅、而賜二於百萬遍之號、且賚二禁中寶物弘法大師利劍名號、已後修二此法、利劍名號爲二本尊、結衆定二十人、以二一千八十之大數珠、（合二於百八之數一珠十連者也、）回レ之百般、則得二一百萬遍一矣、此爲二永式、自レ是以來、每二天下有二災眚、無レ不レ奉二祈願之命、所レ謂後花園院文安六年、同御宇寛正二

堂塔

年、同四年、後土御門院文明元年等也、（災害綸旨公狀見下文、）又當寺有賀茂神宮寺之號、兼修祈願、良有以也、每月十六日、聖朝安穩、一天泰平、祈禱之念佛無怠、一宗雖衆、勅願所未有如當寺也、

〔知恩寺歷志略〕三十九世照蓮社滿靈光譽自心上人、嗣法於靈巖、慶安二年正月十日、自岩槃淨國寺入院、寬文元年回祿、翌年移于北白川田中、東福門院（○德川和子）有御歸依、賜元祖前之斗帳、及九條袈裟、（各蜀錦）同寬文中、在江戶時、嚴有院殿（○德川家綱）欲有御對顏而避之、八月十五日登城、而奉謁見焉、乃賚黃金五百兩、歸京以後、爲建立勸進、檀施山集、經營諸堂、開基心行院安樂院、後西院有御歸依、而賜宸翰莫謂四方遠、唯須十念心之文、及七條袈裟、

〔花洛名勝圖會（東山四）〕長德山知恩寺　本堂（南向）元祖圓光大師（座像、二尺四五寸、）本師堂（本堂の前東傍にあり、西向、堂内數冥なり、）釋迦牟尼佛（座像、七尺許、此像頭は自然の出現にして、餘は慧覺大師の作る所也とぞ、）同脇壇（南方）毘沙門天王（立像、五尺許、安阿彌作、）地藏菩薩（立像、四尺餘、弘法大師作、）不動尊（立像、四尺餘、智證大師作、）同壇（北方）阿彌陀佛（立像、四尺許、）觀音、勢至（立像、二尺四五寸許、）二十五菩薩（各二尺餘）額、知恩寺、（堅額、）後奈良院宸翰　觀音堂（釋迦堂の北にあり、白衣觀音を安置す、）勢至堂（本堂の前西傍にあり、）勢至菩薩（座像、一尺餘、運慶の作、）經藏（勢至堂の北に隣る、東向、中央に釋迦佛を安す、）鎮守社（本堂の西傍にあり、南向、鴨明神を祭る、）經碑（本堂前の東傍にあり、阿彌陀佛を刻す、筑後國善導寺のうつしなり、）方丈（本堂の後にあり、南向、額方丈の二字は、後奈良院の勅筆なり、）鐘樓（本堂前西傍にあり）安樂院（本堂の寅卯方にあり、）本尊阿彌陀佛（立像、八尺許、）善導院（本堂の西北側にあり、本尊善導大師は、自作にして、立像、二尺許、此像は[illegible]寺僧乘坊、唐土より持かへる所の靈像なり、當院は、其はじめ京師の上數珠屋町にあり、中[illegible]知恩寺の境内にうつす、開基は等譽上人なり、又善導大師自作の地藏尊を安置す、）

〔智恩寺歷志略〕五世惠光智心上人、（又名慧空上人、）未知姓氏及相承、（○中略）應仁之亂、寺罹兵燹、此時寺寶記錄多散亡、而存者幾希、

〔大乘院寺社雜事記〕應仁元年五月廿九日、京都ヨリ昨日返事到來、廿六日合戰ニ燒亡所々、窪寺、（悉皆）百万反　香堂　誓願寺之奥堂、小御堂、冷泉中納言宅、此外村雲橋之北と西とは悉以燒亡了、

〔續史愚抄（後奈良）〕天文五年七月二十八日辛巳、百萬遍火、

寺格

〔續史愚抄 靈元〕延寶七年五月○日〻〻、百万遍影堂建云、年代略記

〔知恩寺文書〕當寺淨土一宗、依爲第一、著香衣可令參內給者、天氣如此、依執達如件、

嘉吉三年正月十一日　右中辨冬房

知恩寺長老大譽上人御房

〔知恩寺文書〕當寺爲御祈願所、須專淨土一宗之弘通、奉祈朝家千載之榮運者、天氣如此、仍執達如件、

文安六年五月廿二日　右中辨冬房

知恩寺長老大譽上人御房

〔知恩寺文書〕當寺之門徒末寺等、參會之時、座次事、以當寺住持可爲座上之旨被聞食畢、不可有相違之由、天氣所候也、仍執達如件、

天文二年四月十四日　左中辨花押

知恩寺傳譽上人御房

〔知恩寺文書〕就萬松院殿義晴足利御中陰御訪、當寺與東山知恩院兩部之御經、在所上下次第相論事、於鹿苑院被評議之處、去大永年中、彼院可改寺號造意雖在之、爲寺之內院之趣被支申時、至當寺一宗嫡流之段炳焉者哉、所詮早退彼妨、可爲寺家御經上之旨、被仰付御佛事奉行畢、宜被存知之由所被仰下也、仍執達如件、

天文十九年八月廿二日　對馬守花押

掃部助花押

知恩寺雜掌

〔寺鑑下〕淨土宗　紫衣　京都　知恩寺

御朱印　高三拾石

什物

〔松蔭硯銘〕昔壽永三年之春、平氏一門、城守于攝州一谷、源判官義經、奉勅攻之、平氏敗績、重衡見生擒、嘆蕉沫之命在旦夕、而招法然房源空爲授戒師、聞淨土法門、因贈一枚硯、表檀嚫、且曰、此硯吾先君清盛相國、曾齎黃金若干斤、奉獻趙宋天子、天顏有喜、輙賜此硯、先君秘爲至寶、付予小子、異日畫師座右、染麝煤揮毛穎、書彌陀聖號、則吾本願也、○中略 法然沒後、此硯藏知恩寺、寺在今出川北、卽賀茂神宮寺也、安慈覺大師彫刻丈六釋迦像、故名釋迦堂、又呼賀茂河原屋、司神職者、延法然居焉、後平氏小松內府重盛孫、勢觀房源智爲主、改云知恩寺、源智備中守師盛子也、此硯平氏累世奇玩、源智護以至末孫、鹿苑相公、○足利義滿 欲建相國寺於彼地、而移此寺、遷小河西也、應仁兵亂之初、寺既罹災、硯亦失而不知所在矣、江州篠原正琳、一箇野僧也、自何得之、被蓋壺藏、歷年久矣、老病相逼、急于修冥福、大永二年壬午孟春廿八日、托其心友、寄附知恩寺、結來生緣、翌日逝去矣、○中略

享祿二年己丑解制　前南禪退耕月舟叟壽桂書

雜載

〔續史愚抄〕後土御門 文明三年九月二十四日癸亥、知恩寺之長老參內、講談三部經、前左大臣義政將軍參之云、宗賢卿記

〔養源院文書〕阿陽三好筑前守長輝公者、永正五稔之夏、戰謀已決、與大內義興戰、共壤然鼓而接兵刃於京師、輝公之軍俊倦勞、竟不利而敗、時公恐陷于兵亂、迷入東山之傍知恩寺百万遍了、自刃而薨、後渠之苗裔口承此處、而乞寺主長輝之法諱、仍號爲見性寺殿喜雲道悅大居士、不會 在洛都之一日、尋彼古蹤、到養源蘭若、與現住俊意話及三好氏之事、自輝公既沒、三好家之相次、殘肖像牌位於當寺者八葉、又有石牌之存、讀之則輝公之墓也、予之產隣于三好家之舊跡、緣此口恨塞心、慨歎不已、凡長輝之事故、昭々于紀載、至今正幾乎二百餘歲矣、予幸臨遺蹤、拈香諷呪、遠薦征覺、且綴三五七言篇、以呈院主膝下、

〔知恩寺文書〕於京中諸寺、新儀葬送事、堅雖被停止之、至當寺境內者、更非新例、檀方土葬之儀、任寺法

可被專結緣之由所被仰下也、仍執達如件、

永祿三年八月廿日　對馬守 花押

知恩寺雜掌　備前守 花押

聖護院 照高院 併入

名稱 所在 創建 沿革

聖護院ハ、舊ト常住院ト號ス、京都聖護院町ニ在リ、圓珍ノ開基ニシテ、增譽ノ中興スル所ナリ、三井諸院室ノ上首ニシテ、世々熊野三山檢校ヲ兼ネ、本山派修驗ノ本山タリ、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕聖護院　在東山聖護院村　寺領千五百石　開基智證大師　淸和御宇貞觀八年、奏建持念壇於冷泉院、祝寶祚也、園城寺長吏而且修驗行者、俗云山伏、本寺、稱之本山、三寶院爲當山、道寬法親王、後水尾院之皇子也、

〔雍州府志 四寺院〕聖護院　三井寺門主之隨一、而近世多皇子也、元名常住院、聖護院之號、三井長吏增譽僧正其始也、此僧權大納言經輔卿之息、而三山別當職之始也、山伏等屬之、凡山伏役小角爲祖、然有眞言天台之兩流、天台山伏屬聖護院門主、每秋自三熊野山入葛城大峯修鍊、故稱修驗道、又謂入峯、或稱順峯入、是謂本山衆、然中世大蛇當大峯前路、橫行出其首、山伏不得入大峯也年舊矣、醍醐寺聖寶歎之、自提劒入、自大峯後山、而出大蛇之不意、先斬其尾、終斷其首、自是行路平安、而山伏再得入峯、故是稱當山衆、然先登大峯、而出熊野、依之謂逆峯入、眞言山伏悉屬醍醐寺三寶院門主、此兩門主一代一度入峯、大峯山上構長寮、是謂室、眞言天台異其處、薪炭等物者山下人運漕之、兩門主各留數日、其間修採燈護摩、言採藏王權現堂之燈火、修護摩之義也、出山之日、聖護門主建木塔婆、是謂碑傳、

寺領 寺域

古建石碑乎、其面書熊野三山撿挍三井長吏役優婆塞正嫡聖護院法親王某之字、三寶院門主亦雖建之、其所記小有異同也、兩門主多遻官家之人使書之、是自京師所携也、入峯時先門主之輿、啓行者稱前鬼後鬼、住大峯麓前牛村、常馴攀躋、其輕捷頗如獼猴、是等爲鄕導、又僧中先行路者謂先達、先達山伏各在處處、其所在京師積善院若王子、勝仙院寺等之先達屬聖護院、自是以下山伏者、每年入峯、又不住寺院而在市中者、是謂俗山伏、不僧不俗、帶妻子、凡山伏之爲事也、半薙頭髮、著篠懸袈裟、升頭巾、橫大刀、大吹法螺、徘徊市中、入人家請齋料、是本朝沙門之一種也、篠懸山伏之衣也、懸之於肩背、拂山路篠葉之風露者也、袈裟有纓纈、是役行者著百結衣之遺風也、世誤袈裟爲篠懸、頭巾則巾也、

〔若王寺神社文書二〕熊野三所權現順禮先達職之事

聖護院者、高祖智證大師之門葉而汲三井法水、故役優婆塞之嫡的相承、依爲修驗道之正統、仁王七拾二代御宇、白河院、寬治四年正月廿二日、熊野三山御幸之時、以聖護院門跡元祖法務前大僧正增譽爲御先達、還幸之後、依三山引導之賞、被補撿挍職、修驗道之先達、撿挍之兩職是濫觴也、此太上皇帝五箇度之御幸也、其後仁王七拾七代後白河法皇熊野御參詣者、命大僧正行尊爲御先達、月卿雲客供奉、行粧嚴重、故應綸言、而先達已下著彩衣袍、令抖擻、自爾已來、爲寶祚延年、百官快樂、天長地久、國平長安、門主累代入峯之時、修行者悉著彩衣、玆仙院三山廻宴駕三十四箇度矣、雖然思召於供奉近臣以下苦難、御信仰餘、摸三山、洛外而建立神祠、靈驗威增、日々是新也、以正東山准那智山、象若一王子寶名號若王子、因此被補熊野三山奉行職、本山一家之令掌補任、且亦爲吉野大峯本末而令棟行、修驗道之定格、從聖護院門跡、諸國之霞置先達年行事之職、而令法式守者也、

應仁元年二月七日　忠雅誌之

〔碧山日錄〕應仁二年八月五日壬辰、東西兵破聖護院及諸敎寺、

〔嘉永四年雲上明覽大全上〕聖護院宮〇中略

[illegible]

御領千四百三十石餘　洛東聖護院村號二森御殿一

御宗旨天台大峯本山
聖護院雄仁入道親王　三十一
一品光格天皇御養子、實伏見貞敬親王御子、三井長吏熊野三山檢校
院家　若王子大僧正法印住心院大僧都法印積善院伽耶院
院室　二因幡堂西坊權僧正法印京船越山南光坊大僧都法印一勤學院權僧正法印三巣山觀音院六箕面山岩本坊權僧正法印玉置山高牟婁院
七理覺院十讃州圓密院
僧正地　豫州蓮光院權大僧都法眼
出世　山科十禪寺大僧都法印
坊官　岩坊法印今大路雜務法眼　小野澤宮内卿法印今小路帥法橋　小野澤小野侍從法橋按察使
諸大夫　藤木日向守佐々木能登守
侍　宇佐美筑前介兵衞少尉木田山本右豐後介
御取次　玉木河内介
江戸御役所　赤坂氷川明神別當大乘院

〔諸門跡譜　中〕聖護院殿
智證大師、○中略増命僧正、○中略勢祐律師○中略智靜大僧正、○中略最圓權少僧都、○中略靜覺法印、○中略
增譽大僧正、法務天台座主、(中略)三山檢校、千光院號二一乘寺白川院始熊野御參詣之時、先達之賞始被レ補二此職一、
〔嘉永四年雲上明覽大全　上〕聖護院宮
神變大菩薩　高鴨明神之苗裔、和州人也、舒明天皇六年攝二一葉一生、義學尊師○此間九代略智證大師―――増命權僧正○下略
〔諸門跡傳　三〕聖護院　八月七日山本山入峯、官主聖護院殿、
〔堯恕法親王記　三〕寛文五年七月廿五日、聖護院入峯也、日出之比出門之由傳聞間、日出已前ヨリ、菅谷坊

照高院

官ノ館ニ行テ見物之通也、(左京也、伏見通也)日出ニ門前ニ參、內ニテ有御加持、幷山伏等於南庭主上御見物之由也、仍テ以外ニヲソシ、大佛邊ハ未刻ニ行列也、

○

〔山州名跡志 五愛宕郡〕照高院 在同宮(○北白河八幡宮)東、門向西戌、此所聖護院道澄僧正所開也、僧正彼法務ヲ辭シテ隱退閑居トナセリ、中興聖護院興意僧正也、東照宮伏見城松丸ヲ賜リテ引移シテ再建セラル、近世道晃親王、修補ヲ加ヘテ、穩居シ玉ヘリ、遷化ノ後無住ニシテ、聖護院殿兼帶也、

〔諸門跡傳 三〕照高院

興意親王 陽光院(○誠仁親王)御子、始諱道勝、洛東於白川一宇建立、寺領賜千石、

元和六年十月七日、於武州江戶寂、四十五歲、號淨瑠寺、

聖護院代々出

〔嘉永四年雲上明覽大全 上〕聖護院宮(○中略)

照高院(御宗旨天台) 御無住 御領千石 白川村

聖護院宮御兼帶

坊官 杉本刑部卿法印 杉本中務法眼 近藤式部卿法眼

侍 高橋大和介

慈照寺 淨土寺(研入)

慈照寺ハ、山城國愛宕郡淨土寺村ニ在リ、此地ハ舊ト天台座主明救ノ古跡ニシテ、淨土寺門

名稱　所在　創建

跡ノ跡ナリシガ、文明年中、足利義政此ニ隱遁シテ別業ヲ營ミ、東山殿又東求堂ト稱シ、北山ノ鹿苑寺ニ傚ヒテ、二層閣ヲ起シ、金閣ニ擬シテ、內外塗ルニ銀ヲ以テセントセシガ、其事終ニ果サズシテ已ム、後世尙ホ當寺ヲ號シテ銀閣寺トモ云ヘリ、相國寺ノ末寺ニシテ、十刹ノ一ナリ、

淨土寺ハ、天台ノ僧明救ノ開基ニシテ、古來ノ名寺ナリ、足利義視嘗テ僧タリシ時、玆ニ住セシコトアリ、後ニ義政此地ニ別業ヲ起スニ及ビテ、當寺ヲ京都ノ市內ニ移セリ、

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕慈照寺　在洛東淨土寺村○中略

慈照院義政公建立 一名東求堂、其壯觀以似金閣寺、故俗呼稱銀閣寺、世謂東山殿、

〔東寺執行日記〕文明十五年六月廿七日、長谷公方樣○足利義政東山淨土寺殿○足利義視御跡ニ、御所ヲ被立、御移徙有之、

〔大乘院寺社雜事記〕文明十五年六月二日、今月末ニ淨土寺御所ヘ可御遷云々、　廿七日戊子、准后○足利義政今夜淨土寺御所ニ御移住、　七月一日、去月廿七日、室町殿准后自長谷御所移住淨土寺新造御所云々、此在所ハ山門之門跡、惠良和尙之舊跡、隨分之古所也云々、女中以下可有居住之條、佛法之衰微、末代之至也、去月十八日上洛、御八講衆兼圓僧正空覺法眼、兼親光慶兩得業、爲申御禮于今在京云々、

三日、太閤御書到來、淨土寺新造號東山殿、大納言殿號室町殿、鹿苑院殿號北山殿、其時、勝定院殿、號室町殿例也云々、六月廿九日、諸家參賀、太閤千疋被進之、長祿ハ二千疋云々、關白殿御馬代三百疋、

〔補庵京華別集〕洞庭日本一天秋、月在風波穩處流、蘆荻州前明以晝、君山影落釣魚舟、　洞庭秋月

文明十五年癸卯六月廿七日、准三宮大相公、初移東山新府、貴戚權門冠蓋如織、蓋賀落之也、天子降勅賜名、爲東山殿、又賜名征夷大將軍爲室町殿、吁盛矣哉、於其殿中也、命狩野大井助畫瀟湘八

景於障子、特選吾徒能詩者、各賦一詩張於其上、予百拙僧、最拙于詩、隨諸老之後、賦八景之詩、執事沘其類哉、而公命不可遁、書以獻上、實七月十七日也、予備第五番、瀟湘次得洞庭秋月之題云、景三志、

〔古文零聚　二〕東山殿御普請料万疋事、任去廿三日御奉書之旨、早々可致其沙汰、万一有遲遲之儀者、以譴責可致催促之由被仰出者也、仍狀如件、

文明十五七月二十六日　則宗判

東寺雜掌中

〔蔭涼軒日錄〕文明十七年十二月十二日、謁東府、御持佛堂額、東求、常春、愛蓮、自小補書立來供台覽、則東求可敷、來年二月始、此書立可獻、此外三四亦書立可被進、可被撰其中、常春者、曾御承事、有常春者云云、遂往小補傳台命、　十八年二月十日、東求堂額之字、今明日之間、可出來否、箴東堂若依不例不能書、誰其書而可然乎、其返答早々可白之、有台命之由、悰子及歸報之、乃謁東府白言、雖箴東堂爾來不例勸書之、來十二日可供台覽、万一不適台慮、可見命横川和尙乎之由白之、　十二日、東求堂額字益之書之、澤甫持之來、乃以悰子奉獻、

〔實隆公記〕文明十八年四月二日丁丑、自西園寺有使者、安堂筑後守也、東山殿普請事、又以被仰出之云々、難治事也、可爲如何哉之由所被談也、　十五日庚寅、抑自今日東山殿普請事申付了、　十六日辛卯、東山殿普請如昨日、剰神樂岡芝臥新造道云々、今日以車運之云々、西園寺靑侍幷元盛等奉行也、　十九日甲午、抑今日、御臺御方室町殿等渡御東山殿云々、凡衆日經營以下、盡善盡美、一時壯觀

〔花洛名勝圖會　四東山〕銀閣寺　浄土寺村の東、山の麓にあり、本號慈照寺、俗に銀閣寺と稱す、禪宗濟家相國寺の末寺にして、十刹の一なり、夢窓國師を開祖とす、寺領三十五石、

佛殿南面　釋迦牟尼佛　座像、二尺許、中正院日護の作、日護は法華の僧、鳴瀧三寶寺に住す、

右は方丈の客殿にして、中の間は海北友雪の仙人畫し、東の間は逍遙軒の山水なり、西の間し山水にして、狩野隆也の筆、襖には土佐光興、屏風は相阿彌の筆、芦と薄に金銀の砂子を濺ちらして、畫代の名筆なり、

東求堂（右方丈の東にあり、足利義政公の持佛堂なり、）本尊觀世音（立像、一尺許、兩手に蓮華をさゝぐ、此像實は阿彌陀佛の脇士にして、脊には三尊佛を安す、應仁の兵亂に二尊失す、なと云、）

慈照院義政公像（薙髮にして法服を著し、兩手を重ねて倚子に座す、長三尺四五寸許、木像なり、）

尊牌（高二尺二寸許、幅一寸四五分、）銘云　慈照院殿准三宮喜山壽位（御自筆、倚子の下に立る、）

中央花鳥の畫は、東山殿の同朋相阿彌の筆、上段にかくる水引は濃紫の印金なり、古渡にして、世に希なる奇物なりとぞ、襖障子の白張墨畫がきの竹、彩色の若松は、同相阿彌の筆、

佛壇の後、北の間の壁白張にして、枯木に鴫々鳥の墨畫は、狩野永納の筆、

同東の茶湯の間は四疊半にして、東山殿の物數寄なり、茶亭四疊半の濫觴なりとぞ、高貴の客常に集會ありて茶道を樂しみ、和漢の奇物をもてあそび給ふ、是を後世に傳はりて、時代ものと號す、違棚の張付の墨畫は、狩野古法眼元信の筆、

帳臺の腰障子、琴碁書畫の圖は、狩野永納、兩脇の障子、水仙は、相阿彌の筆、

同乾の間に、其始め釋迦の立像、阿彌陀の像を安ぜしかども、今は他に遷すと聞ゆ、

二重高閣（東求堂と角違ひにして、去ること十四間許、北山鹿苑寺の金閣に准じて、是を銀閣と名づく、）心空殿（高閣の上をいふ、三間四面也、）潮音閣（閣下をいふ、東西三間半、南北四間、木を以て巖洞を作り、佛間とす、）

〔山州名跡志五愛宕郡〕慈照寺

方丈（南向）本尊　釋迦佛（坐像、二尺許、）作中正院日護（近世、法華僧、鳴瀧三寶寺住持、）

〔東山慈照寺銀閣仕樣寸法付之帳〕銀閣（桁行四間貳寸梁行三間壹寸五分）

下之重、高サ石口ゟ上端迄壹丈五寸、上之重、高サ腰緣上端ゟ桁上端迄八尺七寸五分、屋根寶形作り、柿葺腰屋根有、下之重、垂木貳軒木舞物肘木作、軒出端茅負外迄五尺五寸、上之重軒出端同斷、垂木貳軒間半歩、木舞なし、裏板有、三ツ計作、西東連、床かまちを入、後之側腰緣ノ上ニ小柱ヲ立、沓有、上柱貫大輪上ニ、雲形之繪樣有、腰貫ゟ上櫛形內ニ狹間障子有、北南側中之間筭唐戶、北側脇之間、羽目、南側脇之間ニ櫛形內ニ狹間障子有、總拭板敷、格天井椽間半歩ニシテ、板違、須彌壇壹ヶ所、但

寺格

塗物也、四方長押縁三斗桝ニ縁桁、但切目縁也、平高欄力柱有、下之重、總拭板敷、東之大間格天井貳張指板違、北之大間天井棹縁、其外ハ鏡天井也、東側切目縁有之、

〔花洛名勝圖會東山四〕銀閣寺〇中略臨濟宗、相國寺の末寺にして、十刹の一なり、(中略)寺領三十五石、

〔國師日記〕一東山慈照寺之義、就慈照院殿御位牌所、從往古相國寺末寺之儀候、然者先年龍山樣〇近衞前久少之間有御座度由ニ而、德善院折紙參候付、借申候、龍山樣御在世中、返被下候樣ニ、度々御理申候處ニ、何モ被仰無御渡、相延迷惑仕候、只今御違行、今日被成遣付候樣ニ、近衞殿へ雖申入候無御同心、迷惑仕候、太閤樣御朱印、幷德善院折紙、先年村井長門守折紙、其外數返之書物御座候、從往古存來候、今更在家屋罷成申候段、歎敷候間、急度被得上意、被成御渡候樣ニ、被仰出候者可被忝候、以上、

八月十〇慶長十七年十六日　周晟判

周圭判

板倉伊賀守殿

金地大和尚

寺領

〔國師日記〕一城州深草内參拾五石之事、宛行之訖、全可寺納候也、

天正十三十一月廿一日　御朱印　太閤

慈照寺

〔慈照院文書〕當寺諸山之御判料拾石一斗、時分柄間、急度可被相立候、其内貳石六斗ハ慈照院へ充用候事候間可被相渡候、殘分、早々此方へ可被遣候、久々渡申候、

十二月十日　德善院玄以花押

梅津長福寺

○按ズルニ、德川時代ノ寺領ハ、前文名稱ノ條引ク所ノ花洛名勝圖會ニ在リ、

〔蔭凉軒日錄〕文正元年七月六日、以我祖惠雲院之地靑山佳絕、被爲御山莊之地之次、凡御先祖御影、皆在于相國山中、獨慶雲院殿、在于東山、而炎天之時節、御成尤不宜、仍壽德院作慶雲院、以慶雲院作惠雲院、蓋惠雲院御所望爲代地被改之、仍以播磨置鹽庄、始御寄進于惠雲院、

〔兼致朝臣記〕文明十八年十一月廿五日、自東山殿（義政足利）以伊勢右京亮被仰下云、可被立御鎭守、就其社壇摸樣等可計申□云、則以折紙御注進、

御鎭守社、木色歟彩色歟、兩樣之事、於八幡宮者、悉以彩色候、但北山殿并花御所兩御鎭守者、共以木地社壇候、八幡殿御鎭守、（六條若宮）三條万里小路御鎭守、此兩社共以彩色候、所詮於八幡宮者、彩色可爲本儀候哉之由存候、

〔蔭凉軒日錄〕長享二年二月二十四日、相公（義政足利）曰、土地堂祖、神堂立板、書神名祖名、舍佛護堂亦在之、西芳寺西來堂亦在之、於東求堂可立之如何、愚曰、尤可然、相公曰、然者其長短廣狹高低等相計、作畫圖可進上、以其可被爲本云々、

○

〔山州名跡志（五愛宕郡）〕淨土寺（村名）在鹿谷北　此所古佛閣アリ、號淨土寺、叡山西谷圓珍僧正住セリ、將軍義教公初出家ニテ號淨土寺殿、卽此寺ナリ、此寺、文明年中ニ、洛陽相國寺ノ西ニ遷ス、今室町今出河ノ北、築山町其所ナリ、

〔諸門跡傳二〕淨土寺

後土御門院御宇、文明十一年己亥、慈照院贈大相國義政、作銀閣准北山金閣、淨○土○寺○被○廢○

（天台座主）明救僧正　兵部卿有明親王御子　醍醐天皇孫
宮○代○創○立○東○山○淨○土○寺○　慈念僧正資　寬仁三年十月二十日任僧正、補二十五代座主、同四年七月五日

寂、七十五歲、號淨土寺、

〔山槐記〕安元元年八月十一日己未、建春門院、密々御幸相模守業房淨土堂院、

〔百練抄九安德〕壽永元年十二月四日、院〇後白河女房丹後局、〇平業房妻淨土寺堂供養、

〔愚管抄五〕治承三年十一月〇中略廿日、鳥羽殿に御幸〇後白河なして、人ひとりもつけまいらせず、僅に琅慶と云僧壹人など候はずる體にて、置まいらせて、後に御思ひ人淨土寺の二位をば、其時は丹後といひし、そればかりまいらせられたりけり、

曼殊院

曼殊院ハ、一ニ竹内門跡ト云フ、山城國愛宕郡一乘寺村ニ在リ、天台ノ僧是算ノ開基ニシテ、初メ北山ニ在リ、次ニ禁裏ノ門内ニ在リシガ、明曆二年、今ノ地ニ移セリ、北野社ノ別當ハ、當院ノ世職トスル所ナリト云フ、

名稱
所在

〔書言字考節用集一乾坤〕曼殊院(マンジュヰン)城州愛宕郡修學寺東南、俗云、竹内御門主、

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　曼殊院　在修學寺東南、天台門主之一院、而三昧院之法流也、今住號良尚法親王、八條宮智仁親王之子也、

〔山城名勝志十二愛宕郡〕曼殊院在一乘寺村

創建

〔諸門跡譜下〕曼殊院

世號竹裡門跡、院宇始在北山、後移禁中之境內、歲久、又明曆二丙申年移一乘寺給也、〇中略

是算僧都初祖

遍救大僧都

寺職

枇杷左大臣藤原仲平公息、昭宣公基經孫、（○中略）

慈昭權僧正

同（○藤原公賢）男、至當代、梶井門跡大塔宮尊雲法親王雖爲押領、三箇年後令遂再住給云々、（○中略）

覺什少僧都（北野別當）

石浦藤次男、石浦五郞藤原爲輔孫、至當代改爲鹿苑院之屋敷也、

（首書）後圓融院御宇、康曆二建鹿苑院、（○中略）

良尙法親王

八條殿一品式部卿智仁親王息、陽光院御孫、母京極丹後守源高國女、明曆二丙申歲、改地移一乘寺給也、

〔嘉永四年雲上明覽大全上〕御領七百二十七石　一乘寺村（御里坊寺町上御靈馬場行當小島播部）

御宗旨天台

曼殊院御無住

院室　法雲院權僧正法印　修覺院大僧都法印　靜仙院大僧都法印

坊官　鹽小路□□法眼　千種大藏卿

諸大夫　山本筑前守　西池遠江守　山本近江守　西池越後守

侍

〔桃花蘂葉〕家門末子入室門跡等事

曼殊院（號竹內）故門主良什准后、今門主良鎭大僧正二代、已令相續之、有其器用者、向後可令入室也、

〔續本朝通鑑百五十五後小松〕應永十一年十二月壬辰（○二十五日）道義（○足利義滿）令竹內僧正良什領曼殊院門跡及北野社別當職、依舊式永以爲例、

傳稱、竹內寺院舊在北山、至良什時、道義取之入鹿苑寺內、而以他地代之授良什、

〔曼殊院文書 二〕附箋 鹿苑院殿

曼殊院以下門跡、幷北野社別當職事御管領、不可有相違候也、敬白、

附箋 應永十二

十一月廿五日　　義滿花押

竹內僧正御房

〔曼殊院文書 二〕竹內門跡雜掌申

北野社別當職事

副進　證文　十三通　相傳次第　一紙

右彼職者、天慶五年、當社垂跡之始、被補是算法橋以來、門跡廿四代及五百年、相傳無相違者也、官府數通在之、相傳之旨被載之、爰故梶井二品親王、建武三年天下動亂之剋、就被掠申、一旦雖被補彼職、爲當門跡申披子細之間、同建武五年十二月十七日、依等持寺殿〇足利尊氏御執奏、翌日十八日被成下院宣、則令還補畢、其後連々梶井門跡雖被掠申、每度依申披之、任相傳之旨、全知行者也、就中貞治二年、寶篋院殿御書、永和四年鹿苑院殿御書等被載子細、向後雖有掠申輩、不可及沙汰之旨、分明之上者、梶井門跡永可被斷御競望之處、此職事、去年十二月廿九日、彼門跡就被掠申、爲先職被執奏申云々、此事被相觸社家之時、當門跡始令存知者也、不及一往御尋上者不及申披、理不盡之御成敗、言語道斷次第也、所詮當門跡相傳子細、綸旨院宣幷武家代々御書等明鏡之上者、任理運早預御執奏、如元可被還補者哉、且梶井門跡者、雖無此職不可有不足之儀、當門跡者、更無相憑在所之、令得替彼職者、忽可及一跡斷絕之條、歎而有餘者也、云理運云計會、旁以預御哀憐者、可爲御政道之專一哉、仍粗言上如件、

寶德元年十二月　日

林丘寺

名稱所在

林丘寺ハ、山城國愛宕郡修學寺村ニ在リ、後水尾天皇ノ皇女光子內親王ノ創建ニ係リ、禪宗ノ尼寺ニシテ、比丘尼御所ノ一ナリ、

創建

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕林丘寺 在北修學寺村

後水尾院皇女　朱宮(アケノ)御本願建立　本尊觀音

〔山城名勝志 十五 愛宕郡〕林丘寺 在雲母坂瀧、額後水尾院宸翰、

〔雍州府志 四 寺院〕愛宕郡　林丘寺　在修學院山中、後水尾院之皇女光子內親王、始稱朱宮、天性傾禪宗、後水尾院崩後、天龍寺三秀院定西堂爲戒師剃髮、號林丘寺昭山元瑤、延寶八年、天台山之麓、捨平素宅爲寺、建堂、安正觀音之木像、幷有後水尾院宸影、畫妙法院堯恕法親王之筆也、贊法皇之御製、則染宸筆、供養泉涌寺新善光寺孤雲西堂修之、鐘銘黃檗派高泉作進也、住院在堂西、

寺職

〔寳永七年 雲上明覽大全 上〕禪比丘尼御所

御領三百石

御宗旨禪 林丘寺　御無性　修學寺村 御里坊 院參町東角 音羽御所

御家司　赤尾左衛門權大尉

雜載

〔山城名勝志 十五 愛宕郡〕林丘寺 中略 ○

嵯峨山稿云、林丘寺光子內親王、法諱元瑤、自太上法皇賓天之後、薙髮爲苾蒭尼、純修淨業、

林丘寺にまいりて、御堂の前なる瀧を見て、　中院 通茂

山水のすむやいかなるみるからに心をあらふ瀧つ岩浪

名稱
所在
創建

正傳寺

正傳寺ハ、山城國愛宕郡大宮村西加茂ニ在リ、僧東岩ヲ以テ開山トス、蓋シ此寺ハ、元ト僧普寧ノ開タ所ニシテ、初メ今出川ニ在リシヲ、東岩此地ニ移シヽモノナリト云フ、

〔國花萬葉記 二上 山城〕吉祥山正傳寺 洛陽北西賀茂、寺領百八石、

宋兀庵 普門開基

塔頭 瑞泉庵 南陽院 龍珠軒 聞修軒 楞嚴軒 洗心庵 正定庵

〔山州名跡志 六 葛野郡〕吉祥(キチジヤウザン)山正傳寺 在同所西山下 宗旨禪 門 東向 佛殿 同 本尊釋迦佛 坐像、小佛、脇士 左普賢、右文殊、作不考、 當寺開基東岩宏覺禪師 此僧普寧禪師ニ嗣法ス、此所初メ普寧ノ開タ所ニシテ、洛陽今出川ノ邊ニ在リ、寧入唐ノ後、弟子東岩ニ讓ル、岩ノ代移此所、

妙見堂 云正傳寺後山西北峯、土人片言ニ、メケン堂ト云フ、古此所ニ妙見菩薩ノ堂アリ、 毎歳七月十五日ノ夕、聖靈會ノ送火(オクリビ)ヲ、船ノ形ニ燈スハ此峯也、京師ノ男女爭テ見之、

鐘代山(カネウチヤマ) 同麓ノ山也、件ノ火ヲ燈ス時、於此峯鐘ヲ敲テ念佛スルナリ、

〔山城名勝志 十一 愛宕郡〕正傳寺 號吉祥山護國禪寺、額兀庵筆、元創洛一條今出川、其後遷今西賀茂、南禪寺末、十刹一也、開山東岩禪師、嗣兀庵、

幻居山人隨筆云、吉祥山正傳護國禪寺 護國二字、龜山帝所賜也、開山大宋國特賜宗覺禪師兀庵大和尚普寧 建治二年十一月廿四日示寂、塔曰寶光、二世勅謚宏覺禪師東岩惠安、嗣兀庵、建治三年十一月三日、在鎌倉聖海寺寂、〇中略

東巖安禪師行實云、師名惠安、號東巖、播州人也云々、弘長二年、師獨留京洛云々、便隙處吉田 洛陽福田庵 中山兩所云々、兀庵和尚 正元元年來朝、是和尚、自初謁、正傳二十六世無準和尚上足、 既入洛寄宿旅邸、師先遣書慰問退院歸朝之由幷叙延請拜謁之意云々、翌日果垂光降、人事既畢、以法衣頂相付師、其影則崇公在日、命法印長嘉畫、數鋪之中最本也、卽自贊曰、生緣於西蜀、非獨遊日本、十方國土中、常頭倶坐斷、幷賜庵號曰福田、又

名稱
所在

云、向後定應有檀越歸依大興宗社那、時須號額正傳、卽大書而與之、曰正傳我法、故爲此號云々、文永五年、聖護院執事有靜成法印、機感相投、有師檀之約、信心增進求爲師建寺安僧、卽於一條今出河經始禪苑、佛殿本尊、丈六拈花釋迦、迦葉微笑侍左、阿難合掌侍右、其餘至于雲堂、庫院、房、廊、鐘樓、窮精妙、盡善美、靜成乃聖護院執事、與宜朝僧正二人左右相並、宜朝濟懷嫉妬云々、宜朝通計、相語山徒之中凶惡忘身之輩、多與賄賂、令破却正傳寺、

〔全國各宗本山明細帳〕禪臨濟宗

大本山本寺　正傳寺　山城國愛宕郡西加茂

圓融院

圓融院ハ、愛宕郡大原村ニ在リ、天台ノ僧承雲ノ開基ナリ、應德三年、近江國滋賀郡東坂本ニ創建セシモノ、ニシテ、當寺、梶井御願寺、又圓德院ト云ヘリ、其後專ラ京師ノ房舍ヲ梶井ト稱シ、西坂本、又ハ、舟岡等ニ轉移セシガ、應仁亂後又今ノ所ニ移レリト云フ、

〔伊呂波字類抄〕諸寺 圓德院 仁覺座主申寄阿闍梨三口、明雲座主又申ニ加二口、應德三年六月供養導師座主眞、

〔蹇驢嘶餘〕一梶井殿 古來無院號、入滅之後、贈ニ院號、或ハ隱居御時アリ

梶井 在于坂本、梶井ノ芝トテ、今ニ舊跡アリ、山岳、山ノ東、御座ノ時ハ、大宮御所ト申ナリ、御代々宮門跡也、攝家將軍家御一代モナシ、

〔和漢三才圖會〕七十二末 山城 常修院 在北山大原邊 天台 寺領九百六十四石　梶井宮二品法親王

慈胤 後陽成院宮

開基　傳燈大法師位承雲 慈覺大師之弟子

元在東坂本、後移于此、京師御坊號梨本、

創建

〔山州名跡志 五愛宕郡〕圓融院　在同所〇大原村東、　境地南面　門西向　方丈南向　是則天台山門之門主、御持職也、號梶井門主、或號梨本房、　開基傳教大師〇傳云、大師寺草庵之跡、　此寺初洛北舟岡ノ東邊ニアリ、應仁ノ亂火ニ回祿ス、然後此所ニ移シ玉ヘリ、

〔應仁記 下〕洛中大燒之事
中ニモ、梶井ノ宮造リハ、舟岡山ノ瀧頭ニ、東尾ヨリ行松ノ雲ニ聳ヘテ、御池ニハ、常ニ群居鴛鴨ノ、近江ノ湖水ニ不異、

〔山城名勝志 十二愛宕郡〕圓德院　梶井宮御房也、在二勝林來迎(山城愛宕郡大原)兩院間一、梶井元在二東坂本一、號二圓德院一、梨本京師御房號也云々、當院元在二西京一、又西坂本、或舟岡麓、近代遷二此地一、

〔諸門跡傳 二〕圓融房　又梶井殿　梨本門跡　桑光坊　圓融院〇中略　圓德院

傳教大師　慈覺大師
梨本門主之始、五佛院、
承雲和尚　號叡南大師、貞觀元年十月十三日受灌頂、師圓大　同二年二月十六日任內供奉、同十一年二月二十六日、賜撿封宣、

堂塔

〔扶桑略記 三十白河〕應德三年六月十六日壬寅、供養叡山東坂本梶井御願寺、公卿侍臣等、供奉絲竹管絃、奉安丈六九體金色阿彌陀佛像、故中宮職〇藤原賢子一周忌間、每月一體開眼供養、丈六佛像也、寺司勸賞、幷被寄阿闍梨三人焉、

〔百練抄 五白河〕應德三年六月十六日、供養圓德院、資前中宮職菩提、

〔驢驢嘶餘〕一梶井殿ノ圓融房舊ハ階アリ、高欄等アリ、宮ノ造ナリ、廢壞ナル間、中堂再興之次、彼御房再興、中門車寄以下、常ノ御所造ニナルナリ、靑蓮妙法、舊ノ御坊ナレ共、御所ヅクリナリ、

〔本阿彌行狀記 下〕信長建立いたし上られ候、大原の御殿は、後世に至り、今の京都の梶井の宮へ引

寺領　寺職

取建玉ひし故、大原には、其礎計殘りしなり、

〔嘉永四年雲上明覽大全上〕御領千六十四石　今出川口下ル東側

梶井御宗旨天台誠宮ノブ

伏見入道邦家親王御子

院室 淸淨心院權大僧都法印 四王院大僧都法印

出世號大緣院 蓮成院大僧都

坊官 寺家宰相法印 山本宮內卿法眼 富小路中將法橋 鳥居川刑部卿法橋

諸大夫 井上遠江守

侍法師 竹原三河法眼 渡邊相模法眼

承仕 飛田石見法眼 古畑河內法橋 飛田和泉法橋

〔諸門跡譜中〕梶井殿 又號ニ梨本門跡

導敎大師 ○中略　慈覺大師 ○中略　承雲和尙 叡南大師　延雄阿闍梨

尊意贈僧正 天台座主法性房○中略

義承僧正 天台座主二箇度

鹿苑院入道相國義滿公男、寶篋院贈一品左相府義詮公孫、

義承准后大原入寺記拔萃、應仁元年丁亥五月廿五日、御門主梶井御實名義承御入寺、御宿坊如以前、來迎院南坊院號淨蓮花院也、第二度同八月十六日、門跡近邊軍勢亂入、西坊炎上、九月朔日ヨリ、御門跡之勤行、於南坊當坊之堂被勤之、御門跡之御本尊聖敎等、連々仁當坊ヘ被入申、堂仁被置之、

〔太平記一〕儲王御事

叡斯ノ化行レテ、皇后元妃ノ外、君恩ニ誇ル官女甚多カリケレバ、宮々次第ニ御誕生有テ、十六人

マデゾ御座シケル、中ニモ〇中略第三宮〇護良親王ハ民部卿三位殿ノ御腹也、御幼稚ノ時ヨリ、利根聰明ニ御座セシカバ、君御位ヲバ此宮ニ社ト思食シタリシカドモ、御治世ハ、大覺寺殿ト、持明院殿ト、代々持セ給ベシト、後嵯峨院ノ御時ヨリ被定シカバ、今度ノ春宮ヲバ、持明院殿御方ニ立進セラル、天下ノ事小大トナク、關東ノ計トシテ、叡慮ニモ任ラレザリシカバ、御元服ノ義ヲ改ラレ、梨本ノ門跡ニ御入室有テ、承鎭親王ノ御門弟ト成セ給ヒテ、一ヲ聞テ十ヲ悟ル御器量、世ニ又類モ無リシカバ、一實圓頓ノ花ノ匂ヲ荊溪ノ風ニ薫ジ、三諦卽是ノ月ノ光ヲ玉泉ノ流ニ浸セリ、サレバ消ナントスル法燈ヲ挑ゲ、絕ナントスル慧命ヲ繼ンコト、只此門主ノ御時ナルベシト、一山掌ヲ合セテ悅、九院首ヲ傾テ仰奉ル、

〔皇胤紹運錄中〕後醍醐院〇中略

┃護良親王兵部卿、元妙法院主、尊雲法親王、天台座主、號二大塔宮一、

〔尺素往來〕故七佛藥師法者、叡山傳敎之流、靑蓮院圓融院、妙法院等、可レ爲二天台座主之門跡一、〇中略各被レ行レ之候、

勝林寺

勝林寺ハ、一ニ大原寺ト云フ、山城國愛宕郡大原ニ在リ、僧寂源ノ創スル所ナリ、

〔山州名跡志五愛宕郡〕魚山勝林寺一名大原寺　在二門主御所北一、

〔全國各宗本山明細帳〕天台宗　本山

大原寺同國(山城國)同郡(愛宕郡)大原鄕勝林院村

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　勝林寺　在二大原一、而比叡山之末寺也、本尊世稱二證據阿彌陀一、傳言、法然與二台

創建　堂塔　本尊

徒有法論、是謂大原問答、于時此彌陀爲證、故稱之、一說、惠心弟子禪定院覺超、與檀那院弟子靜慮遍救、佛果空不空之法論、於斯堂修之、于時論空時本尊隱其相、不空時顯相、不辟空不空、依是稱證據彌陀云々、此寺僧自古精音聲、世稱大原聲明、陳思王、曹子建、每讀經文、深嗟玩、以爲至道之極也、遂製轉讀七聲昇降、曲折之響、世之諷誦、咸憲章之、嘗遊魚山、忽聞空中梵天之響、清麗哀惋其聲動心、彌悟法應、乃摹其聲節、爲梵唄撰文、此寺亦摹之、故號魚山、

〔山州名跡志　五　愛宕郡〕魚山勝林寺〇中略

萱穗橋　板橋　在御所北、名義不詳、　此橋紀州高野山御廟橋、奥州松島五臺堂棧橋ニ等ク、造惡不善ノ輩ハ渡ルコトヲ不得也、每歲一二人アリ、土人皆見ルナリ、

來迎橋　切石橋、有欄干、銅擬寶珠、　在萱穗北二十間許、　此橋鄕中ニ有新死者、葬送ノ時、先ヅ此橋上ニ舁棺來テ、堂ノ如來前ニ燈明ヲ照シテ、本尊ノ御手糸ト綿ヲ結合セテ、修願回向スルナリ、

堂　在石橋北南向　本尊　阿彌陀佛　坐像、七尺許、　作　康成　此所開基　寂源　長和年中ノ草創ナリ　本尊ヲ號證據如來事ハ、昔山門ノ僧、都率僧都覺超ト、同山靜慮院偏救ト、於此如來前空不空ノ義論ヲナセリ、雙方議辯清鮮ニシテ時ヲ遷ス、シカルニ覺超不空ヲ論ズレバ、本尊相好ヲ隱シ、偏救空ヲ說バ相好ヲ見シ玉ヘリ、是即チ中道實相ノ證明ニ立チ玉ヘルナリ、是故ニ爲稱號也、又文治二年秋、法然上人ト、山門ノ座主顯眞法印及諸宗ノ碩德ト一向專修ノ問答ヲナセリ、其時法然ノ於議論本尊光明ヲ放チ玉ヘリ世ニ云フ大原問答是也、然フシテ諸師皆法然ノ義ニ伏シ、顯眞專修ノ行者トナレリ、加之此所ニ顯眞ノ徒弟ヲ置テ、不退ノ稱名念佛ヲ初ム、其房ハ今ノ法泉房是レナリト云々、〇中略

右所載毘沙門天幷寂源影　今無堂內

法華堂　在實光房北西向　本尊　聖觀音　金銅佛、坐像、一寸八分、　作　惠心

阿彌陀堂　在本堂前東方西向　本尊　阿彌陀佛坐像、二尺五寸許、　作不考
後鳥羽院塔　在實光房東後　石塔十三重　房　在門主御所北　門南向　房西向
後鳥羽院ハ、四條院御宇延應元年二月廿二日、於隱岐國崩御、依御遺詔奉納御骨、　記云、藏大原法華堂云々、堂今無シ、　又同所藏順德院御骨　記、順德院、仁治三年九月十二日、崩於佐渡國、依遺勅、藏御骨於大原云々、御親子故同塔藏トアリ、

續古今集　後鳥羽院かくれ給ひて、大原に納たてまつるよしきこえければ　順德院御製
入月の朧の淸水いかにしてつゐにすむべきかげをとむらん

最胤法親王塔　在本堂後山下　梶井門主一代、崇光院末邦輔親王子、

〔古今著聞集二釋敎〕少將の聖〇釋寂源も大原山の住人なり、三十よ年常行三昧を行せられける間に、毗沙門天王かたちをあらはして、上人を守護し給けり、御影像を東身に圖繪して、いまに勝林院に安置せられたるなり、此上人臨終の時は、勝林院に常行三昧おこなひける時、西方より紫雲げんじて堂の內へ入とみるほどに、肉身ながら見えず、卽身成佛の人にや、往生傳には、かくはなし、委可尋之、

〔元亨釋書十一感進〕釋寂源、左僕射雅信之子也、俗名時信、以門業早上羽林、俄厭世相、從池上皇慶學顯密之敎、長和二年、入太原山、創勝林院、六時行道、一日毗沙門天、執蓋隨後、其天降之室、今猶存、臨終之時、紫雲垂布床上云、

鞍馬寺

鞍馬寺ハ、山城國愛宕郡ノ北方鞍馬山ニ在リテ、延曆年中、造東寺長官藤原伊勢人ノ創建セシ所ナリ、東光坊、太郎坊等アリ、

名稱	所在	創建	本尊

〔拾芥抄下本諸寺〕鞍馬山城毗沙門天、延暦十五年、田村丸造、

〔濫觴抄下〕東寺　鞍馬寺　今年〇延暦十四年有勅草創東寺、造寺長官従四位上藤原伊世人、建鞍馬寺、依貴布禰明神示現、幷禪禰子童子告也、西觀音堂是也、

〔扶桑略記抜萃桓武〕延暦十五年、有勅草創東寺、造東寺長官従四位上藤原朝臣伊勢人、造鞍馬寺、則彼寺縁起云、伊勢人倩我奉勅命、雖造東寺、私願未遂、爭建一堂、安觀音像、伏願觀音示其勝地、夢見洛城之地、有一深山、東西高峙、中有平地、洞水閑流、宜洗塵心、爰老人出來、即相語云、汝知此地甲于天下、建立道場、尤得便宜、伊勢人問云、仁爲誰人、老人對倩、我是王城鎭守、貴船明神也、感汝道心、教斯勝地、其夢既覺、心神感動、試任騎馬、祈赴北山、漸渉於數十里、自到夢地、歔涙數行、下馬再拜、巡見其地、萱草之中、有毗沙門天像、非木非土、其色鈍色、歡喜頂禮、即以歸去、又作思惟、我本立誓、造觀音像、而多門天像、宿素相違、爲之如何、又夢有一童子、容顏端麗、即告云、觀音則是毗沙門天、伊勢人問云、童子爲誰、答言我是多門天侍者、禪口童子也、夢覺以後、構造三間四面堂一宇、奉安置彼毗沙門天像、今謂鞍馬寺即是也、後經年伊勢人、爲遂本懷、奉造觀音像、安置供養、今在鞍馬寺西觀音堂也、其後修行禪僧、來宿堂羽、爲破夜暗、敲火薪、夜及參半、鬼神出來、其形類女、對火而居、禪僧恐畏、燒鐵杖衝鬼胸、忽焉逃去、即隱於西谷朽木之下、鬼即追來、開口欲噉、于時禪僧、念毗沙門、朽木忽顛、打殺惡鬼、天王威力、靈驗掲焉、伊勢人常祈念云、伽藍雖有、禪容空无、發願參詣、禪侶臥庭、問云、何人臥哉、答云、我是東寺禪師峯延也、而在彼寺之時、屬出堂庭、向北遙望、紫雲高聳、漢天五色、爰知北山定有靈驗勝地歟、自尋紫雲、運步方來、無一粒粮、歷五日朝、飢羸疲極、不能起居、伊勢人模米洗水、令飲其汁、漸復尋常、備語來由、峯延依其芳契、住此蘭若、然間時屬五月、可修護摩、當日中時、行法之間、自北岸中、大蛇出頭、吐舌三尺、其光如電、於是峯延、制心一處、誦大威德尊幷毗沙門天呪、念其威神力、由神呪之靈驗、大蛇口而斃、峯延免害、岸蛇頓死、其後歷三箇日、伊勢人參寺、且問其由、且見蛇體、奏聞公家、給夫五十人、斬蛇、令弃靜原里地、稱大虫

峯、(已上出其緣起、○又見今昔物語、伊呂波字類抄、元亨釋書、塵添壒囊抄、)

〔國花萬葉記二上山城〕松尾山鞍馬寺(洛都ノ北山、行程三里、寺領、二百廿六石、) 延暦年中草創、恒眞和尚、藤伊勢人修造、

塔頭 福生院 勝寶院 月性院 實相坊 本住坊 覺眞坊 妙覺坊

〔山州名跡志六愛宕郡〕松尾山鞍馬寺 在鞍馬山腹巽向 樓門(同) 安金剛力士(長八尺許) 作不考 額

鞍馬寺(堅額) 青蓮院尊證法親王筆 從是到本堂八町(中間有名所、如左、○中略)

東光坊 舊跡在由木社後 此所、牛若丸學問所也ト云フ、(○中略)

左義長谷 在向樓門巽嶺 此事、毎歳六月十九日夜、當寺法事也、六人ノ役僧、此所ニ上テ儀式アリ、古ハ如正月左義長、竹ヲ立テ是ヲ燒タリ、中比ヨリ如松明シテ燒ナリ、(○中略)

僧正谷 在八所社西北十町餘 車坂 在同路二町許(○中略) 太郎坊社、 在僧正谷南向 此所、牛若丸劒術琢磨ノ所ナリ、

〔山城名勝志十一愛宕郡〕鞍馬寺 東光坊(舊跡在由伎明神後、○中略) 僧正谷(在鞍馬寺西北四五町許)

〔中右記〕大治二年二月卅日庚寅、鞍馬寺燒亡之後、今日木作始云々、 七月十日丙戌、今日鞍馬寺棟上云々、

〔吾妻鏡三十二〕暦仁元年閏二月十六日壬戌、未剋、鞍馬寺燒亡、失火云々、自小堂火出來、當寺者、桓武天皇御宇、延暦十五年丙子、藤原伊勢人、依貴布禰明神之告、草創以降、星霜既三百八十餘年、專爲帝都擁護精舍云云、 十月三日甲辰、今日鞍馬寺上棟、將軍家有御奉加、馬三疋、御劒、砂金等也、河越掃部助爲御使云云、

〔鞍馬寺文書〕鞍馬寺造營用途料、可被付任官功、十萬疋之由卽宜下候了、以此旨可令披露給、恐々謹言、

(延應元年○四字似追書)五月六日、内藏頭信弘奉、

參詣

〔宣胤卿記〕文明十三年三月廿八日壬寅、今日鞍馬寺本堂供養也、導師定法寺僧正、

〔中右記〕寛治五年九月廿四日、太上皇〇白河參御鞍馬寺、日之中還御、上達部六人、源大納言、中宮大夫、新大納言、右衛門督、新中納言、二位宰相中將、皆布衣、殿上人廿餘人許扈從、皆布衣、撿非違使平貞弘、兵衛尉平爲俊、右衛門尉源光國、候御車後、布衣、武者所等皆扈從、御經供養、被付寺家、

〔古事談〕五神社佛寺粟田左大臣在衡、文章生之時、參詣鞍馬寺、於正面東間爲禮之間、十三四歲童來傍同爲禮、七反計ト思ケレドモ、此小童之不禮終之前ニシハテタラムハワロカリナント思テ、不意奉禮之間、既滿三千三百卅三度之時、此童失畢、爰在衡成奇異之思、致渴仰之信、然而窮屈之餘聊睡眠之間、先童裝束如天童、自御帳之中出來云、官ハ右大臣歲ハ八十二云々、其後日昇進如任雅意、任大臣、又時無讓云々左大臣八十三之時、詣彼寺申云、往日右大臣八十二之由雖示現、今已如此云々、毗沙門亦夢中示給云、官ハ右大臣ニテアリシニ、依奉公勞至左、命ハアシクミタリケリ、八十七云々、果件歲薨也云々、其後彼寺正面東間ヲバ、人以稱進士間云々、

雜載

〔吾妻鏡〕十五建久六年五月三日丁亥、將軍家〇源賴朝被奉御劒於鞍馬寺、相模守惟義爲御使、

〔源平盛衰記〕四十六土佐房上洛事

昌俊ハ、大原路ニカヽリ、龍華越ヲ志、北山ヲ指テ落ケルガ、軍兵二手三手ニサシ廻シ、先ヲ切テ延ヤラズ、昌俊大原ヨリ、藥王坂ヲ越、鞍馬山ニ逃籠、伊豫守〇源義經兒童ノ時、當寺居住ノ好アリテ、大衆法師原、山蹈シテ尋ケル程ニ、鞍馬奧、僧正ガ谷ト云所ニテ搦捕、伊豫守ニ奉、〇下略

〔義經記〕一うしわかくらま入の事

ときはが子共、成人するにしたがひて、中々心ぐるしく、初て人にしたがはせんもよしなし、ならはねば天上にもまじはるべくもなし、たゞ法師になして跡をもとぶらひてなんど思ひて、くらまの別當とうくはう房のあじやりは、義朝の祈りの師にておはしける程に、御つかひをつかは

して仰けるは、義朝の御末の子牛若殿と申候を、かつうは志ろし召てこそ候らめ、平家世ざかりにて候に、女の身として持たるも心ぐるしく候へば、くらまへ參らせ候べし、たけく共、なだしき心もつけ、ふみの一卷をもよませ、經の一字をも覺えさせてたまはり候へと申されければ、とうくはう房の御返じには、こかうの殿の君達にてわたらせ給ひ候こそ、殊に悅入て候へとて、山科へ急ぎ御むかひに人をぞ參らせける、七さいと申、きさらぎ初に、くらまへとてぞ上られける、其後ひるは終日に師の御ばうの御前にて經をよみ、ふみ學して、夕日西にかたぶけば、夜の更行に佛の御あかしのきゆるまでは、ともに物をよみ、五更の天にもなれども、あまもよひもすくまで、がくもんに心をのみぞつくしける、とうくはう坊も、山三井寺にも、是程の兒有べしとも覺えず、がくもんのせいと申、心ざま、みめかたち、るいなくおはしければ、りやうちばうのあ志やり、がくにちばうのりつしも、かくて廿ばかりまでもがくもんし給ひ候はゞ、くらまのとう光坊よりのちも、佛法のたねをつぎ、たもんの御たからにも成給はんずる人とぞ申されける、母も是を聞、牛若がくもんのせいよく候共、里につねに有なんとし候はゞ、心もぶようになり、學問をもをこたりなんず、こひしく見たけれと申候はゞ、わざと人を給り候て、母はそれまで參り見もし、人に見えられて、返し候はんと申されける、さなし共、兒をさとへくだす事おぼろけならぬにて候、ひととせに一度、二年に一度もくださる、かゝるがくもんのせいいみじき人の、いかなる天まのすすめにや有けん、十五と申秋のころより、がくもんの心もつての外にかはりけり、其ゆへはふるきらろどうの、むほんをすゝむるにてぞ有ける、

牛若きぶねまうでの事

志やうもんにあひ給ひて後は、がくもんの事あとかたなく忘れはてゝ、明暮むほんの事をのみぞ思召ける、むほんをおこす程ならば、はやわざをせでは叶ふまじ、先はやわざをならはんとて、

此ばうは、諸人のよりあひ所なり、いかにも叶ひがたきとて、くらまのおくに、そうしやうが谷といふ所有、むかしはいかなる人のあがめ奉りけん、きぶねの明神とて、れいげんしゆしやうにわたらせ給ひける、○中略牛若、かゝる所の有由を聞給ひ、ひるはがくもんをし給ふていにもてなし、よるは、日ごろ一所にて、ともかくも成参らせんと申つる大衆にもしらせずして、別當の御まもりに参らせたるしきたいと云腹巻に、こがね作りの太刀はきて、たゞ一人きぶねの明神へ参り給ひ、ねんじゆ申させ給ひけるは、南無大慈の明神、八まん大ぼさつ、たな心をあはせて、源氏を守らせ給へ、しゆくぐはんまこと成就あらば、玉の御ほうでんつくり、千町のしよりやうをきしんしたてまつらんと、きせいして、正めんより、ひつじさるにむかひて立給ふ、

〔青蓮院文書〕鞍馬寺之儀、衆僧行儀猥ニ付、既佛法及二退轉一之旨、無二是非一次第候、然者彼妻帶之僧、悉被二追却一、今般寺法被二相改一、法事懃行爲レ專、堂舍修理等之儀、可レ爲二肝要一候、當門爲二寺務一之間、諍不レ可レ有二由斷一之狀如レ件、

天正十七七月　日　秀吉花押

青蓮院殿

〔鞍馬寺文書〕猶以命之儀三箇年、不レ然ハ二年實ニ不レ成候ハヾ、三十日ニ而も延命候樣被レ願、今度大政所殿故於二本復一者、爲二奉加一壹萬石可二申付一候條、彌可レ被レ抽二懇祈一事肝要候也、

六月○文祿元年廿日　秀吉花押

鞍馬寺

峯定寺

名稱所在

峯定寺ハ、大悲山ト號シ、山城國愛宕郡ニ在リ、原ト天台宗ニ屬セシガ、後眞言宗トナリ、專ラ修驗道山伏ノ道場タリ、

〔山城名勝志十一下愛宕郡〕大悲山號峯定寺、在鞍馬山乾五里許、花瀨峠北麓、而行程十二三町、而至于別所村、自是大悲山也、昔板踏也、至寺有樓門、額發心門、觀音堂一字、有鎭守社、眞言宗三寶院門下也、本尊千手觀音、開基不知、

〔雍州府志四寺院〕愛宕郡　峯定寺　在鞍馬山之北六里許、號大悲山、觀音安坐之靈場也、開基不知爲何僧、今堂、白河法皇之所建立、而上梁銘有平淸盛奉行之字、有緣起一卷、少納言入道信西、代西念法師而所作也、相傳、一朝葛城大峯、大蛇橫行、故本山修驗道山伏、不能入峯、斯時每年自丹波之國弓削、歷幾許山岳入斯峯、依之斯山謂北大峯、或稱大峯寺、樓門有大悲山發心門之字、爾後、醍醐寺聖寶、再入峯殺大蛇、自茲當山山伏入大峯、故此處廢矣、古此寺僧天台宗、而修驗道山伏也、故屬聖護院門主、今纔有一坊、每年二月十八日、修觀音會、此時多風雨烈、是世謂大悲山荒、斯山樹木蒼鬱、岩石崎嶇、眞幽邃之地也、法勝寺執行俊寬、謫鬼界島、時隱妻子於斯地、此事見于舊記、古此地始屬丹波、豐臣秀吉公時、自斯山北至一里、爲山城界、

〔諸寺略記〕一大悲山者、近衞院御時、三瀧聖人建立、在鞍馬寺之乾方、一靈石、其白如鸞鏡、擬千手觀音寶鏡御手、大悲山名、蓋在此也、當彼石觮中央、置此堂閣之基跡、佛座下有石竇、水滴宛如檐溜、以之供閼伽、以之充盥潄云々、

創建

〔大悲山寺緣起〕爰鳳凰城之北畔、鞍馬寺乾方、有一靈地、自山脚至山頂、往々有奇峯、連々而相接、松柏鬱茂、昇降崎嶇、佛子至此地、戀々不能去、忽結茅茨、栖息倘矣、其山爲體也、先尋往詣之便、各定止宿止所、宛如驛亭、量程置之、此外有九品峯、蓋擬安養界也、○中略久壽元年二月、建立三間堂一字、奉安置白檀二尺千手觀音菩薩像一軀、佛座下有石竇、水滴宛如檐溜、以之供閼伽、以之充盥潄、一尺三寸不動明王、五寸二童子像各一體、同毗沙門天像一體、至于同年四月、仙院忽降勅命、奉請此像、思出不意、事

是鄭重、歡喜踊躍、隨喜悅豫、昔不空三藏之營佛閣也、卽是肅宗皇帝之仁恩也、今貧道比丘之建精廬也、寧非禪定法皇之叡慮哉、歸三寶治万邦、以六度撫四海、古今少案、和漢无類、若不仰利生於我后、何必无緣之比丘、得遂佛願焉、若不殖善種於此山、何必孤露之少僧、得果素意矣、幸哉々々、〇中略弟子昔生弓馬之家、無辨因果之理、以畋獵爲業、以漁釣爲事、春秋廿一、忽喪親父、當于彼時、親父命弟子曰、平生惡業不貲、來世之苦果、何爲汝廻方便、可祈解脫、弟子一聞斯事、如刀劍在胸、行年廿五、善緣忽催、剃首染衣、尙降難行苦行、積功累德、念々步々、思知我父之生何趣、造次顚沛、期知我父受何苦、丹誠盡一心、專念及三年、在夢中見父親、身爲馬面爲人、後歷二年、參詣熊野山那智如意輪堂、又有夢想、我父面爲人、身爲獅子、其後歷十一年、修行播磨國八塔寺、蓋十一面觀音靈驗地也、夢中觀音告曰、汝父已往生淨土、數年後夢中親母同見往生之奏、前後三夢、仰而取信、又弟子平生行業、存紙墨者、依如法之儀式、書寫妙法華經八部、限以一千五百日、入修常行三昧、又修常行常座兩三昧、經歷千六百日、又剋三千日、燒八曼陀羅香、其間修常坐三昧、心神全不動、此外修行大峯、送三箇年、自餘少行、不遑委記、又我父、夢中來告云、汝常在山林、敢莫交聚落、於戲山林之睡眠者、如來讚歎之、聚落之苦行者、菩薩誣訶之、誠哉斯言、于時久壽三年仲春二日、佛子西念聊記由緣、以貽來葉也、　作者小納言入道法名信西

名稱
所在

實相院

實相院ハ、大雲寺ナリ、山城國愛宕郡岩倉村ニ在リテ、圓城寺諸門跡ノ一タリ、其創建ヲ詳ニセズト雖モ、正曆年中、圓城寺圓珍ノ徒、叡山ヲ去リテ此ニ移リショリ、寺運大ニ興リシモノノ如シ、

〔拾芥抄下本諸寺〕大雲寺石藏觀音

〔山州名跡志　六愛宕郡〕岩藏山大雲寺　院號實相院　在里西北山下　宗旨天台　法親王門主御住持
法流圓城寺流義　堂南向　額　大雲寺　墅觀　佐理卿筆　本尊聖觀世音　立像、長五尺七寸、作行基
開基智辨僧正

〔實相院文書　乾〕勘錄
北石藏大雲寺、於四至雖相交他領、致地頭分幷諸役撿斷、堰料河水以下者、可爲寺家管領之堺事、
天祿三年　公驗
四至
限東　安禪寺坂舊岡　限西　篠坂大道西端　限南　木行坂拌　限北　靜原氷室山、谷河越、
右境等所被裁許大雲寺之也、仍使廳勘錄狀如件、
應德二年九月廿六日　　左衛門尉安部顯重□

〔實相院文書　乾〕皆越山證文
大雲寺衆徒等謹言上
寺領牽越山內堂山之子細事
右一原野山
於此堂山者、自寺家終無知行者也、其謂者、賀茂人沽却之狀見由云々、取詮
此條、構私曲造意也、此山事、爲大雲寺本堂山、西限鞍馬大道一所、八葉峯八谷、於此內不交他領山也、其子細、曩祖大師之差圖幷每度之公驗等明白也、一原野堂山之在所八谷內、號墅尾谷之廟所山也、以此山賀茂人號私領、令沽却之間、賀茂領云々、然者何自一原野根本預狀可出寺家哉、寺領蒙于御恩之由、請文于今有之、寺領條勿論也、其上以私曲之狀可對寺家公驗等條、雲泥沙汰也、次文、

創建沿革

先管領御施行之時、於此堂山不被勘落之處、今何可被違亂哉由云々、是文絕于常篇、不足言至也、彼施行之時、忽可令勘落之處、彼等代々爲寺家被官人上者、每度可蒙寺恩由歎申之間、所差置無子細、雖然今度重而被成御敎書御趣、任寺領支證、甲乙人知行悉令勘落、可致本堂造營之由、御成敗之間、以其趣被觸之處、一原野以外、令強訴語諸方、可成弓箭之由、令結構間、寺家尤爲上意上者、可伐山木用意仕之處、北山殿御祈禱、晝夜可致懇祈由、假被仰下間、先閣之畢、隨而此間可令興行之處、爲一原野以別儀暫可差置之由被仰出哉、雖然此山事、既及大沙汰、今更如元閣之者、爲後訴彌可募他領之道理間不可叶之由、若輩僉議也、若八葉八谷之內令闕如者、非被付疵於山耳、曩祖之差圖、幷御敎書等可成反古事、且門跡之御難、且自餘傍例也、早爲寺家爲仰御成敗之、粗言上如件、

應永十六年六月　日

〔大雲寺緣起（山城名勝志所載）〕帝都北、岩藏山大雲寺者、圓融院御願、日野中納言文範卿草創也、勅使中納言敦忠卿、本願眞覺上人造營之、本尊者行基菩薩之所作、金色等身十一面觀音、桓武天皇安置仙洞、相繼本院左大臣（時平）感得也、彼室家藤原明子之時、依勅大雲寺被還座、本堂同仙洞之舊宮所移、智證門流之灌頂堂是也、又飯室座主觀音院大僧正（餘慶）○徒弟文慶法印、（藤氏系圖云、山法印、大雲寺別當、岩倉菩提房、敦忠孫佐理子也、）依勅初當寺補別當職、天台一味之法流、三井之別院、北嶺清淨法華三昧者、當寺之事也、天祿二年卯月二日、比叡山一乘止觀院之五堂會、從岩藏之峯、紫雲聳、爰勅使日野中納言文範卿、見此瑞尋入當山至幽谷、爰有一叢祠、又忽然而老尼坐石上、尼云、吾者石坐老尼、此山有觀音淨土之號相博寺、無始無終之佛閣也、更凡夫所不能見、汝奏當山可建佛閣、吾必可衞護當寺佛法云畢形隱、文範具上奏、帝殊有叡感、勅中納言敦忠卿、參議佐理卿、造營堂舍、清淨山當北寺（當寺舊號云々）大雲寺額（佐理卿書之）

○按ズルニ、桓武天皇ハ、讓位シ給ハズ、安置仙洞トハ云フベカラズ、時平ノ室ニ在原氏アリ、敦

忠ノ母ナリ、參議佐理ハ實頼ノ孫ニシテ、敦忠ト同時ノ人ニアラズ、共ニ勅ヲ奉ズベキニアラズ、此緣起ニ云フ所ハ、都テ疑フベシト雖モ、今姑ク參考ノ爲ニ之ヲ引ク、

〔扶桑略記 二十七 圓融〕貞元三年、延暦寺沙門眞覺入滅、權中納言藤原敦忠卿第四男也、初在俗時、官歷右兵衛佐、去康保四年出家、從師受兩界法、阿彌陀供養法、三時是修、一生不廢、(○下略)

〔諸門跡譜 下〕實相院

餘慶權僧正(圓城長吏、延暦座主、觀音院僧正、)

・證智辨、筑州早良郡人、天元二補圓城寺長吏、治十二年、永祚元九二十二任延暦寺座主、北岩倉山大雲寺內建立精舍、號觀音院、講堂、(六天)五大堂、灌頂堂、(大日)法華堂、(普賢)阿彌陀堂、眞言堂、(兩界)皇后宮昌子御本願也、天元三年、以觀音院爲圓融院御願所、被置阿闍梨四口、同院內蓮臺房爲同御願所、被置阿闍梨四口、於大雲寺始行灌頂、自天元年中至文明十三年、每歲行之云々、又有四神足所謂、勸修、勝算、慶祚、穆算也、正暦二閏二十八寂、七十三歲、

〔扶桑略記 二十七 花山〕永觀三年(○寬和元年)二月廿二日、皇太后昌子內親王、天台山脚建立精舍、號觀音院、此院之裏有六箇堂、(○中略)先陵(○朱雀)先妣(○熙子)外、雖無遺體之葬、妾獨不忘報恩之心、訪泉聲兮和雲色、所延者比丘之一百餘、弄洞簫兮點嶺松、所供者滿山之三千弱、(已上)

〔大雲寺諸堂目錄幷系譜〕智辨(筑前國人、横川飯室僧正餘慶號觀音院、)

〔扶桑略記 二十七 一條〕正暦四年八月十日之頃、觀音院十禪師成算童子、由無實小事、禪院住僧平代致大愁、仍慈覺大師門徒僧等、斫燒於千手院房舍、幷門人一千餘人僧侶、追出山門已畢、燒亡房舍四所、權少僧都勝算房、故阿闍梨滿高房、阿闍梨明肇房、僧連代房也、斫壞房舍、千手院卅餘宇、蓮華院、(冷泉院之御願)佛眼院、(故式部卿是忠親王建立)故座主良勇房、故前少僧都房算房、權少僧都穆算房、故阿闍梨倫譽房、故已講實定房、阿闍梨壽勢房、故阿闍梨湛延房等也、此外房舍粗有其數、不能具記、其後智證大師門人等、各占

堂塔

別處、不住叡山、已上

〔山門三井確執起〕慈覺智證兩大師門徒確執起

正曆四年一條院治宮座主、第廿二代暹賀僧正、八月、觀音院成算之徒、與叡山衆有郤、慈覺之徒燒千手院、及壞房舍四十餘宇、兩門相爭、於是慈覺之徒擯智證之徒、一千人出山、私云、慶祚阿闍梨移大雲寺、則今年也、見新羅大神記焉、

〔大日本史佛事三〕是歲、○正曆四年觀音院成算弟子、與禪院僧忿爭、圓仁之徒、由是蜂起、燒千手院、毀房舍四十餘宇、悉逐勝算穆算等一千餘人、自是圓珍之徒去延曆寺、各占別地、僧慶祚率弟子遷園城寺、四方學者雲集、園城寺始熾、而二寺之釁漸結矣、扶桑略記、元亨釋書、

〔本朝高僧傳感進五十〕洛北大雲寺沙門文慶傳

釋文慶、參議藤佐理子、從園城寺餘慶、悉得顯密奧秘、又就勸修勝算二兄、益研所業、感應日著、名聞輦下、勅住洛北大雲寺、時智證門侶多集巖藏、

○按ズルニ、文慶ノ父ノ佐理ハ敦忠ノ子ナリ、參議佐理トハ異ナリ、本書誤ル、

〔榮花物語初花八〕かゝる程に、女二宮○一條皇女媄子むげにふかくに、かぎりにておはしましけるに、いはくらの文慶阿闍梨まいりて、御修法つかまつりけるに、あさましうおはしましける御心地、かきさましおこたらせ給ぬ、いはん方なくうれしきことに、内にも覺しめして、律師になさせ給へれば、○下略

○按ズルニ、此ハ寛弘五年ノ事ニシテ、又日本紀略ニ見エタリ、

〔諸門跡傳三〕實相院

義海大僧正　近衞前右大臣經熙公御息

寛政十三享和元年三月二十七日入室得度

北岩倉山大雲寺本堂、本尊十一面行基大菩薩作

成金剛院金剛童子、不動、毘沙門、

寺領　寺職

安養院 丈六阿彌陀佛
平等院 村上皇子悟圓親王住此寺給
如法院 善惠大師建立、法華曼荼羅四十六尊、
金龍院 明範建立、丈六阿彌陀尊、
尊光院 丈六阿彌陀像
西南院
如來寺 阿彌陀
南大門 權現堂
脇庄寺 等身藥師

正敎院 六觀音
南大門 理智院
寶塔院 善惠大師建立、法華曼荼羅像四十六尊
圓生樹院 宇治大納言源隆國建立
新御門
北大門 西光院 丈六阿彌陀三重塔
淨雲寺 在定林寺之西
吉倉寺 等身不動
善法寺

定林院 後三條院御願、延喜帝苗裔備前守朝棟建立、
福泉院 延喜年中建立之、刻彌勒尊像、
持寶院 菩薩房文慶法印建立、如意輪觀音像、
最勝院
山本 普賢院
新御堂
成敎院
願成寺 號隱家谷別所
蓮光院 丈六阿彌陀

〔小右記〕寛仁二年閏四月戊戌、密々詣觀音院、廻檢寺中、多破壞、

〔諸門跡傳 三〕實相院 略○中

南瀧院　元祖公顯大僧正、又建法住寺、

北小路堀川房舍幷院領綸旨、武家證文數多略之、天正年中、細川國廣岩倉發向、此時諸堂門跡悉炎上云々、

〔嘉永四年雲上明覽大全 上〕實相院御門跡

智證大師 略○註 ―康濟律師―增命權僧正―京意阿闍梨―敬一阿闍梨―運昭阿闍梨―行譽律師―餘慶權僧正―勸修大僧正 略○中

御領六百十二石五斗餘、　北岩倉、號石倉御殿、

御宗旨天台 實相院御門跡、義賢 廿四　御里坊寺町石藥師入谷大學

權僧正法印

二條故齊信公御子

院家　最勝院大僧都　南松院權僧正

坊官　芝之坊法印　卿法眼　藏之坊法印　北河原中將法眼　松尾刑部　岸之坊

諸大夫　三好筑前守

侍　柏村攝津介　辻越前介

〔諸門跡傳三〕實相院

御代々被寄置領、綸旨、院宣、武家證文數通略之、

諸堂可致造營之由、代々皇帝、仙院御奉加帳有之、久安四戊辰二月日、依覺仙僧都奏、大雲寺被寄置阿闍梨三口矣、

門跡領、近江國野淵庄、同國栗田庄、攝津國八多庄、播州有年庄、越後國紙屋庄、伊賀國音波庄、南瀧院領、近江國倉垣庄內宮武名、并備中國走出庄、伊勢國茱原田御厨、武藏國榛谷御厨、尾張國於田沼庄內富益、院宣所候也、仍言上如件、

八月晦日　隆蔭

進上　實相院僧正御房

大雲寺同寺領攝津國萱野庄、山城國犬上田、近江國朱雀院田、山城國脇庄、并美濃國志津野庄、攝津國正木庄、同國福富庄、伊勢國野代庄、近江國犬上位田、大和國參引別府、播州鞍位庄、御知行不可有相違之由、院宣所候也、仍言上如件、

建武三九月三日　隆蔭

實相院僧正御房

油小路權大納言藤原隆蔭者、右京大夫從二位隆政男、隆行卿孫也、

雜載

〔榮花物語〔見はてぬ夢〕四〕村上の先帝の九の宮〔○昭平〕入道して岩藏にぞおはします、又兵部卿の宮〔○致平〕ときこえさする御子、同じはらからにて三宮ときこえさせし、それも入道して、おなじ所におはします、

〔親長卿記〕文明三年三月廿九日、參岩藏長谷觀音、十一面云々、

蓮臺寺

名稱 所在

蓮臺寺ハ、山城國愛宕郡舟岡山ニ在リ、聖德太子ノ開基、僧寬空ノ中興ト稱ス、宗派ハ新義眞言宗ニ屬セリ、

〔伊呂波字類抄〕〔禮 諸寺〕蓮臺寺

〔和漢三才圖會〕〔七十二末 山城〕上品蓮臺寺 在舟岡山下 眞言 寺領百十石

聖德太子開基、中興寬空僧正、號九品三昧院、眞言新義坊舍十有餘、弘法大師母阿刀氏之塔婆有之、號金峯山、

創建

〔國花萬葉記〕〔二上 山城〕金峯山上品蓮臺寺〔千本寺也、舟岡山下、寺領百十石餘、〕

聖德太子開基、中興寬空僧正、〔九品三昧院ト號ス〕 眞言新義 坊舍 光明院

田中坊 眞言坊 石藏坊 手向坊 芝之坊 中島坊 南之坊 花之坊

上之坊 泉藏坊 橋之坊 願明坊

諸墓 阿刀氏塔、光明院に在、〔弘法大師ノ母公ナリ、當院ハ大師ノ草建也、〕 後藤〔黏 藥〕塔、石藏坊ニ在、〔金銅彫物ノ名師〕 大森宗勳塔、同坊ニ在、〔尺八ノ上手〕

〔山城名勝志〕〔十一下 愛宕郡〕蓮臺寺〔在舟岡西、千本閻魔堂北、本尊地藏菩薩、僧正寬空禪室、扁云上品蓮臺寺、〕

〔日本紀略〕〔四 村上〕天德四年九月九日丙午、權僧正觀空、供養北山蓮臺寺、

雜載

〔野守鏡下〕惠心先德は、念佛往生の衆生十三大劫をへて、蓮花の中より出生といふ事、妙法蓮花經の結緣なき往生の義也、かの經に値遇したてまつりなば、速疾に妙蓮花より出生して須臾のあいだに開悟すべしとて、二十五人の智德をえらびて、廿五三昧をはじめをこなはれし次第、ひるは法花を講じ、夜は念佛を行じき、これよりかの法衆をの〳〵みな順次の往生をとげられ、えいざんのみねに紫雲つねにたな引、蓮臺野の定覺上人これをうらやみて、又をこなひ侍りけるに、蓮花化生したりければ、結界して此所にて墓をしめん人をば、かならず引攝せんと發願をしたりけるより、蓮臺野となづけて、一切の人の墓所となれり、

〔山城名勝志愛宕郡十一下〕蓮臺野廻地藏堂四光法師造立七ヶ所一也、今斷絕、六地藏廻輩、拜常盤村像、盛衰記云、蓮臺野奧峯堂ト云所アリ、重衡卿ノ若君害セシ所也、女房櫻町中納言女、新中納言局、重衡卿八條堀川堂ヘ迎ヘシ人、若君母、阿證房上人、蓮臺野ニ池ノ坊ト云所アリ、其傍ニ地藏堂ト云、御堂ニ具足シ奉テ、簪ヲオロシ奉ル、按、此堂廻地藏堂歟、

名稱
所在
創建

引接寺

引接寺ハ、山城國愛宕郡舟岡ニ在リ、定朝作ノ閻魔王ノ像ヲ安置ス、故ニ千本閻魔堂トモ稱ス、此寺ニ普賢象ト稱スル櫻アリ、每春花枝ヲ京都所司職ニ獻ジテ、花鎮ノ融通踊念佛ヲ行ヘリ、宗派ハ新義眞言ニ屬ス、

〔國花萬葉記山城二上〕光明山引攝寺千本閻魔堂　寺領七石七斗
蓮臺寺と一派にして、新義眞言宗なり、閻魔之像定朝の作也、開基同人、中興定覺上人、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕光明山引接寺　千本閻魔堂舟岡之南　寺領七石七斗

雜載

開基　定朝[部]自作閻魔王
中興定覺上人新義眞言宗[興蓮臺寺一派]

〔山城名勝志二洛陽〕引接寺[千本閻魔堂也、在朱雀通北限舟岡南、開基定覺上人、琰王像定朝作、額世尊寺行季筆也、]
山門横川記云、釋定覺、政田氏、肥之後州之人也、居台嶺三十年、源信之徒、行止觀妙理、雖然常修金剛密宗禪門等矣、寬仁之始、爲法界四生、普亂名號、大念佛開發三所焉、破滅之後、乃明鏡律師如輪繼之、故以覺爲念佛始祖、

永和元年二月日　　　首楞嚴院比丘嚴maybe

〔國花萬葉記二上山城〕光明山引攝寺○中略
此寺方丈の庭に普賢象の櫻あり、毎春さかりの枝を所司職へ獻じて、恒例花鎭の融通踊躍念佛をはじむ、則米三石半を賜ふ、是を以て十日念佛會の資料とす、此念佛と壬生念佛の恒例は、古へ刑部省に活速祭迚、刑獄の罪執をとふらはれし其遺法なりとかや、誠に一枝を所司廳へ捧て賜祿を蒙り、念佛會を勤るといふ、

〔雍州府志五寺院補遺〕愛宕郡　千本引接寺　舊記云、三月晦日、鎭花法會依舊諸寺從之、後小松院應永年中、天下餓死人多、令諸寺修踊躍念佛、慈眞房良快、修鎭花法會、時一條經嗣公捧花云、按今千本引接寺、并壬生地藏寺三月念佛會、鎭花法會之餘流乎、又一說、毎年三月十日安樂花神事、亦鎭花法會之微意也、不知然否、

〔親長卿記〕明應四年二月十三日、本日參詣千本釋迦堂、遣敎經聽聞、次千本櫻一覽畢、

〔宣胤卿記〕文龜二年三月九日、詣千本念佛、并普賢堂櫻盛也、

〔山城名勝志二洛陽〕普賢堂櫻[在閻魔堂、世謂普賢象、]

大德寺

名稱所在

大德寺ハ、山城國愛宕郡紫野ニ在リテ、古ノ白毫院ノ地ナリト云フ、臨濟ノ僧妙超ノ開基ニシテ、花園、後醍醐兩帝ノ信仰特ニ厚ク、花園上皇ハ本寺ヲ以テ其御祈願所ニ定メ、後醍醐天皇ハ此ニ紫衣ヲ許シ、十刹ノ列ヨリ陞セテ、南禪寺ト同位タラシメ給ヘリ、

子院ノ內、眞珠庵ハ一休ノ住所ヲ以テ世ニ聞エ、總見院ハ信長ヲ葬ルヲ以テ名アリ、天瑞院ハ豐臣秀吉ノ母ヲ葬ルヲ以テ知ラレ、德禪寺ハ徹翁ノ塔頭ナルニ由リテ著ハル、

〔雍州府志 四寺院〕愛宕郡　大德寺　號龍寶山

〔山城名勝志 十一下愛宕郡〕大德寺 在船岡山北

〔正法山誌 八〕改白毫院爲大德寺

大德寺者、本名白毫院、而叡山末寺、後爲禪刹也、

赤松圓信 則村○ 者、白毫院之檀那也、圓信之子則祐、爲大德寺之檀那也、

寺域

〔大德寺文書 一〕當寺敷地事、東限船岡山東崎、南限安居院大路、西限竹林、北限同山後、新可令管領給者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年五月六日　左衛門權佐 花押

大德寺長老禪室

創建

〔南禪寺文書 南禪寺誌稿所載〕後醍醐天皇御宇、北御所之代、君臣同道、天下泰平、於洛中新欲建五山御願所也、叡山玄惠法印、三井僧正、東寺虎聖、奈良阿一上人爲張本、都三千八百餘員、以愚書訴、謂不可建立禪宗之事、元弘四年正月二十一日、諸上清凉殿宗論、妙超侍者參內、拈拄杖拂、向大王奏曰、今日宗論、以一言可負者、卽可作下部、大王用此語、月卿雲客傾耳、玄惠出問、如何是敎外別傳、禪答云、八角磨盤走

空裏、玄惠不會、卽作下部、名宗疑、次僧匠擔箱置面前、師問曰、是何物、匠云、乾坤箱、師杖之云、乾坤打破時如何、匠又不會、卽作下部、名宗圓、二人共舁超侍者輿、行紫野、建立大德寺、爲後醍醐天皇勅願所也、又廿一日晚、虎聖奏曰、昔宗論七日七夜也、今何限一問一答哉、此時南禪寺第八世大光國師參內、虎聖敎弟子問、如何是禪師彈指一下云、此音徹梵天、儞還聽之否、弟子不會、卽被追座、至廿七日、俱舍宗、成實宗、律宗、三論宗、法相宗、花嚴宗、淨土宗等、各以諸敎文論文釋義等雖難問不叶、廿七日虎聖參內問如何是禪師云、汝矢離弦、猶無逼迴勢威、虎聖云、中我宗亦復如是、師擧扇子云、儞矢試射看、聖云、中、師重袖扇子、尙射看、聖良久云、禪既盡而已、師云、欲知我宗、白雲萬里哉、聖曰、會時可聽哉、師云近前來、聖近前、師一踏々倒、起立三拜而卽取弟例、其日、宗虎三大將已被取頭、殘黨不全者、其外三千八百有餘者也、

○按ズルニ、右ハ南禪寺八世大光國師ノ筆ト稱シ、今同寺ニ在リ、

〔大燈國師行狀〕大應國師、○南浦紹明 唱臨濟宗旨於橫嶽万壽建長也、殆乎四十年矣、其間、握衣者不知幾何、師其一也、師諱妙超、宗峯其號也、生於播州揖西縣紀氏子、○中略 厥後、大應國師、應詔自橫岳來京師、館于韶光庵、師在師州聞其手段辛辣、越于京、徑詣其室、○中略 德治丁未國師赴于相州住建長、師乃參隨、○中略 師意伏望賜一言、近擬歸故都、莫惜尊意、以爲大幸耳、國師援筆自書、其後云、儞既明投暗合、吾不知、儞吾宗到儞大立去、只是二十年長養使人知此證明矣、爲妙超禪人書、巨福山南浦紹明、延慶戊申臘月、國師示滅、心喪既畢、歸京而卜居於洛水東、○中略 不幾而去雲居、徙居城北紫野、不立佛殿、唯樹法堂、○中略 數年穿有爲檀越外護者、一旦萩原法皇、○花園 聞其風而召入內、上遣中使告師、而欲披道服、而除一重坐席談話、師再三乞著袈裟而對坐、一々許之、帝勅云、佛法不思議、與王法對坐、師奏云、王法不思議、與佛法對坐、上動龍顏、一日上勅問云、不與万法爲侶者、是什麽人、師搖手中扇子云、皇風永扇、一日面有勅云、朕欲以大德寺爲朝廷第一祈禱處、去師受命而云、唯々、後醍醐天皇卽位、如前所勅、禮

堂塔

敬彌敎、龍恩益渥、

〔山州名跡志　七愛宕郡〕龍寶山大德寺　在今宮南　總門（東向）　山門（南向）　額　金毛閣（橫額）

佛殿（南向）　本尊　釋迦佛（坐像、四尺餘、）　脇壇（東）梵天王　帝釋天王（共坐像、長二尺五寸許、）　同（西）達磨像（左）

臨濟（右）　百丈（共坐像、）　開山像（臨濟東、坐像、）此外、安虛堂大磨等代々牌、

法堂　在佛殿北、南面、　經藏　在佛殿東、西面、安傅大士二童子、

〔續史愚抄　後花園〕享德二年八月二日丙戌、紫野大德寺火、（如是院年代）

〔大德寺文書　二〕大德禪寺者、宗派無盡而祖風相承也、爰混兵戈之塵裏、改梵宇之古跡、宜遂不日經營之造功、奉新有道太平之聖運者、綸命如此、仍執達如件、

文明五年六月十九日　　左少辨（花押）

當寺衆僧中

〔宗長手記〕紫野大德寺山門造營の事門徒、老僧、祖心禪師、越前一乘深嶽、末期に京都へ乘物むかへにて、急ぎ罷下るべきよしありて、三月（大永三年）十五日に、一乘に下著、朝倉太郎左衞門敎景、造營の事申屆べきよし有て、申屆侍り、ほどもなくて祖心遠行後罷上、則駿河へ下りて、翌年罷上りしに、眞珠庵より、此造營の事、大切なりがたく、先うちをくべき書狀有之、長阿奉加の用意も、薪妙勝寺總門修造の出錢五十貫、又山門の事は、無覺悟の處に、眞珠庵宿所へ入來有て、寺の衆議如此し、越前へ罷下、奉加の事再興すべきよし有し、敎景にも、此修造うちをかるゝ事、さたしつれば、いかゞといなびつれど、猶衆議のさりがたきにより罷下り、敎景五万疋、其外法眷二万疋餘、申調つれど、今に京著せずとなむ、眞珠庵用捨今はげにもとこそ覺え侍れ、長阿奉加、何ならぬ物沽却、當年迄、凡三万疋におよび侍り、寺木四郎左衞門とて、京にありしが、在國年來、異他知音により、是は長阿奉加の合力とて、去年夏四月まで、三万疋寺納、修功あらば、猶寺納申すべきなどゝ書狀あり、

〔朝野紀事 四〕永祿十二年十一月、岐阜侯（織田信長）入二京師一、將ㇾ修二理大德寺一、有二一僧一諫ㇾ之曰、君侯何不ㇾ欲ㇾ修二理皇居之破壞一、而欲ㇾ修二理一禪院一耶、皇居之荒廢也久矣、信長曰、孤忘ㇾ之、迺修二理皇居一、

〔大德寺文書 一〕大德禪寺、爲二御祈願所一、禪徒等令ㇾ凝二丹誠於無貳一、可ㇾ祈二寶祚於億兆一者、新院（花園）御氣色如ㇾ此、執達如ㇾ件、

正中二年二月廿九日　　俊光

宗峯上人御房

○按ズルニ、本書端書ニ持明院殿新院院宣御祈願所事トアリ、

〔大德寺文書 一〕大德禪寺者、宜ㇾ爲二本朝無雙之禪苑一、安二棲千衆一、令ㇾ祝二萬年一、門弟相承、不ㇾ許二他門住一、不二是偏挾之情一、爲ㇾ重二法流一、殊染二宸翰一、貽二言於龍華一了、

元弘三年八月廿四日

宗峯國師禪室

〔正法山誌 四〕南禪寺、大德寺、紫衣位次相論之時、南禪寺訴狀之寫、

夫南禪寺者、以二龜山法皇勅詔一、被ㇾ成二御建立一、勅願所之事、御崇仰異二于他一、於二宗門之位次一者、天下第一紫衣之濫觴也、大德寺者、元來位次十刹也、雖ㇾ然後醍醐帝、被ㇾ准二紫衣一之時、宜ㇾ相二並南禪第一之上刹一之御綸旨也、然處今度大德寺與二南禪寺一、位次相論之儀、併相二背後醍醐帝御綸旨一者、甚以無二其謂一、所詮任二先規之旨一、南禪寺之位次、彌以可ㇾ爲二天下第一紫衣之上一者也、

天正廿年九月日

〔正法山誌 五〕參內殊他

大德妙心參內之禮式、逈殊二于他一矣、蓋依二華園帝、崇二敬大燈國師一之故事一也、近來甘露寺方長、造二禁殿參內之圖一、送二于妙心一、令二一依ㇾ此、去二御座上壇前黑緣（非二黑塗緣一）六尺一、蓋昔來妙心參內人、到二御座上壇前黑緣一、

寺領

寺制

禮揖、時雙手當黑緣、大德雙手安黑緣上、與天顏相去僅六尺許、

元祿五年、江府濟松寺湘山和尙、再住于妙心、及參內、又到黑緣、自此例復舊規、

〔大德寺文書 一〕左辨官下龍寶山大德禪寺

應永爲一圓不輸寺領、停止國司守護使幷役夫工米諸役、信濃國伴野庄、下總國遠山方御厨、播磨國浦上庄、同小宅三職方、同三方西鄕、紀伊國高家庄等事、

右得彼寺住持沙門妙超今月日奏狀偁、皇帝陛下、伏乞、儵蒙宜慈賜之官符、妙超不勝幸願、所謂當寺不臺爲尋常聖運廓開之梵宇、寶祚萬歲之勝槩也、因玆寺冠五山、位爲上藍、而令法久住、利濟億劫、偏以食輪爲最、昔日吾佛以佛法付囑國王大臣有力檀越、實是所有以也、妙超專要信州伴野庄、下總國遠山方御厨、播州浦上庄、同小宅三職方、同三方西鄕、紀州高家庄四箇村等、各停止國司守護使幷役夫工米諸役、爲一圓不輸之寺領、至未來際無轉變儀、須資僧衆止住、早被下公據、備將來龜鑑、然則王法與佛法永昌、皇風與祖風鎭扇者、權中納言藤原朝臣公泰宣、奉勅依請者、寺宜承知依宜行之

建武元年八月廿一日　　大史小槻宿禰花押

右中辨藤原朝臣花押

〔寺鑑下〕禪宗濟家大德寺派　龍寶山　山城紫野　大德寺

御朱印　高貳千拾壹石餘

〔寺院條目 一〕大德寺諸法度

一僧職轉位、幷佛事勤行等、可爲如先規寺法等事、

一參禪修行、就善知識、三十年費綿密工夫、千七百則話頭了畢之上、遍歷諸老門、晉遂請益、眞諦俗諦、成就出世、衆望之時、以諸知識之連署、於被言上者、開堂入院可許、近年猥申下綸帖、或僧臘不高、或修行未熟之衆徒、令出世、啻非汚官寺、蒙衆人嘲、甚違于佛制、向後有其企者、永可追却其身事、

寺職

一新院建立之時、申降綸帖、塔頭披露先規也、然近年爲私稱寺號院號事、自然自由之至也、向後令停止事、

一常住領、諸塔頭領、今度相改、別紙錄之、永可有收納事、

一諸院各塔主、如先規可爲輪番、但雖爲其門派、或若輩、或ハ不器用之輩、可除輪番事、

右條々、爲寺法相續、依相定如件、

元和元乙卯年七月日　御朱印

〔東武實錄二十七〕寛永六年七月十四日

大德寺僧臘轉位諸法度ノ事、御尋ニ依テ、芳春院、南宗寺、龍光院ヨリ書キ上ルノ趣、

古相國樣御下知、大德寺諸法度五箇條、〇中略

新院建立之時、申シ降ス綸旨之事、

右當寺ニハ、開山以來、寺ヲ建候ヲ以、綸旨院號、寺號ヲ付申ス事無先例候、綸旨ナドハ、申降モ被成下事モ、加樣ノ儀ニハ、先例ノ入申ス儀ト承リ候間、新儀ノ綸旨ヲ申上候儀、難調候カ、是ハ院ト不申候トモ、庵ト申テ成トモ、可有之候間、御法度相背儀御座有間敷候、

一寺領之事、如御書出候、

一塔頭輪番之事、是又如御書出無相違候、

右所申無餘儀思召候者、三百餘年仕來候、如前々入院開堂執行申樣、御分別所仰候也、

芳春院　玉室
南宗寺　澤庵
龍光院　江月

〔親長卿記〕文明六年二月十五日、大德寺住持職事、一〇休〇猶〇藏〇主〇奏聞勅許、　十六日、早旦退出、大德寺綸旨、

令書元長遺寺家了、

〔本朝高僧傳 四十二 淨禪〕京兆大德寺沙門宗純傳

釋宗純、字一休、號狂雲子、母藤氏、南朝簪纓之女、爲後小松帝愛幸、逮其有娠、所譖后宮、出產民間、純僅六歲、投安國像外鑑禪師爲童子、○中略文明六年春、同門耆宿捧勅黃來、請視篆大德、純作二偈謝恩、自誓終不住、但賜鳳書素袍耳、七年在薪之虎丘、門人作壽塔、純牓曰慈楊、作頌示衆、十三年十月初示疾、十一月二十一日、就座書偈曰、須彌南畔、誰會我禪、虛堂來也、不直半錢、瞑目而化、壽八十八、門人舁全身座于慈楊之塔、純憤當時不會祖意、而濫主大法者、尋常混跡、不拘威儀、巡行城邑聚落、論誘緇白、吹尺八、腰木劍、賦偈頌詠和歌、頗恣其言、如風狂然、侍華叟病、手自雪穢、又大德火後、勸化四方、純建法堂、慨龍翔寺頹廢、勠力募緣、還復舊觀、是豈狂也哉、偏大信根之所作矣、平生偈語、門人編輯曰狂雲集、盛行于世、

〔集古文書 五十三〕一休和尙身後法度書 京都大德寺眞珠庵藏

老僧身後、門弟子中、或居山林樹下、或入酒肆婬坊、說禪說道而有爲人開口之輩者、是佛法之盜賊、我門之怨敵也、一盲引百盲之間、老拙還可蒙先師之罰事也、一箇不可有印證者、縱又雖不爲人、而道我會佛法者、告外護官人、速可被加降伏、是老僧身後之忠節也、念之々々

前住紫野龍寶山大德禪寺一休叟　印

書以與睦知客

子院

〔雍州府志 四寺院〕愛宕郡　大德寺 ○中略 天瑞寺、豐臣秀吉公之母公、大政所墳墓之所有也、大光院、大和大納言秀長卿之寺、而始在伊賀國、爾後移于斯寺中、眞珠庵、有一休像、大川院之假山、東山殿同朋相阿彌之所作、而始在室町家臣水淵氏之家園、爾後移斯庭也、

〔都名所圖會 六〕龍寶山大德寺 ○中略

眞珠庵は、一休和尙、此所に居住し給ひし也眞珠庵と、一休の筆を染給ひし額あり、

〔總見院文書〕新紫野天正寺、敷地境內、東西百間付二紫野一間、可レ爲レ林、南北百、貳拾間幷船岡山之事、至二于盡未來際一令二寄進一訖、專佛法紹隆、可レ被レ率レ祈二天下太平一者也、仍狀如レ件、

天正拾貳年十月四日　秀吉花押

古溪和尙

〔總見院文書〕爲二總見院殿贈大相國一品泰巖大居士〇織田信長御位牌所建立寄進物一渡申分之事、

一御太刀一腰不動國行　總見院殿永代可レ爲二御莅割一

一銀子千枚　總見院御作事方　一銀子廿五枚　總見院殿御卵塔之用

一御懸盤　五膳　一御呉器　七ッ入付御皿十五御再進、鉢同杓子御箸一膳、

右御紋桐、金銀具有レ之、總梨地、

一銀子百卅五枚　米五百石充

右田地五十石買得之事、內卅石者、總見院殿每日朝暮御靈供田之事、付本膳、御菜五ッ、御汁壹ッ、二之御膳御汁壹ッ、御菜三ッ、但御名日朝者五之膳、晚者三之膳可レ被レ備事、

一一日下行米九枡充、內三枡朝暮之御膳方

殘六枡有レ之、衆僧朝暮一人四合充、然者三十日衆僧十五人之飯米有レ之、　合米貳石七斗、

右總見院殿御膳長老齋非時、總幷十二ヶ月米卅貳石四斗也、

一米廿石、是者總見院所々御修理方之用、

一壹万貫殘錢　千四百貫文、總見院殿方丈之繪、幷疊、其外萬入目之用ニ可レ被二相立一候、

右渡申所如レ件

天正拾年壬午拾月十七日　羽柴筑前守秀吉花押

總見院

〔さか衣（木下勝俊）〕故關白おほきおとゞ（○豐臣秀吉）わかくは、信長公につかうまつり玉へりしころ、明智のなにがしとやらんいひけんおこのもの、おほけなきこゝろつきて、はかりうしなひたてまつりつ、（○中略）さて御寺いかめしうつくりみがき、御封あまたよせらる、そうけんゐんといふめり、

〔山城名勝志（十一下愛宕郡）〕德禪寺（元在二大德寺前地一、今爲二塔頭一、）

〔本朝高僧傳（三十一淨禪）〕京兆大德寺沙門義亨傳

釋義亨、號二徹翁一、世姓源氏、（○中略）亨就二寺（○大德）前一別開二一寺一、鑿レ池疊レ石、宛有二塵外之風致一、牓曰二德禪一、貞治六年秋、大將軍義詮源公、奏二朝廷一、乞三大德、德禪兩寺遞代、皆俾二亨之兒孫甲乙住持一、（○中略）投レ筆而化、實應安二年五月十五日也、世齡七十又五、法臘五十又六、茶毘奉レ骨、塔二于德禪一、勅諡二大祖正眼禪師一、

名稱　所在　創建

雲林院 念佛寺 附入

雲林寺ハ、原ト仁明天皇ノ皇子常康親王ノ舊居ニシテ、陽成天皇ノ元慶年中ニ、親王ノ御願ニヨリ、遍昭僧正ノ建立スル所ナリ、元慶寺ノ別院ニシテ、天台宗ニ屬シ、觀音像ヲ本尊トス、今廢寺ニシテ舊地ハ、山城國愛宕郡ニ在リ、

念佛寺ハ雲林院內ニ在リ、花山天皇ノ寬和年中ノ建立ニシテ、同ジク廢寺タリ、本尊ノ阿彌陀佛ハ傳敎大師ノ作ナリト云フ、

〔拾芥抄（下本諸寺）〕雲林院（常康親王遺二遍昭僧正一、寬平在二行幸一、）

〔山城名勝志（十一下愛宕郡）〕雲林寺（大德寺巽、雲林院ウチイ云所舊跡也、堂跡猶殘、土人云、本尊觀音像、今在二醍醐成身院一、）

〔諸寺略記〕一雲林院者、陽成院御宇元慶中遍昭僧正建立、常康親王舊居也云々、

或書云、仁明天皇第七皇子居、天皇昇霞之後、出家付屬昭僧、其門跡相承于今不絶云々、

〔三代實錄四十六光孝〕元慶八年九月十日丁卯、權僧正法印大和尚位遍照奏言、雲林院者、故無品常康親王之舊居也、親王出家爲沙門、貞觀十一年二月十六日、以此院付囑遍照曰、深草天皇〇仁明賜此居之、天皇登遐、常康落髮昊天罔極、德猶難報恩、欲永爲精舍令學天台之教、伏思、元慶寺永置年分度僧三人、傳天台之法、行試度之道、請以爲元慶寺別院、成親王之心願矣、但院中雜事、擇遍照門徒之堪幹事者、令其勾當、勅依請聽之、

〔扶桑略記二十六村上〕應和三年三月十九日辛未、有雲林院塔供養會矣、行幸彼寺、多寶塔一基安置五佛像、飾金之鐸、待曉風而常鳴、承露之盤、非秋日以永映、便開支提之會、三身歸心、正驚羅漢之僧、百口應請、鵝王之威力、遠任遍法界之風聲、雁塔之功能、遙分利衆生之月影、已上

〔本朝文粹十三願文〕村上天皇供養雲林院御塔願文　江納言維時

夫雲林院者、松篁有心之地、香花不朽之場也、草創之功、雖在宿昔興隆之思、猶切當今、此院堂舍鐘樓、皆悉具足、其所無者塔婆而已、風聞造塔善根、流傳貝葉、豈唯果報之殊勝、兼復道場之莊嚴也、仍心中發願後、新結構多寶塔一基、安置五佛像、飾金之鐸、待曉風而常鳴、承露之盤、非秋日以永映、便開支提之會、三身歸心、正驚羅漢之僧、百口應請、內典云、若人作樂供養三寶、所得功德、無量無邊不思議、是故別命伶倫、整理音樂、兼令舞人盡其妙曲、嗟呼落花飄颻之光、專如飜袖、垂柳婆娑之態、雖及轉腰、抑亦往年、擇此地之閑敞、修法華三昧、半行半座、累日累年、今令移舊造普賢菩薩像、舊書妙法蓮華經於寶塔之中、至行三昧、於此致勤、觀六牙之白象、證明無惑、讀一乘之法輪、觀念不變、法會勝利、普將迴施、天神地祇之不同、共向惠日、聖靈寃靈之相異、盡住法雲、華夷銷塵、盡感四海之清謐、朝野卷霧、皆戴三光之精明、仰願玉臺之中、彌添王德、金殿之上、又照金輪、黃河澄波、再計五百之歲、紅桃結子、三期一千之秋、乃至鵝王威力、遠任遍法界之風聲、雁塔功能、遙分利衆生之月影、敬白、

雜纂

應和三年三月十九日

〔山槐記〕治承四年三月廿三日乙亥、今日猶禮二百塔殘廿七基一、辰終剋先禮二春日一、○中略次向二雲林院知足一、向二一條堀川邊一、

〔扶桑略記二十五村上〕天曆七年二月十八日戊辰、詔於二雲林院一始二奉造一御願小多寶塔八基中佛像一、

〔山城名勝志十一愛宕郡下〕菩提講寺菩提講在二大德寺境內一云々

大德寺什物之草案云、菩提講敷地證文云、雲林院邊菩提講東塔中、北寄貳拾丈、爲二寺院敷地一預二御寄附一候了、但此地乾角、御先祖噴墓也、不レ可二奉レ堀二移他所一者也云々、莊二嚴墳墓一可レ奉レ訪二彼御菩提一也、元亨四年五月六日　比丘妙超判

〔新古今和歌集二十釋教〕五月ばかりに、雲林院の菩提講にまうでゝよみ侍ける、　肥後

紫の雲の林を見わたせば法にあふちの花さきにけり

〔大鏡一〕さいつごろ、雲林院のぼだいかうにまうでゝ侍りしかば、れいの人よりは、こよなくとしおひ、うたてげなるおきなふたり、をむなときあひて、おなじところにゐぬめり、

〔今昔物語十五〕始二雲林院菩提講一聖人往生語第廿二

今昔、雲林院ト云フ所ニ、菩提講ヲ始メ行ヒケル聖人有ケリ、本ハ鎭西ノ人也、極タル盜人也ケレバ、被レ捕レテ獄ニ七度被レ禁タリケルニ、七度ト云フ度捕テ撿非違使共集テ各議シテ云ク、此盜人、一度獄ニ被レ禁タラムニ人トシテ吉事ニ非ズ、況ヤ七度マデ獄ニ被レ禁ム事、世ニ難レ有ク極タル公ノ御敵也、然レバ此度ハ其足ヲ切テムト定メテ、足ヲ切ラムト爲ニ、川原ニ將行テ、既ニ足ヲ切ラムト爲ル時ニ、世□□□ト云フ相人有リ、人ノ形ヲ見テ善惡ヲ相スルニ、一事トシテ違フ事无カリケリ、而ルニ其相人其盜人ノ足切ラムト爲ル所ヲ過ルニ、人多ク集レルヲ見テ寄テ見ルニ、人ノ足ヲ切ラムトス、相人此ノ盜人ヲ見テ切ル者ニ向テ云ク、此ノ人我レニ免ジテ足ヲ切ルコト

无レト、〇中略非違ノ別當□□□□ト云フ人ニ此ノ事ヲ申スニ、然バ免追ヒ棄テヨト有ケレバ、足ヲ不切ズシテ追ヒ棄テケリ、其後此ノ盗人深ク道心ヲ發テ、忽ニ髻ヲ切テ法師ト成ヌ、日夜ニ彌陀ノ念佛ヲ唱テ、懃ニ極樂ニ生レムト願ヒケル程ニ、雲林院ニ住シテ此ノ菩提講ヲ始メ置ケル也、

〇

〔山城名勝志十一下愛宕郡〕〇念佛寺雲林院内

德治三年勸進詞云、勸進沙門願蓮敬白、殊十方檀那之芳恩を蒙て、雲林院の内に念佛寺を修造せむとおもふ事、右雲林院は、歷代の草創、調御の蓮宮也、淳和の明主天長のむかしは、翠輦なびきて幸路の跡をのこす、宇多の聖皇寬平の春は、鸞輿臺て、禪林の榮を開く、塔婆をいへば、村上の勅願、五佛の慈顏を安置す、地勢をおもへば、城北の勝形四神の具足にかなへり云々、寬和暦におよびて、一の梵宇をひらき、念佛寺となづけ、安置の本尊は、傳敎大師の造、彌陀佛供養の唱導、楞嚴先德云々、其より後、毎月朔の期をむかへて、菩提講の勤いたす、彼式文は惠心の製作云々、去建治のころ、比丘尼正信あまねく上下をすゝめて、聊修造をいたす、不斷念佛の梵行をみす、下略

德治三年四月日　沙門願蓮

古事類苑

宗教部四十八

佛教四十八

三鈷寺

名稱所在創建

三鈷寺ハ、山城國乙訓郡善峯寺ノ上ニ在リ、一ニ往生院ト云フ、天台ノ僧源算ノ開基ニシテ、天台、眞言、律、淨土、四宗兼學ノ地ナリ、

〔雍州府志五寺院〕乙訓郡　三鈷寺　在善峯寺之上、始號往生院、爾後依爲勅願所、忌往生之文字、以其山似三鈷形、改稱三鈷寺、源算退隱之地、而有所自刻之彌陀像、天台、眞言、律、淨土、四宗兼學之靈場、而本尊佛眼明妃之畫像也、明妃元女體、而華嚴宗亦專崇之、斯像、當寺中興、觀性法橋之所畫也、別又有往生院、或稱華臺、是則當寺僧、滅罪所也、門外石表、有不許女人并酒肉五辛妄入門內之字、是則源算之所建、而其石甚舊矣、依之則源算上人、元天台宗而持律之僧乎、其壽踰百歲而遷化、

〔山城名勝志六乙訓郡〕三鈷寺在善峯寺北七八町許、號往生院、
本尊佛眼曼荼羅當寺中興觀性法橋筆、佛眼明妃畫像、三方正面、
堂內有智者大師像、善導大師像、善惠上人像、遂生法師像、號實信房、
阿彌陀堂　鐘樓鐘銘、寬正二年、大檀越、越智義遐寄ニ進之、
西山上人緣起云、當山濫觴源算承保元年正月一日、善峯寺ノ西北五六町ニ一靈地ヲ點ジテ、小室ヲ建立シ、身ヅカラ阿彌陀如來ノ像一體ヲ刻テ、本尊トシテ寵居セラレケリ、北尾往生院トゾ名付給ヒケル、嘉承二年三月二十九日入滅シ給フ、百八歲云云、　爰ニ觀性法橋、應保元年當山ニ尋入、一室

ヲ建立シ、如法佛眼ノ曼茶羅、幷ニ釋迦彌陀ノ像ヲ安置云々、此往生院ヲバ、慈鎭和尙ニ讓申サレシヲ、建保之比、善惠上人ニゾ附屬シ給フ、此處ニ古クヨリ參鈷寺ノ稱號アリ、三峯並峙テ、三鈷ノ形ニ似タル故トカヤ、是モ觀性ノ時ヨリノ事ニヤ云々、其後觀性建立ノ室ニ、層級ヲ重ネ、露盤ヲクワヘテ、多寶塔トナサレケリ云云、　天台善導兩師ノ形像ヲ其上座ニ安置セラル、後ヲバ、吉祥藏ト名付テ、聖敎ヲ納云云、（○中略）

三鈷寺記略云、西山三鈷寺者、（本之號者往生院也、然依慈鎭和尙巳後爲官寺、恒祈祝寶祚延長、乃上卷數、彼題以往生院、尤似不幸者、殿上亦譏之、仍以改今之號、）善惠自建久元年迄建暦二年、居吉水之邊小坂、相從空師云云、追師鶴林、移住當山、兼帶天台、眞言、戒律、淨敎等、世呼稱四宗兼學之山、今之淨土西山流者、基個上人也、（善惠上人、姓源氏、天暦聖主皇胤、賀州刺史親季朝臣長男、）

〔鹽尻　十六〕善峯寺證空（○善惠）は、淨土西山派の祖なり、然れども其所行は、天台宗のごとく、毎日一座の供養法、及び法華梵網等を誦せし、曾て四度の義軌を慈鎭和尙に受け、受職灌頂を公圓僧正に遂しと、彼傳記にしるせり、今の淨土宗の如きにはあらず、

〔仁空置文〕定置條々

一西山參鈷寺（亦名往生院）事

當山者、師跡之本源、法流之濫觴也、祖師善慧上人、眞俗恢宏之後、寺務三人、同是祖師而受之直弟也、遊觀上人入滅以後、無住持名而送多年、先師廣慧和尙爲玄孫、初應一乘之請、備傳持之主、自爾以降、人法佛法之再興、世間出世之紹隆、難得而稱、去貞和二年、依師病患不輕、以仁空被定領業、附財器之日、當寺卽可傳持之旨、雖承嚴命、兄師示淨上人、自備州上洛、臨病席慰問、依爲門人之耆老、先被附與淨上人、彼上人、文和歸寂之剋、任先師素意讓與訖、其後住持旣三十餘年、結緣雖無所殘、師跡荷負名字、存日之程、猶難棄捨者也、逝水以後、圓慧、正叡兩上人之間、可令相續之旨、欲申置之處、兩人共歸寂、無常之迅速、前後之相違、悲而有餘、爰照惠大德者、故雲禪大僧都、（遁世號示觀坊、）入室弟子

也、早世之後、事仕先師和尙、和向歸寂以後、隨從仁聖道、淨土學功積年、尤相當傳持仁歟、仍所令附屬也、次示鏡上人者、當寺前住示淨上人入室也、依事緣不慮經歷南山、重發菩提心、依附仁成受戒灌頂之儀、積聞法研精之功、然者未來傳持之主、可謂其人歟、

〔山州名跡志 十乙訓郡〕西山三鈷寺 在岩倉南西山上二十四五町、順路在灰谷上、坂路十五町、宗旨兼四宗、(天台、眞言、律、淨土)

華臺寺(○三鈷寺○別院也) 在同坂路內、人憩上二町許左、今草庵南向、 本尊 阿彌陀佛(立像尺餘)新作、 此所ハ善惠上人塔所也、弟子實信房蓮生(字津宮賴綱入道)再建所也、荒廢年久ク、今纔一草庵也、(○中略)

善惠上人塔 北方東向 銘 西山中興證空善惠上人(寶治元己未年十一月二十六日)

蓮生法師塔 南方東向 銘 實信房蓮生(正元元己未年十一月十二日○中略)

女人及酒肉五辛制碑 在華臺西往生院門前、是ヨリ三鈷寺ノ界內也、右 銘 (?)不許女人魚肉五辛等(永保元甲寅年三月廿九日)

往生院 在華臺上、南向 本尊 阿彌陀佛(坐像、三尺餘)作源算上人(一刀三禮)脇士觀音勢至 新作(○中略)

三鈷寺佛殿(東向)樓門 在佛殿前、安二天像、(長六尺計)作不考、同門內在石檀到堂、 本尊 佛眼(畫圖坐像、二尺)六七寸計、安廚子、筆者 觀性法橋 廚子外安壇上二佛、 左釋迦佛、(頂寶冠、持鉢、坐像二尺二三寸、)右、阿彌陀、(坐像、長同左、)

作共惠心僧都、(○中略)

方丈(東向) 在堂北、 本尊 寶冠阿彌陀佛(○中略)

鎭守社 在佛殿北南向、所祭 山王 春日 天滿神

閼伽井 在樓門內石階左、 源算和尙ノ設ル處也、旱歲トイヘドモ無枯、

〔山城名勝志 六乙訓郡〕三鈷寺(○中略)

雜々文書云、北尾往生院者、故聖人逝去ノ後、成荒廢之地、無一有情、爰實仁先年之比、住此處、相語永

尊大德、令建立堂舍、守護山內、令生樹木、而中納言法橋御房、依有御要、永以所進上也、敢不可有他妨之狀如件、

仁安肆年貳月壹日　大法師賢仁判

〔三鈷寺文書〕西山三鈷寺之事、及破壞之由、被歎思食候、爲門徒末寺中、可加隨分修造之由、天氣所候也、仍執達如件、

天正廿年九月十三日　左中辨花押

三鈷寺門徒并末寺中

寺領

〔三鈷寺文書〕西山參鈷寺領近江國坂田郡小野庄梵網經供料田十二町事、任當知行之旨、領掌不可有相違者、天氣所候也、仍執達如件、

文明八年二月十三日　右中將判同上

善空上人御房、

寺職

〔三鈷寺文書〕三鈷寺依爲住持、任先例、御衣被下畢、如舊例、律。。衣用之、宜著令參內、又伏見般舟三昧院爲開山住持、宜令入院者、依天氣執達如件、

文明十一年十二月三日　右中辨花押

三鈷寺住持善空上人

御房

雜載

〔山槐記〕治承三年四月廿七日乙亥刻卯、寅（不乘燭、日未出、）向善峯別所、（西山、宮大原野西南、去彼社二許里、山半樹見所也、）女房爲求終焉地所向也、中略○山中乘輿、經善峯本堂前、至于件堂、中略○西行有路、至于五六町、有一草庵、故美作前司顯□女房遁世有此所、齡七十有餘之人也、著此房、于時辰終刻、女房聊□法橋觀性（顯能子、母故爲隆頼女、）。。被養育彼尼公、件法橋遁世住此山、隨又尼公□□法橋房、去此庵室五六町、在西北山上、號往生院、女人不

登二此坂上一口興向二件所一談二法橋一有二成約主等一件持佛堂西南方岸上有二巖堀一法橋立二草庵一云々、本房偏仙洞也、然而猶餘事相交、仍時々无云可籠此口口被レ命、其後岸下有二三間庵堂一故信乃入道（少納言入道信西子）入滅所也、臨終口口云々、歴覽之後、歸二尼公房一著レ饌、侍男共又開二破子一法橋又來二此所一口口相共示可二付屬一此房於女房一之由有二約束一午剋出二件所一未剋歸二三條亭一

〔拾玉集 五〕建久三年八月、觀性法橋舊跡の西山往生院にまかりて、如法經かくとて、歌あまたよみて、人々の許へ遣なかに、殿下へ申、

山寺の秋はむかしにかはらねど主なき色は心にぞくむ

善峯寺

善峯寺ハ、山城國乙訓郡小鹽村ニ在リ、僧源算ノ創ムル所ナリ、始メ良峯ト稱セシヲ、後善峯ニ改ム、

〔伊呂波字類抄 與諸寺〕善峯寺（在二山城國山崎邊一本名阿知坂也、今改二名善峯山一是則流二布諸善事行一諸慰莫作之歟故也、本願建立沙門源算、丹後守大中臣忠律男、寛弘二年造レ之、八尺千手觀音像之由見二于緣起文一）

〔拾芥抄 下本 諸寺〕三十三觀音

乙訓良峯寺（山城、八尺千手、源算上人、）

〔雍州府志 五 寺院〕乙訓郡　善峯寺　在二小鹽山之上一號二西山一後一條院長元三年、源算開レ基、而本尊千手觀音、長八尺、洛陽安居院仁弘法師之所レ作、而與二京師行圓寺觀音一同木也、是亦西國三十三所之隨一也、今天台宗僧守レ之、中古慈鎮和尚、道覺法親王、慈道法親王、尊圓法親王、道玄大僧正等住二斯山一慈鎮和尚以下四門主、時號二西山宮一源算上人像在二昭堂一此處則所レ葬二上人一而所二自建一之塔存矣、堂後有二慈鎮

創建

和尚住庵之跡、今稱御所屋敷、外有慈鎭和尙、善惠上人、及宇都宮入道實信房之塔也、善惠上人、淨土西山派之始祖、而暫住斯處、著淨土曼陀羅註記十卷、今行于世、爾後住粟生光明寺、又有阿彌陀堂、本尊慈覺所刻也、有多寶塔鐘樓山門等、昔日開斯山時、分三尾四谷、建寺院五十餘箇所、應仁之兵火悉炎上、寺產亦分散、今僅七坊存而已、坂間有阿智坂明神社、是則此山鎭護之神也、千載集、有前大納言藤爲氏卿、訪外祖父宇都宮入道蓮生舊跡之歌、凡岩倉山金藏寺、小鹽山十輪寺、此寺三所通用也、

〔山城名勝志六乙訓郡〕良峯寺（在小鹽村西山半里許、延曆寺別院也、拾芥抄云、山城乙訓郡八尺千手、源算上人、西國三十三所順禮一也、往昔分三尾四谷、而寺院在五十餘箇所、罹應仁兵火、而今僅存七坊、）

本堂（千手）阿彌陀堂　多寶塔　開山堂（在塔北）　鐘樓　樓門　鎭守社（號阿知坂明神、坐坂中間、）

〔和漢三才圖會七十二末山城〕良峯寺　王西山小鹽村西（四宗兼學）　本尊十一面觀音（三尺立像）

後朱雀院長久三年、源算上人開基、中古慈鎭和尙、尊圓法親王等住于此、（延曆寺別院也）其後、淨土宗西山派始祖善惠上人在于此、昔有五十餘坊、今僅七坊、　又有千手觀音（長八尺）順禮二十番札所

〔西山善峯寺略緣記〕西國卄番西山善峯寺略緣記

夫當山伽藍の草創は、人王六十八代後一條院の御宇長元二年、惠心僧都の上足源算上人の開基なり、本尊千手觀世音菩薩（御長八尺）は、安居院の仁弘法師の御作なり、抑源算上人は因州の產にして、壯年の時叡嶽に登り、慧心僧都を師とし事へ、博く顯密の敎法を學給へり、嘗て悲母の厚恩を報じ奉り、且萬民を利濟せんが爲、幽邃の靈地を求て伽藍を建立し、顯密の敎を傳へ弘めんとおぼして、年月を送らせ給へける、○中略つら〳〵本尊の御衣木の由來を尋ぬれば、上古賀茂の社地田なりしとき、植ける苗一夜に變じて槻の木となれり、夜ごとに光明を放ちて千手の神呪を誦する聲しければ、皆人怪みて、敢て、斧斤を入ることなく、年を經てぞありける、爰に安居院の仁弘法師、此靈木を得て、千手觀音の、尊像を彫刻し奉り、洛東の鷲尾寺に安置せられける、後朱雀院靈夢

堂塔

を感じさせ玉ひて、長久三年三月十八日勅宣ありて、當山に是を移させ、永く寶祚延長を祈らせ給ひぬ、　後三條院の皇后御懷妊の時、深く此大悲の像に祈らせ給へば御惱みも靜まらせ給ひ、男親王を降誕ましく〳〵ぬ、白河院是なり、因て帝そこばくの庄園を賜り、堂舍の御建立ありて、尊崇彌增玉ひける、　治曆四年天下大に旱魃す、上人四民の悲を憂ひて、大悲の像に祈らせ給へば、卽壇場の側に龍王形を現し、甘雨忽に此峯より降初て、遠近潤をなせり、萬民の歡たゞならず、天聽にも達しければ、叡感斜ならずして、卽良峯の勅額を下し賜りぬ、（後に善峯とあらたむ）　上人佛舍利三顆所持し給ふ、或時一粒失給ひぬ、其後上人の左の肩に疣生ず、三年を過て寬治年中、舍利供養の座席におゐて、疣潰て中より先に失る舍利出給ふ、此を疣の舍利といふ、常に阿彌陀堂に安置す、上人の德行、且諸の奇瑞、朝野に聞へて、貴賤普く渴仰し奉る、凡上人百十七歲の壽を保給へば、當山を開き給ひしよりも、七十餘の星霜を積ておはしければ、法侶いよ〳〵隆にして、五十餘有の僧坊甍をつらね、十餘ヶ所の佛閣光りを競て最隆なりき、　後鳥羽院文治の頃觀性法橋當山に住し給ふ、賴朝公の請により、鶴岡八幡宮大塔供養の導師に赴かせける、賴朝公甚崇敬し玉ひて、旅館に就て數々法要を問給へり、歸山後廿八部執金剛神を建立せらるべき御約諾ありき、卽南都の運慶に仰せて彫刻なさしめ給ふ、卽本尊の左右に安置ましますは是なり、

〔元亨釋書（十四檀興）〕釋源算、因州人、母娠時、勞苦異常、及誕以爲不祥子、棄之路傍、牛馬不踐、鳥獸不害、三日無少傷、隣人怪之收而育之、及總角上叡山、經年剃落受戒、壯歲還俗、丁母喪不任哀毀、返本山登壇重受、時年四十五、後至西山良峯、枕石嗽流、淸修自適、欲創道場、基址不平、岩石磊砢、難施畚鍤、算愁之、一夕夢、異僧告曰、上人莫愁、我助健夫、次夜野猪數千、鑿岩負土、翌早見之、基地坦衍、乃創蘭若、良峯有牛鳴之地者、自算始、○（中略）承德三年暮春、結定印端坐而逝、

〔山州名跡志（十乙訓郡）〕西山善峯寺　在二鈷寺巽雙　宗旨　天台　境地東面三方山、正面順路ハ小

寺領什物

鹽里ノ上ニアリ、坂路八町中間ニ七曲アリ、左ニ人憩アリ、此ヨリ樓門ニ到ニ四町坂アリ、號阿知坂、　山號善峯、麓在民村、又爲號、

坐禪石　在路傍上右方、源算上人登山始觀念坐禪處也、

樓門東向　安金剛力士像長五尺計作運慶

堂東向　本尊　千手觀音立像八尺作弘仁法師○中略

塔二重　在堂前南方　本尊　大日如來○下略

〔善峯寺文書〕足利四代内大臣義持將軍釋光院御字應永廿五年命狀

西山善峯寺領山城國散在田地敷地幷田畠山林等目錄別紙在事、早任當知行之旨、領掌不可有相違之狀如件、

應永廿五年十月五日

内大臣源朝臣花押

〔善峯寺文書〕永正五戊辰十月三日之時秀基當寺江下知

西山善峯寺領山城國田畠山林事、帶代々御判無相違地也、而灰方公文始去文安五年號荒野新田捧謀書綸旨爲本文、及訴訟間、被盡御糺明被成下知狀幷勅裁當知行之處、彼公文永正四年重押領云々、太無謂、所詮任證文等之旨、彌可被全領知之由所被仰下也、仍執達如件、

永正五年十月三日

下野守花押

散位花押

當寺雜掌

〔善峯寺文書〕當寺往代、有書畫奇物法器、及官家令告文書巨多、最可重者、屢罹兵燹而爲烏有、其剩餘者、藏于往生院、今稱三鈷寺是也、慶長始、彼此諍疆域、於是親隨絕所吾重者、亦不永遺、此遺令告文書僅二十四、見其蠹蝕者、當寺曾管領荒野新田、灰方公文能綱、信能、乘當時擾亂橫劫貫物而不納、故將

軍令告執事、故文麾下、而禁殘害、乃是知中古衰微、有妨椿者、寺供不全、而復(略)亂世時、上威德薄、悖逆終熾于下、案古呼荒野新田者、疑指灰谷、蓼平、長峯、坂本等數邑、連山下者、及楊谷間、謂之散在田地山林開土、如今廣洪者未有之、近世領上里村中百石餘地併松林、(俗名之小松林、)蓋議之古謂荒野新田者廣、而此地猶爲荒野中、今也領之、亦將過宿緣地耳、

享保八歲次癸卯十月二十六日識

〔山槐記〕治承三年四月廿七日乙卯、寅刻(不秉燭、日未出、)向善峯別所、(四山、當大原野西南、去彼社二許里、山中樹見所也、)女房爲求終焉地所向也、女房二人、共人十人許相具、○中略予車猶廻南方、於寺戸替牛、以又於大原野分路邊(參大原此山寺)口替牛、一許里、其西方車不通、○中略至于山中乘輿、經善峯本堂前、至于件堂、住侶云、號善口導千手十一面也、本願聖人、往生人也、後朱雀院御時人也、口請无口口坂本至後堂有其曲、堂前有口橋口坂致口口口有食堂、(卯酉屋也、)本堂正面向東、口石口、下留馬口口口口口南方岸上西行有路、至于五六町有一草庵、故美作前司顯口、女房遁世有此所、齡七十有餘之人也、

〔新千載和歌集十九哀傷〕弘安元年三月、藤原景綱ともなひて、西山の良峯と云ふ寺にまうで、、外祖父蓮生法師の舊跡の、花のちりけるを見て、人々三首の歌よみ侍りけるに、

前大納言爲氏

尋ねきて昔をとへば山里の花のしづくも涙なりけり

〔玉葉和歌集五秋〕よし峯に侍りける時よみ侍りける

慈道法親王

わきてなほ紅葉の色やふかゝらむ都のにしの秋の山ざと

金藏寺

名稱
所在

金藏寺ハ、山城國乙訓郡灰方村ニ在リ、僧隆豐ノ創スル所ニシテ、元正天皇ノ勅願ト稱ス、天台宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會（七十二末山城）〕金藏寺　在葛野郡西岩倉山（天台）　寺領

梶井御門跡寺務　開山隆豐和尙　四坊（古者有五十坊）

〔全國各宗本山明細帳〕天台宗　本山

金藏寺　同國（○山城國）乙訓郡灰方村

創建
堂塔

〔雍州府志（五寺院）〕乙訓郡　金藏寺　號岩倉山、天台宗也、　元正天皇之本願、而隆豐禪師之開基、賀登上人之中興也、上人入唐歸朝日、將來物多、今所存者、纔有天台大師之畫像一幅、始隆豐見紫雲在山上、則登臨之時逢異人、謂我來自日向國、栖斯邊、爾興寺則我須爲守護神、言終不見、則是神武天皇、而今向日明神是也、於玆建立此寺、號金藏寺、安置觀音像、南有阿彌陀堂、北有閼伽井、鎭守伊勢、春日、八幡三座也、又別有辨財天社、樓門二王像、安阿彌之所作也、寺中四坊、所謂西室坊、寶地院、櫻本坊、上之坊是也、西室坊有緣起、寺僧傳言、桓武帝遷都日、王城之四方擇勝地、奉納法華經、爲佛法僧三寶之庫藏、此處則西岩倉也、堂前有老松、其大四圍、枝垂地、其老幹屈曲、少見其類者也、本根中間、有寄生之櫻、其大過一圍、

〔山州名跡志（十乙訓郡）〕西岩倉山金藏寺　在同村（○灰方村）西山上登六町許、　宗旨天台　門（東向）　安金剛力士（長八尺許）　新作　堂（南向）　額　金藏寺（竪額）　本尊　十一面千手觀音（立像、六尺一寸、）　向日明神作、以楠所刻彫也、　脇士二十八部衆（立像、三尺餘、）　安本尊厨子外壇上、右內、　風神　雷神　安長押上、已上新作、

五大堂　在堂前東西向、　安五大尊、中央不動（坐像、二尺許、）　四大尊（立像、三尺許、）　已上新作

念佛堂　在本堂西東向、　本尊　阿彌陀佛（坐像、二尺許、）　作不考

隆豐禪師像（坐像、二尺許、）　安左脇壇厨子、

本尊傳　當時ハ人皇四十三代元正天皇ノ御宇、隆豐禪師ト號シテ、修學兼備ノ僧アリ、一時靈夢ニ此山ノ絶境ナルヲ見ル、時ハ養老二年ノ春也、仍テ山上ニ登レルニ、忽弓箭ヲ持スル老翁現來ス、師其體ヲアヤシミミルニ、凡人ニ異リ、近付寄テ、翁ハ何人ゾト問ヘリ、答云、吾ハ是日向國可愛山陵ヨリ移テ、此山ニ住事久シク、山ハ卽吾領スル處也、吾汝ヲ待コト久シト、卽時ニ谷川ノ上ヨリ金光アル鹿飛來リヌ、翁箭ヲ放ツニ、其箭傍ノ楠ニタツテ鹿ハ去リヌ、然シテ其箭ヲ拔ニ、箭ノ跡ヨリ金光ヲ發ス、翁指テ云、是ハ斯靈木也、冀ハ心ヲ一ニシテ千手ノ像ヲ可造ト、師件ノ奇異ヲ感ジテ言ニ應ズ、此所ニ留テ、共ニ彼木ヲ伐テ、尊像ヲ刻彫セリ、今ノ本尊是也、像成テ後、翁ノ云、此山ヲ以テ師ニ可授、此地佛閣ヲ立テ尊像ヲ安置セラルベシ、吾ハ他所ニ移リナ、永ク此山ヲ守護スベシト、箭ヲ放チ玉フニ、其箭今ノ向日山ニ留ル、遂其所ヲ居住トナシテ、永ク守護神トナル、翁ハ卽向日明神ノ化現也、（緣起）　開基隆豐禪師傳、禪師、薩州河邊郡人、父薩摩大守藤原朝臣重命、母字云小觀田、是則右大臣橘勝元女也、母夢日輪入懷、而後有娠、在胎十有三月、天智九年三月三日生焉、時卽松葉貫楠葉、其數居多吹來產屋、因此事故云小兒楠松丸、及八歲春、雖望出家、父母不許之、適乞食沙門來、僅見小兒云、不可置塵中、其後和州談峯定惠和尙、得靈夢差于宣使、遣船馬於重命所、迎取小兒憐愍養育、令讀群書、早通文義、十三歲而剃髮、名曰行善、精勤達法相玄旨、又就元興寺道昭開禪法、從龍門寺義淵構維摩會、又隨吳國智藏、受三論微旨、盛唱空宗、天平勝寶三年十月三日化、

鎭守社　在堂西東向、所祭山王權現、向日明神、

閼伽井　在堂東、

〔山城名勝志　六乙訓郡〕金藏寺（在西岩藏山、延暦寺末寺、寺稱梶井御門主、）

從京坂本村迄三里、從村至二王門、其際六七町、坂路嶮岐ナリ、又從三鈷寺山傳ニ平路アリ、此間半里許、山間ニ產瀧アリ、本堂千手觀音、堂前有巨松、大四圍許、枝垂地、貫登谷ニ岩嶋アリ、貫登上人禪坐スル處ト云、[illegible]西上人舊跡ト云、〇中略

本尊千手八尺　北阿彌陀堂　南閼伽井　不動堂　鎭守伊勢、八幡、春日、

金藏寺略緣起云、夫山州之西、巖倉山者、元正天皇之勅願所、養老二年草創也、開山者隆豐、諱行善、嚕昔出薩摩州河邊郡雙親家、入和州談岑定惠法師室剃髮、漸向壯歲、迦趣高麗、寓阿私山、歸朝又住古庵云云、一時感靈夢、當山蛉塀潛伺西山、見瑞雲起、爲之挽攫而以旋來、秀嶽穹窿、而流水潺湲、勝境如裂蓬脈、宛似靗沒羅阿私山者乎、舊昔倚疊、林木鬱密、不知所之、時有獵翁曰、備下桑遲々、禪師怪之、覺以姓名、對曰、我是自日向國來到、然而後挽弓射鹿、其箭飛中樟木而已、卽拔箭視之、忽然異香芬郁、有自鏃迹、誦千手呪聲、獵翁指楠樹曰、是靈木也、我與汝彫刻此木、造立大悲一尊否、禪師諾之、稍少時、而千手尊像、威耀顯然、願輪常轉遐方、慈雲廣覆刹土、梵相端嚴、宏相麗妙也、獵翁及去向東方、又放一箭、誓曰、以此矢之留地、欲爲吾居、覺告東村吏、有神託、仍州民營祠廟以祭之、向日明神是也、尊佛靈驗之感、漸達帝闕、弘誓深顯、叡念頻起、卽爲勅下藤武智於禪師、以內庫錢帛、令建創精藍梵宇、輪奐而嚴飾壯麗也、既安置金像、風掃山花、妙香薰晨、水濺岸根、梵香唱暮、人天敬畏、緇素瞻仰、靈驗速如影響矣、然則桓武天皇、經始三寶庫藏於平安城四維、以爲新都鎭護、我岩倉亦爲其員、加旃賜以金藏之榜云云、天平勝寶三辛卯年孟冬初三日、龍入別庵、盤居、濕崖默然而示寂、中興開山記云　賀登悲惠　常州筑波根人、三浦曾孫也、寓居比叡山、一日有不思議之感、天德二年之春、登西岩倉山云云、舊跡伽藍寶塔悉頹廢、登愁之甚深、於茲淨藏貴所、千觀來遊、而助營再興、斾金朋友、有章事者、詣闕奏達之、不日堂社佛閣復舊所云云、寬和元年入宋、永延元年十月歸吾山、正曆四年十一月、改賀登任還賀僧正、居當寺四十餘歲、不闕齋戒、壽八十一、而長保元年八月十八日入寂云云、文明二年正月十六日、爲兵火爲灰燼、唯本尊而已免其難、靈寶今纔智者大師寫照與梵磬二物而已、像者讚以德行、磬者銘以寺號、咸漢作精妙也

〔臥雲日件錄〕寬正三年七月四日、原古西堂來、○中略因話、自大原野登十八町、有西岩藏、蓋教寺有五十坊、就中峯坊連目坊冠于諸坊、當院先師曾寓於峯坊、坊主爲師構禪坐室、南邊有床、師名臥雲、又教僧

受師衣盂者多矣、

名稱
所在
創建

光明寺

光明寺ハ、山城國乙訓郡粟生村ニ在リ、淨土宗西山派ノ一本寺ニシテ、原ト幸阿彌陀佛ノ住室ニ係ル、嘉祿年中、山門ノ徒、源空ノ大谷ノ廟ヲ破壞セシニ由リ、其遺骨ヲ此ニ改葬ス、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕報國山光明寺 在西山粟生野、○中略 淨土西山流義一本寺 與永觀堂同派也

〔山州名跡志 十乙訓郡〕報國山光明寺○中略

當寺開基 熊谷入道蓮生法師、建久九年ノ草創也、光明寺號ハ、四條院ノ勅號ニシテ始勅額アリ、亂世ニ滅ス、當寺法然上人ノ廟所トナル事ハ、上人ノ滅後十六年ノ後、叡山ノ僧徒幷梗竪者定照房ト云フ者、念佛宗ノ弘通盛ナル事ヲ嫉デ、上人ノ作選擇集ヲ破シ、彈選擇集ヲ作テ、隆寬律師ノモトニ送ル、隆寬答ルニ、顯選擇集ヲ述シテ、其詞ニ汝ガ僻案ノアタラザル事ハ、暗夜ノ礫ト云云、定照憤ニ堪ズ、三塔ニ披露シテ、衆徒ノ蜂起ヲスヽメテ、圓基僧正ニ讒シ、奏聞ヲ經テ隆寬律師ヲ遠流セシメ、上人ノ墳墓ヲ破卻セント評義ス、此事露顯ノ故ニ、上人ノ徒弟悲歎シテ、上人ノ墳墓ヲ他所ニ遷スベシト、夜ニ入テ密ニ上人ノ石棺ヲ穿出シ、幷上人所持ノ影像等ヲ添テ、太秦ノ來迎房圓空ノ室ニ送ル、然シテ巳ニ其年モ暮ヌ、翌年安貞二年正月廿日ニ及テ、上人ノ石棺ヨリ數行ノ光明出現ス、圓空法師アヤシミタヅネテ、其光ヲ窺フニ、太秦ヨリ午未ノ方、粟生野ノ邊ニ及ブ、明朝ニ至テ、粟生野ニ住スル幸阿彌陀佛ノ許ニ來テ、其旨ヲ語ルニ、幸阿彌又不思議ノ靈夢ヲ感得セシヲ共ニ語レリ、頓テ此由ヲ徒弟ノ中ニ觸ルヽニ、各集會ス、相議シテ云、今年ハ上人十七回忌ニ向ヘリ、幸ニ茶毘ノ法ヲ行ベシトテ、同廿五日ノ未明ニ、太秦廣隆寺ヨリ石棺ヲ粟生野

ニ還シヌ、此ニ於テ棺蓋ヲ開シカバ、上人ノ面貌アタカモ存日ノ如シ、則同所ノ山腹ニ於テコレヲ茶毘ス、時ニ卽紫雲四方ニ滿、異香薰ズ、然シテ舍利ヲ集テ同山ニ收、塔ヲ作リ、廟堂ヲ立テ、永ク淨土門ノ爲ニ宗廟ト、彼紫雲覆シ所松樹アリ、號二紫雲松一、(已上緣起意)

〔法然上人行狀畫圖　四十二〕嵯峨にわたしをきたてまつりて、○中略翌年(安貞二年也)正月廿五日の曉更に、西山の粟生野の幸阿彌陀佛のもとに、わたしたてまつりて、茶毘をなすに、紫雲そらにみち、異香もともはなはだし、○中略かの茶毘所のあとには、堂をたて、御墓堂と號して、念佛を修す、いまの光明寺これなり、

〔圓光大師行狀畫圖翼贊(五十二寺院之餘)〕粟生野光明寺(中略)嘉祿三年ノ違乱ニ及テ、改葬ノ事ニ議定ス、サレバ安貞二年ノ正月廿五日、(先是之事傳文全同也)御棺ヲ富處ニ移シ奉ル、是去夜ニ放光ノ瑞アテ、幸阿ガ庭上ニ及ボシ給ケレバ、道弟ノ宿ダチニ相禰テ茶毘ノ葬場ト定畢ヌ、サテ彼三味院ヲ相去コト三町バカリニ、一堂ヲ營、龕前ノ法用ニ備ヘ、彌陀(行基作之)ヲ安ジテ、御棺ヲ前ニスヘ、種々ノ雜事、此ニ於テ作リ巳ヌ、今之娑婆堂ト號スル、卽是也、(中略)サテ御骨ヲ青瓷ニ收メ奉リ、三昧院ニテ七日供養シテキ、法蓮房、善惠房ノ計ヒトシテ、御骨ヲ二分トナシ、一分ヲバ門弟ノ沼ニ任セテ、各配分セシメ、一分ヲバ當寺ニ收ム、上ニ石塔ヲ營ミ、又廟堂ヲ建テ、雨露ヲ遮レリ、其後門弟ノ沙汰トシテ、一宇ノ影堂ヲ建立シ、船中ノ攝像ヲ安ジ奉ル、抑此尊像ト申ハ、上人ノ御母堂秦氏ヨリ、折ニフレタル御消息ノ積リニケルヲ、上人御形見トヤオボサレケン、收メテカセ給ケル、カクテ其反故ヲ取出テ、正信房ノ手ヲ扶助トシテ、上人御手ヅカラ張セ給ヘル、船中ノ眞影ニテゾ有ケルトカヤ、([illegible])凡上人沒後ノ瑞光ニ依テ、當山ニ茶毘シ奉リ、遺廟ノ地トナレル由、四條院聞召サレテ、叡信淺カラヌ御事ニシ給ヘリ、サテ光明寺トハ勅額セラルトゾ、

〔黑谷源空上人傳〕第十六沒後逆緣利益門

後堀川院ノ御宇、安貞元年丁亥六月二十一日ニ、比叡山ノ衆徒、一同ニ僉議スラク、專修念佛世ニ與行シテヨリ、聖道ノ諸宗習學スル人ナシ、シカレバ奏聞ヲ經テ、善導勸化ノ念佛ノ行法ヲ停廢セシムベシ、所詮、彼法門ノ興造ハ、法然房根本ナレバ、大谷ノ墳墓ヲ破却シ、源空ガ死骸ヲ取テ、鴨河ニ流スベキニサダメ奏シ申シケレバ、ツキニ勅許ヲ蒙リ、同二十二日ニ、山門ノ使者、大谷ニ下來テ廟堂ヲ破ントス、爾時、京都ノ守護修理亮平時氏、コノコトヲ洩聞テ、右兵衞尉

內藤五郎兵衛藤原盛政入道法名西佛ヲ差遣ス、盛政子息一人ヲ相具シテ、マカリムカツテ、縦公家ノ御許アリトイフトモ、子細ヲ武家ニ觸申スベキノ所ニ、左右ナク是ヲ執行ル、ノ條モトモ猥藉ナリ、ハナハダ自由ナリ、若制法ニカヽハラズバ、武家ノ成敗ニマカスベキヨシ、頻ニ禁止ストイヘドモ、山門ノ使、敢テ相隨ザリケレバ、盛政入道、高聲ニ喚デ云、醫王山王モ許玉ヘ、念佛守護ノ四天大王、龍神八部、護法天童ニ代リタテマツリテ、弟子西佛、魔緣ヲ排侍ラン、コレ定テ、天魔波旬、癡侶ニ託シ、僞テ山門三千ノ使ト號シテ、留難ヲ致ナルベシ、豈圖キヤ、戰場ノ莚ヲモテ、往生極樂ノ門出トシ、凶惡ノ輩ヲモテ、臨終知識ノ因緣トナスベシトハ、但汝等各南無阿彌陀佛ト唱ヨ、一々ニ壽命ヲ斷ベシ、顯ニハ關東ノ御家人トシテ、弓術ヲ携テ猥藉ヲ防、冥ニハ西土ノ念佛者トシテ、師恩ヲ報ジテ凶徒ヲ罰スベシト、命ヲ捨テ、馳廻ケレバ、面ヲ向人ナク、蛛ノ子ヲ散ガゴトク、皆悉逃失ケリ、宇津宮入道、假ナルニ、五六百騎ヲ催具シテ馳參ジ、廟堂ヲ守護シタテマツリテ、哀ナルカナ、昔ハ名利ノ爲ニ關東ノ將軍ニ侍衛シ、今ハ菩提ノ爲ニ西方ノ上人ヲ守護スト云ケレバ、万人此詞ヲ聞テ、皆哀ヲ催ケリ、終ニ廟墳ヲ改テ、嵯峨ノ二尊院ニ隱置ヌ、

〔百練抄後堀河十三〕安貞元年六月廿四日、山門所司已下群集大谷邊、被破却法然上人墓所、是專修念佛事、近日有山門之訴、於彼墳墓興盛之故云々、但於遺骨者、門弟等偸堀出渡他所云々、

〔立正安國論〕主人曰、○中略 其上、去元仁年中、自延曆興福兩寺、度々經奏聞、申下勅宣御敎書、法然之選擇印板、取上大講堂、爲報三世佛恩令燒失之、於法然墓所、仰付感神院犬神人令破却、其門弟隆觀、聖光、成覺、薩生等、配流遠國、其後未許御勘氣、豈未進勘狀云也、

〔光明寺文書〕法然上人遺廟光明寺、可爲淨土門根元之地、然久住持退轉、及大破之處、唯今再興被加修造、住院之條神妙者也、彌都鄙西谷末寺輩合力致助成、法事等如先規無懈怠可有執行、天氣所候也、仍執達如件、

三月〇永禄六年十日　右大辨淳光

光明寺登順上人

御房

堂塔

〔山州名跡志十乙訓郡〕報國山光明寺院號念佛三昧院　在粟生村西山下、境地東面、宗旨浄土西山流一本寺

閻魔堂　在門前左、號閻地院、門東向

堂東向　在方丈北山上、額光明寺、竪額竹裏門主筆、本尊法然上人、坐像、二尺許、自作發覺也、上人四國左遷ノ時、母儀ノ以消息等、船中ニシテ所造也、聖徳太子像　安同左脇壇、

蓮生像熊谷　安同右脇壇、

阿彌陀堂　在開山堂前東方南向、本尊阿彌陀佛、立像、六尺七寸餘、作惠心僧都、〇中略

法然上人廟　在同所西上東向、安内石塔婆、供僧不斷念佛、

蓮生塔　在同傍、石棺　在堂前、是則法然上人葬送ノ棺也、

方丈東向　在堂南、御鉢釋迦佛、立像、四尺許、作不詳、安方丈、此像靈驗無雙也、〇下略

寺領

〔寺鑑下〕浄土宗　西山派本寺紫衣　京都粟生野　光明寺

御朱印　高三拾石

〇按ズルニ、寺格ハ京都圓福寺ニ同ジ、同寺ノ條参看スベシ、

什物

〔光明寺文書〕法然房自筆影、雖有禁中、依法與上人所望、令贈之西山者也、且末代可爲結緣之由、天氣所候也、仍執達如件、

文永元年七月廿五日　右少辨經任奉

光明寺觀性上人

雜載

御房

〔元長卿記〕永正八年正月十一日、來廿五日、故法然上人三百年忌也、仍於二西岡光明寺一、如レ法念佛、從レ來十九日一執行、

名稱所在 創建沿革

乙訓寺

乙訓寺ハ、一ニ法皇寺ト稱シ、山城國乙訓郡今里ニ在リ、弘仁年中、僧空海此寺ノ別當ニ補セラレ、爾來眞言宗ニ屬セシヲ、近世南禪寺ノ聽僧之ニ居リ、一時禪寺ト爲リシコトアリシガ、今又新義眞言宗ト爲ル、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕乙訓寺 一名法皇寺。。。 在二今里村一 寺領百石
推古天皇草創、弘仁二年補二弘法於此寺別當一、推古帝一百年忌、修二曼陀羅供于玆一、其後寬平法皇爲二行宮一、故名二法皇寺一、南禪寺伯英德俊禪師居レ之、爲二禪寺一、今又眞言宗守レ之、但與二東山文殊院一、替レ地

〔國花萬葉記山城上二〕乙訓寺 洛西山在二南禪寺末院一 寺領 百石
推古天皇御願、宇多天皇再興、此故號二法皇寺一、

〔山城名勝志乙訓郡六〕乙訓寺 號二法皇寺一、在二今里村一、弘法大師堂一宇存、彌勒堂塔舊跡等、爲二藪林一、然近年本堂以下有二再興一、

〔雍州府志寺院五〕乙訓郡 法皇寺 在二今里一、弘法大師性靈集所レ載乙訓寺是也、傳言、推古天皇始建二堂一、安二置觀音像一、爾後荒廢、大師一旦來二此處一、于時八幡神現出、相共作二一像一、首則八幡神體、而肩以下大師之衣體也、右手持二獨鈷一、左手持二念珠一、是謂二身首合體之像一也、非二必謂一兩作一而已、宇多法皇再二興之一、爾來號二法皇寺一、鹿苑相國義滿公尊二崇之一、爲二大檀越一、故有二推古天皇宇多法皇幷鹿苑院之牌一、元眞言宗也、鹿苑院義滿公時、寺僧有二爭論之事一、依レ之追二放兩僧一、于時南禪寺大事院住伯英和尚爲二歸依僧一、則爲二此寺之

堂塔

寺格寺領

寺職

雜載

住職、改爲禪宗、于今屬南禪寺大寧院、俊伯英爲入唐僧、法皇寺邊有西芳寺幷潮音庵、是皆此寺自屬南禪寺、後所構也、故各爲禪宗、

〔山城名勝志 六乙訓郡〕乙訓寺○中略按南禪伯英德俊禪師六十卷中居之、從是爲禪宗、今又眞言僧守之、但東山興文殊院、昔地(中略)或云法皇寺者、在明星野西北、所謂乙訓寺也、昔推古帝肇開斯地、當於帝之一百回忌、弘法大師修曼陀羅供于茲云々、寛平法皇脫履之始爲行宮、由此更名法皇寺、

〔山州名跡志 十乙訓郡〕大慈山乙訓寺　在今里中北西　境地南面、南北二町餘、東西一町計、　宗旨眞言、派新義　古十二坊舍アリト云々、　門南向　佛殿南向　本尊弘法大師坐像、三尺計、面貌八幡神、餘大師相形、衣薄黑色、持物如常、號合體影、　脇士　左興敎大師　右聖寶尊師共坐椅子、長一尺五六寸計、　新作　安厨子外壇上、右外安聖觀音、彌勒、推古帝、寛平法皇御牌、

〔寺格帳 上新義眞言宗〕御朱印一高百石　城州　乙訓寺

右住職、本寺護持院ゟ申付、

一住職御禮、御白書院、獨禮、獻上壹束壹本、御閾之外三疊目、年頭御禮無之、

一御暇於檜之間、寺社奉行申渡、時服三拜領之、

〔弘法大師年譜 五〕弘仁二年十一月九日、勅補山城國乙訓寺別當、但先月已自高雄寺移住、

太政官符治部省

僧空海

右撿案內、太政官去十月廿七日下彼省符偁、件僧住山城國高雄山寺、而其處不便、省宜承知令住同國乙訓寺者、今被右大臣宣偁、令別當彼寺永預修造事者、省宜承知、依宣行之、寮宜承知、依件施行、

弘仁二年十一月九日已上、御傳、廣傳、要集、深賢記、長者次第、及補任、並載之、

〔日本紀略 桓武〕延曆四年九月庚申、詔曰、是日、皇太子早良親王○中略自內裏歸於東宮、即日戌時出置乙訓寺、

是後、太子不自飲食、積十餘日、遣宮內卿石川恒守等、駕船移送淡路、比至高瀬橋頭已絶、

〔水鏡 下 桓武〕此後東宮に政を預け奉給事無成にしを、安からず覺して、其隙を年比伺給つるに、よき折節にてかくしたまへつるなり、御門奈良より歸り給にき、丙戌日行幸はありて、今日は壬辰日なれば、七日と云しに歸へり給へりとぞ覺え侍る、此比はいむなど申とかや、かくて十月に東宮を乙訓寺に押籠奉十八日まで其命絶へ給ざりしかば、淡路國へ流し奉り給ひしに、山崎にて失させ給にき、

海印寺

名稱 所在

海印寺ハ、山城國乙訓郡奥海印寺村ニ在リ、僧道雄ノ開基ニシテ、文德天皇ノ勅願寺ナリ、宗派ハ眞言宗ニシテ、華嚴宗ヲ兼學ス、

創建

〔東大寺要錄 六〕海印寺 在山城國乙訓郡

右道雄僧都奏聞、文德天皇之創建也、

〔山城名勝志 六 乙訓郡〕海印寺 (號木上山寂照院、在奥海印寺村、向明神社西南一里許、寺記云、開山道雄、本尊千手觀音、從木上山樹上涌出給、有二王門、兩金剛運慶作、)

〔國花萬葉記 二上 山城〕海印寺 (眞言) 粟生の西に在り、文德天皇仁壽元年建立、弘法大師の法嗣、道雄和尚の開基なり、

〔東見記 上〕海印は、かんをむすぶ事なり、如我按指、海印發光、汝暫擧心、塵勞先起、(山谷文集、又在諸師集序)

海印の語は楞嚴經にあり、

〔雍州府志 五 寺院〕乙訓郡 海印寺 在光明寺西、在山上謂奥海印寺、在村中謂下海印寺、兩處共弘法大師之法嗣、道雄和尚之開基而眞言宗、兼傳華嚴宗、本尊觀音也、山上奥海印寺護摩堂、有不動像、楼

門有兩金剛之像、共運慶之所作也、文德實錄第三卷載、承和十四年、道雄拜律師、嘉祥三年、轉爲權少僧都、初道雄有意造寺、未得其地、夢見山城國乙訓郡木上山、其形勝稱情、則尋得所夢、奏朝營造之、名海印寺、于時善財童子、忽然現出謂、吾須爲護法神、

〔文德實錄 三〕仁壽元年六月己酉、權少僧都傳燈大法師位道雄卒、(中略)初道雄有意造寺、未得其地、夢見山城國乙訓郡木上山、形勝稱情、即尋所夢山、奏上造營、公家頗助工匠之費、有一十院、名海印寺、傳華嚴教、置年分度者二人、至今不絕、

〔元亨釋書 二慧解〕釋道雄、姓佐伯氏、(中略)雄欲創伽藍、(中略)奏起營構、官給工粮、合一十院、名曰海印寺、置。。。。華嚴敎焉、年度二人、于今不絕、

沿革

〔東大寺續要錄 九〕末寺

山城國海印寺 宗性法印院務之時被返付之、

被院宣偁、山城國海印寺者、道雄僧都之建立、嘉。。祥。。明。。時。。之。。定。。額。。也、而草創年積、花構空廢、剩近年以降、或爲口領疲力役、或入人家令相傳、以佛地物爲他用者、式律之所禁、格條之所誡也、自今以後、如元爲東。。大。。寺。。別。。院。。尊。。勝。。院。。末。。寺、早企蘭寺一宇之營作、可花嚴三昧之耕行者、院宣如此、悉之謹狀、

文永二年十一月廿二日　　左大辨雅言

謹上　尊勝院院主法印御房

奏書　民部卿法印御房云々

堂塔

〔山州名跡志 十乙訓郡〕木上山奧海印寺 號寂照院 在自村北東山下、境地西面、　宗旨　眞言　門 西向 安金剛力士、長八尺許 作運慶、

佛殿 西向　本尊　千手觀音、立像、三尺計 作弘法　四天王 立像、三尺五寸計 作不詳　安閣壇上廚子外、(中略)

奧院　在寺北　開山葬送地也

〔延喜式 主稅 二十六〕諸國出擧正稅、公廨雜稻、山城國〈○中略〉海印寺料三千束、

〔文德實錄 七〕齊衡二年九月甲戌、以伊豆國大興寺、預於定額、爲海印寺別院、大興寺者、孝子丈部富賀滿爲國家所建也、

〔三代實錄 陽成 三十八〕元慶四年十二月四日癸未、太上天皇〈○淸和〉崩於圓覺寺、〈○中略〉天皇寄事頭陀、意切經行、〈○中略〉自勝尾山歸於山城國海印寺、俄而入丹波國水尾山、定爲終焉之地、

寶積寺

寶積寺ハ、一ニ寶寺ト稱シ、山城國乙訓郡山崎ニ在リ、聖武天皇ノ勅願ニ依リ、行基ノ創建スル所ト稱ス、眞言宗ニ屬ス、

〔伊呂波字類抄 保 諸寺〕寶山寺〈寶寺、寶積寺、同寺之異名歟、山崎橋邊、西願寺北、天平年中建之、行基菩薩造立之寺歟、參河入道寂照入唐之時、於此寺爲母修八講、以靜照爲講師、此日出家之者、五百餘人、四面之輩聞來、无不流淚、〉

〔書言字考節用集 乾坤 一〕寶寺（タカラデラ）〈城州乙訓郡山崎、聖武帝本願、號補陀落山寶積寺、故土俗呼曰寶寺、〉

〔雍州府志 寺院 五〕乙訓郡　寶積寺　世所謂山崎寶寺也、號補陀落山寶積寺、聖武天皇神龜四年、依本願建立之、不動毘沙門同作也、一旦燒失後、此兩像安阿彌作之、古眞言宗僧、有十二坊、所謂閼伽井坊、東光坊、法喜坊、實相坊、雲坊、塔坊、東坊、松坊是也、今閼伽井坊、東光坊、覺昇坊、極樂坊、仙凉坊、圓隆坊、法喜坊、實相坊、雲坊、塔坊絕、覺昇坊、極樂坊、圓隆坊、仙凉坊、東坊、松坊存、隨年老爲座位、其內一人、掌諸堂一年中之諸事、是謂年預、寺產有六十石餘、曾聖德太子、請百濟佛工、令造十一面觀音、置山崎山中山寺、今寺絕、本尊觀音在本堂、太子像在傍、又有行基、弘法、慈惠之木像、每年二月十五日、七月十六日十八日、令參詣諸人見之、

〔和漢三才圖會（七十二末 山城）〕補陀落山寶積寺　山崎寶寺　寺領六十石（離宮八幡社領之内）

本尊　不動　毘沙門（行基作、燒失後、安阿彌作之）　聖武天皇神龜四年勅願開基行基菩薩　參河入道寂昭爲中興祖　古者有十二坊　二王門兩金剛（運慶湛慶作）　什物中有打出小槌

俗謂隱蓑、隱笠、打出小槌、希有重寶有之、著其蓑笠者、人目不顯、惜哉今無之、小槌打出所好物自在也、今有之、而唯名而已、又有儺之鬼面、

〔續本朝往生傳〕同（○大江）定基者、齊光卿第三子也、早遂祖業、稱爲夕郎、兼爵之後任參河守、（○中略）其後於任國所愛之妻逝去、愛不堪戀慕、早不葬斂、觀彼九相、深起道心、遂以出家（法名寂照）多年之間、修行佛法、（○中略）長德年中牒狀、申依本願可拜大宋國淸涼山之由、幸蒙可許、既以渡海進發之時、於山崎寶寺、爲母修八講、以靜照爲講師、此日出家之者五百餘人、

〔山州名跡志（十乙訓郡）〕補陀落山寶積寺（號寶寺）在觀音寺西南三町計山上、　宗旨　眞言　門（巽向）安金剛力士、（長八尺計）　作不考　堂（巽向）本尊　十一面觀音、（立像、六尺七寸、）作聖武天皇、　行基兩作、脇士（左）不動（右）毘沙門（立像六尺）作行基、（安本尊厨子外、）大黑天（立像、二尺計、安西外陣、）　三沙門像（中行基、左弘法、右慈信、安左脇壇、慈信傳載釋書卷十四、）　賓頭留像（坐像、三尺六七寸計、）作行基、大ニ古體ニシテ、於當國無比、

石塔婆（九重）在堂前、　聖武天皇塔也

鎭守社　在堂上巽向、　所祭　十九所明神　社記未考

塔（三重）在門内右方、　本尊　大日如來（坐像一尺計）　作不考　當寺開基　行基菩薩、本願聖武天皇、當寺額道風筆藏ニ收ム、　打出鎚有寶物、龍神化現シテ聖武帝所獻也、

〔寶積寺文書〕山崎寶積寺宜爲勅願所、專御祈禱者、院宣如此、仍執達如件、

嘉慶二年八月廿九日　花押

寺僧中

堂塔

寺格

名所創建

相應寺

相應寺ハ、山城國乙訓郡山崎ニ在リ、僧壹演ノ創スル所ニシテ、天台宗ニ屬ス、

〔雍州府志 五寺院〕乙訓郡　相應寺　在山崎相應和尚之開基、而天台宗也、本尊藥師像、今在草堂中、

〔山州名跡志 十乙訓郡〕相應寺　在離宮鳥居前大路南、今小堂 南向　本尊　藥師佛 坐像、一尺五六寸許、安厨子、作不詳、脇士　十二神 一尺二三寸、安厨子外、當寺初ノ地ハ、此ヨリ巽方、去ルコト十餘町ニアリ、今ノ地ハ荒廢ニ就テ移所也、○中略

〔山城名勝志 六乙訓郡〕相應寺 離宮八幡東南有小堂、是舊跡也、土人呼新堂、本尊藥師、

〔三代實錄 十三清和〕貞觀八年十月二十日辛卯、延六十僧於紫宸殿、以三日轉讀大般若經、勅、山城國乙訓郡相應寺者、元是漁商比屋之地也、往年權僧正壹演、泛水觀行橋頭、遭天暑熱、上岸風凉、有一老嫗、避舍獻地、壹演便在其中、聊作壇法、鏟平地中、得舊佛像、因緣相應、靈瑞頻現、太政大臣、歎其希有、奏建道場、卽發工夫、勿備輪、遂定寺名、以爲相應、宜賜四履、永爲寺堺、東毛橋道、南至河崖、西至作山、北至大路、

〔山州名跡志 十乙訓郡〕相應寺○中略

按ニ、相應寺ノ舊地ハ、今觀音寺ヨリ東方ナル歟、其故ハ、右四境ニ明也、云、東至橋道トハ、此橋今ハ亡シ、是卽自山崎至河內橋也、見次下、其亘リ自北至南トミエタリ、南ハ至河岸トハ、卽前ノ河岸也、北ハ至大路トハ、今ノ山崎ノ大路也、西至作山トハ、尋之、今不詳、其名ヲ絕ス、

〔三代實錄 十四清和〕貞觀九年七月十二日己酉、權僧正法師大和尙位壹演卒、壹演者右京人也、○中略壹演不定居處、去留任意、或時寄寓市肆之中、或時居止流水之涘、嘗乘扁舟、信波浮濫、到河陽橋邊、暫留住水次、爰有一老嫗、避居宅與壹演云、願建精舍住於其中、此地累代商賈之廛、遂魚鹽利之處也、壹演受

雜載

檀越之所施地、雖平欲立小堂、地中得上古朽損之佛像、形體不具、手足分折、奏聞事由於天子、有詔、令木工寮構造堂舍、賜額曰相應寺、

〔今昔物語十四〕壹演僧正誦金剛般若施靈驗語第三十四

今昔、山崎ニ相應寺ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ壹演ト云フ僧住ケリ、此レ本ハ俗也、內舍人大中臣ノ正棟トゾ云ケル、奈良ノ西ノ京ニゾ住ケル、道心發シテ出家シテ後、池邊ノ宮ト申ケル人ノ弟子トシテ唐ニ亘ル、眞言ヲ受ケ習テ法ヲ修行スル事不怠ズ、歸朝シテ後彼ノ相應寺ニ住シテ、眞言ノ行法ヲ修シ、亦日夜ニ金剛般若經ヲ讀誦ス、而ル間貴キ思エ聞エ高ク成ヌル、其ノ時ニ水尾天皇ノ御代、隼ト云フ鳥、仁壽殿ノ庇ノ上長押ニ巢ヲ咋ヘリ、天皇此レヲ驚キ恠ビ給テ、止事无キ陰陽師共ヲ召テ、此ノ事ノ吉凶ヲ被問ルヽニ、占申シテ云ク、天皇ノ重キ御愼也ト、天皇恐ヂ怖レ給テ、方々ノ御祈共有リ、然レドモ未ダ其ノ驗无キ間、彌ヨ愼ミ怖レサセ給フ事无限シ、而ル間或人奏シテ云ク、山崎ト云フ所ニ相應寺ト云フ寺有リ、其ノ寺ニ年來住シテ日夜ニ金剛般若經ヲ讀誦スル聖人有ナリ、名ヲバ壹演ト云フ、現世ノ名利ヲ離レテ、後世ノ菩提ヲ願フ者也、彼レヲ召テ令祈バ、必ズ靈驗掲焉ナラムト、天皇然レバ可召キ由ヲ被仰下テ、使ヲ遣スニ、卽チ召ノ使ニ具シテ參レリ、然レバ仁壽殿ニ召シ上テ、彼ノ隼ノ巢ヲ咋タル間ニテ、金剛般若經ヲ令轉讀ム、四五卷許ヲ誦ズル程ニ、忽ニ隼四五十許外ヨリ飛來テ、隼每ニ巢ヲ咋テ飛ビ去ヌ、其ノ時ニ天皇壹演ヲ禮シテ貴ビ給フ事无限、

〔土佐日記〕二月二〇（承平年）十一日山さきのはしみゆ、うれしきことかぎりなし、こゝに相應寺のほとりに、しばし船をとゞめて、とかくさだむることあり、このてらのきしのほとりに、やなぎおほくあり、ある人、このやなぎのかげの、河のそこにうつれるを見てよめる歌、

さゞれなみよするあやをば青柳のかげのいとしておるかとぞみる

名稱所在

東寺

東寺ハ一ニ教王護國寺ト云フ、山城國葛野郡西九條ニ在リテ、眞言宗古義派ノ總本寺ナリ、延暦十五年、羅城門ノ左右ニ二寺ヲ建テ、左大寺、右大寺ト云フ、左大寺ハ卽チ東寺ナリ、弘仁十四年之ヲ空海ニ授ケ、尋デ教王護國寺ノ額ヲ賜フ、或ハ云フ、此地ハ舊ト鴻臚館ノ在リシ所ナリト、

〔伊呂波字類抄止諸寺〕東寺（弘仁十四年癸卯正月十九日、永給大師、勅使大納言正二位右近衞大將民部卿藤原良房、往來法文曼荼羅等納大經藏、）

〔拾芥抄中末宮城〕東寺四町（唐橋南、九條北、大宮西、壬生東、）

〔拾芥抄下本諸寺〕廿一寺（公家恒例被行御讀經〇中略）

東寺（在九條、高野末寺、弘法大師、）

〔書言字考節用集一乾坤〕東寺（トウジ）（城州紀伊郡、號秘密傳法彌勒八幡山普賢總持院教王護國寺、）

〔雍州府志五寺院〕紀伊郡　金光明四天王教王護國寺　世所謂東寺也、山號秘密傳法彌勒山、院稱普賢總持院、古此處東西有大道場、東稱東寺、西稱西寺、猶南京之稱東大寺西大寺也、各雖有寺號、世人多不知之、凡眞言三部秘經之中、此寺爲金剛頂經之道場、而專說金剛界之理、金剛頂經或號教王經、故號教王護國寺、弘仁十四年正月、勅以此寺賜弘法大師、建灌頂院、空海准青龍寺法式、毎歲二序行灌頂事、乃置惠果所付健陀國袈裟及念珠、爲寺鎭、承和二年三月二十一日、大師於金剛峯寺結跏趺坐作毘盧印、泊然入定、至今此日仁和寺幷此外寺院所安大師像、悉修法事、是稱御影供、寺產二千三十石、坊中二十一箇也、凡此寺至中世無各院、寺僧住長寮、是謂僧坊作、古之寺院多皆然、斯寺一旦衰頽、眞言宗中興願行再興之、始先建寶菩提院住之、自是各建別院、此地始爲鴻臚館、後爲寺、唐橋今在

寺西、古蕃客來朝時、經斯橋入鴻臚館、故俗號唐橋、或有迎蕃客於河陽之事、河陽今山崎乎、羅城門世誤多爲東寺南門、是則九重城闕之南門也、今田間有其地、羅城門毘沙門天像、今在東寺觀音堂中、相傳、古所置王城南羅城門之閣上者也、予始疑之、按唐代屢有西蕃之寇、使僧不空厭之、西蕃果敗走、時不空奏曰、予元無別法、一向念毘沙門天、依之神兵現出破之者也、自玆後城樓上安毘沙門天像云、然則傳敎大師等亦倣之、使置之者乎、爾後羅城門絶、本尊毘沙門天像、置近隣東寺中者也、

〔東寶記　一〕護國寺號事　大師御記云、夫以、大唐惠果大師、奉勅靑龍寺師師相傳、元名大官道場、然而大興善寺大阿闍梨耶被勅爲秘密之場、改號靑龍寺、方今准彼、以東寺可號敎王護國寺、頟是既奉勅而已云々、

私云、倩案、敎王護國之寺號、專起大師建壇之因緣、所謂根本高祖、自刻仁王護國之尊像、被安當寺講堂之仁祠之故也、日本一州、南北二京、諸寺諸山、未聞斯例、國家鎭護之大本、誠无如當寺矣、

〔東寶記　一〕一東寺草創事〈中略〉

或記云、桓武天皇御宇〈中略〉建立東西兩寺於羅城門之左右、〈東寺號左大寺、西寺號右大寺、〉羅城門之左、元在山城國分寺、以其跡建立大伽藍、而號左大寺云々、

〔山州名跡志　二十一〕〈洛陽寺院〉八幡山敎王護國寺〈秘密法傳院、東寺、〉　在大宮通西方九條北、　宗旨眞言、　門〈南面〉安金剛力士、〈長丈餘、作左運慶、右湛慶、〉　山門在大門內、　中頃回祿ス、東西ニ廊アリ、礎石今尙存ス、　傳曰、有頟敎王護國寺、淳和天皇宸翰、

〔壒嚢抄　十一〕鴻臚宮事

東寺ハ、洛陽ノ鴻臚宮ナルヲ、大師ニ賜ト云、

〔壒嚢抄　十四〕東寺事

是洛陽鴻臚宮也、是ハ比丘賓客令館所也、騰蘭ノ二比丘、漢土ニ來シ初、明帝鴻臚寺ニ令居、故他國

創建沿革

沙門爲旅館者也、

〔東寶記〕一東寺草創事　或記云、桓武天皇御宇、延暦十三年(甲戌)平安城遷都、同十五年(丙子)以大納言伊勢人、爲造寺長官、建東西兩寺、近則左右二京之安鎭、遠又東西兩國之衞護也云々、裏書云(鞍馬寺縁起云、造東寺勅使散位從四位下藤原朝臣伊勢人者、贈太政大臣正一位武智麿孫、參議從三位巨勢麿第七子也、性理堅正、能練衆務云々、或記云、延暦十五年、藤原伊勢人、依貴布禰明神敎、作鞍馬寺云々、)或記云、桓武天皇御宇、延暦年中、於山城國被立平安京之時、(本者、山背國也、而同十二年、改山背號山城、)建立東西兩寺於羅城門之左右、(東寺號左大寺、西寺號右大寺、)羅城門之左、元有山城國分寺、以其跡建立大伽藍、而號左大寺云々、○中略

一密敎相應事　弘仁十四年十一月二日符云

右大臣宣、奉勅、件寺令住眞言宗僧五十人、海公乘杯訪道、傳秘密之眞言、杖錫安禪持神呪之妙力、又夫東寺者、遷都之始、爲鎭護國家、柏原先朝所建也、乞察此狀、率僧徒等、護揚眞言、轉禍修福、鎭護國家者云々、

〔愚管抄　六〕殿下鎌倉の將軍(○源頼經)仰せあはせつゝ、世の政は有けり、その初に、播摩國備前國は、院(○後白河)分にて有しを、上人二人にたびて(○中略)東大寺、いそぎ造營候べし、東寺は、弘法大師の御建立、鎭護國家無左右候、寺もなきが如になり候を、つくられ候べし、其に過たる御追善やは候べきとて、東寺の文覺房、東大寺の俊乘坊とに、播摩は文覺、備前は俊乘に給はせてけり、東大寺にはもとより周防國はつきて有ければ、事もなきやうすとて、加へ給はるゝなり、文覺はそのかみ同じ國に流されてありける時、朝夕にゆき合て、佛法を信ずべきやう、國法を重く守り奉るべきやうなど云きかせけり、かくてはつべき世の中にもあらず、うち出る事もあらばなど、あらまし事も約束しけるが、果して思ふまゝに叶ひにければ、高雄寺をも、東寺をも、なのめならず興隆しけり、(○中略)又文覺上人、播摩給はりて、思ふまゝに高雄寺建立して、東寺いみじく作りて有しも、使廳撿非違

使にてまもらせられなどする事にて有けり、

〔東寺文書鳳認類篇所載〕左辨官下教王護國寺

應令建立當寺講堂以下諸宇事

右得彼寺所司三綱等去月日闕○日奏狀偁、考舊貫、桓武天皇延暦十三年、暨平築帝城於此地而創萬代也、羅城門傍營二精舍、左名東寺、右號西寺、是蓋鎭護國家之道場也、同二十三年、弘法大師求法之志未遂焉、爲賜入唐詔、以謁青龍寺慧果、果一見而如舊識、曰、汝知乎否、我先知汝得東來矣、何爲有待而來遲乎、汝有大器、我有兩部大法秘密印爾、亦是不空大廣智三藏之所授也、悉付屬汝、汝且歸日域、周布國界、以誘東漸機、傳將來焉、不唯報佛恩、令衆生住安樂者、大師諾矣、以爲大願已滿、然後遍歷諸刹者、殆可三年、乃唐元和元年秋八月、果所付之曼荼羅佛舍利經卷道具等齎持歸矣、於于勅令流通傳來金剛一乘教、弘仁十四年勅賜東寺於大師、敢不雜住他宗、爲唯密之道場、而三國相承之法物、藏于此寺而已、又八幡大菩薩感於大師德化、忽然現形、大師乃刻木像、以爲鎭護神、天長年中建立講堂安置仁王經曼荼羅、而竭懇誠以祈國家安全、故名寺曰教王護國、嗚呼經有仁王護國題、寺有教王護國號、神有護國靈驗稱、三者不知所以然而然者也、不亦奇哉、大師記文曰、東寺是密教相應之靈地、馬臺鎭國之眼目也、天下可有大亂者、東寺先廢、弘仁官符曰、以代代國王爲我寺檀越、若伽藍興復、天下興復、伽藍衰弊天下衰弊、又曰、東寺破壞之時、壞日本國中大小伽藍、可加修理、天暦官符曰、教王護國寺者、佛法之日足、密宗之玄庭也、不准餘寺、我朝以彼寺爲最頂云云、是以可觀叡信不淺者、右東寺長存、而東京猶盛也、不敢密教加持力乎、十善金輪之絲綸、三地薩埵之記文、可信矣、因之當寺破壞則勅見修理者、定例也、所謂建久付播摩備中等十三箇國正稅、弘安佐渡、永仁下野、正安安藝、康永常陸也、莊園關所棟別等不遑具載、又文安元年、賜官符、始自諸國末寺、終于所寄蹤於村邑聚落之門人等、不論財物在不在、各出錢一百枚修補破壞、亦是例、于天平創東大寺時、聖主自製勸疏廣告十方也、方

今、金堂講堂、廻廊、鐘樓、經藏、中門、南大門、鎭守、皆罹于寇火、諸司三綱等驚恐未休、吞聲吐血、神昏心惑、無所措手足、誰人豈不慷慨耶、竊所願者、雖巨海一滴、太山微塵、再成一間半間之經營、寓念千輪萬奐之莊嚴、是所力之不足、而非所志之不覃也、望請天裁、因准先例、賜官符、遍告十方者、總貴賤長幼緇素男女、別大師門人枝枝葉葉、各行檀波羅密、而相兼六度者、然則施千兩金不爲多之、擲半文錢不爲少之、但從一念隨喜功德、生萬劫福田因緣耳、抑又入上乘門、薫染於身、秘密於意者、匪啻永離三途苦輪、亦復養得現當身命、多是非大師廣大恩德耶、粉骨劖肉、未曾知足、今也當于回祿期也、門人等各付錢一百枚、再建堂宇、以謝夫萬一者、誰可謂非分課役哉、天裁無所滯者、宏構再復本規、繼伽藍於龍華三庭之曉、祈寶祚於鶴算萬歲之春者、權中納言藤原朝臣元長宣、奉勅、依請者、寺宜承知、依宣行之、

長享三年五月六日　　史小槻宿禰判奉

少辨藤原朝臣判

〔東寶記　一〕棟宇目錄

南大門　中門　金堂　講堂（付鐘樓、經藏、）　金堂　灌頂院　塔婆　寶藏　鎭守八幡宮　西院

大小門（南面大門一宇、脇門二宇、東西二面各一宇、北面一宇、）　温室（外院有之）

已上（此內灌頂院、塔婆、寶藏、西院、回祿以後、如舊造立之、）

三面僧房（講堂稱東西北三方有之）大馬道回廊（東西廊各廿間、北面廊三十間、）

廳屋　車宿（慶賀門前、大宮大路東邊、南北廿間、）

已上廢絕

〔高野春秋　十一〕文明十七年九月十三日、東寺諸堂燒失、是係惡黨放火也、

〔義演准后日記〕文祿五年閏七月十三日地震、（○中略）東寺事、食堂、同中門、講堂、灌頂院、南大門、北八足門、東小門、鐘樓、此分顚倒、塔婆、鎭守八幡宮、御影堂、同四足門、同唐門、灌頂院ノ門二字、慶賀門、寶藏、幷不

開門穀屋之內少々相殘、此分無爲云々、

金堂

〔東寶記 一〕一金堂

舊記云、五間四面金堂一宇云々、〇中略

本尊形像

舊記云、延曆十五年丙子造東寺云々、金堂藥師等形像、其時被造立之歟云々、

別尊要記第四、心覺云、金堂中尊藥師、丈六光上七佛藥師、三尺下十二神將、三尺脇士日光月光、八尺云々、

惠什闍梨抄云、揚右手垂左手、是東寺金堂井南京藥師寺像也、以左足押右脛坐像也云々、

〔東寺文書〕東寺金堂再造事、宜仰高祖大師之法流諸國門徒、早遂其功、將又勸五畿七道千家萬戶之諸輩、專無緣之結緣者、綸旨如此、悉之以狀、

大永四年正月十一日　右中辨頼繼

大勸進行尊上人御房

〔義演准后日記〕慶長十一年八月十四日、東寺金堂供養導師ノ事、文殊院ヨリ、內證案內申來了、日取來廿六日云々、火急ノ儀也、總目錄認遣之了、可爲舞樂曼供云々、

講堂

〔東寶記 一〕講堂

一當堂圖樣

東寺新定講堂圖 御筆圖樣 西寺亦准之

九間講堂一字 間別一丈三尺　妻四間 間別一丈三尺　戶十具 南方五具　北方三具　東西各一具　連子二具　壁十四間

天長二年四月廿日、勅使所定如圖、〇圖略　使參議左大辨直世王

東寺　別當少僧都傳燈大法師位空海

西寺　別當律師傳燈大法師位最榮
東西寺撿挍　參議右大辨伴宿禰國道
　上書云　講堂圖帳一卷云々
道我僧正記云、右本、文保年中、勝光明院寶藏群盜亂入之後、爲御見知、寶藏物等被渡常盤井殿仙洞之時、親以大師御筆正本寫之云々、

一當堂本尊
承和十四年、東寺傳法會表白云、
昔我聖朝御體不豫時、金剛乘教中、五佛、五大菩薩、五忿怒、梵王、帝釋、四王等、羯磨之像奉造有誓願也、又像成之後、像前常爲國持念、兼秘密教開演轉讀也云々、〇中略

一建久八年修理次第（寺務長者覺成僧正、凡僧別當賢清、已灌頂也、）
建久八年丁巳、依文覺上人勸進、當寺諸堂所被修理也、寺內丑寅隅十餘間、佛所屋一字造之、南面其南七間漆工所一字造之、北面兩所奉運渡講堂佛奉修復之、但中尊大日許於御堂內修理之、大佛師運慶法眼、引率數十人小佛師令修造之、僧永眞致修理行事、件漆工所西方奉渡居阿彌陀寶生等、爲加修理、小佛師遠江別當、以鑿奉打阿彌陀佛像御頭、小筒打落板敷了、驚取見之銅筒也、仍諸佛師幷行事僧等集會披見之、定所納物可有加推量令求之、塵積難求得、然梵本眞言得之、〇下略

〔帝王編年記 十三 淳和〕天長二年四月廿日、建東寺講堂、仁王經曼陀羅聖衆、五佛、五菩薩、五大忿怒、梵王、帝釋、四天王等安置之、

〔東寺長者補任 一〕同〇天長二年乙巳
長者少僧都空海　今年四月廿四日、奉勅始建立講堂、勅使參議右大辨直世王、督作早畢、

〔東寶記 一〕食堂（有三間中門）

塔

御遺言云、食堂佛前召侍大阿闍梨幷廿四僧童子等、可令習誦五悔、緣起、右案大唐靑龍寺例、宗從大阿闍梨之童子、幷諸名德達之童子等、令會集食堂、僧達一人、童達一人、共令習學五悔、每夜現繫卽闕大衆所得十分之一、宛行諸童子等紙墨料、案彼示之而已、但途不可成立者、雖常住寺內、更强喚不可令此庭列、見器惟品可催之云々、

〔東寺長者補任一〕同〇延喜九年

長者僧正聖寶權法務、後七日法、　六月日依病辭諸職、七月六日卒、〇中略僧正自少至老、斗藪爲業、〇中略周遊諸寺、所造丈六等大像廿餘體、此外伽藍佛經造寫不知數、〇中略東寺食堂、又造丈六千手、幷一丈四天王、開眼之日、太上法皇御幸、

〔初例抄下〕東寺塔　建立　天長五〇一本作三年

同　燒失　天喜三年

〔東寶記二〕塔婆

大師御草勸進表〇中略

右東寺別當沙門少僧都空海等奏、空海等聞、興隆三寶、唯濕一人、一人所務、惟孝惟德、德之所聚者、塔幢是最也、塔名功德聚、〇中略今望令六衛、八省、親王、京城等、戮力竭誠、各曳一木、〇中略僧等微願如是、天慈允許、宜付諸司、

天長三年十一月廿四日

別當

律師傳燈大法師位

少僧都傳燈大法師位〇中略

一尊像安置次第

佛壇四方、安金剛界四佛、○中略 件佛菩薩、悉大師御作也、度々炎上之時、毎度奉取出、遁火難畢、但塔婆、大師御在世被造畢否不分明、若其成風不終功者、本尊安置、後代長者之時有沙汰歟、或記云、件塔、陽成天皇之代、元慶年中造之云々、○中略

私云、塔婆最初建立、天長三年表文、如載先段、如應德御願文者、及元慶更造之云々、自天長三年至元慶之比、經五十餘年、其間若有火事更造之歟、子細不分明、或記云、天長三年雖及勸進表、迄元慶之初、造功周備云々、○中略 其後至仁和四年、爲雷火燒失、○中略 次天喜三年雷火、○下略

〔春記〕長曆四年十一月八日己未、早旦仰云、東寺塔可修造事、伊與前司章任、先日所申請也、而任國事未濟、此間未聽所請也、彼公事漸濟了云々、至于今且可修造之由、從院被仰、此由、何〻〻、

〔扶桑略記〕二十九後冷泉 天喜三年八月廿一日半夜、東寺之塔、爲雷火燒、

〔百練抄〕五白河 應德三年十月廿日、供養東寺塔、件塔去天喜年中、爲雷火被燒、

〔扶桑略記〕三十白河 應德三年十月廿日甲辰、公家供養東寺之五重塔矣、右大臣源朝臣顯房、殊慕勸賞、所營作也、

〔東寺大塔升形銘〕大塔升形大勸進以下名寫

大塔升形被鑄、付塔婆再興之、

紀再興大勸進聖以下諸□□□事

南東門
弘安二年庚辰八月二十日寅剋、事始、

同四年辛巳八月十日、心柱立、

同八年□□酉十二月十七日、造畢、

東寺御塔

大勸進沙門憲静 願行上人

北京大工從五位下藤原國成

引頭

大伴宗國

藤井末吉

大藏國繼

藤井實安

〔東寺造營文書符案〕勝定院〇足利義持御自筆

東寺塔婆、朽損之間、致勸進、可加修理云々、誰人不歸善根哉、早爲結緣、可合力之狀如件、

應永十七年三月　日

〔東寺大塔升形銘〕當寺塔婆朽損、九輪傾艮方、仍可有修造之由、連々歎申公方武家之處、應永二十五年九月十七日事始御就以後、同十月七日九輪復本畢、其外瓦壁以下、少少修理之、用脚不足之間、修造十分之一也、要脚每度自公方下行、職事奉行結城入道云々、　十七日事始之內、室町內大臣〇足利義持入御寺家、終日御座、管領以下、諸大名御共、當日御所へ、御塔心柱木引之、南大門路次見物人人雲集畢、

權大僧都宗源記之

〔續史愚抄後陽成〕文祿三年七月二十二日戊戌、爲東寺塔供養、被行曼荼羅供、導師長者准后前大僧正義演、三寶院公卿右大臣晴季已下、三人著座、度者使左少將實顯、御誦經使藏人式部大丞清原秀賢有舞樂等、今度儀太政大臣秀吉爲母三回令沙汰云、長者補任、內山記、年代略記、享年記、

〔願文集〕東寺塔供養願文

夫東寺者、弘法大師、奉桓武天皇綸命、爲帝都鎭護、攸創建、而天下無雙之靈場也、先是、永祿年中、五層塔婆罹畢方之災、化灰燼矣、嗚呼時耶命耶、所慨喟也、邇來、闔寺清衆雖勵再造之志、時迫澆季、不得有力檀越、因循送歲月者也、頃日、前關白大丞相豐臣秀吉公之萱閑天瑞夫人、起大願力、出家資再興焉、風鈴雲榱、彩飾倍蓰于舊塔、貴賤改觀耳、自延曆十五年至今、僂指數之、則八百餘霜、雖有國家搶攘、

然獨存者、實大師法道不盡故也、奇哉、今茲文祿三年七月二十二日、偶値夫人大祥忌之辰、蒙大丞相鈞命、作塔供養之次、卒然製願文、聊擧其梗概云、

〔雪月花 三〕東寺五重塔

寛永十八年巳十二月より、正保元申年七月迄ニ、御造營、諸用銀高九百七十三貫六百四十二匁五分、

奉行永井日向守　代官小野喜左衛門

右之塔ハ、寛永十八年巳十二月七日夜半、塔之二重より、無故て出火失燒、

灌頂院

〔東寶記 二〕灌頂院

御遺書云、右院雖未造畢、且始傳燈之志、雖此間所思千廻、草々入山非、遂此志、然則實惠大德、一向可造功畢、亦諸莊嚴可如語先々云々、○中略

私云、當院者、大師御在世之間、雖被草創、依未被造畢、檜尾僧都受大師遺命、御入定之後、令終土木之功云々、

一灌頂院差圖　舊記云、五間四面正堂一宇、　七間二面禮堂一宇云々

〔東寺長者補任 二〕同久○建二年

長者僧正俊證○中略　十二月廿八日、灌頂院供養、依修理也、但兩界萬荼羅新摸也、

護摩堂

〔東寶記 二〕護摩堂

嘉承二年寺解狀、五間二面護摩堂一宇云々、

私云、延久元年九月七日、依大風灌頂堂、護摩堂、一時顚倒矣、於灌頂堂者、年內不日造立之、於護摩堂者、後年造營、及嘉承二年、賜叙爵料修造之云々、其後仁治二年四月、光明峯寺禪閤御入壇之時被修造云々、其後建長四年灌頂院回祿之時、同燒失了、其後德治二年十二月十七日立柱、同三年

門

正月廿一日上棟、總大工七條大夫國成、大勸進大工末康、兩大工祿各銀劒一酒肴等被下之畢、爲來廿六日法皇（後宇多院）御灌頂、大勸進泉涌寺長老素道上人承慇懃之仰、致土木之功畢、

〔東寶記　一〕南大門（二階樓門、東西五間、南北二間）

建立

古老傳云、當寺草創之最初所被建立之樓門荒廢之間、依文覺上人之勸進、建久右幕下（源賴朝）施入錢一萬貫文、如舊造營之云々、

金剛力士

大佛師康譽法眼注進云

二王作者

總大佛師運慶

金剛（東）運慶

力士（西）湛慶

但子息等加造乎云々、（運慶子息六人、湛慶、康運、康辨、康勝、運賀、運助云々、運慶始而補東寺大佛師云々、）

私云、根本安置之像、大師御作、朽損之間、建久年中、當寺修理之時、運慶湛慶等新造之、其後正中三年二月、高野證道上人致大勸進、二王二天等令修理、作天衣加綵色了、（○中略）

中門（東西五間、南北二間、）

大佛師康譽法眼注進云

二天作者（東康運　康勝　運助　西湛慶　康辨　運賀　云々）

古老傳云、根本安置像者、大師御作、多聞持國二天也、朽損之間、摸元興寺二天造立之、東持國天、西增長天云々、

寺格

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、〇中略眞言宗、本寺者東寺也、已上是を八宗と云、

〔神皇正統記 嵯峨〕東寺は、桓武遷都のはじめ、皇城の鎭のために、是をたてらる、弘仁の御時、弘法に給て、ながく眞言の寺とす、諸宗の雜住を許さゞる地なり、〇中略三流の眞言いづれと云べきならねど、眞言を以て、諸宗の第一とする事も、むねと東寺によれり、延喜の御宇に、綱所の印鎰を、東寺の一阿闍梨にあづけらる、依て法務のことを知行して、諸宗の一座たり、

〔壒嚢抄 十四〕密宗本寺、大方可レ存知レ事哉、先東寺如何、〇中略然ヲ嵯峨聖主、弘仁三年壬辰十一月廿七日、割二封戸一被レ寄二當寺一時、御起請符云、以二代々之國王一爲二我寺之檀越一、若伽藍興復、天下興福シ、伽藍〇此間恐脫二衰弊天下四字一衰弊セン、若有二无道主、邪賊之臣一、若違犯若破障不レ行、此人必令レ破二辱三世諸佛、一切賢聖一、得レ罪而終墮二无間獄一、無數劫中、永可レ无二出離一、十方諸天、卒土之神明、共起二大禍一、永滅二子孫一、若不レ犯違者、敬行者、世々重レ福、子孫繁昌、共出二塵域一、必登二覺岸一被レ載タリ、又東寺及二破壞一者、壞二日本之大小伽藍一、須レ成二修理一旨、勅宣ヲ被レ下タリ、

寺領用途

〔日本後紀 二十二 嵯峨〕弘仁三年十一月壬午、贈四品布勢内親王墾田七百七十二町、施二入東西二寺一、

〔東寺百合古文書 五十六〕民部省符

應下早施二入東寺一布勢内親王庄墾田等上事

一所伊勢國大國庄

在二飯野多氣兩郡一

一所攝津國垂水庄

在二豐島郡中條一

一所越前國高臯庄

一所同國赫島庄、

右被太政官去十一月廿七日符偁、被大納言正三位藤原朝臣園人宣偁、奉勅、件垂水庄墾田等、宜施入東寺者、省宜承知、依宜行之、符到奉行、

從五位下少輔高階眞人遠成　　從六位下行少錄秦忌寸氏繼

弘仁三年十二月十九日

〔東大寺要錄六〕東寺　右延曆十二年歲次癸酉、公家建立東西兩寺、施入食封千戶、弘仁十四年癸卯以東寺永賜空海和尙、其後涉東大寺眞言院廿一僧爲末寺

〔續日本後紀四仁明〕承和二年正月壬子、大僧都傳灯大法師位空海奏曰、依弘仁十四年詔、欲令眞言宗僧五十人住東寺、修三密門、今堂舍已建、修講未創、願且割被入東寺(東大寺〇恐東寺誤)官家功德料、封千戶之內二百戶(甲斐國五十戶、下總國百五十戶、)以充僧供、爲國家薰修、利濟人天、皇許之、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶七年二月七日甲辰、割山城、大和、河內、淡路四國、過三賓布施稻各三千束、伊賀、伊勢兩國穀各四百斛、遠江、武藏、上野、下野、能登、因幡、周防七國、各五百斛、播磨二百斛、美作稻四千束、充造東寺塔料、

〔延喜式三十三大膳〕東寺中台五佛、左方五菩薩、右方五忿怒料、生道鹽日別五合七勺、海藻六兩、滑海藻十二兩、味醬四合五勺、醬一合五勺、

右每年十二月以前計來年日數、申官行之、

〔延喜式三十五大炊〕東寺春秋修法、秋灌頂佛供料、各米十石、

同寺中台五佛、左方五菩薩、右方五忿怒供料、米日六升九勺、

〔延喜式三十六主殿〕東寺年料、一斛六斗六升六合、(一斛六升五合、眞言中台五佛、左方五菩薩、右方五忿怒、從正月迄十二月燈料、三斗春修法料、三斗秋灌頂料、)

〔延喜式二十一雅樂〕凡四月八日、七月十五日齋會、分充伎樂人於東西二寺、並寮官人詣寺撿挍、前會三日、官人史生各一人就樂戶郷簡充、(在大和國城下郡杜屋村、)

〔元亨釋書一（傳智）〕釋空海、世姓佐伯氏、讃州多度郡人、○中略十有四年○弘仁正月、勅以東寺賜海、建灌頂院、海准青龍寺法式、毎歳二序行灌頂事、乃置曼荼羅所付健陀國袈裟及念珠、爲寺鎭、

〔義演准后日記〕慶長十二年三月廿日、東寺後夜御影供爲出仕入寺、○中略開寶藏事、　廿二日、辰剋開寶藏、奉拜靈寶了、先開朱唐櫃舍利箱、但勅封付ノ間不開之、鈴、五古、三古、獨古、金剛盤、橛、少羯羊磨少輪也、尤珍重ノ物也、殊勝之五色絲ハ新調歟、代代緘紙舍利勘記以下、數多在之、御ケサハ先度金堂供養法之時、既著用之間、今度不開之、七祖梵讃共以奇妙、御筆勢神變、凡驚目了、靜奉拜之十二天目、是ハ非御筆歟、十二天ノ面應德井建武兩度修理之記、彼面ノ裏書ニ在之、持物ニモ同在之、八幡額御筆也、此外種種異寶巨多、未剋入堂、歸宿坊、暫時休息、及黃昏入寺、

〔柳營禁令式一〕東寺諸法度

一東寺、高野、互以横入交衆、可有學問相續、若無學之仁於汚室者、可入替持律住持事、

一觀智院者、一宗之勸學院也、彼經藏諸聖敎、無類本儀、尤大切也、不殘一冊、以目錄令寫之、納于高野山靑巖寺之經藏、可立學者之用事、

一可建古跡之學室、專修學事、

一右東寺醍醐、眞言敎相之所學、及退轉之由、甚以油斷也、至無學闕者、寺領所帶不可叶、早速可修學興行者也、

慶長十四年八月十八日

〔東寺長者補任〕（嵯峨天皇）弘仁十四年（癸卯）（註略）○長者空海（正月十九日勅給東寺、十年五御、歸朝以後十八年、大子略、凡僧）

（淳和天皇）天長元年（甲辰）○長者○空海（三月廿六日甲戌、依新宣、直任少僧都、十年一五○中略、）

（仁明天皇）承和三年（丙辰）長者權律師實惠（五月十日、任權律師、補長者、十年一五○中略、）

同八年（辛酉）長者少僧都實惠、權律師眞濟（十一月九日、任權律師、并長者、元四十、四十一、二長者初也、○下略）

〔諸門跡譜 下〕東寺長者事、

以實惠大德爲本朝第二阿闍梨、又東寺一長者之始、以眞濟權律師爲二長者之始、以峯斅少僧都爲三長者之始、以定昭爲四長者之始、又以眞雅僧正爲東寺法務始、

〔寶簡集 四〕定置文觀聖人〇以下蟲損

條々

東寺長者職者、大師門徒之中、成立傑出之仁、選補之旨云、高祖御記云、往代舊蹤旁以炳焉也、爰有文觀聖人者、偷廻温職拜任之秘計、猥號一宗官長之名字之條、密家之陵怠希代之濫吹也、輙爲異人非器之體、爭可居嚴重崇班之位哉、且者被始置長者職以來、更以不聞其例矣、所詮被停止殊旨之宗務、速可被降新補勅裁之由、可致申沙汰事、〇中略

右以前條々、爲滿衆一同之評定而所定置也、雖爲一箇條、敢以不可違失、若於背此旨輩者、可蒙大師明神兩界諸尊金剛天等護法善神之御治罰於違犯之身上之狀如件、

建武二年乙亥五月　日

預大法師有證在判

行事入寺賴秀在判

年預入寺賢宥在判

第百代

撿挍執行法印大和尚位祐勝

〔釋家官班記 上〕一濫觴事

無品親王〇中略

聖珍 伏見院御子、聖尋僧正弟子、東南院東大寺別當〇〇〇〇元德二年二月廿七日、叙東寺長者、親王初例也、

〔釋家官班記 下〕一僧官採擇故實事

造寺司

法務

二人有之、東寺一長者必爲正權法務、諸寺僧隨時補之、隨分顯要之職也、山門唯顯之輩補任有例、近則靜明心聰等也、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

眞言宗僧五十人

右被右大臣宣偁、奉勅、件宗僧等、自今以後、令住東寺、其宗學者、一依大毗盧遮那、金剛頂等、二百餘卷經、蘇悉地、蘇婆呼、根本部等、一百七十三卷律、金剛頂、菩提心、釋摩訶衍等、十一卷論等、(經論目錄在別)若僧有闕者、以受學一尊法、有次第功業僧補之、若無僧者、令傳法阿闍梨、臨時度補之、道是密教、莫令他宗僧雜住、

弘仁十四年十月十日(〇又見東寶記東寺官符集、醍醐寺初度具書並作十月十日、類聚三代格卷四、元亨釋書係十一月十日、恐誤、)

太政官符

應以眞言宗五十僧內充東寺三綱事

右大僧都傳燈大法師位空海表偁、〇中略伏望三綱之外、鎭知事等、一切省除、其三綱者、擇五十僧內充用者、從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守宣、奉勅依請、

承和元年十二月廿四日

〔續修東大寺正倉院文書三十六〕造東寺司移式部省

合參人

无位道守臣君麻呂(上日廿五　寫紙一百七十五張)

无位秦吳子(上日廿五　寫紙一百七十六張)

右二人書生、

雜載

大初位下佐太忌寸橘（上日卅五 寫紙一百七十五張）

右一人留省

以前人等起去七月五日、盡廿九日、上日并行事如件、以移、

天平寶字二年八月十八日　　主典正八位上安都宿禰雄足

次官從五位下高麗朝臣

〔日本後紀十二桓武〕延曆二十三年四月壬子、從五位下多治比眞人家繼爲造東寺次官、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十月癸丑、官家功德封物、停收東大寺、收造東西二寺諸司出納充用之色、一依前例、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁六年正月甲申、正五位下安倍朝臣眞勝爲造東寺長官、

〔類聚國史百八十諸寺〕延曆十九年四月丁丑、勅、山藪之利、公私須共、〇中略但東西二寺、穢構堂宇、其巨樹直木、特聽禁斷、

〔續史愚抄正親町〕永祿七年十二月二十七日丙申、今夜、賊入東寺寶藏、掠重器云、東執記

〔山城名勝志五洛陽〕東寺古松（在西院前、世云三鈷松、大師於唐朝、投三鈷杵、一落東寺、則此所云々、）本朝神仙傳云、弘法大師於唐朝、投三鈷杵、卜本朝勝地、一墜東寺、一落紀伊國高野山、一落土佐國室生戸山、歸朝之後、相尋弘佛法、

〔新葉和歌集十七雜〕元弘三年六月、後醍醐天皇隱岐國より、還幸の次に、勅願によりて、まづ東寺へ行幸ありける時、松子坊にて、この松の事など、御たづねありければ、ことのよし奏し侍けるほど、松かぜ涼しけ吹ければ、思ひつゞけける、　　前大僧正賴意

うゑおきし昔やかねて契りけむけふの御幸をまつ風の聲

〔神皇正統記後醍醐〕君は、かくともゑらせたまはず、攝津國西の宮といふところにてぞ、きかせましましける、六月〇元弘二年四日、東寺にいらせたまふ、都にある人々まゐりあつまりしかば、威儀を

とゝのへ、本の宮に還幸したまふ、

〔花營三代記〕應永三十二年二月廿二日、於東寺八萬四千基塔造、御方ノ御ヒヂシリヨリ、タケタカユビノ高サ也、赤松越後守持貞、私ノ願ト云々、內々自大御所被仰付歟、

〔日本略記〕一九品之淨土之事、上品上生は東寺、○中略是を九品といふ也、

名稱　所在

西寺　慈恩寺〔例入〕

西寺ハ、山城國葛野郡九條ニ在リ、延曆十五年、羅城門ノ左右ニ二寺ヲ建テヽ、左大寺、右大寺ト稱ス、左大寺ハ謂ユル東寺ニシテ、右大寺ハ卽チ西寺ナリ、鎌倉幕府ノ頃ハ、旣ニ大ニ荒廢シ、今僅ニ其殘礎ヲ田畝ノ間ニ留ムルノミ、

慈恩寺ハ、仁明天皇ノ承和十一年、滋野貞主ノ己ガ別業ヲ捨テ、漢朝ノ慈恩寺ヲ摸シテ建立スル所ナリ、當時私ニ寺院ヲ建立スルコトハ、法ノ禁ズル所ナルヲ以テ、西寺ノ別院トシタルナリト云フ、所在ハ、西寺ノ南ニ在リテ、相去ルコト甚ダ近キモノヽ如シト雖モ、今廢寺ニシテ遺跡詳ナラズ、

〔伊呂波字類抄佐諸寺〕西寺桓武天皇御宇、延曆六年丁卯造之、弘仁九年二月乙未、西寺講堂供養、御願遺佛莊嚴法物一十五種、便卽施入、

創建

〔拾芥抄下本諸寺〕廿一寺公家恒例被行ニ御讀經、○中略

西寺九條南少僧都慶俊

〔山城名勝志七葛野郡〕西寺（中略）今舊跡東寺西三町許ニアリ、金堂ノ跡僅カニ田間ニ殘ル、今松尾祭ノ日、神供ヲ備ル所也、又講堂塔ノ木等、田畠ノ名トナル、土人云、今梅ガ小路村ニ有ニ大日堂、此佛西寺ノ金堂ノ本佛云々、

〔雍州府志五寺院〕紀伊郡　西寺　在東寺之西、一說始號西明寺、今不詳其實、守敏之所住也、曾天長元

堂塔

年大旱、春三月勅空海、於神泉苑修請雨經法、時守敏法師奏曰、守敏世壽法臘共邁于海、先承詔爲適宜、依之詔敏、敏以七日爲期、散朝陰雲厚布、都下晤如夜、雷鳴雨灑、畢朝奏異、勅見雨之所霑、只東西京而已、於是又詔空海、于時霖沛三日、天下皆洽、以是觀之、則與弘法雖小有優劣、世稱一雙、立不爲不可也、然守敏之傳、不見諸書、如何乎、今西寺跡悉爲田疇、金堂講堂悉爲田園之號、守敏塚纔一堆存而已、以今觀之、則弘法與守敏、其跡之相去、天淵遼夐也、

〔醍醐寺緣起〕根本尊師略〇中同〇延喜六年生年七十五任正僧正、略〇中爲西寺別當、始造寶塔、建心柱日、法皇御幸、

〔元亨釋書二慧解〕釋勤操姓秦氏、略〇中天長帝又擢之主西寺幹事、略〇中天長四年五月七日、終西寺北院、年七十、夏四十七、

〔玉葉和歌集十九釋敎〕紀伊國よりのぼるとて、西寺の塔の、きりにまぎれてみえたるに、佛塔高顯のかたちは、衆生戀慕の思ひをすゝめむがためなりといふ事、思ひ出でられて、渇仰のあまり、馬よりおりて、瑠璃頗梨の地にひたひをつくるこゝちして、なく〳〵禮拜するに、天竺に釋迦大師因位の時、燃燈佛にあひ奉りて、泥にかみをしきて、ふませ奉り給し跡、今にとゞまりて、我等が福圓なる事思ひ出でられて、讀侍りける、　高辨上人

おがみつるえるしやこゝにとゞまらむかみをしきてし跡も消ねば

〔明月記〕承元元年四月四日、出京、經久我前桂河西、渡吉祥院西、出西寺塔前、入七條坊門光實門、昏歸冷泉、

〔百練抄十四四條〕天福元年十二月廿四日甲午、今夜西寺塔燒亡、件塔破壞之後、逓送年序、不知修營事云云、

〔明月記〕天福元年十二月廿五日乙未、下人說、夜火東寺由云々、乍驚以下人遣見、午時歸云、西寺之内

造寺司

下人宅失火、吹付塔燒了云々、本自荒廢之寺何爲乎、

〔類聚國史百七職官〕延暦十六年四月己未、遣從五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人於右京職、檢延暦五年以來十五年以往雜官物、

〔日本後紀十二桓武〕延暦二十三年四月壬子、外從五位下日下部得足爲造西寺次官、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十一月甲辰、從五位上藤原朝臣鷹養爲造西寺長官、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月甲子、從五位下田中朝臣淸人爲造西寺長官、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年正月丙午、正五位下三島眞人年繼爲造西寺長官、從五位下藤原朝臣文山爲次官、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十月癸丑、官家功德封物停收東大寺、收造東西二寺諸司、出納充用之色、一依前例、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年七月辛未、從五位下藤原朝臣永貞爲造西寺長官、　六年正月甲申、從五位下秋篠朝臣全嗣爲造西寺長官、

雜載

〔日本紀略淳和〕天長三年三月丁丑、奉爲柏原天皇、於西寺、限七个日、說法華經、

〔二水記〕大永七年十月廿四日、後聞、武家御陣、東寺之西、西寺云々、道永在唐橋里云々、先勢渡河桂西兵等所所令放火云々、

〔催馬樂〕律　老鼠一段、拍子十、

にしでらのおいねずみ、わかねずみ、おんもつんづけさつんづけさつんづ、ほうしにまうさん、しにまうせ、ほうしにまうさん、しにまうせ、

○

慈恩寺

〔伊呂波字類抄諸寺〕慈恩寺參議滋野貞主、天長十一―(天長恐承和誤)捨城南宅爲伽藍、名曰慈恩寺、坐禪之餘、歷遊其間、時人嘉之、

〔山州名跡志十二紀伊郡〕慈恩寺　舊跡今不詳

〔山城名勝志七葛野郡〕慈恩寺拾芥抄云、式部大輔滋野貞主、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年四月壬午、參議式部大輔從四位上滋野朝臣貞主、以在西寺南居宅一區、捨爲道場、仍言、私建道場、是格之所禁也、雖是舊宅、事似新建、但此家之爲體、前臨淵水、後隔佛地、去寺迫近、殆同伽藍、凡寺邊二里、本禁殺生、而家人奴婢、動事魚網、近寺之弊、還犯憲法、望請使入西寺、命爲別院、號其名曰慈恩院、東大寺僧傳燈住位圓修永爲別當、三綱在別人、自此以後、別當三綱、隨檀越願、令宛行之者、勅聽之、

〔百練抄六崇德〕保延二年十二月、慈恩寺燒亡、此寺者、是滋野貞主遣唐使之間、摸漢朝慈恩寺建立之、

〔本朝文粹十詩序〕慈恩院初會序　野相公

滋相公、有城南別業、住此三十年、出自螢雪之勤、登於槐棘之貴、夫火宅踊宮、不免燒、不免濁、故捨此以爲慈恩佛堂、手栽祇樹之花、自買獨園之地、不改朝天之門、便作求車之所、不變閱水之橋、以爲到岸之途、至其粉黛不留、葷血不御、又是相公之素舊、非新戒之所加、相公本自引攝文友、皆耳目浮近之交也、如菩提常樂之契者、其初在今日、故列此會人于左、爲後來之張本、故曰初會、凡今所錄姓名、以爲授記時之驗、承和十一年夏五月七日、記之云爾、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相模守滋野朝臣貞主卒、貞主者、右京人也、〇中略仁壽二年春、毒瘡發脣吻、詔賜醫藥、中使相望於路、道俗來問者、日闐街巷、嗔咽、謹戒子孫云、殯斂之事、必從儉薄、殂歿之後子孫齋供而已、卒于慈恩寺西書院、時年六十八、

施無畏寺

名稱 所在 創建 沿革

施無畏寺ハ、土俗センモン寺ト云フ、原ト觀音寺ト稱シテ、久シク廢頽シタリシヲ、醍醐天皇ノ皇子兼明親王、其靈地ナルヲ惜ミテ、之ヲ再興シ、改メテ施無畏寺ト號ス、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國葛野郡北山ニ在リ、

〔拾芥抄下本諸寺〕施無畏寺北山

〔山城名勝志七葛野郡〕施無畏寺拾芥抄云、北山、土人云、大北山村東側、法音寺北、紙屋川西舊跡也、土俗センモン寺ト云、

〔日本紀略六醍醐〕貞元元年九月十九日壬午、左大臣兼明建立於觀音寺、設法會、

〔本朝文粹十詩序〕七言、暮春施無畏寺眺望、　江以言

城北有古寺、其草創則不知何歲、其檀那亦不知何人、但有邑者村叟之幾傳、其名曰觀音寺矣、草萊不闢、基趾將消、於是故中書大王、相其地之靈勝、搆此寺之頹殘、即改膀額、號施無畏寺、蓋以其本名觀音寺之故也、自彼緱山之秋月、玉笙之音永吞、梁園之春風、瓊花之色空落、右武衛將軍、便繼遺績、更擧花綱、常坐常行、大法之螺長吹、三月九月、八講之筵更展、于時員外藤納言、乘春雨之餘閑、聊暇日而眺望、其外金張華族之家、風月藻思之輩、隨喜其事、周旋此場者、濟濟煌煌、非翰墨之可存焉、於戲茅洞今日之遊、雖親玄鶴之翔、柰苑昔時之會、未轄白牛之車者也、今寓眺望、以命筆硯云爾、

〔本朝文粹五奏狀〕請被以施無畏寺爲定額寺狀　前中書王

右臣先妣藤原朝臣淑姫、帝城西北、聊卜閑地、有意建立道場、安置尊像、而影堂未終、夜臺早掩、臣思遂其志、歲月已久、班爾之巧、土木纔成、僧伽之勤、香華漸積、雖非鳳剎之有飾、猶欲令俗塵而無侵、謹尋舊例、臣下道場多爲定額者有、伏願陛下鴻慈、特降綸渙、准之前例、列之定額、抑先年申請燈分之日、注觀音寺、而京畿之間、號觀音寺、其數繁多、恐星霜推移、名字相錯、改施無畏、將絕有疑、但不爲僧綱并講讀師之所領、別當三綱檀越選定、臨時申補、兼明誠惶誠恐謹言、

年月日

用度

〔本朝文粹五奏狀〕請被以私稻三千束加擧正稅充給觀音寺燈分料狀　前中書王

右北山有寺、號觀音寺、是先妣藤原朝臣化雲之地、平生有願、願起一伽藍、造丈六觀音、念彼大悲之力、以爲滅罪生善之緣、故及臨疾誡臣云、設歸寂滅、必遂此願者、伏因遺敎、聊企微力、淸虛之甚、經年纔成、夫有所始無所終者、古人之所歎也、況光陰如飛、朝露將殞、不成久遠之謀、恐遺陵遲之恨、須申公家、久此本願、謹撿先例、分捨私稻、永充功德、古今之跡、已以居多、望請下知國司、每年加擧、以其利稻、永充燈分料、兼聊資住僧供、重尋舊事、先妣藤原朝臣、先皇御宇之時、奉巾櫛二十餘載、聖上問寢之日、侍宮園亦有年矣、願因彼累葉之勳、得申臣白華之志、兼明誠惶誠恐謹言、

年月日

名稱
所在

鹿苑寺

鹿苑寺ハ、山城國葛野郡大北山村ニ在リ、此寺ハ應永年中、將軍足利義滿ガ、西園寺ノ地ヲ相シテ其別業ト爲シ、其域內ニ一佛閣ヲ創シテ、禪林ノ諸老ヲ集メ、以テ佛敎ヲ談ゼシニ防マル、閣ハ三重ノ高樓ニシテ、內外悉ク金粉ヲ以テ塗ル、故ニ世或ハ號シテ金閣寺トモ云フ、

〔山州名跡志七愛宕郡〕鹿園寺或金閣寺　在北山麓平林中

〔和漢三才圖會七十二末山城〕鹿苑寺又名金閣寺在洛之北山　寺領三百石餘

鹿苑院義滿公建立應永四年

〔山城名勝志七葛野郡〕鹿苑寺在大北山村西北、開祖夢窻國師、相國寺末、

鹿苑寺寺說云、義滿公北山第、境內甚廣、總門紙屋川西北小路、今地藏院傍ニアリ、礎石在于今、御所號芳德、今方丈東北、至石不動堂邊、昔金閣廻悉池、芳德間架反橋、池南有拱北樓、東南有小御堂、東有

創建

地藏堂、安置軀、其地云地藏本、其像今金閣内一軀、石不動堂一軀相殘、其北有大塔、本尊彌勒、石不動堂
ニ有、方丈北有峯、號綴目峯、勝景地也、

〔翰林胡蘆集〕散說

同（應永）四年、北山搦別業、于時公（足利義滿）四十歲、爲謝万務也、其莊麗也、絕勝于古今、築黃金臺、鐵鳳翔
乎上、架拱北樓、長虹橫于空、山圍水繞、麀鹿濯々、白鳥鶴々、於牣魚躍、名花異草、奇石怪松、各得其所、昔
魏文皇帝弘、雅好浮圖之學、常有遺世之心、乃奉皇帝璽綬、傳位於太子宏、宏五歲、群臣奏曰、今皇帝幼
冲、万機大政、猶宜陛下總之、徙居崇光宮、宮在北苑、建鹿野寺於苑中、與僧居之、時談禪理、今公之別業、
與魏人似也、此時世子義持公、年十二歲、居于室町之邸、諸僚奉之、雖然事無大小、總之於北山殿、而有
公暇、則集禪林諸老而道話、圓顱方袍、孰爲相公、孰爲諸老、別業則今鹿苑寺、存乎什之一二耳、

〔翰林胡蘆集〕散說

前年康曆二年、公年二十三歲、建一禪院、未設其名、永德三年九月、以鹿苑爲名、親書額、以揭焉、吾佛光
師祖、開圓覺日、白鹿出遊、以故號山爲瑞鹿、師祖有普說、擧鹿苑之機緣、

堂塔

〔雍州府志（五寺院）〕葛野郡　鹿苑寺　在大北山、元西園寺公經公之山莊、而斯邊建西園寺、安置彌陀大
像、鐘中華之物也、遣使請之、置是寺、鐘今猶存、鹿苑相國義滿公、剃髮號道義、請斯處爲退隱之地、別賜
尾張國松枝庄於西園寺家、斯時西園寺亦移他處、應永四年、相公創北山第、相國自書鹿苑院額揭之、
庭設三重閣、第一號法水院、本尊釋迦、左右有觀音勢至、西壇有夢窓國師之像、幷鹿苑院道義之像、第
二號潮音洞、有自然木之觀音、幷四天王之像、第三號究竟頂、額後小松院之宸翰也、斯床三間四面也、
以板一枚爲床、未見有如此之樹也、凡閣之内外悉貼金箔、故世稱金閣、斯內有八境、所謂法水院、潮音
洞、究竟頂、鏡湖池、岩下水、龍門瀑、銀河泉、安民澤是也、池邊有九川八海石、幷有夜泊石、赤松石、赤松石
則赤松家之所獻也、應永十五年戊子三月八日、相公催後小松院行幸、駐斯地三箇日、其間有數品之

御遊、和歌會日、相公愛子義尙、令著關白之座上、是爲當世之美談、（〇中略）其後宅地遂爲寺、夢窻國師爲開祖、被寄三百石寺產、到今屬相國寺、近世光源院義輝公之弟周嵩爲斯寺僧、世稱侍者御所、

〔山州名跡志〕（七葛野郡）鹿園寺（或金閣寺）在北山龍平林中、　宗旨禪宗　寺（南向）　此所、故將軍義滿公山莊、應永四年四月造ル、莊觀美ヲツクセリ、後爲寺、號鹿園院、卽公ノ院號トス、有三重閣、以金箔鋄、故號金閣寺、

閣　在方丈西大庭、屋根寶形造、棟置鳳凰、（以滅金作、五尺許、）　閣（次第、自下至上、）第三　法水院（南面又知來殿）　第二　潮音洞（南面又鏡殿）　第一究竟頂（四方面）　粉壁、板敷、梁行、下中段五間半、南北四間、上段三間四面、下段東脇、面北ニヨセテ二間ノ所壁、其南一間開戶、是東ノ口也、戶ノ南幅一間ノ內緣、西ノ脇、面南ニヨセテ開戶、是內緣ノ西端也、戶ノ北二間ノ所壁、南面下緣、高サ一尺四五寸、如垣欄干アリ、內ノ間取、東ヲ勝手ニトリ、東西一間半、南北三間ノ空間、此所東ノ壁ニ寄テ昇上段梯アリ、其西三間半ノ所佛間、

佛間壇上　本尊　阿彌陀佛（坐像、二尺五六寸許、）作安阿彌　脇士　觀音　作運慶　勢至（共立像、三尺許、）作堪慶

脇壇　達磨大師（坐倚子、垂立兩手、長一尺二三寸許、座列自西至東、）夢窻國師像（坐倚子、垂立兩手、長一尺二三寸許、）大元像（坐倚子、插頭右手、長二尺許、）

西壇（〇中略）

塔（三重）　今無　應永四年六月、義滿公ノ建立也、　此所昔ハ西園寺公經公ノ山莊也、傍ニ寺ヲ建テ、號西園寺、（寺境見于下）依是公經公ノ末裔、以寺號稱號トナセリ、

〔梧窻漫筆拾遺〕予（〇太田錦城）京師に在留の日、北山の鹿苑院の金閣寺へ兩度、東山慈照院の銀閣寺へ一度參詣せり、金閣の金は、今にのこれり、銀閣の銀は、少しものこらず、さて當時は、光麗なることなるべし、されども今より見れば、金閣の池などは、餘程廣けれども、一體の分內狹少にして、今の諸侯の別莊などに比擬すべきに非ず、銀閣の庭は、殊に狹少にして、今の商買の別莊位なり、義滿、義政、天下を領する勢にて、其侈如此に過ぎず、是にて今の世の富貴繁華の盛を知りて、此世に生

寺領

れて逢ふことは、悦ばしく樂しき難レ有こと、は思へ。〇下略

〔蔭凉軒日錄〕文明十八年正月十八日、相公問曰、鹿苑東門始而建レ之、何處舊門歟、愚白、東福寺正法院之門也、其本房乃南禪方丈是也、去年御一覽之由在レ之、正法乃吉良殿塔頭也、又曰、此門之上假葺歟、愚白、當職節迫建立、以二故假一葺レ之、必可レ改レ葺也、當院殿宇大概備矣、未二全備一者昭堂也、又可二改立一歟、曰、此房舊何處房歟、白、東福常照院之房也、上池院三位法眼檀那處也、房小故廣レ之、

〔大乘院寺社雜事記〕應仁元年六月廿二日、北山鹿苑寺成レ陣、金堂以下破却、以外口法也、一字無レ之無爲云々、小御堂先年炎上取立候處、又破却畢、北山式中々無二是非一、西方陣也、

〔鹿苑寺文書〕鹿苑寺之儀、當住持逐電之上者、今度寺領按割令二改易一、新住持申付候、然上、先坊主之時之借錢以下、彼寺物之內、申懸者雖レ在レ之、承引不レ可レ仕、若違亂之者於レ有レ之者、急度可二申越一候、山林等猥不レ伐二採樣一ニ、堅可二申付一事肝要候也、

慶長三年九月十六日　德善院玄以花押

鹿苑寺役者中

〔寺鑑下〕禪宗五山派　京都相國寺末　山城國北山　鹿苑寺

右住職、金地院々申付ル、

御朱印　高三百五拾石

參詣

〔蔭凉軒日錄〕文明十七年十月十五日、鹿苑寺御成事、〇中略一番走來時、愚奉レ迎二台輿一、依レ雨於二廊下端一卸二台輿一、愚前引二入金閣一、相公〇足利義滿立二緣一向二東方一、住持維馨向二西方一、相揖入レ座、鹿苑院惟明、等持院桂室、崇壽院錦江、相國寺伯升、等持寺春陽著座揖二坐具一、愚見二給仕一、持二御飯一而低頭而入、坐二置坐具一居、相公右邊之下位、御齋如レ恒、〇中略相公曰、池水減少如何、答曰、今年天旱爲レ用レ水、今度御成之前、入レ水之由白レ之、御一咲曰、水之入方何方、愚指二北方一白レ之、彼瀧頭有レ池、相公被レ諾、愚白、前年亂中楓樹太半斫レ之由白、相公

曰、此亭脊亦燒之、愚應台言、御一咲、金閣可有御登否奉問之、可有御登覽云云、愚先行、御伴衆可被參由白之、將登級、相公曰、伴衆如何、愚曰報之、愚又往喚御伴衆、畠山中務少輔殿佩御劍、鈍漢之故、遲參遂登閣上、御伴衆畠山中務少輔殿勢州、同因州、相公對觀音御立、愚曰、此觀音像、亂後安之、本之觀音者亂中失却、此觀音小於本之觀音也、又潮音洞額誰筆蹟、答曰、鹿苑院殿被遊歟之由白之、相公曰、池之南邊曾有一園之大樹、今無之、亂中斫之歟、答曰、亂中斫之、又泉水之中島曾有楓樹、亂中斫之歟、兩島皆有楓樹、皆無之、愚曰、亂中斫之云云、御登究竟頂、相公熟御覽究竟之額、曰、額之字如何以實答、誰筆蹟、答曰、宸翰也、究竟之意如何、最上之儀、又有究竟天云云、入殿愚曰、曾安阿彌陀三尊、同有二十五菩薩、今者白雲計相殘也、相公曰、根本爲舍利殿乎、愚曰、諾、又指瀧頭白之、相公亦指其攸爲然、而自閣下、愚前下、見台輿之出門還矣、

名稱
所在

廣隆寺 桂宮院 附入

廣隆寺ハ、一ニ蜂岡寺ト云フ、山城國葛野郡太秦村ニ在リ、推古天皇ノ朝、秦河勝、厩戸皇子ノ爲ニ建立セシ所ナリ、本尊藥師如來ノ像ハ、陽成天皇ノ時、別當道昌、丹後國石造寺ヨリ移シシモノナリ、

桂宮院ハ、本堂ノ西ニ在ル八角ノ堂ニシテ、厩戸皇子手刻ノ如意輪觀音ノ像ヲ安置ス、

〔伊呂波字類抄〕〔久諸寺〕廣隆寺〈推古天皇二十年壬午秦川勝建立、號蜂岡寺、今世號太秦、〉

〔廣隆寺來由記〕廣隆寺

廣隆寺者、秦川勝賓名也、川勝奉命創建當寺、有功勳、故以賓名爲寺號、

〔拾芥抄〕〔下本諸寺〕廣隆寺〈東寺末、太秦、又號蜂岡寺、河勝建立、藥師佛、〉

創建

〔雍州府志寺院五〕葛野郡　廣隆寺　在法金剛院之西、本尊藥師、而爲眞言宗、有寺產六百石、始號秦公寺、相傳秦徐福來日本、其子孫皆稱秦氏、其裔秦河勝建斯寺、故號秦公寺、或謂桂林寺、又稱蜂岡寺、或號香楓寺、或稱三槻寺、終號廣隆寺、太子眞蹟額子今存、

〔山城名勝志葛野郡八〕廣隆寺〇中略

緣起云、當寺五箇之寺號事、

蜂岡寺（太子行詣此地之時、五百賢聖現蜂虫故、）　秦公寺（秦河勝奉勅建立故、）　桂林寺（太子臨御之時、楓林太雪充滿四方、或桂木空虛之中、成宮殿樓閣故、）　三槻寺（向日明神雖諸木默、影向槻木、其木忽然榮枯、依此三奇特故、）　廣隆寺（廣隆者河勝實名也、此臣奉勅營當寺、盡勤功故、）

水原抄云、（宇豆麻佐）又號葛野寺、

〔日本書紀推古二十二〕十一年十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得是像以恭敬拜、時秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺、

〔廣隆寺來由記〕夫惟慈雲起西天、法雨霑東土、漢帝感夢、白馬未經自時、厥後半滿之教區分、大小之乘並驚、我聖德太子、降誕日域、玄教聿宣、白業資始、以故普天之下、咸沐聖澤、率土之濱、廣植佛種、興法流行、無非聖德洪恩、救世方便、偏賴上宮峻德、大哉至矣、不可得而稱焉、粤稽廣隆寺跡、推古天皇十二年甲子秋八月、太子語良臣秦川勝曰、吾前夜夢、此去北十餘里、至一勝地、楓林蓊鬱香氣芬芳、於彼林中、有大朽木、五百賢聖、來集此處、讀誦般若理趣分、或天童自空飛來、以妙香妙花、供養諸賢聖、或自其朽木、放火光明、忽發微妙音聲、演說無上妙法、於此林中、汝率親族待吾、慇懃川勝拜稽曰、臣食邑與夢相符、早須歷覽、太子唯々命、忽川勝欣然前導、此夕宿泉河濱、太子謂左右曰、我歿二百五十年後、有一苾蒭、建寺弘道、大興佛法、是我後身也、（二百五十年後者、當寺中興、道昌僧都時、）其弟子等、傳法相承、須佛教繁興也、越翌日、屆兎途橋、川勝眷屬等、各獻調膳於太子、其侍從臣、及輿儓等、二百餘人、皆悉飽食、太子大悅、此日抵大堰鄉、徘徊顧瞻、恰如前夢、楓林之中、有大桂樹、異香芬馥、其樹中虛、有小寶閣、光明燦爛、尋常衆蜂群聚、

喧發奇聲、其邑童子、拂逐不去、諸人異焉、太子覽之、則千二百大阿羅漢勝集演說法華、勝鬘、維摩、諸大乘經、只因機見不同、凡夫見之則爲衆蜂、太子覽之、則爲賢聖、於是太子、假造宮殿、稱楓野別宮、太子曰、我相是攸地靈形勝、南豁開朱雀地渺々、北閉塞、玄武峯峨々、東有青龍河、西通白虎路、四神相應擁護釋典、苗裔綿々不墜舊軌、須知是我後身也、（今平安城是也、太子創宮寺時、預記當來事如此、）○三百歳後（三百歳恐二百歳誤、桓武帝遷都自此年、百八十一年後也、）有一聖皇再遷都於此、興隆佛法之靈區也、由是永祝聖壽萬歲、偏祈台齡千穐、更希海晏河淸、八紘昇平、風調雨順、萬民康樂云爾、

即以厥事奏聞皇帝、遂命秦川勝建蜂岡寺、（廣隆寺是也、）以自新羅、百濟所獻之佛像等、安置堂宇、以寺前水田三十町、寺後林野六十町、喜捨于當寺、其餘寺田若干畝、別有記錄、以假宮、新爲梵宮、故號桂宮院、誠是當寺者、北京最初伽藍、首傳佛法之靈區也、由是永祝聖壽萬歲、偏祈台齡千穐、更希海晏河淸、八紘昇平、風調雨順、萬民康樂云爾、

〔續古事談　四神社佛事〕廣隆寺ハ、上宮太子、秦河勝ガモトヘ、御ケルミチニ、ハチヲカノホトリニ、假屋ヲツクリテ、御儲シタリケル所ヲ太子御覽ジテ、コノ所地形、イミジキ所也、三百歳ノ後ミヤコヲ此所ニ移シテ、佛法ヲ崇テ、帝王ノ苗胤アヒツギテ絕ベカラズトノ給テ、十箇日トヾマリテ、コノ所ヲ楓野別宮トイフ、其後寺ニナシテ、河勝ニタマフ、寺ノ前ニ水田三十町、ウシロノ山野六十町、オナジク給ヒケリ、コノ寺ノ本佛ハ、百濟國ノ彌勒也、光ヲ放給フ佛也、藥師佛ハ客佛也、

〔廣隆寺來由記〕安置廣隆寺三尊記事（三尊安置一廚子）

本尊

金銅彌勒菩薩（座像高二尺八寸）

推古天皇十一年癸亥、自百濟國獻之聖德太子、太子於小墾田宮賜之秦川勝、此像靈驗不可思議、恭敬尊崇、人無不成願也、○中略

金銅救世觀音像（座像高二尺、二臂如意輪也、）

推古天皇二十四年丙子秋七月、自新羅國王遣使奉獻、此像放光時々有怪、太子命秦川勝造曰、佛有靈輙不可垢、宜安置淸淨堂、不得恣拜、俗之癡人若有觸犯、彼必被禍、護法之神、毘沙門王、不應爲

善、（詳于聖德太子傳曆）川勝奉命安置蜂岡寺、垂錦帳致尊崇、自爾以後、爲敬佛之良範、垂錦繡帳蓋始此矣、

檀像藥師如來（立像高三尺）

山城州乙訓郡有一字社、號乙訓社、（今向日明神是也）昔入西山採薪人、暫憩此社、社前有一神木、經年樹枯、彷彿株杭、時々放光、憩社人以彼樹須臾間造佛像、唱南無藥師佛、安置此社、其人立失所在、故知此像向日明神權化神作、靈異不可思議、（中略）○清和天皇御宇貞觀六年甲申、天皇不預、勅廣隆寺道昌僧都加持、僧都奏曰、傳聞、西阜願德寺藥師佛、靈應最勝、只願奉此尊像當寺、奉祈聖壽云々、天皇速下勅請尊像於當寺、於是向日明神追隨衞護垂蹟當寺、

〔日本書紀 二十二 推古〕三十年七月、新羅遣大使奈末知洗爾、任那遣達率奈末智、並來朝、仍貢佛像一具、及金塔幷舍利、且大灌頂幡一具、小幡二十條、卽佛像居於葛野秦寺、以餘舍利、金塔、灌頂幡等、皆納于四天王寺、

〔續古事談 四 神社佛事〕昔攝津國ニ、富原ト云所ニ、翁アリケリ、家ノ前ナル梅樹、夜々光リケリ、アヤシミテ、此木ヲ切テ、一探手半ノ藥師ヲツクリタテマツリテ、丹後國石造寺ニウツシタテマツレリトモイフ、（中略）○或說云、旱シケル時、道昌、大井川ヲセキテ祈ケルニ、時ノ人イフヤウ、石造寺ノ藥師佛、靈驗ノ佛也、ソレニ祈ベシ、道昌コレヲ聞テ、暫奉迎テ祈ニ、ソラクモリテ、雨コヽロヨクフリニケリ、サテヤガテ、廣隆寺ニ安置シタテマツリテ、新佛ヲ作テ、彼寺ヘハワタシタテマツリニケリ、サテ廣隆寺ハ繁昌シ、石造寺ハアレニケリ、

此僧都（○道昌）水尾ノ帝（○清和）ノ御持僧ニテ、廣隆寺ノ別當ナリケル時、御藥アリテ、僧都ヲシテ、祈念セシムル時、僧都申樣、大炊寺ニ靈驗ノ藥師佛イマス、彼佛ヲ廣隆寺ニ安置シテ、コヽロミニ奉祈ラント、スナハチ宣旨ヲ下シテ、此佛ヲ廣隆寺ニ奉移、七日祈奉ルニ、玉體平安也、其後大炊寺ノ聖人、道昌僧都ガモトニユキテ、御惱平愈シ給ヌ、カノ佛モトノ如クカヘシワタサルベシトイフ、道

堂塔

昌アヘテキカズ、聖人ナゲキテ、寢食ヲワスレテ、鬱ノアマリニ、醍醐ノ聖寶僧正ノモトニユキテイフヤウ、大炊寺ノ藥師佛、道昌ヌスミテカヘサズ、取カヘサントスルニ、力オヨバズ、イカヾスベキ、聖寶イフヤウ、イトヤスキ事也、スミヤカニトリカヘシテン、タヾシ廣隆寺四壁、マタクシテ、タヤスクヤブリガタシ、ソノ日、ソノ時ニ、人夫千人ヲ、大極殿ノ邊ニマウケテ、我ヲマツベシ、ワガチカラニテ、ナドカトリカヘサヾラントイフ、ヒジリ悅テ、歸テ人夫千人ヲヤトヒ、アツメテ、ソノ日ニナリテ、大極殿ノ邊ニ備テ、僧正ヲマツニ、タマ〳〵出キテイフヤウ、其藥師佛ハワヅカニ一揲手半也、一人シテモトリテン、千人ノ夫ハ、東大寺ノ大佛ヲヌスムベキナリト、アザケリケレバ、聖人不足言トテヤミニケリ、

〔廣隆寺資財帳〕法物章　檜皮葺伍間、講法畫堂壹宇、有庇肆面、(高一丈三尺、長八丈、廣四丈四尺、)　金色阿彌陀像壹軀、(居高八尺)故尙藏永原御息所願、　細色、地藏菩薩像壹軀、(居高六尺五寸)　細色、虛空藏菩薩像壹軀、(居高六尺五寸)已上檢校權律師、法橋上人位、道昌願、　細色、毘沙門像壹軀、(立高四尺)故從五位下良階貞範願、　金剛般若經壹□(表紙黃色黑漆)　田邑口天皇御願以貞觀二年書寫安置、　法華經參部　人人願經　最勝王經貳部　人人願經　法華經壹部　無量義經一卷　普賢觀經一卷　最勝王經壹部　般若心經二卷、　已上、左坊城判官正七位上秦宿禰貞棟願　白銅香爐二具(一具有蓋、大別當玄虛法師奉納、一具無蓋、本自所有、)　金銅火爐三口(一口故尙藏永原御息所奉納、一口徑五寸、一口徑六寸五分、本自所有、)　白銅行香調度壹具(但爐無蓋、本自所有、)　金銅花瓶伍口(高各七寸五分、大別當玄虛法師奉納)　糸花蘰貳拾縣、(人人奉納)　唐甲纈幡貳拾捌流(長壹丈五尺)　檢校道昌律師奉納中○略　鐘樓壹基(高三丈、自土居上至于板敷、一丈三尺六寸、從柱上至于桁、一丈四尺、長二丈八尺、廣一丈九尺五寸、)　銅鐘壹口(高□寸、厚四寸、徑三□□寸、周九尺六寸)以承和九年鑄成、檢校道昌律師御願、　一常住僧物章　檜皮葺、伍間食堂壹宇(高一丈二尺五寸、長四丈六寸、廣一丈九尺)　檜皮葺玖間僧房壹宇(中破高九尺長八尺九寸廣一丈六尺)　板葺拾壹間僧房壹宇(高一丈一尺五寸、長九丈六尺、廣一丈五尺)　板葺陸間僧房壹宇(高八尺五寸長九丈六尺廣一丈六尺)　板葺陸間僧房壹宇(高九尺、長五丈、廣一丈六尺)已

上以嘉祥年中造立也

一通物章　檜皮葺寶藏貳宇(南倉、高一丈二尺、長一丈九尺、廣一丈五尺、北倉、高一丈一尺二寸、長一丈九尺、廣一丈六尺三寸、)　檜皮葺長倉壹宇、(校、高六尺七寸、長五丈一尺一寸、廣一丈一尺、)　草葺倉壹宇(高一丈一尺、長一丈六尺六寸、廣一丈二尺、)　板葺甲小居倉壹宇(高八尺、長一丈三尺二寸、廣一丈二尺一寸、)　板葺漆間政所廳屋壹宇、(高九尺、長六丈三尺、廣一丈五尺、)　板葺拾壹間廚屋壹宇(高九尺、長十丈五尺、廣一丈六尺、)　板葺伍間大炊屋壹宇(高九尺、長六丈、廣一丈六尺、大破、)　板葺伍間湯屋壹宇、并在庇壹面、(高八尺、長三丈八尺、廣一丈六尺、中破、)　板葺伍間厩屋壹宇(高八尺、長三丈、廣一丈六尺、大破、)　板葺門屋壹基(高一丈)　板葺伍間客房壹宇(高八尺五寸、長四丈二尺、廣一丈六尺、)　檜皮葺南大門壹基(高一丈三尺一寸、長三丈、廣一丈八尺、)　檜皮葺東大門壹基(高一丈三尺、廣一丈、)　檜皮葺西大門壹基(高一丈、長一丈三尺、廣一丈、)

〔山州名跡志(八葛野郡)〕廣隆寺　在太秦　宗旨三論兼眞言　境地南面　樓門(南向)　金剛力士(九尺許)
新作　堂(南向)　本尊藥師佛(立像、三尺許)　神作　左　聖觀音(立像、二尺四五寸許、)　右　彌勒佛(座像、三尺許)　安同厨子　日天、月天、(立像、四尺許、)　安厨子外作定朝　十二神(三尺八九寸許)　同作、安壇上左右、　此外千手觀音(立像、八尺許、)　烏作、安東壇　阿彌陀佛、春日作、安西壇、始各堂アリ、○中略　太子堂、在堂西北東面　聖德太子(三十三歳影像立像、五尺、衣冠、持笏香爐、)自作、　歴代天子、此影被進御裝束、當其撰人奉著御也、

〔類聚國史(百七十三諸寺)〕弘仁九年四月丙子、太秦公寺災、堂塔無遺、

〔百練抄(七近衞)〕久安六年正月十九日、廣隆寺燒亡、

〔廣隆寺來由記〕近衞院御宇久安六年庚午正月十九日、當寺佛閣僧院等焚毀、厥後經十有六年、二條院御宇、勅武藏國刺史右金吾信頼而令再造當寺、已經五年、殿堂門廡庫廩庖湢、咸皆具備、改舊時觀、廼涓吉日良辰、永萬元年乙酉六月十三日庚寅、設供養法筵、勅使院使著座、公卿武家衞護、其儀尤嚴、(別有記録)御願文曰、

夫廣隆寺者、聖德太子經始之砌、醫王善逝恒轉之場也、謂其崇重、則漸亘五百載之星霜、思彼靈驗、又

寺領

普滿三千界之國土、佛法恒轉之勝地也、善根繇是繁昌、僧侶常住之仁祠也、香華敢無斷絕、然間久安六年艶陽初月、寺中有災、忽遭回祿之殃、炎上揚焰、難施欒巴之術、梵宇雖化孤煙之色、靈像適全滿月之容、彼時、仙院白河○後殊降綸言、或課國宰、新勵土木之功、或勸寺家、徐盡輪奐之美、其後時代相遷、更泥緇構之勤、光景屢轉、未遂供養之志、今抽淸淨心之懇誠、奉仰瑠璃光之弘願、仍建立檜皮葺七間四面金堂一宇、奉安置本尊藥師如來像一體、金剛彌勒菩薩像一體、金銅如意輪像一體、八尺十一面觀音、不空羂索等像各一體、等身文殊師利菩薩像一體、同十二神將像、但件佛菩薩等者、往古靈神也、如元安置、殊以歸依、建立五間四面堂一宇、奉安置一丈六尺阿彌陀如來像一體、一丈六尺地藏、虛空藏等像各一體、等身不動明王、吉祥天女、頻頭盧像各一體、謂堂舍、謂門廊、一寺莊嚴、數字造畢、三間三面常行堂一宇、安置三尺阿彌陀如來、一尺六寸觀音、勢至等、二菩薩像各一體、廻廊之內奉安置聖德太子像一體、號之上宮王院、奉崇往代像、茲外佛是皆新造新調、中門安置丈六金剛力士像幷八夜叉等像、左建鐘樓之基、高懸九乳之洪鐘矣、右起經藏之勢、尊置一切之諸經焉、奉書寫金泥本願藥師經一卷、奉摺寫墨字同經一百卷、便涓林鐘六月之良辰、供養展梵○梵恐衍筵屢囑羅衲卅口之禪侶、梵唱唱響、十萬之聖衆悉臨省○省恐皆誤到于廣嚴城之露地、三界之群類旁集、疑瀉○瀉恐寫誤、於樂音樹之風儀○中略因攸及利益無邊、敬白、

永萬元年六月日

〔百練抄八高倉〕承安二年三月廿二日、廣隆寺內塔供養、

〔廣隆寺資財校替實錄帳〕一水陸田、　合肆拾肆町壹段貳佰柒拾捌步、四條郊田里、陸町貳段佰貳拾柒步、二町二段二百步畠、二町二段三百卅四步安養寺所入、段百七十步田七段七十七步常荒八段六十八步荒　一　同條殖槐里、拾町柒段貳佰伍步五町三段百廿七步入安養寺、五町二段七十八步田二段常荒、並寺家所領、　五條荒蒔里、拾伍町貳段佰伍拾貳步四町三段十四步常荒九段二百八步田三町九段二百九十步畠六町寺院　同條立屋里、畠貳町、　同條市川里、貳拾陸町參段貳佰拾柒步十二町七段九十六

歩、田三町五段三百廿八歩、畠九町九段百五十三歩、常荒一段、年荒畠、　六條並里、五段、二段田、二段畠、一段川成、　同里、上木島里、十二坪二段、

七條牛養里、貳町捌段貳佰玖拾漆歩、皆入京、　池壹處在六條並里十七坪、已上水陸田其町段歩數、依圖

帳勘知之、荒廢見熟、依實校之、圖者天長圖也、四證圖之、

〔朝野群載 二文筆〕廣隆寺緣起字秦公寺、一名蜂岡寺、謹撿日本書紀云、推古天皇十一年冬十一月己亥朔、皇太子上宮王、謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得此像、將以恭敬、秦造河勝進曰、臣拜之、便受佛像、因以造蜂岡寺者、謹撿案內、十一年冬受佛像、小墾田宮御宇推古天皇卽位壬午之歲、〇三十年奉爲聖德太子、大花上秦造河勝、所建立廣隆寺者、但本舊寺家地、九條河原里、一坪二坪十坪十一坪十三坪十四坪廿三坪廿四坪廿六坪卅四坪、同條荒見里社里、十坪十一坪十四坪十五坪合拾肆町也、而後地頗狹隘也、仍遷五條荒蒔里、八坪九坪十坪十五坪十六坪十七坪幷六箇坪之內、卽施入水陸地肆拾肆町肆段壹佰玖拾貳步也、又去延曆年中別當法師泰鳳、竊取流記資財帳等逃亡、又去弘仁九年逢非常之火災、堂塔步廊緣起雜公文等悉燒亡、然則此寺緣起資財帳等、共燒亡、或散失、雖然或地治開付圖帳、或地常荒未開發、或地入京未入其替、今爲後代粗注其由、留置寺家、以爲累劫龜鏡、

承和三年十二月十五日　　檀越大秦公宿禰永道

大別當傳燈大法師位壽寵　　法頭朝屋宿禰明吉

少別當傳燈大法師位道昌　　都維那傳燈滿位僧惠最

上座傳燈滿位僧賢禎　　寺主傳燈滿位僧安惠

〔廣隆寺文書 坤〕當寺門前境內地子之儀付而、今度太秦之內御藏納之御代官長谷川法眼より申分雖有之、先年御朱印之筋目ニ無異儀申極候之條、彌如先々、永可有寺納狀如件、

慶長二三月五日　　德善院

廣隆寺

總中

〔廣隆寺文書坤〕太秦廣隆寺

山城國太秦之内六百石之事、全可寺納、幷門前境内諸役爲免許之狀如件、

元和元年七月廿七日　家康黑印

太秦廣隆寺

什物

〔續史愚抄中御門〕享保五年五月十六日壬午、召廣隆寺聖德太子御像及重器於宮中、有叡覽、次召法皇御所者、基長卿記

寺職

〔海人藻芥〕廣隆寺者、總撿校御室、別當職者、佐々目額助僧正以來、上乘院門跡進止云々、

參詣

〔日本紀略三十二條〕長和三年五月五日庚寅、東西京貴賤擧首、參廣隆寺、人云、寅年五月五日庚寅日、藥師如來、奉安置此堂之故也、

〔中右記〕大治二年十二月五日庚申、此曉新院、從廣隆寺還御、民部卿以下、上達部七人、殿上人頭中將以下卅人許、參仕云々、去三日雖可有還御、天一神方延引也、從内有御誦經、使頭中將忠宗、又院還御以前、有御誦經、本寺別當權僧正勝覺給御馬、御修法、御讀經、御念誦、結願殿上人給布施云々、諸受領進上米二千、布二千、綿三千、小袖百領給寺僧云々、

〔長秋記〕大治四年十一月廿日甲子、臨曉參院、〇中略治部大輔招予〇源師時示云、自明日、女院〇待賢門院鳥羽皇后藤原璋子令籠廣隆寺給、其間候御共可致其沙汰由可被仰也、而所案不可然歟、近日、兩院〇鳥羽及待賢門院不和御座、而指分令候一方給、不被甘心事也、不如申障不令參給ニハ、此事可然〇中略顯賴傳院宣云、自明後日、女院可令參籠廣隆寺給、其間祗候、諸事可尋沙汰、又取御氣色、可請御修法阿闍梨、又康和本院〇白河天治新院鳥羽〇度有勅使、今度可同歟、於祿不可候歟、且其間事可量申者、返事申云、自去大原野行幸、途中損腰、久不出仕、今夕相扶、參院間、其病更發懸、俄退出、如只今者無術計、加療治減氣候者、可參

籠、不然者爲之如何云々、　廿二日丙寅、女院廣隆寺令參籠給、　卅日甲戌、女院此曉自廣隆寺出給、

五年九月五日甲辰、於院〇鳥羽有和歌、〇中略仰云、自明後日可令籠廣隆寺御也、而例幣間可有憚之由人々申云々、其事可量申中宮大夫〇藤原宗忠治部卿〇源能俊云、年來無此沙汰、但沙汰發者可有憚歟、別當云、故院〇白河御時、御出家已前、毎諸社祭有奉幣、而當院御讓位、剩故院仰云、予俗間毎祭諸社奉幣、件事極有煩、後悔尤甚、尤不可在事也者、仍當院無件事及九箇年、而始依此難出來、所被尋仰也、兩卿被申云、於過方事、於今如何、沙汰出來後、尙可有其憚、故何、近來作法、諸事院御沙汰也、使若行事官等假故障出來時、申事由、間參寺中、爭無其憚哉者、於御物籠不可有日定、雖何月日、何煩候矣、於例幣定日事也、不可改定者、後日令遂御願御、何事候矣、民部卿〇藤原忠教云、自下臈次第可申上、右兵衞督申云、本自無此沙汰、何始有其議矣、若自今以後院中可有神事者、如寬治間諸社奉幣可候歟者、兩端間可隨勅定、下官〇源師時申云、大略同、右兵衞督定申諸后在職時有神事、院號後無其事、唯是御讓位後可神事候由不令存、而故院讓國後有神事、依此例猶豫思給處也、不可有憚之由眼前令申、御幸後又無神事多年序過畢、近則十一月神事間、有御熊野詣事者、於今不可此沙汰候歟、右衞門督民部卿內大臣被申此趣、關白同治部卿申別當奏此旨、〇中略　七日丙午、院令籠廣隆寺給、〇中略　九日戊申、參廣隆寺、右衞門督、新宰相、應召被參御前云々、入大門之間、別當以消息被尋云、前夜備後前司入道、俗名實兼逝去、依是女院〇待賢門院明日令參此御寺給事、可有憚否、院三日御服御座、故有此尋歟、〇中略　十日己酉、女院一定令詣廣隆寺之由有其告、仍日沒參仕、新宰相長實、內相府進具之由相語、秉燭後出御、乃著御寺東廊北面、義車、御車馬道西也、如七日、供奉人、民部卿、新宰相、右兵衞督、下官等也、家保朝臣奉御車寄、〇中略　十四日癸丑、曉鐘報間、中務少輔入來、同車參廣隆寺、〇中略　此後還御、兩院同車、使御覽新御堂地、風流善也美也、

〔帝王編年記二十六〇龜山〕文永三年二月七日、一院〇後嵯峨御幸西郊、卽幸法輪寺、幷廣隆寺等、

雜載

〔新古今和歌集 雜十八〕れいならで、うづまさにこもり侍りけるに、こゝろぼそくおぼえければ、

周防内侍

かくしつゝゆふべの雲となりもせば哀かけても誰か忍ばむ

〔百練抄 十六 後深草〕寶治二年三月十九日丁卯、廣隆寺法花會也、有舞童等、或日去十一日延引、此廿八年之間中絶、今年被興行、

○

桂宮院

〔雍州府志 五 寺院〕葛野郡 廣隆寺 ○中略 桂宮院、太子之所住也、其内八角堂、太子所自修造、而有所手作之如意輪觀幷音中華佛工所作之彌陀、及太子自作之像、

〔山州名跡志 八 葛野郡〕廣隆寺 ○中略

桂宮院 在金堂西一町餘、 門 東向 方丈 南向 堂 東向、形八角、 在中門内、 世俗稱太子堂、 太子於此念誦、故號御念誦堂也、

〔山城名勝志 八 葛野郡〕桂宮院 在廣隆寺西側、

〔廣隆寺來由記〕桂宮院 有八角堂、太子自運土木經營、安置太子手刻如意輪像、以爲本尊、又有手刻肖像幷隋煬帝所獻阿彌陀如來像、

〔聖德太子傳暦 一〕推古天皇十二年八月、○中略 臨楓野大堰而宿、造假宮於蜂岡之下、不日而了、太子御之、○中略 稱楓野之別宮、後以宮爲寺、賜川勝造、

〔廣隆寺文書 乾〕元弘以來被收公當寺領、幷當知行地事、如元不可有相違之狀如件、

建武三年十月廿日　花押 ○足利尊氏

桂宮院長老

〔廣隆寺文書 乾〕桂宮院領山城國桂新免可爲三論宗長日講演料所事、

右當院者、斑鳩太子經始之舊基也、當宗者、羅什三藏弘通之遺敎也、於此靈地傳彼大乘云寺云法可

歸可崇、是以寄附一村湫隆之栗田、而爲長日講讀之料所、寺號則桂宮院矣、寺領又桂新免焉、以名稱之符合、知純熟之機緣、仰冀法水永湛、期三會之時節、悉地圓滿、達二世之願望、懇祈之旨、大較如件、

曆應二年十二月廿七日　　左兵衛督源朝臣〇直義花押

〔廣隆寺文書乾〕義持

桂宮院事、可爲祈願寺之狀如件、

應永廿七年四月十七日　　花押

住持

妙心寺

名稱
所在

妙心寺ハ、山城國葛野郡花園村ニ在リ、花園法皇大德寺ノ開祖妙超ノ弟子慧玄ニ歸依シ、離宮ヲ賜ヒテ蘭若ヲ創メシム、卽チ當寺ナリ、宗派ハ臨濟宗ニ屬シ、始メ十刹ノ位次ニ居リシガ、後紫衣ヲ賜ハリテ、大德寺ト相比肩スルニ及ビ、屢同寺ト寺格ヲ爭ヒシ事アリ、子院ノ內、玉鳳院ハ花園法皇離宮ノ趾ニシテ、其居室ノ如キハ、今猶當時ノ樣ヲ存シ、其寺格ハ妙心寺ノ外ニ獨立シ、開山ノ塔ヲ微笑庵ト云フ、又第二世授翁ノ塔アリ、天授院ト云フ、寺傳ニハ、授翁ヲ以テ、藤原藤房ノ隱遁後ノ名ナリト稱ス、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　妙心寺　號正法山、大德寺大燈國師之法嗣、關山慧玄之開基、而花園法皇爲檀越也、斯地元左大臣清原夏野之宅地、而種群花於苑中、依之號花園、然法皇愛斯地之風景、則爲行宮、別於洛北賜宅地於夏野、今花園村是也、法皇深好禪法、歸依關山、終捨宮爲寺、

〔壒嚢三十二〕西京正法山妙心禪寺の地、昔し籍田の跡にして、後行在に擬して宮殿を建、花園を治

創建沿革

め玉ふ、時の人花園離宮と稱せり、延喜中回祿せり、白河院御宇園を以て左府仁公〇源有仁に賜ふ、仍て池館を開て燕居せり、世に是を花園の亭といふ、花園左大臣の稱これなり の假山園囿、奇樹名花、西都の一壯觀なりしが、一旦兵災に厄して烏有となれり、延喜帝此地に離宮を營したまひし故、花園の御所といふ、花園院是なり 吉野先帝の時、上皇花園帝 御園を捨て蘭若とし關山和尙を以て開山第一祖とし玉ふ、上皇は萩原にうつりたまふ故、或は萩原院とも稱せし、 晩に寺後に玉鳳院を建て、仙居し玉ふと云々、大内義弘亂を發せし時、寺產を沒せられ、應仁元年の大亂に曠墟となれりとかや、明應五年正月、英朝が寺記に見えたり、

〔山城名勝志八葛野郡〕妙心寺號正法山、花園院御建立、開山惠玄禪師、

應仁退轉後、南禪寺一山派廷用兼帶、其後利貞尼殘僧集興之、日峯和尙爲中興、方丈被馬寺引移云々、

正法山六祖傳云、妙心開山玄禪師 師諱慧玄、嗣大燈國師、信州人俗姓源氏、高梨高家之孫也、後醍醐天皇、詔國師入內、于時國師不安、命師而代云々、萩原太上法皇、道甘露寺亞相藤氏宣諭曰、朕將捨花園離宮以成禪苑、當請關山令住持、願預賜山號寺號、國師便應聖旨、進正法山妙心禪寺之號、蓋用拈華微笑因緣、而配上皇於梵王、擬花園於一枝、稱關山爲迦葉師兄者也云云、於是草創正法山妙心禪寺、特降勅黄、請師開山、〇中略

後土御門院綸旨　妙心寺者、花園法皇、革離宮被爲禪刹之名藍也、

文明九年後正月廿六日　左中辨象顯

〔妙心寺文書一〕往年、在先師大燈國師所、於此一段事、得休歇、特傳持衣鉢之後、報恩謝德之思、興隆佛法之志、寤寐無忘、而心事依違、于今未遂其願、頃年病痾纏壺、旦夕難期、空塡溝壑者、永刧之恨、何事如之、仍一流再興、幷妙心寺造營以下事、申置仙洞、候子細在之、縱過一瞬必可滿平生之志、門徒之中、其仁不在、它廻遠慮、可被果興隆之願、故遺鳥跡、述舊懷者也、

貞和三年七月廿二日　御花押○花圖

開山上人禪室

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　妙心寺○中略妙心寺、應仁之亂、悉亡滅、南禪寺中一山派廷用和尙、兼帶斯寺、爾後利貞尼公請妙心寺發僧再興之、日峯和尙、爲中興祖云、

〔國師日記〕一東照大權現御在世之時、鐵山と愚僧と兩人被召出、直に被仰下候ハ、近年諸寺之出世、猥ニ執行之事、佛法を容易ニ仕が故也、自今以後、鐵山者佛法之中興、愚僧者寺領之中興と罷成候而、妙心寺退轉なき樣ニ可申付、佛法世法兩人ニ被仰付候、殊ニ御朱印壹通令頂戴候其時の段々、國師和尙能々御覺可被成候、誠以忝次第と存、兩人罷歸、一山へ遂披露、方丈ニ納置候、其後鐵山遷化被仕、愚僧老衰故、一山の長老衆へ、萬事任置候處、若輩之衆猥出世仕、背御上意候故、色衣御押置被成候而、迷惑候處に、東照大權現十三回御祭禮故、立入院幷五十以上之衆、蒙御赦候事、是又忝次第と存候、就其以來可相守御朱印との一札可仕旨被仰付候、寺中若輩長老等一統仕申候しハ、東照大權現之被下候御朱印之文言ニ、千七百則公案と御座候へ共、左樣ニハ年來家傳之古則其數ほどハ無之、三十年工夫と御座候得共、左樣ニハ年久ハ成間敷と申度、鐵山愚僧と兩人御朱印頂戴仕候、心中ニハ相違仕候、其故ハ、千七百則と申候ハ、傳燈錄ニ載所之祖師之數千七百一人也、大數を以、千七百則と準じて申事、其一家傳古則了畢仕候へバ、千七百人之祖師之語意自然ニ融通仕樣ニ、上古之祖師も申傳也、三十年工夫ノ事、古來之祖師學者を攝して、佛法ノ上ニ、油斷不仕樣にとの慈悲之語ニ御座候、加樣之儀迄、東照權現能御吟味被成、爲佛法相續、慈悲心切之尊意御座候、若輩之衆、今加樣ノ儀被申事、家醜難遁儀ニ御座候、愚僧異見を加候へ共、不肯又老衰仕候故、證引仕候事も無之候、或愚僧が申通を、尤と申衆も御座候へ共、是非を申極ル事難成候、佛法建立と被思召、當代之御朱印頂戴仕、彌先年之御朱印之上を相守、違背不仕樣ニ、被仰付候而可被下候、愚

僧年八十ニ餘名利之望無ㇾ之候、萬世迄寺之無二退轉一、不ㇾ背二御上意一樣ノ御朱印被ㇾ下候者、宗門光輝一山之繁昌と可ㇾ罷成候、此等之趣可ㇾ然樣ニ被ㇾ達二上聞一可ㇾ被ㇾ下候、恐惶敬白、

五月廿八日〇寛永五年　龍安寺

惠稜在判

拜呈

國師大和尙

三應閣下

堂塔

〔山州名跡志 八葛野郡〕正法山妙心寺　在二木辻西一　宗旨禪　境方南面平地　門南向　山門同閣上、安二釋迦佛、及善財童子、月蓋長者、十六羅漢像一、　佛前同　本尊　釋迦佛坐像、二尺四五寸許、持二花左手一、拈花微笑相、　脇士左　迦葉右　阿難立像、三尺許

脇壇所ㇾ安、西　達磨大師坐像、長三尺許、　左　臨濟右　百丈同二中央一　此外安二開山圓成國師牌、大德開山大灯國師牌一、　右安二厨子一、黑漆內金　同東　大元像插頭左手、壇上間三尺許、　密守菩薩持二左手一一幢、同右、　此外安二神牌一　花園院　後花園院　後土御門院　後柏原院　後奈良院牌、厨子同ㇾ右、　法堂　在二佛殿北一、南面、　經藏　在二佛殿東一、西向、　額　毘盧藏竪額　安二傅大士一　所ㇾ藏書寫經也

〔正法山誌 八〕佛殿

龜年和尙住山時、猷都寺開基保福主二山中事一、創二造佛殿一、其支行簿、現在二于本山一、本尊拈花釋迦像、猷都寺擇二己財一造ㇾ之、

泰盤座元云、天正十年壬午之秋、月航和尙住山、明年癸未佛殿稍成矣、月航和尙製二上梁銘一云、

忠曰、蓋造營始二于龜年住山時一、而於二月航住山時一落成歟、其上梁銘探二索佛殿一無ㇾ之云、〇中略

法堂

古無二法堂一時、兼二佛殿前一而爲二法堂一、常住有二古之法堂修造帳一、卽今佛殿也、　佛座左右圓柱、掛二大法被一而掩二佛像一、爲二法堂之用一

矣、壇前及檀東西皆可階、今爲法堂之階、入院之時、佛殿語畢之後、佛前掛大法被而爲法堂、住持自階登座唱祝聖等、開山忌亦同之、

今之法堂、開山三百年忌之前新造焉、

法堂大梁

妙心新造法堂、先索大梁、乃衆議云、若得長七間半末口三尺者足矣、日向國伊藤〇藤恐東誤氏領內、自古出松材、世稱日向松、最好材、今之伊藤殿、妙心派檀家、又大心院單嶺座元日向州產也、令告其國吏、索其材則可事遂、價亦廉也、終如其議矣、出大松貳本、長九間半、木ノ口徑五尺五寸、本末齊等、貳本之價、拾七貫目餘、每一本用樫板、釘木左右、浮海中、舟子數人、在木上搖櫓、又別設船牽之著大坂、自大坂牽淀川到淀城、自此駕車牽之、每一本牛七十頭、向大宮通、言上所司板倉周防守殿、蒙其許可、而出二條城馬場、自此少東向堀川西邊、此時路有伏樋、而人不識之、忽車輪陷而不動、行者能澤、奔走前後、直詣所司申其狀、且云、今日不能舉輪、願一夕逗留、明日必起牽、而不移時矣、所司素歸嚮于妙心、許其所訴、到明日、自堀川西邊索進、欲入于下立賣、木轉西時、可壞南側宅、故預告角宅曰、宅壞則後可速改補、請暫退家內人、遂遶索達于妙心矣、其揚木遣謠者、名三三郎、少年美麗、音聲瀏亮、悅役夫、卽日市人造圖繪、賣于肆中、〇中略

法堂畫龍

法堂覆撩畫龍、狩野探幽法眼守信畫之、守信、每日攜杜山長二來、相與計畫、長二鑒古畫得精妙焉、于時山中衆議云、東福法堂龍、畫於紙而貼板上、經久脫落、吾山之龍、要直畫板上、以此請于守信、卽連張板、斜岸進前退却、揮毫施墨彩、手面皆被墨汚焉、畫畢而張之、方點眼睛、俄有風雨、人以爲靈異焉、本山謝以白銀貳百枚酒樽拾擔、守信初意計謝儀可及千枚二千枚、忽見此以爲薄少、而不敢受納、乃曰請用畫勞、喜捨于本山、不用謝儀、乃却去、

寺格

〔正法山誌 六〕微笑庵災

妙道曰、昔時、妙心寺係兵燹、而微笑庵、歸然而免、其後、雪江之時、又火災、是時、微笑亦遇災于時、雪江和尙、抱開山像首、及大燈印證墨蹟、奔遯于丹波太田龍潭寺、

〔妙心寺文書 八〕正法山妙心禪寺者、花園仙院、革離宮作梵刹、誠一宗無雙之名藍也、依累朝之叡願、諸堂旣全備、爰星霜漸移、佛殿及傾頽之事、達天聽訖、門徒速運籌策、宜遂造替之功、奉祈寶祚長久國家安全者、綸命如此、仍執達如件、

文化三年六月三日　左少辨花押

妙心寺諸和尙禪室

〔妙心寺文書 四〕鹿苑院殿御書

妙心寺事、可爲祈願寺之狀如件、

應永五年十月廿五日　花押

住持

〔妙心寺文書 五〕妙心寺の事、大德寺より申候おもむき、先本寺に、末寺は、かたをならぶるまじき由と申候、れうえやう寺は、大とう國師の師匠の寺にて候ぞかし、されば此寺よりも、本寺と申候、これはゑよざんの位に候べく候、大德寺は紫衣をたまはり、南禪寺にならび候も、本寺をさしこし候、これ程の朝弊にて候しを、そゆんさくと申候し人、紫衣を辭退して、十さつの位になりくだり候しを、近く義天と申候し人、紫衣をさいこうしてより、いまに著し申候、その時のりんじ御覽せられ候べく候、花園院の自筆の御影に、後花園院の御さんにも、ぎよくほう院の禪宮に座すとあそばし候、玉鳳院とハ、妙心寺のたつちうにて候、これにわたらせをはしまし候所を、皇居にてもゆ御ましきと申候も、かたがた御心得ありにくき事にて候、これまで申され候事も候ハねども、ゆ

いしよなきみだりかはしき御さたなどのやうに御思しめしてやとて、申され候らんとて、くハしきむねを被申候かしく、

〔妙心寺文書 五〕徹翁派一條殿へ訴状

紫野大德寺衆僧等謹言上、西京妙心寺申請綸旨勅使、相並本寺着紫衣可入院之由望申事、右當寺者、無比類子細條々依有之、開山爲侍者耆舊依爲元弘建武兩朝之國師、相並南禪寺一級着紫衣候、爲末寺及二百年之後、相並本寺可着紫衣之由企新儀候、彼派者依有子細、開山遷化之後百年餘不許本寺之出頭之處、細川龍安寺○勝元依被歸依日峯、以種々調法、日峯八十歲之時、初而本寺出頭之段申沙汰候、可相並本寺之子細有之者、百事之間仁可申沙汰歟、御代々勅書綸旨等案寫進候、此趣被達叡聞、如先規可預御裁斷、忝可畏入者也、仍謹言上如件、

永正六年三月十四日　大德寺衆僧敬白

傳奏　執事閣下

〔正法山誌 八〕大德寺

大燈國師遷化時、清拙住南禪寺、贈香於大德寺、大德寺方丈現納其瓣香、

妙心稱末寺、

我山素不與大德相好、大德寺修大燈國師三百年忌、我山衆議、云不立香資、時妙心之住持大淵和尙肥後州泰勝寺強請獻香資、大德香資板帳書曰、末寺黃金幾枚妙心寺止此、時吾山行者能仙見之、直進欲裂破板帳、吾山衆制止之、自此閲牆之聲益不絕、

大德寺徹翁下云、我山擯開山派下一年、默無困、既初住于大德、其後再請無困住持焉、不果而寂、日峯又初住于大德、

〔正法山誌 五〕規矩

寺領

入院方丈、爨應勅使、大德寺用三方、當山〈妙心寺〉獨用脚打者、依掛花園帝鏡御影於座上也、依此勅使亦入室時、先闕外跪禮尊影畢、次起立相揖光伴敢入室、

〔妙心寺文書三〕寄進

長講堂領但馬國七美庄上方萩山名事

右於當庄上方者、經秀代々相傳、當知行無相違地也、然病氣依難儀、既相待臨終時分、於老父者、折節令在國、至于子息等者、幼稚之間、末期追善以下、迷惑之餘、以件之一名、妙心寺開山和尚塔頭微笑庵
仁 重所奉寄進也、任申置旨、被取行歿後佛事等、被立置位牌於當庵、至于未來際可被弔菩提者也、此上者於子々孫々、不可致違亂煩、若令違犯者、爲不孝之仁、不可知行經秀跡、永代爲寺領、更不可有相違者也、爲後日寄進之狀如件、

應安六年五月十六日　　經秀花押

後光嚴院院宣

長講堂領、但馬國七美庄上方內友眞岡弘兩名事、任經秀寄進狀之旨、微笑庵相傳知行不可有相違者、院宣如此、仍執達如件、

應安六年九月三日　　花押

雲山上人御房

〔妙心寺文書六〕當寺敷地事、大覺寺門跡御寄進狀明白之上者、永無他妨、早可被取立寺內、幷入夫寄宿、諸役等、被免除訖、被存知候、彌全領知、可被專勤行之由、所被仰下也、仍執達如件、

元龜三年八月三日

右馬助花押

左衞門尉花押

妙心寺雜掌

寺制

〔寺鑑 下〕禪宗 濟家關山派　正法山 京 妙心院

右住職、末寺之內、紫衣之老僧、一箇年宛輪番持、

御朱印、 高四百九拾壹石餘　京妙心寺地中 麟祥院

御朱印 高貳百石

〔寺院條目 三〕從東照權現樣妙心寺江被仰渡候御書付

一僧職轉位、并佛事勤行等、可爲如先規寺法之事、

一參禪修行、就善知識三十年、費綿密工夫千七百則話頭了畢之上、遍歷諸老門、普遂請益、眞諦俗諦成就、出世衆望之時、以諸知識之連署、於被言上者、開堂入院可許之、近年猥申降綸帖、或僧臘不高、或修行未熟之衆、依令出世、匪啻汚官寺、蒙衆人嘲者、甚違于佛制、向後有其企者、永可令追却其身事、

一新院建立之時、申降綸帖、塔頭披露先規也、然近年爲私稱寺號院號事、自由之至也、向後令停止事、

一常住領、諸塔頭領、如今度差出、永可有收納事、

一諸院各塔主、如先規可爲輪番、但雖爲其門派、或若輩、或ハ不器用之衆、可除輪番事、

右條々、爲寺法相續相定處如件、

元和元乙卯年七月　日

寺職

〔惠玄禪師行狀〕師諱惠玄、號關山、信州人、○中略嗣師法者唯授翁宗弼禪師(俗名號中納言藤房)一人焉、師一日裝束頂笠、召弼上人、相携到風水泉頭、倚松樹下、立談出世始末了、泊然化去、(風水泉、井名、今在妙心寺庫裏前、其樹近年尚存、)授翁遠告一衆丈室舁入、奉全身塟於本山艮隅、建塔名微笑庵、世壽八十四、時延文(後光嚴院年號)五年庚子十二月十二日、後勅諡本有圓成佛心覺照國師、

子院

〔本朝高僧傳淨禪三十二〕京兆妙心寺沙門宗弼傳

釋宗弼、號授翁、山城州人、俗名藤房、藤亞相宣房子、○中略

論曰、世儒之言、妙心寺二世授翁、非藤黄門藤房、其徒謬爲藤房也、因引異本太平記曰、藤房土州歸時、沒海而死、凡嫌乎名公鉅儒之歸釋氏者、古來庸儒之常癖也、是故杜撰者多矣、夫授翁之事、法印玄慧親見、而載于太平記、雪江深親聞、而載于妙心寺記、東陽朝覲承雪江而作之行狀、皆實錄也、

〔山州名跡志葛野郡八〕正法山妙心寺

○玉鳳院　在法堂東、南面、　此所花園法皇山莊地也、改爲院號、被安宸筆尊影、同所東側、在開山國師影堂、　門南向　殿同　正面唐門法事入院時開等　額　玉鳳院横額同法皇御宸筆掲唐戸上、　宸影安置ノ間、別ニ退コト二間、間口一間半、退所二間、左右金張付、彩色畫圖、梧ニ鳳凰、奥ノ口前、深サ三尺許板敷、其前段階、三段共ニ黒漆、口長押ノ上總花菱金濃、其四方黒緣、其下一間半ノ口、戸四枚、戸黒塗、畫アリ、以螺鈿四幅對掛物ヲナシ、其畫圖山水石木屋舍アリ、共以鈿螺、　戸ノ內戸張水引青地中金襴繋紅華鬘結、其內中央壇高サ三尺四五寸許、黒漆、

花園院宸影座像法服、色ウスヒハダ、袴ウス花色、アサギノトヒ、紋八ツフザノ丸、右ニ念珠、左ニ持扇チタマヘリ、御長二尺七八寸許、

〔玉鳳院文書〕塔頭玉鳳院事、不混妙心寺、開山上人爲各別之沙汰、塔主可令門弟相續、仍爲後證所染筆也、

貞和三年七月廿九日　御華押○花園

〔正法山誌三〕花園帝鏡御影

華園法皇在日、自映鏡圖面相、要極肖而已、仍稱鏡御影也、

宋高僧傳、周神楷映水塑貌此止、亦此類也、

天和三年秋八月、帝有詔、欲拜覽華園法皇畫影矣、執事相山座元鳳臺院、乾瑞座元長慶院、奉御影參內、自

巳辰、至申辰、奉御影退出歸山、

〔正法山誌 六〕十年不明七字斷案

桂昌院幻堂座元、在會議場立議曰、花園法皇俗體也、每年御忌尊像不可在法堂須彌座上也、竺印和尙傳聞、甚以爲不可也、仍會靈雲派于靈雲、啓衆曰、有議法皇忌尊像在須彌座上者、吾此一派、庶幾不可同此儀也、一衆爲尤然、靈雲派執不可、故是議不成、後十餘年、天和二年冬、是時、竺印已遷化、幻堂再立此議曰、御忌須停法堂、於玉鳳院修之、復罷獻粥、何故粥但獻法皇、大衆不喫、太無理矣、議將行、但在報諸前住矣、是時、忠三十歲、就維那職、常預于會評矣、意念此事、先師前年持不可、吾今直言可止此議也、幻堂及報諸前住位頭桂峯和尙曰、此新法、不可行、幻堂大言曰、若是逆心則可謂新法、天事和尙曰、豈逆心言新法耶、忠進出曰、亦可言新法耳、其故何也、凡禪林行事、皆本于百丈淸規、國忌行之于法堂、而今欲罷法堂、而移于玉鳳、違背淸規、豈非新法耶、幻堂愕然曰、有之乎、忠累點頭曰、有之有之、百丈淸規國忌曰、就法座上安御座、止此、淸規云法座者、法堂須彌座也、幻堂默然徐曰、法皇俗體尊像、而在須彌座上、衆以爲不可、故有移於玉鳳諷經之議也、忠曰、百丈淸規所謂安御座之帝王、卽俗體也、況乎吾花園法皇者法體、而其像披袈裟哉、桂峯和尙曰、古人按淸規文、鋪設于法座上而已、于時衆中稱曰、十年不明七字斷案、後日桂峯和尙、路上遇忠、大稱美焉、

〔玉鳳院文書〕豐後國臼杵戶次兩庄所有御寄附玉鳳院也、早致領知、可令專造營給之由、天氣所候也、仍執達如件、

永和九年七月五日　右少辨 花押

雲山上人御房

〔妙心寺文書 三〕玉鳳院雜掌有成謹言上

欲早被經御奏聞、被成綸旨於武家、被仰楠木中務大輔正儀、停止彼家人押妨、任御寄附綸旨、被沙

汰付雜掌於當保和泉國宮里保間事、

副達

一通　綸旨案

右當保者、爲入道大藏卿成房卿家領關所之地也、仍今年三月廿日、所有御寄附花園院御塔頭玉鳳院也、然早被仰楠木中務大輔正儀、停止彼家人之押妨、任御寄附綸旨之旨、可沙汰付雜掌於當保之旨、被成勅裁於武家、令全知行、爲專御追善以下寺用、粗言上如件、

永和四年六月　日

〔山州名跡志〕八葛野郡　妙心寺○中略

開山堂　在寢殿東　前門（南面、唐破風、）　堂（南面、東西三間、中、南北四間、內敷瓦、口唐戸六枚、又西南在一間口、）　額　微。笑。庵。（横額）　雪江筆

像安置所、別ニ作テ、北ニ退二間、其所東傍西向有壇、如碑石、高サ五尺許ノ板ヲ龜背ニ立ル、彫開山行狀記、其北壇高サ三尺餘、段階四段、欄干擬寶珠、共ニ黑塗、其上深サ三尺許、口唐戸二枚、黑塗內戸張水引（紺地金襴）　中ニ繋紅華鬘結、內中臺、高サ三尺許、後ニ立三枚屛風、高六尺許、

開山國師像（持竹篦坐倚子、長ケ三尺餘、掛倚子法被、青地トヒ紋ノ純子、）　此像、頭面ハ自然ノ出現ニシテ、像刻彫スル時、化人之持來ス、面貌如生、

〔妙法山誌〕八　麟。德。殿。

玉鳳院方丈、名麟德殿、

〔山州名跡志〕八葛野郡　妙心寺○中略

祥。雲。院。殿影堂　在祖堂西傍、南面、（小堂）　祥雲院殿影（一七八歲形、白衣、長一尺四五寸、坐船、）　此所祥雲院殿ノ塔也、始東山知積院ノ地ニアリ、彼院始號祥雲寺、彼爲菩提立テ、妙心寺南化和尙住職セリ、其後故アッテ、當山ニ移サレ、祥雲寺ノ跡爲知積院、

雜載

○按ズルニ、祥雲院ハ、豐臣秀吉ノ長子棄君ノ法名ナリ、

〔正法山誌〕五再住入院受綸旨

古昔、初住時受綸旨、再住無有綸旨矣、顯州害和尚、（百九十三世）再住入院時、初奏受再住綸旨矣、直擧崇光院開山再住綸旨爲例、

初住（居成）五人連續、而第六人別人再住、

寛文二年壬寅歲、曲岸和尚、龍關和尚、安禪和尚、古峯和尚、了翁和尚、此五人連續初住也、第六人南谷和尚、（紀州禪林寺）奉勅再住入院也、（○中略）

綸旨

入院人奉綸旨、古只一進而已、大通院顯宗和尚再住之時、請禁庭曰、吾山開山國師、有再任綸旨、（崇光院）請擧此例、別賜再任綸命、禁庭許可、此吾山初住綸旨外、別有再任綸旨之始也、

大德寺再住、則以初住綸旨、於此日維那宣揚、無別再住綸旨、（元祿年中、大德寺榛岸和尚行再住、此時請勅使、又別有再住綸旨、更可尋問、）

名稱所在

龍安寺

龍安寺ハ、山城國葛野郡花園村ニ在リ、細川勝元ノ創建スル所ニシテ、僧日峯ヲ以テ開祖トス、宗派ハ禪宗ニ屬セリ、

〔和漢三才圖會〕（七十二末、山城）大雲山龍安寺　在洛之北山

〔山城名勝志〕（八葛野郡）龍安寺（在仁和寺東北、號大雲山、文明五年創、妙心寺末、十刹之內、開山日峯宗舜禪師、大檀那細川勝元、號龍安寺殿、鎭守住吉明神、坐寺乾山、龍安寺建立已前之勅請云云、第二世義天詔禪師墓、在方丈東、仁和寺僧說云、今龍安寺、昔日圓融寺舊趾云云、當寺者、元德大寺公有公別莊之地也、然勝元割采地一所、易之、義天和尚、請建寺、義天開祖、讓先師日峯、昔者有佛殿法堂、今有昭堂方丈鎭守等、傳云昭堂

創建沿革

元東福寺一堂也、故堂內繪兆殿司筆云云、有勝元東帶肖像、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　龍安寺　在本願寺之西、號大雲山、本尊釋迦、左右有迦葉阿難之像、鎭守住吉明神也、斯地元官家德大寺公有卿之別莊也、細川勝元請之爲寺、公有卿之文書、并相阿彌之地圖等于今存、斯寺義天和尚爲開祖、此僧爲妙心寺六祖之隨一也、然義天讓開山於先師日峯、故佛殿置日峯之雕像、傍安義天之牌、又有勝元黑袍束帶之木像、此堂東福寺中一塔頭之昭堂也、求之建此寺、故屋宇所畫之迦陵頻伽并蟠龍、兆殿司之所筆也、方丈舊勝元之書院也、故其體與常方丈異也、勝元細川家六侯之一員、而威權輝天下、故私遣船於大明國、求書畫器物絹帛等物、其船檣以大明材造之、爾後剖此柱、爲方丈之板床、其經近五尺、條理堅密、而非本朝之產也、庭壘水石、倭俗作假山、是謂壘水石、其石之大者九箇、是勝元之所自疊、而其布置非凡巧之所及也、故世之設假山者、以是爲龜鑑、豐臣秀吉公在聚樂城時、屢來臨於方丈、眺水石、一日設詠和歌、其時所陪座之僧侶并家臣、各獻詩歌、其一會之短冊、今在寺中養花院、凡有塔頭二十一箇所、其內淸源院、爲細川家代代墳墓之地、有寺產七百二十石、是皆勝元歸依之餘光也、堂前有大池、島嶼索廻、是又勝元之所鑿開也、至冬鴨鷺鳧鷖、群集游泳水上、洛人爲奇觀、凡松蕈洛山處々出、然以斯山之產、馨香風味爲洛下第一、世人爭求之、

〔正法山六祖傳〕龍安義天詔禪師

師諱玄詔、舊名明詔、後改玄承、晚年又自稱玄詔、字義天、嗣日峯、土州人、俗姓蘇氏、入鹿大臣之裔葉子也、○中略右京兆源勝元、○中略且圖建一梵刹、請師住持、嘗以公餘扣道也、○中略仍相攸于洛之東西、獲勝概於北山之巓、乃問父老、是誰家山、父老曰、德大寺右相府○藤原實能管內之地也、京兆便創食邑地一所、奉以易之、遂草創伽藍、拜請師令住持焉、號曰大雲山龍安禪寺、○中略然師奉日峯師翁、爲開山始祖、○中略寬正三年三月十八日卯剋、示衆訖順寂、世壽七十、法臘五十三、諸徒奉全身、塔于大雲山西北之丘、

〔寬永系譜三百九十八細川〕勝元

寺領

聰明六郎、右京大夫に任ず、生國同前、〇土佐 文安比職四年、二度職十二年、文明五年五月十一日に卒す、龍安寺と號す、〇又見諸家系圖纂、

〔伽藍開基記八洛北〕大雲山龍安寺 第百三主、後花園御宇、細川勝元公創之、至元祿二年、及二百二十年矣、開基禪師、諱玄詔、字義天、土州人、蘇姓、入鹿大臣之裔也、幼而穎異、父以王法師名之、十五歲師事本州天忠寺義山和尙、十八得度、爲大僧、卽上京入建仁、初爲侍客、次轉侍香、謁諸老、叩宗要、兩年、荷策東遊、參日峯舜和尙于瑞泉、極力參究、至忘寢食、或坐盤石、或經行月下、如是者五百人不堪其勞苦、而處之欣欣也、故所指甚奧、日峯印之、付以法語、未幾丁父憂、旋故里、里人喜曰、枌楡今現烏鉢花、豈非大幸邪、嘗創寺以延、因請名於師、師書龍門山瑞嚴禪寺與之、復上京、時右京兆細川勝元公、就洛之北山創大雲山龍安禪寺、起師住持、既入寺、奉日峯和尙、爲開山始祖、於是海衆雲臻、儀制肅如、明年勝元公、復於丹波建米山龍興寺、請師開山、當經始日、師與勝元公、躬運土一簣、以先淸衆之勞、然丹與洛、僅一日程、師每往來、勸勵學者、一日降勅、請師住大德寺、入寺日、天使臨筵、勝元公與諸官員、擁護森嚴、開堂罷詣闕謝恩、帝大悅、退歸龍安、寬正三年三月十八日、集衆垂示、訖翛然而化、壽七十、塔于大雲山、雪江嗣其法、

〔龍安寺文書〕寄附龍安寺所々 註文在別紙 事

右所令奉寄當寺之狀如件

寶德二年六月二日　右京大夫源朝臣花押

住持

山城國葛野郡中河原田陸町除北野領事、早任當知行旨、領掌不可有相違之由、所被仰下也、仍執達如件、

享德四年四月廿一日　右京大夫花押

〔山城名勝志八葛野郡〕龍安寺〇中略

古文書云、有公有公袖判龍安寺敷地并山事、東限新堀、西限勝法院領、南限池堤、北限主山嶺松在之、巽限橋、坤限山尾、乾限大谷、艮限谷、悉皆繪圖有之、右雖為家領、依細川殿所望、令寄附龍安寺之上者、永代不可有違變之儀之狀如件、

長祿二年二月十日　　保熙判
　　　　　　　　　　信春判

〔龍安寺文書〕龍安寺領所々目錄在別紙事

文書紛失云々、雖然當知行上者、彌寺家領掌不可有相違之狀如件、

寬正六年十二月十二日　　右京大夫花押

住持

〔龍安寺文書〕寺領方高目錄之事　　龍安寺

一百九拾七石七斗九升四合　西京　　一七石七斗壹升六合　西院
一百九拾石五斗三升六合　龍安寺前　　一卅五石　西岡物集女
一九拾六石貳斗六升　接州原村　　一百七拾四石七斗四升　同富田
一廿石　丹州森村

總都合七百廿貳石四升四合

右御朱印之高、當知行にて御座候、

元和元年七月廿七日　　龍安寺役者　壽口花押
　　　　　　　　　　　住持　惠稜花押

金地院

板倉伊賀守殿

右任御朱印旨、全可有寺納者也、

元和元年七月廿七日　　板倉伊賀守花押

金地院花押

〔和漢三才圖會七十二末山城〕大雲山龍安寺略〇中有塔頭十六院、

〔國花萬葉記二上山城〕大雲山龍安寺洛陽ノ北山、寺領三百九拾石、細川勝元建立ト龍安寺號、開基義天和尚

塔頭

東準庵　養花院　杏林庵　清源院　宜春院　西川庵　龍昌院　牧雲庵

永久院　多福庵　大珠院　妙智庵　本光院　勝林庵　見性庵　靈光院

諸院菩提所

日峯禪師　塔、義天和尚之師也、讓師爲開山、

細川勝元　塔、則龍安寺ト號ス、當寺之大檀越、

石川宗林　塔、大珠院ニ在、石川備前守、美濃國大山城主

細川家代々　塔、清源院ニ在、

〔都林泉名勝圖會四〕龍安寺の林泉は、封境に名池あり、鏡容池と號す、冬日鴛鴦多く聚りて、洛北の眺望世に名高し、略〇中所謂、方丈の庭は、相阿彌の作にして、洛北名庭の第一とす、庭中に樹木一株もなく、海面の體相にして、中に奇巖十種ありて、島嶼に准へ、眞の風流にして、他に比類なし、これを世に虎の子渡しといふ、

等持院

名稱
所在
創建

等持院ハ、山城國葛野郡大北山村絹笠山ノ麓ニ在リ、古ハ眞言宗ナリシガ、足利尊氏ヲ此寺ニ葬リシヨリ、天龍寺ノ下ニ屬シテ禪場ト爲ル、寺號ハ卽チ尊氏ノ法名ナリ、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕等持院　在洛北衣笠山南麓　寺領四百二十石
源義詮公建立　開山夢窻國師　有塔頭三院

〔雍州府志 五寺院〕葛野郡　等持院　在眞如寺西、斯寺古在山上、而爲眞言宗、本尊地藏也、爾後移今處、夢窻國師中興開基、而爲禪刹、則天龍寺之塡寺也、等持寺額、鹿苑院義滿公之筆跡也、池邊有大聖歡喜天堂、幷鎭守六請明神社、聖天像、山城國聖天安置三箇所之隨一、而爲靈像、明神社等、古眞言宗時置之者乎、足利家代々昭堂、慈照院義政公之所建也、

〔山州名跡志 七葛野郡〕万年山等持院
當寺尊氏公建立　開基夢窻國師、山號始號鳳凰山、義堂和尙代改今號、

〔山城名勝志 八葛野郡〕等持院 在天龍寺巽、衣笠山麓、號北等持、開山夢窻國師、天龍寺末、十刹内、額鹿苑院義滿公筆跡云々、
或云、古此地有寺、仁和寺一院云、本尊地藏菩薩、大聖歡喜天堂、鎭守六請明神在于今、是皆昔遺跡也、足利家代代昭堂、慈照院義政公所建本尊釋迦、左右阿難迦葉、中央果證額、尊氏公母公牌所、登眞同公室也、靈壽同息女也云々、
等持院記云、果證院殿、贈一品大夫人淨妙寺殿御臺、尊氏御母、康永元年十二月三日逝去、登眞院殿、贈一品大夫人尊氏御臺、平氏貞治四年五月四日逝去、靈壽院殿、贈一品大夫人尊氏御息女、文和二年十一月九日逝去、

〔天龍寺文書 一〕等持寺院兩所事、依開山國師 ○疎石 辭讓可爲天龍末寺之由、被在世之時契諾畢、今更不可有相違、至末代專門徒一味之興隆、致三品禪閤 ○足利尊氏 二品禪尼 ○義詮母從二位平登子 及先亡後滅之追福也、於住持職者、就本寺幷國師門徒吹擧、任先例可爲檀門之勸請之狀如件、

十二月十三日　義詮 花押

夢窻國師門徒御中

堂塔

〔山州名跡志八葛野郡〕万年山等持院 在㆓絹笠麓㆒、境地同㆑上、宗旨 禪 門南向佛殿同

中門 在㆓佛前㆒ 額 等持院 竪額 鹿園相國筆、此所初有㆓山門㆒、號㆓法雲閣㆒、

佛殿南向 本尊 地藏菩薩 坐像二尺五寸、蓮華座作、岩載許 作不㆑考、 脇壇東 大元像 居㆓倚子㆒、一尺餘、 四 達磨 坐㆓倚子㆒、三尺五六寸、

開山像 坐㆓倚子㆒、三尺許、

足利氏廟

〔山州名跡志七葛野郡〕万年山等持院

足利家昭堂 在㆓佛殿北㆒、南向、堂内敷瓦、 本尊 釋迦佛 坐像、二尺五寸許、 脇士 左 迦葉 右 阿難 共立像、三尺五寸餘、

○中略

右間、左右壁ヲ隔テ、南方東西ニ亘テ有㆑壇、足利家安㆓將軍影㆒、衣冠持㆑笏帶㆑劍、座像年齡ニ依テ長不㆑同、

其高年ナル三尺許、

尊氏公 左一座 額 登眞 横額、掲㆓間口㆒、開山筆

義滿公 右一座 額 靈壽 同㆑上 左座ノ終リ、十四代義榮公、右座終リ、十五代義昭公、已上影前安㆑牌、 右

歷代中不㆑安㆓置像㆒、

長德院 五代義量公 大知院 十代義視公 惠林院 十一代義稙公 萬松院 十二代義晴公

〔太平記 三十三〕將軍逝去事

同年 延文三年 四月二十日、尊氏卿背ニ癰瘡出テ、心地不㆑例御座ケレバ、本道外科ノ醫師、數ヲ盡シテ參リ集ル、倉公、華佗ガ術ヲ盡シ、君臣佐使ノ藥ヲ施シ奉レ共、更無㆑驗、○中略 同二十九日寅刻、春秋五十四歲ニテ、遂ニ逝去シ給ケリ、サラヌ別レノ悲サハ、サル事ナガラ、國家柱石摧ケヌレバ、天下今モ如何トテ、歎キ悲ム事無㆑限、サテ可㆑有非ラズトテ、中一日有テ、衣笠山ノ麓等持院ニ葬シ奉ル、

〔太平記 四十〕將軍薨逝事

斯ル處ニ、同 貞治六年 九月下旬ノ頃ヨリ、征夷將軍義詮、身心例ナラズシテ、寢食不㆑快シカバ、和氣丹

寺格

波ノ兩流ハ不及申、醫療ニ其名ヲ被知程ノ者共ヲ召シテ、樣々ノ治術ニ及シカ共、〇中略同十二月七日子刻ニ、御年三十八ニテ、忽ニ薨逝シ給ニケリ、天下久ク武將ノ掌ニ入テ、戴恩慕德者幾千萬ト云事ヲ不知、歎キ悲ミケレ共、其甲斐更ニ無リケリ、サテ非可有トテ、泣々葬禮ノ儀式ヲ取營テ、衣笠山ノ麓、等持院ニ奉送、

〔滿濟准后日記〕應永三十五年〇正長元年正月廿四日、可有御談合子細在之、可參申由承間、則參了、管領同參申被仰云、〇中略次御影木像事、於被安置等持院御影義持〇足利ハ、御俗體可宜歟、又可爲御法體歟云云、時宜趣當院等持院御影ハ尤可爲御俗體由可宜樣ニ被仰云々、予同管領此儀尤可然事也、已等持寺殿尊氏〇足利寶筐院殿義詮〇足利鹿苑院殿義滿〇足利三代御影、俗體ニテ御座候キ、但於鹿苑院殿御影ハ、故御所樣、近比、改御俗體御法體ニセラレ候キ、違先例條不宜由、諸人申候云々、御俗體尤可然由申了、次勝定院御影義持〇足利事、俗體御法體門可爲何乎事、予申云、是ハ又御法體可宜歟由申了、管領同心、仍此分治定、〇中略二月十三日、參等持院、故鹿苑院殿俗形御影、自嵯峨陽泰院如元奉返渡等持院也、此事先日內々被仰談管領以下、予又列此席承了、此儀尤可宜由申入キ、等持院寶筐院兩御代、既以俗形御影也、鹿苑院殿御一所御法體御影、不得其意キ、

〔維新史料一編〕三條河原梟首　文久三年癸亥二月廿三日、松山藩士三輪田綱一郎、下總の大宮和田勇太郎等、浪士數輩、山城國等持寺村等持院にある、足利將軍三代の首を斬り、之を京都三條河原に梟せり、蓋し足利の凶暴を數めて、當時の關東に擬するの意なりき、

〔天龍寺文書五〕北山等持院事、天龍寺之末寺之由被仰下候、相國寺ニハ、末寺事由被申候、仍可爲證跡、次第之由候、早々自天龍寺、御裁許之證跡被持可有御出參之由候、可得尊意候、恐惶敬白、

五月十四日　夕庵花押

村井主水正貞勝花押

寺領

明智十兵衛光秀花押

妙智院衣鉢侍者禪師

〔等持院文書〕等持院內祠堂錢、幷買得田畠山林等事、今度雖有德政之沙汰、於當寺帳面同買得分者、不可有改動由所被仰下也、仍執達如件、

元龜元年十月九日

右馬助花押

左衛門尉花押

當寺雜掌

古事類苑

宗教部四十九

佛教四十九

仁和寺

名稱 所在 創建 沿革

仁和寺ハ、山城國葛野郡大内山ニ在リ、或ハ光孝天皇ノ創スル所ト爲シ、或ハ宇多法皇ノ脚クル所ト爲ス、世ニ之ヲ御室ト云フハ、蓋シ法皇ノ皇居ト爲シヽニ本ヅク、今眞言宗御室派ノ大本山タリ、

〔伊呂波字類抄 仁諸寺〕仁和寺 光孝天皇御宇遣之、[illegible]元年乙卯五月十八日供養、去元永二年燒亡、更建立安二本佛一也、

〔書言字考節用集 一乾坤〕仁和寺 ニンワジ 城州葛野郡大内山、光孝帝草創、宇多法皇入室、故曰二御室御所一、

〔國花萬葉記 二上山城〕仁和寺 洛陽大内山 光孝天皇の御願として草創 本佛は阿彌陀三尊 天皇の御等身と云々、

〔雍州府志 五寺院〕葛野郡 仁和寺 寛平法皇〇宇多之御庵室跡也、故稱二御室一、法皇葬二後山宇多野一、故號二宇多院一、光孝天皇仁和年中、中二興此寺一、號二仁和寺一、伽藍巍々焉、光孝天皇則葬二此寺之西野一、陵今在二田間一、弘法大師昭堂在レ北、凡本朝主上稱二御門一、故宇多法皇讓レ位後所レ住之室、故稱二御門跡一、又謂二御室一、依レ之仁和寺外、不レ可レ有二御門跡之號一、此外門主號、皆崇二其人一、而准二門跡之例一者也、然則准門跡而非レ實也、此寺之門主、多皇子也、近世寺中多植レ櫻、依レ之於レ今御室清水爲二一雙一、然清水東方而和暖、故花之開也速矣、御室西方而寒冷、故花之開也遲矣、自爲二洛人一春前後之觀一、並岡在二寺之西南一、

〔帝王編年記 十四宇多〕仁和四年八月十七日、供二養仁和寺金堂一、葛野郡小松郷奉レ爲二先帝一所二創立一也、

〔仁和寺御傳序〕夫考當寺之濫觴、光孝天皇、相當城州葛野郡小松鄉大內山之麓、攊荊棘、穿衆木、草創一院、仁和寺是也、以里號小松帝、稱宇多天皇、光孝第三皇子以寬平九年七月五日、禪位於皇太子、延喜帝點昌泰己未之歲、入落飾修眞之道、號寬平法皇、任先皇之素願、又莊一室、號南御室、以此砌相承之親王、奉號御室、法皇汲法海之淵底、嘗智水之甘味、王法與佛法共懸、約光輝於日月之鏡焉、蓋有道同附合之口旨歟、然則長和親王性信〇直叙二品、仁安親王覺性〇領總法務、建長御室法助〇浴准三宮之封戶、嘉元太王性仁〇叙一品、斯爲僧中高位之元祖、法之最上、宗之効驗、依異于他也

〔塩囊抄十四〕仁和寺ハ如何　仁和寺仁和御門御願、則寬平法皇皇居也、御持世時、宇多天皇共、仁和御門共申、又亭子院共、寬平法皇共申シキ、然ルニ御子醍醐天皇御宇、昌泰二年十月十四日、御歲卅三、御出家有、御法名空理、是ヨリ密敎ニ歸シ給テ、仙院ヲ改メテ御室ト號シ奉ル、同御宇、延喜元年辛酉御歲卅五ニシテ、十二月十三日鬼宿日曜於東寺灌頂院、僧正益信ヲ爲師、御灌頂アリ、金剛號ハ金剛覺ト云々、同三年癸亥三月、舊院傍ニ一伽藍ヲ御建立有テ、仁和寺ト號ス、今本寺ト云是也、又同四年、比叡山ニ御行有テ、增命僧正ノ坊、千光院ニ於テ、御室ヲ被立、御住山アリ、翌年乙丑四月、增命僧正ヲ師トシテ、重御灌頂アリ、同十一月、於總持院、蘇悉地法ヲ受ケ、同十年庚午又千光院ニ幸シテ、阿闍梨。位ヲ受給ト云々〇中略御室爰ニ始リテ、仁和醍醐ト別レタル也、

〔元亨釋書二十四資治表〕延喜四年三月、上皇構一堂於仁和寺、安金剛界三十七尊、及外院天等、三摩耶形、上皇禪居側室、俗曰御室、

〇按ズルニ、權記寬弘八年七月十七日、圓成寺御室ノ註ニ、是仁和寺法皇御室也、華山法帝又御存生御此所、仍曰御室也トアリ、

〔花鳥餘情十九若菜〕新國史云、仁和四年八月十七日、於新造西。山。御。願。寺。行先帝周忌御齋會、　今案、西山なる御寺とは、仁和寺を云なり、光孝天皇の御願寺として、仁和年中に造られたるによりて、仁和

寺とは號せり、〇中略又宇多天皇御出家の後、延喜元年十二月に、御室を仁和寺にたてらる、同四年圓堂をつくらる、供養あり、本尊は金剛界三摩耶形也云々、又承平の御門〇朱書は、天暦六年三月に御出家有て、四月に仁和寺に遷御あり、

〔都名所圖會六〕御室御所は、眞言密乘の靈地にして、御境內廣大なり、其はじめは、光孝天皇の御願として、仁和四年八月、小松鄕に於て、一院御草創、大內山仁和寺と號す、〇中略其頃は、御領七十萬石餘にして、御寺中も七十七箇院ありしに、星霜推移にしたがひ、其頃は、殊に國々に兵亂屢おこり、御領もこれが爲に廢失し、就中應仁二年、皇都にて、山名細川の爭ひはじまる、其前年、應仁元年山名の氏族、洛の西に今の西陣なり陣營を構へんがため、民家を放火なせしに、かく亂逆の折からなれば、貴賤山林に隱れて、只其身命を活ん事をのみ思ふ時なれば、誰か敢へて鎭防する者もなく、餘焰西の京に廣ごりて、惜かな、さしも莊嚴花美を盡したまひたる堂塔、一時に灰燼となりて、後ち久しく荒廢におよび、宮居も所々に轉じたまひしを、寛永年中、御再建ましませし處なり、〇中略殊に他に御例なき春秋の勅會結緣灌頂、每歲三月廿五日廿六日に御執行ある御室御所、御室宮、仁和寺宮、總法務宮など稱したまふ、

金堂　本尊　阿彌陀佛、座像、三尺餘、　脇士觀音勢至立像、四尺、

觀音堂　本尊千手觀音、立像、四尺餘、脇士二十八部衆、立像、貳尺六七寸、

祖師堂　弘法大師、座像、三尺餘、御自作、　脇壇左に　寛平法皇御宸影、御木像、三尺餘、右壇に性信法親王御影、注主大御室と尊稱す　經藏　中央釋迦佛、左右文殊普賢、　五重塔

〔經信卿記〕承暦四年八月廿日庚戌、先日殿下〇藤原師實宣云、自仁和寺宮御許、彼寺庫倉幷圓堂經藏、破壞年久、定被濕濕歟、此年來、上東門院御使所開閣也、而院不御座之後、誰人可開乎、言其由來、汝可開閣歟、有固辭聞、爲之如何、予申云、件事不可辭申、又不可望申、其故者、彼寺三寶御心難知之故也、仰云、然者可開也、其後公事指合于今延引、更尋問日次於主計助道言、示送云、廿日尤吉也者、語次相示廿

日可開仁和寺倉之由被示云、必欲參會者、今朝送消息云、今日爲開彼倉、可能向仁和寺、若可會給歟、然者只今可被參會殿邊者、辰剋許參殿、〈予共三人、先立向了、〉別當參會、見參之次申云、依先日仰、爲開仁和寺倉所罷向也、有頃別當相共向寺、〈予冠直衣、別當烏帽、〉午剋參著、宮御房〈馬場〉令申此由、被命云、共雖可向倉下、老爛之身多憚攀登、仍僧都相共可被向也者、又僧正被候寺房者、別當同車、〈予共別車、〉下自仁和寺東門、〈行禪僧都、自西來會、殿禪師君幷僧侶來閤、〉來會僧都示云、僧正被坐此西僧房、先可起歟者、共向其房、僧正〈勤修寺僧正也、爲此寺別當、〉被座、相共向倉下、〈隆令結繩柱、可加修理之故歟、〉使恩紹先開南倉、取出鎰宮幷寶倉目錄等、〈件南倉者、納御八講時物具等、仍只寺所司開闔歟、然者可被納件目錄於北御倉歟、但取出吳樂面形十許、僧都云、此目錄中、有道風書、菅家被加御名字、已以紛失歟、〉忽以板給北倉橋、以恩紹令開、自橋攀登見之、倉上圓座許穿、漏濕有跡、又厨子等、雖指鏁被構開、尋問先先令開所司、申云、依鎰不候、先度所構開也者、少少取出校合目錄、〈每厨子有別目錄、〉或有、或無、然間暑氣難堪之上、塵埃尤甚、仍相議下倉、其前敷疊、取出厨子開見、日漸及昏、雨又頗灑、仍取入南倉、付僧正幷予封渡圓座經藏、相尋鎰、已無相知之人、恩紹云、以御倉鎰、被開之由、側承之者、試令開已被開、只見法文一卷俗書一卷、令闔同令付封、向僧正房、有飮食事、〈僧都幷禪師君被歸去了、〉入夜歸來、僧正被約云、此倉修理之後、隨示案內、可參會者、

〔百練抄〈五白河〉〕永保二年十一月廿七日、仁和寺北院供養、公卿皆參、

〔帝王編年記〈十九白河〉〕永保二年十一月廿七日、供養仁和寺御願喜多院、導師入道師明親王、〈性信〉

〔本朝世紀〕康和五年正月二日壬午、今夜、仁和寺喜多院燒亡、累代法器經論、多以爲灰燼、法親王之秘室也、而被候鳥羽殿之間、彌無人相救云々、　八日戊子、是日、仁和寺北院燒亡、覺行親王在所、

〔百練抄〈五堀河〉〕康和五年正月七日、仁和寺喜多院燒亡、〈傳敎大師御願、藥師像等燒亡〉

〔長秋記〕元永二年四月十四日、依火事向仁和寺、僧正房被語云、去夜子時、自北僧房火出來、仁和寺金堂、食堂、新堂、三面廻廊、三面僧房、寶倉一字、鐘樓、中藥師堂、〈二條院造立、〉觀音三昧堂、灌頂堂、不動堂、皆悉燒、所殘四面門、南御室、圓堂、總社、大湯屋、藏等也、火延付圓堂經藏之間、上被藏上、雜人之中、有傳蘭波術

者消了、但諸堂佛、寶藏御物、皆悉取出了、今朝於佛像者、安置南御堂、南北廊暫懸、鐘於寶物者、加納圖堂經藏了、藥師堂佛、別當法眼奉渡圓融院了、

保延元年五月十八日庚寅、仁和寺供養也、○中略件仁和寺、前年燒亡、而自公家仰常陸守公信所被造也、

〔本朝世紀〕仁平三年十二月十五日己巳、今夜故御室御所本寺燒亡、

〔碧山日錄〕應仁二年九月四日辛酉、東兵燒北山仁和寺、正印之悟藏司、來說寺中西兵擾亂

〔宣胤卿記〕文明十二年二月廿四日乙亥、北山仁和寺邊巡見、一條始悉成荒野、於北山者、鹿苑寺、等持寺、眞如寺、又竹內門跡等令殘了、仁和寺者、奉始御室悉以荒野也、行鹿苑寺之中巡見、殿中破壞以外也、但山水不相替、希代之見物也、

〔仁和寺再興緣起〕勸進沙門覺算敬白

ことに、十方檀那をすゝめ、仁和の舊跡をおこしひらき一寺の再興をくはだて、國家の護持をいたさんとこふ狀、

夫仁和寺は宇多聖日の草創として、上皇脫屣の後、則幽閑を此地にしめましまし、專眞言上乘の梵場として、國家護持の靈崛たり、○中略たれの人か當寺の興廢をおもはざらんや、こゝに應仁の逆亂は、龍の劫火にことならず、堂舍僧坊一時の灰燼と成ぬ、但本尊彌陀三尊はけぶりの中に有りて其災をまぬがれ給ふ、古老の傳ふる所、八幡菩薩化生の神作、弘法大師開眼供養し給ふといへり、○中略見聞の道俗男女、志を同し、力をあはせて、弟子が所願を成就せしめば、並が岡の松のひびきはやく成風のこゑをあげ、鳴瀧の水のながれとほく輪廻の影をひたさん、けだし勸進のむねとなふるところかくのごとし、敬白、

大永四年六月一日　勸進沙門　覺算敬白

宗派寺格

〔拾芥抄下本諸宗〕仁和寺、〇中略真言爲本宗、以東寺爲本、

〔百練抄七二條〕永萬元年八月九日、仁和寺、應保騷動之時、可離東大寺末寺之由被仰下了、

〔仁和寺文書二〕御使下向折節、聊聞食旨有之間、以爲事次、可申置之由沙汰候之趣ハ、去比圓滿院宮、〇道譽於禁裏被勤修尊星王法、當被結願日、爲勸賞可被叙二品親王候けり、而大法修中、内裏燒亡之間、不及結願、宮夜中令逃出給、即籠居櫻井間、不及勸賞、叙品事無沙汰云云、其後度度被遣勅使、無程又出仕云云、此定候者、被叙品始終被宜下候歟、是等子細、日來愁不聞食及候間、一日比、以類親朝臣勘當寺代代例等、二品事被奏聞之處、于今無勅答候、此條頗不被得御心、出家人叙二品事、長和親王〇性信爲最初、知法徳行一天歸依之餘、被奉授其位、同時依無先例、法興院大入道殿〇兼家出家之後、令蒙准三宮之宣旨給候、准被例初被宜下候、從其以降、爲當寺流例、代代令叙二品給、於他門總無其例間、上臈親王等雖、其數不及沙汰候、而故綾小路宮〇尊性之時、以山門威勢被叙二品了、今圓滿院宮叙品事、縱雖追被例、仁和寺事ハ、不可依他門之所望、尤最前可被仰之處、依圓滿院宮非分競望、于今被妨障之條、付眞俗頗無面目事歟、且又故法皇御時、以大法賞被申入、今度法皇宸筆御書、并女院御書等口候、是等子細被聞置之條、大切之間、以事次被申候由候也、

〔都名所圖會六〕御室御所、〇中略かゝる御室柄により、往昔より宮御門跡方の上首にして、其上、總法務の勅任ましまして、今に宮中に於ても、諸宮門跡の御方に混せさせ給はざる御規摸もましますよしなり、

寺領用途

〔延喜式二十六主税〕凡仁和寺燈分油、每日三合、但正月十四箇日、每日一升、佛聖四座、每日白米八升、座別二升、別當一口、每日白米六升、三綱定額僧合九口、每日白米三斗六升、口別四升、並以丹波國正稅充之、受領之吏專當其事、每年計日、在前交易春運、其功賃准例、

〔中右記〕元永元年七月廿五日乙巳、又往年故仁和寺、依爲舊庄、以院廳下文、阿波國中、所被立庄也、與

加納千町杣山相具、被打籠由、國司所料申也、早可尋沙汰也、件庄、故爲房朝臣所沙汰也、其時不問四年、偏庄所打入歟、是前雜色實俊沙汰也者、申云、先召實俊可聞候也、仰云、早可仰者、仰行重了、午上退出、　八月十一日、欠日晩頭參院、前雜色實俊所進仁和寺宮阿波御領之房官下文、幷田數注文、付清隆奏覽之處、依召參御前、被仰云、件庄立始沙汰、實俊何樣申哉、予申云、去天永元年九月、依院廳下文、被立時、威儀師預俊沙汰也、仍不知子細、次年五月、被預給實俊之日、二百餘町所沙汰也、於殘七十餘町者、依寬助僧正申請、宛給顯俊子小僧了、但近代又宛給房官僧靜兼也、但於實俊預所之宮物、領辨國司了、材木取山打籠條、不候事也、庄內山野、少雖在四至內、取材木事、全不候、於材木山者、在他庄內歟、又被仰云、治部卿所進院廳之美乃國彈正庄、成院廳下文歟、立券之處、打籠人人領數百町之由、所憂合也、不便聞食、何樣可沙汰哉、件二箇條、云合關白可申者、其次被仰事等甚多、秉燭以前退出、實俊所進文書二通留御所、口返給也、　十二日、午時許參殿下、雖御物忌、依召參御出居、昨日院仰二箇條、申合之處、御返事云、宮御庄事、故爲房朝臣沙汰之時、定强僻事不候歟、猶可被尋子細也、於治部卿庄者、除人人所領、只彈正庄限、可被打牓示候、次參院、召御前、申殿下御返事、仰云、本文書不注田料、又沙汰人爲房朝臣、威儀師顯俊共死去了、於今者、可尋問人不見、但彼時遣阿波國廳官を相尋天可聞子細也、又彈正庄ハ、近日遣廳官了、返參之後、隨注申可左右者、件庄指圖返上了、　九月一日、宮庄本劵、代代免判付紀伊守奏覽之處、召御前令問子細、御申云、件庄劵後國人許所尋取也、本冷泉院庄、免田十一町、不指四至、而次第傳領、寄二條關白之時、成卅七町之後、代代國司依卅七丁免來也、當寺仁和寺宮御領、注載桂郡四至、田畠山野千五六百町被押入也、前司忠長任時被入也、其前及前司邦忠任、依爲公田、辨濟官物於國司也、件證文相副進上候也、仰云、以件文書遣寬助僧正許、可申子細之由可仰也、又仰云、皇后宮御領相論之文書、早祭主在京之間、可進由可仰也、則書院宣遣仁和寺僧寬助許了、又祭主之文書事、仰頭辨了、頃而寬助僧正返事到來、申云、口口申仁和寺宮處、只可任御定者、件返事付但馬守奏覽、仰云、聞

寺職

食了、無指左右、(返事留御所)又頭辨於途中不申御返事、只以詞申承之由、晩頭退出、　九日、早旦參院、〇中略又申云、尹通所進之仁和寺宮篠田庄文書本券、可令候何處哉、仰云、可送仁和寺僧正許者、其次任代國免件庄卅七町、可被立之由仰者、則以消息示僧正了、又卅七丁免判、可進由、可仰尹通者、以消息示了、

〔仁和寺御傳〕高野御室

康治二(癸亥)年十月十四日、於當寺被始行舍利會、參議敎長卿家領二箇所、(山城富安、越前石田、)爲彼用途永令寄進、

〔仁和寺文書五〕山城國西院内百石事、爲新地進獻之、全可有御直務之狀如件、

天正三年十一月六日　信長朱印

仁和寺殿

〔延喜式二十一玄蕃〕凡四天王、梵釋、常住、仁和等寺三綱、各以十僧内補之、

〔初例抄下〕仁和寺別當始

律師幽仙　慈覺大師弟子、寛平法皇御弟子、寛平二年十二月二日任、右近將監藤原宗通男、元始達五十五、昌泰入滅、六十五、

〔海人藻芥〕御室門跡者、自寛平法皇以來、皆親王也、但峯殿息(准三后法助)入室之例有之、南都兩門跡、(一乘院、大乘院、)執柄息相續也、

〔海人藻芥〕世一僧トハ御室ノ御事ナリ、

〔嘉永七年雲上明覽大全上〕仁和寺宮(御室御所、又稱御室宮、總法務宮、)

御領千五百二石餘　御里坊西院參町新在家角　伊藤玄蕃

仁和寺(御宗旨眞言)　豐宮　十一

參前

仁孝天皇御養子、伏見入道邦家親王御子、

御附弟

院家〈龍華定院前大僧正法印眞光院僧正法印尊壽院權僧正法印眞乘院權僧正法印菩提院權僧正〉

出世住侶〈皆明寺權僧正法印〉

石山寺住侶〈密藏院少僧都法印〉

坊官〈土橋大藏卿法印長尾芝・築地治部卿法印同在廳法印鳴瀧兵部卿法眼橋本民部卿法眼土橋宰相法眼〉

諸大夫〈長尾法橋矢守備後守〉

侍〈山崎近江守吉田尾張介久富播磨介〉

〔長秋記〕保延元年五月十八日庚寅、仁和寺供養也、上皇〈○鳥羽〉女院〈○美福門院〉五宮自夜前宿御田中殿、下官〈○源師時〉相具師仲宿木寺、天明以使問御幸剋限、巳時許云々、但御堂事具後、可依申案內云々、漸及巳剋、師仲參田中殿、及午剋、師仲始送云、御堂事具由所令申也、仍只今可有御幸、早可參也者、仍急參、人巳騎馬扈御車云々、仍更乘車參仁和寺、入自西門、至廻廊西戶下、內大臣、民部卿忠敎、左兵衞督宗輔、中納言顯賴在此所、乃臨幸前駈入自西門之間、左右樂人等出自樓門、參向於御車前鼓舞、〈左光則、右近方、〉左右樂行事相具、〈左中將公隆朝臣、右中將忠基朝臣、〉上皇引車入堂中、至西廊際、自御車下御、有賢朝臣、忠能朝臣付轅、忠能朝臣供榻、有賢朝臣供御履、上皇不著御沓步筵道、自軒廊東一間入御、五宮〈○覺性〉御車御坐別當自車奉抱下御、共步給、〈此間樂止、更奏亂聲、〉上皇御裝束冠直衣、淺黃御指貫、宮御裝束、御直衣、白綾御單衣、二藍二綾御指貫、

此間、女院御車如前引入自西門、暫留樓門外、下官參其所、令開樓門、令引入御車、渡階隱軒廊南面東三間、別當勤其役、〈女院入御後亂聲止、〉上皇御簾內、入御後、同所隱女房車三兩、

〔本朝世紀〕天養元年十月十七日甲午、被供養仁和寺孔雀明王堂、〈仙院御願、伊豫守忠隆朝臣造進、〉兩院臨幸、內大臣

子院

以下參入、覺法法親王爲導師、　廿日、上卿參入、被仰下孔雀明王堂供養勸賞、(正四位上藤忠隆、國司工國未、可二一階、佛師賢圓、追可隨申請、權少僧都覺任、覺法親王讓、)

〔玉海〕壽永元年二月廿九日庚午、法皇(後白河)幸仁和寺法親王房、彼親王被供養五部大乘經、請僧廿口、以隆憲僧都爲導師云々、布施卅八云々、近代之施物、還非功德、傾國家之產、太以無二世之益事也、法皇被行勸賞、實任僧都敍法印云々、是又何故哉、

〔拾芥抄〕(下本諸寺)香。龍。寺。　仁和寺內

〔扶桑略記〕(二十九後冷泉)天喜三年十月廿五日己酉、公家供養圓。乘。寺。仁和寺南有一形勝、此處立堂、號圓乘寺、奉安置金色丈六釋迦如來、普賢、文殊、延命、如意輪等、菩薩像各一體、繡甍珠軒、雖在當今之新飾、丹唇紺頂、莫非先朝之素懷、凡厥大門、廻廊、經藏、鐘樓、一寺莊嚴、四神具足、令撰吉曜、敬奉供養、彼秋後落砌之葉、自成四種之光、冬初殘洞之花、暗添百和之氣、何唯百餘口之禪徒、傳梵唄於中天之日、千萬曲之樂韵、移笙歌於西土之風而已、法會之儀盛矣、(已上)

〔仁和寺諸堂記〕仁和寺　小松天皇御建立、始寬平法皇御時被供養云々、別當所司六人、

圓融寺　圓融法皇御建立、永觀元(癸未)年三月(廿二)日供養、別當眞乘院前大僧正也、此人門跡相傳也、所司六人、

圓敎寺　一條院御願、長德四(戊戌)年正月廿二日供養、別當上乘院前大僧正、所司六人、

圓乘寺　後朱雀院御願、不被之號燒堂、所司三人、

圓堂院　寬平法皇御建立、本者被造大內山、後被渡仁和寺、

觀音院　式部卿敦實親王建立、所司三人、

遍照寺　大僧正(寬朝)御建立也、別當上乘院前大僧正、所司三人、

已上七箇寺、三綱等都合卅人也、以彼輩號三十人所司、合勤仕仁和寺以下堂々寺役雜事等也、皆

是御室侍也、總在廳以下寵也、

小松寺　有大聖院御所西邊、今者無基跡、光孝天皇御願歟、有此號、

神應寺　有同邊云々、然而見其所之人、今者無之、仍不審也、今所殘之千手堂、(號西千手堂)此堂歟、將又別堂歟、未尋明之、

已上二箇所之內、本寺之號、何所哉、同可尋之、件邊當時號寺庭也、

圓宗寺　後三條院御願、天台法華最勝二會被行之、有竪義、此內講堂、灌頂堂、常行堂、五大堂、法花堂、(安置本願聖主御影狀、行常行三昧、)

香隆寺　寬空僧正之跡也、今無基跡、

北院　北院大僧正(濟信)建立、代々御室御本房也、本尊大師御作藥師也、

轉輪院　奉爲鳥羽院母后被造立、白川院御沙汰被造之、當時御室御進上也、當院無庄園、一向以諸國封戶、被宛寺用之間、上古者無懈怠、及于末代、諸國司皆對捍之故、全分無寺用、顚倒畢、御佛事者、於法金剛院南御堂被行之、

法金剛院　待賢門院御建立、御室御沙汰也、每年被行一切經會、有舞樂、

佛母院　鳥羽院御建立、在于觀音院灌頂堂西、御室御沙汰也、

南院　高野御室(覺法)御建立

大教院　後三條院御女、一品宮御建立、經年序之間、破損之時、北院御堂(覺守)令建小堂給故、被行御佛事之所、前大僧正眞惠、申請此所、破却之建私房、號金剛幢院、

無量壽院　高野御室御建立也、其內又御母儀北政所御堂有之、號新御堂、

大聖院　紫金臺寺、御室(覺性)御建立、當時御所也、本尊不動、毗沙門、吉祥天、○中略

紫金臺寺　此御堂初者、被立西山物集庄、其後被渡此寺內境畢、依當院御建立、五宮有紫金臺寺御

號御平生之間、上下兩方、有御堂有御所、上號勝莊嚴院、下者號紫金臺寺、共以有殊勝御所等、被行迎講、御入滅之後雖荒廢、基跡猶不失之處、寛濟法印拜領之後、先上御所、幷勝莊嚴院、燒失了、其後又下御所、幷紫金臺寺、燒失了、然間於今者無基跡、

蓮花心院　八條院御建立、當時安嘉門院御沙汰、

蓮花光院　殷富門院御建立、被奉讓宮僧正、次被讓無品親王、當時道融僧都傳之、

勝功德院　高陽院、奉爲姫宮被建立之、

光明壽院　故御室後高野御室、又申光明壽院御室、御建立、最後御所也、本者仁隆法印房也、

圓樂寺　成典僧正建立、代々門跡相承之、後覺紹法印、讓于超覺律師、

華藏院　三品聖惠法親王傳領、讓于宮大僧正寛曉、其後无可相傳之仁、被讓紫金臺寺御室了、然間燒失了、其後經多年之後、大僧正定豪、無當寺之住坊之故申領之、建立房舍、當時定親法印沙汰也、

威德寺　白河院御寵人、東御方、俗號祇園女御、件人建立、本佛百體大威德也、住坊者、此堂西也、彼東御方、被作之後、讓于養子禪寛阿闍梨安藝阿闍梨云々、其後實任僧正傳領門跡相傳也、住坊者、當時院主、實助法印、傳領之後燒了、○中略

〔本朝世紀〕仁平二年六月十一日甲戌、近曾撿非違使等、行向仁和寺僧綱等房、責濫行之下手輩、是已講明海弟子、於南京殺人、籠居仁和寺邊、左府奏院、以撿非違使資經、令召件下手之間、仁和寺衆徒稱先例使廳下部、無行向寺內之事、令陵礫廳使之故也、　廿六日、○中略　次定申明海已講罪科、是依陵礫使廳下部事也、

法金剛院

名稱　所在

創建　沿革

法金剛院ハ、始メ雙丘寺、又天安寺ト稱ス、山城國葛野郡並岡ニ在リ、原ト清原夏野ノ山莊ニシテ、文德天皇ノ天安二年ノ建立ナリ、崇德天皇ノ大治五年ニ待賢門院再興シ、法金剛院ト改メ、弘安年中圓覺上人之ヲ中興シ、戒律、眞言、淨土ヲ兼學ス、

〔拾芥抄下本諸寺〕法金剛院（本名天安寺、待賢門院、）

〔山州名跡志八葛野郡〕法金剛院（一名雙丘寺、一名天安寺、）在妙心寺西南三町許、宗旨四宗兼學、（眞言、天台、禪、淨土、）

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　法金剛院　在仁和寺之南、承和元年夏四月、嵯峨太上皇、降臨右大臣清原眞人夏野雙丘山莊、愛水石、同十四年十月授雙丘東墳從五位下、天皇游獵時、駐蹕於墳上、以爲四望之地、故有此恩、壬子冬雙丘下、池水鳥成群、車駕臨幸、池邊放鶻隼拂之、東墳今在法金剛院境內北方、稱內山、前所謂池水之所有、今池上村是也、石岩散在處々也、此院始稱雙丘寺、文德天皇天安年中、實爲寺、改號天安寺、眞言宗而與太秦廣隆寺相通、其後廢壞、待賢門院再興之、號法金剛院、自是爲律院、今屬東山泉涌寺、中興祖律師廣修道御、令男女混雜唱融通念佛、與嵯峨淸涼寺、壬生地藏院相比並、融通念佛緣起一卷、于今在斯院、一說、圓覺上人、製融通念佛緣起六十六卷、令置六十六箇國、又於仁和寺邊、建九箇所道場、自造彌陀像九體、安置各院、今法金剛院本尊、亦是九體之一員也、有七十石之寺產、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕法金剛院　在雙岡南太秦東（戒律、眞言、淨土兼學、）　寺領七十石

文德天皇天安二年建立、號天安寺、（右大臣清原夏野之山莊）

待賢門院再興、（崇德天皇之母后、亞相公實卿之女、）康治二年、剃髮名眞如法尼、久安元年八月廿二日薨、（崇德帝大治五年改天安寺、號法金剛院、）

圓覺律師中興祖（諱）修廣（字）導御（姓）大島氏、豆州服部人、廣元之子也、居法金剛院、修融通念佛、又建嵯峨淸涼寺、慶長元年九月二十九日化、

〔山城名勝志 八葛野郡〕法金剛院（在並岡南太秦東、舊記云、境内方四町、舊圖境内有金目地藏堂、今院外東南二町許有之、自弘安年中、圓覺律師專爲中興之祖、專兼備戒律眞言淨土、號五位山法金剛院天安寺、元是清原夏野山莊也、爲寺號並岡寺、又天安年中稱天安寺、其後久廢、待賢門院再興之、名改法金剛院、）

本尊丈六彌陀、（坐像）中興圓覺上人自畫像、（賛稱名院殿）

〔三代實錄 一清和〕天安二年十月十七日甲辰、便請廣隆寺五十僧於東宮、限以三日、轉讀大般若經、廣隆寺四十僧、近陵寺十僧、始自御葬明日、至于四十九日、讀經念佛、頻日所請、即便是也、陵邊修三昧沙彌二十口、令住雙丘寺、元是右大臣清原眞人夏野之山莊、今所謂天安寺也、

〔仁和寺諸堂記〕法金剛院　待賢門院御建立、御室御沙汰也、毎年被行一切經會、有舞樂、

堂塔

〔山城名勝志 八葛野郡〕法金剛院○中略

阿彌陀堂（法金剛院舊圖、南向、本尊彌陀像、丈六、春日作云々、今堂西向也、）　北斗堂（舊圖、在坤隅、）　三重塔（舊圖、在同彌陀堂東、）　經藏（舊圖、在三重塔北、）

觀音堂（舊圖、在彌陀堂北、堂絶、本尊十一面像、在方丈、）　三昧堂（舊圖、在觀音堂東、）　南御堂（舊圖、在金目地藏堂東池南畔、）　南大門（今廢、兩金剛面形殘在寺東、）

金目地藏堂（舊圖、在三重塔東、今自院二町許當巽、）　法金剛院東御所（又曰、待賢門院仁和寺殿、或曰、待賢門院仁和寺御堂、法金剛院舊圖、東御堂云々、在鎭守社西南、法金剛院東北、此間、有川架橋、川南有池、）　法金剛院仙洞（東御所同所）

寺領

〔山城名勝志 八葛野郡〕同（○法金剛院）文書云、法金剛院幷法命寺兩寺領近所ニ有之分、御代官職事、一法金剛院境内拾六町之事者、一圓爲其方可有御進退事、

天文廿一（壬子）八月十九日　山本若狹守宗法判

法金剛院珠榮御房

參詣

〔百錬抄 六崇德〕大治五年十月廿五日、待賢門院（○鳥羽后藤原璋子）供養法金剛院、（播磨守基隆造進之、上皇(鳥羽)臨幸、）

保延二年十月十五日、待賢門院法金剛院内三重塔幷金泥一切經供養、（有行幸御幸）

〔續古事談 五諸道〕待賢門院法金剛院ヲツクリテ始テ御幸アリケルニ、人々コヽカシコニ興ジケリ、立石ハ德大寺法印セラレタリ、林賢トイフ法師、瀧ノ石タテヽ、ソノカタハラニ、フダニカキテタテ

タリケル、

衣ニテナヅレドツキヌ石ノ上ニ万代ヲヘヨタキノシラ絲、人々見テ、或ハ興ジ、或ハ無益ナリナド云アヘルホドニ、二條ノ帥長實和セラレタリケル、

シレ物ノヨシナシ事ヲスル法師ツイニ人ヤニキルトコソキケ、人々ワラヒノヽシリテヤミニケリ、

〔千載和歌集賀十〕保延二年、法金剛院に行幸ありて菊契多秋といへる心を讀侍ける、

法性寺入道前太政大臣

君が代をなが月にしも白菊の咲や千とせのしるしなるらむ

〔百練抄崇德六〕保延三年九月廿三日、天皇行幸法金剛院、有十番競馬、上皇女院同臨幸 四年四月廿七日、天皇行幸法金剛院、有十番競馬、

〔百練抄高倉八〕承安元年十月八日、上西門院〇鳥羽皇女後白河准母統子供養法金剛院内小堂、太上法皇〇後白河建春門院〇後白河后平滋子御幸、守覺法親王爲導師、

〔三代實錄清和三〕貞觀元年八月廿一日甲辰、皇太后屈請六十僧於雙丘寺、限五箇日、講法華經、奉爲田邑天皇、修周忌之齋也、群臣百寮皆悉參會、

〔百練抄崇德六〕保延元年三月廿五日、法金剛院北斗堂供養、 廿七日、兩院始渡御法金剛院東新造御所、周防守憲方造進之、 五年十一月廿五日、待賢門院供養法金剛院御堂、爲万歲御願云々、

〔百練抄近衞七〕久安元年八月廿二日、待賢門院崩于二條高倉第、廿五日、奉渡法金剛院北三昧堂、

〔玉葉和歌集雜十七〕待賢門院かくれさせ給て後、六月十日比、法金剛院にまいりたるに、庭も梢もしげりあひて、かすかに人影もせざりければ、これに住そめさせ給し事など、たゞ今の心ちして、哀つきせぬに、日ぐらしの聲たえず聞えければ、

堀川

君こふるなげきのしげき山里はたゞ日くらしぞともに鳴ける

〔千載和歌集九哀傷〕待賢門院かくれさせ給て後、法金剛院にて時鳥の鳴侍けるに、

仁和寺入道法親王

古郷にけふこざりせば時鳥誰と昔を戀てなかまし

〔山家集下雜〕十月中の十日頃、法金剛院の紅葉みけるに、上西門院おはしますよし聞て、待賢門院の御とき思出られて、兵衛殿の局にさしをかせける、

紅葉みて君が袂やしぐるらむ昔の秋の色をしのびて

名稱
所在
創建

圓融寺

圓融寺ハ、永觀元年圓融天皇ノ御願建立ニシテ、モト寛朝僧正ノ禪室ナリシト云フ、七佛藥師ヲ安置ス、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國葛野郡ニ在リ、

〔拾芥抄下本諸寺〕圓融院仁和寺法皇御在所

〔山城名勝志八葛野郡〕圓融寺拾芥抄云、仁和寺法皇御在所、仁和寺僧傳云、此舊地在龍安等持兩寺山傍云々、

古德記云、圓融寺、寛朝僧正禪室也、圓融院御在位之時造之、安置七佛藥師云々、

〔元亨釋書二十五資治表〕十有四年春三月、〇永觀元年慶圓融寺、納封戸于寺、

〔日本紀略七圓融〕永觀元年三月廿二日戊寅、新造御願圓融寺供養、准御齋會、行事大納言源重信、權左中辨同致方等也、參議大江齊光作御願文、佐理卿清書、大僧正良源爲講師、權僧正尋禪爲呪願、今日可有行幸之由被仰下、依御物忌停止、儀式同雲林院御堵、

〔扶桑略記二十七圓融〕天元六年〇永觀元年癸未三月廿二日、公家供養圓融寺、安置七佛藥師像、池東建法華

堂、

〔山城名勝志 八葛野郡〕圓融寺〇中略

五重塔 仁和寺寺院云、安置五智如來、永延二年三月廿日、供養大法會百四口、

〔扶桑略記 二十七一條〕永祚二年三月廿日、太上法皇供養圓融寺五重塔、

〔日本紀略 八花山〕寛和元年九月十九日庚寅、後太上法皇〇圓融自堀河院遷御圓融院、公卿以下布衣朝衣相交、前駈僧十人、皆著纖物笠等、列此中、法皇唐御車也、僧正寛朝候御車後、左大臣〇雅信乘車扈從、見之者莫不流涙、

〔本朝文粹 十四願文〕圓融院四十九日御願文、始號朱雀院、　菅相公〇輔正也中略

夫圓融院者、當受圖所草創、類脱屣而捿息、爰設齋會彌增善、因臥雲之後、雖謙一乘佛子之名、昇霞以來、定到無上法王之位、何疑鉢羅樹下、開菓脣而轉妙輪、七寶池中、破波句以登覺路、今勤信心之惠業者、唯添法身之莊嚴也、凡一切衆生、普遊四種佛土、敬白、

正暦二年閏二月二十七日、　別當大納言陸奥出羽按察使藤原朝臣

〔本朝無題詩 十山寺〕暮春遊圓融寺即事　藤原敦基

寺門閑處暫留車、廻眼終朝望晩霞、香口曉夢通嶺月、法林昔跡訪庭花、孤林幽僻春煙細、高閣參差夕日斜、五十餘廻衰老士、被牽仙客忘歸家、〇中略

秋日遊圓融院即事　藤原敦基

載轄載脂出洛陽、圓融古寺翫風光、境應仙洞桂林業、地是帝京柳葉黃、榮耀曉思鸞殿月、鬢眉秋撫虎賁霜、壯年莫笑老携學、職任西都主北堂、

圓宗寺

名稱
所在

圓宗寺ハ、原ト圓明寺ト云ヘリ、延久二年後三條天皇ノ御願ニ由リ、建立スル所ナリ、今廢寺ニシテ、舊地ヲ圓宗寺林ト云ヒ、山城國葛野郡ニ在リ、

〔拾芥抄下本諸寺〕圓宗寺後三條院本名圓明寺

〔山城名勝志八葛野郡〕圓宗寺元亨釋書資治表云、在仁和寺南、莊殿冠郡下、仁和寺寺說云、舊跡今日ニ圓宗寺林、在尊壽院東、此處今爲妙心寺支配地、後愚昧記云、圓宗寺後三條院被建立寺、夜鶴庭訓抄云、額兼行色紙形長季、

〔古事談五神社佛寺〕圓宗寺、本ハ圓明寺也、而宇治殿○藤原賴通被仰云、圓明寺ハ山崎寺號也、同庚午日可被供養ゾト云々、依之圓宗寺トハ被改ケリ、

創建

〔本朝續文粹十一銘〕圓宗寺鐘銘延久二年作之、未作序之間被實撿、東大寺鐘無銘、仍准彼例不進此銘、○中略　江大府卿

夫圓宗寺者、爲護國利生弘法傳燈、殊發叡慮所草創也、擇地於仁和寺勝形之左、卜處於古先帝山陵之前、於是班倕從事、土木畢功、朞年而成、金堂寶塔似從地涌出、不日而止、紺項烏瑟如自天來降、方今寺有樓、樓有鐘、聲振三千之月、響驚朝夕之風、若無其銘、何以示後、作銘曰、○銘略

〔扶桑略記二十九後三條〕延久二年十二月廿六日壬午、供養圓宗寺、請僧百六十口、有行幸、皇太子○白河行啓、御願文云、勅、政務事繁、雖似神器於一日之裏、渇仰志厚、猶事佛陀於万機之間、況叡情之至深、宸慮之想像、爲教法久住、國家永穩、方起伽藍之一院、欲致意根於三寶、爰鳳城之西畔、仁和寺之南傍、有一吉土、相叶議者、新降綸綸之命、忽營土木之功、寫淨界之古風、消雲之營不日而就、適建金堂、奉造立安置二丈金色摩訶毗盧遮那如來像一體、丈六同藥師如來像一體、同一字金輪像一體、丈六彩色六天像各一體、建講堂、奉安置一丈八尺金色釋迦如來像一體、丈六同普賢文殊觀音彌勒等像各一體於斯堂、春則講最勝之妙文、宜祈國家於萬年、秋又演法花之實語、欲救群類於六道、建法花堂、奉安置三尺金銅塔一基、其中奉安金字妙法蓮華經一部八卷、始自今日、定置僧侶六口、令修法華三昧、无二无

三忽屆鷲嶺之風、半行半座遙期龍花之日、是則爲鎮護國家、引接群生也、殊擇靈宿、設供養上已

（仁和寺諸堂記）圓宗寺　後三條院御願、天台法華最勝二會被行之、有竪義、此內講堂、灌頂堂、常行堂、

五大堂、法花堂、〈安置本願聖主御晉狀、行常行三昧、〉

（百錬抄〈五後三條〉）延久三年六月廿九日、圓宗寺內常行堂灌頂堂供養、〈行幸〉

（金葉和歌集〈九雜〉）圓宗寺の花を御覽じて、後三條院御事などおぼしいでゝ、よませたまへりける、

三宮

植をきし君もなきよに年へたる花は我身の心ちこそすれ

神護寺

神護寺ハ、原ト神願寺ト云フ、山城國葛野郡高雄山ニ在リ、和氣清麿ノ建立セシ所ニシテ、其子眞綱、之ヲ空海ニ付シ、歟代ノ勅願所タリ、堂舍僧房壯大ナリシモ、後ニ大ニ頽圮セシニ由リ、文覺諸方ニ勸進シテ之ヲ再興ス、

（伊呂波字類抄〈志諸寺〉）神護寺〈元者號神願寺、弘法大師改神護寺、當寺者稱德天皇御願云々、荒廢中絕之後、和氣清麻呂八幡大菩薩有示事、興隆又經年序之後、弘法大師留跡傳眞言、第二番也、元慶八年此寺有行幸之由、日本紀見、今高雄寺是也、〉

（元亨釋書〈一傳智〉）釋空海、〇中略天長二年勅改高尾神願寺、名神護國祚眞言寺、賜海、

（山城名勝志〈九葛野郡〉）高雄山〈在鳴瀧西北一里許、〇中略〉神護寺

（神護寺略記）當寺四至堺事

太政官牒高雄山神護寺

應遣官使加巡撿糺舊跡且堺四至打牓示且禁遏樵採漁獵當寺領事

創建沿革

四至、東限長谷二子磐瀧尾堺井中河、南限赤坂東峯菖蒲谷井素光寺北峯、西限木與志於渡瀬大谷昇路云志天谷北限小野堺磐坂峯橫路、

右太政官今日下山城國符偁、得彼寺所司等去月廿九日解狀偁、謹撿舊貫、當寺者、初則八幡大菩薩垂靈託、次安置御本尊藥師如來、伽藍開闢之濫觴也、後亦高祖師弘法歸本朝以流布御將來眞言密敎瑜伽傳來之根本也、其後淳和、仁明建御願、光孝、朱雀加修理、後白河後高倉兩代恭憐荒廢、被致興隆、因茲被尋舊儀、寄進寺領、加之國母仙院早遂講堂建立之御願、被展供養之齋筵、遙顧壘跡倩見當時、鎭護王城第一道場者歟、是則出自文覺上人之素意、再挑遍照金剛之餘輝、自爾以降堂塔復礎石、山川限寺領之間、東限長谷二子磐瀧尾堺井中河、南限赤坂東峯菖蒲谷井素光寺北峯、西限木與志於渡瀬大谷昇路云志天谷、北限小野堺磐坂峯橫路也、而近來樵採漁獵之輩率多勢致濫行、喰霞臥雲僧侶加制禁不敘用、悲哉、大師結界之地、忽爲獵者樵夫之場、哀哉、佛法流布之世、猶成住持三寶之妨、僧侶進退惟谷之間、相觸子細於六波羅之處、差遣武士二人安東藤內、石坂次郎、召對素光寺沙汰寺進士藏人不知實名、寺家使相共踏山堺尋舊跡、任道理裁斷畢、而近日亦嵯峨樵夫等引率數輩相語素光寺新地頭、亂入寺領、所企無道之沙汰也、佛法之紹隆、僧侶之止住、斯時猶不安堵、後代宜垂鑒察、不堪地忍、所仰天憐也、蓋乃仕衆徒之愁訴、啓此等之子細而已、望請官裁、早被下宣旨官符、停當時猥籍、且斷向後牢口者、仰伽藍之尊崇、奉祈淳朴之乂安者、正三位行權中納言藤原朝臣賴資宣、奉勅依請、遣官使堺四至定牓示禁遏樵採漁獵者、國宜承知依宣行之者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

寛喜二年閏正月十日

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史兼紀伊守小槻宿禰在判牒

〔壒囊抄十四〕神護寺ハ何レノ御願ゾ　高雄山神護寺ハ、宇佐八幡大菩薩ノ御託宣ニ依テ、和氣清丸奏聞シテ、光仁天皇御宇所建立也、○中略初ハ神願寺トス、其後淳和天皇天長二年上テ官寺トシ、

改テ神護國祚寺ト號スルヲ、今神護寺ト云也、然ヲ檀主淸丸子和氣眞綱朝臣、弘法大師ニ奉リ、同勅賜トシテ永ク密場ト成リシヨリ以來、專天下安全ヲ祈、鎭ヘニ令法久住ヲ守ル靈場也、仍大師恩賜後、灌頂堂、護摩堂、納凉房、阿闍梨房等、數宇建立シ給フ、又眞濟僧正、附屬ヲ得給テ、一重寶塔ヲ立、五大虛空藏ヲ安置シ、同御影堂ヲ建テ、大師御影ヲ懸奉、此御影、是御入定近成、眞如親王、戀慕心慰メン爲、御影ヲ寫シ給ヒケルヲ、大師睹知食テ、開眼ヲバ我可加ト仰セラレケレバ、御影御目ニ懸ラルヽニ、自ラ筆ヲ執テ、眼精ヲ入給ヒケル御影也、然ニ一條院御宇正曆五年甲午七月十六日、雷火ニ依テ、雁塔煙リニ昇リシ時、餘烟及所地ヲ拂ト云共、彼堂ニ於テハ、艮隅ニ忽ニ神僧アマタ出來テ、熾炎ヲ拂滅ケルニ依テ、恙ナシト云々、又近衞院、久安五年己巳中夏頃、爲天火、大塔、金堂、眞言坊等、一時灰燼ト成ト云共、寶龕遂殘テ、眞影今御座ス者也、又八幡御筆御影アリ、是ハ大師昔、東大寺南大門ニテ御對面有テ、相互御影寫シ給ヘリ、神筆影像、今納凉房ニアリ、御筆神影、初ヨリ當寺高雄ニ安置セラレシヲ、近衞院御宇、東大寺ノ鎭守祝ヒ進セントテ、南都ヨリ頻ニ申請、又八幡ヨリ去ヌル保延六年庚申正月廿三日炎上、延喜聖主勅定ニ依、敦實親王造作シ給シ、僧俗二體、外殿御神體燒失セシ故、社家ヨリ強チニ望申ケレバ、鳥羽上皇聞食、不思儀ノ重寶也トテ、鳥羽勝光明院寶藏ニ召シ納メラレシヲ、後鳥羽院御時建久八年丁巳文覺上人修造時、又申請テ返納メラルヽト云々、其大菩薩ノ御影、僧形亦蓮華座シ、日輪ヲ戴イテ、袈裟ヲ掛テ、錫杖ヲ持シ給ト云々、又敦實親王造進シ給ヘル、八幡御影モ法體御影、僧形ノ御頭、日輪ヲ戴キ、御手踏ヲ持チ給フ、俗體御影、一向唐人ノ御姿ノ樣也ト註セル記錄アリ、當寺ノ事ニ非ザレ共、神體因記之者也、誠此御影、天下ノ重寶ナル者歟、サレバニヤ親王所造御影、二體共失給ト云共、此御筆今ニ傳テ、一朝靈寶ナル者哉、又乙訓寺ニ於テ一體ニ互爲御影アリ、譬ヘバ八幡御頭ヲ大師刻彫給ニ、大師御體ヲ、八幡造續給ヘル也、先年遂拜見、奇異殊勝、言語道斷ナル者也、

〔類聚國史百八十諸寺〕天長元年九月壬申、以高雄寺為定額、幷定得度經業等、正五位下行河內守和氣朝臣眞綱、從五位下彈正少弼和氣朝臣仲世等言、臣聞、父構子終、謂之大孝、謇公獻可、謂之至忠、惟忠惟孝、不可不順者也、昔景雲年中、僧道鏡、以佞邪之資、登玄扈之上、辱僭法王之號、遂懷窺覦之心、偏邪幣於邪神、行權謡於佞黨、爰八幡大神、痛天嗣之傾弱、憂狠奴之將興、神兵尖鋒、鬼戰連年、彼衆我寡、邪強正弱、大神歎自威之難當、仰佛力之奇護、乃入御夢、請使者、有勅、進引臣等故考從三位行民部卿清麻呂、面宣御夢之事、仍以天位讓道鏡之事、令言大神、清麻呂奉詔旨、向宇佐神宮、于時大神託宣、夫神有大小、好惡不同、善神惡淫祀、貪神受邪幣、我為紹隆皇緒、扶濟國家、寫造一切經及佛、諷誦最勝王經萬卷、建一伽藍、除凶逆於一旦、固社稷於萬代、汝承此言、莫有遺失、清麻呂對大神誓云、國家平定之後、必奏後帝、奉果神願、粉骨須命、不錯神言、還奏此言、遭時不遇、身降刑獄、遂配荒隅、幸蒙神力、再入帝都、後田原天皇寶龜十一年、數奏此事、天皇感歎、親製詔書、未行之間、遇讓位之事、天應二年亦奏之、柏原先帝、卽以前詔、普告天下、至延曆年中、私建伽藍、名曰神願寺、天皇追嘉先功、以神願寺、為定額、今此寺地勢沙穢、不宜壇場、伏望相替高雄寺、以為定額、名曰神護國祚眞言寺、佛像一依大慈胎藏及金剛界等、簡解眞言僧二七人、永為國家、修行三密法門、其僧有闕、擇有道行僧補之、又簡眞操沙彌二七人、令轉讀守護國界王經、及調和風雨、成熟五穀經等、晝夜更代、不斷其聲、七年之後、預得度、一則果大神之大願、二則除國家之災難者、勅、一代之間、每年聽度一人、又備前國水田廿町、賜傳二世、為功田者、入彼寺充果神願者、更延二世、自餘依請、〔又見類聚三代格、神護寺舊記、東寺官符集、宇佐託宣集等〕

〔神護寺舊記〕神護寺　定置四十五ヶ條起請文事

夫神護寺者、八幡大菩薩之御願、弘法大師之舊跡也、密敎始興隆此砌、眞言遍繁昌此寺、大師入定之後、眞濟僧正御門跡之僧徒相繼居住云々、〇註略　然而漸迄于末代之間、人法共斷絕、堂屋悉破滅、爰文覺悲聖跡之毀廢、歎佛法之陵遲、且為奉報大師之恩德、且為利益一切衆生、故忽所發興隆之大願也、

仍仁安三年戊子秋頃、始參詣當寺、普令巡撿處々畢、後結一宇之草庵、即令居住云々、而間假造立三間四面之草堂、奉安置木佛藥師之三尊等、又造納涼殿、奉安置大師之御影、又造護摩堂、奉安置不動尊、又構甫三字之庵室、僧徒少々居住云々、如此興隆之大願、令祈請三寶之間、經六ケ年畢、爰文覺倩案事情、佛法者依王法弘、王法者依佛法保、自往古至于今、離王法之力外、無有佛法流布之義、就中當寺者自本以爲鎭護國家之道場、故昔所有之堂舍佛像者、是先帝之御願也、古所領之封戸庄園者、是國主之寄進也、然則今更以私力不能興隆、須以事由令奏達於吾君也、仍承安三年癸巳夏頃、參上法住寺御所、爲當寺興隆之依估、可被寄進庄園之由令奏達之處、更以無御裁許、而猶强依祈申、早可罷出御所中之由被仰下事度々也、雖然自不蒙御裁許之外、縱使雖盡一生不可退出之由、猶所令申上也、其故者、今所祈申興隆佛法之大願、是非自身之悕望、又非爲名聞利養、近者助支王法、慰万民之愁歎、遠者利益一切衆生、令度生死之苦海之故也、是則菩提之大願也、雖盡未來際不可退去也、如此令申上不退出之處、以北面之衆并力者法師等、種々令凌礫之後、捕搦預賜撿非違使信房畢、其間被下院宣偁、自今以後不可參入御所中者、可令免除云々、文覺申云、今所祈申者、是无上菩提之大願也、此故、種々雖蒙難堪之御勘當、更以無一念之退心、縱雖盡身命不可退菩提之行、更以非背王法之也、然則若被免除之時者、猶令參上可祈申大願之由也、雖及死罪既流於此願者、世々生々不可退轉云々、而間於信房之許經七箇日之後、被預渡右京權大夫源朝臣賴政畢、仍遂配流伊豆國、彼使者賴政朝臣之郎等源省也、始自被預信房之日以後、令下向彼國之間、三十箇日斷食也、至三十一日之時、內心依祈請佛天之大願、即食物助身命、而間或時加持縛、或時繫杻械、如此種々苦惱、不異罪人之値獄卒、雖然興隆佛法之願、片時無退轉、彌奉祈聖朝安穩、一念無怨心、是又爲无上菩提、存難行苦行之故也（以前次第具載別記）遂下著彼國畢、下著之後、尋入深山之中、苅掃荊棘、構一字之草庵、所令居住也、即發誓云、不被免院勘之外、一期之間不可出山內云々、居住之間、一向所令勤修太上法皇御寶壽長遠之祈禱也、

是又爲興隆當寺、利益一切衆生之故也、配流之後、至于第六年、漸被免流罪、遂還住本寺、其間時々院參云々、還住之後至第五年壽永元年十一月廿二日、蓮華王院御幸之時、進參御堂之內陣、先年蒙流罪之時、如令申上、爲當寺興隆、可被寄進庄園之旨令訴申之處、卽可有御裁許之由被仰下畢、於是文覺流淚成悅罷出畢、次年壽永二年十月十八日、被寄進紀伊國挊田庄畢、又宰相中將泰通卿、爲奉資高倉院御菩提、令寄進同國神野眞國庄畢、次年壽永三年前兵衞佐源朝臣賴朝以丹波國宇都鄕、令寄進當寺傳法料畢、同年五月十九日、太上法皇、以吉富庄一圓令寄進當寺御畢、〇中略是倂以太上法皇之御恩德、漸所令遂興隆之大願也、然而末代之僧徒等、恐任淺劣愚昧之心、張行非法、破滅佛法、空失法皇之鴻恩、違背文覺之本懷者歟、爲禁止彼破滅之因緣、記四十五箇條之誡、所令申請太上法皇之御手印也、仍寺僧等、以置文爲末代之明鏡、各愼誡自身、或互加敎訓、可令佛法壽命繼未來之際也、條々之狀具列如左、〇中略仍爲扶助後代之陵遲、所記置如右、

元曆二年正月十九日〇御手印在所有

神護寺勸進僧文覺四十五箇條起請、偏是佛法興隆之願莫大也、隨喜之心忽催、結緣之思尤深、仍爲後鑒聊加手印也、依聖人之誂淸書之、正二位行權大納言藤原朝臣忠親、

〔源平盛衰記十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

此ニ文覺思ケルハ、宿因多幸ニシテ、出家入道ノ身ヲエ、破壞ノ堂舍ヲ修補シ、無緣ノ道場ヲ相訪テ、二親ノ菩提ヲ助ケ、平等ノ濟度ヲタレンコト、剃髮染衣ノ思出タルベシ、但自力造營ノ事ハ、爭可叶ナレバ、知識奉加ノ勸進ニテ、自他ノ利益ヲ遂セント思ヒツヽ、十方上下ノ助成ヲ申行ヒキケル程ニ、或時院〇後白河御所法住寺殿ニ參テ、御奉加之由言上ス、御遊ノ折節ナルニ依テ、奏者此由ヲ申入レズ、文覺終日相待ケレ共、如何ニト云事モナカリケレバ、御前無骨也トハ爭知ベキナレバ、聞召入ザルニコソト心得テ、天姓不當ノ物狂也ケレバ、是非ノ案內ニモ及ズ、常ノ御所ノ、御坪

ノ方ヘ進參リテ、珍シカラヌ管絃哉、機嫌モナキ御遊哉、我貧道無緣ノ身タリトイヘ共、高雄山ノ神護寺修造建立シテ、佛法ヲ住持シ、王法ヲ祈誓シ、衆生ヲ利益セント云大願アリ、況大慈大悲ノ君、十善萬乘ノ主トシテ、ナドカ輙ク御奉加聞召入ラレズ、口惜キ御事ニコソ、大願ノ意趣御聽聞有ベシトテ、勸進帳ヲサツトヒロゲ、調子モ知ズ、大音聲ヲ放上テ讀レ之、

勸進僧文覺敬白

請下殊蒙二貴賤道俗助成一高雄山靈地建二立一院一令上レ勤二修二世安樂大利一勸進狀、○中略

治承三年三月日、文覺敬白トゾ讀ダリケル、○中略

カヽル處ニ、文覺勸進帳ヲバ、左ノ手ニ取渡シ、右ノ手ニハ、懷ヨリ刀ヲ拔出、管ニハ馬ノ尾ヲ組デ卷、一尺餘ナル刀ノ日ニ耀テ如レ氷、長七尺計ナル法師ノ、而ル大力ニテ、衣ノ袖ニ玉ダスキ上、眉ノ毛ヲ逆ニナシ、血眼ニ見テ、庭上ヲ狂廻ケレバ、思懸ヌ俄事デハアリ、コハイカヾセント、上下騷ケリ、此法印ノ體、殿上マデモ狂參リ氣也ケレバ、法皇モ御座ヲ立セマシ〳〵、公卿殿上人モ、閑所ニ立忍給ケリ、宮內判官公朝ガ其時ハ兵衛尉ニテ、北面ニ候ケルガ、近ヅキ寄テ誘ケルハ、ヤヽ上人御房可二搦捕一之由御氣色也、耻見給ヌ先ニ被二罷出一ヨト云ケレバ、文覺罷出マジ、院中ノ御助成ヲ憑進テコソ、此大願ヲモ思立テアレ、只空クテイデン事ハ、大願ノ空クナルニテ有ベシ、大願空成ナラバ、命生テ無要也、同死スル命ナラバ、大願ノ代ニ死スベシ、死骸ヲ朝庭ニサラシテ、面目ヲ閻魔ノ廳ニテ施ス事、身ノ幸也、造營ノ有無、唯法皇ノ御計タルベシ、五畿七箇道所ヒロシ、ナドカ荒鄉一所給フテ、貧道破壞ノ伽藍ヲ助給ハザラン、○中略 文覺更ニ惡事ナシ、上求二菩提一下化二衆生一ノ方便也、トク〳〵一分ノ慈悲ヲタレ給ヘトテ、護法ノ付タル者ノ樣ニ、躍上リ踊上テ出ザリケリ、其時信濃國住人安藤右馬大夫右宗、武者所ニテ候ケルガ、走向テ太刀ノミネニテ、左ノ肩ヲ頸懸テシタヽカニ打タリケルニ、少ヒルミケルヲ、太刀ヲ捨テ、得タリオウト懷ク、文覺ハ、右宗ガ小ガヒナ

堂塔

ヲ突貫、右宗乍突不放、成上成下、アチヘコロビコチヘコロビテ、勝負見エズ、其後集寄テ、カク〳〵拷ジテ、門ヨリ外ヘ引出シ、平判官資行ガ下部ニ給、資行ハ烏帽子被打落テ面目ナシ、右宗ハ預御感、右馬大夫ニ被成ケリ、

〔源平盛衰記九〕山門堂塔事〇中略

北京ニハ、愛宕、高雄ノ山モ、昔ハ堂塔軒ヲ礙、行學功ヲ積ケレ共、一夜ノ中ニ荒シカバ、今ハ天狗ノ栖ト成ニケリ、

〔羅山文集十五〕高雄山神護寺募緣記元和八年作〇中略

今歎、院宇朽敗、欲構復之、然大廈將傾、豈一木所支哉、小蟲不僵、惟百足之輔也、故上自王公妃嬪卿士命婦、下至於編戶之民庶男女、無大無小、無多無少、無不有施納、則庶乎、此寺之不朽也、而復鎭護國祚之名、與實相稱也、

此記、先生依或人紹价、不得止而代山僧而作也、

〔神護寺略記〕堂院事

一金堂　三間檜皮葺堂一宇在四面庇戶四具、　五間檜皮葺禮堂一宇南面蔀五具、東西各眞戶三具、

右承平實錄帳云、三間檜皮葺根本堂一宇、四面庇戶六具、在五間檜皮葺禮堂一宇、戶五具之中、南面三具、蔀東西、脇戶具戶云々、

今金堂

奉安置、　檀像藥師佛像一軀長五尺五寸　同脇士菩薩像二軀各四尺七寸

已上三尊奉安置錦帳內、此錦者、爲後白河院御願被懸之、

右弘仁資財帳云、藥師佛一軀、脇士菩薩像二軀、

承平實錄帳云、檀像藥師佛像一軀、長五尺五寸　同脇士菩薩像二軀、各長四尺五寸云々

八幡大菩薩像一鋪奉安置堂內艮角帳、大師御筆、但二重內奉懸之、上ハ新本、

右承平實錄帳云、八幡大菩薩像一鋪云々、（〇中略）

一講堂　三間二階檜皮葺堂一宇（在四面庇戸六具）

右承平實錄帳云、三間檜皮葺五佛堂一宇（四面庇戸六具）今講堂是也、

奉安置　金色大日如來像一軀、（丈六、光中化佛一尺六寸卅一尊、）一金色金剛菩薩像一軀、（丈六）中彩色不動明王像

一軀、（丈六）中

右文覺上人、以佛師運慶法印奉寫東寺講堂中尊三體、上人歿後終其功畢、

一五大堂　三間檜皮葺堂一宇（在四面庇、南面在又庇、爲外陣、戸八具、）

右承平實錄帳云、五間檜皮葺五大堂一宇、（在戸七具、在額、）右堂、天長天皇（〇淳和）御願、因之、亭子親王命

和氣有娴、以去寬平三年令修葺亦了者云々、

奉安置　彩色五大尊像、各一軀、（〇中略）

一經藏一切經事（三本内）

一本者不具古經、當寺根本御經也、光明皇后御筆等有之

一本者金泥一切經、（貞元錄）鳥羽院御願也、被相副目錄二卷、朝隆卿筆跡、後白河院御代被安置當

寺、

一本者唐本經、（入藏錄）相副目六大納言朝方卿筆跡、持明院中納言基家卿安置當寺了、

此外、紺紙金字法花經一部（八卷）幷普賢無量（二經）法花會御經、當寺重寶也、

又十二天屛風甲乙二帖、佛師勝賀法印筆、種字者紫金臺寺御室御筆也、

一灌頂院（供僧六口）　六間檜皮造月堂一宇（在二面庇戸四具、南面在又庇、爲三昧耶戒道場、正面蔀六具、東西脇眞戸各一具、）

右承平實錄帳云、六間檜皮葺根本眞言堂一宇、（在二面庇戸七具、在額、云々、中略）

奉安置　胎藏界曼茶羅一鋪、（金泥）金剛界曼茶羅一鋪、（同）

右承平實錄帳云、胎藏界曼荼羅一鋪〈八副〉金銀泥繪赤紫綾、裏八葉形錦、緣同、紐幷軸、桶尻等、金剛界曼荼羅、〈七副〉裝束同上、天長皇帝御願云々、此曼荼羅是也、當寺中絕之時者、被奉宿納蓮花王院寶藏、其後暫奉渡高野山、而後白河院御時、奉安置當堂畢、曼荼羅被奉返渡院宣云、右大辨宰相親宗奉、

〔神護寺舊記〕經藏二字　東經藏

本是羅漢堂東邊立之、而羅漢堂造立之時、於石水院西岸移造之、且怖火難遠人煙也、

奉納一切經　附貞元錄

合大小乘經律論及賢聖集等、總一千二百三十八部、合五千三百五十一卷、內欠本四十四卷、見在五千三百七卷、信行禪師三階佛法等已下四十四卷欠、而相當上人十三年之辰、繕彼欠本、滿一部畢、〈○註略〉

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年二月廿五日丙午、僧正傳燈大法師位眞濟卒、〈○中略〉眞濟表請、建五重寶塔於高尾峯神護寺、造五大虛空藏菩薩像、安置塔中、置七口僧及度年分三人、春秋二季、永設法會、轉讀虛空藏、十輪等經、以鎭護國家也、守其遺跡、至今修之、

〔帝王編年記 十七一條〕永延二年戊子、愛宕山可立戒壇之由宣下、依山門訴訟被改定訖、

〔嚴助往年記〕天文十六年丁未閏七月五日、玄蕃頭高尾城落居、其勢五百許、丹波口郡ニ內藤彥五郎在陣之間、相加其手云々、神護寺之金堂、講堂、塔婆、御願堂、灌頂堂以下、一宇不殘、悉以放火、大門、八夜叉神迄燒失云々、〈或說、於八夜叉江州取行云々、〉

寺領

〔類聚國史 百八十二 佛道〕延曆十二年十月辛亥、正四位下和氣朝臣清麻呂奏、請能登國墾田五十八町、施入神願寺、許之、

〔類聚國史 百八十 諸寺〕天長元年九月壬申、以高雄寺爲定額、幷定得度經業等、〈○中略〉勅一代之間、每年聽度

一人又備前國水田廿町、賜レ傳ニ二世一爲ニ功田一者、入ニ彼寺一充、果ニ神願一者、更延ニ二世一、自餘依レ請、

〔神護寺文書四〕橘判官殿は、君の御いとほしみの人にておはしまし候へば、あにおと・とも、おやともたのみまゐらせて候に、あにが妻をまきとりて候へば、おやをまで定所とゐがせがいにも申候しに、君のおんいとほしみおはしまさん人は、よもさはおはしまさじとおもひ候しかども、たゞいまは、一定さ候けりとおぼえ候なり、播磨國太田御莊揖東郡と申候は、君の御領に候、高雄御莊に、福井莊も、君の御領には候はずや、太田御莊の内池の候は、福井御莊の田をやしなひて、四百餘歲になりて候を、件の池をほして、わづかに田四五町つくらんとて、福井莊の田百七十餘丁干損候は、これは橘判官殿御道理にて候か、御莊園をまろしめさんずる人の御訴には候はずや、一日路をも人の御領の中をもほりかけて、水をとる事は、つねのならひに候、わづかに田四五丁をつくらんとて、福井莊の田百七十餘丁をうしなはれて、高雄をもつくり候まじきは、これはよき事に候か、あにが妻をまきとりけるも、ことわりや、福井の水をぬすむとおもへば、このよし御所に申上候て、たびおはしませ、貴殿はいへの子にておはしませば、申上てたびおはしましなんとおもひ候て申候に候、

六月十八日　文覺

馬權頭殿〇藤原公佐

〔神護寺文書八〕寄ニ進神護寺領一事

在ニ丹波國宇都莊一壹處者

右件莊者、相傳之所領也、而殊爲レ興ニ隆佛法一、限ニ永代一所レ寄ニ進彼寺領一也、田畠地利幷万雜公事、併以宛ニ傳法料一畢、然者更不レ可レ有ニ他妨一、仍寄進如レ件、

壽永三年四月八日　前右兵衛佐源朝臣花押〇頼朝

什物

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　神護寺　號高尾山、有寺產三百五十餘石、稱德天皇神護年中所創建也、故號神護國祚眞言寺、弘法大師住焉、第二世眞濟也、大師始與授戒灌頂之儀、其式一卷、大師之所筆、而其時預之人、各被載其名、傳敎大師等、亦在其列、今現在寶藏、又紺紙金泥連筆一切經、以簾帙裹之、此外大師所筆有十如是一幅、眞僞不分明、又木皮上所書無著菩薩之字、其筆法殊勝、非可疑者也、又大師所畫六曲屛風之山水、設彩也至濃矣、元一雙物、而其隻今在醍醐報恩院、於彼院謂畫工康房之筆也、弘法與康房、倭語相同、故當寺誤康房稱弘法者乎、又有宅間法眼所筆十二天之屛風、鈴、獨鈷、念珠、幷兩界曼陀羅圖、弘法歸朝日所將來也、鐘有橘廣相之詞、菅是善之銘、藤敏行之書也、世謂三絕、三月二十一日、弘法御影位、許婦人登山、中興祖文覺上人、住寺中曼陀院、山有昭堂、每年七月二十日誦陀羅尼、而修忌、又寺中迎接院、尾張國長母寺無住老師之所暫寓也、則有無住所自刻之千體地藏小像、又地藏院臨溪間、到秋楓葉染紅、誠三秋之奇觀、而與三春東山之櫻花稱一雙、是亦京洛之遊賞也、

用途

〔延喜式二十六主稅〕凡神護寺寶塔院佛燈油、一斛四斗四升、幷七禪師供米、丹後國以正稅交易及春備、每季送寺家、長官專當其事、無長官者次官亦同、

〔延喜式三十六主殿〕神護寺燈料、月別三升、小月減一合、

寺職

〔海人藻芥〕神護寺別當者、文覺上人弟子淨覺上人寄進申ス、北院御室守覺、但近代自寺家申ス子細有之云々、

〔神護寺文書二〕太政官牒高雄山神護寺

應任德治三年院宣旨被請補灌頂小阿闍梨事

右得彼寺三綱等去八月日奏狀偁、當寺者、和氣氏建立、八幡大菩薩所託之庭也、民部卿淸麿朝臣、稟神宣奏聞公家、寶龜年中被下詔書、桓武皇帝以前詔書、普告天下、建一伽藍、號之神願寺、天長重下勅、更爲定額、得度經業例巳爲永格、一則來大神之大願、二則除國家之災難者、緈存竹牒、不遑羅縷、爲祖

參詣

弘法大師、受眞綱大夫寄附以降、擇此地爲禪定之所、卜當寺爲護法之庭、改寺號名神護國祚眞言寺、玉像比肩、皆似盡巨靈之功、金容結趺、無不假毘首之手、朱軒畫閣之構、臂山腹以開、畫廣廊長廡之基、攀雲根以交峙、碧潟流遠足滌煩惱之垢塵、石龕苔深、堪凝禪默之靜慮、春花秋草、自備供養之妙儀、夕梵晨鐘、晤驚長夜之眠、于誠是佛法相應之福地、密敎最初之靈場也、何者瑜伽之中極秘者、菩薩大士灌頂法門是也、此詣極之夷途、爲入佛之正位、於灌頂有結緣有傳法、結緣者謂隨時競進者皆授之、傳法者謂簡人待器而方許之、然乃鎭護國家、饒益人物、無如此敎、此敎之極秘者、灌頂法門、灌頂之甚深者、結緣之功能而已、往昔大廣智三藏、以大唐天寶五載、於宮中始修此會、上自一人下至庶人、無不被其化、本朝則大師弘法之初、以弘仁三年十一月、於當寺修金剛界會灌頂、以同年十二月、重修大悲胎藏灌頂、結緣者一百餘人、至今五百箇歲、會儀遍于天下、德廣之所及也、溫其蹤跡、起自當寺、事已濫觴也、豈可忽諸哉、彼東寺灌頂者、始於承和之曆、早爲不易之例、觀音院灌頂者、逆隔年代又同本寺、至當山者、雖爲本朝之根本、自家之最初、未被補阿闍梨、寺僧等相替勤其職、殆似無條貫、理豈可然哉、〇中略不勝懇款之至者、正二位行中納言源朝臣賴房宣、奉勅依請者、寺宜承知依宣行之、牒到准狀、故牒、

元應元年十月廿六日

修理東大寺大佛長官正五位上行左大史兼能登介小槻宿禰花押牒

從四位下行左少辨兼中宮大進藤原朝臣

〔神護寺文書九〕後白河法皇當寺御幸記　文覺上人御自筆

二月十六日、當寺御幸御供人々別可注、

御候　供御、御寺沙汰、殿上饗知月房　吉富新庄井　川上庄預所役、北面饗覺文房　福井庄　預

所役、雜人料破子七百合、吉富庄西津庄、□□五百合井御寺沙汰二百合、

御幸午時直御堂參詣、上人文覺被掃除御堂之庭、法皇含咲御覽、速入禮堂著御座、暫時相具上人井

雜載

兵衞介(某甲)入ニ御内陣一、御帳カキアゲテ令レ拜ニ本佛一、於ニ内陣役人一性圓、道海、定信、永眞、行俊、定喜、定圓也、拜禮之後、法皇自火打テ燈爐令ニ燈付一御、兵衞介(某甲)賜ニ火燃一時、以ニ此火一爲ニ常燈一、爲レ傳ニ未來際一、付ニ不斷香(井)油料一給、燈爐燃付、當日本堂長日供養法所ニ被ニ始行一也、諸堂參拜之後出御、

〔園太曆〕建武二年閏十月十五日、行ニ幸神護寺一、(俟ニ灌頂一)

〔神護寺略記〕後宇多院八千枚事

延慶四年三月晦日ヨリ、當寺御參籠、密々儀也、(以ニ曼荼院一爲ニ御所一、不レ及レ被レ仰ニ別當一、)同四月八日、於ニ護摩堂一八千枚在レ之、(以ニ食堂一爲ニ御居所一、)相ニ大覺寺宮(性圓法親王、)一令レ候給者也、禮盤ヨリ巽角御也、

一正和三年七月廿一日、後宇多院御ニ幸當山一、自ニ今夜丑剋一、納涼坊御通夜、閼伽水御手自令レ取レ之給云云、雖レ然僧都御先達も御行水在レ之、三時相續而御行法在レ之、同御手自令レ獻レ花給云々、一七ヶ日之間爲ニ此御儀一云々、

一於ニ納涼殿一百ヶ日御影供令ニ行御一

正和三年十二月六日ヨリ、當寺御參籠(以ニ曼荼院一爲ニ御所一)百日之間、每夜寅一點御ニ幸御影堂一、閼伽水御手自令レ取レ之給、於ニ納涼坊一御行法在レ之、御表白祭文即法皇御製□□□御共人石見判官入道重如、于時承仕隨正、(當堂預、)同四年三月廿一日御結願日、寺家恒例御影供之次、自ニ法皇一御捧物二百十種被レ送レ之、仍滿寺々僧參勤畢、

同御幸、内陣御座、廿二日、大覺寺殿ヘ還御也、

〔神護寺文書九〕被ニ院宣一偁、當寺者、弘法大師經始之仁祠、文覺上人再興之靈跡也、之專ニ顯密之佛法一、未レ携ニ弓劒之武略一歟、而今偏隨ニ散卒逆惡一、似レ招ニ自宗之破滅一、暴濫之至、魔障之甚也、是併起レ自ニ一類之張行一、定非ニ滿寺之結構一歟、自今以後、早退ニ城墎之壘構一、宜レ禱ニ朝家之太平一者、院宣如レ此、仍執達如レ件、

八月廿一日　參議光明

神護寺住侶御中

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應修灌頂事

右入唐廻請益傳燈大法師位圓仁表偁、○中略先師最澄法師、○中略延曆廿三年、奉詔入唐、○中略延曆廿四年、歸朝復命、○中略其年有勅、初建灌頂道場、又勅先師於淸瀧峯高雄寺修灌頂法、傳授眞言敎、○中略

嘉祥元年六月十五日

〔扶桑略記拔萃桓武〕延曆二十四年八月廿七日和氣朝臣弘世奉勅、眞言秘敎未傳此土、然最澄闍梨幸傳此道、良爲國師、宜拔諸寺智行兼備者、令受灌頂三昧耶、因茲九月一日、於淸瀧峯高雄寺始建毘盧遮那大壇、設備法會、○又見叡山大師傳

〔伊呂波字類抄久疊字〕灌頂延曆二十四年九月、依勅天台沙門最澄、於高雄峯始修灌頂、日本始灌頂、

〔古京遺文〕神護寺鐘銘

愛當之山、神護之寺、三寶既備、六度無虧、唯所有梵鐘、形小音窄、故禪林寺眞紹和尚、始發弘願、有心改鑄、鎔範未成、衣裓早化、檀越少納言從五位上和氣朝臣彝範、悼和尚之遺志、尋先祖之舊蹤、以貞觀十七年八月廿三日、雇治工志我部海繼、以銅一千五百斤令鑄成焉、恐年代久遠、後人不知、仍聊記於鐘側、右少辨橘朝臣廣相之詞也、

高山寺

高山寺ハ、山城國葛野郡栂尾山ニ在リ、天台僧尊意ノ開ク所ニシテ明惠之ヲ再興ス、寺傍ニ茶園ノ跡アリ、我國茶樹栽培ノ濫觴ト云フ、

名稱所在

〔書言字考節用集 一乾坤〕栂尾 城州葛野郡、此地在高山寺、法性坊尊意開基、明惠上人再興、

〔雍州府志 五寺院〕葛野郡　高山寺　號栂尾山、舊天台宗、而比叡山法性房僧正尊意之開基也、明惠上人再興之、○中略、曾明惠上人種茶於斯山、深瀬三本木等之園名今猶存、曾清拙、觸芳、夢窓三師、遊斯山賦詩、時呼斯山稱茶山、自是有茶山之號、

寺域

〔高山寺緣起〕一四至事

右寛喜二年正月廿三日、海住山慈心房 民部卿長房卿、法名覺眞、定當山四至事、可申下官符之由、被申合上人畢、同廿六日、當山四至之堺巡見、十一人、山諸僧上下二十餘人、口人十人、同閏正月三日、當山四堺畫圖等、被送慈心房之許、且先被進仁和寺御室畢、定四至間事、爲申入也、同十日、被下官符宣、堺四至打牓示、其趣頗嚴密也、仍續左、

創建沿革

〔高山寺緣起〕夫當寺者、曩昔之聖跡、往古之靈地也、本是雖爲愛宕山之一鎔、神護寺之別院、荒蕪歲舊兮、堂閣跡空、廢絶日久兮、梵鐘響斷、而明惠上人住居之後、佛日再留影、法雨重播潤、伽藍復舊、興隆是新、依之土御門院御宇去建永元丙寅十一月、被下後鳥羽院院宣、以此栂尾寺院山內、別賜明惠上人、仍以此所、永爲華嚴興隆之勝地、寺號高山寺、

〔扶桑略記 二十五朱雀〕天慶三年二月廿四日、天台座主大僧都尊意卒、年七十七、俗姓息長丹生眞人、左京人也、歲及六七、好讀文書、村邑諸童、推而爲首、口唱南無、心樂山林、不嘗魚肉、不害羽毛、隣家有翁、授以千手陀羅尼、幼少之心、常以諳誦、北山有幽邃堂、號曰度賀尾寺、登彼道場、三箇年間、不歸親家、日夜不斷誦千手陀羅尼、

〔神護寺文書 九〕當寺別院事 ○中略

一栂尾 號高山寺、

或記云、一別院、高山寺、右明惠上人、生年九歲、始入文覺上人之室、十六歲隨文覺上人出家、其

堂塔

後住山年久、修錬功積、然間深厭交衆、頻好隱遁、依之爲彼閑居所建立也、文覺上人草創也、

〔栂尾明惠上人傳記下〕文覺上人ノ敎訓ニ依テ、上人紀州ノ庵ヲ捨テ、栂尾ニ住シ給ヒシ始ハ、此山ニ松柏茂リ、人跡絶タリ、松風蘿月、物ニ觸テ心ヲ痛マシメズト云事ナシ、爰ニ纔カナル草庵ヲ結テ、最初、上人ト伴僧ト、只二人住シ給ヒケル、竹ノ箕、柴ノ垣、心細キサマナリ、自ラ訪ヒ來ル類ヒ、心ヲ留メザルハナシ、次ノ年ノ春ノ頃ヨリ、懇切望ム輩有、依テ四人トナレリ、其一人ハ喜海ナリ、万事ヲ投捨テ、只行學ノ營ヨリ外ハ他事ナシ、眠ヲ許ス事モ、夜半一時也、髮ヲ剃リ爪ヲ切ル受用モ、日中一時ニハ過ギズ、此夜ル晝各々一時ノ外ハ更ニ他ヲ交ヘザリキ、キビシキ事無限、瞻ケノ志ニテハ、堪コラフベキ樣モ無リキ、此ノ衆四皓ノ窟ヲ並ベシ商山ヲ摸スベシトゾ、常ニハ上人戯レ給ヒシ、其後又此衆ニ交ラン事ヲ難去望ム類ヒアリテ、漸ク七人ニナレリ、其時ハ、サラバ竹林ノ七賢ガ友ヲ結ビシ跡ヲ學バンナド被仰程、此事世ニ聞エテ、道ニ志シアル輩尋來テ、交ラン事ヲ乞ト云ヘドモ、上人更ニ許シ給ハズ、爰ニ或ハ門外ノ石上ニ座シテ、六七日食セズ、或ハ庭前ノ泥裏ニ立テ、三四日不動、如此振舞ヲシテ深切ナル志ヲ表スル人、皆是月卿雲客ノ親類、世ヲ貪ル類ニ非ザルノミ交レリ、依之上人力ラナク許シ給フ程ニ、三年ノ中ニ、十八人ニ及ベリ、上人、ヨシサラバ、廬山ノ遠法師ノ會下ニ准ゼン、此外ハ更ニ不可許トゾ禁メラレシ、此僧侶、志ヲ勵シ、心ヲ一ニシテ、道行ノ爲メニ頭ヲ集タル事ナレバ、何レモ愚ニハ不見、面々ニ營ミアヘルサマ、我身ヲ見ルモ、サスガニ人ヲ見モ哀レナリ、二度ビ正法ノ世ニ立歸リタルニヤト、隨喜ノ涙ヨリ〳〵袖ヲ濕サズト云事ナシ、カクテ年月ヲ經ル程ニ、又難去人重リテ、十年ノ内ニ、五十餘輩ニナレリ、〇中略然レバ三寶ノ加護モ甚シカリケルニヤ、實ニ不善ナル者ハ自ラ退キシカバ、山中ノ淸衆ケガル丶事、更ニナカリキト云々、

〔山城名勝志九葛野郡〕高山寺在二栂尾山一、寺務仁和寺御門跡、(中略)元天台、尊忠開基、中興花嚴宗明惠上人、〇中略

金堂一字（五間四面、或云金堂今亡、開山塔禪堂院上有摩尼殿、是舊跡也、）

右本堂者、高雄文覺上人、當初雖令草創、其功未終、而明惠上人卜居、遂終成風之功、

中尊周丈六盧舍那（運慶）脇士古佛十一面（傳敎大師、本尊、或云弘法大師、）彌勒（新造）持國（圓慶作、改名運覺、）增長（堪慶）廣目（康運、改名定慶、）多聞（康海、改名康勝、運慶子、）

右諸尊像、本是洛城地藏十輪院（運慶建立堂也、）本尊也、而建保六年、彼十輪院炎上後、運慶法印奉渡之、承久口年四月廿六日、上人開眼供養、

阿彌陀堂一字（一間四面、今金堂東有舊跡、）

右堂者、本是中納言敎盛東山別業佛閣也、參議雅經卿後室有相傳子細、施入當山、中尊彌陀（寺僧云、今洛陽了蓮寺本尊是也、後門論明惠弟子惠日坊等云々、）本處東山賊人盜取御身、奉渡遠國、於彼處可歸本處之由、有靈夢、仍記此子細、竊奉送本處門下、

三重塔一基（毘盧舍那　文殊　普賢、觀音　彌勒）堪慶作、其內文殊（定慶作、）寬喜元年六月廿七日、上人開眼供養、（○中略）

東經藏（本在羅漢堂東、羅漢堂造立之刻、移造石水院西岸、）西經藏（奉納置一切經、○中略）大門一字（二階樓門）金剛力士（湛慶作、）安貞三年建之、

〔大乘院寺社雜事記〕文明二年四月晦日、栂尾悉以燒失歟云々、爲事實者可歎々々、當社眞影等御座、希有在所也、如何哉、能々可尋之、定而如近日者、靈所皆以可滅亡也、

〔嚴助往年記〕天文十六年閏七月五日、玄蕃頭高尾城落居、（○中略）栂尾（○高山寺）又同前、十三重塔婆已下、悉以炎上、諸坊一字不殘、兩寺（○神護、高山、）滅却了、

〔玉葉和歌集〕（十九釋敎）高山寺にまうで、清瀧川のほとりにてよみ侍ける、

岡屋入道前攝政太政大臣

世々をへてにごりにえみしわが心清瀧川にすゝぎつるかな

〔花園院宸記〕元應二年九月八日甲申、今日、御幸(○後伏見)栂尾、朕同參、寅剋乘車出門、先寄車於北山、永福門院(○後深草皇女久子)令乘給、准后又從三位實子自元乘車後、院御方以御輿先御幸也、巳剋到栂尾、上皇自元御座御影堂也、朕同參、前大納言奉爲寫御影、召律師豪信(藤爲信朝臣息也)令寫之、但頗不似、此御影者、正慶所奉作無毫毛之相違、如奉向龍顏、懷舊之涙難抑、次參石清水院、奉拜春日住吉神體(明惠上人所奉寫也)、續之口林聖人房供御膳、還御之次御幸梅畑宮對面、及晩歸洛、

〔花營三代記〕應永二十九年閏十月二十六日、御方御所樣(○足利義量)河原邊へ御出、御臺高山寺御影御拜見、御神事始、一七箇日御精進也、

十一月三日、御臺、高山寺成、則御影御拜見了、(春日御影、住吉御影也、)於閼伽井坊有一獻、

〔海人藻芥〕栂尾高山堂者、明惠上人建立地也、於彼寺者、宮住寺不可有之、上人誡之云々、坊ハ五也、近代以外繁昌歟、閼伽井坊、東坊、池坊、尾崎坊、田中坊是也、

〔吾妻鏡十五〕建久六年四月五日庚申、畠山二郎重忠、爲謁明慧上人參向栂尾、而重忠近到之時、煙塵頗動、上人門弟等、洛中有燒亡歟之由成疑之所、上人云、不然有其號勇士、只今可來入、其氣所見也者、小時重忠參名謁、僧衆今更仰信上人之詞云々、談華嚴宗法門、承出離要道退出云々、

〔海人藻芥〕茶者、自上古我朝ニアリ、挽茶節會トテ、於内裏被行公事儀式、然葉上僧正(○榮西)入唐之時、重而茶ノ種ヲ被渡、栂尾明惠上人翫之、サレバ本ノ茶ト云ハ、栂尾也、非ト云ハ宇治等ノ事也、

大覺寺

大覺寺ハ、山城國葛野郡嵯峨村ニ在リ、淳和天皇ノ皇后正子内親王、御父嵯峨天皇ノ舊宮ヲ

名稱　所在　創建沿革

捨テ、寺ト爲シ、所ナリ、而シテ其開祖ハ、淳和天皇ノ皇子恒貞親王(法名恒寂)ナリトス、後、後宇多法皇之ヲ中興シテ以來、世々宮門跡タリ、

〔伊呂波字類抄太諸寺〕大覺寺

〔拾芥抄下本諸寺〕大覺寺(在遍照寺西、嵯峨天皇御在所。)

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年二月廿五日癸酉、淳和太皇太后(○淳和皇后正子內親王)請、以嵯峨院爲大覺寺、曰、嵯峨院者、太上天皇(○嵯峨)昔日閑放之地也、昇霞之後、涉日既深、階庭不掖、臺榭亦壞、如今頗加修葺、僅避風雨、尋想宿昔之餘哀、欲守終焉於此地、仍奪像禪經、時備敬禮、鐘磬香花、隨以安置、伽藍之體、佛地之端、五六年來、適然具足、若不變名定額、以示將來、殊恐樵夫牧豎或致褻犯、願也樓閣仍舊、便爲道場、名號惟新、稱曰大覺、欲使追慕攀號之志、今古无移、眞如法性之因、自他共利、勅曰、宜隨太后御願賜額曰大覺寺、頒行天下、(○此請文、又見菅家文草、)

〔本朝文粹十一詩序〕三月盡日、遊五覺院同賦紫藤花落鳥關々、　源順

嵯峨院者、我先祖太上皇(○嵯峨)之仙洞也、松風蘿月、借老於煙巖之阿、怪木奇花、雜插於水石之地、自龍昇漢口、人控胡髯、草樹皆告雨露之恩、樓殿空爲僧侶之室、五覺院者、彼院之西洞也、大師尋仙遊而占洞房、寫佛智以利沙界、蒙其教者、暗通三獸淺深之蹤、戴其恩者、遂無一蛇頭尾之論、凡此土衆生、誰不歸依乎、是故我道通儒、吏部善侍郎、率諸客十餘人、先拜冰雪之尊顏、遂感風煙之勝趣、于時紫勝之花滿院、黃鳥之聲入窓、紛紛亂落、飛梢雲於媚景之晴、關關和鳴、調箏柱於和風之曉、誠花鳥之欲盡、觸耳目而難拋者也、(○下略)

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年三月二十三日癸丑、淳和太皇太后(○正子內親王)崩、(○中略)太后(○中略)嵯峨舊宮捨爲精舍、號曰大覺寺、其側建廨舍、名爲濟治院、療僧尼之病、以淳和院爲道場、不改院號、安置平生侍左右之尼、厚充供料、永令居住、師資相承、修道不斷焉、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　大覺寺　傳云、嵯峨天皇之御室也、然天皇之行宮、而非御室、其後爲寺、淳和天皇之皇子恒寂爲開祖、

〔諸門跡譜下〕大覺寺殿

恒寂親王初祖

人皇第五十三淳和帝第二皇子、桓武天皇之御孫、母皇后正子內親王、嵯峨帝皇女、俗名恒貞親王、號亭子皇子、天長十二位太子、九歲、嘉祥二年出家、廿四歲從眞如阿闍梨受兩部密法、晚以莊田貲產捨大覺寺、大覺寺者弘仁帝之故宮也、天長大后改爲佛寺、寂造丈六彌陀像、又度諸經論等、寺供僧類皆寂之所置也、仁和元年九月廿日入滅、六十歲、○中略

〔增鏡十三秋のみ山〕文保二年三月廿六日、御門○花園おりゐさせ給ふ、○中略龜山殿○後宇多はさる事にて、ちかごろは、大覺寺のほとりに、御堂たて丶こもりおはしましつ丶、いよ〳〵密敎のふかき心ばえをのみつとめまなばせたまへば、おのづからも京にいでさせ給事なく、またまゐりかよふ人もまれなる樣にて、かうさびたりつるを引かへ、事しげき世に、おこなひもけだいしてむづかしくおぼさる、○下略

〔增鏡十四春の別〕卯月○正中元年のすゑつかたより、法皇御なやみおもくならせ給へば、天下のさわぎ思やるべし、御門○後醍醐も、いみじくおぼしなげく、御修法ども、いとこちたく又々はじめくはへさせ給へど、しるしもなく、日日におもらせ給へば、よるひるとなく、いかにいかにととぶらひたてまつらせ給、○中略大覺寺殿へ行幸ありし事、おぼしいづ、よろづの事どもきこえさせたまふ、うへの一御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしき物に思ひきこえさせ給て、この大覺寺に、そこらのみさうみまきなどをよせおかる、法のあるじとしておはしますべくおぼしおきてけり、さやうの事など見給へざらむあと、うしろめたからぬさまなどぞ、聞えさせ給ける、○中略御法事

をぞ、まめやかにつとめさせ給ける、大覺寺にては、性圓法親王とりもちておこなはせ給、御門春宮の御法事は、龜山殿の大多勝院にてつとめらる、

〔神皇正統記後宇多〕嵯峨のおく、大覺寺といふところに、弘仁寛平のむかしの御あとをたづねて、御寺などあまた立てぞおこなはせたまひし、その丶ち、後醍醐の帝位につきましまし丶かば、またしばらく世をしらせたまひて、三年ばかりありて、ゆづりましましき、

〔諸門跡譜下〕後宇多院

諱世仁、法諱金剛性、龜山院第二皇子、○中略文永十一三廿六卽位、八歲、○中略德治二丁未七廿六御出家、四十一歲、御戒師禪助僧正、法諱金剛性、正中元甲子六月二十五日崩、五十八歲、號大覺寺殿、

元亨二年四月、後宇多院使大納言藤原定房卿到關東、請曰、委世事於帝、而其身早隱居大覺寺也、高時聽之云々、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕大覺寺○中略

嵯峨天皇故宮、後改爲寺、貞觀十八年始爲大覺寺、

後宇多天皇、德治二年落飾、居大覺寺、

堂塔

內金堂　後醍醐天皇、元亨元年建立、此時諸堂再興、

內塔　後光嚴院、應安六年建立、

廡舍　名濟治院、於是療僧尼之病、

〔新千載和歌集雜十八〕建武三年八月廿八日、大覺寺回祿有しかは、故院年久しく御心をとゞめられて、造營せられける諸堂、ならびに房舍ども、殘すくなく、時のまの煙となり侍けるかなしさのあまりに、ふかき山中にまよひありき侍けるとき、おもひつゞけ侍ける、

權僧正道我

宗派 寺格 寺領

世中のげにうき時は身ひとつをかくす計のかげだにもなし

〔都名所圖會四〕大覺寺宮は、眞。言。宗。にして、佛殿には、五大尊を本尊とす、弘法大師の作りたまふと也、開基は恒寂法師、淳和帝第三皇子なり代。々。法。親。王。御。住。職。したまふなり、嵯峨天皇故宮を精舎として、大覺寺と號す

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年八月廿三日己亥、勅以山城國葛野郡二條大山田里地三十六町、爲大覺寺地、其四履、東至朝原山、西至觀空寺、幷栖霞館○館一本作觀東路、北至山嶺、自餘山野、入嵯峨院四至者、皆爲公地、若有稱空閑申請者、一切不得勅許、但樵蘇之輩、不在制限、

〔大覺寺文書〕山城國御所內七拾石餘、幷嵯峨內生田村高田村貳拾七石餘事、爲新地進覽之、全可有御直務之狀如件、

天正三年十一月六日　信長花押

大覺寺殿

山城國伏見庄內、爲加增五拾石宛行訖、全可有寺務狀如件、

天正四年十一月廿二日

大覺寺殿

上嵯峨內六百拾五石事、令寄附候訖、全被寺納、可被專勤行等之狀如件、

天正十三年十一月廿一日　秀吉花押

大覺寺殿

就今度聚樂行幸、江州高島郡海津西庄蛭口村內貳百石之事、令宛行訖、被勵御奉公、其家之道可被相嗜狀如件、

天正十六卯月十五日　秀吉花押

大覺寺殿

什物

〔集古文書三十二〕天正十一年下知狀所藏不詳

大覺寺御門跡領高田村御本役年貢、草。錢。、地子錢等之義、向後、御直務申定上ハ、下用給五段半事茂、一織可被御直務、自然誰々雖望申、御直納之上ハ、別號下用給事不入義候、御寺領之妨仁可成義者、今より以後も、御停止尤候、恐々謹言、

大覺寺殿

御雜掌中澤右近大夫殿

〔大覺寺文書〕山城國上嵯峨之内六百拾五石、同地子錢百六拾石、池裏之内貳百貳拾八石、吉祥院拾三石貳斗、合千拾六石貳斗之事、全可被寺納、此外、門前境内山林竹木等寄附之上者、爲守護不入、當知行、永代不可有相違也、寺家諸法度、如先規、從門跡令下知、專寺院之興隆、勵事敎之修練、彌可令抽天下安全之精祈之狀如件、

慶長十六年四月十六日　家康花押

大覺寺殿

〔山城名勝志九葛野郡〕大覺寺○中略

又大澤池乾有心經堂舊跡、此堂從嵯峨天皇迄後奈良院被納宸筆心經云云、至于今件心經在于寶藏勅封也、云云、寺僧加行間、每日詣心經堂舊跡蓮華峯寺、觀空寺觀音等云云、

〔親長卿記〕長享二年七月十日、被仰下云、奉勾當嵯峨心經可有御頂戴可仰遣云々、十二日、午剋許、自大覺寺被送心經、

一本、嵯峨天皇一字三禮、表紙之内、藥師三尊、檀林皇后宸筆云々、供養弘法大師、

一本、後光嚴院一字三禮、供養三寶院、

一本、後花園院一字三禮、供養三寶院義賢僧正、

納黒漆筥、御使寶幢院法印持參、先各男女令頂戴、○中略即相副勅封、返進御使了、

〔寛永七年雲上明覽大全 上〕大覺寺宮○中略
御領千拾六石二斗餘、
上嵯峨京御里坊、下立賣御門內、西殿町南側
御留守居森左馬大允

御宗旨眞言大覺寺
御無住
院家覺勝院前法務前大僧正大勝院少僧都法眼
院室尊壽院僧正觀無常院權僧正常永仙院權僧正尊勝頂院權僧正大悲心院權僧正實莊殿院權僧正妙法輪院權僧正
坊官井關兵部卿法印野路井刑部卿法印
諸大夫林石見守野路井近江守渡邊安房守
侍林右衞門大尉森左馬大允武田伊勢介
御用人田口長門介細川右馬大允衣笠播磨介角倉出雲
侍法師千島參河法眼田中相模法眼勢多因幡
御執達石塚主馬小野司馬

〔雍州府志五寺院〕葛野郡大覺寺○中略淳和天皇之皇子恒寂爲開祖、其後住職多爲王子、與仁和寺兩立、而爲天下眞言宗之法務、

〔海人藻芥〕大覺寺者、近代後宇多法皇ノ御願也、不及座主、寺務稱號者也、

〔仁和寺諸院家記〕大覺寺寛平法皇御所、定昭僧都傳領之、
定照大僧都興禪寺一乘院、又號嵯峨僧都、顯宣公(慕經)弟、左京人、藤原氏、仁敎僧都入室、寛空僧正附法、一長者、山階寺別當、

〔菅家文草九奏狀〕奉淳和院太后令旨、請大覺寺置僧俗別當幷度者狀
右此寺、元太上皇之閑院也、微誠有達、乃許爲寺、令所恐像未時及、去聖逾遠、若無精進練直、不令心事諧合願也、別選持戒修心、兼堪住持、每年二人、豫得度例、若其人研精不綬、智慧有聞者、唯安祥寺等之

雜載

例、豫維摩最勝之竪義、輪轉之次、卽在安祥寺下、又諸寺皆有僧俗別當、若無別當、恐失綱紀、重願也、僧俗別當各一人、隨寺家願、以被配任俗別當、必用公卿、功德無邊、善根無量、興隆佛法、護念國家、上奉朝過去聖靈等、下普及一切衆生界、謹請處分、

元慶□年九月廿日

〔源氏物語松風十八〕つくらせ給御だうは、大かく寺の南にあたりて、瀧殿の心ばへなど、をとらずおもしろき寺なり、これは川づらにえもいはぬ松かげに、なにのいたはりもなくたてたるさんでんのことゝそぎたるさまも、おのづから山里の哀をみせたり、

〔花鳥餘情松風十〕大覺寺は、もと嵯峨院と號せり、嵯峨天皇昔日閑放の地なり、瀧殿は泉殿といふがごとし、大覺寺にも瀧殿あり、棲霞寺にもあるによりて、心ばへなどおとらず、おもしろき寺とはかける也、

〔本朝無題詩山寺九〕夏日大覺寺卽事　藤原明衡

晨出洛城日漸闌、嵯峨古院得盤桓、披雲先禮氷顏潔、當夏獨垂雪鬢寒、忝北敎文難悟李、院主賴公、令予讀西天正敎、遂序、荆南氣味愁斟蘭、予時有盃酒、有梵宮華構龜陰舊、左傳云、龜陰者龜山之陰也、洞○洞上下恐有脫字、珍奇馬腦殘、太上天皇馬腦御枕于今在此寺也、松岸風生秋百尺、竹籬曉至露千竿、何因遠覓蓬瀛地、象外勝形此處看、

〔續後拾遺和歌集冬六〕元亨三年八月、大覺寺殿に行幸ありて、人々題をさぐりて、歌つかうまつりしついでに、落葉をよませ給うける、　後宇多院御製

山里はちる紅葉ばに道絕て冬は人めのかるゝなりけり

清涼寺　棲霞寺　附入

名稱 所在

清涼寺ハ、山城國葛野郡嵯峨ニ在リ、卽チ栖霞寺ノ趾ナリト云フ、東大寺ノ僧奝然、入唐ノ際、淮南楊州開元寺ノ本尊釋迦如來ノ像ヲ摸シテ將來シ、之ヲ此ニ安置セシ所ニシテ、始メハ眞言宗ナリシガ、近世ニ及ビテ方丈ハ淨土宗ノ僧之ニ住シ、寺務ハ仍ホ大覺寺宮ニ屬ス、

創建 沿革

栖霞觀ハ、河原左大臣源融ノ別業ニシテ、大覺寺ノ開祖恒貞親王(法名恒寂)之ヲ寺院ト爲シテ、栖霞寺ト號ス、

〔拾芥抄 下本諸寺〕清涼寺 嵯峨釋迦、奝然上人、

〔書言字考節用集 二乾坤〕清涼寺 城州葛野郡、世云嵯峨野寺、永延元年釋奝然安置自異域所將來釋迦像、

〔山城名勝志 九葛野郡〕清涼寺 (中略)按今清涼寺、納愛宕護神輿、孟夏祭出之、以迎送神、寺雖有山下、屬神地、故題樓門曰愛宕山、蓋有以歟、

今方丈、爲淨土宗、塔頭五房、各爲眞言宗、寺務大覺寺御門主也、

〔雍州府志 五寺院〕葛野郡 清涼寺 元棲霞觀也、後爲栖霞寺、始爲眞言宗、嵯峨天皇之本願、而弘法大師住焉、淳和帝皇子恒寂爲開祖、本尊則在今阿彌陀堂也、法泉院之福滿虛空藏、役行者之作也、五大堂中、大威德天之所乘牛者、弘法之作也、處々有伽藍之址、法泉院、法性院、妙王院、地藏院、歡喜院、是古栖霞寺之坊舍、而各眞言宗也、大覺寺門主爲寺務也、五大堂前有大石塔婆三基、傳言、其一嵯峨天皇、其二檀林皇后、其三爲左大臣源融公、予思、嵯峨天皇多皇子、源融公因謠曲、而世人之所偏識也、故誤稱之、須爲恒寂之塔也、東大寺法橋奝然入唐、將今釋迦像幷十弟子像來、安置此寺、改清涼寺、然近世淨土宗僧守之、住方丈僧稱上人、多官家子也、寺中有三坊、其一古善導寺之跡也、

〔花鳥餘情 十松風〕棲霞観は、左大臣融公の山莊なり、後に寺に成て棲霞寺といふ、今の清涼寺の東に有る、あみだ堂これなり、清涼寺は、その西にある寺也、小野宮右府記、永延元年八月十八日、法橋上人位奝然申請云、以愛太子山號五臺山、清涼寺に建立一伽藍、置白栴檀釋伽尊像云々、此釋伽は、奝然入唐してわたしたてまつる佛也、但清涼寺と云名は、昔より有しなり、貞觀七年の國史に見え

たり、又李部王記、天慶之比、捿霞寺尺伽堂と云るせり、奝然わたし侍るよりさきにも、尺伽堂はありし也、いとおぼつかなき事也、所詮清涼寺といふは、もとよりありける中に、奝然別に一堂を立て、三傳の尺伽を安置し奉るにや、

〔清涼寺縁起第五〕清涼寺の本尊、我朝日本國に來給へる由來をくはしく尋れば、人皇六十四代圓融院の御宇に、南都東大寺に沙門あり、奝然法橋となづく、學三論をきはめて、名天下にきこゆ、宿願の子細ありて、もろこしのあき人陳仁爽、徐仁滿等が歸朝の舟に便船して、永觀元年癸未八月一日に、ともづなをとく、癸未の歳にあたれり、十月にいたりて、宣旨をかうぶり、淮南楊州の開元寺に至て、地藏院につく、これは則彼御本尊、開元寺の飛閣にとゞまりましますと云事を、日本に於て、久しくつたへきゝて、おがみ奉らんがためなり、云かるにたゞ飛閣のみありて、佛像はましまさず、その子細を、寺僧にくはしくあひ尋るところに、寺僧こたへていはく、彼瑞像、天竺よりわたり給て後、二百餘年の間、所々にうつり給ふ、〇中略今上皇帝二代大宗迎て、內裏の滋福殿に移し奉り、毎日供養し給ふ、〇中略奝然あやにくに奏して申さく、我身、いやしといへども、不思議の機緣をもて、瑞像を拜見し奉る事、生々世々の本懷なり、伏て願はくば、此靈像をうつし刻て、日本國に渡し奉り、上一人より下万民に、善緣を結ばしめむと、あながちに歎き申奉る處に、皇帝いよ〱、奝然が慇懃のこゝろざしを感じおぼしめして、便尊像を內裏の西花門の外に出し奉り、故宮を改て精舍となし、あらたに啓聖院と號し、銅錢一百緡を捨て、佛師の名匠張榮をめして、彼精舍に於て、うつし造らしむ、不日に事なりて、福智圓滿し、妙相端嚴なる事、毗須羯摩がつくりし古佛にすこしもたがふ所なし、〇中略

繪

太宗雍熙三年丙戌、台州の鄭仁德があきなひ船に便船して、奝然とともに本朝に光降あり、六十

五代の花山院永觀二年丙戌七月九日、歸朝の旨奏聞す、大藏經五千四十八卷、及十六羅漢の繪像、同時にわたる所なり、明年にをよひて、六十六代一條院永延元年丁亥二月十一日に入洛あり、乃大極殿にあむちし奉り、毎日一斗の白飯を供養す、三年をへて、大内北野蓮花臺寺に安す、いく程なくして、嵯峨栖霞寺にうつし奉る、しかれば、奝然奏聞を經て、愛宕護山をもて、五臺山に准じて、更に清涼寺をたて、、この瑞像を遷座し奉らんとて、先一字の小堂をつくりて、安置し奉る、いまの釋迦堂これなり、淸涼寺の建立、宿願いまだとげざるに奝然寂滅す、時に、六十七代三條院の御宇、長和五年丙辰三月十六日なり、入滅已後、弟子盛算かさねて奏聞を經て、栖霞の西の臺を清涼寺となづけて天竺の靈鷲山、震旦の五臺山等のもろ〳〵の聖迹の土一坏を入て檀をつき、瑞像の厨子を安置し奉る、故に、日本有驗の靈場天下無雙の瑞像なり、

〔增鏡序〕きさらぎの中の五日は、つるのはやしにたきゞつきにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつましさにさがの清涼寺にまうで、、常在靈鷲山など心のうちにとなへて、おがみたてまつる、〇下略

〔塵嚢抄十二〕ニ如來トハ何　善光寺阿彌陀、嵯峨釋迦、因幡堂ノ藥師也、其由、七佛藥師ノ所ニ見タリ、嵯峨釋迦ハ、三國傳來ノ佛也、〇下略

〔松蔭の日記二花まつもろ人〕こぞ十〇元祿三年の秋も、嵯峨の釋迦如來をゐて奉りけるに、家人はじめて、あやしきめこなどまでも、ゆるし給はりて、おがませ給ふ、さるべきおとゞひとつを、かきはらひてすへ奉りたり、上下となくゆすりてまいるさま、いはんかたなし、三國傳來のゆへを、人みなしり奉りたれば、珍らしきけちえんに、皆こぞりてなみだおとす、かくのみ、神ほとけの道にさへ、ふかくつかうまつらせ給事と、今さらに、たれも〳〵かんじ奉るを、〇下略

〔山州名跡志八葛野郡〕五臺山清涼寺俗曰釋迦堂在大覺寺西三町許

樓門南向　安金剛力士長一丈許　額　愛宕山竪額　筆者不考　堂南向　本尊　釋迦佛立像、五尺二分、作　毘首羯磨天　脇士　十大弟子立像、二尺五寸、　作不考、共安同厨子、　脇壇所安　東　文殊　西　普賢長三尺許、獅象三尺餘、　作不考

〔百練抄十三後堀河〕貞應元年二月廿三日、今日嵯峨清涼寺供養也、法皇御幸、○中略　先年回祿之後、往生院念佛房所造營也、

〔法然上人行狀畫圖四十八〕承久三年、嵯峨の清涼寺、釋迦堂是也　廻祿の事侍しを、このひじり○往生院念佛房、又號念阿彌陀佛、知識をとなへて、程なく造營ををへ、翌年二月廿三日、供養をとげられにき、

〔本國寺年譜十〕寛永十四年丁丑

十月九日、嵯峨清涼寺火、

寺領

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年九月己卯朔、詔以山城國葛野郡山地一町八段賜清涼○涼、原作源、今據一本改、山寺、

〔寺鑑下〕淨土宗　嵯峨　清涼寺

御朱印　高九拾七石

什物

〔好古小錄上書畫〕清涼寺融通念佛緣記二卷、畫大夫法眼永春、備前守光國、粟田口隆光、前兵部大輔入道寂濟、飛彈守光行、土佐守行廣、春日修理亮行秀、詞上卷後小松帝宸筆、及公卿集書、下卷慈照院義政公、佐々木赤松等、

〔元亨釋書十六力遊〕釋奝然、○中略永觀元年秋入宋、○中略　雍熙三年、上台州鄭仁德舡歸、永延元年也、然得大藏五千四十八卷、及十六羅漢畫像、其優塡模像見今在嵯峨清涼院、

參詣

〔法然上人行狀畫圖四〕保元元年上人○源空　二十四のとし、叡空上人にいとまをこひて、嵯峨の清涼寺に、七日參籠のことありき、求法の一事を祈請のためなりけり、この寺の本尊釋迦善逝は、西天の雲をいで、東夏の霞をわけて、三國につたはりたまへる靈像なれば、とりわき懇志をはこび給ひけるも、ことはりにぞおぼえ侍る、

〔吉記〕元暦二年五月廿九日辛亥、今日、院〇後白河御幸嵯峨、次參詣清凉寺、聖人奉供養一日五部大乘經、有御結緣、花山院大納言、三條中納言、修理大夫、平宰相、大藏卿參御供云々、

〔明月記〕正治二年八月十六日、雞鳴之程參上御堂、無程御輿出御、予〇藤原定家資家、國行、信光、騎馬供奉、布衣打梨經七條大宮四條大路、自西京田中出廣隆寺西門前、出大井河、河無御船、不令渡給、以信光乘小舟被供燈明、法輪寺即令參嵯峨釋迦堂、又於大門居御輿、以予被供燈明、即還御、被昇入御輿於中院草庵、

〔管見記〕嘉吉二年五月十五日、自去十日、武家母儀、被參籠嵯峨五大尊、上臈同被相伴云々、仍爲八葉車赴嵐際、

〔康富記〕寶德二年五月二日乙巳室町殿大方殿〇足利義政及妻自嵯峨五大尊有御出京、御本復之故云々、

〔二水記〕永正元年三月十九日辛巳今日嵯峨釋迦御身拭參詣、　五大堂在清涼寺内、俗呼牛堂、大威德明王所乘牛、名作故云、

〔鹽尻 六〕大覺寺と、清涼寺と、度々公事有之、清凉の本願へ遣候證章の寫し、

條々

一嵯峨清凉寺ハ、大覺寺御門跡御寺務所之條、本願彌如先矩御門跡江式日の御禮可相勤事、

一涅槃會大念佛會、誕生會、此三ヶ度の散錢ハ先規之通、御門跡目代致支配、其外ハ、本願へ可被受納候、且又枝木枯木之儀、院内之事ニ候間、本願之可爲支配事、

一大壇之儀、去ル元祿十六年十二月、大覺寺御門跡、堂供養之節、被指置候假堂に付、無之其巳前も有無不分明候、可爲其通候、向後正月十五日、五月十五日、九月十五日、國家安全の御祈禱、三月十九日釋迦の御身拭、十二月煤拂、右五ヶ度の法事之節、不及斷、本願より、大壇の退け法事濟候はば、如元大壇可被差置候、臨時の法事有之大壇の退ヶ法事不取退候而不叶節は、奉行所へ被相達、可令指圖を受候事、

附眞言宗の寺僧、於釋迦堂、登大壇法事堅可爲停止事、

右此度遂證儀、且又松平紀伊守就在府、相談定之、急度堅く此旨可守候、爲後證双方へ相渡者也、

寬永三年八月十八日　奉行連判

右は近年、大覺寺と、清凉寺本願と、諍論數度ニ付、幕府の有司、是非を付、證章を双方へ遣し、事極りける、是往年、釋迦の像、江府にて開帳の時、數千兩の金を得たりけるより、互に寺務を諍ひ、訟に及びけるとかや、淺ましかりし事共也、

〔管見記〕嘉吉三年三月七日、嵯峨清凉寺大念佛、自昨日始云々、

〔駿牛繪詞〕唐庇牛名

安嘉門院〇後堀河准母邦子內親王の御牛、北白川そだちなり、所生のはじめより、さま〲にいたはりたてられしかば、勢もおほきに、容儀もたぐひなき程の上牛也、女院御秘藏の次第のべつくしがたきもの也、眞影を花幔にうつされて、清凉寺の本尊の帳にかけて、いま〇延慶三年頃にあり、

〇

栖霞寺

〔伊呂波字類抄〕勢諸寺栖霞寺

〔拾芥抄〕下本諸寺栖霞寺嵯峨野西

〔山城名勝志〕九葛野郡棲霞觀〇中略　栖霞寺〔中略〕寺說云、以恒寂爲始祖、

〔三代實錄〕三十八陽成元慶四年八月廿三日甲辰、太上天皇〇淸和遷自水尾山寺、御嵯峨棲霞觀、以水尾有營造佛堂也、詔授左大臣源朝臣融家令正六位上伴宿禰枝雄從五位下、棲霞觀者、左大臣山莊也、故有此賞也、

〔小右記〕長元四年三月十日丁巳、向栖霞寺、拜文殊像、太宋商客良史附屬放盛給、中納言三位中將、中納言息重等同車、少納言資高騎馬、少將經季騎馬來迎、

〔本朝文粹十詩序〕初冬於栖霞寺同賦霜葉滿林紅應李部大王敎　源順

栖霞寺者、本栖霞觀也、昔丞相〔○源融〕遊息所、遺者、泉石之聲、今大王〔○恒寂〕紹隆所、供者、香花之色、

〔本朝無題詩九山寺〕春日於栖霞寺即事　藤原敦基

行々信馬眺望通、象外光陰一道空、花色春深林霧底、鐘聲日暮野煙中、逃名將指龜山月、稽首遙傳鶴樹風、〔慈寺安置釋尊第三傳之像〕西出都門尋景趣、捿霞觀下片霞紅、〔○中略〕

夏日遊栖霞寺　藤原實範

古先帝跡低嘉猷、不耐栖霞寺裏遊、昔自鶯與仙蹕寺、今移鷲嶺勝形幽、午茶煙細僧爐下、子竹露危仙閣頭、人物變來非往日、唯看泉石卜風流、

〔新古今和歌集雜十七〕後白河院栖霞寺におはしましけるに、駒ひきのひきわけの使にて參けるに、　定家朝臣

嵯峨のやま千世のふる道あととめて、又露わくるもちの月こま

二尊院

二尊院ハ、一ニ華臺寺ト云ヒ、又阿彌菩提寺ト稱ス山城國葛野郡嵯峨村ニ在リ、淨土宗ノ開祖源空ノ古跡ニシテ、正信房湛空ノ再興スル所ナリ、元ハ天台、眞言、律、淨土ノ四宗ヲ兼學セシガ、德川幕府時代ニハ、專ラ天台宗ニ屬セリ、其影堂ニ安置セル法然ノ畫像ヲ、足曳ノ御影ト云フ、

〔山州名跡志九葛野郡〕小倉山二尊院〔寺號華臺寺〕在同山、境地東面、〔○中略〕門〔東向〕中門〔同〕額、小倉山、〔竪額、後柏原院宸筆、〕佛殿〔東向〕額、二尊院、〔後奈良院宸筆〕本尊二佛〔北〕釋迦佛〔南〕阿彌陀佛〔共立像、二尺五六寸、〕作春

創建沿革

日

法然上人影堂　在佛殿北南向、所安置畫像、座像、二尺五六寸、左向黑衣、右手持念珠、右側有包鉢、圖絹面、筆者　宅磨

〔山城名勝志九葛野郡〕二尊敎院　號小倉山、額小倉山二尊院、像快慶作、影堂法然上人畫像、世稱足曳影、

嵯峨記云、麓に、二尊敎院あり、彌陀釋迦を安置し給ひて、四宗兼學にて、巍々堂々たり、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　二尊院　號小倉山阿彌菩提寺、古樓門有小野道風之額、今絕、本尊釋迦彌陀也、故號二尊院、元天台、眞言、律、淨土、四宗兼學之地也、然不詳其開祖、法然上人暫住焉、法嗣信空相續、自茲兼淨土宗、月輪相國兼實公、甚歸法然、欲寫生前像、然不肯之、或時浴後伸兩脚而坐、相國召畫工宅間、隔籬竊令寫之、法然見之、大驚祈之、兩脚立屈、其畫影今在堂、是謂足引影、法然碑石在山上、然文字不分明、第十六世廣明和尙、後奈良院之歸依僧也、方丈靈寶有若干、法然所自筆之淨土宗門七箇條敎誡、殊絕也、終有諸弟子之名、其中有綽空、是則本願寺祖親鸞也、其外寺物不遑枚擧、寺領有百二十石、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕二尊院　號阿彌菩提寺、在嵯峨小倉山、寺領百十九石

本尊　彌陀、釋迦、　故曰二尊院、

舊嵯峨淳和二帝離宮也、後延喜帝之皇子常康法親王爲寺、屬僧正遍昭、爲天台宗、既而源空上人結庵、屢通于此、當時住僧正信上人名曰湛空、歸依于源空而從行、於師配所、於船中、以紙粘造師眞像、今在當寺影像是也、又上人滅後立墳墓、建長五年七月廿七日寂、壽七十八、

源空上人塔　碑銘宋濂所作

御影堂　上人畫像、世謂之足引御影、有傳記、

二條殿歷代塔　有多

應司殿塔　信國公以來多有之

西三條家塔

〔法然上人行狀畫圖四十三〕嵯峨の正信房湛空は、德大寺の左大臣實能公の孫法眼圓實の眞弟、大納言律師公全これ也、〇中略つねに聖道門をすて、上人〇源空の弟子となり、ひとすぢに淨土門にぞ

宗派 寺領

雜載

いり給ける、〇中略嵯峨の二尊院は、上人草庵をむすびて、かよひ給し地なり、その跡かうばしくして、居をこゝにしめ、寺院を興隆し、楞嚴、雲林兩院の法則をうつして、二十五三昧を勤行し、上人の墳墓をたて、ゝもはらかの遺徳をぞ戀慕し給ける、上人遷謫のときも、配所までともなはれけるが、御かた見のためにとて、船のうちにて、上人の眞影をはりたてまつられける、船のうちのはり御影とて、當時二尊院の塔にましますこれなり、生年七十八、建長五年五月の比より、所勞の事おはしけるが、同七月二十七日、念佛數百遍、ねぶるがごとくして、終給にけり、

〔蓮門宗派 山城名跡志所載〕當時者、弘仁聖主、凝叡信於此砌、爲萬代之御願、被建一宇之梵閣、華臺寺是也、而曆數推移、涼燠相積、徒雖貽聖跡之名、更無紹隆之仁、爰法然上人、求幽閑之地、到此靈跡、結精舍、行佛道、二尊院是也、其後、正信上人湛空再興、

〔山州名跡志 九葛野郡〕小倉山二尊院〇中略宗旨兼學天台、眞言、律、淨土、

〔寺鑑 上〕天台宗　小倉山　京嵯峨　二尊院

御朱印　高三百貳拾石

〔二尊院文書〕惠林院殿

勅願所二尊院事、依應仁錯亂、堂舍令退轉之條、任禁裏御奉加之旨、於諸國被勸進、可被專造功之由所被仰下也、仍執達如件、

永正十五年四月廿八日　左衛門尉 花押
前近江守 花押

當院雜掌

〔二尊院文書〕光源院殿

當寺祠堂錢事、任先年御成敗之旨、塔頭中彌不可御改動、如此所被仰付也、依執達如件、

永祿三年二月廿七日　　大藏丞花押
　　　　　　　　　　　伊勢守花押
嵯峨
二尊院雜掌

〔新拾遺和歌集 十 哀傷〕中園入道前太政大臣かくれ侍て、二尊院にて後のわざし侍し時、あまたのはらからの中に、ひとり送侍し事を思ひてよめる、　　境空上人

思はずよ夜半の烟とのぼるまでひとり立そふ契ありとは

〔古今著聞集 二 釋教〕湛空上人、嵯峨の二尊院にて涅槃會をおこなはれける時、人々五十二種の供物をそなへけるに、花をうへにたて丶、歌をよみて付けるに、西音法師、水瓶に櫻を立ておくるとて、よみける、

きさらぎの中のいつかの夜半の月入にしあとのやみぞかなしき

返し湛空上人

闇路をばみだのひかりにまかせつ丶春のなかばの月はいりにき

檀林寺

名稱
所在
創建

檀林寺ハ、山城國葛野郡嵯峨ニ在リ、嘉祥三年、嵯峨天皇ノ皇后橘嘉智子ノ創スル所ニシテ、唐僧義空ヲ以テ開祖トス、尼寺五山ノ一ナリ、

〔伊呂波字類抄 多 諸寺〕檀林寺

〔拾芥抄 下本 諸寺〕檀林寺 嵯峨野、橘太后、

〔國花萬葉記 二上 山城〕檀林寺 禪宗　嵯峨ニ在　仁明天皇嘉祥三年五月、嵯峨天皇之御后檀林皇后、御本

願建立、開基唐ノ義空、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕檀林寺　在嵯峨　寺領二百石

嵯峨天皇后檀林皇后本願、仁明天皇嘉祥三年建立、唐義空開基、本朝禪刹始、而尼寺五山之其一皇后深歸佛法、見空海和尙聞眞言密法、次曰、南天竺菩提達磨傳來佛心宗有大唐國、空海未究之、太后乞之命僧惠蕚、文德天皇齊衡年中入唐、唐宣宗皇帝大中年中　惠蕚歷鴈門五臺山、至杭州靈池寺、謁齋安禪師、採得宗門直旨、伴禪師弟子義空歸朝京師、居住東寺、而後皇太后創檀林寺居焉、時々問道、

〔山城名勝志九葛野郡〕檀林寺　嵯峨舊圖、在朱雀大路東作道北、檀林寺跡云云、嵯峨大指圖、在天龍寺前金剛院北東側、

按增鏡、檀林寺跡ニ淨金剛院ヲ建ラルト云云、淨金剛院天龍靈居庵ノ東隣也、雙村行道記ニ、四禪寺檀林唐地ト云ヘリ、然バ此邊皆檀林寺舊地乎、檀林寺橘太后本願、以唐僧空爲開祖、本朝禪刹始也、至後世尼寺五山一員也、朱雀大路天龍寺前、清凉寺大門通街、作道法界門筋、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、壬午葬太皇太后于深谷山、○中略　太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、○中略　后自明泡幻、篤信佛理、建一仁祠、名檀林寺、遣比丘尼持律者入住寺家、仁明天皇助其功德、施捨五百戶封、以充供養、

〔元亨釋書六淨禪〕釋義空、唐國人、事鹽官齋安國師、室中推爲上首、初慧蕚法師、跨海覓法、吾皇太后橘氏欽唐地之禪化、委金幣於蕚、扣聘有道尊宿、蕚到杭州靈池院、參于國師、且通太后之幣、國師感嗟納之、蕚曰、我國信根純熟、教法甚盛、然最上禪宗、未有傳也、願得師之一枝佛法、爲吾土宗門之根柢、不亦宜乎、國師令空充其請、空便共蕚泛海、著大宰府、蕚先馳奏、勅迎空館于京師東寺之西院、皇帝賚錫甚渥、太后創檀林寺居焉、

〔赤染衛門集〕檀林寺の鐘の、つちのしたにきこゆるを、いかなるぞととへば、鐘堂はなくなりて御だうのすみにかけられたればかうきこゆるぞといひしに、きさきのおぼしをきあはれにて、

ありしにもあらずなりゆく鐘のおとつきはてんよぞ哀なるべき

天龍寺

名勝所在 創建

天龍寺ハ、山城國葛野郡嵯峨ニ在リ、卽チ昔ノ檀林寺ノ趾ナリト云フ、曆應年中將軍足利尊氏、後醍醐天皇ノ追福ノ爲ニ建立セシ所ニシテ、原ト曆應寺ト稱シ、禪僧楚石ヲ開山ト爲ス、五山ノ第一ニ列シテ、禪宗ノ巨刹ナリ、而シテ寺中ノ多寶院ハ、後醍醐天皇ノ廟所タリ、

〔和漢三才圖會 七十二末 山城〕靈龜山天龍資聖禪寺　在葛野郡嵯峨大井川北岸

〔天龍寺造營記錄〕師檀和睦有改號、被下勅裁云々、其狀云、

曆應寺事、可被改號靈龜山天龍資聖禪寺者、院宣如此、仍執達如件、

七月〇曆應三年廿二日　　權大納言經顯奉

謹上　夢窻國師方丈

此事聊有奇特、今年夏比、武衞將軍〇足利尊氏有兩度之夢想云々、語云、金龍赴于此地、大虚ニハピコル、或時亦示云、銀龍天ヨリ降テ、此地ニハピコル、兩度瑞夢共以衆日之儀也、而後日ニ改號有、天龍之名信仰彌深云々、

〔天龍寺造營記錄〕曆應資聖禪寺造營記

後醍醐院號吉野新院曆應二年八月十六日崩御事、同十八日未時自南都馳申之、虚實猶未分明、有種々異說、終實也、諸人周章、柳營、武衞兩將軍〇足利尊氏、直義、哀傷恐怖甚深也、仍七々御忌懇勤也、御佛事記在別、且爲報恩謝德、且爲怨靈納受也、新建立蘭若、可奉資彼御菩提之旨發願云々、〇中略敷地事、漸有其沙汰之處、西郊龜山殿者、祖皇仙跡、先院御管領之地也、殿舍傾危、既欲顛倒、令造替佛

閣之條、可爲何樣哉之由、內々執奏、勅許無相違、殆君臣合體御願也、而間被申誘夢窻國師之處、任勅○
願○○○之先例、可被仰聖道家歟、不然者可爲律家歟、於禪院者、臨川一寺、旣興隆了、重疊不可叶云々、而猶
可爲禪院之由、公儀治定之間、國師可有管領之由、被定下之處固辭、然而推而可申成勅裁旨沙汰了、
以御使行重、付進事書於上卿、(按察中納言藤經顯卿)
（折紙）龜山殿事、可擬禪院之旨、先日被仰下了、此上忩被下院宣於夢窻國師幷武家、可致其沙汰之由、可
申入畢、　(圓忠執筆)
其後、被下院宣云、
龜山殿事、爲被資後醍醐院御菩提、以仙居改佛閣、早爲開山致管領、令專佛法之弘通、可奉祈先院
之證果者、院宣如此、仍執達如件、
曆應二年十一月五日　　按察使俊顯奉
夢窻國師方丈

〔天龍雜志〕足利相公自筆文書
一天龍寺事、爲奉報先皇之恩德、蒙今上之勅命、爲御開山建立訖、公私之發願、濫觴異他、現當之願望
御伽藍之昭鑑、仍當家之子孫一族家人等、及末代專當寺歸依之志、寺院幷寺領等事、可抽興隆之
精誠、若現不義及違亂者、永可爲不孝義絕之仁候也、可得此御意候、恐惶敬白、
觀應二　八月十六日　　尊氏御判
侍者御中
右在于天龍寺重書之內

〔夢窻國師年譜〕康永四年八月晦日
疇昔、嵯峨天皇御宇、有慧蕚上人、奉勅渡于大唐、流通佛法於本朝、參監官女國師信、有敎外玄旨、仍請

其會下上首義空和尚、來于本朝、勅以東寺西院、爲安下處、時々召對鳳闕、于時皇后宿植開發、一面契悟、乃建精舍於此嵯峨、以號檀林、請彼禪師住持、檀林寺內、有十二院、皇后居其一院、因稱檀林皇后、其事具載石碑、而在東寺、其碑表題云、日本首傳禪宗記、然禪宗興行、未得其時、皇后登霞之後、檀林精舍、漸々荒零、或爲郊蕪、或爲民居、嵯峨聖代已後、迄千四百載、禪院聿興、謂洛之建仁東福相之壽福建長是也、自爾以降、大小禪利、徧於天下、七十年前、後嵯峨院、卜皇居於此地、乃是檀林寺一院之故基也、龜山法皇、亦相繼以爲行宮、其內有壽量院、分南禪寺僧二十員、而安此院、今之法堂所在、便是壽量院之舊跡也、是知、此地將興大叢林、而豫有斯兆矣、遂見、又革此行宮、作大伽藍、禪宗首傳本朝、則此地爲先鋒、禪宗旺化於世、則此地亦爲殿後、此乃得處得時、以興佛法之驗也、理自照著、其誰疑諸、本寺修營已及太半、朝廷叡願必當圓成、山名寺號、未揭牌扁、今上皇帝（光明）先染宸筆、佛殿、法堂署額、左梁右欐誌文、以至聯芳洞鑒之表題、並是太上天皇（光嚴）之奎翰也、聖志懇誠斯彰、祖宗光幸可見、熟思此加藍之興建、偏起乎大亂之因緣、其豈非明王賢臣、外逆內順、相爲表裏、扶竪宗猷者、

〔太平記二十四〕天龍寺建立事

夢窻國師、左兵衛督（直義）ニ被申ケルハ、近年天下ノ樣ヲ見候ニ、人力ヲ以テ爭カ天災ヲ可除候、何樣是ハ吉野ノ先帝（後醍醐）崩御ノ時、樣々ノ惡相ヲ現ジ御座候ケルト、其神靈御憤深シテ、國土ニ災ヲ下シ、禍ヲ被成候ト存候、（中略）哀可然伽藍一所御建立候テ、彼御菩提ヲ弔ヒ進セラレ候ハヾ、天下ナドカ靜ラデ候ベキ、菅原ノ聖廟ニ贈爵ヲ奉リ、宇治ノ惡左府ニ官位ヲ贈リ、讃岐院、隱岐院ニ尊號ヲ謚シ奉リ、仙宮ヲ帝都ニ遷進ラレシカバ、怨靈皆靜テ、却テ鎭護ノ神ト成セ給候シ者ヲト、被申シカバ、將軍モ、左兵衛督モ、此儀最トシテ被甘心ケル、サレバ頓テ夢窻國師ヲ開山トシテ、一寺ヲ可被建立トテ、龜山殿ノ舊跡ヲ點ジ、安藝、周防ヲ料國ニ被寄、天龍寺ヲゾ被作ケル、此爲ニ、宋朝ヘ寳ヲ被渡シカバ、賣買其利ヲ得テ、百倍セリ、又遠國ノ材木ヲトレバ、運載ノ舟更ニ煩モナク、

自順風ヲ得タレバ、誠ニ天龍八部モ、是ヲ隨喜シ、諸天善神モ、彼ヲ納受シ給フカトゾ見ヘシ、サレバ、佛殿、法堂、庫裏、僧堂、山門、總門、鐘樓、方丈、浴室、輪藏、雲居庵、七十餘宇ノ寮舍、八十四間ノ廊下マデ、不日ノ經營事成テ、奇麗ノ粧交ヘタリ、此開山國師、天性水石ニ心ヲ寄セ、浮萍ノ跡ヲ爲事給シカバ、傍水依山、十境ノ景趣ヲ被作タリ、所謂、大士應化ノ普明閣、塵々和光ノ靈庇廟、天心浸秋曹源池、金鱗焦尾三級岩、眞珠琢頷龍門亭、捧三壺龜頂塔、雲半間ノ萬松洞、不言開笑拈花嶺、無聲聞音絕唱溪、上銀漢渡月橋、此十景ノ其上ニ、石ヲ集テハ煙嶂ノ色ヲ假リ、樹ヲ栽テハ風濤ノ聲移ス、慧崇ガ煙雨ノ圖、韋偃ガ山水ノ景ニモ未得風流也、康永四年ニ成風ノ功終テ、此寺五山第二ノ列ニ至リシカバ、總ジテハ公家ノ勅願寺、別シテハ武家ノ祈禱所トテ、一千人ノ僧衆ヲゾ被置ケル、

〔天龍寺供養記〕康永四年八月二十九日庚辰、今日天龍寺供養也、著座事、武家依有申旨、所令出仕也、巳半剋出門、束帶（青朽葉下襲、有文帷、白引陪木、表袴、裏同白、）駕毛車、（牛童、車副如恒、不及如木、）侍（有長揚發）一人、小雜色八人、泰成（院司事、兼申領狀、右衛門佐、春宮權大進、）同車、（駕文車可運車也、而日數迫、依難調出、申合人々畢、和）束帶如恒、（紺地平緒、藤輪細劔、）隨身二人、（朽葉雙袴、弓童錦如例、）童（摩尼熊丸、萌木上下、紅衣）（下話、）今日武家兩人、（鎌倉大納言、左兵衛督）召具隨兵帶刀等、參寺門云々、仍路次見物、雜人充滿棧敷、立車無其隙、先立入椎野（兼申上人、）相待刻限休息、此間覺觀上人對面、未剋事已近付之由風聞之間、參寺門、於總門前下車、（件門右四上北面、守護武士數十人列居、不交他人、左立出仕人々車、）步進山門前（左壇下西上南面、守護官人佐渡大夫判官秀綱、敷床子上數祗候、）至彼前下、裾小揖、秀綱脫床子揖、下部四人著熊皮袴、錦羅水干、其外家子、郎徒等數十人有傍、漸入山門、門內左立樂屋、（各以松葉葺也）其前在舞臺、佛殿左壇下、（東寄南敷）立御誦經幄、正面左第一間、敷小文帖爲勅使座、其末敷紫端帖爲院司座、同右第一間、敷同帖爲公卿座、其末敷連紫端帖爲殿上人座、一列著座、是爲武家之法云云、（無公卿座、皆兼並著此所、）經右樂屋并舞臺右（南廊前也）直昇佛前階著座、（著沓、小雜色少少召置砌下、）新中納言自元在座、泰成昇同著院司座、（隨身童召置砌下、是主典代後也、）主典代廳官、候御誦經幄傍、其後次第人々參集、殿上人自佛殿南軒作合參著、聊有通路也、及數刻、如風聞者、隨兵等依有相論之事、兩人出門遲々云々、此間見堂前之儀、佛

殿之外、總門山門兩方廊等、皆半作假葺之門々、構棧敷懸翠簾、南廊武家之輩見物、北廊京方人々見物云々、佛前立大蠟燭四本、(本尊左右脇士前也)佛壇左下、敷打敷備供具、廿合許歟、(各立白小蠟燭)對佛前立飾法被之床子、爲導師座、(夢窻和尚開山也)同佛前左右東西行敷小文帖、爲僧衆座、(伴僧所々長老十人、今度請僧也、)大概所見及如此、酉終剋、勅使藤中納言參、(束帶如恒、前駈一人、揚經侍三人、如木雜色二人、)經左樂屋幷舞臺左、(小廊前也)直昇佛前階、著堂前座、(元著座疊、忽見下之條無骨、仍暫起座、)泰成下壇下小揖、相從堂上、如元著座、既及黃昏間、舞臺四角燒篝、(寺家沙汰也)及亥剋兩人(布衣下紙云々)參寺門、於總門前下車、自後入棧敷云々、其後和尚以下僧自後戶入導場、(此時有亂聲)供奉隨兵等、各取松明、列居兩方廊前庭、一方十人、兩方廿人也、夜陰無念事具了、諷經此間讀御願文歟、(草有範朝臣、清書行尹朝臣、料紙面白、裏紫色、有薄淡、)此次聊述旨趣也、被違委不及聽聞、次撤堂莊嚴、讀楞嚴神呪、行道和尚所々長老以下僧衆百人立也、次正面左第一間、寄柱南北行敷小文帖、爲導師座、佛前左右東西行敷同帖、爲僧衆座、(五人相分著左右)次公卿起座、於佛殿辰巳角軒取布施、(千秋左衛門大夫高範傳之)新中納言以下、殿上人等、次第取之、(各著沓取之、)○中略卅日辛巳、今日又可有佛事、可著座之由、武家令申之間、所令出立也、且御幸可爲未明由、被相催云々、參會人々既參入之由、依其聞、午剋參寺門、(泰成今日依無所役不出仕、)於總門前下車、(守護武士如昨日、)入山門、(門守護官人未參著)直參堂前座、以佛殿左廊西端爲御所、搆入土地、堂之前懸翠簾、參會人々經山門前、自北廊後參入云々、兩人去夜立入伊豆守重能立石山庄、剋限參上、自後入棧敷、未始剋御幸、於總門放御牛、引入御車於山門前、(秀綱參庭上、取見參、)供奉公卿殿上人步儀、被寄御車於御聽聞所、(此儀不見及、隨傳聞記之、)其後隨兵等、如昨日列居左右廊前庭、嚴重之儀也、此間新中納言以下人々、自樂所參進著座、今日陞座可有一切經供養云々、堂莊嚴大略同昨日、但佛前左右、立白木長机、(有打敷)其上並置經五卷、其後立鼓位五脚、又後敷小文帖、(兩方如此)對佛前立飾法被之床子、剋限先亂聲、次僧十人、出於山門右廊、經左右樂屋中央舞臺、昇正面階、著佛前左右帖、(五人相分著之、)次和尚出於同所參入、先敷筵道、樂人舞人左右相分先行、各發樂、次持幡童二人、(左右)和尚漸步、執蓋執綱侍者僧六人相從、昇正面階著座、侍者同堂上之後持幡童、

執蓋人退、傍舞人奏一曲、各退出、次和尚著床子、僧衆同著卓位、左右相同、次陞座禪學二人、次揚經題目、事了、和尚已下僧衆還著本座、長机卓位等撤之、次公卿起座、取布施、其儀如昨日、布施目六、又同令通用歟、但仙洞御加布施二生衣新中納言取之、各還著本座、和尚以下僧衆退座、次舞樂振鉾一曲、又同、

左蘇合太平樂　右古鳥蘇長保樂

陵王荒序朝榮舞之納蘇利久俊、忠春舞之、

笙龍秋笛景朝大鼓景武

武家兩人、於後戸聽聞之、後參御前、舞樂之間、令祗候云々、

已上今日儀、又大概如此、雅仲蘇合未了之程、自閑居退出、不還入椎野、直出京、戌半剋歸宅、御幸還御、子剋、武家兩人、丑剋歸京云々、兩日大儀、無風雨難、無一事之煩、被遂行了、珍重々々、

〔太平記二十四〕依山門嗷訴公卿僉議事

同〇康永四年八月ニ、上皇〇光嚴殿臨幸成テ、供養ヲ可被遂トテ、國々ノ大名共ヲ被召、代々ノ任例、其役ヲ被仰合、凡天下ノ鼓騷、洛中ノ壯觀ト聞ヘシカバ、例ノ山門ノ大衆恐ヲナシ、夜々ノ蜂起、谷々ノ雷動無休時、アハヤ天魔ノ障礙、法會ノ違亂出來スルトゾミヘシ、三門跡〇靑蓮、妙法、梶井、是ヲ爲靜、御登山アルヲ、若大衆共、御坊ヘ押寄テ、不日ニ追下シ奉リ、頓テ三塔會合シテ、大講堂ノ大庭ニテ僉議シケル、〇中略次日、〇康永四年七月某日聽テ、山門ノ奏狀ヲ、武家ヘ被下、可計申由被仰下シカバ、將軍、左兵衛督、諸共ニ山門ノ奏狀ヲ披見シテ、是ハソモ何事ゾ、建寺尊僧トテ、山門ノ所領ヲモ不妨、衆徒ノ煩ニモナラズ、適公家武家歸佛法、大善事ヲ修セバ、方袍圓頂ノ身トシテハ、共ニ可悅事ニテコソアルニ、障礙ヲ成ントスル條、返々不思議也、所詮神輿入洛アラバ、兵ヲ相遣シテ可防、路次ニ振棄奉ラバ、京中ニアル山法師ノ土藏ヲ點ジ、造替サセンニ、何ノ痛カ可有、非據ノ嗷訴ヲ被棄置、可被遂嚴重供養ト、奏聞ヲゾ被經ケル、武家如斯申沙汰スル上ハ、公家何ゾ可及異議トテ、已ニ事嚴重ナリ

堂塔

シカバ、列參セシ、大衆、徒ニ款狀ヲ公庭ニ被レ棄テ、失ニ面目ヲ登山ス、依レ之三千ノ大衆、憤不レ斜、〇中略山門既ニ南都ニ牒送スト聞エシカバ、返牒未レ送以前ニトテ、〇中略枉ニ諸事ヲ先院宣ヲ被レ成下、勅願ノ儀ヲ被レ停止、爲ニ御結緣ヲ翌日ニ御幸可レ成被レ仰ケレバ、山門是ニ靜マリテ、神輿忽ニ御歸座有シカバ、陣頭警固ノ武士モ、皆馬ノ腹帶ヲ解テ、末寺、末社ノ門戶モ、參詣ノ道ヲゾ開ケル、

〔鹽尻三十二〕康和〇和當作レ永四年、天龍寺供養の時、延曆寺の衆徒等、興福寺に牒送せし文に、天龍寺供養座領掌の藤氏をばことごとく氏を放せ、猶をして出仕する人あらば、山門も力を合せて、其家々に臨み、苛法の沙汰すべきよし書り、嗚呼他宗の興盛なるを妬むは乞食者の心なれば、元よりかく有べし、氏を放ち苛法を致は何ぞや、天子の命にもとり自私をもつて廷臣を恣にせんとするは、國賊の甚しき者にあらずや、そのかみ君臣山門といへばおぢ恐れて、彼が我意を長せし事もまた愚といふべきのみ、幸に平信長一炬に燒亡ぼされし後、世に人目覺め、逆徒もまた衣食の便なければ、手を束ねて國家にへつらふ、すべて僧家强盛なれば、必らず驕亢不遜にして、天下の害となる事、和漢其例多し、

〔天龍寺記〕靈龜山天龍寺〇中略

伽藍地封內四町四方

佛殿拾間四方　天井之龍、狩野采女筆、

本尊　釋迦如來　文殊菩薩　普賢菩薩

土地堂　天照太神宮　梵天　帝釋

祖師堂　達磨大師　百丈禪師　臨濟禪師

方丈　拾四間ニ九間半　方丈繪、狩野采女筆、

庫司　七間ニ六間

開山堂　七間ニ五間　堂前石、曰ニ彩山一、

開山夢窓國師像

本尊地藏菩薩

尊氏相公像

御當家御代々御位牌

僧堂　八間ニ拾間半貳尺

多寶院

後醍醐天皇　御尊牌

左本尊觀音大士

右御尊牌　後嵯峨院 光嚴院法皇　龜山院法皇 中書大王　後鳥羽院

〔太平記 四十〕中殿御會事

サルニ合セテ、同三月〇貞治六年廿八日丑剋ニ、夥敷天狗、西ヨリ東ヲ差テ飛行クト見ヘシガ、翌日廿九日申剋ニ、天龍寺新造ノ大廈、土木ノ功未レ終、失火忽ニ燃出デ、一時ノ灰燼ト成ニケリ、故ニ此寺ハ、公家武家尊崇異ニ于他一シテ、五山第二ノ招提ナレバ、聊爾ニモ、攘災集福ノ懇祈ヲ專ニスル大伽藍ナルニ、時節コソアレ、不思議ノ表示哉ト、貴賤唇ヲゾ翻シケル、因レ茲將軍御參內ノ事、可レ有ニ斟酌一由、再三被レ經ニ奏聞一シカドモ、是寺已ニ勅願寺タル上者、最天聽ヲ驚ス所ナレドモ、如レ此ノ攘レ災殃レ臨レ期宸宴〇中殿御會ヲ被レ止事無ニ先規一、早諸卿ニ被ニ仰下一シカバ、此問答ニ時遷テ、御參內モ夜深過ル程ニナリ、御遊モ翌日ニ及ビケルトカヤ、淺猿カリシ事共也、

〔天龍寺文書 二〕天龍寺造營事、任ニ曆應延文例一、可レ令ニ造進一給之由、天氣所レ候也、仍言上如レ件、

右大辨闕房奉

四月廿一日

進上　鎌倉前大納言殿

○按ズルニ、右年紀ヲ錄セズト雖モ、萬里小路闕房ハ、貞治六年四月十三日右大辨ト爲リ、又鎌倉前大納言ハ、足利義詮ニシテ、此年十二月ニ薨ジタレバ、貞治六年ノ文書ナルコト明ナリ、

〔天龍寺文書一〕天龍寺造營事、爲大勸進職、殊令致佛法之紹隆、可被專師跡之再興者、依天氣執達如件、

左中辨□□

正月十六日

等持寺長老

○按ズルニ、右年紀詳ナラズト雖モ、蓋シ亦貞治災後ノ再建ノ比ナラム、

〔空華日工集〕康曆二年十二月十三日、與三人同飰、飰後爲仲首座求請三體集序、忽告西山火、或云、天龍、遽赴西山入天龍寺、卽東廊及文庫燬矣、常住文書皆出、時都聞他之鎖封、故開山以來公文皆燒畢、雲居庵無恙、東垣叢竹皆焦矣、過勝光院、與僧錄相見、略慰火事、

〔花營三代記〕康曆二年十二月十二日、申時天龍寺庫司已下東班悉回祿、

〔臥雲日件錄〕文安四年七月十日、天龍季照來、蓋以旣前日再住也、因曰、往時天龍炎上、普明國師力致再興、然不要煩人、故勸進、唯以寺產漸々修造耳、凡天龍創業、乃曆應二年己卯也、爾後二十年、延文三年戊戌正月炎上、同歲四月晦日、等持院殿薨、○足利尊氏、爾後十年、貞治六年丁未二月廿九日又炎上、同歲十二月七日、寶篋院殿薨、○義詮、爾後七年、應安六年癸丑九月廿八日夜又炎上、爾來七十五年、又逢此厄、非唯慨吾宗奇數、又竊爲天下寒心、○中略、自康曆庚申、○二年、至今年六十八年也、今文庫不全、文書皆燒、而雲居無恙、大抵與庚申厄相同、唯所恨七堂西廊盡燼、可太息哉、

〔蔭涼軒日錄〕寬正六年二月七日、天龍寺求勸進于高麗、欲歸朝、忽船頭就借物致緩怠、留彼船頭依用

事入洛云云、以次被召置之預究訣、則爲幸之由、自寺家訴之、其趣天龍寺寺奉行飯尾兵衞大夫、今晨於殿中論此子細、仍披露之、可留彼船頭、命于飯尾兵衞大夫也、于時天龍寺出管、於當軒共聞此命也、

（碧山日錄）應仁二年九月十六日癸酉、客云、七日西峨之亂、天龍、臨川、寶幢、及諸房寺、一時灰燼、

（宣胤卿記）文明十二年九月七日甲申、昨日人數令同道歸京、嵯峨亂後始而一見、諸寺諸院以下悉以燒失、荒野也、天龍寺、臨川寺等、如形取立者也、釋迦堂、法輪寺、（虛空藏堂、）此兩所者所殘也、奇特不可過之、

（京都戰爭見聞錄）二十日（〇元治元年七月）朝火未だ鎭まらず、（〇中略）さて夫より油小路通りに出、下へ／＼と行時に、西の方に當りて、砲聲頻りに聞えたり、後に聞ば、薩州會津の兩勢、嵯峨に押寄せしなり、（〇中略）田圃に出る頃は、尙砲聲頻りに轟て、嵯峨の邊に黑烟立上る事夥し、これ果して長州人數の旅宿なる天龍寺を燒しなるべし、

寺格

（日本略記）一五山之事、京の五山は天龍寺、（〇下略）

（山城名勝志九葛野郡）天龍寺（五山第一）

寺領

（天龍寺造營記錄）今日、故先被寄寺領一所、（備後國三谷西條也）

武州奉　圓忠成草　師芙（〇芙恐直誤）淸書

奉寄

曆應寺

備後國三谷西條地頭職事

右爲當寺造營料所奉寄如件、

曆應四年四月廿一日　　權大納言源朝臣（御判〇足利尊氏、中略）

同六月十五日、國富庄、那賀山庄、兩所御寄附、

奉レ寄ニ
　暦應寺一
　　日向國國富庄除ニ先寄進寺社領一事
右爲ニ當寺領一所レ令ニ寄附一也者、早任ニ先例一可レ被レ致ニ沙汰一之狀如レ件、
　　暦應三年六月十五日
　　　　　　　　　　　　　　　權大納言源朝臣御判
〔天龍寺造營記錄〕凡度々寄附寺領五ヶ所、土貢既及ニ一万餘一之由、雖レ有ニ其沙汰一近年或民畑牢籠、耕作不レ全、或所務之違亂、乃貢之減少、難レ覃ニ筆端一仍造營無ニ其期一候間、連々公船御沙汰未ニ一決一又被レ寄ニ成功一云々、
　任官功勅負尉百人分所レ被レ付ニ天龍寺一也、可レ被レ仰ニ武家一之旨、院御氣色所レ候也、仍執達如レ件、
　　九月廿四日　　　　　　　　　　　權大納言經顯判
謹上　春宮大夫殿
○按ズルニ、本文書、年紀ヲ明ニセズト雖モ、署名ノ經顯ハ、蓋シ勸修寺氏ニシテ、暦應二年十二月二十七日、權大納言ニ任ジ、同五年正月十六日辭セシ事、公卿補任ニ明ナレバ、前ニ引ク所ノ暦應三年六月十五日ノ文書ト相前後スルモノト知ルベシ、
〔天龍寺文書二〕天龍寺領土貢注文
　合
一六人部庄宮村方三ヶ村分
　　京進米貳佰拾壹斛伍斗肆升漆合
　　　延伍拾貳斛玖斗伍合　一斗別二升五合宛
　并貳佰陸拾肆斛肆斗伍升貳合　寺升定

庄納米佰漆拾漆斛捌斗肆升
代佰漆拾漆貫捌佰肆拾文
公事錢佰漆拾壹貫佰伍拾伍文
同庄高津方三ヶ村分
京進米佰捌拾貳斛漆斗陸升六合
延肆拾伍斛陸斗玖升　同上
幷貳佰貳拾捌斛肆斗伍升六合　同上
庄納米佰伍拾漆斛玖斗漆升八合
代佰伍拾漆貫玖佰漆拾八文
公事錢佰參拾參貫陸佰拾二文加行枝名年貢錢
一同庄生野方三ヶ村分
京進米貳佰壹斛陸斗壹升玖合
延伍拾斛肆斗二合　同上
幷貳佰伍拾貳斛貳升一合　同上
庄納米參拾肆斛壹斗捌升六合
代參拾肆貫佰捌拾六文
公事錢貳佰玖拾貳貫伍拾漆文略○中
已上寺納米貳仟肆佰貳斛參斗參升貳合
已上錢伍仟漆佰貳拾壹貫伍佰肆拾文
幷米錢捌仟佰貳拾參貫捌佰漆拾貳文除二庄主得分以下一定

此外佰捌拾貫文　弓削上下村勘料錢（但五ヶ年一度在之）

諸方公用錢仟佰貳拾貫文　每年沙汰之

右就當知行分所記如斯、

至德四年丁卯閏五月廿一日　納所昌贇判　納所景補判

維那希通判　都寺昌和判　都聞道桀判　首座道渭判

耆舊光宜判　周而判　中諳判　周樞判　西堂可卍判

倫崇判　觀造判　住持海壽判

〔常住寶藏天龍寺重書目錄甲〕一天龍寺領諸國所々段錢人夫臨時課役守護役等事、任先々免許之旨、向後彌被免除訖、早爲守護使不入地、可被全領知之由、所被仰下也、仍下知如件、

文安四年八月廿三日　右京大夫源朝臣（○細川勝元）判

〔蔭涼軒日錄〕寬正三年六月十一日、天龍寺領江州建部莊內、自山門被懸段錢之事、停止之御奉書被成之事伺之、卽命于山門奉行布施下野守也、

〔天龍寺記〕勅願所（光嚴院法皇）　京五山第一、靈龜山天龍寺（○中略）禪宗濟家、

光明帝勅會供養有之（但建立後六年也）

御朱印寺領千七百貳拾斛　嵯峨鄉

內千百斛（內荒高參拾貳斛）參斗貳升九合

田方五百拾斛貳斗五合

畠方五百八拾九斛七斗九升五合

物成平均四德七步

六拾斛　物成四德九步　北山村

貳百參拾六斛　物成五德五步　馬場村

参詣

参百貮拾四斛　（物成壹斗貮歩参毛八弗）　樋爪村

但水損場故、拾ヶ年之間、平均如此、

〔國師日記〕一領知方就散在、今度改之、於四箇所千七百貮拾石、相添目錄、令寄附訖、末代不可有相違、而勤行等無懈怠、堂舍修理以下、可致專之、若有無沙汰者、可悔還候也、仍狀如件、

天正十三

十一月十一日　御朱印太閤

天龍寺

〔國師日記〕一天龍寺領高千七百二拾石之指出ノ内ニモ、地藏院領百五十石餘ト御座候、寮者ノ指出トテハ別ニ無御座、大地震以前マデハ、地藏院御座候ヘ共、破却以後、再造無之、二箇寺寮者ヨリ、右知行配分仕納之事、〇中略

右是ハ、寬永五年戊寅十月廿七日、天龍眞乘院ヘ、清兵衛ヲ遣、〇中略爲後證奧書仕候、

〔臨幸私記〕貞和二年二月十七日

太上天皇〇持明院殿光嚴 臨幸當山、入。外門。內。（後日幸安二金剛院、故御車從脇門而入）便退牛、而官僕牽御車至。山門。頭、諸臣皆於總門外下乘、鳴鐘鼓、並如住持入院、時住持（并）大衆無出迎之儀、直入大殿、上皇於。山門。前。下乘、直至殿前、住持從殿內右邊出在戶外、表奉接之儀、（止于鐘鼓）上皇便入大殿、先於佛前燒香、（公卿捧御香合）次御拜、（大文疊二帖横敷之、拜席竪敷其上）御拜時、諸臣蹲居、住持大衆退身於佛壇之後、御拜了、住持進白云、且就御座、（正面左邊、設于屛風倚子）上皇坐御倚子、公卿列坐、〇中略住持下堂、便歸方丈、換衣出于寢堂後門右邊、奉接上皇、直從正面入方丈內、住持從右邊入、奉揖御座、住持退坐右邊、當獻點心時、住持退出、（昨夜雨降、明朝未晴、因茲臨幸遲矣、住持讓寮了、是故不著座矣）（縱雖齋前、住持不著座、爲宜）獻點心後雨晴、幸龍門亭、（亭內敷大文一帖、其餘皆用圓座）住持先去在亭內、奉候臨幸、（沙彌三人爲伴行者、不隨引）上皇於法堂後乘御手輿、（此時未有輪藏、後日臨幸時、從方丈直至輪藏、不用御輿）於多寶院前下乘、入聖廟內、燒香御拜、（拜席等如佛殿）然

後又於南小門外乘御手輿、直到亭上、(亭外下乘)叡覽山花、又乘御輿、上于山頂、(此時塔未建、只爲眺望而已、)住持直從亭上歸方丈、還御之後、又就方丈奉獻御膳茶菓、命住持談禪錄、(就書院談傳心法要、)日暮還御、(中略)○貞和三年春、上皇再幸本寺、還回供奉官人、不飾衣裝、(詣之內御幸)是以寺家、亦不鳴鐘鼓、殿內祝聖及上堂等之禮、並不作焉、

〔園太曆〕貞和三年二月卅日、今日、上皇(光嚴)○臨幸天龍寺也、可參旨、度々有仰、仍營々參會、已剋參寺門、烏帽子、直衣、(著下袴)八葉車、(遣牛飼、不懸下簾、)諸大夫光熙、光連、永季、侍々重貞、源康成、紀定景等在共、(皆布衣上括)於總門外下車、暫入長老坊休息、小時御幸已近給云々、仍大夫(時爲春宮權大夫、○公賢長子實夏)參會山門邊、予(○藤原公賢)徘徊佛殿邊、上皇於山門下御、殿上人(其人忘却)立御榻、獻御裏無、中將兼親朝臣候御劔、此間予侍佛殿前壇下東方、上皇入御、御拜御燒香、(座主邦朝臣持御香合、花山院大納言傳進、)予等同入堂內北方祗候、稜嚴會僧等於南方誦之、次出佛殿後戶、入御法塔御聽聞所、在堂北方、上皇入御此處、公卿座在御聽聞所以西、各廻堂外、次第昇著、殿上人御聽聞所以東敷紫疊爲座、公卿座有床、殿上人座無床也、次僧衆、次第進立佛殿、(有禮)次長老□□(上人)自後戶參入、(行者四人、荷蠟燭、)昇法座拈香、其後僧一人參學、數問答、次有誦事等、其後下法座、諸僧退出、次上皇同自後戶出御、入御長老坊、(東堂夢窓上人參會)於西面方叡覽嵐山花、數百株一時開敷、頗非俗人之所見歟、其後入御客殿、供點心、(中略)○次幸東堂塔頭、此處夢窓祗候、自嵐山所掘出馬惱大石、生石菖、琢之納檜、誠希奇也、其大長七八尺、廣五六尺、件石在所四角書一四句偈、(乾坤之內、右前中有一寶、左後宇宙之間、左前在形山、右後)此石安置令懸額、其字形山云々、御覽之間、東堂頗被述法語、次還御、於西面供御齋食、予等祗候如初、陪膳已下如先、次幸山門上、至門下被用御手輿、予等又步行、上下登剣階、數反曲折凡難堪也、眺望極眼界、件山門上層構觀音殿、(號普明閣、懸額、)西方作山形、中央作居正觀音像、其南北作立十六羅漢、前列香爐一口、茶盞一對安之、於觀音前御燒香、其後御北方御座、(北壇際、南面敷大文二枚、其上施毯、御後立御屛風也、)御座東方敷小文、予以下候之、其後自南方衆僧參入、中央觀音像敷疊數十帖立標、(但書□置之、)又敷二、鐃一口、鉢五六具

子院

置之、衆僧守標著座、次打鼓突鉢幷鐃、是觀音懺法體云々、衆僧禮拜以下聲靈之體有威、其儀良久、頗及一時餘、事了衆僧退、(東塔國師侍行、當長老南方祗候、)次下御、自是可幸西方寺云々、　五年三月廿四日、衆又天龍寺御幸、御方可參候歟、殿上人闕如候とて被責伏之間、公豊構得候可進之由俄奔波仕候、雖乏人數殿伺候間、前行之時者、彌冷然候、召具輩候はやと存候而、楚楸之時可爲何樣候哉、自他未不見及候事候、若如傍難や候はんずらん、總楸之時者、剛候分にて召具之條勿論候、楚楸之時者、強不結構之間、自然不及沙汰歟、(○中略)誠恐謹言、

三月廿四日　　公季

二階堂安藝守成藤送使者於光興朝臣云、天龍寺御幸、兩所、(○足利尊氏、直義、)可有參會、大納言殿者、車副幷退紅可被召具也、兵衞督殿、參議以下、不可召具退紅之間承之、但召具之條、可爲何樣哉、被注下候樣可披露云々、仍注遣之、(○中略)

廿六日、今日、新院(○光明)幸天龍寺也、而兩院可幸之由、和尚申沙汰之、而本院(○光嚴)依御不豫、新院一所幸云々、今度供奉人、布衣か用楚楸之由被仰云々、

〔臨幸私記〕觀應元年八月(○日闕)齋龍

本新兩院(○光嚴、光明)同御幸本寺、(○註略)直入方丈、住持奉接之禮如先例、無供御之設、只獻茶而已、(○中略)及晚還幸之次、至雲居庵、又有法譚、

〔園太曆〕觀應二年九月七日、今日、兩院(○光嚴、光明、)密々御幸天龍寺、夢窻國師不食所勞難治、大略待時體也、仍幸云々、(○中略)十九日乙丑、夢窻國師所勞猶危急、可訪聞食、兩院密々幸天龍寺云々、

〔夢窻國師年譜〕觀應二年八月十六日、國忌、就後醍醐聖廟、多寶院、陞座說法、滿散、

〔山城名勝志九葛野郡〕慶壽院。(嵯峨大指圖、在三會院東、)

〔和漢禪刹次第〕靈龜山天龍資聖禪寺(○中略)

諸寮○中略

同(四山)慶壽庵滌門和上、諱承朝、顯常光、嘉吉三五月九日寂、

〔管見記〕嘉吉元年八月十日甲戌、今日、宗意七回遠忌也、仍精進看經於慶壽院、如形修佛事、向彼寺燒香、

〔山城名勝志葛野郡九〕天龍寺

金剛院和漢禪刹次第云、光嚴院御廟、普明國師、在天龍寺門前東側、法界門筋北西角、

普明國師行業實錄云、貞治甲辰、建上皇壽塔于寺東、扁金剛院、上皇喜其助積、有旨永使師門派主焉、語錄同之、

壽寧院在臨川寺、與三會院六塔頭一也、

龍湫和尚行狀云、師諱周澤、自號龍湫云々、嘉慶二年戊辰九月九日、八十一歲示寂於西山壽寧院云云、塔在西山者曰壽寧、山門曰兊德山、室曰聽水軒、卵塔曰銳像、不安木像、開戶則翠竹一叢檀欒矣、

靈松庵和漢禪刹次第云、靈松庵西山西胤和上、諱俊承、嗣廣照國師、應永三十二年八月廿八日寂、(中略)嵯峨大指圖、在清涼寺南光壽寺東、今此院絕、舊跡爲竹林、招慶院當領此院事、

眞淨院和漢禪刹次第云、天龍寺說云、舊在河端、今絕、常光國師、○中略

華嚴院

默雲稿新居移竹、天龍華嚴院、天隱

華館新開雨霽時、涼風與竹似相期、主人自躍龍門浪、作杖不須投葛陂、

寶德院寺家說云、後花園院寶德三年建立、開基竺雲和尚、諱等連、

竺雲和尚記云、寶德院、迺今上皇帝後花園院率爲後小松院御建立之一字也、去年八月廿二日、奉勅參內云云、宣諭曰、爲後小松院佛香、營一院於多寶院傍、可與和尚、老拙竺雲忝而退矣、今年二月十一日、萬里小路中納言冬房、爲勅使來、儀被相其好攸焉云云、仍伺政暇、承嘗年號、立名於寶德院也、

禪昌院元在小川寺內北、本法寺東、今遷爲天龍寺塔頭、

〔翰林胡蘆集〕細川右典厩預修壹七日拈香

蘇迷盧南贍部洲東大日本國山城州平安城西北、有一寶坊、曰禪昌禪院、院乃緋衣功德主從四位源右典厩大嶹道勝大禪定門、(○細川政國)頃者以別業爲精舍者也、今茲文明十九年、歲舍丁未、就于當院、莊嚴預修生七之道場、特涓二月十四日、爲七日之啓建、以四月三日、爲七日之滿散、

〔諸家系圖纂(九細川)〕政國

右馬頭、法名道勝、號大嶹禪昌院、實安房守之弟也、續持賢家督、列公方之末座、賜食、御供奉之頭也、明應四年八月廿四日、於京都卒、六十七、(影像者、薪黃色禪衣掛羅也)

〔寬永系譜(三百九十八細川)〕賴之

明德三年三月二日に卒す、歲六十四、法名常久、道號桂岩、天龍寺にありては永泰院といひ、谷にありては地藏院といふ、院に賴之が木像あり、その右のかたつらに、天童扇をひらいて舞をなす像を安置す、

〔翰林胡蘆集〕西山渡月橋勸進　代大錯老人

王城西有山曰嵯峨、河出于山間而注于其東者曰大井、長橋臥其上、名曰度月、乃天下第一山天龍禪寺十境之甲者也、丁亥歲、(○應仁元年)戎馬起洛、賊兵略地到此、佛宇僧廬、燬而盡之、而橋亦斷于茲矣、嘗其收復日、也寺院復舊者在焉、天龍其一也、寺僧稍々相集、有倡于列者、曰、大井爲河也、源浚流遠、殆不可揭勵也、於是乎、行人借舟、居民脫袴、往來窘甚、按諸郡志、若橋幷道路、古之人、率委之僧、又朱辨橋記曰、功利之大且廣者、爲浮屠氏所有、而此橋也、一爲山門境致、棄置焉則不可也、寺乏恒產、何以辨之、宜擇一言、使人樂施者、爲化主、庶有成功、(○中略)持地菩薩、爲比丘時、於一切要路津口、或作橋梁、或負沙土、如是勤苦、經無量佛、至釋迦大佛、證圓通、爲上首、誌望不淺矣、若約祖宗門下、則三條椽下徒杠成、七尺單前輿梁成、此岸彼岸、打成一片、未橫獨木已前、度驢度馬、度一切衆生了也、有何難哉、且置遺事、仍持短

名稱　所在　創建

疏、偏叩王臣宰官長者居士及同志者、伏希隨喜發心、所獲勝報、豈易量哉、

臨川寺

臨川寺ハ、山城國葛野郡嵯峨村臨川寺ノ西ニ在リテ、大井川ニ臨メリ、此地ハ原ト龜山法皇ノ離宮ニシテ、後醍醐天皇ノ皇子世良親王之ヲ傳領シ、河端別業ト稱セシガ、親王易簀ノ際、遺命シテ寺ト爲シヽモノナリ、天龍寺ノ開山疎石ヲ以テ開祖ト爲ス、宗派ハ臨濟宗ニシテ十刹ノ一トス、其子院三會院ハ即チ疎石ノ塔ナリ、

〔和漢禪刹次第〕十刹位次〇中略

臨川寺西山、開山夢窓國師、節月軒方丈、梵音閣山門、圓融道場、佛殿枯木堂、世寶三會院開山塔、靈龜山寄附、〇冥資、〇天廚院、

〔山城名勝志九葛野郡〕臨川寺在天龍寺東大井川端、十刹第二、三會院本尊彌勒、額虎苑院、義滿公、前假山夢窓國師所疊石云々、

〔天龍寺文書一〕太宰帥世良親王御遺命云

西郊河端別業、改成禪院、寄附所領等、令止住僧徒、可爲閑居道行地之由發願、去五月比、本元上人參彼所之次、令約諾畢、此病痾已無憑、於今者力不及事也、且以此趣可申入禁裏、日來所存被聞食者定無參差之儀歟、兼又母儀一期之間、件領等內一所可計進也、又兩所姬宮共在襁褓中、成長之時者必可奉入釋門、是又日來所案也、此外事、隨宜可令計沙汰者、

元德二年九月十七日　　大納言源判

此條々、去十三日夜被仰置之、偏期御平減、不能記置、不圖大漸之間、爲後日所染筆也、且今朝右大辨秀房朝臣、爲勅使被尋御遺跡事、大概以此趣申禁裏畢、

〔本朝皇胤紹運錄〕後醍醐院〇中略

尊良親王（〇註略）
世良親王（河端宮、元德二九十七薨、（中略）大宰帥上野太守、母三木實俊卿女、遊義門院一條、）

〔諸寺文書纂三〕吉野院（〇後醍醐）建武元年九月十五日、於禁中有御授衣之儀、雖然牽泥尋常小師之列、所不宜也、又思、本尊無建、其思由難書乎、都督親王（〇世良親王）大願中而御存生之時、堂舍一字也、未成焉、御薨之後、至于元弘、老拙依勅命創建精藍、建武二年十月、賜宸翰俾應令夢窻國師爲靈龜山臨川禪寺開山事、

右當寺者、龜山法皇仙居、都督大王（〇世良親王）遺跡也、大王薨逝之後、以遺命爲蘭若、仍加寺領、寄附國師、令振弘法利生之地、專致國家泰平之精祈、兼施大王追福之回向云々、寶篋院殿（〇足利義詮）御遺骨一分事、就往年之由緒、所被奉納當寺也、宜被致不朽之勤行之狀、依仰執達如件、

貞治七年二月廿九日　細川右馬頭賴之（判）

黃梅院長老

堂塔

〔山州名跡志九葛野郡〕靈龜山臨川寺　在大井川北畔、門（南向）禪家十刹第二　佛殿（東面）當寺初在所　梵音閣（云山門）　圓通道場（云佛殿）　拈木堂（云法堂）

〔花營三代記〕永和四年十一月三十日、夜半臨川寺廻祿、

〔續史愚抄後土御門〕應仁二年九月七日甲子、天龍寺臨川寺等火、（王代年代記、本朝通鑑、）

寺格

〔天龍寺文書一〕靈龜山臨川寺

右當寺者臨川之勝槪也、臨濟之（〇之恐衍）正派、斯道西郊之靈場也、西祖宗風可振、宜爲諸山之隨一、革新聖朝之安全者、院宣如此、仍執達如件、

建武三年九月廿七日　參議資明

謹上　夢窻國師禪室

〔天龍寺文書 一〕嵯峨臨川寺事
後醍醐院勅願、開山國師寂場、禪宗再興之聖跡、君臣歸依之梵宇、信仰異他也、仍雖爲徒弟院、任東福寺之先例、可准十刹列之由、被仰門徒了、存其旨、可被執務之狀如件、

文和三年正月廿六日　　左中將花押

當寺長老

〔花營三代記〕永和三年八月十日、臨川寺可爲五山之由、被成御教書、依田左近入道奉行、東福寺下

〔空華日工集〕永和三年九月二十四日、中圓藏主回自京師、出三會曇芳書、且審臨川寺陞爲五山第五刹、　四年五月晦日、圓覺使者回自京城、余得等持元章及諦觀中書、書曰、去十四日大光明古劒首唱恢復臨川、爲十刹舊制、清溪執筆作狀告官、因山林辨道者、應古劒唱而出、署花字於狀末者無數、已達官府、未有報者、且請關東門徒、急々連署、同心請復舊制云々、〇中略　八月一日、京僧梵光藏主、出諸谿古劒等諸師兄書、皆爲智臨川訴訟連署、蓋清溪以下皆退告官、官未報也、江濃尾三州爲門徒者、皆連署告官云々、余歸報恩、遣中退於黃梅、將瑞泉古天及闇首座來與之話臨川事、余□子細思惟、臨川復舊固可矣、但連名結黨告官、是乃今時惡事之基、亦非先師素意、不連署而只苦復舊同心之事如何、古天領之、闇亦肯之、余因說三會門下之弊、〇中略　九月一日、瑞泉使者、回自京師、說云、不遷和尙、去月再往天龍、雲居、正持、向陽三庵主、亦歸復、蓋以官命堅執臨川五山之義也、又遵書記狀中說、洛之門徒爭分如水火之異云々、又黃梅使者回、出京師報書數通、德叟月山洎彌信的三西堂皆還住、或失意、或無事、是皆破連署之義、臨川事未定、門徒分爲兩岐、未知如何、大義絕海觀中等意、同前書矣、十一日中勘維那傳門徒書、來自京師、其書謂、清溪、大法、古劒、元章、謙叟、物先、月庭、笑山、絕海、觀中、天錫、凡十又一人、皆爲臨川復事未成也、舉欲余作告狀上相府、以濟其事、爲援云々、余引勘維那爐邊細話、問臨川連署之起、乃知古劒自製告文、清溪執筆、門徒連署者無數、三會院主亦槇焉、余曰、凡今時連署皆惡事也、是

寺領

故余自幼誓而不爲也、今三會院主隨群連署、是殊不曉、夫三會院者、吾門宗廟也、主者宜等嚴不與庸輩混而坐斷其事、世諺曰、考相撲者目出相撲、則考勝負者誰哉、凡吾門下、因臨川事、退席者、不可勝計、此輩咸謂、雖十年二十年、臨川事不成、則誓不歸住、不出頭、吁是何言哉、夫世俗三年喪爲孝行也、而不三十六月、而二十五月、則何哀哉、久廢家業、廢家業則絕嗣、絕嗣不孝之最也、今我三會門下退席者、十年二十年不歸、則不啻廢家業、吾宗泯滅矣、今諸老則各化一方、建立法門、相續家業、以壽吾宗、何忽與掃蕩之輩、一槩沈沒哉、是甚不曉也、余不覺泣下曰、凡僧名和合、同承先師法乳、爲同衣者哉、余不忍聽、

〔碧山日錄〕長祿四年五月二十日丙申、有客曰、臨川寺者、正覺國師石○疎瘞履地也、師俾衆僧只成勤修行道、以養林標致、不爲意也、故所構甚素野也、又以從這裏入之四字爲門額、蓋師初師事一山積有年矣、師致問則必答曰、吾宗無語句無亦一法與人、是乃掃蕩語那邊底也、後謁佛國、國問曰、聞覺和尚所示、儞試擧看、師曰、吾宗無語句無亦一法與人、國抗聲曰、何不道和尚漏逗不少、師於言下得省、國乃印所證、是以師續佛國、是自建立門悟入、故以從這裏入之字扁門也、師滅後、諸兄弟相議曰、吾臨川乃一方大刹也、宜加之五山列、因以曇晦谷爲住持、爲大方之聘、且撤玄師之所揭舊額、晦谷一夕夢、國師包笠而出寺、翌日語諸兄、諸兄又曰、我各有此夢、晦谷之住未滿期、寺罹鬱攸之厄、又合議曰、列寺於大方之位、恐其非國師之意乎、乃復十刹云、

〔寺鑑下〕禪宗五山派　天龍寺附庸　十刹嵯峨　臨川寺

御朱印　天龍寺領之內配當

〔天龍寺文書一〕故大宰帥親王家御遺跡臨川寺領等目錄

一丹波國葛野庄○中略

一和泉國鹽穴庄○中略

一同國若松庄○中略

一伊勢國富津御厨〇中略
一美濃國南宮庄〇中略
一讃岐國二宮庄〇中略
一常陸國佐都庄〇中略
同西岡田鄕〇中略
東岡田鄕〇中略
一近江國栗津橋本御厨〇中略
以上天王寺入道大納言基嗣卿遺領、入道大納言讓進靑蓮院宮、尊助親王宮被讓進後嵯峨院、院被進大宮院、〇後嵯峨妃姞子女院被進昭慶門院、〇龜山皇女憙子內親王女院被進故院宮地也、
一美濃國高田勅旨〇中略
一阿波國富吉庄〇中略
一加賀國富永御厨〇中略
以上、大宮女院御遺領、昭慶門院御相傳、同被進故宮、
一紀伊國富安庄〇中略
一相模國成田庄〇中略
以上、領主等寄進昭慶門院、同被讓進之、
一近江國朝妻庄十二條鄕〇中略
一大和國波多庄〇中略
一備後國垣田庄〇中略
以上、龜山院御遺領、被進昭慶門院、女院又被進故宮、

右○中略粗注進如件、

正慶元年二○元弘年六月日

〔臨川寺文書〕和泉國鹽穴庄、伊勢國富津御厨、常陸國佐都庄、同國東岡田郷、同國西岡田郷、加賀國富永御厨、

右所々爲臨川寺領、可令管領給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月二十三日　　左少辨花押

疎石上人御房

〔天龍寺文書一〕太政官符山城國司

應停止伊勢太神宮役夫工米、御禊大嘗會以下勅役、院役幷都鄙寺社所役、及國中段米、關米、恒例臨時公役等、永爲臨川禪寺領、當國葛野郡内大井郷事、

右得彼寺住持沙門契愚去年十二月日奏狀偁、謹撿案内、去建武年中、後醍醐上皇賜宸翰詔曰、當寺者、龜山法皇仙居、都督大王遺跡也、昭慶門院傳領之、附屬大王、大王命爲蘭若、仍加寺領寄附國師、令擬弘法利生之地、專致國家泰平精祈矣、抑此靈場者帝都之西境也、有便于聽禪那靈知之法語、離宮之東隣也、相應于修普賢發心之行業、宜恢弘臨濟禪師之宗風、令稟承臨川禪寺之法流、以門業相續、至龍華三會者、既爲勅願寺、奉祈我聖朝、於是有數箇之莊地、轉一寺之食輪、欲賜諸役勅免之官符、而備將來不易之規鑑、望請、洪慈枉聽懇欵、然則一百許輩之緇徒、常祝請無疆之聖祚、盡未來際之歷數長擧楊柳教外之宗門者、正二位行權大納言源朝臣通冬宣、奉勅依請者、國宜承知、依宜行之、符到奉行、

正四位下行左中辨平朝臣花押

修理東大寺大佛長官從四位下行左大史小槻宿禰花押

寺職

貞和五年四月廿八日

〔天龍寺文書三〕臨川寺領役夫工米事、爲内外宮分貳佰貫文、三會院領參拾貫文、廿一箇年一度可致其沙汰之上者、一切所令停止催促也、可被存知之狀如件、

應永廿九年閏十月十七日　義持花押

住持

○按ズルニ、德川幕府時代ノ寺領ハ、前文寺格ノ條ニ引ク所ノ寺鑑ニ在リ、

〔臨川寺文書〕臨川寺可令管領給者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月二十三日　左少辨花押

疎石上人御房

子院

〔夢窻國師年譜〕觀應二年八月二十九日、預書遺偈、以順世禮、○中略怡然而逝、○中略門人以遺命奉全身塔於三會院、

○按ズルニ、三會院ノ事ハ、前條名稱ノ下引ク所ノ和漢禪刹次第ヲ參照スベシ、

〔天龍寺文書四〕三會昭堂修補之事、經上裁候、貳萬疋分御奉加被仰出候、巨細使僧可有演說候、恐惶謹言、

五月四日　法霖花押

天龍三會　侍衣禪師

○按ズルニ、右年紀ヲ詳ニセズト雖モ、蓋シ應仁亂後ノ事ナラン、

〔天龍寺文書四〕當院諸塔頭、幷嵯峨中寺院跡事、今度一亂中、猥作田畠、放飼牛馬云々、甚不可然、所詮向後堅被停止之訖、若猶背御成敗、有不能承引之族者、爲被處罪科、可被注申交名之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十四年十二月三日

沙彌 花押

上野介 花押

三會院雜掌

寶幢寺

寶幢寺ハ、山城國葛野郡嵯峨ニ在リ、康暦年中、將軍足利義滿ノ建立セシ所ニシテ、僧妙葩ヲ開山ト爲ス、宗派ハ臨濟宗ニ屬シ、十刹ノ一ナリ、開山堂ヲ鹿王院ト云フ、

〔和漢禪刹次第〕十刹位次〇中略

西山 寶幢寺 覺雄山、大福田寶幢禪寺 普明國師 開山塔曰鹿王院〇開山

〔山城名勝志〕九 葛野郡 鹿王院在河端村從道北

〔雍州府志〕五 寺院 葛野郡 寶幢寺 舊在同處臨川寺東也、康暦三年、鹿苑相國義滿公、一夕夢中有異人來告曰、相國今年有大患、若建伽藍、安置寶幢菩薩觀音大士多聞天王、則免之、因創斯寺、名曰覺雄山大福田寶幢寺、令普明爲第一祖、寺成日、相國入山、請普明而開堂說法、寺後搆一小院、爲開山塔、扁曰鹿王院、蓋緣彼莊有白鹿瑞也、至德元年、陞寶幢寺位、爲十刹第五位、今寺絕、鹿王院殘、

〔翰林胡蘆集〕敍說

康暦年中、夢有一異人告曰、公〇義滿今年必有大患、若與建伽藍而安寶旛菩薩觀音大士及多聞天王像、則得增福壽、當此之時、公年二十三、又創寺於城西、名寶旛、請普明師〇妙葩爲開山始祖、應永二十七年庚子、當台靈〇義滿一十三年之忌辰、嗣君顯山相公〇義持預選二月初九日、慶讃寶旛寺、盛儀震耀于一世、蓋以寶旛菩薩爲地藏、地藏乃南方生佛所變也、寶生卽寶旛耶、按經有南方寶旛如來、其刹土莕

薩出世、建立寶幢之說、亦此之謂乎、帝釋一名寶幢、然則觀音現帝釋身、現毘沙門身、三郎一乎、嗣君周備寶旛事、譬如帝日王崩後、其子覺密王、承鴻業營造伽藍、又南宋高宗、建報恩光孝寺、奉先帝香火、震旦月邦、孝者一也、

〔鹿王院文書二〕鹿苑院殿

大福田寶幢寺事、爲開山可被建立候、恐惶敬白、

康暦二年四月十五日　義滿花押

普明國師禪室

〔寶幢寺鹿王院記〕當寺院者、征夷大將軍准后左相府、〇義滿以蒙瑞夢之告、建立之處也、多聞天王現居士、地藏薩埵化高僧、語曰、今將軍福祿官位、建立伽藍者、必增長壽命矣、相公作奇異想、翌日、召拙老語夢中事、便命山僧俾開此山、維時利劍飛掃妖氣、乃此建寺、以曰興聖、且復開昭堂地時、野鹿現來成群、因名院稱鹿王、草造未幾、綈閣畫堂玉立、廊腰縵廻、簷牙高啄、人喚爲洛外奇觀也、至德元年十一月、相公下鈞命、改興聖號寶幢、至德二年二月、令寶幢禪寺任十刹、同年三月、伸供養、相公命丹州太守一色令警固、帶劍輩一百餘員、隨兵一百餘人、自總門入而經西廊、至殿前直渡東廊、又出總門外、卽分左右、設敷皮奉待御車、車近時取退敷皮蹲居、是時役者各出向、鳴大開靜、御車至總門時、相止開靜、於此相公從御車出御步行、伶人進御先舞樂、奏一奚婁、自山門頭經舞臺之上入佛殿、暫奏樂器時、相公著坐于上間、次著坐于下間、公卿者、關白九條滿敎公、太政大臣德大寺公俊公、左大臣二條持基公、右大臣西園寺實永公、內大臣左大將轉法輪三條公光公、〇中略各著坐畢、時十講僧聚總門待導師來、導師南禪廷月和尙、乘輿至總門、全材首座、宗過藏主爲侍者、聖恬首座、祖范首座爲禪客、隨輿後來、於是伶人復奏一奚婁、進導師之先、自山門經筵道入佛殿、而舞樂六對、一番萬秋樂　二番地久　三番青海波　四番胡島曾　五番陵横　六番納蘇利　管絃聲盈耳、舞殿冷袖惱人、雖云天人伎樂、爭如是乎、舞止而後、導師赴殿時、十講僧列

左右而先行、侍者隨其後、次提燈行者四人、兩列而行、次持籌童子二人、兩列而行、次導師執蓋役、殿上人松木中將只一人、次執綱童子二人、兩列而行、次侍者二人、兩班學列、入殿內、次十講僧五岳長老五人、列班上間、十刹東堂、列班下間、其外東堂西堂、隨圖立班、導師立中央、是時出班燒香、次維那出向導師問訊而歸本圖、導師上香、次維那復出問訊、十講僧五岳東堂各一列上香、次十刹一列上香、次向本尊列拜如常、東堂西堂凡一百七十餘員、僉云、如龍象、爾時、十講僧入殿內立班、住持拙老陞座、爲度三千大千沙界一切衆生說法、說法畢下座、向本尊燒香、燒香畢歸位、時維那始諷經、大衆同音諷誦者、凡一千餘僧、響天動地、廷月和尚引行道、次十講僧、次五岳東堂西堂、以其位爲次第、聯不違規矩、行道半、天華紛紛亂墜擧時、瞻之仰之、實後代美談也、行道畢、導師就上間之横疊休息、十講僧五岳諸老、列上間之西面、十刹西堂、列下間之東面、皆以北爲頭、於此引布施物、次第將軍、次關白、次太政大臣三人、此御布施者、導師出而引之、是時從御殿有註進曰、若君御誕生、相公御歡喜不尋常而還御、卽名若君號寶幢若君、當寺非常相公御崇敬、特賜先帝數通官符宣、其詞云、應免除伊勢大神宮役夫工米日食米、造大裏御禊、大嘗會以下、勅役、院役、都鄙寺社之所役、及國中段米關米、恒例臨時課役等、又被止守護使、撿非違使、院宮諸司、甲乙人之亂入云々、是故諸國所所庄園無其煩、依全寺務、寺院嚴麗也、

〔看聞日記〕應永廿八年閏正月六日、重有朝臣出京、歸參語世事、寶幢寺供養事、天下抛萬事、公武經營此事也、可有隨兵云々、室町殿寺家へ御出、諸家悉可扈從申云々、其行路椎野門前也、○中略 廿日、椎野有書狀、大儀近々間、嵯峨騷動頗如動亂云々、○中略 今度之儀不見物人、世ニハあらじと、室町殿有御沙汰云々、仍可然人々無見物者、可背御意之由廣橋申、○中略 廿七日、前源宰相參語世事、彼供養事來月九日必定也、就其三井寺申嗷訴、其旨趣、南禪寺長老廷用和尚室町殿伯父供養導師也、彼參入之時、持幡童聖護院三寶院進之、仍聖護院事、自寺門支申云、禪僧所役兒童奉仕難有先例事歟、且耻辱也、於聖護院者、不可被出之由固支申間、其由被申、時宜以外不快云々、山門南都相語、送牒狀、山門者

同心、南都末無返牒云々、障碍出來、天魔所爲歟、○中略　二月九日、今日寶幢寺供養也、早旦入棧敷(花殿院築地之東南面打之、)○中略　先是參會人々出仕、右大臣(前關白、[illegible])次左大臣(前關白、[illegible])其後導師延用和尚乘輿(車輿、)行者四人前行、(一人執獸、)侍者僧二人、力者等濟々在共、行粧美麗也、○中略　以上行列如此、寶幢寺門前(四足、)侍所、(一色兄弟、)帶甲冑著座、隨兵廿人(色々鎧著之、)其外半具足兵數百人、門左右著座警固之、每事相國寺供養佳例云々、法會儀式委細次第被載可尋記、導師陞坐、次大衆諷經、次舞、左万秋樂、(破、六帖、)右古鳥蘇、青海波(垣代隨身立加、)狛桙、陵王、落蹲、次引布施、(禁裏仙洞女院被進之、)導師布施檀主取之、十高僧、(五山十刹長老、)左大臣以下取之布施畢、各退下、檀主還御、○中略　申刻供養畢、

堂塔

〔山州名跡志　九葛野郡〕鹿王院　在臨川寺東五町許、　宗旨禪十刹　門(向午、未聞、)　額　覺山王(横額、筆者不考、)

佛殿(向卯辰、)　本尊　釋迦佛(坐像、二尺五寸許、)　脇士　十六羅漢(立像、一尺二三寸許、)　作　運慶

左脇壇所安　開山普明國師像(坐倚子、爲合掌、長四尺許、安厨子、)　自作(以土作、)　厨子上有額○中略

右脇壇　尊氏公影(坐像、衣冠黑袍、持笏、帶劍、二尺五寸許、)

開基普明國師、本願將軍義滿公、初寺境廣ク、佛閣多シ、號覺雄山大福寶幢寺、

〔花營三代記〕康曆二年二月廿一日、寶幢寺立柱始、

寺格

〔鹿王院文書　二〕鹿苑院殿

寶幢寺可令爲十刹(座位等持寺下、普門寺上、)也、將亦未來住持職事、以鹿王院(開山塔頭、)吹擧可有補任候也、恐惶敬白、

至德二

十月廿三日　　花押(○足利義滿)

普明國師(禪室)

〔寺鑑　下〕禪宗五山派

天龍寺附庸十刹　嵯峨　寶幢寺

寺領

御朱印　天龍寺領之內配當

〔鹿王院文書　四〕左辨官下鹿王院

應因准傍例免除伊勢太神宮役夫工米、日食米、造内裏、御禊、大嘗會以下勅役、院役、都鄙寺社所役及國中段米、關米、凡恒例臨時公役等、永爲當院領、山城國大山崎庄并散在攝津國犬居庄花枝名、相模國三浦庄内長澤鄕、武藏國赤塚高坂鄕、近江國忍海庄、越中國小佐味領家職、并地頭職、井見庄、立山寺領内寺田岩、并丹波國瓦屋南庄内成時名、野口庄内小河方行元、武口兩名、上林庄、下村内多田佃天田、宗我部國衙河口庄地頭職、豐前國田河郡内田村糸田庄等事、

右得寶幢禪寺衆僧去月日奏狀偁、謹考案内、當寺者、多聞天王現居士、地藏菩薩化高僧、相語曰、今之將軍、福祿官位如意滿足、建立寺院、增長壽命云云、驚靈夢之告、作希夷之想、卽致華構、蓋此蘭若也、寺額寶幢、表薩埵之感應、山稱覺雄、集茲芻之碩才、准后尤相闔下經營之、智覺普明國師草創之、綉棟畫梁、絢粲嵐山之下、廣堂甍閣、壯麗天壤之間、轉大法輪度衆生界、莊嚴日、寶劒飛而掃妖怪之氣、開堂時、瑞華紛而下相公之前、當寺奇特、後代美談者哉、於焉常住之資緣、領知之庄園、永被止伊勢太神宮役夫工米、并勅役、國役諸社神人國司守護使入勘、官使、撿非違使、院宮諸司、甲乙人亂入、望請、洪慈因准先例、早賜件役勅免之官符、將備不易澄明之規鑑、特願、蓬闕聖明、並日月以照臨、柳營武運、與天地而長久者、權大納言藤原朝臣嗣房宣、奉勅依請者、同下知彼國國、既畢、院宜承知依宜行之、

至德元年十一月三日　　大史小槻宿禰花押

右中辨平朝臣花押

〔鹿王院文書　三〕鹿王院領山城國散在

伏見金松名（付越願寺）　物集女庄内（行□名、友名名、末國名）　地利

吉祥院　地利　大覺寺下司名　地利

上久世　地利　河島（下司名安養寺田、平野田、）　地利

下久世　地利　高田法華經田　地利（○中略）

寺職

近江國散在〇中略　丹波國散在〇中略

寛正二年辛巳十月　日

〔鹿王院文書三〕慈照院殿御判

寶幢寺領播磨國安田庄、加賀國松寺村、但馬國鎌田庄、阿波國賀茂和食、土左國吾河山、攝津國五箇庄同國倉殿地頭方、同國多田庄阿古谷、日向國穆佐院、山城國乙訓郡大覺寺等事、所返付也、早如元寺家可全領知之狀如件、

文明十年五月廿八日

准三宮源朝臣　花押

〇按ズルニ、德川幕府時代ノ寺領ハ、前文寺格ノ條引ク所ノ寺鑑ニ在リ、

〔本朝高僧傳三十五淨禪〕京兆萬年山相國寺沙門妙葩傳

釋妙葩、字春屋、自號不輕子、甲州人、〇中略丞相源公〇義滿一昔感異夢、建梵刹於城西、號覺雄山寶幢寺、聘葩爲第一代、慶讃日、源公入山、膺其演法、有雨華之瑞、源公增發信心、寺後搆小院、爲葩壽塔所、以其地有白鹿來、牓曰鹿王也、

〔鹿王院文書二〕鹿苑院殿

天下僧錄禪家事、殊爲佛法紹隆所令申也、早可有御存知此趣候、恐惶敬白、

康曆元年十月十日　右大將花押

春屋和尙禪室

法輪寺

名所所在

法輪寺ハ、山城國葛野郡嵯峨ニ在リ、初メ葛井寺ト稱セシヲ、釋道昌今ノ名ニ改ムト云フ、

〔山城名勝志十葛野郡〕法輪寺 拾芥抄云、虚空藏大井川四、廣隆寺末、○中略

鎭守

南法華寺古老傳云、山城國嵯峨法輪寺緣起云、法輪寺 鎭守者法輪法護、大菩薩明星之垂跡、本地虚空藏菩薩也、崇神天皇之御宇、依託宣被崇、大和國壺坂寺、畢、其後天平年中就行基菩薩、來止當山、仍行基菩薩構小社所被崇也、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕智福山法輪寺 在嵯峨大井川西 寺領七十石

開基 道昌 本尊虚空藏 初號葛井寺。。。。

傍有井、道昌汲之垢離、時星天降、因名落星井、其幹上建小社、爲鎭守、 空也上人天慶年中勸貴賤再興、

創建

〔雍州府志五寺院〕葛野郡 法輪寺 號智福山、在大井川西、始號葛井寺、弘法大師法嗣、釋道昌開基也、一日道昌晏座、虚空藏菩薩現衣袖上、昌乃截袖圖之、置法輪寺、今本尊是也、眞言宗僧守之、始承和年中、大井河溢、昌董防遏、衆人子來、不日而成、故老拭涙曰、不料今復見行基菩薩、

〔諸寺略記〕一法輪寺者、無緣起、淳和御宇、本尊虚空藏菩薩、道昌僧都建立、孝靈天皇皇女、常詠月居住大井河邊、卽構小社、其後道昌僧都、爲修求聞持參其砌、勝驗地故也、小社之前閼伽井、道昌月夜汲閼伽云、明神定此夜月者詠給覽可示給、令祈請之處、道昌之衣袖、虚空藏菩薩移給、仍件衣爲法輪本尊繪像佛者、影移衣也、

〔源平盛衰記四十〕法輪寺附中將相見瀧口幷高野山事

抑法輪寺ハ、道昌僧都ノ建立、勝驗無雙ノ靈地也、彼小僧都法眼和尚位道昌ハ、讃岐國香川郡ノ人、弘法大師ノ御弟子也、俗姓ハ秦氏、秦始皇六代孫、融通王ノ苗裔也、淳和帝御宇、天長五年ニ就弘法大師登灌頂壇、眞言ノ大法ヲ傳受セリ、三十歲其後虚空藏求聞持法ヲ修セントテ、勝地ヲ尋求ケ

ルニ、大師歎テ云、於葛井寺今法輪寺可修之、彼山靈瑞至多、勝驗相應ノ地也ト、仍同六年ニ此寺ニ參籠シテ、一百箇日、求聞持ノ法ヲ修シ給フ、五月ノ比、皓月隱西山、明星出東天時、奉拜明星、汲閼伽水之處、光炎頓爆テ宛如電光、依テ是ヲ見、明星天子來影、虛空藏菩薩現袖、非畫非造、如縫如鑄、雖經數日、其體不滅、尊相嚴然トシテ、異香芬馥セリ、是則生身御體トシテ、奇特ノ靈像也、誰不致歸敬之誠、受道昌造虛空藏形像、其木像ノ御身ニ、件ノ影像ヲ奉納、於神護寺、弘法大師是ヲ奉供養、彼像ノ前ニシテ、不斷ノ行法ヲ修シケルニ、利生誠ニ新也、貞觀十六年ニ引山腹、埋幽谷、建佛閣、安置件靈像、改葛井寺名法輪寺、鎮守ハ本地虛空藏、號法童法護大菩薩、阿彌陀堂ト申ハ、當山最初ノ舊寺ノ跡也、天平年中ニコレヲ建立シテ、葛井寺ト云ケリ、天慶年中ニ、空也上人參籠之時、貴賤上下ヲ勸進シテ、舊寺ヲ修造シテ、常行堂トスルトカヤ、詠月遊興之輩ハ、明神忽ニ與巨盃、往詣參籠之人ハ、本尊必滿願望給フ、月照窻之夜ハ、煩惱之雲正ニ晴、嵐吹松之時ハ、妄想之夢必覺、斯ル目出寺ナレバ、瀧口モ閑籠テ行澄シテ居タリケリ、妹背ノ情ニ引レツヽ、尋行ケル横笛モ、菩薩ノ善巧方便ニテ、善知識トゾ覺ヘケル、異說云、比ハ二月半ノ事ナレバ、梅津里ノ春風ハ、餘所マデ匂フ垣根哉、桂ノ里ノ月影ハ、朧ニ照ス折ナレヤ、龜山ヤスソヨリ出ル大井川、殊更心細シテ、久方ノソコ共知ズ尋行、此坊彼坊尋レド、上人ガ行末ハ不知ケリト、又異說ニハ、横笛ハ法輪ヨリ歸テ髮ヲオロシ、雙林寺ニ有ケルニ、入道ノ許ヨリ、

シラマ弓ソルヲ恨ト思フナヨ眞ノ道ニイレル我身ゾ

ト云タリケレバ、女返事ニ、

白眞弓ソルヲ恨ト思シニマコトノ道ニ入ゾ嬉キ

其後横笛尼天野ニ行テ、入道ガ袈裟衣スヽグ共イヘリ、異說マチ〳〵也、イヅレモ哀ニコソ、瀧口入道ハ、法輪寺ヲ出テ、高野ニ籠、五六年ニゾ成ケル、

堂塔

〔法輪寺文書〕法輪寺別當恭畏法印御房　頭右中辨光豐

嵯峨木上山法輪寺、空亘光陰、既逮破壞之處、淨侶頻嘆而、興滅繼絕爲補其闕、略慈悲之輩所奉加、懇志之至也、吾朝者雖神國、佛法東漸之間、不顧難行、早速致再興之沙汰者、忠切以何加之者、依天氣執達如件、

慶長二年十月廿四日　　　頭右中辨花押

法輪寺別當恭畏法印御房

〔享保集成絲綸錄二十一〕寬保三亥八月

嵯峨法輪寺堂舍大破ニ付、今度任先規例、諸國勸化之綸宣被下置候て、從公儀も御銀被下候、其上爲勸化諸國巡行すべき筈之處、失脚多相掛り、年月を經候而者、却而修造之爲に不相成、難儀之事ニ付、於江戶屋敷ニ相廻申度旨相願候、依之願之通被仰出候間、可被存其趣候、

一當表屋敷之分へは、法輪寺役僧相廻、勸化之儀可申達候、其外頭支配有之分へは、其頭支配へ相廻り、組中支配之面々、幷其家來迄へも、勸化帳相廻候樣ニ仕度旨、法輪寺申候間、寄進之儀可有之候、委細は勸化之狀ニ書載有之事、

一勸化物之事、來子年中迄ニ、法輪寺受取候樣仕度旨可申事、

一万石以下之面々知行所へは、もより御代官ゟ勸化帳差廻、奉加も御代官中ゟ取置候筈ニ候事、

一勸化物之儀、京都は法輪寺自坊、當地者深川永代寺地中勸化所ニ而請取可申事、

右之趣、向々江相達候樣ニ可被致候、

八月

寺領

〔法輪寺文書〕法輪寺領八講田事、就西林房死去之儀、万一雖違亂輩候、不可有承引候、若猶及異儀者、不日可令注進候也、仍狀如件、

嵯峨

（文明十八）十二月十五日　貞通花押

當所百姓中

〔寺鑑上〕無本寺寺院　山城國嵯峨　唯眞言宗

知福山法春院　法輪寺

御朱印　高五拾石

右住職弟子讓リ入院御禮無之、參上御禮御白書院、獨禮、（御閾之外三疊目）御暇檜之間、寺社奉行、獻上一束一本、拜領時服三、

〔百練抄十一（土御門）〕建永元年三月廿二日、今日上皇（○後鳥羽）御幸北野宮幷嵯峨法輪寺、

〔本朝無題詩（九法輪寺）〕春日法輪寺言志　藤原茂明

朝辭京洛囂塵境、尋至梵宮瞻望賒、禪坐寫閑觀曉月、經行路暫入春霞、秦箏高調古谿鳥、蜀錦旁飄深洞花、酌酒吟詩優遊處、被牽景色忘歸家、

夏日遊法輪寺　藤原明衡

驚出俗塵尋靜境、法輪寺裏養心情、倩望山月淸明影、遙惟空傳隱暗名、（此寺在暗山、故云、）乘閑適到勝形地、松戶無人鳥獨啼、誰謂蓬萊難得覓、龜山近在鳳城西、（有龜山鳳流之美、故云、）

暮秋法輪寺即事　中原廣俊

半天雲際插蓮宮、嶺是峙西河浩東、圍遶山深秋霧底、廻流水急夕陽中、京花隔境空觀靜、落葉飛窻色相紅、寺號法輪知佛乘、爲思隨喜路應通、

法華山寺

名稱
所在
創建
雜載

法華山寺ハ、俗ニ峯堂ト稱ス、僧勝月ノ開基ニシテ、羅漢像ヲ本尊トス、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國葛野郡峯山ニ在リ、

〔山城名勝志 十葛野郡〕法花山寺 宣秀卿御教書案云、西山峯堂法花山寺云々、今曰峯山、地藏院與淨住寺間、有下通丹波國王子村道上、從此登十町許、有堂跡、

〔蔭涼軒日錄〕寛正二年二月廿七日、奉報西芳寺、爲花御成之事、而御成坊主等、頂首座、先奉懸于御目也、香茶千斤獻之、御齋、於御影前御燒香、○中略 南禪寺近來火災甚、以寺奉行飯尾左衞門大夫幷同加賀守、往寺家可加下知之由被仰出也、齋後佛殿御燒香、後被乘御船、次峯堂御登山、御燒香、被御覽繪羅漢、幷本堂塑像羅漢、又於拜殿被御覽遠景、甚奇絶也、寺號法華山寺、俗喚峯堂也、開山曰勝月上人也、法流者三井寺也、

〔沙石集 九上〕證月房上人之遁出事

松尾ノ證月房ノ上人ハ、三井ノ流ヲ受テ三密ノ行タケテ、道心アル人ト聞エテ、遁世ノ初ノ事ヲ人ノ語シハ、人間ニナガラヘテモヨシナシ、如說修行シテ臨終セント思ヒ立テ、只一人松ノ尾ノ奥ニ人ニモシレズシテ、七日ガ時料ヲ用意シテ、カリニ庵ヲムスビテ修行セラレケリ、七日ノ食盡テ、芋ノ莖ノヒタルヲ水ニ入テ、ヤハラカニナシテニテ食テ、今日ノ命ヲノベント思ハレケル程ニ、薪取山人見アヒテ、其日ノ食ハ供養シテケリ、又イモノクキヲバホシテヲキテ、次ノ日水ニ入テ食ニアテガヘバ、又山人見ツケテ供養シケリ、其後連々人見アヒテ時料ヲクリケレバ、ツイニ芋莖モモチキズシテ、食物アヒツイデ行ハレケリ、三寶ノ冥助、諸天ノ守護ノ故ニヤ、次第ニ寺ト成テ如法ニ勤行年ツミテ、臨終目出クシテヲハラレニケリト聞エ、○下略

〔風雅和歌集 十八釋教〕式乾門院十三年の法事に、法華山寺にて唐本の一切經供養せられける時、空に音樂のきこえければよみ侍りける、　慶政上人

法の庭空に樂こそきこゆなれ雲のあなたに花やちるらん

名稱 所在

創建 沿革

西芳寺

西芳寺ハ、山城國葛野郡嵯峨村ニ在リ、行基ガ建ツル所ノ四十九院ノ一ナリト云フ、舊ト西方寺ト稱セシガ、足利幕府ノ時、臨川寺ノ僧疎石之ヲ中興シテ、禪刹ト爲シ、改メテ西芳寺ト號ス、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕西方寺　在嵯峨松尾之南

當寺有聖德太子作彌陀三尊、行基菩薩來拜之、別刻三尊、納右佛於胎中、建寺名西方寺、其後高岳親王入寺爲沙門、檀那攝津守親秀因夢告、招請夢窻國師、爲住持、且建伽藍、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　西芳寺　在松尾南、始號西方寺、元聖德太子之所開、而本尊彌陀、則太子之所作也、其後行基中興之、弘法大師亦暫住焉、平城天皇皇子高岳親王、出家後號眞如、始入此山、坂上田村丸訪其寂、又小松殿平重盛、爭諫入道之過奢時、暫避入道之怒氣、蟄居斯寺、最明寺道崇亦被寓之、具在緣起、夢窻國師再興斯寺、改方作芳、則爲禪刹、方丈前庭假山、則國師之所經營也、水石之狀、非凡作之所及、其內處々命其名、國師塔所指東庵、古眞如之所棲也、曾尊氏公屢來臨斯寺、花時有詩歌會、到今屬天龍寺、

〔西芳寺池庭緣起〕抑當寺の池庭は、むかし聖德太子の別莊となりし頃、すでに朝日のまみづ夕日のまみづとて、ひんがしと西に、時かはりて涌いでし天然の池水あり、〇中略曆應年中、尊氏將軍は、谷の堂七箇寺の封疆をさだめ給ふとき、則此池の東に一字を建、手づからきざめる地藏尊を安置し、堂より西を西芳寺領東を最福寺領と御敎書を下されける、興正菩薩〇叡尊は放生の事を、一千三百五十六箇所にまうけ給ふ時、當寺にて先其事をはじめ、放生會の軌則をとゝのへ給ふ、行

基菩薩より、年代久しく、建久の頃に至り、此寺大に廢壞して住僧もなかりしを、檀那攝州大守中原師員、かさねて堂舍を建立し、本來念佛宗に歸依しければ、厭離穢土欣求淨土の心をあらはし、寺を二ッにわけ、西方寺、穢土寺と名附、法然上人を請じ、當寺第五興の開山と仰ぎ、三尊の靈像、年ふりて莊嚴損じいませしを、上人の御手をかり、金泥をもつて補ひ供養ある、あしたにいたりて、池に金蓮花を生じければ、○中略師員此由を聞き、うれしく思ひ、多くの魚とりを市にもとめて、上人と共に池にはなち、久しく絶たるを起されしとや、建久年中師員再興の事は、夢窓國師の緣起、竺仙禪師の寺誌にも見へたり、又法然上人の事蹟は、永德年中の放生文にしるされたるがごとくし師員、辭世の後數度の兵亂ありて、寺又荒廢に及びければ、四代の孫攝津掃部頭藤親秀、ふかく此事をなげき、いかなる高僧をも請じ再興せんと、本尊に參籠し、靈夢をかうぶり、曆應二年、臨川寺にまうで、夢窓國師を拜請し、始て敎家をあらためて禪宗となし、殿堂門廡に至るまでかたのごとく造營あり、よつて中興開山と仰がれける、

〔夢窓國師年譜〕曆應二年己卯

春三月、作臨川家訓、以貽門人、夏四月、卓西方敎院、作禪院、此寺、聖武天皇天平年中、有釋行基者、民間稱曰菩薩、彼時人得之於鷹巢也、力化宴中、營建佛寺、凡四十九所、今之西方其一也、後百年、平城天皇太子、棄儲宮爲沙門、天皇封爲眞如親王、居之久、又棄而往唐、度流沙至羅越國而薨、爾來五百年、凡庸相繼而住、寺廢甚、檀越藤親秀、厚禮勤請師忻然曰、吾素慕亮座主之風、而今得西山居焉、不亦善乎、輙改西方舊名、爲西芳精舍、揭額、蓋取祖師西來五葉聯芳之義也、佛殿本安無量壽佛像、今以西來堂扁焉、堂前舊有大櫻花樹、春時花敷、稠密殊妙、爲洛陽奇觀、

〔山州名跡志九葛野郡〕西芳寺　在右社神○中略坤三町許　宗旨　禪　境地東面　門南向　佛殿東向

額　西芳精舍　横額

參詣

本尊阿彌陀佛立像、二尺餘、作聖德太子○中略

指東庵　在方丈北、東面、前有門、額向上關、筆者西笑和尚、此所開山塔所

夢窻假山　在方丈東面庭、所造國師

〔山城名勝志十葛野郡〕西芳寺在松尾南○中略

十境

瑠璃殿緣起云、無縫閣閣下名瑠璃殿、　西來堂緣起云、佛殿本來安來迎之像、是乃前之三尊也、仍名之西來堂、寺亦舊名西方、額扁西芳精舍、　邃密釣寂緣起云、書院曰釣寂庵、○中略　礪精惜烟緣起云、於山水流出之傍、築小亭、名礪精、　寶風店同云、欲上山頂之傍構小店、名寶風、　縮遠亭同云、山之最頂築小亭、名縮遠、○中略

無縫塔緣起云、親秀出師員家傳之佛舍利、置于寺、今立一閣、安其塔於中、扁曰無縫閣、閣下名瑠璃殿、○中略　合同船緣起云、池曰黃金、於船所泊構一小閣、曰合同、　向上關同云、庭之乾立小門、名向上關云云、今在方丈與指東庵之間、○中略　指東庵開山塔、緣起云、自向上關入、而又開佳境、於山腰南面作小庵、名指東、是眞如親王山居舊地也、國師於此庵、詠和歌云、かくせたゞ道をば松の落葉にてわが住やどゝ人にしらすな

總門緣起云、國師以總門名西山、　格外同云、來寮、又曰環中、　湘南亭同云、又閣之南於池中構亭、名湘南、又有橋曰邀月、　潭北軒同云、佛殿之北西立軒、號潭北、其庭種叢竹七莖、標北斗七僭、　貯清日工集云、貯清寮云々、緣起云、寺北建小院、曰貯清、　士峯一覽同云、貯清之南、於比叡山露頂處、又構一宇、名士峯一覽、

影向石同云、國師命親秀、開庭觀池亭之日、異人七員來遇扶其力、動石穿池、得大自由、問其性名、伏不答、其內二人舁一盤石來、置地上、自首老人坐於其上、乃下知餘巡禮之輩、敬之猶臣下事君王、庭觀泉池、卽日成矣、老人起於磐石曰、我每月影向於儲石上、道了將餘巡行某樹下某岩下、終隱其實云々、當寺造畢之後、親秀欲勸請松尾明神、立鎭守之社、乃託宣于幼童曰、別其營社廟、上下神祇、特天照太神每日影向庭之一盤石、我亦加其員也云々、仍以影向石爲鎭守、

〔夢窻國師年譜〕康永元年壬午四月八日、太上天皇、○光嚴駕幸西芳寺、受衣盂、以執弟子儀、

〔園太曆〕貞和三年二月卅日、今日、上皇○光嚴臨幸天龍寺也、○中略次下御、自是可幸西方寺云々、予○藤原公賢騎牛不用意、欲退出之處、相構可參旨有勅定、仍借牛於公與阿闍梨、下品牛一頭借事、其體雖不能乘用、猶可參之時宜慇懃云々、仍然御幸後塵追從之時、漸及日沒、行程不幾一里許歟、未暮之間著御、庭花盛開、有盛宴○或作讌有興、花陰立胡床敷脚、上皇以下、東堂、并諸卿候之、暫握翫、其後御乘船、御料舟

一艘、有小屋形、

〔夢窻國師御詠草〕西芳精舍に御幸なりて、兩株の佳花歷覽ありける、翌日にたてまつられける、

竹林院内大臣（于時大納言）

めづらしき君が御幸を松かせにちらぬ櫻の色を見しかな

御返し

花ゆへの御幸にあへる老が身に千とせの春をなをも待かな

〔夢窻國師御詠草〕征夷將軍（于時亞相）幷典厩（○義詮）西芳寺に來臨、法談之後、庭前兩株之佳花、賞翫之次に、

人々うたよみけるに、

いつもみばかくめづらしきことはあらじ散しも花の情なりけり（○中略）

右武衞將軍、西芳精舍に來臨法談のゝち、人々うたよみけるついでに、

をのづからとひくる人のある時もさびしささそふ山かげのいほ

〔空華日工集〕康暦二年十二月廿五日、早過西芳寺、（○義堂）先鈞寂庵先師（○疎石）像前炷香三拜、先師平日所用道具器皿等、不移一物、皆在此矣、蒲團則以靑葛布而爲表、其餘物皆稱是、次瑠璃殿、次西來堂彌陀像前炷香罷、視粉壁上、則先師所書二偈、墨痕如新、（○中略）次過向上關入指東庵、（○中略）次登縮遠亭、（○中略）九重城之南北東西、粲然如畫圖中物、既下登無縫閣、拜舍利塔、塔乃先皇（○後光嚴）勅封不許輙開、復入方丈、餔時、寺主周遠老人他之老僧某留余飯、飯罷、讀壁上所貼先師遺訓、增感、今時俗禮、不與三十餘年前同、既而歸矣、

〔二水記〕大永二年三月十六日、朝間詣西芳寺、見庭池、水淸潔、忽一洗浴塵了、暫令歷覽、歸家朝食、

〔空華日工集〕永德二年十月十三日、承府君（○足利義滿）命赴西芳精舍紅葉之會、會者、官伴二條攝政（○良基）眞殿、侍從中納言、萬里小路中納言、日野兄弟、管領兄弟、僧伴大淸、物先、汝霖、本寺長老善明白等也、今日

之供、管領〔斯波義將〕辨之、坐列之式、席固信迫府君命代國師〔妙葩〕國師與大清對、二條殿與府君對、其餘僧俗隨次而坐、蓋國師小惱不來也、

名稱	所在	創建

長福寺

長福寺ハ、山城國葛野郡東梅津村ニ在リ、元ト天台宗ノ尼寺ナリシヲ、曆應年中、僧月林之ヲ中興シ、改メテ禪刹ト爲ス、

〔雍州府志五寺院〕葛野郡　長福寺　號大梅山、在梅津、元眞理尼之創建也、天台宗之尼寺、而本寺觀音也、曾月林入宋、嗣法古林清茂、此處有院北面梅津左衛門尉清景者、尊崇月林、則請此寺、改爲禪刹、花園法皇、歸依月林、時々臨幸、被問法要、則開山畫影、有宸翰勅賛、開山塔謂圓明、是又有勅額也、花園帝慮末世之變遷、七箇處被置宸影、今所在此寺、亦隨一也、此村東野萩原有陵、土人謂王墓、花園帝稱萩原帝、然則此陵、爲花園法皇也決矣、此寺今屬南禪寺、有寺產三百石餘、弘治四年正月二十三日、三好修理大夫長慶男、筑前守義長暫留斯寺、爾後移京北木下宅云、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕大梅山長福寺　在同郡〔葛野郡〕東梅津〔同禪宗〕　寺領三百六十石

開山　月林大幢國師

檀那　豐前左衛門清景〔法名是球當村領主〕

國師〔名〕月村〔諱〕道皎、〔號〕獨步叟、〔姓〕源氏、久我中納言具房男也、十六薙髮師事相州佛國禪師、後居洛北岩藏山花園院、荐召聽心要、元亨年中入宋、留止十年、歸朝還居於當寺、花園太上皇恩寵厚、觀應二年二月二十五日寂、後光嚴院勅諡普光大幢國師、　塔頭十軒

〔山城名勝志十葛野〕長福寺〔號大梅山、在東梅津村、十刹一員也、開山普光大幢國師、〕

寺記云、仁安三年十二月、伽藍建云云、

大梅山長福寺略誌(寺蔵)云、梅津邑長始祖、藤原惟隆至淸景、既十有八世、淸景號豐前左衛門、淸景深仰月林禪師道風、故以曆應二年正月十三日、革梅山敎苑、請月林爲開山始祖、山曰大梅、寺號長福、寄附田莊者、六百九十畝、敎苑山主純覺、知心、改服入禪、知心者覺母也、淸景法名稱是球、

長福寺古文書云、當堂者、眞理比丘尼草創靈場也、去年曆應二年正月十三日、改禪院、奉寄進月林大和尙云云、

曆應三年二月九日　左衛門尉淸員　左衛門尉淸景　沙彌性溪　藤原氏女

月林和尙行實云、師諱道皎、字月林、稱獨步叟、又稱圓明叟、晩稱西山暮翁、族源氏、村上天皇第十一世久我中納言具房之子也、母藤氏、十六歲投僧薙染、卽往相陽、依止佛國禪師、佛國唱滅之後、赴京師、居城北之岩藏山、時宗峯和尙、昌化於大德、師頻亦往相見、茲花園太上皇、荐召師咨訣心要、元亨辛酉冬、師將有南詢之行、庚午之春、歸本朝、結茅庵於城西法花山寺傍、扁妙峯、茲敎僧投師改服、以所管之敎寺迎師、師遷居之、梅津長福是也、山曰大梅、雲堂曰枯木、方丈寢室曰淸居、其額則師手澤也、淸居則在鳳臺時扁所居之號也、花園太上皇、愈崇尙師之道、或延皇居入室、或入山叅扣、陽祿仙院、亦歸宗旨之法、令重師賓之禮、師起塔院於長福之正北、曰淸凉、安休居之像、於其右安師之像、觀應辛卯二月二十五日逝、閱世奉全身、定淸冷之塔、延文(後光嚴)天子、勅諡普光大幢國師、

〔長福寺文書 一〕長福寺緣起

稽首和南、白兩足尊言、願主比丘尼眞理、自幼稚之昔、唯有佛道修行之志、更無世間榮耀之望、仍遂剃花髮、苟持木叉、當庄中卜有緣砌、建立一堂舍、安置古佛等、仁安四年(己丑)二月廿二日(己酉)、喝當城寺信遜阿闍梨開眼、自卽日置三口僧、兩人供僧(觀舍、尊室)、一人住僧(妙覺)、始修長日例時懺法、舉件古佛、皆是先祖奉造立之尊像等也、無程安置所、勵爲雨露被濕、且悲此事、令遂彼願也、嘉應二年(庚寅)十月三日(己酉)、屆權

堂塔

少僧都澄憲供養了、然則雖似弟子之新造、卽稱鼻祖之素意、豈不隨喜乎、居處者分段捺宿、令不足希、望華洛舊居、雖逢炎上、敢不勵造之微志、唯在佛閣之故也、抑一族之中、以不違背我遺誡之人、可爲當庄領主也、背遺誡之輩、不可領主、又於佛聖燈油等田薗、幷供僧住僧田畠、恒例講筵用途田等名者、後代之撿田畠使等、雖勘出段步加作開發、更不可收公、可任僧侶之進止、又於供僧職者、一期之剋、擇其器量、可讓門弟也、但所領田畠者、外命有待所資也、然以淸淨心捨入之僧徒、諸共住發菩提心、利益有情輩、爲善知識、可訪後世也、不善之輩努力不可入寺門、時代臨末、僧徒多好惡行、仍爲向後誡之、凡代代本家、幷供僧等、雖一事一言、眞理現存沒後、不可有違背、違背之人、付冥付顯可有其過也、奉勸請大梵天王、釋提桓因四大天王、北斗七星、琰魔法王、五道大神、別天ハ當伽藍鎭主松尾大明神、總日本國中諸大明神、殊ニハ八幡、賀茂、山王七社、祇薗、北野等乃冥衆、所定置之田畠、幷供僧等田堵、於成相違之輩者、始自本家預所、至于田堵住人、早蒙其罰、於現世者可當不祥厄會、於後生者可無三途出期、若仰信起請之人者、出家門弟在家子息、上件神祇冥衆等、可令守護給、仰願以此佛閣之行業、遙及慈尊出世、仍爲向後、書緣起文如右、是以梅津御庄領之御庄田漆町肆段貳百步、上御庄田壹町肆段大、深草名參段大、永限代々、所寄置佛聖燈油恒例講筵供田等料也、田畠坪付如奧委注矣、是則眞理滅後之本家料、返々所書置也、存生之時者、可在我進止也、又風雨等大事出來之時、供僧等各不顧住房、可參御堂而已、

〔山州名跡志 九葛野郡〕大梅山長福寺　在東梅津、境地東面、　宗旨　禪門 (東向)　額　長福寺 (竪額、世尊寺家忠季筆、)　佛殿 (南向、二重屋形、)　額　祈禱　本尊　釋迦 (坐像脇士)　普賢 (左)　文殊 (右像、共坐像、作不考、)　開基　月林大幢國師、入大元、法嗣茂古林、號佛慧智鑑大師、是則大元文宋帝勅號也、又普光大幢國師、是則及滅後七年、後村上院勅號、又花園院有御歸依、

別傳院 (又號大寶輪)　花園院御塔所也、宸影畫圖在當寺、有上讃、御宸翰也、如左、

予之陋質、法印豪信（故爲信廟息）所圖也、
　于時暦應改元無射之候也、
圓明　云開山塔　在同所清涼院（○中略）
梅津左衛門塔　在長福寺門外南半町許
〔山城名勝志十　葛野郡〕長福寺（○中略）
僧堂（寺記云、地藏菩薩、）　圓明（開山塔、花園院勅額、）　鎮守（梅宮）　花園院御影堂（○中略）　別傳院（花園院皇居）　清涼院（月林和尙）
行實云、在長福寺正北云々、額普廣院殿筆跡、今在長福寺、○○幻居山人隨筆云、清涼院長福寺開山塔、
〔風雅和歌集十八　釋教〕大梅山別傳院に御幸侍ける時、僧問雲門、樹凋葉落時如何、雲門云、體露金風といふ因緣を頌せさせ給けるついでに、　院（○伏見）御歌
立田川紅葉ばながる御吉野のよしのゝ山にさくら花さく
〔長福寺文書〕一讓與梅津長福寺寺務職事
　合寺田坪付別紙在之
右寺務職者、承覺重代相傳之所職也、而限永代所讓與門弟寛舜實也、更不可有他妨、仍爲後日讓狀如件、
　　永仁五年潤十月八日　　　　權律師承覺花押
〔長福寺文書〕一下梅津御庄沙汰人百姓等所
　定補長福寺幷新堂別當職事
　　　　　尼　智淵
右人、任相傳、爲彼職、可令寺務執行、庄家宜承知、敢莫違失、以下、
　　正安二年七月廿七日
沙彌花押

〔長福寺文書 一〕讓與長福寺別當職事

右寺務職者、純覺重代相傳所職也、而依爲器量限永代讓與門弟得命丸者也、更不可有他妨、恒例佛事、長日懃行等、無退轉可被致沙汰矣、仍爲後日讓狀如件、

正中貳年十月十三日　純覺花押

〔長福寺文書 三〕梅津長福寺開山塔頭淸涼院田地等事、任本所安堵幷御敎書之旨、知行不可有相違之狀如件、

明德五年六月日　備前守□永本 花押

〔長福寺文書 三〕定

長福寺佛殿奉加錢法式條々事

一現質物者、衣服之外、不可許容也、

一利平貳文子、每月晦日無懈怠可被上之、若有無沙汰者、爲流質則可沽却、

一寺門僧衆之外、借用不可叶也、

一質物取換不可叶

一質物暫借不可叶

一奉行兩人限一回

一月俸、人別可爲壹緡、

一寺家新參暇僧者、掛搭錢壹貫文、沙喝者五百文、佛殿造營之間可納之、但以後者、如先規掛搭錢五百文、沙喝者不可出之也、

一算用可爲每年二月晦日、

一勘定錢可爲參佰文、

右評議之旨如レ件

時文明十一年己亥十一月二十八日識焉○中略

瑞葊院　心祐花押○以下署名略

浄福寺

名稱

浄福寺ハ、光孝天皇ノ皇后班子女王ノ創スル所ナリ、後火災ニ遭ヒテ廢頽セシヲ、鎌倉幕府ノ時之ヲ再興シ、改メテ禪刹ト爲ス、今廢寺ニシテ、山城國葛野郡ニ在リシト云フ、

〔伊呂波字類抄 志 諸寺〕浄福寺格云、以當寺僧請三會講來井二會輪轉立義一人、可准安祥寺例狀、官府下知口事云々、在圓城寺下々東院、皇后宮御願置之、定額僧四口、弘仁格云、山城國葛野郡建立道場、有勅賜額、曰浄福寺、下知國司列定額、安尊像云々、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕十五大寺

浄福寺、○中略謂之廿五大寺也、

創建沿革本尊

〔浄福寺由緒書〕村雲戻リ橋浄福寺由緒

抑當寺ハ、往古廿五大寺東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺、新藥師寺、大后寺、不退寺、法華寺、超證寺、龍興寺、招提寺、宗鏡寺、弘福寺等十六ケ寺、是ナ南都十五大寺ト云、崇福寺江州、梵釋寺同上、延暦寺比叡山、眞觀寺、元慶寺山科、醍醐寺同上、勸修寺同上、仁和寺御室、檀林寺嵯峨、浄福寺等都而廿五大寺是ナリ、新古諸抄ニ出タリ、ノ其一ツニシテ、人皇五十代桓武天皇ノ御宇帝都ヲ遷ルコト廿四星、其間王化ノ澤ヲ流シテ、佛乘ヲ崇玉ヒ、數多勝業ヲ營玉フ、御願ニヨツテ、山城國葛野郡葛野愛宕ノ境ハ、西朱雀ノ中央ナ限ル、西朱雀ハ今ノ千本通也、東朱雀ハ今ノ京極通也、其東西ノ境、今ノ油小路也、西ナ右近ト云、葛野長安城是也、東ナ左近ト云、愛宕郡平安城是ナリ、ニ一字ヲ御建立アリ、勅アツテ額ヲ給フ、浄福寺ト云、國司ニ下知シテ定額ニツラナリ、釋尊ノ像ヲ安置シ玉ヒ、國家安全ノ御祈願寺也、弘仁格ニ出タリ、抑此通肩ノ尊像ハ、毘首羯磨天、鄔那衍那王ノタメニ彫刻シ玉フヲ、鳩摩羅琰龜兹國ニ移セリ、其後亂世而支那ニ渡リ玉フ、人皇三十七代孝德天皇ノ御宇、元興寺ノ道昭法師、勅詔ヲ受テ、白雉四

年五月、遣唐使吉士長丹ト同船シテ支那ニ至リ、三藏ノ玄弉法師ニ謁シテ禪學ヲ傳エ、長樂道場ニ入テ、初テ此像ヲ拜シ、不思議ノ靈相ヲ知テ、ヤガテ高宗皇帝ニ奏シ、此像ヲ日域ニ渡サント請トイヘドモ、帝深ク惜ミ玉フニヨリ、道昭悲歎スル事至テ切ナリシカバ、三藏其誠心ヲ感ジ、一ツノ器ヲ出シ、道昭ニ語テ曰、是コソ佛世尊在世所持シ玉フ不思議ノ鼎ナリ、予西域順行ノ時、受得シテ秘藏ストイヘドモ、汝ガ深切ヲ感ズル故ニ、是ヲ授與スルナリ、日域ニ安置スベシトテ、心宗ノ經籍數卷ニ添テ與ヘラレタリ、道昭歡喜斜ナラズ而、歸帆ヲ急ガレシニ、痛マシキ哉、道昭如何ナル因縁ニヤ、海上ニシテ彼妙器ヲ龍神ニ奪レ、經籍而已ヲ持テ歸朝ス、道昭思ラク、佛縁ノ熟セザル所ナリトテ、歸朝ノ後諸國ヲ順行シ、飢者或ハ病苦ノ者ヲイタワリ救ヒ、渡リニハ橋舟ヲ營ミ、（山城宇治橋モ、道昭掛ラル、）普ク善行ヲ施セリ、

三十九代天智天皇ノ御宇二（癸亥）稔、百濟國ヨリ兵亂ニヨッテ、日域ニ加勢ヲ乞事アリ、依而將軍大華下阿曇ノ比邏夫ノ連、同阿倍ノ引由ノ比邏夫ノ臣等ニ副、兵ヲ下シテ百濟ヲ救シメ玉フ、官軍強ク唐ヲ攻ル時ニ、唐ノ高宗、臣劉德高ヲ日域ニ遣シテ、頻リニ和ヲ請、天智帝是ヲ許シ玉ヒテ、守君ノ大石坂部ノ石積等ヲ百濟ニ下シテ、官軍ヲシヅメ玉フ、兩將高宗ニマミエシ時、高宗勅シテ長樂道場ノ剩檀ノ靈像ヲ兩使ニ附シテ、日域ニ渡シ玉フ、（委ハ大覺禪師記錄ニ見ヘタリ）兩將靈像ヲ守リ奉リ、順風ニ帆ヲ上ゲ、程ナク着岸ノ折節、靈夢ノ告ニ曰、我末世ノ衆生化益ノタメニ、今東土ニ渡ルナリ、今世帝都ノ西ニ當リ、山城ノ國ノ中央ニ我ヲ安置セヨ、此地後世皇居ノ因縁アリ、其地ニ在テ王法ヲ守護シ、末代ノ衆生ヲ化益セント、兩將同事ニ告ヲ得テ覺ヌ、歸洛シテ速ニ此旨ヲ奏聞ストイヘドモ、近臣ノ妨障ニヤ、敢テ勅答モナカリケレバ、兩將センナキコトニ思ヒナガラ、佛勅ニ任セ、山城ノ國葛野郡ノ林中（古記ニ曰、村雲ノ森是也、亦此森ノ北ニ林アリ、村雲ニ準ロテ白雲ト云、兩森トモニ、後ニハ民屋ト成テ、村雲村白雲村ト云、）ニ、密ニ安置シ畢ヌ、（時ノ人、松林堂ト云、今松林庵トテ、舊名已殘レリ、願クハ坊舍ヲ再建セン事ヲ、）而其後五十代ノ帝桓武天皇（柏原天皇本號）御宇、延暦十

三年ニ當テ、帝都ヲ此地ニ移シ玉フ、(葛野郡村多字、長安城都是也、)以前十二年ノ事ナルニ、賢憬法師ニ勅シテ、新都ノ地相ヲ見セシメ玉フ、憬師愛宕葛野郡ヲ廻リ、思ハズ此尊像ヲ拜シ奉ルニ、本朝希有ノ瑞像也、直チニ淨信ヲ感ズ、如來大悲ノ光明賢憬ヲ照シ玉フ、憬師思ラク、是コソ大石石積等支那ヨリ將來シ、靈告ニ依テ山城ノ國葛野郡ニ安置セラレシト傳聞シ靈像是ナルベシ、佛勅違ハズ、正ニ今帝都ヲ此地ニ移シ玉ワントノ叡慮コソ不思儀ナレ、然バ誠ニ帝都長久ノ地ナリト、勸喜ノ涙袖ニ餘ル、皇帝ニ歸リ此由具ニ奏聞セラレタリ、帝勸喜斜ナラズ、遷都アッテ其後堂舍ヲ御建立アリ、淨福寺ト改號シ玉ヒ、天下安全御祈願佛ト崇メ玉フ、靈驗日ヲ追テアラタナレバ、有信ノ者其利ヲ得ル事言語ノ及ブ所ニアラズ、開山一叡、(南都興福寺ノ徒、產姓不レ詳、仁壽二年四月七日ニ寂ス、)福業、法忍、感流ト住持四代相續ス、○中略

其後天德四年九月、內裏ト共ニ燒亡シ、唯舊名而已殘レリ、此時比叡山良源法師、(慈惠大師ト謚ス、是善ク談人ノ能ク知ル所ナレバ此ニ略ス、)聖跡ノ空シクナラン事ヲ患テ、寺ヲ西坂下ニ移シ、本堂、地藏堂、(地藏尊、傳教大師ノ作、慈惠安レ之、)其外諸堂舍造營有テ、(舊記ニ醍醐トアリ、舊跡今ニ存スト云々、)尊像ヲ崇敬セラレシコト他事ナカリキ、故ニ慈惠大師當寺中興開山ノ名アリ、慈惠般若心經ヲ書寫シテ、寶前ニ納メ置、寶祚長久、天下安全ノ祈願ヲ籠玉フ、其後二百餘年ヲ經テ、(此間住持六世相續)兵火ノ爲ニ諸堂殘ラズ、回祿ス、故有テ本尊及什物等ヲ、暫ク法勝寺ニ安置シス、

鎌倉ノ尼公二位殿(世ニ尼將軍ト云也、○平政子)ノ御願ニ依テ、承久元年源賴經公相陽ニ御下向ノ時、本尊ヲ鎌倉ニ移シ玉フ、將軍賴經公ハ天下國家ニ在テ兆民ヲ安ジ、官職ノ責任淸カラン事ヲ而已好ミ、日夜靈像ヲ信ジ玉ヒ、天下泰平ヲ祈リ玉フ事深切ナリ、故ニ天下無雙ノ賢將泰時(北條三代)ヲ得玉フ也、○中略九十代後宇多院ノ御宇建治二年ノ比、葛野郡ニ更ニ淨福寺ヲ御再興在シテ、(古記ニ正應年中御建立トモ)有本尊釋迦御長三尺五寸ノ座像ヲ安置シ、當國和尙ノ(皇都鑑)ヲ住持トシ玉ヒ、往古ノ如ク定額ニッ

ラ（定額上ハ衆僧ノ學校也、檀林ノ事也、）勅願寺ト定メ玉フ、村雲淨福寺是ナリ、依テ當國和尚ヲ開山トス、（文保二年正月廿七日入寂）德治元年鎌倉建長寺大覺禪師ノ弟子德儉、洛東建仁寺ニ來ル、後宇多太上皇夙師ノ道ヲ慕ヒ、西郊ノ別宮ニ詔入レ玉フ、（嵯峨御所是ナリ）玄要ヲ咨扣ク、奏對旨ヲ契フ、故ノ關國藤原良教ノ華苑一區ヲ以テ、壽藏ノ地トシテ庵ヲ賜フ、牧護ト云、（今ノ南禪寺ノ內、牧護庵是ナリ、）文保二年勅ヲ下シ玉ヒテ、德儉ヲ上洛サセシメ、南禪寺ノ山務ヲ勤シム、後ニ國號ヲ賜リ、佛燈國師ト云、太上皇勅ニヨツテ、國師ノ弟子建長寺元圭和尚ノ弟子元曉（參州岡崎ノ產、姓ハ中川氏也、）ヲ上洛サセシメ、當寺ヲ相續セシメ玉フ、同年佛燈國師當寺ニヲヒテ、數日禪法ヲ講談セラル、（○中略）同（○康永三年）三月九日、直義朝臣ヲ以テ永ク御祈願寺タルノ旨御免許アツテ、則天下安全ノ御祈願狀ヲ寶前ニ納メ玉フ、其語ニ曰、

京都淨福寺住持元曉申祈願之事

右如申狀者、當寺者釋迦如來安置之靈場、佛燈國師門徒相続之寺院也、仍或蒙勅命、或應武命、致天下安全懇祈條、住持三四代證跡已連綿、就中大覺禪師、與最明寺禪門、說文及起錄、在當寺、備上覽訖、旁非無由緒歟、且於敷地者、住持相傳之條、公驗分明也、敢莫後勘歟、早蒙御願寺之裁許、欲勵漸々之興隆云云、而眞如寺長老月翁和尚、所被吹擧也者、任申請之旨、可爲祈願所之狀如件、

應永三年三月九日　　左兵衛督源朝臣書判

且佛供料トシテ、毎年三百貫ヲ賜フ、（○中略）同（○天正）六年、信長公御下知ニ依テ、先年義輝公御下知ノ勸化帳、亦諸名エ出ス、　同十年、諸堂造營修覆成就ス、

今度就當寺之由緒、釋尊之所謂御尊、舊記錄起記錄等粗一紙ニ寫集、指上申處、仍如件、

天正十二（甲申）年十月　　村雲戾リ橋淨福寺住持　崇林判

寺格

前田法印殿

如斯書上候處、天正十三年十一月廿一日、秀吉公當寺在御參詣而、尊像ヲ始、諸記錄諸寶物等御拜見之上、御祈願寺ト定メ、則座ニ寺領百石可被宛行旨、被仰出候處、故有テ辭退申上ニ付、爲佛餉料山城一乘寺村之內、永代三石之御朱印賜之也、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官符

應以淨福寺僧請三會聽衆幷二會輪轉各義各一人事

右得皇太后宮職(光孝后班子女王)解偁、件寺是依御願所建立也、仍年分度者、復試立義之事、可准安祥寺例狀、官符下知先畢、今撿彼寺例、非唯立義者而已、三會聽衆亦有請用、因循之旨、何得相違、望請、官裁准彼寺例、每年依件被請用者、左大臣宣、奉勅依請、但立義者輪轉請用、其年次者在圓成寺下、

昌泰二年十月三日

太政官符

應圓成淨福兩寺聽衆立義內輪轉遞請仁和寺僧事

右彼寺別當律師法橋上人位觀賢奏狀偁、仁和寺是寬平御代、奉爲仁和先帝所創立也、其定額僧十口、皆諸宗智者、而聞一寺之獨見闕三會之多聞、夫淨福寺者東院皇后御願、置定額僧四口、聽衆立義各一人、又圓成寺者故尙侍贈正一位藤原朝臣淑子之所建立也、寬平殊有御願、作起寶塔、聽衆立義、亦具備焉、伏尋細由、雖三寺異處、共一代建立、仁和寺僧盡預決釋、當今太上法皇御在之間、左右無妨、若至後代、相和可難、望請、處分三寺、輪轉遞令請用三會聽衆、二會立義、謹請天裁者、左大臣宣、奉勅依請、立爲恒例、

延喜七年五月二日

太政官符

供養

應ᵀ以₂淨福寺僧₁每年請ᵀ用最勝會立義者一人ᵀ事

右太政官去昌泰二年十月三日下₂治部省₁符偁、件寺立義者、輪轉請用、其年次者在₂圓成寺下₁者、右大臣宣、奉ᵀ勅、最勝會立義者、改₂輪轉₁每年請用、

延喜三年三月五日

〔日本紀略一醍醐〕延喜元年十月廿二日、太上法皇〇宇多、奉₃爲先皇后〇宇多后胤子₁於₂淨福寺₁供₂養一日經₁、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜元年十月廿三日、公家於₂淨福寺₁供₂養一切經₁、太上法皇宇多院、於₂大會中₁三₂禮增命和尙₁、公卿侍臣等皆以稱歎、

名稱　所在寺域　創建

古事類苑

宗教部五十

佛教五十

東福寺

東福寺ハ、山城國紀伊郡稻荷山ノ北ニ在リテ、五山ノ第四ニ位シ、世ニ新大佛ト稱ス、藤原道家ノ建立ニシテ、唐僧圓爾ヲ開山ト爲ス、住持虎關ノ元亨釋書ノ鏤板、及ビ殿司明兆ノ佛畫ハ、寺寶トシテ世ニ著ハル、又子院ニ南明院アリ、將軍德川家康ノ室ヲ葬リシ處ナリ、當寺ニ屬スルモノニ、三聖寺普門寺等アリ、亦皆有名ナリ、

〔拾芥抄(下末諸寺)〕東福寺(禪院、聖一上人、月輪殿、)

〔花洛名勝圖會(東山八)〕慧日山東福寺○中略 當寺の號は、南都東大、興福の兩寺を合せて用ゆ、俗に新大佛と稱す、建立の初めより、更に回祿の災なく、伽藍は往昔の儘なり、

〔東福紀年錄〕建長七年乙卯六月二日、藤丞相實經慶東福寺、本朝昔既有舍那、彌陀、彌勒三大像、而今復安釋迦大像、是故俗指東福寺稱新大佛、

〔山城名勝志(十六紀伊郡)〕東福寺(在一橋南、法性寺大路東、稻荷山北、號慧日山、五山第四也、)

四至文(寺敷山堺事、弘安三年、)限東月輪殿堀路通 限西法性堺 限南溪川 限北東北院田端

〔東福紀年錄〕嘉禎二年丙申藤丞相道家(光明峯寺殿下)歸佛崇法、古今寡匹、嘗蓄建寺度僧之志、四月二日夜、感瑞夢、翌日便自製發願文一千四百餘言、於是闢平安城東南地、建大伽藍、殿內安釋迦像、長五丈其

左右觀音、彌勒像各減其半、四天王像復減其半、釋迦眉間藏遮那像、其長五寸、光中化佛五百軀、(其五百數者、蓋表五百塵點成道、五百慈悲大願、且復敎化五百羅漢、是乃開近顯遠妙旨也、)僧亦五十員、如寺產稍豐、則當增五百員僧衆、則日夜孜孜、當學顯密性相、大小權實等敎、以祈國家安寧、復祝君臣壽福、寺名東福、即亞洪基於東大、取盛業於興福、丞相所願如此、後嵯峨天皇寬元元年癸卯、宰府有智山寺、即關西講肆、其徒媒圓爾禪化、欲聞于朝以毀承天新寺、朝廷不許、乃勅陞承天、崇福二刹、以爲官寺、有智山衆議乃寢、師揭勅賜天字、世亦欽佛鑒先知焉、(○中略)二月師(○圓爾)入京、相國(○道家)先遣僧信、通勞來安慰、延之月輪別墅、終日問道酧對、果如惠(○謂惠)所言、相國大悅、即任僧正位、師乃辭、復以其禪敎兼通、補日本國總講師、師亦辭、於是相國親書聖一和尙四字、以擬唐代宗賜法欽國一之例、蓋國務出於我也、就爲東福第一世、

沿革

〔相國寺塔供養記〕ちかき世に、かの光明峯寺の入道殿(○道家)こそ、信心も熾盛に、果報もすぐれておはせしか、(○中略)禪法を崇敬し給しかば、聖一國師と力をあはせて、東福寺を建立せられし、いかめしき事にこそ、

〔桃花蘂葉〕一家門管領寺院事

東福寺(惠日山)　峯殿御草創、見御置文等、當時禪刹五山之一也、寺家于今不燒亡、然而應仁以來、寺僧等隨緣離山、佛事上堂等令退轉畢、文明十一年以來、世上聊以靜謐、住持等爲武家被定仰之間、頗本復之體也、長老入院之時、御敎書自武家被出了、然而依代々芳躅、家門御敎書同副遣、往代者雖爲司奉書、至愚老(○一條兼良)之代、任武家御敎書、仰人令書之、加官判遣、(入道之後、書沙彌判、)毎度潤筆料二百疋進之、于今不失舊規、又毎年誕生日、維那僧持來祈禱頌乞銘、仍書姓名遣之、

堂塔

〔山州名跡志〔十二紀伊郡〕〕東福寺　境地南面、東ハ山、西曠タリ、北ハ泉涌寺領、南ハ稻荷領也、　山門(南向)
額　妙雲閣(横額)　勝定院義持公筆　二階　本尊　釋迦佛(坐像、三尺許、)　脇士(東)　善財童子(立像、二尺五六寸、)
(西)月蓋長者(立像、三尺四五寸、)　十六羅漢(坐像、四尺許、)　本尊左右、以木作岩洞、安其中、本尊金色、餘ハ彩色也、筆者

兆殿司、同所天井ニ樂器ヲ圖ス、是當山寒殿主ノ筆也、畫ヲ兆殿主ニ學ブ、

思遠池　在山門前

佛殿南向　本尊　釋迦佛坐像、五丈、　脇士左　觀世音右　虛空藏共坐像、二丈五尺、　四天王立像、一丈二尺五寸、安同檀四隅、已上作未考、　同佛壇後面所畫圖、觀音井十八天衆、　筆者兆殿司　當寺ノ號ハ、南都東大興福之兩號ヲ合シ用ラル、　開基聖一國師、願主檀那光明峯寺入道殿下九條關白道家公　後嵯峨院ノ御宇、寬元元年ニ建立開堂後深草院御宇建長七年、　上梁銘東梁　恭願、皇圖大統、扇仁風於率土之濱、帝祚延鴻、布德化於普天之下、次冀、以文以武、而干戈偃息、惟德惟幡、而國家安寧、　大檀越從一位藤原朝臣經道謹立、私曰、經道公、號後芬茶利華院、即道家公五世也、　同四梁　伏冀、繼博陸侯、長爲邦家之柱石、當曲阜任、永作祖道之金湯、更希、佛日與惠日增輝、祖門共寺門彌盛、　貞和三年丁亥六月日　住持　法沙門一鞏敬白

〔東福禪寺手日記〕僧堂

五百羅漢五十幅兆殿司筆　十六羅漢可翁筆　本尊　擘開のすがたの文殊　奥ニ觀音大士の像あり

佛殿

本尊釋迦御長五丈　左右ニ觀音、彌勒二丈五尺　四天王一丈二尺五寸　堂の裏に、阿彌陀如來有、誓願寺の本尊とおなじ長にて、同じく春日之作なり、東の方に、梵天帝釋の像あり、西ニ開山、達摩百丈、臨濟の像あり、

法堂

涅槃像かゝる、四間ニ八間、表具の畫ともに兆殿司の筆也、

堂ニあたり、上下をまきかけたり、東に五大尊有り、運慶作、西に愛染明王あり、康慶作、

山門

十六羅漢の像あり

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

十三重石塔在鎭守傍

〔聖一國師年譜〕延應元年己亥五月、藤丞相道家、染病、命諸僧諷呪、以祈保安、二十三日、比良山神託家盛妻、告僧慶政上人證月曰、藤丞相將擬建寺復造十三重石塔、憑此善念、夙罪消滅、今後、善根必當清淨、我有三千眷屬、當爲伽藍神、以致衛護、道家聞、乃願心彌堅、

〔濟北集七〕後無價軒記

癸酉(〇正慶二年)之夏、作無價軒記、明年(〇建武元年)正月癸巳、寺(〇東福寺)爲祝融所奪焉、予拾瓦礫掃灰塵、構小寮而居、闢東軒、爲燕坐之室、殿宇雖燼、松竹無恙、(〇中略)建武元年五月十六日、

〔濟北集十〕東福火後疏

徑山、慧山、兩朝大刹並稱、國一聖一二師開基類名、是曰禪宗恢弘之靈場、卽爲君相鎭護之福地、惟鬱攸之不愼、訝伽藍之斯亡、祖師禪恰似初禪、吾廬受焚燼、長者子本是窮子、實藏至自然、萬牛雖難挽大廈之棟梁、二天猶痛移廢趾之柱礎、今我拾瓦似勤苦之有餘、若人揮金見咄嗟而可辨、等慕能引等施、不隔王公四民、大志必策大功、欲復殿堂諸宇、回此勳業以福國家、

〔東福紀年錄〕貞和三年丁亥、後芬陀利華院一條殿下經通公、再建立東福佛殿、(見于一條和尚上梁銘)

〔幻雲稿〕某人住東福山林友社疏

竊以、惠日山東福禪寺、庚寅之冬、(〇文明二年)賊軍入寺、使掠諸院、殊海藏祖塔、罹于兵燹、雖然門派在近郡者、各出隻手、勤土木役、輪奐復舊、於是山中耆宿胥議、事海藏的孫前席三聖某禪師、聞諸相府、住持本寺、欲再整頓宗綱、禪師洛人、而檀信敎者多在越、以故屢作耶溪雲寺之遊、(予)自壯歲往來于越、四十餘

年、某山某林、投老而隱者、皆予舊識也、聞所盛擧、豈不抃舞哉、

〔東寺執行日記〕享德三年六月十二日、東福寺三重塔婆爲勸進、於法成寺大路、關所立之、仍土一揆寄破之、出官僧打死、寺方ニ手負七八十人有之、

〔師鄉記〕享德三年六月十一日辛卯、法性寺大路、爲東福寺沙汰立新關、是間、塔婆造立云々、而醍醐山科已下近邊土民令同心、昨今寄于法性寺大路、可燒東福寺之由企之云々、仍自寺家相防之間、及合戰云々、寺官修造司一人討死、長不可立關之由寺家申之、仍土民等退散、屬無爲云々、

〔續史愚抄後花園〕永享十三年〇嘉吉元年九月三日丁酉、土一揆壞東福寺、

〔東福紀年錄〕天正十三年、東福山門地震傾倒、秀吉公、賜可修補之狀、并御朱印、而造營之、

〔天明集成絲綸錄三十二〕天明四辰年正月

町奉行江

京五山東福寺、伽藍修復、且朝鮮國書啓御用等之諸入用、難儀ニ付、爲助成、於御當地、富興行御免被仰付、當辰閏正月ゟ、來ル寅年正月まで、每月壹度宛中年拾箇年之間、上野黑門前、常樂院境內ニおいて、致興行候ニ付、右之趣、町方江觸知せ度旨相願候處、願之通相濟候間、此旨可觸知者也、

正月

寺格

〔日本略記〕一五山之事、京の五山は、天龍寺、相國寺、建仁寺東福寺、萬壽寺、〇下略

〔桃花蘂葉〕一家門管領寺院事〇中略

東福寺惠日山 峯殿〇藤原道家御草創、見御置文等、當時禪刹五山之一也、

寺領

〔吾妻鏡三十三〕延應元年七月廿五日壬辰、越中國東條、河口、曾禰、八代等保事、爲請所、以京定米百斛、可備進之旨、地頭等、去年十一月、獻連署狀於禪定殿下、〇藤原道平仍可停止國使入部、并勅院以下國役之由、同十二月、國司加應宣、就之去正月、任國司廳宣、地頭等寄進狀、爲東福寺領、停止勅院事、國役等、

爲地頭請所可令備進年貢百石、兼又當國宮島保、雖當家領、被紀返國領之由、被遣禪定殿下政所御下文、是爲寄附彼寺、所被相傳也、仍被申其趣於將軍家之間、可存其旨之由、今日被奉御返事、

〔東福紀年錄〕文永二年乙丑七月、藤丞相實經、捨四十一莊于東福、

弘安二年庚辰五月晦日平時宗（法光寺殿）書至、捨加賀熊坂莊于東福、

康曆元年己未、東福寺務田規混雜條々、雖及公訟、无異儀之旨、普明國師蒙義滿公鈞命、而自筆云、

貴寺御訴訟條々趣、令執達大閤幷武家候之處、無異義落居候、併開山冥感之所使然候乎、隨而大閤御書、將軍家御證判、管領裏封事書、進覽之候、貴寺末代龜鏡候之間、殊珍重之至候、

康曆元年十二月十三日　妙葩在判

東福寺僧衆御中

應永七年十二月廿六日　入道准三宮前太政大臣（〇藤原實時）賜東福寺領寺家可領掌之狀御判物、

同廿八年九月五日　義持公、頒河內國光通寺寺邊散在田地、寺家領掌不可有相違之御判物、（〇中略）

正長元年七月十九日　管領畠山殿、東福寺領可全領之狀賜之、

長祿二年三月廿八日　東福寺領、在于美作、因幡、周防三箇國之內、所々紛失、再改被返付當寺也、如先規可令領知之狀御判物、慈照院殿、右近衞大將源朝臣賜之、

同（〇天正）十七年十二月朔日　當寺門前、境內地子以下、令免除訖、永不可有相違之狀、御朱印、秀吉公頒之、

〔國師日記〕一領知方散在之條、今度改之、於三ヶ所、千五百八拾四石、相添目錄、令寄附之訖、末代無相違、可有寺納、次勤行等無懈怠、堂舍修理被下、聊不可有油斷、若於無沙汰者、可悔還候也、仍狀如件、

但此冊之奧九丁目、權現樣之御黑印ニ、千八百五十石四斗餘と有之、不審、

天正十三年十一月廿一日　御直判大閤

東福寺

什物

〔寺社寶物展閲目錄一山城〕東福寺

一無準眞跡扁額類十四幅

勅賜承天禪寺　上堂　小參　秉拂　淋汗　說戒　普說　念誦　巡堂以上竪物　普門院

選佛場　圓爾　圓爾　圓爾〇以上橫物中略

一兆傳主筆觀音三十三幅

一同四十祖像四十幅

一同五百羅漢五十幅

〔空華日工集〕永德二年二月廿九日、等持院忌、府君〇足利義滿就書閣說、〇中略君又問、一切經與藏經同別、余曰、同也、〇中略因說適者、東福虎關和尙所建海藏院經籍所藏、謂之文庫、秘惜天下儒釋二書皆藏焉、時元亨釋書、乃日本高僧傳也、凡公家武家、歸依佛法者、僧俗、佛像、經卷、封爵等、諸宗始末、皆載于此書、開板之費、官賜江州某田地、今年開板已成、其板亦燼矣、可惜也、蓋爲再刊之張本、故特及此、君頷之、

子院南明院

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

南明院在永明院南

秀吉公御妹、天正十八年正月十四日、於聚樂薨去、葬于東福寺、號南明院云云、

〔折たく柴の記下〕此年〇正德四年十一月、南明院殿御供米田御寄附の事あり、石五十神祖百年の御忌にあたらん時、此事おはしますべき由、前代〇德川家宣の御遺志有りしによられしところなり、我在京の時、東福寺に遊びし日、南明院に行向ひて、神祖と御臺所の御畫像おはしますを拜せし事あり、神祖の御像は、京にも南都にもおはしますを拜み參らせたりき、御臺所の御像は、此所より外に

常樂庵

渡らせ給ふべきにもあらず、太閤秀吉の御妹君にて、神祖の御臺所にておはしませしが、其代の御榮は申にも及ばず、今は朝夕の御供をだにはか〴〵しく參らすべき便もなき小院の內に、其御像のみ殘らせ給ひし御事、いと悲しく覺えて、おぼえず泪をぞ催したりける、〇中略ましてや天下の大祖に配せられ給ひし御事なり、然るを都の內に捨おかれて、其御跡とはせ給ふと云事もなく、わづかに小院の僧の齋飯を分ちて、其御供に參らせん事、いかにやはさふらふべきと申たりければ、御形改めさせ給ひて、申す所理り至極せり、去ながら今に至て其故なく、かの御事に及びなば、代々の御誤りを顯しまゐらするに似たり、神祖百年の御忌も程近し、其時に及ばん頃、計ふべきやうこそあれと仰られしかば、かくれさせ給ふ御時に、此事仰置れしとぞ聞えて、此度この御事に及ばれしなりける、

〔山州名跡志〕十二紀伊郡 東福寺

常樂庵〇號普門院〇在通天北 樓門西向 額 普門院橫額 筆者無準 佛殿南面、在閣、上額 常樂庵豎額

後光明峯寺筆 此所中央在壇上室 額勅諡聖一國師橫額 持明院震筆 所安 聖一國師像坐倚子、持拂子、長三尺許、 同所室後左 土地堂 守護神勸請處 辨財天坐像八九寸 十五童子立像尺許 作康珍

同右 祖堂 中央 達磨坐倚子、二尺許、 左 百丈禪師 右 臨濟禪師共坐倚子、一尺五寸許、 作不考 外陣東傍在西向室、所安光明峯寺殿下影、坐像四尺許、法體左手持五鈷、右手念珠、 右室後壇西向 安九條家牌 右室西東面壇、徑山無準禪師像、坐像、一尺二三寸許、安厨子、

已上堂內畢、堂內土間敷瓦、

開山室外北場、有一條家八代塔、寶篋卯塔、自西至東 後光明峯寺〇家經 後[二]一條殿下〇實經 後[三]圓明寺〇兼冬 芬[四]陀利華院〇內經 後[五]芬陀利華院〇經通 成[六]恩寺、〇經嗣 後[七]成恩寺〇兼良 後[八]妙花寺殿下、〇冬良

〔東福紀年錄〕文永五年戊辰藤丞相實經、剏常樂庵、弘安二年庚辰五月二日、移常樂庵、○中略藤丞相實經、入山問疾、○中略文應上皇、○龜山遣醫际病、○中略弘安三年十月十七日、東福老彌重、投筆而化、

永明院

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

永明院（在南門内東南）

和漢禪刹次第云、藏山和尚、諱順空、諡圓鑒禪師、嗣聖一、○中略

俊成卿墓（今在東福南明院、永明院一代、分地建南明院、故以墓入南明院地也、）

〔東野州聞書〕一或人のかたりし、俊成卿の墓、南禪（○南禪恐東福誤）寺の永明院の奥の山に有と申せしなり、此永明院の地のぬしにておはします間、毎月廿九日、今も弔ひ奉るとかや、毎朝夕、大悲呪一返有、廻向には、五條三位俊成釋阿と入よし、やがて彼院の僧申なり、

圓通寺

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

圓通寺（或云、寺跡今泉涌寺境内、戒光寺地是也、開山寶覺禪師塔所也、泉涌寺八景、謂圓通孤松、）

〔蔭涼記〕應永八年二月廿六日乙酉東福寺邊花歷覽、圓通寺、菩提院、東林寺、永明庵、

海藏院

〔和漢禪刹次第〕慧日山東福禪寺○中略諸塔○中略

海藏院（虎關和上、諱師錬、嗣東山寶覺、洛陽人、貞和二七月廿四日寂、頌云、勿啓予手、勿啓予足、）

三聖寺

〔拾芥抄下本諸寺〕三聖寺（明德二九廿燒）

〔和漢禪刹次第〕日本諸國諸山之禪院　五畿内

同○山城州三聖寺（東山、開山東山禾上、寶覺禪師、）

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

三聖寺（在東福寺北門内、門前有橋、曰絶塵橋、三聖元天台宗、釋迦、阿難、迦葉云、唐佛、兩金剛運慶作云云、今北門前云三聖寺門前町、）

愛染明王八角堂　鎭守稻荷　圓通寶覺禪師肖像

〔元亨釋書八淨禪〕釋湛照、○中略照卿開三聖之禪苑、乃移焉、正應帝詔入宮問道、照權萬壽、

〔花營三代記〕康曆二年四月三日、師項西堂、東福寺三聖寺門徒入院聖福寺、東福寺門徒入院當寺始也、

〔寺鑑下〕禪宗五山派

東福寺附庸　三聖寺　諸山大和大路東福寺內

御朱印　東福寺領之內配當

普門寺

〔和漢禪刹次第〕十刹位次○中略

東山普門寺號普山、開山聖一國師

〔山城名勝志十六紀伊郡〕東福寺

普門寺在通天橋北、十刹第六位、常樂庵在方丈傍、額普門院無準

〔東福紀年錄〕寛元四年丙午、藤道家以東福未成、先建普門寺、俾圓爾居焉、

〔桃花蘂葉〕一家門管領寺院事

普門寺　東福寺之門徒十刹之一也、住持御敎書等同本寺、右四ケ寺院、○法性寺內報恩院、光明峯寺、東福寺、普門寺、中比與九條家有相論事、後芬陀利華院(一條經通)殿、與後報恩院關白(九條經敎)殿時也、而應永七年六月六日、鹿苑院大相國就一門長、指三流家督也可致管領之由、被出書狀也、自筆爾來于今無他妨、又應永廿六年、廣橋儀同三司、以勝定院、被仰東福寺以下管領、不可有相違之由、奉書在之、尤可備龜鏡者也、

〔花營三代記〕康曆二年四月二日、士東西堂、南山和尙少師入院普門寺、被成十刹始也、

〔大乘院寺社雜事記〕文明十三年四月十一日乙卯、尊實寺主、前判官入道、自京都參上、御葬禮○一條兼良昨日寅剋九日曉也於東福寺之普門寺十刹也在之、

〔道房公記〕寛永十八年十月一日癸卯、向東福寺、入住持玄召東堂坊、見代々廟所、在普門寺舊跡、尋召東堂之處、其答不分明、不見石塔云々、非沙汰限、此廟所者、六七年來如無歟、東光院○九條殖通殿、後月輪

殿二代石塔、在常樂庵廟所、自後慈眼院〇九條延孝殿已前石塔者、在普門寺、總而當家廟所者、在普門寺、

一條家廟所者、在常樂庵、玄召東堂語云、普門寺諸堂絕了後、此五六十年以前、謂玉西堂者、借普門寺舊跡地構小庵、號大喜軒、其節御廟所令破歟云々、于今有此寺、限普門寺舊跡三分之一爲寺內歟、曉賴相伴召東堂、見普門寺舊跡、

〔建武以來追加〕東福寺條々應安五十十九御沙汰、執筆布施彈正大夫入道、

一止掛塔事

如僧籍者、現住六百三人、沙喝三十人云々、加參隨者殆單七百人乎、五山之法、曆應以來、度々有其沙汰、可爲三百五十人之由被定置訖、假令雖有加增之儀、不可過四百人、但當寺依不及武家之沙汰、如此令群居歟、於今者、輙叵變斷、所詮向後固可被停止掛塔、且雖有起單之闕、敢不可被許參暇、偏是爲被減僧員也、若令違犯者、可有殊沙汰矣、

〔鹽尻一〕一昔明兆殿司、好畫僧將軍義持公に信せられ、公望む事あらば、啓せられよとの給ひしに、殿司云、財餠に於ては望なし、只東福寺の衆徒僧、好ンで櫻花を愛し、寺中多花木有、後世恐らくは遊戲の與場とならん、予所歎く是なり、希くは是を禁じ給へといふ、大に感じ、悉く是をきらしむ故、今に至て東福寺境內に櫻なしとぞ、

今世の法師原、花木を植添て、人の見來るを榮とし、甚しきは、茶店戲場をはり、寺院の利とす、何ぞ獨り兆公の罪人ならんや、佛祖も爲に眉をひそめられなん、

〔花洛名勝圖會東山八〕惠日山東福寺〇中略

夫當寺中、通天橋は、洛東觀楓第一の勝地にして、橋下左右の崖は、悉く楓林なれば、年々秋の末に至りては、さながら紅錦繡を浪に洗ふが如く、風景いはんかたなく、實に此地哉、東山中にしていさゝかの嶮地なく、唯平坦にしてしかも巍々たる堂字の間なるに、其深間に至れば、幽僻深山の

心持して、山川の鍾秀奇絕といふに足る、

名勝所在
萬壽寺

萬壽寺ハ、東福寺ノ境內ニ在リテ、五山ノ第五ニ列ス、此寺ハ原來白河上皇ガ、皇女郁芳門院媞子追福ノ爲ニ、六條院ノ內ニ建立セシ所ニシテ、當時ハ六條御室ト云ヘリ、應仁、大永等ノ亂ニ屢〻火災ニ罹リ、近世ニ及ビテ今ノ地ニ再興セリ、

〔和漢禪刹次第〕京師萬壽禪寺、開山十地覺空上人、實覺禪師、塔曰左邊、今改興禪、

〔拾芥抄中末諸名所〕六條內裏北六條坊門南、六條二町、東洞院東、高倉二町、萬壽禪寺是也、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕京城山萬壽寺　在東福寺院內

〔山城名勝志十六紀伊郡〕萬壽寺五山第五、今在三聖寺內、元在洛中、

創建沿革
〔京城萬壽禪寺記〕本寺者、郁芳門院追嚴道場、昔六條院也、郁芳諱媞子、白河上皇長女、右大臣顯房第一女、中宮賢子者聖母也、堀川帝者弟也、帝事郁芳以母儀、不以賢姊待之、嘉保三年丙子今年十二月十七日、改元永長、秋七月下澣、郁芳不豫、八月二日大赦、祈平安也、夜有星隕、七日甲子晚登遐、二十一齡也、九日丙寅上皇不任哀悼而落飾、二十六日、葬蓮臺寺側、永長二年丁丑、革郁芳遺宮爲佛廬、俗稱六條御堂、十月十四日供養、上皇出聖躬血、書永劫護法願文、其文曰、世漸及澆季、雖屬末法、不可改我此願、遠可期三會曉、我遠證九品者、天眼瑩之、我誓留三有者、以怨念罰之、何世聖君、非我後裔、誰家賢臣、非我舊僕、一事一言、違之背之、國主皇帝、殊可加炳誡矣、永長二年十月十四日、自留手痕而表信、故曰御手印、藤原國明寄附江州田井鄉、而仰佛法王法之庇廕、康和元年正月四日、六條院火、八月十二日、再造供養、平治元年十月二十六日、因幡堂、河原院、崇親院、祇園離宮同時災、正嘉年中、○後深草十地上人、文曰當一上人、覺空禪師

寺格

也、與其徒慈一上人〈寶覺禪師也〉修浄土教、慈一問東福國師道風、往扣其室、針芥相投、十地亦見國師、遂傾玄旨、二師棄教入禪、扁六條御堂、曰萬壽禪寺、蓋嘉暦三年相模守平朝臣狀云、萬壽之題額、起最明寺之素意、弘長元年十一月二十四日、寶覺禪師旌禪苑開堂之儀、翌日東福有賀狀、其略云、昨日無風雨難開堂、道德之至、隨喜無極、於是寶覺禪師、覺空禪師、爲兩開山、文永九年壬申十一月二十四日供養、同十年十月十二日火、元德二年庚午九月二十日、内親王崇明門院〈諱禖子、後宇多院皇女、御母者永嘉門院〉新賜寶地、廣開紺園、此樋口東、高倉西、東洞院爲界也、元弘二年、〈今年改元正慶〉前住瞬雲原之徒紹臨、奉朝命就彼地、先建報恩精舍、奉安地藏尊容、修薦永嘉門院仙靈、〈永嘉門院諱瑞子、中務卿宗尊親王女、嵯峨院孫女、後宇多猶子、嘉暦四年八月二十九日升遐、四年者元德改元也、〉崇明創尾州味岡本莊、充永嘉香燈、曆應三年庚辰、僧良悅附味岡新莊、六條萬壽與報恩、合爲一寺、六條舊地、今號南院、報恩舊基、今曰萬壽、特爲郁芳仙祠、白河、後宇多等、同嚴追修、自永長上皇願文血書、宸翰之所感、寄田園於此寺者甚夥焉、〈○中略〉等持仁山相公〈○足利尊氏〉大執國柄、深信佛乘、殊興禪叢、令嗣寶篋相君〈○足利義詮、○中略〉永享六年甲寅二月十四日、六角堂因幡堂祇園離宮等、洛中人家、一萬餘火、寺及其殃、蕩焉成墟、怪哉、與平治實相類、普廣相公忝傾台恩、擢開山門葉邵外英幹住持事、創中興業、同九年丁巳、捨播之安田、東九條田園、泊罪隷籍沒之財、而大殿山門、丈室新成矣、法堂僧堂、庫司浴室、淨廁衆寮、諸寮等、次第備矣、

〔碧山日錄〕應仁二年二月十二日癸卯、祖與龍翔明南浦同族系、而共生于駿州藁科、〈○中略〉浦後住京城萬壽、而奉百廢改叢規、故祖堂有中興之牌也、諡圓通大應國師、

〔二水記〕大永八年二月八日、萬壽寺是又悉以破滅、四面築地無其面影、竹木不殘寸苗、言語道斷之式也、但法塔只一殘了、

〔日本略記〕一五山之事、京の五山は、天龍寺、相國寺、建仁寺、東福寺、萬壽寺、〈○下略〉

〔本朝高僧傳〕〈二十九淨禪〉京兆萬壽寺沙門明千傳

寺領

釋明千、號古鏡、蚤參清拙和尚得悟、又遊元朝參謁諸老、〇中略在元二十年而東還、源丞相〇足利尊氏請住洛之眞、如乳香嗣清拙、遷信之開善、洛之萬壽、輦下挹風者衆矣、延文三年九月初八、陞萬壽歯列五山之位、千上堂日、萬壽本爲皇后寺、將軍今賜五山名、山僧坐著貢直簇、撾鼓陞堂祝聖、

〔建武以來追加〕禪院法則條々應安五四十五布彈入奉行

一万壽寺兩班座位事布施彈入奉行

万壽寺兩班座位事、可爲五山列之由、去貞治二年載事書被定下之處、予今不及遵行之條、大不可然、仍重所被仰也、所詮守先度事書之旨、彼寺々之耆舊令參暇之時、當寺之座位任名字、敢以不可有違亂、今度猶云住持云大衆、及異議於背上裁者、須被閣寺訴之上、就張本可處罪科之狀、依仰執達如件、

應安五年九月四日　　武藏守判

南禪寺長老自餘五山文章同前

一當寺耆舊座位事、任名字不可有違亂之由、所被仰四ケ寺也、可被存知之狀、依仰執達如件、

同日　　同前

万壽寺長老

〔京城萬壽禪寺記〕至德初元甲子、鹿苑大相國〇足利義滿遵先相君〇義詮遺命、重降鈞帖、定兩班位次、大方爭議、不欲與之歯、大相國命南禪大淸、天龍德叟、建仁相山、東福天章、各寺西堂諸勳舊等、以連署令定其班、遂無異論、至今受其賚、

〔京城萬壽禪寺記〕弘長三年、關白殿下〇藤原良實以泉州長瀧包富、付與十地上人、建武五年、〇曆應元年也一條殿下、〇經通以長瀧彌富幷附之、弘安九年、室町院〇後堀川皇女寄附江州田中莊、正和元年、院宣〇伏見賀州富積保、爲祈禱賜之、貞治五年、寶篋相君〇足利義詮以備前土師鄕、易越中佐味庄、又大小檀施、洛中園地、處處有之、明德四年、前住濟翁樹、寄五條坊門朱雀窪田、充忌辰之茶湯、西京四段綾小路、室町七條、猪熊

六條、高倉、又六條坊門萬里小路、六條坊門高倉兩地、爲永觀都聞設浴之薪水、又禪通都聞施入銅錢壹陌緡、出其息爲開浴之設、至德三年、大内義弘梅窻居士、歸附長門厚東郡吉部鄕、爲浴僧之資、鹿苑大相國〇足利義滿須下鈞帖、爲季世證、此外有莊產田園、被他剗略者、勢州木造庄、日置庄三賀野莊、小倭庄内、井八知山爾鄕、三箇庄、三箇庄名者伊賀河合庄、柘植庄、長田庄院田山田庄、院田越後佐橋庄、信州仁科庄若州垣枝庄、丹波豐富庄、備前長田庄、江州羽田庄也、又五條堀川、六條坊門油小路、姉小路油小路、左女牛堀川、甲斐河五段、寺門西面楊梅路、此本志、都聞冥福之地、一々契券、代々官符昭々焉、〇中略永德二年乙丑、大相國〇足利義滿以寺產之契券官符、雜亂紛冗、而不便點撿之故、提其綱要、命門眞權少府周淸、連書一冊、準眞本、稱之曰青表紙、自大相國以降、勝定〇足利義持普廣〇足利義敎今大丞相〇足利義政皆有花押、實爲家珍、

〔國師日記〕一山城國西院内六拾參石四斗七升、境内地子、替西岡寺戸内貳拾貳石、本知合八拾五石四斗七升、奮遣之訖、可全領知候也、

天正十九九月十三日　御朱印大閤

万壽寺

法性寺

法性寺ハ、藤原忠平ノ建立スル所ニシテ、今廢寺タリ、舊地ハ山城國紀伊郡鴨河ノ東岸東福寺門前ニ在リテ、土俗寺屋敷ト稱スル所是ナリ、本尊ノ彌陀佛ハ東福寺佛殿內ニ在リ、諸堂亦多クハ同寺內ニ在リト云フ、

〔伊呂波字類抄〕保諸寺法性寺

創建沿革

〔拾芥抄下本諸寺〕廿一寺

法性寺九條河原、貞信公、

〔源氏物語五十東屋〕かはらすぎ、ほうさうじのわたりおはしますに、夜は明はてぬ、

〔花鳥餘情二十八東屋〕法性寺は貞信公建立し給へり、尊意座主は貞信公の師檀たる故に、法性房の名をとりて法性寺とはいへり、

〔山州名跡志十二紀伊郡〕法性寺　在東福寺北門前南西向　本尊　觀世音千手三面也、左邊三寶荒神、右邊辨財天、頂有二十五面、立像、三尺、　作　春日　宗旨、今淨土宗守之、近世所撰當國三十三所順禮觀音第廿二番也、此本尊、古法性寺ノ內、諸尊ノ其一也、彼寺荒廢ノ後、再建スル所也、舊地此ヨリ南西ニアリ、見以下、○中略

法性寺舊跡　載舊跡前　拾芥抄云、法性寺在九條河原云云、　按ニ件地ハ、九條通ノ東面ニアタル、其地ヲ河原ト云ン事義前ニ載ス、此舊跡ニ今倚畠ノ號ニ阿彌陀堂ノ字アリ、古老曰、此堂近世ニ猶在リ、荒廢ノ後、本尊ハ東福寺ニ移ス、坐像、七尺許、在東福佛殿內、此所嚴重ナル伽藍ト見エタリ、中ニ稱小御堂アリ、法然上人讃州左遷ノ時、兼實公ノ沙汰トシテ、此小御堂ニ暫止ラル丶由、上人傳ニ載ス、當寺建立ハ、攝政太政大臣從一位忠平公也、照宣公男、天曆三年八月八日薨、七十歲、諡貞信公、　和漢年代記、法性寺、近衞院御宇久安四年立云云、此義不審、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕法性寺拾芥抄云、九條河原、貞信公舊跡、在鴨河東九條南、今日法性寺大路是也、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕法性寺殿今有鴨河東、東福寺北門四、一橋南稱御所內車宿等所、土人云、法性寺殿舊跡云々、

〔雍州府志五寺院〕紀伊郡　法性寺　藤原忠通公之所創、而始在東福寺門前鴨川之東岸上、今舊址存、土人稱寺屋敷、本尊彌陀在東福寺佛殿內、寺中五大堂、是又法性寺諸堂之一員也、凡寺屋敷幷五大堂東福寺中同聚庵知之、到今每年自二月五日至同二十日預此堂、地下人出五大尊芧字之札、東福寺門前八町間土人則貼戸々之門楣、如此則禳疫云、不限是、凡斯外古諸堂本尊今多在東福寺門前

所々之小堂ニ也、

〔大鏡七太政大臣道長〕昭宣公○藤原基經、中略、やむごとなくならせたまひて、御堂○極樂寺たてさせにおはしますー御車に、貞信公○基經子忠平はいとちいさくてぐしたてまつり給へりけるに、法性寺のまへわたり給ふとて、て、ごに、こゝこそよきだうどころなめれ、こゝにたてさせ給へかしときこえさせ給ひけるに、いかにみてかくいふらんとおぼえてさしいで、御らんずれば、まことにいとよくみえければ、おさなきめにいかでかくみつらん、さるべきにこそあらめとおぼしめして、げにいとよきところなめり、ましがだうをたてよ、われはしか〳〵の事のありしかば、そこにたてんずるぞと申させ給ける、さて法性寺はたてさせ給しなり、

〔日本紀略二朱雀〕承平四年十月十日丁丑、以ニ法性寺一爲ニ定額寺一、置ニ年分度者一、

〔續世繼三五笠の松〕法性寺のおとゞ○藤原忠通は、○中略法性寺の御堂の御所などつくりて、貞信公○藤原忠平の御堂のかたはらにすませたまひしかば、法性寺殿とぞ申める、

〔鹽尻十九〕京師法性寺は、太政大臣藤忠通草創有しいと大き成し寺なり、供養の日行幸なんどありし事、榮花物がたりに見ゆ、其廢寺となりしは徒然草に記せり、今は其跡だになし、佛像及び堂舍は、東福寺に遷せしもの多しとかや、我尾州中島郡國衙の國分寺もいづれの時か荒廢して、堂舍證狀などは妙興禪寺の有となり侍るとなん、古今うつりかはれるさま是のみならず、

〔山城名勝志十六紀伊郡〕法性寺○中略

五大堂元在ニ法性寺大路一、今遷ニ東福寺内栗棘庵西向一、額五大堂不二守藤不寄附一卜云、緣起云、照大宣公建立、御堂攝政道長公再興、弘安三年聖一和尚鼎ニ建之一云々、今丈六不動一尊殘也、傳云、敎大師作云々、毎年正月廿八日於ニ此院一行ニ修正一、東福内同栗庵勤レ之、出ニ方字札一、法性寺大路八町毎家門戸押レ之、○中略　藥師堂今東福寺門前三ノ橋ノ北西側有ニ藥師堂一、號ニ明靜院一、元法性寺一院也、傳云、法性寺罹ニ兵火一之時、本尊藥師假遷ニ此院一、免ニ火災一云々、又云、元武鳩社在ニ當院地一、後遷ニ一ノ橋ノ南一、其跡在ニ于今一、此社破壞後置ニ藤杜御旅所一、故世人御旅所呼ニ武鳩社一云々、○中略　三昧堂○中略

塔○中略　常行堂○中略　新堂○中略　總社今東福寺鎭守社是也、號ニ成就宮一、○中略　灌頂堂○中略　東北院東福○四至文書云、北限ニ東北院田堺一云々、○

中略 最勝金剛院 中略○ 一音院 中略○ 淨光明院（或云、今東福寺佛殿後有丈六彌陀、是則淨光明院本尊、或云、西御堂像云々、○中略）報恩院 中略○ 松林寺 中略○ 西御堂（又號小御堂、阿彌陀之像、今在東福寺佛殿後、舊跡在鴨川東九條南鳳村北、○中略）東法院 中略○ 觀音寺（拾芥抄云、在法性寺、又三十三所觀音內云、法性寺觀音堂云々、今東福寺前、二橋南有小堂、土人稱法性寺觀音、○中略）尊勝院 中略○ 定法寺 中略○ 圓法院

〔扶桑略記 二十四醍醐〕延長七年九月十七日、左大臣（○藤原忠平）子息四人、共於法性寺設五十賀齋會、其儀本堂。毗盧遮那像前、安置銀藥師如來像、安置六角佛殿內畫藥師淨土、外金蒔繪殿頂安水精火炎珠、當戶懸兩金花鬘代、殿角蕨形懸金幡、○中略 五十僧自大門。引入堂、群卿大夫皆在禮堂。○下略

〔左經記〕寛仁二年閏四月十六日戊申、今晚參大殿、自夜部依有御惱氣也、今夜令籠法性寺五。大。堂。給云々、

長元四年正月六日甲寅、入夜參法性寺依藥。師。堂。修正也、

〔伊呂波字類抄 保諸寺〕法性寺（寛弘四年丁未十二月一日甲午、內大臣公季供養三。昧。堂。、）

〔百練抄 四一條〕寛弘四年十二月十日、內大臣公季、供養法性寺三昧堂、

〔扶桑略記 二十五村上〕天曆八年二月廿一日、勅供養法性寺塔。造金色普賢菩薩像、金色觀世音菩薩像、安置塔婆、

〔百練抄 七近衞〕久安四年七月十七日、攝政室供養法性寺內新。堂。、行幸 六年八月廿四日、攝政於法性寺新造堂、被行總社祭、新尊崇之、

〔百練抄 十五後嵯峨〕仁治三年九月廿五日甲辰、法性寺禪定太閤灌。頂。堂。供養也、導師行遍僧正、讃衆廿口、關白已下著座、

寛元元年八月廿二日己亥、今日法性寺成。就。宮。（東福寺鎮守）被始行祭禮、禪定殿下（○藤原道家）右大臣殿（○藤原實經）左大將殿（○藤原忠家）准后倚侍兩御方內々御參（南廻廊爲御所）各被啓幣帛、

〔本朝續文粹 十四願文〕奉爲亡考小野宮右大臣（○藤原實資）四十九日追善願文 明衡朝臣 ○中略

仍爲訪彼菩提、奉圖繪胎藏金剛兩部曼陀羅各一鋪、奉書寫金字妙法蓮華經一部八卷、無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各一卷、墨字法華經六十部、無量義、觀普賢等經各一卷、便於法性寺東北院、敬以供養矣、演說焉、是則尋淸愼公〇藤原實賴建立之場、右丞相〇藤原實資歸依之砌也、又所天在生之時、奉造等身金色藥師如來像一體軀、畢首之功雖就、開眼之誠未企、今當是日、以同奉供養、所生惠業、併資幽儀、抑相府平日雖仕王家、多年深歸佛道、開禪庭於蓮府之中、安尊像於花堂之內、例修每月之講說、偏致發露之精誠、況復先卽世之期、遂出家之願、織心機而著尸羅之衣、應繫一乘之珠、状木叉而覓金剛之路、何疑七步之尊、登覺之計、非無所憑、於戲昔乘花輦、忝出入於蓬萊之宮、今坐寶臺、定往生於瑠璃之界、乃至上自有頂、下及阿鼻、蠢蠢衆生、一一利益、敬白、

寬德三年三月二日

〔續拾遺和歌集 十八 雜〕愁にしづみて後、最勝金剛院の八講にまかりて、あしたに前中納言定家もとにつかはしける、　前內大臣 基

數ならで年ふる夢に殘る身は昨日の跡をとふかひもなし

〔明月記〕建永元年五月卅日、早旦出門、參法性寺殿最勝金剛院、以女房蒙仰、退出、

〔百練抄 十四 四條〕曆仁元年九月十三日乙酉、月明於法性寺一音院、有作文、題云、山家夜月、韻中 又有三首和歌、

〔今昔物語 十三〕法性寺尊勝院僧道乘語第八

今昔、法性寺ノ尊勝院ノ供僧ニテ道乘ト云フ僧有ケリ、比叡ノ山ノ西塔ノ正算僧都ノ法弟トシテ、初ハ比叡ノ山ニ住ケルガ、後ニハ法性寺ニ移テ年來ヲ經タリ、若ヨリ法花經ヲ讀誦シテ、老ニ至ルマデ怠タル事无カリケリ、

〔扶桑略記 二十七 一條〕寬弘三年十二月廿六日甲午、左大臣、法性寺內建一堂、置丈六五大尊、今日開眼供

寺職

養、

〔扶桑略記二十七圓融〕天元四年十二月、權大僧都餘慶任法性寺座主、于時慈覺大師門徒云、法性寺座主者、建立太政大臣貞信公、以慈覺大師門人而補任之、仍長者四代之間、奏任座主九人、他門不交、而第五長者、當時太政大臣、誤違舊蹤、以智證大師門徒餘慶奏任第十座主、仍慈覺大師門徒僧綱阿闍梨等廿二人、諸院諸寺從僧百六十餘人引率、參向關白太政大臣里第、僧從失禮、有濫吹事、因玆供奉之僧綱等召仰綱所、被停公請、其後不幾經日、權大僧都餘慶辭法性寺座主、

遣寺使

〔西宮記臨時一裏書〕康保口年六月十九日、民部卿藤原令奏定申造崇福寺使文云々、使以宣旨可仰歟、可入除目歟、尋先例。。。造法性寺使、以除目任云々、仰可勘例云、七月十四日、右大將藤原令外記有方勘申造崇福寺使任例文、申云、造法性寺使、以除目任之云々、仰以除目任、似失錯、須以宣旨可下、

雜載

〔本朝無題詩三〕法性寺翫月　同人〇中原廣俊

暇日暫辭人事譁、逢僧月下忘歸家、年々流景留難得、夜々清光惜又斜、世界三千望誤雪、生涯五十鬢添華、姮娥本自看無他、我願爭教曉漏加、

〔日本紀略一醍醐〕延長七年九月十七日癸未、右兵衞佐藤原師輔等、於法性寺賀左大臣〇忠平五十算、

〔元亨釋書二十六資治表〕久安七年七月、道皇幸法性寺、

〔明月記〕正治二年八月廿四日、未時許、參法性寺殿、令御覽歌一卷、

〔帝王編年記二十五後嵯峨〕寬元二年十二月廿九日乙未、天皇爲立春御方違、行幸禪定殿下法性寺別業、

嘉祥寺

嘉祥寺ハ、嘉祥年中文德天皇ノ其父仁明天皇ノ爲ニ建立シ給フ所ニシテ、後ニ仁和寺ノ別

院ト爲ル、宗旨ハ眞言宗ニ屬ス、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國紀伊郡深草ニ在リ、

名稱
〔伊呂波字類抄諸加寺〕嘉祥寺（格云、先帝（文德）奉爲深草天皇（仁明）所建立之内、西院建之、）

所在
〔山城名勝志十六紀伊郡〕嘉祥寺（舊跡曰、嘉祥寺畑、有號戒檀村處、又有號房瓜橋口所、安樂行院東南地也、此寺嘉祥年中草創、後世爲仁和寺別院云云、今嘉祥寺畑、眞作者多居住、）其村家中有巨松一株、土人云、是嘉祥寺鎭守社神木云、

〔仁和寺諸院家記〕嘉祥寺（深草貞觀寺西院也、仁和寺別院也、）

題耀律師（號少納言律師、入道藤通憲息、覺耀律師付法、當寺別當、）

創建沿革
〔三代實錄二清和〕貞觀元年三月十九日乙亥、大僧都傳燈大法師位眞雅抗表曰、道之極味、無勝秘藏、人之高行、在轉法輪、秘藏不直開、待緣乃開、法輪不獨轉、逢時初轉、法興道隆、其應有由、伏惟今上陛下値良因於往劫、績寶祚於今辰、聖仁攸被、無遠而不臻、佛心所加、無幽而不照、眞雅幸遇聖明之主、儻遇仁造之時、道善人勸、劾此足矣、所謂悉曇梵字者、凡聖之致父、人天之知母者也、所以學字相者、廣生世間兼智、觀字義者、深證出世妙智、似巨海呑百川、如大地載萬物、如來說法、自斯字而發、薩埵圓覺、從彼文而開、眞雅苟爲傳薪之人、何無弘法之思、待緣仰運、齡傾力衰、如今當於此際會、不畀彼心期、則俟河之清、人壽幾何、若夫嘉祥寺者、先帝（文德）奉爲深草天皇（仁明）所建立也、舊跡風流、宛然在日、伏願便於彼寺新院、永賜三人度者、敎以悉曇文相、學以梵字字義、即是聲聞之業、法文之要、是故眞言宗以此爲要道、應學法明、其類巨多、今所最要者、配於三人也、將使一人諳書大佛頂梵字、一人諳書大隨求梵字、一人諳書悉曇章梵字、亦其護身則摩尼（尼、類聚三代格作由、）之力殊高、存命則尊勝之助最深、是以莎底苾蒭、返損滅之神於明王、善住太子、延已縮之命於佛頂、極濟之功、亘億界而不竭、度脫之力、歷萬劫而無極、然即使此三人兼讀大孔雀明王經三卷、并佛頂尊勝梵字一道、每年三月上旬試定上件三人、當於今上降誕之日度之、其得度之後、爲持念之僧、住嘉祥寺西院、轉孔雀尊勝、恒護十善之鳳輿、永堅九重之寶城、特令弟子之中冠首者、永代相承行此白業、然則今上陛下、德滿乾坤、等日月保不壞之聖體於轉法

之力、擧無疆之法壽於密言之功、深草聖帝〈○仁明〉正覺之花更鮮、田邑先皇〈○文德〉無價之寶彌照、卽使世同東戶、時化南薰、天下淸平、人物安樂、詔許之、

堂塔

〔三代實錄 三十三 陽成〕元慶二年二月五日辛未、嘉祥寺申牒、請安置七僧、永爲定額、勤修御願、誓念國家、至有僧闕、寺家簡擇申官補之、又准貞觀寺、不聽僧綱攝領、但令貞觀寺座主三綱等專得撿知、勅許之、

〔文德實錄 三〕仁壽元年二月丙辰、是日移清涼殿爲嘉祥寺堂、此殿者、先皇〈○仁明〉之讌寢也、今上不忍御之、故捨爲佛堂、

〔三代實錄 四十六 光孝〕元慶八年六月廿三日壬子、勅以近江國米百五十六斛、丹波國米三百七十九斛、貞觀錢十二貫文、充嘉祥寺造五重塔料、

用途

〔延喜式 三十 大藏〕凡嘉祥寺三月十月兩度地藏悔過布施料、細屯綿廿屯、〈佛聖二座料〉布卅八端、庸布十二段、〈僧沙彌十二口春料〉絹十二疋、庸綿五十屯、布廿六端、庸布十二段、〈同僧沙彌冬料〉錢四貫文、〈二貫文二度客僧布施料、二貫文二度雜用料、〉會月以前送之、

〔延喜式 三十三 大膳〕嘉祥寺春地藏悔過料、海藻十九斤、海松九斤、凝菜二斗四升、紫菜三斤、布乃利九升六合、細昆布十六把、末醬一斗四升四合、醬八升、芥子四升八合、鹽一斗九升三合六勺、〈冬亦准之〉

〔延喜式 三十五 大炊〕嘉祥寺地藏悔過料、米二石四斗、糯米四斗六升、大豆二斗、

右每年三月十月中旬修之、其佛聖以下沙彌已上一度料、當月上旬、運送寺家、其夫申官令京職進、

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

山城國、正稅公廨各十五万束、〈○中略〉嘉祥寺料、一千七百卅六束四把、

雜載

〔文德實錄 三〕仁壽元年三月壬辰、修先皇御忌齋會於嘉祥寺、百官盡會、

〔今物語〕嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまだ若くて、病大事にてかぎりなりける比、〈○中略〉ふしぎの夢を見たりつるとて語られける、おほきなるさるの、あゐずりの水干きたるが、たてぶみた

る文を持て來つるを、人の遲く取入つるに、自ら是を取て見つれば、歌一首あり、
たのめつゝこぬ年月をかさぬればくちせぬちぎりいかゞむすばん、とありつれば、御返事に新拾
は、
心をばかけてぞたのむゆふだすき七のやしろの玉のいがきに、とかきて參らせつる也、是は
山王よりの御うたを給りて侍る也と語られければ、〇下略

名稱 所在 創建 沿革

貞觀寺

貞觀寺ハ、清和天皇降誕ノ日、其外戚藤原良房、僧眞雅ト相謀リテ建立スル所ニシテ、初ハ嘉祥寺西院ト稱シ、別ニ寺號ヲ命ゼザリシガ、貞觀四年ニ至リ、始テ貞觀寺ト號セリ、今廢寺ニシテ、舊跡ハ、山城國紀伊郡深草ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 知諸寺〕貞觀寺

〔山城名勝志 十六紀伊郡〕貞觀寺 嘉祥寺西

今、深草鄕內有僧房村、按、嘉祥寺、貞觀寺等僧房跡歟、

〔元亨釋書 二十八寺像志〕貞觀寺者、貞觀帝降誕之初、大相國忠仁公與眞雅法師謀建、護帝祚也、十六年二月二十三日、設大齋會、落慶道昌爲導師、惠達爲呪願、延諸宗碩德一百員、以備法儀、先勅王孫公子、年少童子四十人、習舞樂、至是日、兩部奮樂更舞迭出、凡樂部之舞、支那高麗諸樂、及林邑天人等舞、皆盡奏之、一時盛事、都人發瞻聽、會後一百比丘、各賜度者一人、

〔類聚三代格 四〕應改嘉祥寺年分度者、爲貞觀寺年分事
右得貞觀寺牒偁、天安三年三月十九日格偁、大僧都傳燈大法師位眞雅表偁、件年分三人、得度之後、

爲持念之僧、住嘉祥寺西院、轉孔雀尊勝、特令弟子之中貫首者、永代相承、行此白業者、右大臣宣、奉勅、宜依來表者、夫貞觀寺建立之初、未定其名、因茲假嘉祥寺年分、即號稱西院、令住度者、貞觀四年七月廿七日、應以嘉祥寺西院號貞觀寺之狀下知既訖、而年分之號仍舊不改、恐後代人、還致疑殆、望請官裁早被改定者、從三位守大納言兼左近衛大將陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、宜依件改之、

貞觀十四年七月十九日

〔三代實錄 二十五 清和〕貞觀十六年三月廿三日壬午、是日詔、於貞觀寺設太齋會、以賀道場新成也、以律師道昌爲導師、大僧都慧達爲呪願、延諸宗宿德僧百人、以備威儀、雅樂寮、唐高麗樂大安寺林邑、興福寺天人等樂交奏、○中略 其願文曰、夫貞觀寺者、先皇仁壽之初、今上降誕之日、星垂長男之光、日有重瞳之慶、故太政大臣美濃公、憂龍姿之不免在襁褓、憐鳳德之未得勝衣、○衣上下恐有誤脱、與僧正眞雅和尚、私相謀、使念諸佛之加持、修眞言之秘密、庶幾飛天景福、與日月而光華、表海元儀、感風雲而眇遠、即除荊棘、漸夷涯險、成斯堂構、爲一道場、及至貞觀之始、系統守文、悟彼遠慮深謀、斯時遂成鴻業、寢食之頃、不肯遺忘、當今無爲無事、一切不費無益國之用、一事不行有苦民之幣、往欲酬彼私志、返恕乖此公議、重思將恐之雅言、復顧棄予之風刺、即課梓匠、爰命輪材、構毗盧舍那之寶塔、造尊勝如來之金像、并立灌頂堂一宇、太政大臣、生存之日、更建一堂、奉造釋迦丈六、梵釋四王像、皇太后別立西堂、安置金剛界曼茶羅、僧正眞雅和尚、又立東堂、安置胎藏界曼茶羅、三摩地法苑、如修天上、三昧耶界、自然移於下界、始自嘉祥院之後園、今爲貞觀寺之初地、仍取其本號、爲定額名、唯有足於性者、天損不能入、貞於明者、時累不淫、故不爲勸誘者增浮華、不因諫銚者廢塗飾、歷代規謨、前王典故、非撲非剎、允執其中、所謂不誠之者、遠之則爲是、秦繆勞苦、○苦一本作若、恐有誤脱、鬼神之勤、近則爲非、漢文重中民十家之產、思茲在茲、去泰去甚、遂不施國家糜費之功、猶恐後代處利圖之罪、然而帝釋安居之化、不敢以自利爲謀、輪王精進之宮、唯斯以周施爲業、故三千世界、遠近歸依、百億群方、幽明仰慕、況乎一人有慶、兆民賴之、因此而論、不言可知、

天下黎甿、四方庶品、或竭力相持、或勞身共役、孰不進趨頼此吉祥、方今所修、雖事起于一人、而爲德及兆民矣、何折彼功方、還作斯功德、信心惟貴、非謂金銀七寶之莊嚴、明德惟馨、何必黍稷百味之供養、原野旅生之藥可施十方之僧、山林自笑之花、足供三世之佛、仍請僧徒一百人、爲今日之證者、設伎樂一兩部、代天人之妙音、先以功德上分、奉澄山陵七廟、崇之以春秋輪說、覺路先迷、敬之以伏臘牲牢、玄津晩闇不如、乘斯妙業、宜遊十地之前、託此勝因、取躋三天之上、故太政大臣、志深輔佐、念切憂勞、尊謀聖○𥥔一本作旦、恐有誤脫、不顧我生之衰耗、天不愸遺、四海相怨、次願尊彼宿因、速歸依佛部、挿覺藥而大覺、乘化達而廣化、皇太后、德懷千月、慈雲覆之彌明、功載萬方、法雷震之無動、朝廷歸依諸佛、乃父乃兄、廻向法門、或權或正、所願長期交泰、永保昇平、雨順風調、年豐歲稔、東宮被金剛之愛護、增銀牓之精華、汞福雲聚、群蘇星拱、九卿八座、內外百官、播聖德之香霖、滅世間之煩熾、一切神祇、一切靈鬼、雨師風伯、水惟山精、攝此芳緣、俱脫苦業、含生有識、或飛或沈、同嘗法味、共趣覺路、

〔三代實錄 三十五 陽成〕元慶三年正月三日癸巳、僧正法印大和尚位眞雅卒、○中略十六年、○貞觀於新造精舍設大齋會、賀道場新成也、卽便賜額、曰貞觀寺、

〔三代實錄 二十六 淸和〕貞觀十六年九月廿一日丙午、制、貞觀寺置定額僧十六口、若有闕者、申官補之、

〔新編法華靈場記 六〕墨染寺

城南伏見の里深草山墨染寺は、はじめ貞觀寺といひ侍りて、淸和天皇の御宇貞觀十六年、弘法大師の御弟眞雅法師の建立、眞言の道場なり、又當寺を墨染寺と名付る事は、是世に云、墨染櫻の舊跡なり、されば古今哀傷の部上野峯雄の歌に、

深草の野邊の櫻し心あらば此春ばかり墨染にさけ、秀吉公の命によつて、細川幽齋右の歌を書畫れし短冊、其外懷紙の類品々多し、かゝる名跡なれば、大僧都日秀聖人に御寄附ましまし、新に法花の精舍となし、たびく此寺に御成ありければ、卽制札下野守殿當寺に給ひて、尤

寺領

諸役免許の地、卽甲州身延山の末寺なり、本地貞觀舊寺は、相國忠仁公の本願たり、又墨染の改場は、秀吉公の御興起として、永代當寺に御影を納、秀賴公御筆にて、一首の歌を書置給へり、舊場貞觀寺の事、元亨釋書に見えたり、

〔三代實錄 清和七〕貞觀五年八月十五日乙亥、庶人文室宮田麻呂家十區、地十五町、水田三十五町、在近江國滋賀、栗太、野州、甲賀、蒲生、神埼、高島、坂田等郡、勅施貞觀寺、

〔三代實錄 清和八〕貞觀六年三月四日庚寅、詔以內藏寮所領、遠江國長上郡田地一百六十四町、施入貞觀寺、

〔三代實錄 清和十一〕貞觀七年九月五日癸未、勅、〇中略 伊賀國阿拜、山田、伊賀三郡田、六町九段二百八十八步、施入貞觀寺、　十四日壬辰、勅以遠江國長下郡水田十二町、施入貞觀寺、　十月廿八日丙子、勅曰、〇中略 遠江國長上郡、空閑地百六十町、施入貞觀寺、

〔三代實錄 清和十二〕貞觀八年正月廿日丁酉、勅、美濃國多藝郡、空閑地六十町、施入貞觀寺、

用途

〔延喜式 主税二十六〕凡貞觀寺佛供、幷燈油料、白米日六升、小豆日九合、油夜三合、尊勝佛、延命菩薩、聖僧、合三座料、〇中略 以山城國正稅稻交易、幷春備、每年送寺家、

〔三代實錄 陽成三十八〕元慶四年十二月四日癸未、是日申二剋、太上天皇〇清和崩於圓覺寺、時春秋三十一、〇中略 于時有僧正眞雅法師、自降誕初、侍護聖躬、奏建佛寺、額曰貞觀寺、凡厥用度、總經官家、制飾甫就、設齋供養、天皇命王公百寮行事、

寺職

〔三代實錄 清和二十九〕貞觀十八年八月廿九日癸酉、勅置貞觀寺座主、不令僧綱摂領、先是、僧正法印大和尙位眞雅奏言、貞觀寺者、今上之御願所建立也、故太政大臣忠仁公、與眞雅戮力推誠、經略修造、彫鏤莊嚴、成之不日、公家施入田園資財、安置僧十六口、令修念眞言業、今堂宇輪奐、資具既備、非有主領、誰能齊進、伏望准天台宗、特置座主、勿令僧綱摂領、其座主必簡定受學兩部大法、修練加行堪爲師範者、

三綱與俗撿按及別當共署上奏補之、若有座主幷定額僧中任僧綱者、更還本寺、不令寄住從之、

極樂寺

極樂寺ハ、藤原基經ノ創建スル所ニシテ、今廢寺タリ、舊跡ハ山城國紀伊郡極樂寺村ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 古 諸寺〕極樂寺 在觀山南之山邊

〔拾芥抄 下末 諸寺〕廿一寺

極樂寺 昭宣公、阿彌陀、

〔山城名勝志 十六 紀伊郡〕極樂寺 拾芥抄云、昭宣公、阿彌陀、深草郷内有極樂寺村、今寶塔寺門前也、稻荷與極樂寺村間有大門鐘樓等之名、又寶塔寺西南有瑞光寺、明暦元年、元政上人所創也、此地號藥師堂畑、是極樂寺藥師堂遺址也云々、

〔山州名跡志 十二 紀伊郡〕極樂寺 村名 在稻荷山南、古此地極樂寺アリシ故ニ爲地名、此寺中世改宗旨、今寶塔寺是也、

〔菅家文草 九 奏狀〕昌泰元年九月十九日左大臣 藤原時平 請欲以極樂寺爲定額寺狀

右臣亡考昭宣公、基經 占山城國宇治郡地、有意欲建立極樂寺、本尊且現、堂構未成、慕金沙以揚名、先白露而殞命、臣思述其志、八載于今、鳳刹龍街、見聞之情相感、香煙花朶、供養之法僅存、雖無莊嚴之可觀、猶是塵俗之難犯也、伏願陛下鴻慈、特廻天鑒、列之定額、將遂宿心、臣時平誠惶誠恐頓首頓首死罪死罪謹言、

昌泰二年　月　日

〔山州名跡志 十二 紀伊郡〕右 菅家文草所載文、易時平公所製菅家也、此年時平公年二十九、菅家五十六歲也、

又如文、深草古宇治郡歟、今紀伊郡也、

〔大鏡七太政大臣道長〕いづれの御時とはたしかにえきゝ侍らず、たゞふかくさ〇仁明の御ほどにやなどぞおもひやられ侍り、せりかはのみゆきせしめ給ひけるに、昭宣公〇藤原基經わらはは殿上にてつかうまつらせたまへりける、みかど琴をあそばしける、この琴ひく人は、べつのつめをつくりておよびにさし入てぞひくことにて侍りし、さてもたせ給ひけるをおとしおはしまして、大事におぼしめしけれど、又つくらせ給ふべきやうもなかりければ、さるべきにぞおぼしめしよりけん、おとなしき人々にもおほせられで、おさなくおはします君にしも、もとめてまいれとおほせられければ、御馬をうちかへしておほせられけれど、いづこをはかりとも、いかでかはたづねさせ給はん、みいでゝまいらせざらんことのいみじうおぼしめされければ、これもとめいでたらんところには、一伽藍をたてんと願じおぼして、もとめさせ給ひけるに、いできにたる所ぞかし、極樂寺はおさなき御心にいかでかおぼしめしよらせ給けん、さるべきに御つめも、おち、おさなくおはします人々もおほせられけるにこそは侍けめ、

〔本朝文粹十詩序〕冬日於極樂寺禪房同賦落葉聲如雨　慶保胤

極樂寺者、東山勝地也、寺之西北、有一仙洞、蓋象外之境、壺中之天也、中起高堂、大悲觀世音爲中尊、西置禪房、傳法阿闍梨爲本主、室巽有碧羅山、雖少而其勢如對千萬尋、山中有瀑布泉、雖細而其聲可聞一二里、水是屈曲、色即瑠璃、或流爲蜀江、紅葉浮而濯錦、或瀉爲酈谷、黃菊映而沈金、插短虹爲橋、横獨木而爲欄、此外奇巖怪石之千象萬形、靈樹異草之大躰無名、潤色庭戸、黼藻風流、土事終、景物盡焉、殆非人力、〇下略

安樂壽院

名稱所在

安樂壽院ハ、山城國紀伊郡竹田村ニ在リ、鳥羽天皇ノ創建シ給フ所ニシテ、卽チ鳥羽殿ノ遺蹟ニ係レリ、不動堂ハ、安樂壽院内ニ在リ、本尊ハ根來寺ノ僧覺鑁ノ作ニシテ、世ニ北向不動ト稱ス、

〔雍州府志五寺院〕紀伊郡　安樂壽院　在竹田、東西二門、共以丹塗之、故土人不謂寺名、直稱朱(アカ)門、本御塔向東、本尊彌陀者、傳言、春日之神作也、(中略)此院或稱上○○○菩提院云

〔山城名勝志十六紀伊郡〕安樂壽院在竹田村

礦礫集云、安樂壽院ハ、鳥羽院ノ御佛殿ナリ、本尊ハ四海不雙ノ如來ナリ、此ワタリ皆離宮ノ跡ナリ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕安樂壽院又名上菩提院　在伏見竹田　寺領五百石

鳥羽法皇建立、於此處崩御、葬尊骸於本尊臺座下、以八條女院骸葬新御堂下、坊舍十二坊、皆近臣後裔、至今無斷絶、

創建

〔安樂壽院記山城名勝志所載〕安樂壽院者、鳥羽上皇之御願也、(古者、鳥羽東殿御堂、鴨河以西鳥羽、河東竹田也、離宮殿後、此院獨在河東、故今呼爲竹田、)上皇保安四年正月二十八日、脫躧之後、居城南離宮、(號鳥羽殿)拓基摭於東隣、而創精藍、安無量壽尊、號安樂壽院、於中造五層寶塔、人呼爲本御塔、保延三年冬十月十九日落慶、覺行法親王爲導師、其塔中所安無量壽像、神人之所刻彫云、厥后相繼營立堂宇、而彌陀像九軀置院中、(今見在者、本新兩塔二像而已、)永治元年至久安三年八月十一日、慶讃諸像、四年法皇宸筆法華經盛石函、置本御塔刹柱之下、以爲寺鎭、今尙在堂下、(今無塔、就遺礎架小堂、尙呼本御塔、)皇后美福門院、(得子、法皇之妃、近衞天皇之母、權中納言藤原長實女、)皇女八條女院、(暲子、法皇第十四女、母后美福門院也、内親王直號院號之始也、)保元元年六月十一日、其剃染處離宮、同年七月二日法皇崩離宮、葬于安樂壽院、就上建塔、安彌陀像、(相傳、春日神化人所運斧云々、)今新御塔是也、(當時寶塔五級、今二層者、慶長中、豐秀賴公所修起也、)因茲號鳥羽禪定法皇、(新御塔、稱八條女院美福門院、爲本願、本御塔、法皇稱本願、)兩貴尼摸本御塔之淨規、置法侶六人、今新御塔六院是也、　佛殿、僧院、鐘樓、經

藪等、久累星紀、數歷兵燹、實地變爲租田矣、其所存者、往昔之十一而已、(故村落中、有丈六堂巷、僧坊巷名、野田中、今呼塔田、法花堂、阿彌陀堂等、皆院中諸字之遺名也、)且又如成菩提勝光明院閭剎、空爲田畝阡陌之名、

〔長秋記〕保延元年六月十八日庚申、伊與國司可參院之由有御氣色云々、仍臨曉令參、賁賢仰云、鳥羽御堂事、いつともなくて送年月、倩思無由、今年中欲供養、諸事可急催者、申云、尤可然、先問日次、可令申事由、追申云、御堂二階御佛、四面各一體可奉居也、而件御佛可作何佛哉、相具本佛阿彌陀可令作五佛歟、仰云、五佛有便宜、但申合仁和寺宮、其定可量行、又申云、供養間事、大略所令致其沙汰也、而御經事未令沙汰候、蒙仰可令下知、仰云、可用何經哉、申云、前々金字法花經一部、色紙黑字經百部、所被供養也、今度、先其定仰下、若有可被副供養之御經、追其沙汰候矣宜歟、仰云、早其定可令沙汰者、

〔元亨釋書二十六(資治表)〕天治皇帝(○崇德)

十有四年冬十月、慶安樂壽院、(○中略)

十月十九、鳥羽安樂壽院、覺行爲慶導、聽牛車、

〔百練抄六(崇德)〕保延三年十月十五日、上皇供養鳥羽東殿御堂、(安樂壽院)

〔鳥羽新御堂供養次第〕保延三年十月十五日

當日寅剋、奉居御佛、卽時二品法親王修鎭壇、(無布施)　次神分亂聲　剋限臨幸、入御之間亂聲、　次發音樂、(秋　万樂)　舞人樂人等參向、打奚婁一鼓前行、　次入御御所、　次樂人舞人入樂屋、　次院司公卿奉仰、令打衆僧集會鐘、　次衆僧著集會幄、威從召計之、　次公卿豫被候御堂北庇、　次非參議院司奉仰召公卿、　次公卿著御堂東西座、　次左右亂聲　次振桙、先左次右、　左右共一節、(○中略)　次敷莚道、　次執蓋參進　次諸僧退去、樂人發樂、(宗明樂)　次撤供養法壇前机供香花、被始所作、兼被相定供僧、　次還御

〔山州名跡志十一(紀伊郡)〕安樂壽院　在竹田　境地東面　宗旨　眞言(宗派古義新義、隨意修學、)

門在東北　當院、初鳥羽上皇ノ離宮ノ地ナルヲ、保安四年ニ改メテ爲寺、五層寶塔ヲ造ツテ爲地鎭、〇中略

堂東向　始五重塔也、今猶號本御塔、

本尊阿彌陀佛、座像、二尺四五寸許、安厨子、　神明化現シテ造リ玉ヘリ、委有傳記、胸ニ卍字アリ、號卍字阿彌陀、〇中略

新御塔　右卯辰間西向　此堂古五重塔也、後世堂ニ改ルト云ヘドモ、用舊號ナリ、傳曰、此所始塔九所ニ在リ、舊地不詳、　本尊　十一面觀音立像三尺四五寸許、安厨子、　作　弘法大師　脇壇右鳥羽院宸影、左美福門院、　八條女院、裝束、五重共、畫圖筆者不詳、　同御自筆ノ影兩幅アリ、納藏、

〔長秋記〕保延元年五月七日己卯、申刻、召具大工季貞參白河殿、只今自法勝寺還御、以師行申鳥羽御堂事、

一御堂高難事、尤有其謂、但是者二階層高故、以菩薩像爲立柱中也、如普通立柱外、二階層一尺餘切縮事極安、仰云、菩薩以立柱中可爲最吉之由、前大相國藤原忠實ナドモ所被申也者、向鳥羽、以立菩薩隨體可仰一定、又申云、凡御堂高事者、自上長押下、御佛爲恐可見定令造故也、是於御堂中令奉見御時、至天蓋無隱可令顯料也、而其事不可然者、切御堂事可安、只可隨御定、仰云、如然雜事行向可令沙汰也、凡者有事煩者不可直之由所令存也、又申云、於廻廊一定可切候也、其故、組物二重一定可取也、工支度損由所令申也、仰云、切廊事有煩之由少工等所令申也、而大工申此旨、然者早可切也、又申云、樓不可候者造廻廻廊開中可度橋歟、仰云、樓事、衆人可在吉事由所令申也、然而爲省後修理、只此定可造留也、其由仰大工畢、愚案、廻廊此定造留者如平履歟、但不可申左右也、

〔中右記〕嘉承三年〇天仁元年六月三日壬午、曉、法王〇鳥羽有御幸鳥羽、仍參入、左衞門督以下公卿八人、殿上人卅人許前驅、卯時許出御、先御于鳥羽東殿御覽可被立御塔之所、林中全無眺望之所、大略有深御塵所被立歟、播磨守基隆朝

臣奉之、其後入御于北殿、　辰剋許、與左大辨同車歸洛、

天永三年十二月十九日壬寅、今日法皇（○白河）被供養鳥羽新造御塔、（多寶塔一基、御院廳、此十月以後被造立也、行事邦宗、與本院塔合巳成三基也、）依有行幸、辰剋許、著束帶參院、攝政殿（○藤原忠實）内府、（○源雅實）右大將、（○藤原家忠）以下、上達部十六人、殿上人四十人許前驅、殿下御車、巳剋出御、從大炊殿北門、經萬利小路、二條、東洞院、五條、大宮、七條、朱雀等大路、到鳥羽東御所御塔之下、寄御車於塔東面、（母屋東假庇爲御所也）　同壇上南西敷高麗端疊、爲公卿座、殿上以下人々參上、民部卿被參此處、（人々解似）壇下南北庭敷筵道、爲僧昇道、午剋、法印權大僧都寬助率讃衆十二人參上、（此中、僧綱二人、權少僧都嚴覺、權律師尋譽、但納衆六人、甲衆六人、有執蓋、不乘輿、）塔中立經机、置壽命經、五位殿上人爲堂童子、有御誦經、付眞言之奥義、設供養之齋筵、未剋事了、内大臣以下上達部取被物、殿上人取布施、事了渡御北殿北御所、供腋御膳、殿下於御直廬聊有御儲、此間上達部候殿上、申剋還御、乘燭以前著御本御所、人々退出、

〔百練抄五鳥羽〕天仁二年八月十八日、太上皇（○白河）供養鳥羽御塔、

〔百練抄六崇德〕天承元年七月八日、鳥羽殿泉殿内九體阿彌陀堂供養、件堂白河院昇霞、三條御所西對也、御平生所被造立之九體阿彌陀佛奉安置之、　九日、白河院御骨、自香隆寺奉渡鳥羽殿三重塔、是御平生叡慮也、

保延五年二月廿二日、上皇供養鳥羽東殿三重御塔、（右兵衞督家成卿造進之、爲御萬歲也、）

〔安樂壽院記（山城名勝志所載）〕十二坊舍者、兵亂荒涼之後、縮移伽藍磨滅之地、故極狹隘、此之由也、

〔後愚昧記〕貞治二年六月廿日戊午、今日早旦、侍所率軍勢發向鳥羽云々、公文舍宅幷在家等燒拂了、尋事起、去十四日、久我（右府管領地）住人寄于鳥羽、鳥羽勸願寺在家等燒拂之、及合戰、（○中略）依之、右府（○源通相）欝訴之間、自武家所差遣侍所也云々、於鳥羽者、勅願寺以下被燒拂了、

〔安樂壽院文書〕鳥羽安樂壽院事、今度、依不慮之猛火令回祿云々、爲國家太以不可然、不日成經營之

功、然者彼寺領播磨國石造庄、近年有名無實之由、言語道斷次第也、此砌將類致嚴重沙汰者、可爲神妙趣、爲衆中堅可加下知之由天氣如此、悉之以狀、

天文十七年十一月卅日　左中辨花押

安樂壽院衆僧中

〔安樂壽院文書〕山城國竹田內五百石事、全可有寺納候也、

天正十三〇此四字似追書

十一月廿一日　秀吉花押

安樂壽院

〔鹿王院文書一〕安樂壽院領、越中國日並庄、爲授衣御布施、永代令寄進金剛院候、可令永領給候也、恐恐謹言、

十月廿七日　滿仁花押

春屋上人侍者

〔和漢三才圖會七十二末山城〕安樂壽院又名上菩提院　在伏見竹田　寺領五百石

〔山城名勝志十六紀伊郡〕不動堂在安樂壽院南

安樂壽院記云、初法皇〇鳥羽師敬根來錢上人、安樂壽院成後、爲營別院安樂壽中、寓錢公、稱傳法院、土俗謬呼、今爲賢法院、錢公嘗手刻不動像、長丈餘以爲王城之鎭護、像面北向、俗呼北向不動是也、

〔百練抄七近衞〕久壽二年二月廿七日、鳥羽安樂壽院中不動堂供養、御幸

〔山城名勝志十六紀伊郡〕鳥羽院御在所今云奥坊

安樂壽院記云、院之一隅別置律寺、號淸淨寺、近世移遺趾、爲一小坊、今奥坊是也、

〔帝王編年記二十一後白河〕保元元年七月二日辛巳、中時法皇崩御於鳥羽殿、御年五十四、即夜奉渡安樂壽

院御塔、擬山陵也、號鳥羽院、

〔愚管抄　四〕さて七月（○保元元年）二日、御支度のごとく、鳥羽殿に安樂壽院とて、御終焉の御所まおかせ給たりけるにて、うせさせ給にけり、（○鳥羽）その時、新院（○崇德）まいらせたまひたりけれども、内へ入まいらする人だにもなかりければ、はらだちて、鳥羽の南殿の人もなき所へ、御幸の御車ちらしておはしましけるに、まさしき法皇の御閉眼のときなれば、馬車さわぎあふに、勝光明院の前のほどにて、親範が十七八才のほどの範家が子にて、勘解由次官になされてめし遣けるが、まいりあひたりけるを、うたせ給ひけるほどに、目をうちつぶされたりとのゝしりける、

〔明月記〕建永元年七月二日辛巳、參鳥羽（安樂壽院）小時被始講筵、

〔百練抄　十四〕天福元年三月七日辛亥、今夜、群盜亂入鳥羽安樂壽院法華堂、搜取銀御塔幷種々寶物云々、鳥羽院御自今獻給常燈消畢、

○按ズルニ、安樂壽院ノ事ハ、帝王部山陵上篇陵地條ニモアリ、

城南寺

名勝所在

城南寺ハ、山城國紀伊郡鳥羽ニ在リ、卽チ鳥羽殿ノ遺趾ナリ、

〔拾芥抄　下本諸寺〕城南寺（鳥羽）

〔書言字考節用集　二乾坤〕城南離宮（セイナンノリキウ）（在城州鳥羽、則上皇寢居之處、）

雜載

〔山槐記〕保元四年二月十三日戊戌、午剋著束帶（帶劍）參千。體。新。阿。彌。陀。堂。今日供養習禮也、先參院、次參御堂也、此堂者先年亂逆之時、讃岐院（○崇德）出城南宮構鳥合陣之地也、然官軍放火、彼御所燒失畢、令課太宰大貳淸盛朝臣所被建立也、佛者鳥羽院御平生之時令造立給、未被建立御堂崩御了、三尺彌

陀也、御周忌之間、人々爲御追善造加、仍其數餘于千體、仍所殘美福門院有御沙汰被安置云々、清盛朝臣侍等拂拭堂中、右中辨親範勤行此事、

〔明月記〕建仁二年五月廿六日、日入之間、御供參鳥羽、于時漸秉燭、御城南寺云々、良久亥時許出御二棟、建永元年八月三日、御幸城南寺、仍自金剛心院前、與實俊侍從參儲、入御馬場殿、　八日、出御城南寺、鳥合、予〇藤原定家所進一勝、存外勞飼、明日可進由有仰、　九日、午時參城南寺、相具鷂、出御之後小々被合鳥、

〔本朝世紀〕康治元年九月廿三日壬子、鳥羽城南寺祭也、兩院〇鳥羽、崇德、臨幸、有競馬事、五番仁平元年九月廿三日庚申、今日兩院幸鳥羽馬場殿、被行七番競馬事、依城南寺祭也云々、　二年九月廿七日戊午、今日、鳥羽城南寺祭、仍上皇御馬場殿覽競馬、六番

〔山槐記〕永曆元年九月廿日、今日城南寺祭也、競馬左方事可奉行之由、先日以家明朝臣有院宣、仍兼日相催念人、昔立下給也、受領宛乘尻、裝束已上皆悉又相具、鑭頭衣、卯刻可參之由、消息催之、付右衛門權佐時忠所申散狀也、早旦可有御幸云々、

證金剛院

證金剛院ハ、山城國紀伊郡鳥羽ニ在リ、即チ鳥羽殿ノ遺蹟ニシテ、康和年中、白河上皇ノ其御所在ヲ捨テヽ、創建シ給フ所ナリ、

〔拾芥抄〕下本諸寺 證金剛院鳥羽殿

〔山城名勝志〕十六紀伊郡 證金剛院拾芥抄云、鳥羽殿、夜鶴庭訓抄云、額俊房、色紙形御堂、

〔帝王編年紀〕十九堀河 康和三年三月十日、太上法皇〇白河御願證金剛院供養、導師顯俊　同廿九日密供養、賴堀

名稱　所在　創建　雜載

川左大臣(後房公)色紙形中御堂、

〔百練抄(五堀河)〕康和三年三月廿九日、法皇(○白河)供養鳥羽御堂、(證金剛院)　四月廿四日、行幸鳥羽、翌日以御船渡御上皇(○白河)御所、覽新御堂、

〔本朝續文粹(十三願文)〕白河法皇八幡一切經供養願文　敦光朝臣

敬白(○中略)又帝都之南有一仙洞、林池幽深、風流勝絕、其中新建立道場、號證金剛院、安丈六彌陀佛、又造塔婆三基、其中三重塔一基、安金字紺紙妙法蓮華經、(○中略)

大治三年十月廿二日

成菩提院

成菩提院ハ、山城國紀伊郡鳥羽ニ在リ、卽チ鳥羽殿ノ遺蹟ニシテ、原ト白河天皇ノ御在所ナリシヲ、天皇ノ崩ジ給フヤ、此ニ葬リ奉リテ寺ト爲シタルナリ、尙ホ帝王部山陵篇ヲ參看スベシ、

〔山城名勝志(十六紀伊郡)〕成菩提院(拾芥抄云、美福門院御在所、明月記云、鳥羽西北、)

〔長秋記〕天承元年七月八日壬寅、鳥羽家殿跡御堂供養也、件御堂、元三條殿西對、故院(○白河)御所也、而運渡、忠盛朝臣奉上皇(○鳥羽)仰、自去月所造營也、不日功成、今日供養、

〔本朝世紀〕康治二年三月十六日癸酉、法皇(○鳥羽)於鳥羽成菩提院被修御八講、限以五箇日、爲白川上皇御菩提也、上皇幷待賢門院同有臨幸、攝政以下諸卿參入、式部大輔藤敦光朝臣仰御願文、院宮幷公卿侍臣等各被獻捧物、

〔保元物語(上)〕法皇崩御事

同〇保元元年 六月十三日、美福門院鳥羽ノ成菩提院御所ニテ、御カザリヲロサセ給、現世後生ヲ懇進サセ給フ、近衞院モ先立給ヌ、又偕老同穴ノ御契淺カラザリシ法皇モ、御惱重ラセ給フ御歎ノ餘ニ、思召立トゾ聞ヘシ、

〔吉記〕壽永二年六月廿一日甲寅、被立山陵使、〇中略 成菩提院、（白川院）安樂壽院、（鳥羽院）

勝光明院

勝光明院ハ、山城國紀伊郡鳥羽ニ在リ、即チ鳥羽殿ノ遺蹟ニシテ、保延二年、鳥羽天皇ノ創建シ給フ所ナリ、

〔拾芥抄〕（下本諸寺）勝光明院（鳥羽殿、保延二三廿三供養、行幸、）

〔山城名勝志〕（十六紀伊郡）勝光明院（拾芥抄云、保延二三廿三、供養行幸、鳥羽御堂、）

〔百練抄〕（六崇德）保延二年三月廿三日、上皇〇鳥羽 供養鳥羽勝光明院、（行幸）

〔元亨釋書〕（二十六資治表）天治皇帝〇崇德 十有三年春三月、〇保延二年 慶勝光明院、天皇幸之、夏秋多

保延二年三月二十三日、慶鳥羽勝光明院、導師忠尋、呪願覺猷、帝及太上皇、六宮下司皆預會、

〔本朝續文粹〕（十三願文）鳥羽勝光明院供養　　敦光朝臣

敬白

建立瓦葺二階一間四面堂一宇、奉安置金色一丈六尺阿彌陀如來像一體、光中雕刻大日如來像一體、十二光佛、廿五菩薩像、鏡面書寫梵字阿彌陀小呪一遍、天蓋頂飛天像八體、

四柱圖繪胎藏金剛兩部諸尊像、

續載

四面扉圖繪極樂九品往生幷迎攝儀式、

四面廂造顯二尺五寸普賢菩薩、文珠師利菩薩、虛空藏菩薩、彌勒菩薩、地藏菩薩、海惠菩薩、維摩居士等像各一體、二尺諸大菩薩、及天龍八部像二百二十三體、佛後壁表裏、圖繪廿五菩薩像幷極樂九品變像、二階上安置金色七尺五寸金剛法利因語等菩薩像、彩色四尺五寸伎樂菩薩像卅二體、

奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部、無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經等各一卷、墨字色紙妙法蓮華經百部、無量義經、觀普賢經、阿彌陀經、般若心經各百卷、

右九重城南萬年縣裏、築山以擬姑射、貯水以摸昆明、蓋是往日經始之離宮、今時延覽之勝境也、東方十州之深洞縮風流於其中、西伯百里之芳園積道德於其處、弟子傳至斯地、歲月久焉、林泉之景色雖舊、春秋之叡賞惟新、但遜讓之後、幽閑爲先、燕宋綦鄭之音不欲聽、魚龍爵鳥之玩不欲觀、以讃佛乘爲多年之精勤、以轉法輪爲累日之惠業、方今就其勝絕之名區、起以莊嚴之梵宇、彌陀尊佛座于中央、菩薩聖象侍于左右、七寶嚴飾五彩彰施、況復前池泓澄以遶砌、重閣穹隆以臨崖、繡甍高聳半天之勢插雲、瓊戶斜排滿月之容瀉水、碧潭倒軒檻之影、素瀨變金玉之輝、遂使浴禽翻翻、忽假定惠之翅、潛鱗游泳、暗動出離之心、可謂仁風被于品物、惠澤洽于昆虫者歟、〇中略寰海之中外靜謐、州閭之遠近豐穰、乃至三界六趣、一切衆生、可以脫昏衢之嶮難、可以免苦海之沈溺、同嘗法味、共遊覺苑、稽首合掌、敬白、

保延二年三月廿三日

〔百練抄六崇德〕保延四年六月二十四日、勝光明院池、有一莖二花嘉蓮、

〔本朝世紀〕久安二年八月廿三日庚申、是日、法皇〇鳥羽御覽鳥羽勝光明院寶藏所納寶物、即有被書目錄事、件目錄、先年白河御所炎上之時燒失也、顯密之聖敎、古今之典籍、道具書法、弓劒管絃之類、皆是往代之重寶也、

〔古今著聞集五和歌〕久壽元年二月十五日、法皇〇鳥羽美福門院御同車にて、鳥羽の東殿より勝光明院

へ御幸有て、庭の櫻を御覽せられけり、先阿彌陀講を修せられける、法皇少納言入道信西を御使にて、御歌を内大臣新大納言等に給はせけり、檀紙に書てさくらの枝に付られたり、

古事類苑

宗教部五十一

佛教五十一

元慶寺

元慶寺ハ、山城國宇治郡北花山ニ在リ、陽成天皇降誕ノ時、母后藤原高子ノ創建スル所ニシテ、元慶元年堂宇漸ク成リ、定額ト爲ル、仍テ元慶ヲ寺號トス、又此寺花山ニ在ルヲ以テ、世ニ花山寺トモ稱ス、後世禪僧愚堂之ヲ中興シ、禪刹ト爲ス、

〔伊呂波字類抄〔久諸寺〕〕元慶(クワンキヤウ)寺

〔拾芥抄〔下諸寺本〕〕十五大寺

元慶寺〔中略〕〇謂之廿五大寺也、

〇按ズルニ、元慶寺ハ、拾芥抄ノ右ノ文ノ次ニアル二十一寺ノ内ニモ見エタリ、

〔雍州府志〔五寺院〕〕宇治郡　元慶寺。。。　在北華山、本尊藥師、而元爲天台宗、今眞言宗也、僧良峯宗貞、一旦剃髮爲僧、住斯寺、終爲僧正、所謂僧正遍昭是也、其木像于今存、或言所自作也、華山寺。。。　在同處、或號慈德寺、又稱東山寺、　花山院竊出禁闕、先赴此寺、近世妙心寺愚堂和尙再興之、

〔山城名勝志〔十七宇治郡〕〕元慶寺（今北花山村、從道北小堂殘、號元慶寺、本尊藥師佛、遍昭僧正像等見在、古地勢道北山際有、呼寺內、由至于今所々殘礎石、土人云、此村氏社、六所明神元慶寺鎭守云云、）

〔和漢三才圖會〔七十二末山城〕〕花山寺。。。　在花山　〔禪〕

花山法皇寛和二年於當寺落飾、　中興愚堂和尙

〔拾遺抄註〕花山ハ山階ニアリ、元慶寺ト云御寺タチラレタリ、花山院ハ彼寺ニ御幸アリテ御出家アリ、仍號花山法皇、後ニ京ニ御座御所ヲ花山院ト號ナリ、遍昭僧正モ住彼寺、仍號花山僧正ナリ、但彼臨幸ハ非法皇御時歟、彼僧正、寛平二年入滅之故ナリ、

創建
寺格

〔類聚三代格 四〕太政官符

應以元慶寺爲定額置年分度者三人事

大悲胎藏業一人　金剛頂業一人　摩訶心觀業一人

右法眼和尙位遍照上表偁、此寺中宮〇藤原高子清和后有身之日、今上〇陽成降誕之時、至心發願、始以草創、自後堂宇漸構、佛像新成、見聞隨喜、道場正備、夫增寶祚於長代、眞言之力也、消禍胎於未萌、止觀之道也、是以奉祈仙齡、以此冥助、修練之誠年月差積、方今皇基肇開、万物荷慶、道之將隆、幸遇此時、謹檢案內、依去天安三年三月十九日、貞觀元年四月十八日格、嘉祥安祥兩寺、各置三人年分、望請准彼二寺、賜件年分、遠傳兩宗之玄敎、永爲國家之鎭護、其誠業經書等、一准天台宗年分、每年十二月上旬、特請勅使、對讀課試、通五以上、以爲及第、卽當今上降誕之日、剃頭得度、但受戒之儀、於延曆寺戒壇令受菩薩大乘戒、受戒之後、更歸本寺、於五大菩薩前、使止觀業者轉讀仁王般若經、眞言業者三時念持不斷、又爲定額寺、彌增興隆、上奮護聖朝、下福利億兆者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使源朝臣多宜、奉勅、宜依來表、

元慶元年十二月九日

雜載

〔扶桑略記 二十二宇多〕寛平二年正月廿日丁未、大臣奏云、華山僧正〇遍昭昨夜入滅、此僧正殊事先帝、又殊仕當代云々、有賜勅使之例、遣少納言若殿上侍臣等弔弟子、或有給物等之迹、〇中略廿一日戊申、詔遣少納言從五位上令扶於元慶寺、弔故僧正遍昭遺室、幷捨綿三百屯、調布百五十端、令修諷誦、

〔菅家文草 七銘〕元慶寺鐘銘一首 幷序

此寺之有此鐘、弘誓甚深、至心無等、元胎發願、過其人之聞八萬歳、九乳懇誠、待彼力之及三千界、是故日融內應、霜氣外催、皇帝馭曆之四歳己亥月建庚午八日丁酉、金火用事、冶鑄施功、謹譔群也、唱梵音也、欲使有緣行道之徒、覩主漏以知警誡、無明受若之宅、遂梱風以證菩提、如是功德、不可思量、國土衆生、同大歡喜、乃有勅勒銘、曰、〇銘略

〔帝王編年記 十七花山〕寛和二年六月廿二日、夜半偷出鳳闕、向華山寺出家、御年十九、法名入覺

〔大鏡 一花山〕永觀二年甲申八月廿八日、位につかせ給ふ、御歳十七、寛和二年丙戌六月廿二日の夜、あさましく候し事は、人にもしられさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ、御とし十九、よをたもたせたまふ事二年、其後廿二年はおはしましき、〇中略花山寺におはしましつきて、御ぐしおろさせ給ひてのちにぞ、あはだ殿〇藤原道兼はまかりいで丶、おとどにもかはらぬすがた、今一度見え、かくとあんないも申て、かならずまいり侍らんと申給ひければ、〇中略あはれにかなしきことなりな、

〔愚管抄 三〕さて花山といふは、元慶寺にて御ぐしをろされにければ、やがてみちかねも出家せんずとおぼしめしけるを、なく〳〵今一どおやをみ候はゞや、わがすがたをも一ど見えさぶらはばや、さ候はずば不孝の身になり候はゞ、三寶もあしとやおぼしめすべく候らん、君の御出家とうけ給候はば、道兼をとむることとさぶらふまじ、

安祥寺

安祥寺ハ、山城國宇治郡山科ニ在リ、仁壽年中、文德天皇ノ御母藤原順子ノ建立スル所ニシ

名稱所在　創建沿革　堂塔

ヲ、齊衡二年定額ニ預ル、

〔拾芥抄〈下本諸寺〉〕安祥寺〈五大虛空藏、大后順子、〉

〔雍州府志〈五寺院〉〕宇治郡　安祥寺　號吉祥山、仁明天皇妃、五條后順子之所建也、弘法眞雅兩開山、而眞雅修大元法處也、本尊十一面觀音、有長八尺、鎭守日吉稻荷兩神也、庭有靑龍水、又有宗叡惠運之昭堂、一坊纔存、高野山實性院知寺事、一說、此寺始在東山如意嶽壇谷、慶長年中、移今十二所權現山云、古來迎寺大立寺等在斯邊、

〔山城名勝志〈十七宇治郡〉〕安祥寺〈在御廟野東、諸羽明神西、號吉祥山、今高野山實性院兼帶之、〉

實性院宥快傳云、永和三年、謁興雅僧正於安祥寺、咨印入唐惠運僧都一流之淵源、僧正喜其器宇、傾誠附與、故安祥之正統、而歸實性、

古文書云、安祥寺賢聖會田東一段者、故行賢法印、相副證狀四通、限未來際、奉寄進御坊者也、

〈今有觀音堂、十一面像長八尺、傳云、此堂元在如意山壇谷、是眞言傳相上寺乎、慶長年中、遷此地云云、故至如意山邊、當寺境內也、○中略〉

寛正三六月十五日　榮藝〈判〉

密乘院御房

〔國花萬葉記〈二上山城〉〕吉祥山安祥寺〈眞言、山科ニ在、〉　仁明天皇の后順子之建立也、〈開山〉弘法大師、同眞雅僧正兩師也、本尊ハ十一面觀音、〈長八尺〉鎭守日吉稻荷の兩神也、庭に靑龍各有、又宗叡惠運の昭堂有、今一坊纔に殘れり、

〔三代實錄〈二十淸和〉〕貞觀十三年九月廿八日辛丑、天安二年八月乙卯、文德天皇崩、后哀慟柴毀、後遂爲尼、〇中略后貞固、天禮則備、母儀之範、永古少比、深信釋敎、建立精舍、額曰安祥寺、資財田園、割給甚多、年分度者、修大乘道焉、

〔安祥寺資財帳〕堂院　禮佛堂一間〈長五丈〉　五大堂一間〈長四丈〉　佛頂尊勝陀羅尼所重一臺〈廣〉

惠蕚大法師所建　寶幢二基〈各高四丈一尺、太皇大后御願〉　金銅惠蕚獻頂

寺格

僧房東房二間 一檜皮葺各長一丈 一板葺二面有庇 西房二間 一檜皮葺各長七丈 一板葺二面有庇

〔文德實錄 七〕齊衡二年六月戊寅朔日、詔以安祥寺預於定額、施稻一千束、以充燈油、

寺領

〔文德實錄 八〕齊衡三年十月辛卯、以山城國宇治郡粟田山、施入安祥寺、

〔安祥寺資財帳〕山五十町 四至 東限大槻大谷、西限堺峯、南限山陵、北限檜尾古寺、所在山城國宇治郡餘戶鄉北方、安祥寺上寺在其裏、建立已後經九箇年、至齊衡三年 歲次丙子 冬十月、太皇太后宮 〇藤原順子 買上件山、施入於安祥寺、

什物

〔安祥寺資財帳〕佛菩薩像

毗盧遮那佛像壹軀　阿閦佛像壹軀　寶生佛像壹軀　觀自在王佛像壹軀　不空成就佛像壹軀　右五佛金押 〇中略

道具　三股金剛杵四口 唐　獨股金剛杵二口 唐　三股金剛鈴三口 一唐一小　五股金剛鈴二口 唐小

五色螺子二口　金銅護摩杓三具 各法杓　金剛輪二口　金剛橛四枚 油拔木、安佛舍利、　金剛酌杓二支

泥塔銅印子幷模四具　雙天像一對　熟銅多羅一合 〇中略　船二艘 一艘廿斛 一艘十五斛 在大津 在同崖津

灌頂壇具　蓋二具 一緋綾 一紫綾　大花王座二具 紺 赤兩面綾　覆面緋褶一條　帶廿條 長紫

寶緋、各長六尺 廣四寸、懸幡料、

說法具　經臺 漆泥 金裝　漆泥高座一具 金銅亂香　漆泥盤一合 金　白蓋一合 骨八枚、平文總組入八條、緋綱二

條、　般敷二條　金銅幡八流　半疊四枚　右太皇太后宮施入 [illegible]　如意二柄 印　鹿毛一文

納匣　安机一基

莊嚴供養具　五層圓灌頂二流　有金銀裝鎮二枚 各着鈴三口、五色絲綱二條、各長十一丈、　金裝竿二柄各有袋　右

太皇太后宮施入 〇中略

夫三寶物者、互用之過惟深、故寶印經云、佛法二物不得用、又云、佛塔有物、乃至一傘已上、以施主重心、故捨於此物、中應生塔想佛想、乃至風吹爛壞、不得貿賣、供養以如來塔物、無人作價也、〇中略

貞觀九年丁亥歳次六月十一日　少僧都法眼和尚位惠運

用途

〔延喜式 三十三 大膳〕安祥寺、試年分度者、證師六人菜料、醬一升、醬滓四升、滓醬四升、和布三連、鹽三升、使料滓醬二升、醬滓二升、和布二連、荒布一束、鹽一升、

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻　土佐國〇中略 修理安祥寺寶塔料五千束、

寺職

〔元亨釋書 十六 力遊〕釋惠運、洛城人、東寺實惠之徒也、承和五年、共圓仁師、同舟入唐、十四年歸、爲安祥寺第一世、貞觀十三年九月卒、年七十四、

〔類聚三代格 四〕太政官符

應得度安祥寺年分者三人事

試經論

大孔雀明王經一部三卷　大佛頂眞言一通　大隨求眞言一通　菩提心論一通

右件經論等、度者須先依眞言宗講習、而後讀他經論、

妙法蓮華經一部八卷　金光明最勝王經一部十卷

右件經、度者須先習自宗、而後兼學、但其論疏通、於七宗之中、任度者之意、其課試之法、各依所兼之宗本法、複試竪義、亦復如是、

以前得彼寺牒偁、皇太后宮〇中略 御願、去仁壽年中、初建此伽藍、所願每年度此三人、代身修道、將除三毒、夫眞言敎門、諸法之肝心、如來之祕要、凡在佛子、必可修習、仍課度者、以爲自宗、自餘七宗、皆爲兼學、度者必須兼學一宗、立此兼濟之道、示彼不別之心、仍試度之後、〇七年之間、不聽出山、專勤精進、晝則講所兼之經論、夜則念所宗之經呪、又令此度者每年相次、夏中三月、講演法花、最勝仁王等經、其講師

者、寺家簡定、牒送綱所、將令宛行、但法花最勝、年々相替、令講一部、至仁王經、毎年加講、住山限滿、當行利他、須准新藥、弘福、法隆、崇福等寺之例、預維摩最勝會竪義之列、其年次者在崇福寺下、但複以下之業、本寺據例課試、又毎年至八月、起廿一日盡廿七日、合七箇日、殊奉為田邑天皇〇文德、令修尊勝法、凡厥試度之事、令權律師傳燈大法師位惠運、專一勾當、師資相傳、不關別人、其行事者、一任寺記、若有臨時、應以俗為勾當者、專依寺家所請、不更雜用他人、先帝平生之日、具狀奏聞、許可已畢、未及施行、請也下知彼寺及所司、俾勤遵行、勿致違乖者、右大臣〇藤原良相宣、奉勅、依御願、

貞觀元年四月十八日

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應毎年請用維摩最勝兩會聽衆幷竪義者各一人事

右得安祥寺牒偁、皇太后宮御願偁、安祥寺可毎年度三僧、以安居講經、擇用維摩最勝兩會聽衆幷竪義之狀、奏聞先畢、因茲去貞觀元年四月十八日、十二月廿五日、兩度官符、被下所司、然此寺有求道僧、專事修學、是則七大寺諸宗之僧也、雖名編本寺、而身住此寺、是以從去仁壽元年、于今十有餘歲、御願之事、令此黨修、後學之輩、相就為師、既是有勞、何不薦擧、仍須維摩最勝兩會聽衆幷竪義各預一人、但年分度者、住山之後、經七箇年者預竪義、經十三年者預聽衆、本寺毎年選定其人、牒送綱所、永令請用、自餘庶事、一如先符者、右大臣宣、奉勅、依御願、

貞觀三年四月十三日

太政官符

應預正月御齋會聽衆安祥寺僧事

右撿案內、件寺、先太皇太后宮〇藤原順子仁明皇后御願建立也、初從去貞觀三年、至于同十四年十二月、幷十二箇年、以彼寺僧二口預件會聽衆、積年流傳、既為恒例、而僧綱去今兩年、或稱不入式、或稱宣旨遲到、

雜載

頻煩執中、棄而不預、論之物情、誠非穩便、右大臣宣、件事行來、既歷多年、豈有謏土未乾、速改先例乎、臣子之義、誠所可耻也、宜依舊令預、

貞觀十六年二月十七日

〔元亨釋書十七雜〕讚州刺史高公輔、幼薙髮於慈覺之室、法名湛慶、有義學名、然傳戒捡反俗、仕到于侯牧、俗號高大夫、于時都城多怪、勅太史卜、奏曰、王城東南古寺佛像亂階、故有此怪、官使物色東山安祥寺、大殿安兩界諸尊、歲久傾斜差升、詔公輔整理、公輔向寺入殿、坐一席、以白杖指揮曰、其像移某處、諸像自起、隨杖居各位、無少錯誤、輦下嘆舊感之不失、

〔伊勢物語下〕むかし田村のみかどゝ申すみかどおはしましけり、其時の女御たかきこと申すみまそかりけり、それうせ給ひて、安祥寺にてみわざしけり、人々さゝげ物奉りけり、奉りあつめたる物、ちさゝげばかり有、そこばくのさゝげ物を、木のえだにつけて、どうのまへに立たれば、山もさらに、だうのまへにうごき出たるやうになん見へける、それを右大將にいまそかりけるふぢはらの常行と申すいまそかりて、かうのをはるほどに、歌よむ人々をめしあつめて、けふのみわざを題にて、春の心ばへある歌奉らせ給ふ、右のむまのかみ成けるおきな、めはたがひながらよみける、

山のみなうつりてけふにあふことははるのわかれをとふとなるべし

〔續門葉和歌集九雜〕安祥寺に閑居して、年をかさね侍りける時、　法印親瑜

老が身によのうきごとのなぐさむはいまいく程とおもふばかりに

毘沙門堂

名稱所在

毘沙門堂ハ、山城國宇治郡山科村ニ在リ、平等、尊重、護法ノ三廢寺ヲ合シテ、京都出雲路ノ地ニ創建セシモノニシテ、中世久シク廢絶セシヲ、寛文五年、天台ノ僧公海、此ヲ今ノ地ニ再興シテ、叡山諸門跡ノ一トセシモノナリ、

〔雍州府志（五寺院）〕宇治郡　毘沙門堂　寛文年中、門主公海僧正再興之、有五百七十石之寺產、此地元爲禁裏之御領地、賜之使爲寺、外擇地爲禁裏之御領也、

〔山城名勝志（十七宇治郡）〕毘沙門堂（元在洛北出雲路、寛文年中、門主公宗（宗悉海誤）僧正、於山科安祥寺東被再興也、）

〔山城名勝志（二洛陽）〕毘沙門堂（按、今塔壇内有毘沙門町、南北二町、是其舊蹟歟、世ニ毘沙門ノ花盛ト謂フハ、此寺ノ事也、寛文年中、門主公海僧正於北山科地被再興、塔壇者、相國寺大塔、在富小路東毘沙門堂南、載于蔭凉記、其蹟也、）

〔塞壒嘶餘〕毘沙門堂殿、在于相國寺東、

〔和漢三才圖會（七十二末山城）〕毘沙門堂　在山科　寺領五百七十石

寛文年中建立、開山花山院大僧正公海、（後陽成王子）　初在相國寺塔之壇毘沙門町、故名、後移于此、

創建

〔毘沙門堂記錄（山城名勝志所載）〕平等尊重護法寺等事

平等寺、（葛原親王建立、元在廣隆寺西、）其寺燒失之後、於舊跡者、廣隆寺領之、圓智以彼本尊、奉居當寺、寺領（紀伊國石垣庄）

尊重寺、（曩祖平宰相親信卿、元在五辻、親信高棟五代孫參議從二位、）建立其寺、顚倒之後、舊跡今者院御領也、圓智以彼本佛、奉渡大原、而其後亦建立當寺、奉請之、寺領、（安藝國吉茂庄、加賀國能美庄、）

護法寺、（亡父三位入道範家卿、元在伏見里、）建立禪門知行伏見庄、居住此寺、而平治逆亂出來之後、應保元年、壞渡北岩倉、（師賴卿息三井寺隆賢闍梨之領也）同二年、被遂供養、以隆賢補別當、長寬元年、爲山門衆徒、一寺被燒拂之剋、此寺同爲灰燼之間、金堂丈六三體、（大日、釋迦、藥師、）皆以燒失、阿彌陀堂丈六像一體、毘沙門堂丈六像一體、依未造畢、各免火難、入道暫被住天王寺之時、奉請彌陀像、被安光堂畢、多門天像者圓智永萬元年不附大原緣忍上人、先奉渡來迎院、後年建立一堂於彼山麓奉安之、其後去建久六年、所移立此出雲地也、

寺領

寺領、伏見敷地山野田畠者、入道自五辻齋院宛賜之、而成後白河院御領、令宣陽門院御傳領也、〇註略

此外、圓智私領三箇所、寄附三寺、

一所、〈但馬國木前庄、依為寺務人、附明禪僧都、〉一所、〈伯耆國宇多川東庄、可附寺僧、〉一所、〈同國矢送庄、附屬外孫中納言典侍局、毎年八講布施料、鵝眼十貫可為年貢、其外不可有課役、〉

已上三寺、并諸庄子細如此、抑洛北出雲地境內、建立五間精舍、安置三所之本尊、以西擬平等寺、以東擬尊重寺、以中擬護法寺、殊以三寺忽為一堂、是則根本中堂之例、佛法繁昌之所也、

建保二年〈甲戌〉二月十七日〈壬子〉　沙門〈在判〉記之

沿革

〔諸門跡傳 二〕毘沙門堂

元院室稱號、代々任僧正、然近世堂上花園家之息為一代、後墮落號三休、於茲中絕、南光坊天海僧正為中興、花山院之為嗣、毘沙門堂公海僧正為第二世、此時始有門跡之號、

明禪法印參議正三位藤原成賴卿息、權中納言顯賴卿孫、山碩學、

公豪大僧正　左大臣藤原實房公息、內大臣公敎公孫明禪法印資因長僧正受法、

〔輪王寺宮年譜〕久遠寺院准三宮公海

元和九年癸亥、從大師〈〇天海〉往駿府、薙髮于總持院、後陽成院帝歸仰大師、〈〇天海〉以山科毘沙門堂室久廢、欲興復之、勅賜其號于大師、大師付之公海、從此稱毘沙門堂御門主、為九條太閤幸家公之猶子、〇中略寛文五年乙巳、開於山城國宇治郡山科鄉之地、創建毘沙門堂、住、寛文九年己酉九月三日、奏請後西院帝第六皇子貴宮、為毘沙門堂御法嗣、天和二年壬戌、付毘沙門堂於公辨親王、奏後西院帝賜號久遠壽院、元祿五年壬申六月十一日准三后宣下、元祿八年乙亥十月十六日薨于山科毘沙門堂、御年八十九、奉葬于毘沙門堂之乾隅、

寺職

〔嘉永四年雲上明覽大全 上〕御領千七十石　山科　御里坊中立賣御門內　鈴木內匠

雜載　　名稱所在　　創建沿革

御宗旨天台
毘沙門堂　御無住

輪王寺宮御兼帶

院家　資源院權僧正法印　行嚴院大僧都法印
　　　護法院大僧都法印　林泉院

坊官　前大路治部卿法印

奥御家司　進藤大和守　磯田豐前守

御用人　磯田帶刀　進藤左近

〔明月記〕貞永二年二月廿一日丙午、毘沙門堂花半開、

〔後愚昧記〕應安二年二月十九日、向毘沙門堂、一見花、

西本願寺山科別院

西本願寺山科別院ハ、山城國宇治郡山科ニ在リ、文明十二年、本願寺八世蓮如ノ創建スル所ニシテ、天文元年、攝津大坂ニ移ルマデ、實ニ眞宗ノ本寺タリキ、而シテ本願寺ノ東西ニ分立スルニ及ビ、此寺ハ西派ノ別院ト爲ル、宜シク西本願寺篇ヲ參看スベシ、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕山科坊舍　在山科小野庄内野村

蓮如上人文明十二年建立

〔山城名勝志十七宇治郡〕山科本願寺舊跡在東野村、西野村間、○中略

蓮如上人墓明應八年三月廿五日遷化、今現山科古跡有墓、數地東表、有數株松所也、○中略

實如上人墓東野村東、總土堤ヨリ巽六町餘ニアリ、

〔蓮如上人遺德記〕文明九年玄律ノ比、金森ノ善従、出口ノ閑窟ニ謁シテ申シケルハ、城州宇治郡ノ

東ニ、貴坊ヲ建ラルベキヨロシキ在所アリト、時々申サレケレバ、先師ノ仰ニハソレ一處不住ニシテ生涯ヲ果スベシト思ナリト云々、シカリトイヘドモ、善從ナヲ啓述アリツル旨ハ、昔ハ京都東山ニサヘ在キ、宇治郡邊ハ道俗參入ノ便最アルカノ由ノ再諮ニ及間、先師ソノコヽロヲ得タマヒテ、急ギコノ處ヲ歷覽アルベシトテ、同十年先師六十四歲初陽下旬第九日、河内國茨田郡出口ノ里ヲイデヽ上洛シ在テ、山城國宇治郡小野トイフ莊、山科ノ内野村ノ西中路ニ鸞輿ヲタテラレ、少時見廻タマヒテ、シカラバ此ニ居住シ時宜ヲモ試ベシトテ、先小屋ヲ建タマヒ、ソノ年ハ江州近松ノ弊坊ニテ越年シ、翌年六十五歲ニシテ沽洗ノ比連續シテ、作事ヲ企タマフ、爰ニ先師慥、存生ノ間ニ御影堂建立セバヤト思召ケリ、則門葉モ忽焉ニソノ企ヲナシケリ、

〔叢林集七上〕吉崎退出之事

明應八年三月中旬、上人〇蓮如御重病ノ由ヲキヽテ、御勘當御侘言申サバヤトテ、山科御坊ノ邊ニ上リ居シガ、同キ廿日、安藝ガユクヱタヅチ見ヨト仰セアリシカバ、實如上人外聞トイヒ、イカヾオボシメスベキト申シタマヘバ、當流ノ義本願ノ本意ハ、科アルヲ許スゾト仰セラレケレバ、各各落涙シテ、安藝ハ御侘言ノタメニ、御門前ニアルヨシヲ申シ上ゲシカバ、卽チ召シ出サレテ、御目ニカヽラレタリ、御最後ニモ參リ、御葬禮ニモアヘリ、　同二十八日ニ山科ニテ往生シテゲリ、ケ樣ノ事類ナキタメシナリト、八年記ニハ感ゼラレタリ、

〔叢林集七上〕一山科御坊退廢之事

文明十年八月記ニ文明九年御草建ヨリ五十四年ノ後、拾塵記ニ五十三年、八年記ニ享祿四年八月廿四日、天正三年ノ記ニ云ク、山科ノ御坊モ、本堂ハ三間四面ナリ、御影堂ハ五間四面ナリト、天文元年八月下旬、證如十七歲ノ御時、山科ノ御坊炎上退轉ス、ソノユヘハ文明三年大谷退却ノトキ、蓮如上人賴テ三井寺ニ入テ近松ニ在ス、三井寺ノ衆徒、オモヘラク、モシ山門ト事アル節ハ、一方ノ方人ニモシタテマツラント、サテコソ御先途ヲ隱シヲキシニ、早速北地

堂塔

へ越シタマフニ、アマツサヘ神ノ下山科ニ本寺ヲカマヘ、根本ノ御影ヲ移シ引ル、段、意趣ヲフクムコト、今ニ四十餘年ナリ、事モガナ恨ミ奉ランナド、若僧等思ヒ居タリ、下間源十郎、證如上人、幷ニ筑前ノ法橋ヲ恨ルコト有テ、ヒソカニ憤リテ三井寺ニ通ジ、山科ヲ計ル、巳前山門ノ餘憤又ナキニ非ズ、サレバ寺門山門カタラヒ合テ、天文壬辰秋八月廿四日、小關山ヨリ藤尾ニカヽリテ、山科小山神元ノ杜マデ押ヨセタリ、時ニ近松ヨリ驚キ觸テ、大津瀨田江東野州粟田ノ諸門徒、雲ノ如クニ馳向ヒ、湖上ニ飛ブ舟ハ、落葉ノ如クシテ打出ニ著ク、(大津ノ濱ナリ)先手ノ勢相坂兩國寺マデ往シニ、ハヤ野村ノ御坊炎上ノ烟ウヅマキテ、雲ノ如クニ見エ、寄手ハ本意ヲトゲテ、藤尾本山へミナ歸リヌト沙汰アレバ、諸勢ミナ眼雨フリ、心クレテ、是非ナク退キ歸リケリ、又披遂ミテ、東寺鳥羽小野邊マデハセ回ル門徒モアリトゾ、證如上人ハハウ〱宇治邊へ落チシノビ給ヘリト、委クハ清澤ノ記ニアリ、同八月廿四日ニ、大坂ノ御坊ニ入リタマヒ、コノ地ヲ御本寺トシテ、安住シタマフコト、四十九年、シカルニ天正八庚辰八月二日ニ、又コノ地炎上セリ、明應第五御草創ヨリ、コノ天正辰ノ四祿マデハ、總ジテ七十五年ナレドモ、御本寺タルハ四十九年ナリ、照蒙下卷ノ記ニ、證如上人ノ御墓モ、山科ノ御敷地ニアルト書タルハ不審ナリ、證如上人ハ天文二十年辛亥八月十三日御遷化、(此年、佛ノ滅後二千五百年、)山科炎上ノ後チ廿一年目ナリ、何ンゾ彼地ニ御墓アランヤ、又後蓮實兩上人ノ御墓ハ、今彼地ニ殯ス、證如上人ノ御墓トテハ、カノ所ニ未ダ是ヲ不知、重テ可正、

〔大谷本願寺通紀〕四 山科松林山記(去本山一里半)

松林別院、在城州宇治郡山科鄕小野庄野村、文明十二年八月、蓮宗主再建祖堂於斯地、明年六月、本堂亦成、時稱松林山本願寺、(實悟系圖云、蓮如山城國山科松林山開山、又遠德記卷尾、年譜、松林殿、亦可證、)歷五十三年、天文元年八月廿四日、火災而廢、又歷二百一年、後享保十七年閏五月、由山科講、請移北山別院堂字、再興佛殿、又歷三十二年、後改大其制、經始于寶曆十三年四月九日、落慶于安永三年三月廿日、凡十二年而成、方十二

雜載

間、

本尊　雲光青蓮、傳自越前某海濱來、屢有靈異等、身祖像、（有龕）　蓮宗主小幅古像、（有龕）

實證兩宗主像（右餘間）　湛宗主像　法宗主御書（天明元年閏五月中旬賜之）

鐘樓（無鐘銘）　鼓樓　香積　對面所　書院　接待所　寄進所　集會所　境地

留主　三十日番兩人　與力六寺　元文二年八月住宗主、聽著青袈裟來詣、（東野眞光寺、辻法敬寺、）

（小山安樂寺、井明教寺、藤尾東光寺、山ケ峯西念寺、）　西宗寺（在西野村、爲是蓮宗主往生地、與門下初中後、）

實證兩宗主靈墳　在別院南、（東野村東數町）松林內、卽本山領地也、北墓小低者、爲實宗主、南墓高大上有數株樹者、爲證宗主、幷設竹垣護之、

蓮宗主靈墳　在別院西二町許平原、墳上古松鬱葱于霄、元文以來、由東門障礙、無復所屬、近來有人作竹垣護之、

〔光源院殿御元服記〕後奈良院天文十五丙午年十二月十九壬寅日、於坂下樹下宅、公方左馬頭義藤朝臣（後被改義輝）御元服次第　御成次第　十八日

一、御成道路、（中略）○從日岡花山、過本願寺屋敷巽方、到東小山前、到大津、

〔厳助往年記〕天文廿年四月二日、從三井寺山科打入、上野安禪寺放火、人數十人打取云々、三井寺者一人打死云々、

勸修寺

勸修寺ハ、山城國宇治郡勸修寺村ニ在リ、醍醐天皇ノ母后藤原胤子ガ、天皇ノ儲宮ニ在リシ時、之ヲ誓護センガ爲ニ草創スル所ナリ、或ハ云フ、母后ノ兄弟定方ノ立ツル所ナリト、

名稱所在

創建沿革

〔拾芥抄 下本諸寺〕十五大寺

勸修寺 醍醐四、右大臣定方建立、

〔雍州府志 五寺院〕宇治郡　勸修寺　在勸修寺村、眞言宗、而門主住之、有寺產五百石、堂前假山、弘法大師之所作也、二尊院、斯門主之院家也、

〔都名所圖會 五〕勸修寺は大龜谷の艮の方なり、此所の名を勸修寺村といふ、當寺の宗旨は華嚴に眞言を兼たり、○中略東大寺の寺務にして、勸修寺御門跡と稱す、

〔勸修寺長吏次第〕或記云、勸修寺者、延喜帝御願、自醍醐寺以前建立也、

〔伊呂波字類抄 久諸寺〕勸修寺 格云、贈皇后在世之日、爲令奉護天皇陛下所建立也、在堂五字、

〔勸修寺緣起〕閑院贈太政大臣冬嗣のおとゞと申は、大織冠六代の御すゑ、大納言眞楯卿の御孫、右大臣內麿の六男にてぞおはしける、その冬嗣の御子に、內舍人良門と申人おはしけり、○中略良門の御子に高藤と申おはしけり、○中略高藤の公は、朝家に又なき權臣にて、內大臣になり給ひにけり、皇子踐祚ありて延喜の聖の御門とぞ申なる、我朝の賢王におはします、帝祖になり給にければ、うせ給てのちは太政大臣正一位を贈せらる、二人のをのこ君と申は、泉の大將定國、三條右大臣定方これ也、いづれも才卿にて天下におもき人にてなんおはしける、○中略かの南山科の大領の跡をば寺になされけり、今の勸修寺これ也、この寺いまだ造はじめざりける時、渤海國の使裴といふ人、この國にわたれりけるが、越州つるがの津につきて、山科をめぐりて、羅城門へゆくとて、南山科のかげ道をとをりけるが、馬よりをりて、北にむかひて拜してとをりけるを、人そのこゝろをゑらず、あやしびて問ければ、渤海客申けるは此處にちかく伽藍いでき侍べし、地形龜の甲のごとし、佛法の命長久にして、貴人たゆべからず、このゆへに拜する也とぞ申ける、はたし

て寺となりて、後聖主御願堂をたてさせ給て、五大明王を安置せらる、是鎮護國家のためなり、又寛平法皇の御ために、多寶の大塔をたてらる、其功いまだならざるに晏駕ありしかば、御いちうと柔子内親王と申は、六條の齋宮とも申にや、遺詔をうけ給はりて、造營功ををへて、供養をとげ、五佛會とて、やむごとなき法會をぞとりおこなひ給ける、この寺をば餘寺の眞言をむねとして、三論宗をかねならふとかや、はじめには廣澤のながれをくみて、のちには小野の風をぞつたへける、○中略其跡伽藍となりにければ、延喜の聖代の勅願なるうへに、三條右大臣一堂を建立せられたりける威風すでになりて、ほどなくかくれ給にければ、朝成、朝忠など申御子たち、佛閣の莊嚴をそへて、八月ついたちより、おなじき四日、丞相の御忌日にいたるまで、南北の碩才をまねきて、一乘八座の講師をはじめをこなはる、

〔今昔物語二十二〕高藤内大臣語第七

今昔、閑院ノ右ノ大臣ト申ス人御マシケリ、御名ヲバ冬嗣トナム申ケル、○中略其御子數御ケリ、兄ヲバ長良ノ中納言ト申ケリ、○中略次ヲバ内舍人良門ト申ケリ、○中略而ルニ其ノ良門ノ内舍人ノ御子ニ高藤ト申ス人御ケリ、○中略而ル間、年十五六歲許ノ程ニ、九月許ノ比、此ノ君鷹狩ニ出給ヒニケリ、南山階ト云フ所、渚ノ山ノ程ヲ、仕ヒ行キ給ケルニ、申時許ニ俄ニ掻暗ガリテ、雨降リ大キニ風吹キ、雷電霹靂シケレバ、共ノ者共モ、各馳散テ行キ分レテ、雨宿ヲセムト、皆ナ向タル方ニ行ヌ、主ノ君ハ、西ノ山邊ニ、人ノ家ノ有ケルト見付テ、馬ヲ走セテ行ク、共ノ舍人ノ男、一人許ナム有ケル、其ノ家ニ行著キテ見給ヘバ、檜垣指廻シタル家ニ、小サキ唐門屋ノ有ル内ニ、馬ニ乘乍ラ馳入ヌ、○中略暫許有テ、臥乍ラ見給ヘバ、庇ノ方ヨリ遣戸ヲ開テ、年十三四許有ル、若キ女ノ、薄色ノ衣一重、濃キ袴著タルガ扇ヲ指隱シテ、片手ニ高坏ヲ取テ出來タリ、耻シラヒテ、遠ク佇ミテ居タレバ、君此寄ト宣フ、和ラ居サリ寄タルヲ見レバ、頭ツキ細ヤカニ、額ツキ髮ノ懸リ、此樣ノ者ノ子ト

不見ズ、極メテ美麗ニ見エ、高坏折敷ヲ居テ、坏ニ著ヲ置テ、持來タル也、前ニ置テ返リ入ヌ、〇中略獨リ寢タルガ怖シキニ、有ツル人、此ニ來テ有レト宣ヒケレバ、參タリ、此寄レトテ引寄テ、抱テ臥給ヒヌ、〇中略契明シテ夜モ睦ヌレバ起テ出トテ、帶給タリケル太刀ヲ、此レヲ形見ニ置タレ、祖心淺クシテ、男ナド合ストモ、努々人ニ見ユル事ナセソトテ、出モ不遣ズ云置テ、出給ヒヌ、〇中略彼ノ見シ女ノ事ノミ心ニ懸リテ、戀シク思エ給ヒケレバ、妻ヲモ儲ケ不給ザリケル程ニ、六年許ヲ經ヌ、而ル間、彼ノ共ニ有シ馬飼ノ男、田舍ヨリ上テ參タリト聞テ、馬飼ヲ召出テ令折給フ樣ニテ、近ク呼テ宣ハク、一トセ鷹狩ノ次ニ、雨宿リシタリシ家ハ、汝ヂ思ユヤ否ヤト、男ノ申サク、思エ候フト、君此ヲ聞テ喜シト思ヒ給テ、今日其ニ行カムト思フ、鷹仕樣ニテナム可行キ、其ノ心ヲ得テ可有シト宣テ、共ニ帶刀ニテ有ケル者ノ、睦シク仕ビ給ヒケルヲ具シテ、阿彌陀ノ峯越ニ御ヌ、〇中略家主ノ男ヲ呼ビ出セバ、思ヒ不懸ズシテ此ク御タルガ喜サニ、手迷ヒヲシテ出來タリ、有シ人ハ有カト問給ヘバ、候フト答ヘテ、喜ビ乍ラ有シ方ニ入テ見レバ、凡帳ノ高ニ鉉ハヅ隱レテ居タリ、寄テ見レバ、見シ時ヨリモ長ヒ增リテ、非ヌ者ニ微妙ク見ユ、世ニハ此ル者アリトマデ見ルニ、其ノ傍ニ五六歲許ナル女子ノ、艶ヌ嚴氣ナル居タリ、此レハ誰ゾト問給ヘバ、女低テ泣ニヤ有ラムト見ユ、墓々シク答フル事モ无ケレバ、心モ不得テ父ノ男ヲ呼ベバ、出來テ前ニ平ガリ居タリ、君ノ宣ハク、此ノ有ル兒ハ誰ゾト、父答テ云ク、一トセ御マシタリシニ、其ノ後人ノ當リニ、寄ル事モ不候ズ、本ヨリモ幼ク候シ者ナレバ、人ノ當リニ寄ル事モ不候ザリシニ、御マシテ候ヒシ程ヨリ、懷妊シ候テ、産テ候フニナムト、此レヲ聞クニ、極テ哀レニ悲クテ、枕上ノ方ヲ見レバ、置シ太刀有リ、然バ此ク深キ契モ有ケリト思フニ、彌ヨ哀レニ悲シキ事无限シ、此ノ女子ヲ見レバ、我ガ形ニ似タル事、露許モ不違ズ、此テ其ノ夜ハ其ニ留テ明ル朝ニ返リ給フトテモ、今迎ヘニ可來シト、云置テ出ヌ、此ノ家主ノ男、何者ニカ有ラムト思テ、尋子問給ヒケレバ、其ノ郡ノ大領、宮道ノ彌益トナム云

ヒケル、此ル賤ノ者ノ娘也ト云トモ、前世ノ契深クコソ有ラメト思給ヒテ、亦ノ日、筵張ノ車ニ、下簾懸テ、侍二人許具シテ御ヌ、車寄セテ乘セ給フ、彼ノ姬君モ乘給ヌ、无下ニ人ノ无カラムガ惡ケレバ、母ヲ呼ビ出テ乘セタレバ、年四十餘許ナル女ノ、乾カナル形シテ、此樣ノ者ノ妻ト見エタリ、練色ノ衣ノ、強ラナルヲ著テ、髮ヲバキコメテ居タリ、乘ヌ殿ニ將御シテ、□□□ヒ下シ給ヒテ、其ノ後ハ亦他ノ人ノ方ニ、目モ不見遣ズシテ、棲給ヒケル程ニ、男子二人、打次テ產テケリ、然テ此ノ高藤ノ君、止事无ク御ケル人ニテ、成上リ給テ、大納言マデ成給ヒヌ、彼ノ姬君ヲバ、宇多院ノ位ニ御シケル時ニ、女御ニ奉リ給ヒツ、其ノ後幾ク程ヲ不經ズシテ、醍醐ノ天皇ヲバ產奉リ給ヘル也、男子二人ハ、兄ハ大納言ノ右ノ大將ニテ、名ヲバ定國トゾ申ケル、泉ノ大將ト云フ此レ也、弟ハ右大臣定方ト申ス、三條ノ右大臣ト云フ、此レ也、祖父ノ大領ハ四位ニ叙シテ、修理ノ大夫ニナム被成タリケル、醍醐ノ天皇、位ニ即セ給ニケレバ、祖父ノ高藤ノ大納言ハ、內大臣ニ成給ヒニケリ、其ノ後彌益ガ家ヲバ寺ニ成シテ、今ノ勸修寺此也、向ノ東ノ山邊ニ、其ノ妻堂ヲ起タリ、其ノ名ヲバ大宅寺ト云フ、此ノ彌益ガ家ノ當ヲバ、哀レニ睦シク思食ケルニヤ有ケム、醍醐ノ天皇ノ陵、其ノ家ノ當ニ近シ、此レヲ思フニ、墓无カリシ鷹狩ノ雨宿ニ依テ、此ク微妙キ事モ有ルハ、此レ皆前生ノ契ナラメトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔尊卑分脈藤原七〕高藤〇註略

―定方〇中略

―胤子醍醐天皇御母儀、宇多天皇女御、贈皇太后、

〇按ズルニ、甘露寺、葉室、勸修寺、萬里小路、清閑寺、中御門、坊城、小川坊城或稱二小川坊城一、芝山、池尻、梅小路、岡崎、穗波、海住山或稱二海住山一、堤或稱二中川一ノ諸家ヲ、勸修寺家ト稱ス、皆定方ノ後ニシテ、其稱ハ此寺ヨリ出デタリ、

〔伊呂波字類抄久諸寺〕勸修寺(中略)在二定五字一

御願堂　五大尊、等身、綵色、如意輪、

件堂、奉ㆍ爲延喜天子母后、以外祖父宮內少輔宮道彌益〇此下恐有ㆍ誤脫ㆍ所ㆍ被ㆍ造立也、

本堂　西院東本尊四天、

件堂、本施主宮內少輔宮道氏建立云々、傳云、件堂彼彌益朝臣鷹屋之跡云、去天喜年中、已以燒亡

仍故大藏卿伏〇伏恐匪佐誤卿被造立、

西堂件堂、康保元年七月廿一日、坊城中納言朝成、故右丞相定方府下、奉ㆍ爲亡母靈ㆍ、延喜年中所ㆍ被ㆍ建立ㆍ也、天慶以來每ㆍ及ㆍ忌辰期ㆍ、剋ㆍ四日ㆍ而開ㆍ八講ㆍ云々、

〔勸修寺舊記〕一堂舍佛像

御願堂在ㆍ本堂南ㆍ、五間四面、有ㆍ七間禮堂ㆍ、已上檜皮葺

奉ㆍ安置ㆍ五大尊五體等身綵色如意輪一體、右御願、

金色阿彌陀三尊三體、　四天王四體、在ㆍ厨子內ㆍ、右根本佛、

地藏菩薩一體泉大將佛

件堂、奉ㆍ爲延喜天子母后ㆍ、以ㆍ外祖父宮內少輔宮道彌益ㆍ爲ㆍ行事ㆍ所ㆍ被ㆍ造立ㆍ云々、佛聖燈油料、在ㆍ近江國ㆍ、　供養日可ㆍ尋注ㆍ、

延長三年八月廿二日、公家於ㆍ此堂ㆍ被ㆍ修ㆍ母后御態ㆍ云々、卽被ㆍ供ㆍ養補五佛像、幷宸筆法華經、七僧百僧者、講師靜觀僧正、行事左少辨元方云々、此日以ㆍ別當濟高ㆍ任ㆍ權律師ㆍ、勅使左少將平希世　件御佛經、故僧正房燒亡之次、已成ㆍ灰燼ㆍ云々、

奉ㆍ安置ㆍ

御塔在ㆍ御願堂東ㆍ、一重多寶塔、四面有ㆍ庇ㆍ、

金色金剛界五佛

件塔、撿ㆍ承平三年濟高律師實錄帳ㆍ、有ㆍ塔无ㆍ佛幷柱繪ㆍ云々、

寺格

天曆元年五月十八日、六條齋宮(延宮同胞、諱柔子內親王是也、)被供養之、其願文云、昔延長聖主奉爲山陵、起多寶塔於勸修寺、外望漸壯、內地猶空、弟子陳情於前朝、承詔於往日、聊加壇場之飾、奉安置此尊像云々、爲贈皇太后被供養者、

本堂(在御願堂北西院東、三間四面南有孫庇、檜皮葺)奉安置

白色四十手觀音像　綵色正觀音像

四天像四體

件本施主宮內少輔宮道氏建立云、人傳云、件宮彼彌益之廳屋云々、去天喜年中、已以燒亡、(但奉出本)佛、仍故大藏卿隆佐卿被造立者、

(都名所圖會五)勸修寺(○中略)

本尊ハ、延喜帝御等身の觀世音なり、(長五尺三寸)

(吉記)元曆二年七月九日午剋大地震、(○中略)勸修寺鐘樓、經藏廻廊、(廿間許)西中門顚倒、

(扶桑略記二十三醍醐)延喜五年九月廿一日、以勸修寺、勅爲定額寺、

(類聚三代格四)太政官符

應以勸修寺爲定額寺幷置年分度者二人事

眞言宗聲明業一人(○中略)

三論宗一人(○中略)

右律師法橋上人位承俊奏狀偁、件寺、贈皇后(○藤原胤子)存生之日、爲令誓護天皇陛下所建立也、而先后坤位永隔、陰儀早遷、少僧承俊蒙彼遺令、勾當寺家、雖草創之功歎其無遂、然林衙之構追稍有成、自爾口降、御願尊像有勅安置、方今修學之徒接影嵐窻、祈念之侶連蹤苦徑、若廢勸導於當時、恐致退轉於

後代、伏願天裁、准淨福寺例、置年分度者二人、毎年十月試定所業、通五以上爲以及第、即正月十八日宸儀醍醐〇降誕之日、剃頭授沙彌戒、得度之後於東大寺戒壇受具足戒、受戒之後住於伽藍、令精練各本業、上奉護聖朝、下利益國家、亦以件伽藍列之定額、不爲僧綱幷讀講師之所摂者、左大臣宣、奉勅依請、

延喜五年九月廿一日

〇按ズルニ、醍醐天皇ハ、仁和元年正月十八日降誕シ給ヘリ、

寺領用途

〔延喜式主税二十六〕凡〇中略勸修寺五大尊燈油一石八升、供料白米卅三斛六斗、並近江國以正税交易、幷春備、毎年十月以前送納寺家、

〔山城名勝志宇治郡十七〕勸修寺〇中略

古文書云、城州山科東西庄内散在分事、任當知行之旨、南者限檝縄手、上者至黒石、可被全所務之段被成奉書、

文祿三十一月六日

松田丹後守　長秀判
松田豐前守　賴亮判

御門跡雜掌

古文書云勸修寺殿分勸修寺領、寺邊散在、八幡田、同新八幡田、號寛意法印跡幷末寺安祥寺、大宅寺新御領御所内等事、任綸旨御敎書保元保安帳等之旨、御管領所不可有相違也、

嘉應二年九月二日

左衛門佐

當寺政所

寺職

〔初例抄下〕勸修寺建立　權律師永俊、東大寺、法相宗、延喜二年、任權律師、元威儀師、勸修寺建立根本師、同寺勾當、延喜五十二月七日死去、

雜載

〔諸門跡譜中〕勸修寺〇中略

濟高大僧都〇勸修寺長吏、東寺長者、法務、

聖寶尊師資、延喜十年八月九日任長吏、天慶五十一廿五寂、八十六歲、

貞譽權律師勸修寺長吏、東寺長者、法務、任撿挍、

承俊律師資、天慶七六廿一任長吏、

〔勸修寺長吏次第〕一代　大僧都濟高

長吏根本承俊僧都入室弟子、延喜十八年八月九日任長吏職、

〔寬永七年雲上明覽大全上〕勸修寺宮〇中略

御領千十二石

眞言宗
勸修寺　御無住

院家　佛土院權僧正法印　淨土院權僧正法印

院室　密乘院權僧正法印　理趣院大僧都法印

出世

坊官　二松宰相法印　同法眼　山田中務卿法眼

諸大夫　朝井隱奥守

侍

勸修寺村
御里坊石藥師寺町角
入澤右京

〔日本紀略一醍醐〕延喜三年八月五日、其日、天皇於勸修寺、屈僧綱以下百七口、供養神筆法華經、奉爲贈皇后〇胤子御菩提也、

〔玉葉和歌集十九釋敎〕保延二年、勸修寺にて、三十講おこなひ侍けるついでに、法華經序品の心を、

民部卿顯賴

ひとりのみ尋ねいるさの山深みまことの道をこゝろにぞとふ

〔碧山日錄〕應仁二年八月廿八日乙卯、永安翁僊居勸修寺、此日乃其子佐侍者卒哭辰也、赴其齋、及晩而退、琰侍者曰、十四日、自西兵入本寺、常喜法輪長慶本成之諸老、及長幼之徒數百員、悉下山而去、鐘鼓止響、香燈絶光、欠晨誦晩叅之勤、邊夷戎卒猥籍於諸堂、屠肉庫下、繋馬廊間、行力未逃者罵詈、只恐戮殺而已、其暴虐不可言云、聽之不覺老淚迸出也、

〔二水記〕享祿五年二月廿一日、午時罷向勸修寺、(西林院)　廿三日、早旦行水、叅八幡、一寺鎭守也、古老云、石淸水已前之勸請云々、

〔元長卿記〕永正九年五月四日、勸修寺緣起出來、繪光信、

○按ズルニ、元長、稱號ヲ甘露寺ト云フ、勸修寺家ノ人ナリ、

名所所在

隨心院

隨心院ハ、山城國宇治郡小野ニ在リ、曼茶羅寺ノ院室ニシテ、僧仁海ノ開基ナリ、其後御願寺ト爲リ、世々攝家門跡タリ、

〔雍州府志 五寺院〕宇治郡　隨心院　小野門主之室、而始仁海之所住也、眞言二流中、小野流出自仁海、斯門主兼南都東大寺寺務、(或號曼陀羅寺)

〔山城名勝志 十七宇治郡〕曼荼羅寺　(小野村隨心院東傍有藥師堂、是曼茶羅寺金堂云々、土俗號曼茶羅藥師、○中略)

隨心院

〔拾芥抄 下本十陵〕後山階 (醍醐天皇、在醍醐寺北、曼茶羅堂丑寅、)

〔都名所圖會 五〕小野隨心院は勸修寺の東なり、曼茶羅寺と號す、眞言宗にして、開基は仁海僧正な

り、法務は小野御門跡と稱す、攝家の御連枝住職したまふ、

寺域

〔義演准后日記〕慶長十五年四月廿四日、黑印出了、隨心院門跡、當寺〇醍醐寺ノ內ニ入了、勸修寺門跡同今度予申入、別ニ黑印申出之、進之了、自他ノ爲也、先年不知案內ニ付、德善院如此相計了、但兩門黑印文言ニ、門前境內ト被載候、是ハ兩長老不案內故也、第一ノ越度也、門前モ境內モ、兩門ニハ曾無之候、先年、大閤御寄附以來ハ、當寺ノ門前境內也、爲後證粗記之、

創建沿革

〔元亨釋書 四慧解〕釋仁海、事元杲闍梨、稟密學、博錯綜衆流、醍醐之側小野之地、海啓密講之席、四來受業之者多、世號小野密派、

〔諸門跡譜 上〕隨心院

小野曼荼羅寺、寬喜元蒙宣旨、親嚴門跡領掌云云、後堀川院御宇、後七日御修法之賞、以隨心院永爲御祈願所矣、

弘法大師〇略 註　眞雅僧正〇略 註
源仁僧都〇略 註　聖寶尊師〇略 註
觀賢僧正〇略 註　淳祐內供〇略 註
元杲大僧都〇略 註　仁海僧正〇略 下

〔本朝高僧傳 五十四 感進〕城州隨心院沙門顯嚴傳

釋顯嚴、直講中原廣宗之子、從隨心院增俊阿闍梨、承傳法灌頂、周旋東寺南山、研精密經、在隨心院、誘掖後學、有詔加東寺長者、轉任僧都、感驗尤著、貞應年中、勤後七日御修法、朝廷擧隨心院爲御願場、任順德後堀河四條帝護持僧、乘車入禁、

寺領

〔隨心院文書 坤〕預申隨心院御門跡領越後國山東郡白鳥庄內、於木方持分、除稲川吉水釜屋事、

雖守護方契約候、以加增、每年御年貢京進貳拾伍貫文、不法無懈怠可致其沙汰候、萬一無沙汰之

寺職

事候者、可㆑被㆑召㆓放御代官㆒候、仍爲㆓後日㆒請文之狀如㆑件、

應永卅一年十月廿六日　　太田刑部少輔　花押

○按ズルニ、德川時代ノ寺領ハ、後文寺職ノ下ニ引ケル雲上明覽大全ニ在リ、

〔和漢三才圖會　山城七十二末〕隨心院　在㆓小野㆒

開山仁海僧正　中興增俊何闍梨中納言國俊子　又中古自㆓九條殿㆒令㆑嗣以來、攝後御門跡、

〔桃花蘂葉〕家門末子入室門跡等事○中略

隨心院　代々當家由緒、不㆑及㆓子細㆒、故門主祐嚴准后、今門主嚴寶僧正、爲㆓愚息㆒之上者、不㆑可㆑有㆓不審㆒者也、

〔嘉永七年雲上明覽大全　上〕隨心院御門跡○中略

御領六百十二石餘　　洛東小野　御里坊寺町上御靈口下ル北角

御宗旨眞言　隨心院御門跡增護　五十一

前大僧正法印

九條故准后尙實公御猶子

實二條故前左大臣治孝公御子

院家　寶幢院大僧都法印

院室　無染院權大僧都法印

喜乘院　寶嚴院

讃州善通寺　弘法大師誕生之地

誕生院

四觀智院權大僧都　十一遍照院權大僧都　十甲山寺權大僧都　十五延命院權大僧都　三出釋迦寺大僧都　一九品院權大僧都　七万恒寺權大僧都　二善光寺權大僧都

都五寶光寺權大僧都六舍那院權大僧都八觀喜院權大僧都九吉祥寺權大僧
都十二嚴谷寺權大僧都十二法永寺權少僧都十四長壽院權律師十六持寶權僧
律師十七寶城院權律
師十八花藏院權律師
坊官本貫式部卿法橋
諸大夫芝但馬守
同豐後守
侍岡本右衛門權大尉
御用人長尾右兵衛
植田觀貞

名稱
所在
創建

法琳寺

法琳寺ハ、承和七年、僧常曉ノ始テ太元帥ノ法ヲ此寺ニ修スル所ナリ、故ニ又太元堂トモ稱セリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國宇治郡小栗栖村ニ在リ、

〔伊呂波字類抄諸寺保〕法琳寺仁明天皇御宇、承和七年庚申、始被修大元法、常曉賜法琳寺地、爲大元師之秘法所、康平元戊戌七月五日、大元堂前地陷長十餘丈、廣三丈餘、

〔拾芥抄諸寺下本〕法琳寺太元堂是也、太元今移給井在之、以彼水行彼法、文德御時、常曉律師入唐之後造之、在小栗栖、

〔雍州府志寺院五〕宇治郡　法琳寺　在同所、○醍醐醍醐寺理性院派下也、

〔山城名勝志宇治郡十七〕法琳寺土人云、北小栗栖村西山半腹有小堂、安毘沙門天像、此地法琳寺舊跡也、

〔和漢三才圖會山城七十二末〕法琳寺　在小栗栖
仁明天皇承和七年御草創、號大元堂、賜于常曉、　常曉小栗栖路傍棄子也、稍長師事元興寺豐安、承和元年入唐、遇栖靈寺文璨、稟密教、文宗帝大和八年也、又謁花林寺元照、益究密奧、授以阿闍梨位、又授太元帥秘法、此法彼國不出都下、藩外人不許修供、而喜照之才器、潛授焉、明年歸申官、於當時修太元帥法、齊衡年中天下大旱、勅於神泉苑亦修之、白龍現幡上、大雨普灑、貞觀七年十一月三十日逝、

堂塔

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年六月丁未、入唐請益僧傳燈大法師位常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥、足修大法、望請、今般自大唐奉請、太元帥靈像秘法安置此處、爲修法院、保護國家、不關講讀師之攝、許之、

〔山城名勝志 十七宇治郡〕法琳寺○中略

舊記云、孝德天皇御願、昔時堂塔有四宇、三重塔 彌勒堂 藥師堂 齊明天皇御願、定惠和尙造立、太元堂 仁明天皇御願、承和七年、常曉和尙、經奏聞建立御願堂、淸涼殿移渡始而崇阿闍梨之宣下、寺務執行云云、已上法琳寺別當舊記

醍醐寺 三寶院附

醍醐寺ハ、山城國宇治郡醍醐村ニ在リ、笠取ノ山上ヨリ山下ニ亘ル、貞觀中、眞言小野流ノ開祖聖寶ノ草創スル所ニシテ、醍醐、朱雀、村上三代ノ御願寺ト爲リ、延長以後漸次ニ、寺域ヲ擴メ、伽藍坊舍ノ數ヲ增シ遂ニ眞言宗中、東寺、高野ノ兩寺ト相並ブニ至レリ、山務ハ座主ノ主ル所ニシテ、座主ハ、初メ小野流ノ僧ノ中、德望アル者ヲ擇ビテ之ニ補セシガ、幾ナラズシテ、座主ノ私門ニ限ラレ、師資ヲ以テ相承シ、又久シカラズシテ獨リ三寶院門跡ノ占ムル所ト爲レリ、事ハ同條ニ詳ナリ、

名所所在

〔伊呂波字類抄 太諸寺〕醍醐寺 在山城國宇治郡笠取山醍醐、業一件寺故僧正法印大和尙位聖寶所建立也、

〔醍醐寺緣起〕在山城國宇治郡笠取山、

總以當寺號醍醐寺者、老翁嘗泉水、號醍醐味、故貴爲寺號、以此水亦爲閼伽井、牟尼大師說眞言、嘗醍醐味、當山流布敎是也、眞俗得靈法、與報之美名、和融、佛神同言宗、與寺之德號相通、以天然之理呈佗

體之妙、爲法然之文、爲寺門之額、以彼寺號爲帝名、

〔雍州府志五寺院〕宇治郡　醍醐寺　貞觀年中、光仁帝裔、葛聲王爲檀越、而聖寶闢基、號深雪山醍醐寺、演顯密二敎、貞觀九年爲官寺、于今寺產有四十石、聖賢好修鍊、經歷名山靈地、大峯嶮路、聖寶再蹈開之、凡聖寶所管攝、東西二寺、東大興福兩寺也、常有所持如意、背後刻五獅子形、面雕三鈷杵、而表顯密兼學之意、聖寶爲東大寺座主、時置東大寺、興福寺維摩會講師必執此如意、應唱演、凡醍醐山自山腹龍樋不動堂、以上不許女人登之、山中直谷。。。南禪院者、成賢僧正隱遁地也、成賢少納言入道信西之子也、相傳不更生、直爲天狗、常棲斯山、故或號直谷、斯堂有木像、開戶見之、則必爲崇、故今閉其扉、以鐵釘貼之、笠取山竹谷。。。。道慈之所住也、寂靜谷。。。權大僧都心敬所詠散花之倭歌也、跳嶽。。近江湖水在目下、八景谷。。在西谷、則有八景、准胝堂。。。本尊觀音三十三所之隨一、而聖寶像亦有之、如意輪堂。。。本尊聖豪內供奉等身之觀音、而是亦三十三處之隨一也、〇中略今自下醍醐登山上、其行程三十七町、標石之梵字、亦成賢之所筆也、

〔都名所圖會五〕深雪山醍醐寺ハ、小野南なり、山上を上醍醐といひ、麓を下醍醐と號す、宗旨ハ眞言宗にして、修驗道なり、此所を當山と號す、本山といふは聖護院の流義〇中略法務ハ三寶院御門跡と稱す、

〔醍醐寺雜事記〕醍醐寺四至

東者石間寺東　西者櫃河

南者桂御房堀　北者高岡川

西南者布豆田里十二坪、東行東杜道、

西北者大藪里廿坪、西繩手行河、

〔山城名勝志十七宇治郡〕醍醐山寺、山下有寺院、從麓至山上、行程三十七町、標石有梵字、權僧正成賢筆跡云云、自山腹瀧ガ樋不動堂以上不許女人登山、

〔壒囊抄十四〕醍醐寺ハ、何レノ御願ゾ、夫醍醐寺ハ、延喜御門、持中尹甫奉行トシテ、延長四年甲子建

寺域

創建

立アリト云共、醍醐、朱雀、村上、三代御願ト云也、譬ヘバ如三井寺歟、貞觀寺座主、權法務聖寶僧正草創也、門徒ノ稱號、尊師ト申奉ルト云、○下略

〔醍醐寺緣起〕在山城國宇治郡笠取山

右當寺者、根本尊師、昔振飛錫、遍遊名山、翠嵐吹衣、何巖不蹈、白雲拂首、何岫不探、徒尋道世長往之蹤、未得令法久住之地、爰於普明寺、七ケ日之間、祈念佛法相應之靈地、酬彼祈願、五色之雲、聳當山之峯、因茲攀昇此峯、欣然如歸故郷、噫爾欲建精舍、而谷有獨老翁、嘗泉水、褒醍醐味、爰尊師問老翁曰、此處建精舍、將欲弘佛法、永可久住哉、老翁答曰、此山者是古佛練行之洞、諸天衞護之砌、前佛之遊處、名神之所居也、如意寶生之嶺、功德聚集之林、法燈續而及龍花開、僧侶不絶、至鷄足之朝、我爲此處之地主也、横尾明神是也、永獻和尚、便弘佛法、廣救群類、我倶衞護云々、其後失而不見、梢鳥唱三寶、尊師彌流感涙、于時上奏此由、延喜上皇殊有叡感、奉爲除病延命、造營根本堂舍、被安置藥師如來像、惠利僧都作、奉爲帝御願、尊師造營准胝堂、奉安置七准胝佛母、奉爲朝敵降伏、造營五大堂、于時貞觀十六年六月一日、加持准胝如意輪、并諸堂本尊御衣木、則手斧始石礎立柱始之、同十八年六月十八日、刻彫准胝如意輪、終功了、而准胝者起立步行、入于內陣、而如意輪同奉安置准胝堂之處、自登東峯、御座于石山之間、芼苔建堂、崇重之餘、晝夜奉行無絶、而如意輪語尊師、倂此山者補陀洛山也、則此道場者、彼補陀洛山之中心、有金剛寶葉石、我坐此上、而觀照十方世界、衆生苦樂、晝夜常拔苦與樂云々、自爾以降、効驗任行者之心、利生隨衆生之樂、因茲眞言流之初行之本尊、以不動爲本尊、其外前住行者之表、就而於延命院流者、以如意輪爲初行本尊、末代行人、爲令値遇彼生身如意輪也、今如意輪堂本尊是也、以初行吉凶、覺知一期運不運悉記、成不成揭焉也、凡朝家無雙之靈佛、密宗崇重之本尊也、造立毘沙門像、安置彼如意輪堂、尊師御作、爲佛法護持也、靈驗無雙也、

〔貞信公記〕承平元年五月廿日、有官奏、公忠朝臣仰木工寮、可令作醍醐寺事、

堂塔諸院

〔類聚符宣抄十〕奉造醍醐寺　御佛行事所
上召使檜前貞則　上日六十二
右自去七月十五日至九月十七日、奉造御佛所、奉仕漆工之間、上日如件、
承平元年九月廿五日
修理大進林康恒
主殿頭藤原朝臣良柯
中納言藤原朝臣恒佐宣、宜追給件上日者、
同年十二月七日　大外記朝原三行奉

〔醍醐寺緣起〕延命院、念覺院、（安置延壽御本尊）五大堂、觀音堂、（安置千手）遍照院、中院、（安置五大尊）大宮御堂、持明院、圓院、御影堂、
已上山上
尺迦堂、三昧堂、五寺、搭婆、無量光院、大主堂、東院、東常寺、曼荼羅寺、三古寺、法琳寺、（安祥師建立）岳西院、
已上山下

〔山城名勝志十七宇治郡〕醍醐（山寺山上山下有寺院○中略）
藥師堂（在准胝堂上方、像會理僧都作、故曰會理藥師、○中略）　准胝堂（在清瀧社上方、○中略）　如意輪堂（在開山堂西、拾芥抄云、等身、○中略）　五大堂（○中略）　延命院（○中略）　念覺院（○中略）　觀音堂（千手）　已上（山上根本六堂○中略）　中院（緣起云、安置五大尊、○中略）　持明院（同上○中略）　圓光院（舊記云、西御堂、○中略）　金剛輪寺（聖寶本坊也、今有德僧輪香居之、○中略）　御影堂（尊師在如意輪堂東、中聖寶、左右弘法觀賢、○中略）
南禪寺（在直谷、土人呼直堂、本尊彌陀坐像、春日作、成賢僧正隱遁地也、○中略）　圓明院（在西谷、俊乘坊重源住院也、重源於醍醐山而創西所阿彌陀堂云云、今東谷阿彌陀堂其一也、其餘頹破、○中略）　圓明房（圓明院同所乎、○中略）　釋迦院（在西谷、號水本、今云報恩院、○中略）　惠心院（○中略）　盛琳院（○中略）　寶幢院（在西谷、寺家說云、當院第二世興正菩薩也、所持拂子、幷袈裟興等、存于今、○中略）　安養院（舊跡、在戒光院境內、號松本、山寺僧云、安養院一名云松本坊、故名云云、○中略）　山下寺院（下醍醐、小野村南也、（中略）昔下醍醐寺四十九院アリ、）　三寶院（醍醐寺座主、在西門前、○中略）　理性院（在三寶院北、○中略）　金剛王院（在三寶院南、○中略）

報恩院號二極樂坊一、在二下醍醐深沙構造一、今曰二釋迦院一、○中略　無量光院舊記云、堀川院母代郁芳門院置、光院中宮御願、白川院御建立、　蓮藏院舊記云、願覺法印王大中臣、願法性寺關白、土人云、舊跡在二赤岡東南山麓一、其邊有レ川、土俗曰二蓮藏川一、○中略　無量壽院號二松橋一、在二金剛王院東一、元在二山上寂靜院谷一云々、○中略　遍智院舊記云、義範僧都創、○中略　阿彌陀院今在二六坊內一、東側南端、○中略　觀心院○中略　寶池院在二金剛王院南一、寺家說云、文永年中、大僧正定濟建立、文明中燒失、寬文年中前大僧正高賢再興、○中略　西南院密宗血脈抄云、西南院、實助、○中略　清淨光院密宗血脈抄云、在二醍醐一、土人云、舊跡赤岡西南、在二理性院東一、今屬二山林一、土俗云二其地清淨光寺一、　一言寺在二菩提寺坤一、舊記云、南都保一言觀音堂、願主阿波內侍、號二眞阿彌尼一、或記云、禪那院、俊譽一百寺、○中略　大智院舊記云、堀川左大臣俊房建立、本佛、觀音、等身、　妙法院舊記云、願主正四位下藤原惟信朝臣、關白殿下忠通公、土人云、舊跡今屬二山林一、二王門南一町許、五智院下俗也、　寶塔院舊記云、願主上野守常行建、　東院舊記云、朱雀院御願　勝俱胝院舊記云、實運僧都建立、　中院舊記云、阿彌陀院、丈六像、願主安房守親元、又云、中院地藏堂、本佛、延壽像、御本尊、等身、六體、　成身院六坊內西側　金剛輪院　普賢院號二西坊一、在二理性院北一、　地藏院舊跡在二理性院東一、遍藏院西、○中略　中性院密宗血脈抄云、中性院聖賢、　岳西院　光明院

西往院　大慈院　密嚴院　安樂院　寶篋院　悉地院　西方院　豊財園院　安養院　金剛手院　無量院　中堂院　正覺院　稱名院　西院　眞如院　寶蓮院舊跡在二南門前一、今爲二山林一、理性院領、　勝正院　聖塔院　正寶院　法成就院　蓮華院願主四條殿女

三寶院已下下、醍醐四十九院、

〔醍醐寺雜事記三〕一醍醐寺在家帳久壽二年三月二日取帳

合七百五十餘家內

堂四十二宇　塔四基　鐘樓三宇　經藏四宇　神殿十社　高庫二宇、御倉町三所、　湯屋三宇

僧房百八十三宇　御所三箇所、帳衆八十六房、　在家五百餘家內　職掌十人　小寺主十一人

堂童子三人　小舍人所十一人　政所三十人　御厩舍人三人　牛飼四人　番匠四人　鍛冶四人　山作四人

已上重役輩九十四人

車役二十人　召馬役二十二人　在家役三十人　此外在家人并從名等百二十八人　不レ中レ用在

家人十人

〔義演准后日記〕慶長三年二月二十三日、大閤御所〇豐臣秀吉御入寺、〇中略諸伽藍御再興之由被仰出、別當門跡領知千石拜領、不寄存知式、面目之至、〇中略此內、六坊再興イタシ、三百石可附被仰、殘七百石、門跡可藏納之由也、金堂、講堂、食堂、鐘樓、經藏、塔、湯屋、三門、以上八宇御建立之目錄也、此內五重ノ塔婆一基、御修理最中也、〇中略

同二十六日、塔五重出來、

六坊岳西院　光重院　金蓮院　成身院　西往院　中往院〇中略

同二十八日、大閤御所御成、〇中略ヤリ山ヘ御登山、〇中略

六坊ナハバリ、〇中略橫御立三十間ツヽ也、

三月五日、五重共ニ悉出來、

〔醍醐寺新要錄金剛輪院〕爰慶長三年戊戌二月、大相國〇秀吉渡御、池廣大ニ被仰出、聚樂ノ庭ヨリ、藤波〇〇ノ名石〇〇大石始メテ、海石巨多被運渡候、以數百之人夫、普請以夜繼日、〇中略昔ノ泉水ニ十倍セリ、南東ノ山ニハ、老杉交梢、西北ノ汀ニハ、名石立砌、瀧落ノ體恐無雙歟、諸人美談不淺、末代之門主不可被改候、抑灌頂院、阿彌陀院、寶池院、皆有泉水、代代烈祖御意也、

慶長五年庚子三月八日、經藏礎居、十二日立柱、竪四間橫二間半、二十帖敷也、但二階アリ、二十帖敷、以二階爲經藏、奉納置本尊聖敎佛具等、瓦葺立籠也、爲禦火難、

天正三年五月、從山上始下山、同十五日新始、同二十一日開舊跡、〇中略巍構四五宇之坊舍、既送二十餘歲之星霜、

爰慶長三年戊戌二月九日、大閤御入寺、花御覽支度、同十六日、又渡御當院、寢殿以下可有新造トテ、御手自指圖御沙汰、〇中略終日花御覽、或構新造之御殿、或立新巧之茶屋、盡善盡美、難筆舌、〇中略

同月十二日渡御、○中略従五月初旬之頃、大閤御不例、○中略雖然任御遺言、徳善院奉行、如形周備丁、十月六日、當院書キ坊舍壊テ、寺家六人ガ銘銘ニ支配、○中略同二十九日、御厨子所礎居、十一月二日立柱、竪十間、横四間、十一日常御所礎居、十七日立柱、竪十一間、横七間、十一日部屋町礎居、十二日立柱、竪十間、横二間、二十二日寢殿立柱、竪十二間、横五間、二十三日書院立柱、竪八間半、横四間半、二十七日灌頂堂礎居、十二月二日立柱、竪十一間横四間半、二日護摩堂立柱、三間四方、但北ニ有廂、已上半柿葺、二十一日盡周備移住、則修鎮宅護摩、徳善院奉行引揚候、番匠以下祿同賜候諸職人五百餘人、差饗膳、終日及酒宴、○中略同四年己亥三月十八日、湯殿礎居、十九日立柱、同二十一日、屏中門許始、五月三日周備、非常塀中門、以外結構也、柱扉以下黒膝、金物金銅、扉ニ三尺餘ニ、ツブ桐ヲホリ、押金薄、裏表ニ打之、其外、ホリ物アリ、柱六本建之、梁五本、唐破風柿葺、○下略

〔義演准后日記〕慶長十一年六月廿七日、山上學侶、伽藍指圖持テ、大坂へ四人下、

上醍醐伽藍御建立被仰出、御目録見、滿山、衆悦不斜候、早速御馳走厚恩之段、中々非所草言詞候、彌可然様御取成所希候、穴賢、

六月廿七日　判

片桐市正殿

尙々、三堂共ニ御再興、大慶不過之與申、

上醍醐堂舍御再興之儀、市正殿へ御入魂候故、早々被仰出、大慶不過之候、芳恩之至、難呈禿筆候、尙以御取成賴入候、穴賢、

六月廿七日　判

片桐主膳正殿

〔義演准后日記〕慶長四年五月三日、金堂再興、今日正面ノ階幷扉以下、悉出來了、本尊藥師、脇士二體

アリ、四天先一體修理、今日安置之、根本ハ釋迦也、雖然當堂ニ付テ到來、不及力、重而新ニ可造、

〔醍醐醋吸抄〕金堂（一名釋迦堂）

〔義演准后日記〕慶長五庚子年正月十四日、德善院罷向了、金堂爲秀賴卿可有御建立、（○中略）三月三日、上人來、金堂作事料折紙米千七百石、德善院可相渡、（○中略）二十六日、虹梁四本上之、（○中略）二十七日棟上、（○中略）四月十八日棟札打之、

〔拾芥抄（下本諸寺）〕醍醐如意輪堂（等身、聖寶內供、）

〔醍醐寺雜事記二〕阿闍梨大法師義範

右上醍醐觀音堂者、先祖建立之道場也、仍以門跡之上臈爲別當、職事爲定準、其來尙矣、今件人師資相承、補任當仁、別當職如件、向後之氏人等專不可背此旨、故符、

延久六年二月二十二日

〔醍醐寺雜事記一〕准胝堂　正堂一字（三間四面）　廊一字（五間）　禮堂一字（三間四面）　東西廊（各三間）　鐘樓一字（已上檜皮葺）　奉安置准胝像一體（高五尺）　如意輪像一體（高五尺）　前執金剛神像一體（高五尺）　左毗沙門像一體（等身）　右帝釋像一體（等身）　又前准胝像一體（等身、是堀河院御造立也、）

〔續史愚抄（桃園）〕寬延四年二月十二日庚辰、今曉寅刻、醍醐山准胝堂（○註二本○堂）火、貞觀十六年、理源大師建立後、所未火云、（醍醐記）

〔醍醐寺雜事記一〕五大堂一字（三間四面　檜皮葺　尊師建立　延喜御願）奉安置五大尊像各一體（等身）

〔醍醐寺新要錄（五大堂）〕天正十四年戊三月日、爲陽光院（○後陽成御父）御願御再興、面五間、奥四間、但未周備矣、傳聞、延喜御字爲朝敵降伏御建立、（○中略）御願忽成就、（○中略）爰關白太政大臣豐臣朝臣秀吉公、頻令

臨帝位給之由、巷說都鄙甚以不止、寔如履薄氷、宸襟不安、御愼不淺、依之仰延喜之先蹤、崇明王之効驗、陰謀堯助僧正、俄御建立、同年七月二十五日不慮崩給、爰准三后（陽光院后也、今上國母、仍令蒙女院之號給、）御施入料物衣、果遂叡願、一字如形造畢云云、今年〇慶長十年重而依令旨云云、大威德金剛夜叉二尊修理、但金剛夜叉者如新造、〇中略中尊者自之不損、仍不及修理、

〔醍醐寺雜事記三〕一釋迦堂一字（延喜御願、五間四面、）庇戶八具

奉安置釋迦佛像一體（結跏趺坐、長五尺六寸、頭佛師僧定聖、）

文殊師利一體（長四尺五寸、座下師子形五頭、僧時仁、）

彌勒菩薩一體（長四尺五寸、沙彌蓮樂）

已上金色

四天王像四體（長各五尺六寸五分）

賓頭盧一體（居長二尺八寸）

已上彩色

阿彌陀佛一體（居長三尺一寸）　觀世音菩薩一體（長四尺二寸）

得大勢菩薩一體（長四尺二寸）

已上金色、本願御周忌供養佛、（木佛前天蓋者、此佛天蓋也、）

不動尊一體（等身、大僧正御房定者、天承年中被奉居之、）〇〇〇

〔醍醐寺雜事記三〕一三昧堂一字（朱雀院御願）　三間四面　寶形造　檜皮葺

本佛普賢像一體（三尺）

延喜御本尊（天曆二年三月二十日宣下）　聖觀音十一面　如意輪奉安置之（口傳在之）（又阿彌陀三尊同安置之）此御本尊自內裏二間欲奉渡當寺之時、十一面頂上佛失了不見奉、入于醍醐之後、件頂上佛在矣、先令入、仍如本奉居而奉結付之云云（在本日記云云）又

延喜帝御筆金泥法花經員四卷、又御持經法花經一部、道風自筆同奉安置之、西三昧堂跡者、無量光院之跡也、其三昧堂五間、比皮葺也、東三間等身五大尊像奉安置之、醍醐夏花於此堂奉之、西二間三昧堂也、堂破壞之時、其普賢像、東三昧僧賢智奉見由所語傳也、其後普賢御在所不知之云云、於五大尊像者、大僧正御房被建立東僧房十一間之時南端被奉居之、件僧房破損之時、座主大僧都御房（[illegible]）被奉渡三昧堂、其僧房當座主御房（乘海）之時損失了、

〔醍醐寺雜事記 三〕太政官牒醍醐寺

永宛法華三昧堂料稻一萬束事

右太政官今日下近江國符偁、從三位守大納言兼右近衞大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣實賴宣、奉勅、件稻宜仰彼國、以正税宛本穎、始自今年加擧、毎年利稻舂備見米差幹了綱丁令運送彼寺者、國宜承知依宣行之、其舂功運賃用件稻內者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

天慶五年七月二十日　從五位下行左大史兼丹波介尾張宿禰言鑒牒

從四位下守右大辨兼行內藏頭源朝臣

〔日本紀略 三村上〕天曆三年三月、今月日、醍醐寺建法華三昧堂、運清涼殿材木作之、

〔醍醐寺雜事記 三〕五重塔一基（村上御願、瓦葺、）

安置胎藏五佛像（各三尺）

中務卿親王（代明）令啓皇太后宮（朱雀村上兩帝母、藤原穩子、昭宣公第四女也、）依其令旨所興造也、承平元年十一月三日、延賀法師勸支度進之、（普光寺塔支度也、）承平六年三月四日、右大臣採送心柱六枝、其殘諸王會可令引之、同年中務卿薨、爲公家御沙汰、

天曆六年十二月二日、供養百僧、講師禪喜僧都、呪願寛空僧都、讀師覺惠律師、三禮定助律師、（預遣塔事、今日任）唄運照阿闍梨、散花勢祐已講、堂達寛法法師、

傳云、經二年序一之後、破損之時、寶圖之母修二理之一云々、

〔義演准后日記〕慶長二年二月十六日、所司代德善院執事松田勝右衞門ヨリ、當寺塔修理之儀可レ有二御尋一トノ書狀到來、○中略同二十六日、塔婆爲二修理一、○中略大佛番匠來、同二十八日、當寺塔婆修理料目六、三千二百石餘也、今日德善院へ遣了、珍重珍重、○中略三月十九日、大塔中尊大佛、今度修覆、薄悉押レ之、四佛新造、○中略同二十一日、大塔供養、

〔醍醐寺雜事記三〕禮堂一宇七間二面　廻廊六十間、鐘樓一宇、經藏一宇、八足中門一宇、奉レ立二多聞持國二天像一、前大僧正御房定造立也、保安元年十二月十六日開眼、導師僧都御房勝覺、佛師院覺法眼、
八足南大門一宇、奉レ立二金剛力士像一、大僧都元海御造立也、導師寺一和尙深禪阿闍梨也、佛師金剛勢增、力士仁坤、
八足西大門一宇　四足東大門一宇
已上自二本堂一皆檜皮葺
額者道風之手書也、額裏算木有二自筆日記一、件木當レ及レ打之玉所レ落也、美濃君隆勝取而持レ之、權僧正御房時勝―聞二食此由一、雖レ遣レ召惜以不レ進、深隱了、日記之位所者、右衞門佐云云、於二正本一者、納二寶藏一、今額者權僧正御房時、以二出雲阿闍梨範意一令レ寫レ之、又前大僧正御房時、參議藤原敎長朝臣見二南大門額一申云、不レ似二我傳得本一、傳語云、醍醐者、依二魔事強一、寺之字者、守護人之打範物氣之委書レ之云云、仍以二件本一、令二澄雅阿闍梨寫一レ之、俱是不レ似二正本一、本願御宇勅云、南大西大兩門、以二何方一爲レ晴乎、奏曰、西大門者爲レ晴者、依レ勅以二信字額一打二西大門一、是大僧正御房之傳說也、

〔醍醐寺雜事記一〕一圓光院一宇、一間四面白河院中宮○藤原賢子御願、母右衞門督源顯房女、奉レ安二置金銅兩界曼荼羅一、
廊一宇四間三面　渡廊一宇三間　鐘樓一宇　僧房一宇五間三面已上檜皮葺　雜舍一宇二間二面板葺

應徳二年二月日棟上
供養　應徳二年八月二十九日　導師法務御房定賢　讃衆二十人　此内阿闍梨三人宣下
三十講　寛治四年六月一日
始、權僧正御房被行之、

件三十講　承徳二年六月三日　移無量光院

圓光院之跡者、廣壽聖人建立、持明院之聖人願云、我來生此處立御願利益山之僧徒云云、

供僧所作等略之

一同院折帳恒例佛事等用途事略之

一同院別當次第

權少僧都定賢

可爲撿挍云々

權律師義範

可爲別當

右件人等、宜爲前中宮職〇藤原賢子御願圓光院司者、

應徳二年八月十七日　　　前中宮亮在判　奉

權僧正勝覺令旨　大僧正定海此御時可付醍醐代代座主之由、經奏聞被付座主元海僧都了、仍自今以後者、以座主可知別當也等略之、

一同院修理別當幷知院次第等略之

圓光院領

一近江國柏原庄本公験延暦十二年十一月二十日員十三枚、

本主山城前司源盛清領、應徳二年寄進圓光院、但依致三千餘石未進、天承元年被付寺家了、本田百九町六段十歩、當時定百六十六町三段三百五十歩、

柏原方田百六丁五段三百五十歩

畠三十七丁三段

大野木方五十九丁八段　畠三十九丁二段半（等云云 略之）

一越前國牛原庄

庄田開嚴廳宣一巻（六枚、應德三年閏二月、）庄建立最初立券一巻（三枚、應德三年、）內撿帳一巻（十三枚、寛治二年、）立券一通（三枚、長承二年、）北庄百六十九町一段百四十歩、南庄百九十町九段七十歩、中央五十九町三段二百五十五歩、庄林四十町八段四十歩、毎年年貢五百石、內（所用三百十石四斗、用殘百八十九石六斗、）所當段別五斗、（此外加徴五升小加徴三升、收納時笠斗別二升、鎰付斗別三合、）

〔百練抄 五 白河〕應德二年八月廿九日、奉爲前中宮職供養醍醐圓光院、件堂佛閣內、奉納前中宮御骨、

〔朝野群載 十六 佛事〕醍醐寺圓光院

請被殊蒙天恩因准傍例長定置傳法灌頂阿闍梨三人狀

傳燈大法師位澄慶（臈年□□）眞言宗　東大寺

傳燈大法師位懷深（臈年□□）眞言宗　東大寺

傳燈大法師位定尊（臈年□□）眞言宗　東大寺

右謹撿案內、雖非御願寺定額寺、被置阿闍梨、解秘密法、古今之例、前蹤間存、爰此院者奉爲前中宮職御頓證菩提、宮臣同心、暮年之間、卜醍醐之山上、營土木於寺中、永定六口之禪侶、鎮修兩界之秘法、紹隆之勤、欲傳萬代、仍須被供僧等中年臈俱高、德行兼備之者、先當朝選、隨闕補之、方今澄慶等、眞言傳蹤、習護摩之密法、兩部受業、究諸尊之瑜伽、不擧若人、何弘遺跡、就中玆寺者、累聖之御願、眞言之名區也、伽藍之基、地形雖舊、闍梨之職、天慈未覃、寺家之鬱、唯有此事、適逢圓光之新規、欲慰方袍之舊念、望請天恩、因准傍例、永被定置傳法灌頂阿闍梨三人、以澄慶等補任件職、修練其法、然則聖日添光、遍照一清之水、長秋貢德、忽登九品之蓮、仍注事狀、謹請處分、

　應德二年九月十三日　　　撿挍阿闍梨權少僧都法眼和尚位定賢

　卽依請宣旨下了

〔爲房卿記〕應德二年七月十日壬寅、又醍醐御堂上棟立柱、（奉爲前中宮職（藤原賢子）以本職納物、大夫所被營作也、）件御堂佛壇之內、奉埋前宮御骨、移入金銅塔中、奉納石辛櫃、月來奉納茶垸瓶、奉安置淨房也、遷納之間事、大夫幷僧覺俊等奉仕云々、○中略　廿九日庚寅、今日、前中宮職供養醍醐寺內圓光院、中央安置金銅兩界曼陀羅、（壇下奉埋前宮後骨、子細見七月十日記、）件御堂、大夫源卿、以職納物幷伊豫重任物、偏所營作也、

〔百練抄〕（五堀河）承德元年八月、法皇奉爲郁芳門院供養圓光院、

〔醍醐寺要書〕僧綱牒醍醐寺

　應以東院○○爲御願寺、定置供僧參人事

牒玄蕃寮去七月三日牒偁、治部省今年六月廿九日符偁、被太政官今年正月廿三日符偁、得中宮職（○冷泉中宮昌子內親王）去年十二月廿二日解偁、奉令旨得醍醐寺十禪師傳燈大法師位慶助辭狀偁、此寺東院者、是故律師法橋上人位定助、去天慶年中、奉爲延喜聖主增法樂所建立也、巖石新削土木初成、朱雀院法皇慕先王之昔恩、運沖襟於本寺、適勅定助造立御室、禪窻忽開於洞戶、仙輸將廻於山門、而玉體不豫、珠簾无褰、龍駕終登鼎湖之雲、烏瑟永沈金沙之浪、卽卜件院便處、奉置山陵於堂邊、檐砌交影、松柏通心、厥後定助承院司之命、治平昔厨膳御器、鑄造西方彌陀尊像、卽奉安此院、定置修僧、晝則轉讀法花大乘、夜亦修念彌陀寶號、專奉爲法皇聖靈也、定助沒後修念僧等、禪悅之霞乏味、苦住之雲少緣、上歎御願之漸空、下悲師迹之欲絕、恐世已像末、人多變通、彌送皇風、誰以堂構者、昔在襁褓之齡、不知由緣、今見啓狀之文、尤可思念、抑椒房之資、桀邑多貢、以供佛陀、有何所乏、以施僧侶、猶非不豐、然而此只當時之事也、何爲永代之儲乎、早給奏請、廣作佛事者、望請官裁、以此院計定額之列、以三口爲修僧之數、若修僧有闕、院司定額補、申請本寺、將經言上、令補其闕者、右大臣宣奉勅、依請者、宜承知、依宣行

之者、寮宜承知、依例行之、牒送如件者、所仰如件、寺宜承知、依件行之、故牒、

從儀師在判

安和二年八月十七日

大威儀師在判 下略○

僧正寛空

〔醍醐寺雜事記十三〕東安寺

太政官符治部省

應爲醍醐寺別院東安尼寺事

在山城國宇治郡小野郷 字小野寺

右得散位新良貞雄去年十月二十五日解偁、件寺是貞雄先祖也、子孫相承、知寺家務、申成定額、申官任司、代々相傳來、於今月十日、先帝山陵被安斯地、僧衆來往无便行事、但有是亦先帝御願寺也、醍醐與山陵專不隔、堺東安寺醍醐寺宜爲綱維、加以名號尼寺、本自今以後、除弃尼字、寺司唯用三人、立以爲例、不聽衆任、卽寺家雜務將聽本寺分、以本寺上座爲執當之司、以貞雄之子孫定擅越職、後爲例法、望請蒙官裁、依件被裁下、然則先帝山陵不斷念佛之音、國家鎭護彌增熾盛之力者、又彼寺解偁、件寺近在御在所、停却破之煩、令定額僧等遞以寄住、奉警聖靈、誠得穩、永爲寺家別院、近奉壯嚴山陵、遠奉新朝庭、職省專簡、用先師門徒中、准眞言天台寺別院之例、寺家立爲恒例、以所有田園等、依舊將令宛修治料、然則東安伽藍以存興隆、西方實刹以飛慈雲、奉導聖靈者、左大臣宜依請承知、依宜行之、符到奉行、

從四位上行勘解由長官兼左中辨參川權守紀朝臣齊光

從五位下行左大史兼紀伊介錦部宿禰春陰

承平元年五月七日

奉行十月十三日

寺格

參議卿藤原朝臣　　　讀申少錄櫟井

〔拾芥抄下本 諸宗〕醍醐寺　各眞言爲本宗、以東寺爲本、

○按ズルニ、後世東寺高野醍醐ヲ同寺格ノ如ク爲スニ至リシ事ハ、金剛峯寺寺格ノ條ニ詳ニセリ、

〔醍醐寺要書〕僧綱牒醍醐寺

應以彼寺爲定額寺事

在山城國宇治郡笠取山醍醐峯

牒、玄蕃寮牒偁、治部省符偁、被太政官延喜十三年十月廿五日符偁、少僧都法眼和尙位觀賢奏狀偁、件寺、故師僧正法印大和尙位聖寶所建立也、先師、昔振飛錫、遍遊名山、翠嵐吹衣、何巖不踏、白雲拂首、何岫不探、徒然則刪遁世長往之蹤、未應令法久住之地、適以貞觀末攀昇此峯、欣然如歸故鄕、嘿爾思建精舍、採樹下草結成庵居、掃石上苔安口尊像、地勢相應、雖悅佛力之多靈、天時未來、還歎我功之晚熟、既而至延喜七年、僧正奉勅、初於此寺奉行御願造佛像事、同九年秋、閻浮緣盡、寂滅來催、鶴色爲之變林、鷄足忽以閉石、其後亦依御願造作佛堂、便勅觀賢得預其事、方今新堂雙宇揭焉煙峯之巓、尊容連光炳然寶殿之內、則知此寺興隆待明時而開運、先師念願積多年以畢功、伏望、以件道場爲定額寺、永修御願、護持國家、但任寺司者、拔僧正門徒之中堪職者、將以擧用、不爲僧綱及講讀師所攝、其門徒爲僧綱者、更非制限、然則不出一門之中、可傳萬代之外者、大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣、奉勅、依請者、省宜承知、依宣行之者、寮宜承知、依件行之者、僧綱寄狀依例行之者、宜承知、依件行之、故牒、

延喜十四年正月廿一日　　從儀師三勝

少僧都　　大威儀師〇中略

律師　　　　　　　　　威儀師雲〇雲一本作靈秀〇下略

〔東大寺具書〕東大寺醍醐寺勝劣對論事

彼濫陳狀云、東寺秀諸寺之條不及一言難破云々取詮

此條、東寺之秀諸寺者、當寺八宗內爲眞言宗別院之故也、已無對東寺判勝劣之所見者、全非難破限之條、勿論之次第也、

同狀云、憚惡口於東寺、惜過言於廣澤、無言甲斐次第也云云、取詮

此條、東寺所之諸寺全不成當寺敵論之企、醍醐獨建慢幢、當寺爭不摧破之、誇邪見倒想之僻執、擬曳穢和順寺之條、所存頗不足言也、〇中略

一醍醐寺非當寺末寺旨、任自由雖諍申、所申悉無所據事

彼濫陳云、若號因緣之繫屬、捨由來之勅宣者、何爲本寺、何爲末寺等云々、

右此一段、其狀雖詞多、皆序分歟、正宗只限一句見、就之謂之、以因緣之繫屬爲本末之由緒事、上古中古其例蓋多、專寺他寺其類甚繁、且舉一兩可顯實正、雍州海印寺者、文德天皇之御願、道雄僧都建立之故、爲花嚴之別院、宰府觀音寺者、元明天皇之御願、具足戒壇造營之後、成當寺之末寺、此等已雖爲勅願之寺、皆往代已來之末寺也、自餘之流例不遑于羅縷、醍醐獨以號勅願欲離末寺、不勘先規、不訪傍例、自由雅意之張行、新儀非分之濫惡、罪責無所遁者乎、抑由來之勅宣者、是何物乎、尤不審也、捨之云云、捨何勅宣哉、當寺所申者、醍醐爲當寺末寺之由也、非當寺末寺之旨、勅宣已無之上者、當寺全無所捨、無理之餘載無詮表之詞、猛惡論人之定習也、太以不便也、

同狀云、立七大寺十五大寺號之時、延曆寺等可號小寺乎、勅願本寺多之、何限四ヶ寺哉、隨又安和勅宣、醐醐本寺之旨分明也、凡本寺之號、其望各異、或望顯學業之道、或名密宗相承之地、互不可諍、又雖爲八宗一列、天台法相反改了、雖一門寺、權門諸寺定悔返歟、又大師號四家之眞言、將來八家

也、東大寺爲其外、可爲彼等末寺哉、又東寺一門之公請、敢非新儀、又東寺本寺之條承伏之上者、非五ヶ本寺乎、東寺醍醐人法無別、本末何異、又有職解文、眞言宗下東大寺、隨非本寺之支證、備左等

云云、

件條々、所申一々比興也、七大寺十五大寺等事、僅聞傳名目、都不辨濫觴、凡本朝諸寺之僧、代々應勅請事、都洛遷移之間、處々相改者也、所謂欽明天皇御宇、佛法傳來之後、以本藥師寺等四大寺、帝都被行法會、皆橘寺之近邊也、文武天皇御宇、遷都寧樂京之後、聖武皇帝當寺草創以來、漸又以件四箇寺被移平城宮之地、東大等七大寺起自斯、其後平安城之初、以七大寺專被賞翫、經數十年之間、東大興福兩寺之外、南都之鑽仰漸衰、延暦園城一門相分、北嶺之習學博盛、四箇寺之聲譽創于此時、然者以往四大寺中、古七大寺、近來四箇本寺、時代相隔、非同時之上、敢無妨難、不究子細、恣加謬難、諸篇皆如斯矣、十五大寺之號者、於南都私呼出之名目也、全非仕公庭應勅喚之一列、大師被申下官符中、雖有十三大寺之詞、全非十五大寺、今一具書載之條、無沙汰不足言之至極也、安和勅宣者、醍醐寺內以東院申成御願寺之日、對別院呼總寺爲本寺許也、以此本寺號欲對比四箇本寺之條、尾籠之所存也、是一次本寺之望各異、顯學大業之道、密宗相承之地云々、四箇本寺內、興福一寺者唯顯之地、自餘三寺者兼密之砌也、東大寺密宗即爲東寺之間、御齋會西廳出仕、爲南都一列之條、眼前之支證也、無由緒之由論申之旨、不知案內之至極也、以露顯了、

〔東大寺具書〕東寺隨公請事、是專爲東大寺不攝之故也、非新儀之由令申之條神妙也、非四箇本寺所屬、於被召加公請者、事免新儀也、諸寺可申子細之處、本來爲東大寺所攝、勸來之上者、曾不及沙汰、非新儀之條、則吾寺所申之所據也、弘法大師依勅爲東寺住侶、應勅請、弟々稟承繼踵不絕之上者、爲其門跡敵對當寺之條、絕流忘源、宜化口治罰、但倩見高祖歎德飾錦之文、併當吾寺稱美矣、添色之詞、尤以所令庶幾也、還而可謂神妙哉、是四次東寺醍醐非本末之由雖申之、後七日法代代日記分明之上

寺領用途

者、始而雖諍申、誰敢依信乎、其上醍醐之外一門之寺、木像經卷僅相殘、而受口決悉斷絶之由言上之條、我慢獨一之所存、過分偏執之至極、宜以此一篇被察其萬端者哉、是五

〔醍醐寺雜事記 三〕一奉施入封戸卅五烟（貞信公施入、承平三年十月三日、從一位左大臣藤原朝臣忠平、）

信濃廿戸　讃岐廿五戸

公文所

勘申可收御加封料物事

合卅五烟

廿烟信濃國　料物

調庸布八十端　中男作物、紅花大二斤四十兩、租穀八十石

廿五烟讃岐國　料物

調絹廿五疋　庸米卅石　中男作物、油一斗七升五合、仕丁一人　功錢二貫百廿四文　養米五石三斗七升四合　租穀百石

右勘申如件

承平三年十月三日左史生讃岐

依智秦良範

預散位吉田春宗

一中宮職（承平六年八月十日中納言兼民部卿平朝臣高藤朝臣）

施入　御封伍拾戸事

上野國廿五戸　伊豫國廿五戸

〔醍醐寺要書〕朱雀院

施入封戶五十烟廿五烟甲斐國、廿五烟播磨國、

奉仰云、件封戶、施入醍醐寺、此道場者、延長聖皇醍醐所建創也、灌叢薙除百草無遺、於其際、地勢平坦、三寶具足於其中、自彼龍駕不歸、斑竹成變、依山陵之接近、知佛陀之逢迎、香煙逐風、不隔芬芳之氣、華鐘報曉光、通寥亮之聲、斯蓋感動谷空相應月滿者也、昔在九重之宮城、爲十號之威德、新建法華三昧堂於寺中、作報恩資、薰修有勤、利益無極、今避寶位、偏卜幽居、一天萬乘之鴻名、早逢辭讓、二千戶之封邑、更驚優困、仍聊割茅土、敢獻蓮臺、唯願應器料分越之累、不出白雲之扉、燃燈添圓融之光、自照金繩之地者、

天慶九年十二月十一日　主典代近江少目菅野

別當大納言兼右近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣師輔　判官代修理亮藤原朝臣在判

〔醍醐寺雜事記〕三太政官符民部省

應加擧正稅上醍醐寺觀音堂燈分料三千束事

右得近江國去九月一日解偁、守從四位上藤原國光朝臣、爲鎭護國家、先年造觀音像、幷五大尊、安置上醍醐寺觀音堂、香花供養、運心涉年月、燈油佛供、觸色多闕矣、爰今年適忝分憂、頗預公俸、仍割件數、已宛其料、若非付公帳、恐難期永年、謹撿傍例、諸國牧宰、私造佛像、割其公廨、宛燈分料、申請官裁、因准傍例、早被裁許、加擧正稅、以其息利、永宛件燈分料、彌令鎭護國家者、左大臣宣奉勅依請、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

右少辨平朝臣　左少史浅井宿禰

康保元年十二月廿六日

〔醍醐寺雜事記〕二寺領

伊與國大島庄、領家中院右大臣雅定寺家用相折、百八十七石一斗四升也、內

百八石供僧六口、各十八石月別一石五斗、　日別五升
廿一石六斗預二人、各十石八斗、月別九斗、　日別三升
十四石四斗承任二人、各七石二斗、月別六斗、　日別二升
九石六斗下部二人、各四石八斗、月別四斗、　日別一升三合三勺四才
十石八斗御佛供料、月別九斗、　日別三升
五石四斗御明油三斗六升代、月別三升、
三斗六升香井燈心樒等直
十六石九斗八升御國忌料

彼庄由來者、故土御門右大臣家御領大島內、甘原方田三十町也、又故從三位藤原朝臣基隆、爲伊豫守之時、大島內吉浦方、以田五十町、寄進宮御品田畢、相具甘原田三十町、并八十町、爲御願寺領庄、又兩方各有畠七十六町云々、大治三年、官使史生等下向打牓示了、當時者、吉浦田四十三町、甘原方田三十七町也、田所當官物、段別五斗代、此外笠有二斗、是本家分也、又三升預所分也、又一升公文分也、又一升出納分也、又畠所當地子、段別麥二斗也、細々所募田定也、麥者雖本家、召物年貢、運上食物、并運賃料、所被宛之也、又鹽地子三十石、此外使分手料二籠、一斗也、名別歟、又桑代絹二十疋、又交易綿一兩、下米三升所召也、又宿人、一年四人、三十日仕之、

當時領家源中將通資朝臣、寺用年貢、依致巨多未進、件庄可付寺家之由、訴申院廳之處、領家被陳申五代相傳之由、寺僧就之、未重申上子細、若言上時者、未進之辨更不可依代々相傳、尙被執申相傳者、於甘原方三十町者、任本家預可放也、其外五十町者、宮之根源、御品田也、尤可被付寺家之由可訴申、

〔醍醐寺文書〕無爲知行處々

山城醍醐寺邊百石、桂邊百石、深草善綠寺五十石、　近江河毛鄕三百石、香庄二百石、山前庄三百石、

善理庄二百石、　美濃森部郷二百石　尾張日置庄（半分）安食庄二百石、初念庄二百石、　伊勢法樂寺（三箇郷）五百石　大和殿庄（半分）　丹波篠村（村社領佐作庄）　攝津山田庄桑津三十石、野鞍庄四百石、　播磨田中庄（半分知行之）五十石、小宅庄（半分知行之）五十石　丹後松氣庄五百石、以上領所二十箇所、

知行高合三千六百三十石　御敵陣處々

大和安養淨土院（三寶院領）百石　紀伊傳法院（寺領七ケ所）五百石　和泉鳥取領主職（傳法院領）百石、國泰寺百石、　河内志紀五ケ庄百石、郡庄百石、松原庄三百石、　近江毛平庄五十石、馬榀庄五十石、和田庄二百石、　筑前楠橋庄三百石、武恒犬丸兩庄千五百石、　筑後高良庄二千石

伯耆國延保三百石、以上領所十四箇所、

知行高合五千七百石　御方人々押領處々

武藏高田郷（手一揆押之）百石、　遠江初倉庄本家方（半分守護押之）二百石田庄（守護押之）二百石、　尾張日置庄（半分仁木左京大夫、土岐明智押之）瀨部庄（土岐押之）百石　越前牛原領家職（平泉寺法印並守護方押之）六百石　越中院林郷（多野野尻押之）五百石　伊勢曾禰庄八百石、片淵御厨三百石、泊浦（號小里）三百石、伊向神田五十石、松原庄五百石、南黒田庄五十石、（以上守護押之）　丹波黒岡光久安田庄（守護押之）　丹後鹿野庄（守護押之）五百石　播磨大河内庄（守護押之）三百石、高田庄百石、田中庄（半分修理）百石、　讃岐長尾庄（細川右馬頭押之）五百石、造太庄（細川式部大夫押之）千石、　阿波金丸西庄（細川右馬頭押之）百十五石　土佐大野仲村兩郷（細川式部押之）二千五百石　尾張國衙領一同（守護押之、奉行之地非私領）以上領所二十五ケ所、

知行高合八千八百五十石

以上三口分

領所五十九箇所

寺職

知行總高一萬八千百八十石

〔寺格帳下無本寺〕高七百八拾六石三斗御朱印三千九百九十八石貳斗餘之内　五十一坊配當　醍醐五十一坊總代

〔三寶院文書五〕醍醐寺管領諸門跡等目錄○中略

寺領在別

一左女中若宮別當職○中略　一篠村八幡宮別當○中略

一三條坊門八幡宮別當職○中略　一高倉天神別當職○中略

一佛名院○中略　一清閑寺法華堂別當職、

一清閑寺、大勝院、同南池院、　一鎌倉二位家、右大臣家、兩法華堂別當職、○中略

一但馬國朝倉庄福元方　一山城國日尾寺、善縁寺、

已上

〔海人藻芥〕醍醐ハ、座主被寺務也、

〔醍醐寺座主讓補次第〕醍醐寺座主代々讓補事

自最初座主觀賢僧正、至第十代慶助大法師、

被付寺務於聖寶僧正之門流、非必師資讓補之儀、

第十一代座主大法師明觀寺務二十年

長德四年十二月十七日、任座主、

後一條院御宇寬仁二年、當座主職、永可讓補門弟之由被宣下之、仍同十二月廿六日、讓寺務於弟子大法師覺源、自爾以降、不依年戒淺深、不論位次上下、偏以師範之擧狀被下官符矣、

第十二代大法師覺源明觀弟子、寺務四十四年

第十七權律師明海改名實運、元海弟子、三寶院相傳、院務四ヶ年、

保元元年六月十三日任座主、實運、勝賢、賢弟可讓座主職之間、保元三年十二月廿九日□□罷少僧都申任權律師畢、而平治元年十二月十二日、勝賢被配流、然實運自永曆□年二月九日所勞之間、以弟子乘海、同十八日讓此職、同十九日奏聞、任申請急可宣下之由、藏人辨朝方奉之、爰同廿日、天下騷動之間、宣下遲々之處、同廿四日、實運入滅畢、而同月、勝賢一類可被召返之由宣下、勝賢無程上洛之間、依勝賢配流、雖讓乘海、宣下之以前、勝賢既歸洛之間、任實運之日來契約、五月一日被補勝賢畢、

〔初例抄下〕醍醐寺座主始

觀賢　于時權大僧都　延喜十九年始補之

〔三寶院文書三〕應令大僧都滿濟補任醍醐寺座主職事

右、左少辨藤原朝臣經豐傳宣、權大納言藤原朝臣資敎宣、奉勅、件人宜爲醍醐寺座主者、

應永三年正月十四日　修理東大寺大佛長官左大史小槻宿禰（花押）

〔醍醐寺雜事記三〕太政官牒醍醐寺（内給）

應置任僧幷三綱事（十禪師云々）

○按ズルニ、滿濟以後、醍醐寺座主ハ、三寶院門跡ノ世襲トナレリ、事ハ三寶院篇ニ詳ニセリ、

權大僧都法眼和尙觀賢

權律師法橋上人位延敒（昇座主）

傳燈大法師位延性（年六十一、臈卅二、昇座主）　東大寺

傳燈大法師位眞願（年六十、臈卅、）　東大寺

傳燈大法師位神鏡（年五十四、臈三十、）　東大寺

傳燈大法師位仁晈（年四十七、臈廿七、昇座主）　東大寺

傳燈大法師位元方（年三十七、臈十八、）　東大寺

已上定任僧

傳燈大法師位觀嘉（年五十五、臈卅二、）　東大寺定上座

傳燈滿位　僧靈治（年五十、臈廿五、）　依補定額僧　東大寺定寺主

傳燈住位僧喜逢（年卅八、臈十九、）　東大寺定都維那

右權大僧都法眼和尚位觀賢奏狀偁、謹撿代々御願寺例、供僧及所司等、皆以官符補任、其迹明存、令件伽藍爲當代御願寺之後、未有定行住僧、及所司雜務、望請十僧之中、以一僧任座主、以三僧爲三綱、以六僧置定額僧、永以爲例、但件座主三綱及住僧等、毎有其闕、選定故僧正法印大和尚位聖寶門徒僧中、堪其職者、申官補入、他僧門徒、不可相雜、觀賢苟爲門徒之長、何以不擧請者、右大臣宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宜行之、

延喜十九年九月十七日

〔醍醐寺要書〕太政官符近江國司

應永宛醍醐寺定額僧僧供料米事

定額僧拾口料、白米毎日肆斗陸升、（日別四升六合）

座主一口

三綱三口

住僧六口

右大納言正三位兼行右近衞大將陸奥出羽按察使藤原朝臣仲平宣、奉勅、件料米、宜以彼國正稅永令春宛之者、國宜承知、依宜行之、仍須每月計日、在前運送之、其精代舂功運賃依例宛之、不得闕怠、符到奉行、

從四位上行勘解由長官兼右中辨參河權守紀朝臣淑光

從五位下大史兼紀伊介錦部宿禰春隆

承平元年五月七日

〔日本紀略 三 村上〕天曆元年四月廿三日戊寅、朱雀院幸醍醐寺、

參詣

〔醍醐寺雜事記 二〕花山法皇醍醐御登山記幷和歌詩連句等

太上法皇忝有御行、猥垂恩問、多奉勅命、時剋推移、還御之間、山中入夜、於是座主大法師、偏思御願之寄、忝駐仙駕之儀、新交殿上、頻勸數坏、侍臣醉顏、自有御覽、于時御製和歌、比況秋葉、尋得諷味、忽催感懷、仍不憚蕪詞、倫綴一絕、

致仕沙門元古老

一聞紅葉移顏艷、　追悔猶留漏御行、　莫導閑居容不變、　多年供奉幾丹誠

山ニ入テ頭白ヲナゲケドモ君ガミユキハ悅シカリケリ

〔醍醐寺雜事記 九〕一院(○後白河)御幸事

承安三年春、一院頃者、醍醐上下伽藍、幷石間寺可有御參詣之由云云、自然延引之間、當年清瀧會、勝於例年會之嚴重、所之作法、院中稱美、世間鼓動云云、俄三月十五日、可有御幸之處、件日密雨濛濛、臨幸忽止、同廿四日拂曉、有御幸、自西大門入御、先三寶院、可有御拜之處、御共之人人、不知案內之間、令迴南大門、仍座主幷源運法眼、參向南脇門、其時於脇門、下自御輿、參詣拜殿、法花經一品許、高揚御聲、令讀誦、御正面北間之西端、高麗御座一帖敷之、座主祗候于母屋之坤角、次入自中門、參詣釋迦堂、座主於中門內、被召而立御前、登壇、開正面之犬防入御矣、禮堂正面柱內、高麗一帖敷之、爲御座矣、座主祗候同東間、禮堂南端、高麗三帖敷之、中納言源資賢、中納言兼右衞門督平宗盛坐之、殿上人二人、右近少將兼信乃守藤原實敎、右馬頭兼內藏頭藤原親信等、祗候板敷、同法花經第七八卷、御轉讀御音

磐遇雲、視聽人銘肝、是希代之勝事、向後之美談也、見聞寺僧、貴賤如堵、或有拭感涙之者、或有致合掌之者、自同正面御出、自壇下向、東自廻廊向東脇門御出、經三昧堂之前、自東大門乘御輿、御登山、公卿二人上馬乘輿、殿上人已下步行、於山上先御參詣拜殿、御所作御念誦也、御座正面東間北端、高麗一帖裝之、公卿二人祗候東間大床、座主祗候御座東板、次御參詣准胝堂、柱內敷高麗一帖、爲御座、公卿二人、祗候庇、殿上人同以祗候、御念誦之間貫進御引出物、大師御筆一卷尊師鈴杵入蒔繪三衣筥師先入道取之奉傳源中納言、中納言取之被置御座上、開而經御覽、頗有御感、次被行御諷經、御導師、山上別當、已灌頂覺鑁、於內陣行之、諷誦物白布一裹、布施回絹二疋云云、主典代取之給御導師共人、次藥師堂、乍御輿拜見之、次如意輪堂、并於毗沙門寶前、有御所作、次五大堂、次御影堂尊師御物等悉以御拜見、奇異之由、有御叡感、次圓光院、開內陣御拜見了、座主自此下山、次御參詣石間寺、自寂靜院邊、俄雷電降雨、於笠取邊、雖有破子御儲、依雷雨空令過御、御輿舁四十人許、垸飯一具用食了、又於石間有御儲、供御成了、御所大房東端高麗三帖敷之、竹棚一脚、居御菓子十合、堂前御座、裝續綱御一宿也、法花經二部、千手經百卷、御轉讀云云、源中納言宿所東室、右衛門督湯屋進物所、橋下口餘之殿上人、并北面衆七八人、寄宿小庵室等、僧綱二人(房覺法印、實經僧都、)祗候笠取、御破子其夕、進覽石間御所了、上達部殿上人之中、支配之云云、抑淸瀧大明神、有御感應之時者、以雷電降雨爲瑞相、然今日自御出洛至御登山、天晴無片雲、諸堂御巡禮之後陰雲忽合、雷電霹靂、暴雨滂陀、已知神感之至、隨又申剋許、雨止天晴、前後之霽晴、靈瑞之揭焉也、祗候御前之公卿僧綱等、隨喜感悅之由、各被申云云、次日早旦、石山寺御拜見、無御逗留、卽自大津方遷御法住寺殿矣、昔花山法王之有御幸上醍醐寺也、是延命院僧都之勝躅也、今太上法王之有御幸上下兩寺也、非當座主僧都之遺美哉、仍爲後代大旨記之、

〔義演准后日記〕慶長三年二月十六日、太閤御所門跡馬場ヘ、直ニ御成、寢殿可有御建立由云云、櫻ノ馬場ヲ南ノ廣庭ニ構入、南ハ觀心院、西方院ヲ限、築地トノ御意也、北ハ東安寺モ入了、西ハ寶幢院

マデ也、東ハ灌頂院モ、過半屋敷ニ成了、百二十間四方トノ仰也、寢殿ハ東西十五間、南北九間、臺所ハ十間九間也、廊八間、護摩堂以下、御自身御指圖云云、同十九日、植木ニ櫻、〇中略八足口ヨリ、ヤリ山マデ左右ニ植了、同二十日、太閤今日御成、直ニヤリ山ヘ登山、〇中略泉水ノナハバリ中島ニ護摩堂、檜皮葺一宇、橋ヲカケ、瀧二筋落サルベキ御工也、聚樂御屋敷ヨリ、名石可引由被仰出候、〇中略去十六日、山號深雪山ト可號旨被仰出候、〇中略則御詠歌云、

相おひの松に花さく時來ればみ雪の櫻千世やへぬらん

〔太閤記十六〕醍醐の花見

夫惟、白髮は貴賤をわかず、月は雲をよぎず、花は風をいとはず、死は時を期せぬならひ目前なり、いざ此春は北政所に醍醐の花を見せしめ、環堵の室を出やらぬ女共にも、いみじき春にあはせ、胸のかすみをはらし、一榮一樂に世をわすれさせんとおもひよりしなり、〇中略

醍醐御普請之覺

一三寶院小破之所をば可加修理也、大破なる所は新儀に立直し、壘以下も新敷可申付候事、

一院外五十町四方、三町に一ヶ所宛番所を立、弓鐵炮之者を置、堅番を沙汰し可申事、

一伏見より醍醐に至て、道の兩邊に埒を結せ可申事、

一寺々宿札を打て、破壞之所あらば可致修理之事、

一院内院外、掃除念を入可申付之事、

一振舞等、其外萬潤澤に可有之事、

一百姓以下幷往還之旅人等、不迷惑樣に可有之事、

右堅可申付者也

慶長三年戊戌正月廿日　德善院玄以僧正

淺野彈正少弼殿
增田右衛門尉殿
石田治部少輔殿
長束大藏大輔殿〇中略

三寶院におひて御成ましく〱て、こしぞひの諸侍などかへしつかはし、夕日に及び、下々めしつれ相越べきとの御事也、則此院にて、右之御うへ〱〱裝束かへ給ひしが、はなやかなるよそほひいとおびたゞし、おの〱〱思ひ〱〱の出立、異やうなるゑな〱〱いづれもはれならずといふ事なし、是より寺々の名所、所々の花園まで、道の左右に埒をとをし、五色の段子のまん幕をうち、秀吉公父子、其外上﨟衆、かちにていとしづかなる有さま、人間の住家にはあらざるにやと思はれし體也、ふもとには當山の鎭守たうとく物さびてけり、左には鐘樓堂あり、右には五重の塔婆あり、櫻にあらぬ諸木まで、木だち物ふりつゝ、又有べき共覺えざりき、谷々の水落あふて、淸きながれのすえ〱〱、魚のあそびたはふれ、をのがさま〱〱なるを御覽じつゝ、なをたのしみあへりぬ、〇中略二三町山上し給へば、谷の左右、咲も殘らず散そめもせぬ花あまたにして、寶枝をならさぬ風、香を吹送りしかば、溫問此上有べきとも更に覺えざりけり、心有御供之中に、

聞說醍醐花世界　見來此處雪乾坤

又有人の

天が下殘らぬ花のさかりには山より山や風にほふらむ、となんよめりけり、

〔三寶院文書六〕御立願條々

一於當寺可奉成行幸給、上意之事、

一七堂伽藍可被成御建立、御誂約之事、

一於神前御能可被遊御用意事

一天下無雙一切經、可被成御寄進御詫事、

一坊舍寺領等、既被仰付候事、

一千本櫻之外、至萬木可被成御殖事、

一於當社千句連歌可致執行事

右明日十五日、太閤大相國様〈○豊臣秀吉〉秀頼様、御花見御遊覽仁、風雨不鳴枝、天晴雲收、御宴於御成就者、條々早速可被成御執行候也、

慶長三年三月十四日　興山上人

〔醍醐寺雜事記十一〕一寺家宿直兵士事

正月〈牛原南庄〉二月〈同庄〉三月〈牛原北庄〉四月〈同庄〉五月〈河内庄〉六月〈中央庄〉七月〈柏原庄〉八月〈同庄〉九月〈曾禰庄〉十月〈同〉十一月〈自朔日十五箇日、牛原北庄下司、自十六日十五箇日、牛原南庄下司、〉十二月〈自朔日六箇日、中央庄下司、自七日八ヶ日、柏原庄下司、自十五日七ヶ日、大野木下司、自廿二日九ヶ日、曾禰庄下司、〉

右各兵士五人限、永代可勤仕之狀、所定如件、

〔新勅撰和歌集十七雜〕醍醐の山にのぼりて、延喜の御願寺をみてよみ侍りける、　中原師季

なをとむる世々のむかしにたえねどもすぐれし跡ぞみるもかしこき

〔三寶院文書五〕醍醐寺方管領諸門跡等目錄

一三寶院〈○中略〉　一寶池院〈○中略〉

一金剛輪院〈○中略〉　一遍智院〈○中略〉

一安養院〈○中略〉　一菩提寺〈○中略〉

一鳥羽金剛心院　一大智院曼荼羅寺○中略

一醍醐寺座主○中略　一傳法院座主○下略

〔醍醐寺要書〕右大辨紀朝臣淑光傳宣、中納言藤原朝臣扶幹宣、奉勅、後山階新陵陵戸五烟、徭丁二十五人、暫停諸陵寮領、宜寄醍醐寺令守御陵者、

承平四年七月十三日　左大史坂上在列奉

彼御陵八十町者、東西八丁、南北十丁、定畫、淑光日記文

四角　巽足形東里卅六坪　坤同西里卅五坪

艮捧口西里十三坪　乾大藪里十四坪

御在所者、上小野里十六坪用之、醍醐寺、勸修寺、願興寺、此之三箇寺中所安治有其故事也、

延長八年十月十一日辛丑　於山陵署之

〔三寶院文書五〕三寶院御門跡雜掌重而謹言上

右醍醐御陵、不混諸陵子細、如先度委細言上、被寄附當寺之證文、承平四年之傳宣明鏡也、總而醍醐十保之事者、當門跡御管領也、代代御判等、嚴重之儀在之、仍此陵之保、十保之隨一也、爰先年在通令競望醍醐御陵、掠給御下知事、古今始也、依驚尋歎申處、仁、則被成返御下知訖、既當御代御成敗之上者、無紛者也、然仁尙號在重本領而匪啻企濫訴、剩寺院年來知行者非分之押領云云、言語道斷次第也、從往古之寺田於在重押妨、曾無謂、其故者、滿寺晝夜之勤行、四海安全之懇祈、衆亦奉廻向延喜、朱雀、村上三代之御菩提外、更諸陵頭捧禮奠儀無之、特當月廿九日、爲天皇正御國忌、衆徒悉令參詣御廟所、江事、每年不怠之法會也、迄于土民等、皆以令存知、構御陵謂事、不可有其隱、然而當年可退轉哉、愁歎有餘者也、

一延德二年、兩方捧訴狀、理非之段達上聞、醍醐寺仁被返付處、一方向之御沙汰云云、前代未聞儀、條

名稱　所在　創建　沿革

條恋解狀也、〇中略

永正六年　月　日

〔女人往生聞書〕醍醐ノカスミノウチ、女身ヲモテオモムカズ、

附　三寶院　理性院　金剛王院　無量壽院　報恩院　併入

三寶院ハ、醍醐寺西門〈山下ニ在リ〉ノ外ニ在リ、其初ハ同寺ノ院室ニシテ、醍醐寺座主勝覺ノ開基セシ所ナリ、南北朝ノ比、院主賢俊、足利尊氏ヲ助ケテ功アリ、尋デ滿濟義滿ノ猶子ヲ以テ、此室ヲ繼ギ、准三宮ト爲リ、醍醐寺ノ座主職永ク當院院主ヲ以テ繼續スベキノ宣旨ヲ蒙レリ、當院ノ院家ニ、理性院、無量壽院、報恩院、金剛王院等ノ院家アリ、原ハ皆三寶院ト相並ビテ、醍醐寺ノ院室タリシガ、德川幕府ノ初メニ至リ、室町將軍ノ故事ヲ尋ネテ、遂ニ三寶院ノ下ニ屬セシムルニ至レリ、

〔山城名勝志〕〈十七　宇治郡〉三寶院〈醍醐寺座主、在西門前、織田信長公、爲將軍義昭二條御所造營時、細川亭ニ有シ、被引進藤戸石、疊水石、其外所所ノ名石ヲ聚ト云云、秀吉公時、彼石ヲ被寄當院云云、〉

〔密宗血脈抄〕〈二〉仰云、此僧正〈〇勝覺〉乳母子有二人法匠、舍兄賢覺理性房、理性院始也、舍弟聖賢三密房、金剛王院始也云云、但三流相對云、三寶院時者、以定海僧正爲本體也云云、星遍口決云、三寶院事、灌頂堂幷經藏、權僧正〈〇勝覺〉御時造之云云、但此後說不審云云、結緣灌頂、同時天承年中被始行之云云、

〔諸門跡譜〕〈中〉三寶院〈勝覺權僧正建立之〉

勝覺權僧正〈〇〇初祖〉

堀川左大臣源俊房公男、土御門右大臣師房公孫、天喜五年誕生、寬治六五十六叙法眼、三十六歲、嘉承二五廿三任權少僧都、五十一歲、保安元十二晦任權大僧都、六十四歲、大治二九十一任權僧正、七十一歲、同四四朔寂、七十三歲、醍醐僧正是始也、

定海大僧正（醍醐寺座主）

右大臣源顯房公男、土御門右大臣師房公孫、承保元誕生、（中略）久安五四十二寂、七十六歲、醍醐大僧正是始也、

〔雍州府志 五寺院〕宇治郡　三寶院　元聖寶之本庵、而今爲醍醐寺門主之室、凡聖護院爲眞言山臥之本寺、是謂本山衆、慕役行者入峯之跡、自熊野入大峯出吉野、是謂順峯入、爾後大蛇自大峯出擁路、依之入峯年久絕、然醍醐寺聖寶、自執斧鉞、自吉野山入大峯後山、出其不意、始自蛇尾寸寸截之、遂出熊野、自是入峯又興起、依之三寶院流、是謂當山衆、稱逆峯入、（中略）聖護院、三寶院兩門主、各一代一度入峯、建碑傳於山上、而爲後來之證、當寺門主室、元號金剛輪寺、自古於此寺中、撰有德人、令住斯院、主裁寺事、然龜山院時、實深創建報恩院、斯院有清泉、或稱水本、是眞言小野六流之隨一、而稱水本流、實深師弟定濟、住寶池院、傳眞言松橋流、又兼金剛王院法流、于時稱傑出人、又兼帶佐目牛八幡別當職、其後移住三寶院、斯院元、山中有德人輪住之處也、斯僧崇龜山法皇之歸依、且俗種爲官家之所緣、故三寶院自是以來爲獨住、至今連綿、定濟弟子滿濟、二條殿庶流、師冬公之息、而鹿苑院義滿公之養子也、後住義演、二條殿晴良公之子、而甚得豐臣秀吉公之寵遇、公斯山櫻花遊覽時、義演被設經營、今門主客殿、則秀吉公所賞花之亭、而始在山腹、于今其跡存矣、殿中之彩畫、狩野榮德之所畫也、樓門有菊桐之紋、是又賞花亭之外門也、庭前假山、有藤戶石、相傳、元在備前小島、佐々木三郞守綱、殺嚮導之人於斯石上、秀吉公取斯石、置聚樂城、爾後寄斯寺、當山秀吉公遊覽時、被附三百石寺產、

〔醍醐寺雜事記 四〕一三寶院（又號灌頂院）五間四面

奉安置大日藥師釋迦（各三尺、白檀、定朝作云云）、兩界曼荼羅、禮堂（六間）廊一字、（五間二面）中門一字、并廊九間、四足門一字、（已上檜皮葺）經藏一字、（五間瓦葺）寶藏一字、（瓦葺）寢殿一字、（七間四面）侍廊一字、（五間一面）客侍一字、（三間二面）護摩堂一字、（三間）持佛堂一字、（三間三面）隨身所一字、（三間二面、已上檜皮葺）雜舍一字（十間、板葺）、湯屋一字、（三間四面）厩一字、（二間、板葺）

寺格

權僧正御房、令建立三寶院、　永久三年十一月二十五日供養　導師嚴覺僧都　額字、堀川左大臣源朝臣〇俊房之御手書也、

次大僧正御房、大廈造成之被寄進、　鳥羽院御願、定置供僧十五人、毎日修供養法、白月十五日金剛界、黑月十五日胎藏界也、

天承元年十二月十九日、始被行結緣灌頂、〇中略

〔教令類纂初集九十三〕正德甲午年七月

一三寶院殿と醍醐三院家〇理性院、報恩院、無量壽院、出入ニ付裁許之書附、　三寶院殿へ被仰出之御書付

一醍醐寺法流之事、座主の所職たる故によりて、慶長元和之間、其宗の法制條目を以て、三寶院御門室に被成下候事、度々に及び訖、然則當家祖宗の御旨を奉られ、彼山古今之事例ニ據られて、御門下諸寺院等、嚴重に御沙汰あるべき事、

一醍醐寺領之事、慶長以來、三寶院御門室へ寄附之御判、重疊たる上ハ、凡事の大小に限らず、門室の御沙汰たるべき事勿論ニ候、然りといへども、元和以來、醍醐寺領の內をわかち領する寺院に、御朱印を被成候所の、御沙汰におゐてハ、門主より其領家へ仰下され、領家おの〳〵其仰をうけて、領分所下知あるべき事、

一御門下諸寺院等の事、門室の御沙汰に決せられがたき事、有之におゐてハ、慶長以來の例の如く、京職に就て、其事の子細を御申あるべし、御朱印を帶し候寺院領の事ニ至ても、或ハ門室の御沙汰に決しがたく、或ハ醍醐寺領の外之他領に相かゝはり候事におゐてハ、御門室より、京職に案內を通せられ候上ニて、其領家より訴出候樣に可被仰付事、

右三ケ條、醍醐寺院家等の事によりて、三寶院御門室より、訴申され候處、御裁斷の上、被仰出候處也、

正徳四年甲午七月

大和守　源朝臣判
豊後守阿部朝臣判
河内守　源朝臣判
相模守　源朝臣判

右令條

〔教令類纂初集九十三〕正徳四甲午七月

三院家へ相渡御書付

一醍醐寺座主職之事、満済准后以來三寶院門室において、拜任の例たるによりて、慶長元和の間、其宗の法制條目を以て、彼門室ニ被成下候、然則朝章といひ、國制といひ、既ニ重疊たる上ハ、三院家等宜其義を存すべき事、

一慶長以來、醍醐寺の院家不律之僧門室御申の旨に付て、其法に行はれ、并ニ院家其門室ニ隨身の儀例に、其事證既に分明なる上は、三院家等妄に異同を論ずべからざる事、

一醍醐寺領の內、三院家等領分沙汰之事、元和以來、御朱印の旨に准じて、領家の進止たるべき事勿論に候、雖然慶長以來山上山下の寺領すべて、これに三寶院門室を寄附之御備有之上ハ、毎事門室の仰をうけて、おの〳〵其領分に下知すべき事、

右三條、三寶院御門主御申之事について、御裁斷の上、被仰出候所也、

正徳四年甲午七月　豊後守阿部朝臣判

報恩院
理性院
無量壽院

〔折たく柴の記下〕此年〇正德四年八月、三寶院門主訴の事を御沙汰ありけり、是は醍醐の院家、報恩院、理性院、無量壽院等、路次禮節の事より起りて門主に對捍の事有しを、訴申されしによりて、此年の二月、三院共に下向すべきの由、寺社奉行所の召文を遣せしに、紀伊守信庸の朝臣、老中に狀送りて、三院は當時の御護持の僧にて、就中報恩院は、東寺の長者、理性院は第二の長者なり、當職の法務加勤等、一時遠國に去し事、密家において其例なし、台家には其例あるかの由を申す、是によりて、仁和寺、大覺寺、安井等に、其例をとはれしに、各答へられし所、三院申條に同じ、三寶院にとはれしに、東寺長者職護持僧の時、關東下向の例を記し出さる、三院殘らず下向なからんにも、苦しかるまじき事にや、うち〳〵某が所存を承はれとの、叡慮の由、傳奏の人々申されぬとぞ記されたる、詮房朝臣、此事いかにや有るべきと問はれしかば、三院しるし出し丶所にも、台家の例あり、三寶院殿しるし出されし所には、密家の例あり、三院當時の護持僧なるをもて、朝憲をかりて、奉行所の召に隨がはず、三寶院殿に對捍の罪已に決せり、事ゆるがせならん事然るべからず、其中一人をとゞめられて、其餘は早々下向せしめらるべきよしを、仰遣はさるべしと申す、其由を答へられしかば、いく程なく、報恩院、理性院、兩大僧正下向せり、三寶院殿訴へ申さるゝ所をもて、召とはるゝに、三院共に、昔は門跡と稱したりき、今に至りても、三寶院と共に、東寺長者職に任じ、同じく護持の僧ともなさる、然るをやゝもすれば、其門下の院下の如く申さるゝ條、其謂なしと申より事起りて、寺社奉行の人々、其枝葉の事どもを論せしほどに、其事の論多くなりて、此獄いづれの時に決すべしとも見えず、詮房朝臣、此事をとはれしに、是ら計の事を決せんに、何條事か有べき堂上のき、人々の、かへりきかん所も口惜き事にてぞと申たりければ、老中の人々にも、議せられたりけん、某が議を參らすべしと有けり、某が議を參らする迄もなし、院家等に、此問目を下さるべしといひて、醍醐寺の座主、第七十三代三寶院の準三后滿濟、應永年中、其職に任ぜられしよ

り此かた、他院の僧、座主職に任せられし例あるやと問ふに、其例なしと答へ申す、慶長年中東照宮醍醐法流の事、其沙汰に任せらるゝ由の御條目は、いづれの所に有やととふに、此事をば存せずと答へ申す、勅賜開山大師號の事によりて、勅使登山の時に、三院其座を論じて、法會に預らざる事の由を問ふに、灌頂曼陀羅供の時、院家寺家同席の儀ある事は、此二會においては、大阿闍梨を尊宗の儀有によれり、他の法會に比すべからず、然るをかの法會に當りて、三寶院の門主院家寺家等、座次を同じくせらる、是によりて集會にあたはずと云、其後凡天下の事勢は、時に隨がひて相變ず、古時の例、今日の事に準ずべからず、醍醐寺座主職の事も、古に有ては、彼山の院家等相互に補任の事ありとも、應永より此かたは、三寶院の門室譜代の職となれり、其餘或は門跡と稱し、或は院家と號する事の如きも、古の時は今の如く其品異なりとも見えず、就中神祖天下の事を知し召れしに至りて、古來の例を斟酌せられ、當時の時宜を議定せられし所は、當家一代の定制なり、然るに當時の制を捨て、往代の例を論ずる事ども、其謂なし、慶長よりこのかた、醍醐法流の沙汰を任せらるゝの御條目を、三寶院殿になされし事は、たとひ諸國散在末流の寺院も、此旨を存ずべし、況又其山において、他に異なる由を申す、院家等承り傳ふる所なき由を答へ申條、嘗家代々、其寺領を寄附の恩より來る所をもしらずんば、當時何の法制を以て、其軌範とはするや、たとひ其當家百餘年以來、かの山の事をもて、三寶院殿の沙汰に任せらるゝ事を存じ知らずとも、一山の座主職に任せられし事は、朝家の勅旨なる事を存じ知らざらんや、三院古の時に在て、門跡の號あるをもて、他に異なるの院家たる由を申す、當時に在て、正しく一山の座主職に任せられ、一山沙汰の事を任せられし門主に對して、無禮を顯はし、爭論を起すごとき者ども、いかんぞ護國の大法、聖體の護持など、其功驗を致すべきや、又醍醐寺開山の祖贈號宣命使登山之日、其座位を論じて、集會にあたはざる事の如き、たとひ其宗儀において、大阿闍梨を尊敬の儀、大日如

來に相同じきと云とも、僧家四恩の儀によらば、朝恩佛恩いづれか輕重あるべき、朝使禮待の儀、大阿闍梨尊敬の儀及ぶべからざる事、其謂をしらず、況聖寶僧正、滅後八百年の後に至りて、勅賜大師號の事、其法孫にあつて、此會場に相預かるべき事、誠に希代の値遇なり、然るに一偏の我執によつて、朝恩をもかへりみず、師恩を併せて忘れしこと、都て律義において何のかなふ所か有べき、路次禮節の如きも、同位同官禮節に及ばざる堂上の例ならんには、假令同官同位の大臣、路次において揖讓に相遇ふ時、同官同位の故を以て、致敬の儀に及ばれざらんか、三寶院殿においては、朝家既に座主職に任せられ、當家已に法流の事を任せらる、たとひ院家等同官同位たりといふとも、其職分においては、いかで其禮節なかるべき、是等の事ども答へ申べき由、六條を記して參らす、院家等此問目を得て、一條も披陳の詞なくして、怠狀を參らせ、仰ぎ願くは、院家法流の差別相立ち、只今迄有來るごとく、一山如法の事に隨ひ、此後天下安全の御祈禱を勤修せしめられんより外無二他事一由を申ければ、其獄立所に決してけり、(六月の事なり)其寺領の事等、御沙汰に及ばれて後、八月に至りて、某が草せし定文をなし下され、三寶院殿の使者、幷院家等御暇を給はりて歸さる、やがて三寶院殿より、謝恩の狀を參らせられ、門室の興隆を悅び給ひたりける、此時の事記せしものども、大半は紛失して、今は只院家等に下されし問目定文等の草のみ殘りしなり、(此時三寶院殿の使者、北村長門守、安江賴母と云、二人を下されたりき、)

寺領　寺職

〔醍醐寺雜事記四〕一三寶院(又號二灌頂院一○中略)

鳥羽院御願、定二置供僧十五人一、毎日修供養法、○中略

寺領、　尾張國安食庄、見作田百町四段百二十歩、所當美絹別一疋、　庄田來本統正王施入釋迦堂庄例失之後、大僧正御房爲二灌頂院一所二令申立一也、

〔寛永七年雲上明覽大全上〕三寶院御門跡

御寺領三千九百九十八石二斗餘守護使不入之所、内御院領六百五十石 醍醐御里坊梨木町廣小路北

御宗旨眞言大峯當山御法頭
三寶院御門跡定演 四十七

醍醐寺座主前大僧正法印

鷹司故政熙公御子

同

院家 報恩院前大僧正理性院僧正無量壽院大僧都法印寶光院大僧都法印

住侶 持明院山務僧正岳西院權僧正行岩院權僧正龍光院大僧都彌勒院大僧都成身院大僧都佛眼院權大僧都戒光院權少僧都光臺院・金蓮院西往院總持院密乘院慈心院普賢院密嚴院向彌陀院田明院

坊官 御家司大溪宮内卿法印山田式部卿法印平井兵部卿法眼

諸大夫 御家司北村掃部少允同伊勢守左右田加賀介執達甲村阿波介

侍 藤井六位代官飯田河内介

江戸御役所 鳳閣寺

東都御里坊御留守居丹羽直記

院室幷修驗觸頭諸國散在不遑枚擧故略之、

〔梅松論 下〕夜〇建武三年二月十一日更て赤松入道圓心、酒に將軍〇足利尊氏の御前に參りて申けるは、縱此陣を打破て、都へ責入といふとも、御方疲て大功をなしがたし、しばらく御陣を西國へ移されて、軍勢の氣をもつがせ、馬をも休、弓箭干戈の用意をも致して、重て上洛有べき歟、凡合戰には、旗を以て本とす、官軍は錦の御旗を先だつ、御方は是に對向の旗なきゆゑに、朝敵に相似たり、所詮、持明院殿は、天子の正統にて御座あれば、先代滅亡以後、定而叡慮心よくもあるべからず、急に院宣を申

くだされて、錦の御旗が先立らるべき也、○中略備後の柄に御著有所に、三寶院僧正賢俊、勅使として、持明院より院宣を下さる、是に依て人々勇あへり、

〔諸門跡譜　中〕三寶院○中略

賢俊大僧正　法務

權大納言藤原俊光卿男○中略

滿濟准三后

權大納言藤師冬卿男、權大納言基冬卿孫、征夷大將軍源義滿公爲猶子、永和四二生、應永六三叙法印、廿二歲、同十六三廿二、轉大僧正、三十二歲、同三十五四廿准三后宣下、五十一歲、

里坊

〔山城名勝志　三洛陽〕三寶院　土御門萬里小路

普光院殿拜賀記云、永享二年七月十六日、今日渡御三寶院、土御門萬里小路門主准后、前大僧正滿濟御小直衣御車也、

〔應仁記　二〕三寶院責落事

無程大內等上洛ス、山名方ニハ大ニ悅ンデ、龍ノ水得タルゴトクキホヒ、下京ノ細川方ヲ追拂、武衞ノ構ヲ根城ニシテ、細川陣ノ東ノ面ヘ攻上テ、內裏ヲ警固シ、相國寺ヲ陣ニ取、御靈口ヲ塞デ、敵ノ通路ヲ留ントト支度也、武田大膳大夫ガ舍弟安藝守基綱、三寶院ヲ固テ、內裏ノ御警固シテ居タリシヲ、右衞門佐義就、能登ノ修理大夫、大內介、土岐、六角、一色、五萬餘騎、東陳ノ一ノ木戶ナレバトテ、三寶院ヘ押寄、武田基綱、大力ノ勇者ニテ、手勢二千人ニテ、三寶院ノ門ノ片扉ヲ開キ切テ入、○中略カクテ三寶院ヤケヽレバ、淨花院ヘ押寄テ責ニケル、

雜載

〔三寶院文書　一〕三寶院事、雖有申子細之輩、依通圓憲源等讓、先規勅裁被仰下候、貞永回祿之後、院家造營其功畢、依任眞濟僧正之委附、永可令門跡相承給候、依院宣執達如件、

弘安六年五

醍醐座主法印御房

〔弘鑁口說〕憲深僧正醍醐ノ座主持給シ時、三寶院ノ院家ヲバ、地藏院ノ親快御知行ナリ、三。寶。院。本。ヨ。リ。座。主。坊。ノ。事。ナ。レ。バ。、憲深ノ方ヨリ、親快ヘ借リ被申、御爲ニハ憲深モ師匠ニテ御座セバ、無異義被借申、然ル間憲深一期ノ後ハ、親快ノ方ヘ被返申ベキニ、左モナク、定濟ノ方ヘ讓玉ヘリ、親快事外ニ思食テ、龜山院ヘ此事ヲ歎キ給フ、然ニ定濟本ヨリ龜山院御メノトゴ御妻愛ノ事ナレバ、曾テ御許容ナケレバ、親快淸龍ヲ恨ミ被申、御惡見ニ入ツレ、淸龍ト中違シテ、西山ニ陰居シ玉フ、

〔寺鑑下〕當山修驗

觸頭

鳳閣寺（三寶院御門跡直末）正大先達

右住職、本寺三寶院御門跡より申渡有之、

○

理性院

〔山城名勝志宇治郡十七〕理性院（在三寶院北、眞言宗之本寺、一流之法統也、元祖法眼賢覺太元阿闍梨、法琳寺別當云云、院內有太元堂、每歲自正月八日迄十四日七箇日被行御修法、）

〔諸門跡傳一〕理性院　賢覺法眼　賢圓威儀師息、高野小別當、　太元別當、法林寺、大安寺、東安寺別當、

〔理性院文書乾〕太元明王者、合戰之師法、三國無雙之爲本尊、今般被移院內、太元堂再興之事、早仰武勇之輩、以奉加之勸誘、被企一宇建立、一天安全、五穀豐饒、可被抽懇祈之旨者、天氣如此、仍執達如件

九月五日　　左中辨光房（〇甘露寺）

理性院僧正御房

無量壽院

〔山城名勝志宇治郡十七〕無量壽院（號松橋、在金剛王院東、元在山上寂靜院谷云云、）

報恩院

〔諸門跡傳 一〕無量壽院(號松橋門跡)

元海大僧都　京極源大納言雅俊卿息、保元元年八月十八日寂、六十四、自法身如來第二十代祖、松橋本願、

〔山城名勝志 宇治郡 十七〕報恩院(號極樂坊、在下醍醐、深沙橋邊、今日釋迦院、)

〔報恩院文書 四〕醍醐寺報恩院所司等謹重言上〇中略

右大智院者、永代爲報恩院門跡領、與行佛事以下、未來際不可退轉之由、勅裁懇懃、子細先度具言上畢、爰、

宮廳(大覺寺宮)〇濫陳狀云、依奉入先覲宮於道順僧正門跡、爲御輔翼被付當院家於報恩院之由、正和年中被下院宣於僧正(于時法印)畢云々、

此條不知案内之至歟〇中略

同狀云、去元亨又加當寺末寺、被載官符畢、前後御沙汰、併依爲御進止地也云々、

此條、大覺寺末寺十六箇寺者、云員數云名字、依爲歷然不被加之處、今宮廳被加末寺内之由書載之條、奸曲至也、以之思之、非舊院(〇後宇多)御素意之條勿論也、至崩御以後、十二月官符被載之由、太以勞籠也、右筆之謬歟、宮廳僻案歟、末寺分與諸庄園未治定之條顯然也、是偏背理致爲掠領之所見者也矣、〇中略

觀應元年八月　日

〔寺格帳 下 無本寺〕高百五拾六石(御朱印三千九百九拾八石貳斗餘之内配當)　三寶院御門跡(京醍醐)院家　報恩院

(御朱印)高百石　釋迦院

右貳ヶ院住職、從三寶院御門跡被申渡、

一入院御禮無之

一年頭御禮、兩院ゟ代僧一人、御白書院御次一同、獻上卷數、

一御暇於檜間、寺社奉行申渡、奉書貳通幷時服壹拜領之、取渡ス

〔山城名勝志字治郡十七〕金剛王院在三寶院南、號三寶院西賀茂靜光院、

〔密宗血脈抄二〕仰云、此僧正〇聖覺勝乳母子有二人法匠、舍兄賢覺理性房、理性院始也、舍弟聖賢三密房、金剛王院始也云々、

〔諸門跡傳一〕金剛法院

聖賢　自高祖弘法大師十二代祖、小野六流之隨一也、金剛王院阿闍梨、又號三密房、號西光院、元名賢仁、賢威儀師息、

岩間寺

岩間寺ハ、又正法寺ト號シ、山城國宇治郡笠取山ノ東ニ在リ、僧泰澄ノ創スル所、本尊ハ千手觀音ニシテ、西國順禮三十三所ノ一タリ、

〔拾芥抄下本諸寺〕三十三所觀音

同醍醐○臨　石間本尊千手、等身泰澄大師、

〔山城名勝志字治郡十七〕岩間寺號正法寺、在醍醐山東南一里半許笠取山東、三十三所觀音一員也、醍醐理性院爲別當、自醍醐登八町坂、有大門六僧坊跡、昔有藥師堂、今觀音堂鎭主五社權現社許殘、等身千手像頽破而彼、等身像、泰澄所造龍金銅觀音一㮶手半像安置之、勝士婆蘇仙吉祥天女、泰澄所造也云云、本堂西側、有巨桂一株、此樹山城近江堺也、緣記、別當書記、西國順禮記等、曾近江國云云、然岩間山、係近江山城兩國、故載之、從當山登石山寺、行程一里半、

〔諸寺略記〕一石間寺者、山城國宇治郡醍醐山奥笠取山東峯也、泰澄大師建立、亦名金鎭大師、越後國古志郡人也、故號古志小大德矣、本佛一㮶手半金銅千手觀音像也、金鎭大師、山林斗藪之間、不放身

預藏給御本尊也、遂攀昇當山、建立運宗、安件小像、大師於當山、坐禪苦行十二箇年、其間伽藍西南角之柱樹、手自造立等身千手觀音像、奉籠彼金銅小像、凡厥利生効驗、古今無改、

〔續古事談四神社佛寺〕巖間寺、正法寺トイフ、山城國宇治ノ郡、上醍醐ノ奥ノ笠取山ノ東ノ峯也、越ノ小大德トイフヲコナヒ人、十二年ヲコナヒタル所也、日本第三ノ靈驗所トゾ、一ハ熊野、二ハ金峯山也、コノ大德ヲバ泰澄法師トモイフ、又金鎮法師ト云、越後國古志郡ノ人也、白山ヲコナヒテ次ニ此所ニキタレリ、一磔手半ノ金銅ノ千手觀音ヲ本尊ニテ、身ヲハナタズイタヾキマツリケルヲ、此所ノヒツジサルノ方ニ桂木ノアリケルヲ切テ、自手等身ノ千手觀音ヲ作テ、此金銅ノ佛ヲ籠タテマツリテ置之タル也、コノ人ハ唐ヘワタリテカレニテ、ウセニケリ、此寺ノ護法ハ、熊野ノ權現、金峯山ノ藏王、白山ノ權現、長谷寺ノ龍藏權現也、龍藏ハ大德カノ寺ニマウデヽ歸ケルニ隨逐シ給ケレバ、イハヒ奉ルトゾ、清瀧權現ハ地主ニテオハスル也、三井寺ノ叡効律師トイフ人、コノ寺ニ二三年オコナヒテ無言ニテ法華經ヲ六千部ヨミ講ジキ、夜ゴトニ三千反拜シケリ、サテ堂ノヒツジサルノ桂木ニノボリテ、我不愛身命、但惜无上道ト誦ジテ谷ヘ身ヲ投ケレバ、護法袖ヲヒロゲテウケトリテ、ツユチリニトナカリケリトゾ、コノ事一定ヲシラズ、此人ハ後一條院東宮ニオハシケルトキ、ワラハヤミヲワヅラヒ給ケルニ、參テオトシタテマツリテ、御衣給リテ律師ニナサレケリ、マカリイデヽ後發給タリケレバ、勸賞アマリ多シト、時ノ人申ケリ、叡効ガ後此所ヲコナフ人タエニケリ、信増トイフ者キタリヲコナヒテ、ソノ後常住七人タエズ、其中ニ誓源トイフ常住難行苦行ス、天王寺ノ海ニテ身投テケリ、久壽元年十月ノコトナリ、○又見元亨釋書

〔方丈記〕是より峯つゞき、すみ山を越、笠取を過て、或岩間にまうで、或石山をおがむ、

名稱 所在

創建 沿革 本尊

法界寺

法界寺ハ、一ニ日野藥師ト云フ、山城國宇治郡日野村ニ在リ、往昔藤原內麻呂、最澄手刻ノ本尊藥師如來ノ小像ヲ、最澄ノ徒圓仁ヨリ傳領シ、以テ其家ニ安置セシガ、其裔日野資業、當寺ヲ建立シ、更ニ大像ヲ作リ、從來ノ小像ヲ其腹中ニ藏ム、後世幾多ノ變亂ヲ經テ、寺域大ニ荒廢ニ屬シ、其本尊ハ阿彌陀堂中ニ移サレタリ、

〔伊呂波字類抄 比 諸寺〕日野

〔拾芥抄 下本 諸寺〕法界寺 日野藥師、資業三位、

〔山城名勝志 十七 宇治郡〕法界寺（中略）在日野村、

土人云、古者有諸堂、今彌陀堂許殘、丈六彌陀像、定朝作也、藥師堂跡在彌陀堂東、燒失後藥師像幷十二神將等安置彌陀堂內、觀音堂者、在彌陀堂北、堂亡、今殘于田字、日吉社、在彌陀堂東、春日森、在日野村北、社亡、大門跡在村入口、五大堂舊跡、土俗呼不動堂、又日野家山莊跡、在法界寺東北山麓、土人呼御所山、前有池痕、今爲田、外山西麓也、

〔叡岳要記 上〕日野藥師事

傳敎大師、自造三寸像、太政大臣房前孫子、左大臣內麿、眞楯大納言子也、北家、自慈覺大師御手、奉傳之爲本尊、相續及數代、資業三品之時、造大佛像、奉納御身畢、建寺號法界寺、件資業舍兄廣業ト中人相論之、及奏聞、任道理、資業可傳之由被宣下云々、

〔雍州府志 五 寺院〕宇治郡　法界寺　在日野、號東光山、嵯峨天皇弘仁十二年六月、延曆寺戒壇建立時、藤濱成男從三位參議左大辨家宗、爲勅使帶宣旨登山、傳敎大師不耐歡悅、卽以七寸金銅藥師像、太刀一腰、貝多羅葉藥師經等與家宗、擬勅使酬謝、家宗歸京日、家領日野地建法界寺、安置靈尊、傳敎爲開基、其後從三位式部大輔資業再興藥師堂、永正六年二月隱日野山庄、是稱日野三位、此人聚群書置文庫、每冊貼法界寺文庫之朱印、而文庫絕、書冊今偶存、在處々、中古、每年七月六日、寺僧獻歡

品花於禁裏、日野家執奏之、今無其儀、織田信長公滅亡山門日、此寺亦爲兵火被燒、今阿彌陀堂一宇殘、安置藥師幷十二神於其中、今寺僧絕、承仕法師十人分領百石寺產、交勤阿彌陀堂結番、

〔續古事談　四神社佛事〕日野藥師佛ハ、傳敎大師ノツクリ給ヘルト申、マコトニヤ、有國宰相ガ家ニツタハリタル佛也、正家朝臣ガ時ニ、家ノ長ツタフベシト、資綱朝臣申ニヨリテ、後冷泉院ノ御時、寶綱給タルナリ、

〔山州名跡志　十五宇治郡〕日野　所名　在石田東五六町許、〇中略法界寺、在民居南境地南面、宗旨眞言、堂(南向、二重屋根、)額、法界寺、(竪額)

當寺本尊、藥師佛、今此堂阿彌陀堂也、

本尊藥師佛(金銅座像、七寸、安厨子、)作不詳、脇士日天月天十二神(立像、一尺四五寸、安厨子外、)二王(安同座、)作運慶、已上安彌陀壇前、阿彌陀佛(座像、七尺許、)作春日、日野資業影(衣冠持笏座像、二尺許、)當寺日野家宗本願ニシテ、息資業卿建立也、

〔中右記〕保安元年八月二十二日庚寅、今日年來所造營之日野法界寺中塔婆所供養也、早旦講師權律師忠尋來、先有鎭壇事、任注文、五寶五藥等相儲、令鎭堂地也、其後律師於宿所有儲事、巳時許、塔壯嚴畢、始講筵、題名僧十二人、是本寺供僧、隨見在人數也、各可著指貫裝束之由相示、律師一人被著法服也、依有開眼事、禮盤之前机外儲脇机、居供養法具也、願文大內記宗光作之、願之意趣具在其中、律師先開眼、次說經、能說之人隨喜隨感歎事畢、布施裝束被物等、四位少將幷宗能、宗成、宗重等相互取之、又奉牛一頭、依遠行間也、

大治二年二月三十日庚寅、今日丈六佛二體奉安置新造日野堂、雖未造畢、依爲舊像且奉渡也、渡一條之堂後、此八九年奉居本丈六堂也、以住僧十三人爲此堂供僧、從今日且始黃昏例時、其次可奉唱阿彌陀小呪一百遍由仰諸僧、是依最小所作、永年長日以安所爲先也、定承仕二人、(定清能樂)抑堂供養以

前且始例時、是陰陽頭家業申行也、堂未供養、依不作事畢也、雖然乍二體、爲舊像依不可止例所作、令行例時也、寺僧見住十三人皆悉爲供僧之志、是此寺僧侶依可令行各心皆以補供僧也、抑奉渡佛、且有可奉行大神之疑、且又一家廣間、自其障出來歟、仍抛万事、今日始奉安置佛也、

〔兵範記〕保元二年四月廿二日丁巳、殿下密々令向日野給、丈六堂阿彌陀佛、依定朝造可令拜見給之故云々、

○按ズルニ、山城名勝志ニ此文ヲ引テ、此寺ノ阿彌陀堂本尊ヲ定朝ノ作トス、然ルニ山州名跡志ニ、春日作トセシハ、據ル所ヲ知ラズ、

〔義演准后日記〕慶長十三年九月廿七日、日野法界寺、當谷地驗以來山上寺家ノ下ニ成テ、諸役相働了、其後、去慶長三年當寺へ新知御寄附以來ハ、山下寺家目錄ノ内ニ成了、仍山上ヨリ諸役相除云云、爰今度江戶幷駿府御見舞ニ山上ヨリ、年預來月罷下ニ付、役錢如元相懸云々、依之法界寺角坊眞乘坊來歎申入、今更山上ヨリ申懸段、分別不仕候、所詮山下寺家役ニ御奉行如目錄可罷成由申入了、

〔宗長手記〕日野七佛藥師、門前より杖にてまことにさびしく、哀にあらしにまよふ落葉、佛前のふるき戶帳に吹まよひ、車のわれ、こゝかしこにちりぼひ、むかしおぼゆる心ちして、鴨長明閑居の舊跡、かの重衡卿笠やどりの跡、泪こぼれ侍しふる坊、所々の道しば、紅葉の朽葉を分て醍醐のあるじ、まことに上味ともいふべし、

淨妙寺

淨妙寺ハ、一ニ木幡寺ト云フ、一條天皇ノ寬弘二年ニ、藤原道長ノ建立スル所ニシテ、此地世

名稱

所在

創建

世藤原氏ノ墓所タリ、今廢寺ニシテ、舊地ヲ土俗淨メン寺ト云ヒ、山城國宇治郡木幡村ニ在リ、

〔伊呂波字類抄古諸寺〕木。幡。寺。寛弘二年十月九(九上恐脱二十字)日、關白左大臣道長供二養三昧堂一、勅准二御齋會一、

〔拾芥抄下本諸寺〕淨。妙。寺。木幡御堂殿

〔山城名勝志十七宇治郡〕淨妙寺土人云、木幡村東北山麓、有二大門跡塔壇等一、村內有二葬所一、名二淨メン寺一、是皆舊跡也、又村內行願寺彌陀像、古淨妙寺古佛、申傳云云、

〔榮花物語十五疑〕又木幡といふところは、太政大臣基經のおとゞ、のちの御諱昭宣公なり、そのおとどのてんじをかせ給へりしところなり、藤氏の御墓とおぼしをきてたりけるところに、とのゝおまへ(○藤原道長)わかくおはしましけるとき、故殿(○藤原兼家)の御ともにおはしましておぼしけるやう、我先祖よりはじめ、志たしきうときわかず、いかでみなこれを佛となし奉らんとおぼしける御心ざしとし月へけるを、此おりこそとおぼしめしけり、いづれの人も、あるは先祖のたて給へる堂にてこそ、忌日もし、說經說法をもし給めれ、しゞちの御身をおさめられ給へるこの山には、たゞしるしばかりのいしの、卒都婆一本ばかりたてたれば、またまいりよる人もなし、これいとほいなき事也とおぼして、この山のいたゞきをたいらげさせ給て、たかき所をばけづり、みじかきところをばつちをきなどせさせ給、三昧堂をたてさせ給なかに、めんだうをあけさせ給て、左右に僧坊をたてさせ給て、供をあてさせ給、夏冬の衣服を給ひ、やがてそのあたりのむら、ひとつさとゝなさせ給て、水きよくすみ、烟たえずして、ことのたよりを給はせて、はぐゝみかへりみさせ給ふ程に、よろづの人きをひすみ住す、御堂供養寛仁三年、○寛仁三年、法成寺攝政記、日本紀略、及下文所レ引小右記等作二寛弘二年一、十月十九日より法花經百部、その中に我御手づからかきて一部ませさせ給へり、七僧百僧などせさせ給て、法服うるはしくしてくばらせ給、その日藤氏の殿ばら、かつ隨喜のため、聽聞のゆへに殘りなくつどひ給へり、さき〴〵の一の人などかくおぼしよらざりけんとみえたり、との

のおまへ（○藤原道長）こゝらの人の前にて、三昧の火をうたせ給、我この大願のちからにより、この山に骨をうづみ、かばねをかくし給へらん人々、わが先祖よりはじめたてまつり、ゑたしきうときわかず、すぎにしかたいまゆくすゑにいたるまで、我すへの人々これをおなじくつとめ、三昧のともしびをけたずかゝげつぐべくば、此火とくいづべしとの給はせて、うたせ給しに、其火一どにいでゝ、この廿餘年いまだきえず、その日の御願文、式部大輔大江匡衡朝臣つかうまつれり、おほかきつゞけたれど、けしきばかりをゑるす、はじめの有さまもきかまほしくぞ、願文の詞かなのこゝろえぬ事どもまじりてあれば、うつしとらず、そのおりは左大臣にておはします、此寺のなをば淨妙寺とぞつけられたる、ことゞもはてゝ、とのゝおまへをはじめたてまつり、藤氏の殿ばらみな御誦經せさせ給、僧ども祿たまはりてまかりいでぬ、

〔大鏡七太政大臣道長〕淨妙寺は東三條殿（○藤原兼家）の大臣になり給ひての悦に、こばたにまいらせ給へり、御ともに入道殿（○藤原道長）ぐしたてまつらせ給ひて御らんずるに、おほくの先祖の御骨おはするに、かねのこゑきゝ給はぬいとうき事なり、わがみおもふさまになりたらば、三昧堂たてんと、御心のうちに、おぼしめしくはだてたりけるとこそはうけ給はれ、

〔小右記〕寛弘二年十月十九日甲午、今日木幡寺供養日也、僧前（高坏十二枚、加折敷、□□二具）、幷諷誦布（信乃布百端）、拂曉送彼寺、左兵衛督早朝立過、同車參入、召寮馬令騎隨身等、亦有假隨身（將監嘉武、將曹保春、府生保堪）、參著寺之間見。額銘書淨妙寺、諸卿會合（左大臣、内大臣、帥大納言道綱、中納言齊、公、俊、隆、忠、參議有、懐、行、正、經、三位二人親信、兼隆、）俗客饗了、諸卿著堂前座、先是打鐘、式部□正入自南大門、用御齋會儀、講師乘輿（講師前大僧正觀修、讀師大僧都定澄、則呪願也、）十口僧外堂達二人、用凡僧（已講林懐、阿闍梨命已、）殊加請天台座主覺慶、證誠云々、百僧衲衆（僧綱相交）、讚衆、梵音衆、錫杖衆等也、又有定者、但十一口僧、（證誠在之中）皆有法服、公家給度者（右頭中將實成、就講師高座邊仰之）、所々諷誦（公家二、院、東宮、女御達、本家男女子、大臣以下一族男女人々等也、）布五千四百端、手作布百端、花山院、絹廿疋、（十疋右大臣、十疋内大臣女御、）公家御諷誦及所々使々被物、戌剋許事了、春宮大夫以下執

祿被僧綱以下、雲上侍臣諸大夫同執、亥剋許歸家、假隨身以下給祿、堂只造普賢一體、自今夜可始三昧云々、堂僧六口皆有法服云々、今日殊供養法花經一部卽相府自筆、是三昧料經云々、又供養百部法花經、件寺事、前大僧正勸修知行、又有三綱、左府於堂前被示彼是云々、件寺事如形所草創也、向後一門逹可被興隆、又可知行件寺事之人、不限門徒、只被用於世之人中殊以道心者可令知行件事再三向彼是被陳也、〇又見御堂關白記、日本紀略、

〔本朝文粹顧文十三〕爲左大臣〇藤原道長供養淨妙寺願文　江匡衡

弟子大日本國左大臣正二位藤原朝臣某前白靈山淨土釋迦尊言、風聞、天上天下、妙覺之理獨圓、三千大千、無緣之慈、普被佛法之冲邈、不可得而稱者也、弟子自竹馬鳩車、至而立强仁、不好獨善、企兼濟、不忘敬始願善終、昔弱冠著緋之時、從先考太相國〇藤原兼家屢指木幡墓所、仰三重暗四瑊、古塚纍纍、幽隧寂寂、佛儀不見、只見春花秋月、法音不聞、只聞溪鳥嶺猿、爾時不覺涙下、竊作斯念、我若向後至大位、心事相諧者、爭於玆山脚、造一堂修三昧、福助過去、祓弘方來、思以涉歲、不敢語人、爰承累葉之慶、浴皇花之恩、年三十極人臣之位、十一年來忝王佐之任、皇帝之爲舅也、皇后之爲父也、榮餘於身、賞過於分、如履虎尾、如撫龍鬚、因玆雖趁朝庭、雖居私廬、發菩提心、凝道場觀、行住坐臥、專三寶、造次顚沛、歸一乘、抑撿家譜、萬歲藤之榮、所以卓犖萬姓、其理可然、何者始祖內大臣、扶持宗廟、保安社稷、淡海公手草詔勅、筆削律令、與佛法詳帝範、其後后妃丞相、積功累德、蹇繁有徒矣、建興福寺法華寺、開勸學院施藥院、忠仁公〇藤原良房始長講會、昭宣公〇藤原基經點木幡墓所、貞信公〇藤原忠平建法性寺修三昧、九條右相府〇藤原師輔建楞嚴院修三昧、先考建法興院修三昧、此外傍親列祖之善根德本、不遑稱計、方今時時詣墳墓、爲建寺指點形勝、向彼松下、則瑊二恩父母之廟壇、問此ゝ頭、亦瘞同胞兄弟之芳骨、雖至孝鍾愛之子孫、不能晨昏、雖近習舊勞之僕妾、不能陪侍、山嵐朝掃庭、溪月夜擧燭而已、仍自長保六年三月一日、結花構價初心、不材之所企、造普賢而爲刻木拜貌之志、匪石之所思、書妙法而代立碑記德之文、是以勵

寺領

拙掌而馳筆區、以信爲嘉手、倩昆首而加意匠、移孝禮尊顏、今日擇曜宿、始法華三昧、剋十月定星之期、廻萬代不朽之計、于時蒙霧開、愛日暖、可謂天地和合、風雨不違、祖考感應、垂冥助之介然也、別亦奉書法華經百部千軸般若心經百卷、屈百餘口賢聖衆、以香花梵唄、洪鐘浮磬、寶蓋幢幡、名衣上服、七珍百味、供養之演說之、青苔鋪設、自展七淨瑠璃之茵、紅葉亂飛、暗成千花錦繡之帳、玉軸星羅、見崑山之積玉、金言流布、知提河之有金、夫寺廟者、如來之墳墓也、實相者、法身之舍利也、丹誠獨勝、有便於弘一乘、王舍不遠、無煩於率群僚、丹丘青塚、忽具如來之眞色、萬籟百泉、皆唱妙法之梵音、疑是靈鷲山之乘五色雲以飛來歟、將亦法龍池之驚六種動以涌出歟、視耳未曾視、聽目未曾聽、彼端木者、魯之賢士也、移家於孔子之墓傍、王劭者、晉之重臣也、築寺於祖父之廟北、聚龍象以弘知峯、識羊太傅之絕後胤、伴槐棘以高法棟、擬王丞相之拜先塋、黑白衣之雲集、豈唯三州五郡之淺奥、内外戚之影從、抑亦見佛開法之大緣、功德遍于法界、利益及于衆生、我願已滿、衆望亦足、以此一善、廻向四恩、天下安穩、萬民快樂、敬禮釋迦多寶、妙法大乘、妙光法師、普賢薩埵、入此道場、證明功德、天神地祇、及茲山幽靈善神等、被如來之衣、著菩薩之座、仰願三寶增益一念、嗟呼煖寒木於大智之日、淚變蒼栢之煙、潛朽壤於甘露之泉、手播白蓮之種、刧石雖磷、願主之印不刓、芥城縱盡、不退之輪長轉、願共諸衆生、上征兜率、西遇彌陀、弟子某歸命稽首敬白、

寬弘二年乙巳十月十九日甲午　左大臣

〔古事談五神社佛寺〕御堂令始木幡三昧給之日、法螺ヲ禪僧等エフカザリケレバ、殿下御手ニ取テ令吹給ニ、タカクナリタリケレバ、時ノ人感ジノヽシリケリ、

〔山城名勝志十七宇治郡〕竹原里

古文書云、木幡淨妙寺田之事、　合貳段者在山城國宇治郡竹原里十三坪

右田地者、爲七觀音院領當知行、無相違地也、

雜載

應永廿三年八月廿八日　住持比丘妙德

〔榮花物語五浦々の別〕かくてこの日もくれぬれば、内大臣殿〇藤原伊周故殿〇藤原道隆こよひぞそひてゐていでさせ給へとおぼしねんせさせ給御志るしにや、そこらの人さばかりいひのゝ志りつれど、夜中ばかりにいみじうねいりたれば、御をぢの明順ばかりと、御ともに、人二三人して、ぬすまれ出させ給、〇中略それより木幡にまいり給へるに、月あかけれど、このころはいみじうこぐらければ、そのほどぞかしと覺しはかりおはしまいつるに、かの山ちかにては、おりさせたまひて、くれぐれとわけいらせ給に、木のまより出たる月を志るべにて、卒都婆くぎぬきいと多かる中に、これはこぞのこの比のことぞかし、されば少ししろうみゆれど、そのおりかく人々あまたものし給しかば、いづれにかと、よろづをたづね參りよらせ給へり、そこにてよろづをいひつゞけ、ふしまろび、なかせ給けはひにおどろきて、〇下略

〔權記〕寛弘二年九月廿日乙丑、詣左府〇藤原道長、奉木幡寺鐘銘、廿六日辛未、貞仲朝臣來示鐘銘彫板二行之由、即書之文、

〔百練抄四一條〕寛弘四年十二月二日、左大臣〇藤原道長供養木幡塔、

〔百練抄四後一條〕寛仁元年二月廿七日、攝政〇藤原道長參木幡墳墓、公卿騎馬、上官爲御前、

〔新後拾遺和歌集雜十七〕後近衞關白身まかりて、淨妙寺にをくりをき侍りける時、常には日野山庄にかよひ侍りける事を思ひ出て、

高階宗成朝臣

木幡山君がゆきゝはなれにしをかちよりをくる旅ぞかなしき

橋寺

名稱
所在

橋寺ハ又常光寺ト稱ス、山城國宇治郡宇治橋ノ東北ニ在リ、西大寺ノ末寺ニシテ、律宗ニ屬ス、

〔山城名勝志十七宇治郡〕橋寺〈在宇治橋東北、號放生院常光寺、開基觀尊、西大寺之末、〉

創建
沿革

或身學正記云、弘安四年四月廿日、依平等院僧等請、著宇治、廿一日開講梵網經、今日橋寺堂供養、

〔國花萬葉記山城二上〕常光寺　今ハ律也　宇治ニ在、橋寺ト稱ス、

〔山州名跡志十五宇治郡〕常光寺〈稱橋寺〉　在右同所〈○宇治橋東〉　宗旨　律　門〈西向〉　寺〈同〉　本尊　地藏菩薩〈立像、五尺、〉新作　外安觀音阿彌陀佛　開基道昭和尚　宇治橋造營ノ時、開ク所也、中興興聖菩薩　此所昔ハ境界寛悠ニシテ、堂宇多シ、其舊跡今寺ノ東ノ方ニ所々宇アリ、興正菩薩、此所ニテ大法會ヲ行ヘリ、時集會ノ僧ニ引所ノ水晶黒柿牛裝束ノ珠數、其内今猶當寺ニアリ、

雜載

〔百一錄〕元祿二年三月十五日、宇治橋寺、聖德太子草創也、興聖之四百年忌ニ付開帳、

〔康富記〕應永廿七年十月十九日甲寅、予宇治下向、橋寺、〈放生院〉客坊宿之、

〔親長卿記〕長享三年三月廿三日、早旦起、南都宿、於宇治橋寺、地藏院申一獻、

興聖寺

名稱
所在
創建
沿革

興聖寺ハ、山城國宇治郡朝日山ノ麓ニ在リ、僧道元ノ開基ニシテ、曹洞宗最初ノ寺院ナリ、始メ深草ニ在リシガ、慶安年中、永井尙政今ノ地ニ移シテ再興スル所ナリ、

〔雍州府志五寺院〕宇治郡、興聖寺　在同處〈○宇治川東〉號佛德山、曹洞宗道元開基、而始在深草、然中絕年舊矣、近世永井信濃守尙政、領淀城時、再興佛德山興聖寺於斯處、闢岩構堂宇、其景象非筆舌之所及也、本尊釋迦、而堂有靑蓮院尊純所筆佛德山興聖寺之額、

〔山城名勝志十七宇治郡〕興聖寺在朝日山洗宇治川東北、號佛德山、曹洞道元和尙開基、

此寺始在深草郷、中絶年舊、正保年中、淀城主永井信濃守大江朝臣尙政、再興于此地、中興祖万安、頴者靑蓮院尊純親王、土人云、此寺地、元離宮神地也云云、〇中略

寺記云、開基道元禪師、諱希元、字道元、號佛法禪師、姓源氏、洛陽人、入宋從洞山良价之流、師天童如淨禪師、附以曹洞宗、歸朝開法於城南深草郷、經營於一宇、嘉禎二年十月十五日、開堂號觀音導利院興聖寶林禪寺、建長五年示寂云云、寺退轉、近年再興宇治朝日山、土人云、深草郷道元禪師舊跡者、藤杜東興谷口之間云云、〇中略

宇治興聖禪寺記深草村道云、城州宇縣の興聖寶林禪寺ハ、本朝曹洞の初祖、道元師の草創として、宗門相續せしが、いつの比よりか寺院破壞して、いまはかたもなくなりしを、永井信濃守大江尙政朝臣、ちかきあたりゐるよしして、暨佛勝概周覽のついでに、此寺の廢れたる事をおしみて、忽再興の志をはこび、不日の經營をなし、すでに落成す、しかるに件の練若、當昔の佛什物等紛失せり、爰に或人告ていはく、彼師手自刻むところの釋迦牟尼尊ありと、是を聞隨喜感悅して、則こひとりて安置す、師作の佛像、世洛有物也云云、今此時にあたりて、はからざるに尊像出現せる事、精舍の興隆に往契あるがごとし、希代の機緣、末世の不思儀といふべきか、しかのみならず、師の法語に眞蹟の一ぢく、興聖寶林寺沙門道元記云云洛陽に所持の人ありて寄附す云々、

慶安三の年冬十二月これを記す

〔永平開山道元和尙行錄〕禪師、諱希玄、後更名曰道元、〇中略師登岸、乃手圖海上所現觀音妙體、後系贊于上、梓像流布、遂寓京之建仁、天福癸巳春、弘誓院正覺禪尼等、相攸於洛之東南宇治縣、或謂、深草極楽寺舊跡也、營禪苑、大殿、法堂、雲堂、庫院、凡伽藍所宜有者悉備焉、卽請師爲開山第一祖、嘉禎二年冬十月十五日、開堂演法、叢規取則太白、衲子雲集、檀越斗仰、寺曰觀音導利院興聖寶林禪寺、懷弉、僧海、詮慧等、師之神足、大龍象也、樋拂下常集萬指、受菩薩戒者二千餘輩、由良覺心法燈國師開師孀化、來參願受礎磨之功、

受菩薩大戒、

〔羅山文集銘四十四〕城州興聖寺鐘銘并序

淀城主從四品信州太守大江姓永井氏尙政、以狀告余曰、山城州宇治郡興聖寶林禪寺者、道元和尙之古蹟也、和尙入宋、參天童如淨禪師、傳曹洞家之法、歸朝暫駐錫于此地、後赴北州、實日本洞下之最初也、此跡一旦蕪廢久矣、今太守經營蘭若、輪奐惟新、請萬安長老、爲之住持、其寺之境致、東有朝日山之除暗返照也、西有八幡宮之和光同塵也、巨川在坤、長橋如虹、而送者望崖而返、離宮在乾、與橋姫如神遊者、其靈不可測焉、東北有喜撰庵、所謂京洛之巽、而此寺之艮也、其餘對平等院、則憶博陸之舊事、向惠心院、則尋僧都之遺蹤、且淀城金湯之險固也、河航片帆之往還於伏見里也、山崎之名山、大原野之佳麗、良岑之逸景、及丹陽之大枝山也、皆擧在一望中、誠是人境相得者乎、若此之類、不遑枚擧、可謂勝地、既而高構一樓、新鑄巨鐘、以架之、請余爲之銘幷詞、不已、余不同其道也、雖相爲謀也、若之何、其西來無意、通犀駭鷄、東方未曙、明月藏鷺、無情說法、須將眼聽、此鐘有聲有色、何故貝多云無眼耳與、而今墮玄妙窟裏者、余何以言哉、唯庶乎太守之功名風聲、永與此鐘共鳴于不朽也、(中略)慶安四年辛卯月日

〔山州名跡志十五宇治郡〕佛德山興聖寺　在惠心院南　宗旨禪曹洞、門西向、門前二町餘、左右ニ櫻雙樹アリ、其外草木水石ノ景色四季ニアリ、是則永井氏直正ノ營建、佛殿西向、額、興聖寶林禪寺、横額、靑蓮院尊純親王筆、本尊、釋迦佛、坐像、一尺許、脇士、左文珠、右普賢、作不考、開基、道元和尙、中興、万安和尙、

萬福寺

萬福寺ハ、山城國宇治郡大和田村ニ在リ、寛文中、將軍德川家綱、歸化ノ支那僧隱元ニ開基セシメシ所ニシテ、黃檗宗ノ本山タリ、堂舍佛像皆支那ノ模型ニ據レルヲ以テ、一タビ其境ニ

スレバ、殆ド別天地ノ想アリ、住持ハ其初メハ支那僧ニ限リタリト雖モ、後幕府ノ命ニ由リテ、又邦人ヲモ擧用セリ、

名勝所在

〔和漢三才圖會山城七十二末〕黄檗山萬福寺　在宇治郡大和田

〔山城名勝志宇治郡十七〕黄檗山萬福寺在五箇庄大和田村〇中略

黄檗十二景

妙高峯寺之後山　大吉峯案山也、長峯也、見西　五雲峰在妙高峯左　白牛巖在柳宮上　青龍澗在寺左　雙鶴亭在寺右上山　三級池在山門道左、今絶　龍目井在總門前左右、今一井、　松隱堂開山堂、在山門右　萬松岡在寺右、藏北邊、　中和井在開山堂東　東林庵在寺左牛里

創建沿革

〔黄檗開山國師隱元和尚傳下〕伽藍地を賜ふ事

萬治二年己亥六月、御上意有て、京都の近邊にて地を見立、寺を造り、隱元を移し申せと仰下されければ、龍溪長老、國師を請じ奉り、洛邊の山々處々を見て、宇治郡大和田村に至り、み給ひて、此山勝地なりとの給ひければ、龍溪長老關東に言上あれば、卽御許し下されければ、長老大に悦あり、是より伽藍建立の用意有けり、然所に大坂天王寺秋野と云し人、國師の道風をあをいで請じ供養し奉り、又三奉行迎入て供養し給へば、各法語を書て御示しあり、普門寺に還り給へば、十月木庵首座來朝有、國師御よろこび有て、首座寮に移し給ふ、〇中略

黄檗山建立の事

寛文元年辛丑正月、國師慧林西堂を召、伽藍地の御禮に、關東へ遣され、五月八日、大和田の地を開創し給ひ、黄檗山萬福禪寺と號し給ふ、是は本國の寺を忘給ざらんが爲なり、扨御年七十歳にして、八月廿八日、黄檗に御入寺ありければ、貴賤群集して、禮拜供養し奉りけり、然に十一月四日は、國師七十の大誕生日なれば、唐の黄檗の住持慧門和尚より、高泉、曉堂二人の法子を遣し、諸官人の壽草、一山の役人の壽軸齊金、其外の珍物を獻じて、祝し奉れば、國師御悦あり、二人の法孫を日

本に留置給ふ、〇中略寛文三年癸卯正月十五日、御上意をうけて、天下太平、國家安全の爲に、開堂説法あり、時に黄檗永代の僧糧として、宇治郡五ヶ庄、大和田、廣芝、畑寺、岡本、新出、此五ヶ村にて、御朱印をなし下され、是より道風いよ〳〵さかんにして山川色をまし、大衆雲霞のごとく集り、三百年來たをれたる禪法、此時又おこりければ、本朝百九代後水尾院法皇、隱元和尚の道德を聞召て、龍溪長老に勅詔なされ、法要を御尋あり、和尚法語をのべて奏し奉有ば、ゑいりよにかなはせ給ひ、御信厚淺からずまし〳〵けり、國師、七十二歲の冬、結制ありて、龍溪、獨湛を西堂になし、兩禪堂にあんじ給ふ、時に四方の衆僧多集りて、其數半千に及たり、〇中略又臘月朔日より、初て禪門大乘戒壇をひらき給ふ、受戒の人數五百に及べり、國師戒壇を開給ふこと、此度に至りて十六會なり、戒を受たる弟子、其數を知る事なし、日本に、戒壇たえて、久敷なかりし所に、國師此度戒壇を開給へば、四方の僧俗希有の思ひをなし、皆喜奉りける、

〔普照國師年譜〕下寛文七年丁未

五月廿五日、師晏坐丈室、忽覩白蓮花開清香可掬、尋報、大將軍〇德川家綱令旨到、發白金二萬兩及西域木等、爲本山建殿宇、故有令音一揆玉蓮開之句、又按、與端山獨廣二護法書曰、老僧開闢此山迄今七載、未獲大觀、茲蒙國主賜金鼎建佛殿等、可謂法門盛典、山林有光、老僧雖邁、敢不勉乘薫修、以答國恩云々、六月十九日舍殿告成、〇中略

八年戊申

師七十七歲、是年本山締構經始、三月廿五日、大殿上梁、有老夫拶入蓬萊會、托出榑桑第一枝之句、既而天王殿應供堂、鐘鼓樓等、次第告竣、題大殿聯云、宗門肇啓廓天心、祇樹林中十聖三賢皆景仰、紺殿莊嚴光佛日、寶華座上千枝萬葉永流芳、先是嘗謂左右曰、此山之興必在丁戊二歲、今果驗、〇中略

堂塔

寛文九年己酉

師七十八歳春、竪大雄寶殿額、師手書也、字大如車輪、筆注奇古、觀者嘆賞、

〔原城紀事四〕六年〇元和庚申、明僧眞圓來、爲構一精舍、修道敎化、撥摘南京諸商執異敎而往還者、南京諸商、請以爲香花院、命於長崎伊良林鄉、創興福寺、號東明山、以眞圓爲初祖、如定、逸然相續而至、承應中、依足利氏故事、於山城宇治、營一大蘭若、因逸然招請隱元禪師西土而來、澄一、悅峯、雷音、旭如、果堂、竺庵、其他諸弟子投化、數人代爲住職、至享保間而止、長崎實錄大成

〔鹽尻四十五〕山城宇治の黃檗山萬福禪寺へ、新建の台命ありし時、明曆元年長崎湊へ天竺鐵梨木多く漂來りし、崇福寺の檀越等、官に請て取上、宇治へ送りて、今の佛殿を造りし、實に一奇事にして、大光普照國師東化の德なりけり、

〔山州名跡志十五宇治郡〕黃檗所名　在西方寺南二町許、是即五箇庄ナリ、黃檗號ハ、近キニ起ル、

黃檗山萬福寺　在同所民居東、境地西面後山　門西向　額　第一義横額　高泉和尙筆　門前立入制文、彫石　不許葷酒入山門　門　左右柱揭聯、有數字、以繁略、巳下準之

放生池　在門內右

山門西向　額　黃檗山竪額　隱元和尙筆層扁揭二重閣、

天王殿　在山門東、西面上壇地、前在石階、額　天王殿横額西面　木庵和尙筆　威德莊嚴横額東面

即非和尙筆　所安布袋和尙像坐像、三尺許、金色、　西面　韋駄天像立像、三尺餘、全身金色、　東面　四天王像立像、九尺許、全身金色、　同所安左右、左東多門天、西廣目天、右東持國天、西增長天、

大雄寶殿　在天王殿東西面、額　大雄寶殿横額　隱元和尙筆層扁揭二重閣、　額　萬德尊横額　木庵和尙筆、第二軒內揭中央、　本尊　釋迦佛坐像、五尺許、　脇士左迦葉右阿難共立像、五尺許、金色、　十六羅漢坐像、二尺許、全身金色、安左右壇、

法堂　在寶殿後西面、　額　獅子吼(橫額)費隱和尚筆　額　法堂(橫額)隱元筆(堂內揭中央)、

右天王殿大雄寶殿間、所立南北堂如左、

鼓樓　在天王殿左南面、

祖師堂　在鼓樓東南面、　額　祖師堂(橫額)木庵筆　達磨大師像(坐像、三尺許、全身金色、)　安費隱禪師牌

選佛場　在祖師堂東南面、　額　選佛場(橫額)隱元筆　本尊　觀音(坐像、三尺許、)　脇士(左)善財童子(右)

八歲龍女(共立像、三尺餘、)此所坐禪堂也、佛壇左右坐禪床

鐘樓　在天王殿右北面、

伽藍堂　在鐘樓東北面、　額　伽藍堂(橫額)木庵筆　伽藍神像(掛倚子於腰、長三尺餘、衣服漢土體、提右手半月、面身金色、三目、)

禪悅堂　在右堂東北面、　額　禪悅堂(橫額)木庵筆　金奈羅像(立像、三尺許、面身金色、)安中央壇　此所食堂、

牌堂　在選佛場東南面、　本尊　地藏(坐像、一尺六七寸許、全身金色、)　同壇左右、安檀信牌、

浴室　在食堂後北向、　額　浴室(橫額)高泉筆　高泉和尚代建立

開山堂　在山門內北山下、　門(南向)　額　玄通(橫額)隱元筆　堂(南向)　額　開山堂(橫額)木庵筆　額(揭堂內、後水尾院賜隱元國師號勅書、○中略)

隱元像(踞倚子、持拂子、紫衣、長四尺許、)安廚子、　額　那伽室(橫額)隱元筆

壽藏(堂形六角)　在門內南面、　壽藏(此字以紺青書、南面窗戶、窗九、)隱元筆　堂內所安隱元像(掛倚子於腰、持拂子、紫衣、長四尺許、)堂下以

截石圍口南面、內安隱元遺身、口立青石戶、戶銘、　開山隱元老和尚之塔(以紺青書、隱元二字以朱書、)

舍利殿　在開山堂後山、　堂(南向)　額　舍利殿(橫額)隱元筆　額(揭堂內)○中略

塔頭

万壽院　在山門內北方南面、　門　額　万壽院(橫額)隱元筆　北院第二世木庵和尚塔所

万松院　在万壽院西南面、　門(同)　額　万松院(橫額)隱元筆

天眞院　在山門南、北向、　門同額　天眞院横額高泉筆

鎭守社　在山門內左、南面、

藏經印板倉　在佛殿巽山上二町許、納一切經及諸論釋印版、建立本願主　鐵眼和尙寺在攝州難波

普化墓　在黃檗門前往還道南二町、此所、近邊葬所也、

寺領

〔和漢三才圖會山城七十二末〕黃檗山萬福寺中略　寺領四百石

〔寺鑑下〕黃檗派　黃檗山　本山山城國宇治　萬福寺中略

御朱印　高四百五拾石

用途

〔天保集成絲綸錄五十六〕寬政四子年八月

寺社奉行江

黃檗山萬福寺蒲庵儀、此度入院ニ付而は、先住職格宗不取計ニ而、至而取亂、當時相續も難相成、入院翌日より、日用之差支等之譯申立、被下銀之儀、再應相願、難澁之趣無餘儀相聞候間、自餘之例ニは不相成、格別之儀を以、爲資料被下、小堀數馬御代官勤役中懸ニ而貸附候、銀百貳拾貫目之內、小堀周防家斷絕ニ付、元領分村方より百ヶ年賦取立、銀之分ハ、萬福寺江不相渡、御金藏納之積りを以、此度七拾三貫八百目御取替銀被成下、資料被下銀貸附高百貳拾貫目之都合ニ被成下候之間、以前之通、小堀縫殿懸りニ而貸附置、年々利銀之分請取候樣可致候、尤右之通被成下候上は、右利銀之內より、格宗拜借返納殘金八百兩返納方も、當子年より、來る未年迄、年々金四拾兩宛、二十ヶ年賦致返納、蒲庵拜借金千兩之返納方ハ先達而申渡候割合之通、來丑年ゟ、來ル卯年迄、十五ヶ年賦返納之積り申渡、右之通格別ニ被成下候上は、向後之儀等、專精を入、改正之儀取計候樣、萬福寺江可被申渡候、尤御勘定奉行可被談候、

寺職

八月

〔內寄合帳〕丑〇嘉永六年　三月十九日　訴訟

宇治黃檗派
萬福寺代　守節

去ル亥年中、住職被仰付、其砌、先例之通願之上、拜借金仕、右を以、進山祝國開堂等之式無滯勤行相濟候處、猶又住職後三ケ年目定例執行仕來候、三壇戒會興行可仕之處、諸伽藍向大破、雨漏等數ケ所有之、總修覆不差加候而者、法務差支候程之儀ニ而、住職後未間合萬無之、恐入候得共、出格之譯を以、銀百貫目拜借被仰付、尤返上納之儀者、大津御代官所ニ而、貸附方取扱候、祠堂銀利子、年々金五拾五兩程宛寺納相成、右之分、當丑年ゟ三拾ケ年之間、合金千六百五拾兩餘之內を以、年々上納可仕候間、何卒願之通拜借被仰付、總修復仕度、願之儀ニ付、

御老中江伺之上、願之趣者、難被及御沙汰、願書差戻、

〔長崎志五〕黃檗山唐僧歷任之略記

嚴有院樣御在世之時、承應元年、古昔足利家之例ニ準せられ、日域に禪刹一字被創建、唐國より道德優長之僧を可令住持旨、上意有之、當表興福寺之住持逸然方ゟ、唐國徑山寺費隱和尙之法嗣福州府黃檗山之住持隱元和尙方ニ請待之儀再三申入、則許諾有て、承應三年七月、當表興福寺に到著有之、仍て明曆元年、城州宇治郡大和田之地に一寺を開創有之、隱元和尙開基之初祖被仰付、黃檗山萬福寺と稱す、此後長崎三ケ寺在住之內、德義ある僧を撰び、代々可被令繼席旨被仰渡之、

開山隱元琦禪師　明曆元年開創

承應三甲午年渡海、長崎興福寺に在着せり、唐國ゟ隨從僧貳十人、其內大眉、獨言、獨知、獨湛、獨吼、獨立、眞演、惟一、恒修、無上、此十人ハ始終陪侍せり、其外十人ハ翌年歸唐す、明曆元乙未年城州宇治黃檗山万福寺に至り、開基之初祖と成、則大光普照國師之號を賜る、

二世木庵瑫禪師　寬文元年繼席

明曆元乙未年渡海、長崎福濟寺に在住せり、萬治三庚子年攝州普門寺に入、寬文元辛丑年黃檗山に登り、第二世繼席と成る、

三世慧林機禪師

隱元渡海之初ヨリ、隨從セシ僧衆之內、獨知名を慧林ニ改、第三世之繼席と成ル、

四世獨湛瑩禪師

隱元に隨侍せし僧衆之內、第四世繼席と成ル、

五世高泉潡禪師

寬文元辛丑年渡海、直ニ本山ニ登リ、第五世繼席と成ル、但慧門之弟子也、慧門ハ、隱元之弟子也、

〔長崎志六〕聖壽山崇福寺〇中略

一去る承應年中、有上意、城洲宇治郡黃檗山を創建有、隱元和尙開山初祖と成、其後長崎唐三ヶ寺之內ゟ學行德義衆備之僧を撰び、可令繼席旨被仰渡之、仍而萬治三年渡海有し千獃和尙、元祿八年黃檗山に登り、第六世之繼席となる、巳後黃檗山繼席之事略之、

〇按ズルニ此後十三世マデハ皆支那僧ニテ、日本僧ナシ、其後ハ兩者相混ゼリ、

〔天明集成絲綸錄二十八〕明和五子年七月

寺社奉行江

長崎唐三ヶ寺末庵〇興福寺、崇福寺、福濟寺、共、唐僧來朝之儀、長崎奉行江相願候、黃檗萬福寺住職之儀者、元文五申年被仰出候通、和僧ニ而も、唐僧ニ而も、其時之吟味次第被仰付事ニ候間、此度願之通、唐僧來朝被仰付候迚も、此以後万福寺後住之もの江、決而被仰付候儀ニ者無之候、勿論其心得ニ可有之候へ共、一應唐三ヶ寺相尋可申旨、長崎奉行江相達候間、可被得其意候

七月

〔寺社法則上〕寬政十一未四朔　長崎奉行ゟ達

一唐僧請待之儀ニ付、黄檗山萬福寺石定願立候儀ニ付、先達而掛合候趣、於長崎表唐三ヶ寺、福濟寺崇福寺興福寺江御尋之件々御答之趣、唐人共申立通、詞和解いたし申立候旨有之、種々書付數多有之、

〔寺鑑下〕黄檗派　黄檗山　本寺　山城國宇治　萬福寺

右住職唐僧被仰付候節は、於長崎御奉行所被仰渡、和僧被仰付候節は、於寺社御奉行所被仰渡、

〔天明集成絲綸錄二十九〕明和九辰年五月　黄檗宗　山城國宇治　萬福寺

右諸堂及大破、修理爲助成、御府内万石以上以下武家方、幷町中勸化御免被仰出候ニ付、去卯十月より、當辰二月迄、五ヶ月之內、志之輩者、物之多少ニよらす、可致寄進、宿寺深川海福寺江勸物差越候旨相觸候上は、月限可致寄附儀ニ付、相殘候旨申筋ニは有之間敷候、併勸物寄附類も有之候はば、去卯十月相觸候通心得、當八月迄ニ宿寺深川海福寺江可致寄進候、

五月

〔近世畸人傳二〕僧鐵眼

僧鐵眼、諱光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻もありしが、其宗徒不德無才の人も、寺格により上位に居ることを甘心せず、黄檗山にのぼり、木庵禪師に從ふ、〇中略一切經の藏板を思ひたちて勸進せしに、其料金集れるころ、天下大に饑しかば、師憐みて、件の金を不殘施し、又如前勸進せるに、數年ならず又集りたるが、再び五穀不熟にて餓死多ければ、此たびも此金を救ひに盡せり、されども德の至りにや、第三回の勸進にて、藏經の印刻成就して、其經を頒つ所の代金を、本寺より巳下一宗の寺々に、配ること今に於て同じ、

平等院

平等院ハ、山城國久世郡宇治村ニ在リテ、其寺域宇治河ニ臨メリ、永承七年、藤原賴通、其別業ヲ捨テヽ寺ト爲シヽ所ニシテ、園城寺ノ僧永圓ヲ開祖トス、其阿彌陀堂ヲ鳳凰堂ト號シテ、世ニ著名ナリ、

名稱 所在

〔拾芥抄 下本 諸寺〕平等院 宇治

〔雍州府志 五 寺院〕久世郡　平等院　號朝日山、在宇治川西、斯處舊有左大臣源融公之別業也、爾後、陽成院、宇多帝、朱雀帝、三代主上屢御遊之地、而被催遊獵燕飮之興、行宮號宇治院、一條院時爲左大臣雅信公之領地也、長德四年、御堂關白道長公愛斯地之風水、構別莊、時々往來、息男宇治關白賴通公、永承七年捨宅爲寺、

〔山城名勝志 十八 久世郡〕平等院 在宇治橋南

土人云、此院、元天台、寺務三井圓滿院御門主也、然宇治關白御家人等結草房、爲菩提所、寄衣料於心譽上人、令住于此地、于今天台、淨土兩流守此院、鎭守離宮明神菟道稚郎子皇子是也、

創建 沿革

〔帝王編年記 十八 後冷泉〕永承七年三月廿八日、關白左大臣 賴通 以宇治別業爲佛寺、平等院奉供養、使置六口僧、被修法華三昧、四月七日、僧綱已下、於賀茂社、爲禳疾疫、奉供養大品般若經四部、先是依夢想告、奉勸進院宮公卿大夫等、各令書寫也、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕永承七年三月廿八日癸酉、左大臣 藤原賴通 捨宇治別業爲寺、安置佛像、初修法華三昧、號平等院、

〔諸門跡譜 上〕平等院

堂塔

永承六辛卯○元亨釋書亦同、恐七年壬辰誤、三月廿八日、關白太政大臣藤頼通公建立之給、仍號宇治殿也、

永圓大僧正寺一身阿闍梨

致平親王男、村上天皇孫、母源雅信公女、

明行法親王一身阿闍梨、俗名敦元親王出家、

三條院皇子、冷泉院孫、母御堂關白道長公女、

行尊大僧正寺法務天台座主

參議從三位源基平男、小一條院孫、三條院彥明行親王貢保延元年二月九日寂、八十一歲、

〔古事談一王道后宮〕宇治殿○頼通建立平等院宇治邊、多寺。○。領ニ被打入云々、後三條院聞召此事、爭テ恣ニサル事有哉トテ、遣官使可撿注之由、被仰下ケリ、宇治殿聞食其由、平等院大門前ニ、錦平張ナド打テ、種々儲ドモ用意シテ、雖待官使、官使成恐、不參向止畢ト云々、

〔沙石集七上〕齒取事

宇治殿ノ、平等院ヲ建立シ、阿彌陀堂、供養ノアリケルニ、山僧ニナニガシノ阿闍梨トカヤ、貴キ聞エ有ルヲ、御導師ニ請ジ給ケルニ、施主分ニ、此御堂造立ノ故ニ、地獄エ落サセ給ハン事コソ、淺猿ク侍レト云タリケレバ、聽聞ノ人々マデモ、興サメテ思ケルニ、御供養スギテ、イカヾシテ此ノ罪懺悔シ侍ルベキト、仰ラレケルヲ、此御堂造立之間、非分ニ、人ヲ惱シ給ヘル分ヲ、御得分ノ物ニテ、ツクノヒ返シ給ハヾ、目出タク侍ナント、申サレケレバ、悉クタヅネ聞食サレテ、人夫マデモ、イトマノ分ヲゾ、タマヒケル、カヽル淸淨ノ信心有テ、ツクリオキ給ヘル寺ニテ、昔ヨリ今ニイタルマデ、ヤケズ損ゼズ、○下略

〔山州名跡志十五久世郡〕平等院　在橋○宇治橋南二町許　宗旨天台、屬三井寺、　樓門北向　額平等院堅額中納言俊房卿筆、

凡寺院ニ構門、北ニ向フハ稀也、此門北面也、○中略按ズルニ、當寺初天台ニシテ、屬園城寺、大僧正行尊住セリ、仍テ號平等院僧正、

扇芝　在樓門內、源三位賴政自害ノ所也

觀音堂　在右同所、堂(向寅卯、)本尊十一面觀音、(立像、五尺許、)安厨子、作春日、脇士、左地藏菩薩、(立像、四尺許、)安壇外、作湛慶、右不動明王、(立像、四尺許、)同上、作智證大師、此本尊ヲ稱釣殿觀音、其故ハ、始此所ニ有殿閣時、有釣殿、是則官家逍遙ノ時垂釣所ナリ、

賴政馬繫松　今亡、古在觀音堂前、枯木倒在側、

佛殿　在觀音堂南、堂(向寅卯、)稱此堂鳳凰堂ト云、形兩翼ヲ伸タルニ似タリ、棟上ニ雌雄ノ鳳凰ヲ造テ置ク、順鳳舞、(以銅作、長三尺許、)屋禰二重、左右ニ閣アリ、佛殿ヲ隔ルコト四間許、其中間上、廊ニシテ、其床佛殿第二ノ軒ニ雙リ、是則兩翼ニ類、本尊阿彌陀佛、(坐像、六尺許、上品印、)作定朝、堂內左右ノ壁板ヲ以テ作ル、長押ノ上ニ、二十五菩薩ノ像雲ニ乘ズルヲ繫ル、長、立像ハ一尺四五寸、坐セルハ尺餘許、作未考、長押ノ下壁及三方ノ扉ニ、(開戶)淨土九品ノ說相ヲ畫ク、繪師長者爲成筆也、同上ニ色紙形アリ、觀經ノ文ヲ書ス、中納言俊房ノ筆跡ナリ、諸ノ莊嚴美麗ニシテ、天蓋、佛壇等ニ、車渠馬腦諸ノ珠玉ヲ以テ飾ル、所鏤箔光色世ニ希有ニシテ、如此蓋亦絕倫ナリ、堂前ノ池形ヲ阿彌陀佛ノ種字ニナス、惠心僧都ノ所作也、

〔扶桑略記　二十九後冷泉〕永承八年(天喜元年)○三月四日甲辰、關白左大臣(賴通)○平等院內、建立大堂、安置丈六彌陀佛像、喝百口高僧、設其供養、准御齋會、佛像莊嚴、古今無雙、

〔山城名勝志　十八久世郡〕平等院○中略

阿彌陀堂

寺說云、此堂移漢例兩樓爲翅、後廊爲尾、棟鎔金鳳凰雌雄居之、隨風舞、故曰鳳凰堂、

按、是古宮製ヲ摸セルニヤ、豐樂殿ニモ、左右ニ、栖霞、霽景ノ兩樓アリ、洛邊無雙ノ堂ツクリナリ、

〔古事談五神社佛寺〕宇治殿(○藤原賴通)令建立平等院給之時、地形事ナド爲被示合、令相伴土御門右府給、宇治殿被仰云、大門之便宜非北向者無他之便宜、北向有大門之寺侍乎云々、右府被申不覺悟之由、但匡房卿(○大江)イマダ無職ニテ江冠者トテアリケルヲ、後車ニ乘テ被具タリケルヲ、彼コソ如然コトハウルセク覺テ候ヘトテ、召出被問之處、匡房申云、有北向大門之寺ハ、天竺ニハ奈良陀寺、唐土ニハ西明寺、此朝ニハ六波羅密寺云々、宇治殿大令感給云々、

〔定家朝臣記〕康平四年十月廿五日甲辰、平等院御塔供養也、先二日裝束、(○中略)卯剋安置御佛、(普賢如來像)辰剋給法眼、(導師、幷座主、讃衆廿人、已上新調、)午剋打鐘、此間、上卿已下著饗座、次上卿著座、未剋僧侶參上、(座主大僧正明快參)(證議昇從脇道立候座、椅僧正同被候、)導師前大僧正明尊、(乘肩輿無蓋、侍無執綱、人俄有讃留之、)讃衆廿人、(數列、爲庭中鐃道、助四、實源持鉢前行、導師有讃不立堂上行道、)此間船樂、出從阿彌陀堂北廊北邊、奏樂、各以著座、(○又見百練抄)

〔扶桑略記二十九後冷泉〕康平四年十月廿五日、供養宇治平等院之塔、皇后宮職(寬子)造立件多寶塔一基、奉安置金色摩訶毘盧遮那如來像一體、阿閦如來像一體、寶生如來像一體、无量壽如來像一體、不空成就如來像一體、平等院者、水石幽奇、風流勝絶、前有一葦之渡、長河宛如導群類於彼岸、傍有二華之疊層嶺、不異積諸善而爲山、是以改賓閣兮爲佛家、廻心匠兮構精舍、爰造彌陀如來之像、移極樂世界之儀、禮月輪以舉手者、仰引接於八十種之光明、臨露地以投歩者、縮往詣於十萬億之刹土、況乎弘一乘之妙文、修三昧之行業、弟子建多寶塔於斯處、安金剛界於其中、露盤之代仙掌、寫輪奐於照明圓之雪、風鐸之懸四端、任製造於菩提樹之月、(已上)

治曆二年十月十三日、右大臣藤原朝臣師實、平等院内建五大堂供養之、

〔中右記〕保安元年正月二日癸卯、入夜知信、爲殿下(○藤原忠實)御使來云、今年堂一宇、可建立宇治平等院也、而金神在巳方、從京宇治當巳方也、仍去廿九日、向宇治方違了、　三月二日壬寅殿下、内大臣殿、早

且先入御宇治、平等院中、被立八角御堂、棟上也、午剋有件事、殿下内大臣殿（烏帽子御直衣）令付綱末給云々、後所聞、工重經承也、

〔本朝世紀〕康治元年二月廿六日庚寅、入道前大相國（○藤原忠實）母儀（號一條殿）於宇治被供養堂云々、　六月廿九日庚寅、是日、入道大相國於宇治小松殿北邊、建立新堂、今日有供養事、法皇幷高陽院臨幸、以仁和寺二品法親王為導師、就眞言之軌儀、儲供養之齋筵、群卿侍臣、皆悉參會、有音樂舞能等、中納言藤實光卿作願文、有勸賞幷敍人々、（○下略）

〔太平記十四〕將軍（○足利尊氏）御進發大渡山崎等合戰事

去程ニ、正月（○建武三年）七日ニ、義貞内裏ヨリ退出シテ、軍勢ノ手分アリ、（○中略）宇治ヘハ、楠木判官正成ニ、大和、河内、和泉、紀伊ノ國ノ勢五千餘騎ヲ副テ向ラル、（○中略）敵ニ心安ク陣ヲ取セジトテ、橘ノ小島、槇島、平等院ノアタリヲ、一宇モ殘サズ燒拂ケル程ニ、魔風大厦ニ吹懸テ、宇治ノ平等院ノ佛閣、寶藏、忽ニ燒ケヽル事コソ、淺猿ケレ、

〔天明集成絲綸錄三十一〕天明二寅年十二月

山城國宇治鄕
平等院

山城　大和　丹波　播磨　近江

右伽藍、鳳凰堂大破ニ付、修復為助力、勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參役僧、來卯四月より午四月迄、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候間、志之輩は、物之多少ニよらず可致寄進旨、御領は御代官、私領は領主地頭より可被申渡候、

十二月

右之通可被相觸候

〔扶桑略記（二十九後冷泉）〕治暦三年十月五日庚戌、天皇車駕、幸臨宇治平等院、宸儀渡御宇道橋之間、伶人棹

華船、泝河上、凡仁祠之莊嚴事絶于筆端、入御之後、即駕腰輿、幸禮阿彌陀堂、池上架錦繡假屋、又池中有龍頭鷁首船、奏童樂、訖渡御經藏、御覽佛具、還御之後、供御膳、以金銀珠玉備之、事之希有、殊催叡感、翌日雨下、乘輿停蹕、風流地勢、殊可賞翫、忽有詩議、召屬文之生、令獻詩、文人著座之間、被獻細馬六疋、

七日壬子、還御、寺家加封三百戶、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕永承八年〇天喜元年十月十三日、上東門院〇彰子參詣宇治平等院矣、

〔扶桑略記 三十 堀河〕應德四年〇寬治元年五月十九日庚午、太上天皇〇白河攝政從一位藤原朝臣〇師實內大臣藤原朝臣〇師通幷納言、參議、侍臣等供奉、渡御宇治平等院、叡覽風流水石之地、 廿一日壬申、上皇自宇治院還御洛陽、

〔百練抄 五 堀河〕寬治元年五月十九日、太上皇〇白河臨幸平等院、 廿一日、還御有賞、

〔後二條關白記〕寬治七年三月廿四日辛丑、今日、院〇白河有御幸宇治平等院、予〇藤原師實著冠直衣、辰時參御所、大殿〇藤原師通御冠直衣、三位中將布衣、頭辨師俊衣冠、沙汰萬事、相待御幸、日已及未時御幸成、

〔長秋記〕長承三年五月十三日壬戌、陰、時々雨下、上皇〇鳥羽御幸宇治平等院、辰始左兵衛督被入來、依昨日案內也、令同車師仲、令參鳥羽殿、於下官〇源師時乘車直令參宇治、召時兼申所勞由、依仰直所參仕也、武衛下官共著布衣、辰二刻進發、扈從者五人也、過深草之間、左衛門志成國、以取夫令作路、其中有予仕丁也、夜中被取具雜色等請返間、放免借力不返與、仍搦具件放免將來、依事不穩便、從宜優免已始至宇治橋妻下車、令入本觀音房、待臨幸、于時宇治尼公送湯漬、飡食畢、已了御幸、前駈到來、下官自是騎馬、渡橋入自大門、至北廊南妻、前大相國〇藤原忠實新大納言〇忠實次子賴長被候此所、御車同入自大門、養御車之間、相國招關白〇藤原忠通共被寄御車、上皇先令禮本堂、次令禮懺法堂給、次禮持佛堂給、此間、下官等見本堂、件佛皆定朝作由處、佛師院覺云、於不動尊高成之作也者、仍此度委見、誠高成作也、尤有興、次渡御阿彌陀堂、御車大相國被參、關白以上步行參、卿相居北廊出馭、上皇御佛前、大相國被候北戶上、

向下官告召由給、仍經東榮參上、御堂飾間事、細々承之、

一佛壇金銅高欄滅金剝事、不依打物鑄物、共以同、(鳥羽鑄物、宇治打物、)今所爲又以同者、爲之如何、予申云、壇高欄共沃懸地吉歟、無左右仰、玉幡事、仰云、尤大切也、水精火打雖難得、自出來歟、座居玉近來用金銅、玉尙可被用水精歟、仰云可然、佛座平事、是不可本、於小御所爲奉見平座也、仍可村此儀哉、仰云可然、如此事不能細記、此間雨灑良久、還御小御所、本堂北廊居上達部殿上人饗、然而人不著之、皆參御所、(〇中略)先予師仲參御所、上皇乘御車、御覽泉殿、殿中隔皆徹之、只如客殿、於此所殿又數剋談給、御覽法定院、故四條太后(〇後冷泉皇后藤原寬子、賴通女也、)建立堂也、佛師長勢作云々、堂忠(〇忠上下恐有脫文、)作云々、水石草樹皆優美也、此間、關白參給、次還御、雨脚滂沱、招予師仲直歸京、戌剋也、

〔明月記〕元久元年七月十四日、今夕御幸(〇後鳥羽)平等院之由雖聞、無程不能參、私出橋邊、惱亂不輕、十五日、參院、今日寶藏御覽也、午終許御幸、(御輿、)公卿侍臣騎馬、(公卿少々御輿先陣、)入御西大門、於經藏廻廊戶下下御、自筵道昇御、公卿皆扈從、不可然云々、殿上人猶以入、(少々被出中、)入宿所休息、經一時許還御由聞參入、阿彌陀堂方御覽廻、太政大臣(〇藤原賴實)以下扈從、自北大門還御、入御後退下、

〔宇治御幸記〕寶治二年十月廿二日乙未、今日上皇(〇後嵯峨)御逗留宇治也、傳聞、人々著水干裝束參入、早旦有經藏御覽事、御烏帽子、直衣、薄色固織物、御奴袴、攝政(藤原兼經、冠直衣、)以下候御共、顯方朝臣候御劍、上皇、攝政左府(〇藤原兼平)令入經藏給、長吏圓淨僧正、率供僧參入、爲雜役云々、堀川大納言令所望參入、珍事歟、冷泉大納言有召參入、此外人々不入經藏云々、攝政申云、本願子孫、不令入經藏、仍不召大納言殿云々、此事可尋、寶物御覽畢、還御、人々淺著水干狩袴、

〔扶桑略記二十九後三條〕治曆五年(〇延久元年)五月廿八日甲子、前太政大臣(〇藤原賴通)於平等院始行一切經會、(〇又見初例抄)

〔本朝無題詩十山寺〕夏日宇治平等院言志　法性寺入道殿下(〇藤原忠通)

平等院前誰發榮、傳斯重代威猶成、蓮花紅綻淸風曉、香火煙纖殘月程、松杉戰枝眠空斷、鐘磬報聲夢獨驚、縱往衰中催眺望、無勝此處未聞名、

同人

梵宇今傳平等號、我斯草創昔餘流、雙松寺裏宜修夏、宿麥壠邊只有秋、淨土業因西可向、暮天炎暑未曾休、道場尋到無他念、瞻仰尊顏暫逗留、

〔明月記〕元久二年三月廿二日、今日有被開宇治寶藏事、○中略 仍大納言殿藤原兼經弟兼輔令向宇治、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附賴政最後事

三位入道ハ、右ノ膝ヲ射サセタリケレ共、宮○高倉ノ御伴ニ落行ケルガ、子息ノ判官ガ討ルヽヲ見テ、申ケルハ、兼綱コソ、入道ヲ延セントテ、討死仕ヌレバ、若キ子ガ討ルヽヲ見テ、老タル入道ガ、イツマデ命ヲ生トテ、イヅクマデカ落行ベシ、御矢ヲ仕ベシ、急南都ヘ入セ給テ、深ク衆徒ヲ御憑有ベシ、今コソ今生ノ最後ニ侍レ、サラバ暇給ベシトテ引返ケレバ、宮モ御遺惜ク思召、御涙ニ咽バセ給フ、入道ハ、養由ヲモ欺ケル程ノ弓ノ上手也ケレバ、年闌タレドモ引トリ〳〵、散々ニ射ケレバ、アダ矢ハ一モナシ、平家ノ大勢、射シラマサレテ、度々河耳ヘ引退、右ノ膝モ痛手也、矢種モ既ニ盡ケレバ、郎等ノ肩ニ懸、平等院ノ釣殿ニヲリ居テ、唱法師源八副ヲ招テ宣ケルハ、身仕六代之賢君、齡及八旬之衰老、官位已越列祖、武略不慙等倫、爲道爲家有慶無恨、偏爲天下今擧義兵、雖亡命於此時、留名於後世、是勇士所庶、武將非幸哉、各防矢射テ闕ニ自害ヲ進メヨト申ケレバ、○中略 入道池ノ水ニテ、手口ヲスヽギ、西ニ向テ念佛三百返計申テ、最後ノ言ゾ哀ナル、

埋木ハ花咲事モナカリシニ身ノナルハテゾ哀ナリケル、ト云モ果ヌニ、太刀ノ先ヲ腹ニ取當テ倒懸リ、貫テゾ死ニケル、此時、歌ナド讀ベシトハ覺ネドモ、若ヨリ心ニ懸好ミケレバ、最後ニモ思出ケルニコソ、哀ニヤサシキ事也、入道ノ首ヲバ、下河部藤三郎取テ、平等院ノ後戸ノ板敷ノ下

名勝所在

ノ壁ヲツキ破テ、隱シ入ル、同子息伊豆守仲綱モ、散々ニ戰テ後、入道ノ跡ヲ尋テ、平等院ノ御堂ニ立入テ、物具脫捨腹搔切テ死ニケリ、彌太郎盛兼其ノ頸ヲ搔落シテ、入道ノ首ト一所ニ隱シ置、人不知之、後日ニ、竹格子ノ下ヨリ、血ノ流出タリケルヲ恠テ、御堂ヲ開テ見ケレバ、頸モナキ死人アリ、誰ト云事ヲ不知、後ニコソ伊豆守トモ披露シケレ、

〔宇治拾遺物語序〕世に、宇治大納言物語といふ物あり、此大納言は、隆國といふ人なり、西宮殿高明也の孫、俊賢大納言の第二の男なり、年たかうなりては、あつさをわびて、いとまを申て、五月より八月までは平等院一切經藏の南の山ぎはに、南泉房といふ所にこもりゐられけり、さて宇治大納言とはきこえけり、

〔山城名勝志十八久世郡〕南泉房舊跡在平等院ノ方丈ノ南、土俗其他ヲナイセン坊ト云フ、

笠置寺

笠置寺ハ、山城國相樂郡笠置山ニ在リ、天智天皇ノ時、創建セシ所ニシテ、中世律僧貞慶此ヲ中興ス、

〔拾芥抄下本諸寺〕笠置大和國、彌勒、

〔書言字考節用集一乾坤〕笠置山カサギヤマ本字鹿鷺、山城州相樂郡、

〔枕草子九〕寺は　かさぎ

〔山州名跡志十六相樂郡〕笠置山　在同所、〇笠置　泉川南畔、〇中略

鹿路山笠置寺　在右山上、坂路八町登村西、折北境地北面、　宗旨眞言新義　本尊彌勒佛刻彫自然石

當寺開基不詳　本願天武天皇

創建

〔大和めぐり〕南笠置　北笠置より舟にて渡る、人家頗多く、富商あり、〇中略是より笠置寺まで八町の坂を上る、毎町石表を立たり、

〔東大寺要錄六〕笠置寺　右寺、天智天皇第十三皇子建立、有緣記

〔帝王編年記九天智〕三年甲子、天人降造笠置石像彌勒、

〔伊呂波字類抄加諸寺〕笠置カサキ天智天皇御願

天智天皇皇子狩獵之間、皇子就鹿馳行、騎馬到臨高岸、鹿失足而落、抛弓矢、雖引手綱敢不留、至淨殿之透出馬、騎(騎一本作跪、或與跪通歟)餘足四蹄聚一處、直下者十許丈也、眼眩轉而不踞床(床恐底訣)驚怪還馬、無足之所踏如夢、頭曰、山神鬼魅若扶吾命者、於殿畔奉刻彌勒尊像、依願力須臾如有冥助、仍建立之、

〔今昔物語十一〕天智天皇御子始笠置寺語第三十

今昔、天智天皇ノ御代ニ、大友御子在マシケリ、〇中略山城ノ國相樂ノ郡賀口ノ鄉ノ東ニ有ル山邊ヲ狩リ行クニ、山ノ斜ニ登タル所ヲ、皇子、駿馬ニ乘テ、鹿ニ付テ馳セ登リ給フニ、鹿ハ東ヲ指テ逃グレバ、我レハ鹿ノ尻ニ次テ馳セテ鐙ヲ踏ミ、柾テ弓ヲ引ク程ニ、鹿俄ニ失ヌ、倒ルヽナメリト見ルニ、鹿不見エ、早ク岸ノ有ケルヨリ、落ヌル也ト思テ、弓ヲ投ゲ弃テ、手綱ヲ引ト云ヘドモ、走リ立タル馬ナレバ、輙ク不留ラ、早ク遙ニ高キ岸ヨリ鹿ハ落ヌル也ケリ、此乘リダル馬走リ早マリテ鹿ノ如ク、既ニ可落キカ、四ノ足ヲ同所ニ踏テ、少シ指出タル巖ノ崎ニ立ニタリ、馬ヲ折返サムニモ、所モ无シ、馬ヨリ下リムト爲ルニモ、鐙ノ下ハ遙ナル、谷ニテ有レバ、可下キ所无シ、馬少シ動カバ、落入ナムトス、谷ヲ見下セバ、十餘丈許ナル下口也、見ルニ目モ暗レテ、谷底モ不見エ、東西モ忘レヌ、魂ヲイツキ、心騷テ、只今馬ト共ニ死ナムトス、然レバ皇子歎テ云ク、若シ此所ニ座セバ、山神等、我ガ命ヲ助ケ給ヘ、然ラバ此巖ノ喬ニ、彌勒像ヲ刻ミ奉ラムト願ヲ發スニ、卽チ其驗ニ、馬尻ヘ、逆サマニ退テ、廣所ニ立ヌ、其時皇子馬ヨリ下テ、泣々伏シ禮ミ、後ニ來テ尋ム注シニ見ムガ爲ニ、著給ヘル藺笠ヲ脫テ置テ返ヌ、其後一兩日ヲ經テ其所ニ置シ所ノ笠ヲ尋テ至ヌ、山ノ頂ヨリ下

堂塔

テ、巖ノ腰ヲ廻リ經テ、麓ノ砌ニ至ヌ、上樣ヲ見上グレバ、目モ不レ及雲ヲ見ルガ如シ、皇子心ニ思ヒ煩テ、山ノ腹ヲ指テ、其面ニ彌勒ノ像ヲ彫リ奉ラムト爲ルニ、力无シ、其時ニ天人是ヲ哀ビ助ケテ、忽ニ此佛ヲ刻ミ彫リ奉ル、其間俄ニ黑キ雲覆テ、暗キ夜ノ如ク成ヌ、其暗キ中ニ少キ石ノ多ク迸ル音聞ユ、暫計有テ、雲去リ霞晴テ、明カニ成ヌ、其時ニ皇子仰テ巖ノ上ヲ見給フニ、彌勒ノ像其形チ鮮ニシテ、彫奉リタリ、皇子是ヲ見テ、泣々恭敬禮拜シテ返給ヌ、其ヨリ後、是ヲ笠置寺ト云是也、笠ヲ注ニ置タレバ、笠置ト可云也、其レヲ只和カニ、カサギトハ云也ケリ、○中略此寺ハ、彌勒彫顯シ奉テ後、程ヲ經テ、良辨僧正ト云フ人ノ見付ク奉テ、其後ヨリ行ヒ始タルゾト人云フ、其ヨリナム、堂共ヲ造リ、房舍ヲ造リ、重テ僧共多ク住シテ行フ也トゾ語リ傳ヘタルトヤ、

〔山州名跡志十六相樂郡〕笠置山○中略

彌勒石四面　高五間餘、於中横三間許、土際二間許、頂上一間餘、山爲後、面現二彌勒佛像一、立像、八尺許、元弘年中、後醍醐天皇、此山ニ遁入テ、皇居ヲ此石ノ後山ニ造ラシム、然ルヲ陶山、小見山、皇居ニ火ヲ放ツ時、共ニ燒損シ、形相不二安定一也、　前在二拜殿一繫造

石塔十三重　在二彌勒石前一　由緣不レ詳

藥師石　在二同所南一　山ヨリ崖上ニ差出、出所五間許、長九間云々、横五間許、　現二石面藥師佛像一、

虚空藏石　在二彌勒石艮一、五間許、　石面四向　現二虚空藏菩薩像一

護摩堂　在二彌勒石北傍一　本尊不動明王立像、二尺許、　作不レ考

後醍醐帝皇居　在二彌勒石上一、到二藥師石傍一、本丸二丸ト名テ、南北ニ雙ブ、其中間溝ノ跡アリ、本丸ハ其北方、彌勒石ノ頂ニ至テ、地形平ナリ、皇居ノ由緣見二太平記一○中略

正月堂　從二藥師石南一到二山上一、左平地其舊跡也、

護摩壇跡　在二同所垣內一　此所古ヘ初春始、天下安全ノ修法ノ所ナリ、號二正月堂行一是也、此行法、春

三月之ヲ修ス、所謂正月堂、二月堂、三月堂ナリ、堂山回祿ノ後、正月堂ノ行法斷絶ス、二月堂、三月堂ノ行法ハ、有南都東大寺者是也、(中略)

般若臺　在鐘樓西二町許、

此所ハ、解脱上人、春日明神ヲ爲奉請、建久年中ニ所作也、般若臺ハ、天竺五大山ニアル所ナリ、(向殿ニ別記、)此所境地、南北七八間、東西四間許、岸ヨリ築出ス所、高サ六間許、同キ下壇ノ地ニ六角形ノ堂跡アリ、

〔吾妻鏡十八〕元久元年四月十日癸卯、笠置解脱上人(貞慶)使者、去頃參著、於當寺可建禮堂、間、所申將軍家御奉加也、仍今日賜砂金已下重寶等於彼使、但無御奉加之狀云云、

〔元亨釋書五慧解〕釋貞慶、藤給事(通憲)〇藤原之孫、尙書左丞貞憲之子也、母夢、高僧來宅、自稱曰、貞慶、言已入懷、自是而孕、母記而藏之、薙染後奉書於母、署曰、貞慶、母依之期、慶以累世之比丘也、投興福寺出家、有才譽、應最勝講詔、慶居貧乏資、借乘僕於人、以故後於會、官使催之逢于路、相捉入宮、會衆先坐堂上、莊服嚴麗、慶弊衣而至、官僚緇伍皆匿笑、慶謂、正今釋子不率法儀、只競浮諂、我不可與此徒爲等伍、宮講五日、猶患其久如也、講已不還南京、上山州笠置窟、高名籍甚、

〔細々要記七〕永和二年(南方天授二年)三月十二日、具秀朝臣、南都ヲ發シ、城州笠置ヘ登山セラル、彼寺、去ヌル元弘元年、後醍醐帝皇居ノ時、東國ノ凶徒燒拂ヲハンヌ、其後建武二年、御造營ノ御沙汰アリケル中、天下大亂ニツキ、中途ニシテ造作ヲ止ム、其後亂逆不治ニヨッテ、今ニ沙汰ナシ、今年南山ノ帝御願ニヨッテ、造營ノ御沙汰アリ、具秀朝臣巡見ノタメ、發向セラルト云々、紀州ノ山ヨリ材木ヲテンジ、北畠殿ヨリ人夫ヲ差向ラルベキヨシ云々、

〔笠置寺緣起〕元弘元年辛未八月廿八日、戌剋ニ、城中ニ火ヲ放ツ間、寄手ノ軍兵亂入畢、是ヨリ宮(後醍醐)ハ又和東ヘ行幸成セ給フ、然間寄手兩ノ口ヨリ亂入テ、所々ニ火ヲ放ツ間、本堂ヲ始テ、堂塔、坊

寺領

參詣

雜載

舍、鐘樓、經藏、悉被燒拂畢ヌ、僅ニ千手堂、六角堂、大湯屋バカリゾ殘リケル、爰ニ魔風頻ニ吹テ、本堂ノ猛火本尊ニ覆、石像燒隔テ、化人刻彫ノ尊容已ニ埋沒セリ、其後、吉野帝御代元弘三年癸酉八月十四日、奉勅宣、本堂造立ノ企ニ及トイヘドモ、成セズシテ頗年月ヲ經、于時永德元年辛酉三月十一日ニ造畢セシム、然ニ又應永第五曆、籠所ノ局ヨリ火出テ、重テ炎上畢ヌ、〇中略

本云 文明十七年乙巳、笠置寺住侶願宗房貞盛、彼寺再興爲勸進御下向之時、令書寫御本畢、

〔東大寺續要錄 一〕末寺 笠置寺山城國 件寺廻田所出四十餘石也、 近來廿石許、七の庄主沙汰、不及本寺年貢、

〔百練抄 四條一〕永延元年十月十七日、院〇花山參詣長谷寺笠置寺七大寺、

〔女人往生聞書〕女人ノカタチ、〇中略 笠置寺ハ、天智天皇ノ建立ナリ、カノ五丈石像ヲ、彌勒ノマヘタカクアフヒデ、コレヲ禮拜ストイヘドモ、ナヲ壇ノウヘニハハヾカリアリ、

〔本朝世紀〕久安五年五月十二日癸巳、今日於仙院御所、〇鳥羽 召卿相兩三人、聊有被尋事、得長壽院修理間事也、件御堂、頗西方傾、而被加修理之間、佛像可奉出他所否、被問人々、左大將雅定卿、權大納言伊通卿等申云、御佛靈驗佛也、輙不可奉動、者以大木扶持御堂、何不叶哉、若猶可傾者、西方可作廊二宇也、東大寺大佛新以開眼之後、鳥雀犯之、笠置彌勒加彩色之後、靈驗惟少、准此等例、更不可動、

〔太平記 三〕主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上笠置ヘ臨幸成テ、本堂ヲ皇后トナサル、始一兩日ノ程ハ、武威ニ恐テ、參リ仕ル人、獨モ無リケルガ、叡山東坂本ノ合戰ニ、六波羅勢打負ヌト聞ヘケレバ、當寺ノ衆徒ヲ始テ、近國ノ兵共、此彼ヨリ馳參、

蟹滿寺

名稱所在

蟹滿寺ハ、山城國相樂郡綺田村ニ在リ、創建年代詳ナラズ、

〔山城名勝志 二十相樂郡〕蟹滿寺 在綺田村玉水町東南五六町許
今有小堂一宇、號光明山懺悔堂、本尊觀音立像、又有釋迦之像、

〔雍州府志 五寺院〕相樂郡 蟹滿寺 號普門山、○中略 今眞言宗之僧守之、

〔和漢三才圖會 七十二末山城〕蟹滿寺 在相良郡綺田村、

本尊 釋迦如來 長八尺八寸○中略

按、元亨釋書爲久世郡、又本尊爲觀音者非也、恐是虎關師所聞之差謬也、

創建

〔元亨釋書 二十八寺像志〕蟹滿寺者、在山州久世郡、有郡民、合家慈善奉佛、有女七歲誦法華普門品、數月而終全部、一日出遊、村人捕蟹持去、女問、捕此何爲、答曰、充飡、女曰、以蟹惠我、我家有魚、相報酬、村人與之、女得放河中、歸家多貺乾魚、其父耕田中、一蛇追蝦蟆而呑之、父憐而不意曰、汝捨蝦蟆、以汝爲壻、蛇聞言擧頭、見翁吐蝦而去、父歸舍思念、誤發言、恐失愛子、懊惱不食、婦及女問曰、翁何有憂色而不食、父告實、女曰、莫慮也、早飡焉、父悅受膳、初夜有叩門人、女曰、是蛇也、只言三日後來、父開門有衣冠人、曰依約來、父隨女語曰、且待三日、冠人去、女語父擇良材、固造小室、室成女入内閉居、三日後冠人果來、見女屛室、生恚恨心、乃復本形、長數丈、以身纏室、擧尾敲戶、父母大恐、不得爭奈、半夜後、叩聲息聞悲鳴聲、頃刻悲聲又止、明旦父見之、大螃蟹百十、手足亂離、蛇又被瘡百餘所幷皆死、女開室出、顏色不變、曰我聞戶外、大小蟹千百來、殺此蛇、大蟹多歸小蟹死、今存者皆小蟹耳、然大於尋常、我通夜誦普門品、有一菩薩長尺餘、語我曰、無怖也、我擁護汝、父母大悅、便穿土埋衆蟹及蛇、就其地營寺薦冥福、故號蟹滿寺、又曰紙幡寺、

〔日本靈異記 中〕贖蟹蝦命放生現報蟹所助緣第十二

山背國紀伊郡部內有一女人、姓名未詳也、天年慈心、謓信因果、受持五戒十善、不殺生物、聖武天皇代、彼里牧牛村童、山川蟹取八、而將燒食、是女見之勸牧牛白、幸願此蟹免我、童男辭不聽曰、猶燒噉、慇誂乞脫衣而買、童男等乃免之、勸請義禪師令呪願、以放生、然後入山見之、大蛇飮於大蝦、誂大蛇言、是蝦免我、賂奉多幣帛、蛇不聽答、女募幣帛而禱之而曰、汝爲神祀、幸乞免我、不聽猶飮、又語蛇言、替此蝦以吾爲妻、故乞免我、蛇乃聽之、高捧頭頸以瞻女面、吐蝦而放、女期蛇言、自今日經七日而來、然白父母具陳蛇狀、父母愁言、汝了唯一子何誑託故作不能語、時行基大德、有紀伊郡深長寺、往白事狀、大德聞曰、烏呼難量之語、能信三寶耳、奉敎歸家、當期日之夜、閉屋堅身、種々發願、以信三寶、蛇繞屋蜿轉腹行、以尾打壁、登於屋頂、咋草拔開落於女前、雖然蛇不就女身、唯有爆音、如跳齚齧、明日見之、大蟹八集、彼蛇條然揿段切之、乃知贖放蟹報恩矣、无悟之虫、猶受恩返報恩、豈人應忘恩歟、自此已後、山背國貴山川大蟹、爲善放生也、

名稱
所在
創建

淨瑠璃寺

淨瑠璃寺ハ、圓融天皇ノ天元年間ニ、源滿仲ノ建立スル所ニシテ、行基作ノ藥師像ヲ本尊トシ、眞言宗ニ屬ス、後冷泉天皇ノ代、義明上人此寺ヲ再興シ、佛工定朝ノ刻セシ彌陀ノ大像九體ヲ安置ス、今廢寺ニシテ、舊地ハ山城國相樂郡木津川ノ東、西小田原ニ在リ、

〔雍州府志　五寺院〕相樂郡　淨瑠璃寺　在木津東南西小田原、人皇六十四代圓融院天元年中、多田滿仲所創建、而安置行基菩薩所刻之藥師五尺坐像、故擬瑠璃之寶珠而號淨瑠璃寺、則爲眞言宗、寺產有七百石餘、爾後、後冷泉院時有義明上人者、再興斯寺、又置佛工定朝所刻彌陀大像九體、古諸堂巍然、二條院宸筆有秘密莊嚴院之額、鎌倉右府源實朝公歸依之、被寄千石千貫之領地、寺中有莊嚴理

趣兩院、并四十九院等、今悉廢壞、有九體彌陀像之存、故世人不知淨瑠璃寺之號、直稱九體佛而已、

〔伽藍開基記 五 山城〕淨瑠璃寺 天元年間創、至元祿二年、已七百一十年矣、

此寺在山州相樂郡木津川之東西小田原、本朝六十四代圓融帝天元年間、多田滿仲源公、就當山創精藍、安置菩薩僧行基手造之藥師佛像、號曰淨瑠璃寺、納莊田若干頃爲寺庫、後六十餘年、有義明上人、移錫於此山、以佛工定朝所造阿彌陀大像九軀置當寺、第七十八主二條天皇有宸書額、曰秘密莊嚴院、鎌倉將軍實朝源公、納米田一千石銅錢一千貫、以資僧糧、山中有子院若干所、實一大精藍也、惜年代久遠皆廢、唯九軀彌陀像存焉、故庶民不知寺號、稱之以曰九體佛也、

古事類苑

宗教部五十二

佛教五十二

東大寺

東大寺ハ、一名ヲ金鐘寺ト云ヒ、金光明寺ト云ヒ、大華嚴寺ト云ヒ、城大寺ト云ヒ、總國分寺ト云ヒ、又單ニ東寺トモ云フ、大和國添上郡奈良ニ在リ、八宗兼學ニシテ、特ニ三論、華嚴、律三宗ヲ主ト爲ス、聖武天皇ノ朝、金銅盧舍那ノ佛像ヲ鑄造セシメシニ就キテ、建立シ給ヒシ所ニシテ、其像ノ鉅大ナルコト海內無雙ナリ、世ニ之ヲ奈良ノ大佛ト稱ス、

寺內ノ羂索院ハ、修二月濫觴ノ地ニシテ、一ニ二月堂ト云フ、其法華堂ヲ三月堂ト云ヒ、三昧堂ヲ四月堂ト云フハ、二月堂ニ對シテ言フナリ、又戒壇院ハ、我國戒壇ノ起源ニシテ、往昔ハ僧タルモノハ、皆此壇ニテ受戒セシナリ、事ハ戒律篇ニ詳ナリ、

正倉院ハ、聖武天皇ノ遺物幷ニ歷代ノ御物ヲ藏スル所ニシテ、世々勅封タリ、其開扉ニハ每ニ勅使ノ參向アリ、織田信長ノ蘭奢待ヲ截リシ事ノ如キハ、古來尤モ著名ノ談ナリトス、

名稱

〔伊呂波字類抄止諸寺〕東大寺

〔拾芥抄下本諸寺〕七大寺

東大寺聖武天皇神龜五年始造之

〔大和志二添上郡〕佛刹　東大寺一名大華嚴寺、又名城大寺、又總國分寺、又金光明四天王護國之寺、此聖武天皇所賜標額、今尙存焉、

〔和漢三才圖會七十三大和〕東大寺又名城大寺、大華嚴寺、恒說華嚴寺、國分寺、金光明四天王護國之寺、

〔續修東大寺正倉院文書四十三〕東寺寫經所、呂合經師五人、○中略

天平寶字二年八月十九日

〔續修東大寺正倉院文書二十八〕金光明寺造物所解　申奉請經事○中略

右被良辨大德宣、○下略

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年三月丁丑、運金光明寺大般若經、致紫香樂宮、頭至朱雀門、雜樂迎奏、宮人迎禮引導入宮中、奉置安殿、請僧二百、轉讀一日、○下略

〔東大寺要錄七〕太政官符　治部大藏宮內等省

佛金光明寺○本名金鐘寺、○中略

天平十四年七月十四日

〔神皇正統記嵯峨〕花嚴三論は、東大寺にこれをひろめらる、○中略此寺はすなはち此宗により一、建立せられけるにや、大花嚴寺と云名あり、

所在

〔大和名所圖會一添上郡〕東大寺は春日社の北に隣る(奈良)

西大門平城肚跡考曰、東大寺西南の門なり、雲井坂にあり、俗に雲井坂門とも、國分門ともいふ、額は弘法大師の筆にして、金光明四天王護國之寺と書し、額の縁に、梵天帝釋四天王の像を顯はし、長八尺、亘六尺、此門廢して後、額は東大寺殿屋寶藏にあり、門の礎は雲井坂のひがしに殘れり、

南大門額は弘法大師の筆なり、いにしへ東南院事務一代の御門主、此寺は八宗兼學といへども、三論華嚴を殊にせり、爭か華嚴にかぎるべからずとて、西南兩門の額をおろされしとなり、

寺域

〔正倉院御物〕東大寺圖

奉勅依此圖定山堺、但三笠山不入此堺、

東大寺圖○圖略

天平勝寶八歲六月九日、定堺爲寺領地、

創建

大僧都良弁〇以下署名略之

〔正倉院御物〕東大寺圖

奉勅依此圖定山堺、

四至

北一堺菁川川上高峯　二堺梅本横峯　三堺鳴川北横峯并梅谷

東四堺馬勝坂又外政所東峯　五堺内合井津谷

南六堺仙房并御笠山口　七堺寺薗

西八堺興福寺乾角　九堺野馬道并富羽北坂谷

右圖堺勅定如件

天平勝寶八歳六月九日〇署名略之

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年九月乙亥、勅依天平勝寶格、東大寺四面二里之内、不聽殺生、今年序稍遠、禁防彌薄、宜令使經國司、新立標牓、如有國師不撿、即以違勅論者、而今无識之徒、不畏朝憲、國司講師、禁制亦緩、遂使柰苑之邊、還作漁獵之地、梵宇之下、不異屠宰之場、宜更禁止、有犯科罪、

〔古京遺文〕勝寶感神聖武皇帝銅板詔書

菩薩戒弟子皇帝沙彌勝滿稽首、十方三世諸佛法僧、去天平十三年歳次辛巳春二月十四日、朕發願稱、廣爲蒼生遍求景福、天下諸國各合敬造金光明四天王護國之僧寺、并寫金光明最勝王經十部、住僧廿人、施封五十戸、水田十町、又於其寺造七重塔一區、別寫金字金光明最勝王經一部、安置塔中、又造法華滅罪之尼寺、并寫妙法蓮華經十部、住尼一十人、水田十町、所冀聖法之盛、與天地而永流、擁護之恩、被幽明而恒滿、天地神祇共相和順、恒將福慶永護國家、開闢已降、先帝尊靈、長幸珠林、同遊寶刹、又願、太上天皇〇文武、太皇后藤原氏〇宮子、皇太子〇孝謙、已下親王、及大臣等同資此福、倶到彼岸、藤原氏

先後太政大臣(○鎌足不比等)及皇后先妣從一位橘氏大夫人(○不比等室三千代)之靈識、恆奉先帝、而陪遊淨土、長顧後代、而常衞聖朝、乃至自古已來至於今日、身爲大臣、竭忠奉國者、及見在子孫、倶因此福、各繼前範、堅守君臣之禮、長紹父祖之名、廣給群生、通該庶品、同辭愛網、共出塵籠者、今以天平勝寶五年正月十五日、莊嚴已畢、仍置塔中、伏願、前日之志悉皆成就、若有後代聖主賢卿、承成此願、乾坤致福、愚君拙臣、改替此願、神明効訓、

〔續日本紀 十五 聖武〕天平十五年正月癸丑、爲讀金光明最勝王經、請衆僧於金光明寺、其詞曰、(○中略)別於大養德國金光明寺、奉設殊勝之會、欲爲天下之摸、諸德等、或一時名輩、或萬里嘉賓、僉曰人師、咸稱國寶、所冀屈彼高明、隨茲延請、始暢慈悲之音、終諧微妙之力、仰願梵宇增威、皇家累慶、國土嚴淨、人民康樂、廣及群方、綿該庶類、同乘菩薩之乘、並坐如來之坐、像法中興、實在今日、凡厥知見、可不思哉、

三月癸卯、金光明寺讀經竟、詔遣右大臣橘宿禰諸兄等、就寺慰勞衆僧、

〔扶桑略記 抜萃 聖武〕天平廿一年(○天平感寶元年)二月又云、天平年中、大倭國諸樂京東山有一寺、號曰金熟、金熟優婆塞、住斯山寺、故以爲名、今謂東大寺是其處也、

〔日本靈異記 中〕攝神王蹲放光示奇表得現報緣第廿一

諸樂京東山有一寺、號曰金鷲、金鷲優婆塞、住斯山寺、故以爲字、今成東大寺、未造大寺時、聖武天皇御世、金鷲行者、常住修道、其山寺居一執金剛神攝像矣、行者神王蹲繫繩引之、願晝夜不憩、時從蹲放光、至于皇殿、天皇驚怪、遣使看之、勅信尋光至寺見、有一優婆塞、引於攀彼神蹲之繩、禮佛悔過、信視遄還、以狀奏之、召行者詔、欲求何事、答曰、欲出家修學佛法、勅許得度、金鷲爲名、擧彼行、供四事無乏、時世之人美讃其行、稱金鷲菩薩矣、彼放光之執金剛神像、今東大寺、於羂索堂北戸而立也、(○下略)

〔古事談 三 僧行〕金鐘行者、靈驗殊勝、天下皆歸依之云々、可被造大佛殿沙汰之時、自大佛殿正面東八、金鐘行者之所領也、自正面西者、辛國行者之領也、爰辛國答云、歸依僧之道可依驗德、何強被歸依金鐘

一人哉、早被召合兩人、可被競其効驗、隨勝劣分德ヲモ被崇、伽藍ヲモ可被立云々、依所申有謂、公家召合二人之行者、已被競驗德、各誦呪祈之間、自辛國方、數萬之大蜂出來、擬螫金鐘之時、自金鐘方、大成鉢飛來、蜂ヲ打拂之間、蜂皆退散ス、其鉢至辛國之許、滅行者、爰辛國忽發惡心、爲寺敵、度々此寺之佛法ヲ魔滅セントシケリ、此事雖無慥之所見、古老所申傳也、但寺ノ繪圖ニ第比明神辰巳角、有辛國堂之由注之云々、(中略)

故老傳云、天皇御坐奈良京平城宮之時、東山麓大槻木下ニ、良辨僧正童行者ニテ、草庵ヲ結テ、土ニテ造タル、執金剛神ノ像ヲ安置シテ、其本尊ノ足ニ綱付テ、每禮拜引動テ、聖朝安穩、增長福壽ト唱ケリ、其聲カスカニ、天皇之御耳ニ聞ケリ、遣勅使被尋之處、勅使尋至先問其名、金鐘行者ト云、此處是殊勝之靈驗之窟也、立伽藍興隆佛法ト思ニ、私力難及、其德令當帝王給云々、勅使歸參奏此由、天皇聞食此事、後大伽藍ヲ建立セムト思召立ケリ、件槻木ハ、去天承四年九月顚倒云々、

〔僧綱補任〕光仁天皇　寶龜四年癸丑

僧正良辨花嚴宗、相模國人、元法相宗、閏十一月十六日、入滅東大寺、

聖武天皇御師僧正者、先生震旦修行者也、爲求法向舍衞國、欲渡流沙、依無功錢、數月遲留、天皇者、先生流沙船師也、不顧功錢、濟渡修行了、爾時件修行僧、爲酬罔極之恩、可生轉來國王之由、致誠祈誓、以其念力生日本國王也、然而今生樂可受苦、因之良辨奏云、建立大伽藍、可爲後世之資粮、天皇依教喩、建立東大寺、奉鑄大佛、依无沙金、晝夜長大息之間、夢中有人奏云、水邊勝地建立伽藍祈禱、砂金出來歟、夢驚令求勝地、建觀世音菩薩像、不經幾月、下野國初貢砂金、今近江國石山寺是也、(又見扶桑略記、七大寺年表、)

〔東大寺別當次第〕少僧都良辨華嚴宗

天平勝寶四年五月一日始補、年六十四、相模國人、漆部氏、金鷲菩薩是也、義淵僧正資、去天平五年癸酉、建羂索院、東大寺以前、年四十五、十二年七月八日、於金鐘寺、法華堂、初與華嚴宗、依夢想告也、十六年降勅百寮、同建華嚴別

供、十八年奏公家、請諸寺名德、賜勅使、始行法花會、天平勝寶三年、任少僧都、年六十三

〔東大寺要錄　一〕太神宮禰宜延平日記云

天平十四年十一月三日、右大臣正二位橘朝臣諸兄爲勅使參入伊勢太神宮、天皇聖武〇御願寺可被建立之由所被祈也、爰件使歸參之後、同十一月十五日夜示現給布、帝皇御前玉女坐而、放金光氏宣久、當朝ハ神國ナリ、尤可奉欽仰神明給也、而日輪者大日如來也、本地者盧舍那佛也、衆生者悟解此理、當歸依佛法也云々、布御夢覺給也、後彌堅固御道心給、始企件御願寺給也、謂東大寺是也、已上記文

〔源平盛衰記　二十四〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

當大伽藍御建立以前ニ、聖武天皇行基菩薩ヲ勅使トシテ、潛ニ伊勢太神宮ニ祈誓申サレシカバ、御託宣ニ、實相眞如ノ日輪ハ、照生死長夜之闇、本有常住ノ月輪ハ、掃無明煩惱之雲、我遇難遇之大願、建立聖皇大佛殿故ト取詮アリキ、菩薩歡喜ノ涙ニ咽ッヽ、此由奏シ給ヒシカバ、叡信イヨ〳〵深ク、竭仰マス〳〵切ニシテ、又宇佐宮ヘ勅使ヲ被立テ、同叡願ノ趣ヲ被申シカバ、八幡大菩薩ノ御體正ク現ジ給、御音ヲ出サセ給ヒテ、吾國家ヲ護リ王位ヲ守ル志、楯戈ノ如シ、早ク國内ノ神祇ヲ幸シテ、共ニ吾君ノ知識タラント、新ニミコトノリ有ケレバ、歡喜ノ懇情深クシテ、則行基菩薩ニ勅シテ、知識ノ宜ヲ一天四海ニ被下シカバ、玉簾ノ内ヨリ、柴ノ樞ノ下ニ至ルマデ、上下男女其縁ヲ結バズト云事ナシ、サレバ天平十七年ニ、土木ノ造緣ヲ始ラレシニ、或ハ力士變化ノ牛來テ料材ヲ運、或ハ久米ノ仙人通力ヲ起テ大木ヲ飛シ、或ハ雷神磐石ヲ碎テ船筏ヲ下キ、三明六通ノ羅漢ハ、五百ノ工匠ト成テ、大小ノ諸材ヲ削、四海八方ノ冥衆ハ、數萬ノ夫役ヲ勤テ、遠近ノ公事ニ從ヘリ、鎭守權現ト申ハ、則八幡大菩薩是也、神託ニ任テ、勸請ノ爲ニ、勅使百官ヲ宇佐宮ニ立ラレタリケレバ、天平勝寶元年十一月己酉日、御影向アリ、則尊神ト天皇トモロ共ニ、大佛殿ニ御參有

リラ一萬僧會ヲ被行シニ大内ニ天下泰平ト云文字現ジケルニ依テ、又天平寶字ト改元アリ、神明ノ靈威種々顯テ、影向ノ軌則親々タリ、其ヨリ已來當寺ニ跡ヲ垂御座テ、晝夜ニ大佛ヲ拜シ、八宗ノ教法ヲ護給ヘリ、○下略

大佛

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字四年六月乙丑、天平應眞仁正皇太后崩、○中略創建東大寺及天下國分寺者、本太后之所勸也、

〔續日本紀 四十桓武〕延暦九年十月乙未、散位正三位佐伯宿禰今毛人薨、○中略天平十五年、聖武皇帝發願、始建東大寺、徵發百姓、方事營作、今毛人爲領催檢、頗以方便勸使役民、聖武皇帝録其幹勇、殊任使之、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年七月庚戌、詔、○中略勅使又問奈良麻呂、○中略又問、政稱無道、謂何等事、欸云、造東大寺、人民苦辛、氏々人等、亦是爲憂、又置剗奈羅、爲已大憂、問、所稱氏々指何等氏、又造寺元起自汝父時、今噵人憂、其言不似、於是奈良麻呂辭屈而服、

〔朝野群載 十六佛事〕東大寺大佛殿佛前板文

勅曰、朕以薄德、恭承大位、志存兼濟、勤撫人物、雖率土之濱、已霑仁恕、而普天之下、未浴法恩、誠欲賴三寶之威靈、乾坤相泰、修萬代之福業、動植咸榮、粤以天平十五年歳次癸未十月十五日、發菩薩大願、奉造盧舍那佛金銅像一軀、盡國銅而鎔像、削大山以構堂、廣及法界、爲朕知識、遂使同蒙利益共致菩提、夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也、以此富勢造此尊像、事也易成、心也難致、但恐徒有勞人、無能感聖、或生誹謗、反墮罪辜、是故預諸知識者、懇發至誠、各招介福、宜毎日三拜盧舍那佛、自當存念各造盧舍那佛像、如更有人情願持一枝草一合土助造像者、勿禁勿障、同進百姓、强令加造、太政官奉勅、普告天下、率率知識、以天平十五年歳次癸未十月十五日、於近江國信樂京、奉創佛像、其功已止、更以天平十七年歳次乙酉八月廿二日、於大倭國添上郡、奉創同像、天皇專以御袖入土持運、加於御座、然後召集氏々人等、運土築堅御座、以天下十九年歳次丁亥九月廿九日、始奉鑄鎔、以勝寶元年歳次

己丑十月廿四日、奉鑄已畢、三箇年八箇度奉鑄御體、以天平勝寶四年歳次壬辰三月十四日、始奉塗金、未畢之間、以同年四月九日、儲於大會、奉開眼也、同日奉入大小灌頂廿六流、呉樂、胡樂、中樂、散樂、高麗樂、珍寶等、金銅盧舍那佛像一軀、結跏趺坐、高五丈三尺五寸、面長一丈六尺、廣九尺五寸、肉髻高三尺、眉長五尺四寸五分、目長三尺九寸、鼻長三尺二寸、口長三尺七寸、頤長一尺六寸、耳長八尺五寸、頸長二尺六寸五分、肩徑長二丈八尺七寸一分、胸長一丈八尺、腹長一丈三尺、臂長一丈九尺、自肱至腕長一丈五尺、掌長五尺六寸、中指長五尺、脛長二丈三尺八寸五分、膝前徑三丈九尺、膝厚七尺、足心一丈三尺、螺形九百六十六箇、高各一尺二寸、徑各三尺六寸、銅座高一丈、徑六丈八尺、上周廿一丈四尺、基周廿三丈九尺、石座高八尺、上周三十四丈七尺、基周卅九丈五尺、用熟銅七十三萬九千五百六十斤、白鑞一萬二千六百十八斤、練金一萬四百三十六兩、水銀五萬八千六百二十兩、炭廿萬六千三百五十六斛、圓光一基、高十一丈四尺、廣九丈六尺、挾侍菩薩像二軀、並壞光高各三丈、面長六尺廣五尺、口長二尺一寸、耳長五尺九寸、眉長五尺九寸、目長二尺二寸、鼻下徑一尺八寸、繡觀自在菩薩二舗、高各五丈四尺、廣各三丈八尺四寸、四天王像四柱、高各四丈、○中略

大佛師、從四位下國土麻呂
大鑄師從五位下高市眞國
　從五位下高市眞麻呂
　從五位下柿本男玉
大工　從五位下猪名部百世
　從五位下益田繩手

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年十一月壬申、甲賀寺始建盧舍那佛像體骨柱、天皇親臨、手引其繩、于時種種樂共作、四大寺衆僧僉集、襯施各有差、

〔扶桑記抜萃聖武〕天平十七年八月廿三日、於大和國添上郡、更奉創東大寺大佛、天皇專以御袖入土、持運加於御座、然後召集氏々諸人、運土築堅御座、

〔續日本紀十七聖武〕天平十九年九月乙亥、河內國人大初位下阿保連人麿、錢一千貫、越中國人无位礪波臣志留志、米三千碩、奉盧舍那佛智識、並授外從五位下、二十年二月壬戌、進知識物人等、外大初位下物部連族子島、外從六位下田可臣眞束、外少初位上大友國麿、從七位上漆部伊波、並授外從五位下、

天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、御盧舍那佛像前殿、北面對像、皇后太子並侍焉、群臣百寮及士庶、分頭行列殿後、勅遣左大臣橘宿禰諸兄、白佛、三寶乃奴止仕奉流天皇羅我命盧舍那像能大前仁奉賜部止奏久、此大倭國者、天地開闢以來爾、黃金波人國用理獻言波有登毛、斯地者無物止念部流仁、聞看食國中能東方陸奧國守從五位上百濟王敬福伊、部內少田郡仁黃金出在奏氏獻、此遠聞食驚伎悅備貴備念久波、盧舍那佛乃慈賜比福波倍賜物爾有止念閉受賜里恐理戴持、百官乃人等率天禮拜仕奉事遠、挂畏三寶乃大前爾恐美恐美毛奏賜波久止奏、

〔東大寺要錄一〕天平廿一年〈○天平勝寶元年〉冬十月廿四日、奉鑄大佛畢、三箇年八ヶ度也、右兵衞督藤原朝臣爲勅使、奉勸請八幡大神、以爲鎭守、由之大佛鎔鑄之功畢、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年十二月丁亥、八幡大神禰宜尼大神朝臣杜女、〈其輿紫色、一同乘輿、〉拜東大寺、天皇、太上天皇、太后、同亦行幸、是日百官及諸氏人等、咸會於寺、請僧五千、禮佛讀經、作大唐渤海吳樂、五節田儛、久米儛、因奉大神一品、比咩神二品、左大臣橘宿禰諸兄奉詔白神曰、天皇我御命爾坐、申賜止申久、去辰年、河內國大縣郡乃智識寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天、則朕毛欲奉造止思登毛、得不爲之間爾、豐前國宇佐郡爾坐廣幡乃八幡大神爾申賜閉止勅久、神我天神地祇乎率伊左奈比天、必成奉天、事立不有、銅湯乎水止成、我身遠草木土爾交天、障事無久奈佐牟止、勅賜奈我成奴禮波、歡美貴美奈念食須、然

猶止事不得爲天、恐家禮登毛、御冠獻事乎、恐美恐美毛、申賜止久申、尼杜女授從四位下、主神大神朝臣田麻呂、外從五位下、施東大寺封四千戸、奴〇奴一本作度一百人、婢百人、又預造東大寺人、隨勞叙位有差、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年四月乙酉、九日〇盧舍那大佛像成、始開眼、是日行幸東大寺、天皇親率文武百官、設齋大會、其儀一同元日、五位已上者著禮服、六位已下者當色、請僧一萬、既而雅樂寮及諸寺種々音樂並咸來集、復有王臣諸氏五節、久米儛、楯伏、踏歌、袍袴等歌儛、東西發聲、分庭而奏、所作奇偉不可勝記、佛法東歸、齋會之儀、未嘗有如此之盛也、是夕天皇還御大納言藤原朝臣仲麻呂田村第、以爲御在所、〇又見扶桑略記、東大寺要錄、

〔古事談三僧行〕昔東大寺開眼導師者、可被用行基菩薩之由、被仰之時、行基申云、己者不堪大會導師、自異國一人之聖者可來云々、臨期奏事由、異國聖者今可相迎云々、即下勅宣、引卒九十九僧、幷治部省、雅樂寮等、到攝州難波海、調音樂、阿伽一前ヲ海ニ浮了、此閼伽漸指西去、頃之自西方、僧一人乘小船來、所浮海之阿伽、有此船之前、迎僧歸來也、著岸之後、一人梵僧下自舟、加白僧之末、其時行基執手、一度者喜、一度者悲デ、詠和歌云

拾遺釋　靈山能、釋迦乃彌摩部仁、知岐利天子、眞如久知世須、阿比美都留加奈、

異國聖人和歌云

同上　加毗良惠遍等毛還知岐里之、加比阿利天、文殊乃美加保、阿比美都留加奈、

此時行基菩薩云、異國聖人、是南天竺波羅門僧正也、名菩提云々、開眼導師ハ、波羅門僧正、供養導師ハ、隆尊律師、聖武天皇ハ、救世觀音、良辨僧正ハ彌勒、波羅門僧正ハ普賢、行基菩薩ハ文殊也、

〔文德實錄七〕齊衡二年五月庚午、東大寺奏言、毗盧舍那大佛頭自落在地、　六月甲申、遣參議左大辨兼左近衛中將從四位上藤原朝臣氏宗東大寺、見大佛頭墮落之狀、　七月戊申、遣參議宮內卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上淸原眞人瀧雄等、向佐保山陵、策命云、天皇恐美恐美毛、掛畏支佐保山

陵留奏賜部止奏、御願止天之奉造理給倍留、東大寺乃盧舍那佛、時代久經太留波禮、自然留毀損天、去五月廿三日乎以天、頭落給倍利、今御願能破奴支倍留依天、奉造固止无須、今毛今毛賢山陵能、御本願留顧給天、相助護給留依天、佛毛平留奉造固利、天下毛平天可在止奈之毛天、參議宮内卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上清原眞人瀧雄等乎差使天恐美恐美毛奏賜久止奏、九月壬子、遣少納言從五位下利見王、向八幡大菩薩宮、策命曰、天皇我詔旨止、掛畏岐八幡大菩薩乃廣前留、恐美恐美毛申給倍止申久、東大寺乃盧舍那佛波、佐保天皇御世留、大菩薩乎知識留奉唱天奉造給倍利、而乎時代久經留天、自然留毀損禮天、去五月廿三日乎以天、頽落給留利、太今本志乃破奴支倍留依天、奉造固止无須、今毛今毛亦大菩薩乃相助介護賜牟留依天、佛毛平留奉造固利、天下毛平安介久在倍支、故是以、少納言從五位下利見王乎差使天、守豆乃大幣帛乎令捧持天奉出須止、恐美恐美毛申賜久止申、別辭天申久、大宰府申久、前與利勞利續波世賜不宮波、去閏四月留作利畢奴止申須、此乎聞食、悅比奈天毛悅、太幣帛乎令副捧天奉出賜不、掛畏支大菩薩如故留安穩留靜萬利坐天、天皇乎常磐留堅磐留、夜守利日守利留護給比矜賜倍止、恐美恐美毛申賜久止申、

〔文德實錄八〕齊衡三年五月丙寅、遣右大辨從四位上清原眞人岑成、向佐保山陵、策命曰、天皇恐牟恐牟毛掛畏支佐保山陵留奏賜閉止奏久、御願止天之奉造理給閉留東大寺乃盧舍那佛、時代久經太留波禮自然留毀損天、去年五月廿三日乎、以天頭落給閉利、因茲參議宮内卿從四位上源朝臣多、安藝守從四位上清原眞人瀧雄等乎差使天、可奉造固狀乎奏給閉利、而國家事繁久故障多之天、今留天末怠太利、今奈毛始天的久奉造固留、畏山陵乃御願留顧給天、相助護給留依天之、佛毛奉造固利、平久可在止奈之毛天、右大辨從四位上清原眞人岑成乎差使天、恐牟恐牟毛奏賜久止奏、

〔三代實錄四清和〕貞觀二年四月八日戊子、詔、東大寺大毘盧遮那佛會事、總聽修理大佛撿挍修行傳燈賢大法師眞如處置、又詔二品治部卿賀陽親王、大納言正三位源朝臣弘、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男等、勾當供養大佛會事、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年正月廿一日丙申、是日宣詔、山城、河内、和泉、攝津、及七道諸國司、近來奉修理東大寺大毘盧遮那佛像、功夫既成、仍來三月十四日、當設无遮之大會、極莊嚴之妙態、宜自十一日至廿日、禁斷殺生、至于會日、於國分二寺、各開齋會、請集部内僧尼、普爲供養、其料物便用正税、其太宰府、於觀音寺修之、令導師具演事由、兼令會集僧尼、俱稱讃盧舍那佛號、乃至無知小民敎作是念、我寺知識所奉修理毘盧舍那、今日至心、應奉供養、我亦運心、專念同就、廣作功德、但先帝准據本願、天皇之弘誓、以八幡大菩薩爲主、天下名神及萬民爲知識衆、初作修理、今至當時、此事遂成、始終雖殊、德業惟一、然則使八幡大菩薩、別得解脫、令諸餘名神神力自在、本願天皇、及先帝御靈、乃至開闢以來、登遐聖靈、同賴薰修、早開覺花、爰及當今、表裏夷晏、風雨順時、年穀豐稔、以此爲基、當遍法界、不論自他、終證菩提焉、　二月廿一日乙丑、詔山城、河内、和泉、攝津、七道諸國司云、來三月十四日、當設无遮大會、奉供養東大寺大毘盧舍那佛、宜令彼日會集人授十善戒、　三月十四日戊子、於東大寺設無遮大會、奉供養毘盧舍那大佛、勅二品治部卿賀陽親王、三品中務卿諱光孝天皇親王、四品彈正尹本康親王、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男、從四位下行右中辨藤原朝臣冬緒、左京大夫從四位下在原朝臣行平、從五位下守左衞門權佐紀朝臣春枝、散位外從五位下布留宿禰清貞、外從五位下行左大史三善宿禰清江、少外記正七位下御室朝臣安常等、相率向寺、監修會事、此是佛像、感神聖武皇帝、天平十五年創造、文德天皇齊衡二年、頭傾頸斷、頓落于地、年來修理、鎔鑄復舊、是日即使開眼、佛師入籠、轆轤引上、乃點佛眼、凡其莊嚴之儀、不可勝載、殿廊之柱、衣以錦繡、壇場之上敷其朱紫、懸七寶樹、遶栽庭際、藻飾幡蓋、排批香花、極巧盡麗、奪人目精、歷覽梵宇、處々莊飾、觀者不能厭而拋過、衲衣宿德、振錫秀眉、威儀具足、塡噎堂宇、大唐、高麗、林邑等之樂鼓鐘肆陳、絲竹方激、先令内舍人端貌者廿人供倭舞、次近衞壯齒者廿人東舞、後梵唄接響、衆樂遞奏、大佛殿第一層上、結構棚閣、更施舞臺、天人天女、彩衣霓裳、香伎聒空、以移一天、南北兩京貴賤士女、充街塞陌、莫不聚觀、躡足翕肩、人不得顧、

〔三代實錄清和五〕貞觀三年三月十二日丙戌、授從八位下齋部宿禰文山從五位下、文山修理東大寺大佛、巧思不恒、功夫早成、仍以賞焉、　十三日丁亥、令百官限三箇日斷魚肉、以明日應奉供養東大寺毘盧舍那佛故也、

〔東大寺造立供養記〕夫東大寺之四大菩薩之結構、三國無雙之伽藍也、草創之後、送四百餘歲之間、安德天皇御宇、治承四年十二月廿八日、爲前大相國平清盛入道、東大、興福寺等、忽被燒失了、如弗沙蜜王之燒寺、似會昌天子之滅法也、天下悉驚悲之、況於寺中哉、禽獸猶有憂色、況於人倫哉、四百餘歲之伽藍、悉成灰燼、一十六丈之聖容、忽歸磨滅矣、爰高野山之重源上人感夢想也、大佛告上人言、吾可去他方云々、夢覺大驚、疑念不少、忽出高野山、詣大佛殿、謁于理眞已講、示於夢想由、其後不旬日、有燒失也、後白河禪定法皇、深被悲歎、道俗男女、莫不驚悲也、三公九卿、鴻才英俊、僉議云、案上古權者之結構、末世凡夫非智力也、悲哉再不可營大像、哀哉重不可遂花構云々、雖然治承五年庚子春、禪定法皇殊發叡願、企作治之計、卽六月廿六日、任造寺官、長官藏人左少辨正五位下藤原朝臣行隆、次官三谷爲信、判官中原基康、主典三善行政、造佛長官藤□□行、次官小槻隆職、養和元年四月九日、重源上人行向行隆亭云、東大寺事再々感靈夢、仍二月下旬、參詣彼寺、拜見燒失之跡、烏瑟之首、落而在于後、定惠之手、折而橫于前、灰燼積而如大山、餘煙揚而似黑雲、目暗心消、愁淚難抑、遇一兩耆老、述心緒之處、爲勅使下向之由承之、仍所參也、行隆云、天平行基菩薩、與叡願令勸進、齊衡眞如親王、廻丹誠而唱知識、聖人發心、感應不空、早可令含綸旨勸衆庶之由、且以談話、遂法皇召上人、仰合此事云々、時重源奏云、傳聞當寺建立之始、寄廿五箇國、六十一年、而勵營作、終造功也、末世薄福之衆生、奉加知識、敢無憑者歟、雖然發大願唱知識、王德不可空、武家又加力歟、況佛神之冥助更無疑、勅願成辨、旁有憑云々、仍□□□□□□□□□□重源上人、賜□□□□宣禪定仙院、忽甫聞斯綷、惻隱于懷、任礎石於舊製、探山木以致造營、撰鎔範於良工、聚國銅以欲修補、叡願之趣、尤足隨喜、

夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也、○中略五畿七道諸國國司、因此事莫令侵擾百姓、布告遐邇、俾知朕意焉、

治承五年六月日

即捧此勅書、廻諸國、又在上人之勸進帳、彼此共□□一輪車、普令見知諸人、以彼車六兩、令配六道、□盧遮那佛、并脇士、四天像六鋪、以每車被副也、遣□□□□□□□東勸進毛人城而夷類等、有隨分奉加、是一不思議也、爰奥州猛者、藤原秀平眞人、殊抽慇懃之志、專廻知識之方便也、依眞人忠節、盡奥州結緣、從爾以降、一天四海次第結緣也、養和元年十月六日、被鑄始大佛御頭、時剋戒師一人、授戒於鑄工等、次踏多々良、即奉鑄螺髮三流、鑄工持參長官前、置八足上之間、主典取□□□□□□□勵成吉次四人、各給白布一段、使部取之、次御髮被渡僧官座、此後各起座、壽永二年二月十一日、大佛右御手奉鑄之、同年癸卯四月十九日、始奉鑄御首、同年五月十八日丙戌奉鑄既了、首尾經廿九日、前後及十四箇度、終其功了、鑄物師大工陳和卿也、都宋朝工、舍弟陳佛壽等七人也、日本鑄物師、草部是助以下十四人也、和卿與土人、作火爐三口、以置佛上之東西、爐口弘一丈高一丈餘也、涌銅或時一萬餘斤、或時七八千斤也、炭或六十石、或五十石、○中略今日奉加人、不知其數也、水瓶、鏁、鏡、金銅具等、多寶物皆所施入也、當寺長官左大辨藤原朝臣行隆之子息、爲上人之弟子也、大勸進上人以下、同朋五十餘人、鑄師七十二人、并中門衆、法花堂衆、或有驗壯年輩、同心合力也、錫湯入爐內、如大河流于紅海、飛焰上空中、似猛火燒于泰山、其聲如雷電、聞者悉驚動、禪定法皇、御奉加之銅、奉送御使、○中略至五月廿八日、奉鑄滿畢、□當寺別當前法務大僧正禎喜、以龍馬一疋、美絹十疋、賜宋人陳和卿也、□僧綱已講、乃至幼稚學者、皆以往詣上人所、令賀申也矣、○中略又重衡卿後室、彼遺物之中、以金銅具奉加之、即以其金銅、欲鑄加之處、爐亦破裂、銅湯多流出、遂於彼奉加金銅具、不相交而只如本、仍見聞之客、罪業之至、彈指垂悄、○中略熟銅都合八萬三千九百五十斤、御身所塗黃金一千兩、并所押薄十萬枚、弘定薄抑雖有黃金、若无

水銀、則佛身難成、而伊勢國住人大中臣、以水銀二萬兩、貢上法皇、是則彼人之斎宅所掘出也云々、一萬兩被獻大佛、文治元年八月廿八日、被行開眼供養、〇中略有御幸、取筆開眼師禪定法皇(法名行眞)筆付綱十二筋、長有七町、配十二光佛、引諸方矣、參入集會之人皆悉付綱、同准開眼之儀也、其後上人、參詣伊勢大神宮、祈請造寺事、故作是念、若我願滿足、當應示旨、爾時非夢非現、而寶殿之前、有東帶之俗人、又幼童出來、在上人懷中、語上人言、欲遂其願、可令我肥云々、夢覺之後作是念、以般若之法味、增神明之法樂、仍書寫大般若經二部、備內宮外宮之法樂、引率六十口之僧、轉讀十六會之妙典、令尊勝院律師辨曉爲導師、其後二度書寫供養、次第同前、但導師醍醐僧正勝憲、笠置上人貞慶、此外於八幡春日兩社、又二部供養、皆是爲大願成就也、

〔玉海〕治承五年(〇養和元年)十月三日丙午、酉剋大夫史隆職來談云、來六日可被鑄始東大寺御佛、仍行隆相共、明後日可下向南都者、

養和二年(〇壽永元年)二月廿日辛酉、大夫史隆職來、召前談雜事、語申云、東大寺大佛御首事、以土可造形云々、用途大略、以智識物成寄之由、重源聖人令申云々、　七月廿四日壬辰、又聞、東大寺大佛、奉鑄加事、依重源聖人之功已欲成、宋朝鑄師年來渡此朝、且今年渡而在鎭西、而欲歸宋朝之間、忽船破損不遂前途、度々止了、而之間此事出來、依件聖人之請京上、廻種々之秘計、莫大之功、無煩欲終、誠是神之助、天之力也、世欲滅亡、所憑只在斯歟、彌致勤愼、可庶敎化之反淳素也、　二年正月廿四日庚寅、東大寺勸進聖人重源來、余依相招也、聖人云大佛奉鑄成事、偏以唐之鑄師之意巧、可成就云々、來四月之比、可奉鑄云々、　五月十五日戊寅今日被立佐保山陵使、被謝申東大寺大佛燒損、并近日修補事云云、　十七日庚辰、此日被立八幡奉幣使、被告申東大寺大佛燒損、并近日修補事也、　十九日壬午、今日奉鑄東大寺大佛之面云々、

壽永三年(〇元曆元年)正月五日乙未、右中辨行隆來、予召簾前、問大佛之間事、左御手已奉鑄了、凡今年內

可終功之由、聖人所申也、又云、宋朝鑄師之外、爲聖人沙汰、而加河內國鑄師、宋人雖有不快之色、誘彼是、於今者和顏了云々、

〔集古文書二十六〕源賴朝卿御下知南都東大寺藏

解狀之趣令經御覽畢

條々事○中略

一滅金事

右今狀可有御入洛之、是且爲大佛修護之御知識也、必御入洛之時可令相具御也、凡率土之中、誰無施入之心、更不可及緩怠也、

以前條々、鎌倉殿仰如此、仍以執達如件、

壽永三年七月二日　散位廣元奉

〔玉海〕元曆二年○文治元年三月十九日壬寅、東大寺勸進聖人重源、相具指圖目錄等來臨、大佛後山可壞退之間事也、先壞小分可奉鑄御佛御背云々、此條尤可然歟、　七月廿日辛丑、今日藏人少輔親經傳親宣云、東大寺大佛開眼、來月廿八日也、而爲下吉日之由有時難云々、然而彼大佛天平勝寶初度開眼、即下吉日也、仍不可有其憚哉如何云々、余請文云、

大佛開眼事、猶擇用上吉宜歟、來月廿八日戊寅、別而天平勝寶例爲同支干者、雖爲下吉、偏就相應例被遵用、其理可然、於他支干、只所謂下吉例、被用他下吉日、專無其謂歟、凡如此之日時、方角等之日取、上古强不避忌諱、近代殊被定用捨、然則偏難被准古昔之風歟、我朝第一大佛事、被擇用下吉之條、可有思慮事歟、以此趣宜被議奏、狀如件、

七月廿日

八月廿八日戊寅、此日東大寺金銅盧舍那佛開眼供養也、自朝有雨氣、其後大雨、若妨法會之威儀歟、

尤遺恨也、若是半作也、供養中間之開眼、不叶大佛之照見本願之叡念歟、但開眼儀了有此雨、還又可謂効驗歟、今日之雨、兩般之疑、相兼者也、　廿九日己卯、自旦至暮日、被下緇素、自以歸洛、未剋八條院還御、日沒法皇還御、昨日雨法會中間云々、子細可尋記之、且問歸洛之輩、各答云、法皇自取筆入佛眼、定扁僧正（本寺別當）染神呪云、如天平勝寶例者、波羅門僧正、自奉入佛御眼、又輔異言、今度左府所造、或云、佛眼入御眼云々、然則法皇爲佛師歟、是何例哉可尋之、或人云、彼天平例、聖武天皇（于時上皇）自取筆奉入御眼給云々、此事未見記文、如要錄者、菩提僧正勤之也、

〔山槐記〕元曆二年（○文治元年）八月廿八日戊寅、今日有東大寺大佛開眼事、地震一度、後日新藤中納言注送曰、午剋法皇臨幸（御步行）法皇昇大佛假階、令開眼給、法會之儀、不遑注申、（○中略）法皇以天平筆、被奉開眼、廻寸法如法被入眼、歸下之時、或向後退下云々、猶有其恐歟、開眼師別當法務權僧正定遍遲參、法皇下御之後參入、滿呪遍、太遺恨事云々、

〔源平盛衰記四十六〕南都御幸大佛開眼附時忠流罪忠快免事

文治元年八月廿七日、法皇南都ヘ有御幸、公卿ニハ、花山院大納言兼雅、堤中納言朝方、中山中納言頼實、衣笠中納言定能、吉田中納言經房、民部卿成範、藤宰相親信、平宰相親宗、大藏卿泰經、殿上人ニハ雅方朝臣以下、皆著淨衣被供奉ケリ、伊豫守義經同著淨衣候ス、御後隨兵六十騎ヲ相具セリ、同二十八日、大佛開眼アリ、亥剋ニ法皇有臨幸ケリ、左大臣經宗、權大納言宗家卿以下、被參入ケリ、開眼ノ師ハ、僧正定遍、呪願ハ、僧正信圓、導師ハ、大僧都覺憲也、同晦日、辨曉權少僧都ニ被仰ケリ、開眼師、定遍僧正賞讓トゾ聞エシ、

〔吾妻鏡十四〕建久五年三月二十二日癸未、被奉砂金於京都、是東大寺大佛御光料也、被下佛師院尊支度、可被進二百兩旨、有御敎書云云、　五月十日庚午、被進砂金百三十兩於京都、且可傳獻由、被仰遣二條前中納言（能保卿）之許云云、是東大寺大佛御光料、去春之頃被進之殘也、三百兩可入之由云

云、

〔看聞日記〕應永二十三年九月四日、將亦東大寺大佛綵色舊損之間、可レ被二修理一云々、金數百兩薄師ニ賜レ之、於二相國寺一金薄ニ打レ之、僧令二奉行一云々、室町御夢想以下有二御愼事一、仍被レ發二大願一、有二御祈禱一云々、

〔續史愚抄 正親町〕永祿十年十月十日壬午、今夜東大寺大佛殿、及諸堂廊門等火、(彈正少弼久秀焚レ之、但依レ有二合戰一也、)佛頭燒墮、(但佛體存、後日以二銅板一假修レ之云、)南大門、鐘樓等纔殘、抑聖武天皇御建立後、治承四年火、因二後乘坊重源一所二再造一也、

〔和州舊跡幽考 二 添上郡〕東大寺

第三の再興は、人王七代正親町永祿十年十月十日、當國信貴の城主松永彈正忠の兵火にかゝりて、大殿けぶりとぞなりける、舍那佛の御ぐしおち給ひしが、その世につぎ奉るべきたくみもなくして、月をかさねけるが、こゝにやまとの國に山田道安といふあり、弓馬の家にして、繪に妙あり、いとたくみやふかかりけん、御ぐしを鑄奉るべき料にとて籠の術をとゝのへ、良匠冶工等にをしへてつぎ奉らしめて、佛に猶もとのごとく成就し給ひつれども、大殿は造營あらずして、いしずへのみのこれり、永祿十年より凡百十三年、

〔東大寺別當次第〕十八 興雲君

天長三年任、寺務四年、(天長三四五)四年四月、始築二大佛御後山一、(見二官符文一)

大佛後築山

〔東大寺要錄 七〕大佛後築山事

太政官牒　綱所

應レ同二東大寺大佛一事

牒、撿使宣、使左大辨直世王、民部大輔笠朝臣梁麿、右兵衞權佐藤原朝臣豐主等、去二月廿九日奏狀偁、大僧都勤操、前大僧都護命、律師泰演、長上三島公島繼等廿七人申、切二八柱一築レ山奉レ固、是則去年四

月八日、勅使右大辨伴國道等、所裁定直世、梁麿、豐主申、依島繼等議、何者破損有五驗、御尻折窪一尺三寸八分、是一也、佛高元五丈三尺五寸、今減八寸、是二也、延暦五年以降、所裂碎長廣增益、是三也、新碎裂四處、是四也、面傾倚西方六寸也、是五也、以今破准昔損、无疑傾作而榮井滿足申、當大佛後可築小山、基廣二丈、高至腰上者、凡厥大佛蓮花座再重、高一丈八尺、佛高今減定五丈二尺七寸、肩徑二丈八尺七寸、皆准之、然則基廣二丈之小山、築至腰上高四丈餘、自基及末、必期減小、以小枝大、恐彼此不全、是一也、又申、若无止可切柱須四柱者、既稱築小山、何可切柱、所據未明、是二也、又申、應用木固、何者去年四月八日、可驗乘昰无有相差者、從爾以降、于今十月、非久遠也、是則忌積漸之破、要造次之頽、恐難了慣、又既倂築山、何更有用木、亦滿足去年四月、依島繼議、四者勅使裁定了、今所中並三議未定、所據、吉野申、同榮井等第二議、何者延暦年中所判木、今取放之、曾不摧損、又放木之後、无有傾動者、放木之後、未經幾時、偏執須臾全、遺忌防將、然今放腰下木、撿彼破損、益元數倍、然則摧損動其驗灼然、又申、件破損口、物體高重所落委也、非作壞何有非常之疑、又申、但腰下破早可修固之者、修固方未知所爲、其意如何、東大寺僧平智藥上泰智、大安寺平法等申、不更切柱須築小山、其邊壘石固者、同滿足言更无議、今須依島繼言、切八柱以築立山、縱堂舍雖破損、而金土豈有壞乎、凡矯枉過直、物理有也、今此佛像、一柱之後、何伎所施、又昔工竪柱其數八枝、在蓮花座上、所切二柱无有損害、以今准古、宜物爲貴、愚管執見具錄、如前者、同使木工頭榮井上、皇后宮大夫藤原朝臣吉野、本工權助益田連滿足等、去三月廿九日奏狀、倂吉野等聞、欲行其事、先慮其言、故功當其利、人樂其成、仰惟本之非小緣、天神地祇、請爲同法、公卿黎庶、引入知識、塡深谷以開基、疏高山而抗殿、遂乃出黃金以陶鑄、沸清泉而助供、經始勿丞、子來終功、非唯人力、兼感鬼神、綿世未聞、如此希有者矣、吉野等奉勅往撿、抑有悔事、何則去年四月所議定、切八柱築山可固者、功登八萬成未半分、二柱先研、一戸巳壓、行道絕理、御願斯虧、加復蓮花坐幷及柱等、多造小佛、未支一箇之大佛、還減數百之小佛、援猶有多、埋佛豈无罪、夫昔日起手之初、削大地、

堂塔

以作像、傾洪爐而鑄成、金泥雨激大佛下其高五丈三尺五寸、今所減八寸、面傾六寸、雖窪尺餘、是物勢高到、重致落委、何以驗之、假令五丈之體、小分而論、四支在前、一分居後、輕重俯仰、不同可知、既積年序、多經地震、緣合之物、何无小破、而今在於其體、无有殊傷所、支扶木亦不盬功、若也不斫柱壓戸、則愚臣之慮、有所施矣、事業先如、无由廻謀、不咎既往、可愼將來、今須通前、斫却四柱、當大佛後、聊爲小山、山高僅及佛腰上、則足支傾動、萬金之謀也、徒盡八萬之功、以供板築之費、庶從減省、以宛他用、不揆愚蒙、輙陳所見、具件如前者、中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅宜依直世等議者、綱所察之、早令修固、故牒、

天長四年四月十七日

寺家別當興雲君（家高　但別當次第云、明珍律師俗別當左近大將實賴云々、）

〔和漢三才圖會七十三大和〕東大寺諸堂

講堂（永祿十年回祿以後不作）　鐘樓堂（釣鐘、大紀子右、銅錫凡七万三千斤、）　念佛堂（本尊地藏、俊乘坊作、）　良辨杉（有子安社、以良辨之母所祭神也、）

遺藏堂（俊乘坊遺像、有笠、杖、木履、）　二王門（安阿彌作、裏有石獅子、）　御影堂（有上坊、良辨僧正自作影像、每年十一月十六日有開帳、）

二月堂（本名羂索院、實忠和尙開基、本尊十一面觀音、秘佛也、於攝州難波浦、實忠和尙因瑞現得之、長七寸、銅佛、每二月朔日至十四日有法會、押弘法大師所作鑑符、俗云二月堂牛王是也、若狹國遠敷明神、被進閼伽水、事見于若狹國卷、正嘉二年二月九日、寬文七年二月十五日兩度燒亡、亦本尊安然炎中無恙、人皆爲奇、寬文九年有再興、如舊也、）

法華堂（俗云三月堂、一名羂索堂、一名金鐘寺、本尊彌勒菩薩、良辨僧正之作也、又有執金剛神、）　三昧堂（俗云四月堂、本尊普賢、今本尊阿彌陀也、）

遠敷大明神　在二月堂之北、小社、（本社在若狹國、又井傍有鵜社、）　飮食大明神　在同南小社

鎭守　八幡宮　在手向山下、　三座　八幡大神、（神功皇后、姬大神玉依姬）　天平勝寶元年十一月十九日、禁裏囑七歲童子曰、可遷八幡於大佛傍、因石川年足、藤原魚名、奉勅勸請之、

戒壇院　聖武帝朝、鑑眞和尙來朝、用天竺那蘭陀寺之土、築戒壇、（每六月十八日、七月七日、什物開帳、舍利有五百粒、）

總持院　地藏菩薩〈俗稱文使地藏〉東大寺再興奉行左少辨行隆死去、有一女、深歎之、結誓於地藏手、願請亡父返翰、既而七日後、佛手有書、乃亡父之筆跡也、〈文言略之〉其書有于今、

東南院　聖寶僧正建立、大佛供養時、源頼朝公爲旅宿、其後〈嘉暦二年〉後醍醐天皇暫入御寺也、回祿後、殆廢衰、而當時建東照權現靈廟、甚美麗、

如意塚　在東南院境內、聖寶堀出如意於此處、常所持之、遷化後亦傳當院、昔興福寺維摩會時、聖寶爲講師持之、而以來興福寺維摩會講師、必以持此如意爲例、

詫宣池　在同境內、世所傳三社詫宣文、天平神護二〈丙午〉年七月十一日浮見于此池水面、人寫留之云々、或云、聖寶寫留之、或云聖珍法親王〈伏見院皇子也〉寫留之、〈三說時代大異也〉恐聖寶當寺住職、〈延喜九年七月六日寂、壽七十八歲、〉以聖寶爲始可矣、

東塔〈七重高二十三丈八寸、天平勝寶五年建、〉　西塔〈七重高二十三丈六尺七寸、今唯礎石有之計、〉

勅符藏〈號正倉院、〉

〔本朝高僧傳　六十五檀興〕和州東大寺沙門慶信傳

釋慶信、給事中藤公成之子、平安城人、自少從有慶於和之東南院、研泳三輪、承保二年、勅管東大、是時堂塔多以頹敗、信奉官符、役役修造二十年間、不辱其任、朝廷宜勞頻補僧綱、加法眼位、南京諸寺、信始敍之、嘉保元年臘月季依病解印、居東南院、明年正月九日寂、年五十五、

〔山槐記〕治承四年十二月廿八日〈丙午〉、〈○中略〉其間、東大寺興福寺爲灰燼云々、〈○中略〉

東大寺內　大佛殿　講堂　食堂　四面廻廊　三面僧房　戒壇　無勝院　安樂院　眞言院

藥師堂　東南院　八幡宮　氣比　氣多

已上三ケ寺四院內外堂舍、僧房、庄家不知數燒失了、御佛一體不奉取出也、是依恐官兵也、

〔百鍊抄　八高倉〕治承四年十二月廿八日、今日東大寺、興福寺、堂舍僧房不殘一字、悉以燒拂、佛法之滅亡

偏在此時、東大寺者、聖武天皇天平八年始造、同十五年造畢、孝謙天皇天平勝寶四年四月乙酉、大佛開眼、造畢以後、至于今年庚子四百三十八年、始逢此災、

〔吾妻鏡 二〕治承五年○養和元年正月十八日乙丑、去年十二月廿八日、南都東大寺、興福寺已下、堂塔坊舍、悉以爲平家燒失、僅勅封倉等免此災、火焔及大佛殿之間、不堪其周章、投身燒死者三人、兩寺之間、不意燒死者、百餘人之由、今日聞于關東、是相模國毛利庄住人印景之說也、印景爲學道、此兩三年在南都、依彼滅亡歸國云云、

〔六代勝事記〕治承四年五月廿六日に、入道源三位賴政卿、高倉の宮○以仁王に後從して、南都に零落の事ありき、○中略同十二月廿六日、南都の大衆蜂起するゆゑに、三位中將重衡官軍として、東大寺を燒はらひをはりぬ、

〔源平盛衰記 二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

廿六日○治承四年十一月に、藏人頭重衡朝臣大將トシテ、五條大納言邦綱卿ノ山庄東山若松ノ亭ニシテ勢汰ヘアリ、著到アリ、其勢三萬餘騎、南都ヲ可攻ト披露アリ、大衆是ヲ聞テ、東大寺ノ大鐘ナラシ、蜂起騷動シテ、大和山城ノ惡黨吉野十津川ノ者共ヲ招集テ、奈良坂、般若路二ノ道ヲ伐塞ギ、爰カシコニ落シヲ堀、菅ヲ植エ、在々所々ニ城郭ヲ構テ、逆木ヲ引、掻楯ヲカキ、老少行學甲冑ヲ著シ、弓箭ヲ帶シテ相待ケリ、廿八日ニ、重衡、三萬餘騎ヲ二手ニツクリ、奈良坂、般若路ヨリ推寄セテ、時ヲ造ル、衆徒用意ノ事ナレバ、時ヲ合テ散々ニ防戰ゲリ、大衆モ軍兵モ互ニ命ヲ惜ズ戰ヒケルガ、平家ノ大勢責重リケレバ、衆徒禦ギ兼テ引退、軍兵勝ニ乘テ、二ノ道ヲ打破テ、寺中ニ亂入テ、此彼コニ充滿タリ、播磨國住人福井庄下司次郎大夫俊方ト云者、重衡朝臣ノ下知ニ依テ、楯ヲ破テ續松トシテ、酒野在家ヨリ火ヲ懸タリ、師走廿日アマリノ事ナレバ、折節乾ノ風烈シテ、黑煙寺內ニ吹覆、大衆猛火ニ責ラレ、炎ニ咽クレバ、不堪シテ蜘ノ子ヲ散ガ如ク落行ケリ、坂四郎永覺ト云ケル

悪僧ハ、長七尺計ナル法師ノ、骨太ニ逞ガ、心モ剛ニ身モ輕シ打物取テハ鬼神ニモ劣ラジト云ケリ、强弓ノ矢繼早ク、開間カズヘノ手タリ也、十五大寺、七大寺ニハ、並者ナキ恐シキ者也ケルガ、褐直垂ニ萌黄ノ腹巻ニ袖付テ、三尺ノ長刀ノ氷ノ如クナル持テ、同宿十二人左右ノ脇ニ立テ、手階ノ門ヨリ打出テ、引詰引詰射ケル矢ニ、多ク寄武者討レケリ、矢種盡ケレバ、長刀十文字ニ持テヒラヒテ、敵ノ中ニ打入テ、散々ニ戰ヒケレバ、兵モ多ク討レ、同宿モアマタ討捕レテ、我身モ痛手少少負ケレバ、今ハ不レ堪ヤ思ヒケン、春日ノ奥ヘゾ引退、猛火寺中ニ吹覆ケレバ、東大興福兩寺ノ佛閣、諸堂、諸院一宇モ殘ラズ、瑜伽、唯識兩部ノ法門、因明、ヰ明一卷モ不レ免、三論花嚴ノ經釋、大乘小乘ノ聖敎悉ク燒ニケリ、我身ヲ助ケントセシ程ニ、大師先德ノ秘佛モ、年來住持ノ本尊モ亡ヌルコソ悲ケレ、月比日比兵亂有ベシト聞エケレバ、若ヤ助カルトテ、山階寺ノ中、大佛殿ノ上ニ梯ヲ構テ、兒共、童部、老僧、尼公イクラト云事モナク上リ隱タリケル程ニ、猛火御堂ニ懸ケレバ、不レ劣不レ劣ト下ラル丶程ニ、階蹈折テ下ニ成者ハ押殺サレ、上成者モ高ヨリ落重リケレバ、暫シハ息ツキ居タレ共、終ニハ皆死ニケリ、殘留ル輩ナニヲ撰ヘ、ヂニヲ歩テカ降リ下ルベキゾ、アヤシノ小屋ヂラバコソ、手ヲ捧テモ助、足ヲ取テモ落スベシ、日本第一ノ伽藍也、閻浮無雙ノ大堂ナレバ、梁ダニモ十丈ニ餘レリ、今更俄ニ助ベキ支度ナシ、餘ノ悲サニ思ヒ切リ、飛落ル者モ有ケレ共、碎ケテ塵トゾ成リニケル、一人モナジカハ可レ殘、火ノ燃チカ付ニ隨テ、喚叫ブ音山モ響キ、天モヒヾクラント覺エタリ、叫喚大叫喚ノ罪人モ角ヤト覺エテ哀也、警固ノ大衆ハ、兵杖ニ當テ身ヲ滅シ、修學ノ碩德ハ、火炎ニ咽テ命ヲ失フ、貴賤ノ死骸、七佛ノ煙ニ交リ、男女ノ遺骨、諸堂ノ灰ニ埋レリ、無慙ト云モ疎也、○中略醍醐天皇御宇、延喜十七年十一月、當堂幷ニ三面ノ僧坊燒失セシ時、黑煙一天ニ覆テ、日ノ光不レ見ケリ、東大寺ノ炎上ニアラズハ、角ハ有ベカラズトテ、御門大ニ驚キ騷ガセ給ヒテ、寮ノ御馬ニ召レテ、俄ニ行幸アリケリ、是ゾ騎馬ノ行幸ノ始ナル、其後承平五年ニ、造畢供養セラ

レケリ、〇中略凡大佛殿同キ四面ノ廻廊ヨリ始テ、講堂三面ノ僧房、鐘樓、經藏、食堂、大湯屋、東西七重ノ大塔、八幡宮、氣比ノ社、氣多ノ宮、五百餘所、八大菩薩、戒壇院、眞言院、尊師僧正東南院、南都七寺ノ本院家三論ノ本所也、五師子ノ如意モナツカシク、光智僧都ノ尊勝院花嚴圓宗ノ本所也、村上帝ノ御願トカ、堪照僧都ノ吉祥院、五重唯識窻深ク、珍海已講ノ禪那院八不ノ堪水底澄リ、知足院ト申ハ、法相一宗ノ本所也、鑒眞建立ノ唐禪院、律宗天台ノ本所トカ、神社、佛閣悉燒ニケリ、梵釋四王、龍神八部、冥官冥衆ニ至ルマデ、定テ驚騷給ラントゾ覺エシ、三笠山ノ松ノ風、遮還ノ煙ニ音咽ビ春日野ノ草ノ露、魔滅ノ灰ニ色替レリ、昔釋尊ノ非滅ヲ唱ヘシニ、雙林風痛デ、其色忽ニ變ジ、抜提河水咽テ、其流又濁ケンモ限アレバ、菩薩聖衆人天大會ノ悲ミ、角ヤト思知レタリ、日本我朝ハ申ニ及ハズ、天竺震旦ニモ加程ノ法滅ハ、類希ニゾ覺エケル、若ク盛ニシテ身ノ力アル輩ハ、山林ニ逃籠、吉野、十津河ノ方ヘ落失ニケレドモ、行步ニモ叶ハヌ、老僧身モタヘズ、事宜キ修學者達ハ、其數ヲ知ズ、切殺サレ打殺サレニケリ、尼公ノ首ヲモ多切タリケルトカヤ、大佛殿ニテ燒死ル者、千七百餘人、山階寺ニテ五百餘人、在々所々坊舍堂塔ニテ、二百餘人、戰場ニシテ被討大衆七百餘人、都合一萬二千餘人トゾ聞エシ、其内ニ四百餘人ガ頸、法華寺ノ鳥居ノ前ニ切懸タリ、十二月廿九日ニ重衡朝臣、南都ノ大衆ノ頸三百餘ヲ相具シテ歸上ル、首共サノミ多シトテ、少々ハ道ニ捨ケリ、重衡上洛シテ首渡スベキ由奏申ケレ共、東大寺興福寺回祿ノ淺増サニ、其沙汰ニ及ザリケレバ、穀藏院南ノ堀ヲバ、南都ノ大衆ノ頸ニテ埋ケリ、一院、新院、攝政殿下、一天四海貴賤男女歎悲ケレドモ、入道相國バカリハ、南都ノ衆徒等、サテコソヨトゾ宣ヒケル、後世イカナラントゾ聞モ身毛竪ケリ、

〔東大寺續要錄三〕東大寺燒亡間事〇中略

就中二階十二丈之梵宇、層甍構高、五丈三尺餘之尊容、金銅粧嚴、訪之異域、猶無比類、今有火災若被

行廢朝如何、依佛寺火事廢朝之例雖不分明、於此寺者何拘常禮、准山陵之例、(貞觀十年二月廿五日、依野火延燒田邑陵樹也、康平六年十二月十五日、自今日廢朝三箇日、依盜人發掘狹城盾列池後山陵也、永保二年五月廿一日、自今日三ヶ日、依神功皇后山陵火事也、)可有沙汰歟、且詢群卿有議可被計、仍勘申、治承五年二月五日、大炊頭兼大外記主計權助備後權介中臣朝臣師尚勘申、

〔源平盛衰記三十七〕一谷落城幷重衡卿虜事

多クノ人ノ中ニ、重衡卿一人被虜給ヘル事、大佛燒失ノ報ヒニヤ、重衡ハ只憖七步之命、纔ニ遁一旦之死、曝顏於都鄙、辱名於遠近ケリ、去頃東大寺大佛上人(○重源)ノ夢ニ、我右ノ手急ギ鑄成スベシ、敵ヲ討ゼンガ爲也ト示給ト見ケレバ、急ギ鑄テケリ、去七日、右ノ御手成給ケルニ、彼卿虜レケル事、測知ヌ、大佛ノ御方便也ト云事ヲ、末代也トイヘ共、靈驗マコトニイチジルクゾ覺エケル、

〔源平盛衰記四十五〕內大臣京上被斬附重衡向南都被切幷大地震事

土肥次郎、使者ヲ南都ヘ立テ云、三位中將重衡ヲバ、關東ニシテ雖可被刎首、南都兩寺ヲ亡ス依咎、可渡遣衆徒之手由、源二位家ノ下知ニ任テ、寺邊ニ發向ス、寺內可入歟、於境外可被請取歟ト申タリケレバ、東大、興福兩寺ノ大衆、宿老、若輩、貝鐘鳴シテ、大佛殿ノ大庭ニ有會合僉議、若大衆ノ僉議云、(○中略)一門悉沈西海、重衡獨爲生虜、修因感果、究竟彼卿寺邊廻來、然者早衆徒ノ手ニ請取、兩寺ノ大垣三度廻シ、其後七箇日間ニ堀頭歟、鋸歟、斷切ニ可殺トゾ申ケル、若大衆ハ尤可然ト同ジケルヲ、老僧ノ僉議云、重衡卿重犯事、衆徒ノ僉議ニ同ズ、因果道理實必然也、但彼卿治承ニ南都ヲ亡シヽ時、以衆徒力打モ留、搦モ取タラバ、刑罪可任僉議之旨、而今年月ヲ送テ勇士ニ取レ、武家ノ手ヨリ請取テ、罪ヲ行事、全非大衆高名、就中修學利生之窻中ニシテ、行邪見不善科、背菩薩大悲、僧徒ノ威儀ニアラジ、誠ニ自業自得ノ所催、彼卿死罪雖遁歟、然者寺院ノ內ニ

不入シテ、イヅクニテモ武士ガ切タラン頭ヲバ請取テ、伽藍ノ敵ナレバ可懸奈良坂ナリトゾ僉議シケル、此條可然トテ、別ノ使ヲ相副テ、重衡卿間事被申送、源二位家仰奉畢、但衆徒ノ手ニ請取テ、行刑罪事其憚アリ、般若野ヨリ南ヘ不入シテ可被相計、首ヲバ衆徒中ニ給テ可加一見ト返事シケリ、

〔黑谷源空上人傳〕第十勸進念佛往生門

治承四年庚子十二月二十八日、平家南都ヲセメシトキ、東大寺ニ火カヽリシカバ、皆悉炎燒ス、其後造興ノ爲ニ、右大辨藤原行隆朝臣ヲモテ、大奉行ニ定ラレケルニ、行隆敬テ往昔ヨリ彼寺ハ、一天四海人民ヲ勸テ、御建立アリケリ、今又勸進ノ聖ヲ付ラレンカ、眞力ヲ假ズンバ俗補勇難ト勅答申シ上ケレバ、尤先例ニ任ベシトテ、大勸進ノ聖ノ沙汰侍ケルニ、法然房源空コソ、其器量ニ當レリト選定テ、行隆朝臣ヲ御使ニテ勅宣アリケルニ、上人申サレケルハ、源空ガ好所ハ念佛勸進ノ行ナリ、起立塔像ノ大勸進職ハ、器量ニアラズ〇中略ト固辭退申サレケレバ、モシ門徒ノ中ニ、其器量ノ者アラバ擧申ベキヨシ、重テ仰下サレケルニヨテ、上人醍醐ノ俊乘房重源ヲ召テ、勅ニ應ジテ參內セシム、法皇後白川喜玉ヒテ、遂ニ大勸進ノ職ニ補セラレニケリ、

〔吉記〕治承五年六月廿六日辛未、戊時左大臣參議藤原定能卿、參著仗座、藏人左少辨藤原行隆來仰大臣云、可定申造東大寺事者、先是左少辨以日時風記一覽大臣返給、次大臣召大外記淸原頼業、被仰可進造東大寺雜事勘文之由、頃之進之、卽付藏人辨被奏之、〇中略

造東大寺知識詔書

詔、朕以幼齡、忝纘聖緖、唯依宗廟之保護、偏思社稷之安、今尋若大和國添上郡建大伽藍、安十六丈金銅盧遮那佛像、蓋感聖武天皇、天平年中、發菩薩大願所鑄造也、棟甍插半天、光明超滿月、諮之倭漢、敢無比方、而去年窮多不慮有火、四百餘栽之華構、空化灰燼、三十二相之金姿、悉交煙炎、禪定仙

院、忽聞斯韡、惻愴于懷、任礎石於舊製、採山木以致造營、撰銘範於良工、聚國銅以欲修補、叡願之趣、尤足隨喜、夫有天下之富者朕也、有天下之勢者朕也、以此富勢、將助禪念、亦答本願聖靈之叡志、宜唱大善知識之勸進、上自王侯相將、下及輿儓皂隸、毎日三拜盧遮那佛、各當存念手自造盧遮那佛像也、昔聖武天皇志深象濟、誠切利生、內祈神道、外勸注界、降綸綍之命、果廣大之願、稱尋舊規、可追古跡、雖一粒半錢、雖寸鐵尺木、施與者世々生々在々所々、必依妙力、長保景福、彼泰山無嫌撮壤、故疊起雲之峯、巨海不厭細流、故激浮天之浪、況乎時臨澆醨、俗非淳素、共勵興立之思、同結菩提之因、今在此時、已興此善、幸遇朕之勸進者、豈非民之良緣哉、然則率土之濱、霑法雨以佇華胥、普天之下、染惠風以同栗陸、五畿七道諸國等司、因斯事莫令侵擾百姓、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

治承五年六月廿六日

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年三月七日庚寅、東大寺修造事、殊可抽丹誠之由、武衞被遣御書於南都衆徒中、又被送奉加物於大勸進重源聖人訖、所謂八木一萬石、沙金一千兩、上絹一千疋云云、

御書云

東大寺事

右當寺者、破滅平家之亂逆、遂逢回祿之厄難、佛像爲灰燼、僧徒及沒亡、積惡之至、比類少之者歟、殊以所歎思給也、於今者如舊令遂修復營造、可被奉祈鎭護國家也、世縱雖及澆季、君於令施聖德者、王法佛法、共以繁昌候歟、御沙汰之條、法皇定思食知候歟、然而如當時者、朝敵追討之間、依無他事、若令遲々候歟、且又當寺事、可致丁寧之由、所令相存候也、仍勒狀如件、

三月七日　前右兵衞佐源朝臣

〔吾妻鏡 七〕文治三年四月二十三日甲午、周防國者、去年四月五日、爲東大寺造營被寄附之間、材木事、於彼國有杣取等、而御家人少々耀武威、依有成妨事、勸進聖人重源、取在廳等狀、訴申公家之間、被下

其解狀、於關東、所被尋仰子細也、

重源申上候、御材木の事、いそぎさた出り候べきよしぞんじて、まかりくだり候ところに、なほなほ武士のらうぜきとゞまり候はず、

筑前冠者家重　內藤九郞盛經　三奈木三郞守直　久米六郞國眞　江所高信

これらがおの〳〵かまくらより地頭になり候て、所々にをさめをきて候、米百八十六石、そのゆゑなくおしとり候畢、人夫食料にたのみてまかりくだり候あひだ、かやうに狼籍いでき候て、よろづ相違つかまつり候畢、わたくしに制止をくはへ候に、さらにもちひず候、かやうの事しづまり候はずば、此御大事なりがたく候者也、かねては國人をかりあつめて、城郭をかまへて、わたくしのそまづくりをはじめしあひだ、御材木引夫めし候に、さらに承引せず、あるひは山野の狩をつかまつり候に、またく院宣にはゞかり候はず、如此の事により候て、諸事ゆかず候へば、恐のために急ぎ申候由、委在廳解に申候よし、重源恐々謹言、

文治三年三月一日　　在判

十一月十日丁未、佐々木四郞左衞門尉高綱申云、東大寺棟木、去年雖被尋、終不得之、去九月之頃、於周防國杣採之、其長十三丈也、是偏依重源上人信心、緈成就之兆也云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年閏十二月五日己酉、高三位書狀參著、所送進院廳御下文也、是相催地頭之輩、可令引東大寺柱之由也、　九日癸丑、東大寺柱四十八本、明年中可引進之由、被仰畿內西海地頭等、佐々木四郞左衞門尉高綱可爲奉行云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年正月十四日壬午、高尾文學上人傳申云、東大寺造營、頗難終功之由、舜乘房愁訴申云、舊院御時、雖被寄料米二萬石、國司只貪利潤、敢不致沙汰、於今者、關東不令執申給者難成歟云云、仍被預舊院御分國內備前國於文學房、以其所濟可給彼寺之營作之由、可早被申京都、亦頗倒

保元以後新立庄、進於土御門殿、可被奏達之趣有沙汰云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年六月二十八日丁巳、造東大寺間事、將軍家旁令助成給、材木事仰左衛門尉高綱、於周防國殊有採用、又二菩薩、四天王像等、宛御家人可致造立云云、所謂、

觀音宇都宮左衛門尉朝綱法師　虚空藏穀倉院別當親能　增長畠山次郎重忠　持國武田太郎信義　多門小笠原次郎長淸　廣目梶原平三景時

又戒壇院營作、同被仰付小山左衛門尉朝政、千葉介常胤以下訖、而其功頗遲引之間、今日所被催促也、但各偏存結緣之儀、可成功之由御下知先訖、只以隨公事之思、縡若及懈緩者、可辭申之旨、嚴密被觸仰云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年三月十日乙未、將軍家爲令逢東大寺供養給、著御于南都東南院、自石淸水直令下向給云云、　十一日丙申、將軍家令施入馬千疋於東大寺給、義盛、景時、成尋、昌寛等奉行之、凡御奉加、八木一萬石、黃金一千兩、上絹一千疋云云、

〔猪隈關白記〕正治元年十二月八日丙寅、右中將長房朝臣來云、明年大將軍在南、東大寺可被造營、仍天王寺方可有御方違之處、御幸不可叶、何樣可有沙汰哉之由有院宣者、可被付寺家歟之由令奏了、被問人々云々、

〔朝野群載十六佛事〕東大寺大佛殿佛前板文

勅曰、○中略粤以天平十五年歲次癸未十月十五日、發菩薩大願、奉造盧舍那佛金銅像一軀、盡國銅而鎔像、削大山以構堂、廣及法界、爲朕知識、遂使同蒙利益、共致菩提、○中略

大佛殿一宇、二重十一間、高十五丈六尺、東西長卅九丈、廣十七丈、基砌高七尺、東西砌長三十二丈七尺、南北砌長廿丈六尺、柱八十四枝、殿戶十六間、天壺三千百廿二蓋、步廊一、廻戶廿間、東西經五十四丈六尺二寸、南北徑六十五丈五尺、塔二基、並七重、東塔高廿三丈八尺七寸、西塔高廿三丈六尺七寸、

露盤高各八丈八尺二寸、用熟銅七萬五千五百二斤五兩、白鑞四百九斤十兩、錬金一千五百十兩二分、

鐘一口、高一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚八寸、用熟銅五萬二千六百八十斤、白鑞二千三百斤、

〔言繼卿記〕元龜二年八月廿五日乙卯、柳原一品、〇資定奏者所口迄罷向、東大寺之奉加、甲州ヘ綸旨之事令談合了、　廿九日己未、自柳原一品綸旨被、則如此、中御門他行云々、

東大寺大佛殿者、爲日本無雙之伽藍、上古之舊趾異于他之處、南都擾亂之時節、依兵火魔風回祿之由被歎思召者也、仍以諸國之勸進、可勵再造之微功之由、任衆僧奏申旨、萬方被成綸旨畢、然者爲國家安寧武運長久之祈願、別而於被抽奉加之忠志者、可爲神妙之由天氣如斯、仍執達如件、

元龜二年七月十六日　　權左少辨宣教判

武田大膳大夫入道殿

〔東大寺藏書文〕信長御書

爲大佛殿再興勸進分、國中人別每月壹錢宛之事、不撰權門勢家、貴賤上下無懈怠可出之、以此旨可被相勸者也、仍狀如件、

元龜三六月　日　　信長御朱印

東大寺本願濟玉上人御房

〔重興南都大佛殿讃頌集一記〕重興南都大佛殿碑記

洛陽南都去度畑郎九十四里、有處甚夷曠、四山廻合、鬱然鐘王者氣、卽都中之地界也、〇中略聖武皇帝、因感異夢勅菩薩僧行基、良辨、菩提三公共勠力而刱之、久而後成、世總稱之爲四聖云、〇中略至永祿十年冬十月、又厄于回祿、而龍宮寶界悉化爲瓦礫荊榛之場、蓋囿乎數有不可逃者、獨大像存焉、逮今

百有餘歲、往々爲風日所逼霜露所侵、若將頽焉、道俗瞻禮者、未始不愴然太息、以至于殞涕者有之、〇中略貞享元年、當時之子院院主公慶上人奇人也、生來氣宇超邁、道念堅確、精修密行、挙弗懈、講演之餘、常以起廢爲己任、亦可謂荷擔大法者、已乃奏聞于上、以先人俊公所遺小木杓、偏募天下檀信、無論貴賤男女、各隨所捨而共成之、蓋欲天下人均獲福利也、既而鋟穀雲委、木石川裴、有若堂上一呼而堂下百諾、何其幸哉、〇中略遂涓戊辰五年、〇貞享五年即元祿元年四月二日經始、鳩匠氏五百人、齋四方僧伽衆萬指、作佛事者七日、以祝聖天子萬壽、大元帥千秋、餘是國之善男信女、持香華而隨喜者、雲興海涌、歡聲載道至無所容者、蓋以今上皇帝、〇東山與當朝大相國公、〇綱吉明同日月、德覆乾坤、故有若是之盛事也、上人以古寺之重興、人夫協贊、功績浩大、儻不述其顛末勤之貞珉、將何垂示于後乎、乃命其法侶、請予爲文記之、予惟此像之靈瑞與予有一段大因縁、向所不欲言而今之奇遇至此、又不容不言也、

〔鹽尻 三十一〕寶永六年三月廿一日より四月八日に至り、南都東大寺大佛殿落慶供養の時、うりけるとて、人の送り侍る一紙、左のごとし、

堂高　二十五間
東西　廿八間七尺
南北　廿五間四尺
瓦數　十三萬三千六百六十四枚

大佛殿華梁銘
古殿燒毀、梵像儼然、或聞或見、靡不甚憐、欲興久廢、遍募衆縁、始運斤斧、廣設齋筵、般師五百、淨侶一千、公慶之德、海內爭傳、仰祈世主、睿算綿々、民安國泰、億萬斯年、
元祿元年四月二日、東大寺長吏前大僧正道恕〇安井門主所造銘也、
別當二品法親王濟深和尙〇勸修寺

長吏蓮花光院道恕大僧正

大勸進龍松院公慶上人（元祿元年八月上人位、寶永二年七月十二日ニ記ス、）

天和三年、公慶發興復之志、上奏、貞享元年以來、募四方、修佛像、元祿元年四月二日、大殿經始僧侶一千人、匠氏五百員云々、同十四年五月十二日造寺、同東大寺大佛長官從四位下左大史小規宿禰季連云々、寶永二年閏四月十日上棟、

大佛殿供養のよし聞えける頃、彌生廿日あまり奈良へ文遣るとて申送り侍る、

時あればちとせの後の八重櫻けふぞむかしの香に匂ふらん

彼寺は花嚴を宗とし侍りぬれば、如日光照高山の意をよみて、佛布施に書そへて遣はす、

霧こめてふもとはくらきしのゝめにあさひうつろふ峯のしらくも

〔重興南都大佛殿讃頌集三〕賀偈（井序）（同○性激高泉）

南都東大寺有盧舍那佛銅像、昔天平帝（○聖武）因夢感所造像、高一百六十尺、梵容奇古、望之若紫金山、復建大殿以覆之、後爲祝融氏所廢、猶銅像存焉、歷百餘歲、以風日雨雪所侵而像亦損壞、緇白瞻禮者輙有悲感、近年龍松院住持公慶闍梨、確然有興復之志、遂白大將軍、募天下、人無論貧富、各施銅錢一、予聞而嘆之、以其取少而化廣、異乎常、乃減衣盂、奉三十貫、意以一人而預三萬人云、無何積錢如山、乃先飾聖像而後擇今戊辰（○元祿元年）之夏四月二日經始、集匠氏五百人、又飯千僧以修法事、如是者七日、住持請予祝國拈香、予嘆其行人所不能行、作人所不能作、眞僧中龍哉、詩以贈之、

〔續近世畸人傳四〕僧卍山

其後、東大寺の公慶上人檗宗の鐵眼和尚など、親しく交給ひしが、寬文四年の秋、三師同じく會して、物語の時、師云、大願を發さゞるは、菩薩の魔事也と大般若に見ゆ、しかれば各位大願を發し給んや否と、鐵眼和尚曰、誠然、吾も亦願心あり、一切經を彫刻して、檗山に納め、永く世に廣めんと思

ふと、公慶上人曰、我は南都大佛殿を造立せんことをおもふと、〇中略永祿十年十月十日、松永彈正久秀が兵火に又燒失す、此時御首も地に落ちたるを、大和福住の處士、山田道安といふ畫の妙手、多く財寶を出して、佛頂を鑄、鑵に入て引上、繼率たれども、伽藍の興立には及ばず、滴謨曰、元祿九年、貝原先生の記にも、野中に立給ふと書れたり、こゝに此上人大願心を興して、貞享帝の勅を奉じ、寶永五年六月廿六日成就す、大檀那薩摩の太守にて、曼荼羅壇、什器、舍利塔等をも供せらる、これ又希有の大興立なり、三師の志願、通計四十五年にして、各成就を遂られしも、たうときことにこそ、

〔祐天大僧正傳〕師諱愚心、字祐天、號明蓮社顯譽、奥州岩城人也、〇中略師生平所受信施、未嘗自用、皆用興廢寺、繼絶跡、嘗游方至南都、大佛殿回祿彌曠、佛像冒雨露、師慨然曰、吾若遇再建之時、願竭身力以資之、方其再建募緣之日、寄資大殿十圍巨柱木若以美、然者十餘、其料率數千金、皆其歷年所書施主號淨財也、

〔鹽尻三十九〕南都東大寺再建の事、始天下に令して、一百石の地より銀十五匁目を出さしめ給ふ、かゝる折節、奸商等棟木をたづぬとて、甲申の春、勢州山田の御山こそ數十丈の松あり、これを出せば利を得る事甚しと云、我政府下の賤商等實とし、神人によりて請へども、御垣ちかき木なれば許容する者なし、夫神木をもつて佛寺を造る事甚恐れあり、推古の御時何れの臣か、霹靂樹を伐て祟を請し、孝德帝生國魂の社木を伐しめたまひ、齊明帝朝倉の社の木を伐せたまひしより、光仁帝西大寺の西塔の造料に、江州小野神社の木を採らしめまし〳〵ける、何れも神祟大方ならず、君も臣も恐れ給ひしよし、正史に記せり、いはんや市井の凡民、太神宮の御山の木を伐取べき、此事元來僞り欺き、一旦の利を得るのみにて、實に神木を出す事にはなかりしかども、其商人あらぬ事にて、此年府下を追れ、跡なくなりしにぞ、假にも神明をあなどりたてまつりし神罰にこそと、人皆いひあへりける、

講堂

〔和州舊跡幽考〕二 添上郡 東大寺諸堂

講堂　講堂は、天平勝寶年中の造建、本尊は五丈の千手觀音也、一萬僧會のくやうありしには、天人あまくだり、花ふり異香しけるとかや、是より十天樂はつくりはじめて奏しけるとぞ、盛衰記

〔源平盛衰記〕二十四 南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

大講堂ト申ハ、天平勝寶年中ニ御建立、本尊ハ五丈ノ千手ノ靈像也、一萬僧會ニテ供養ヲ遂ラレシ時、天人天降リツヽ、花ヲ佛前ニ散ジ奉ル、其香發越トシテ、法會ノ庭ニ匂、九重ノ中ニ薫ジケリ、聖武皇帝叡感ノ餘リニ、樂人ニ仰テ始タル樂ヲ奏スベシト、勅定有ケレバ、伶人等俄ニ十天樂ヲ作、始テ是ヲ奏シキ、類少キ不思議也、

〔東大寺要錄〕四 講堂 在三面僧房 講堂一字 長十八丈二尺 廣九丈六尺 軒廊一字 長六丈 廣三丈八尺 房四字 一字長廿七丈七尺、廣四丈六尺、 一字長廿七丈六尺、廣同前、 二字各長十二丈七尺、廣四丈六尺、

已上、堂舍、延暦元年新撿記帳所注載也、第一卷

〔扶桑略記〕二十三 醍醐 延喜十六〇六恐七誤 年十二月一日、東大寺講堂一字、十一間、幷三面僧房、一百二十四間燒亡、

〔日本紀略〕一 醍醐 延喜十七年十二月一日丙午、東大寺講堂一字、僧房一百廿四間燒亡、 四日己酉、定法皇〇字多 以馬幸東大寺、令修御諷誦、施調布五百段、 五日庚戌、勅差使於東大寺、施綿一千屯、

〔扶桑略記〕二十四 醍醐 延長五年十月廿六日、供養東大寺講堂、或記云、請僧千人、講師經賀任大僧都、讀師長海任小僧都、呪願觀賀任權僧正、三禮觀宿任大僧都、唄會理、散華寛印、已上二人任小僧都、堂達安靈任權律師、已上

〔宣胤卿記〕永正五年三月二十日、右大丞折紙到來、

東西塔

東大寺講堂炎上事

十八日夜亥刻、東大寺講堂三面僧房悉以燒失之由、只今自東大寺注進候、言語同斷之儀候、〇中略社頭大佛殿等、無爲之儀可勸及候、

廿日　　尙顯

中御門殿

〔和州舊跡幽考二添上郡〕東大寺諸堂

東塔　野田の入口に礎のこれり、〇中略

西塔　氣比氣多明神の邊に礎のみあり、〇中略

或說に、天平勝寶五年三月三日造立あり、東塔は、一條院長保二年十月十九日炎上、西塔は朱雀院の御宇、いかづちおちて燒火す、其後後宇多院、建治元年二月二十九日、西塔の日どり時どりをさだめ、帝王編年再興ありて後、兩塔なくなりし時代をしらず、

〔東大寺要錄四〕一東塔院

七重寶塔一基高廿三丈八寸、塔內安四方淨土、在二廻廊、今作之

一西塔院　高廿三丈六尺七寸

天平勝寶五年閏二月廿三日建

長保二年十月十九日、西塔三重、幷正法院燒亡、興福寺喜多院燒亡、火移也、

又承平四年甲午、東大寺西塔燒亡、

〔扶桑略記二十五朱雀〕承平四年十月十九日、雷火燒亡東大寺西塔、

〔扶桑略記二十五裏書朱雀〕承平四年十月十九日、戌刻雷鳴、今夜東大寺西塔幷廊等爲神火燒亡、但大和國國分寺也、

東西小塔院

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡東大寺四天王像、幷東西兩塔破損者、用寺家例修理料封戸調庸雜物之內修理之、

〔東大寺要錄 四〕東西小塔院　神護景雲元年丁未、造東西小塔堂、實忠和尙所建也、天平寶字八年甲辰秋九月十一日、孝謙天皇造一百萬小塔、分配十大寺、各籠無垢淨光陀羅尼摺本、口傳云、惠美亂誅之間、罪懺悔料云々、

羂索堂

〔和州舊跡幽考 二 添上郡〕東大寺諸堂

法華堂　法華堂、又は金鐘寺、又は羂索堂ともいふ、佛法傳通記 俗に三月堂とよぶ、又金熟寺ともいふ、これは優婆塞金熟といふあり、その住給ひしより寺號とす、釋書 或は金鐘行者といふ、御順禮記 或は金鷲仙人ともいふ、佛法傳通記 その名ひとしからず、只良辨僧正のもとの名にて侍る、御順禮記

〔東大寺要錄 四〕羂索院 名金鐘寺、又改號金光明寺、亦云禪院、

堂一宇　五間一面 在禮堂

天平五年、歲次癸酉、創建立也、良辨僧正、安置不空羂索觀音菩薩像、當像後有等身執金剛神、是僧正本尊也、光仁天皇皇子崇道天皇等定僧都、爲師出家入道、廿一歲登壇受戒、住持此院、後以景雲三年移住大安寺東院矣、○下略

〔東大寺續要錄 三〕東大寺燒亡間事 ○中略

寺中羂索院者、良辨僧正之建立、靈驗殊勝之伽藍也、適免餘焰云々、有便于移行歟、彼寺雖爲廣濟衆生之庭、已作鎭護國家之砌、因玆、代々置造寺官、隨壞修之、旁思其旨趣、尤可被尊崇、今任蹤跡、有議定者、法燈無消、惠日永照者歟、

二月堂

〔和州舊跡幽考 二 添上郡〕東大寺諸堂

二月堂　羂索院、俗に二月堂とよぶ、天平勝寶年のはじめ、勅定によりての造營なり、

〔東大寺要錄 四〕一二月堂

今此堂者、實忠和尙之草創也、凡利益不空、効驗無滯之仁祠矣、觀音大士普施靈德、現當悉地莫不稱遂、是以、道俗男女、頓首恭敬、尊卑老少、竭誠歸依、可謂諸佛垂應之所、菩薩遊化之地者乎、天平勝寶四年壬辰、和尙始行十一面悔過、至于大同四年、合七十年、每年始自二月朔日二七日夜終、每日六時行法、

三昧堂

〔和州舊跡幽考添上郡二〕東大寺諸堂

三昧堂　三昧堂は、本尊普賢三昧なれば、三昧堂とも、普賢堂ともいふ、俗に四月堂といふ、二月堂に對してこそかくはいふらめ、此堂の濫觴をしらず、

〔東大寺要錄四〕一三昧堂

治安三年、仁仙大法師、與助慶聖人同心所創建也、同造僧坊、令住六口三昧僧、修法華三昧之行、又每年夏中、修百ヶ日講、幷始自八月十五日三ヶ日、不斷念佛、于今無絕、三ヶ日僧供、寺衆次第勤仕、

戒壇院

〔攝壤集上寺院〕律家

戒壇院

〔和州舊跡幽考添上郡二〕東大寺諸堂

戒壇院　戒壇院は、聖武天皇の勅使として、從四位上眞吉備、鑑眞和尙のもとにゆきて申、みかど東大寺を御建立より、十年を經給へり、しかれども本朝にいまだ戒壇なし、和尙これをいとなみ給ふべしとなり、和尙みことのりをうけ奉りて、釋書まづ大佛殿の南の前に釋書四日戒壇をきづく、

〔東大寺要錄四〕一戒壇院

堂二宇　南戒壇　北講堂

本願聖武皇帝之所建也、時雖定惠之聲傳自漢土、而戒律之法未流此地、口像三衣而受大戒、穿鑿四角而結壇場、邪正亂端、輕重紊條、於是聖朝深崇佛道、重譯求法、便有入唐學僧榮叡普照、與大使藤原

淸河、副使大伴古滿呂等、詣龍興寺、拜請鑒眞和尙、仍唱白塔寺法進律師十餘人、遠凌鯨波、歸朝鳳闕、天皇敬其德、安置東大寺唐禪院、因玆本朝立戒壇、始行授戒而已、

〔僧綱補任〕孝謙天皇、天平勝寶六年甲午正月十二日、鑒眞自唐來、弟子法進如意等廿四人、住東大寺、四月於大佛前立戒壇、天皇受菩薩戒、後於大殿西別作戒壇、持來五臺山之土加之云々、本朝受戒始也

〔東大寺續要錄三〕東大寺燒亡間事〇中略

抑每年三月於戒壇院令得度諸寺諸國之沙彌、已爲年事、行來尙矣、寺家土木以前、受戒空中絕者、沙彌僧等失得度之計歟、然者、寺門造營縱雖遲留、戒壇作爲不日終功、宜任舊跡被行受戒、

〔寺鑑上〕無本寺寺院　南都東大寺山內 花嚴律宗 戒壇院

御朱印　高三拾九石九斗五升九合

〇按ズルニ、戒壇院ノ事ハ、戒律篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

唐禪院

〔東大寺要錄四〕一唐禪院

天平勝寶十年所創建也、龍興寺和上居住此院、後移住招提寺矣、

〔東大寺續要錄九〕唐禪院

右大唐龍興寺鑒眞和尙、依聖武天皇勅請、爲弘五篇七聚之戒法、凌一十二年之留難、天平勝寶五年、持三十粒舍利來朝、同六年甲午四月初、於盧舍那殿前立戒壇、天皇初登壇受菩薩戒、同年五月一日、被下戒壇院建立之宣旨、寄附廿一箇國、被立戒壇、同十月十三日、僧大會、展供養、導師權少僧都鑒眞任大僧都、同七年、依勅被建和尙修練之道場、號唐禪院、

念佛堂

〔和州舊跡幽考二添上郡〕東大寺諸堂

念佛堂　念佛堂は、又淨土院と號す、舍利塔銘本尊地藏菩薩、是は重源上人、上の醍醐にして、不斷念佛を興せられしより、其外七ヶ所におかれしなり、まづ東大寺の念佛堂、高野山新別所等なり、法然御傳

此堂に重源上人のゐはいあり、

〔南都七大寺巡禮記 上〕東大寺

淨土堂。號東大寺別所。 東向三間四面堂、號念佛堂、安五智如來等也、○中略 治承以後、此堂者重源上人自阿波國渡之、本尊十體、內一體者、六條禪尼建立、殘九體、自彼國渡之、舍利十三粒、內一粒者、聖武天皇御持也、

眞言院

〔和州舊跡幽考 二添上郡〕東大寺諸堂

眞言院 眞言院は、善無畏三藏と云あり、天竺の人にして、甘露飯王の末なり、元正天皇養老年に此國に渡り給へり、釋書 年代たしかならず、いまだ東大寺の造營もなかりし以前に、いほりをむすびて、八十日住給ひき、其所は東大寺の西南、今の眞言院なり、其後高市郡米目寺の東院にいほりを立ておはしましけり、かの三藏のむすび給ひし、東大寺のいほりのむかしを忍給ひて、弘法大師、此眞言院を立給ひし也、又南院とも號す、佛法傳通記

〔東大寺要錄 四〕一南院。亦名眞言院。

弘法大師之建立 心經秘鍵奧書云、承和元年仲春之月、於東大寺眞言院開演云々、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官符

應東大寺眞言院置廿一僧令修行事

右撿案內、太政官去弘仁十三年二月十一日下治部省符偁、右大臣宣、奉勅、去年多雷、恐有疫水、宜令空海法師於東大寺為國家建立灌頂道場、夏中及三長齋月修息災增益之法、以鎭國家者、今被從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守宣偁、自今以後、宜件院置廿一僧、永為定額、不向食堂、全令修行、別當之僧專當其事、但住僧交名、專當法師等簡定、牒僧綱令行、若僧有闕、隨以補之、

承和三年五月九日 ○又見續日本後紀、東大寺要錄、

〔東大寺別當次第〕大法師空海弘法大師、東寺長者始、眞言宗、○中略
寺務四年弘仁元、二、三、四、○中略東大寺眞言宗始也、弘仁比
律師永念不見僧綱補任、
弘仁十三年任、同年二月十一日、被建立眞言院、灌頂堂、寺務四年、弘仁十三、十四、天長元、二、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

眞言院ト申ハ、養老年中ニ、中天竺ノ善無畏三藏來朝ノ當初、八十日ガ間、遊士修練シ給シ芳躅ナリ、其間ニ、良辨、義淵等、大虚空藏等ノ秘法ヲ受テ、密敎稍傳持セリ、然共根機普ク熟セザリケルニヤ、三藏所持ノ毗盧舍那經ヲバ、大和國高市郡、久米寺ノ東塔ノ柱ノ底ニ納テ、無畏三藏ハ歸唐シ給ニケリ、其後弘法大師出世シ給テ、内外平滿ノ敎コト〳〵ク通達シ給テ後、諸佛内證ノ不二法門アルベシトテ、當伽藍盧舍那佛ノ前ニシテ祈請申サレシカバ、夢想ノ告有テ、彼久米寺ノ大經ヲ感得シ、勅定ヲ蒙テ渡海入唐シ、青龍寺ノ大和尚ニ謁シテ、三密五智ノ瓶水ヲ受、眞乘秘密ノ奥藏ヲ傳ヘ、大同年中ニ歸朝シ給テ、法水ヲ四海ニ流シ、甘雨ヲ一天ニソヽギシカバ、東大寺ノ別當ニ被補キ、勅命ニ依テ此寺ニ移リ居テ、三藏修練ノ芳跡ヲ慕、大唐青龍ノ風範ヲ寫シテ、灌頂壇ヲ立テ、增息ノ法ヲ修シ給ヘリ、密敎相應他ニ異ナル聖跡也、○下略

吉祥堂

〔東大寺要錄四〕一吉祥堂
吉祥御願、於此院修之、天曆八年吉祥院燒失、由之移羂索院行之、今年吉祥御願、請僧十口、始成七口、云々、實物等略之、

知足院

〔東大寺續要錄九〕知足院
當院者、寛平二年、高雄昇殿十禪師建立也、而星霜屢遷、院家皆荒、仍濫僧多以住、俗人又卜居、爰別當法印定親、建長第二年、一向以此砌被定清淨之地、淨行寺僧可造房舍、且又營作之間、可有助成之由

東南院

被相觸畢、本住監僧等賢覺五師道源得業、明眞、良榮、增全宛給余敷地、移遣他所畢、隆圓得業且爲重代之居所、且爲堂舍敷地、於女人者不可入居、枉可被許居住之由雖歎申、恐後代之相濫、更無有許容、仍堂舍房宇同破出畢、其後或學徒、或禪衆僧行輩、以寺務之資助各移造房舍、遂寄附田園、被定置院僧、此內在別所、宗春上人之建立也、隱遁之禪侶令止住、在堂舍、在僧房、彼所止住侶者、或學、或律、尤學戒律、可與戒法受戒之由、上人之素意也、當寺度如之輩、又破戒濫吹之類、難居住、

〔國師日記〕南都東大寺之內、知足院と申律院者、西大寺開山以來、末寺無其隱候處、先住持替目之砌、招提寺良存坊と申仁、筒井順慶江不口競望被申、廿ヶ年餘被抱候、紛敷處、去十月十九日ニ死去被申、然者跡之住持、招提寺良忍坊可持由被申候、不謂儀ニ候間、此以後之住持者、任先規、從西大寺可信之體入置候樣ニ被仰付者、滿寺可爲衆悅事、

南都東大寺○內
法○相○宗　知足院

〔寺鑑上〕無本寺寺院○中略

御朱印高貳千石之內　高六拾九石七斗八升三合　配當

〔和州舊跡幽考二添上郡〕東大寺諸堂

東南院　有人、東坊と當院は、同院なりといへり、しからば東坊はさきの名にして、聖寶僧正建立の後、東南院と申にや、さだかにしらざれば、今別段にこれをあらはす、聖寶僧正の造營三論のもとにして、代々院主となり、宗の長者となれり、

〔東大寺要錄四〕一東南院

貞觀十七年乙未、聖寶僧正造東南院、檜皮葺僧房內安如意、藥師堂、在東南院內

〔東大寺續要錄九〕東南院

當院家者、當寺別當道義律師、延喜四年七月二日夜、發三百餘人夫工等、壞渡香積寺、字佐伯院所建于當寺南大門東腋也、其後律師、延喜四年、大衆中付屬于聖寶、爲備後代之龜鏡、即請寺司之署判、但

道義律師壞取香積寺之條、理不盡之沙汰歟、然而氏人庭弱、不陳子細、隨又氏人故參議正三位大宰帥佐伯宿禰今毛人曾孫等、深案由來、所壞渡堂幷佐伯院敷地、永付屬于聖寶、仍得兩方之讓、爲萬代之證、五間檜皮葺藥師堂一宇、安置金色丈六藥師像一體、同日光月光像各一軀、檀相十一面觀音像一軀等也、次乞請當寺、破壞悲田院屋一宇、以爲代々院主房、並御門御脇、此處號東南院、永傳于門跡、次妙音寺者、會藝大法師所建之私領也、買取此所、加院家領、次三論長者、諸宗三論宗中、殊探器量、以官符所補來也、而延久三年、永以東南院院主、可爲此宗長者之由、被宣旨以來、于今無違禮矣、次中樂地以南敷地者、本是嚴調已講相傳領也、慶信爲白川院御臨幸買取之、白川法皇御幸之時建殿舍、爲御所、其後累代相傳、可爲御所之由被定畢、

治承四年十二月廿八日、爲平家逆臣被燒失大佛以下諸堂等之剋、東南院同成灰燼畢、所殘纔院主房、經藏等是也、而建久元年十月十九日、大佛殿上棟衆被宣下、卽後白川法皇可有御幸、任先例、以東南院可爲御所、仍期日以來可建立之由、被仰下第十三代院主勝寶僧正了、仍首尾五十ヶ日之間、令造營一院家了、八月廿五日擬上棟、十月十七日御幸、速疾之營作、萬人之所感也、寢殿一宇、五間四面、檜皮葺、公卿座、中門廊、殿上廊、中門隨身所、車宿、對屋等、房宇幷樒莊嚴盡美、仍往還之客驚目、見聞之類傾首畢、

〔諸門跡傳 三〕東南院

聖寶僧正　兵部大輔葛野王息、十六才投眞雅僧正得度、學三論于元興寺願曉、及圓宗、唯識於東大寺平仁、華嚴於同寺玄榮、又賜金剛峯寺眞然僧正受眞言密敎、復從源仁僧都益得奥秘密、

東寺長者、東大寺別當、七大寺撿挍、醍醐草創、小野元祖、法務、東。南。院。開。基。

〔東大寺別當次第〕傳燈大法師玄津

貞觀十七年四月廿八日任、○註略 同年始建東南院、

〔東大寺具書〕近衞院御宇久安三年五月十六日、被仰下三ヶ條雜事、○中略 次東南院、聖寶僧正起之由令申之條、不知案內之至極也、道義律師渡之眞雅僧正住之、本是大安寺之香積寺也、仍大師族姓之寺、其寄非容易、而今親族之諸人起立之諸寺、以之爲一准例、就其加多言難之條、是又大僻也、藤卿相建立之精舍、厭幾許乎、唯以興福寺總而爲氏之寺、佐伯院之本號獨在當寺、東南院非自餘准例之條顯然也、是則親在大寺之墩內、爲練行之聖跡、今毛人等氏人殊有深致寄進之、眞雅觀賢等、專以由緒崇重之上者、列其後葉之人、爭可忽諸哉、是只大師以下有因緣、被崇重當寺之所見也、以之可爲眞言宗本所之旨不申之上者、馬骨之譬、甚以無要、經難之至極也、敢不可來競於宗本所者、眞言院灌頂壇於寺門而專一也、在當時而儼然也、敢不可及異端矣、恣加不來之難、徒贖數紙之面之條、構無理之濫陳、飾虛誕之妄言之間、懸無窮之岐路、忘正轍之直道、尤不便之次第也、但醍醐寺僧、以件院家爲本寺之條者、爲聖寶僧正相承之本院家故也、更遠不可尋高祖大師之本緣、勿論之次第也、是六 次聖口觀賢練行之聖跡、醍醐寺僧爭不仰本寺哉、當院緣起尤足爲本末支證、非所見之由辭申之條、太以無其謂者也、況乎如聖寶僧正東南院起請者、延喜六年錄藥師堂起請條流於一門斷末世喧云々、同七年重錄院主坊起請云、爲代々院主坊、永傳於一門、是爲斷末世喧起請云々、皆是醍醐寺建立之比、御願奉行之以前也、彼寺承尊師遺流一門者、豈非當院末塵哉、若云以當院非一門者、寧不背鼻祖之起請哉、速改迷執、來可拜祖跡者也、是七

〔東大寺具書〕重源上人申下院廳御下文案

院廳

可早任建久七年二月七日宣旨且依大和尚重源契狀以下略之

右大和尚重源、今月八日解狀偁、謹撿舊記、凡東南院者、聖寶僧正草創以降、院主及十三代、或爲三論

明匠、專傳八不之遺風、或兼東寺長者、鎭湛三密之智水、又帶醍醐座主、又補當寺別當、皆是淨行持律之高僧、朝家清撰之碩德也、當時院主權律師定範者、潤三密法水、而繼八不之□□門跡興隆爲先、尤當其仁矣、故一向所申誂彼定範也、永傳彼一院、敢不可分渡他門、倩見當寺爲體、云往古寺領、云恒例佛事、經日而陵遲、是則或爲末寺之別當、不知子細、或存遷替之寺務、不加□治故也、以下略之

建久九年四月日

〔東大寺具書〕定範法印申下院廳御下文案

院廳

可早任法印權大僧都定範申請付東南院

一攝津國長洲庄内開發用事

右同解偁、抑東南院者、數代臨幸之勝地、三論鑽仰之靈砌也、我朝無相之一家、永留此所、南都眞言之濫觴獨在此砌、是以住侶元守三密也、遠追尊師僧正之古風、門人之學二明也、遙訪觀理僧都之芳流、南都一門之稱起自當院、□寺本院之號豈非此所乎、尤可賞翫之、深可興隆之、以下略之

承久元年四月日

〔義演准后日記〕慶長十一年六月十日、南都東南院近代仁體退轉、仍將軍ヘ、寺家ヨリ訴訟、則隨心院兼帶可然之由被仰出云々、隨門ヨリ御使在之、予存知也、雖然先年隨門ヘ與奪申了、當寺ヨリ代々兼帶申了、非于他由緒也、

〔鹽尻十一〕眞福寺上人東南院宮ト稱スル　眞福寺上人、宥天大栖第三世、仁瑜法親王、後村上帝皇子東南院の宮と稱す、東南院在處何の地ぞやと、予曰、高野山の東南院は、智泉大師の開基、もしや是歟と、後に、南都東大寺の東南院は、古しへの寺務門跡たり、仁瑜親王も、南都東南院の御門跡なりしと、華嚴僧の語りしかば、重ねて申おくりし、其事明らかに知らずば、たやすく答へすまじき事也、

西南院

〔東大寺要錄〕四一西南院

右件院新堂者、如意寺本願、女親王藤原貞子、鎭護國家、於東大寺西南院以天平神護年中爲一院所草創也、卽奉安丈六金色釋迦如來像、藥師如來像、千手觀音像等也、佛聖燈油料、奉施入京內水田守梨原庄田、合九町九段百八十歩、

尊勝院

〔東大寺要錄〕四一尊勝院

天曆元年丁未始立尊勝院、五間四面堂二宇在三面僧房、但切堂者、村上天皇御願、同八年奏聞、成御願了、此堂者先師大僧都之願也、

〔東大寺續要錄〕九尊勝院

太政官符大和國司

應以新造尊勝院爲東大寺一院置知行僧十口令修御願事

建立五間四面檜皮葺堂一宇在禮堂十三間僧房二宇、

奉造金色毗盧遮那像一體、金色釋迦如來像一體、金色佛頂尊勝如來一體、金色藥師如來像二體、金色十一面觀世音菩薩像一體、金色延命菩薩像一體、梵天帝釋四王像各一體、

右得彼寺別當律師法橋上人位光知、去天德四年十一月廿八日奏狀偁、件堂舍佛像、爲奉護公家、殊致忠誠所建立也、謹撿案內、東大寺者、感神聖武皇帝、發菩薩之大願、爲鎭護國家利益法界被建立也、光智幸蒙天恩拜別當職之後、殊竭身力勤仕寺務、而間更廻私計、寺內擇地建立舍堂、剋造尊像、結爲一處、號尊勝院、是專遠期永代、爲奉祈聖朝之寶祚、及攘除天下之災癘也、因玆以十口僧、於件堂舍可勤仕御願之由、經上奏、早卽撰定知行僧、始自十月廿八日勤修其事、晝則轉讀仁王般若、夜則轉念尊勝大日藥師觀音延命不動眞言、精勤無私、冥助何空畢、望請特蒙天裁、被賜官符、以件尊勝院爲寺家一院、置十口僧、爲期永代、殊令勤仕聖朝安穩國家豐樂之御願、但其院司撰智行之者、師資相傳令

勅行件事、抑以花嚴宗、爲院住僧者、花嚴教者、抽大日如來之肝心、聚普賢薩埵之行願也、圓融之理甚深難測、利生之誓廣大無際、仍爲立第一之宗、興廣大之敎也者、左大臣宣、奉勅、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位上行左中辨兼内藏頭美作權守藤原朝臣　　正六位上行左少史笠朝臣

應和元年三月四日

〔扶桑略記 二十六 村上〕應和元年二月廿五日己丑、東大寺別當律師光智令奏、以新造尊勝院爲寺、宛一院置智行僧十口、令勤修公家御祈願者、仰依請、

四聖坊

〔寺鑑 上〕無本寺寺院　　南都東大寺山内 花嚴宗本寺 四聖坊

御朱印高貳千石之内　高百五拾石　配當

龍松院

〔寺鑑 上〕無本寺寺院　　南都東大寺山内 三論宗本寺 龍松院

御朱印高貳千石之内　高七拾石　配當　但龍松院配當兼行者無之、金珠院配當兼領、

正倉院

〔東大寺要錄 四〕一、正藏院

鎰七具、倉坊二具、勅封鎰在實二具、封一具、北偏一具、東三倉一具、西行南一倉、　北倉代納受侍灌頂等、　東行南一倉納袈裟香爐等、　東行第三倉納錫杖八十枚、柱源八十四柔、龍頭八十一、自餘皆略之、

〔好古小錄 雜下〕校倉ハ烈日ニアタレドモ、土蒸ノ氣ナク、又雨ニ逢テ濕氣ヲ含マズ、故ニ其藏ル所ノモノ數百年ヲ經ルトイヘドモ、魚食ノ憂ナシ、古人ノ遠慮往々此ノ如シ、

〔左經記〕寛仁三年九月廿八日辛巳、攝政殿召余被仰云、東大寺勅封御藏匙只今可遣者、卽差使部一人遣取已畢、　同卅日癸未、自夜半風雨殊甚、先御藏町開寶藏等御覽、本寺別當僧都、幷所司、余幷大監物惟忠朝臣等、登藏上、令開加實撿、令出寶物等御覽畢、監物惟忠、付封於御藏等次歸御、

長元四年八月四日己卯、早旦從右中辨許、有消息、其狀云、依宣旨監物相共、下向東大寺、開勅封御藏

令修理了、而南御藏板敷下漏通濕潤、恐納物等濕損歟、仍開撿、同欲加修理之處、所隨身之御鎰不相合、不能開撿、爲之如何、若可擇給他鎰歟、申事由可被仰下者、參殿申此旨、仰云、濕損之疑尤可然、早可擇遣他鎰之内、可仰前日奉宣旨上卿之由、可傳頭中將者、○中略大監物行經朝臣舉鎰近衞司等、入自日華門給御鎰、傳聞、件鎰等雖有其數、不付短尺退出、仍難知其藏鎰、因之三舌四舌鎰、大少各二枚取出、令持官使部副監物下部遣之云々、

〔小右記〕寬仁三年九月廿九日壬午、彼是卿相云、今晚東大寺勅封御倉匙、大監物惟忠申給馳參云々、

〔春記〕長曆四年○長久元年九月廿四日丙子、日記一通送別當許了、件日記、勘問盜取東大寺勅御倉銀等之犯人文也、僧長久爲首同類等有其員、件長久去十八日、所捕得也、十九日勘問、昨日藏人義綱奏聞也、仰云、同類幷贓物、慥可相尋之由可仰者、(昨日被申其由了云々)仍所遣仰也、　廿七日己卯、右衞門尉季任朝臣、令藏人義綱令奏云、東大寺取御倉物犯人同類、菅野淸延捕得、卽出贓銀卅兩者、

〔中右記〕大治四年十一月廿五日、厳幸得業送書云、東大寺累代寶物、五師子如意、當講惠曉依例請了、而一日彼房追捕之間失了云々、鎭護國家公物山階寺、幷東南院人々、大歎合也、付追捕官人邊、可被尋歟、(件如意ハ寬平法皇令作給、後給聖寶僧正也、彼僧正弟子勤三會時令持、後達々不絶也、)或人云、追捕之間、入件如意之筥、棄御寺西大門邊云々許也、撿非違使光信郞等、取失之歟、　廿六日、頭中將於廣隆寺對面之次、彼五師子如□□□□相尋之處、一日追捕撿非違□□□□許也、件如意慥有之由所申也、仍暫守護、可待尋之旨仰含了間、此尤神妙歟、累代寶物、不紛失條、三寶冥助歟、　五年五月一日壬寅、又於東大寺、十月千僧御讀經、(觀音經)行事右中辨師俊朝臣、度者使左少將敎長朝臣、午時事了、開勅封御倉、本寺別當定海僧都、相共撿知、依有濕損疑歟、

〔台記〕永治二年○康治元年五月四日丙申、法皇幸南京、宿御東大寺西室、　六日戊戌、今朝入道殿參御東大寺、與法皇御覽勅封藏寶物云々、則還御、

〔本朝世紀〕永治二年（○康治元年）五月六日戊戌、早旦開勅封倉、御覽寶物、昨日俄有儀、召遣辨一人、藏人左中辨源師能、大監物藤時員等、隨身鎰參向、（件鎰、有鈴印辛櫃也、）鏁相澀、數剋不開得、有議切局畢、寶物之中、聖武天皇玉冠、及鞍、御被枕碁局笥竹簫八竿、（其形、如笙、）王右軍㒵毛屛風、侍臣等運出之、件屛風有良田讃、召判官代高階通憲令讀之、又有一銅壺、其體頭長尻平也、召通憲被尋仰、通憲奏云、是投壺器也、其形見三禮圖、畢、又往代勅封倉目錄有此、銅壺中若有小豆歟、召人倒壺、小豆兩三粒出來、人莫不歎伏、如此古器、人不知之故也、午剋出御於木津河、御御船、入夜還御白河北殿、　八月十九日癸卯、是日左大辨顯業、爲開勅封倉下向南都、

〔兵範記〕仁安二年十月九日癸卯、今日政始、（○中略）次安永明門腋、打板辛櫃鎰典鎰預之、
一合納御印一面（在印監筥、下机等新造、）　一合納、東大寺勅封御倉鎰四（韓鎰一、鏁鎰三、）鎰七十一（無銘）鏁一、

〔正倉院三倉御開封勘例〕後鳥羽院天皇建久四年八月二十五日、御開封、賴朝公御修復、

〔三倉御開封日記〕建久四年、此年有御倉修復也、修復之間移置寶物於綱封倉、（三倉之外、別有綱封倉、以別當印封之、三綱出入、故名、中古此倉朽絕、故以三御倉之南倉代之、三倉之中北南共有勅封、此後中北爲勅封、南倉爲綱封、）

〔東大寺續要錄五〕開撿勅封倉事
建久四年八月廿五日己未、今日被開東大寺勅封藏、令移納寶物於綱封藏事、　勅封藏、爲被加修理也、前日勅使等參向、各宿寺中、（○中略）

勅封藏寶物事
建久五年三月廿日、被返納了、藏修理簿也、勅使右少辨藤原朝臣資實、大少史惟宗重光、大史生紀良重、同賴兼、大監物小槻宿禰有賴、鎰藤井依時、造寺長官左大辨宰相定長、判官中原朝臣基□別當前權僧正勝賢、寺家所司二人、綱所威從二人、（勅封藏納物爲虛也、）今度、錫杖十支、重源上人依申請被取出之、寺家佛事之時爲被用者、左少辨云、彼子細註置藏簿、（○中略）

鎰事

北勅封倉、中封倉、此二鎰、公家在之由、日來存知處、三鎰皆自監物取出之故、大監物下向、取鎰開之也、公家鎰在所不知食歟之間、有御尋、寺家鎰入唐櫃、白木新也寺家儲荒薦處之、此鎰事、勅封倉三鎰在之、自公家被下之、銘兩中北云々、後職一義存之、此倉乍三勅封倉也、綱封倉者別倉也、顚倒以後移置此倉之間、以倉南中綱封倉云々、○中略

同年○建久四年十月廿七日、盜人燒開東大寺勅封倉、○中間盜取寶物、○中略十一月廿九日、彼盜人搦之、吉野前執行下人申云、聊寄事候、葛上郡顯識申僧在之、彼仁定爲彼盜人歟之由、仍興福寺大衆令下向、欲搦取之處、彼僧出合相鬪、而彼寺々僧延實讃岐者舍弟弘景九郎卽向遇切合、遂弘景打臥顯識、卽兄弟轉身命搦取了、彼法師被疵、并母女等同令面縛、種々令糺問之處、皆以露顯、同類等差申之、銀八面細ニ打破了、於京都欲沽却之處、減直之間、大佛殿前五百餘所社中裏堆置之云々、仍取出了、○中略彼盜人等顯識、同舍弟法師、并春密等、於佐保山斬頸、懸首奈良坂畢、○中略

嘉禎三年六月二日、口被撿知正藏院寶物之由、被下食馬宣旨、○中略依可爲事繁多、櫃數許計之、○中略下層勅封倉分八拾四合、上層北分三拾四合此內空納一合北倉南端綱封倉分也七拾三合、○中略

仁治三年正月八日、先帝○四條崩御、同年三月十八日當今○後嵯峨御卽位、而爲被御卽位、開勅封被召上玉御冠并諸臣禮服冠畢、三月十二日、勅使下向、同十三日、被開勅封倉訖、○中略抑勅封倉鎰令紛失之間、無可開之趣、方爲朝家重事、勅使下向之上者、不可及子細之間、召鍛冶打破鏁樞畢、仍奉開之、希代勝事歟、其後臨入倉中、任記錄被見御冠櫃、取出卽玉御冠四頭、諸臣禮服冠廿六頭云々、○中略

凡玉御冠四頭之中、於二頭者女帝御冠云々、 但其銘云、先帝云々、是孝謙天皇之御冠歟、今二頭者聖武天皇御冠也、其銘書付太上天皇云々、今度卽位、以太上天皇御冠被用御卽位畢、諸臣禮服冠同

被著用之、抑於四頭玉御冠、路次之間、散々打損畢、是公家御無沙汰歟、勅使越度歟、一向被令持雜夫、之間、不知子細振損之事不便云々、〇中略

建長六年六月十七日、天陰雨、戌刻、雷神落懸勅封藏、蹴破東西北端扉、幷摑裂下柱等、投捨知足院門邊、即龍神入藏內、雷火付寶藏、然間爲消彼火、切於其扉、遂以打消畢、一寺騷動、萬人群集、偏依八幡之冥助、吟得三倉之安穩、不廻時日、年預五師契寬申事由於別當、新熊野即被經奏聞之間、先仰大勸進圓審被修理、中北兩倉扉四枚、幷北脇柱一本敷居等造替之、番匠卅人、八ヶ日之內作之、下柱六本、龍神列割之間同令造替、〇中略

正嘉二年正月廿一日、岡屋禪定殿下〇藤原兼經於戒壇院登壇受戒、其翌日被開勅封倉、

勅使右中辨高輔

〔春日社參記〕おなじき六の年、〇寬正長月廿日あまり一日と定められ、〇中略廿四日は、大佛を初て、こなたかなたの靈場ども巡禮し給ひて、戒壇院にては、御受戒の作法など有て、すぐに公惠僧正の坊にいらせ給ふ、人々花ををりて、めづらかなる物見にこそ侍りけれ、是にて、東大寺の寶藏のふるき寶物など多く御覽有けり、此寶藏には、勅封をつけらるゝ事にて、頭左中辨のぶたね、東帶にてぞ勅封をばひらき侍りし、

〔三倉御開封日記〕寬正六年九月、〇中略但此年九月、室町殿〇足利義政春日社參詣、於當寺寶物御覽、御香被召上、〇中略

截香法、一寸四分宛二箇、其一獻禁裏、其一獻將軍、又截五分四方一箇、獻別當云々、兩種御香同然、

〔信長公記七〕天正二年甲戌三月十二日、信長御上洛、〇中略相國寺初而御寄宿、南都東大寺蘭奢待御所望之旨、內裏へ御奏聞の處、三月廿六日、御勅使日野輝資殿、飛鳥井大納言殿、爲勅諚忝も被成御院宣、則南都大衆致頂拜御請申、翌日三月廿七日、信長奈良之多門に至て御出、御奉行、塙九郎左衞

門、菅屋九右衛門、佐久間右衛門、柴田修理、丹羽五郎左衛門、蜂屋兵庫頭、荒木攝津守、夕庵、友閑、重御奉行、津田坊、以上、　三月廿八日、辰剋、御藏開候へ訖、彼名香、長六尺の長持ニ納り在之、則多門へ被持參、御成之間於舞臺懸御目、任本法、一寸八分被切捕、御供の御馬廻末代の物語ニ、拜見可仕の旨御諚にて、奉拜の事、且御威光、且御憐愍、生前之思出、忝次第不申足、一年東山殿被召置候已來、將軍家御望之旁、數多雖在之、唯ならぬ事の候間不相叶、佛天之有加護て三國無隱名物、被食置於本朝、御名譽御面目之次第何事加之、

〔三倉御開封日記〕慶長七年六月、○中略但此年、東照大權現御修復之儀被仰出、故爲寶物點撿也、

〔正倉院御開封之記〕慶長八年二月家康公被加御修理之時、以油倉之二倉、准綱封倉被移之、○中略家康公御修理之儀、被仰出候テ、則大和國之總分仕置被仰付候、大久保石見守請取、其內ノ甲田法順拜小堀新助ト申候ハ、大和案內者ニ付テ、石見守ト新助兩人ニ被仰付候、

〔正倉院辛櫃書付〕御修理、從征夷大將軍右府家康公被仰付、造立畢、長持三十櫃被御寄附者也、

〔正倉院御開封之記〕慶長十五年庚戌七月二十一日ニ大風吹、大佛假屋倒伏候、當時三僧、自身罷出、材木等取置候、其奉行ヲ、福藏院、北林院、中證院兩三人仕リ、彼三人スヽム由ニテ、寶藏之下へ切ニ參候テ、盜人ニ可入由談合シテ、兩三人申合、北ノ藏ノ下ヲ切破、盜人ニ入候ヲ、慶長十七壬子三月二十一日ニ、上生院質坊法師、無量壽院長圓坊得業、濟涼院卿公擬講內ニ不思議成寶物、方々ヨリ出候テ、沽却之由風聞承及、右之日、寶藏ヲ相尋見出、得業中評定ヲ成シ、當國守護代ニ付、大久保石見守之內、鈴木左馬助奈良之代官ニ付テ、被經案內、郡之奉行板倉伊賀守へ及談合、其時內大臣殿者、駿河國ニ御在國被成候、其時分者、副將軍之位ヲ下シ、大御所ト號ス、聽テ注進候テ、被得御口方々才覺候テ、先彼御藏ニ假屋ヲ作、勅使ヲ可申下之由、用意候テ、同年霜月十二日ニ、勅使ヲ可申下之由用意候テ、同年霜月十二日ニ、勅使柳原殿到、四聖坊ニ御下向、奉行者永井彌右衛門殿、○中略然所

ニ、彼盗人御穿鑿之儀者、假屋被レ成、御立候付テ、大久保石見殿下奉行杉田九郎兵衛、見分ニ、慶長十七壬子閏十月二十一日ニ被二參一候、當時老若中、三藏口呼集、假屋體如二前々ノ一、無二相違一哉ト被レ尋、其次手ニ、福藏院、北林院、中證院ヲ、奈良ノ中坊ヘ同道シテ、其内ニ搦候テ、同二十四日ニ、杉田九郎兵衛召シ被二龍上一、京都所司代板倉伊賀守前ニテ、彼盗人共沽却候、賣買之相手訴人ニ罷出、及二對決一、白狀仕、京都ノ籠ニ、閏十月二十四日ヨリ被二召籠一候、〇中略依レ之、彼福藏院、北林院學頭ト申候テ、此學頭ハ、右ノ寶物相夫ヲ仕タル依レ科、同罪ニ籠者候ヲ、甲寅二月十七日ニ、籠ヨリ曳出シ、奈良坂ノ北高座ニテ、ハタ物ニ上ゲ候テ、成敗シ畢、

〔續史愚抄後水尾〕慶長十七年十一月十六日乙亥、爲二東大寺三藏寶物實撿一、勅使藏人左少辨業光參向、持二向勅封一、或作二十二月一東大寺寶物記 家抄 家記追

〔國師日記〕一十二月二日、東大寺之内、清涼院、無量壽院、霜月二十七日之狀來、今度三倉盗人、三院跡職之儀申來、

一四拾三石四斗三升、北林院分、

一二十九石三斗壹升、中證院分、

一八石四斗七升、福藏院分、此由申來、伊賀殿ヘ三狀之案來、

一當寺三倉御改之儀、板倉伊賀守殿ヘ、爲二使僧一兩人罷上候處、三院跡職被レ成二御尋一之間、中證院、北林院者、少人取立、福藏院者、致二一寺集會所ニ一度由申候處、可レ然歟、然者駿府ヘ可レ有二御註進一間、以二書付一可レ申旨、被レ仰之間、伊州ヘ以二書狀一申入候、則寫令レ進之候、然者北林院者、清涼院之隣坊、中證院者、無量壽院之隣坊、殊更由緒之儀候條、被二仰付一候樣、於二御前一御取成奉レ願候、尙追可レ得二貴意一候間、不レ能二子細一候、恐惶謹言、

霜月十〇慶長七年二十七日　清涼院

無量壽院

金地院侍者御中

〔續史愚抄 靈元〕寛文六年三月四日乙酉、有東大寺三藏開封、勅使藏人權右少辨資茂參向、此日柳原前大納言資行卿爲法皇御使下向關東、(四月十二日上洛)(家記追、弘卿記、東大寺寶物記、)

〔正倉院御開封之記〕今年(○元祿六年五月)三倉御開封之故者、寛文六丙午年四月三日、御開封以來、至今年迄、凡年暦二十八年故、御倉及破損之旨、從寺務宮、以南曹辨被經奏聞、則爲被加御修理勅使申下、御開封之儀式被行、

〔正倉院辛櫃書付〕三倉御修理、從征夷大將軍右府源綱吉公被仰付畢、依之兩種御香內外櫃、其外小寶物小箱等新調、被爲寄附者也、

〔勅封御開封記〕天保四年十月、今年三倉御開封之故者、元祿六癸酉年五月十六日御開封以來、至今年迄凡四十一年故、御倉及破損之旨、從寺務宮、以南曹辨被經奏聞、則爲被加御修理勅使申下、御開封之儀式被行、

〔拾芥抄 下本 諸宗〕東大寺、兼學八宗、但三論、華嚴、律等爲宗、

〔日本略記〕一四箇之本寺と申は、東大寺、興福寺、延暦寺、園城寺也、此四箇之大寺は、天下の御祈禱所にて、內裏の御祈禱所也、

一諸宗之本寺之事、(○中略)華嚴宗者東大寺也、(○下略)

〔東大寺具書〕一東大寺諸宗廣學故、最頂眞言宗、殊可恢弘事、

右當寺、八宗兼學之名稱者、一天都鄙之口實也、而今醍醐寺僧等、以有餘宗、恣稱唯顯之寺、謂無密教、擬奪兼學之德之條、太以自由也、於東寺誰住者、彼寺所學、別限一宗、是眞言別院故、尙如當寺眞言院、共結侶不向食堂、令修行、何以之可爲眞言、非當寺所學之支證哉、又東寺遁難住全非醍醐爲本寺之

所見、今此一篇所詮何事哉、太不足言也、凡就眞言致有兩種義、竪論差別者、却早口牟限宗之秘最極東寺遮異類是也、橫存平等者、口數廣多、全無所隔、當寺兼諸宗是也、而猶於密宗本所眞言院者、別無共住之儀、是則高勝之敎、昇出諸宗之義也、然者於當寺者、橫廣竪顯密諸宗之本寺也、而今醍醐寺僧等、捧弘仁十四年官符、并高祖遺記等、爲膠柱、申子細之條、唯執一邊失其兩端、不知敎之深意、偏迷宗之實義、以此智分自稱眞言阿闍梨之條、增上慢之所存、秘密敎之澆醨、尤可悲云々、所詮、高祖已奉勅命入住當寺、積薰修令致護持之上者、浴此流之輩、忽諸其聖跡之條、逆惡之罪、爭可遁之哉、不便之次第也、

〔東大寺具書〕一東大寺雖有八宗、興福寺法相、延暦寺天台宗、本來各別、非當寺攝屬事、

彼狀云、就東大寺稱八宗本所事、指法相天台之處、相承名別、無混濫之由申之、只勘注、爲興福寺法相宗之所見竪義綱牒、醍醐寺所申顯其證了、東大寺法相宗本所之支證何在、雖云七宗通學、豈無本末哉、而八宗之諸寺、皆爲吾寺末寺之由申之上者、法相已爲八宗之隨一、同宗之上者、興福寺可爲東大寺末寺歟、而改先言之上者、限眞言一宗、何及本末之論哉、是一　次天台宗請來漸絕無人之由申之上者、八宗曾無其實之由承伏、比興也、延暦興福雖爲八宗內、非末寺之由承伏至東寺以爲八宗內、猶不改先言之條、奸謀忽露顯了、是二　次大師歸朝之初、一切不住東大寺、於彼寺不奉行當宗、高祖一生之間、於東大寺不申下秘宗安置之官符等、是三　又東大寺若依學大師門流者、吾寺之末寺也、凡常人之所知者、以師之遺跡爲本寺、東大寺所申者、以師遺跡爲末歟、啻匪佛法之越法、剩墮儒道之不孝、東大獨雖自稱天下誰可聽許、

〔東大寺具書〕右於當寺八宗兼學之儀者、嘉名傳于古今、聲譽聒于遐邇、醍醐寺僧非聾者、何不聽之哉、盜鳴鐘於掩耳者、蓋此謂歟、雖口實之疊字、加耳外之謬難之條、太以無言甲斐、周室孔安國傳五常典之引序、倭國海和尙述三敎旨之法言也、未見其文歟、宜披彼書乎、凡此段狂言、甚非神妙之儀、奏聞之

狀體以外猥轄也、爭可遁罪科哉、

聖武孝謙之御宇、眞言不傳者、一隅之管見也、彼役優婆塞之受兩部灌頂於箕面瀧下也、則示曼荼羅於南山金峯、輪波三藏之留一尊軌則於額安寺中也、非弘求聞持之相應成就哉、守株之謬難可謂員外哉、矧乎先皇叡信之眞言院、正被建立此砌、拜灌頂道場之儼然、見今弘仁十三年官符之炳焉、猶責申支證之條、都不得其意、凡醍醐作閉當寺八宗兼學唱之溢海內、詐稱不聞之由、雖視眞言一字堂舍莊之峙寺中、猶申不視之旨、自失耳目、强好雙瞥之條、其意樂乖常儀、是頗烈祖之冥罰、預呈當受之惡報歟、尤不便之次第也、何況如嘉承元年八月五日宣旨者、當寺者顯密敎法相並大小諸乘幷兼之基也云々、密宗傳持勅宣分明也、如建久七年被置顯密二宗供僧之宣旨者、舍那殿內以密宗十二口淨侶、每日令勤修兩部大法云々、如同九年院廳御下文者、本願聖武天皇、當寺草創之後、留八宗敎法、留諸宗學侶云々、詳申八宗兼學之條、大背歷代勅裁之旨、今按胸臆之謀陳、其科尤難遁、且當寺八宗學侶交名少々注進之、

〔壒嚢抄十三〕四箇大寺何御願幷年記如何〇中略先東大寺ハ四十五代聖武天皇御願、良辨僧正草創也、〇中略供養日淨名居士、六十華嚴ヲ持來會、此地彼宗相應由ヲ示シ給ト云々、サレバニヤ、總門ニハ大華嚴院ト題シ、大佛殿ニハ恒說華嚴院ト額ヲ掛ル也ト云リ、但今ハ大佛殿額モナシ、是東南院一代門主寺務時被下ケルト也、其故當寺、是八宗兼學寺、殊三論華嚴ヲ以テ、專爲兩眼、何ゾ華嚴ニ限哉ト云々、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事
東大寺ト申ハ、一閻浮提無二無三ノ梵閣、鳳甍高ク聳テ半天ノ空ヨリ抽テ、八宗ノ敎法廣敷廣學ノ僧庵、獄臺遙ニ構テ、一片霞ヲ隔タリ、〇中略是則我朝ノ總國分寺トシテ金光明四天王護國之寺ト號ス、誠ニユヱアル哉、

寺領

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡大和國國分二寺者、便以東大寺爲僧寺、以法華寺爲尼寺、其僧尼者、各依本數分配二寺、若有闕者、各取當寺僧操履可稱者、申省補之、

〔東大寺要錄 八〕勅旨 可有封庄章之中

金光明寺宛食一千戸

伊勢國員辨郡五十戸　遠江國磐田郡五十戸　駿河國百戸 金頭郡五十戸 富士郡五十戸　相模國鎌倉郡五十戸　下總國印播郡五十戸　常陸國筑波郡五十戸　近江國百五十戸 坂田郡五十戸 愛智郡五十戸 高島郡五十戸　信濃國小縣郡五十戸　上野國新田郡五十戸　武藏國兒玉郡五十戸　下野國芳賀郡五十戸　越前國丹生郡五十戸　丹波國天田郡五十戸　但馬國百戸 氣多郡五十戸 朝來郡五十戸　因幡國八上郡五十戸　播磨國赤穗郡五十戸

奉今月廿一日勅偁、件封宛金光明寺、其收停期更待後勅者、

天平十九年九月廿六日

〔東大寺金銅碑文〕施

封五千戸　水田一萬

以前捧上件物遠限日月、窮未來際、敬納彼三寶分、依此發願、太上天皇沙彌勝滿、諸佛擁護、法藥薰質、萬病消除、壽命延長、一切所願、皆使滿足、令法久住、拔濟群生、天下大地、人民快樂、法界有情、共成佛道、以代々國王、爲我寺檀越、若我寺興復、天下興復、若我寺衰弊、天下衰弊復其後代、有不道之主、邪賊之臣、若犯觸、若破障、而不行者、是人必得被辱、十方三世諸佛菩薩、一切賢聖罪終當墮大地獄、無數劫中永無出離、十方一切諸天梵天護塔大善神王、及普天率土、有勢威力、天神地祇、七廟尊靈、幷佐命立功、大臣將軍靈、共起大禍、永滅子孫、若不犯觸敬勤者、世々累福終隆子孫、共出塵域、早登覺岸、

天平勝寶元年

平城宮御宇太上天皇沙彌勝滿

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、東大五寺○中略墾田地一百町、七月乙巳、定諸寺墾田地、限、○中略大倭國國分金光明寺四千町、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年二月壬午、益大倭金光明寺封三千五百戶、通前五千戶、

〔東大寺要錄六〕造寺司　牒三綱所

合奉宛封一千戶

下野國貳佰伍拾戶芳賀郡石田鄉五十戶、足利郡土師鄉五十戶、梁田郡深川鄉五十戶、都賀郡高栗鄉五十戶、鹽屋郡片岡鄉五十戶、

若狹國伍拾戶遠敷郡玉置鄉

越後國二百戶頸城郡賭君鄉五十戶、賀茂郡值(值一本作殖)栗鄉五十戶、磐船郡山家鄉五十戶、緖太郡播多鄉五十戶、

丹波國五十戶竹野郡網野鄉

阿波國一百戶板野郡高野鄉五十戶、美馬郡御津鄉五十戶、

讃岐國一百五十戶山田郡宮處鄉五十戶、香川郡中間鄉五十戶、鵜足郡川津鄉五十戶、

伊豫國一百戶風早郡粟井鄉五十戶、溫泉郡橘樹鄉五十戶、

土佐國一百戶土佐郡鴨部鄉五十戶、吾川郡大野鄉五十戶、

以前、寺家雜用料永配封、當年所輸之物、爲始奉宛如件、今以狀牒、牒到准狀、故牒、

天平勝寶四年十月廿五日　主典從七位上阿刀連滿主

次官正五位上兼行下總員外介佐伯宿禰今毛人　判官正六位上大藏伊美兵萬里○下略

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十一月壬寅、勅以備前國墾田一百町、永施東大寺唐禪院十方衆僧供養料、伏願先帝陛下薰此芳因、恒蔭禪林之定影、翼茲妙福、速乘智海之慧舟、終生蓮華寶刹、自契寂覺之眞如、皇帝皇太后、如日月照臨、並治萬國、若天地之覆載長育兆民、遂使爲出世之良因、成菩提之妙果、

〔東大寺要錄 六〕勅在御印二十四面

東大寺封伍千戶

右平城宮御宇後太上天皇皇帝皇太后、以天平勝寶二年二月廿二日、專自參向於東大寺、永用件封入寺家訖、而造寺畢後、種々用事未宜分明、因玆今追議定如左、

營造修理塔寺精舍分一千戶　供養三寶幷常住僧分二千戶　官家修行諸佛事分二千戶

天平寶字四年七月廿三日　大師從一位藤原惠美朝臣

〔續日本紀 二十八稱德〕神護景雲元年三月己巳、授外從五位下利波臣志留志從五位上、以墾田一百町獻於東大寺也、

〔類聚三代格 八〕太政官符

應官家功德分封物依舊收東大寺事

右撿案內、太政官去延曆十四年六月十一日下民部省符偁、太政官去寶龜十一年十二月十日下造東大寺司符偁、被內大臣宣偁、奉勅、東大寺封五千戶、就中官家修行諸佛事分二千戶、宜收於別庫以充每年安居國忌及雜齋會料度、仍三綱寺司與諸司、相對出納者、右大臣宣、奉勅、件物收置別倉出納、諸司往還有煩、宜自今以後、收納官庫、修行功德之日、隨用出充者、今右大臣宣、奉勅、詔書偁、朕有所思、宜其依舊還收寺家充用佛事、仍大和國司與僧綱及三綱、計會出納者、宜依詔書幷寶龜十一年十二月十日符、依舊收納當寺別庫、充用官家修功德分、國司諸綱相對出納其收物、畢卽申民部省、至於出用待官符行、仍年終造納物幷用殘等帳申送、

大同三年三月廿六日

〔日本後紀 二十二嵯峨〕弘仁三年十月癸丑、官家功德封物停收東大寺、收造東西二等諸司出納充用之色、一依前例、

〔古文書彙纂〕東大寺

請蒙官裁任寺家本公驗領掌因幡國高草郡高庭庄之狀合田地柒拾參町捌段柒拾伍步

副進寺家公驗案文一卷

領掌人今陸奧出羽按察使藤原朝臣家幷紀高子等

右謹撿案內、件庄地、去天平年中、本願感神聖武天皇所施入給也、卽注載寺家驗記帳、而去延曆廿年、當時僧綱三綱等、不經官裁、誤賣却於他人、因茲後任司等具注事由、可返領之狀言上於官、則太政官、去承和五年五月五日差使寺家俗別當正六位上石川眞主、可勘領之由下符彼國、其文云、凡寺家田園、僧綱三綱等輙非出入物色、若有賣却者、須申官然後沽却、而偏沽放寺財、事意相違、今須還爲寺地、者、爰國郡與使眞主等、同共勘領返納、言上亦了、而後後司等漏忘不領、經數十年之間、更爲他人所領也、爰前別當時牒送在地國郡、令勘、其勘文云、領掌人右衞門督藤原朝臣家幷紀高子等云々、未經言上、爰智鎧以去延喜十二年被任別當、就事之後、任本公驗、可被返納之狀、度度牒送彼家、而返牒云、件田以去寛平七年、從晏子內親王家買納、卽立國郡公驗、領掌既經多年、無有他妨、今事情頗難定、須彼此公驗依實辨糺、未然之間不能返納者、因茲令持寺家公驗、重以牒送、而又返牒云、家須隨牒狀返納、然而尋案內、彼內親王家副代々本公驗賣寄於家之由、旣以分明、仍不能返納者、方今案事情、彼家所陳頗乖理致、何者彼家須相合彼此公驗、論定是非、專任正理、而偏稱有彼內親王家公驗、曾不以被承引、睹知內親王家之賣與彼家之公驗、是伺寺家不領之隟、奸輩所賣、彼親王家之券、望請官裁、任本願皇帝施入公驗、返納寺家、將爲佛僧供之資、仍副寺家公驗案文、謹請官裁、謹言、

延喜十三年十月三日

別當傳燈大法師位智鎧

上座威儀師傳燈大法師位口世

寺主傳燈法師位會□

都維那傳法師位　觀實

〔本朝世紀〕久安五年二月五日戊午、又近日、東大寺與藥師寺有企合戰事、尋其由緒、東大寺領清澄莊、與藥師寺領藥園莊接境之間、藥師寺僧徒等、燒拂清澄莊、是則清澄莊住人等寄住藥師寺領之間、不隨寺家所勘之故云々、仍東大寺僧等、儲軍兵、欲襲藥師寺、衆獻奏狀訴申、仍仰藥師寺、召犯人又放火之輩、被勘罪名、法家斷頗有疑殆、仍被問公卿、實行伊通卿、各有被申旨、藏人頭經宗朝臣、今日以件人人申狀、奏法皇也、

〔東大寺要錄二〕伊賀國阿波廣瀬山田有丸庄者、爲平家沒官之地、前右大將家〇源賴朝知行而依後白河院勅令、被賜當寺總大工宋人陳和卿之日、右大將家同以次令去進地頭給了、仍和卿發善願、永以寄付淨堂領矣、其旨具見于大和尚讓文、

〔隨心院文書乾〕院廳下　諸國在廳官人幷東大寺所司等

可早停止宋人和卿濫妨、任去建久九年院宣、宛顯密佛事用途料當寺領庄庄事

播磨國大部庄　伊賀國阿波廣瀬山田有丸　周防國宮野庄

右彼寺三綱等、去三月□日解狀偁、謹考案內、件寺領等者、勸進上人大和尚〇俊乘或申直顚倒之寺領、或申賜沒官之地、或以私寄進文書所建立之寺領也、子細各見于宜旨院宣等、而經奏聞之刻、可宛賜宋人和卿之由被言上者、造寺造佛之間、所召付之巧匠也、爭無衣食哉、豈不賜作料哉、仍以此等之所出、先者宛彼用途、終者爲經寺用也、而佛像堂宇未出來前、可被寄寺領之由言上之條、有憚之故、彼初條奏狀之面、雖載宋人事、素意者偏存可爲寺領之由、入若干之功、□□身心而造營之傍所申立之庄庄也、且和卿如此子細之故、最前寄進寺領畢、仍重經奏聞之處、各被下宜旨、成不輸之寺領畢、加之以庄庄地利、可宛色々佛寺之由、院廳御下文明鏡也、寺領之條勿論事歟、然而於宮野一所者、年來一向

預賜和卿、不及餘人之口入、爰大和尚至去年始被致沙汰者、且和卿代官庄務散々之間、所當有名無實之由風聞、且又乍號寺領、不經寺用、送星霜之條、不便之故、成加沙汰者、可全兩方所當之由、上人申含和卿之處、庄務已不可交他人、寺家年貢又可辨進一斛云々、申狀頗似狂言歟、仍抑而令致沙汰之間、偏爲私領之由、付甲乙之緣、欲取放寺家之刻歟、上人致種々讒奏、剩自餘庄庄同企押領、猛惡不當之至、無物于取喩、凡和卿作法、嗔恚憍慢增盛之上、嫉妬狂氣相加之間、當寺居住之後、所行不當不可稱計哉、或大佛冶鑄時、妬日本鑄師、其鑄形之中籠土入瓦、或佛殿造營之始、切破數丈之大柱、忽造私之唐船、或造寺間、不用上人之下知、企自由作事之故、裳層垂木拔下、見者恠之、瓦葺之遲怠職而由之、凡如此之所行、不違毛擧、每人知之、寺中無隱、然而依優一德、不顧萬過、已送年月畢、既此七八年以來、全以不交造寺之操、且寺家木工久馴其功、彼之工頗無用之上、動背上人命、粗失錯出來之故、然者於今者、一德已闕畢、不足抽賞歟、重又押妨寺領、違背上人、可謂住寺之緣、云妻心惡自露顯歟、凡召仕道道之工、所々之例雖多、云懃懇云施物、未聞如此、邊地之田畠、京都之敷地、奉加之財寶、善惡之布絹等、都以不知其數云々、恩賞餘身、作料過分也、全不及庄園之抑留者歟、就中召付造佛知行庄務之條、偏上人引級也、直無蒙上仰、不知恩之至、更不足言哉、何況去年冬、此上人令奏達庄子細之時、進退只可有上人意之由被仰下畢、其上猶構種々謀、付强々緣、廻領知之秘計云々、不顧違勅、不恐冥罰之條尤可有形迹歟、與依法造營之首者、雖似一分之助緣、妨正法資緣、今者已爲三寶之怨敵、早處重科、可被究行其罪也、當寺御歸依口當代者施入、縱無傾動、誠息末世之將來者、顚倒猶以難知歟、仍宮野等三箇之領、永停止和卿之濫妨、爲不輸之寺領、願寄佛事之用途、不可退轉之由、被成下廳御下文、欲備後代之龜鏡、望請鴻慈、且任建久九年院宣、重被成下院廳御下文者、寺漸復本願之當初、人彌奉祈聖朝御願矣者、件庄庄等、永停止宋人和卿濫妨、任建久九年院宣、不可退轉願寄佛事用途等之狀、所仰如件、在廳官人并所司等、宜承知、不可違失、故下、

元久三年四月十五日　　　　主典代中務大屬兼春宮大屬安倍朝臣 ○連署略

〔東大寺續要錄 一〕東大寺

注進　寺領庄々近年田數所當等事

大和國櫟庄　畠六町五段　所當地子

見作田三十四町二段二百四十歩、建仁三年撿田帳定、

除

三昧田二町　温室田二町三段　戒師田一町　法花會佛供田一町　炷田五段　二月堂田

一町二段　寺主供田二町　勾當供田一町　顯性房五師給田八段　林寛房得業給一町

尊明房得業田八段 不辨所當　公人給田一町　庄堂三昧田一町三段　井料二段、　預所佃一町

下司給一町　公文給五段　職司　五段　表田二段百四十歩

〔東大寺要錄 二〕大佛殿佛餉懸札云

記錄　東大寺大佛殿長日佛餉料田事

本願勅施入之田地　在大和國

合參拾伍町伍段大

一小東庄十三町一段大之內、庄沙汰人給分本者五段、今者壹町、井定使給分五段六町大者行康押領、佛餉料五町六段、八合定　一段別一

斗五升八合、但此內二町者段別一斗宛、字十坪 ○中略

右天平勅施入之佛餉田三十五町五段大之內、庄沙汰人幷定使給分四町一段、所殘三十一町四段

大、毎日一段、段別一斗五升八合、器物八合定　被宛置、以備三百十四日聖供、雖然尙欺四十六日闕如之處、

大和國河內村住人一王次良行康以下之輩、不憚本願之叡信、不顧佛陀之冥慮、恣依押妨、六町三段

之佛田、忽令闕如六十三日之聖供、所殘纔廿五町一段半、當時定田二百五十一日、已及百九日闕如、

什物

三寶物反用、偷依違施意、得無量罪、何況於為底下卑賤之凡人、犯用佛陀施入之料物哉、罪定沈深底、報事免無間乎、見聞之緇素誰不恐之乎、視聽之道俗尤可歎之乎矣、仍記錄之狀如件、

元慶二年陸月十二日　　堂司大法師定忠

〔東大寺要錄二〕東大寺

言上　寺領伊賀國玉瀧杣西堺內為信樂庄民等停止數十町押妨、其上欲召禁惡行者骨張輩子細狀、

副進

庄解一通

右謹撿案內、聖武天皇忝被奉鑄立大佛金銅尊像之日、且為相宛當寺造寺之料材、且為令備向後破壞之修理、天平勝寶元年以玉瀧杣、永被施入寺家以降、一郭不亂、猥耕無有、爰信樂庄民等、俄欲押領當杣西堺數十町之間、或入庄家取斂疋之馬、或禦杣工加禁制之詞、此條未曾有之濫吹、不可說之猥藉也、根源者、本願之御時也、尋○恐爭論之濫觴者、信樂之無道也、何背以往之例、可致新儀之妨哉、即驚此沙汰、庄家未安堵弄辞錯、於大佛寶前、忽闕恒例臨時不斷之寺役、當時如結構者、一寺之愁、萬人之嘆、何事如之哉、早如申請停止彼妨、被糺返所押取之馬等、急又召取惡行骨張之輩、欲被禁獄其身、若不然者、逃匿○逃恐誤　會違本願勅施入之文、抑又為四百餘歲無為寺領滅亡之基者歟、仍五師三綱連署言上如件、

建曆三年九月日　　都維那法師○下略

〔和州舊跡幽考二添上郡〕東大寺寺領二千二百拾一石四斗餘

〔東大寺獻物帳〕奉為太上天皇○聖武捨國家珍寶等入東大寺願文　　皇太后御製

妾聞、悠々三界、猛火常流、杳々五道、毒網是壯、所以自在大雄天人師佛、垂法鉤而利物、開智鏡而濟世、

遂使擾々群生入寂滅之域、蠢々品類趣常樂之庭、故有歸依則滅罪无量、供養則獲福无上、伏惟先帝陛下、德合乾坤、明並日月、崇三寶而遏惡、統四攝而揚休、聲籠天竺、菩提僧正渉流沙而遠到、化及振旦、鑒眞和上凌滄海而遙來、加以天惟薦福、神祇呈祥、地不惜珍、人民稱聖、恒謂千秋萬歲、合歡相保、誰期幽途有阻、閲水悲涼、靈壽無增、穀林搖落、隟駟難駐、七々我來、茶襟轉積、酷意彌深、披后土而無徵、訴皇天而不弔、將欲爰記勝業、式資聖靈、故今奉爲先帝陛下、捨國家珍寶、種々翫好、及御帶、牙笏、弓箭、刀劍、兼書法樂器等、入東大寺、供養盧舍那佛、及諸佛菩薩、一切賢聖、伏願持玆妙福、奉翼仙儀、永馭法輪、速到花藏之寶刹、恒受妙樂、終遇舍那之法筵、將普賢而宣遊、共文殊而展化、仁霑百億、德被三千、又願今帝陛下、壽同法界、福類虛空、劫石盡而不盡、海水竭而無竭、身心永泰、動息常安、復乃天成地平、時康俗阜、萬姓奉无爲之化、百工遵有道之風、十方三界、六道四生、同霑此福、咸登妙果、

獻盧舍那佛

御製裝合玖領○中略

厨子壹口○中略

納物

雜集一卷○中略　右平城宮御宇後太上天皇御書

孝經一卷○中略　右平城宮御宇中太上天皇御書

頭陁寺碑文幷杜家立成一卷○中略

樂毅論一卷○中略　右二卷皇太后御書○中略

書法廿卷○中略

金銀作小刀一口○中略

斑犀偃鼠皮御帶一條

御刀子六口〇中略
御袋一口〇中略
斑貝鞊鞢御帶一條
十合鞘御刀子一口〇中略
三合鞘御刀子一口〇中略
〔赤紫黒紫綰綬御帶一條
紅地錦御袋一口〇中略
三合鞘御刀子一口〇中略
小三合水角鞘御刀子一口〇中略
水角鞘御刀子一口〇中略
犀角鞘御刀子一口〇中略
牙笏一枚〇中略
通天牙笏一枚〇中略
大魚骨笏一枚〇中略
紅牙撥鏤尺二枚
綠牙撥鏤尺二枚
白牙尺二枚
紅牙撥鏤竿子百枚〇中略
犀角杯二口〇中略
雙六頭一百一十六具一隻未造了二具〇中略

雜玉雙子六百六十九○中略

貝玖拾二箇　犀角奩一合○中略

納物

純金念珠一具

白銀念珠一具

瑪瑙念珠一具

水精念珠一具

虎魄念珠一具

眞珠念珠一具

紫琉璃念珠一具

金銅作唐刀子一口○中略

唐刀子一口○中略

百索縷一卷並軸

玉尺八一管

尺八一管

樺纏尺八一管

刻彫尺八一管

赤漆欟木厨子一口○中略

納物

犀角一具○中略

白犀角一枚〇中略

犀角一枚〇中略

斑犀角一枚〇中略

白石鎭子十六箇〇中略

銀平脫合子四合〇中略

檜木倭琴二張〇中略

銀平文琴一張〇中略

染琴一張〇中略

螺鈿紫檀琵琶一面〇中略

紫檀琵琶一面〇中略

螺鈿紫檀五絃琵琶一面〇中略

螺鈿紫檀阮咸一面〇中略

桐木箏一張〇中略

楸木瑟一張〇中略

甘竹簫一口〇中略

吳竹笙一口〇中略

吳竹竽一口〇中略

雕石橫笛一口〇中略

雕石尺八一口〇中略

金鏤新羅琴一張〇中略

金鏤新羅琴一張〇中略

木畫紫檀棊局一具〇中略

木畫紫檀雙六局一具〇中略

御大刀壹佰口〇中略

御弓壹佰張

梓御弓八十四張〇中略

槻御弓六張〇中略

阿惠御弓一張〇中略

檀御弓八張〇中略

肥美御弓一張〇中略

別色御弓參張〇中略

御箭壹佰具〇中略

御甲壹佰領〇中略

短甲十具〇中略

挂甲九十領〇中略

御鏡貳拾面〇中略

御屏風壹佰疊畫屏風廿一疊、鳥毛屏風三疊、鳥畫屏風一疊、夾纈六十五疊、﨟纈十疊、〇中略

白練綾大枕一枚〇中略

御軾二枚〇中略

紫檀木畫挾軾一枚〇中略

御床二張（○中略）

右件、皆是先帝翫弄之珍、內司供擬之物、追感疇昔、觸目崩摧、謹以奉獻盧舍那佛、伏願用此善因奉資冥助、早遊十聖、普濟三途、然後鳴鑾花藏之宮、住蹕涅槃之岸、

天平勝寶八歲六月廿一日

〔正倉院曝凉目錄〕延曆十二年六月、東大寺使解申曝凉香藥等事、合一百四十五種、納厨子二口、韓櫃三十合、收納廳院西雙藏北端、

〔勅封藏開檢目錄〕北藏（○中略）

木地厨子一脚

納

下緒一具、笛三管、（牙二、竹一、）象牙笏三隻、同牙重二、同牙曲尺二、馬瑙唐帶一筋、海獨子口、雙六賽一筥、同石一筥、圍碁石六筒、貼筆一管、經一卷、（不名）書一卷、（同）玉冠二頭、（在）鳥毛屛風二帖、屛風六十五帖、

染付長櫃一合、納靑玉环一口、瑠璃水瓶一口、（黑葛納之）瑠璃、

唾壺一口、（○中略）二合納花氈皮一帖、一合納脇足四脚（表脇足三、無白二、）紫檀螺鈿一、一合納黃熟香一切、（長三尺許、口一尺許、）一合納丁子皮、（員多）一合納太刀十二腰、象牙笏一隻、（納筥）一合納藥壺十二、水精念數二連、（納朱小筥）金銅水瓶一口、（○中略）

中藏

白大鹿角一支、（人云七擊鹿角云々）琵琶一面、（在錦袋）鐵丸透香納筥一合、（○中略）

檜櫃一合、納木筆二管、大色紙二卷、墨二廷、研一基、會前加納墨五廷、水精玉四果、眉間分

天平勝寶五年七月一日（撿納櫃銘如此）（○中略）

建久四年八月廿五日

〔和州舊跡幽考 二添上郡〕勅封倉

勅符の倉正倉院は、智足院にあり、和漢兩朝の珍寶あまたの中に、名香二種あり、蘭奢待、もとの名は黃熟香、重目三貫三百五拾目、又大紅塵、重目四貫六百目ありとかや、

〔寂照堂谷響集 五〕蘭奢待

客曰、東大寺寶藏香木名蘭奢待、人知東大寺庾語、無知是胡語、嘗聞之、曰、蘭奢待者胡國語、指物之善者、稱爲蘭奢待、故差此香名蘭奢待、聖武帝御宇自異國至、以蘭奢待中自有東大寺之三字、帝感名實冥稱、置諸寶藏、以爲寺鎭之一也、蘭奢待爲胡國語者、相傳在晉書、某屬檢晉書不見、答、王導嘗謂胡僧曰、蘭奢僧悅、蘭奢胡語之褒譽也、見朱子語錄、

〔好古小錄 上書畫〕東大寺鴨毛屛風畫

今存スル者十六枚、中一枚ニ、天平勝寶三年十月ノ八字アリ、千有餘年ノ書、實ニ賞スベシ、

〔好古小錄 上書畫〕天平寶字四年七月二十三日勅書

東大寺封戶勅書也、古勅書ノ傳ル者、褾褫及軸等存スル者無シ、獨此勅書軸等存ス、古制詳ニ考フベシ、

奴婢

〔東大寺要錄 七〕一東大寺職掌寺奴事

以前被民部省去天平勝寶元年九月廿日符偁、被太政官今月十七日符偁、被大納言正三位藤原朝臣仲麿宣偁、奉勅、奴婢年卅已下十五已上、容貌端正、用正稅充價直、和買貢進者、省宜承知依前件數、仰下諸國、令買貢上、但不論奴婢、隨得而已者、國宜承知依狀施行者、謹依符旨、件奴婢買取進上如件、仍便付朝集使目從六位下賀茂宜秋麿申送謹解、

天平勝寶二年正月八日　　史生從八位上土師宿禰田次

用途

私云、勝寶二年、可買進形貌端正良人、被下綸言者、五畿七道諸國司等、各買進奴婢、以同年二月廿二日、太上天皇、皇太后、共雙鳳輿、親臨伽藍、以件奴婢二百口、施入東大寺、寺家請納、擇史幹之人、預供佛施僧之事、爲上司職掌、以良匠之器、爲造寺之工、文傳歌舞音樂之曲、備供佛大會之儀式、其子子孫々相繼爲寺奴婢、職掌于今勤仕寺役、供奉諸會、已朝拂霜雪備大佛供、廻毎日不闕之計、暮戲星辰侍寶藏邊、防盜賊火難之畏、寺家要人只在此耳、奴婢等籍帳廿二卷、在印藏、

〔東大寺奴婢籍帳〕太政官符治部宮內省

施奉大和國金光明寺奴婢貳佰人、奴百人 婢百人

官奴婢一百十七人 奴六十六人 婢五十一人

嶋宮奴婢八十三人 奴三十四人 婢四十九人

歷名如前

以前奉去年十二月二十七日勅偁、上件奴婢等施奉金光明寺、其年至六十六已上、及廢疾者、准官奴婢、依令施行、雖非高年、立性恪勤、駈使無違、衆僧矜情、欲從良者、依願令免、凡寺爾入訖奴婢者、以指毛指、犯佐奴乃止毛云、然此奴婢等依感爾可還賜波將還賜牟、何爾毛加久爾毛將用賜牟不在障事止宜、又外今買充奴婢、亦准此者、省宜承知、依勅施行、今以狀下、符到奉行、

天平勝寶二年二月廿六日

〔延喜式 二十一 玄蕃〕凡東大寺大佛安居布施稻、毎年納寺家、充修理料、

〔延喜式 二十三 民部〕凡東大寺大佛、一季供養料稻百十束、○中略以大和國官田稻、季別送入寺家、

〔延喜式 二十六 主稅〕凡東大寺年料油七斛四斗八升五合、大佛殿燈料七斗六升八合、千手堂、觀音堂、吉祥堂、戒壇堂各三斗八升四合、萬燈料四石、戒壇十師供養料一斗八升一合、並九月以前送、○中略大和國交易送寺家、其直用正稅、

〔東大寺要錄 八〕勅旨

施二百匹

右學問僧等衣服料自今以後、永爲恒例、毎年宛皇后宮職、

天平十九年三月廿八日

少錄正八位上田部足島

中務大輔正五位上石川朝臣麿

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁三年十月癸丑、官家功德封物停收東大寺、收造東西二寺諸司、出納充用之色、一依前例、

〔海人藻芥〕東大寺者、東南院、西室尊勝院被補別當、此外、仁和醍醐上綱被補任例繁多也、

〔東大寺別當次第〕少僧都良辨華嚴宗

天平勝寶四年五月一日始。補。年六十四、相模國人、漆部氏、金鷲菩薩是也、

〔初例抄上〕東大寺別。當。始。

朗辨　于時僧都、天平勝寶四五月一日補、天平十七年正月廿一日任律師、百濟氏、石山寺根本、

〔東大寺具書〕定海僧正補本寺。寺。務。官符案

太政官牒東大寺

應補任別當職事

權律師法橋上人位定海

右得定海今月奏狀、偁、謹撿案内、當寺別當有闕之時、門跡之僧綱隨申請、被補任先例也、爰定海、備綱維以多年、修御願以幾日、若況採之恩慈、誰謂非據之妄授、望請天恩因准先例、被補任件別當者、將知門跡之不定矣者、正三位行中納言源朝臣顯雅宣、奉勅依請者、寺宜承知依宣依之、牒到准狀、故牒、

大治四年五月二十日　左大史正二位口部宿禰——牒

右少辨正五位下藤原朝臣

〔東大寺要錄 七〕東大寺權別當官符事

太政官牒　東大寺

應補任權別當職事

傳燈大法師濟慶

右得濟慶去十月十九日奏狀偁、謹撿案內、聖武天皇草創寺家、以實忠被置權官、以後居件職者繼踵无絕、常住修學之僧經三會講師之者、多以弁任、濟慶通達大業、常住年久、採擇之間、尤得其理、望請蒙天恩、被拜任件權別當職、將仰奉公修學之貴者、從二位行權中納言兼宮內卿皇太后宮大夫源朝臣道方宣、奉勅依請者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

萬壽二年十二月廿九日　　造大安寺勅官大夫正六位上大宅

〔東福紀年錄〕正嘉元年丁巳、○中略帝勅聖一幹東大寺事、凡國法、諸大寺院置幹事職一者、俾庸輩幹三寺事、則互相是非、致爭起訟、或私意一萌、其弊百出、靡所不爲、是故朝廷選名德高僧、以充新職、除其濫冗、師辭不可、

〔職原抄 下〕造寺使東大、興福等兩寺外、無此號、

長官東大寺者、大辨必兼之、興福寺者、南曹辨兼之、　次官　判官東大寺者、一史兼之、　主典

〔職官志 四〕造寺之官、古多有之、○中略職官鈔云、東大、興福之外無此號、蓋朝廷及相家特重之、不廢其名也、不必以造寺故置、東大寺聖武帝建置、天平十四年所發願也、○中略按一史謂太政官左大史上首、卽小槻氏之人也、

〔續修東大寺正倉院文書 三十六〕造東大寺司移內匠寮

銅鐵工肆人

大初位上山下黑麻呂　大初位上三宅庭万呂　大初位下日佐首智久万呂　无位朝妻望万呂

以前人等以今日午時到來司家、卽加撿領已訖、仍付返抄、故移、

天平勝寶二年五月廿五日　　主典從七位上葛井連

次官從五位下兼行大倭介佐伯宿禰〈参向内裏〉

〔續修東大寺正倉院文書三十六〕造東大寺司移左京職

左大舍人大初位下土師宿禰志太流　中宮舍人少初位上葛井連荒海

右比來事繁、屢請過所、然此司作物太忙、不堪移書、仍今以件人、永爲請過所使、乞察狀、自今已後、使至處分、故移、

天平勝寶二年五月廿四日　　主典從七位上葛井連

判官正六位下上毛野君

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年十一月乙亥、造東大寺判官外從五位下河內畫師祖足等十七人、賜姓御杖連、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年十月壬子朔、正五位下國中連公麻呂爲造東大寺次官、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年正月壬子、從四位下佐伯宿禰今毛人爲造東大寺長官、　四月丁亥、正五位下市原王爲造東大寺長官、　十二月丁酉、禮部少輔從五位下中臣朝臣伊加麻呂造東大寺判官正六位上葛井連根道、伊加麻呂男眞助三人、坐飲酒言語涉時忌諱、〇下略

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年正月己未、正四位下吉備朝臣眞備爲造東大寺長官、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年二月甲申、幸東大寺、授造寺工正六位上猪名部百世外從五位下、

八月丙午、從四位下阿部朝臣毛人爲東大寺次官、宮內卿如故、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年二月癸巳、外從五位下上毛野公眞人爲造東大寺大判官、

〔續日本紀稱德三十〕神護景雲三年十一月壬午、造東大寺工手從七位下秦姓綱麻呂、賜姓秦忌寸、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十一月丁丑朔、正五位下佐伯宿禰眞守爲兵部大輔兼造東大寺次官、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年三月癸巳、從四位下石上朝臣息繼爲造東大寺長官、　八年十月辛卯、從四位下石川朝臣名足爲造東大寺長官、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年正月辛亥、從四位下佐伯宿禰眞守爲造東大寺長官、從五位下林忌寸稻麻呂爲次官、東宮學士如舊、

〔續日本紀四十桓武〕延曆八年三月戊午、廢造東大寺司、

〔公卿補任桓武〕延曆十五年丙子

參議從四位下紀梶長

延曆十四年六月戊辰、兼造東大寺長官、

〔日本後紀十七平城〕大同三年七月庚子、停東大寺別勅長上一人、金銀銅鐵長上一人、

〔文德實錄十〕天安二年四月庚戌、從五位下藤原朝臣家宗爲造東大寺大佛長官、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年七月廿三日丙子、以從五位上守右少辨兼行中宮亮藤原朝臣家宗、爲修理東大寺大佛長官、

〔三代實錄二十八清和〕貞觀十八年三月七日乙酉、制、東大寺造寺所知事僧、遷替之日、責其解由、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十八年三月廿八日辛丑、仰造東大寺講堂使等、

〔殿曆〕天永二年九月廿七日丁亥、犬死穢出來、以五位藏人雅兼奏院、其次奏云、新藤中納言宗忠卿遣高陽院上卿也、辨爲隆伊勢造宮辨同爲隆也、已此兩人觸穢、爲之如何、被仰云、造宮行事辨爲隆未仰下、只內々儀、然者過此程可仰下、宗忠五日許穢也、不可改者、隨仰仰下了、造東大寺辨實光云々、同仰下了、

〔公卿補任安德〕壽永二年癸卯

寺印

参議正四位下藤兼光

治承三年十月九日、轉權右中辨、即從四位下、廿一日兼造東大寺長官、○中略五年六月十五日、造興福寺長官、

〔公卿補任龜山〕文永八年辛未

参議正四位上藤資宣

文永七正廿一、轉左大辨、三月卅日、兼造東大寺長官、

〔公卿補任後土御門〕文明九年丁酉

参議正四位上藤量光（中略）八月十五日轉左大辨、同日補造東大寺長官、

〔季連宿禰記〕天和二年正月一日庚戌吉書始、陽春嘉慶、四海太平、○中略仍試筆如件、

天和二年正月一日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史竿博士小槻宿禰季連

〔明和新增京羽二重一〕官方

左大史從四位下壬生主殿頭小槻知音修理東大寺大佛長官

〔安政三年雲上明覽下〕壬生官務輔世宿禰

主殿頭　修理東大寺大佛長官

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年八月巳卯、初令所司鑄僧綱及○中略東大○中略等寺印、各頒本寺、

〔小右記〕長元四年三月十日丁巳、進東大寺印文三面、印寫捺紙、其奧注三面印進退人々、名注付、但別當少僧都仁海、權別當濟慶、三面印文皆署件文、別當已下署、其奧勅使右少史ム史生ム加署、示可奏由之略見、件返抄印一枚相合、一枚不合、三面印、　十二日己未、頭辨持來宣旨、是東大寺返抄事、仁堪法師所進返抄印相合寺家上政所印、早可返給、件返抄二枚、神叡法師甚小不合、三箇所印、所謂上下政所、并造官等印也、被問神叡法師歟、然而無左右仰、

參詣

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年六月丁酉、泰廉〇新羅王子等就大安寺東大寺禮佛、
〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年正月辛丑、行幸東大寺、燃燈二萬、
〔扶桑略記二十三醍醐〕昌泰二年十一月二十一日辛亥、法皇〇宇多御幸於東大寺、廿四日甲寅、於同寺受戒、
〔帝王編年記十七一條〕永延二年十月廿九日、圓融院法皇於東大寺御灌頂、導師寛朝僧正、遍照寺僧正者、寛平法皇之御孫、敦實親王之息也、或記曰、同年八月三日、於圓融院御灌頂云々、具說有之、
〔東大寺續要錄五〕開撿勅封倉事
文應二年九月一日、一院〇後嵯峨御幸于南都、爲七大寺御巡禮、三日、早旦御參大佛殿、五日、入御于當寺中御門御所、期日被開勅封倉、被取出寶物等於中御門、有御覽、即被返納畢、
〔太平記二十〕南都北嶺行幸事
元德二年二月四日、行事ノ辨別當萬里小路中納言藤房卿ヲ召レテ、來月八日、東大寺、興福寺行幸有ベシ、早供奉ノ輩ニ觸仰スベシト、仰出サレケレバ、藤房、古ヲ尋、例ヲ考テ、供奉ノ行粧、路次ノ行列ヲ定ラル、佐々木備中守、廷尉ニ成テ、橋ヲ渡シ、四十八箇所篝、甲冑ヲ帶シ、辻々ヲ堅ム、三公九卿相從ヒ、百司千官列ヲ引、言語道斷ノ嚴儀也、東大寺ト申ハ、聖武天皇ノ御願、閻浮第一盧舍那佛、興福寺ト申ハ、淡海公ノ御願、藤氏尊崇ノ大伽藍ナレバ、代々ノ聖主モ、皆結緣ノ御志ハ御坐セドモ、一人出給事容易カラザレバ、多年臨幸ノ儀モナシ、此御代ニ至テ、絕タルヲ繼、廢タルヲ興シテ、鳳輦ヲ廻シ給シカバ、衆徒歡喜ノ掌ヲ合セ、靈佛威德ノ光ヲ添、サレバ春日山ノ嵐ノ音モ、今ヨリハ萬歲ヲ呼ブカト奇マレ、北ノ藤波千代カケテ、花咲春ノ陰深シ、
〔蔭凉軒日錄〕寛正六年九月廿四日、早晨參詣〇足利義政于一乘院御所披露、今日御巡禮、於大佛殿而參侍奉迎、御退屈也、天快晴、人皆喜之、御巡禮以後、戒壇院御受戒、又於西室御成云々、開東大寺寶物被

雜載

御覽也、南都獻物金錢、悉如先規御寄進之由、今晨於殿中聞之、一乘院南門畠山管領守之、帷幕相擁、公武列參如有威也、午後御巡禮、於大佛前上間東邊北首班立、三寶院又從之、公方上于蓮華座以後、堂中巡匝、還御也、入或出兩度、賜回顧寵光、不勝蹈舞也、愚老曰、一顧是千金也、鹿苑龍岡曰、一顧傾城云云、此方他宗殊嫌、殊嫌禪尤甚、是故顯所荷擔禪而如此乎、實不堪感歎、爲宗門之榮也、

〔女人往生聞書〕女人ノカタチ〇中略東大寺ハ、聖武天皇ノ御願ナリ、ソノ十六丈金銅遮那ノマヘハルカニ、コレヲ拜見ストイヘドモトビラノウチニハイラズ、

〔日本略記〕一九品之淨土之事、〇中略下品中生ハ東大寺、〇中略是を九品といふ也、

名稱
所在

古事類苑

宗教部五十三

佛教五十三

興福寺 一乘院 大乘院 喜多院 寶藏院 併入

興福寺ハ、大和國添上郡奈良ニ在リ、齊明天皇ノ時、藤原鎌足、其私第ナル山城國宇治郡山階ニ草創セシ所ニシテ、當時山階寺ト云ヘリ、其後天武天皇ノ時大和國高市郡ニ移シテ、厩坂寺ト稱セシガ、元明天皇、平城奠都ノ際、今ノ地ニ移シテ、始テ興福寺ト稱ス、法相宗ノ本山タリ、古來東大寺ト相比肩セシ巨刹ニシテ、堂塔伽藍實ニ宏壯輪奐ヲ極メタリ、就中、南圓堂ハ、不空羂索觀音并ニ四天王ノ像ヲ安置シテ、藤原內麻呂ガ、其族ノ繁榮ヲ祈リテ建ツル所ナリ、當寺ハ、藤原氏ノ氏寺ナルヲ以テ、種々ノ特例アリ、卽チ藤原氏ニアラザレバ、本堂ノ壇上ニ登ルヲ得ズ、寺職ノ如キモ、必ズ氏人ノ簡定ヲ經ルヲ以テ例トス、末寺ニ六方衆、八方衆アリテ、當寺事アル每ニ、相會シテ之ヲ議ス、猶叡山三塔ノ會合ノ如シ、中世以降、一乘院大乘院ノ二院室ハ、往々皇子ノ住持スルアリテ、交ゝ寺務ヲ主リ、喜多院以下ノ院家アリテ之ニ屬セリ、又寶藏院ハ、槍術ヲ以テ名アリ、

〔拾芥抄 下本諸寺〕七大寺

興福寺 不比等、和銅三年造二山階寺一是也、

〔書言字考節用集 一乾坤〕興福寺 藤鎌足初創二伽藍於城州山科一、淡海公改二移之南都一、號二山階寺一、又謂二之厩坂寺一、

〔興福寺伽藍記〕山階寺 人皇卅八代、齊明天皇卽位三年丁巳、始鎌足內大臣建立山城國宇治郡山階

里、同年、維摩會始被行、

伽藍　天智天皇即位八年己巳、嫡室鏡女王、爲大織冠御建立、同丈六之釋迦像被置、于時號山階寺、

廐坂寺　四十代天武天皇即位元年、白鳳十二癸未年、都大和國移高市郡時、山階寺改而號廐坂寺、

興福寺　元明天皇即位二年、和銅二己酉年、都移添上郡時、號奈良原、内大臣正胤淡海公、春日勝地平登氏伽藍被建、此額改而廐坂寺手號興福寺也、　同七年甲寅被遂供養、寺内十平乃堂塔御建立有之、

寺域

〔伊呂波字類抄古諸寺〕興福寺

四至　東堺氷室、西堺大路、南深谷峯、北堺從廐坂寺後小路、直登春日山黒葛中尾、

〔平城坊目遺考下〕興福寺〇中略

興福寺ノ築地ハ、天正十七年五月十七日より、大和大納言秀長卿、大政所一万石を以テ寄進造營する所なり、堅固なる筋塀にて、周圍四丁四方、

創建沿革

〔伊呂波字類抄古諸寺〕興福寺仁和二年有勅、被始置興福寺研學竪義、律宗氏勢爲最初竪者、

日本紀云、齊明天皇御宇二年丙辰、鎌足住家山城國宇治郡小野郷山階村、號陶原宅、大臣住此處、爲無期病、就陰陽師雖祭祀事、不平愈、爰高麗國尼修行之次來、大臣請入語病由、大臣同宜、本國爲有此病人哉、尼答云、有歧爲何之、四之云造維摩詰像、修其法者平愈者、大臣承正願其像、家内立精舍修此法、既得平愈、仍每年爲會修此法也、都遷奈良京、内大臣第二子贈太政大臣正一位藤原朝臣不比等承職、從山階陶原家遷法光寺、字中臣寺、修此會、次遷殖槻修此會也、次不比等建立興福寺之時、遷山階陶原家精舍、立興福寺、修此會也、立奈良京以興福寺號山階寺者、依壞立山階陶家精舍并其具、修件會、仍號山階寺、此故也、大中臣氏寺字中臣寺、内大臣賜藤原姓後、以藤原寺也、伯耆國部郷被究也、和銅五年壬子始於此寺修維摩會、從三位藤原葛不生、元明御宇和銅三年庚戌三月、右大臣勝不比等造金堂井法花寺、天平二年庚午四月十八日、立五重寶塔、弘仁四年癸巳建南圓堂、冬嗣公本願、四天像、造彼堂之時、築壇之鬼現形、歌云、

補陀羅くの南の岸に伊保利世バ北の藤波今ゾ佐加衣無

〔興福寺緣起〕寺家一院在左京三條七坊、御門九宇、南大門一宇、東三宇、西三宇、脇門二宇、堂塔雜舍、百七十五宇之中、堂廿一宇、寺東野廿七町、

金堂一宇七間

右岡本天皇〇舒明即位十三年歲次辛丑多十月、天皇崩、明年正月、皇后即位、是爲天豐財重日足姬

堂塔

天皇皇極天皇、於是宗我大臣毛人之男入鹿、自執國柄、恣行威福、王室衰微、社稷傾危、于時藤原內大臣竊謂、立輕皇子爲君卽討、其事不終、發願奉造釋迦丈六像一軀、脇侍菩薩兩軀於四天王寺、事遂叶願、仍造玆像、至於天命開別天皇○天智卽位二年歲次己巳冬十月、內大臣枕席不安、嫡室鏡女王請曰、敬造伽藍、安置尊像、大臣不許、再三請乃許、因此開基山階、始構寶殿、遂乎神衞南遷、改造廐坂、和銅三年歲次庚戌、太上天皇○元明俯從人願、定都平城、於是太政大臣○不比等相承先志、簡春日之勝地、立興福之伽藍也、

〔續日本紀八元正〕養老四年十月丙申、始置養民造器、及造興福寺佛殿三司、

〔和漢三才圖會七十三大和〕添上郡　興福寺○中略

金堂　釋迦藤山佛師作、藏白銀長三寸小佛於御首中、是乃大織冠所持靈像、　脇士四菩薩藥王妙幢　藥上無盡意　四天王像　和銅三年、淡海公建立本堂也、

　鐘樓西　鼓樓東　北室　東室　西室於是有維摩會矩式

北圓堂　彌勒元正天皇養老四年　淡海公建立同八月淡海公薨

東金堂　藥師聖武天皇天平廿年　爲元正帝御惱祈

五重塔　高十五丈一尺天平二年　光明皇后建立

西金堂　釋迦天平六年　光明皇后建立

講堂　阿彌陀安阿彌之作　同十八年　長岡大臣御願　脇士左右勢至觀音　文殊大士淨妙居士

維摩會、於講堂行之、大織冠有疾旣危時、有百濟國尼法明者、曰讀誦維摩經中問疾品、公疾可愈也、仍令僧讀之、果平愈、其後處々修維摩會、延曆二十一年以來、興福寺外不可勤、有勅定、凡維摩會講師、用聖寶僧正所持如意勤之、如自東大寺不出其如意、則不成、

食堂　千手觀音　淡海公建立、金堂同時、

以上俗云七堂伽藍

南圓堂（不空羂索）（弘仁四年）冬嗣公建立（淡海公五代、内麻呂之子、觀音銀像千體納于地底、）西國巡禮第九番

中門（金剛力士、脇在夜叉神、）於此被行佛生會、有伶人樂、　南大門（金剛力士之二王像）於前有四座薪能、（自二月七日至十四日、）

窪辨才天　弘仁年中、弘法大師勸請之、

一言主神社　俗云聖天社

中院屋　佛舍利傳來當寺

此外寺院數多（〇中略）

興福寺爲兵火或雷火回祿數度、而再建如故也、今伽藍、應永六年鹿園院義滿公建立、

〔續南行雜錄〕興福寺諸堂間數（但京間。〇）

金堂（十八間、十二間、）二ケ所共ニ　鐘樓（七間、五間半、）　講堂（廿一間、九間半、）　鞍馬堂（三間、三間二尺五寸）　北堂（六十二間、七間）　西金堂（十三間四尺八寸八分、七間尺八寸七分）　北圓堂（六間）　南圓堂（七間半）　東金堂（十一間半、六間四尺八寸七分）　五重塔（四間半）

食堂（十八間、八間五尺）　禮堂（十八間、四間三尺五寸）　中間（十二間五尺、四間）　回廊（門ヨリ西八十五間、西表三十五間、北金堂迄十二間五尺、金堂ヨリ東十四間一尺五寸、東表卅五間、南側中間ヨリ東十七間一尺五寸、）　湯屋門（一丈四尺五寸）　東不開門（六間）　北八足門（四間四尺）

西不開門（五間五寸、三間）　西御門（五間五寸、三間）　圓城坊門（二間二尺、一丈二尺、）　三藏（十一間、五間、）　南大門（十一間七寸五分ニ四間三尺、前ノ芝居西東四十八間、薪能ノ時、石壇根ヨリ南へ七間半、西ハ門ノハツレ、東ハ門ノ外三間許、）

〔扶桑略記（二十九後冷泉）〕寛德三年（〇永承元年）十二月廿四日、興福寺火。災。金堂、講堂、西金堂、東金堂、南圓堂、鐘樓經藏、南大門、東西上階、僧坊燒亡、但北圓堂、幷正倉院金堂釋迦、南圓堂不空羂索、西金堂佛等、取出了、

〔朝野群載（三文筆）〕春日社告文　孝親朝臣作

維永承二年歳次丁亥二月十四日己未、吉日良辰（留）、大日本國、關白從一位行左大臣藤原朝臣（〇藤原頼通）

通掛毛畏支佐保山椎崗廟乃廣前爾、恐美恐美毛申賜止八久申久、興福寺波靈廟乃所建立也、其後知次々乃皇后丞相乃加作禮留堂塔毛有其數利、歸依年久久、靈驗日新奈利、帝王皇后、補佐乃大臣、出自一門太留者不知幾許須、爰去年十二月廿四日夜、不慮爾有火天、數宇乃堂舍、一時爾爲灰太利、忽聞此告天、氏乃卿相等遠引率之天參詣世留處爾、堂宇雖爲燼毛、佛像波免煙多江利、不覺之淚各下天、不知所裁須、若是才毛無久、行毛無久天、知行氏事比、又王室遠補佐之奉加所致歟、就中年來之間、旱災頻起天、人民之費弊世禮止、曩祖乃賢跡、不可默止留依天、去七日爾始造營天、七月十八日、柱乎立、棟遠上久奈流邊利、凡始自公家女奉利、一門乃尊卑毛莫不營事、何況近日之間波、憂念耻歎久古夜毛晝毛限無久量無之、靈廟此狀遠聞食天、無事無故久天之令作畢給邊、又身上爾可來加留不祥毛遠、未萌爾拂退給比天、安平爾護賜比矜賜止邊恐美恐美毛申賜波久申、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承四年二月十八日辛巳、申剋、山科寺內北圓堂、唐院、傳法院燒亡、火不及新造堂舍、是去永承元年之火災之時、所遺堂舍也、

康平三年五月四日、興福寺亦燒亡、東金堂、南圓堂、僅免餘災、翌日、灰中求出釋迦眉間銀佛、全不損壞、僧侶歡喜矣、

〔定家朝臣記〕康平三年五月五日、巳剋、興福寺使者來申云、去夕亥剋、寺家燒亡、金堂、幷廻廊、中門、大門、維摩堂、三面僧房爲灰燼、火出金堂內佛堂、仍併爲灰燼、東西金堂、南圓堂、食堂、適免煙焰者、殿下〇藤原賴通驚□以頭辨被奏事由、別當左中辨資仲朝臣馳向了、其後出洛給、民部卿以下、卿相被參會、僉議終日、公家遣勅使、藏人右衛門權佐隆方殿下遣使、美作守實綱朝臣十一日、遣雜物於興福寺、米二百石、絹三百疋、布五百端、爲勞問火事、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕治曆三年二月廿五日癸酉、供養興福寺建立金堂一宇、奉造立安置丈六金色釋迦如來像一體、同藥王藥上菩薩像各一體、同十一面觀世音像二體、彩色四天王像八體、彌勒淨土院安

置菩薩諸天等像、建立講堂一宇、加修飾、奉安置丈六金色阿彌陀如來像一體、觀音、勢至、文殊、淨名等、菩薩像各一體、彩色四天王像各一體、建立東金堂一宇、奉造立安置丈六金色藥師如來像一體、日光、月光、虛空藏、觀世音菩薩像各一體、維摩詰、辨天像八體、又造立卅〇卅、本作冊、永緣手觀世音菩薩像一體、如舊安置食堂、更擇曜宿、敬以供養、即啒三百口之僧侶、忽驚虛空界之諸尊、

〔中右記〕嘉保三年〇永長元年九月廿六日、卯時許聞、此夜半、興福寺有燒亡、火從東妻室僧房上出來、則付講堂、仍金堂南左右廻廊、中門、南大門、鐘樓、經藏、講堂、幷三面僧房、皆爲煨燼由、別當幷參議左大辨季仲所被申也、是別當法印賴尊件旨以書狀被申也、

〔後二條關白記〕嘉保三年〇永長元年九月廿六日、早旦、左大辨來申云、去夜亥剋許、興福寺中室火出來、講堂燒亡程、參申云、早參殿可申也、乍驚可馳參、數日咳病重八九日宜侍、依無力侍、不能參入、遺恨難悉、永承元年十二月頃、興福寺燒亡皆悉、自件永承至嘉保三年、五十一年也、火事不可申盡、

裏書 左大辨參御寺、家司口房朝臣、遣御寺御佛等、皆悉奉取出也、破損今夜初受加持、時範申云、考定明日也、興福寺口口三箇日、公事被行否、令尋先例之處、不見之由、自官所申也、上遣部令問、雖先例明日延引、後日可被行由、所被申也、余云、國家幷家內大事也、心難之至、莫過於斯矣、早可知於官也、

別當法印賴尊堂舍殘給事

南圓堂　東金堂　西金堂　北圓堂　御塔　食堂　細殿　自餘皆悉燒失了

〔中右記〕承德二年二月九日、今日關白殿、引公卿殿上人下向南京給、是明後日、依興福寺棟上也、

〔帝王編年記〕十九堀河康和三年五月四日、興福寺燒亡、金堂佛眉間玉中小佛、自灰中奉取出云々、佛法壽命、猶不絕歟、件眉間玉之中、有釋迦像、玉中無可入之口、希有事由、佛師定朝所申也、

〔山槐記〕治承四年十二月廿八日丙午、〇中略又被攻敗、寵興福寺合戰、猶不禦得、衆徒皆退散、官兵放火

所々在家、其間東大寺興福寺爲灰燼云々、官兵所爲歟、惡徒所爲歟、不分明、○中略後日宿曜師大威儀師珍賀所送之堂舍燒亡記曰、治承四年十二月廿八日、爲官兵被燒失所々、

合 興福寺内堂卅八字 塔三基 金堂 講堂 東金堂 西金堂 南圓堂 北圓堂 御塔 鐘樓 經藏 寶藏等 四面廻廊 三面僧房 南大門 中門 中宮御塔 觀自在院 東圓堂 一乘院 唐院二 松陽院 東北院 傳法院二 北院 觀禪院二 西院二 五大院二 圓誠院 松院堂 大乘院二 塔一 發心院 中院二 新院 二階堂 北戒壇已上堂舍 修南院 勅使房 北政所 皆殿 松室 東院 大湯屋 南戒壇 轉法院 莊嚴院 一言主宮 總宮 妙見 北院二所 五逆房 大窪幄 北戒壇 布留明神旅所 竈殿 以上九所、神社、 此外僧房不知數、無法號堂少々在之、○中略

後聞、興福寺金堂釋迦眉間銀釋迦小像、自灰中求出其像、其體不見云々、

〔明月記〕治承四年十二月廿五日癸卯、傳聞、藏人頭重衡朝臣、帥師發向南京、 廿九日丁未、官軍入南京、燒堂塔坊等云々、東大興福兩寺已化煙云々、可彈指云々、

〔源平盛衰記 二十四〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

南都ノ大衆蜂起騷動シテ、不靜ケレバ、公家ヨリ御使ヲ遣シテ、何事ヲ計申テ、角騷動スルゾ、子細アラバ、奏聞ヲ經ベシト、被仰下タレバ、別ノ風情ナシ、只清盛法師ニ不會候、乃至名字ヲモ不聞候ト申、○中略 南都大衆イカナレバ、カク太政入道ヲバ惡ムラント云ケレバ、或人ノ申ケルハ、理也、攝籙ノ臣ヨリ始テ、南家、北家、花山、閑院、日野、勸修寺、前官當職ノ公卿殿上人、十之八九ハ藤氏トシテ、春日大明神ノ氏人也、代々ノ國母、仙院、多ハ此家ヨリ出給ヘリ、皇王ト云、臣公ト云、我朝ヲ政事、專此氏ニ在、而平家世ヲ取テ、萬乘ノ世務ヲ妨奉リ、諸卿ノ理政ヲ無代ニスレバ、爲國爲人、春日大明神衆徒ニ替入セ給テ、角騷動スルニヤ有ヲン、イカ樣ニモ、南都ノ失ル歟、平家ノ滅ルカ、子細アラ

ントイフ程ニ、廿六日ニ、藏人頭重衡朝臣、大將軍トシテ、五條大納言邦綱卿ノ山庄、東山若松ノ亭ニシテ、勢汰ヘアリ、著到アリ、其勢三萬餘騎、南都ヲ可攻ト披露アリ、○中略廿八日ニ、重衡三萬餘騎ヲ二手ニツクリ、奈良坂般若路ヨリ推寄セテ、時ヲ造ル、衆徒用意ノ事ナレバ、時ヲ合テ、散々ニ防戰ケリ、大衆モ軍兵モ互ニ命ヲ惜ズ戰ヒケルガ、平家ノ大勢責重リケレバ、衆徒禦ギ兼テ引退、軍兵勝ニ乘テ、二ノ道ヲ打破テ、寺中ニ亂入テ、此彼コニ充滿タリ、播磨國住人、福井庄下司次郎大夫俊方ト云者、重衡朝臣ノ下知ニ依テ、楯ヲ破テ續松トシテ、酒野在家ヨリ火ヲ懸タリ、師走廿日アマリノ事ナレバ、折節乾ノ風烈シテ、黑煙寺内ニ吹覆、大衆猛火ニ責ラレ、炎ニ咽ケレバ、不堪シテ、蜘ノ子ヲ散スガ如ク落行ケリ、○中略猛火寺中ニ吹覆ケレバ、東大寺、興福兩寺ノ、佛閣諸堂、諸院、一宇モ殘ラズ、瑜珈唯識兩部ノ法門、因明内明、一卷モ不免、三論花嚴ノ經釋、大乘小乘ノ聖敎、悉ク燒ニケリ、○中略興福寺ハ、是淡海公ノ御願、藤氏累代ノ氏寺也、○中略中。金。堂。ト申ハ、入鹿大臣、朝家ヲアヤブメ奉ラントセシ時、皇極天皇發願シテ、被造立丈六釋迦ノ三尊也、眉間ノ水精ハ、唐國ヨリ被渡タリ、此玉左見ニモ、右見ニモ、釋迦三尊ノ影、ウルハシク移リシ玉也、此像ノ御頭ノ中ニハ、大織冠ノ御髻ノ中ニ、年來戴給ヒケル、銀ノ三寸ノ釋迦像ヲ被籠タリ、東。金。堂。ト申ハ、神龜三年丙寅秋七月ニ、聖武皇帝ノ伯母、日本根子高瑞淨足姬○元正御惱ノ時、玉體安穩ノ爲ニトテ造ラレタリシ、藥師像ヲ安置セリ、又敏達天皇卽位八年己亥冬十月、新羅國ヨリ度給ヘル、金銅ノ釋迦、觀音、虛空藏ノ三尊モ、此御堂ニ御座ス、西。金。堂。ト申ハ、聖武天皇ノ后、光明皇后○安宿媛ノ御母、橘大夫人○三千代ノ御爲ニ、天平六年甲戌正月ニ造供養シ給ヘル、丈六ノ釋迦ノ像ヲ被居タリ、天竺ノ乾陀羅國大王、生身ノ觀音ヲ拜ント云願アリ、夢中ニ告ヲ得タリ、是ヨリ東海ニ小島アリ、日本國ト名ク、彼國ノ皇后光明女ヲ可拜ト、夢サメテ後、西天日域雲ヲ隔テ、大小諸國ノ境、遠ク行拜セン事難叶、生身ヲ移サン爲ニトテ、佛師ヲ差遣セリ、工匠子細ヲ奏聞シケレバ、后仰テ云、我母ノ爲ニ、阿彌陀如來造

立ノ志アリ、然而イマダ工ヲ得ザル處ニ、幸ニ今天竺ノ佛師ヲ得タリ、願ハ佛像ヲ造テ、妾ガ素願ハタセト、工匠奏シ申サク、佛々平等ニシテ、利益無差ドモ、釋迦ハ穢土ノ敎主トシテ、慈悲ヲ一子ニ覆護セリ、摩耶ノ生所ヲ知ントテ、大菩提心ヲ發シツヽ、二六ノ難行功畢テ、無上正覺成就セリ、十月胎内ノ報恩ノ爲ニ、九旬忉利ノ安居セリ、サレバ母ニ孝養ノ志深キハ、釋尊ニ過ズト奏シケレバ、可然トテ被造タル佛也、皇后此佛ヲ拜シ給シニ、イマダ眉間ノ玉モ不入ニ、佛像額ヨリ、光ヲ放チ給ヒシカバ、此佛ニハ眉間ノ玉ハナシ、自然涌出ノ觀世音モ、此御堂ニゾ安置セル、傳法院ノ修圓僧都ト云人、壽廣已講ヲ相具シテ、尾張國ヨリ上リシニ、賀茂坂ノ邊、スガタノ池ノ邊ヲ通リケルニ、已講々々ト呼聲シケリ、音ニ付テ行見レバ、田中ニ十一面觀音像御座ス、貴ク忝ク思ヒツツ、懷キ上ゲ負奉テ、南都ニ歸上リツヽ、先南大門ニ居奉リ、何ノ御堂ニカ入奉ベシト、大衆僉議シテ、金堂ヨリ始テ扉ヲ開テ入奉ラントテ、千萬人集テ、是ヲ昇奉レドモ、更ニ動給ハズ、西金堂ト申時、輕々ト擧テ飛ガ如クシテコソ、此寺ニハ入給ヘ、一度歩ヲ運人、二世ノ願ヲゾ成就シケル、南圓堂ト申ハ、八角寶形ノ伽藍也、丈六不空羂索觀音ヲ安置セリ、〇中略此戒壇ト申ハ、行基菩薩ノ建立、清度利生ノ眞影アリ、清涼院ト申ハ、清水ノ學窟、大聖文殊ノ靈應アリ、一乘院ハ、又定照僧都ノ聖跡、顯密兼學ノ道場也、貞松房ノ松室、應和ノ鳳香シテ、興靜僧都ノ喜多院、本院ノ礎不傾、斯ル目出タキ所々ヨリ始テ、瑠璃ヲ並ベシ四面ノ廊、朱丹ヲ粧ル二階ノ樓、空輪雲ニ耀キシ、五重ノ塔婆、稱古寬閑ナル、三面ノ僧坊、大乘院、松陽院、東北院、發志院、五大院、傳法院、眞言圓成院、一言主、辨才天、龍藏、總宮、住吉、鐘樓、經藏、寶藏、大湯屋ニ至迄、忽ニ煙ト成コソ哀ナリケレ、

〔吉記〕治承五年六月廿七日壬申、午上參院、付泰經朝臣奏條々事、

一造興福寺御佛佛師間事

明圓申云、一向南京佛師可勤仕者、不可爭申、今度金堂、講堂御佛、院尊已奉之由承之、康平佛師長

勢、覺助等也、而覺助雖下臈造進、興福寺御佛康保三年賴順雖下臈奉之、如此例者、上臈必不可勤仕、至于永承者、宗朝之外依無他人難用、上臈勤仕例歟、金堂、講堂之間、不奉一堂者、雖縱奉他堂、猶可爲愁云々、成朝(康朝男)申云、南京大佛師以實朝爲初、仍永承燒失之度、定朝奉造御佛、康平覺助奉造之、永長賴助奉造之、其後康助、康朝、成朝、相幷六代也、就中講堂御佛被移阿彌陀院之剋、賴助奉造之件引懸、猶留成朝家、爲南京大佛師、爭不勤仕哉云々、院(〇後白河)仰云、明圓之所申非無其謂、殿下(〇藤原基通)可令計宛給、殿下仰云、左右猶可依院御定、予(〇藤原經房)猶有申旨、又成朝事無左右仰、

〔玉海〕文治元年六月廿八日己卯、興福寺所司持來牒狀云、東金堂爲寺家之沙汰、造營已了、於佛像之條、其力難及、勸進氏公卿以下受領等、可遂其功云々、牒狀之外副廻文、大臣一紙、大納言已下一紙、受領等一紙、余大將、中將各奉加、廻文ニハ不書之、注別紙給之、

前右大臣家

可奉加東金堂造佛用途事

能米五十石

令散位大江政職奉

〔太平記 二〕天下怪異事

嘉暦二年ノ春ノ比、南都大乘院禪師房ト、六方ノ大衆ト確執ノ事有テ、合戰ニ及ブ、金堂、講堂、南圓堂西金堂、忽ニ兵火ノ餘煙ニ燒失ス、

〔尙通公記〕天文元年七月十七日癸亥、南都(江)本願寺一揆令蜂起、諸坊放火打破、(〇中略)十九日乙丑、南都有注進、從喜多院被申送分、東大寺、興福寺、一乘院、大乘院、東院、修南院、喜多院、松林院(〇中略)等相殘、其外悉院家僧坊燒拂云々、言語道斷驚嘆無極者也、

〔鹽尻 六十三〕享保二年正月四日亥の剋、南都興福寺講堂より出火し、諸堂炎燒す、

講堂内規廿一間九間　金堂同十八間十一間　西金堂同十七間四間　南圓堂同八間八方
南大門同十一間四間　中門同十一間四間　廻廊同百廿六間一間　西室同三十六間一間
北室同六十六間一間　中室同三十六間一間　鐘樓同四間六間　鼓樓同三間四間
西金堂關伽處
西金殿南圓堂の本尊は、出しまゐらせしと云々、
殘る諸堂には
東金堂　北圓堂　食堂　勸禪堂　大御堂　五重塔　三重塔　細殿　寢殿　勸學院　三ッ殿
藤家の氏寺、はからざるに回祿の事、大方ならざる變異なりしかば、朝家御つゝしみありて、太神宮以下御祈の御沙汰あり、同十日御使ありて、熱田宮にして、天下太平の御祈禱、内藏權頭尾張宿禰仲賴命を奉す、
興福寺　元明帝和銅三年建₂南都₁
炎燒は、陽成院の元慶二年始歟、後朱雀院の寬德元年、後冷泉院の康平三年、堀川院の康和三年、高倉院の治承四年、後宇多院の建治三年、後奈良院の享祿四年、巳上七ヶ度、今度回祿と共に八度歟、
大概伽藍の災は、四天王寺、東大寺、延曆寺等も、又數度火災あり、されども再起昔に耻ざる處多し、但京師の法勝寺、元應寺は、圓戒嫡流の大伽藍なりしに、荒廢の後跡絶侍るも、惜むべき事ならずや、其他京師より、諸州名藍古跡の廢退猶多し、皆是曆數滿、因緣盡侍る時にや、
〔閑窻自語四〕興福寺享保火事
享保二年正月四日の夜、戌刻ばかり、興福寺講堂より火いでき、金堂、西金堂、南圓堂、南大門、中門、廻

廊、西室、北堂、中堂、鐘樓、鼓樓、築地にいたりやけぬ、南圓堂の本尊（不空羂索観音）は、事故なくとりのけ奉る、その外本尊ともにほろび侍りしとなむ、（東金堂、五重塔、北圓堂、食堂、勸學堂、經殿、竈殿、三重堂、三念觀禪院、大塔ハ殘りぬ、）その時は、天火のやうにいひけれ共、盗賊古金襴の戸帳をとらむとて、火をつけしとぞ、これも數年へて、事あらはれ、刑に行れしとなん、

〔有徳院殿御實紀附錄十五〕其ころまた奈良大乘院、一乘院、兩門主、江府に參向ありしが、寺社奉行土井伊豫守利意が宅に使して、申送られしは、兩門主とも〳〵にこひ申されたき事あり、門主の旅館に參り申さるべし、もしさりがたき公事どもありて、他に出がたくば、門主みづから駕を枉らるべしとなり、伊豫守も私にいらへ申すべきならねば、内々御けしきをうかゞひしに、かなたへまゐるべしと仰下されたり、やがて同職酒井修理大夫忠音とゝもに、彼旅舍に參りしに、兩門主對面せられ、南都興福寺は、古昔よりの大伽藍なり、然るに先年炎燒せし後、いまだ再建なき事誰かはこれをなげかざらむ、あはれ關東の御沙汰として、造立あらむ事こそあらまほしけれ、是我々が私願のみにあらず、大内にも奏しけるに、こたび江戸にまかりしついで、この事申請べしとの叡慮をも加へられし所なれば、兎にも角にも、造立の事こそ願はしけれとありしかば、奉行等なにとも答申しがたく、宿老に議して、御答申べしとてかへりぬ、伊豫守、修理大夫そのゝちふたたび、彼旅館に參り、さきに宣ひたる興福寺再建の事、宿老等と相議したるに、當時國財とぼしく、貧民救恤の事に、明くれ御心を煩はし玉ふ折からなり、寺院など、再建の事は思もよらずかゝる事聞え上る事もなりがたしとて、宿老等あへて許容せざれば、まげて時節を待せ玉ふべしといひすてゝ、まかでぬ、兩門主も、せんかたなく、外にいふべきことばなくしてかへられたり、既に往古よりの名寺といひ、殊に叡慮を加へられしことさへ、かくのごとくなれば、この後寺社皆頽敗する事多かるべしと、世の人も申けるに、其後古よりつたはりたる寺社荒廢せば、社僧困窮す

るもの多かるべしと思召つけられ、これよりのち、頽敗せし寺社は、諸國を勸化して、金帛をつのりもとむる事をゆるされ、驛馬をも給ひ下さるべければ、寺僧、社人等、力をつくして、國々を勸進し修理をいとなむべしと仰下されけるとぞ、是もまた御仁政の一端なるべし、

〔享保集成絲綸錄　二十一〕享保十巳年九月

南都興福寺、燒失之伽藍造立ニ付、諸國勸化之事、一乘院御門跡、大乘院御門跡より、公儀江被相願候ニ付而、今度勸化之儀、被仰出之、從公儀も、御寄附之品も有之候、依之諸大名幷御旗本之面々、且寺社町方其外、御料私領國々在々所々へも、興福寺伽藍造立勸化之儀、彼寺之僧、來春より巡行致、可相進候間、被存其趣、志之輩は、寄進之儀可有之候、勿論、志無之者ニハ、押而進め候之儀、堅く無用ニ候、猶勸化之狀ニ書載之候、以上、

九月

享保十七年六月

申渡

一南都興福寺伽藍造立爲助力、淺草觀音地中ニおいて、十箇年之間、三月、七月、十一月、毘沙門天富突被仰付度旨、一乘院御門跡、大乘院御門跡、御願之通相濟、其段申渡、來月二十四日より始申候、町中若胡亂ニも可存候間、寄々申聞候樣ニとの御事ニ候、右之趣可相心得候、此旨各方より、町町不洩樣、可被申達候、以上、

六月

享保二十卯年七月

申渡

一南都興福寺、富、來ル廿四日致興行候、依之御當地町中へ、相賦リ候富札、町々家主、店借リ裏店迄、

志有之者、江行渡候樣ニ致度旨、興福寺役人相願候、

七月

〔和州舊跡幽考〕三添上郡興福寺〇中略

金堂

中金堂は釋迦如來菩薩なり、釋書此東西に二基の鐘樓あり、〇下略

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

金堂　人王四十三代元明天皇御宇、和銅三庚戌年、正胤淡海公不比等建立也、中尊釋迦像者、大織冠逆臣爲誅、入鹿願像也、嫡室鏡女王、爲鎌子造此丈六像、山城國安置山階寺、後大和國高市郡安置厩坂寺、都遷平城時、安置堂、幷此釋迦白毫內、鎌足公持念佛納釋迦之像一軀、銀御長三寸

本尊　釋迦如來　坐像御長一丈八尺

〔蔭凉軒日錄〕文正元年正月廿二日、南都金堂勸進就于朝鮮國求化緣也、疏文章可命之由、以飯尾肥前守被仰出、仍伺之、可命之由被仰出也、　二月十六日、奉報等持寺御成之事也、御成〇中略　南都興福寺金堂爲修造、求朝鮮國勸進之正使、爲話柄持造花一株而來謝也、造花者櫻也、朝鮮國疏之事者、愚老以飯尾肥前守可命之由被仰出、是故來告之、　廿八日、南都興福寺金堂、藥師寺勸進奉加、被求于朝鮮國之疏、其文者、綿谷西堂製之、奉懸于御目、御印之事伺之、〇中略　朝鮮國被遣之疏御印者德有隣也、蓋舊例也、

東金堂

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

東金堂　人王四十五代聖武天皇御宇、神龜三丙寅年、叔母元正天王依爲御眼病、聖武皇帝彼上皇爲奉除病延命、七月造立供養、

本尊　金銅藥師如來　坐像御長八尺

〔扶桑略記〕六聖武神龜三年六月辛酉日、太上天皇〇元正不豫、詔令天下諸國放生、或記云、七月〇七月二字、從眞福

(寺本及鈔本補)今帝陛下、爲太上天皇寢膳不安、山階寺內立東金堂、藥師佛像幷挾侍菩薩像所造也、

〔日本紀略後一條十四〕長元四年十月廿日甲午、關白左大臣(○賴通)供養興福寺東金堂幷塔、仍關白左大臣以下參向、准御齋會、

西金堂

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

西金堂　件堂者、天平六年甲戌正月十一日、奉爲橘大夫人、往生極樂、當彼忌日所造之也、其日屈四百僧、人別各施衲袈裟一帖、設大會、如此行道、件袈裟少々、于今在北寶藏云々、是光明皇后御願也、本尊丈六座像釋迦、脇士藥王上也、

〔扶桑略記六聖武〕天平六年正月十一日、皇后藤原氏、本奉爲先妣贈從一位橘氏往生菩提、相當忌日、興福寺內建西金堂、安置釋迦丈六像、及挾侍菩薩十大弟子、四羅漢、神王等像、敬延供養、屈請衆僧四百人等、別施衲袈裟等、如法行道焉、(已上出彼寺緣起)

〔扶桑略記三十白河〕承曆二年正月廿七日壬寅、中宮職(○藤原賢子)殊抽懇志、供養西金堂、奉安置金色丈六釋迦如來像、同觀世音菩薩像、得大勢至菩薩像各一體、彩色丈六釋迦十弟子像各一體、同八部衆像各一體、金色十一面觀世音菩薩像一體、彩色五尺六天像各一體、金剛力士像一體、佛則舊像、加丹青而增彩、堂之前基、添莊嚴而畢功、開講之儀、雖切于后房之芳意、修飾之美、已彰于相府之素懷、寺司有賞、

講堂

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

講堂　件堂者、從二位藤原卿仲丸押勝、爲先妣天平十八年正月日造立供養、延曆廿年、桓武天皇御宇、維摩會於興福寺行之、不可移他所之由宣下、以來又號維摩堂也、本尊阿彌陀三尊、淨明、文殊、四大天王等也、又親通之記、和銅三年、於此堂修維摩會、仍云維摩堂也云、

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

講堂(○中略)本尊　阿彌陀如來　座像御長六尺　建久年中、春日大佛師法印院尊造之、

北圓堂

〔興福寺緣起〕講堂一宇

右安置羂索菩薩像也、天平十七年歲次乙酉正月、正三位牟漏女王〔美努王女、藤原房前妻、天平十八年正月薨、〕寢膳乖和、造件像、幷寫神呪經一千卷、而癥山遂遷、不果其願、孝子從二位藤原夫人〔聖武夫人〕正四位下民部卿藤原朝臣〔眞楯〕等、並顧先志、堂造忌日、〔件尊像、以弘仁四年、長岡右大臣〈眞楯子〉内麻呂、遂未作南圓堂之間、假以安置之、〕

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

北圓堂　人王四十四代元正天王御代、養老五辛酉年、元明帝、元正帝同心、奉勅右大臣從二位長屋王〔天武孫、高市王子ノ子、〕爲贈太政大臣淡海公、則相迎一周忌、八月三日造立供養、

本尊　彌勒菩薩　坐像御長半丈六　永承年中春日大佛師定朝造之

〔扶桑略記〕〔元正、六〕養老五年八月三日、天皇幷太上天皇同勅、爲右大臣藤原朝臣淡海公、周忌法事、興福寺内建北圓堂、安置供養摠彌勒像、挾侍菩薩像、四天王像、同日橘氏三千代夫人、奉爲所天贈太政大臣淡海公、興福寺金堂内、造座彌勒淨土、奉供養之、

〔扶桑略記〕〔堀河、三十〕寬治六年正月十九日壬寅、供養興福寺内北圓堂、關白從一位〔藤原師實〕引率内大臣〔藤原師通〕以下公卿等、參會、請僧百口云々、寺司有賞矣、

南圓堂

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

南圓堂　件堂者、弘仁四年、閑院左大臣冬嗣公御願也、鎭壇者弘法大師也、本尊不空羂索、及四天像者、長岡大臣内麻呂御願也、本尊等弘法大師作也、

〔興福寺緣起〕南圓堂

右安置不空羂索觀音像、幷四大天王像也、長岡右大臣、殊發大願、所奉造也、後閑院贈太政大臣、〔内麻呂〕子冬嗣以弘仁四年、造立圓堂、所安置尊像也、故記文云、伏惟故閑院贈太政大臣太閤下、構仁德以爲宇、栽孝忠以爲衣、在朝則周旦之輔君、歸釋則淨名之愛道、爰先考長岡右大臣大殿門、殊發大願、敬以奉

塔

造不空羂索觀音尊像、又常歸依妙法花經、尊重至深、渴仰至篤、而尊容功畢、假以安置、法門咸生、未遑講演進疑之間、母盚忽遷矣、太閤下以爲尊親冥先、於同心酬往冥貴於逝志、仍占勝地於伽藍之中、建立堂宇於清淨之刹、途使八柱圓堂挺玉墀而表、魔八臂金容口蓮座而居、尊等云々、

〔續古事談　一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデ、オハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク〳〵キヽ、オカセ給テ、御卽位ノ後、サマザマノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事、長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ、關白大二條殿〇藤原敎通マゲテ申サセ　ケルニ、事カタクシテ、タビ〳〵ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテ、仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモク、オソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ、事ノ外ニ御ムヅカヽアリケレバ、殿座ヲタチテイデサセ給トテ、大聲ヲハナチテノ給ハク、藤氏ノ上達部、ミナマカリタテ、春日大明神ノ御威ハ、ゲフウセハテヌルゾトイヒカケテ出給ケレバ、氏ノ公卿、マコトニモ一人モノコラズ、皆座ヲタチテ、殿ノ御トモニ出ケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリケル、主上是ヲキコシ食テ、關白殿幷ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニケリ、殿ノ御威モ、君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテイミジキ事ニテナンアリケル、

〔愚管抄　六〕さて九條殿〇兼實は、攝籙本意にかなひて、物もなかりし興福寺、南圓堂の御本尊、不空羂索等、丈六佛像大伽藍、東大寺とは、なほ並べて作られ〇下略

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

五重塔一基　件塔者、號東金堂之塔、光明皇后御願、天平二年四月廿一日建立供養云々、正面西向也、安阿彌陀、彌勒、藥師、釋迦、各脇在之、塔高十六丈云々、或者神龜元年建立之、

〔興福寺緣起〕五重塔一基

右天平二年歲次庚午夏四月廿八日、藤原皇后(○安宿媛)發願、自臨興福伽藍、持簣運土、公主夫人命婦釆女、咸皆從之、正三位中務卿兼行中衞大將藤原朝臣房前等、相率文武百官人等、共四部衆、下杵示基、構立木塔、一歲之間、丹靑已訖哉、(塔內四方畫井四方淨土也、)

〔扶桑略記(三十白河)〕承曆二年正月廿七日壬寅、供養興福寺之塔、關白左丞相(○藤原師實)以下參會、去寬仁元年、寶塔東金堂、忽逢雷火、已爲灰燼、卽入道前大相國(○藤原道長)殊興弘願、早以修復、又康平三年、寺院之內、重逢火擧、彼時下勅、堂宇復舊、壯嚴盡美、供養先了、塔婆輪奐、今正甫就、五層究巧、穿暮雲而崔嵬、七寶排扉、納行月而照耀、新寫四方之淨土、旁安諸尊之化主、脇仕圍繞、菩薩羅列、爰擇支干之吉曜、展齋會之梵筵、驚十方之聖衆、嘔百口之龍象、公家降綸命以造營、貲相抽丹懇以敬重、

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

三重塔　件塔者、在南圓堂西南方、口傳云、弘法大師云々、或記云、康治二年十二月廿八日、興福寺三重塔供養、皇后宮御願也、此塔事也、

東院　〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

東院東堂　天平寶字八年甲辰九月十一日建立、安置十萬基小塔、同十八日誅惠美大臣、

〔扶桑略記(拔萃淳仁)〕五年(○天平寶字)二月、大師從一位藤原惠美押勝奉爲光明皇后、興福寺內造一堂宇、安置觀音幷像、繡誧落山淨土變而安西邊、繡阿彌陀淨土變而安東邊、件堂、山階寺東院也、

五大堂　〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

五大堂(南圓堂次)　件堂者、朱雀院御願也、安五大尊、弘法大師造云々、在東圓堂西、

食堂　〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

食堂(天平勝寶八年丙申五月廿二日、奉爲平城宮御宇後太上天皇所請納也、金銅千佛像、連一舖、高一丈五寸五分、廣一尺一寸三分、厚七寸二分、)　本尊丈六千手觀音也、在本佛左厨子、云貧頭留尊者、座像也、口傳云、此本尊者、東大寺本尊也、及度々兩寺相諍云々、又神木

入都之時、此尊者必奉入都云々、

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

食堂　和銅三年淡海公御建立

本尊千手觀音大士　立像御長一丈六尺

　佛師安阿彌作

四天王　各立像御長四尺五寸

〔爲房卿記〕承曆三年八月四日己亥、去二日、興福寺食堂無風雨難、已以顚倒、北圓堂御佛破損云々、後日、殿下〈○藤原師實〉以清家朝臣遣實撿使、著布衣向寺家、後日有聞被勸當淸家者、

僧坊

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

三面僧坊　件室者、在講堂之東西北、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年四月八日癸酉、大和國興福寺失火、燒堂宇僧房、

勅使坊

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

勅使坊〈號客坊〉　件坊者、維摩會使住處也、又爲學侶集會所、細々無之、只供目代初任之時、致集會許也、又維摩會第六日〈仁〉、於當坊而修番論義、奉隨此役、則加學侶之衆也、承平七年維摩會講師者、延曆寺基坊〈六十六〉爲威儀僧良源下向、慈惠大師事也、興福寺義照、與良源番論義第一番也、仍自承平于今不退轉者也、此坊在五大堂之西方、

門

〔伊呂波字類抄〕〈古諸寺〉興福寺〈○中略〉緣起云、寺家一院、方四町、在左京三條七坊、有四門、

南號長者門、前四町殖四季花、爲奉供佛之、

西號敬田門、前四町殖時菓、爲供衆僧之、

北號悲田門、前四町令住病者孤獨、爲勞養之、

東號奴婢門、令仕奴婢、爲勤仕寺役也、

宗派寺格

〔日本略記〕一四箇之本寺と申は、東大寺、興福寺、延曆寺、圓城寺也、此四箇之大寺は、天下の御祈禱所にて、內裏の御祈禱所也、

一諸宗之本寺之事、法相宗本寺者興福寺也、〇中略巳上是を八宗と云、

〔神皇正統記文武〕不比等の大臣は、後に淡海公と申なり、興福寺を建立す、〇中略後に玄昉と云僧、唐へわたりて、法相宗を傳へて、此寺にひろめられしより、〇下略

〔玉葉和歌集十九釋敎〕法相宗は、三國傳來して、相承いまにたえず、たゞ興福寺にのみこれを學する事を思ひて、　前大僧正良信

みつの國ながれたえせぬ法の水わが寺ならでくむ人ぞなき

寺領

〔續日本紀十三聖武〕天平十年三月丙申、施山階寺食封一千戶、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各〇中略墾田地一百町、

七月乙巳、定諸寺墾田地限、〇中略興福〇中略一千町、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十二月辛亥、勅、昔爲救養疾病及貧乏之徒、以越前國墾田地一百町、永施山階寺施藥院、

〔類聚三代格十五〕勅

京南田卌町

右奉爲藤原皇太后〇安宿媛每年忌日、講說梵網經料、永入山階寺、天平寶字五年六月八日〇又見續日本紀

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年七月十七日癸亥、越前國丹生、大野、坂井等郡田地六百一町九段百五十八步、依天平勝寶元年四月一日詔旨、令興福寺領得、但天平勝寶元年以前、爲公田之類、雖在四至之內、不聽領之、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年十二月廿五日丁巳、越前國田地百十二町二百九十歩、加賀國田地二百十六町、依天平勝寶元年四月一日詔旨、返入興福寺、

〔朝野群載佛事十七〕施入帳

藻原庄壹處地四至（東限清水野、西限巨堤萊原、南限綠野、北限小竹河、）東西壹仟貳拾丈　南北肆佰捌拾漆丈

田代庄壹處（在長柄郡、在天羽郡、）開田參拾餘町畠等（具在券文、）

右庄田等、制國券公驗等書、奉入如件、就中藻原庄、曾祖父故從四位上黑麻呂朝臣之牧也、墾闢爲治田也、田代庄、始自曾祖父、至于祖父故從五位下春繼朝臣、其間往々買得以爲私業也、先考故從四位上良尙朝臣、相承管領也、菅根等、先人、生平被過庭之訓云、件兩箇庄、先君有命、可施入興福寺云、昔先君於此藻原庄寢居、卽遺令云、病深齊宣、命迫旦暮、若有不諱、葬此庄中、汝生時我無慮、若其後子孫非其人、轉爲他人之地、恐令牛羊踐我墳墓、須汝世卽施入興福寺者、仍隨遺命、葬件庄中、今我命祿頗叶、得免飢寒、須隨先君本意、施入彼寺、此作此念、不意遷化、今菅根等、敬隨祖考之命、施入件等庄田、伏願寺家下知彼庄、但天羽庄、奉維摩會之資用、藻原庄奉諸聖衆之供給、願以此功德、先奉資祖考、早脫漏屎、遊常樂我淨之域、乍渡迷風、觸究竟涅槃之岸、乃至七世父母、皆成佛道、敬白、

寬平二年歲次庚戌八月五日　　蔭子藤原朝臣敏樹　藤原朝臣基風

藤原朝臣房貞　藤原朝臣顯相

藤原朝臣眞興　因幡掾藤原朝臣菅根

奉別當大納言卿宣、俾宜下知彼寺、早令領納者、

同月廿日、別當左少辨藤原朝臣佐世奉

〔日本紀略八花山〕寬和二年二月廿六日甲子、興福寺僧等訴、申前備前守藤原理兼損亡鹿田御庄事、

〔古簡雜纂子〕興福寺僧綱大法師等、誠惶誠恐謹言、

言上　三箇條

一請、殊蒙天恩、停止山城、河内、攝津三个國國司令收公當寺庄々、繼維摩大會惠命、修造伽藍僧房破損狀、○中略

當伽藍者、寺中用途雖繁、庄園濟物不幾、近年以降封戸無辨、仍當憲法之時、欲致訴訟之處、三國庄園多以顛倒、二所杣山亦復收公、而道場數多破損非一、自昔至今、修造无絕、若无國家優免、爭加伽藍修補哉、鳳甍欲頽、以何障之、虹梁欲落、以何資之、古寺修造者、新制一條也、綸言如汗、草木猶靡、爰三箇國司已放苛法使者、停廢當寺庄園、衆徒大訴五内无休、抑我后上皇、○後白河異域慕唐堯虞舜之古風、我朝追延喜天曆之舊儀、興久絕政、復已廢例、豈於此事不復舊哉、況又歸三寶而傾叡慮、不異梁武帝之聖德、靜四海而施仁恩、相同唐太宗之皇化、已當明王憲法之時、蓋散佛法陵遲之愁、望請天恩早被停止三个國國司收公、將挑一寺法燈、彌奉祈万歲寶祚矣、僧綱大法師等、誠惶々々謹言、○中略

保元三年□月日

○按ズルニ、原書此文ノ次ニ、保元三年十月日ニ係ル、興福寺僧綱等ノ寺領免除ヲ請フ文ヲ載セタリ、恐クハ彼此相前後シテ上リシモノナラン、

〔玉海〕承安元年九月廿三日甲午、今日南都衆徒可上洛之由、有其聞、又進奏狀、仍一昨右少辨兼光爲攝政御使、向南京加制止、仍衆徒上洛延引了、此事趣ハ前下野守信遠信忠法師子、候院下北面者也、依僧衆玄之讓、知行山階寺領坂田庄之間、致濫惡、其中殺害大織冠大炊女衞衆等、又凌礫興福寺政所使等、依此罪可被配流其身、又件庄可被付寺家之由、經奏聞之處、仰云、於庄者早可付寺家、於信遠流罪者、其罪科無一定、信遠不過由陳申、然者早可奉證人、其時於使廳經沙汰、隨所當之罪、可被行罪科云々、而衆徒申云、自上代大衆之訴、未有進證人之例、何可虛言哉云々、又山階寺末寺庄園寺、五十餘所可被起立云々、依此等之訴可企上洛云々、當時雖延引、來十月十餘日之比、尙可上洛云々、或人云、更不可上洛、

什物

先々如此云々、

〔平城坊目遺考下〕興福寺〇中略

明和二年記錄曰、一坊舍九十六、　知行高合九千七百一石九斗六升八合

〔續南行雜錄〕春日社頭幷興福寺領〇中略

千四百九十五石二斗　一乘院領　九百五十一石七斗餘　大乘院領　二百八十石喜多院領、

二百九十石　院家中領　七千七百廿一石餘　諸院諸坊〇中略　都合二万千百十九石五斗餘〇中略

一納方寺務幷喜多院權別當、以差圖一年替、從寺中三人充、五師之內時々爾、　出合百姓、前物成相窺、春日御藏、唐院新坊ヘ納之、相符可付置事、〇中略

右條々任元和三年九月七日、寬永十年四月廿一日下知狀之趣、不可有相違者也、

寬文五年七月十一日　久世大和守

稻葉美濃守

阿部豐後守

酒井雅樂頭

〔大乘院寺社雜事記〕延德三年九月晦日繪注文

三藏繪十二卷　當院　吉備大臣繪二卷　同　春日驗記一卷　同

同

春日驗記二十卷　社頭　片岡繪五十二卷　慈恩院　地藏繪六卷　西南院　八島合戰繪三卷　北院　木津地藏繪三卷　同寺　長谷寺緣起三卷　同寺　東征傳五卷　招題寺　地藏繪三卷　十輪院

〔續史愚抄中御門〕享保十六年四月二十五日丁卯、召興福寺妙幢菩薩、已下靈器等於宮中、有叡覽、先人御記、實方朝臣記、嘗成記、成記、久守記

奴婢

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年二月戊子、幸山階寺、奏林邑及吳樂、奴婢五人、賜爵有差、

用途

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻
信濃國〇中略興福寺料四万束、〇中略上野國〇中略興福寺料三万束、〇中略下野國〇中略興福寺料二万二千束、
凡東大寺年料油、〇中略興福寺南圓堂料、三斛一斗七升二合五勺、並大和國交易送寺家、其直用正稅、

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年九月廿六日辛未、遠江國稻二千束、近江國穀三百斛、美濃、若狹、出雲、美作、四箇國稻各二千束、備前穀二百斛、播磨三百斛、阿波二〇二、類聚國史作三、千束、伊豫三千束、施興福寺、以充造鐘樓僧房料、並通用三寶施料稻穀、

寺制

〔興福寺法度〕興福寺法度
一坊舍幷寺領、爲私不可有賣買事、
一號舊檀那、從俗方寺之裁判不可有之事、
附兒幷新發意は、僮成後見可有之事、
一衆徒如前之有來、可順寺務之命事、
右堅可被守此旨者也
慶長十七年九月廿七日　御判
當寺寺務一乘院殿

寺職

〔延喜式二十一玄蕃〕凡興福寺別當。三綱。者、不依諸大寺之例、隨氏人簡定補之、
〔西宮記臨時一裏書〕延喜六年十月十三日、令當時朝臣給、大納言藤原、興福寺申、以左大臣爲撿。校。前例

造寺司

以氏中亞相爲件寺別當、今以氏長者可當其事申請、依請、

〔初例抄下〕興福寺別當始　慈訓法相宗　天平寶字元補、天平勝寳八年五月廿四日任少僧都、直任同日兼法務、寶龜八死、

同權別當始　眞喜豐忠　仁和二十二月廿八日補

〔海人藻芥〕興福寺者、一乘院大乘院以下、諸院家多被補別當也、〇中略於南都兩門跡者、他家ノ競不可有之者也、

〔寺社分限記三〕當寺務ハ　一乘院　大乘院　代替別當職被補之也〇中略

興福寺院家　喜多院　修南院　東北院　右院家、但當時補寺務職、

〔堯恕法親王記〕貞享元年六月十九日

一興福寺々務事、一乘院宮、大乘院前大僧正、北院、三家頻ニ相論ノ事有リ、從去年極月比事起、互訴公武、由、内々有風聞、今日從公武急度被申渡旨ハ、大乘院近日辭退寺務、一乘院宮可有再任也、此後、南都興福寺、并春日社諸篇、永代從一乘院可有下知、又院家被補被職事ハ、兩門跡或無住或幼少等之時、暫時可被補也、又院家中官職等之事、從一乘院撰其器量可有執奏都之事、從大乘院聊之事モ下知不可有之旨、急度被申渡云々、仍テ右之旨從一門注進有之、卽及黃昏出京、委細聞其樣子、尤一乘院門跡之眉目、珍重事也、

〔續日本紀八元正〕養老四年十月丙申、始置養民、造器及造興福寺佛殿三司、

〔公卿補任堀河〕嘉保三年乙亥

參議正四位下藤季仲左大辨、勘解由長官、(中略)十月日兼造興福寺長官、

〔中右記〕永長元年十月十五日辛未、未時許、左大臣參内著仗座、先有吉書、〇中略次有任造興福寺司之除目、長官以下在別紙、

承德元年十月廿二日、在蓬門間、造興福寺判官盛忠來談云、〇中略
康和四年正月廿三日、酉剋許、人々參上、除目入眼被始、〇中略有僉議事、式部錄資成與造興福寺主典刑部錄經貞兩人之間、以誰凡可被成官史哉、人々或勅定、或資成有理、但予〇藤原宗忠定申云、造寺官、先先有勸賞之上、經貞任刑部錄後、已及卅年、就中依有才能聞、殊被任造寺官了、經貞有理之由申上、是爲思氏事、一端所擧申也、藤氏公卿一兩、被同申予議、

〔殿暦〕永久二年七月廿八日辛丑、今日春日、御社功事、頭辨奏事由、長門守能遠朝臣也申功輩如雲、雖然爲造興福寺之次官、供養日可隨追申請之由、被下宣旨了、仍有理歟、仍令奏也、又申輩皆遷任也、而法皇〇白河仰云、遷任功爲後極無由、重任有何事乎、仍所仰下也、

〔玉海〕文治二年八月廿六日庚子、大夫史廣房仰云、初齋宮行事辨親經、依父俊經入道所勞危急籠居西郊云々、〇中略凡近日出仕辨、只親經一人也、光長依所勞籠居及數月、就中於神事者、依爲造興福寺長官、不可叶歟、

〔大乘院記錄〕興福寺造營事書如此、可有御下知寺家之旨、天氣所候、以此旨可令申入右大臣〇右大臣恐左大臣誤、時左大臣道平爲藤氏長者、殿給、仍執啓如件、

七月〇正慶二年十七日　　　　左衛門權佐範國

謹上　左少辨殿

興福寺造營條々

一造寺長官被仰右大辨宰相淸忠卿事〇下略

〔公卿補任 光嚴〕正慶二年癸酉

參議正三位藤淸忠六月十二日遷任、同日兼右大辨、九月廿三日補造興福寺長官、

〔公卿補任 光明〕康永二年癸未

參議正四位下藤國俊

曆應二四十八、右大辨、五月七日造興福寺長官、

〔公卿補任後奈良〕天文四年乙未

參議正四位上藤兼秀

享祿二八廿七、左中辨、〇中略同十二月七、造興福寺長官、

〔宗建卿記〕享保十三年三月卅日、參殿、殿令對面給、仰云、興福寺再建了、朝廷御沙汰之義、從一乘院、大乘院等被願此事者也、仍自南曹辨光綱今日言上之義、被聞食置了、此儀如舊例、於被仰出也、造興福寺長官次官判官等可被置之、雖然當時之義、長官判官被置之可然也、於長官者、南曹辨則有便、判官者史可兼也、舊例勘物被見之了、就中近例之文有之注左、

天文四年十二月四日　藏人右少辨藤原宣次兼造興福寺長官

右大史兼算博士三善亮功

舊例不暇記、翌四月一日、造興福寺長官以光綱南曹辨也被補之、

〔議奏記錄〕萬延元年十二月四日、職事被附、〇中略

造興福寺判官如故之事

〔應仁元年都仁志喜二下〕官方

右大史正五位下山名中務少丞三善隆功造興福寺判官

〔大乘院寺社雜事記〕文明元年四月六日、於古市所番條、昌懷宗藝等會合、寺門事可破之由、內々評定歟之由傳聞、筒井計略、〇中略七月九日、六方。。。末寺者、

戌亥方分　安任寺　高雄寺　慈恩寺　當麻寺　仙間寺　伏見寺　高天寺　牟尼谷

丑寅方分　長岡寺　富貴寺　香具山興善寺　鬼取鶴林寺　金勝寺　千光寺　信貴山

辰巳方分　門王寺　慈光寺

六方衆八方衆

雜載

菩提院方分　寶生寺　極樂寺　（阿曾谷）永福寺　雪別所　西小田原　（隨願寺）東小田原　（中川）成身院　岩船

忍辱山　海住山　（片岡）安養寺　觀音寺　鹿山　（宇多福）灌頂寺

龍花院方分　菩提山　（桃尾）龍福寺　（萱尾）圓樂寺　（三輪）平等寺　長谷寺　（壺坂）南法貴院　（中山）法興寺　澀谷

（鳥見）靈山寺　金峯山

未申方分闕〇下

〔建內記　永享嘉吉文安年中裁斷〕昨日、快算相語云、今度訴訟事、自學侶牒六方衆、於十三重大衆會合、於南都十三重（今又在別知子細）八方大衆令會集成評議了、八方ノ塔アリ、自然有憚テ社參不叶之人ハ參此塔、御本地御座ナリ、令評定、其後於大湯屋（興福寺中大湯屋事也）會合事者、更不改變事也、無裁許者、可及大訴、勿論云々、〇中略

興福寺者、凡六方ノ所也、乾　艮　巽　坤　龍華院　菩提院　以上六方ナリ、是ニ今二方北ト南トノ衆アリ、加ヘテ八方ナリ、八方大衆ト申スハ、興福寺ノ、〇下缺

〔享祿本類聚三代格　二〕太政官符謹奏

請抽出元興寺攝大乘論門徒一依常例住持興福寺事

右得皇后宮職解偁、始興之本、從白鳳年、迄于淡海天朝、內大臣割取家財、爲講說資、伏願永世萬代勿令斷絕、近則裝嚴天朝、福田萬姓、遠則恒轉法輪、奉資菩提者乎、亦中間者、故正一位太政大臣藤原公〇不比等頻割取財貨、添助論衆、迄于聖代、皇后〇安宿媛自減資財、亦增論衆、伏願再興先祖之業、重張聖代之德、三寶興隆、萬代无滅、欲令講說興福寺、伏聽進止者、朝議商量、崇道勸學、无妨佛敎、望依所請、今具事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、奉勅依奏、

天平九年三月十日

〔滿濟准后日記〕正長二年九月廿二日、申終、室町殿〇足利義敎御下向、御行粧珍重々々　廿四日、今日、兩寺（興福、東大、）御巡禮、御行粧如昨日、御手輿也、御先達孝俊僧正著香染前行、諸堂御巡禮、先金堂、次東金堂、

次法花堂、次西金堂、次南面堂也、南面堂ニテ、壇下ニ構御座了、藤氏外ハ不登壇上也、但故鹿苑院殿、○足利義満 去應永六年、此金堂供養時令登壇、於壇上御拜在之、御法體故歟、如何、

〔教訓抄 六〕薪宴 興福寺、東西金堂ニ有之、二月三日ハ、西金堂ノ薪ト名ヅク、ソハ先河上ニ集會シテ、ソレヨリ薪ノ前シテ列參、薪松木也 此御門ヨリ入ル、此間其駒ヲウタフ、ソレ狛笛ヲ吹、之ニ付笙笛也、狛笛ニ付、笙笛事有雑事、近來歌絶テ、樂許リ侍リシ、是ハ光明皇后ニ、河上ニテ上分ヲ進テ、御堂家ヲ祝儀式也、西金堂光明皇后御願也 自然湧出ノ觀音ヲバ、彼ノ御身ト申傳也、 四日ハ、東金堂ノ薪ト名ク、先氷室山ニ集會、上分ヲ進作法也、大鳥ヲタウフ、笛笙笛ヲ付ク、大鼓ヲ打、即古樂振拍子打 東御門ヨリ入、門前ニシテ大鳥ヲ取作法ヲシテ舞也、此風俗大鼓打事、昔通ナラヌ事也 氷室宮ハ興福寺地主、東金堂鎮座ニオハシマスユヱニ、上分ヲ進メ、御堂家ヲ祝儀式也、佛法最初ノ釋迦佛、此御堂ニ御、又樂所ノ氏寺トスル也、

○

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

一乘院 件院者、東寺一長者兼興福寺別當定照僧都建立也、號長講堂、本尊大日如來云々、又在此院艮春日御本地一御殿、不空羂索云々、是彼院主惠信僧正奉鑄之云々、定照任興福寺別當事、去天福元年十月十日、治十四年也、其間補三綱了、永觀元年三月廿三日入滅了、又安毘沙門天、口傳相承之本尊也云々、當時無之歟、此院在勸學院之西、

〔諸門跡傳 三〕一乘院

南都一乘院本願、法務、又興福寺、又金剛峯寺別當、當寺長者、顯密兼學、

定昭大僧都 左大臣師尹公御息、仁敎僧都入室、

寛空僧正受法 密灌 冷泉院御宇安和二年閏五月十日以定昭補、 東寺四長者之始、天祿元

年補興福寺十八代別當、永觀元年三月二十一日寂、七十八歲、

〔嘉永五年雲上明覽大全上〕一乘院御門跡○中略　南都　御里坊石藥師西北角　中沼左京

御領千四百九十二石

御宗旨法相一乘院尊應入道親王　二十八

二品　興福寺別當

仁孝天皇御養子、實伏見貞敬親王御子、

院家　修南院大僧都法印　喜多院大僧都法印　松林院大僧都

院室　教林院大僧都

坊官　高天宮內卿法印　二條宰相法印　內侍原大藏卿法印　北小路中將法橋　高天治部卿法橋

諸大夫　中沼大和守　前田肥後守

侍　中沼但馬守　小南能登守　森田大隅介

大乘院

〔和州舊跡幽考三添上郡〕大乘院

傳へ聞、大乘院は堀川院の御宇、寬治元年二月に造立なり、今の所は、元興寺の別當の住坊たりし、禪定院の跡とかや、むかしの大乘院の跡は、興福寺寺院の內、龍雲院といふ僧坊のほとりなり、本願は隆禪大僧都と申き、左少將藤原政兼朝臣の長男なり、康和二年七月十四日に遷化ありて、大安寺へ葬き、その所は、大安寺觀音堂の北のかたに、松の一本生たる塚是なり、

〔南都七大寺巡禮記〕興福寺

大乘院　件院者、興福寺權別當法印隆禪爲先考建立之、本尊丈六十一面觀音、并多寶塔一基云々、

今無此院、

〔諸門跡傳三〕大乘院

寛治元年二月、隆禪僧都建立、

大乘院本願初祖長谷寺大安寺別當、

隆禪權大僧都　左少將藤原政兼朝臣男　母從三位濟政女、永長元年補二長谷寺別當一、寛治元年二月建立、同年十二月二十八日補二大安寺別當一、康和二年七月十四日寂、六十三、

〔嘉永七年雲上明覽大全 上〕大乘院御門跡〇中略　南都　御里坊梨木町　神足勘解由

御領九百十四石

（御宗旨法相）大乘院御門跡隆溫　四十四

興福寺別當

前大僧正法印　二條故左大臣齊信公御子

新御門主隆芳

大僧都法印　九條左大臣尙忠公御子

院家　松林院大僧都法印

坊官　南院刑部卿法印　南院大藏卿法橋　多門院中將法印　松井兵部卿法橋　福知院式部卿法　福知院侍從法

諸大夫　原修理少進　江守　同造　同伊勢守

侍　上田攝津介　神足加賀介

〔桃花蘂葉〕家門末子入室門跡等事〇中略

大乘院　尊信（室巖寺洞院攝政息）慈信（大善三昧院明寺殿御息）圓　兩僧正置文、并孝覺（已心院後普院關白息）一孝圓（後報恩院關白息）僧正等書狀在ㇾ之、當時尋尊僧正爲二門主一、令二現在一之上者、不ㇾ及二異論一、又經覺大僧正與二家門一如二魚水一、更不ㇾ及二子細一、九條若君入室、是又不ㇾ及二豫儀一、今僧正房（政覺）爲二二條太閤息一、以二室町殿一（于時前左大臣足利義政）猶子分被ㇾ入室、非分之儀也、僧正房、其子細者、又被二覺悟一之人也、

〔教令類纂初集九十三〕正德二壬辰年八月

一乘院殿、大乘院殿、異論之儀ニ付、左之書付二通、繼飛脚を以、松平紀伊守まで遣ㇾ之、紀伊守より二通之書付、傳奏衆へ差ㇾ出之、

一近世以來、興福寺兩門主、爭訟の事、度々におよび、去々年の春、一乘院殿御申之旨有ㇾ之ニ付て、兩門下の耆宿等を召され、兩門相和ぎ、一山無事なるべき所を、相議し可ㇾ申由被ㇾ仰付ㇾ候處ニ、到ㇾ于今、其議猶いまだ決せず、大抵一乘院殿門中において、毎年兩門の高下を論じ、往古以來、寺中三千之僧侶、皆其門下たるよしを申といへども、此等の說其門下の私言にして、古今公論のある所は、其證とすべき事なし、況や又兩門並立し以後、其門主かはりがはり、興福寺寺務拜任の例、歷世相承け、既ニ七百年に及ぶ上は、兩門其高下なき事、別に其證を求むべからず、然るに近世に至り、一乘院殿の門には、皇子入室の御事有ㇾ之を以て、其門室を併せて、大乘院殿の門室に比すべからざる由を申之條、甚以然るべからず、一乘院の本願、大僧都定照以來、三十三世の間、皇子入室の例は未聞えず、皇子入室の御事は、今において僅に三世、もし皇子入室の故を以て、其門室を併せて、大乘院の門室の上に加へられて、其高下相同じからずば、たとひ當寺は、皇親の尊に壓れて、大乘院殿の門下申旨無ㇾ之といふとも、若後代におよびて、入室なるべきの皇子ましまさゞる時に當り、舊に依て、或は攝家あるひは他家の子弟、入室の事有ㇾ之は、大乘院殿の門下、其下たる事を安んずべからず、兩門の爭訟、今日よりも猶甚しかるべきもの歟、又一乘院の門主、三十三世の後におよび、始めて皇子入室の御事なる例によらば、後代に至りて、大乘院の門に、皇子入室の御事あるべからずとは申難し、若兩門の高下相同じからずば、必兩門の爭訟、又今日よりも猶甚しかるべきもの歟、世事の變遷、測識るべからず、若又後代におよびて、大乘院殿の門には、皇子入室の御事ありて、一乘院殿には、往代の如く、或は攝家、或は他家の子弟、入

室の事有之においては、必らず兩門の爭訟、甚しき事、今日のごとくなるべからず、凡天下の大計、深く謀り遠く慮はからざる事をすべからず、若一時の權宜に隨ひて、萬世の長策に及ばれざらむには、兩門の不和、止む時なく、一山之無事を致す期有べからず、然る上は、法親王の御事、もとより皇親の尊崇あるべき所を、兩門室においては、其高下有べからざる所とを相混せらるゝ事なく、其寺門の儀軌においては、往代の成規に依てよろしく御沙汰可有之御事に候、若必らず法親王の故を以、併せて其門室をも相たつとまるべき叡慮有之においては、大乘院殿の門にも、皇子入室の御事可有之候歟、若又大乘院殿の門には、皇子入室の御例無之を以て、此事においては、かなふべからざるの叡思も有之においては、一乘院殿の門にも、當門主の後は、永世に限りて、皇子入室の御事を停められ、往代の如くに、或は攝家、あるひは他家の子弟を以、御附法可有之候歟、此三條の間は、宜しく聖斷の上を以て、兩門の爭訟をば、御裁決あるべき由の御事に候、其學問領之事においては、もとより武家より、御寄附の所に候得者、當代の御旨に任せられ、御沙汰之次第は、可有之御事に候、右之趣を以て、禁裏仙洞の傳奏中迄、宜敷相達べく候也、

八月

〔折たく柴の記中〕六月〇寶永七年二十日、進講訖りし後、詮房朝臣して仰下さる、前代〇德川綱吉の時、南都兩門主、一乘院殿、大乘院殿、爭論の事、すでに御裁斷ありて、御判をなさるべきにおよびて、御他界あり、此事によりて、一乘院門主使者、並にその院家華藏院、發心院等を下して申さるゝ事共あり、しかるに此事の由をば、近衛の相國よくしり給へりとてのたまふは、東求院入道前關白前久、龍山の御事也二人の息男あり、長子は、一乘院門主尊敬大性院と申すこれなり、次子は、三藐院前關白信尹也、神祖には、東求院殿と、年頃したしくせさせ給ひしかば、伏見の御所より、京によらせ給ふたび〳〵、近衛

殿にたちよらせ給ひ、たがひに御枕をならべて、ふしながら、御物語の事などありけり、其時尊敬をば、太郎君と申し、信尹をば、次郎君と申す、その太郎君の十一の時に、つねにこゝに物しぬれど、しかるべきもの進らせしこともなし、なに事にもあれ、申し給へ、其望かなへて進らせむと、仰られしに、我は物ほしとも思はず、我氏寺なれば、興福寺の寺務となりて、其衰しを起さばやとこそおもふなれと、申給ひしかば、こは不可思議の事を、のたまふものかなと仰ありしに、やがて一乘院に、入室の事などありて、つひに彼寺務になされ、絶たるを繼ぎ、廢れたるを興し給ひたりけり、神祖御代の事しらせ給ひし初めに、むかしの御契をたがへられず、其學問料など寄せ進らせらる、此門流においては、たとひ寺務當職にあらずとも、ながく學侶の事等、御沙汰あるべしといふ御朱印をも給らせ給ひたりけり、されば嚴有院公方の御時、故の門主三菩提院殿(眞敬親王)坊かさねて、御朱印をなされ、前代の御時に至ても、一乘院の門主は、維摩會中第六日に、寺務職に任せられ、大乘院の門主は、進講以後、拜任の儀有べしなども、御沙汰ありしに今の大乘院の門主は、御臺所の連枝なれば、内々申されし事どもありし故に、其事中頃變じつひに神祖より、一乘院の門室に寄られし學問料の事をも、大乘院の望み申されしまゝに、御沙汰にはおよびたりきされどいまだ其御判をもなされざるほどに、御代も改りぬれば、この後の事はたゞいかにも、神祖の定め置れし御事の、むなしからず、それより後の代々に因り循がはれし所に、たがふところなからん事こそ、あらまほしけれとの事なり、其事の詳なる所は、奉行所よりまゐらせしものに見えしなり、此たび御沙汰あるべき所をば、しるし下さる、此旨によりて、御さだめの文の草をまゐらすべしと仰下されて、御沙汰の次第をしるされしものに、奉行所よりまゐらせしものを副て、下し給はる、家に歸りし後に給りし物ども、併せ見て、明けの日(二十一日也)の朝、封事を奉る、其大要は、南都兩門爭訟の事、其理の當否は姑く論せず、相國のたまふ所のごとき、ことごとく信ずべからず、神祖伏

見の御所より、近衛殿に渡らせ給ひ、その太郎君、十一歳の時に、御契約の事あるによりて、彼御出家の後、學問料をまゐらせられし由を承り訖ぬ、神祖伏見の御所におはしましゝ御時ならむには、其事東西御和睦ありて、天正十四年十月、御上洛の儀ありしより、後の事とぞ聞え侍る、公卿補任を按するに、三藐院前關白は、御年五十歳にして、慶長十九年十一月二十五日薨せらる、さらば天正十四年の頃は、此殿二十二歳の時也、大性院殿は、其御兄にておはしますと聞えければ、その年のほどは、推はかるべし、いかんぞ神祖の御所にておはしまさず時、十一歳の事あるべき、もし又大性院殿十一歳の御時、神祖御上洛の事ありしとも申さば、たとひ大性院殿の生れ給ふ事、其御弟に一つ二つさきだち給ふとも、その十一歳の頃ほひは、天正の初にあるべし、其頃、神祖御上洛の御事ありとも聞えず、いはむや其頃は、甲斐の武田父子と、遠江國を爭ひて、日夜の御合戰やむ時なし、いかんぞ神祖我國の戰を見すて給ひ、多くの國を打すぎて、御上洛の事ましますべき、これ又必ずなきの御事なり、かれこれを深く考ふるに、其のたまふところの從ひがたき事、既にかくのごとし、いはんや又奉行所よりまゐらせし所のものを見るに、前代御沙汰の次第、こと〲く其理にあたるに似たり、もし此事ゆるし下さるゝ所のごとく、御さだめあらんには、南都兩門の爭訟、やむ事あるべからざるのみにあらず、必ず山門三井寺等の爭訟、うちつゞきて起りぬべきか、また相國ののたふま所によるに、前代の御沙汰は、鷹司殿の事によれるなり、さらばまた、前代の御沙汰すでに訖りし事を、また改めて御沙汰あらむには、世の人もまた、これを近衛殿の御事によれりと申すこと、ゐるまじきともおもはれず、もし御ゆるしを蒙りて、其事を議し申すべきにおいては、敢て心のおよぶ所を盡さゞるべきや、これによりて、昨日下されし所の物ども、今返しまゐらするにはおよばず、仰下さるゝ所によりて、其草を奉らむ事においては、御ゆるしを蒙るべき所なりと申せしなり、○中略七月十日、南都兩門跡、爭訟の議、二册を奉る、その議によられ

て、一乘院殿門下の院家等、召問はしめられ、（華藏院 發心院）また大乘院殿門下の院家をも、召下されて、問はしめられし御事共ありしに、（松林院 普門院）一乘院門下の者ども、答申す所、其詞屈しぬ、其後、兩門相和らぎ、一山無事なるべき所をもて、其議を奉るべき由、仰下されし程に、一乘院殿の院家ふたりともに、病ひし居候、門主の使等（内侍原刑部、喜多坊駿河、）御暇を給て、罷歸らむ事を望申ければ、九月二十五日に、兩門の耆宿等に、仰下さるべきもの、草を奉る、兩門下の輩共、其仰を承て、おの〳〵罷歸りたりけり、其事の詳なる所は、別に錄せし物どもあれば、こゝには其大要をのみ志るせり、（此爭訟の大要は、はじめ慶長五年九月、關ヶ原の戰終りしのちに、神祖大坂の城に入らせ給ひし時、興福寺領の事に付て、僧侶のあらそひありしを、御裁斷ありて、十一月十六日、五師中に、御朱印をなし下され、當時の寺務、一乘院の門主にも、其事志るされし御書をなされしなり、すなはちこれ、大性院尊敬僧正、寺務の時の事也、其職有院殿御在世の頃に、一乘院の門主、三菩提院殿と申しゝ事は、後水尾法皇の皇子、眞敬法親王と申しゝにておはします、此時に至て、むかし神祖一乘院の門主になされし別御朱印は、門室の重寶なるを以て、法皇の御文庫に、御藏め置れしに、すぎにし内裏炎上の時に、やけうせぬ、彼御朱印によられて、當代の御朱印を下し賜らむと、望申されて、彼慶長五年十一月に、大性院殿へなされし御書をうつしたるものを、まゐらせられき、寛文五年十一月三日に、御望申されし旨によられて、御朱印をなされたりき、前代の初におよびて、公家よ[illegible]の仰に、興福寺は藤氏の氏寺にて、代々の天子御外戚の御寺なれば、公家の御沙汰にまかせられたき由の御事なりしかば、其儀に任せらる、眞享年中に至て、一乘院の門主は、維摩會中第六日に、寺務職に任ぜられ、大乘院の門主は、遂講の後に拜任あるべしとは、宣下せられたりけり、そののち、あらたに門下の僧黄衣免許などいふ事をも、始め行はれ、彼寺學問料の事は、神祖一乘院の門室に寄せられし所なれば、たとひ寺務當職にあらずとも、知行せられ、學侶の事に至ても、門室の御沙汰たるべしなどのたまふ事共出來りて、つひに大乘院殿愁訴の事に及び給ふに、その使は、松井兵部とかいひし坊官雙なきものにて、事の由を申ひらきてければ、三菩提院殿はやすからぬ事におもひ給にかくれ給ひ、松井は、此事の御判賜らむことを請申して、年を經し程に、これもこゝにて、病ひし死にけり、一乘院殿の門下にして、神祖別御朱印といふもの、すでに燒うせぬとて、そのうつしをまゐらせし事なれば、覺束なし、餘には、そのうつしにも、御書例と志るされし上は、御朱印にはあらず、まして公家より彼寺務拜任の日をわかたれしかど、いにしへより此かた、兩門かはるがはる其職に任せられし上は、兩門の差別あるべき事にもあらず、また神祖の御書にも、學問料の事、長く一乘院の門室へよせられしとも見えず、寺務當務にあらずとも、これらの事をはじめて、學侶の事等、沙汰あるべしとも見えず、これはたゞ、當時の寺務になられし所なるに、大性院殿、その時の寺務なれば、一乘院殿とはなされしなり、たとへば三井寺の事仰下されしにも、當時の長吏なれば、顯高院殿へとはなされたり、もし一乘院殿の申給ふごとくならんには、たとへ當時の長吏たらずとも、三井寺の事は、長く聖護院の門室にて沙汰せらるべき事也、もし一乘院殿の申給ふ如くに、御沙汰あらんに、聖護院殿よりも、三井寺の事申給ふ事ありて、圓滿院、實相院等の門主の愁訴も起りぬべし、凡てこれらの事ども、某が論ぜし事どもによられて、御推問の事ありしほどに、

〔興福寺濫觴記〕諸堂建立之次第

彼門下の院家、ことごとく闘屈して、まづ神祖の別御朱印といひしものなも、みづからあらためて、神祖の御消息などいふ事になりて、申すほどの事ども、ふるきものどもに見えし所に相合す此所の事心苦しとやおもひけん、二人ともに、打つゞきて、病し死して、其使も罷歸り行しかば、その事いまだ御裁斷には及ばざりき、此年の冬は、我南都におもむきしに、かしこの奉行三好備前守我に語りて、此たび御沙汰の次第、大乘院殿のありがたくおもひ給ふは、いふに及ばず、一乘院院殿門下の僧侶といへども、感じ申さぬものもなしとぞいひける、

喜多院　空晴僧都本願也、天德元丁巳年九月化、

〔諸門跡傳三〕喜多院

一乘院、大乘院、其外院室之始是也、依之號本院、

空晴探題僧都　三類境私記、幷十卷私記作者、天德元年二月五日、現身而天上云々、八十歲、探題、因明相承、

〔寺鑑上〕無本寺寺院

御朱印　高二百八十石　南都興福寺 法相宗　喜多院

〔大和志二添上郡〕佛刹　興福寺(中略)一乘院、大乘院寺務所居、喜多院、修南院、松林院、東北院、謂之院家、其餘僧院八十餘宇、唯寶藏院以世傳鎗術馳名天下、

〔寺鑑上〕無本寺寺院

御朱印　興福寺領高七千七百貳拾壹石餘之内　高三拾五石三斗五升　配當　南都興福寺内 法相宗　寶藏院

大安寺

大安寺ハ、南都七大寺ノ一ニシテ、推古天皇ノ二十五年、聖德太子ノ建立スル所ナリ、初メ大和國添上郡熊凝村ニ在リシヲ以テ、熊凝精舍ト稱シ、舒明天皇踐祚ノ初メ、十市郡百濟川ノ西ニ移シテ百濟大寺ト號シ、天武天皇ノ二年ニ、再ビ之ヲ高市郡ニ移シ、高市大寺ト稱セシ

ガ、幾モナクシテ大官大寺ト改メ、尋デ元明天皇ノ和銅三年、更ニ平城ニ移シ、聖武天皇唐ノ西明寺ヲ摸シテ改造シ、天平十七年大安寺ト改ム、而シテ東西ノ大寺ニ準ジテ南大寺ノ稱アリ、花園天皇ノ朝、大地震ノ爲メ、堂宇破壞シ、終ニ廢絶ニ歸シ、今僅ニ一字ヲ存スルノミ、大安寺緣起ハ、菅原道眞ノ眞筆ニシテ、般若寺ト海龍王寺ト隔年ニ之ヲ預レリト云フ、

名稱所在

〔伊呂波字類抄 太諸寺〕大安寺 皇極天皇元年壬寅九月造之、元者號百濟寺、今改大安寺、

〔拾芥抄 下本諸寺〕十五大寺

大安寺 元大官大寺、

〔壒囊抄 十三〕大安寺モ、三十四代、推古天皇廿五年丁丑立ト云エ共、其時ハ熊凝村ニ建立アリシ故ニ、熊凝ノ精舍ト云キ、廿二年ヲ經テ、三十五代、舒明天皇十一年己亥七月ニ、十市郡百濟河ノ側ニ移サレシ故ニ、百濟大寺ト云シヲ、又其ヨリ四十五年ヲ經テ、四十代、天武天皇即位十三年ニ當ル、白鳳十二年甲申高市郡ニ遷シ改メ造テ、大官大寺ト云、又廿五年ヲ經テ、元明天皇和銅三年庚戌今ノ平城ニ遷テ、大安大寺ト號ス、又廿年ヲ經テ、聖武天皇天平元年己巳ニ更ニ改造テ、大安寺ト云也、是レ以前ニ當朝未ダ寺規ニ不委、此ノ年道慈律師唐ヨリ歸朝シテ、震旦西明寺ノ差圖奏進ス、仍テ改メ造ル者也、是皆五畿內也、

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕大安寺 初名百濟寺、後號大官寺、

推古天皇二十五年、聖德太子草創、始建于熊凝、後遷百濟川邊、名百濟大寺、舒明天皇十一年改號大安寺、遷于此、沙門道慈以唐西明寺爲模範、立大伽藍、本朝七大寺之其一、准東大寺西大寺、俗稱之南大寺、也、菅丞相聖筆緣起有之、然後花園院之朝大地震破壞、堂社僧坊自廢絶焉、惟菅家緣起有之、今般若寺與海龍王寺、隔年預之、

〔和州舊跡幽考 七添上郡〕百濟大寺

百濟川より二町西にあり、川の東に佐味村あり、此川東は十市郡、西は廣瀨郡なり、三重塔一基、堂一字、當世にあるにまかせて、廣瀨郡に記すものなり、

抑此郡のわかちに、ふるきふみどもまち〳〵なり、

玉林抄曰、百濟大寺は今の佐味百濟にはあらず、橘寺の坤、石川といふ所の百濟にして、五條野のほとりに有と云々、此說をおもふに、高市郡なり、然ども聖廟の神筆の大安寺の緣起、又三代實錄、釋書等に、百濟大寺は、十市郡と見え侍れば、玉林抄の高市郡の說もちゆるにたらず、十市郡にある伽藍なるべし、

當世百濟川をへだてゝ、廣瀨郡にかの寺の侍るをおもふに、堂と塔の中間に、弘法大師のほらせ給ひしゑ字の池あり、○中略是をおもふに、弘法大師百濟大寺のむかしをゑのび、百濟の皇宮の跡にうつしかへて、百濟大寺を二度建立ありけるにこそ侍らめ、後の人あきらかにせらるべし、

〔和州舊跡幽考高市郡十六〕大官大寺

俗に講堂といふ、おもふに一字の礎石はありしにかわらず殘り、むかしの講堂の跡なればにや、かくはいふならん、その礎石徑六尺ばかり、柱口四尺五寸、又ほとりに塔の礎あり、心柱などの石、よのつねのものにもあらず、天香久山より十町ばかり南也、又撰集鈔、通要曰、大官大寺の跡は、南淵川のほとりなりと云々、此所よりははるかの南なり、後人さだかにせらるべし、

大官大寺は、舊名百濟大寺と號して、十市郡にありしを、天武天皇二年に高市郡にうつし、封邑七百戶、公田三百町、利稻卅萬束を施し加へられ、大官大寺と改號せさせ給ひし後、十三年を經て、帝御やまひいとおもくわたらせ給ひしかば、○下略

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕大安寺三綱言上

伽藍緣起幷流記資財帳

初飛鳥岡基宮御宇天皇〇舒明之末、登極位、號曰田村皇子、是時小治田宮御宇太帝天皇〇推古召田村皇子、以遣飽浪葦墻宮、令問厩戸皇子之病、勅、病狀如何、思欲事在耶、樂求事在耶、復命、蒙天皇之頼、無樂思事、唯臣伊羆凝村始在道場、仰願奉爲於古御世御世御宇帝皇、將來御世御世御宇帝皇、此道場乎欲成大寺營造、伏願此之一願、恐朝廷讓獻止奏支、天皇受賜已訖、又退三箇日間、田村皇子私參向飽浪、問御病狀、於茲上宮皇子、命謂田村皇子曰、愛哉善哉、汝姪男、自來問吾病矣、爲吾思慶可奉財物、然財物易已、而不可永保、但三寶之法、不絕而可以永傳、故以羆凝寺付汝、宜承而可永傳三寶之法者、田村皇子奉命大悅、再拜白曰、唯命受賜而奉爲遠皇祖、幷大王、及繼治天下天皇御世御世、不絕流傳此寺、仍奉將妻子以衣齋褰土、營成而永與三寶、皇祚無窮自後時天皇臨崩日之、召田村皇子遺詔、皇孫朕病篤矣、今汝登極位、授奉寶位與上宮皇子讓朕羆凝寺、亦於汝毛授部利、此寺後世流傳勅支、仍即天皇位、十一年歲次己亥春二月、於百濟川側子部社乎切排而、院寺家建九重塔、入賜三百戶封、號曰百濟大寺、此時社神怨而失火、燒破九重塔、幷金堂石鴟尾、天皇將崩賜時、勅大后尊久〇皇極此寺如意造建、此事爲事給耳、爾時後岡基宮御宇天皇〇齊明造此寺司阿部倉橋麻呂、穗積百足二人任賜、以後天皇行幸筑紫朝倉宮、將崩賜時、甚痛憂勅止、此寺授誰、參來止、先帝待問賜者、如何答申止憂賜支、爾時近江宮御宇天皇〇天智奏久、開伊髻墨刺乎刺肩負鋤、腰刺斧奉爲奏支、件天皇〇持統奏久、妾毛我妹等、炊女而奉造止奏支、爾時手拍慶賜而崩賜之、以後飛鳥淨御原宮御宇天皇〇天武二年歲次癸酉十二月壬午朔戊戌、造寺司小紫冠御野王、小錦下紀臣訶多麻呂二人任賜、自百濟地移高市地、始院寺家入賜七百戶封、九百三十二町墾田地、卅萬束論定出擧稻、六年歲次丁丑九月庚申朔丙寅、改高市大寺號大官大寺、十三年天皇寢膳不安、是時東宮草壁太子尊奉勅、率親王諸王諸臣百官人等、天下公民誓願賜久、大寺營造近今三年、天皇大御壽、然則大御壽更三年大坐支、以後藤原宮御宇天皇〇持統朝廷爾、寺主惠勢法師乎令鑄鐘之、爾後藤原朝廷御宇天皇〇文武九重塔立、金堂作建、幷丈六像敬

事造之、次平城宮御宇天皇武〇聖天平十六年歲次甲申六月十七日、九百九十四町墾地入賜〇中略

右以去天平十八年十月十四日、被僧綱所牒偁、左大臣宣、奉勅、大安寺緣起幷流記資財物等子細勘錄、早可言上者、謹依牒旨、勘錄如前、今具事狀、謹以言上、

天平十九年二月十一日　　　都維那僧靈仁〇以下署名略

〔大安寺緣起〕中天竺舍衞國祇園精舍、以兜率天宮爲規模焉大唐西明寺、以彼祇園精舍爲規模矣、本朝大安寺以彼西明寺爲規模焉、寺者在大和國添上郡、其寶塔華龕、佛殿僧房、經藏鐘樓、食堂浴室、內外重構、不遑具記、其自小及大蓋起於上宮太子熊凝精舍矣、太子者、用明天皇之第二子也、用明天皇崩、崇峻天皇立、崇峻天皇崩、推古天皇立、推古天皇者、用明天皇同母妹、上宮太子叔母也、太子生而能言、甚有聖智、及壯一聞十人之訴、一々辨明、兼知未然、習釋敎於高麗僧惠慈、秘奧之文莫不貫綜矣、是以父天皇特敬愛、令居南上殿、上宮之名自此而得矣、推古天皇廿五年丁丑、太子爲知將來入定、卽便奏天皇曰、後代帝王多可短祚、非佛法力何敢救護、願建一精舍於熊凝村、修種々佛事、護代々皇位矣、廿九年辛巳、太子薨于斑鳩宮、其將薨之時、天皇聞而愍之、勅田村皇子、慶問太子病、其勅曰、朕聞太子寢疾將遷他界、每加慰問言與涕並、痛哉哀乎、其難再遇、若有所願朕將隨之、太子報天皇曰、臣幸以宿恩忝生皇門、欲報之德、昊天罔極、況非其器久執朝柄、聖恩未酬、浮生將盡、以此爲恩、亦無所願、但欲以熊凝精舍獻朝廷成大寺、是只保護皇胤之故也、又私語皇子曰、善哉皇子、是我姪男、滿朝群臣、濟々之中、汝銜勅命來而訪我、以此精舍又附屬汝、將令汝子孫世々繁昌矣、是皇子稽首再拜、謹承其旨、只以所報、還奏天皇、天皇且悲且喜、欲起熊凝精舍以成大伽藍矣、推古天皇崩、舒明天皇立、天皇者卽田村皇子也、時人以爲皇子信受上宮太子遺記之故、自得佛力登帝位也、天皇踐祚之初、百濟河側擇勝地移精舍、號曰百濟大寺、復以封邑三百戶、良田二百町、種々財寶、一一施入、令諸惠衆學侶集住于寺中、矣、爾時造寺司等、多伐社樹、社神委怨、放火燒寺、天皇愁悶之間寢膳乖常、遂崩于百濟宮矣、及崩以寺

付屬皇極天皇、天皇即位、令造寺司阿倍椋橋、穗積百足等、遵先帝遺旨、日夜營造之、天皇以寺付屬孝德天皇、天皇且營寺院、且造佛像、天下之政更無他事、孝德天皇崩、齊明天皇立、此天皇者前皇極天皇復更即位也、及崩付屬天智天皇、天皇造寺之間、又造丈六釋迦佛像幷脇士菩薩等像、安置于寺中矣、天皇造立佛像之初、臥錦帳成祈念、其曉有二女、來自天上、容花端麗、香氣遍滿、禮拜此一像、供養妙花、讃嘆良久、謂天皇曰、今見此像、好相已具、與靈山實相毫釐無相違、可謂此土衆生甚有淸信、其言未終、飄然入雲、又開眼之日、瑞應不一、紫雲滿空、妙香沸天等是也、天智天皇崩、天武天皇立、天皇即位二年、任造寺司大紫冠御野王、大錦下紀訶多等、移伽藍於高市地矣、施加封邑七百戸、公田三百町、利稻卅万束等、改名大官大寺矣、後十三年天皇不豫、於是東宮草壁皇子尊奉勅率諸王臣百官人等、共往詣大官大寺、各發願曰、天皇御願欲於此伽藍開大法會矣、而其願未企、晏駕將出、縱雖定業、願延三年御壽、令遂此大願矣、于時天皇得善夢、延寶算如其所願、三年之間刻鏤佛像、繕寫法文、開大法會之後、崩于藤原宮矣、持統天皇相傳興隆、資財奴婢、種々施入、又加銅數千斤、改舊銘鑄洪鐘、開一日齋會度千口沙彌、持統天皇崩、文武天皇立、起九重塔、施入七寶物、又於寺內度五百人、追感天智天皇御願、欲造丈六尊像、招求良工、未得其人、天皇合掌向本尊發願曰、願遇木聖奉刻金容、其夜有一沙門、謂天皇曰、往年造此像者是化人也、非可重來、雖有良匠、猶有斧斤之蹟、雖云畫師、豈無丹靑之訛、宜以大鏡懸於佛前、拜其映像、其映像則非圖非造、三身具足、見其形者、應身之體也、窺其影者、化身之相也、觀其空者法身之理也、功德勝利無過斯焉、天皇覺而歡喜、知如來之應願、即以大鏡懸於佛前、請五百僧設大供養、其後元明天皇、飯高天皇、代々相傳、幢幡寶蓋、田薗奴婢、種々施入、和銅三年庚戌、移伽藍及丈六佛像等於平城、聖武天皇奉遵先帝遺詔、日夜紹隆此寺、遍降綸命搜求良工、時有稱沙門道慈者、奏天皇曰、道慈問道求法、自唐國來聖朝、但有一宿念、欲造大寺、偸圖取西明寺結構之體、天皇聞而大悅、以爲我願滿也、天平元年己巳、更勅道慈、改造此寺、即以道慈補律師、兼賜食封一百戸、褒賞有員、不具記之、

大寺、以爲大安寺、詔曰、令天下太平安樂之義也、同國復有東大西大兩寺、故俗呼爲南大寺、爲外從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村、去七月十七日仰偁、遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讃岐介紀朝臣長谷雄傳宣、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、宜須令大安寺司等勘申彼寺建立代々緣起者、仍令勘出從流記十二卷中、進知弘仁承和八年之宣旨等例、略所注進如右、

寛平七年八月五日

都維那傳燈法師位恩寛
寺主傳燈大法師位朝侶
上座傳燈大法師位恩成
別當傳燈大法師位壽令
俗別當遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣

〔南都七大寺巡禮記〕大安寺（大和國添上郡平城左京六條三坊）○中略

建立事

件寺者、上宮太子之御願也、太子入滅後、推古天王相承而造、始者攝州在熊凝村云々、舒明天皇建百濟河邊、遷立件寺、改熊凝之名云百濟、其後爲神火燒失、皇極天皇又改造之、天智天皇御時建丈六釋迦像、開眼供養之日、紫雲滿空、妙音聞天云々、天武天皇又移造高市地、名云大官大寺、其後依夢想懸佛前鏡、而奉供養、請五百僧堂中、設此會云々、元明天皇和銅三年、又遷奈良京、聖武天皇相承而造之、高僧導慈律師爲求法大寶元年入唐、養老二年歸朝、其時奏天皇、而以大唐西明寺圖建之、又天平元年、以導慈爲律師云々、口傳云、中天竺舍衞國祇園精舍者、兜率天摩尼寶殿造之、大唐西明寺者、祇園精舍造之、日本大安寺者、寫西明寺造云々、後一條院寛仁年中、西塔幷講堂、食堂、寶殿、經藏、鐘樓等、凡廿餘院、拂地燒失、但木佛幷大師造之佛奉取出了、今所拜見釋迦者、非昔佛云々、於昔佛者燒失畢云

堂塔

云

〔和州舊跡幽考四添上郡〕大安寺〇中略廢亡をしらず、わづか一むかしにやなりけん、阿誰といふ盲人あり、靈跡の絶なんをなげき、觀音の像一軀ののこらせ給ふを修補し、わづかに二間四面の堂を建立して、大安寺のしるしとなせり、野府記にいはく、人王六十八代、後一條院治安三年七月二十日、大安寺杣の司材木をあつめる解文、又柱十六本淀津よりひきよすべきのおほせあり、撿非違使成通、貞證等、無事につとめけるよし見えたり、人王百三代、後花園院の御宇、大地震に堂社僧坊あれ果ぬれば、修理の勸進せり、勸進帳それよりをのづからに絶はてけるとなり、只靈山も鳥の宿り、祇園も鹿のふしどのみ、慶長年中、淨家の和尚、大安寺にまうでられしに、諸像二間四面の草室にかさねをき、本尊も分々にわかれ、佛面は庭の芝生のしきものとなせり、或和尚拾來て住楢にをかれしよし、述作の書に見えたり、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕伽藍緣起幷流記資財帳〇中略

合寺院池壹拾伍坊四坊塔院、四坊堂、幷僧房等院、一坊半禪院、食堂、大衆院、一坊池、幷岳、一坊半賤院、一坊苑院、一坊倉垣院、一坊花園院、

合門玖口佛門二口、在神王金剛力士、梵王、帝釋、婆斯匿王、毗婆娑羅王形、僧門七口、

合堂參口一口、金堂長十丈八尺、廣八丈、柱高一丈八尺、一口、講堂長十四丈六尺、廣九丈二尺、柱高一丈七尺、一口、食堂長十四丈五尺、廣八丈六尺、柱高一丈七尺、

合樓貳口一口、經樓長三丈八尺、廣二丈五尺、一口、鐘樓丈尺如經樓、

合廊壹院金堂東西脇各長八丈四尺、廣二丈六尺、高一丈五寸、東西各長廿丈五尺、廣二丈六尺、高一丈五寸、

合食堂前廡廊□東西各長五丈五尺、廣一丈三尺、高一丈五寸、

合通左右廡廊陸條一行經樓、一行鐘樓、長各二丈七尺、廣一丈四尺、高八尺、二向講堂東西長各九丈、廣一丈、高一丈五寸、一講堂北廊長五丈二尺、廣一丈八尺、高一丈八尺、一食堂長九丈九尺、廣一丈八尺、高八尺五寸、

宗派寺格

寺領

合僧房壹拾參條二列東西大房列、長各廿七丈四尺五寸、廣二丈九尺、高一丈五寸、二列東西二面大房北列、長各廿四丈五尺、廣高如上、二列東西南列中房、長各廿七丈四尺五寸、二列東西中房北列、長各廿九丈一尺、廣三丈、高一丈一尺、二列北大房、長各十二丈五尺、廣三丈九尺、高一丈五寸、一列北東中房、長廿七丈、廣三丈、高一丈、一列小子房南列、長十丈、廣一丈二尺、高九尺、一列東小子房、長廿九丈一尺、並葺檜皮、

合並屋貳口並六角、同各長一丈、高九尺、在僧房院、

合病直屋陸口二口金堂東西、長各一丈三尺、廣八尺三寸、二口南大門東西曲屋、長各二丈四尺、廣一丈、高七尺五寸、葺瓦二口、南中門東西長各一丈四尺、廣一丈、高八尺、

合温室院室參口一口長六丈三尺、廣二丈、一口長五丈二尺、廣一丈三尺、一口長五丈、廣二丈、並葺檜皮、

合廚院舍利舍捌口堂一口、長七尺、廣四尺、高一丈四尺、僧房六口、一口長六丈三尺、廣三丈八尺、三口長五丈、廣二丈、一口長十丈八尺、廣一丈八尺、一口長四丈、廣一丈五尺、廊一條長四丈、廣一丈二尺、以上葺檜皮、

合大衆院屋陸口一口葺瓦五口、葺檜皮一廚、長二十二丈、廣五丈、高一丈一尺、一竈屋、長十一丈四尺、廣七丈二尺、高一丈八尺、葺瓦二維那房、長各七丈七尺、廣二丈八尺、高一丈六尺、一井屋長七丈七尺、廣三丈、高一丈四尺、一碓屋長五丈、廣二丈、

合政所院參口一口長七丈、廣四丈、高一丈四尺、一口、長五丈、廣三丈、高一丈一尺、以上葺檜皮、一口長九丈、高一丈三尺、高三丈葺草、

合倉貳拾肆口之中雙倉四口、板倉三口、並在大衆院、甲倉一口、在禪院、板倉二口、甲倉十三口、並在倉垣院、

以前皆伽藍內蓄物如件

〔三代實錄 清和 二十九〕貞觀十八年七月十八日癸巳、雷雨、是日、大安寺塔震動、

〔僧綱補任抄出 上〕前權少都源信

寬仁元年丁巳三月一日夜、大安寺燒亡了、

〔攝壤集 上 寺院〕律。家。

大安寺

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事。○中略 成。實。宗。本寺者大安寺也。○中略 已上是を八宗と云、

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕伽藍緣起幷流記資財帳○中略

合食封壹阡戶在二土佐、備後、播磨、丹波、尾張、伊勢、遠江、信濃、相模、武藏、下野、常陸、上總等國一

參佰戶　右飛鳥岡基宮御宇天皇○舒明歲次己亥納賜者

柒佰戶　右飛鳥淨御原宮御宇天皇○天武歲次癸酉納賜者

合論定出舉本稻參拾萬束在二遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、常陸等國一

右飛鳥淨御原宮御宇天皇歲次癸酉納賜者

合墾田地玖佰參拾貳町

在二紀伊國海部郡木本鄉一佰柒拾町　四至東百姓宅井道、北山、西牧、南海、

若狹國乎入○遠敷郡島山佰町　四至四面海

伊勢國陸佰陸拾貳町　員辨郡宿野原伍佰町開田卅町、未開田代四百七十町、　四至東鴨社、南坂河、西山、北丹生川、　三重郡宮原肆拾町開十三町、未開田代廿七町、　四至東賀保社、南峯河、北大川、西山限、　奄藝郡城上原四十二町開田十五町、未開田代三十七町、

四至東濱、南加和瓦社井百姓田、西同田、北濱道之限、　飯野郡中村野八十町開田三十町、未開田代五十町、　四至東南大河、西横河、北百姓家井道、

右飛鳥淨御原宮御宇天皇歲次癸酉納賜者

合水田貳佰壹拾陸町玖段陸拾捌步

大倭國六十町三段三百步

近江國百五十六町五段百廿八步

右飛鳥岡基宮御宇天皇歲次己亥納賜者

合今請墾田地玖佰玖拾肆町

伊勢國六百四十四町　員辨郡志理斯野百町　四至東山井河、南百姓宅、西岡本、北川井山、　同郡阿刀野百町

四至東百姓墾田御井、南武賀河、西高山、北河胡登山道、　三重郡赤松原百町開八町、未開田代九十二町、　四至東上無淸泉、南甲社山道、北郡界道、西山之限、

同郡河內原六十町開六町、未開田代五十四町、　四至東椿社、南鎌山登道、西山、北牧木之限、　同郡釆女鄉十四町開二町五段、未開田

代十二町五段、　四至東公田、南岡山、西百姓宅、北三重河之限、　同郡日野百町　四至東郷濱、南大河、西細川、北岡田里之限、　鈴鹿郡大野百町　四至東北野、西高山、南石間河之限、　河曲郡牛屋窪二十町　四至東島沼橋、北南岡、西棒迫之限、　奄藝郡長濱五十町　四至東海、南沼、西河道、北道之限、

播磨國壹拾伍町開六町、未開九町、　印南郡五町伊保　四至東松原　　赤穗郡十町多太野　四至東横村前、南骨前、西麻生前、北百姓熟田、

備前國壹佰伍拾町開廿三町、未開一百廿七町、　上道郡五十町大邑眞葦原　四至東大守江、南海、西石間江、北山、　御野郡五十町長江原　四至東丹比眞人墾田、南海、西津高界江、北石木山之限、　津高郡五十町比美葦原　四至東堺江、南海、西備中界、北山井百姓墾田堤之限、

紀伊國伍町　海部郡木本鄕葦原　四至東川、西百姓熟田、南松原、北山之限、

近江國貳佰町　野州郡百町自郡北川原井葦原　四至東百姓熟田、西川、南里、北山之限、　愛智郡百町長蘇原　四至東中海谷東上道、西秦武藏東上道、南氷室度、北胡桃按度、

伊賀國貳拾町　阿拜郡拓殖原　四至東山、西百姓熟田、南路、北山、

美濃國肆拾伍町　武義郡廿五町墾江野　四至東大岳、西縣岳、南路、北熟田之限、　大島野廿町　四至東大河、西山、南北百姓家之限、

右依前律師道慈法師、寺主僧敎義等敬白、云城宮御宇天皇○聖武　天平十六年歲次甲申納賜者、

合國地貳處一在左京七條二坊十四坪、一在左京四條三坊十六坪、

合處々庄拾陸處　庄々倉合廿六口、屋卅四口、

大倭國五處一在十市郡千代鄕、一在高市郡古寺所、一在山邊郡波多蘇麻、一在式下郡村屋、一在添上郡瓦屋所、

山背國三處相樂郡泉木屋幷園地二町、東大路、西薬師寺木屋、南自井一段許退於北大河之限、一棚倉瓦屋、東谷上、西路、南川、北南大家野之限、乙訓郡一處在山前鄕、

攝津國一處在西成郡長溝鄕庄內地二町、東田、西海部船津、南百姓家、北路之限、

近江國六處栗太郡一處、野洲郡一處、神前郡一處、愛智郡一處、坂田郡一處、淺井郡一處、

什物

伊賀國二處（伊賀郡大山縣厩庄一處、阿閉郡拓殖庄一處、）

〔新抄格勅符抄〕大安寺千五十戸、（癸酉年施二三百戸一、丙戌加二施七百戸一、天平寶字五年正月加二五十戸一、）伊勢百戸、尾張五十戸、遠江五十戸、相模百戸、上總百戸、常陸百戸、信乃五十戸、武藏百戸、下乃百戸、丹波五十戸、播万五十戸、備後五十戸、

〔大安寺伽藍縁起幷流記資財帳〕大安寺三綱言上

伽藍縁起幷流記資財帳（○中略）

合佛像玖具（壹拾漆軀）

丈六佛像貳具

右淡海大津宮御宇天皇（○天智）奉レ造而請坐者

金埿銅像一具

右不レ知二請坐時世一

宮殿像二具（一具千佛像、一具三重千佛像、）　金埿雜佛像參具　木葉形佛像一具　金埿灌佛像一具

金埿雜佛像三軀　金埿太子像七軀　金埿菩薩像五軀

合繡佛像參張（一張高二丈二尺七寸、廣一丈二尺四寸、二張高各二丈、廣一丈八尺、）

一張像具二脇侍菩薩八部卅六像一

右袁智天皇（○此據二長暦一恐孝德天皇）坐二難波宮一而庚戌年冬十月始、辛亥年春三月造畢、即請、

一張大般若四處十六會圖像　一張華嚴七處九會圖像

右以二天平十四年歲次壬午一奉下爲二十代天皇一前律師道慈法師、寺主僧敎義等奉上レ造者、

織絨佛像一張

畫佛像六張

右不レ知二世時一

繡菩薩像一張

右以丙戌年七月、奉爲淨御原宮御宇天皇〈○天武〉皇后幷皇太子奉造請坐者、

合菩薩像八張〈並畫像〉

即四天王像四軀〈在佛殿〉

右淡海大津宮御宇天皇〈○天智〉奉造而請坐者、

攝四天王像二具〈在南中門〉

右天平十四年歲次壬午、寺奉造、

即宍色菩薩二軀　即羅漢像十軀

即八部像一具〈並在佛殿〉

右天平十四年歲次壬午、寺奉造、

羅漢畫像九十四軀　金剛力士形八軀

梵王帝釋波斯匿王毗婆娑羅王像〈並在金堂院東西廊中門〉

右平城宮御宇天皇〈○聖武〉以天平八年歲次丙子造坐者、

合一切經一千五百九十七卷〈部帙卷數如別錄二卷〉

右平城宮御宇天皇、〈○元正〉以養老七年歲次癸亥三月廿九日請坐者、

合部足經一百十五部〈之中、百十四部人々坐奉、〉

金光明經一部八卷

右飛鳥淨御原宮御宇天皇〈○天武〉以甲午年請坐者、

合雜經五百七十二卷〈之中、百七十二卷、人人坐奉、經名如別錄、〉

金明般若經一百卷

右飛鳥淨御原宮御宇天皇、以₂甲午年₁坐奉者、

合律八十八卷別名如記

合論疏玄章傳記總十六部卅七卷、部足論十一部、疏玄章別記合四部十四卷、別卷［　］論卅二卷、別名卷數如₂別錄₁、

合典言四卷　書法一卷○下略

用途

〔三代實錄 七清和〕貞觀五年七月廿七日丁巳、勅以₂新錢一千貫文₁、施₂入諸大寺₁、充₂修理料₁、中宮職一千廷、加₂充同料₁、東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺各錢百貫、鐵百廷、

寺職

〔榮花物語 十六本の雫〕國の守よりはじめ、さるべき寺の別當ども、宮のおまへ○一條中宮彰子に御くだものまいらする中に、えもいはずおほきなるおほづゝみに、あかきつなつけてひきいだしたり、おどろ〳〵しういかめしき事かぎりなし、大安寺別當大威儀師あんてうがまいらせたるなりけり、なかを御らんずれば、さま〴〵のくだ物を、みなものゝかたにつくりなどして參らせたるなりけり、關白殿○藤原賴通などもいみじう御覽じけうせさせ給て、これいさゝかそこなひあやまたで、京にまいらすべきよしおほせ給て國守まさもとの朝臣にあづけ給はせつ、たいらかに事なくてかへらせ給ぬ、

造寺司

〔大安寺伽藍緣起幷流記資財帳〕後岡基宮御宇天皇○齊明造₂此寺₁司、阿倍倉橋麻呂、穗積百足、二人任賜、

〔日本書紀 二十九天武〕二年十二月戊戌、以₂小紫美濃王、小錦下紀臣訶多麻呂₁、拜₂造高市大寺₁司、今大官大寺是

〔大安寺緣起〕天平十七年乙酉、改₂大官大寺₁、以爲₂大安寺₁、

〔續日本紀 二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、造宮官准₂職、造大安藥師二寺官准₂寮、　二年八月己亥、以₂正五位上高橋朝臣笠間₁、爲₂造大安寺司₁、

〔續日本紀 二十八稱德〕神護景雲元年三月戊午、幸₂大安寺₁、授₂造寺大工正六位上輕間連鳥麻呂外從五位

雜載

下、

〔東大寺要錄七〕東大寺權別當官符事

太政官牒　東大寺○中略

萬壽二年十二月廿九日　　造大安寺勅官大夫正六位上大宅

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱、及大安、藥師○中略等寺印、各頒本寺、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年五月己卯、於宮中、及大安、藥師、元興、興福四寺、轉讀大般若經、爲消除災害、安寧國家也、

〔續日本紀十七聖武〕天平二十年四月壬戌、於大安寺誦經、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應令大安寺每年修法華經會事

右別當傳燈大法師位平等表偁、釋教興隆、傳法賴焉、無明迷徒、有識爲燭、如今此寺、僧伽稍多、學徒復衆、權實之疑、日々佇聞、他說之諍、人々難決、伏請准興福藥師兩寺維摩最勝等會、每年八月演說件經、妙法眞味、先爲國家而薰修、甚深奧義、廣及群生以引攝、但會用途料充以寺家物者、大納言正三位兼行左近衞大將民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅依請、仍須其立義及第者、准興福寺維摩會預安居講師、

天長九年十月三日

〔續古事談四神社佛寺〕大安寺ノ尺迦佛ハ、天人ノツクリタル也、ソレヲウツシテ佛師康尙此佛ヲツクレリ、維敏滿仲ナドイフ武者ヨリ始テ結緣助成セリ、假堂ヲ作テ始テ五時講ヲ行フ、時ノ明匠日ゴトニ請ニオモムク、所謂山ノ座主花山嚴久、僧都横川明豪、僧正東塔靜仲供奉、靜昭法橋、淸範律師也、說經論義コトバヲ盡テ、オギロヲキハム、願文ハ大江匡衡ツクリ、佐理宰相淸書セラレタリ、イカニメデタカリケム、思ヒヤルベシ、聽聞ニハ山ニハ惠心檀那ノ僧都ヨリ始メ、奈良ニハホ

島眞興僧都清海上人已下七大寺コゾリテアツマル、內記上人三川入道ナドサマアル人、ノコルハナカリケリ、結緣ノ爲ノミニアラズ、人多夢ノツゲアリケリ、此會ニアヘハム人ハ、三途ヲハナレテ淨刹ニムマルベシトイフ、又靈山ノ尺迦アヅカリ給ナドミタリケリ、第三日講師靜仲高座ノ上ニテ、南無大恩敎主釋迦大師トオガミタリケレバ、聽聞集會ノ人同時ニトナヘテ、五體ヲ地ニナゲテ禮拜シケリ、ハカラズ今日尺尊フタヽビイデキ給ヘリトゾ、ヲノ〳〵隨喜瞻仰シケル、時明朝臣米千石、造堂ノ料ニ施入シケリ、其後コノ所鴨河水ミナギリ入テ、苑池ホド〳〵水底ニナリヌベカリケレバ、上人廣幡院移作ケリ、コノ所ハ顯光左大臣ノ家也、昔庶明中納言スミケリ、古老ツタフラク、行基菩薩此地ヲミテ、三災不動ノ所也、尊重スベシトノ給ヒケリ、

〔日本略記〕一九品之淨土之事、〇中略 下品下生は大安寺也、是を九品といふ也、

名稱　所在

元興寺

元興寺ハ、大和國添上郡奈良ニ在リ、元正天皇靈龜二年五月建立スル所ナリ、此寺奈良遷都ノ時、同國高市郡飛鳥ノ元興寺ヲ遷ス所ナリ、宜シク本元興寺篇ヲ參看スベシ、

〔大和志二 添上郡〕佛刹　元興寺　元興寺町、又名奈良飛鳥寺、續日本紀曰、靈龜二年、始移元興寺於左京六條四坊、卽此、金堂、五層塔今猶存焉、子院有三、曰極樂院、在中院町、釋智光所居、曰小塔院、在西新屋町、僧正護命所住持、曰十輪院、有朝野宿禰魚養之墓、在十輪院町、其餘藥師町藥師堂、吉祥寺町吉祥天住、阿字萬字町及南室辻北室鵜福院等、皆舊界內云、

〔和漢三才圖會七十三 大和〕元。興。寺。　在奈良〇添上郡之南　寺領五十石

推古天皇四年、於高市郡飛鳥之地、立四門之額寺、其一也、蓋蘇我馬子、討守屋時、發誓、退治後奉勅建之、名法興寺、又名飛鳥寺後改元興寺、元正天皇靈龜二年遷于新都奈良、中古以來衰廢、今所存唯五重塔一基、觀音堂一宇耳、

創建沿革

〔南都七大寺巡禮記〕元興寺大和國添上郡平城左京五條四條七坊之内〇中略

當寺元明天皇建立云々、敏達天皇御宇十三年九月、自百濟國渡馬瑙之彌勒像、則安本元興寺金堂、云々、件本元興寺者、橘寺之西北方、但今礎許也、

元明天皇自高市郡藤原宮遷都于添上郡之次位、以前事、元正天皇改本元興寺、於奈良京遷給時、彼像等皆奉移新元興寺云々、彼瑪瑙像者安本寺間、多武峯僧盗取、其座許相殘也、元正天皇養老六年壞本寺、聖武天皇天平十七年造奈良元興寺云々、推古天皇代、施入田地、悉以絶之云々、

〔和州舊跡幽考〕三添上郡元興寺寺領五拾石、當代眞言宗、

元興寺はをところへ果て、五重塔一基、大日如來います、又堂一宇觀音菩薩をすへたり、此觀音の像は、長谷の觀音をつくりし靈木の、第二のきれにてきざみぬれば、長谷にまうでぬる人は、まづ此觀音にまうでぬれば、事のかなふ事かならずに侍る、御順禮記夫當寺は、推古天皇四年、高市郡飛鳥の地にたて給ひて、日本紀その四門の額は、南に元興寺、北に法滿寺、東に飛鳥寺、西に法興寺とかけられたり、又建興寺、又建通寺ともいへり、玉林抄、御順禮記其後人王四十三代、元明天皇和銅三年、高市郡藤原の宮より、都をならにうつされし日、御門飛鳥寺に行幸なり給ひて、是佛法元興の場なり、件の寺、奈良にうつし給ひなんと、勅言おはしましき、三代格くはしくは帝王編年にあり、四十四代、元正天皇靈龜二年五月、元興寺をならにうつし、左京の六條四坊にたつる、續日本紀又同御宇養老二年八月、法興寺を新京にうつせしよし見えたり、續日本紀靈龜二年より養老二年迄は、わづか二三年を經る、靈龜二年に元興寺をはじめて、養老二年に成就せるにや、かさねてあらため給ふべし、元興寺法興寺異名、同寺也、扨高市郡元興寺は、舊都にありて本元興寺といひ、新京ならにはあらたにたて、、新元興寺といへり、帝王編年佛像などは半うつされしとかや、玉林抄靈龜二年より延寶七年迄、凡九百六十四年か、

〔帝王編年記十元明〕和銅三年、造新元興寺、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應令本元興寺法華供得業僧預維摩會竪義事

右得彼寺傳燈住位僧金耀牒偁、謹撿案內、此寺佛法元興之場、聖敎最初之地也、去和銅三年、帝都遷平城之日、諸寺隨移、件寺獨留、朝庭更造新寺、備其不移之闕、所謂元興寺是也、于時初立六宗、分業相傳、厥後聖武天皇慨法音之移新都、嘆傳燈之絕本寺、六宗之外、建法華供、傳說之迹于今不止、試複之輩、專寺多數、夫維摩會、爲令法久住、勸勉後學也、而此寺獨不預件色、望請准法隆、新藥師等寺例、以預件竪義、然則建供之迹、後代永傳、苦學之徒、當今無倦、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅准法隆、新藥師、崇福等寺、依次預之、

貞觀四年八月廿五日

〔今昔物語十一〕聖武天皇始造元興寺語第十五

今昔、元明天皇、奈良ノ都ノ飛鳥ノ鄕ニ、元興寺ヲ建立シ給フ、堂塔ヲ起給テ、金堂ニハ、□□丈ノ彌勒ヲ安置シ給フ、其彌勒ハ此朝ニテ造給ヘル佛ニハ不御、昔シ東天竺ニ生天子國ト云フ國有リ、國王ヲバ長元王ト云フ、○中略其コニシテ童子門ヲ閉テ、人ヲ不寄シテ佛ヲ造ルニ、國ノ人密ニ門外ニシテ聞ケバ、童子一人シテ造ツト思フニ、四五十人計シテ造音有リ、奇異也ト思フニ、第九日ト云ニ、童子門ヲ開テ、佛ヲ造リ出タル由王ニ奏ス、王急テ其所ニ行幸シテ、佛ヲ禮シテ宣ハク、此ノ佛ヲバ、何佛トカ名付ルト、童子ノ云ク、佛ハ十方ニ在マセドモ、是ハ當來補處ノ彌勒、造リ奉レル也、第四兜率天ノ內院ニ在ス、一度此ノ佛ヲ禮スル人、必ズ彼ノ天ニ生レテ、佛ヲ見奉ルト云フ、○中略然ル間、白木ノ國ニ國王有リ、此佛ノ靈驗ヲ傳ヘ聞テ、何デ我ガ國ニ移シ奉テ、日夜ニ恭敬供養セムト願ヒケルニ、其國ニ宰相有リ、心極テ賢ク思慮深カリケリ、國王ニ申テ、宜ヲ崇テ彼ノ國

ニ渡リテ、構ヘ謀テ、密ニ此佛ヲ取テ、船ニ入テ、〇中略本國ニ返テ國王ニ奉ル、王喜テ佛ヲ禮シテ、本堂ノ繪圖ヲ以テ、忽ニ伽藍ヲ建立シテ、此佛ヲ安置シ給ヒツ、其後僧徒數千集リ住シテ佛法盛也、但シ佛ノ眉間ノ光无シ、其ヨリ數百歲ニ及テ、其寺ノ佛法漸ク滅スル比、堂ノ前ノ海ニ、不知ヌ島近ク有テ、波堂ノ前ニ懸ル、僧徒此ノ波ニ恐テ皆去ヌ、寺ニ人不住マ、然ル間、我朝ノ元明天皇、此ノ佛ノ利益靈驗ヲ傳ヘ聞給テ、此ノ朝ニ移シ給テ、伽藍ヲ建立シテ安置奉ラムト思ス願有ケルニ、國王ノ外戚ニ僧有リ、佛ノ道ヲ行フ人也、亦心賢ク思慮有リ、國王ニ奏スル樣、我レ國王ノ宣ヲ奉テ、彼ノ國ニ行テ、其佛ヲ取奉ラム、吉々三寶ニ祈請シ給ヘト、國王喜ビ給テ、僧彼ノ國ニ至テ、晝夜ニ彼ノ寺ノ堂ノ前ニ船ヲ漕寄テ、三寶ニ祈請シテ、密ニ佛ヲ取テ船ニ入奉テ、漕去テ遙ニ□□□□□□□□□□云フニ、我ガ朝ニ佛ヲ渡シ奉レリ國王□□□□□□□以テ、今ノ元興寺ヲ建立シテ、金堂ニ此ノ佛ヲ安置シ給ヘリ、其後此ノ寺ニ、僧徒數千人集リ住シテ、佛法盛也、法相、三論二宗ヲ兼學シテ、多ノ年序ヲ經ルニ、寺ノ僧末代ニ及テ彼ノ、東天竺ノ長元王ノ忌日ヲ可勤ト議シテ、毎年不闕勤ルニ、一人ノ荒僧有リ、極タル非性人也、其ガ云ク、何ノ故有テカ、我朝ノ元興寺ニシテ、天竺ノ王ノ忌日ヲ可勤キゾ、自今以後ハ、更ニ不可勤ト、非道ニ行フ、滿寺ハ何也トモ何デカ本願ノ忌日ヲバ不勤ルベキト云フ程ニ、大キニ論出來テ、互ニ諍ケルニ、非性ノ僧ノ門徒ハ廣クテ、滿寺ノ僧ノ、忌日可勤シト行フヲ皆追ツ、然レバ多ノ僧、東大寺ニ移シヌ、其間事ニ觸テ、兩寺不和ニシテ、俄ニ合戰スル時、老僧ノ所行ニ非ズト云ヘドモ、惡ニ被引テ甲鎧ヲ著テ、法文聖教ヲ不持シテ、諸堂ニ弃テ、十方ニ散失ヌ、若僧ハ我ガ師逃失ナバ、我等亦此ノ寺ニ可住キニ非ズト云テ泣々各失散ヌ、然バ五日ノ内ニ千餘人ノ僧皆失畢ニケリ、其ヨリ元興寺ノ佛法ハ絕タル也、但シ彼ノ彌勒ハ于今御マス、化人ノ造奉ル佛ニ御マセバ、糸貴シ、亦天竺震旦本朝三國ニ渡リ給ヘル佛也、正ク度々光ヲ放テ、歸敬スル人、皆兜率天ニ生タリ、世ノ人尤モ禮可奉ト、奈良ノ元興寺ト

堂塔

云フ是也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔續日本紀 七 元正〕靈龜二年五月辛卯、始徙建元興寺于左京六條四坊、

〔續日本紀 八 元正〕養老二年九月甲寅、遷法興寺於新京、

〔大和志 四 平群郡〕佛刹　中宮寺在法隆寺艮隅、舊在法隆寺東、一名斑鳩尼寺、又曰法興寺、養老二年九月、遷法興寺於新京、蓋是乎、

〔續日本紀考證 三 元正〕元興寺舊在高市郡飛鳥地、(中略)狩谷氏曰、養老二年九月紀云、遷法興寺於新京、法興寺元興寺一名、蓋是時始移、至養老二年落成耶、凡閱二十九月、

〔大乘院寺社雜事記〕寬正三年三月二十八日、昨夜南都元興寺二王四燒亡、希代次第也云々、如形相殘了云々、○中略　四月十二日、元興寺二王爲一見出了、以外體也、珍事々々、此二王者、日本國之二王之初也、藤木之池ニ御影ヲ埋給、以其作之、希代本尊也云々、然而如此燒亡時剋到來者歟、但如形相殘條可悅々々、

〔南都七大寺巡禮記〕元興寺

講堂　本尊者、丈六藥師、脇士者二體、高八尺許、等身十二神將、入厨子二基在本尊左右、頽倒以後不立者也、

食堂　在講堂北、佛像幷厨子繪等不可思議也、但頽倒以後無之、

吉祥堂　光明皇后御願、五間四面、安吉祥天女也、又號小塔院、安八萬四千基之小塔、故號小塔院、轆轤曳、高七寸許塔也、各納無垢淨光陀羅尼經眞言、○中略

鐘樓一宇　在鐘一口、此鐘在靈云々、永德之頃、大將軍義滿建立相國寺、件鐘渡彼寺云々、其後應永十年、寺炎上之時燒失云々、其金又鑄直之云々、又道場法師事者、本元興寺事也、彼鐘靈魂住禪定院山、仍號鬼薗山、

觀音堂　件堂號中門觀音堂、靈像也、十一面也、仍垂寶帳、口傳、寺僧一千日之間、每日參詣長谷寺之間、長谷寺炎上之日、空拜堂跡處灰之中、仁、頂上佛面儼然不損、以彼一面、建立丈六觀音、在靈驗云々、

堂衆其行人六十餘人、號中門衆、四天等像同安之者也、

五重塔一基　本尊如興福寺塔也、柱繪等不可思議也、件塔者、敏達天皇御宇十四年、蘇我大臣之威得舍利、加種々寶物納此塔、興福寺五重之塔者、寫當塔云々、安四方淨土相、

極樂坊　安極樂蔓陁羅、故號極樂坊也、智光法師所書之蔓陁羅也、則號智光蔓陁羅也、長廣二尺許也、去寶德三年十月十四日、於禪定院而燒失云々、堂一宇、號蔓陁羅堂、在四方ニ極樂蔓陁羅、口傳云、此堂者、智光法師造之、其後破損間、西行法師勸十方建立云々、

室一宇、智光法師之坊也、口傳云、件室者、元興寺三面僧坊之內、北室之東端、于今相殘在之、則智光法師住也、

太子堂一宇、件太子者昔像也云々、安蔓陁羅堂、然而應永年中、建立當堂云々、

石塔婆一基　在金堂前、高一丈許、顚倒

南大門　安金剛力士、內安師子像件二王之內西方之一體者、日本國二王出現之始也云々、〇中略

諸門額事　東門額飛鳥寺、西門法興寺、北門建通寺、

又云、東門額明香寺(アスカ)、西門法興寺、北門建通寺云々、

禪定院　號飛鳥坊

宗派寺格

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、〇中略三論宗本寺者元興寺、〇中略已上是を八宗と云、

〔今昔物語十一〕聖武天皇始造元興寺語第十五

今昔、元明天皇奈良ノ都ノ飛鳥ノ鄕ニ、元興寺ヲ建立シ給フ、〇中略其後此ノ寺ニ、僧徒數千人集リ住シテ、佛法盛也、法相三論二宗ヲ兼學シテ、多ノ年序ヲ經ルニ、〇下略

寺領

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨大安、藥師、元興、興福、東大五寺、各絁五百匹、綿一千屯、布一千端、稻一十万束、墾田地一百町、　七月乙巳、定諸寺墾田地限、〇中略元興寺二千町、

〔和漢三才圖會大和七十三〕元興寺 在奈良之南 寺領五十石

子院

〔三代實錄陽成三十二〕元慶元年十二月十六日壬午、以禪院寺爲元興寺別院、禪院寺者、遣唐留學僧道照、還此之後、壬戌年天智元年三月、創建於本元興寺東南隅、和銅四年八月、移建平城京也、道照法師本願記曰、眞身舍利、一切經論、安置一處、流通萬代、以爲一切衆生所依之處焉、

〔續日本紀文武一〕四年三月己未、道照和尚物化、天皇甚悼惜之、遣使弔賻之、和尚河內國丹比郡人也、俗姓船連、父惠釋少錦下、和尚戒行不缺、尤尙忍行、○中略於元興寺東南隅、別建禪院而住焉、○中略後遷都平城也、和尙弟及弟子等奏聞、徙建禪院於新京、今平城右京禪院是也、此院多有經論、書迹楷好不錯誤、皆和上之所將來者也、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡禪院寺經論、三年一度曝凉、省寮、僧綱、三綱、檀越等相共撿挍、

雜載

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年三月辛亥、幸元興寺、捨綿八千屯、商布一千段、賜奴婢爵有差、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱及大安、○中略元興○中略等寺印、各頒本寺、

〔延喜式玄蕃二十一〕凡十五大寺安居者、○中略並起四月十五日、盡七月十五日、分經講說、○中略興福、元興○中略本元興○中略等十二寺、法華、最勝、仁王、般若經各一部、○下略

新藥師寺

新藥師寺ハ、大和國添上郡奈良ニ在リテ、一ニ香山藥師寺ト云ヒ、又香藥寺ト云リ、聖武天皇ノ皇后藤原安宿媛ガ、天皇ノ不豫ヲ祈ランガ爲ニ、建立セシ所ニシテ、藥師如來ヲ安置ス、而シテ藥師寺ニ別タンガ爲メニ、特ニ新字ヲ加フ、

名稱所在

〔伊呂波字類抄志諸寺〕十五大寺

創建沿革

新藥師

〔拾芥抄 下諸寺本〕新藥師寺 聖武天皇

〔大和志 二添上郡〕佛刹 新藥師寺 淸水町、一名香藥寺、

〔大和名所圖會 二〕新藥師寺 不空院の辻子西側にあり、御順禮記曰、聖武帝御眼を煩せ給ひしより、藥師の像を御造立あつて、こゝにすえ給ふとかや云々、

〔東大寺要錄 一〕延曆僧錄文

仁政皇后菩薩 諱安宿媛、尊號天下慈眞皇后、

出家尼名光明子沙彌

皇后、俗姓藤原朝臣氏、父贈一位太政大臣藤原朝臣史氏之女、卽勝寶感神聖武皇帝之后也、〈○中略〉后又造香藥寺九間佛殿、造七佛淨土七軀、請在殿中、造塔二區、東西相對、鑄一鐘口、住僧百餘、僧房田園食料、

堂塔

〔東大寺要錄 六〕新藥師寺 亦名香藥寺、

佛殿九間 在七佛淨土七軀、

右寺、仁聖皇后之建立也、實忠和尙西野建石塔、爲東大寺別院云々、寶龜十一年庚申、新藥師寺金堂、講堂、西塔燒失ス、

〔東大寺要錄 一〕十九年〈○天平〉丁亥三月、仁聖皇后緣天皇不豫、立新藥師寺、幷造七佛藥師像、

〔東大寺要錄 四〕村上御日記之狀

應和二年十二月、大納言源朝臣、令國光朝臣奏大外記傳說、勘申新藥師寺事文申云々、日本紀聖武天皇造新藥師佛像之由不見具由、但外記奏、案元所進文、文光明皇后造新藥師寺七佛藥師者、兩端亦難辨、爲之如何、令仰須令本寺進緣起帳定也、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年正月庚辰、大雷、災於京中數寺、其新藥師寺西塔〈○中略〉等、皆燒盡焉、

寺領

〔東大寺要錄〕四村上御日記之狀〇中略
應和三年三月、大納言源朝臣〇高明令國光朝臣奏新藥師寺勘申緣起流記帳文、仰依前日定、可告
聖武天皇山陵、可造立風損御願七佛藥師堂佛像等事、廿四日丙子、大納言源朝臣、令藏人棟世申、
明日奉告山陵宣命趣、仰了、新藥師寺七佛藥師堂、卽聖武天皇御願也、而去八月爲大風顚倒、令修
造之狀可載宣命、廿五日丁丑、大納言源朝臣令藏人輔成奏告山陵宣命草、覽了返給、暫源朝臣令
爲光奏告佐保山陵〇聖武宣命、卽發遣使者、

〔日本紀略〕四村上應和三年三月廿五日丁丑、奉遣佐保山陵〇聖武使、參議橘好古、右衞門權佐平僧行、被
告新藥師寺佛像破損之由、

〔山槐記〕治承四年十二月廿八日丙午、其間東大寺、興福寺爲灰燼云々、〇中略所殘、〇中略新藥師寺邊本
堂、幷僧房在家、

〔續日本紀〕十七聖武天平勝寶元年閏五月癸丑、詔、捨〇中略崇福、香山藥師、建興、法華四寺、各〇中略墾田地一
百町、七月乙巳、定諸寺墾田地限、〇中略崇福、新藥師、建興、〇中略寺別五百町、

〔東大寺要錄〕六僧綱牒東大新藥師二寺鎭
應割修理東大寺塔寺料封一百戶宛修理新藥師寺封事
牒、玄蕃寮今月九日牒云、省今日符偁、被太政官去二月廿七日符偁、得新藥師寺鎭三綱等牒偁、去天
平寶字六年閏十二月十七日有恩勅、使割於東大寺料封一百戶施入此寺、永供養修造靈塔佛殿僧
坊等類料、而造作未畢之間、件封被收望〇望恐誤已收之封、重施新藥、然卽朽損殿塔、還免於漏濕、毀碎材
瓦、復國於當年者、仍撿案內、太政官寶龜十一年十二月十日下造東大寺司符、被內大臣宣偁、奉勅、去
天平寶字四年七月廿三日勅內偁、平城宮御宇後太上天皇、皇太后、以去天平勝寶二年二月廿三日、
入東大寺、封五千戶、造寺畢後、種々用未宣分明、今追議定、以一千戶爲營修理塔寺、〇中略今被大臣宣

用途

雜載

偁、奉勅、宜割取營修理塔寺分封一千戸內一百戸充修理新藥師寺分、其物實者爲置本倉、臨時下宛、修造之日、令東大寺三綱共知其用度者、宜承知依宜施行者、寮宜承知依宜施行者、今以狀牒者、二寺三綱宜承知、牒到准狀、故牒、

延暦十二年三月十一日　　從儀師

〔和漢三才圖會七十三大和〕新藥師寺　在清水　寺領百石

〔延喜式二十一玄蕃〕凡新藥師寺每年修法料、米一十七斛四斗二升六合、大和國送寺家、

〔延喜式二十六主税〕凡新藥師寺每年二月修法料、米一十七斛四斗二升六合、大和國春備、先期送納寺家、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱及○中略新藥師○中略等寺印、各預本寺、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年四月丁巳、僧綱奏言、○中略今須每月三旬三箇日間、輪轉諸寺、晝讀大般若經、夜讃藥師寶號、以此奉答國恩、勅報曰、○中略宜令○中略新藥○中略等廿箇寺、每旬輪轉、自五月上旬迄八月上旬、誓願薰修、

〔南都名所集四〕新藥師寺　道筋を清水といへば立どまりて、まばしやすらはまほしけれ、先此堂にまうでぬる、抑當寺の濫觴は、御順禮記にいはく、聖武天皇御目を煩ひおはしましけるにより て、藥師の像を作りて安置したまふ、故に此佛の御目持を、きらく敷作られたり、今も發り心ちする人、參籠すれば、忽におとさずといふ事なしとかや、又十二神は石淵寺より、一とせ大水に流れ來りけるを取あげて、當寺へ安置しける也、又千體の地藏あり、此中に夜泣の地藏と申おはします、春日の御殿に每夜子の泣香しけり、社人あやしみて、御殿をひらきて見るに、地藏おはしき、やがて此寺へ、をさめたてまつりけるとかや、千體の毘沙門は、自然居士の作といふ、堂中に、春日大明神おはします、こなたなる、觀音堂のほとけは、近江の湖より、獵師のあみにかゝりてあがらせ給ふと云ふ靈像なり、扱つきがねは、元興寺にありし鐘なり、　手向にと手折や花の新藥師

法華寺

名稱 所在

法華寺ハ、大和國添上郡法華寺村ニ在リ、或ハ藤原不比等ノ建立ト云ヒ、或ハ又聖武天皇ノ皇后藤原氏安宿媛ノ建立ナリト云フ、國分尼寺ノ本寺ナリ、

〔和漢三才圖會七十三大和〕法華滅罪之寺 其南有川、名曰枕川、　律宗　寺領二百二十石

光明皇后建立　自作十一面觀世音爲本尊

建長元年以來、成西大寺末派、當代尼寺也

横笛堂　在法華寺東門内

〔菩提心集下〕問、尼は人ばなれて住べしや、答、尼の寺をば、京の内に立よと説けり、ㄙかれば平城京にも、法花寺といふ尼の寺は、京中にあり、尼、その寺に住て、法花經よむを勤とすべし、扨法花寺と名づく、

創建 沿革

〔菩提心集下〕注云、○中略 温懐王の伽藍開基記三云、法華寺聖武帝之后、光明子、移父淡海公之宅、爲寺乎、造十一面大悲像以安之、爲國分尼寺、號法華滅罪寺、時聖武天皇天平九年、勅令天下各州建國分寺、安丈六釋迦三尊像、並納大般若經六百卷、特賜封五十戸、莊田十町、充二十僧糧、號曰金光明四天王護國寺、又詔使每州造國分尼寺、納莊田、既而勝寶元年、南都國分金光明寺賜田四千町、修最勝會、又尼國分法花寺賜米田一千町、修法花妙典、其後寛元三年、西大寺興正菩薩重興之、授文篋沙彌尼戒、又建長元年、授慈善等大比丘尼戒、自是此寺屬西大派下、後慶長六年九月、關白秀頼公爲先妣再興之、

〔和州舊跡幽考四添上郡〕法華滅罪之寺　寺領二百二十石

宗派寺格

法花寺、○中略此所は、淡海公の舊宅たりしを、光明皇后の御建立なり、緣起中略○

本尊十一面觀音菩薩は、光明皇后みづからきざみしなり、緣起中略○

再興は、北京嵯峨の塔空上人修理せられし後は、西大寺興正菩薩の再興あり、其後又破壞して堂一宇塔一基あり、むかしの金堂の跡は今の堂の前にして、いしずへのこれり、此堂の御建立は慶長六年九月、御母君の御ために、幕下豐臣公御再興あり、奉行は片桐市正、鐘幡子銘

〔大和名所圖會添上郡二〕法華寺法華寺村にあり、律宗にして尼の國分寺と申也、往昔淡海公の舊宅たりしを、光明皇后、此寺となし、草創し給ふ、又の說は、榮花物語うたがひの卷に、左大臣正二位藤原朝臣道長公、雲山淨土釋迦尊の前にむかひて申給ふ詞に、淡海公興福寺、法華寺を建立と見えたり、抑其もとを尋れば、聖武帝、東大寺を御造營まし〳〵て、內陣に、女身を詣させ給はざりしかば、后も亦此寺を建立し給ひて、男を詣させ給ふ事なしといふ、今公卿の尼公、御住職し給ふ、脇寺多し、埴土を以て、少さき高麗犬を作りて賣也、此所名產とぞ、

〔榮花物語疑十五〕弟子大日本國左大臣正二位藤原朝臣道長、前白雲山淨土釋迦尊言、風聞、○中略淡海公者、○中略建興福寺、法華寺、○下略

〔今昔物語十一〕光明皇后建法華寺為尼寺語第十九○闕文

〔延喜式玄蕃二十一〕凡大和國國分二寺者、便以東大寺為僧寺、以法華寺為尼寺、其僧尼者、各依本數分配二寺、若有闕者、各取當寺僧操履可稱者、申省補之、

〔和州舊跡幽考添上郡四〕法華滅罪之寺寺領二百二十石

法華寺は、尼の國分寺にして、法華滅罪之寺と申、○中略國分寺の事、大和國にしては東大寺を僧の國分寺とし、法華寺を尼の國分寺とせられしなり、○中略當代律宗たり、寬元三年、西大寺の興正菩薩を師として、此寺の文僖沙尼戒をさづかり、建長九年慈善等大比丘尼戒をうけつぎしより、西大寺の末寺とはなりたり、

〔享祿本類聚三代格二〕太政官符

應依格令大和國講師於法華寺安居講法華經事

右得彼寺牒偁、案天平勝寶九年四月十四日內大臣宣偁、法華寺鎭三綱狀云、願用大修多羅衆物、每年安居說法華經者、其後依官符旨、初爲國分法華滅罪寺、卽安置十尼、以爲定額、○中略左大臣宣、寺家所請、合於格意、宜下知國司、依件行之、其布施供養、准諸國例、依式充之、

昌泰三年十二月九日

寺領

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨○中略法花四寺各絁二百疋、布四百端、綿一千屯、稻一十万束、墾田地一百町、七月乙巳、定諸大墾田地、限大安、藥師、興福、大倭國法花寺、諸國分金光明寺、寺別一千町

〔類聚三代格 十五〕勅

京南田十町

右奉爲藤原皇太后、○安宿媛於法華寺淨土院、自忌日初、迄于七日、每年請屈淨行僧十人、禮拜阿彌陀佛料永入法華寺、

天平寶字五年六月八日 ○又見續日本紀

用途

〔延喜式 十五 內藏〕平城法華寺大神神子二人春秋裝束料絹六疋五丈八尺、襪料調布八尺、沓四兩、直

〔延喜式 二十六 主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

若狹國○中略京法華寺料一万束、○中略越前國○中略京法華寺料二万束、○中略加賀國○中略京法華寺料一万五千束、○中略能登國○中略京法華寺料一万束、○中略越中國○中略京法華寺料二万五千束、○中略越後國○中略京法華寺料一万八千四百五十束、

〔延喜式 三十六 主殿〕諸寺年料油

法華寺月別三斗一升 小月減一升

寺制

〔類聚三代格 三〕太政官符

禁斷諸尼競入法華寺事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、今聞、諸尼競入件寺、自今以後、一切禁斷、非勅處分、不得輙入、

延曆十六年二月三日

寺職

〔寛永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領二百二十石　南都法華寺村

御宗旨律
法華寺　御無住

御家司　水野木工

造寺司

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字二年六月甲辰、造法華寺判官從六位下余東人等四人、賜百濟朝臣姓、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年七月壬申朔、外從五位下秦忌寸眞成爲造法華寺判官、十一月癸未、兵部卿從三位藤原朝臣宿奈麻呂爲兼造法華寺長官、

〔續日本紀桓武三十六〕天應元年十月己丑、外從五位下和史國守爲造法華寺次官、

〔續日本紀桓武三十七〕延曆元年二月庚申、正五位下桑井宿禰披麻呂爲造法華寺長官、四月癸亥、詔曰、朕君臨區宇、撫育生民、公私彫弊、情實憂之、方欲屏此興作、務茲稼穡、政遵儉約、財盈倉廩、今者宮室堪居、服翫足用、佛廟云畢、錢價既賤、宜且罷造宮勅旨二省、法花鑄錢兩司、以充府庫之寶、以崇簡易之化、

參照

〔續日本紀考證桓武十二〕法花寺司也（造法華）

〔日本後紀平城十七〕大同三年七月庚子、停西大寺木工長上二人、法華寺一人、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年五月辛丑、高野天皇〇孝謙與帝有隙、於是車駕還平城宮、帝御于中宮院、高野天皇御于法華寺、

〔扶桑略記臨闕二十六〕寛平十年〇昌泰元年十月廿一日、太上天皇〇宇多有御鷹狩逍遙、廿三日、早朝進發、狂

道過法華寺、禮佛、給綿二百屯、上皇出入往返、巡覽寺中、毎見破壞之堂舍、彈指歎息、出寺門、至舊宮重閤門所、路傍有酒醴果子、往々生炭、不見一人、群臣不問其主、任意飮喫、

〔續日本紀 稱德二十七〕天平神護二年十月壬寅、奉請脇寺毘沙門像所現舍利於法華寺、簡點氏氏年高然有容貌者、五位已上二十三人、六位已下一百七十七人、捧持種種幡蓋、行列前後、其所著衣服金銀朱紫者、恣聽之、詔百官主典已上禮拜、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后○嘉智子崩、　壬午、初法華寺有苦行尼、名曰禪雲、見后未笄、就把其臂云、君後當爲天子及皇后之母、后竊記之、遂生仁明天皇及淳和太皇太后、后追想尼言、訪其所在、尼時既亡、

〔平家物語 十〕よこぶえの事

三條の齋藤左衞門かちよりが子に、齋藤たき口時よりとて、本は小松殿の侍たりしが、十三のとし、本所へ參りたり、けんれい門院のざうしよこ笛といふ女有、たき口、是にさいあひす、父此よしを傳へ聞て、世にあらん者のむこ子にもなし、出仕なんどをも心やすうせさせんと思ひ居たれば、よしなき者を思ひそめてなど、あながちにいさめければ、○中略十九の年、もとゞり切て、さがのわうぜうゐんに行ひすましてぞゐたりける、○中略横笛も樣をかへぬるよし聞えしかば、瀧口入道も、一首の歌を送ける、

　そる迄は恨しか共あづさ弓まことの道に入ぞうれしき

よこぶえが返事に

　そるとても何か恨みん梓弓引とゞむべき心ならねば

其後よこぶえは、ならの法花寺に有けるが、その思ひのつもりにや、いく程なくてつひにはかなくなりにけり、

名稱
創建

圓照寺

圓照寺ハ、大和國添上郡山村ニ在リ、後水尾天皇ノ皇女文智女王法號大通ヲ以テ開山ト爲ス、宗派ハ禪宗ニシテ、比丘尼御所ノ一ナリ、

〔圓照寺文書〕一普門山之記

予濫入空門、而百無能、眞個痴獃禿丁尼也、且性慵病多、不欲與世浮沈、只圖於空山林野守一味幽閑、以終一報之身、曾結庵於洛北修學院、棲遲者一十六年、然被閒爲人事折困、不能無障礙、謂更可入深居、長謝世緣、有時夢、有人告曰、汝當於伊勢、八幡、春日三神社之內、隨心住而以取終焉、自是決欲赴和州奈良之邊、因宣叔父前一乘院尊覺法親王、以尋幽栖之地、又更命人、蹈遍郡邑、相求不得、一夜又夢、只驪覺奈良一里許之間矣、後果相攸、得八島東山、於此門主、乞其地於藤堂氏、遂得移居於此、遍庵曰拈葉、追慕忠國師高蹈也、題偈曰、數椽始架小禪房、先寄衣盂事祝香、宿志從來世塵外、便將拈葉學南陽、寛明曆二年丙申四月五日也、數歲之後、徒衆二十餘輩、茅庵狹陋、而無由修列坐法事、私乞有緣同志、新創圓通殿、啓懺摩等之法筵、以漸成一庵風度矣、寛文己酉年、得東福門院之詔東關、令此山間爲精藍之地、前村充食邑、蓋報緣之偶然耳、此地也、幸是古基、而堂塔礎石、若干猶存焉、居民稱大樂寺千坊者也、尋移梵字、而重新之、聊擬禪林制、以創定叢規、一要循佛祖之垂範、而使汝等袈裟下不失人身也、各自以生死事大爲念、日夕究明己事、修練清業、莫空斷送時光、稱予之法孫亦足焉、予曾看虎關國師禪戒軌、而深慕之、欲於此山創菩薩大戒、以爲萬世規範、以延寶七年巳來之冬、共各衆預修懺者五七日、因延槇尾雲松比丘、受梵網大戒、乃十一月初九日也、衆亦次第授受焉、唯滿分受、隨其器耳、自此半月、布薩無闕也、茲歲貞享四丁卯之秋八月廿四日、予始聞菩薩

戒壇、以授會下一衆、自今後代住持、及上座輩、期未來際、須轉授不絶、持犯開遮、諳補意解、持律清淨、不染世縁、共成無上道焉、

是此住山、實春日大明神之冥助而爾、此故逐日設別供、以報彼洪德、祈其鎭護、後代宜效之也、

予初移八島日、以縮蘯擇山上清淨之土、試塑永源寂室禪祖之像、蓋祖是本朝山林達士、高蹈尊宿、而先師佛頂國師、亦曾慕其跡、以赴永源之請、予某時訪國師之日、親瞻禮遺像、眼略記之、以故安排新居、祝效其道風矣、幷塑國師之像、私擬開山、令各衆修其嚴忌、辨報乳之供、師乃受訣於華園愚堂寶鑑國師、若論宗脈、當依焉、復次塑後水尾院聖像、親裁其御髮、設菡於壇之左者、故院曾傾叡信於吾宗、特重國師道韻、予遠離宮掖、而修定省之孝日少、見垂慈愛年久、以故爾也、又安本願東福門院之牌、共傳法孫、晨燈夕香、以報答昊天之德者、妙莊嚴院昭子內親王者、匪啻連枝之親、於吾法因緣尤深、且遺命令寄此寺產之三分之一、所以其追修、特不可欠者也、且故大樹殿有院者、是山林寺產之大檀越也、追薦等莫敢怠、

一夫住持者、實是傳法根苗、山門基本也、事不容易、代須請公主、若無公主之應其器者、或皇族之內、若親王家、若攝家之息女亦可也、若雖公主幼年而得度、當於五八之戒、隨分次第受持焉、開遮持犯之學窮了、齡至二十、宜如法受菩薩大戒、〇中略

貞享四丁卯年冬佛成道日

住普門山圓照禪寺大通文智至囑々々

〔野史二十八皇女〕後水尾帝〇中略皇女、文智院王、典侍藤原氏所生也、紹運續錄元和五年六月生、稱梅宮、又改澤宮、年代略記寛永八年七月適權大納言藤原敎平、十一年長還、一本系圖尋薙髮爲尼、號大通、創建一寺於大和山村、號圓照寺住焉、年代略記元祿十年正月薨、年七十九、號深如海院、年代略記葬山村、年代略記

寺領

〔圓照寺文書三〕當尼寺領大和國添上郡山村貳百石の事、新令寄附之訖、全御知行有べきの狀如件、

寛文八年八月五日御印

寺職

圓照寺御かたへ

〔嘉永七年雲上明覽大全上〕御比丘尼御所

御領三百石　　南都山村御所　丸太町櫻馬場行當　御里坊　闕大職

禅宗旨　圓照寺福喜宮　十一

仁孝天皇御養子

伏見入見禪樂親王御女

御家司

〔圓照寺文書三〕圓照寺御代々記

圓照寺御代々

御開山深如海院大通文智　後水尾院皇女　靈元院皇女　寛永十七年八月廿八日、御得度御入室、

第二代藤宮　靈元院皇女　御重彤稱菩提心院大歡文喜、元祿十五年正月廿六日御入室、御得度無之、御早世、

第三代大寂文應　寶永六年五月十一日御入室、同七年五月十八日御得度、

一歡喜心院宮　御得度　寶曆六年丙子九月三十日　御號　大徹　御諱　文亨

御戒師　當山第三世　清淨心院宮　但御在世之內、御剃刀御作法、依被為済候、大聖寺宮上臈橋取院殿、御次剃刀被勤之、尤御得度後、戒行御戒師之儀者、御代々御因緣依有之、城州相樂郡加茂鄉之內北村瓶(甕)山現光寺歡明一圓律師勤之、

一御得度後、御一生之內、御轉住御敘官之儀、不被為有候事、

一當宮御得度　御戒師　大聖寺二品入道天巖永皎女王　但御兼帶中、於當山御諱被稱文皎、尤就御高年、御名代上臈慈雲院殿被勤之、戒行御戒師之儀者、依御例瓶(甕)山現光寺光忍尊揚律師勤之、

右之通御座候事

六月

名稱 所在	創建

阿閦寺

阿閦寺ハ、聖武天皇ノ皇后安宿媛ノ建立スル所ナリ、傳ヘテ曰ク、皇后嘗テ浴室ヲ建テヽ、親自ラ千人ノ身垢ヲ去ランコトヲ誓フ、最後ニ阿閦如來、癩人ニ化シテ來リ、皇后ノ決心ヲ試ム、故ニ此名アリト、今廢寺ニシテ、舊地ハ大和國添上郡法華寺村ニ在リ、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕阿閦院 阿閦佛 光明皇后

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕阿閦寺舊跡 在法華寺近處田中

光明皇后有志願、立浴室、將去千人之身垢、時阿閦如來化癩人、試其深心、後建寺、號阿閦寺、

〔大和名所記 四 添上郡〕阿閦寺

法華寺の鳥居のたつみわづかにへだゝりて、田の中に松の一本ありし所ぞ、阿閦寺の跡なり、三册集 當代はとりゐもなく、松も見えず、

〔元亨釋書 十八 尼女〕天平應眞皇太后光明子者、淡海公第二女也、〇中略 聖武帝造國分寺、東大寺、皆后之勸發也、又置悲田施藥二院、恤天下餓恙、及東大寺成、后以謂、大像大殿皆已備足、帝勗于外、我營于內、勝功鉅德、不可加也、且有詑意、一夕閤裏空中有聲曰、后莫詑也、妙觸宣明、浴室淬濯、其功不可言而已、后怖喜、乃建温室、令貴賤取浴、后又誓曰、我親去千人垢、君臣憚之、后壯志不可沮也、既而竟九百九十九人、最後有一人、徧體疥癩、臭氣充室、后難去垢、又自思而言、今滿千數、豈避之哉、忍而揩背、病人言、我受惡病、患此瘡者久、適有良醫、敎曰、使人吸膿、必得除愈、而世上無深悲者、故我沈痾至于此、今后行無遮悲濟、又孔貴之願、后有意乎、后不得已、吸瘡吐膿、自頂至踵皆遍、后語病人曰、我吮汝瘡、愼勿語人、于時病人放大光明告曰、后去阿閦佛垢、又愼勿語人、后驚而視之、妙相端嚴、光耀馥郁、忽然不見、后驚喜無

量、就其地構伽藍、號阿閦寺、

〔寶物集六〕光明皇后ノ湯ヲ沸シテ、十方ノ衆生ニ浴シ給テ、一日ニ三人ガ垢ヲ摺給ヒケルニ、イブセク怖氣ナル乞兒ノ、我垢摺テ給ヘト申シケレバ、物憂事ニハ思食ドモ、行ヲ破ジトテ、病ニ垢ヲ摺タマフガ、我汝ガ垢摺ツト人ニ語ルナト宣ヒケレバ、此乞兒光ヲ放テ、汝モ亦阿閦佛ノ垢摺ヌト人ニ語ルナト云テ、カイケスヤウニ失ニケリト云ヘリ、

名稱

所在創建

不退寺

不退寺ハ、大和國添上郡ニ在リ、傳ヘテ曰ク、在原業平ノ創建スル所ナリト、又曰ク、滋野貞主ノ家ヲ寺ト爲シテ、慈恩寺ト稱セシヲ移セルナリト、

〔伊呂波字類抄不諸寺〕不退寺

〔拾芥抄下本諸寺〕十五大寺

不退寺

〔和州舊跡幽考四添上郡〕不退寺

眉間寺より西五六町ばかり

不退轉法輪寺は、濫觴さだかにあらず、業平朝臣の建立にして、みづから觀自在菩薩をつくりすへ給ふといひ傳ふる說あり、又は滋野〇貞主宰相の家を寺となし、慈恩寺と名づけられて、城上郡三輪里のほとりにありしを、爰にうつされけるともいふ、又その慈恩寺は、業平朝臣の居住の所にて、後爰にうつして、不退寺といふとも、玉林抄に見えたり、

此地は、平城天皇の住給ひし宮なりといひつたへたり、然ば平城天皇は、大同四年平安城にて御

位を春宮にゆづり給ひて、ならのみやこに遷幸のよし、續日本後紀に見えたり、此所なるべし、

寺領

〔百練抄 六崇德〕保延二年十二月、慈恩寺燒亡、此寺者、是滋野貞主、遣唐使之間、摸漢朝慈恩寺建立之、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年十月十五日辛卯、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八步、施捨不退超昇兩寺、

〔和州舊跡幽考 四添上郡〕不退寺○中略 寺領五十石

雜載

〔吉野詣記〕不退寺にいたりて、業平自筆の影あり、おぼろげには、ひらかざるよし申せしを、宗二とて、かのあたりのしる人にて、よくいひより拜見せしに、容顏美麗端正なる、うつゝの人にむかふがごとし、

〔宗長手記〕鑑山は、慈恩寺、新福寺、阿彌陀寺、長福寺等、四箇寺各律院、七堂みえたり、その〳〵宿所宿所東南市あり、

海龍王寺

海龍王寺ハ、一ニ脇寺又ハ角寺ト稱シ、大和國添上郡ニ在リ、現今ハ西大寺ノ末寺ニシテ、眞言律宗ナリ、

名稱創建

〔和漢三才圖會 七十三大和〕海龍王寺　一名角寺○中略

天平三年、光明皇后建立、

〔和州舊跡幽考 四添上郡〕海龍王寺法華寺の東北のならび、寺領百石、又の名は脇寺、續日本紀角寺とも帝王編年かけり、光明皇后、天平三年七月に建立、延寶七年迄凡九百四十七年か、又玄昉僧正入唐の時、風波をだやかにと願立て、造營せられしともいふ、

寺領

〔續日本紀十三聖武〕天平十年三月丙申、施₂○中略隅。院食封一百戸₁、

〔新抄格勅符抄〕角。院寺百戸天平十年施、出雲五十戸、播万五十戸。

〔和漢三才圖會七十三大和〕海龍王寺○中略 寺領百石

雜載

〔續日本紀二十七稱徳〕天平神護二年十月壬寅、奉₂請脇寺○一本作₂隅寺₁毘沙門像所₁現舍利於法華寺₁、

正暦寺

名稱所在創建

正暦寺ハ、一ニ菩提山寺ト號シ、大和國奈良東南一里許ニ在リ、正暦年中、僧兼俊ノ創スル所ニシテ、建保六年僧信圓ノ再興ニ係レリ、

〔和州舊跡幽考四添上郡〕菩提山寺領三百石當代眞言宗　ならより一里半ばかり巽にあり

菩提山正暦寺龍樹院は、正暦年中勅をうけて、兼俊僧正の建立、此僧正は、法興院攝政兼家の御子なり、其後建保六年、信圓大僧正の再興ありしより、是を中興開山といふ、此大僧正は、月輪禪定公の御子なり、本尊藥師佛は、龍樹菩薩のつくらせ給ひしを、善無畏三藏の來朝の時もて來り給ひき、又佛牙の舍利あり、是は法然上人の御弟子、蓮光法師のをさめられしなり、寛永六年炎上の時も、如來の像、火にもそこなはれさせ給はず、其年再興あり、當寺舊記

〔和漢三才圖會七十三大和〕菩提山正暦寺在₂奈良巽一里許₁　眞言　寺領三百石

本尊　藥師　開基　兼俊僧正

一條院正暦年中、兼俊僧正攝政兼家公之子也奉₂勅建₁之、號₂龍。樹。院₁、此本尊於₂天竺₁龍樹菩薩作₂之、善無畏三藏來朝時將來、遂藏₂于當寺₁、

建保六年信圓大僧正再興、以爲₂中興開山₁、

寺領

〔正曆寺文書〕覺

一和州菩提山寺之事　一條院聖代之昔被成御建立由來者、去年具ニ令言上候條、只今不及注進候事、

一先年御國替之刻、當知行之面九百七石餘勘進申候、雖然依不得達上聞、子細不知行令迷惑候、因茲近年寺家零落、坊舍等も數多相果、衆僧等も方々へ令離山候條、于餘歎數存、旁被付訴訟之儀雖相談申、終ニ長盛公御耳にもたてられす、無念存候條、又去年巳來、以御兩仁御歎申事候、然者此節和州方々寺社修造等之儀被仰付候由候、當寺家之事、長盛公以御哀憐佛閣修理、幷衆僧等寺住儀相繼申候樣ニ勘忍致候事被仰付候ハヽ、尤可忝存候事、

一右之趣宜樣ニ預御執成候ハヽ、一山開喜悦之眉、寺院大慶不可過之候、然者彌御武運長久之御祈念、別而不可存油斷候事、以上、

六月日　菩提山寺
報恩院

福原清左衛門殿

〔正曆寺文書〕覺

一和州ぼだいせん寺の事、先年柳原一位大納言殿御取次にて、內府樣へ御禮申上候處に、大閤樣の時分の樣子を以、寺領之儀可被仰出由御意に候間、幸天下之儀悉被仰付候、此刻寺領御付なされ候樣に御取成賴奉り候、菩提山寺之儀者、一條院御こんりうの御寺候、依之日本傳來四牙の御舍利（二寸八分在之）其外種々の靈寶共、于今無相違候、總寺領之事者千石餘幷坊舍之儀も、此比七八十在之儀候、此等之旨可然樣御披露被仰候事、以上、

十月廿八日　菩提山寺報恩院源俊花押

大久保十兵衛殿

薬師寺

名稱所在

薬師寺ハ、大和國添下郡砂村ニ在リ、天武天皇八年、皇后ノ病ヲ救ハンガ爲ニ建立セシモノニシテ、薬師如來ヲ本尊ト爲ス、此寺ハ僧祚運ノ設計ニ成レルモノニシテ、境内ニ三重ノ塔アリ、又佛足石アリ

〔拾芥抄 下本諸寺〕七大寺

薬師寺 天智天皇元年造之、天武天皇、

〔大和志 三添下郡〕佛刹　薬師寺 在砂村、一名西京寺。。。

〔大和志 十四高市郡〕古蹟　薬師廢寺 在木殿村、礎石尚存、

創建

〔薬師寺縁起〕右寺者、天武天皇即位八年庚辰十一月、皇后不念、巫醫不驗、因之爲除病延命、發奉鑄丈六薬師佛像之願、爰霊驗有感、皇后病愈、天皇大感、已鑄金銅之像、鋪金未畢、以十四年丙戌秋九月九日天皇崩、於明香清御原、以戊子年十一月葬給於高市大内山陵、皇后嗣即帝位、是持統天皇也、爲遂太上天皇前緒、高市郡建寺、安置佛像經論等、本薬師寺是也、〇中略

寛元元年癸卯初秋上旬候寫之云々

〔南都七大寺巡禮記〕薬師寺 大和國添上郡右京六條二坊〇平城中略

當寺建立事　天智天皇御宇、御子持統天皇姫宮ニ御在之時、彼姫御背ニ惡瘡出來、天皇無限恐歎給爲祈禱、以金銅丈六薬師佛鑄給之間、其驗新而宮病即愈給、天皇喜貴給事無限、其後者彌奉恭敬供養給、然間天智天皇失給後、弟天武天皇即位也、其次持統天皇即位也、此天皇高市郡ニ建立寺、安彼像、元明天皇之時、奈良之西京六條坊ニ建立寺、今薬師寺是也、寺僧等不入堂内、只俗堂子許入堂

堂塔

內、奉佛燈明也、

又或記云、第一本願者天武天皇、第二者持統天皇、第三者元明天皇、

〔日本書紀 二十九 天武〕九年十一月癸未、皇后體不豫、則爲皇后誓願之、初興藥師寺、仍度一百僧、由是得安平、

〔上宮太子拾遺記 七 天智〕九年(庚午)建藥師寺、

〔享祿本類聚三代格 二〕太政官符

應令藥師寺每年修最勝王經講會事

右撿中納言從三位兼行中務卿直世王奏狀偁、件寺淨御原天皇(〇天武)爲皇后所建也、皇后近江帝(〇天智)女也、柔範光暢、叱贊洪業、皇帝嘉寵、修斯蘭若、而創基未竟、宮車晏駕、后主含悲歸佛、終成寶刹、如今封物田地、儭施有數、僧供雜費、觸用有剩、而斯寺、學衆稍多、說法猶少、伏請設件齋筵、護國隆法、招彼耆宿、立義弘道、以在播磨國賀茂郡同寺水田七十餘町、便充供料、庶扇彼覺風、奉翊先靈、飛此慈雲、將延聖壽者、左近衞大將從三位兼守大納言行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅依請、夫立義者、議其優劣、便爲諸國講讀師之試、

天長七年九月十四日(〇又見類聚國史)

〔日本書紀 三十 持統〕十一年七月癸亥、公卿百寮、設開佛眼會於藥師寺、

〔續日本紀 一 文武〕二年十月庚寅、以藥師寺構作略了、詔衆僧令住其寺、

〔壒嚢抄 十三〕藥師寺ハ四十代天武天皇卽位第九、白鳳八年(庚辰)建立アリ、其比我朝未造寺之儀不審故ニ、有智ノ僧侶尋ネラルヽト云共、能其法知者ナシ、仍祚蓮法師入定、龍宮往キ、佛殿ヲ見出テ圖會ヲ進上ス、此時始テ佛宇營構ノ規ヲ知ル者也、龍宮佛閣ヲ摸スル故、此寺嚴麗ナル者也、以前數多ノ佛閣立ト云共、改變種々也、其趣右ニ見タリ、爰以天王寺ヲ以テ最初トシ、七大寺ノ中ニハ、藥

師寺ヲ以テ、勅願寺ノ始トスベキ歟、

〔藥師寺緣起〕一寺內流記帳云、寺院地拾陸坊肆分之、四坊堂舍并僧坊院、二坊大乘院、五坊塔金堂并僧坊等院、一坊大乘院、一坊　院、一坊温堂并倉垣院、二坊殘院、

今按、垣內十二町爲四曲、未申四丁堂院、辰巳二丁別院、戌亥四丁政所町、（二町職掌町云々）五町、（東町倉院地、南二町）（花苑并八幡宮、）

〔扶桑略記　五天武〕白鳳九年十一月、依皇后病、造藥師寺、鋪金未遂、龍駕騰仙、始鑄佛於飛鳥淨原之朝、畢造寺於養馬藤原之宮、土木之功、熱於三帝、（天武、持統、元明、）日月之營、送於五代、（文加文武飯高）寶塔穿雲、亘于千代、不古、珠殿承日、歷于万劫、長今、東南水面、觀實相之月、西北山頭、開淸涼之風、金容垂慈、含二六之願、鐘響遠聽、滅百千之罪、（已上）爲憲記云、藥師寺、淸御原天皇之師僧祚蓮入定、見龍宮樣、習作也、（已上）寶塔二基、各三重、有裳層、高十一、（○一字虛、醍寺本无）丈五尺、縱廣三丈五尺、兩塔內安置釋迦如來、八相成道形也、金堂一字二重閣五間四面、長七丈八尺、廣四丈五寸、柱高一丈九尺五寸、佛壇長三丈三尺、高一尺八寸、安置丈六金銅須彌座、藥師像一軀、左右脇士、日光遍照菩薩、月光遍照菩薩像各一軀、（已上持統天皇、奉造座者也、）又觀世音菩薩像、二體、又帳外壇下佛前并左右、造立綵色十二藥叉大將像、高各七尺五寸、南大門、五間二重、長五丈廣三丈二尺、東西居師子形、各高七尺、金剛力士、中門一口五間一蓋、長五丈一尺、廣二丈五尺、高一丈六尺、南面左右立二王像、并夜叉形天、及座鬼形等、合十六體、講堂一字、重閣七間四面、在裳層、高一丈三尺六寸、長十二丈六尺、廣五丈四尺五寸、安置繡佛像一帳、高三丈、廣二丈一尺八寸、阿彌陀佛像、并脇士菩薩、天人等像、總百餘體奉繡之、（爲天武天皇、持統天皇之奉遺者也、）食堂一字、九間四面、正中一間、內殿安置金銅半丈六阿彌陀佛像、并觀音得大勢至菩薩、各一體、經樓一口、鐘樓一字、懸鴻鐘一口、百濟國王所獻也、西院安置彌勒淨土障子、僧房十四字、（已上）

〔藥師寺緣起〕一寺家
築垣四面高一丈一尺、基廣八尺、蓋一丈三尺、門七口佛門二口大門中門人門五口之中東南門西北門、僧西南門僧東門、奴婢門、北門、道俗門、流記帳云、門七口、佛門二口、僧門五口云々、今止二一佛門一加二二脇門一、故八口也云々、
一佛門五間二重戸三間、壁二間、長五丈、廣三丈二尺、是云南大門東西居獅子形々各高七尺、
右別當大法師趁禪任中天祿四年癸酉二月廿七日燒亡、別當大法師僧祐任中以二寬弘三年正月八日一始立レ柱、○中略
一寶塔二基、各三重、每レ重有二裳層一、高十一丈五尺、縱廣三丈五尺、
右兩塔內安置釋迦如來八相成道形也、○中略
一金堂一字、二重二閣、五間四面、長八丈七尺五寸、或七丈八尺、廣四丈或五丈一尺五寸、或五丈一尺、或四丈五寸、柱高一丈九尺五寸、佛壇長三丈三尺、廣一丈六寸、高一尺八寸、○中略其堂中安二置丈六金銅須彌座藥師像一軀一圓光中半出七佛藥師佛像火災間翅造二無數一飛レ天也、左右脇士日光遍照月光遍照、菩薩像各一體、已上持統天皇奉レ造二鑄座一者、○中略
一講堂一宇、重閣、七間四面在二裳層一、高一丈三尺六寸、長十二丈六尺、廣五丈四尺五寸、略記柱高二丈五寸、南無レ戸、東西各戸一間、北戸一間、北戸三間、自餘皆連子今壁安二置繡佛像一帳一高三丈、廣二丈一尺八寸、阿彌陀佛幷脇士幷天人等總餘體奉レ繡之、○中略
一食堂一宇、九間四面、東屋長十四丈、廣五丈四尺五寸、柱高二丈五寸、前戸九間、後戸三間、左右脇門各一間、正中一間、內殿安二置金銅半丈六阿彌陀佛像幷觀音得大勢至菩薩各一體一、

〔日本紀略六圓融〕天延元年二月廿七日壬子、亥刻、藥師寺燒亡、所レ遺金塔○塔一本作堂一基、　五月三日丙辰、被レ定下可レ造二藥師寺一之國々上、大和、伊賀、美濃、播磨、備中、備後、安藝、周防、讃岐、伊豫十ヶ國也、○又見親信卿記、僧綱補任、

〔藥師寺緣起〕一鐘樓一宇丈尺如二經樓一、懸二鴻鐘一口一、高二口經一、俗傳佛鐘百濟國王所レ獻云々○中略

塔

抑別當大法師珪禪任中、天祿四年癸酉〈天延元年〉二月廿七日夜、從食殿堂壹子宿所、慮外失火、食堂、講堂、三面僧房、四面廊、中門、大門悉以燒亡、寺僧神鎭、職掌清額禮宗見金堂二層西南火付、捨身滅火之、寺家具注子細言上、公家隨則以三月五日被下實檢勅使左少辨源朝臣伊陟等、還參之日、具由奏聞、以同廿八日被下神護禮宗等依夜入炎中消金堂火之功、可任以神鎭三河講師、以禮宗大和國日上之宣旨也、又有宣旨、被令配造諸國、大門〈大和〉中門廊廊卌間〈備前〉卌間〈備後〉廿二間〈安藝〉十四間食堂〈播磨〉經樓〈周防〉鐘樓、東院房、〈美濃〉東南僧坊〈伊豫〉西南僧坊〈讃岐〉講堂、寺衆別當珪禪所造立也、又五月十五日宣旨、平超可檜皮葺僧坊行事、〈今講房也〉朝靜鑄鐘行事、寺主慶空造曲殿二字行事、造講堂長官右少辨高階眞人成忠、判官左少史三統宿禰、而依年依當御忌方被止件造作也、〈藤原朝臣文範奏留云々〉

〔善隣國寶記中〕文正元年丙戌　遣朝鮮書　綿谷製之

日本國源義政、奉書朝鮮國王殿下、兩邦千里雖阻溟渤、使者遝來猶如咫尺、苟有所須、必賜恩容、感幸之情不可勝言、本邦南京有敕寺、名曰藥師、頃年墮壞、風震雨淩、殆泣龍象、於是一衆相與謀曰、產薄力微、無由重興、非求助於大邦、豈有他術哉、遂請以書爲介、故遣正使融圓、副使宗禮等、進諭其意、儻得殿下之力、百廢一新、則豈非成東方一佛界耶、所謂淨瑠璃亦善隣之寶也、土宜信物具于別幅、仲春漸暄、惟冀若時保愛、

　龍集丙戌春二月廿八日、日本國源義政、

〔大和名所圖會三添下郡〕藥師寺

六層塔。〈天平二年の建立なり、今にあり、〉

〔扶桑略記六聖武〕天平二年三月廿九日、始建藥師寺東塔、

〔古京遺文〕藥師寺東塔擦銘

維清原宮馭宇天皇〈天武〉卽位八年庚辰之歲建子之月、〈十一月〉以中宮不念、創此伽藍、而鋪金未遂、龍駕

騰仙、太上天皇〈統〇持〉奉_レ_遵_二_前緒_一_、遂_二_成斯業_一_、照_二_先皇之弘誓_一_、光_二_後帝之玄功_一_、道濟_二_群生_一_、業傳_二_曠劫_一_、式_二_於高躅_一_、敢勤_二_貞金_一_、其銘曰、

巍々蕩々、藥師如來、大發_二_誓願_一_、廣運_二_慈哀_一_、猗歟聖王、仰延_二_冥助_一_、爰餝_二_靈宇_一_、莊嚴御_レ_亭、々々寶刹、寂々法城、福崇_二_億劫_一_、慶溢_二_萬齡_一_、

右刻在_二_藥師寺東塔刹柱上_一_、〈〇又見_二_藥師寺緣起_一_〉

〔道の幸〕〈中〉六〈日〇寛政四年十二月〉藥師寺へ行、〈〇中略〉六重の塔のみ、天武天皇の御宇に、草創のまゝにてありといふ、〈〇中略〉かつまたの池はましたにあり、高さ十六丈、空輪の長さ五丈ほどありとぞ、さても九輪の心柱をくゝみて、屋の上におほひたるを露盤といふ、方五六尺もあらんか、高さは二尺ばかりあり、露盤のうへに、上のひらきける鉢のさましたるもの、ふちに、手をかけて、いきみて露盤にのぼる、年ごろ聞わたりぬる銘文は、心柱の東の方にえりてあり、塔の心柱をば、擦といふよし、順朝臣の和名抄に見えたれば擦の銘といふべきなり、世人の、露盤の銘といふはあやまりなり、

〔倭訓栞〕〈中編二十二不〉ぶつそくせき　佛足石也、大和添下郡の藥師寺の庭前にあり傍に石牌ありて和歌十七首を彫たり、是皇后光明子の作る所なり、

〔古京遺文〕佛足石記

釋迦牟尼佛跡圖

案西域傳云、今摩揭陁國、昔阿育王方_二_精舍中_一_、有_二_一大石_一_、有_二_佛跡_一_、各長一尺八寸、廣六寸、輪相花文十指各異、是佛欲_二_涅槃_一_、北趣_二_拘尸_一_、南望_二_王城_一_、足所_二_蹈處_一_、近爲_二_金耳國_一_、商迦王不_レ_信_二_正法_一_、毀_二_壞佛跡_一_、鑿已還生、文彩如_レ_故、又捐_二_於河中_一_、尋復_二_本處_一_、今現圖寫、所在流布、觀佛三昧經云、若人見_二_佛足跡_一_、内心敬重、无量衆罪、由_レ_之而滅、今俱非_二_有幸之所_一__レ_致乎、又北印度烏仗那國、東北二百六十里、入_二_大山_一_、有_二_龍泉河源_一_、春夏含_レ_凍、晨夕飛_レ_雪、有_二_暴惡龍_一_、常雨水災、如來往化、令_三_金剛神以_レ_杵擊_二_崖_一_、暴龍聞口怖、歸_二_依於佛_一_、恐_二_惡心起_一_、留_レ_跡示_レ_之、

佛足石

於泉南大石上現其跡、隨心淺深、量有長短、今丘慈國、城北四十里、寺佛堂中玉石之上、亦有佛跡、齋日放光、道俗至時、同往慶修、觀佛三昧經、佛在世時、若有衆生、見佛行者、及見千輻輪相、即除千劫極重惡罪、佛去世後、想佛行者、亦除千劫極重惡業、雖不想行、見佛跡者、見像行者、步々之中、亦除千劫極重惡業、觀如來足下、平滿不容一毛、足下千輻輪相、轂輞具足、魚鱗相次、金剛杵相、足跟亦有梵王頂相、衆蠡之相不異、諸惡是爲休祥、（以上正面在南）

知識、家口男女、大小、（正面方圍外下方題字）

三國眞人淨足（左側方圍外右方題名）

大唐使人王玄策、向中天竺□□國中轉法輪□回見跡、得轉寫搭、是第一本、日本使人黃書本實、向大唐國、於普光寺得轉寫搭、是第二本、其本在右京四條坊禪院、向禪院壇披見神跡、敬轉寫搭、是第三本、從天平勝寶五年歲次癸巳七月十五日盡廿七日、幷一十三箇日作了、檀主從三位智努王、天平勝寶四年歲次壬辰九月七日改之寫成、文室眞人智努畫師越田安万書寫、神石作主□□呂人足、匠仕□□□□□□（以上左側在西）

三國眞人淨足（左側方圍外題石在第十行下方）

至心發願、爲亡夫人從四位下茨田郡主、法名良式、敬寫釋迦如來神跡、伏願夫人之靈駕遊入无勝之妙邦、受□□□□之聖□永脫有漏、高證无爲、同霑三界、共契一眞、（以上背面在北）

同左面記

諸行无常、諸法无我、涅槃寂靜、（以上左側在東）

佛跡圖石、在西京藥師寺、所引西域傳與西域記法苑珠林載略同、所記佛跡足寸、西域記釋迦方誌、慈恩傳續高僧傳皆同、今曲尺計之、其廣正合、其長嗛二寸、不知何謂、蒙齋以記中一尺八寸、爲一尺六寸之誤、未撿西域記諸書也、觀物三昧經事同文異、蓋係操觚者之纂節、王玄策使天竺、見唐書西

城傳、法苑珠林云、貞觀二十三年、有使圖寫迹來者即是、磨下二缺字、當是揭陁輸下缺字、蓋處字、黃文連出自高麗國人久斯那王、見姓氏錄、本實天智天皇紀、持統天皇紀、文武天皇紀並載、而無向唐國之事、按天智天皇十年紀、黃文造本實獻水臬、豈非得於唐國而獻之耶、普光寺、唐貞觀五年、爲太子承乾建、見佛祖統記、禪院道昭所建、初在飛鳥、後移平城、詳見續日本紀及三代實錄、按續日本紀、智努王天武天皇之孫、父一品長親王、天平十九年正月授從三位、天平勝寶四年八月乙丑賜文屋眞人姓（按八月無乙丑、九月廿二日即得乙丑、然不與此云九月七日合、可疑、）天平寶字五年改名淨三、授正三位、六年正月爲御史大夫、八年正月叙從二位、九月致仕、寶龜元年十月薨、野呂氏摹刻此文、卷末所附、淨三卿履歷訛謬頗多、故余爲正之、亡夫人茨田郡王法名良式未詳、按續紀云、天平十一年正月丙午、授無位茨田女王從四位下、位階適合、或其人也、三國眞人繼體天皇皇子、椀子王之後、見姓氏錄、淨足無攷、文中石字、王字、休字、磨滅不可見、此從野呂氏摹本、蓋或見不損本也、今匡以分之、但野呂氏摹本案作尋、十指作帶相、商作商相作彩、捐於河中脫於字、內心作恩、由其而滅作由共滅、有暴惡龍、脫有字、以杵擊崖上衍山字、龍口口伏、作暴龍出伏、寺佛堂作在佛堂、迹作跡、不遇作不異、天竺磨口口國、脫磨口二字、因見作回見、此本作日本、四條一坊作四行坊盡作至、一十三箇日脫一字、畫師安万作安方、三國眞人淨足作文室眞人淨三、皆誤、末行石手字、呂字足字、仕奉字、人字、野呂氏不刻蓋闕疑之意、不足責也、背後及右側二面、野呂氏不刻豈不獲搨本耶、是記石質頑堅、不得深刻、文字隱晦、多不可讀、又高卑坳堘刻隨其勢、是以世罕有搨本、余親至西京、經七日之久、精撫一本、纔得釋之、其方圍下方二題字、埋在塵土中、余磨挲數日之後、始獲之、前人所未嘗見也、

佛足石歌婢

恭佛跡　一十七首

美阿止都久留、伊志乃比鼻伎波、阿米爾伊多利、都知佐閉由須禮、知々波々賀多米爾、毛呂比止乃多

米爾

彌蘇知阿麻利、布多都乃加多知、夜蘇久佐等、曾太禮留比止乃、布美志阿止々、己侶麻禮爾母阿留可毛

與伎比止乃、麻佐米爾美祁牟、美阿止須良乎、和禮波衣美須氐、伊波爾惠利都久、多麻爾惠利都久、

己乃美阿止、夜與呂豆比賀利乎、波奈知伊太志、毛呂毛呂須久比、和多志多麻波奈、須久比多麻波奈、

伊可奈留夜、比止爾伊麻世可、伊波乃宇閇乎、都知止布美奈志、阿止乃祁留良牟、多布刀久毛阿留可、

麻須良乎乃、須々美佐岐多知、布賣留阿止乎、美都々志乃波牟、多太爾阿布麻氐爾、麻佐爾阿布麻氐爾、

麻須良乎乃、布美於祁留阿止波、伊波乃宇閇爾、伊麻毛乃己禮利、美都々志乃覇止、奈賀久志乃覇止、

己乃美阿止乎、多豆禰毛止米氐、與伎比止乃、伊麻須久爾々波、和禮毛麻胃氐牟、毛呂毛呂乎爲氐、

舍加乃美阿止、伊波爾宇都志於伎、宇夜麻比氐、乃知乃保止氣爾、由豆利麻都良牟、佐々義麻宇佐牟、

己禮乃與波、宇都利佐留止毛、止己止婆爾、佐乃己利伊麻世、乃知乃與乃多米、麻多乃與乃□□

麻須良乎能、美阿□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

佐伎波比乃、阿都伎止毛加羅、麻爲多利氐、麻佐米爾彌祁牟、比止乃止毛志□、宇禮志久毛阿留可、

乎遲奈伎夜、和禮爾於止禮留、比止乎於保美、和多佐牟多米止、宇都志麻都禮利、都加閇麻都禮利、

舍加乃美阿止、伊波爾宇都志於伎、田伎米具利、宇夜麻比麻都利、和我與波乎閇牟、己乃與波乎閇牟、

久須理師波、都禰乃母阿禮等、麻良比止乃、伊麻乃久須理師、多布止可理家利、米太志可利家利、

己乃美阿止乎、麻婆利麻都禮婆、阿止奴志乃、多麻乃與曾保比、於母保由留可母、美留期止毛阿留可、

於保美阿止乎、美爾久留比止乃、伊爾志加多、知與乃都美佐閇、保呂歩止曾伊布、乃曾久止叙伎久、

右歌碑建在佛足石之後、所鐫歌廿一首、其十七首、咏贊佛蹟、四首呵責生死、碑嘗罹火災、以故四邊

有剜脫者、中亦有磨滅不存者、其剜脫而後人取舊文補刻者、今圈以別之、其磨滅者、今從野呂氏摹本塡入、亦匡以存之、第二首拾遺和歌集載之云、光明皇后自書于山階寺佛蹟、皇后崇奉佛教、其吟詠想當如此、按義楚六帖載西域記云、佛在摩竭陀國波吒釐城石上印留跡、記弉法師親禮聖迹、自印將來、今在坊州玉華山、鐫碑記讃皇后蓋倣此也、契冲律師曰、山階寺卽興福寺、或云、佛跡石及此碑、古昔在興福寺、後移置藥師寺、然第十五首詠藥師佛、則似舊在於此、方外友西敎寺潮音曰、第十五首使用客醫舊醫之事、見涅槃經、亦喩釋迦之敎勝於餘敎、非謂藥師佛也、愚按、第九首第十四首並云、舍加乃美阿止、非謂藥師佛明矣、雖是寺安藥師佛、然又有釋迦佛跡石、亦何害、拾遺集云、山階寺者、恐傳聞之誤、以爲移置者、以碑見在藥師寺、不與拾遺集合、臆度爲之說、不足據也、潮音近日考證記文、注釋和歌、並精審可據、以有專書、此不贅、

〔佛足石和歌集解〕總論

此碑の和歌をば、聖武の皇后の御筆作なりと云は、拾遺集哀傷に、光明皇后、山しな寺にある佛跡に書付たまひける、みそぢあまりふたつの姿そなへたる昔の人のふめる跡ぞこれ、と、碑中第二の歌を引なほして、入られたるを證とせしのみ、他に考ふる所なし、○中略さて廿一首の歌は、佛跡落慶の日などに集ひたる人々の、各よみたる歌を、行道の諷誦として、やがて碑に鐫て建たるとおぼしければ、筆者などをばしひて考ふべきものにはあらず、さるからに藥師をよめるも、呵嘖生死の歌もまじりたるなめり、○中略

一說云、此碑中ごろ寺內の廢頽につきて、近境の橋梁と成たりしを、南都の墨工松井氏號古梅園搜出て再建せり、其時の圖なども寺中に收むと、げに碑面の缺損、趺石の磨滅などはさも有べくおもはるれど、かの山科寺の說に因て、近世他より移したる物なりと云說は、もとよりとるにたらず、はた寛永巳來の大和州の事を書るものに、皆その佛跡の所在をしるしたれば、其再建もあまり

に近からぬことなるべし、○下略

〔雲遊文蔚 二〕四月朔、○中略入二藥師寺一、○中略乃追二寺僧一拜二佛足岩一、○○○○磐高一尺八寸、平面二尺五寸、亘三尺二寸餘、佛跡長一尺五寸七分、幅五寸三分、輪相及諸相彷彿于面、

寺領

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨二藥師一、○中略墾田地一百町、

奴婢

〔類聚三代格 三〕家人事

勅、藥師寺奴婢等、年滿二六十一、并才能勇勤、悉從レ良、

天平神護二年五月十一日

用途

〔延喜式 二十六 主税〕諸國出擧正税、公廨雜稻、○中略

駿河國○中略藥師寺料八千束、○中略武藏國○中略藥師寺料四万二千束、○中略安房國○中略藥師寺料二万束、○中略上總國○中略藥師寺料三万四千束、○中略下總國○中略藥師寺料三万五千束、○中略常陸國○中略藥師寺料五万束、○中略美濃國○中略藥師寺料二万七千束、

寺印

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜二年八月己卯、初令下所司鑄二僧綱及大安藥師○中略等寺印一、○○各頒中本寺上、

造寺司

〔續日本紀 二 文武〕大寶元年六月壬子、以二正五位上波多朝臣牟胡閇、從五位上許曾倍朝臣陽麻呂一任二造藥師寺司一、 七月戊戌、太政官處分、造宮官准レ職、造大安藥師二寺官准レ寮、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年三月辛卯、始置二造藥師寺司史生二人一、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平四年十月丁亥、正五位上粟田朝臣人上爲二造藥師寺大夫一、

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年三月癸亥、幸二藥師寺一、捨二調綿一万屯、商布一千段一、賜二長上工以下奴婢已上二十六人爵一、各有レ差、

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年七月庚子、停二藥師寺木工長上二人一、

參詣

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年八月甲子、高野天皇○孝謙及帝幸二藥師寺一、禮レ佛、奏二呉樂於庭一、施二綿一千

名稱
所在
創建
沿革

屯、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月癸亥、幸藥師寺、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜五年三月廿一日、法皇〇宇多御藥師寺、因使元方奉問途中消息、令仲平朝臣奉掛衣百條、藥師寺万燈會料也、先日菅根朝臣傳御氣色、所令奉仕、今法皇御彼寺、令行會事、仍令運奉彼寺、已上

西大寺

西隆寺　佛入

西大寺ハ、大和國添下郡西大寺村ニ在リ、孝謙天皇ノ勅願ヲ以テ、天平神護元年創建シ給フ所ナリ、嘉禎中、叡尊當寺ニ入リテ戒法ヲ說キシヨリ、遂ニ律宗ノ本寺ト爲リ、德川幕府時代ニ在リテハ、寺中金剛院ノ住持、寺務ヲ執リ、眞言律ノ總本寺ト稱セリ、

西隆寺モ亦孝謙天皇ノ創建シ給フ所ニシテ、陽成天皇ノ元慶四年、西大寺ヲシテ此尼寺ヲ攝領セシメタリ、

〔伊呂波字類抄佐諸寺〕西大寺號四王院、稱德天皇御宇、天平神護元年、助造西大寺、安置七尺金銅四天王像、或書云、光仁御宇寶龜三年壬子造西大寺云々、

〔大和志三添下郡〕佛刹　西大寺西大寺村、高野天皇建、仍名高野寺、

〔和漢三才圖會七十三大和〕西大寺　在小和田村之北　稱德帝天平神護元年草創　開山常騰僧都

四天王像長七尺銅佛

〔大和名所圖會三添下郡〕西大寺添下郡、西大寺村にあり、南都七大寺其一なり、〇中略

奥院興正菩薩の塚あり、抑西大寺、貞觀二年の回祿より、三百七十八年を經て、嘉禎二年興正菩薩中興開基せり、もとは思圓上人と申侍しが、正安二年、興正菩薩と謚したまひき、

〔西大寺資財帳〕緣起坊地第一

夫西大寺者、平城宮御宇、寶字稱德孝謙皇帝、去天平寶字八年九月十一日誓願、將敬造七尺金銅四王像、兼建彼寺矣、乃以天平神護元年、創鑄件像、以開伽藍也、居地參拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路、除東北角喪儀寮、南限一條南路、西限京極路、除山陵八町、北限京極路、

〔元亨釋書二十八寺像〕西大寺者、天平神護元年、稱德帝建、鑄四天王銅像、長七尺、三像已成、只增長天王一像不成、改鑄六度遂不成、至第七度、帝親幸治處、誓言、朕若因是功勳、來世轉女身成佛道、手攪熱銅、無傷損、而像成矣、若不然手爛、像不成、便以玉手攪洋銅、御手無傷、像便成、見聞無不嗟嘆、

〔扶桑略紀拔萃稱德〕天平神護三年〇神護景雲元年六月十五日、天皇奉造西大寺彌勒淨土、在大和國添下郡平城宮右京一條二坊、

〔元亨釋書十三明戒〕釋叡尊、歲十一離家、師事醍醐山睿賢、〇中略嘉禎二年、與同志者四人、依大乘三聚通受法、自誓受戒、自爾居南京西大寺、盛弘戒法、

〔西大寺藏本下〕西大寺并諸末寺住侶等謹言上

欲殊有申御沙汰當寺一門僧尼寺等、且被優難興宗、且被賞致御祈禱功、申賜關東御敎書、令停止御家人幷甲乙輩狼籍子細事、

副進

一卷　御祈禱御卷數御報案　一卷　諸寺注文

右八宗弘于本朝、難興者律宗也、三學傳于末代、易廢者戒法也、然而先師上人捨身命而興宗、碎骨髓而弘戒以降、及數百千人之僧尼、經六十三年之星霜、爰門弟等、衣鉢之外雖無貯、護先師之敎誡、忘當時之飢寒、奉祈國土泰平武家安全、然間、時及澆季狼戾非一、或入殺生禁斷之寺邊、刃傷僧衆、或堂塔敷地稱有課役、入魚鳥於僧房之內、或於路次入尼寺、押取尼衆、强令破戒、或寄事於御德政、佛聖燈油料田等、皆以顚倒、或入寺敷地內、駈使寺民、如斯狼籍不能委細、進欲訴彼仁、有損人之難、違菩薩行、

退欲息此事、無興法之意、背如來教、可有御哀、何事如之哉、加之毎年武家安全御祈禱、抽丹府凝白善、進卷數預御報、況又就宗興行依法外護、云上古云先規、不違毛擧、所詮、御家人幷甲乙輩狼籍等、早被誡先非、且可愼後失之由、被申下關東御敎書者、彌瑩五篇七聚之戒珠、鎭千秋万歳之御運哉、仍粗言上如件、

永仁六年二月　日　　西大寺僧侶等

○按ズルニ、此年九月九日、北條氏命ジテ、守護代、幷地頭、御家人等、西大寺以下諸寺ニ於テ、濫惡ヲ爲スヲ禁ゼリ、

堂塔

〔西大寺資財帳〕堂塔房舍第二

金堂院　藥師金堂一宇（長十一丈九尺、廣五丈三尺、）

蓋上東西金銅沓形、各重立金銅鳳形、各咋銅鐸、蓋上中間金銅火炎一基、中在金銅茄形、居銅蓮花形、令待於金銅獅子形二頭、蹈金銅雲形、又宇上周廻火炎三十六枚、幷在銅瓦形角隄瓦端銅華形八枚、桷端金銅花形三十六枚、各著鈴鐸等、又四角各懸鐸、堂扉幷長押在金銅鋪肱金等、

彌勒金堂一基、（二重、長十丈六尺、廣六丈八尺、○中略）中門一宇、（長七丈八尺、廣三丈、）東西脇門二宇、（各長二丈、廣二丈八尺五寸、）中大門一基、（二重、長九丈、廣三丈七尺、）在鐸八口、東西樓門二基、（各長二丈六尺、廣二丈、）塔二基、（五重、各高十五丈、）幢六株、（二株無鳳形）

在金銅鳳形四翼、（二破）壯柱並金銅頭

十一面堂院、○中略　西南角院（東南角院等略之）正倉院、南一瓦葺甲倉、（長三丈一尺、高一丈六尺、廣二丈二尺二寸、○中略）

〔續日本紀（三十稱德）〕寶龜元年二月丙辰、破却西大寺東塔心礎、其石大方一丈餘、厚九尺、東大寺以東、飯盛山之石也、初以數千人引之、日去數步、時復或鳴、於是益人夫、九日乃至、卽加削刻、築基已畢、時巫覡之徒、動以石祟爲言、於是積柴燒之、灌以三十餘斛酒、片々破却、棄於道路、後月餘日、天皇不念、卜之、破石爲祟、卽復拾置淨地、不令人馬踐之、今其寺內東南隅數十片破石是也、

宗派寺格

〔續日本紀 光仁三十一〕寶龜二年十月己卯、授正六位上英保首代作外從五位下、以構西大寺兜率天堂也、

〔續日本紀 光仁三十二〕寶龜三年四月己卯、震西大寺西塔、卜之、採近江國滋賀郡小野社木、構塔爲祟、充當郡戶二烟、

〔續日本紀 光仁三十四〕寶龜七年七月甲辰、震西大寺西塔、

〔續日本後紀 仁明十六〕承和十三年十二月戊寅、火燒西大寺講堂、佛像一時與煨燼共盡、

〔日本紀略 醍醐一〕延長五年十月□□日、西大寺五層塔有火、

〔扶桑略記 醍醐二十四〕延長六年七月十一日、夜雷震、西大寺塔有火、一基蕩盡、

〔園太曆〕貞和三年八月三日、朝間、大藏卿爲勅使有被尋事、西大寺申、當寺塔供養准勅願可有沙汰、於院司下向者、不可然歟、御願文可沙汰下之旨申也、可爲何樣哉者、勅願之時、如御願文者、雖有無沙汰事、勅使院司主典代被略之條不打任也、勅願之儀者、於邊鄙申請之時、被遣之常事也、被遣御願文、被略院司之條示之旨申了、

〔宣胤卿記〕文龜二年五月十九日庚寅、勸黃門狀到來、去七日西大寺燒失事注進、案在左 先遣返事了、定綸旨事可申入歟、其案可書給云々、

去七日、當寺回祿非所及言語候、塔婆始而鐘樓、經藏、四王堂、四面僧室等、悉以令燒失了、是併依陣宿等汚穢不淨也、早々被成綸言、御再興可爲佛法再昌之洪基之旨、可被經御奏聞候、恐惶謹言、

五月十三日　西大寺僧衆等

勸修寺殿

〔日本略記〕一諸宗之本寺之事、○中略 律宗本寺者、西大寺也、○中略 已上是を八宗と云、

〔直言律辨〕西大寺ハ、興正菩薩ヨリ眞言宗ニテ、而モ戒ヲ守リ候故、眞言律ト申候、招提寺モ、大悲菩薩○覺盛ヨリ以來ハ、眞言律ト申候、山城國ノ槇尾山モ、明忍律師已來眞言律ニテ候、和泉ノ神鳳寺

ノ一派、河内國野中寺ノ一派モ、皆同前ニ候故、タトヒ禪宗淨土天台ナドヨリ、彼派ニ入リ候人モ眞言ヲ學シ候、當寺〔靈雲寺〕ハ愚僧〔淨嚴〕本來眞言宗ニテ、戒律ヲ守リ、諸弟子皆同前ニ候故、眞言律ト名乘候、然ルヲ今度公儀御取立ナサレ、關東八箇國ノ、眞言律ノ本寺ト仰出サレ候ヘバ、イツマデモ、如法ノ眞言宗ト存ジ罷在候、

寺領

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年五月戊辰、近江國人外正七位上大友村主人主、稻一万束、墾田十町、獻於西大寺、〇中略授外從五位下、六月庚子、土左國安藝郡少領外從六位下凡直伊賀麻呂、稻二万束、牛六十頭、獻於西大寺、授外從五位上、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年閏六月己酉、戸百五十烟捨西大寺、

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年六月乙酉、武藏國入間郡人大伴部直赤男、以神護景雲三年、獻西大寺商布一千五百段、稻七万四千束、墾田四十町、林六十町、至是其身已亡、追贈外從五位下、

〔西大寺藏本下〕伊賀國島原保地頭職爲後鳥羽院、後宇多院、後醍醐天皇御菩提料所、可被知行者、天氣如此、仍執達如件、

正平八年五月十五日　勘解由在判

西大寺長老

〔西大寺藏本下〕西大寺領戌亥山、幷谷谷田畠等事、向後爲律家進止、可停止白衣僧等自專之義、若亦違背僧衆命者、嚴密可有其沙汰、存其旨、可相觸滯寺之由、被仰顯昭法印了、可被存知之旨、天氣所候也、仍執達如件、

九月廿五日　木工頭宗房

淨覺上人御房

造寺司

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年二月戊申、從四位下佐伯宿禰今毛人爲造西大寺長官、右少辨正五

位上大伴宿禰伯麻呂爲兼次官、

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲二年二月癸巳、外從五位下飛驒國造高市麻呂、楠部越麻呂、並爲造西大寺大判官、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年十一月丁丑朔、從五位上栗田朝臣公足爲造西大寺員外次官、 四年五月癸巳、從四位下津連秋主爲造西大寺次官、

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年七月庚子、停西大寺木工長上二人、

行幸

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年十二月癸巳、幸西大寺、無位淸原王、○中略 並授從五位下、

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年三月壬子、幸西大寺法院、令文士賦曲水、賜五位已上及文士祿、

城內寺院

〔寺鑑 上〕無本寺寺院　南都西大寺中　眞言律總本寺　金剛院

御朱印西大寺領三百石之內　高拾貳石　配當

右住職、西大寺以衆評相定ル、

雜載

〔延喜式 二十一 雅樂〕凡西大寺、三月十五日、成道會、○中略 官人史生各一人、率樂人等供奉、

〔西大寺光明眞言緣起〕抑大會光明眞言者、文永元年之始行、思圓上人誓約云、且當寺之大檀那爲期再會於淨佛道、且六道四生皆是劫々、父母鐵圍砂界、莫不世々朋友、思彼禁痛、爲我般憂、因茲窮未來際、卜七日七夜之光陰、資瑜伽瑜祇之壇場、令一結本末衆、晝夜不退之神呪、自開白初、至結願終、溫座修運之時々、大法土砂納壇、座々加持、其利益不可勝計、

〔古今和歌集 一 春〕西大寺のほとりの柳をよめる　僧正遍昭

あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春のやなぎか

○

西隆寺

〔和州舊跡幽考 五 添下郡〕西隆尼寺

西隆寺尼寺の跡、さだかならず西大寺の乾に、尼が谷といふ所あり、これらの所にや、

〔三代實錄陽成三十七〕元慶四年四月十九日壬申、令西大寺攝領西隆寺尼寺、此兩寺是高野天皇創建、以西隆尼寺、爲西大寺僧等洗濯法衣之處也、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年八月丙午、從四位上伊勢朝臣老人爲造西隆寺長官、中衞中將參河守如故、九月辛亥、從五位下池原公永守爲造西隆寺次官、大外記右平準令如故、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年五月辛未、惠美仲麻呂越前國地二百町、故近江按察使從三位藤原朝臣御楯地一百町、施入西隆寺、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱及〇中略法華、西隆等寺印、各頒本寺、

唐招提寺

名稱　所在　創建

唐招提寺ハ、初メ建初律寺ト云フ、大和國添下郡蓬萊村ノ南ニ在リ我國傳戒ノ祖唐僧鑑眞、聖武天皇ノ御爲ニ建立セシ所ニシテ、其講堂ハ、時ノ朝集堂ヲ賜ヒシモノナリト云フ、

〔拾芥抄下本諸寺〕招提寺律院〇

〔招提本源記〕天平寶字三年八月廿五日和尚於當寺舍利殿前立戒壇、太上皇〇聖武初登壇受菩薩戒、〇中略孝謙天皇賜官額、號唐招提寺、初名建初律寺、依日域傳戒最初也、

〔和州舊跡幽考添下郡五〕唐招提寺蓬萊村の南寺領三百石、律眞言兼學、

〔招提千歲傳記下一殿堂〕寺基方四町也、東限五條南北大道、西限南北小路、南限五條大路、北限四條大路、此餘西山有別院四十八院也、

〔唐大和上東征傳〕大和上〇鑑眞遂果本願、來傳聖戒、〇中略時有四方來學戒律者、緣無供養、多有退還、此事漏聞于天聽、仍以寶字元年丁酉十一月二十三日、勅施備前國水田一百町、大和上以此田欲立伽

藍、時有勅旨、施大和上園地一區、是故一品新田部親王之舊宅、普照思託請大和上、以此地爲伽藍、長傳四分律藏法勵四分律疏、鎭國道場飾宗義記、宣律師鈔、以持戒之力保護國家、和上言大好、卽寶字三年八月一日、私立唐律招提名、後請官額、依此爲定額、以此日請善俊師講件疏記等、所立者今唐招提寺是也、初大和上受中納言從三位氷上眞人燒〇皇之延請、就宅竊嘗其土、知可立寺、仍語弟子僧法智、此福地也、可立伽藍、今遂成寺、可謂明鑒之先見也、

〔招提千歲傳記下一殿堂〕寺基〇註略

夫此地者、天武天皇第七子一品大將軍新田部皇子之舊地也、皇子初住斯地、紺殿朱閣、韓玉雙甍、官人進階、宮女步廊、朝乘牛車、轟々登于鳳闕、哀四海民、暮從朝退、入長生殿、戀不老樂、詠歌吟詩、奏樂作舞、厥歡樂豈窮乎、其仁情慈育、而爲淸明人也、位進一品、兼任大樹職、當時爲天下純也、天平勝寶年間薨、國人憂之、勅遣官人數輩、監護葬事、又使連兄舍人皇子入其館而弔之也、其後殿閣相荒、年漸古也、然寶字年中、吾祖大師自嘗地味、乃知爲佛法延榮之地、尋下勅於此地、令立伽藍、號稱招提、殿閣映日、藍院聳山、緇徒三千、連乎學寮、可謂海東無雙之大藍、日域最勝之戒場也、至于今幾一千歲、樓殿昭々林岳、其間盛衰是世常也、誠吾大師之遺德、與天地同無窮矣、

〔招提千歲傳記上一傳律〕扶桑律宗太祖鑑眞大師傳

太祖、諱鑑眞、世姓者淳于氏、支那國楊州江陽縣人、齊辨士髡之後也、〇中略天平寶字元年、上欲遂先帝之志、勅高房藤公爲經營之司、至三年八月乃成、此歲廢帝元年也、厥規制、飛楹層閣塗金、間碧朱甍畫棟、照輝林巒、恰如化成龍天之宮也、太祖表立輪蓋龍王祠、以鎭于寺、蓋龍王有護舍利之誓故也、上皇孝謙親御翰墨、書唐招提寺四大字、懸于講堂、又詔祖、築戒壇、從受菩薩大戒、今上同登壇受戒、至於皇后妣嬪公卿大夫、皆預受戒、又詔天下、爲出家者、先入招提、受戒學律而學自宗、據之四方雲衲、騰踏而赴者、唯恐後焉、以故常居凡三萬指、

堂塔

〔續日本紀二十淳仁四〕天平寶字七年五月戊申、大和上鑑眞物化、○中略聖武皇帝師之受戒焉、及皇太后不念、所進醫藥有驗、授位大僧正、○中略又施新田部親王之舊宅、以爲戒院、今招提寺是也、

〔東大寺要錄四〕唐禪院

天平勝寶十年、所創建也、龍興寺和上居住此院、後移住招提寺矣、

〔扶桑略記淳仁拔萃〕天平寶字三年八月三日、大唐鑑眞和尙奉爲聖武皇帝、招提寺所創建也、金堂一宇、少僧都唐如寶所建立也、安置盧舍那丈六像一軀、唐義靜法師造之、經藏一基、納佛舍利千合、佛菩薩像、經律論疏、一切寶物等、鐘樓一基、講堂一宇、平城朝集殿施入也、安置丈六彌勒像、脇侍菩薩像、唐法力法師奉造、食堂一宇、安置障子藥師淨土繪、阿彌陀佛像幷脇侍菩薩等、藤原仲麿朝臣家屋施入也、羂索堂一宇、安置金色不空羂索菩薩像一體、幷八部衆、入唐大使藤原清河卿家屋施入也、一切經四千二百八卷、大僧都賢影大法師、奉爲國家書之、已上

〔好古小錄雜下〕南都招提寺ノ講堂ハ、平城宮ノ朝集殿ト云傳フ、予其結構ヲミルニ、朝集殿ノ結構ニ非ズ、金堂ノ結構ヲ詳ニスルニ、間架結構疑フベクモナキ朝集殿ナリ、藻井、及土壇ハ、當時金堂トナシテ設ル所、朝集殿ノ結構ニ非ズ、材ノ美モ諸堂ノ及ブベキニ非ズ、講堂ヲ朝集殿ト云說ハ、古來ヨリ誤リヲ傳ヘタル者トミユ、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年四月甲申、遣散位外從五位下江沼臣小並等、造招提寺塔、

〔大和名所圖會三添下郡〕唐招提寺(中略)初建立より火災なし

寺領

〔招提千歲傳記下三封祿〕備前州水田一百町是者天平寶字元年冬十一月廿三日、孝謙皇帝爲聖武上皇菩提、寄于唐禪院、同三年太祖建立當寺、其八月廿六日廢帝以此水田寄于吾山、蓋此田者十方衆僧供養物也、吾太祖令天下之緇侶學習戒律、以此水田充其供也、

越前州水田六十町高津郡柏津庄也、天平寶字三年勅賜當山、是爲律學料也、具云五十四町三百五十六步無腊、

備前州平田十三町三野郡葦方庄後改云新庄也、因由同前、播州戶五十煙是者寶龜六年五月光仁皇帝勅賜此山、封戶五十烟圖未詳是者嵯峨皇帝

（弘仁年間勅賜之也、或曰寶龜六年所寄、播州之戶者則是也、嗚呼悲哉、是者弘法大師代如實公寄表進闕前、寶龜六年者弘法大師二歲之時也、豈二歲之童能寄表乎、況亦表曰、如實隨師達披露朝、六十于今也、性靈集第四往見焉、寶龜中未當六十年、豈可然乎、與前爲別可知、又古記曰、桓武皇帝建立彌陀堂時、賜此封戶也、）

田地貳百町（國未詳、是未詳、古記曰、大同皇帝歸崇豐安律師、故造立瑠璃壇、立大塔、又賜田地二百町也、）

田地百七十八町四段三百廿三歩（國郡未詳、是者寶字年中、吾太祖蒙得此地施入寺家、其後延年以驛國頃歟、增廣以功德、故讓不輸租、仁壽三年冬十月、文德皇帝以此田地、勅永爲當寺之傳法田也、然文德實錄三、寶龜年中、龜字寫誤、宜作字字也、）

攝津州渡邊郡寺本庄、草苅庄、富島庄、溝杭庄、津江庄等、是者等持院殿（○足利尊氏）之寄進也、未詳所以、尊氏家歸依吾山、實然御賀麻呂自書心經一卷、爲尊父等持院殿菩提納于此寺、今尙存之、以之計思有其歸依也、

布薩田十町（寶字元年秋閏八月、孝謙帝寄之、具見舊事纂也、）

和州五條庄三百石（東照神君寄之、于今領之、）

已上隨見記之、自餘十方檀越、或一田、二田等、隨力寄之尤多、不能委記之、

〔續日本紀　三十四光仁〕寶龜七年六月癸亥、播磨國戶五十烟捨招提寺、

〔享祿本類聚三代格　二〕太政官符

應令招提寺爲例講律事

四分律一部（七十卷）　疏一部（十卷）　釋法礪撰華嚴經一部（八十卷）　涅槃經一部（卅六卷）　大集經一部（卅卷）　摩訶般若波羅密經一部（卅卷）　已上在寺內

田地一十三町（在備前國）寶龜八年七月廿六日官符、　水。田。六。十。町。（在越前國）用知識物所買、

右得律師傳燈大法師位如寶牒偁、件寺者、斯唐大和上鑒眞奉爲聖朝之所建也、去天平寶字三年、勅以沒官地賜之、名爲招提寺、令修學戒法、爾來殆五十年、雖有經律、未經披講、一則乖和上之素意、一則闕佛道之至志、伏望下符寺家、永代傳講、便用件田、充律供儲、然則招提之宗、久而無廢、先師之旨、沒而

什物

不朽者、右大臣宣、奉勅依請、

延暦廿三年正月廿二日

〔日本後紀 二十二嵯峨〕弘仁三年七月己巳、封五十戸施入招提寺、

〔性靈集 四〕爲大德如寶奉謝恩賜招提封戸表一首

沙門如寶言、伏蒙恩施招提寺封戸五十烟、如寶隨師〔〇鑑眞〕遠投聖朝、六十年于今矣、雖云德行無取、才能不聞、賴先師餘慶、聖朝泰澤、積恩累疊、積有年歲、伏惟皇帝陛下、仁過兩儀、道隆貫三、顧彼福田、捨此封戸、四衆萬民無不感悦、況於如寶、不知手足、謹詣闕奉表陳謝以聞、沙門如寶、誠懽誠喜謹言、

〔日本後紀 十七平城〕大同三年九月乙未、勅權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其招提寺、封五十戸、〇中略宜且納穀倉院、

〔文德實錄 五〕仁壽三年十月丙子、招提寺田地百七十八町四段三百二十三歩永爲傳法田、初寶龜中、大唐和尚鑑眞買得此地、施入寺家、其後逐年墾闢、頃畝增廣、以功德故聽不輸租、

〔寺鑑 上〕無本寺寺院　南都律宗招提寺

御朱印　高三百石

〔猪隈關白記〕建久八年四月卅日癸酉、早旦、殿下〔〇藤原基通〕令參內給、今日招提寺舍利被奉渡內裏云々、殿下少々令申請給還、

〔大乘院寺社雜事記〕延德三年七月二十一日

一松題〔招提〕寺東征傳五卷、召寄之、自大內被仰出間也、〇中略

一廿六日、松題寺東征傳繪五卷、京都ニ被上之、中御門奉行、昨日京上、〇中略

一二十七日、中御門返事、東征傳繪、御悅喜旨被仰出之、

〔好古小錄 上書畫〕東征傳繪緣起〔五卷 簽鷹司殿〕

曝卷紙ニ、奉施入唐招提寺、永仁六年戊戌八月日、極樂律寺住持沙門忍性、按ニ、此卷及吉備公入唐繪、高山寺ノ繪詞ノ類、略其事ノ始末ヲ考フベシトイヘドモ、圖スル所、多異邦ノ事ニシテ、衣服器用ニ至リテハ、畫工ノ私意ニ出ヅ、故ニ考古ノ益スクナシ、

秋篠寺

名稱所在

秋篠寺ハ、大和國添下郡ニ在リ、光仁、桓武二帝ノ勅願ニ出リ、善珠ノ創建スル所ナリ、古來宮中ニ於テ大元帥ノ法ヲ修スル時、其香水ト壇土トヲ此寺ニ取ルヲ例トス、

創建

〔和州舊跡幽考 五添下郡〕秋篠寺 四大寺の北、寺領百石、眞言宗、

秋篠寺は藥師如來を安置す、光仁桓武兩帝の勅願、香水記 開山は善珠僧正と或宗派に見えたり、此僧正は唯識宗をまなぶには、心のたはむ事をしらず、因明論にむかひては、まなこにあく期あらず、延曆十六年四月にをはりをとる、年七十五、釋書 香水は寺内に井あり、丹ぬりの祠をもとめて扉をとぢ、常に人見る事をえず、

〔廣大和名勝志 十一添下郡〕秋篠寺 寺領百石 中略〇

法琳寺別當舊記曰、太元法爲御齋會御修法、元由承和七年、常曉和尙始而於宮中修此法、匪有宣下、巳載新式、以爲國典云々、自爾巳來、于今不闕之御願也、此法醍醐寺理性院代々可爲譜代職旨賜宣下、今於理性院、每年自正月八日一七箇日被行之、又和州秋篠寺役、汲御香水、大元影現之閼伽井取塗壇土進上阿闍梨之坊、如舊式衞士之所役也、

〔秋篠寺緣起〕和州添下之郡阿陀縛狗山秋篠寺眞言院之緣起

夫治國慈民、君子之行業、興法利生、菩薩之悲願也、粵和陽阿陀縛狗山秋篠寺眞言院之伽藍者、往昔

爲人王四十九代光仁帝同五十代桓武帝兩聖主之御願、而鎭護國家之靈場、利濟黎元之精舍矣、而其開基者、善珠大德、珠者妙通八五三二之源旨、深達三十三過之淵奧、遂博該三藏、特隱括宗趣、因於相宗、爲本朝第一祖也、光仁帝寶龜十一年、奉勅開斯靈場、事載之於別記矣、蓋當寺本尊者、行基菩薩之造彫、藥師如來之眞容也、鐘峙七堂雙甍、佛閣輪乎巍々、四境構門、壁樹卓爾森々、是以詣參之人、實前成市、供養之輩、再拜側肩、三寶供奉之恩澤特厚、投三千有餘之俸祿、以寄附於後代、僧舍亦一千餘區、交檐以繁焉、自爾以降者、由來尙矣、雖然世垂澆季、而興廢時移、盛衰物換、嗟夫保延元年六月中浣、魔風頻扇、兵火忽起、而一山既成焦土、稍得以奉出於諸堂之尊像、且防助講堂一宇、故令達之於叡聞、便課於工匠、以不日成、再建香水閣、及修補本堂焉耳、然七堂不全復於舊制也、嗟惜矣乎、特當伽藍者、小栗栖常曉闍梨、太元明王感得之勝地也、所以何則、人王五十四代仁明帝之御宇、常曉和尙、有以而歸依於當寺之本尊、求願之志深重、而令參籠數日於焉、丁滿夜、有感奇異之靈夢、悟了直爾、而往詣於閼伽井之邊、于時太元尊容示現于水中、曜於光暉、暫現卽隱、因圖其尊容於法衣之袖、（至今當寺寶物之隨一也）然未詳何尊、故奏之於太政官、請入唐之聽許、遂得蒙勅詔、承和元年甲寅、入大唐到淮南廣陵館、過栖靈寺文璨（倉晏切、溫璨、吳本作璨也）、稟密教、乃文宗大和八年也、璨者不空三藏弟子、慧應之徒、妙明經律、深通秘藏、又謁花林寺三教講論大德元照、語之以曾感靈夢之奇瑞、更請益密奧、照授以阿闍梨位、特傳靈夢所感之太元帥秘法、此法也、彼國秘不出都外、然照喜曉之神器、且靈感之不可思議、欲播化於異域潛授焉、令委軌則也、明年附船而歸、申之於官、開受持法驗尤顯、六年獻太元帥像、七年返賜、命鎭供、於是奏曰、入唐請益僧傳燈大法師位常曉言、山城國宇治郡法琳寺、地勢閑燥、足以修大法、伏乞、安置自大唐所請來太元帥像、汲秋篠寺香水、以爲閼伽、取壇土、以塗爐壇、爲國家修秘法、永祈寶祚之延長、有詔許焉、於是、安元帥、以爲修法院、汲閼伽水於秋篠寺、取壇土於同寺本尊之座下、修天下安全之大法、茲有年矣、而後至文德天皇仁壽開元、倍大唐王宮之儀式、可移修法院於淸涼殿、行太元秘法於北闕之由、復

造寺司

名所所在

有宣旨、故應勤徙焉、而獻壇土香水、於今顯然、御修法之時、所以取秋篠寺本尊座下之土、用塗護摩之爐也、曾稽和月氏和漢三國之土、以加持之、而築斯大壇云々、此故、毎歳孟春初八、獻以香水及壇土矣、自此以來、法相。象學之。眞言。宗也。嗟乎香水壇土之所以爲閼伽塗爐壇也、良有故哉乎、一天四海安穩泰平之修法、御願圓滿、萬民豐樂之濫觴矣、特本尊藥師如來、十二本願之妙藥者、除滅內外二病、成滿現當所願也、彌綸於經軌矣、信修奉朝、四種万荼之華彌鮮色、觀念秋暮、五相成身之月增添光、方今開福智之寶藏、而可共服長生之醍醐也、仍所記緣起如斯、

于時保延五己未歲正月八日　　秋篠寺

〔日本後紀平城十七〕大同三年七月庚子、俸西大寺木工長上二人、法華寺一人、秋篠寺一人、

超昇寺

超昇寺ハ、後ニ超勝寺トモ書ス、大和國添下郡超勝寺村ニ在リ、平城天皇ノ皇子眞如法親王ノ創建ニ係レリ、

〔伊呂波字類抄天諸寺〕超昇寺

〔和漢三才圖會大和七十三〕超勝寺　在超勝寺村　眞如法親王建立

平城天皇第三王子、出家名眞如、建當寺、後爲求法渡天、於旅中爲虎所害矣、當寺天正年中以來衰廢、而今有一小庵、大日如來耳、

念佛堂　正曆年中、與福寺僧淸海、遷超勝寺、造念佛三昧一字於院內、自圖曼陀羅、此本朝第三曼陀羅云、

〔和州舊跡幽考添下郡五〕超昇寺

超昇寺〔三代實錄〕又超勝寺〔釋書〕ともかけり、眞如法親王の御建立なり、〔三代實錄〕天正年中に絕果て、今は形ばかりなるいほりに、大日如來一軀あり、むかしは密法の華風にきほひて、四方に薰じ、今は民業の苗露になびきて、一村のたのしみとなる、誠に時あればにや、白鷺池も水かれ、華清宮も草まげしとかや、○中略

念佛堂は正曆年中夢の告にまかせ、淸海法師超昇寺の院內に造立あり、〔西万陀羅抄〕

創建

〔伽藍開基記三和州〕超勝寺〔未詳年月、至元祿二年、凡及八百六十餘年矣、〕

添下郡超勝寺眞如法親王開創之所、雖大伽藍、以年代久遠漸毀壞、今僅小殿存焉、中安大日如來、開山眞如、乃本朝五十一代平城天皇第三子也、

〔三代實錄六淸和〕貞觀四年十二月二十五日己未、大藏大輔正五位下在原朝臣善淵奏言、善淵自在童齡之年、平城天皇別賜恩隱、荷戴之德、猶欲灰身、自宮車晏駕、常念結精廬於陵次、以作念佛之地、聊且所得白業、卽便奉資御靈、丘山之恩、以補萬一、假使世累未免者、以得意一僧代身令住持、至于歸老之時、將果出世之願、而年鬢漸衰、心事未合、望山陵而泣血、顧簪纓而胡顏、竊見禪師親王、○眞如昔構堂舍之地、今來荒廢、基趾猶存、因願不勞犯土之功力、便建一舍於此中、方今薰風遠扇、眞俗需仁、凡有善願、皆蒙成濟、儻枉大恩、蒙賜哀許、則獻微涓於存沒、爲知恩之一端、督深念於現當、作斷惑之勝業、卽預目之至願、土灰之極榮也、詔許之、善淵平城太上天皇孫、高丘親王之男也、

寺領

〔三代實錄四淸和〕貞觀二年十月十五日辛卯、大和國平城京中水田五十五町四段二百八十八步、施捨不退、超昇兩寺、先是傳燈修行賢大法師眞如上表曰、件田、大同四年、勅賜上毛野叡繼、石上內親王等、彼親王等偏謂、私地捨充功德、而歷代以降、並被收公、閑諸俗務、理縱宜然、假之眞論、義有未儘、當今慈雲廣覆、慧日更明、凡緣佛事之莊嚴、必賜恩給之印可、請特哀許、施入不退超昇等寺、不破亡靈之宿心、將資聖朝之冥助、勅許之、眞如者、平城太上天皇皇子、弘仁之廢皇太子也、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十月十六日甲子、詔以權僧正法印大和尚位壹演、爲超昇寺座主、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年四月九日甲戌、權少僧都法眼和尚位宗叡奏言、藥師寺法相宗傳燈大法師位義澄、同宗傳燈大法師位義叡、東大寺律宗傳燈大法師位忠誠、華嚴宗傳燈大法師位心惠等四人、兼學眞言、堪爲師範、伏望、隨修行傳燈賢大法師位眞如本願、令入住超昇寺、詔從之、

古事類苑

宗教部五十四

佛教五十四

法隆寺 中宮寺 附入

名稱 所在 創建

法隆寺ハ、大和國平群郡法隆寺村ニ在リ、推古天皇、厩戸皇子ト相共ニ協心シテ、創建セシ所ナリ、藥師如來ヲ本尊ト爲シ、又釋迦、觀世音、二天等ノ諸像アリ、倶ニ光銖ノ背或ハ座下ニ記文アリ、金堂、五重塔等ハ千載以前ノ構造ヲ今日ニ見ルコトヲ得、其精巧ナル器什モ亦當時ノ物タリ、今法相宗ノ大本山ナリ、

中宮寺ハ、法隆寺內ニ在リ、斑鳩御所トモ稱シ、比丘尼御所ノ一タリ、

〔伊呂波字類抄 保諸寺〕法隆寺 七大寺內、和銅年中造立、寺家緣起云、推古天皇第十五年、聖德太子斑鳩宮西建二一伽藍一、名二法隆學問寺一、安二置佛舍利一、末朝始二法華、維摩會、請二聖三部大乘於此寺、如來教法始所、故名二學問寺一、

〔和州舊跡幽考 六平群郡〕法隆寺 寺領一千石四斗、法相宗、八宗兼學、

法隆寺又ハ七德寺、又ハ聖國寺、又ハ寶龍寺、又ハ來立寺、又ハ法隆學問寺、ハ又鳥路寺、又ハ往生所寺、玉林抄

〔和漢三才圖會 七十三大和〕斑鳩里 因可池 今法隆寺東院之地是也、太子居住宮跡也、其近所有池、名因可池、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕法隆寺伽藍緣起幷流記資財事

奉爲池邊大宮御宇天皇、用明 幷在坐御世御世天皇、歲次丁卯、推古天皇十五年 小治田大宮御宇天皇、推古

幷東宮上宮聖德法王、法隆學問寺、幷四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺平敬造仕奉、〇下略

〔法隆寺記補忘集〕一當寺東院修南院建立之時、堂供養之表白諷誦呪願文等之寫、享保七年霜月日東鄉住侶令所持、之寫也、修南院建立之檔與也、

表白

敬白

奉供養一間四面堂舍一宇

奉開眼供養聖德太子十六歲御影一尊

南閻浮提大日本國法隆學問寺衆等、稽首和南而白、風聞、中天有釋迦牟尼之出世、以靈鷲爲常住之床、本朝有聖德太子之誕生、卜斑鳩爲不退之席、中邊境雖異、依器是勝處者歟、蓋聞、當寺者、四十六院建立根本之大法城、四十九歲傳燈演說之金剛坐也、所以者何、佛法鎭壇之伏藏、入定靜慮之夢殿、自於此地、千幅輪文之足印、一粒生身駄都、獨留此宮、何啻妹子表誤燒、字妙法納藏、入定示眞、先身之持經現殿而已哉、〇中略

文明七年二月廿三日　法隆學問寺衆等敬白

〔法隆寺記補忘集〕福貴寺道詮傳〇中略

福貴道詮和尙、生國者武州、初居法隆寺、學三論無相敎、盡二諦八不源、曰、四河入海、同從無熱池而出、七宗分鑣、俱從三論而分、三論是七宗之本、諸宗是三論之末、最宗汲太子及惠慈之流、遠照龍樹提婆之宗義、更兼學眞言、時々行三密、嘉稱彌天下、帝之皇子眞如修行賢大法師阿闍梨、歸依而受三論空宗於道詮也、昔行信和上、卜閑居於太子之古跡、而見上宮荒廢之礎石、悲淚遮眼、頻廻再興思慮、奏聞聖武皇帝、則勅命太政大臣房前、天平聖代、遂修造功畢、然後又彼夢殿、被侵百餘曆霜露、甍損雨濺佛頂、邪俗嘲云、頗

堂塔

似灌頂職位、尊淸和天皇御宇道詮和上、彼上宮墜構、悲嘆泣血、重勵再興意樂、遂申忠仁公、益加修覆畢、依之大衆造行信道詮兩像、安置上宮北壇、自爾至于今、旦夕燈華供、及遠忌追福不懈、

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合寺院地 四方各一百丈

門伍口 佛門二口之中、一口在金剛力士、一長四丈二尺、廣二丈九尺、一長三丈八尺、廣一丈九尺、僧門三口、一長三丈四尺八寸、廣一丈、一長三丈、廣一丈七尺、一長三丈五寸、廣一丈六尺、

塔壹基 五重、高十六丈、

堂貳口 一口、金堂、二重、長四丈七尺五寸、廣三丈六尺五寸、柱高一丈二尺六寸、一口、食堂、長十丈二尺、廣五丈七尺、柱高一丈五尺九寸、

燈貳樓 高各一丈一尺五寸

廡廊壹廻 長各卌丈八尺、廣各廿丈六尺、

樓貳口 一口、經樓、長三丈一尺、廣一丈八尺、一口、鐘樓、長三丈一尺、廣一丈八尺、

僧房肆口 一口、長十七丈五尺、廣三丈八尺、一口、長十八丈一尺、廣三丈八尺、一口、長十五丈五尺、廣三丈二尺、一口、長十丈六尺、廣三丈八尺、

温室壹口 長七丈八尺、廣三丈三尺、

太衆院屋壹拾口

貳口廚 一口、長十五丈、廣四丈二尺、一口、長九丈四尺、廣二丈、

壹口竈屋 長九丈五尺、廣四丈三尺、

貳口政屋 一口、長七丈、廣三丈三尺、一口、長六丈八尺、廣一丈八尺、已上、並蓋瓦、

壹口碓屋 長六丈八尺、廣二丈四尺、

壹口稻屋 長八丈一尺、廣二丈五尺、

壹口木屋 長五丈二尺、廣二丈、

貳口客房 一口、長四丈七尺、廣一丈五尺、一口、長六丈二尺、廣一丈八尺、已上並葺檜皮、

合倉漆口 四口蓋瓦之中、二口雙倉、一口土倉、一口甲倉、三口葺草、

〔法隆寺雜記〕金堂事　圓融院別當長隆律師第十三年、天元五年壬午、聖德太子薨御以後、六廻ト聞也、五月廿一日夜半、金堂壁切破、西間佛五體盜人取之了、文或日記云、承德元年丁丑金堂西壇佛盜人取之云々、　寬喜三年辛卯二月廿三日、金堂御佛阿彌陀三尊始奉鑄之、盜人取後相當百卅六年也、別當定眞大僧都、○中略

講堂事　淳和天皇御宇天長二年乙巳、安居講始之云々、　延喜御門御宇、延長三年乙酉、講堂、幷北室、西室、八箇室燒失了、　一條天皇御宇、正曆元年庚寅、大講堂造立畢、燒失以後、相當六十六年也云々、北室于今不及其沙汰、○中略

御塔事○中略

顯眞小草子曰、別當覺遍僧都嘉禎三年丁酉、塔本佛、昔羅漢像勝月上人令修造給了、其後實光院但馬得業、兒實御塔內外之修理在之、　弘安六年癸未春　建長四年壬子六月己未十六日戊辰、應來、十八日戊申、申剋、雷神落入塔第三重層、到于心柱則火付、四面見寺僧見付、鐘撞集會老少、上下面々走昇滅之了、其時鄉人四人別賞錢給了、但御舍利不被取也、

〔大和寺社記〕法隆寺○中略

金堂は四方正面なり、本面は釋迦の三尊、鞍作鳥佛師の作にして金佛也、左の藥師如來は用明天皇の御惱御祈のために作り給へり、右は阿彌陀如來、御母間人皇后の御ために造り給ふ、其脇に多門天、廣目天あり、何れも鳥佛師所造の金佛也、其前に持國天有鎮護國家七曜の御劍を持、増長天は孝謙帝の御願也、東面は正觀音、推古帝の御願、西面は阿彌陀なり、善光寺の摸にて、鎌倉最明寺北條時賴公の寄進なりといふ、○中略

五重の塔は四方正面也、本面は阿彌陀の三尊、東面は文殊大士、淨名居士、西面は茶毗入棺、北面は涅槃、いづれも鳥佛師土を以て造りし佛也、

〔大和名所圖會〕平群郡三法隆寺平群郡にあり舊名斑鳩寺法相宗、八宗兼學、○中略

講堂御講讀の時掛給ふ金長幡、出山釋迦、阿彌陀、如意輪觀音、不動、藥師、釋迦、誕生佛、五大尊、達磨、十寛文記曰、大講堂は、藥師の三尊、四天像、賓頭盧尊者を安置す、靈寶目録曰、聖徳太子法華勝鬘經一面觀音、八歲龍女、舍利、伽羅陀山地藏、愛染、其他畫像かず〳〵あり、○中略

大經藏靈寶記曰、經論聖教等を納る也、本尊阿彌陀佛春日作なり、○中略

聖靈院俗に太子堂といふ、皇太子攝政東帶の御像あり、大見皇子、殖栗王子、茨田皇子、惠慈法師、巳上鳥佛師の作、其外像かず〳〵あり、○中略

東院日本紀曰、推古天皇九年二月、皇太子初て宮室を斑鳩に興す、古今目録抄曰、此地を斑鳩と云ふは、いかるが數萬集り、常に下り居て遊ぶ、其所に宮を造り、斑鳩宮と名づく、後に寺となす、

夢殿八角寶形堂也、上光院、又は上宮王院ともいふ、靈寶記曰、本尊觀世音、前立觀音、東面九面觀音、西面太子像、沈水香水にて太子御作の觀世音あり、毎正月十二日開扉あり、○中略

舍利堂南無佛舍利、釋尊の左眼也、太子二歳の二月十五日に、東方に向ひ、南無佛と唱へ開給ふ御掌の内に、出現し給ひし舍利なれば、南無佛の尊號あり、又佛法最初なればとて、見佛聞法の舍利と申奉る、

〔義演准后日記〕慶長十六年二月十七日、卯剋發足、法隆寺一見、塔婆ノツタリ異樣ナリ、太子以後不改塔歟、本尊涅槃ノ體ナリ、羅漢以下驚目、悉土佛也、四方ニ送葬ノ體ナドモ在之、殿ノ中ニアリ、堂廻廊等廣大、太子堂ニテ中食了、

〔法隆寺雜記〕綱封藏事　藏開代々事、昔卅三藏云々、今綱封藏一殘也、　後冷泉院御宇、康平二年己亥六月廿五日、別當長照大僧都、綱封藏物移納使威儀師□□　白河院御宇、承曆四年庚申七月十一日壬申、綱封藏西面悉落地、別當大威儀師能算、同八月三日封勘勅使下云々、　堀河院攝政師實、別當延眞律師、永長一年丙子七月廿四日綱封藏西浦破損、八月二日綱所下向、寶物移納云々、　康和元年己卯、綱封藏顛倒、其寶物西倉被取納畢云々、　鳥羽院御宇天仁年中、別當定眞大僧都綱封藏顛倒了、寶物倂藏移納了、綱所使威師、○中略中院御時、元久二年乙丑、別當成寶大僧都、自南藏北藏寶物悉移納了、無勅使幷綱所等、只別當御封許在之云々、

〔日本書紀〕二十七天智九年四月壬申、夜半之後、災法隆寺、一屋無餘、

〔慶長造營記〕竊聞、震旦僧風、日域人寵、上宮太子者、祇林基七處九會之玄蹤、靈山傳受於法寶、仙苑究三行一實之妙理、台嶽總攬於宗綱、而北斗程藏身、去化來乎此土、略○中時和州平群郡、撰掄勝境、艾闢榛荆、草創一宇蘭若、號之法隆學問寺、此是久遠劫剃倖傑出於聖學之緇徒、衆聖兮託緣出現、晝誦之咻供一色一香花、群賢兮視毎降臨、夜讀之聰弄三止三觀月、仰高唯佛與佛道場可謂、豈羨寂光土喜見城、其閤閣鏤金攻玉、光采照四山、或安置於釋迦如來、彌陀如來、轉祈攘三界迷衆於四方淨刹、信敬於觀音薩埵、地藏薩埵、專冀善誘一切群類於南閻浮洲、宸海洋拯野溺、是皆仁慈之所致也、復知會誅毅件兇徒、後帝叢之間開靈窟、暨乎四十餘刹、咸修朝梵暮呪之勤行、而救濟於妄纒之衆生、欝海晏河清之懇祈、口銜於悠久聖運、其功德不遑枚擧焉、雖然如是大圓覺伽藍毎遇饕風驟雨之厄、梁柱摧朽、欄楯傾斜、堂僧殿司、毎旦覲奉加、將支之無一木檀越、累歳抱憂苦、欲補之絶牢夊苺苦、於戲辱右大臣朝臣秀頼公、有再興之貴命、旣片桐東市正且元欽奉旃、饋官庫之金銀、如衆賓盛土塊、運公田之粱粟、似群船載塵沙、因玆三十餘棟殿堂、朞年未滿而正成畢矣、神佛倘照鑑件丹誠、則建法旆、吹法螺、鳴法鼓、而退散於城西冦讐、洋智劒、架智箭、枯智鈷、而降伏於海內海外魔鬼、最八蠻九貊兮號慕德澤、緝貢船於難波之岸頭、五戎六狄兮懐惠風、推寶穀於平安之路上、守盾海外、保護壽域兮與霄壤等者也、

慶長十暦乙巳菊月吉日

片桐東市正且元

〔敎令類纂二集百十八〕安永七戊戌年閏七月

南都　法隆寺

武藏　相模　上野　下野　上總　下總　安房　常陸　駿河　山城　大和　河內　和泉

播磨　丹波　近江　美濃　尾張　伊賀　伊勢

右諸伽藍就大破、修復爲助力勸化御免、寺社奉行連印之勸化狀持參、役僧共、當戌八月より、來子年十月迄、御料、私領、寺社領、在町可致巡行候間、信仰の輩ハ、物の多少によらず、可致寄進旨、御料は御

南都　法相三論、律、眞言、四宗兼學　法隆寺

宗派

寺格

寺領

代官、私領は領主、地頭より可被申渡候、

閏七月

右之通可被相觸候

〔寺鑑上〕無本寺寺院

〔和州舊跡幽考六平群郡〕法隆寺(中略)法相宗、八宗兼學、

〔法隆寺伽藍縁起幷流記資財帳〕法隆寺伽藍縁起幷流記資財事○中略

小治田天皇○推古 大化三年歳次戊申○大化四年 九月廿一日己亥、許世徳陁高臣宣命爲而食封三百烟入賜岐、又戊午年○推古六年 四月十五日、請上宮聖德法王、令講法華勝鬘等經岐、其儀如僧、諸王公主、及臣連公民信受無不意也、講説竟高座爾座奉、而大御語止爲而、大臣乎香爐乎手擎、而誓願氐事立爾白之久、七重寶毛非常也、人寶毛非常也、是以遠岐須賣呂岐乃御地乎、布施之奉耳久、御世々々爾母不朽滅可有物止奈毛、播磨佐西地五十万代、布施奉此地者、他人口入犯事波不在止白而、布施奉止白岐、是以聖德法王受賜而、此物波私可物爾波非有止爲而、伊河留我本寺、中宮尼寺、片岡僧寺、此三寺分爲而入賜岐、伊河留我寺地乎波、功德分、食分、衣分、寺主分、四分爲而、誓願賜波久、功德分地乎持者、在御世御世天皇御朝乎、日月止倶長久令榮爲而、毎年法華維摩勝鬘經乎説乍、佛御法乎万代爾流傳、令爲興隆麻久欲止誓願賜岐、食分衣分地乎持者、衆僧等爲衣食、而學習佛教、令継後代止誓願賜岐、寺主分地乎持者、此寺乎造穪不朽壞氐爲修補、寺主法師等料四分爲賜岐、○中略

都合本記地壹佰壹拾陸萬參仟壹佰肆拾代

成町二千三百廿六町二段二百八十八歩

合水田參佰玖拾陸町參段貳佰拾壹歩參尺陸寸

十三町七段、讀涅槃經料、

六十九町四段九十八步、功德分料、
六十八町卅三步、衆僧衣分料、
二百卅一町九段七十步、食分料、
十三町三段十步三尺六寸、寺主分料、

近江國栗太郡貳拾壹町漆段壹佰肆拾肆步
大倭國肆拾玖町壹段伍拾漆步參尺陸寸（平群郡卅六町九段二百一步三尺六寸、添上郡二町一段二百十六步、）
河內國捌拾漆町陸段壹佰捌拾漆步（志貴郡一町、澁川郡卅六町二段百八十七步、更浦郡卅町、和泉郡卅五町九段、）
攝津國菟原郡參拾壹町陸段貳佰捌拾捌步
播磨國揖保郡貳佰壹拾玖町壹段捌拾貳步

右播磨田、小治太宮御宇天皇、戊午年四月十五日、請上宮聖德法王（平）令講法華勝鬘等經而布施奉地五十万代、卽納賜者之中、（十万九千五百六十一束二把代）
成町二百十九町一段八十二步

合陸地壹千玖佰貳拾玖町玖段漆拾陸步貳尺肆寸
薗地參拾壹町貳段
近江國栗太郡物部鄉肆段
大倭國平群郡壹拾伍町
河內國陸町貳段（澁川郡六町、和泉郡二段、）
播磨國揖保郡壹拾貳町貳段

山林岳島等貳拾陸地

大倭國参地 平群郡屋部郷一地、東限鳥方岳板垣濃、北限滝谷至於保伊知比石鳥、西限石鳥至大谷須疑墓、南限寺領、同郡板戸郷岳一地、東限平群川、南、西限久度川、北限志比路、 添下郡菅原郷深川栗林一地、東限道、南限百姓家習宜池、西北限百姓田、

河内國日根郡鳥取郷渠日松尾山壹地 東限高峯、西限路、南限菅我紀谷、北限胸川、

攝津國雄伴郡宇治郷宇奈五岳壹地 東限弥奈刀川、南限加須加多池、西限凡河内寺山、北限伊米野、

播磨國貳拾壹地

揖保郡五地 於布弥岳　佐伯岳　佐乎加岳　小立岳　鳥西伎乃岳

印南郡飾磨郡内島林十六地 止奈弥乃利山　伊奈豆母山　伊布伎山　左豆知乃乎利山　多居知乃乎利　斯止々山　石井前山　夜加山　弥多知山　比利布乃佐伎山　大島山　加眞止麻利山　比乃利弥山　弥多知乃弥利　奈閉島加夜波眞林

右在播磨國印南郡與飾磨郡間

合海貳渚

合池陸塘 大倭國平群郡寺邊三塘　河内國和泉郡軽郷六塘　攝津國菟原郡宇治郷一塘　播磨國揖保郡佐々山池一塘

合處々庄肆拾陸處

合庄々倉捌拾肆口　屋壹佰拾壹口

右京九條二坊壹處

近江國壹處 在栗太郡物部郷

大倭國貳處 平群郡一處　添下郡一處

河内國陸處 大縣郡一處　和泉郡一處　澁川郡一處　志貴郡一處　日根郡一處　更浦郡一處

攝津國伍處 西成郡一處　川邊郡一處　武庫郡一處　雄伴郡二處

播磨國参處 明石郡一處　賀古郡一處　揖保郡一處

備後國壹處在二深津郡一

讃岐國拾參處大內郡一處、鵜足郡二處、三木郡二處、那珂郡三處、山田郡一處、多度郡一處、阿野郡二處、三野郡一處

伊豫國拾肆處神野郡三處、伊余郡一處、和氣郡四處、浮穴郡二處、風速郡一處、骨奈島二處、溫泉郡一處

合食封貳佰戸永年者在二四國一

播磨國揖保郡林田郷五十戸、但馬國朝來郡牧田郷五十戸、相模國足下郡倭戸郷五十戸、上野國多胡郡山部郷五十戸、

右天平十年歲次戊寅四月十二日　納賜平城宮御宇天皇者

合食封參佰戸

右本記云、又大化三年歲次戊申九月二十一日己亥、許世德陀高臣宣命納賜、己卯年停止、

又食封參佰戸

右養老六年歲次壬戌、納賜平城宮御宇天皇者、神龜四年歲次丁卯年停止、

〔法隆寺記補忘集〕一法隆寺領入組等之事

廣瀨郡安部村九百三十六石三斗餘　池尻村六石六斗四升

大加井戸村三十五石二斗五升　安賀邊村二十二石

都合千石

學侶方高六百六十六石六斗六升六合　七ツ五歩取物成リ五百五石一斗四升一合

堂方高三百三十石　物成リ二百四十七石五斗　安邊村家數凡九十軒程　大垣內家數八十軒

餘

一池尻村三輪內山入組　一赤邊郡山　法隆寺　多武峯入組

一大垣內御藏法隆寺　郡山秋篠入組

〔上宮聖德法王帝說〕戊午年〇推古六年四月十五日、少治田天皇、請二上宮王一、令レ講二勝鬘經一、其儀如レ僧也、〇中略

天皇布施聖王物、播磨國揖保郡佐勢地、五十萬代、聖主卽以此、爲法隆寺地也、今在播磨田三百餘町者

〔日本書紀 推古 二十二〕十四年、是歲、皇太子、亦講法華經於岡本宮、天皇大喜之、播磨國水田百町施于皇太子、因以納于斑鳩寺、

〔續日本紀 聖武 十三〕天平十年三月丙申、施○中略鵤寺、食封二百戶、

〔續日本紀 聖武 十七〕天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨○中略法隆寺絁四百匹、綿一千屯、布八百端、稻一十万束、墾田地一百町、　七月乙巳、定諸寺墾田地限、○中略法隆寺五百町、

〔三代實錄 淸和 二〕貞觀元年五月十九日甲戌、傳燈大法師位道詮奏言、法隆寺東院、是聖德太子所居、堂舍存、遺像是在、年祀稍久、破壞日加、請以大和國平群郡私水田七町四段、施入彼院、以充修理堂舍幷忌日轉念功德料、許之、

〔吾妻鏡 七〕文治三年三月十九日、辛酉依被重上宮太子聖跡法隆寺領、地頭金子十郎妨事、可停止之趣、去年下知給之處、猶不靜之由、寺家帶院宣就訴申、遣雜色里久、可止鵤庄押領之由及沙汰、件庄事、太子殊依執思食、有被載趣、二品專所聞食驚也、

下　播磨國鵤庄住人

可令停止金子十郎妨、一向從領家所勘事

右件庄、可令停止金子十郎妨之由、去年依院宣令下知畢、而金子十郎入置代官、令押領庄之由重所被仰也、甚以不當之所行也、自今以後、早可令停止其妨、若猶不用者、爲召誡其沙汰人、所下遣使者里久也、早可令停廢彼妨之狀如件、

文治三年三月十五日

〔寺鑑 上〕無本寺々院

南都　法相、三論、律、眞言、四宗兼學　法隆寺

御朱印　高千石

什物

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合佛像貳拾壹具　伍軀肆拾張

金埿銅藥師像壹具

右奉ㇾ爲池邊大宮御宇天皇、〇用明小治田大宮御宇天皇〇推古幷東宮聖德法王、丁卯年敬造請坐者、

金埿洞釋迦像壹具

右奉ㇾ爲上宮聖德法王、癸未年三月王后敬造而請坐者、

金埿銅像捌具

金埿押出銅像參具

宮殿像貳具一具、金埿押出千佛像、一具、金埿銅像、

金埿灌佛像壹具

金埿千佛像壹具

金埿木像參具

右人々請坐者

檀像壹具

右養老三年歲次己未、從ㇾ唐請坐者、

金埿雜佛像伍軀

右人々請坐者

畫佛像肆拾張卅七張、人々請坐者、

立釋迦佛像壹張

十弟子釋迦佛像壹張

立藥師佛像壹張

右天平四年歲次壬申四月廿二日、平城宮御宇天皇請坐者、

觀世音菩薩像捌張

右天平四年歲次壬申四月廿二日、平城宮御宇天皇請坐者、

合塔本肆面具攝一具涅槃像土　一具彌勒佛像土
一具維摩詰像土　一具分舍利佛土

右和銅四年歲次辛亥寺造者

〔古京遺文〕藥師佛造像記

池邊大宮治天下天皇〇用明大御身勞賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子而誓願賜、我大御病大平欲坐、故將造寺藥師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇〇推古及東宮聖王〇厩戸大命受賜而、歲次丁卯年仕奉、

右藥師佛像、在法隆寺金堂、天平廿年法隆寺資財帳載之、記在光背、

〔古京遺文〕釋迦佛造像記

法興元世一年歲次辛巳十二月、鬼前大后崩、明年正月二十二日、上宮法皇枕病弗悆、干食王后仍以勞疾、並著於床、時王后王子等、及與諸臣、深懷愁毒、共相發願、仰依三寶、當造釋像、尺寸王身、蒙此願力、轉病延壽、安住世間、若是定業、以背世者、往登淨土、早昇妙果、二月二十一日癸酉、王后卽世、翌日法皇登遐、癸未年三月中、如願敬造釋迦尊像幷挾侍及莊嚴具、竟、乘斯微福、信道知識、現在安隱、出生入死、隨奉三主、紹隆三寶、遂共彼岸、普遍六道、法界含識、得脫苦緣、同趣菩提、使司馬鞍首止利佛師造、

右釋迦佛像、上宮厩戸皇子妃爲皇子所造、亦在法隆寺金堂、記刻在光背、天平二十年法隆寺資財帳云、王后敬造、

〔古京遺文〕觀世音菩薩造像記

歲次丙寅年正月生十八日記、高屋大夫爲分韓婦夫人名麻古顚、南无頂禮作奏也

右金銅二臂如意輪觀音像、藏在大和國法隆寺綱封庫、記在其座下、案丙寅推古天皇十四年也、正月生十八日、謂正月々始見之後第十八日也、當時未用曆日、非因月之明晦、莫知每月之更改、故以月初見於西方爲朔、

〔古京遺文〕二天造像記

山口大口費上而、次木閈、二人作也、　藥師德保上而、鐵師閈古、二人作也、

二像、亦在法隆寺金堂、記在光背、

〔集古文書四〕孝謙天皇勅書　大和國龍田法隆寺藏

獻法隆寺

御帶壹條　紫皮班犀角、金銅裏鉸具以三脊繩纏、

御刀子壹口　大沈香把班竹鞘、金銀莊、口及鞘口尾、以金鏤口邊、刃亦紫黑紫綱組係、

御刀子壹口　犀角把、白牙鞘、金銀莊、口及鞘口尾、以金鏤口邊、刃白組係、卄

御刀子壹口　犀角把、金銀莊、口水牛角鞘、白組係、

青木香二拾節

右並盛染革箱、又盛紅綠綱地高麗錦卄　淺綠臈纈裹袋卄　又綠地高麗錦緣纈裹杷敷机、又羅夾纈單杷覆二、幅長六尺八寸　綠綾帶貳條纈束一　帶長一丈

奉、今月八日勅前件並是、

先帝翫弄之珍、內司擬之物、各分數種、謹獻金光明等十八寺、宜令常置佛前長爲供養所願用此善因奉資冥助、早遊十聖、普濟三途、然後鳴鑾藏之宮、住蹕涅槃之岸、

天平勝寶八歲七月八日

從二位行大納言兼紫微令中衞大將近江守藤原朝臣仲麿、從三位行中務卿兼左京大夫侍從藤原朝臣手永、從四位上行紫微少弼兼武藏守巨萬朝臣福信、紫微大忠正五位下兼行左兵衞率左右馬監賀茂朝臣角足、從五位上行紫微少忠葛木連戸主、

右勅書、印御璽十八顆、

〔好古小錄書畫上〕上宮太子畫像

法隆寺所傳也、國朝古畫ノ存スル者、此ニ過タル者有ベカラズ、衣服ノ制モ聊考フベシ、

〔好古小錄書畫上〕上宮太子傳畫

數種アリテ、法隆寺繪殿ノ圖ヲ巨擘トス、近年本寺朽敗ヲ恐レ、屏風トナシテ寶藏ニ秘ス、畫力拙カラザレドモ、後世ヲ以當時ヲ寫ス、故ニ、上宮太子ノ御服、黄丹ノ縫腋、公卿ノ東帶、五六百年來ノ體也、推古帝ノ朝、此ノ如キ衣服フランヤ、又殿舍ノ結構、及器用、婦人ノ衣服ニ至テハ、皆畫工ノ意ニ任テ、無稽ニ出ル者也、又異幅六軸其圖大槩繪殿ノ如ニシテ、畫法腕力伯仲ヲ成シ難シ、此餘諸佛刹等ニ藏スル、上宮太子繪詞數種アリ、畫力賞スベキ者ナシ、今皆之ヲ略ス、

〔法隆寺古今目錄〕太子御影、但於此有多義、但當寺相傳者、唐木御影也、唐人爲結緣申請御前、其人前爲彼應現給、而間書二複、一本留日本、一本持歸故云唐木御影、或人云、非唐人、百濟阿佐之前現給形云々、攝政關白兼經岡屋殿宣、更非他國之緣、日本人裝束、其昔皆如此也、

〔樂家錄五十〕第九法隆寺鐘律聲之事

世傳、和州法隆寺鐘者、聖德太子建立此寺之時、所鑄之鐘也、世謂南無佛之鐘是也、此音當于雙調也、律本名號仲呂若後世律聲高下混雜、則以之可爲其證、而詠和歌殘之、

南無佛乃、舍利遠茂出須、二ツ鐘、昔茂佐曾那、今茂雙調、謂七鐘者、每日出舍利之前、鳴此鐘七點、故號、

寺僧曰、此歌傳謂和泉式部也、然不見于彼集、未詳是非、○余安部季尙往年至彼地之時、考鐘聲大抵當于壹

越也、（律本名賤黃鐘）曰雙調不審、

奴婢

〔法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳〕合賤伍佰參拾參口之中、（廿五口訴未判竟者、在大倭國十市郡、口山背國宇遲郡、奴九口、婢十六口、童家人者、）

家人壹佰貳拾參口（奴六十八口、婢五十五口、）　奴婢參佰捌拾伍口（奴二百六口、婢一百七十九口、）　淨寺奴壹口

右壹口、天平十年歲次戊寅正月十七日、納賜平城宮御宇天皇者、

用途

〔延喜式（二十三民部）〕法隆、弘福寺、二寺佛供養、各卅束四把、並以大和國宮田稻、季別送入寺家、

參詣

〔太子傳玉林抄（十二）〕治安廿三年冬十月廿六日、大相入道殿下、（○藤原道長）御修行之次、臨御法隆寺、（○中略）

建久元年六月二日、後白川院御參當寺、

雜載

〔續日本紀（三十一光仁）〕寶龜二年八月己卯、初令所司鑄僧綱、及（○中略）法隆（○中略）等寺印、各頒本寺、

○

中宮寺

〔和漢三才圖會（七十三大和）〕中宮寺　在斑鳩寺之艮（初有法隆寺之東、一名法興寺、）

間人皇后草創（太子母公）本尊　如意輪觀音（太子作）

〔大和志（四平群郡）〕佛刹　中宮寺（在法隆寺艮隅、舊在法隆寺東、一名斑鳩尼寺、又曰法興寺、養老二年九月遷法興寺於新京、蓋是乎、）

〔寬永七年雲上明覽大全（上）〕御比丘御所

御領四十六石餘外十二石　南都　法隆寺內稱斑鳩御所、　御里坊寺町石藥師下ル田中舍人

（知恩院宗旨法相律）中宮寺尊澄　二十一（有栖川故一品親王御養子實伏見故一品貞敦親王御子）

御家司（田中左京上島掃部）

〔義演准后日記〕慶長七年三月廿六日、南都中宮寺殿、去十八日御入滅云々、予伯母也、伏見殿御女也、七十六才云々、法隆寺內ニ、彼中宮寺、今度歷々金堂以下御建立云々、

〔法隆寺記補忘集〕一中宮寺天壽國曼荼羅供養之式奧書（三段式）

建治元年秋八月、新奉レ繡二天壽國曼茶羅於洛東靈山寺釋迦堂一、講二法華勝鬘等經一、日々讃二歎之一、面々禮二拜之一、然間且酬二願主禪尼請一、且慕二太子聖靈德一、注二五段簡略之式一、結二三尊値遇之縁一、莽忽之作、曾愚彌迷者也、同廿一日相二當皇后御月忌一、於二曼陁羅寶前一始令レ行二用之一、

天台法華宗法印權大僧都定圓記

一同寺太子讃歎六段式奥書曰

貞治七年二月廿二日書寫畢

寫本云
此式者、園城寺定圓法印、爲二中寺一被レ草之畢、

右二卷之式、享保十八年六月、中宮寺蟲拂之節、良訓見二分之一、經師ニ申付令二修覆一、此式之軸表紙絹、良訓令二寄二附之一、

一中將姬縫給三尊彌陁像在レ之、是添狀、

此三ぞんの彌陁、中將姬、蓮のいとをもつてつくらるゝのよし申つたへ、中井主水數代所持候、俗家不相應にぞんじ候間、寄附つかまつり度よし申候まゝ、永御寺に安置せられ候ば本望たるべく候、誠古佛希有尊像候、御重寶尤よし、よく／＼申給候かしこ、

たう晃

中宮寺宮

御喝食御中

右之文、近年卷物ニ致候、表紙純子之切者、智空師ニ令二所望一用レ之、經師南部十輪院町平介、

額安寺

名稱所在

額安寺ハ、大和國平群郡額田部村ニ在リ、今西大寺ノ末寺ニシテ、宗派ハ眞言律宗ニ屬ス、

〔和漢三才圖會 七十三大和〕額安寺　在額田部村○中略　本尊十一面觀音○中略　鎭守神一座　祭推古天皇　中興　忍性律師

〔大和志 四平群郡〕佛刹　額。田。寺。額田部額。安。寺。邑、一名熊。凝。寺。、三代實錄曰、昔聖德太子建平群郡熊凝道場、飛鳥岡本天皇遷十市郡百濟川邊、元亨釋書曰、初推古天皇二十五年、營寺於熊凝村、熊凝今額安寺是也、

創建沿革

〔伽藍開基記 三和州〕額安寺 推古帝二十五年創、至元祿二年一千七十二年矣、

和州法隆寺東去一里、額田部村有額安寺者、推古帝二十五年、上宮太子、入三昧觀皇運、及出定奏曰、後代皇祚多災厄、非佛慈不可救、願建一勝藍、帝乃勅創之、安十一面大悲像、既而推古帝纈生瘡、太子爲手造藥師如來像、以禱之、無何平復、以故號額安寺、又構推古天皇之廟、爲鎭守神社、其後鎌倉極樂寺忍性菩薩爲中興云、

寺領

〔額安寺文書〕寄進　大和國額安寺

所領壹所 備前國金岡東庄

夫大和國額安寺者、推古天皇御宇聖德太子□□、後代帝皇寶祚長遠、被建立□熊凝精舍是也、遙温濫觴、文武天皇大寶年中、道慈律□、應朝撰渡漢土、傳六宗佛法、□□天規摸、且親謁善無畏三藏傳□□求聞持法云々、歸朝之時、聖武天皇起叡願、勅道慈建立大伽藍、道慈上奏云、我□唐之間、竊圖得西明寺之華構、□摸彼寺云々、天皇大喜、天平元年課營作、同十四年終土木功、所謂大安寺也、深有叡感、以道慈□補律師畢、其後律師移住額安寺、求聞持本尊虛空藏菩薩像等、奉渡此所云々、佛法紹隆□而可測、然而興廢有時、盛衰無常、星霜差積、寺院荒蕪、近曾有興正菩薩人、慈悲爲鑒戒、行整□七衆之律儀依之恢弘、萬人□歸依爲之興盛、當初菩薩平常時擬額安寺之聖迹、講梵網經古迹、又忍性上人爲其同朋、頻與□願、蓋是木叉之再昌、抑亦草創根元也、今信空上人爲彼遺弟、□其餘慶、仍爲酬兩人

寺職

之遺德、專□一寺之興隆、受慈信嘉德之□淺、興善之志惟深、然間卜松墳□此地、資菩提之要路、至恩所僕隷、納遺骨、廼以備前國金岡東庄、永所寄附此額安寺也、早爲□一圓之管領、宜宛追善万代之料、當庄者爲別相傳之地、非院家□、然者後代院務等全不可及□入、且相傳文書等相副、追善注文悉□施入也、爲備龜鏡、則染燕毫所記錄如件、

延慶三年十二月廿一日

前法務大僧正花押

〔額安寺文書〕額安寺備前國金岡東庄

領家職事、去年十二月廿日御敎書、幷當年九月十四日任御施行旨、寺家御代官仁、一圓打渡申候也、仍之狀如件、

應安七年十月一日

左衛門尉康知花押

〔和漢三才圖會七十三大和〕額安寺略○中　寺領二十石

〔額安寺文書〕額安寺別當職相傳次第

本願道慈和尙以來、緇素累代之、但於上古□□進之、

永承六年三月五日宗岡仲子立券狀□□

在郡判　國判

□岡仲子

□耀大法師天喜元年、得宗岡仲子之讓、宗岡之養子也、

□圓法師康平七年、得朝耀之讓、宗岡之孫子也、

□智法師寬治四年、得義圓之讓、義圓之子息也、童名王義丸、

□觀法師保延四年、得尊智之讓、尊智之子息也、

名勝所在　創建

法起寺

法起寺ハ、又池後寺トモ、岡本寺トモ云ヒ、大和國平群郡小泉村ノ南ニ在リ、今法相宗ノ小本寺ニシテ、大本山法隆寺ニ管セラル、

〔伊呂波字類抄 遺 諸寺〕岡本寺。。。

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕法起寺　在小泉之南一名池後寺、又云岡本寺、
聖德太子、法華演說之寺也、其西山有瓦塚、太子以數万瓦納于此、

〔和州舊跡幽考 六 平群郡〕法起寺 小泉村の南
法起寺、又は池後寺、又岡本寺ともいふ、夫池後寺は、聖德太子法華經講說の時、唄師きたらざりしに、池の蛙唄聲を吟じぬれば、講席ことゆへなくつとめ給ひしより、法用池とぞいふなる、又池の後の寺なればとて、池後寺と號し給ふ、玉林抄 その池の跡、草村しげりて只名のみ計也、又岡本寺といふは、人皇卅四代推古天皇十四年、聖德太子岡本宮にして、法華經を講じ給ふ、天皇いとよろこびおはしまして、播磨國の水田百町、太子にをくり給ひしかば、太子斑鳩寺に納給ひ侍りぬ、日本紀 岡本の皇居の跡なれば寺の名となり、但高市郡の岡本宮は、卅五代舒明天皇二年に、はじめて岡本の宮をたてられし也、日本紀 異所同名なり、

〔法隆寺記補忘集〕末寺岡元法起寺寳塔露盤銘
上宮太子聖德皇、壬午之年二月廿二日、臨崩之時、於山代兄王勅御願旨、此山本宮殿宇、卽處專爲作寺、及大和國田十二町、近江國田卅町、至于戊戌年、福亮僧正、聖德皇御分敬、造彌勒像一軀、構立金堂、至于乙酉之年、惠施僧正將竟御願、構立堂塔、而丙午之年三月、露盤營作、戊戌舒明十年乎、太子崩十七年目也、

寺領

名稱 所在

創建 本尊 開山

〔伊呂波字類抄 遠諸寺〕岡本寺 扶桑略記曰、大炊天皇御宇、封百戸施入之、

〔新抄格勅符抄〕岡本寺百戸、寶龜二年五十戸、因幡五十戸、白壁天皇、

朝護國孫子寺

朝護國孫子寺ハ、一ニ歡喜院ト云フ、大和國平群郡志貴山ノ上ニ在リ、僧明練ノ開基ニシテ、厩戸皇子ノ古跡ナリト云ヒ、毘沙門ヲ本尊ト爲ス、

〔伊呂波字類抄 志諸寺〕信。貴。山。

〔拾芥抄 下本諸寺〕信貴 河内毘沙門天、明蓮上人、

〔和州舊跡幽考 六平群郡〕信貴山 付信貴畑

拾芥抄、宇治拾遺等に、河内國と云々、緣起にいはく、大和國と云々、此山兩國の境なり、

〔和漢三才圖會 七十三大和〕信貴山 在大和河内堺

號歡喜院朝護國孫子寺、天台 十二坊、

〔今昔物語 十一〕修行僧明練始建信貴山語第卅六

今昔、佛道ヲ修行スル僧有ケリ、名ヲバ明。練。ト云フ、常陸ノ國ノ人也、心ニ深ク佛ノ道ヲ願テ、本國ヲ去テ、國々ノ靈驗ノ所々ニ修行スル間ニ、大和國ニ至レリ、□郡ノ、東ノ高キ山ノ峯ニ登テ見レバ、西ノ山ノ東面ニ副テ、一小山有リ、其山ノ上ニ、五色ノ奇異ナル雲覆ヘリ、明練是ヲ見テ、定テ彼所ハ靈驗殊勝ノ地ナラムト思テ、其雲ヲ注(シルシ)ニテ尋ネ行ク、山ノ麓ニ至リヌ、其山ニ登ラムト爲ルニ、人跡無シト云ヘドモ、草ヲ分チ木ヲ取テ登ルニ、山ノ上ニ、猶此ノ雲有リ、所ヲ指テ登リ立チ見ルニ、東西南北ハ遙ニ谷ニテ下ダリ、峯一有リ、其ノ峯ニ此雲覆ヘリ、此ニ何ナル事ノ有ニカト

疑ヒ思テ寄テ見ルニ、更ニ見ユル者無シ、只馥キ香ノミ薫ジテ、山ニ滿タリ、然レバ、明練彌ヨ奇異ノ思ヲ成シテ、尋求ムト見ルト云ヘドモ、木ノ葉多積テ地モ不見、只指出タル物ハ、大ニ高立テル石共也、然ルニ積リ置ケル木ノ葉ヲ掻去テ見レバ、木ノ葉ノ中ニ、巖迫ニ一ノ石ノ樞有リ、長□計弘サ□計、高サ□計也、樞ノ體ヲ見ルニ、此世ノ物ニ不似、樞ノ面ノ塵ヲ□テ見レバ、銘有リ、護世大悲多門天ト、是ヲ見ルニ、貴ク悲キ事無限シ、然レバ此樞此ノ所ニ在マシケルニ依テ、五色ノ雲覆ヒ、異ナル香薫ジケリト思フニ、涙落ツル事雨ノ如クシテ、泣々禮拜シテ思ハク、我レ年來佛ノ道ヲ修行シテ、諸ノ所ニ行キ至ルト云ヘドモ、未ダ如此ノ靈驗ノ地ヲ不見、然ルニ今此ニ來テ、希有ノ瑞相ヲ見テ、多門天ノ利益ヲ可蒙シ、然レバ今ハ我レ他所ヘ不可行、此ノ所ニシテ、佛道ヲ修行シテ命ヲ終ラムト思テ、忽ニ柴折テ庵ヲ造テ其レニ居ヌ、亦忽ニ人ヲ催テ、其樞ノ上ニ堂ヲ造リ覆ヘリ、大和河内ノ兩國ノ邊ノ人、自然ラ此事ヲ聞キ繼テ、各力ヲ加ヘテ、此堂ヲ造ルニ、輙ク成ヌ、明練其庵ニ住シテ行フ間、世ノ人皆是ヲ貴テ訪フ、亦訪フ人無キ時ハ、鉢ヲ飛シテ食ヲ繼ギ、瓶ヲ遣テ水ヲ汲テ行フニ、乏キ事無シ、今ノ信貴山ト云是也、靈驗新タニシテ、供養ノ後ハ、于今至ルマデ、多ノ僧來リ住シテ、房舍ヲ造リ重テ住ム、外ヨリモ首ヲ低テ、歩ヲ運ビ參ル人多カリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔和漢三才圖會大和七十三〕信貴山〇中略

本尊　毘沙門　開山明蓮上人

〔和州舊跡幽考平群郡六〕信貴山〇中略

信貴山觀喜院朝護國孫子寺は、開山大明蓮上人也、拾芥抄聖德太子官軍を引率して、守屋大臣を攻給ひしに、大臣の軍兵手痛して、官軍三度破れて、信貴山に逃入けり、太子御誓願、丹心に侍りければ、山中に石樞あらはれて、多門天の銘あきらかなり、ふかく信じ、たかく貴み給ひて、白膠木にし

て、四天王の像をきざみ、御髻に納られ、更に進み給ふ所に、往駒山のふもとにして、老武者二騎忽然と味方につかうまつれり、をそらくは修羅をもむざむくべきつらだましゐあり、一人は阿多大臣とめされ、一人は坂本大臣とよび給ひしが、かれが軍功たとへをとるにかたなし、終に守屋大臣を討ければ、二臣雲に乘じて跡を見せず、扨かの多門天の石櫃の上に、方一丈の殿をたて給ひき、信貴山の毘沙門天是なり、舊記ども互見にまかせあらはすものなり、當世は堂一宇、坊舍九軒、

〔大乘院寺社雜事記〕文明元年八月十日、信貴山毘沙門堂、建立以後無立柱上棟之儀之間、爲供養、

〔好古小錄上書畫〕志義山毘沙門緣起三卷畫并詞信貴融、發融賛信實ニ似テ、一家ヲナス、此卷ノ如キ、結構奇絶、畫力ト共ニ成ル、俗手ノ企及ブベカラザル所アリ、

〔樂家錄四十六〕第廿志貴山

志貴山、和州平群郡寶喜院朝護國孫子寺、上古有奏樂之者、今斷絶、

或曰、當山有靏頴奪僧作笙爲長、世持其笙者甚重之、凡文永比者乎、

〔太平記三〕主上御夢事附楠事

元弘元年八月廿七日、主上〇後醍醐笠置ヘ臨幸成テ、〇中略當寺ノ衆徒成就房律師ヲ被召テ、若此邊ニ、楠ト被云武士ヤアルト御尋有ケレバ、近キ傍リニ、左樣ノ名字付タル者アリトモ未承及候、河内國金剛山ノ西ニコソ楠多門兵衞正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ、是ハ敏達天王四代ノ孫井手左大臣橘諸兄公ノ後胤タリトイヘドモ、民間ニ下テ年久シ、其母若カリシ時、信貴ノ毘沙門ニ百日詣テ、夢想ヲ感ジテ設タル子ニテ候トテ、稚名ヲ多門トハ申候也トゾ答ヘ申ケル、

放光寺

名稱 所在

放光寺ハ、王寺、又片岡寺ト云フ、敏達天皇ノ勅願ニシテ、天皇ノ皇女片岡姫ノ建立ト稱ス、本尊放光佛タルヲ以テ、此名アリ、今廢寺ニシテ、舊地ハ大和國葛下郡王子村片岡山ニ在リ、

〔和漢三才圖會大和七十三〕放光寺一名王寺 在達磨寺之坤二町許王寺村

聖德太子建立四十六箇寺之内、今有礎石耳、

〔大和志葛下郡七〕佛刹 放光寺在王寺村、縁起序曰、放光寺者、雛余驛田宮、祿天縱之叡澤、小墾田片岡、專擇地宜之勝躅、所經始之仁祠也、四履文曰、東限富川、南限岡領、西深谷、北限大河、

創建沿革

〔放光寺古今縁起上〕放光寺古今縁起井序中略 ○

一片岡放光寺伽藍壹區

銘寺生起、大功皇矣、磯余彥尊治國以降、繼體承基三十一世、太玉敷皇〇敏逹生多御子、所謂王子六人、姬宮九人、第三姬宮、葛木下郡片岡中山擇地造宮、名片岡宮、號片岡姬、嚴粧金屋斷思、深望眞如花界、艶色穠姿離心、偏願無爲寶刹、天皇踐祚、專興釋敎、女王訓導、頻勸叡慮、奏云、釋迦遺敎、漸通皇朝、發起寺塔、以逢慈尊云云、勅答曰、朕至主尊、眞人復誕、汝歸佛界、豈不可哉云云、遂使點改片岡宮、肇定仁祠地、因名片岡寺、供養會日、尊像放光、上耀蒼天、下照率土、光觸群類、得益不限、今上陛下、前皇、後宮、竹薗、沁水、蓮府、棘路、含鷄、鷺臺、尙書、羽林、監門、都督、牧宰、庶民普觸光明、悉證當果、故本尊名放光佛、寺銘號放光寺、玄應法師曰、放光佛者、定光佛異名、梵云提和竭、或云提竭羅、此翻云錠光、亦云燃燈、或云普光、亦云妙光、皆是放光佛名也、大唐梁朝漢州德陽縣善寂寺東廊壁上帳僧繇、圖觀音地藏二尊、彼像常放光、故名放光菩薩、敏達天皇勅願、片岡姬王建立、用明天皇御願、上宮上皇恢弘、舒明天皇紹隆、孝德天皇興隆、聖武天皇潤色、累代明皇洪績、名詮、連綿得名皇寺、所以金堂、講堂、食堂僧庵、經藏、鐘樓、廻廊、

大門皆停凡匠、唯雇天工、深撿鵝説、建構厩宇、百濟高僧、尋奇構於祇園、高麗聖哲、訪梵閣於那蘭、造寺工、造瓦工、鑪盤工、金帛工、冶鋳工、畫圖工、膠染工、鍛冶工、皆是異州獻工、吾朝來度、造成洪器、逐叙功訖、東幽鄰閑々、飢人遷圓寂、西連峯峨々、神仙貽勝躅、北望斑鳩宮、泣五百大願慈悲、南顧清水山、拜三十三身本主、竹林殿起云、逝多林(園)勢似此砌、西片岡山、似靈山麓、法隆南畔、遷南天地、似佛生國、片岡山麓、遷靈山砌、煙浪雖隔、土風相同、隨喜尤厚、仰信超他、救世薩埵、久凝匪石、惠慈尊者、深行鎭壇、至北乾艮、掘穴五所、地鎭寶瓶、金銀珠玉、重器寶物、奉納其中、三寶匪石、五穀饒石、降魔鎭石、人法紹石、奴婢滿石、安置穴上、是則令法久住、轉妙法輪、曠劫匪石、不朽感事也、

一知足摩尼寶殿一宇　金銅彌勒像　號金堂

敏達天皇眞影(彌勒ナリ)安置精舍、百濟國多須那、巧匠尊容、都率天上説法、一時度五百億天衆、龍花樹下成覺、三會化八万四千歳、普賢、文殊、觀音(放光瑞尊)(愛明王作)、妙音四隅圍遶、四體並光釋王、梵王、護世、四王、六方侍立、六天振威、寶祚八年、調度始企、林鐘五日、造化新成、鳳甍高聳、插二重層級於乾象、鴛瓦流降、混四面現檐於穹隆、

○中略

一轉法輪勝義殿一宇(號講堂)　釋迦(普賢 文殊)　乾角二階廚子安釋迦像、講法傳敎堂者、橘豐日尊踐祚二年二月八日、遂造功矣、釋迦善逝、示後身於用明帝、々々々、瑩眞容於靈場、五百大願、秋月普浮五濁塵水、三身圓滿春花、遠薫三有園觀、普賢深理門、證一如於法界圓融、文殊妙智堂、究万行於絶諸戲論、天皇頂髮入佛首、如來光明受龍顏、渉入自在、互融無礙、因茲安置賢劫能化世尊、證明轉妙法輪功德、小墾田宮御宇九年十月晦日、調供養席、聖德太子自作會式、導師惠慈、鶴勒再談、對講日羅、鷲子重來、梵唄讃嘆、鸞鳳率群、伽陀散花、鸞雀揚聲、所以福因之隆、惠聰(靈聰)惠寔、觀勒、令欣、道嚴、惠日、令開、聆照、惠衆、惠濟、惠宿、惠先、令威、龍象十六口、並鋪設、妓樂兩三聲、加羅列羅襟祢、下於鷲峯山頂、青眼白足、昇於鳳凰谷底、道儀照地、九億人來、法音涌天、三千界動、加以廚子釋迦者、昔于闐天王、慕四八相明月、跳眦首羯磨、今片

岡姫王、仰一千年梵風、雇多須那工、幼稚士初更企習匠、仲春十五朝、早開遊眼、朝供難陀紫岸香、暮捧樹提後園葩、薫修積歲、鑽仰經日、無雙靈像、無二尊體也、白毫並輝、烏瑟互照、朝夷參客、皆詣景福、遐邇詣人、悉銷天災、時節法事、當堂敷座、恒例齋會、佛前並床、緇侶結群、素人運步、一塊一塵、施入花亭、一粒一喰、與加僧壇、是佛弟子、如來使者、現超厄難、速滿安樂、後盡苦際、早到寶剎、

一住持施齋殿一字（號食堂）　菩薩僧　羅漢僧

施齋舖設院者、推古天皇元年四月初、聞群臣之奏、勅曰、吾女身也、性不解物、万機日愼、國務滋多、宜天下之事、皆啓太子、即日立太子、爲皇太子、万機悉委矣、同六月、重勅太子曰、先皇二代、片岡姫宮、造佛殿立法堂、朕豈不爾云々、因玆企成風、遂締雲、賓頭盧尊者、娑婆世界第二教主、閻浮提內第一和上、頭陀安居積臈、防非止惡聞德、（○中略）

一金剛舍利殿一基（號塔婆）

娑羅林鳳範者、泥洹圓寂墳墓、馱都實相家廟、金堂南面、相當中心、築壇編塔、立名前塔、國家安全無大於旃、虐臣殄滅、職而由斯、片岡姫齡廿一正月二十三日、始企習匠、炊屋姫祚廿九八月十五日、重遂締功、（○中略）

一封倉十二字

一甲斐倉（高一丈三尺七寸、長二丈一尺七寸、廣一丈八尺六寸、瓦葺、）　二南板倉（高一丈三尺七寸、長二丈一尺七寸、廣一丈八尺八寸、瓦葺、）

三南甲倉（高長廣皆如上、瓦葺、）　四丸木倉（高長廣等如上、瓦葺、）

五角板倉（高長廣等如上、草葺、○中略）

一四箇別院

南塔院（寺南）堂一字（一間四面地藏）松庵二十字　光明院（寺東）堂一字（一間四面阿彌陀）松庵十二字

世尊院（寺巽）堂一字（一間四面千手）松庵十八字　知足院（寺北）堂一字（一間四面彌勒）松庵二十字（○中略）

名稱
所在

一寺役駈仕奴婢百廿人

敏達天皇九年五月廿九日　勅施入二十一人　片岡姫王廿七歳十二月廿三日　御寄入二十一人　用明天皇二年正月廿四日　勅施入二十四人　推古天皇廿九年十一月廿九日　勅施入二十四人　舒明天皇元年六月十七日　勅施入十八人　皇極天皇五年七月十四日　勅施入十二人

件奴婢者、金堂經藏封倉分配八十人、伇々警固、法堂食堂寶塔省置四十人、番々宿直、恒例規模齋會、掃除滿寺路匝、季節月正講筵、拭清三堂寶塔、齋月修善、時々洗床塵、結夏安居、日々掃庭草、造寺造營、加用勵棄、晁垢觸穢、拔退勿逗、任勅施入、停止國役、守官省符、免除狩獵、自今以後、代々世々、任司官吏、敢勿術役、非道譴責、無代擾亂、違奪精神、擾禍與禍、責賀斷命、入奈落伽、加刑與罰、永爲免斯矣、

當麻寺

當麻寺ハ、一ニ禪林寺ト云フ、大和國葛下郡當麻ニ在リ、用明天皇ノ皇子麿子皇子ノ開ク所ナリ、或ハ云フ、右大臣藤原豐成ノ女中將姫之ヲ創スト、而シテ寺ニ藏スル所ノ曼荼羅ハ、卽チ中將姫ノ藕絲ヲ以テ織ル所ナリト傳フ、

〔伊呂波字類抄太〕諸寺當麻寺名禪林寺、在大和國横帶、大納言女子建立、

〔尊卑分脈八藤原〕武智麿

　豐成内舍人兵部丞從一位正二中衛大將、右大臣、母從五位下安部貞嗣女、異本云、母從五位下眞若古云々、號難波大臣、又號横佩大臣、號横佩墻内之故也、

　女子當麻寺曼荼羅本願、號中將姫、

〔大和名所圖會三葛下郡〕當麻寺山の麓にあり、二上嶽の下、丸子二上山万法藏院禪林寺と號す、

剏建沿革

〔古今著聞集二釋教〕當麻の寺は、推古天皇の御宇、聖德太子の御すゝめによりて、麻呂子親王の建立し給へるなり、万法藏院と號して、則御願寺になずらへられにけり、建立の後、六十一年をへて、親王夢想によりて、本の伽藍の地を改めて、役の行者練行の地にうつされにけり、金堂の丈六の彌勒の御身の中に、金銅一搩手半の孔雀明王の像一體をこめ奉る、此像は、行者の多年の本尊なり、又行者祈願力によりて、百濟國より、四天王の像とび來り給ひて、金堂におはします、堂前にひとつの靈石あり、むかし行者孔雀明王の法を勤修の時、一言主明神きたりて、此石に座し給へり、天武天皇の御宇、白鳳十四年に、高麗國の惠觀僧正を導師として、供養をとげらる、其日天衆降臨し、さまざまの瑞相あり、行者金峯山より法會の場に來りて、私領の山林田畠等、數百町を施入せられけり、

〔當麻曼陀羅緣起〕當麻寺のおこりは、用明天皇の第三皇子、麿子の親王の建立の寺なり、そのゝち、夢想のつげありて、役行者のむかしのあとをもとめて、この寺をうつしたてまつれり、それよりこのかた、大炊天皇〇淳仁御宇に、よこはきのおとゞ〇藤原豐成といふ人のむすめ、いますかりけり、〇中略ふかく佛のみちをたづねて、法のさとりをもとむ、これによりて、稱讚淨土經一千卷をかきて、玉の軸をとゝのへ、花のひもをひらきて、この寺にをさめたてまつる、

畫

そのゝち、天平寶字七年六月十五日、つひに、はなのかざりを松として、こけのたもとになせり、すなはち、ちかひていはく、われもし、生身の如來をみたてまつらずば、この寺門をいでじ、かさねてちかふ、七日の期をかぎりて、一心の誠をこらせり、しかるあひだ、同月二十日、ひとりの比丘尼きたりていはく、祈念のこゝろざしを見るに、隨喜のおもひにたへずして、われこゝにきたれり、九品の敎主ををがみたてまつらんとおもはゞ、われその相をあらはすべしすみやかに、はすのく

堂塔

き百獸をあつむべしといへり、願主の尼この事をうけて、天聽におよぼすに、忍海連におほせて、近江國の課役として、たちまちに、もよほしあつめたり、こゝに化尼さどりをえてきたれり、みづからはすのくきををりて、いとをいだす事わづらひなし、もゝわくにくりいだし、ちゞわくにあることをみたり、

畫

はじめて井をほるに、みづ滔々として、なみ溶々たり、いとをひたしてそむるに、そのいろ五色をそめいだせり、人力の所爲にあらず、神通の方便なり、みる人奇特のおもひをなし、願主不覺のなみだにおぼる、この地の奇瑞をおもふに、むかし天智天皇の御時、井のほとりに、よる〳〵ひかりをはなつ石あり、すなはち勅使をさして、そのところをみせらる、その石のかたち佛像をなせり、よりて彌勒の三尊に彫刻して、精舍一堂の建立をなせり、名づくるにそめ寺といへり、〇中略

畫

おなじき二十三日のゆふべ、化女一人きたれり、そのかたち、みやびやかなる事、天女のごとし、化尼にとひていはく、はすのいと、すぐにとゝのへまうせるやといへり、すなはちいろ〳〵のいとをさゝげさづくるに、わら二はを、あぶら二枡にひたして、ともしびとす、堂のいぬゐのすみをしめて、いろはたをたてゝ、いぬのときより、とらの時に及て、足だまもて、たまもゆらにおりいだせり、その後、化尼、本願尼兩人のまへに、一丈五尺の曼陀羅一鋪、たけのふしなきを軸としてかけたてまつる、これををがみたてまつるに、玉をつらねてみがきたるがごとく、金をのべてかざりたるがごとし、莊嚴赫奕として、光明遍照たり、ときに化女のはたおりめ、五色のくもにのりて、いなびかりのきゆるがごとくしてさりぬ、

〔大和名所圖會葛下郡三〕當麻寺、〇中略本堂は觀世音なり、曼陀羅堂といふ、勅額あり、是れに新曼陀羅

什物

あり、又本堂の後の寶藏には、中將姬眞の曼陀羅を收めたり、○中略講堂本尊は阿彌陀如來、地藏菩薩の像あり、又側に藥師堂あり、法華堂本尊は、釋迦如來を安置す、此堂は右大將賴朝公、熊谷小次郎直家を奉行として建立し給ふ、東西に二基の塔あり、坊舍眞言宗十六坊、淨土宗三ヶ寺、尼寺三ヶ寺あり、紫雲庵和州寺社記曰、中將姬は、當麻寺の實雅法師を師として髮をおろし、善心尼とも號し、又改て法如尼と號す、紫雲庵といふいほりをむすんで念佛したまふ、紫雲庵は當麻寺の東の方に小堂あり、尼寺にて中將姬命終の所なり、○中略奥院は、往生寺といふ、源空上人の遺像は、上人みづから開眼四十八度に滿給ひし像にして、洛東智恩院にて年暦を經給ひけるが、○中略夢の告あり、我本師は、當麻寺の曼陀羅なり、かしこに移しするよかし、かの曼陀羅堂の乾は、八功德池にして、千世の青蓮華ありとをしへさせ給ひて夢さめにけり、衆僧あやしみ、當麻寺に巡行して尋れども蓮華なし、おもふに、役小角むかし諸神勸請の所は、清淨の地なるべしとて、土をうがちぬれば、地底に青蓮華あり、則堂を建て、遺像をうつし、往生寺と號す、西響抄

〔和州舊跡幽考八葛下郡〕當麻寺○中略金堂彌勒菩薩は、丈六土佛なり、佛胸に、一搩手半の孔雀明王像を納たり、○中略又金堂の前に、一言主明神の來座の石、又瑞籬の內の石は、熊野權現影向の所なり、諸堂甍をならべたり、炎上は治承年中、兵火に、金堂講堂、二基塔、鐘樓、經藏、坊舍けぶりとなるといへども、曼陀羅堂は、巽の角に火つきながら、おのづからに消侍りき、西響抄建立以來火災なし、

〔寺社寶物展閱目錄三大和〕當麻寺○中略

一繪詞傳三卷　繪土佐光茂詞逍遙院內府實隆公作

詞書

後奈良院宸翰、青蓮院尊鎭法親王、梶井彥胤法親王、近衞太閤尙通公、近衞關白稙家公、聖護院道增、逍遙院內府實隆公、西室公順卿、

創建 本尊 開山	名稱 所在	雜載

〔樂家錄四十六〕當麻寺和州葛下郡二上山万法藏院、本禪林寺上古有奏樂之例、樂處之輩勤役之乎、寺僧等修之例未考、

傳聞、當初當寺有舞樂、今想之、此寺毎年三月十六日有謂練供養、是中將姫逝葬之儀式也其法爲菩薩之像、數十人行列、以此按之、上古修大法會、伶人等勤役之、其後至斷絕乎、然寺僧等難歟之、世衰催伶人等無便、故惟伶人之中菩薩人耳出作、而上古之遺法備之乎否、

金峯山寺

金峯山寺ハ、大和國吉野郡吉野ニ在リテ、役小角、及ビ僧日藏修練ノ舊跡ナリ、本堂ヲ藏王皇ト云ヒテ、藏王權現ヲ安置セリ、古來此山ニ詣ヅルヲ御嶽詣ト云ヒ、其參詣ノ前、潔齋スルヲ御嶽精進ト云フ、

〔伊呂波字類抄見諸寺〕金峯山ミタケ大和國吉野郡、七高山其一也、

〔書言字考節用集乾坤二〕金峯山キンブセン和州吉野郡、義楚曰、日本國都城南五百餘里有金峯山、　御嶽ミタケ和州、土俗所金峯山曰御嶽、

〔空穗物語菊宴〕ひと〳〵さうじいもゐをしつゝ、略○中いみじき大ぐわんをたて、あるは山はやしにまじりて、かね。の。み。た。け。こしのしら山、うさの宮までまいり給つゝ、略○下

〔大和志十吉野郡〕佛刹　金峯山寺在吉野山、自六田川攀登、左顧四手掛、三十六町許、至金剛藏、千載和歌集曰、金乃鳥居附介流、藤原教光、夢覺來、其晩宣、待程乃、關寶母原須、往乃櫻、鄙此、正堂、觀音堂、講堂、僧舍、四十一區、其吉水、寶城、二院俱是、

〔壒囊鈔九〕吉野へ詣ヲ御嶽ミタケ參トテ、稠致カセギテ精進神歟、又藏王堂ト申セバ若佛歟、　吉野ハ神ニテ御座ス也、昔役。の。行。者。渡生利益ノ爲ニ、金峯山ニ一千日籠居シテ、生身ノ像ヲ見奉ント、肝膽ヲ碎祈給ニ、金。剛。藏。王。先柔和忍辱ノ相ヲ顯シ、地藏菩薩ノ形ニテ、地ヨリ湧出シ給ヒタリシヲ、小角首ヲ掉ナ、

未來惡世ノ衆生ヲ濟度シ給ハントナラバ、左樣ノ御形チニテハ不可叶ト被申ケレバ、則伯耆大山ヘ飛還セ給ヌ、其後大勢忿怒ノ悉ヲ顯シテ湧現シ給、右ノ御手ニハ、三鈷ヲ握、臂ヲ勢シ、左手ハ、五指開テ、腸ヲ押ヘ、三眼明ニ忿テ、魔障降伏ノ相ヲ示シ、兩脚昇低テ、天地經緯ノ德ヲ顯シ給ヘリ、示現ノ貌、尋常ノ神ニ替テ、尊像ヲ錦帳ノ裏ニ鎖、サレバ其正體ヲ秘センガ爲、緣ノ行者ト天武帝ト手ヅカラ尊像ヲ作リ副テ、三尊ヲ安置シ奉リ給フ、爾ヨリ以來、惡魔ヲ六十餘州ニ示シ、彼ヲ是シ此ヲ非シ、賞罰ヲ三千世界ニ顯テ、物ヲ利シ人ヲ化ス、總テ神明權跡ヲ垂テ、七千餘座利生新ナルヲ論ズレバ、无二亦无三ノ靈神也ト侍ベリ、

〔金峯山秘密傳中〕一草創事

扶桑略記引神祇聚云、金峯山第六代孝安天皇治天下第七年草創云々、

私云、或記云、僧聽三年戊午廿九代帝宣化天皇第三年八月十九日夜半、靈鷲山一角乘五雲飛來云云、

〔金峯山秘密傳上〕金藏王本地垂跡習事

今金剛藏王者、本地高遠、其德甚妙也、垂跡廣大利生亦無雙也、是故万人步長途參詣當山、貴賤祈求願、財投此尊、誠所願若空、何致其告、求願不成、誰爲其勞哉、利益廣大、卽觀彼推之、抑今尋其地者、卽三尊妙體、論其垂跡者、藏王一身、此三而一也、一亦三也、是三諦一如、卽表三密一心德也、卽相傳云、昔役優婆塞、天智天王御宇、白鳳年中、開金山大峯、而勤求佛道、祈末代相應佛尊、濁世降魔尊、于時大聖釋尊忽然現前、示護法相、行者白言、邊土衆生不堪見佛身、强々衆生所不應也、願示所應身、時尺尊忽然滅、更千眼大悲尊、自然卽涌現、行者亦白、今尊五部果成佛、大悲拔苦尊、雖爲無雙柔軟形體、故尙所不應惡世也、于時大聖化滅、亦彌勒大悲尊自然影現、行者亦白言、大聖此釋尊補處大慈與樂尊、此土緣深、雖然末代尙不應、願現降魔身、其時寶石振動、從磐石中、金剛藏王靑黑忿怒像忽然涌出、卽住磐石

上手、時行者大歡喜、敬重奉崇、此其元始也、今四尊影現者、此四生濟度表示、四海靜謐之相也、此四佛中、前三佛爲能反本身、後一佛爲所反一身也、初三佛此三世佛體、卽三密尊像也、所謂尺迦、此過去已成尊身密佛也、次千手、卽現在彌陀正法輪身、此語密々々說法之佛也、次彌勒、卽當來作佛大慈意密佛、此尊住兜率、此云喜足、卽悅在身云樂、在心名喜、此意密大慈故、今三密爲三世、以身口意、卽爲過現當三世、故三尊卽三世三密佛身也、今雖爲三尊差別、此卽釋迦三密・一佛萬德也、此一心具三密、三佛卽歸一心、故三佛合現一身、此爲金剛藏王也、○中略

一金山本峯習事

傳云、當山是鷲峯分、卽釋尊遊化勝地也、昔宣化天王卽位三年、有難思靈瑞、西天鷲巽峯角金剛崛坤方分來此土、離成當山也、大聖釋尊、本誓願鷲峯、內證表王舍、今彼山來住和州、和州卽王城也、此法爾大義難思因緣也、今大峯中一高嶽此云釋迦嶽、甚秘、思之鷲此西方金精神、金卽西利性也、卽金能反、西此所反、故發心能反、金居東土、名金峯山、所生菩提、鷲在西天、號鷲峯山也、亦大聖釋尊金人所住、故云金峯山也、

〔鹽尻十一〕大和國金峯山藏王權現は、吉野に立、安閑天皇皇陵也、藏王權現は、宣化帝三年吉野に現すといへり、此山彌勒佛の出世と云々、金山なり、金峯山と號す、文武帝大寶年中、役行者建立、亦或書に云、金峯山の神は、金剛藏王菩薩といふ、安閑天皇を祀るといふ、是ならず、諸社考、和爾雅に、金峯山の神は少耆名命と記せり、

〔鹽尻十四〕藏王權現ト申ハ、昔役優婆塞（役公加茂）金峯山ニ一千日籠テ、生身ノ薩埵ヲ祈リ玉ヒシニ、此金剛藏王、先地藏菩薩ノ形ニテ涌出シ（伯耆ノ大山ヘ飛去ト云々）後大勢忿怒ノ形ヲ顯ハシ、右手ニ三鈷ヲ握リ、臂ヲイララゲ、左ノ手ハ五指ヲ以テ腰ヲ押ト云々、示現ノ貌、尋常ノ神ニ替テ、尊像ヲ錦帳中鎭シテ、其涌出ノ體ヲ秘セン爲ニ、役優婆塞ト天曆帝（村上天皇）ト、各手自二尊ヲ副テ、三尊ヲ安置ストス云

堂塔

云、

按、神名式、大和國吉野郡吉野水分神社、大、月次、新嘗、吉野山口神社、大、月次、新嘗、金峯神社、名神大、月次、新嘗、

私曰、水分社ハ龍守社、大宮ハ三座、住吉同體ト云々、山口社、勝手社、受命、金峯社ハ押武金日天皇、諡安閑、ナリ、其他吉野山ニ金生明神等ノ社アリ、役氏山ニ入テヨリ、皆胡竺ノ鬼トナル、亦浮屠ガ説ニ曰、金剛藏王ハ、垂迹示現ノ形、本地ハ釋迦彌勒地藏ノ三尊ナリト云、夫藏王菩薩ハ密家ノ曼荼羅ニテ、其形ヲ考レバ、千手ノ如クニシテ青色ナリ、吉野ノ像ハ金剛童子ノ形也、

〔大和名所圖會〕六吉野郡吉野山〇中略

金鳥居、額は發心門と書して、弘法大師の筆なり、高さ二丈五尺、柱のめぐり一丈一尺、〇中略　二天門、金剛力士の二天には、雲慶、湛慶の作なり、

金峯山寺、六田より攀登る事凡三十六町、　本堂藏王權現、佛體二丈六尺　脇士左觀世音、千手、二丈四尺、右彌勒、二丈二尺　役行者道像を安置す、是當山の開基なり、其外觀音堂、講堂、僧舍四十一區、吉水院、寶城院は、倶に後醍醐帝の行宮なり、大塔の趾は、本堂の西に礎石あり、〇中略

威德天神社、本堂の右にあり　即北野天滿宮にてまします、

〔元亨釋書〕二十五資治表承保皇帝

七年〇白河天皇承曆三年十有一月、慶金峯山塔、

〔扶桑略記〕三十堀河寛治七年九月廿日甲午、金峯山金剛藏王御殿燒亡、但御體不燒云々、〇又見百練抄、帝王編年記、

〔帝王編年記〕二十六龜山文永元年六月廿七日、金峯山藏王堂、爲雷火燒亡、

〔太平記〕二十六芳野炎上事

去程ニ、武藏守師直、三萬餘騎ヲ率シテ、吉野山ニ押寄セ、三度閧聲ヲ揚タレ共、敵ナケレバ音モセズ、サラバ燒拂ヘトテ、皇居幷卿相雲客ノ宿所ニ火ヲ懸タレバ、魔風盛ニ吹懸テ、二丈一基ノ笠鳥居二丈五尺ノ金ノ鳥居、金剛力士ノ二階ノ門、北野天神示現ノ宮、七十二間ノ廻廊、三十八所ノ神

寺格
寺領

樂屋、寶藏、竈殿、三尊光ヲ和ゲテ、萬人頭ヲ傾ル、金剛藏王ノ社壇迄、一時ニ灰燼ト成果、煙蒼天ニ立上ル、淺マシカリシ有樣ナリ、抑此北野天神ノ社壇ト申ハ、天慶四年八月朔日ニ、笙ノ岩屋ノ日藏上人頓死シ給タリシヲ、藏王權現左ノ御手ニ乘セ奉リテ、炎魔王宮ニ至給フニ、○中略鐵湯中ニ、玉冠ヲ著テ、天子ノ形ナル罪人アリ、○中略延喜ノ帝ニテゾオハシマシケル、○中略帝ハ御涙ヲ拭ハセ給テ、吾在位ノ間、萬機怠ラズ、民ヲ撫、世ヲ治メシカバ、一事モ誤事無リシニ、時平ガ讒ヲ信ジテ、罪ナキ菅丞相ヲ流シタル故ニ、此地獄ニ墮タリ、上人今冥途ニ赴給フトイヘドモ、非業ナレバ蘇生スベシ、朕上人ト師資ノ契淺カラズ、早ク娑婆ニ歸給ハヾ、菅丞相ノ廟ヲ建テ、化導利生ヲ專ニシ給ベシ、サテゾ朕ガ此苦患ヲバ免ベシト、泣々勅宣有ケルヲ、上人具ニ承テ、固ク領狀申ト思ヘバ、中十二日ト申ニ、上人息出給ニケリ、冥途ニテ、正シク勅ヲ蒙リシ事ナレバトテ、則吉野山ニ廟ヲ建、利生方便ヲ施シ給シ天神社壇是ナリ、藏王權現ト申ハ、昔○中略役ノ優婆塞ト天暦ノ帝ト、各手自二尊ヲ作副テ、三尊ヲ安置シ奉給フ、○中略無二亦無三ノ靈驗ナリ、斯ル奇特ノ社壇佛閣ヲ、一時ニ燒拂ヌル事、誰カ悲ヲ含マザラン、

〔園太暦〕貞和四年二月三日、傳聞、吉野悉沒落、至分無人、矢倉少々相殘、懸火之處、件餘焰移藏王堂、悉成灰燼云々、冥慮尤可怖事也、

〔菅笠日記上〕九日○明和九年三月とくおきいで、○中略なほ行て、大きなるあけの鳥居あり、二の鳥居又修行門ともなづくとかや、金御峯神社、いまは金精大明神と申て、此山志ろしめす神なりとぞ、○中略なほ深く分入て、茶屋ある所にいたる○中略藏王堂、大坂の右大臣○豐臣秀頼のたて給へるとぞ、

〔寺格帳上天台宗〕藏王權現領御朱印千拾三石貳斗之内　學頭料　高三百石

大僧正迄昇進　吉野山學頭

右住職御伺之上從御門主被仰渡之、

御嶽詣山籠

一學頭職之御禮、御白書院獨禮、獻上壹束一卷、御闕之內貳疊目、御暇無之、

一山門ニ而、僧正官勅許相濟候人、山門ゟ致兼帶候得者、僧正官御禮不申上候、若現住ニ而、御執奏之人、學頭被仰付候節者、僧正官之御禮申上候、

一年頭御禮無之

〔中右記〕寬治七年十月廿七日、今日以權少僧都貞禪、爲金峯山撿挍、是彼御山大衆與興福寺大衆、近日有違背事、十一月三日、興福寺大衆、行向金峯山之下山合戰云々、

〔續古事談四神社佛事〕金峯山ノ御在所ニハ、九月九日ヨリ、後三月三日マデ、人マイラズ、コレハタヾ寒氣ニヨリテノミニアラズ、天人クダリテ、供養シ給トモイヒ、又邪魔ヒマヲウカヾヒテ、充滿ストモイフナリ、

〔女人往生聞書〕金峯山ノクモノウヘ、男子ニアラザレバイタルコトナク、○下略

〔源氏物語四夕顏〕明がたもちかうなりにけり、とりのこゑなどは聞えで、みたけさうじにやあらん、たゞおきなびたるこゑに、ぬかづくぞ聞ゆる、たちゐのけはひたへがたげにおこなふ、いと哀に、あしたの露にことならぬ世を、なにをむさぼる身の、いのりにかと聞給ふに、なもたうらいのだうしとぞをがむなる、かれきゝたまへ、この世とのみはおもはざりけりと、あはれがりたまひて、

うばそくがおこなふ道をしるべにてこん世もふかきちぎりたがふな、長生殿のふるきためしはゆゝしくて、はねをかはさんとはひきかへて、彌勒の世をぞかね玉ふ、ゆくさきの御たのめ、いとこちたし、

〔花鳥餘情三十宇治〕みたけさうじゝける　金峯山精進には、後夜於庭前禮拜金峯山百度スト云々、

○按ズルニ、御嶽精進ハ、金峯山ニ參詣センガタメニ、先ヅ潔齋スルヲ謂フナリ、

〔枕草子六〕あはれなる物

よき男のわかきが、みたけさうじしたる、へだてゐて、うちおこなひたるあかつきのぬかなど、いみじうあはれなり、むつまじき人などの、めさましてきくらんに、おもひやり、まうづるほどのありさま、いかならんと、つゝしみたるに、たひらかにまうでつきたるこそ、いとめでたけれ、

〔枕草子春曙抄六〕へだてゐて、うちおこなひたる曉のぬか、　ぬかは額突とて、禮拜する事也、御嶽精進に、別所にはなれゐて、彌勒を禮拜するさま也、金峯山の金剛藏王は、過去釋迦、現在觀音、當來彌勒と也、　まうづるほどの　千日精進して、金峯山に參る也、

〔扶桑略記二十五朱雀〕天慶四年三月、〇中略道賢今名日藏上人冥途記云、弟子道賢、以去延喜十六年春二月、年十有二、初入此金峯山、卽於發心門椿山寺剃髮改衣、斷絕鹽穀、籠山六年、爰得風傳云、母氏頻沈病痾、戀泣不休云々、因之以同廿一年春三月出山入洛、自後年中一般蹈攀不倦、自彼入山之春至于今年之秋、此山勤修、既及廿六箇年也、年來天下國土災難非一、隨見觸聞、身半如死、加以爲私物怪夢想紛紜不休、天文陰陽頻告不祥、仍爲蒙靈驗之助、抛萬事攀登此山、從深彌深入、企强信精進、是則先爲鎭護天下、後奮念身上也、更結三七日、無言斷食一心念佛、于時天慶四年八月二日午時許、居壇作法之間、枯熱忽發、喉舌枯燥、氣息不通、竊自思惟、既言無言、何得呼人、泣唯作息、思惟之間、出息已斷也、卽命過出立巖外、口負荷佛經、如入山時、眼廻四方、見可行方之間、巖內一禪僧出來、手執金瓶盛水、與弟子令服、其味入骨髓、甚甘善也、其禪僧云、我是執金剛神也、常住此窟、釋迦遺法守護、我感上人年來法施、忽往雪山取此水而施而已云々、又有數十天童子、種々飲食盛大蓮葉捧持侍立、禪僧云、是所謂廿八部衆也、須臾之間、從西岩上一宿德和上來下、卽申左手授弟子令執、相導直道攀登於岩上、窮雪數千丈、適至其頂、見卽一切世界皆悉下地也、此山極最勝、其地平正、純一黃金、光明甚照、北方有一金山、其中有七寶高座、和上至畢坐其座、大和尙曰、我是牟尼化身、藏王菩薩也、此土是金峯山淨土也、

〔今昔物語十二〕金峯山薢嶽良算持經者語第卅

今昔、金峯山ノ蘇ノ嶽ト云フ所ニ良算持經者ト云フ聖人有ケリ、本ハ東國ノ人也、○中略舊里ヲ弃テ、金峯山ニ詣デ、蘇ノ嶽ト云フ所ニ、草ノ庵ヲ結テ、其レニ籠居テ日夜ニ法花經ヲ讀テ十餘年ヲ經タリ、○又見法華驗記

〔今昔物語〕十四 僧明蓮持法花知前世語第十八

今昔、明蓮ト云フ僧有ケリ、幼クシテ祖ノ家ヲ別テ法隆寺ニ住シテ、師ニ隨テ法花經ヲ受ケ習テ、日夜ニ讀誦ス、後ニハ、暗ニハ誦シ奉ラムト思テ、第一卷ヨリ第七卷ニ至ルマデハ暗ニ誦ス、第八卷ニ至ルニ、忘レテ暗ニ誦スル事ヲ不得ズ、○中略佛神ニ祈請シテ、此ノ事ヲ可知シト云テ、○中略長谷寺。金峯山ニ、各一夏ノ間籠テ祈請スルニ、亦其驗無シ、○又見法華驗記

〔百練抄〕四 寬弘四年八月二日、左大臣○藤原道長參詣金峯山、

〔榮花物語〕八 初花 寬弘三年になりぬ、ことしは、大との○藤原道長みたけしやうじんせさせ給べき御としにて、正月より御ありきなどこゝろとけてもなけれど、つぎ〳〵れいのさはうにてすぎもてゆく、ことしは不用にやなどおぼしめされて、四五月にもなりぬ、○中略寬弘四年になりぬ、○中略二月になりて、とのゝおまへみたけしやうじんはじめさせ給はんとするに、四五月にぞ、さらばまいらせ給べき、なほ秋やまなん、よくはべるなど、人々申て御しやうじんのべさせ給て、よろづつつしませ給、あふぎの中納言○藤原忠輔と云人の家にぞ、いでさせ給ける、とのかきこもらせ給へれば、世中いみじうのどかなり、さてこもりおはしませど、よのまつりごとは、なほしらせ給、八月にぞまいらせ給ひける、よろづしたくし覺し心ざしまいらせ給ほども、をろかならず、をしはかりてしりぬべしさべき僧ども、さま〴〵の人々、おほくきをひつかうまつる、君達おほうぞうひろげおはしませば、この程いかにも、おそろしうおぼしつれど、いとたいらかに參りつかせ給ぬ、とし比の御ほいは、是よりほかの事なく、おぼしめさる、これを又世のおほやけごとにおもへり、

雜載

〔濫觴抄 下〕上皇白河○金峯山御參吉野山　堀川七年壬申寬治六七月十二日御參

〔百練抄 堀河五〕寬治六年七月二日、上皇御參詣金峯山、延喜五年之例也、

〔扶桑略記 堀河三十〕寬治六年七月二日癸未、太上天皇參詣金峯山、十三日甲午、上皇參著御在所、奉御燈明、幷供養法花經百部、金泥五部、大乘經同字御筆法華經等、嘱請百口僧侶、施百條甲袈裟、導師權僧正隆明、賞寺家司等、別當法眼快親之弟子僧、幷好算共叙法橋、阿闍梨三人、被寄置了、先是、十日辛卯、上皇於下山寶塔、俄以御惱、上下緇素、騷動無極、爰權僧正、依召參入加持御藥忽立平存、佛法効驗、誠以揭焉、

〔太閤記 十六〕吉野花御見物之事

文祿三年甲午二月廿五日、吉野の花、御覽○豐臣秀吉あるべきとて、大坂を立出させ給ふ、○中略かく短冊あそばし、其後、かねの鳥居、仁王門をとをらせ給ふて、藏王堂へ御參詣ましく〵けり、秀俊卿より、旅館幷舞臺を立をかれけるに依て、立よらせ給へり、去共御能はなし、是より櫻が撫、後醍醐天皇の、皇居ありけるを御覽有て、今熊野、たつてん山、聖天山、辨才天山など通らせ給ひて、昔義經のしばらくおはしましける、吉水の城を旅館となし、兩日御滯座あり、

〔塵囊抄 六〕閻浮檀金ト云ハ何ナル金ゾ、

凡金ハ、三國ニ有共、昔ハ此國ニハ希也、サレバ聖武天皇、東大寺御建立ノ時、大佛ノ薄ノ爲ニ、金ヲ求メ給フニ、无カリシカバ、和州金峯山ハ、金ノ山也ト申セバトテ、良辨僧正ニ仰テ、藏王權現ニ申請サセ給ヒケルニ、夢中ニ示シテノ曰ク、我山ノ金ハ、慈尊出現世ノ時、大地ニ布ン爲ナレバ、取事不能、近江國志賀郡水海ノ岸ノ南ニ一ノ山アリ、大聖垂迹ノ處也、彼ニ行テ祈可申ト、仍僧正彼山ヲ尋給フ處ニ、老翁有テ釣ヲ垂ケルガ、良辨ニ語テ曰、此山之上ニ、一之靈崛アリ、八葉之蓮花之如シ、紫雲常ニ聳、瑞光頻ニ輝、是觀音利生ノ砌也、我ハ亦當山ノ地主、比良ノ明神也トテ、忽ニ隱給ヌ、

則此由ヲ奏聞セラレケレバ、御門御本尊ヲ渡シ賜テ、彼ノ石山ニ詣テ草庵ヲ構テ祈誓シ給ヒケルニ、則天平廿一年三月、陸奥ヨリ砂金ヲ堀出テ、始テ官庫ニ納メ奉ル、○中略是藏王權現ノ告ニ依テ、我朝ノ金ハ多成ル物也、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし、七條に、薄うちあり、みたけまうでしけり、まいりてかなくづれをゆいてみれば、まことの金の樣にてありけり、うれしく思て、件の金を取て、そでにつゝみて、家にかへりぬ、おろしてみければ、きら／＼としてまことの金なりければ、ふしぎの事也、此金とれば、神なり、ぢしん、雨ふりなどして、すこしもえとらざんなるに、これはさる事もなし、この後も、此金をとりて、世中をすぐべしと、うれしくて、はかりにかけてみれば、十八兩ぞ有ける、これをはくにうつに、七八千枚にうちつ、これをまろげて、みなかはんひともがなと思て、しばらくもちたるほどに、撿非違使なる人の、東寺の佛つくらんとて、はくをおほくかはんといふとつぐるものありけり、よろこびて、ふところにさし入て行ぬ、はくやめずといひければ、いくらばかりもちたるぞととひければ、七八千枚ばかり候といひければ、もちてまいりたるかといへば、候とて、ふところより、かみにつゝみたるをとり出したり、みれば、やれずひろく、色いみじかりければ、ひろげてかぞへんとてみれば、ちひさき文字にて、金御嶽云々と、こと／＼くかゝれたり、心もえで、このかきつけは何のれうのかきつけぞとゝへば、はくうち、かきつけも候はず、何のれうの書つけかは候はんといへば、げんにあり、これを見よとて、みするに、薄うちみれば、まことに有、あさましき事かなとおもひて、口もえあかず、撿非違使、これはたゞごとにあらず樣あるべきとて、友をよびぐして、金をば、かどのおさにもたせて、薄打ぐして、內裏のもとへまいりぬ、件の事どもを、かたり奉れば、別當おどろきて、はやく河原に出ゆいてとへといはれければ、撿非違使ども、かはらにゆいて、よせはしほりたてゝ、身をはたらかさぬやうにはりつけて、七十度のかうじをへければ、せなかは

紅のねりひとへを水にぬらしてきせたるやうに、みざ〳〵となりてありけるを、かさねて獄に入たりければ、わづかに、十日ばかりありて失にけり、薄をば、金峯山にかへして、もとの所にそきけるとかたりつたへたり、それよりして、人おちて、いよ〳〵件の金とらんとおもふ人なし、あなおそろし、

〔發心集〕八 於金峯山犯妻者經年爲盲事

河内國ヨリ、妻男アヒ具シテ、御嶽へ參ル者アリケリ、夜ニ入テ詣ツキテ、イト苦ク覺エケレバ、禮堂ニ打ヤスミツヽ、妻男サシナラビテ、アカラサマニ寄臥タリケル程ニ、イフガヒ無クマドロミニケリ、良久アリテ寢覺タルニ、カタハラニ女アリ、ネボレタル心ニ、物詣ト云事フツト忘ヌ、我家ニアルヤウニ覺エテ、何トモ思ヒワカズ、此妻ヲ犯ツ、ヤウ〳〵目サメユク程ニ、思ヒ出レバ、金剛藏王ノ御前ナリケリ、トモカクモ云計ナシ、家ニアリテ、精進ナンド初タル程ダニ、イサヽカモ怠ル事アレバ、時ヲスゴサズ、オソロシキ事ノミ有ニ、カバカリノ誤ヲシツ、只今罰ヲ蒙ン事無疑、コハイカヾスベキト、妻男オドロキ悲ブ、先御前ヲ出テ、河ノ邊ニフタリ行テ、ヨタ〳〵水アミテ、イヒ悲ミツヽ、泣々オコタリ申テ出ニケリ、無類程ノ事ナレバ、人ニモ不語、心ノ内ニ、今ヤ〳〵ト待レツヽ、月日送レド、妻モ男モ、更ニ其御トガメト覺ル事ナシ、事故ナクテ、年來スギニケリ、此事ハヨハイ廿許ノヲリニヤ有ケン、サテ四十餘年經テ後、シタシキ者ノ、御嶽へ參ルトテ、アナガチニケヾシカリケルヲ、サシモ可有事カハナドイフ程ニ、自ラ云アガリテ、イデヤ事々敷モノ給フ物カナ、翁ハソノカミ、シカ〳〵ノ業ヲ、正ク藏王ノ御前ニテ犯シタリシカド、更ニ事モ無テ、既ニ六十ニ餘タリ、萬ノ事ハ、只云トイハヌトナリト云、是ヲ聞人、今更アサマシト驚アヘリケル程ニ、カク云テ寢タリケル夜ノ中ニ、二ノ目ツブレニケリトゾ、是ハ近世ノ事ナリ、

〔勘仲記〕弘安五年三月廿八日戊子、○中略 今夕軒廊御卜延引、鴨社怪異幷金峯山御正體令落事云々、

名勝所在

雜載

如意輪寺

如意輪寺ハ、大和國吉野郡吉野山ニ在リ、寺內ニ後醍醐天皇ノ御陵アリ、宗派ハ淨土宗ニ屬ス、

〔大和めぐり〕如意輪寺　勝手の社より、八町ばかり東に有、谷のむかひなり、今は淨土宗なり、山寺なり、後醍醐帝を葬りし御寺也、御陵は後の山に在、寺より近し、大なる陵なり、

〔和州舊跡幽考十一芳野郡〕如意輪寺

塔尾山如意輪寺は、本尊如意輪觀音菩薩也、藏王權現あり、御厨子の扉に、吉野より熊野迄の畫圖あり、後醍醐天皇の宸筆の讃曰、

嶠嶋月前爲教主　金峯嵐底現藏王　班荆禪客安居砌　緇素群焉滿願望

慈風扇境四流渴　惑霧晴心六度差　碧樹集雲飛鷲嶺　黃金敷地契龍華

風月澄心文道祖　火雷宥忿法陀尊　日藏聖感瑞夢處　大政天爲敎海棨

兩山梯峨古仙跡　四海船浮權化神　行積僧祇蹙末世　威攸鬼類縛其身

〔太平記二十六〕正行參吉野事

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵衛、同紀六左衛門子息二人、野田四郎子息二人、楠將監、西河子息、關地良圓以下、今度ノ軍ニ一足モ不引、一處ニテ討死セント約束シタリケル兵百四十三人、先皇ノ御廟ニ參テ、今度ノ軍難義ナラバ、討死仕ベキ暇ヲ申テ、如意輪堂ノ壁板ニ、各名字ヲ過去帳ニ書連テ、其奧ニ、

返ラジト兼テ思ヘバ梓弓ナキ數ニイル名ヲゾトヾムルト一首ノ歌ヲ書留メ、逆修ノ爲ト覺

敷テ、各鬢髮ヲ切テ、佛殿ニ投入、其日吉野ヲ打出テ、敵陣ヘトゾ向ケル、

比蘇寺

名稱 所在 創建

比蘇寺ハ、一ニ現光寺、又吉野寺ト稱ス、本尊觀音像ハ、欽明天皇ノ十四年、河內國茅渟海ヨリ得タル樟木ヲ以テ刻セルモノト云ヒ、又推古天皇ノ三年、淡路島ヨリ得タル沈水香ナリトモ云フ、今廢寺ニシテ、舊地ハ、大和國吉野郡比蘇村ニ在リ、

〔和州舊跡幽考 十一吉野郡〕比蘇寺

毗蘇寺 釋日本紀 比蘇寺 釋書 とかけり

比蘇寺、又現光寺といへり、額は栗天八一 玉林抄 當代たづねしに、此額なくなりし時代をしらずとなり、推古天皇三年四月、沈水香淡路島にうかみよれり、その大さ一圍あり、浦人沈水香をしらず、只薪にまじへてくゆらかす、そのけぶりいと遠くかほりける程に、いとあやしみて、御みかどに奉りけり、日本紀 聖德太子、是は沈水香木にて、その實は鷄舌のごとく、その花は丁子、そのあぶらは薰陸なり、水に沈みて久しきを沈水といひ、水に入て久しからぬを淺香と申と奏し給ひしかば、御門よろこびおぼしめして、觀音の像をつくらせ、吉野の比蘇寺にすへ給ふに、時々光明をはなち給ふとなり、釋書 それより現光寺の名あり、玉林抄 再興は、弘安二年、金峯山より聖人來りて、再興あり、西大寺の興正菩薩、戒法をすゝめて、律院となりたり、太子傳抄 やうやう繁昌せしが、又破壞して、當代かすかにのこれり、

〔日本書紀 十九欽明〕十四年五月戊辰朔、河內國言、泉郡茅渟海中有梵音、震響若雷聲、光彩晃曜如日色、天皇心異之、遣溝邊直 此但曰直、不書名字、蓋是傳寫誤失歟、入海求訪、是月、溝邊直入海、果見樟木浮海玲瓏、遂取而獻、天

皇命畫工、造佛像二軀、今吉野寺放光樟像也、

（日本書紀通證欽明二十四）吉野寺天書曰、遂爲吡蘇山立寺、在吉野郡池田莊比曾村、一名現光寺、一名比蘇寺、

（聖德太子傳曆上）推古天皇三年乙卯春、土佐南海夜有大光、亦有聲如雷、經三十箇日矣、夏四月著淡路島南岸、島人不知沈水、以交薪燒於竈、太子遣使令獻、其大一圍長八尺、其香異薰、太子觀而大悅、奏曰、是爲沈水香者也、此木名栴檀香、木生南天竺國南海之岸、夏月諸蛇相繞、此木冷故也、人以矢射、冬月蛇蟄、即祈而採之、其實雞舌、其花丁子、其脂薰陸、沈水久者爲沈水香、不久者爲淺香、而今陛下興隆釋敎、肇造佛像、故釋梵感德、漂送此木、即有勅、命百濟工、刻造檀像、作觀音菩薩、高數尺、安吉野比蘇寺、時時放光、

雜載

（太子傳玉林抄八）比蘇寺額事　秘決云、栗天八一云々、大難得意、或人云、栗天八一云々、○中略先師云、後醍醐ノ天皇、○中略自栗天奉寺ト書テ本ノ額ヲ寺庫收之、今宸筆ヲ打之也云々、但近比參テ見レバ、栗天八一ト云字アリ、イカサマ木ノ額ヲ打テ、後醍醐ノ御筆ヲバ寺ニ收之歟、

室生寺

名稱　所在　創建

室生寺ハ、大和國宇陀郡室生山ニ在リ、宗派ハ新義眞言宗ニ屬セリ、

（和漢三才圖會大和七十三）室生山檉生寺　在宇陀町之艮四里許、又名西山、

眞言無雙勝地、弘法大師以三國相承寶器、納此山岫、麓有伽藍、號佛隆寺、俗稱女人高野山、　寺領三十八石興福寺印内配分御朱印用西大寺、招提寺戒壇院等律宗高僧、爲住職、興福寺僧侶二人、勤一夏結番、

鎭守　龍穴社　在麓

昔善女龍王來値釋慶圓、承即身即佛印明、爲報恩、誓成當寺守護神、

〔和州舊跡幽考十七 宇陀郡〕室生山寺領三十八石

宇陀の町より四里ばかり艮

室生山、延喜式 檉生山、三代實錄 或は宀一山、或面一山といふ、寺號は室生寺日域無雙の眞言の勝地にして、弘法大師万民衆庶の薄命をすくはんがために、三國相承の重寶を納め、本尊海會彼岸に安置し麓に伽藍あり、佛隆寺と號す、行狀記

〔天明集成絲綸錄二十八〕明和五子年六月

大和國宇陀郡室生山

室生寺

河内

攝津

右室生寺諸堂修復爲助成、勸化御免可被仰付、寺社奉行連印之勸化狀持參來候、丑正月ゟ來ル寅十二月迄二ヶ年之間、役僧共、御料私領寺社領在町可致巡行候間、信仰之輩ハ、物之多少ニよらず可致寄進旨、御料者御代官、私領者領主地頭ゟ可申渡候、

六月

右之通、可被相觸候、

長谷寺

長谷寺ハ、一ニ豐山寺ト號ス、大和國城上郡泊瀨山ニ在リテ、僧德道ノ開基ニ係リ、神龜年中、勅願ヲ以テ供養セシ所ナリ、本尊十一面觀世音像ハ、德道ノ彫刻ニシテ、天然ノ石上ニ安ジ、三十三所觀音ノ一ナリ、宗旨ハ眞言宗ニシテ、豐山派ノ總本山タリ、德川幕府ノ初、寺內ニ小

名稱　所在　創建　沿革

池坊ヲ建テシ事等ハ、智積院篇ヲ參看スベシ、

〔伊呂波字類抄波諸寺〕長谷寺ハセ、豐山寺、一云異名也、

〔拾芥抄下諸寺本〕長谷大和、十一面觀音、

〔書言字考節用集乾坤一〕長谷寺ハセデラ初瀨寺也、事見釋書、今號豐山妙音院小池坊、

〔和漢三才圖會七十三大和〕長谷寺　在泊瀨山、俗爲初瀨、寺領五百石、　號豐山神樂院、

〔長谷寺緣起〕稱長谷寺者、夫於南閻浮提陽谷輪王所化之下、破取盧島水穗國長谷神河浦北豐山峯、而德道聖人建立十一面觀世音菩薩利世之道場也、此豐山有二名、一者泊瀨寺、又云本長谷寺、二者長谷寺、又云後長谷寺、其差別者、十一面堂西有谷、自其西岡上有三重塔幷石室佛像等、是泊瀨寺也、得號者、泊瀨河上瀧藏權現座、其所勝地、而往古以來、諸天影向砌也、脇彼社在天人所造之毗沙門天王、古人喚爲天靈神矣、雷取登空之時、御手寶塔流而泊此山麓三神里神河瀨、武內宿彌卜筮曰、斯授天德表地榮也云々、則自手崇而北峯西北隅納之、仍改舊號三神將泊瀨豐山矣、其後經三百餘歲、道明聖人移之石室、自爾以降、繁昌有於此山、故提里名尙安寺號矣、是天武天皇更勅弘福寺道明聖人建精舍於此矣、彼金銅佛像下、有天皇御筆緣起文、其聖人六人部氏人矣、次谷東岡上有十一面堂等者、長谷寺也、從大悲利生之谷長而稱者、專答德道聖人之願、而北家曩祖房前臣奏元正天皇、奉聖武詔勅、以所建立也、彼德道聖人者、播磨國揖寶郡人、俗姓辛矢田部造米麻呂也、後名子若、是法基菩薩應化第三仙人再誕矣、〇中略生年十一別考、十九離妣、〇中略遂爲求佛道、〇中略聖武天皇即位、天皇踐祚之初、房前臣重勸解狀、聖人受命、神龜元年甲子歲正月一日上解狀、依房前之奏狀、同年二月廿三日勅、其年三月二日所宣下國宜承知、同月十八日、香稻三千束下行、仍同六年己巳歲〇天平元年四月八日辰時、以吉日良時加持御衣木、其役道慈律師同時始、三箇日之間、奉造十一面觀自在菩薩像、高二丈六尺、其巧匠者、稽文會、稽主勳也、造始佛像當第二日、樵夫吉躬津麻呂、入山欲取薪之、因向佛所遙見

稽文會、六臂地藏菩薩、每手削刻佛像、又見稽主勳、不空羂索觀自在菩薩六臂、或取鑿或取刀、同時向佛成奇特思、行聖人所而語、則遙見如言、相共近行佛所而見常人也、是地藏觀音之應化、神明尊崇之權跡、其具記有別矣、亦堂舍構、高下險難也、何爲、恒思歎而感應、時至聖人、合掌本尊、發願曰、願得冥助、悉建精舍、其夜夢有一金神、指示北峯曰、聖人莫患慮、掩峯地中、有金剛寶盤石、上地際齊、下輪際窮、其體在三枝之頂、大悲菩薩坐説法、此其一也、用彼可爲金剛寶師子座、○中略天平五年癸酉歲五月十八日、房前臣奉勅付長谷寺、同廿日、捧法味、調音樂、奉開眼供養、請僧百口、興福寺、元興寺、大安寺、法隆寺也、導師行基上人、呪願義淵大德、于時自觀自在菩薩頂上、五色雲聳滿於虛空、散造花、天花交降、其卷登西方虛空不下、又供養之夜、自本尊眉間放光、一夜之間、山內皆金色也、如此事、衆會皆見、倍凝敬重之懷、○中略德道聖人又勸進上下諸人、營造寺院、天平七年乙亥歲五月十六日上棟、奉天裁、御藏司等、爲棟綱、線絲五百兩施入、凡堂舍構悉成畢、同十九年丁亥歲九月廿八日、奉供養、請僧百口、興福寺廿一人、元興寺廿一人、大安寺廿八人、藥師寺、法隆寺也、導師天竺僧菩提聖人、呪願行基菩薩也、則瑞應不一、異香薰會場、紫雲沸虛空、天人影向、而奏音樂、散天花、衆會皆見、成奇特之思、自爾以降、鎭護國家之道場、而上自一人、下至萬民、一天皆奉歸敬、一化建立儀如斯、爰聖武天皇遁位之後、天平勝寶五年十一月十六日臨幸、則持御自筆最勝王經一部、并法花經一部、納大聖御寶前、又同月十八日、開大法會、奉供養、奏散曲之舞樂、喝千口之僧侶、導師隆尊律師、同月十九日夜、天皇得善夢而下勅、其年十二月廿日、始奉懸寶帳、則勅於此伽藍者、及永代可奉祈聖朝安穩、寶祚長遠、國土泰平、萬民快樂云々、別當大僧都賢璟奉勅流之門徒、并以勅約金札、奉納御寶前、今此伽藍開發一途非常儀、云道場者、諸佛法輪地、秘密莊嚴土、三災壞劫不動、四魔靈鬼失威之砌也、○中略

寛平八年二月十日　都維那僧行空　寺主法師惠義　上座法師圓詮　別當傳燈大法師位

知照

俗別當左大臣從二位藤原朝臣良世

從五位下行左大史兼春宮大屬壬生忌寸望村　遣唐副使從五位上守右少辨兼行式部少輔文章博士讃岐介紀朝臣長谷雄　中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平　執筆

遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮大夫式部大輔侍從菅原朝臣道眞

奉行　去年七月廿七日下二諸寺幷長谷寺一宣旨

〔古事談 五神社佛寺〕長谷寺觀音ハ、神龜二年三月廿一日庚午供養、行基菩薩爲二導師一、件寺者、興福寺僧道明、沙彌德道、播磨國住人、二人相共所二建立一也、○下略、已上緣起、

○按ズルニ、諸書多ク當寺ノ供養ヲ以テ、神龜四年ト爲ス、而シテ本書獨リ二年ノ事ト爲ス、恐クハ誤ナラン、且ツ此年三月ハ、甲申朔ニシテ、二十一日ハ甲辰ナリ、今庚午ト爲スモ亦非ナリ、

〔今昔物語 十一〕德道聖人始建二長谷寺一語第卅一

今昔、世ノ中ニ、大水出タリケル時、近江ノ國高島ノ郡ノ前ニ、大ナル木流テ出寄タリケリ、鄕ノ人有テ、其木ノ端ヲ伐取タルニ、人ノ家燒ヌ、亦其家ヨリ始テ、鄕村ニ病發テ、死ヌル者多カリ、是ニ依テ、家々其祟ヲ令レ占ルニ、只此ノ木ノ故也ト占ヘバ、其後ハ、世ノ人皆其木ノ傍ニ寄ル者、一人モ无シ、然ル間ニ、大和國葛木ノ下ノ郡ニ住ム人、自然ラ要事有テ、彼ノ木ノ有ル鄕ニ至ルニ、其人此ノ木ノ故ヲ聞テ、心ノ内ニ願ヲ發ケル樣、我レ此ノ木ヲ以テ、十一面觀世音ノ像ヲ造奉ラムト思フ、然レドモ此ノ木ノ輙ク、我ガ本ノ栖カヘ可二持亘一キ便无ケレバ、本ノ鄕ニ返ヌ、其後、其人ノ爲ニ示ス事有テ、其人饗ヲ儲ケ、人ヲ伴ヒテ、亦彼ノ木ノ所ニ行テ見ルニ、尙人乏テ徒ニ歸ナムト爲ルニ、試ニ繩ヲ付テ曳見ムト思テ曳ニ、輕ク曳ルレバ、喜テ曳ニ道行ク人力ヲ加ヘテ共ニ曳ク程ニ、大和國葛木ノ下ノ郡ノ、當麻ノ鄕ニ曳付ツ、然レドモ、心ノ内ノ願ヲ不レ遂シテ、其木ヲ久ク置タル間ニ、其人死ヌ、然レバ此ノ木、亦其所ニシテ、徒ニ八十餘年ヲ經タリ、其程其鄕ニ病發テ、首ヲ擧テ病

ミ痛ム者多カリ、是ニ依テ亦此ノ木ノ故也ト云テ、郡司、郷司等集テ云ク、故某ガ无由キ木ヲ、他國ヨリ曳來テ、其ニ依テ病發レル也、然レバ、其子宮丸ヲ召出テ勘責スト云ヘドモ、宮丸一人シテ、此木ヲ難取棄シ、更ニ可爲キ樣无レバ、思ヒ煩ヒテ、其郡ノ人ヲ催シ集メテ、此木ヲ敷ノ上郡ノ長谷川ノ邊ニ曳棄ツ、其所ニシテ亦廿年ヲ經ヌ、其時ニ僧有リ、名ヲ德道ト云フ、此事ヲ聞テ心ニ思ハク、此木口ヲ開クニ必ズ靈木ナラム、我レ此ノ木ヲ以テ、十一面觀音ノ像ヲ造奉ラムト思テ、今ノ長谷ノ所ニ曳移シツ、而ルニ德道力无クシテ、輙ク造奉ラムニ不堪ズ、德道哭々七八年ガ間、此ノ木ニ向テ禮拜シテ、此ノ願ヲ遂ムト祈請ス、其時ニ、飯高ノ天皇、自然ラ此事ヲ聞シ食テ、恩ヲ垂給フ、亦房前ノ大臣力ヲ加ヘ給テ、神龜四年ト云フ年造リ給ヘリ、

〔東大寺要錄〕六長谷寺(神龜四年三月廿日庚午、(庚午壬辰誤)供養、請僧六十口、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、法隆寺、導師行基、呪願義淵法師、)

右寺、沙彌道德、沙彌道明(唐國僧、姓六部、)之建立也、飯高天皇、賜稻三千束、道明十一面像高二丈六尺、道德夢有神、指大和國城上郡長谷郷、土下大石堀顯奉立此觀音、夢覺之後、堀得長石八尺、面如掌、仍立其像、天慶七年正月七日、燒失之後、但取出頂上佛面一體、切取取出時別當東大寺長教禪師也、僧興運奉作十一面半金色、增本定二尺奉作也、件願主道德(良辨之弟子)以彼寺渡進本師良辨僧正、僧正次付屬實忠、如此代々相承、爲寺家之末寺、東大寺寺僧次第相繼、寺務執行、而正曆元年時別當仁和寺眞永之後、興福寺平傳律師橫押取、件平傳者、眞永之父、

注云、道德者、良辨之弟子、道明死去後、道德奉付良辨律師、

又云、養老二年、唐僧道明、姓六部飯高天皇朝庭賜稻三千束、令觀音像高二丈六尺安置、無處、而雷公降摧盤石、爲其座、神龜四年、沙彌道德造堂、道明造佛、

○按ズルニ、此書ニ、神龜四年三月廿日庚午供養トアレド、此月ハ癸酉朔ニシテ庚午ナシ、一代要記ニ、神龜四年丁卯三月庚午、供養大和國城上郡長谷寺、トアルモ、亦此誤ニ同ジ、帝王編年記

堂塔

ニハ、神龜四年丁卯三月廿日、長谷寺供養トアリテ、干支ナシ、

〔伊呂波字類抄〕波諸寺 長谷寺 日本紀云、養老六年、始造長谷寺、願主沙彌道明、俗姓六人部氏、養老三年、大和國城上郡、始建之、同四年供養、導師行基菩薩、

〔春記〕永承七年九月七日、或說云、此寺有本寺、號長谷寺、至于此觀音堂、號豐山寺、養老五年長谷寺僧道明等建立、

〔義演准后日記〕慶長六年二月十五日、泊瀨寺ヘ、未刻著了、○中略 泊瀨寺觀音直ニ參詣、小池御迎ニ罷出了、先年一見ノ時ハ半作ナリ、今度ハ悉周備、舞臺如淸水、先年根來寺滅亡ノ時ヨリ、小池居住也、昔ノ僧ハ在家ナリ、仍テ大納言ノ時ヨリ眞言宗六坊再興也、彼在家ハ二王門ノ外ヘ被出了、于今觀音ノ事モ不知體ニテ、六坊トシテ被奉行也、今夜、小池坊ニ一宿了、于時印可頻ニ懇望申入間許容了、然處客僧次ヲ以テ、御免トハ可忝由、種々申入間、難默止免許了、道場奉行演賀律師、承仕明丞、

〔大和名所圖會〕城上郡四 豐山神樂院長谷寺

夫當山は元正天皇養老五年に草創、又文武天皇の御時、德道上人これを造立すともいふ、本堂は八棟作り、十一面觀世音の長一丈六尺、拾芥抄ニ丈六尺 二王門は南に向ふて、麓より上まで瓦葺の長廊ありて、其屋の下に石階あり、諸堂へ登る路なり、北へ登り、東へ轉じ、又北へ登る、山上に坊舍學寮多し、眞言宗にして、新義の學僧集る所也、小池坊は、むかし紀州根來寺にありしに、天正十一年、秀吉公根來寺破却の後、寺僧諸國に流浪し、智積院は京都に建、小池坊は此地に造立す、これ講堂と號す、

〔扶桑略記〕二十四醍醐 延長六年七月十二日、長谷河水溢流、民家多損、長谷寺鳥居同流失云々、

〔扶桑略記〕二十五朱雀 天慶七年正月九日、夜半、長谷寺燒亡、歷二百十八年、有此火災、佛像同成灰燼、

〔日本紀略〕二朱雀 天慶七年正月九日壬午、夜半風雨、大和國豐山寺長谷寺也 堂舍皆悉燒亡、驗佛同燒失、建立之後二百廿四年、

○按ズルニ、扶桑略記ハ長谷寺ノ創立ヲ以テ神龜四年ト爲ス、諸書ト合フ、日本紀略ハ養老五年ト爲ス、伊呂波字類抄ト合ス、

〔春記〕永承七年八月廿八日、今日眞範僧正參入、督殿申云、長谷寺已以燒亡了、只今自彼寺告來、□範彼寺別當也、今有此事大悲、古昔燒亡云、不能取出、只取出御頭、十一面也作繼御身、燒亡之後百餘年云々、靈驗所第一也、末法之最年有此事、可恐之、但佛取出事、無一定云々、　九月七日、今日山科寺別當眞範僧正、奉昇殿之書云、長谷寺事拜見、涙難抑候、前度燒亡、只御面一口以彼塔佛身造立、此度左邊怨怒相一面、右邊自牙相一面、頂上佛面一面合三面殘、御足人不奉取出、灰中所存給也、皆金色也、爲火不損侍、末法事希有事侍、燒亡以後、遠近人參詣如雲、某宿報可恥、申年老頻罷過於此罪、定措身無處、不日堂一欲建立□心云々、此書昨日書也、

或説云、此寺有本寺號長谷寺、至于此觀音堂號豐山寺、養老五年、長谷寺僧道明等建立、大佛師稽文會云々、其後天慶七年正月日夜燒亡、只取出御頭一云々、其度燒亡、諸廊堂塔皆悉燒亡、只二王堂一字殘云々、此間本所傍候假屋、安置御頭三面、皆垂帷帳、人不能見之云々、衆人參入、奉御燈明云々、件火自若狹國參入下人晚食間、火燒表其撲滅已了云々、而風口吹上小焔付僧房、其火付廊、仍參御堂之人、已以不通御堂、燒亡之間相構取出御頭云々、○又見百練抄

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜二年八月十一日壬寅、供養長谷寺、導師大僧正明尊、讀師小僧都長守、六十僧、

〔百練抄 十三 後堀河〕嘉祿二年十月廿二日、長谷寺供養也、天下道俗擧首參詣、前年回祿之後新造終功、忽有供養之儀、

〔大乘院寺社雜事記〕文明元年八月三日夜部長谷寺燒失之由、執行注進狀到來、但觀音堂、十三重塔、新宮等無爲、珍重珍重、大聖驗德尤也、可喜可喜、燒失所々事、

本長谷寺、同三重塔、舟倉、一切經藏、松金剛院、二王堂、吉祥院、登廊、食堂、客坊、

此外、在家、諸坊等悉以燒了、火本ハ共繪坊云々、總堂舍二十四宇坊在家百二十間云々、

〔大乘院寺社雜事記〕明應四年十一月廿二日、子時、公坊之下井坊ヨリ火出之、公坊燒、則觀音堂、幷本尊悉以燒失、時剋到來也、十三重塔　鐘樓　愛染堂　新宮三所　長樂寺　灌頂堂　不動堂　彌勒堂　炎魔堂　一切經藏　本長谷寺　三重塔　來迎院　登廊土分相殘　横田坊　東中院　中坊、以上、二王堂一宇相殘、其餘、堂社悉以廻祿了、評定衆執行注進狀、次日到來了、　廿三日、長谷寺炎上注進之間、定使幷光秀罷下、　此間越智勢共陣ニ取之、自昔、二王堂上ニハ陣取無之、今度堂塔之內悉以爲陣所、不精大辨、小辨魚女人之儀、以外次第共有之、如何樣爲寺珍事可出來由、諸人申沙汰、如案火事出來、越智惡行故也、不驚火事也、立歸而殊勝々々、　廿四日、京都注進之辰市御童子上之、賴物幷山城新關共下行之、一條殿難波方仰之、

一昨日廿二日夜子時、長谷寺觀音堂、幷本尊十三重塔、鐘樓　經藏　新宮社　灌頂堂、本長谷寺、　三重塔、悉以燒失候、諸堂不殘、一宇、二王堂相殘候、言語道斷次第候、公武可有御披露候也、恐惶謹言、

十一月廿四日　　尋尊

勸修寺大納言殿

廿六日

一弘安三年三月十四日、長谷寺炎上、本尊以下頂上佛錫杖取出、食堂、藥師寺等燒了、　五月十六日、大洪水出、坊舍三十家流、參詣輩數十人流死、　六月十二日、御佛造初之、　正和五年六月九日、十三重塔供養、導師穎安寺殿、卅七年ニ當也　貞和二年三月十八日、舞臺供養、五十八年當　貞治二年十月廿九日、觀音堂供養、導師己心寺殿、廻祿以後八十四年、自弘安三年至明應四年二百十八年也、

宗派

寺格

〔續史愚抄後土御門〕明應六年七月十一日辛亥、大和長谷寺再造及依玄空上人勸進、觀音大士刻彫事、被聞食者、賜綸旨於當寺別當僧正某、奉行藏人頭左中辨宣秀朝臣、宣秀卿記

〔大乘院寺社雜事記〕明應四年十二月廿三日

一長谷寺奉伽帳加判了

御奉伽帳御加判候、隨而一萬疋分御到來次第可被付其足之由、可被披露評定衆之旨、被仰下也、恐惶謹言、

十二月廿二日　成就院濟圓判

長谷寺往生院方丈

〔長谷寺文書〕當寺觀音堂造營作料之事、禁裏樣御修理御作料、同前可被遣事尤候、恐々謹言、

九月三日　羽柴秀吉花押

○按ズルニ、右ノ文書ハ、天正年間ノモノナランヽ

〔和漢三才圖會大和七十三〕長谷寺(中略)眞言新義、小池坊僧正、

〔國師日記〕慶長十五庚戌九月

急度申入候、長谷寺北坊、從往古律院にて候處ニ、今度、貴老新義致退放、迷惑之由、御訴訟ニ被罷下候、右之坊主儀、貴老此地にて圓光寺江被仰上候ハ、あき坊之由候間、從先々律院本主有之所を、致御樣之段、不審千萬ニ可達上聞之由候へ共、先樣子可承屆と申入候、自古律院義候ハヾ、如有來尤存候、從御報可得上意候由候、非分被仰懸候ハ、御爲不可然之御分別ニ過間敷候、北坊此地ニ相詰被申候、尙追而可申入候、恐惶謹言、

九月四日　榮任

〔續日本後紀十七仁明〕承和十四年十二月丙辰、勅大和國城上郡長谷山寺、高市郡壺坂山寺、元來靈驗之

闕若也、宜付所司編爲定額、永以官長令撿挍也、

寺領用途

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正税公廨雜稻　大和國、○中略　豐山寺料二千四百束、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年十月庚申、幸長谷寺、捨田八町、

〔三代實錄二十八淸和〕貞觀十八年五月廿八日甲辰、先是律師法橋上人位長朗申牒偁、大和國長谷山寺、是長朗先祖川原寺修行法師位道明、寶龜○寶龜恐神龜誤年中、率其同類、奉爲國家所建立也、靈像殊驗、遐邇仰止、請每年安居、令居住僧等、講演最勝、仁王兩部經、奉護朝廷、其布施供養、用寺家物、太政官處分、依請、

〔三代實錄四十八光孝〕仁和元年十二月四日甲寅、先是大外記大藏朝臣善行、修解申請偁、大和國靈驗山寺、有長谷、壺坂兩精舍、並有燈分稻、付國司出擧、但至于島山寺、凡其靈驗彼兩寺之亞也、而未有燈分、照曉夜者、星月而已、望請以稻四百束、付之國宰、加擧正稅、送利稻於寺家、爲長明燈之資、至是詔許之、

寺制

〔寺鑑上〕新義眞言宗　本寺　和州　小池坊

御朱印　高五百石

〔國師日記〕長谷寺法度

一爲學問、同住山之所化、不滿二十年者、不可執法幢事、

一坊舍幷寺領、爲私不可有賣買事、

一所化衆、不用能化之命、非法於有之者、可追放寺中事、

右堅可守此旨者也

慶長十七年十月四日　御朱印

當寺能化坊

參詣

〔長谷寺緣起文〕爰聖武天皇遜位之後、天平勝寶五年十一月十六日臨幸、則持御自筆最勝王經一部

幷法花經一部、納二大聖御寶前一、又同月十八日、開二大法會一奉二供養一、奏二歎曲之舞樂一、唱二千口之僧侶一、導師隆尊律師、同月十九日夜、天皇得二善夢一而下レ勅、其年十二月廿日、始奉レ懸二寶帳一、則勅、於二此伽藍一者、及二永代一可レ奉レ祈二聖朝安穩、寶祚長遠、國土泰平、萬民快樂一云々、別當大僧都賢璟奉レ勅、流二之門徒一、幷以二勅約金札一奉レ納二御寶前一、

〔百練抄四一條〕永延元年十月十七日、院〇花山參二詣長谷寺、笠置寺、七大寺一、

〔撰集抄七〕宗順阿闍梨信二觀音一遁二災難一事

むかし比叡の山に、宗順といふ人侍き、泊瀨の觀音にまふでゝ、おはしける夜の夢に、觀音のやゝとおほせのありければ、宗順ゐなをりかしこまりたるに、汝本寺に歸りなん時に、つりがね、風のためにおちて、おほくの坊どもを打やぶりて、人の命をおほくうしなふべし、汝もかれがために命をほろぼすべしといへども、我にこゝろざし深きによりて、今度の命には、かはるべしと仰らると見て、夢さめ侍りぬ、〇中略二三日へて、永祚の風とて、末の世まで聞ゆる風に、つり鐘俄に落て、人の家十間ばかり打ひさがれて、命をうしなふ人數あまた侍り、此宗順坊も打ひさがれたる內にてなん侍る、俄の事なれば、誰も何とてか遁るべきなれば、おほく死に侍しに、此宗順、折ふし持佛堂につとめして侍けるが、家のひさげたる時に、此本尊の等身の觀音、宗順の上におほひて、ことなるあやまち露ばかりなかりけり、〇中略長谷のくはんをんになぞらへ奉りて、持佛堂をば、長谷堂とぞ申傳てはんべる、

〔百練抄四一條〕正曆二年十月十五日、東三條院〇藤原詮子自二式曹司一參二詣長谷寺一、〇又見二日本紀略一

〔枕草子六〕あはれなる物

はつせなどにまうでゝ、つぼねなどするほどは、くれはしのもとに車引よせてたてるに、おびばかりしたるわかき法師ばらの、あしだといふ物をはきて、いさゝかつゝみもなく、おりのぼると、

雜載

て、何ともなき經のはしうよちみ、倶舍の玄ゆをすこしいひつゞけありくこそ、所につけておかしけれ、

〔扶桑略記 三十 堀河〕寛治三年十月十三日己酉、攝政大相國〇藤原師實參詣長谷寺、供養丈六四天王木像、

〔百練抄 八 高倉〕承安二年三月四日、攝政〇藤原基房參詣長谷寺、蓋寛治之例也、公卿殿上人刷行粧扈從、

〔多聞院日記〕天文十二年二月十五日、小松殿、長谷ヘ參詣ノ初度ニハ、信仰ノ餘リニ、本尊ノ何ノ方ヘ向キ給トモ方角ヲ不辨、其後、第二度目ニ參詣ノ時、漸々ニシテ方角ヲ辨ラルト云々、後ニ依勅意御代官トシテ可有參詣之旨被仰下候處ニ、最前ニ參セシ時、強信ノ餘リ、不辨東西、其後ハ初ニハ替リテ方角ヲ辨ズ、如此信心次第次第ニ薄クナレバ、今度參詣セバ、又ウスクナルベシトテ辭シ被申云々、

〔今昔物語 十六〕新羅后蒙國王咎得長谷觀音助語第十九

今昔、新羅ノ國ニ、國王ノ后有ケリ、其ノ后キ、忍テ竊ニ人ニ通ジニケリ、國王、此ノ事ヲ聞テ、大ニ嗔テ、后ヲ捕ヘテ、髮ニ繩ヲ付テ、間木ニ鈎リ係テ、足ヲ四五尺許引上テ置タリケリ、后辛苦惱亂スト云ヘドモ、更ニ可爲キ方无クシテ、自ラ心ノ内ニ思ハク、我レ此ク難堪キ咎ヲ蒙ルト云ヘドモ、我レヲ可助キ人无シ、而ルニ傳ヘテ聞ケバ、此ノ國ヨリ東ニ、遙ニ去テ、日ノ本ト云フ國有ナリ、其ノ國ニ、長谷ト云フ所有ケリ、觀音ノ靈驗ヲ施シ給フ在マスト、菩薩ノ慈悲ハ、深キ事大海ヨリモ深ク、廣キ事世界ヨリモ廣シ、然レバ憑ヲ係ケ奉ラム人、何ドカ、其ノ助ヲ不蒙ザラムト、祈請シテ、目ヲ塞テ、思ヒ入テ有ル間ニ、忽ニ足ノ下ニ金ノ榻出來ヌ、然レバ后此レ我ガ念ジ奉レルニ依テ、觀音ノ助ケ給フ也ト思テ、其ノ榻ヲ踏ヘテ立テルニ、苦シブ所无シ、此ノ榻ヲ、人見ル事无シ、其ノ後、日來ヲ經ルニ、后被免ニケリ、后偏ニ、此レ長谷ノ觀音ノ助ゾト知テ、使ヲ差テ、多ノ財物ヲ令持メテ、日本ニ送テ、長谷ノ觀音ニ奉ル、其ノ中ニ、大キナル鈴鏡、金ノ簾有リ、于今彼ノ山ニ納メ置タリ、

實ニ長谷ノ觀音ノ靈驗不思議也、念ジ奉ル人、他國マデ、其ノ利益ヲ不蒙ズト云フ事无シ、人尋ニ歩ヲ運ビ、首ヲ低テ禮拜シ可奉シトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔源氏物語二十二玉鬘〕佛の御なかにははつせなん、日の本のうちには、あらたなるしるしあらはし給ふと、もろこしにだにきこえあんなる、ましてわが國のうちにこそ、とをきくにのさかひとても、としへ給ひつれば、わか君〔玉鬘〕をば、ましてめぐみ給ひてんとて、いだし奉る、

〔伏見宮所藏宸翰類七〕敬白長谷寺觀自在菩薩寶前

立願事

一可奉轉讀大般若經一部事

一可奉轉讀最勝王經十部事

一可奉轉讀觀音品三千三百三十三卷事

右所願令成就者、今年中必可果遂者也、仍立願如件、

正中三年三月十五日　太上天皇胤仁〔後伏見〕敬白

〔醍醐十二〕長谷寺　長谷寺荒廢の時、時衆淨阿上人〔京四條金蓮寺の祖〕住せられしとぞ、彼影今にあり、

本元興寺

本元興寺ハ、一ニ建興寺ニ作ル、大和國高市郡飛鳥村ニ在リ、故ニ又飛鳥寺トモ云フ、此寺元ト蘇我馬子ノ創建ニ係リ、法興寺ト稱セシヲ、其後推古天皇ノ御願ニ由リテ官寺ト爲シ、元興寺ト改メシガ、元明天皇都ヲ奈良ニ遷シヽ時、諸寺從テ多ク新都ニ移レリ、然ルニ當寺ハ之ヲ動スコトナクシテ、元正天皇靈龜二年五月、別ニ同名ノ一寺ヲ創シテ、新舊二寺ト爲セ

名稱 所在

リ、而シテ舊寺ハ之ヲ本元興寺ト呼ビシガ、後世殆ド廢替シテ、纔ニ眞言宗ノ一小寺ト爲レリ、

〔伊呂波字類抄〕久諸寺元興寺推古天皇時、號二飛鳥一、〔同〕安諸寺飛○鳥○寺○アスカテラ元興寺是也、但有二二所一、一所推古天皇御願、一所元明天皇御願、〔同〕止諸寺豐○浦○寺○扶桑略記曰、舒明天皇御宇建二塔心柱一、大欽天皇、但馬國封五千戸(五千戸恐五十戸歟)施之、

〔和漢三才圖會〕七十三大和豐○浦○寺○　名二元興寺一　在二大野丘之北一、○高市郡石川精舍及大野丘塔、燒拂之後建二立之一、○中略四門有レ額、　元興寺南額　法滿寺北　飛鳥寺東　法興寺西　元正天皇靈龜二年、移二當寺於奈良一、故此曰二本○元○興○寺○一、又推古天皇、初皇居二于此地一、○中略故有二豐浦寺之名一、

〔和州舊跡幽考〕十六高市郡元興寺付樹葉家　眞神原　苫田
元興寺流記曰、大野岳の北と云々、或抄曰、大野岳の北は、豐浦寺の東佛門也と云々、元興寺は、石川精舍、大野岳の塔を燒はらひし後の建立と見えたり、今見るに形ばかりなる草室に、鞍作鳥のつくられし靈佛、御膝よりうへのみのこり給ひしを、すゑたてまつりき、礎石所々にみえわたりたり、
元興寺、又の名は飛鳥寺、又は法興寺、亦は大樂寺、又は豐浦寺、又は櫻井道場共いへり、御順禮記、釋書、緣起等に見えたり、○中略一炎上は、五十八代光孝天皇、仁和三年十二月晦日也、其後再興ありしかども、衰破して、名のみのこりける、

〔大和志〕十四高市郡古蹟　飛鳥廢寺飛鳥村、一名元興寺、靈龜二年移二寺於平城左京一、今安居院此其遺址、巳上三寺(大官大寺、川原寺、飛鳥寺)上古稱二之三大寺一、

〔大和名所圖會〕五高市郡飛鳥寺飛鳥村にあり、今は密宗にして、鳥形山安居院と號す、舊趾飛鳥村の北田畑の中に、礎石九十ばかりあり、

〔太子傳玉林抄〕四傳云、營二佛殿於宅東一、文或裏書云、蘇我大臣宅東也、逆臣屋○守燒失之後、又成レ寺、今○豐○

浦寺是、(本元興寺ノコトナリ)

傳云、佛殿構立於石川宅、文或裏書云、蘇我大臣宅也、豐浦ヨリ西四十町許在之、其所立堂、今在之云云、

〔太子傳玉林抄 四〕敏達天皇十四年〇中略傳云、春二月、蘇我大臣起塔於大野岳北、文裏書云、扶桑舍利集云、大野岳者、今豐浦寺東御門之處也、今〇此間恐脫本字元興寺是也云々、

〔日本書紀 二十三舒明〕於是大兄王〇山背大兄王、中略、更亦令告群大夫等、〇中略吾曾將訊叔父〇蘇我蝦夷之病、向京而居豐浦寺、

〔續日本紀 三十一光仁〕天皇諱白璧王〇中略嘗龍潛之時、童謠曰、葛城寺乃前在也、豐浦寺乃西在也、於志止度、刀志止度、櫻井爾、白璧之豆久也、好璧之豆久也、於志止度、刀志止度、〇中略蓋天皇登極之徵也、

〔續日本紀 十七聖武〕天平勝寶元年閏五月癸丑〇二十日詔、施〇中略崇福、香山藥師、建興、法華四寺、各絁二百疋、

〇按ズルニ、東大寺要錄二、此時ノ格ヲ載セテ、建興寺ヲ豐浦ニ作ル、

〔催馬樂譜入文 中〕葛城

かづらぎの寺のまへなるや、とよらのにしなるや、抄云、豐等寺は葛城に在寺也、考曰、前といひ、西といへるは、葛城寺は西に在て、東に向ひ、豐浦寺は南に向ひて、其西の方に當りて、榎葉井は在歟、されど葛城寺は、何れを云かしらず、豐浦寺は同じ葛城の高間山の下に在し寺也と云り、或人は豐浦寺は高市郡也、此故に万葉八に、故鄕豐浦寺とよみたり、元明天皇藤原宮より、奈良宮へうつらせ給へる故に、彼集には明日香川邊をさして故鄕といへり、葛城寺は葛上郡なれば、更に同じからずと云へり、猶考べし、已上考說今按に、豐浦寺を高間山の下に在としては、榎葉井といたく阻てかなはず、又葛城寺と云號、凡て物に見えず、彼山に金剛山寺と云と、高天寺と云古寺はあれど、其

創建沿革

稱號はなし、又此寺どもと、かの明日香の豐浦寺とを合せ云としては、其井は豐浦寺の傍に在に、葛城よりは三里も放てかなはず、又此或人はと云りしより以下は、契沖說也、○中略今按に、古歌にかづらきや、とよらの寺とつゞけたるいと多かるを、此說の如くにては、皆ひが事とする也、されどそのほどまでは、傳へたる事ども、少しは殘るべく、又其中には其跡をたづねてとあるもあれば、然か誤るべきにもあらじ、こはやうある事なるべし、先づ豐浦寺の事、行嚢抄を考るに云、元興寺は飛鳥村西南、久米寺へ行方ニ在豐等村ノ内也、昔ハ四方ニ四門ヲ建テ、四ノ額ヲ掛タリ、扁曰、東門ニハ飛○鳥○寺○、西門ニハ葛○城○寺○、一本ニハ、法興寺ト誤レリ、南門ニハ元○興○寺○、北門ニハ法○滿○寺○ト云、境內方廿二町餘、最坊舍數十字有シト也、今ハ僅ニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈ノ釋迦佛ノ銅像一體、昔ノ餘波ニ殘レリ云云、豐浦寺云是也と見え、又大和巡路記に、此寺の記錄として引て、右の趣に云り、然れば此寺、東門は飛鳥に向ひたる故に、飛鳥寺といひ、西門は葛城に向ひたる故に、葛城寺といひしなるべし、推古御時、葛城邊にいまだ寺あらざりければ、彼四つ五つの寺號の中にも、豐浦は本の大宮の號、飛鳥、葛城は地名なりける故に、かの四天王寺を難波寺といひしやうに、專ら此二つを以て呼しならんかし、然るときは、別に葛城寺と云が有しにはあらず、今此四句は、彼の榎葉井の在方角を、此寺の前通にして、少し西の方にあるよしを、詞をかへて云るにて、二ケ寺のあはひと云にはあらず、彼やすみしゝあがおほきみ、高ひかる日の皇子といへる古語の、二人を指せるにあらざると同例にて、長歌などには、此類常多かるに准へて心得べし、則葛城寺の前なるや、其同じ豐浦の寺の西なるやといふ意也、又其えのば井も、葛城寺のえのばゐといひならへるまゝに、無名抄の如くにはかけるなれば、かれもひが事にはあらじ、

〔伊呂波字類抄 久諸寺〕元興寺 推古天皇陵號二飛鳥一有二本新○兩○寺一云々、推古天皇御願、建二立大和國○武○智郡一、號二本○元○興○寺一、元明天皇御願建二立於奈良一、號二新○元○興○寺一云々、共號二飛鳥寺一、

〔同 保諸寺〕法興寺 崇峻天皇元年建之 日本紀云、敏達天皇御宇十三年甲辰九月、自二百濟國一、彌勒石像一軀送之、今在二元興寺東堂一、

扶桑略曰、推古天皇御宇元年正月、蘇我大臣馬子宿禰、依合戰願、於飛鳥地、法興寺立之、同御宇四年冬十一月造畢、供養、今元興寺是也、本元興寺事歟、中宮寺是也、

〔塵囊抄十三〕元興寺、崇峻天皇元年戊申十月建立有云共、其時ハ法興寺ト云、是蘇我馬子大臣私寺也、八年後、推古天皇四年丙辰十一月改造元興寺ト號、以被官寺、其後高麗沙門惠慈、百濟僧惠聰ヲ以テ、被令居住、又其ヨリ百十五年ヲ經テ、四十四代、元正天皇卽位、靈龜元年乙卯此寺ヲ左京ニ移サル今ノ元興寺是也、

〔日本書紀二十一崇峻〕二年〇用明二年七月、蘇我馬子宿禰大臣、勸諸皇子、與群臣、謀滅物部守屋大連、〇中略大連昇衣揩朴枝間、臨射如雨、其軍强盛、塡家溢野、皇子等軍、與群臣衆、怯弱恐怖、三廻却還、〇中略蘇我馬子大臣、又發誓言、凡諸天王大神王等、助衞於我、使獲利益、願當奉爲諸天與大神王、起立寺塔、流通三寶、誓已、嚴種々兵、而進討伐、爰有迹見首赤檮、射墜大連於枝下、而誅大連幷其子等、由是、大連之軍、忽然自敗、〇中略平亂之後、〇中略蘇我大臣亦依本願、於飛鳥地起法興寺、　元年、壞飛鳥衣縫造祖、樹葉之家、始作法興寺、此地名飛鳥眞神原、亦名飛鳥苫田、

〔日本書紀二十二推古〕元年正月丙辰、以佛舍利置于法興寺刹柱礎中、　丁巳、建刹柱、

〔扶桑略記三推古〕元年正月、蘇我大臣馬子宿禰依合戰願、於飛鳥地建法興寺、立刹柱日、島大臣〇馬子幷百餘人、皆著百濟服、觀者悉悅、以佛舍利籠置刹柱礎中、

〔日本書紀二十二推古〕四年十一月、法興寺造竟、則以大臣男善德臣拜寺司、是日、惠慈惠聰、二僧始住於法興寺、　十四年四月壬辰、銅繡丈六佛像並造竟、是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂、時佛像高於金堂戶、以不得納堂、於是諸工人等議曰、破堂戶而納之、然鞍作鳥之秀工、以不壞戶得入堂、卽日設齋、於是會集人衆不可勝數、

〔今昔物語十一〕推古天皇造本元興寺語第廿二

今昔、推古天皇ト申ス女帝ノ御代ニ、此ノ朝ニ、佛法盛ニ發テ、堂塔ヲ造ル人世ニ多カリ、天皇モ、銅

ヲ以テ、丈六ノ釋迦ノ像ヲ百濟國ヨリ來レル□□ト云フ人ヲ以テ、令鑄給テ、飛鳥ノ郷ニ堂ヲ起テ、此ノ釋迦佛ヲ令安置給ハントシテ、先ヅ堂ヲ被造ル間、堂可起所ニ當ニ生ケム世モ不知ヌ古キ大ナル槻有リ、疾ク切リ去ケテ、堂ノ壇ヲ可築シト宣旨有テ、行事官立テ、是ヲ行フ間、行事ト木□□□□□□□□曳出ヨナド喤テ、皆人逃テ去ヌ、其後程ヲ□□□□□可伐キ也ト被定テ、亦他ノ人ヲ以テ令伐ルニ、始モ斧鐇ヲ二三度許打立ル程ニ、死シカバ、亦此ノ度惶々寄テ令伐ル程ニ、亦前ノ如ク俄ニ死ヌ、○中略其時ニ或ル僧ノ思ハク、何ナレバ此木ヲ伐ニハ、人ハ死ルト、構テ此事知ラバヤト思、雨ノ際无ク降ル夜、僧自ラ蓑笠ヲ著テ、道行ク人ノ木蔭ニ雨隱レシタル樣ニ、木ノ本ニ竊ニ拔足ニ寄テ、木ノ空ノ傍ニ竊ニ居ヌ、夜半ニ成ル程ニ、木ノ空ノ上ノ方ニ、多ノ人ノ音聞ユ、聞ケバ、云ナル樣、カクテ度々伐リニ寄來ル者ヲ、不令伐シテ、皆蹴殺シツ、然リトテ遂ニキラヌヤウ有ラジト云ヘバ、亦異音シテ、然リトモ、每度ニコソ蹴殺サメ、世ニ命不惜ヌ者无ケレバ、寄來テ伐ラム者不有ト云ヲ、異音シテ、若麻苧ノ注連ヲ引廻ラシテ、中臣祓ヲ讀デ、杣立テノ人ヲ以テ繩墨ヲ懸テ伐ラム時ゾ、我等術可盡キト云フ、亦異音共シテ、現ニ然ル事也ト云フ、亦異音共歎タル音共ニテ、云合ル程ニ、鳥ナキヌレバ、音モセズ成ヌ、僧賢キ事ヲ聞ツト思テ、拔足ニ出ヌ、其後、此ノ由ヲ奏スレバ、公感ジ喜給テ、其僧ノ申ス如クニ、麻苧ノ注連ヲ木ノ本ニ引廻テ木ノ本ニ米散シ、幣奉テ、中臣祓ヲ令讀テ、杣立ノ者共ヲ召テ、繩墨ヲ懸テ令伐ルニ、一人モ死ヌル者无シ、○中略其後堂ヲ造畢ヌ、供養ノ日、曉ニ佛ヲ渡シ奉ルニ、佛ハ大キニ、堂ノ南ノ戸ハ狹シ、今一二寸廣カラムニ壇佛可入給キ樣无シ、是ハ、今三尺計廣サモ高サモ佛ハ過給ヘルハ可爲キ樣无シ、扉ノ壁ヲ壞テコソハ入レ奉ラメ、何カセムト、□□□□□□□□□□□□、□□□喤リ騷ギ合タル事无限シ、然ル間、年八十□□□□□□□□□突タルガ出來テ云ク、イデ〱主達皆去ケ、只翁ガ申サムニ隨テ可爲ト云ヲ、佛ノオトガヒ引廻カシ奉ル樣ニシテ、御頭ノ方ヲ前ニシテ、糸安ラカニ引

寺格　寺領　用途　行幸　雜載

入テ奉リツ、〇中略供養ノ後ハ、此寺ノ事ヲ、聖德太子承テ行ヒケレバ、佛法盛ニシテ、愚ナル事无シ、本ノ元興寺ト云フ是也、其佛于今在マス、

〔三代實錄 四十二 陽成〕元慶六年八月二十三日壬戌、太政官下符大和國司、偁、散位從五位下宗岳朝臣木村等言、建興寺者、是先祖大臣宗我稻目宿禰之所建也、本緣記文、具存灼然、望請、宗岳氏撿領、而彼寺別當傳燈大法師位義濟確執曰、太政官仁壽四年九月十三日下當國符偁、彼寺、推古天皇之舊宮也、元號豐浦、故爲寺名、凡厥緣起具存前志、佛法東流、最始於此、其田園奴婢施入之由、勅誓堅懇、銘之金盤、頃年、堂龕頹破、尊像暴露、綱維不勤、勾當有懈、磬臺鈴臺、其久斷眞演之聲、佛物僧物、還致俗用之訟、習而不悛、恐乖御願、宜令長官勾當、不得獨任綱維以致道場之損、立爲恒例、又貞觀三年九月二十五日下治部省符偁、僧綱申牒、彼寺本自無有俗別當、而今特置之、寺中諸事、觸途爲損、請早從停止、處分依請者、宗我稻目宿禰以家爲佛殿、天皇賜其代地、遂相移易、施入皇宮、稻目宿禰奉詔造塔、然則建興寺之建、出自御願、不可爲宗岳氏寺明矣、官商量、宜停氏人撿領之望、不得重致寺家之愁、

〔日本書紀 二十九 天武〕九年四月、是月、勅凡諸寺者、自今以後、除爲國大寺二三、以外、官司莫治、〇中略且以爲、飛鳥寺不可關于司治、然元爲大寺、而官恒治、復嘗有功、是以猶入官治之例、

〔新抄格勅符抄〕豐浦寺五十戸 天平寶字七年施常陸國、

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年五月甲寅、勅充油一斛正稅三百目於故京本元興寺六月十五日万花會、十月十五日万燈會、以此兩日、每年修之立爲恒例、

〔日本書紀 二十九 天武〕六年八月乙巳、大設齋於飛鳥寺、以讀一切經、便天皇御寺南門而禮三寶、　十四年五月庚戌、天皇幸于飛鳥寺、以珍寶奉於佛、而禮敬、

〔日本書紀 二十六 齊明〕三年七月辛丑、作須彌山像於飛鳥寺西、且設盂蘭盆會、

〔日本書紀 二十七 天智〕十年九月、天皇寢疾不豫、〇中略十月、天皇遣使奉袈裟、金鉢、象牙、沈水香、栴檀香、及

名稱所在

諸珍財於法興寺佛、

〔大織冠傳〕大臣性崇三寶、欽尚四弘、每年十月、莊嚴法筵、仰維摩之景行、說不二之妙理、亦割取家財、入元興寺、儲設五宗學問之分、由是賢僧不絕、聖道稍隆、蓋斯之徵哉、

〔續日本紀一文武〕四年三月己未、道照和尚物化、○中略初孝德天皇白雉四年、隨使入唐、○中略始習禪定、所悟稍多、○中略還歸本朝、於元興寺東南隅、別建禪院而住焉、于時天下行業之徒、從和尚學禪焉、

〔續日本紀三文武〕大寶三年正月丁卯、奉為太上天皇、設齋于大安、藥師、元興、弘福四寺、

龍蓋寺

龍蓋寺ハ、一ニ岡本寺トモ云ヒ、又俗ニ岡寺トモ云ヘリ、大和國高市郡ニ在リ、天智天皇ノ御願、義淵僧正ノ開基ナリ、今ハ新義眞言宗ニ屬シ、長谷寺ノ末寺タリ、

〔伊呂波字類抄利諸寺〕龍蓋寺俗云岡寺高野天皇御願、〔同諸寺〕岡寺扶桑略曰、大炊天皇之時、越前國封五十戸施入之、法隆寺緣起云、推古天皇御宇、於法隆寺、聖德太子、被講三部大乘之故、天皇以播磨國佐西地五十万代奉御布施、太子三分、施入伊河留我大寺、中宮尼寺ト、片岡僧寺ト云云、是若此寺事歟、可尋、

〔和州舊跡幽考十五高市郡〕龍蓋寺　寺領二十石

東光山龍蓋寺眞珠院は、俗に岡本寺といふ、拾芥抄舒明天皇の皇居、岡本宮の地なれば、かくぞいふなめる、天智天皇の御願、義淵僧正の開基なり、

〔和漢三才圖會七十三大和〕東光山龍蓋寺俗云岡寺　寺領二十石

本尊　如意輪觀音弓削道鏡作之　開基　義淵僧正

天智天皇御願、此地本名遊岡、因舒明天皇宮都岡本宮、稱岡本寺、略曰岡寺、西國巡禮第七番○註略

飛鳥川ゆきゝの岡の秋萩はけふ降雨に散りか過なん　丹比

創建

〔今昔物語十一〕義淵僧正始造二龍蓋寺一語第卅八

今昔、天智天皇ノ御代ニ義淵僧正ト云フ人在マシケリ、俗姓ハ阿刀ノ氏、是化生ノ人也、初メ其父母大和國高市ノ郡ノ天津守ノ郷ニ住テ年來ヲ經ルニ、子无キニ依テ其事ヲ歎テ、年來觀音ニ祈リ申ス間ニ、夜ル聞ケバ、後ノ方ニ兒ノ呼ク音有リ、是ヲ怪ムデ出テ見ルニ、柴ノ垣ノ上ニ、白帖ニ被裹タル者有リ、香薰ジテ馥シキ事无限シ、夫妻是ヲ見テ心ニ恐ルト云ヘドモ、取リ下シテ見レバ、端正美麗ナル男子、白帖ノ中ニ有リ、今歳ノ程也、其時ニ夫妻共ニ思ハク、是ハ我等ガ子ヲ願テ年來觀音ニ祈リ申スニ依テ給ヘル也ト、喜テ取テ家ノ内ニ入ルニ、狭キ家ノ内ニ馥キ香満タリ、是ヲ養フニ程无勢長ジヌ、天皇此事ヲ聞給テ召取テ、養テ皇子トセリ、然ルニ此子心ニ智リ有リ、法ノ道ヲ悟レリ、遂ニ頭ヲ剃テ、法師ト成テ興福寺ノ僧トシテ、大寶三年ト云フ年、僧正ニ成ヌ、其家ノ所ヲバ伽藍ヲ建テ、如意輪觀音ヲ安置シ奉レリ、今ノ龍蓋寺ト云フ是也、靈驗新タニシテ、諸ノ人首ヲ擧テ詣テ願求ムル所ヲ祈請フニ、必ズ其驗シ有リトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔元亨釋書二慧解〕釋義淵、世姓阿氏、和州高市郡人、其父無レ子、祈二觀自在像一、一夕聞二兒呱一、出見レ之、柴籬上有二一包一、香氣芬郁、開而見レ之小兒也、父母喜而收養、不レ數レ日而長、天智帝聞レ之、同二皇子一鞠二育崗本宮一、後出家、從二智鳳一學二唯識一、又入唐稟二智周法師相宗之訣一、周者慈恩基公之上首也、歸朝盛倡二相宗一、受二其業一者、行基、道慈、玄昉、良辨、宣敎、隆尊等也、又勤二營建一龍蓋寺、龍門寺、龍福寺、皆淵之構造也、

本尊

〔和州舊跡幽考十五高市郡〕龍蓋寺〇中略

本尊は、如意輪觀音菩薩なり、初は一搩手半の六臂の小像を、道鏡禪師の造立たりしが、其後弘法大師、三國の土をもて、丈六二臂の像をつくり、かの小佛を、佛胸にこめられしとなり、御堂は、孝謙天皇の勅願と縁起にあり、然ども拾芥抄曰、丈六の土佛は、弓削法皇の造立にして、それより炎上なしと見えたり、又年のやく難を轉じ給ふ菩薩のよし、水かゞみに見えたり、

名稱所在	創建堂塔

〔堯恕法親王記十六〕延寶六年正月廿六日　和州岡寺觀音(二臂如意輪、御長一磔手半、鑄像、入六角之厨子、)像ハ孝謙天皇御守本尊也、其後嵯峨天皇之御宇、空海造丈六土佛、以件之鑄像奉籠腹心云云、此像今日岡寺之像某持參一門之里房、仍而奉拜之、誠不思議之感應也、

久米寺

久米寺ハ、大和國高市郡久米村ニ在リ、來目皇子ノ建立ト稱ス、來目皇子ハ用明天皇ノ皇子ナリ、又久米仙人ノ創建トモ稱ス、久米仙人ノ事ハ、方技部仙術篇ニ見エタリ、

〔和漢三才圖會七十三大和〕久米寺　在畝傍山之南七八町

本尊　藥師如來　號釋迦山東塔院

聖德太子弟、久患眼病至盲、太子爲有祈願、不日平愈、因改名來目皇子、建當寺云、或云、久米仙人建立、　多寶塔高八丈　養老年中、善無畏三藏來朝、住于當寺、二年立此塔、

〔全國各宗本山明細帳〕眞言宗　中本寺

久米寺　同國(大和國)高市郡久米村

〔和州舊跡幽考十六高市郡〕久米寺　畝傍山より七八町南にあり

釋迦山東塔院久米寺は、久米仙人建立といへり、本尊藥師如來は來目皇子の御願なり、此皇子は聖德太子の御弟におはします、

〔和州久米寺流記〕當寺者、來目王子之建立、推古天皇御願也、(王子者、豐日天皇之御子、上宮太子之御弟也、)此王子爲病黏而兩眼共盲矣、爰兄聖德太子、勸而世醫療方雖盡其術、終以不叶、于今者須殉出世之妙藥、東方有世尊、號醫王善逝、彼伏發心發願、衆病悉除之利益也、深仰彼悲願、宜呈其金容云々、仍王子盡財抽誠、而和

州高市郡、擇炎山甲勝之地、革治鑄丈六金銅醫王之金容、幷脇侍日光月光、二大菩薩之靈像於焉、王子引手於侍臣、對面於佛像、一禮僅記、兩眼立開畢、肆世擧人稱、而始號來眼王子、因建五間四面之梵字、即安一佛二尊之聖容、仍復寺同稱來眼寺云々、

金堂（五間四面二蓋）講堂（七間四面）鐘樓經藏、大門、中門等、皆推古王子之建立也、推古天皇即位十九年辛未夏四月一日、天皇臨幸于斯寺、件日仙蹕以前卯剋、奇光自東方差分、光照王宮、而復納佛閣畢、其明旦臨幸、上宮太子爲侍臣而同詣、于時三尊靈像、放光而照曜无量衆、尊一人三台皆低頭叉手、而稱之日本生身瑠璃光佛、以年號立定光云々、

天皇益凝叡信、勅入千項万戶、重建東西兩塔、被締僧院二十間畢、

義淵僧正（高市郡人法相）勤操僧正（同郡三論）本皆住于斯寺矣、

一東塔院大塔大日經安置事

此塔者、多寶大塔、高八丈也、遷南天鐵塔之半分、以善无畏三藏基立之、（日本最初之多寶大塔也）件三藏者、解飯王五十二代玄孫、中印度摩伽陀國之大王也、殊厭十善之帝位、深欣八葉之華王、爰以十九出家之後、巡禮五十餘箇國、而殉毘盧舍那經供養法之卷終、則於金粟王之塔下感得之、幷遇于達磨掬多三藏、傳大悲胎藏大曼荼羅闕、而開元四年丙辰、從印度來于震旦、玄宗皇帝、敬爲國師、然而依東土邊州利益之願、齎持大日經、獨入焉野馬臺之國、初著于東西院之阿（後弘法大師、建南院之地也、）三藏普踏廻四瀛八紘焉、求七軸安置之場、大日本國高市郡王舍側、此地最足稱美、仍廬東院之岫、而三箇年七百二十日際、起立一寶龕、而號之東塔院、即以三粒之佛舍利、納寶石之底、又以七軸之大日經、安刹柱之下、即秘藏記云、馱都是釋尊之遺身經王、又舍那之全體也、然而少國片域、大機未熟、仍留此法於斯地、正待機所待時也、來葉必興法利生之菩薩來、而可恢此敎於世、記而歸震旦國畢、其後弘法大師、寶龜五年甲寅、光仁帝御宇、誕生讚州多度郡屛風浦佐伯氏、（中略）佛前發誓願曰、（中略）唯願三世十方諸佛、示我不二、一心

祈感、夢有人告曰、於此有經、名字大毘盧舍那經、是乃所要也、卽生隨喜、尋求件經王、於大日本國高市郡久米道場東塔下得此經云々、又別記曰、弘法大師、依靈夢之告、始卽來此地、以求東院大塔柱下、歷然而得大日經矣、大師擎經、卽奏于桓武天皇、叡感而頂戴之、加以三公九卿、皆去席而禮拜、遂則延曆二十三年五月十二日、被勅入唐、卽遇青龍寺和尙惠果、以傳受此經、幷請來二百十六部金剛乘敎、而大同二年歸朝、後同年仲冬八日、率龍象於鴈塔手自講大日經疏之時、一万餘之有勢神現壜顯形而聽聞、衞護々々龍象者、實惠、眞濟、眞雅、眞昭、堅惠、眞曉、眞然等也、　已上流記文

已下古今傳記

一久米仙人經行事

天平年中、和州吉野郡龍門山嶇、有三人之神仙、所謂大伴仙、安曇仙、毛堅仙也、此毛堅仙、常自龍門嶽、飛通葛木峯、於其途中久米河、有洗布之下女、仙見其股、色愛心忽發、通力立滅、落于大地畢、終則以其嫗爲妻居寺外院、但晝雖爲夫婦之儀、夜共修座禪之行云々、于時聖武皇帝、依造東大寺之御願、被召國中人夫之內、仙被召其列而參洛、奉行辨見人夫之中、有異相之優婆塞、卽十一面觀音之聖容如幻而現頂上、奉行辨警蹕而問曰、汝何人乎、答曰、我是久米之仙人也、奉行哈曰、汝被祿惡緣、被催人夫之之役、今伴于善緣、奉助天皇御願、卽有南山材木、欲運之、多費國力、汝現通力須飛之、仙堅雖辭之、其責頻之間、仙向南方結鉤招之印、(或說云、暫塞目爲觀念云々、) 其時材木飛來如飛鳥云々、其後忽然而失畢、在室之嫗、戀仙而死、經七箇日之處、仙歸來呪而去、死有限、別離亦爾、我爲利生、汝爲夫婦、再得蘇生、請一佛土云云、忽蘇生而夫婦共指西方飛去畢、其仙室之跡在今云々、(世傳而云、仙人者十一面觀音、嫗者大勢至、菩薩也云々、)

一代々天皇臨幸事

推古天皇如先、宇多天皇寬平七年十月八日仙蹕、菅相公御參詣、幷良香素性法師同詣云々、醍醐天皇昌泰元年十月二十三日臨幸、菅丞相、都良香、素性法師、參詣如先、但丞相耳於山有遊行云々、

〔扶桑略記 醍醐二十三〕昌泰四年八月廿五日、古老相傳、本朝往年、有三人仙、飛龍門寺、所謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、大伴仙草庵、有基無舍、餘兩仙室、于今猶存、但久米仙飛後更落、其造精舍、在大和國高市郡、奉鑄丈六金銅藥師佛像、幷日光月光像、堂宇皆亡、佛像猶坐曠野之中、久米寺是也、

〔今昔物語 十一〕久米仙人始造久米寺語第二十四

今昔、大和國吉野ノ郡龍門寺ト云寺有リ、寺ニ二ノ人籠リ居テ、仙ノ法ヲ行ヒケリ、其仙人ノ名ヲバ一人ヲバアヅミト云フ、一人ヲバ久米ト云フ、然ルニアヅミハ前ニ行ヒ得テ、既ニ仙ニ成テ飛テ空ニ昇ニケリ、後ニ久米モ既ニ仙ニ成テ、空ニ昇テ飛テ渡ル間、吉野河ノ邊ニ、若キ女衣ヲ洗ギ立テリ、衣ヲ洗フトテ女ノ肺脛マデ衣ヲ掻上タルニ、肺ノ白カリケルヲ見テ、久米心穢レテ、其女ノ前ニ落ヌ、其後其女ヲ妻トシテ有リ、〇中略然ル間久米ノ仙、其女ト夫妻トシテ有ル間、天皇其國ノ高市ノ郡ニ都ヲ造リ給フニ、國ノ内ニ夫ヲ催シテ其役トス、然ルニ久米其夫ニ被催出ヌ、〇中略行事官等是ヲ聞テ、然テ止事无カリケル者ニコソ有ナレ、本仙ノ法ヲ行テ、既ニ仙人ニ成ニケル者也、其行ノ德定テ不失給、然レバ此ノ材木多ク自ラ持運バムヨリハ、仙ノ力ヲ以テ空ヨリ令飛メヨカシト、戯レノ言ニ云ヒ合ヘルヲ、久米聞テ云ク、我レ仙ノ法ヲ忘レテ年來ニ成ヌ、今ハ只人ニテ侍ル身也、然計ノ靈驗ヲ不可施ト云テ、心ノ内ニ思ハク、我レ仙ノ法ヲ行ヒ得タリキト云ヘドモ、凡夫ノ愛欲ニ依テ、女人ニ心ヲ穢シテ、仙人ニ成ル事コソ无カラメ、年來行ヒタル法也、本尊何カ助ケ給フ事无カラムト思テ、行事官等ニ向テ云ク、然ラバ若ヤト祈リ試ムト、行事官是ヲ聞テ、嗚呼ノ事ヲモ云フ奴カナト乍思、極テ貴カリナムト答フ、其後久米一ノ靜ナル道場ニ籠リ居テ、身心清淨ニシテ食ヲ斷テ、七日七夜不斷ニ禮拜恭敬シテ、心ヲ至シテ此事ヲ祈ル、而ル間七日既ニ過ヌ、行事官等久米ガ不見ル事ヲ且ハ咲ヒ且ハ疑フ、然ルニ八日ト云フ朝ニ、俄ニ空陰リ、暗夜ノ如ク也、雷鳴リ雨降テ露物不見エ、是ヲ怪ビ思フ間、暫計有テ雷止リ空晴ヌ、其時ニ見レバ、大中

小ノ若干ノ材木ヲ併テ南ノ山邊ナル杣ヨリ、空ヲ飛テ都テ被造ル所ニ來ニケリ、其時ニ多ノ行事官ノ輩、敬テ貴ビテ、久米ヲ拜ス、其後此事ヲ天皇ニ奏ス、天皇モ是ヲ聞キ給テ貴ビ敬ヒテ、忽ニ免田三十町ヲ以テ久米ニ施シ給ヒツ、久米喜デ此ノ田ヲ以テ、其郡ニ一ノ伽藍ヲ建タリ、久米寺ト云フ是也、其後高野ノ大師、其寺ニ丈六ノ藥師ノ三尊ヲ銅ヲ以テ鑄居エ奉リ給ヘリ、大師其寺ニシテ大日經ヲ見付テ、其レヲ本トシテ、速疾ニ佛ニ可成キ敎也トテ唐ヘ眞言習ヒニ渡リ給ケル也、然レバ止事无キ寺也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

壺坂寺

名稱所在

壺坂寺ハ、一ニ南法華寺トモ稱ス、大和國高市郡淸水谷村ニ在リ、宗派ハ法相宗ニ屬ス、

〔拾芥抄 下本 諸寺〕法華寺 又號壺坂寺、千手、南都道基上人建立之、

〔和漢三才圖會 七十三 大和〕壺坂寺 又名南法華寺　在土佐町之巽、　寺領四十五石六斗

本尊　千手觀音 道基上人作之　西國順禮第六番

開基　元興寺海辨僧正

鎭守一座　龍藏權現　祭吉野川赤根淵龍神

創建沿革

〔帝王編年記 十 文武〕大寶三年、今年佐伯姬足子入道尼名善心、造高市郡南法華寺、字壺坂寺是也

〔伽藍開基記 三 和州〕壺坂寺

和州高市郡土佐街上、距東南一里許、有觀世音靈刹、號壺坂寺、或曰南法華寺、本殿安千手大悲像、乃道基上人所開創也、或曰元興寺海辨僧正開基、又曰、文武帝大寶三年佐伯姬足子、發心薙染名善心尼、因建此寺、不知孰是、其後五十四代仁明天皇承和十四年、擧爲官寺、設龍藏權現祠、爲鎭守神、此寺

寺格

東去五百歩、有高香山、其中有五百石羅漢、並兩部曼荼羅、亦可謂希有矣、

〔廣大和名勝志高市郡十七〕南法華寺　寺領四十五石六斗

在清水谷村東壺坂山、延喜式云、壺坂寺料三千束卽此、有八稜堂、禮堂、三層浮圖、鐘樓、伽藍、神祠、力士門、僧房十二宇、寺記云、大寶三年辨基大德建、左大臣長屋王施入燃燈田、元慶四年十一月遣使於壺坂、燃燈嚫綿以修功德、寺前有石燈壚、勒曰、大永七年立、又有僧覺憲冢、

〔續日本後紀仁明十七〕承和十四年十二月丙辰、勅、大和國〇中略高市郡壺坂山寺、元來靈驗之蘭若也、宜付所由綸爲定額、永以官長令撿挍也、

用途

〔三代實錄光孝四十八〕仁和元年十二月四日甲寅、先是大外記大藏朝臣善行、修解申請偁、大和國靈驗山寺、有長谷壺坂兩精舍、並有燈分稻、付國司出擧、但至于島山寺、凡其靈驗、彼兩寺之亞也、而未有燈分、照曉夜者、星月而已、望請以私稻四百束付之國宰、加擧正稅、送利稻於寺家、爲長明燈之資、至是詔許之、

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻

大和國正稅公廨各廿万束、〇中略壺坂寺料三千束、

雜載

〔玉勝間六〕さぬきの國の山の谷なるあやしき物

大和國つぼ坂寺のおくなる山に、五百羅漢のかたとて、石に數百の人のかたを彫たるあり、或人のいへるは、これを俗に羅漢としもいふは、あらぬこと也、よく見ればみな上つ代の人の形也、神の御わざと見えたりといへり、おのれいまだ見ざれども、まことにさぞあらんとぞおぼゆる、すべてふるき神の御像、またさらぬをも、世にはみなおしなべて佛のかたと思へるおほし、又物の形など、石にゑりたるが、あやしく何ともわきまへがたきなど、よに多かるを見れば、上つ代には、くさぐ〳〵石に物ゑることの多かりし也、神代のしわざをも、今のあたり見るべき物は、石のみ

橘寺

名稱　所在

橘寺ハ、一ニ菩提寺ト云ヒ、又志度道場トモ稱ス、大和國高市郡ニ在リ、推古天皇ノ十四年ニ、聖德太子ノ建立スル所ナリ、

創建

〔伊呂波字類抄　太諸寺〕橘寺　推古天皇十四年丙寅六月十五日、太子講二勝鬘經一、竟夜蓮花雨、其所レ立堂、則此寺也、

〔拾芥抄　下本諸寺〕菩。提。寺。又號二橘寺、志度道。嶋、上四海人立レ之、

〔和漢三才圖會　七十三大和〕橘寺　又名菩提寺　號二佛。頂。山。上。宮。院。一、在二後飛鳥岡本寺之西五町許一、〇中略良方十町許有二後苑一、太子幼稚與二數輩童子一比二論辨一之地也、今呼曰二小原一、

〔和州舊跡幽考　十五高市郡〕橘寺

玉林抄云、高市郡と云々、後飛鳥岡本宮より西五町ばかり、佛頭山上宮院菩提寺は、又橘寺ともいふ、平氏傳に、推古天皇十四年七月、聖德太子をまねかせ給て、勝鬘經を講せさせ給ひしに、三日を經て、講をはりけり、日本紀其講會の儀は、聖德太子、麈尾をとり師子座にのぼり給ひしは、たゞ出家のごとくにぞ侍る、もろ〳〵の名僧大德、其妙義をたづねたてまつれば、こたへさせ給ふに、いとあきらかなり、講をはるの夜、蓮花ふりしきて、地にみちたり、そのはないとおほきにして、二三尺ありけりとかや、これよりして、皇居を施し、寺塔を立られたり、今の橘樹寺これなり、平氏傳、水鏡、ふる所の瑞花は曼陀羅花白色のはなゝり、扶桑紀そのふりつみし所は、金堂と講堂の間にぞ侍る、鎭守明神は、推古天皇也、社は北にむかへり、玉林抄〇中略再興は、おほくの年序かさなりて、をのづから形ばかりにのこり侍りけるが、頃年今春、八郎太夫

用途　雜載　名稱所在

再興せしなり、

〔帝王編年記 八推古〕三年四月、土佐國南海毎夜有光物、其聲如雷、經三十箇日、寄淡路國南岸、其勢一圍、長八尺、其香無比類、〈○中略〉依崇佛法釋梵威德天之浮送也、南天竺南海岸、稱栴檀香樹是也、帝取之造觀音像、時々放光、令太子〈○厩戸〉講勝鬘經、二三尺蓮華降其所、仍建立堂、今橘寺〈大和國高市郡〉是也、

〔扶桑略記 四推古〕十四年七月、天皇詔皇太子云、宜於朕前講勝鬘經、太子乃操塵尾登師子座、三日講畢、其儀如僧、講演竟夜、蓮華雨零、花長可二三尺、而溢方三四丈之地、天王覽之、即於其地誓起堂宇、今橘寺也、

〔類聚國史 百八十二佛道〕天長四年正月丁卯、勅以在大和國高市郡、贈皇后墾田十町限御世施入橘寺春秋悔過料、

〔日本書紀 二十九天武〕九年四月乙卯、橘寺尼房失火、以焚十房、

〔類聚國史 百八十二佛道〕延暦十四年四月丁巳、大和國稻二千束、施入菩提寺、以遭火災也、

石川精舍

石川精舍ハ、敏達天皇ノ十三年ニ、大臣蘇我馬子、石川ノ自宅ヲ捨テヽ佛殿ヲ修シ、百濟ヨリ貢セシ彌勒ノ石像ヲ安置セシニ始マル、今廢寺ニシテ、舊地ハ大和國高市郡石川村ニ在リ、

〔大和志 十四高市郡〕古蹟　石川廢精舍〈石川村古址、今有本明寺及石浮屠、高丈許、敏達天皇十三年秋九月、百濟貢彌勒石像、蘇我馬子宿禰於石川宅營建精舍、佛法之興、此爲始也、〉

〔和州舊跡幽考 十六高市郡〕石川精舍

玉林抄云、豐浦より西四十町ばかり、蘇我大臣の領知の内にして、かの家の東なりと云々、今見る

創建

に石川は西に、豐浦は東にならび、なを東につゞきて、元興寺の跡に草室有、

〔日本書紀 二十敏達〕十三年九月、從百濟來鹿深臣、(闕名字)有彌勒石像一軀、佐伯連(闕名字)有佛像一軀、是歲蘇我馬子宿禰、請其佛像二軀、乃遣鞍部村主司馬達等、池邊直氷田使於四方、訪覓修行者、於是唯於播磨國、得僧還俗者、名高麗惠便、大臣乃以爲師、令度司馬達等女島、曰善信尼、(年十一歲)又度善信尼弟子二人、其一漢人夜菩之女豐女、名曰禪藏尼、其二錦織壺之女石女、名曰惠善尼、(壺此云都符)馬子獨依佛法崇敬三尼、乃以三尼付氷田直與達等、令供衣食、經營佛殿於宅東方、安置彌勒石像、屈請三尼、大會設齋、此時達等得佛舍利於齋食上、以舍利獻於馬子宿禰、馬子宿禰試以舍利置鐵質中、振鐵鎚打、其質與鎚悉被摧壞、而舍利不可摧毀、又投舍利於水、舍利隨心所願浮沈於水、由是馬子宿禰、池邊氷田、司馬達等、保信佛法、修行不懈、馬子宿禰亦於石川宅修治佛殿、佛法之初自茲而作、

川原寺

名稱　所在　創建

川原寺ハ、一ニ弘福寺ト云フ、齊明天皇元年ノ建立ニシテ勅願寺タリ、淳和天皇ノ弘仁九年、此寺ヲ僧空海ニ賜フ、空海乃チ其東南院ニ於テ、盛ニ密乘ヲ修セリト云フ、今廢寺ニシテ、舊地ハ大和國高市郡飛鳥河原ニ在リ、

〔伊呂波字類抄 加諸寺〕川原寺(齊明天皇御宇造之、見扶桑略)

〔和州舊跡幽考 十五高市郡〕川原寺

橘寺の二町ばかり北、むかしの礎石あり、草室一宇古佛の二天、ならびに十二天の像あり、

川原寺亦は弘福寺ともいふ、人皇卅六代、皇極天皇重祚ましく〳〵て、齊明天皇と申奉り、卅八代にぞあたらせ給ひける、此御宇元年飛鳥の川原の宮にうつりおはせしより、川原寺を御建立あり、

寺領
雜載

名稱
所在

釋書

〔伽藍開基記三和州〕川原寺齊明帝元年創、至元祿二年一千三十四年矣、

高市郡飛鳥川原有梵刹、號川原寺、或曰弘福寺、神武三十八代齊明天皇元年、移在飛鳥之川原宮、以勅創之、因以爲名、後四十主天武天皇幸寺中、賜莊田若干、至五十三代淳和帝弘仁九年、以此寺賜弘法大師、大師於東南院、盛唱密乘、又定慧和尙、住西南院、大振其法云、

〔新抄格勅符抄〕川原寺五百戶癸酉年施常陸百戶、上野一百五十戶、武藏百五十戶、紀伊百戶、

〔日本書紀二十五孝德〕白雉四年六月、天皇聞旻法師命終、而遣使弔、幷多送贈、皇祖母尊、及皇太子等、皆遣使弔旻法師喪、遂爲法師、命畫工狛堅部子麻呂鯽魚戶直等、多造佛菩薩像、安置於川原寺、或本云、在山田寺、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年九月辛丑、親王以下逮于諸臣、悉集川原寺、爲天皇病誓願云々、

〔類聚國史三十四嵯峨〕弘仁元年七月辛亥、遣使於川原長岡兩寺誦經、聖體不豫也、

坂田寺

坂田寺ハ、一ニ金剛寺ト云フ、推古天皇ノ朝、佛師鞍作鳥ノ建立スル所ニシテ尼寺ナリ、始メ鞍作鳥、丈六ノ佛像ヲ造リテ、天皇ニ獻ズ、天皇其功ヲ嘉ミシ、勅シテ近江國坂田郡ノ水田二十町ヲ賜フ、卽チ其田ヲ以テ當寺ヲ建ツ、今廢寺ニシテ舊地ハ大和國高市郡椋橋山ニ在リ、

〔和州舊跡幽考十五高市郡〕南淵坂田尼寺

詮要抄云、橋寺より南、今此所を見るに、椋橋山の尾さきの北に坂田寺ありて、細川ながれたり、尾をへだて、南に稻淵川ながれ尾さきをめぐり兩川落合て、末はひとつになかれ行、

〔和漢三才圖會七十三大和〕南淵坂田尼寺 在椋橋山之尾崗北、一名金剛寺、又名小墾田坂田尼寺、

創建沿革

繼體天皇十六年、南梁司馬達等來朝、構居於此地、祭佛像、而人未知佛道、以無異國神、推古天皇十三年、蘇我馬子建元興寺、鳥佛師奉勅作本尊丈六釋迦像、因叙大仁位、賜江州坂田郡水田二十町、其後鳥佛師用此田領建金剛寺是也、乃脇士丈六菩薩父德濟法師之所作也、

〔日本書紀 二十二 推古〕十四年五月戊午、勅鞍作鳥曰、朕欲興隆内典、方將建佛刹、肇求舍利、時汝祖父司馬達等、便獻舍利、又於國無僧尼、於是汝父多須那、爲橘豐日天皇 用明 出家、恭敬佛法、又汝姨島女、初出家爲諸尼導者、以修行釋敎、今朕爲造丈六佛、以求好佛像、汝之所獻佛、本則合朕心、又造佛像既訖、不得入堂、諸工人不能計、以將破堂戸、然汝不破戸而得入、此皆汝之功也、卽賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田二十町、鳥以此田、爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田寺、

〔多武峯略記 下 末寺〕坂田寺 法號金剛寺

日本紀第二十二云、推古天皇十四年夏五月五日、勅鞍作鳥郎、賜大仁位、因以給近江國坂田郡水田廿町、焉鳥以此田、爲天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺矣、太子傳上云、用明天皇二 丁未 年、佛工鞍部多須奈、爲天皇自身出家、造丈六佛像 并 坂田寺矣、承安二年八月四日、南淵坂田寺、永可爲當寺之末寺由、賜長者宣、同三年正月晦日、彼寺本主木幡寺上座永嚴、以坂田寺流記公驗等、永寄進當寺了、

明治四十五年七月二十六日印刷
明治四十五年七月二十九日發行

神宮司廳

昭和十年四月一日印刷
昭和十年四月五日發行

（普及版古事類苑　全六十册）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　八九六〇番
電話小石川(85)　一〇五四番
　　　　　　　　三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）